
無幻真天楼

島原あゆむ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無幻真天楼

【Nコード】

N4012R

【作者名】

島原あゆむ

【あらすじ】

ちよつと寂れた漁師町

そこで生まれ育った栄野京助はどこにでもいる中学二年生の男子生徒だった

そう、あの独特の語尾で話す少年、緊那羅と出会うまでは。

年相応に悩んで馬鹿やって過ごす日常に少しだけ不思議と懐かしさをプラスしてそうやって今日もまた一日が始まって日常になっていく

【第二回】始まりはエビフライ（前書き）

北海道日本海沿岸のちよつとさびれかけた町

ごくごく普通の男子中学生 栄野京助えいのきょうすけは空腹と戦っていた

いつもならとつくに早弁をしているのだが今日は弁当を忘れている
きつと たぶん 誰かが届けてくれるだろうという期待を胸に時間
が過ぎるのを待つ

午前の授業が終わり全力で玄関へと向かった京助を待っていたのは
弁当ではなく：

【第一回】始まりはエビフライ

三時間目が始まった頃だろうか：正月中学2年3組の教室にはちらほらと『ハラヘツタゾ』という腹の鳴き声が聞こえ始めていた弁当時間まであと一時間

それまで我慢する者、早々に弁当や食い物を取り出しコソコソ（または堂々と）食す者が男子生徒を中心に見え始めた

そんな中彼【えいの・きようすけ栄野京助】も泣き喚く腹と格闘の真っ最中だったいつもならとつくに早弁をしている時間だった

「：ちつくしよ：腹減って勉強に集中できねえ：」

「普段でも集中して無いだろうが」

机に突っ伏してうだうだ空腹だと文句を垂れる京助の隣で幼稚園からの腐れ縁【さかた・みつる坂田深弦】が眼鏡を拭きながら淡々と突っ込みを入れてきた

「折角ハルミさんがお前の様な馬鹿息子の為に丹精込めて作ってくれた弁当を忘れるからだ。ざまあみろ」

『んべ』と舌を出し京助を小馬鹿にすると眼鏡をかけなおした

「しかたねえだろが：寝坊しちまったんだから：はあゝああ：」

遡る事二時間前

「こまったわねえ：」

【栄之神社】古びた石段の柱にはそう記されている

「京助：お弁当忘れて行っちゃって：私は神社を離れるわけにはいかないし：」

京助の母【栄野ハルミ】はかれこれ数十分ほど青い弁当の包みを溜息混じりに見つめていた

そこへパタパタと足音が近づいてきてハルミの後ろで止まった

「僕が届けるゝ」

どんぐり眼をキラキラさせながらハルミを見上げていたのは京助の弟【悠助】ゆうすけだった

「あら悠ちゃん…そっか今日は小学校開校記念日とかで休みだったのよね…たしか」

そうぽつりと呟き改めて悠助を見下ろす

今年小学校に入学したばかりの悠助は最近積極的に人の手伝いをしていたがっていた

「大丈夫だよ！僕もう一年生だもん！それにコマとイヌもついてきてくれるっていつてるもん！だから…!!」

そう主張する悠助の横には白い二匹の犬(?)とをもって見えなくも無い犬がふさふさしたなんともさわり心地のよさそうな尻尾を左右に振っていた

「…じゃあ…お願いしようかしら」

ふふつと微笑んで青い弁当包みを悠助に手渡した

「まっかせてよハルミママ！ コマ、イヌ行こう!!」

嬉しそうに玄関に向かって走り出した悠助の後ろをコマとイヌが追いかける

「いつてらっしゃい」

多分聞こえていないと思いつながらハルミは手を振って見送った

「…あんなに振り回して…中身きつとぐちゃぐちゃね」

三時間目終了のチャイムが鳴り終わると京助は玄関まで猛ダッシュした

腹の限界が近いらしく目が血走っている

「よう！ 京助便所か？」

途中隣のクラスの【中島柚汰】なかじま・ゆうたと【南朔夜】みなみ・さくやとすれ違ったが多分、いや絶対気づいていないだろう

「空腹は盲目ってか」

京助の後を追ってきた坂田がひょうひょうと言い放つ

意味の分からない中島と南は京助の走り去った廊下をぽかんと眺めていた

玄関についた京助は自分の下駄箱を上下左右隈なく見た

しかしあるのはちよつと臭う自分のスニーカーのみで愛しの青い弁当箱は何処にも見当たらなかった

「つつだゝゝまだ届いてねえしゝ；　　：俺を餓死させる気か…」

へろへろとスノコの上に座り込んでそのままパタリと倒れこむ

同時に腹の叫び声が空しく玄関に木霊した

「おかずはきつと昨日の残りのエビフライだろーなー：それと多分ミニトマトー：玉子焼きー…」

一段と大きくなってきた腹の叫びはもうどうにもならない

人間とは追い詰められると並み半端じゃない能力を発揮するものだとよく言うものだ

京助は普段なら聞こえるはずの無い微かな足音をその耳に入れていた
「俺のエサー！ー！」

がばつと起き上がると足音のしたとおもわれる方向に向かってダッシュしていった

「誰だお前…」

『お前こそ誰だよ』と返ってくるだろうと思い京助は名乗るスタンバイをしていた

そこにいたのは愛しの弁当箱：じゃない悠助ではなく何とも不思議な格好をした一人の少年(?)だった

間をおいても『お前こそ誰だよ』がこなかったので京助はとりあえず悠助のことを聞いてみることにした

「なあ、青い弁当箱持ってるやつ見なかったか？」

「…栄野…京助」

「はい？」

いきなり唐突に名前を呼ばれて上ずった返事をしてしまった
少年はふっと微笑むとゆっくり近づいてきた

「えと…どっかであったっけ？ 演劇部のヤツか？」

懸命に思い出そうとしていると少年が更に近づいてきた

「栄野京助」

「な…」

ついには今にもキッス（昔表現）ができそうなくらいまで顔を近づけてきた

「きゃー！！健全なる青少年育成の場でなんということでしょう！！」

京助の後を（面白そうだから）追ってきた南が声を上げた

「お前…いくら綺麗でも可愛くても男に手エだすなよ…」

「ハルミさん…かなしむだろうなあ…息子がホモだなんて…」

中島、坂田も後に続き口を挟む

「ちが…；これはっ；！！」

少年の肩を掴み引き離す

「栄野京助」

少年が京助の手を振り払い再び名前を呼ぶ

「何なんだよお前ッ！！俺に何の用なんだっての！！」

坂田達のいる位置まで下がると京助は食って掛かるように少年に問いかけた

少年はまたふっと笑った

「お前：明らかに小馬鹿にされているな」

「るっさいッ！！；」

坂田が同情の目で見つつ京助の肩に手を乗せた

「なあ京助…お前演劇部か劇団四季に知合いいたのか？」

南の問いかけに京助は首を大きく横に振った

「じゃあ中国雑技団かキダムには？」

「はあ？ いるわけねー…」

中島のふざけている問いかけに『いるわけねーじゃん！』と返そう

として何気に少年の方を見ると少年は玄関前に建っている旗棒（高さ30m位）のてっぺんに立っていた

「ありえねー…」

4人は口をそろえてハモった

「我は緊那羅^{きんなら}！！ 栄野京助！ 上の命によりお前が護るべき者が滅する者かこの緊那羅が判断するっちゃ！！」

「…ちゃ？」

おそらく、いや絶対4人は同じことが脳裏に浮かんだであろう

「ちゃ、だつてさ」

「好きよ好きよ好きよ うっふん だな」

「だーりーん だな」

「トラビキニだな」

（多分）危機に立たされているのだろうが今はあんまりソワソワしないでVVというかソワソワどころかむしろ笑いたくてムズムズしている4人であった

玄関先から4人の笑いのトルネードが発生したのはそれから間もなくの事だった

「何がおかしいっちゃッ！！；」

笑いまくる4人にキレた緊那羅^{きんなら}

笑い声にまぎれて聞こえてくる腹の虫の声

そして更にその中から聞こえた：

「きよおすけ」

という声と明らかに何かを振り回して落とした音

そのどちらかに各々が反応して振り返る

目に入ったのはうつ伏せに倒れている悠助と二匹の犬、そして待ちに待った愛しの弁当箱だった

「…悠？；」

なかなか起き上がらない悠助に比較的遠くから京助が声をかける
するとどنگり眼に涙を溜めて泣くのを懸命に我慢しながら悠助が

顔を上げた

「ほーら悠！ 泣かない泣かないーもう一年生なんだろう？ 痛くないぞー痛くない痛くない」

「そうそう！ えらいぞー！ 泣かなかっただらもつとえらいぞー！」

「一年生だもんー一人で立てるもんなー？」

南、中島、坂田の三人があやすと悠助は鼻水を啜って立ち上がった

「いたくないもんー僕泣かないもんーいたくないもん」

ぐしぐししながら弁当箱を拾うと京助の方に向かって歩き出した
そして京助に辿りつくと足にしがみついた

「よくよく我慢した！ えらいぞ悠！」

三人から拍手が巻き起こる

「そこー！！ 無視するなっちゃッ！！」

すっかり忘れ去られていた緊那羅きんならがついに突っ込んだ

「ああ！ ラムちゃん！！ いたことすっかり忘れていた」

「ラムってだれだっちゃッ！！」

悠助の頭を撫でながら『スマンスマン』と謝るしぐさをした

「お前らー私を馬鹿にしてるっちゃね」

「え？ そんな格好してお前が馬鹿じゃなかったんか？」

南が突っ込んだその時だった

緊那羅きんならが両足につけていた棒のようなものを両手に持つとくるくると回し

「…その4人…覚悟するっちゃー！！」

高さ30mの旗棒の上から京助達めがけて飛び降りてきた

「でえええー！！！！？」

間一髪攻撃をよけた（っぽい）京助達は逃げるが勝ちというように
一目散に走りだした

「逃がすかあっ！！」

緊那羅は体勢を立て直すと後を追った

4時間目開始のチャイムが鳴り響く中階段を駆け上り教室を走りぬけ生徒を薙倒し先生のヅラを飛ばしながら4人は逃げていた（悠助は京助に抱きかかえられている）

その後を緊那羅きんならが二本の棒の様な物で更に被害を広めながら追いかけていく

「京助！僕一人でも走れるよ？ 足とかもう痛くないもん一年生だもん体育のとき先生に早いねって褒められたし」

「今はだあつとれーッ！！！」

降りて自分も一緒に走ると言い出した悠助に怒鳴ると悠助は『ぷー』と膨れてそっぽを向いた

「待つっちゃー！！！」

周りのもの（人間含）を破壊しながら緊那羅きんならは尚もしつこく追いかけてくる

「やはり馬鹿 逃げてる相手に 待てという」

「お、上手いこと作ったな」

坂田が一句詠むと中島が『ナイス！』と親指を立てた

「いやゝゝ照れますな」

そして照れるしぐさをする坂田

「しっかししつこいなあゝ」

むくれたままの悠助を抱きかかえて走る京助が息を切らせながら呟いた

「このまま校外にバックレてもいいんだけどさあそうなると地域住民の方々に迷惑がかかるしなあゝ」

「校内の皆様にはいいんかい（片手突っ込み）」

地域住民の安全優先を主張する中島に南が突っ込む

「つうかさゝゝこの先って確かゝ」

坂田が何かを思い出して爽やかに笑いながら3人を見ると3人も頷いて笑った

角を曲がって階段を上るとそこはゝ

「屋上ダァゝゝゝ」

屋上ⅡてっぺんⅡ行き止まりⅡ逃げ道ナシ

青い空と風が気持ちよく正月町内がよく見える

「逃げ道ナシだっちゃね」

4人が振り向くと緊那羅きんならが微笑みながら屋上に入ってきた

「…覚悟、するっちゃ」

二本の棒のようなものを構えた

4人はフェンスを背中に感じながら緊那羅と距離を置く

「ねえねえ京助」

さっきまでむくれて静かだった悠助が口を開いた

「…なんだよ」

京助は緊那羅きんならから目を逸らさず返事だけした

「トイレ」

辺りの空気が一瞬にして緩んだ

「トイレ！！！」

「だーッ！！　もう我慢しろんなもんッ！！！！」

「ヤダー！！　できないー！！　『しぜんげんしょう』だもん！！　トイレー！！！！」

「だったらその辺でしろッ！！！！」

「ヤダー！！　トイレー！！　トイレいくー！！！！」

しょうもない兄弟喧嘩のゴングが鳴った

「どうして来る前に家でしてこなかったんだよ馬鹿ッ！！」

「馬鹿じゃないもん！！　京助がお弁当忘れるから京助の方が馬鹿だもん！！」

「お、悠それは正論だな」

「やかましい坂田ッ！！！！」

ぎゃーぎゃー喧嘩する栄野兄弟に坂田がハッハと笑いながら口を挟む

「京助馬鹿説に賛同のものー挙手！」

南の声に中島、坂田、悠助、そしてコマとイヌまでもが手を挙げた

「おのれらはーッ！！！！」

ゴ
ス
ツ

ほぼ同時だった

京助が声を張り上げたそのとき悠助の持っていた弁当箱が空中分解し中身が舞った

カラんカラんと空しい音を立てて空の弁当箱が屋上の床に落ちた

「人を無視するなっちゃ」

弁当箱の後に続いて中身が床に落ちてゆく

ミニトマト、白米、玉子焼き……

「俺のエビフライーっ！！！！」

京助の叫び声が青く晴れた空に響いた

屋上の床に無残にも落ちたエビフライ（とその他）

散々腹の叫び声と格闘して待っていたエビフライ（とその他）

変な服装のラムちゃんに追いかけられながら守っていたエビフライ

(とその他)
⋮

「俺のエビフライ……！！！！！！！！！！」

「京助！！
3秒ルールだ！！
3秒ルールッ！！」

「駄目だ!! 無理だ南! もう3秒以上経ってる!! ルールは

「無効だ！」

【解説しよう。3秒ルールとは床に食べ物が落ちてでも3秒以内なら拾って口にすることが出来るという素敵的ルールであり、きちんとした同盟もあるのである】

半狂乱でエビフライと叫ぶ京助を南と中島が落ち着かせようとする

「弁当と自分の命と……どっちが大事だっちゃん……」

これから殺される（かもしれない）状況にあるのになおも床に落ちた（元）弁当に対して喚く京助を緊那羅は呆れたように見ていた

「とにかく…栄野京助、及びその取り巻き…覚悟するっちゃ」

二本の棒を回し緊那羅きんならが近づいて…

「何さらしとんじゃきさー！ーんッ！！！」

…来たかと思っただけ何処からかとんできた未確認亜光速飛行物体が

緊那羅を直撃し、緊那羅きんならは白目で倒れた

倒れた緊那羅きんならの頭の上には目を回しているコマがいた

「ハルミさんが折角馬鹿息子の為に朝早くから作った弁当様を…ッ」

コマは屋上の入り口に立っていた坂田がぶん投げたらしい

片手にはコマを外した時用に予備イヌが捕まっていた

「あゝ食べ物粗末にしちゃ駄目なんだぞー」

坂田の後ろから現れた悠助が白目むいて倒れている緊那羅きんならに向かっ

て怒っている

「人が悠を便所に連れて行ってる間になにしくさってんじゃワレ…アアン？」

ぐりぐりと気を失っている緊那羅きんならを足蹴にする坂田を見て

「なんというか…やっぱ組長の血筋だよな」

「つうかハルミさん絡むと本当性格変わるよな」

「ウチの母さんのどこがいいんだか…」

緊那羅きんならが目を覚ましたのは放課後だった

「…こんなことしてただで済むと思うなっちゃ」

屋上の避雷針にくくりつけられた緊那羅きんならは京助達をにらんだ

その顔には『ダーリン命』とか『キダム参上』などという落書きが油性ペンで書かれていた

「さあてと…お前には聞きたいことがわんさかあるんだよな」

緊那羅きんならと目の高さをあわせるために京助がしゃがむとその上に悠助が乗っかってきた

「ねえねえ！ 緊ちゃんはどうからきたのー？」

緊張感のカケラもない悠助が質問をした

「…ラムちゃんからキンちゃんに呼び方変更ー」

「ダーリン からなんでこうなるの！！ に変更ー」

南と中島が更に緊張感を崩す発言を連発した

「ソコとソコとココッ！！ 少しだぁとれッ！！」

中島、南、悠助と順に指を刺しながら京助が怒鳴る

「ねえ、どこからきたのー？」

「…天」

悠助の質問に緊那羅きんならがボソッと答えた

「ふうん、何しに來たの？」

「…柴野兄弟を護るべき者が滅する者か…確かめるためだっちゃ」
悠助の気の抜けた尋問に小声ながらも緊那羅きんならは答えていった

「あのさ、お前…緊那羅きんならが嘘ついてる様には見えないんだけどさあ…
天からきて俺と悠を護るか殺すか確かめるとか…なんなんだ？」

緊張感がすっかり無くなった中京助が緊那羅きんならに聞く

「それは…私も詳しくはわからない…ただ上の命に従ってきただけだっちゃ」

緊那羅きんならは俯き答えた

「なら上に聞けばいいじゃん？ 連絡手段とかあるんだろ？」

坂田が眼鏡を拭きながら言った

「あつた…にはあつたんだっちゃけど…」

「ど？」

「さっきこのイヌがぶつかってきた時壊れたっちゃ」

辺りがモノクロの空気に変わった

ホラ、と耳を見せられて4人はソコについていたのだろう【連絡手

段】の残骸を見た

ピアスになっていたらしいがぶら下がっていたと思われる部分がなくなっていた

「なら一旦帰ればいいじゃん？ そして…」

「こっちからは帰れないんだっちゃ…こっちからじゃ扉が開けられないから…確認が終ったら連絡して開けて貰う手筈になっていたんだっちゃ」

「なんてこったい…」

京助が溜息をついてガックリと肩を落とす

「…じゃあ緊ちゃん帰れないの？」

悠助が京助から降りて緊那羅きんならの顔を覗き込む

「しばらく…しばらくしたら…音信不通になったということでもた誰か来ると思うっちゃ…」

緊那羅きんならは空を見上げた

つられたのかどうなのか京助達も空を見た

ゆっくりと流れていく雲と青い空

「つか…天からきたとか言ってるけどさあ…天って空にあるのか？」
中島が何気に呟いた

「空…といえば空だっちゃ…でも空じゃないといえば空じゃない…
天は天なんだっちゃ」

「…ようわからんトコから来たからようわからん格好してるんだなお前」

南が緊那羅きんならの格好を改めてまじまじと見ていたその時

『ピンポンパンポーン…♪2年2組中島君、南君及び2年3組栄野君、坂田君…前田先生が至急生徒相談室まで来る様にこのことです…繰り返します…』

前田先生というのは緊那羅きんならとの追いかけてこの時ヅラと吹っ飛ばした先生のことでしつこいことで有名な中年教師であった

「…バックレるか？」

中島が3人を見渡した

「今日逃げて明日、明日も逃げると明後日…」

南が両手を挙げて【お手上げサ】というように首を振った

「んっじゃま…叱られにいきますか…」

坂田があーあといいながら屋上の出口に向かった

「じゃあねえなあ…おい悠、母さんに遅くなるからって言うておい

てくれ」

京助も後に続いて屋上から去った

風が吹いて緊那羅きんならの髪飾りを弄んだ

「緊ちゃんっていい人なんだ」

「へ？」

悠助が緊那羅きんならに顔を近づけてニコニコ笑う

「私は…」

「だってコマとイヌが懐いてるもん」

言われてふと膝を見ると二匹は気持ちよさそうに緊那羅きんならの膝で丸くなっていた

「学校壊したり京助達いじめたりお弁当粗末にしたことは悪いことだけど…謝ったらきつと絶対みんな許してくれるよ。僕も前に玉ネギ残して隠れて捨てた時謝ったらハルミママ許してくれたもん、だから謝ったら大丈夫だよ」

しばらくきょんととして悠助の話を聞いていた緊那羅きんならは目を細めると

「…そう…だっちゃね…」

ふっと笑った

午後八時

「つっだ…疲れた…めっちゃくそ疲れた…前ドゥーの野郎3時間説教の後に後片付け…腹減った…」

京助は帰宅するなり玄関に座り込んだ

「おかえり！」

バタバタという足音とワンワンという鳴き声とともに悠助とコマとイヌがのしかかってきた

「悠…重いからドケロ…」

コマとイヌを払い落とし悠助を降ろす

「腹減ってんだよ…；朝昼食ってねえし、いらねえ体力使うしで…」
ブツブツ言いながら廊下を歩き茶の間の障子を開ける

「おかえりだっちゃ」

「あゝただいまだっちゃ：ツ！！！！？；」

違和感なく返事してしまっただけ 緊那羅きんならの姿を見て目を丸くした

「き：！？ってか悠！！？ キンナラムちゃん！！？；」

パニくってよくわからない言葉を連発しながら悠助と緊那羅きんならを交互に見る

「緊ちゃんね、いいたい事があるんだって」

悠助が京助にを見上げてにっこり笑った

「いい：たいこと？」

「ね？ 緊ちゃん」

緊那羅きんならは悠助とアイコンタクトした後コクリと頷いて

「ごめんなさい」

そういつて頭を下げた

京助は何が起こったのかわからなくて固まったままだった

「ほらほら京助、そんな所に立っていたらおかず運べないわ今日から家族増えたんだから少し手伝ってちょうだい？」

お盆に夕飯のおかずをのせ母ハルミが茶の間に入ってきた

「京助！緊ちゃん謝ってるよ？」

悠助に制服の裾を引っ張られハツとして京助は緊那羅きんならを見た

緊那羅きんならはまだ頭を下げたままだった

悠助を見ると【許してあげてオーラ】が全開で出ていた

母ハルミを見ると：微笑みながら真新しい箸を手渡された

「：母さん昨日のエビフライ：まだ残ってたっけか？」

「冷蔵庫にあったはずよ？」

「：とってくる」

そういうと京助は茶の間を出て行った

しばらくして戻って来たかと思うと真新しい箸にエビフライを一本刺し緊那羅きんならに差し出した

「きよ：」

「さっさと持てよ温めてきたから皿あちいんだから」

恐る恐る緊那羅きんならが箸を受け取ると京助は意地悪そうに笑い

「食ってみろよ昼間弁当に入ってたエビフライと同じヤツだから：食べられなくしたことでござってえ後悔する美味さだぞ」

そう言っただけで席に着いた

「じゃあいただきますしよろしくね？　ホラ悠ちゃんも緊ちゃんさ

んも座って：」

母ハルミが仕切りだす

「よかったね！緊ちゃん！」

箸を持ったまま立ち尽くしていた緊那羅きんならに悠助が笑いかける

「：うん：」

緊那羅きんならが少し照れながら頷いた

>i19370—2575<

【第二回・弐】緊那羅（きんなら）の子守唄（前書き）

【天】に帰れなくなった緊那羅^{きんなら}は京助の家に居座ることになった
夕暮れの縁側に座った緊那羅^{きんなら}が無意識に歌を口ずさんでいたところに悠助がやってきて…

【第一回・弐】緊那羅（きんなら）の子守唄

「緊ちゃんって歌うの好きなの？」

緊那羅きんならが栄野家で過ごし始めて4日目、風が気持ちいい土曜日の夕方のことだった

母ハルミは婦人会の旅行計画の打ち合わせとかなんとかで出かけていて京助は学校から今だ帰ってきていなく栄野家には悠助きんならと緊那羅、コマとイヌしかいなかった

縁側で何をするわけでもなくボケっとしていた緊那羅は悠助の声で振り向いた

「歌、上手だねっ」

「え…私…歌ってたっちゃ？」

よいしょ、と隣に悠助が腰を降ろした

「僕もねえ歌好きなんだー昨日もね校歌歌ったんだよ」

エヘへと笑いながら足をブラブラ揺らした

「ハルミママの歌も好きだけど僕緊ちゃんの歌も好きになったよ？」

今歌っていたのなんていう歌？

「うーん…無意識に歌っていたみたいっちゃから…わからないっちゃ；」

緊那羅きんならが申し訳なさそうに苦い笑みを返した

「ええ…むう…」

悠助が頬を膨らませてちえ…とそっぽを向いた

「ごめんだっちゃ；」

緊那羅きんならが謝ると

「そうだ！じゃあ緊ちゃんが一番好きな歌教えて？　っていうか歌って聞きたいー！！」

悠助が緊那羅きんならの体を揺すってせがんだ

「ん…；一番好きな歌…だっちゃ？」

顎に手をかけて考え込んだ緊那羅きんならを期待一杯の目で悠助が見つめる

「じゃあ…」

歌を歌うときは何を考えて誰を想い声を出すのだろう

優しい気持ちで歌う歌は、憎いという気持ちで歌う歌は…

「それ、子守唄かなんかか？」

片手にタオルケットを持ち京助が『よっ』と手を上げた

「京助…？ あれ？」

太もものに温かいものを感じて目をやると悠助が寝こけていた
京助はしゃがんで寝ている悠助にタオルケットをかけてやると悠助が微かに動いた

「鳥居くぐったらさ歌聞こえて…その茂みから覗いたら悠は寝てるしお前は熱唱してるし…」

京助が伸びをして緊那羅きんならの横に座る

「さっきも聞いたけどその歌って子守唄か何かか？」

「私もよくわからないんだっちゃ； ただ悠助に一番好きな歌歌ってくれて言われて…したらこの歌が自然と…いつ、誰から教えてもらったのかわからないんだっちゃ…でも何だか…」

緊那羅きんならが悠助の頭を撫でると悠助がモゾモゾと動いて起きるかと思いきやまた寝息をたてだした

「ふうん…でもさ、俺もその歌好きかもしれないねえわ。なんつうか…嫌なこと忘れそうになるっつうか」

足の裏と足の裏を合わせながら京助が照れくさそうに言った

「とにかく俺、緊那羅きんならの歌好きだぞ」

「あ…りがとだっちゃ…」

悠助だけではなく京助にも歌が好きといわれ緊那羅きんならが照れて俯くとそれを見た京助が

「さうて…そろそろ母さん帰ってきますかねー…っ」と

言ってから恥ずかしくなったのか京助はすつくと立ち上がると家の奥に入っていた

「……栄野…京助、悠助……」

風鈴がチリリ、と鳴った

緊那羅きんならが薄暗くなってきた空を見上げると一番星が見えるようになっていた

> i 1 9 3 9 4 — 2 5 7 5 <

【第二回・弐】緊那羅（きんなら）の子守唄（後書き）

【第二回】 届け恋の光合成（前書き）

夏本番

降り注ぐ太陽の光をめいっぱい浴びて咲いた向日葵を見て嬉しそうに笑う悠助と面倒くさそうに庭に水をまく京助

その二人を御神木の上から見ている人物が二人

京助たちの【日常】が【ちょっと変わった日常】へと本格的に動き出す

【第二回】 届け恋の光合成

「でっかく育ったなあ……」

「僕より大きくなっちゃったね」

夏休み目前の日曜日栄野家の庭先では京助がホースで水をまき悠助がそれを手伝って（邪魔して？）いた

「こないだまで双葉だったと思っていたのにもう花咲きそうでやがんの」

栄野兄弟が『大きくなった』といっているのは初夏に悠助が植えた向日葵のことで鉢には【ヒマ子さん】とかわらうじて読める悠助のミズ文字で書かれていた

「それはアンタが世話してなかった証拠でしょう？」

背後から母ハルミのごもつともな意見が飛んできて後頭部に容赦なくグツサリとつき刺さった

京助の母、ハルミは一見おとなしそうでおっとりしているような印象の大和撫子風の日本美人だがその性格は日本男児顔負けである
女手一つで兄弟を育てているということもありかなり気が強く結構口も悪く人使いも荒い

「部活だか補習だか知らないけど休みの日くらいは家の手伝いはやってもらうわよ？水まき終わったら境内の拭き掃除お願いね？ 掃き掃除は緊ちゃんがやってくれているはずだから」

「……ハイハイ……」

ゴン

京助の後頭部に今度は缶ジュースが勢いよくめり込んだ

「……返事はハイと一回気持ちよく……！……水まき終わったらそれ、緊ちゃんにも持っていて拭き掃除の前に一服しなさい」

拳句駈にも厳しい……が優しい所はきちんと優しくかった

「京助たんこぶ」

後頭部を抑えてしゃがみこんでいる京助の頭を悠助が泥だらけの手

で笑いながら撫でている

足元では京助が手放した暴れホースでコマとイヌが水をかぶりながら遊んでいた

「ったく…； あゝ痛え…」

立ち上がった京助は再びホースで水をまき始める

悠助も小さな自分のじょうろに水を入れて【ヒマ子さん】にかけている

「綺麗に咲くといいな」

ある程度水をまき終えた京助はホースを片付けながら悠助に声をかけた

「明日に咲く？ 明後日？ 僕早くヒマ子さんの咲いたところ見てみたい」

「来週中には咲くんじゃねえかな…ホラ、蕾開きかけてるし…ブツ！…」

と京助がヒマ子さんに顔を近づけたときいきなり強い風が吹き京助はヒマ子さんの頭突きを顔面で受けた

「…今日は…首から上に注意報発令か？…」

後に缶ジュース、前にヒマ子さんの頭突き…朝っぱらから災難が頭だけに降りそそいでいた

「もうちょっと静かに着地できなかったんですか？ 結構風起きちゃいましたよ？」

「出来ないこともなかったがな…どんくさい輩のことだ気にも留めぬであらう」

緑豊かな栄之神社の中で最高樹齡の御神木『しんちゃん（悠助命名）』の中枝から微かに聞こえる会話

「まったく…迦楼羅かるらはそんなだから階級高いのに子ども扱いされるんですよ」

【迦楼羅かるら】と呼ばれた目つきの悪い少年（？）はムスツとしてもう一人の少年を睨んだ

「ワシに指図するな!!」

迦楼羅^{かるら}が声を張り上げるとその髪についていた赤玉の飾りがはずれはるか地面へと落ちていった

「大体! 乾闥婆^{けんたっぱ}はあーだこーだいちいちこまかいのだッ!!」

迦楼羅^{かるら}に【乾闥婆^{けんたっぱ}】と呼ばれた少年はしれっとした顔で

「迦楼羅^{かるら}が大雑把過ぎるんですよ。ほっといたら食事もしないじゃないですか」

と言い放った

どうやら二人とも落ちていった飾りのことは気づいていないらしく口げんかに夢中になっていた

悠助と共に緊那羅^{きんなら}がいる境内へとやってきた京助は御神木の葉がやけに落ちていることに気が付き近づいて上を見上げた

「…さっきの強風で飛んだんかなあ…」

葉の間から夏の日差しが射し地面に微妙な文様を作っている

「…さっき掃いたばかりだっちゃのに…;」

独特の『くちや』（キンナラムちゃん語／命名坂田）を語尾につけ、ため息混じりに緊那羅^{きんなら}が境内の方からやってきた

片手に箒を持ち片手で悠助の手を引いている

緊那羅^{きんなら}が栄野家に居候するようになって一週間が経過していた

あの演劇部のような服ではさすがに目立つということで京助の服を着ている

ここの生活にも慣れてきて『働かざるもの食うべからず』という母ハルミの一言で神社の手伝いをするようになったらしい

「…掃きなおさないと駄目だっちゃね…これは」

「僕も手伝うー!!!」

緊那羅^{きんなら}が箒を持ち直しザカザカと葉を集め始めると悠助も手で葉をかき集め始めた

「ストロップ!」

とそこに京助が割って入り緊那羅^{きんなら}の頬に缶ジュースを付ける

「暑い中ご苦労サン、ここらで一服してくれって母さんが」

「一服…」

緊那羅きんならは缶ジュースを両手で受け取ると上から下から…色々な角度から不思議そうにそれを見た

どうやら開け方がわからないらしい

「京助、コレ…」

「ああスマン、こうやって開けるんだ」

カシ、と京助がタブを起こして開けてみせると緊那羅きんならもタブに手をかけた

「緊ちゃんのファンタ（グレープ）だね」

ブシー！！

悠助の声とともに感の中身が勢いよく噴出し小さな虹ができた
見事ファンタ（グレープ）まみれになった三人は髪から雫を滴らせながら顔を見合わせた

「…緊那羅きんならいつから水出せるワザでできたんでしょう」

その様子を見ていた乾闥婆けんだつばが小首をかしげる

「あれは…出したというよりは…あの筒から勝手に噴出したともとれるがな」

迦楼羅かるらが枝に座ったまま答える

「しかし…緊那羅きんならにも困ったものだな…役目を忘れ、挙句馴染んでいるとは…」

迦楼羅かるらの右前頭部に【怒】マークの象徴である血管が浮かんでいた

「落ち着いてください迦楼羅もうしばらく様子見ることにしましょう？ 緊那羅きんならだって何か考えがあってこうしているのかもしれないませんし…」

乾闥婆けんだつばがあつくなつた迦楼羅かるらをなだめる

「！……」

「緊ちゃん？」

何かに気づいたように突然御神木を見上げた緊那羅きんならに悠助が声をかけた

「…いや…なんでもないっちゃ…」

気のせいだと自分に言い聞かせるように緊那羅きんならが呟いた

「こりゃ風呂はいらねえと…ベタついてしょうがないな;」

ベトベトする髪をかき上げて京助が言った

「緊那羅きんなら、悠、先入って来い。俺掃いててやつから」

緊那羅きんならから箒を取り『ホレホレ』と手でいってこいと合図する

「じゃあ…いくっちゃ悠助」

「うん」

緊那羅きんならが手を差し出すと悠助は嬉しそうにその手につかまって歩き出す

その姿を見送った後京助は箒を動かし始めた

コロコロ…

「お？」

どう聞いても葉っぱを掃いた時の音とは違う何か丸い物が転がる音がした

京助は掃くのをやめ足元に目をやると木漏れ日を浴びて光る赤い小さな玉を見つけた

ふさふさした毛(?)のようなものが付いていて宝石類に全く興味の無い京助にも結構な価値があるということがわかった

「…落し物…高そうだなあ…なんでも鑑定団にだしてみつか…」

冗談にも本気にも聞こえる言葉を呟くとその玉をハーフパンツのポケットに入れ再び箒を動かし始めた

「京助、代わるっちゃ」

甚平を着た緊那羅きんならが小走りやってきた悠助の姿は無い

「もう入って来たのか? ってかまだ髪乾いてねえじゃん」

「暑いしいっちゃ」

ポニーテールにした髪から水が滴っているのを絞りながら緊那羅きんならが

笑う

「京助、頭にハエとまってるし足からアリ登ってきてるっちゃ」

緊那羅きんならに言われて足を見ると三匹のアリが登ってきていた

ソレを片足で払うと

「んじゃ、バトンタッチな」

「ん、了解だっちゃ」

箒きんならを緊那羅に渡すと京助は駆け足で家の方向に向かっていった

「…迦楼羅かるらと…乾闥婆けんたつぱだっちゃね」

御神木を見上げ名前を呼ぶと二人が降りてきた

「久しぶりですね緊那羅きんなら、元気そうで何よりです」

乾闥婆けんたつぱがにっこり微笑んだ

「迦楼羅かるら…」

にこにこしている乾闥婆けんたつぱとは対照的にブスっとしている迦楼羅かるら

「…お前は何をしておるのだ？」

ガンを飛ばし【怒】を抑え（ているようにも抑えていない様にもとれる）ながら緊那羅きんならに問う

「迦楼羅かるら」

今にも何か怒鳴りそうな迦楼羅かるらを乾闥婆けんたつぱが抑える

「…今日は何も聞きません…このまま帰ります。が…」

ふっと笑って乾闥婆けんたつぱが言った

「次回は…わかっていますね？」

先程の笑顔は何処へやら…ビフォーアフターの目つきで緊那羅きんならを凝視した

「……」

無言でコクリ、と緊那羅きんならが頷くと迦楼羅かるらがフンと鼻を鳴らし

「自分の役目を忘れないことだな」

と言うと同時に強風が起こった

ザアアと御神木がざわめき葉が大量に落ちてくる

「…役目…」

落ちてくる葉を見上げながら緊那羅きんならが苦い顔をした

「きーんちゃーんっ!!」

「おわっ!?!」

悠助に不意打ちアタック抱きつきVerをくらった緊那羅きんならは前にのめって御神木に顔面をぶつけた

「また風吹いたねえ」

悠助が抱きついたままはしゃぎながら言った

「また掃きなおしだねっ」

「…そう…だっちゃね」

強打した顔をおさえて起き上がると御神木を見上げた
葉っぱが1枚遅れて落ちてきた

「っでえええええい!!!!!!!!!!!!」

月曜日、栄野家はいつも通り（強調）の朝を迎えた

寝坊した京助が家の廊下を走り回るバタバタという足音と朝食（と弁当）を作っている良い香りに混ざり洗濯機のまわる音と洗剤の香りもする

「京助！ 弁当忘れてるっちゃッ!!」

自分の部屋の戸を勢いよく開けて鞆を持ち玄関で靴の踵を踏んだまま走り出そうとしている京助に緊那羅きんならが慌てて弁当を手渡すと『サンキュ』というように片手を挙げて走り出す

これも【いつも通り】の一つになっていた

小学生の悠助は近所の子供会で集団登校をしているということでもう家をとっくに出ていた

「…さてと…」

京助を慌しく見送ると緊那羅きんならは立てかけてあった箒を持ち境内に向かう

もうすっかり習慣になってしまっているらしい

母ハルミは庭で洗濯物を干していた

皺を伸ばす音が気持ちよく響き干された洗濯物が風になびく

昨日フアンタ（グレープ）まみれになった服も綺麗に洗濯され干されていく

母ハルミが京助の履いていたハーフパンツも他の洗濯物と同様に皺を伸ばすため宙に打ち付けるとそのポケットから何かが飛び出した
「あら：今何か出たかしら？　：気のせいかしらねえ？」

キヨロキヨロと自分の周りを見てからハンガーにハーフパンツを干した

赤い玉が鉢の中でキラリ、と光った

「どうよキンナラムちゃんは」

昼休み、南がペットボトル片手に聞いてきた

「どうよって何がどうよ？」

玉子焼きを箸で挟んだまま京助が聞き返す

「天だから何か来たか？　しばらくしたら誰か来るとかゆーてたじやん？　もう結構【しばらく】してると思うんだけどさ」

机に腰掛けて坂田の弁当からおしんこを失敬しパリパリ噛みながら中島が言った

「別に：なーんの音沙汰もねえぞ？　：緊那羅は毎日母さんの手伝いしてるし：」

玉子焼きを口に含みここ数日のことを頭の中で振り返る

「今日辺り来そうな気しなくもないんだけどさあ：来たら来たらでアレだろ？」

「どれだよ」

箸を上下に動かして溜息をつく京助に再び弁当を狙ってきた中島の手を箸で刺しながら坂田が突っ込む

「面倒っていうか：その誰か来たらまたこの間みたいな感じになるんだろ？　緊那羅きんならが来たときみたいになさ：守るだの殺すだのダーリンだの：」

「アレはもう御免だねえ：」

南が遠い目をしながら呟く

緊那羅きんならとの初対面（及びその他）を思い返し4人はそろって溜息をつく

「俺今度あんななかったら京助と友達やめるわ」

キラキラと爽やかな（エセっぽい）笑顔を浮かべて坂田が申し訳なさそうに手を振った

南、中島も同じく爽やかな（エセっぽい）笑顔でコクコク頷いている

「…俺も自分と友達やめてえよ…」

京助はガツクリと肩を落とした

「いや、無理だから」

追い討ちをかけるように更に爽やかな笑顔で南が京助の落ちまくった肩に手を乗せた

「じゃあまた明日ね」

一学期中はほぼ午前授業の小学一年生悠助が友達と別れ、石段を駆け上って元気よく玄関の戸を開けて

「ただいまー！！」

と家の奥に向かって叫ぶと

「おかえりだっちゃ」

後から緊那羅きんならが声をかけてきた

「ただいま緊ちゃんー」

腰に抱きつき満面の笑みで緊那羅を見上げると緊那羅きんならも笑顔で少し汗ばんだ悠助の前髪を撫で上げる

ゴト…

ふと庭で何か重たいものが動く音がした気がする

「…今何か気こえたよ…ね？」

悠助が庭の方を見ながら緊那羅きんならに聞いた

「…悠助も聞こえたなら気のせいじゃないっちゃね…」

昨日の迦楼羅かるらと乾闥婆けんだつばを思い出し緊那羅きんならの顔つきが陰しくなる

腰から悠助を引き離し庭へと向かう

その手にはいつの間にかあの棒のようなものが二本握られている

「緊ちゃん…」

「悠助はそこにいるっちゃ」

声をかけてきた悠助に振り向かないで言った

ゴト…ゴト…

音がだんだん近づいてくる

緊那羅^{きんなら}が庭に近づいているせいもあるが向こうの音も緊那羅^{きんなら}に近づいている様な気がする

「…私の…役目…京助、悠助…」

グツと手に力を入れて棒のようなものを構えた緊那羅^{きんなら}が庭に足を踏み入れた

「!?!?; ツー…うわあっ!!!!!!」

「緊ちゃん!?!?」

玄関先で緊那羅^{きんなら}に言われたとおり待っていた悠助は緊那羅^{きんなら}の叫び声を聞いて一瞬迷った後庭へと駆けていった

自宅玄関の引き戸を開けた京助は再び玄関の引き戸をゆっくりと閉めた

そして表札を見、ここが自分の生まれ育っている【栄野】という家であることを確認した

「おかえり〜京助〜」

悠助が閉めた戸をカラカラと開けて抱きついてくる

「なあ…悠…お兄ちゃん今な〜んか変なもの見えただけどアレ、何かなあ〜?」

悠助を見るわけでもなくどこか遠くのメルヘンな世界を見ているような遠い目で京助は訊ねた

「ヒマ子さんだよ」

玄関の中を振り返るとそこには

「お帰りなさいませ京様」

そういつて両手(?)をつき頭(?)を下けている物体がいた

「ヒマ子さんって…あのヒマ子さんか?」

京助は庭で悠助が育てている鉢植えの向日葵を思い出した
そしてその物体を改めてみると確かに【ヒマ子さん】と書かれた鉢
がついている

「そうでございます…私^{わたくし}悠様に植えていただいた向日葵、ヒマ子で
ございます」

ヒマ子は両手…いや両葉をついたまま頭…(?)をあげ京助を見ると
顔を赤らめた

「…ナンダヨその行動は；」

まるで恋する乙女のようなヒマ子のしぐさに京助が突っ込む

「ヒマ子さん、京助が好きなんだって」

「は？」

悠助の耳を疑いたくなる問題発言に京助が固まる

「いやですわ悠様！！ そんなはつきり…私困ってしまいますわ…」
ヒマ子が両葉で顔を支えイヤイヤと横に振る

「…困ってしまうのは俺の方だ…」

玄関の柱に頭をつけて溜息をつく

チラリとヒマ子の方を見ると片葉で床に【の】の字を書きながらモ
ジモジしている

京助はガックリとその場にへたり込んだ

「あ！！ そうだ京助！ 緊ちゃんが大変なのー！！」

悠助がへたり込んだ京助の制服を引っ張って騒ぐ

「大変…？ 何が…；」

のろのろと立ち上がると手を引っ張って庭につれて行こうとする悠
助に身を任せよろよろとついていった

「…何してんだ緊那羅…」

庭に出ると緊那羅^{きんなら}が洗濯物干し竿の下に座り込んでいた

「…緊那羅^{きんなら}って」

「ギャーーーーーーッ！！！！！！；」

「だーーーーーーッ！！！！！！？；」

呼んでも返事をしない緊那羅^{きんなら}の肩を京助が叩くと途端に上がった緊^き
んなら

那羅の悲鳴

ゴン

「落ち着け；」

それに対して京助が緊那羅きんならの頭を殴った

「きよ：うすけ：」

ハッとして顔を上げた緊那羅きんならが京助と悠助を見、安心したように溜息をついた

「緊ちゃん、もう大丈夫だからね？ 京助帰ってきたから」

悠助が『ねー』っと京助を見上げて笑う

「：で？ 何が大変なんだ？」

確か悠助は緊那羅きんならが大変ということと京助を庭に連れてきた

見たところ別に何も【大変】そうには見えない緊那羅きんならとその周辺に何が大変なのか悠助に尋ねた

「緊ちゃんねー立てないの」

「：は？」

緊那羅きんならを見ると真っ赤になって俯いた

「：腰：抜けたのか？」

「あんなもんみりや誰だって腰抜かすっちゃッ！！；」

ぼそっといった一言に真っ赤になりながら緊那羅きんならが声を張り上げて言い返す

【あんなもん】とはヒマ子さんのことらしい

迦楼羅かるらか乾闥婆けんたつばがやってきたのかと思ひ覺悟を決めて庭に入ったのはいいがいたのは迦楼羅かるらでも乾闥婆けんたつばでもなく動いて話す向日葵のヒマ子さん

極度の緊張と決死の覚悟で精神がいっぱいいっぱい状態の【あんなもん】のヒマ子さんを見た緊那羅きんならは腰が抜けてしまったのだ

「俺は抜かさなかったぞ」

ざまあみろ的笑みを浮かべ胸を張る京助を緊那羅きんならは赤い顔でにらんだ

「僕も抜かさなかったー！！」

悠助がピョンピョン飛び跳ねながらはしゃぐ

「わかったっちゃから…起こして…」

はぁ…と深い溜息をつき緊那羅きんならが手を差し出すと京助がその手を掴んで立たせる

結構長い時間その場に座り込んでいたらしく立てた後も足が笑っている緊那羅きんならを京助と悠助が支えながら家に入る様子をみていた【あんなもん】のヒマ子は密かに緊那羅きんならに対し女のジェラシーというものを燃やしていた

「このままではいけませんわ…私女として男の緊那羅様きんならに負けては一生の恥…京様は私のものでしてよ…」

緊那羅きんならはただならぬ殺気を感じぶるっと震えた

それはこれから始まるヒマ子の勘違いな敵対心の幕開けの合図だったのかもしれない

ジー…パシン

「…なにしてるっちゃ?」

メジャーを持ち緊那羅きんならの腰に両葉を回しているヒマ子に声をかける

「…57・4cm…勝ちましたわ…」

ボソッと呟くと緊那羅きんならに背をむけて走り出す（鉢引きずったまんま）

「京様ー!! 私勝ちましたわー!!」

ヒマ子が無にどうして何を勝ったのかわからないが京助の名前を高らかに叫びながらゴトゴト鉢のまま走るヒマ子の後姿を緊那羅きんならは箒を持ったままぼかんと見ていた

「京様!! 私やりましてよ! 緊那羅様きんならに勝ちましたわ!」

「ぶへほッ!」

鉢がついたままタックル抱きつきを直で受けた京助は数メートル吹っ飛んだ

「緊那羅様きんならウエスト57・4cmに対し私ヒマ子なんと14cm!」
ヒマ子は腰（にあたる部分と思われる）に葉をやりセクスイーポーズを決めて勝利宣言をする

「勝った…つうかお前3サイズ全部同じなんじゃねえの?」

タツクルをくらって埃まみれになった京助の言葉を受けてヒマ子はメジャーで3サイズを計り始め、そしてガックリとその場に座り込む

「…おなじ…でしたわ…」

ヒマ子の頭上に【ずん胴】の文字が浮かんで見えた（様な気がした）

「…ボンキュッボンの向日葵がいてもどうよって感じだけどな」

胸と尻をプリプリさせているヒマ子を想像して京助は青い顔で遠くを見つめた

「なにしてるの？」

庭でコマとイヌと遊んでいた悠助はヒマ子のいつもと違う格好を見て声をかける

日傘をさしサングラスをかけ挙句日焼け止めのクリームを塗っていた

「白い肌は女の命ですわ焼くなんてもってのほか！！ 美の敵ですわ！！ 美肌なら緊那羅様きんらに負けませんわよ！」

そう力説するヒマ子に

「でもヒマ子さん緑色だよ？」

悠助の痛恨の一撃、ヒマ子は固まってしまった（RPG風に）

「ピッ ●ロさん（ドラゴ ●ボール）と同じだね」

夏休み特番放送でドラゴ ●ボールを昨日見た悠助は楽しそうにヒマ子に言った（悪気皆無）

「…京様…」

白い布きんが掛かった皿を真っ赤になりながら両葉で京助に差し出た

「暑い中草むしりご苦労様です…あの…よろしかったらお食べになつてください…元気になりますわ」

京助が皿を受け取ると両葉で顔を覆い、恥ずかしそうに身をくねらせる

その様子を頬を引きつらせながら見ていた京助と目が合うと『キャッ』と小さく声を上げてしゃがみこんでしまった

「ま…あ何だありがとうな」

引きつった笑顔で皿の布きんを取った京助は中のものを見て固まった
「：なんだ：コレ」

異臭を放つ土のような物体：

「榎樹屋の植物用肥料『元樹君ハイパー』ですわVVどうぞお食べに：」

「食えるかッ！！；」

体育^{のみ}5の京助が力いっぱい放り投げた『元樹君ハイパー』は皿ごとはるか彼方に飛んでいった

「何なんだよアイツはッ！！；」

散々ヒマ子に付きまとわれ夕方、京助がついにキレた

「ヒマ子さんは京助のこと好きなんだってば」

「こちとら迷惑なんじゃっ！！ てか何で向日葵が動いて話してるんだよッ！」

頭をかきむしり声を荒げながら京助はキレていた

「大体俺をどうして好きになったのかがわからんッ！！；」

「本人に聞いてみたらどうだっちゃ？」

意味も無く歩き回っては意味も無い動きをする京助に緊那羅^{きんなら}がさらにといった

「私もなんで敵視されているのか丁度聞こうと思っていたところだっちゃし：」

敵視される理由がわからないのに敵視されている緊那羅^{きんなら}も疲れてきているらしい

「僕もいく」

3人はヒマ子のいる庭に向かうことにした

「ヒマ子さんっ！？」

先に庭にはいった悠助の尋常じゃない声を聞いて京助と緊那羅^{きんなら}が急いで庭に入る

そこにはぐったりとしてヒマ子が倒れていた

「ヒマ子さん！！ ヒマ子さん！！」

悠助が泣きそうになりながらヒマ子の体を揺すって起こそうとする
「悠助ストップだっちゃ！」

ヒマ子をガクガクと揺すっている悠助を捕まえて緊那羅きんならが押さえる
「ヒマ子さん！ ヒマ子さんー！！ 死んじやだあー！！」

うわーんと声を上げて悠助が泣き出すと京助がぐったりしているヒマ子に近づいた

「京助…」

泣いたままの悠助を抱きながら緊那羅きんならもヒマ子に近づく

「…なんだ？ これ…」

ヒマ子の葉に触った京助はぬるっとした感触を手に感じた

「なんだっちゃ？」

緊那羅きんならも悠助を抱いたまま京助の手を見る
ヌルヌルした物体が京助の手についていた

「…何か…どっかで嗅いだことのある匂いなんだけど…」

京助はフンフンと手の匂いを嗅いで何かを思い出そうとしている

「…まさか…日焼け止めか？…」

日差しの強い日母ハルミがよくつけていた日焼け止めクリームの匂いであることを思い出したらしい

「京助嗅覚犬レベルだっちゃね…」

緊那羅きんならが感心して(?) いる

「そう…いえばね、昼間緊ちゃんちゃんが美肌で緑色の女の命だからピツコロコロさんで焼かないって…」

「は？…」

悠助が泣いた後特有ののしゃっくり地獄に陥りながら昼間ヒマ子が日焼け止めクリームを塗っていたことを告げた

「そりゃ…ぐったりするの当たり前だわな…そんなもん塗ったら光合成できねえし…」

京助が溜息をついた

「…助かるっちゃ？」

「助かるの？」

緊那羅きんならと悠助が恐る恐る京助に聞く

「…クリーム落として水やって…明日日光浴びたら元気になるだろうさ」

頭をかきながら京助が立ち上がり家の中にはいつていった

「…よかったっちゃね悠助」

悠助を地面に降ろして頭をなでてやると目をこすって

「うんっ!!」

と赤い目のまま満面の笑みで緊那羅きんならを見上げた

「はいお前らも手伝えよ？」

手にタオルとバケツを持って京助が家から出てきた

体が軽くなっていくのを感じてヒマ子がうつすらと目を開けるとすっかり暗くなった空に星が見えた

「私…」

ゆっくりと頭を右の方に向けると縁側に緊那羅きんならの姿があった

「きん…なら様…」

その声に気づいた緊那羅きんならは小走りで近づいてきてしゃがむとヒマ子の顔を覗き込んだ

「大丈夫だっちゃ？」

額（にあたる部分）に手を当てて心配そうに聞いてきた

「私…どうしたのでしょう…」

何も覚えていないらしいうつろな眼で空を見るヒマ子に緊那羅きんならが日焼け止めのせいで光合成ができなかったということを説明した

「…そうでしたの…私ったら…申し訳ありません…」

ヒマ子は目を閉て緊那羅きんならに謝った

「ヒマ子さんは本当に京助が好きなんだっちゃね」

「俺の何処がいいんだかな」

振り返ると縁側には柱に背中を預けて京助が座っていた

「京様…」

ヒマ子が名前を口にとすると京助が庭に下りてきた

「私向こういつてるっちゃ」

緊那羅きんならは立ち上がり京助とバトンタッチというように手を合わせる
と家の中に入って行った

しばらく沈黙が続いた後京助が口を開いた

「…もう大丈夫なのか？」

「はい…ご迷惑をお掛けいたしました…」

申し訳なさそうに謝るヒマ子に京助は続きの言葉を詰まらせまたし
ばらくの沈黙

「あの…さ俺の何処が良くて好きなのわけ？」

ラチがあかないと判断した京助はいきなり核心…一番聞きたかった
ことを聞いてみた

「…初めてだったのですわ…」

頬をほんのり赤くしてヒマ子が京助をチラリと見た

「何が？」

その仕草に多少悪寒を感じつつ京助が聞き返す

「…接吻…ですわ」

「はぁッ!?!」

ヒマ子の口から出た『せっぷん』という言葉に京助の顔がこの世の
ものとは思えないものに変わった

ヒマ子とキス

向日葵とキス…

「忘れもしない強風の吹いたあの日…私の心は京様に奪われたので
すわ…」

両葉を頬にあて一人ヒマ子は盛り上がっていく

「あの激しく痛いキス…その瞬間私は京様に操を立てたのですわ!

いやんもう!! 恥ずかしいですわっ!!」

身をくねらせ更に一人で盛り上がるヒマ子に対し全く身に覚えの無
い京助は激しく混乱しつつ歯止めの一言をヒマ子に言った

「…俺キスした覚え全ッ然ないんですけども;」

その一言で今度はヒマ子の顔がこの世のものとは思えないものに変わり…

「ひ…ひどいですわーーーーーッ!!」

声を上げて泣き出した

その声を聞いて緊那羅きんならと悠助、母ハルミまでもが庭にやってきた

「私は真剣でしたのにッ!! やはり緊那羅様きんならとできてらしたのですわねッ!! 私きんならは遊びだったのですわねーーーーッ!!!!」

緊那羅の姿を見たヒマ子は更に声を上げて泣き出す

「ハイ!?!」

京助と自分ができているといわれ緊那羅きんならは京助とともに素っ頓狂な声を上げた

「ねえねえできてるってなに?」

悠助が母ハルミのスカートを引っ張ってのんきに聞くと母ハルミも「そうねえ…らぶらぶ…ってことかしら」

とのんきに答えた

「緊那羅様きんならと違ってしよせん私は植物!どんなに頑張って光合成しても京様との子供なんて出来ないですわ!! 葉緑体しか増えないのですわーーーー!!」

「いや私もできないっちゃ子供(男だし)」

緊那羅きんならの小さなツッコミに一瞬動きを止めたヒマ子だが

「でもラブいですわーーーー!!」

と叫び再び泣き出した

「落ち着け」

コッソン、と京助がヒマ子の頭を軽く小突いた

驚いて泣くのを忘れたヒマ子が顔を上げると

「あの…さあ」

京助は面倒くさそうに何かを言おうとしている

「…キスしたとかしてないとか? 緊那羅きんならとできるとかはこっちに置いて置いて…頑張って光合成で葉緑体だかが増えるってのはいんじゃないねえ? ソレ増えたらお前綺麗に咲き続けられるんだろ?

：俺理科嫌いだからよくわからねえけど：向日葵って花好きぞ」
目を細めてどこか呆れたように優しく笑う京助を見てヒマ子は頬を
赤くした

「僕も向日葵好きだよー!!」

庭に下りてきた悠助がヒマ子に抱きついて頬擦りをする

「青空と向日葵ってすっごく綺麗なんだよーだから好きー!!」
だからヒマ子さんも【こうごうせい】たくさんして綺麗なままでいて
ね？」

につこりと笑って悠助がヒマ子を抱きしめる

「折角綺麗に咲いてるのにそんなにないたら花卉取れちゃうっちゃ
よ？」

緊那羅きんならもしゃがんでヒマ子を撫でた

「私：私：」

「向日葵はね顔をお日様に向けて咲くから輝くの：明日もいい天気
だそうだから：また綺麗になれるわね：もっと綺麗になって京助を
見返してあげたら？ ヒマ子さん？」

母ハルミが悠助の頭に手を置き笑いながら言った

「なんじゃそれ；」

京助が苦笑いで反論する

「：ありがとう：」

ヒマ子が小さく言った

>i119436—2575<

【第二回・弐】南くんのチョイ人（前書き）

京助の友達の一入である 南 が出会ったのは5歳の小さな
ス でした

【第二回・弐】南くんのチョイ人

一学期の終業式が終わり校門が生徒でごった返しているのを教室から眺めていた南は窓を閉め振り返ると坂田、中島、そして京助と見渡した後にコクリと頷いた

三人も『了解』と言うようにそろって頷く

「プロジェクト【ありす】始動！ 三十分後三浦医院の正門前！

京助はキンナラムちゃんと悠も忘れずにつれてくること！」

「ラジャー！！」

南の一言でそれぞれ一学期中に溜め込んだ物資（漫画とか遊び物）を抱え教室のドアやろうかにぶつかりながら一旦解散した

「待つてろよ…不思議の国へご招待だ」

事の発端は南の従兄弟（4歳）が喘息で入院した所から始まる
母親に頼まれてお見舞いを持って小児科病院を訪れた南は従兄弟の隣のベッドで一人本を読んでいた少女と知合った

南が病室に行くと丁度従兄弟がいなかったから暇つぶしに隣のベッドの女の子に

「なに読んでんの？」

と話しかけてみたのだ

ビックリして顔を上げた少女は本を閉じて表紙を南に見せた

「不思議の国のアリス…この本好きなのか？」

そう問いかけるとにっこりと笑って頷いた

「その子、喉の病気なのよ…声が出ないの」

そうこうしているうちに戻ってきた従兄弟の母親が教えてくれた

【北田ありす】 歳は5歳

病院のベッドに書いてある名札から名前と歳を知った

服を引っ張り嬉しそうに『遊んで』というように笑顔を向けるありますが可愛く思えた

妙にありすに懷かれた南は従兄弟が退院してもちよくちよくありすに会いに病院へ通った

が：おかしなことに一度もありすの両親に会ったことが無かったきつと忙しいのだろう、南は特に気にもしていなかった

「南？」

病院のロビーで聞きなれた、でも今は聞きたくなかた声に呼び止められた

「：京助：」

そこにいたのは目を真っ赤にした悠助を背負った京助だった

「何してんだ？　：悠、足どうした？」

悠助の左足にまいていある包帯に気づいた

「境内の廊下で転んで捻挫。：南こそぞないしたん誰か知合いとか入院してるのか？それとも看護婦にトキメキメモリアルか？」

冗談で京助が笑うと南は

「：：そうかもしれない：：な」

と真顔で返してきたものだから京助は悠助の尻を支えていた手を思わず離してしまった

「京助落ちる落ちるゝ！！」

悠助が懸命に京助の首につかまる

「看護婦じゃないけどな」

ふつと笑って背を向けると自動ドアから外へ出て行った

「：：なんなんだ：：南のヤツ：：」

悠助を背負い直すと会計のカウンターに向かった

南がおかしい

それが中島、坂田、京助が共通で最近感じていることだった

「三日に一回は真直ぐ帰宅モードになってるし」

坂田がスナック菓子コバンを口に運びながら言う

「授業中とかなんかの型紙作ったりしてるし」

中島もコパンを食べながら報告する

「この間なんか小児科病院にいたし…」

京助も教室内を歩き回って腕を組みながら言った

「…おかしい…」

3人は口をそろえてその一言をハモったその時だった

「京助！ 坂田！ 中島！ 3馬鹿いるかっ！！？」

南がでっかい袋を4つもって勢いよくドアを蹴り開けた

「…いますけれども」

「何用でしょうか」

「つかお前い今3馬鹿とかゆうたろ」

噂をすればなんとやら南くんのご登場であった

「…頼みがある」

4つのでかい袋を両手に持った姿はさながらバーゲン帰りの主婦のようだった南の顔は真剣そのものだった

「…頼みって何だ？」

坂田が机に座って聞き返すと南は4つの袋を置きその一つからなにより取り出した

「…ウサ耳…」

ヘアバンドに取り付けられた白く長い物体…南が頭に装着するとそれはウサギの耳になった

ウサ耳をつけた南は袋の中から更に袋を取り出し三人に渡した

袋の中にはそれぞれシルクハットやら変な被り物やら背広やらが入っていた

「…南…これってまさか…」

中島が尋ねると南はウサ耳を指で弾いて後にやるとにと笑ってこういった

「不思議の国を作るの手伝ってくれ」

その日のありすはいつもより元気がなく南から離れたがらなかった

「…ありすはどっか行きたいところあるのか？」

何気なく南が聞くとありすは目を大きく見開いた後泣き出してしまったのだ

そんなありすをようやく泣き止ませ帰ろうとしていた南は看護婦に呼ばれて振り向いた

『ありすはどっか行きたいところあるのか？』

看護婦の言葉を聞いた南はさっき自分がありすにした質問に後悔する

「ありすちゃん…ご両親が離婚して再来週福島県に引っちゃうのよ」

「え…」

知らなかったとはいえありすを傷つけてしまったことには変わらない次の日ありすは南にくつついたままだったが一回も笑わなかった

「…ありす…」

どうしていいかわからなくて南はただありすの頭を撫でるだけだった面会時間終了の音楽が鳴っているのに気づいた南がありすを見るとありすは静かに寝息を立てていた

起こさないように立ち上がると南の立った反動で枕もとの絵本が数冊床に落ちてしまった

慌ててありすに目をやると起きる様子もなくよく眠っていたほっとして本を拾いはじめた南の手が止まった

【不思議の国のアリス】

ありすとであった時にありすが読んでた本だった

『不思議の国のアリス…この本好きなのか？』

そう聞いたときのありすの笑顔を思い出した南は何かを思いつき時計に目をやるとダッシュで病院を出て行った

「…というわけでお前らの協力が必要不可欠になってしまったんでごわすよ」

ウサ耳をプラプラ揺らしながら南がコパンを口に運ぶ

「ええ話やナア…」

感動した中島が京助のシャツで鼻をかむ

「南の恋人は5歳かあ…恋人つつーよりはチョイ人って感じだよな」
中島を肘で攻撃しながら京助が言った

「で…実行はいつなんだ？ 時計ウサギの南くん」

坂田がシルクハットをかぶってウサ耳の南に聞いた

「実行は明日終業式終了後、ちゃんと医者に許可も取った。それと京助、キンナラムちゃんと悠助の協力もほしいんだ」

そういつて今だ中島を攻撃し続ける京助を見た

「…悠と緊那羅きんならもか？…まあいいけど」

緊那羅きんならと悠助の文の衣装を受け取ると京助は自分のも一緒に鞆に突っ込んだ

ありすは窓外を見ていた

膝には【不思議の国のアリス】の絵本

「不思議の国に行きたいかい？ ありす」

はっとして振り返ると大きな包みを持ったウサ耳装着済の衣装に身を包んだ南が深々と一礼をして包みを手渡した

「行きたいならば行こう？ さあ早く着替えて」

そういうと南はベッドの周りを囲うようにあるカーテンを閉めた

ありすが恐る恐る包みを開けるとそこには青いワンピースドレスと黒いリボンつきのカチューシャ、そして白いエプロン…【不思議の国のアリス】の衣装だった

これらは全て南のお手製である

「早く早くありす！もう時間が無いんだ！」

南がどこか演技っぽくカーテン越しにありすに声をかけるとカーテンが開きアリスの格好をしたありすが照れながら出てきた

「さすがはありす、アリス姿がよくお似合いで」

二人は顔を見合わせて笑った

「さあ！ 不思議の国にご招待だ！」

ありすを抱き上げ小走りで病室を出た

廊下では当たり前だが他の入院している子供たちの注目の的となっておりすは真っ赤になって南に抱きついた

しばらく行くと南が足を止めた

「さあついたぞありす」

そういつてドアを開けると軽快な音楽とともに猫耳をつけた悠助がおで迎えする

「ようこそ不思議の国へ！」

どうやらチシャ猫の役らしくシマシマの尻尾を振り回してあちこち走り回っている

ありすがぼかんとしていると今度は奥から坂田扮するいかれ帽子屋とトランプ兵に扮した京助がやってきてありすに白い薔薇を手渡した

「それが見つかる女王様に首をはねられちゃうんだようだからありすにプレゼンツ！」

トランプ兵京助が手で首を切るマネをするとありすがふふっと笑った
「ようこそありす不思議の国のお茶会へ、今日はなんでもない日……」

だからお茶会を開いているのですよ」
シルクハットを指で挙げて坂田がまんまセリフを棒読み

「坂田：演技下手すぎ」

トランプ兵京助が突っ込んだ

「よくいらつしやいましたありす、私がハートの女王だわよ」

ハートの女王の姿を見た南とありすは固まった

「いや……緊那羅きんならが断固拒否したんで代役……をと」

ハートの女王に扮していたのは中島だった

比較的華奢な緊那羅きんなら用につけてあったと思われる衣装は比較的体格のいい運動部の中島の体には不釣り合いだった（当たり前）

「……こんなのが女王だったら不思議の国じゃなく不気味の国だよな……」

坂田がぼそっと呟いた

「なんで私だけ女役やらないといけないんだっちゃ」

緊那羅^{きんなら}は椅子に腰掛けて本来なら中島がやるはずだった三月ウサギの格好をしながらポツキーをくわえていた

「と…とにかくっ；…さあ、ありすこちらへ」

白い薔薇を持ったまま固まっていたありすは南の声で我に返り椅子に腰掛ける

「皆のもの！ 存分に楽しんでいってくださいですよ！」

ハートの女王中島のおかしな掛け声で不思議の国のお茶会が始まった

ミーンミーン…

「あつつう…；…なんなんだよこの暑さは…ハルミさんいないしさあ…最悪…」

扇風機の前でうだる坂田を馬鹿にするように外では蝉がせわしなく鳴いている

坂田、南、中島の3人は夏休みに入ってから【宿題合宿】とこじつけて栄野家に泊り込んでいた

母ハルミは婦人会の旅行で二泊三日不在だった

「4年ぶりの猛暑とか天気予報でいってたぞ」

うちわで扇ぎながら京助が言った

「北海道でコレなら…福島はもっと暑いんだろうな」

ぼそっと一言はなった南に3人が視線を向けた

縁側に足を投げ出してぼーっと空を見ている

庭ではヒマ子さんと悠助、コマとイヌがビニールプールで遊んでいる
ありすが福島に行ってから2日経っていた

「…凹んでるナァ…南」

チリリと風鈴の鳴る音がいつもより大きく聞こえた

「そりゃあ…恋人が遠くにいっちゃったなら誰だって凹むだろうが」

「ハルミさん…」

京助の一言が（何故か）坂田にもダメージを与えたらしいパタリと横になってしまった

「ただいまだっちゃー」

カラカラと玄関の引き戸が開く音と共に緊那羅きんならが帰ってきた
ジャンケンで負けた緊那羅きんならは近くの商店にアイスの買出しに行つて
来たのだった

「おかえり緊ちゃんっ!」

悠助がプールから上がって走りよる

「コラ悠! 体拭いてから家人中入れよ」

「はあい」

びしょびしょのまま縁側に足をかけた悠助に京助がタオルを投げた

「あ…そうだ京助、コレ…」

緊那羅きんならがアイスの入った袋とは別の袋と財布を京助に手渡した

「…ああ! こないだの写真か!」

それは【不思議の国のお茶会】の時の写真だった

「できあがったんだなあ…つかこの女王やっぱ不気味だな…」

「どれどれ?」

京助が写真を見始めるとアイスを食っていた中島、悠助、坂田、緊き
那羅んならもその周りに集まった

南だけがぼーっと空を見ていた

「オイ! ロリコン!」

コッソンと坂田にアイスで頭を小突かれた

「ロリ…じゃねえってば」

「わーってるってば…ホラ」

アイスと共に一枚の写真を手渡された

「俺ガリガリくんがいいー」

「文句たれるな;」

頭におかれたカップアイスを手に取った南が文句を言う

「ありす笑ってるのにお前しよげてたら駄目なんちゃう? 時計ウ

サギとアリスがいてからこそ不思議の国のアリスだろうが」

写っていたのは楽しそうに笑うありすと南（後に女王とチシャ猫）
だった

「声：出るようになったら電話するってさ：言っただ番号教えてないのに」

苦笑いを浮かべて南は写真を見つめた

「手紙：書こっかとか：」

「よいんじゃありません？」

「番号教えるのに：」

「うむ」

「あと：写真も送りたいし：」

「金、かさねえからな送料に気をつけろや」

「：ケチ」

「アイス溶けるぞ」

坂田も南も相手を見ないで遠くを見ながら漫才のような淡々とした会話をした

「また：会えるよな」

「：会えるだろうさ。アリスだって最後には時計ウサギにあえたんだし」

「そうだよな：」

南は溶け掛かったアイスの蓋を開けた

>i19470—2575<

【第二回・参】僕らの開かずの間清掃（前書き）

旧家な造りの栄野家は住人に反比例してやたらと部屋数が多い
夏休みに入った京助たちに母ハルミからくだった指令は【大掃除】
だった

行け！！
焼肉のため！！

【第二回・参】僕らの開かずの間清掃

【栄野京助Ⅱ殺虫剤、スリッパ】

【坂田深弦Ⅱハタキ（色はピンク）】

【南朔夜Ⅱ箒】

【中島柚汰Ⅱバケツ&雑巾】

【きんなら緊那羅Ⅱ箒】

【栄野悠助Ⅱゴミ袋】

選ばれし暇をもてあましていた5人の勇者達が各々に武器（というか掃除用具）を持ち最終決戦（っても栄野家）のステージである栄野家の開かずの間の引き戸の前に集結した

「…いくぞ」

京助の一言に全員が頷いた

京助が開かずの間の引き戸に手をかけると一気にその戸を開けた

「暇ならお掃除手伝ってくれないかしら？」

栄野家での夏休み宿題合宿（仮）の6日目は母ハルミのこんな一言から始まった

宿題合宿といっても名前だけで実際は海だ！ 山だ！ 夏休みだ！

と遊び倒していた

「いいですともっ！」

母ハルミの頼みとあらば黙っていられないのが坂田である

目を輝かせて引き受けてしまった

栄野家は神社、しかもソコソコ続いているらしくやけにだだっ広く部屋数も結構あった

普段の生活に必要な茶の間、トイレ、風呂場などは母ハルミと居候きんなら緊那羅が掃除をしているのだがその他の部屋は年に数回しか掃除

していなかったとかとてもじゃないがそこまで手が回らなかった
そこで母ハルミは若くて元気のある労働力、3馬鹿が泊まりにきて
いるうちに手伝ってくれるよう声をかけてみたのだった

「あらあ助かるわ」

坂田の返事を聞いた母ハルミは嬉しそうに笑った

「：俺らの意見は聞いてくれなさそうっスね」

中島が庭先で光合成しているヒマ子に水をかけながら溜息をついた

「お掃除頑張ってくれるなら今晚は奮発して焼肉にするわね」

その一言が坂田以外の輩、京助、中島、南のやる気に火をつけた

焼肉！ やきにく！ ヤキニク！ Y A - K I - N I - K U！

「お任せください母上！ ダスキンもビックリな掃除っぷりをお見
せいたしましょう！！」

京助が両目に【焼肉】の二文字を輝かせながら宣言した
南と中島もコクコクと頷いて『任せろ！』といわんばかりに親指を
立てた

さすが母ハルミは馬鹿の扱いが上手かった
こうして栄野家の大掃除が始まったのである

それぞれ分担して掃除をしていく

昔ながらの造りの栄野家は掃除機より箒の方が勝手がいい
緊那羅きんならがなれた手つきで廊下の奥からゴミを掃き出すと掃いた後か
ら中島が雑巾を掛ける

坂田がハタキで天井の埃を払うと悠助がくしゃみをして鼻水を床に
たらす

京助は割り箸でクモの巣をクルクルまきとっていた
南は仏間に掛けてある掛け軸をみて唸っていた

「さばんなよ」

京助がチョップを食らわせる

「いやゝゝこの掛け軸いい仕事してますなあゝじゃなくて京助」

京助の手を掴んではなすと南が仏間を見渡して聞いてきた

「お前の父さんってどれだ？」

梁の上に並べてある沢山の故人の白黒の写真

「父さんのはねえよ？」

京助がさらりと言った

「写真へたに残して母さんが思い出して哀しむの嫌だから写真は残すなって遺言だったらしいんだゝ俺も顔覚えてねえし」

京助は父親は悠助が母ハルミの胎内にいた頃に他界したと昔母ハルミから聞いたことがあった

まだ小さかったから父のことは覚えてなくて当然だとも聞かされていた

父との思い出は全く思い出せない

そこまで自分は小さかっただろうか

「ゝさゝてゝ焼肉のためにもうひとふんばりますか！！ゝさばんなよ」

しみりしてしまった空気を払うかのように京助が少し大きめの声で言った

「京様！ 私も微力ながらお手伝いいたしますわ！」

柱を雑巾で拭いていた京助の元に鉢を引きずりながら雑巾を葉に持ちヒマ子がやってきた

「たとい今は緊那羅様に劣っているようにも！ 女ヒマ子！ 必ず京様を振り向かせて見せますわ！！」

「だからゝどうしてそこに緊那羅きんならがでてくるんよゝってか性別ゝ」

京助は背後で緊那羅きんならにまだ勝手に恋の闘争心をさらけ出して燃えているヒマ子と視線を合わせないように柱に雑巾を掛ける

遠くの廊下で緊那羅きんならがくしゃみをした声が聞こえた

「…手伝うのはいいんだけど…ミス・ヒマ子…土…落ちてますから…」

燃えてるヒマ子に中島が声を掛ける

ヒマ子の通ってきた後には一直線に土が落ちていた

「…残念」

京助が柱を拭きながらぼそつと呟いた

大掃除も終盤を迎え、残すは廊下の突き当たりの古い引き戸の部屋のみになった

「俺…この部屋はいった記憶ねえんだよな」

栄野家長男本人もが入ったことが無いという古い引き戸のこの部屋は俗に言う【開かずの間】という代物であろう

廊下の突き当りとあって日の光も届かず夏なのに涼しく昼間なのにどこか不気味だった

「なにか出そうなヨ・カ・ン」

坂田が気持ち悪く言った

「私恐ろしいですわ…京様…」

京助の後ろに隠れながらヒマ子がここぞと京助にべったりとくつつく

「怖いなら光合成でもしてろ…」

京助がうつとうしそうにヒマ子を払った

「…自分の姿見てから言った方がいいと思うよミス・ヒマ子」

南が壁に手を突いて首を振った

「…というか本当に入るっちゃ？」

緊那羅きんならがちよつといやそうな顔をして引き戸を見る

悠助は緊那羅のシャツをつかみながら引き戸を開けようとしていたがガタガタいうだけで開かなかった

「…焼肉のためだ…行くぞ！」

ドガシャーーー！！

京助が勢いよく開けようとした古い引き戸は部屋の中に倒れた
倒れると同時に埃が舞い上がりか奥の小さな窓から入る微かに光に
キラキラ光った

「：コレ、どう見ても引き戸だったのにどうしてこんな開き方する
んだ？」

「知るか；」

気を取り直して室内を見渡す

八畳くらいの広さの和室

窓は一つ

電気は付いているものの電球がついていなかった
畳は長年の埃のせいで白くなっている

「：ボク明日白猫になっていたりして」

「ホットケーキ食いすぎてホットケーキになるよりマシだろう」

某魔女映画のセリフを言った南に中島がお約束のツツコミを入れる
と二人して親指を立てた

「ここさえ終らせれば焼肉が待っているんだ：焼肉が！」

自分に言い聞かせると京助は部屋に一步足を踏み入れた

足の裏に埃のざらつきを感じながら窓に近づく

他の輩もそろりそろりと部屋の中に入った

置いてある荷物はダンボール数個のみであとはがらんとしていた
窓を開けると風が入って埃が舞った

「一体何年掃除してなかったんだか：」

目の前に下りてきたクモに殺虫スプレーをかけながら京助が部屋を
見渡した

悠助は白くなっている畳に指で何か落書いて遊んでいる

「ここをダスキンもビツクリのビフォーアフターすればハルミさん
喜ぶんだろうな：」

坂田がボソツと呟いた

「ここで私が女の愛の意地根性パワーを京様に見せれば一歩リードですわね……」

ヒマ子もボソツと呟いた

「ここを片付け終わったら焼肉……」

更に京助と南、中島も呟いた

それぞれの思惑が埃の舞う室内で飛び交っている

緊那羅はそんな面々をわけもわからずただ見ていた

「京助ーこのダンボール一旦外出してもいいかー？」

中島が部屋に無造作に置かれていた（放置プレイ）ダンボールをペシ叩きながらクモの巣駆除に勤しむ京助に問いかけた

「あ……いんちやうかね？ 廊下にも一時避難させておけ」

巣についてきたクモに殺虫スプレーをかけながら投げやりに京助が言った

「中、何はいつてるんだろうな」

坂田のボソツと放った一言が全員の動きを止め、計りきれない好奇心に着火を促した

「……」

全員無言のままダンボールの周りに集まって顔を見合わせると爽やかに笑みを交わして親指を立てた

「ごっ 開帳」

「はア……いいらしいませ」

ご開帳コールの中中島が某番組の某司会者のモノマネをしながらダンボールを開けた

中には……

「……布？」

中に入っていたのは一枚の長い布だった

「京助のオシメか」

「うっわ汚ったねッ！」

南の一言に中島が手にとっていた布を投げた

「オシメにしちゃあ長すぎないか？少なかれ3mはあるぞ？」

投げ出された布を京助が拾って広げた

「ビック・ベイビィだったんだなあ…お前」

中島が布の端を持ちながら言う

「いや、いくらなんでもでかすぎだって…つうか…結構な年代物らしいけどコスけてないってすげえ…」

南が感心して布をまじまじと見た

手先が器用な南はよく自分で服を作るために布を購入している
そんな南いわく色の薄い布ほどコスけ率が高いから保管するのは難しいらしい

「そいや…白いTシャツとかも一年タンスに放置プレイしてたら黄色っぽくコスツてるもんなく…さすがハルミさん、一点のコスけもなく長年保管してるなんて…！」

坂田が何かに感動して布に頬ずりした

「あの…」

布に群がっていた4人に緊那羅きんならが声をかけた

「…焼肉とかいいんだっちゃ？」

「あ」

布にかまけていてすっかり忘れていた掃除

悠助はどうの昔に逃亡していたらしく庭から声が聞こえた

ヒマ子は日光不足で貧血になったためにリタイアしたらしい

「…再開…しますか」

「はアいガチャリンコ…」

中島が再びダンボールのふたを開めた

バケツの水は10回近く替えただろうか

雑巾は4枚程真っ黒になって使い物にならなくなった

殺虫スプレーも一本と半分くらい使った

「終ったっちゃ…」

緊那羅きんならが雑巾を持ったまま大きく伸びをしてやれやれと肩を回した

「こっちも終ったぞ〜い」

廊下に一時避難させていたダンボールを室内に戻して清掃終了

「…鼻水が濁流になってる…」

くしゃみをして鼻をかんだ南がティッシュについた自分の鼻水を見てあらためてこの部屋がどんなにすさまじく埃にまみれていたのかを思い知る

坂田の眼鏡も埃で汚れていた

「焼肉の前に風呂だなこりゃ」

京助が髪をバサバサと払うと埃が舞った

「グーチーパーで組み決めて二人ずつな。余ったヤツは悠と一緒だ」

「グーチーパーとか懐かしいし〜…」

典型的な組み分け方法は挙げた京助に南が苦笑いをしながら手をヒラヒラさせる

「…グーチーパーって何だっちゃ？」

聞きなれない言葉に首をかしげる緊那羅きんならに坂田がやり方を教えた

「グーチーパーってのはなグーとチョキとパーのうち好きなものを出して…」

「初心者はグーしか出せないんだぞ」

「南くん嘘はいけないよ」

某霊界探偵漫画のセリフをパクった南に中島が突っ込むと二人は再び笑みを交わして親指を立てた

「んじゃせーのでいくぞ〜…せーの！」

窓の外では京助の殺虫スプレーを逃れた一匹のクモが再び巣をつくっていた

>i19528—2575<

【第三回】金鳥・蚊取線香（前書き）

緊那羅^{きんなら}が栄野家に住むことになって　いつしかそれが当たり前のようになっ
ていたこと

そう気付いたのは　【いなくなって】からだった

【第三回】金鳥・蚊取線香

夏休みも終盤にさしかかった日の夕方

「京様く？ 京様く！！」

京助の名前を呼びながら家中探し回っているヒマ子がいた
部屋にも境内にも茶の間にもいなかった

「おかしいですわねえ…ここ数日ふつといなくなれる回数が増えていますわ…」

ヒマ子がゴトゴトと鉢を引きずって庭に降りていった

ここは何故か落ち着いた

廊下の突き当たりこの間までは【開かずの間】となっていた部屋の
窓辺に京助は腰掛けていた

足や腕についた青瘀もだいぶ色が薄くなってきた

頬についた擦り傷も目立たなくなってきた

「俺は…」

京助は拳を握り締め額に当てた

遠くで豆腐売りのチャルメラが聞こえた

悠助が風邪をひいたということで坂田、南、中島の3人は宿題合宿

(仮)を切り上げて帰った

「こら、おとなしく寝てろ」

母ハルミに起き上がってこようとする悠助の監視役として任命された京助は悠助の寝ている隣で漫画を読んでいた

「だって暇なんだもん…」

京助に叱られて悠助はぷーっと頬を膨らませて枕に頭をつけ手足を
バタバタさせた

「つまんないつまんないつまんなーい！」

「お前がつまなくても俺はつまってんだっつーの」

布団からゴロゴロ転がって机の前まで辿りつく通学用の鞆を開け始めた

「なにやってんだよ；ちゃんニ寝てろって」

京助が悠助を布団に戻そうと立ち上がり近づいて

「お、懐かしい」

と言ってしゃがみこんだ

悠助は国語の教科書を開いていた

小学一年生の教科書は字も大きく平仮名ばかりで中学二年の京助にとってはパツと見、逆に読みづらかった

「このページを暗記してこないといけないんだ；宿題っ！」

良くある国語の宿題パターンの一つである【詩の丸暗記】をだされたいらしい

悠助は教科書を持つと布団にもぐって読み始めた

「おおきなかぶ；」

足をパタパタさせながら声に出して同じ所を何度も読み返す

「何してるっちゃ？」

緊那羅が戸を少し開け覗き込んだ

「宿題だとさ。話の丸暗記」

「宿題？」

少し開けていた戸を開け緊那羅が部屋に入って悠助の読んでいる教科書を覗き込んだ

「もう、緊ちゃん邪魔しないでよ！」

悠助が緊那羅を見上げて頬を膨らませた

「あ；ごめんだっちゃ」

慌てて緊那羅が離れると悠助は再び教科書を読み始めた

悠助に邪魔といわれた緊那羅は京助の隣に座った

「だいぶ良くなってきたみたいだっちゃね；安心したっちゃ」

思ったより元気そうな悠助を見て緊那羅が微笑んだ

「まあ；元々熱がちよつとあったただけだしな」

京助があぐらをかきなおして机に背を預けた

「うんとこしょ!! どっこいしょ! それでもかぶは抜けません」

「俺もよく暗記させられたっけなあ:蚊取線香とか数え歌とか」

一生懸命暗記しようとしている悠助を見ながら京助が懐かしそうに言った

「一度火をつけたら元来た道を一生懸命戻り出す、忘れ物をしたように:ってか:小四くらいの時に暗記させられたの覚えてるって凄くね?」

京助が【蚊取線香】の詩の一部を暗唱した

「蚊取:線香の詩なんてあるんだっちゃんね。蚊取線香ってあの緑色したうずまきのやつだっちゃんね?どんな詩なんだっちゃん?」

緊那羅きんならが珍しそうに聞いてきた

「あ:~んとよく覚えてねえんだけどさ:蚊取線香って火いつけたら中心に向かってくじゃんか?その様子が忘れ物を取りに戻るみたいだって詩」

京助がウロで思い出した【蚊取線香】の詩を説明した

「京助は忘れ物しても戻ってこないっちゃんね」

「うっせ;」

緊那羅きんならがさらりといった

風邪薬のせいか頑張って暗記しようとしたせいか悠助が教科書に顔をつけて寝てしまっていた

少し開いた窓から風が虫と一緒に入ってきて緊那羅きんならの腕に止まった
「:こんなときこそ蚊取線香っ」と

京助が立ちあがって部屋から出、手に蚊取線香セット (マッチ、蚊取線香、灰皿) を持って再び戻ってきた

戸を閉める音に悠助が微かに反応したが寝返りを打つとまた寝息を立て始めた

「地味に効くんだよな:蚊取線香って」

火をつけると細い煙が上がり独特の煙たさが広がった
灰皿に蚊取線香を置くと緊那羅きんならがソレを覗き込む

「…この火が忘れ物取りにもどってるちゃか？」

煙を上げながら中心に向かっている火を見て京助に聞いた

「そうなんじゃねえの？」

「ふうん…一体何忘れたんだっちゃかね」

ゆつくりと中心に向かつて進んでいく火を緊那羅きんならはしばらく黙って
みていたがふと顔を上げた

「…笛の音…？」

風に乗って微かだけど笛の音が聞こえてきた

「ああ、今日港祭りやってんだ。そこで流してる音楽だろ」

緊那羅きんならが窓を開けて耳を澄ます

笛の音に混じって少し音の外れたおっさんの歌声も途切れ途切れだ
が聞こえてきた

「…悠助寝ちまったし…外もだいぶ涼しくなってきたし…暇だしの
三拍子そろってることだし…行ってみつか？」

漫画本を閉じて京助が立ち上がり首をコキコキと鳴らした

「いいっちゃ？」

口ではどこことなく気が引けるようなそんな言い方をしているが緊那きん
羅ならの目は行きたいと訴えている

「見るだけだからな。金ねえし」

漫画本を机の上において部屋の戸を開けた

緊那羅きんならも窓を少しだけ開けて京助について部屋を出た
蚊取線香の燃えカスがポロリと落ちた

『お祭り行くなら悠ちゃんに何か買って来て』

母ハルミから2千円を貰い緊那羅きんならと京助は薄暗くなってきた町道を
港に向かって歩いた

途中浴衣姿や出店で買った玩具をもった同級生なんかに遭遇した

「人、多いっちゃね」

港に近づくにつれ増えてくる人をみて緊那羅きんならが言った

「つとに…この狭い街のどこにこんな数の人がいたんだか…はぐれ

んなよ緊那羅^{きんなら}」

緊那羅^{きんなら}の腕を掴んでさらに人の多い出店ゾーンに突入した
クレープ、わたあめ、りんごあめ、フランクフルトに定番のタコヤ
キ…威勢のいい声といい匂いがする

カラコロという下駄の音、駄々をこねて泣き喚く子供の声、射的の
鉄砲発射音：

「にぎやかだっちゃー…」

京助に腕を引っ張られつつ緊那羅^{きんなら}は周りを見て呟いた

「よそ見してツとコケるぞ」

「何買っていくか決まったっちゃ？」

わたあめ屋の前で止まった京助に緊那羅^{きんなら}が聞く

「わたあめでいいや…おっちゃん、一つ」

「あいさ!! にイちゃんどの袋がいい？」

針金にぶら下がっているわたあめの袋にはTVのキャラクターが描
かれている

「この黄色いの…この間悠助と見たっちゃ」

緊那羅^{きんなら}が手に取ったのは黄色い電気ネズミ描かれたの袋だった

「ハイ! ポケ○ンね! 300円」

わたあめ屋のおっさんがぶら下がっていた針金からポ○モンの袋を
外して緊那羅^{きんなら}に持たせた

「毎度ありい」

黄色い電気ネズミの描かれたわたあめの袋を抱えたまま緊那羅^{きんなら}が人
混みの中で足を止めた

「…? 緊那羅^{きんなら}? どうした？」

振り返った京助が少し戻って緊那羅^{きんなら}に問いかけると

「あ…や、なんでもないっちゃ」

と言って歩き出した

京助も何か変だと思いながらも歩き出した

出店ゾーンから抜けるとだいたい人数も少なくなっ歩きやすくなった

小走りで緊那羅きんならの横に並ぶ

「…人に酔ったか？　しゃーねーな；」

どこか元気の無い緊那羅きんならに京助が心配そうに聞いた

「…え？」

「どこか休める所…こっちだな」

『今何か言ったっちゃ？』そう言おうとした緊那羅きんならのその言葉を待たずに京助は近くの公園に入った

祭り会場から離れた公園は案の定誰もいなく遠くからやっぱり少し音の外れた歌声が聞こえてくる

「そこ、座ってろ」

緊那羅きんならにベンチに座る様に言って京助が自動販売機に向かって駆けて行き手に二本の缶を持ってまた駆けて来た

「座ってろったじゃん；」

座るように再度言い黄色い電気ネズミの描かれた袋を緊那羅きんならから取って缶茶を手渡した

「…京助…」

「あ？」

カシ、と缶を開けてベンチに腰掛けた京助を緊那羅きんならが小さな声で呼んだ

「…京助…私は…」

何かを言おうとしている

それもちよちと複雑な事を

変なカンだけいい京助にはそれがわかった

「私は…」

俯き、缶を両手で握り締めたまま緊那羅きんならはその先の言葉を言えずにいた

「京助…私…は…」

パン…！！！！

やっと緊那羅が【その先の言葉】を言おうとして顔を上げた瞬間
京助が腰掛けた隣においてあったわたあめの袋が爆発(?)した
「な…ッ!?!」

京助が驚いて飛び退くと『クスクス』という何とも人を小馬鹿にしたような笑い声が聞こえてきた

「…そっちに決めたんだ」

自動販売機の上で足を組み、手で頬を支えて口元に笑みを浮かべる
少年…といっても京助より年上に見える

「すぐ決めると思ってたのに結構時間かけてくれたね…まったく…
僕待つか面倒くさいの嫌いなんだよね」

はぁ、と大げさに溜息をついて意地悪そうに微笑むと顔の横に垂ら
していた布を後ろに払った

「…お前性格悪いだろ」

京助が自動販売機上の少年を指差して言った

「僕? さあね…どう思う? 緊那羅?」

少年の口から【緊那羅】の名前が出ると京助は緊那羅を見た
緊那羅は鋭い目つきで少年を睨んでいた

「…緊那羅…?」

明らかに【ボク等仲良し】的知り合いではないことがわかった

「… 矜羯羅…」

【矜羯羅】と呼ばれた少年は初対面の時の緊那羅の様な不思議
な格好をしていた

【ボク等仲良し】的知り合いではなくとも関係はあるらしく…

「性格がいいんじゃない? 【いい性格】してるんだっちゃん」

結局の所少年の性格はかなり悪毒で悪いらしい
緊那羅の手にはあの棒の様な物が握られていた

「ふうん…僕とやろうての? 緊那羅。宝珠も持っていないこっちら
戸も満足に開けられない君が? 僕と?」

矜羯羅がクスリと笑った

「…うつわぁ…本当【いい性格】してやがんの…」

そんな矜羯羅こんがらを見て京助は緊那羅きんならのいったとおりだと思った

「まあいいや：君たちがこっちに決めたなら：僕たちはいらないから…」

につこりと笑みを浮かべて矜羯羅こんがらが京助を見、パチン！と指を鳴らした

京助の頬を何かがかすめて頬に軽い痛みを感じた
手をやると赤い血が手についた

「消すよ」

右の手首をくるっと返すと矜羯羅こんがらの5本の指の間に小さな青い玉が挟まれていた

さつき京助の頬をかすったのもおそらくその玉だろう

「：ヤバクナイデスカ？；」

『消すよ』おそらく、いや絶対本気で矜羯羅こんがらは京助を消す気だろう
それも笑顔で

頬を押さえながら後ずさりする京助の前に緊那羅きんならが立った

「：京助：私が初めて京助に会ったとき【守る者か滅する者か】：
そういったこと覚えてるっちゃ？」

矜羯羅こんがらから目を逸らさず棒の様な物を握り締めて緊那羅きんならが聞いてきた

「：私は：決めたっちゃ」

緊那羅きんならはゆっくりと振り返ると微笑み、そして再び矜羯羅こんがらを凝視した

「私は栄野兄弟を守る！」

矜羯羅こんがらを手にとっていた棒の様な物で指した

そんな緊那羅きんならを矜羯羅こんがらは顔色一つ変えずにあいも変わらず笑みを浮かべて見ていたが

「兄弟って独り占め？」

とわざとらしく目を見開き肩を落としやれやれと言うように溜息をつく

「：独り占めは良くないよ？ 緊那羅きんなら」

ピン！と矜羯羅こんがらが玉を緊那羅きんならめがけて飛ばしたが緊那羅きんならはそれを棒の様な物で弾くとその棒の様な物を口に当てた

高い音色が響いたと思った

京助が瞬きをしたのはコンマ何秒の間だろう

その間に緊那羅きんならがあの不可思議な格好に変わっていた

「緊那羅きんなら…お前…ソレ…」

京助は恐る恐る緊那羅きんならに近づくと

「ソレ…笛だったんか…」

「…は？」

辺りの空気が緩く溶けた

「プッ…あはははははは!!」

矜羯羅こんがらが笑った

「京助…」

緊那羅が力なく呆れたように俯いた

「な…だってずっと気になってたんだよッ」

「普通は変身というか着てるものが一瞬で変わったトコに驚くと思うんだけど…」

ヒーヒーいいながら矜羯羅こんがらが何気に突っ込んできた
どうやら本気で笑いのツボに入っていたらしい

「おもしろいね…京助だっけ？ 僕君みたいな馬鹿嫌いじゃないよ。
そうだ…知ってる？ 緊那羅きんならは音楽の腕前が凄くてね…歌声も綺麗なんだよ」

「…俺はお前みたいな意地クソ悪いいかにも悪役っぽいしかも顔のいい奴は大嫌いだ」

矜羯羅こんがらが『ね？』と微笑みながら緊那羅きんならのほうに顔を向ける

確かに緊那羅きんならの歌は上手かったと京助も矜羯羅こんがらに悪態をつきつつも
緊那羅きんならを見た

「…なんだっちゃ」

少し照れているらしい緊那羅きんならが京助をチラ見した

「あ、そっか…だから武器、笛なのか」

感心した様にまじまじと武器笛と緊那羅きんならを交互に見て京助が納得する
「僕…久々に緊那羅きんならの声聞きたくなっちゃった」

いつの間にこんな近くに來ていたのだろう

矜羯羅こんがらは緊那羅きんならの顎をつかまえて顔をクツと上げた

緊那羅きんならが矜羯羅こんがらの手を払うと後ろに下がる

「…声、きかせてよ緊那羅きんなら」

矜羯羅こんがらの回りに青い小さなあの玉が多数浮かんでいた

「…やっぱり【イイ性格】してるっちゃ…」

「本当だな」

緊那羅きんならが武器笛を構えた

矜羯羅こんがらが指を弾くたびに小さな青い玉が緊那羅きんならと京助めがけて物凄いスピードで飛んでくる

「何なんだよあの危ないヤツはっ！！！！」

京助はスレスレで玉をよけつつ緊那羅きんならに問いかけたというよりは怒鳴った

「簡単に言うと【敵】だっちゃ！ 京助！ 右！！」

二本の武器笛で玉を弾きつつ緊那羅きんならも叫んだ

まるでテニスのダブルスでもやっているかのように思えた

「逃げてばかりじゃつまらないじゃない…声も聞けないし…」

明らかにこの状況を思いつき楽しんでいる矜羯羅こんがらは【簡単に言う
と敵】らしい

「簡単に言わなくても敵だと思うぞ！！！」

京助は自分の運動神経にコレまでの人生の中でこれほど感謝したことは無いだろう

息は切れてきたもののまだ一度も玉に当たってはいなかった

というか一回当たれば即ゲームオーバーだろう

「…飽きちゃった」

矜羯羅こんがらが右人差し指をクツと曲げると避けた玉がカンバックして京助の左肩にモロに当たった

「！！ッ！！！！！」

激痛が走った

折れてはいないみたいだがかなり痛い

「京助!!」

緊那羅きんならが名前を呼びながら駆け寄る

「…ってえ…」

肩を押さえ痛みに耐える

「京助…」

「あれ…? 緊那羅きんなら、京助守るんじゃないの?」

クスクスと笑いながら宙に浮かぶ矜羯羅こんがらを緊那羅きんならが睨んだ

トントン、と頬に当てた指で口元を叩きながら矜羯羅こんがらはにっこりと

微笑むと

「…声、聞かせてよ」

沢山の玉が緊那羅きんならめがけて飛んできた

避ければ京助に当たってしまう、かといってあの数は防ぎきれない

「顔は避けてあげるね」

目をつぶった緊那羅きんならの耳に矜羯羅こんがらのそんな声が聞こえた

「ツうああああ!!」

何かが何かにぶつかる音と緊那羅きんならの尋常じゃない叫び声

これが緊那羅きんならの悲鳴だと把握できるのに時間はそんなに掛からなかった

「やっぱりいい声してるね緊那羅きんなら…そう思わない? 京助」

顔を上げた京助が見たもの

スローモーションでも掛かっているかのようにゆっくりと倒れてい

く緊那羅きんならと楽しそうに笑う矜羯羅こんがらそして自分の周りに自分を避けたかのように散らばる無数の小さい玉

「き…」

『緊那羅きんなら』、名前を呼ぼうとしたが声が出ない

かろうじて動いた右手で倒れていく緊那羅きんならを受け止めた

「終わり? …もちよっと声聞いていたかったんだけど」

溜息をついて矜羯羅こんがらがゆっくりと京助に近づいてきた

意識の無い緊那羅きんならを庇いつつ矜羯羅こんがらを睨む

「今度は：君の番」

矜羯羅こんがらが微笑みながら右手を挙げると京助の周りに散らばっていた玉が矜羯羅こんがらの回りに集まった

「そう：やすやすと消されてたまるかよッ！；」

まさに火事場のなんとやら

京助は緊那羅きんならを抱きかかえるとダツシュで逃げた

左肩がキシキシと痛んだがそんなこと構っちゃいらなかった

「：足速いんだね：僕運動って嫌いなんだけど」

矜羯羅こんがらは京助の走り去った後を楽しそうに見ていた

『一体なんなんだ

俺が一体何をしたってんだ

そりゃあ：早弁したり居残りしたりとかは日常茶飯事でやってきたけど

得体の知れない中国雑技団みたいなのに命狙われる様なことなんてした覚えが無い：』

必死で逃げながら京助の頭は混乱していた

ついこの間までは【普通】だったのに

いつの間にか【普通】ではなくなっていた自分の日常：

京助は足を止めた

緊那羅きんならの髪飾りが風に流れ腕に絡みつく

「：緊那羅きんなら：お前は どうして俺の所にきたんだ：？」

意識がない緊那羅に問いかけた

「どうして：俺を守るとか言ってたんだ：？」

端から血が流れている緊那羅きんならの口は動かない

「：わかんねえ：」

そう呟くと京助はその場に座り込んでしまった

「…何がわからないの？」

フツと耳に息を吹きかけられて京助が驚き振り向くと息一切らずに矜羯羅こんがらが笑顔でそこにいた

「京助って足速いんだね…僕運動嫌いだから疲れちゃった」

「嘘つけ…」

耳を押さえ緊那羅を引きずって後ろに下がる京助に矜羯羅こんがらは面白そうに一歩一歩ゆっくり近づいた

「一気に殺っちゃってもいいんだけど…それだと面白くないし？」

そういうながら矜羯羅こんがらが指を弾く

「ッ！；」

玉が京助の腕に当たった
さつき肩に当たったのに比べるとかなり加減した攻撃だったが青く痣が浮き上がってきた

「想い出を思い出す時間とかほしいんじゃない？ やっぱり」

再び指を弾くと今度は足に玉が当たった

「だから…ゆっくり消してあげるよ」

矜羯羅こんがらの口元には笑みがあつた

そう口元には

「やっぱ…スнгеエ【イイ性格】…」

矜羯羅こんがらの回りに再び無数の玉が浮かんた

京助には今起こっていることが夢なのか現実なのかわからなかった
怖くはなかった

むしろ本当に何が何だかわからなくて

でもやっぱり玉の当たった箇所は痛く腕にいる緊那羅きんならは意識は無いものの温かくそれは現実で…

でも誰だってこんな状況を現実だなんて思えないだろう

現実か夢か

こんなに頭を使ったことなんて小学校の時の掛け算以来だろう

「なに考えてるの？」

矜羯羅こんがらの声でぐちゃぐちゃした考えが一瞬一気に吹き飛んだ

「そろそろ…いい？」

「…嫌だっても実行するくせに」

小さく突っ込み京助は緊那羅きんならを自分の後ろに庇いながら苦笑いを浮かべて矜羯羅こんがらを見上げた

「よくわかったね」

につこりと笑い矜羯羅こんがらが指を弾いた

その音と同時に玉が京助に向かって飛んできた

強風が巻き起こった

玉の攻撃に覚悟を決めたのと突然巻き起こった強風でゴミが目に入らないようにというので目をきつく閉じてしまった京助は風が弱くなったのとなにやら気配を感じてゆっくり目を開けた

目の前は一面の金色

「…天国…？」

「たわけ！！ 周りをよく見てから言え！！」

ぼそっと漏らした京助に誰かが怒鳴った

と目の前の金色が消えさっきまで見ていた風景と悠助と同じくらいの身長の子供の後姿が京助の目の前にあった

その子供は京助をチラリと見、その後緊那羅きんならを見た

「乾闥婆けんたつば、緊那羅きんならとその馬鹿を任せたぞ」

「な…馬鹿って…コルアガキ！！ てめー…」

「本当のこといわれて怒らないで下さい！ 迦楼羅かるらももうちよつと

やわらかく言えないんですかまったく…」

迦楼羅かるらが分が悪そうにフンとそっぽを向くと乾闥婆けんたつばはやれやれというように首を横に振った

「…久しぶりだな矜羯羅こんがら」

迦楼羅かるらに名前を呼ばれた矜羯羅こんがらは眉をしかめつつも笑顔を浮かべていた

「…まさか君が出てくるなんてね…」

さっきまでとは明らかに様子が違う矜羯羅こんがらを目つきの悪い目をさらに悪くして迦楼羅かるらが睨む

「結構楽しそうにやっていたみたいだな…」

さわさわと風が吹き出し砂埃が舞い上がる

「その礼はワシが代わりに返してやろうぞ！！！！！」

迦楼羅かるらの怒鳴り声と共に物凄い強風が巻き起こり目の前に再びあの金色の世界が広がった

「…は…ね…?…」

迦楼羅かるらの背中からはその身長とは不釣り合いな巨大な金色の羽根が生えていた

「つうか体のわりにでかすぎねえ?…」

目の前に広がった金色の羽根を指差して京助が乾闥婆けんだつぱに言う

「もっと大きくなりますけど…まあああ見えても結構なご老体ですからあまり力使いたくないのかもしれないし…もっともこれ以上力使うなら僕が止めますからこのくらいが丁度いいんです。さ、矜こ羯羅んがらは迦楼羅かるらに任せて緊那羅きんならを何とかしないといけませんから。見せてください」

乾闥婆けんだつぱは京助の隣に座ると京助の腕で意識を失っている緊那羅きんならの顔を見、それから全身を見る

「数箇所折れてますね…まあ腹に穴開かなかったただけよしとしますか。血出ちゃったら服汚れますからね。それに死ぬ危険性も出てきますし…」

おとなしそうな顔して怖いことを連発した後、乾闥婆けんだつぱは胸に着けていた飾りを三回指で突付いた

「この程度ならコレ使わなくても【天】に帰ればある程度早く治るんですけど」

乾闥婆けんだつぱの胸の飾りから小指サイズの小さな試験管の様なものが出てきた

中には何か液体が入っているようだった

「ほら、ぼけっと阿呆面してないで緊那羅きんならの口開けてください」

可愛い顔してババンバン…乾闥婆けんだつぱの性格はかなりキツイらしい言われるがまま京助が緊那羅きんならの口を指であけると乾闥婆けんだつぱが中に入っ

ていた液体を緊那羅きんならの口に注ぐ

乾闥婆けんたっぱは三分の二を緊那羅きんならの口に注いだ後京助をチラッと見た

「：貴方も飲みますか？ たぶん傷治ると思いますけど：」

そういつて残っていた液体を入れ物ごと京助に差し出した

「これ：何よ：水？」

透明で無臭の液体を受け取った京助はまじまじと中身を見る

「飲めばわかります」

乾闥婆けんたっぱに見られながら京助はその液体を口に含んだ

甘さの後に辛さというか：熱さが舌に絡んだ

「：なあ：傷治るところかスンゲエまずいんだけど」

京助が顔をしかめてカラになった入れ物を乾闥婆けんたっぱに返した

「：そんな：まさかでも：迦楼羅！（かるら）！」

一体何に驚いたのか乾闥婆けんたっぱは大声で迦楼羅かるらの名前を呼んだ

金色の羽根を広げ矜羯羅こんがらと睨み合っていた迦楼羅かるらはその乾闥婆けんたっぱの声

に反応して振り向く

矜羯羅こんがらも乾闥婆けんたっぱの方を見た

「まだ：早かったみたいです」

乾闥婆けんたっぱのその一言で迦楼羅かるらと矜羯羅こんがらの突き刺すような視線が京助に

向けられた

迦楼羅かるらが地上に降りると金色の羽根が消えた

「：本当か？」

迦楼羅かるらが乾闥婆けんたっぱに歩み寄りながら少し驚いたように聞いた

「：ソーマが効かなかったんです：それしか考えられません。別人

でもないみたいですから：まだ：早かったとしか」

【ソーマ】とはさっきの変な味の液体のことらしい

京助は後味の悪いあの液体が効かなかったということとで矜羯羅こんがらと迦

楼羅るらの突き刺さるような視線を浴びたのだとやっと気づいた

「ではまだ：だから緊那羅きんならは：」

迦楼羅かるらが京助に近づき目線を合わせた

「：お前、名前は栄野京助で合っているか？」

「な…んだよ；」

「…お前は栄野京助なのかと聞いておる！！ さっさと答えんか！
このたわけ！！！」

怒鳴った迦楼羅かるらの口から少量の炎が出てきた

「迦楼羅落ち着いてください…火出ましたよ」
乾闥婆けんたつば

乾闥婆が少し睨みを入れて迦楼羅かるらを見る

「なんだ…まだ早かったなら消しちゃ駄目なんじゃない…」

忘れられているように感じたのか矜羯羅こんがらが伸びをしながら少し大きな声を出した

「どっちかわかるまで…」

クスクスと笑うとそのままスウッと消えてしまった

「き…消えた…」

「帰っただけです消えたわけじゃないですから。さて…邪魔者はいなくなっただけですし…栄野京助君…でいいんですよね？」

驚いていた京助に先ほど迦楼羅かるらがしてきた質問と同じ質問を乾闥婆けんたつばがしてきた

「そうだけど…だから何だっていうんだよ」

京助はさっき飲んだ【ソーマ】とかいうまずい液体のせいで舌がぴりぴりしていた

「…緊那羅きんならは何か言ってませんでしたか？」

「緊那羅きんならが…？」

【ソーマ】は本当に傷が治るらしい

緊那羅きんならを見るとさっきまであった痛々しい傷がなくなっていた

「…別に何も…ただ俺と悠助を守るとか…」

傷は治ったもののまだ緊那羅きんならの目は開かなかった

「…両方守る…ということは緊那羅きんならめ…やはり知ってたのだな」

迦楼羅かるらが呆れたように緊那羅きんならを見る

「緊那羅きんなららしいといえば緊那羅きんなららしいですけどね…でも…」
乾闥婆けんたつば

乾闥婆が京助を見た

腕と足に痣、頬に擦り傷、肩は…たぶん肩にも痣があるだろう

傷だらけだった

「今日みたいな事があつては守っているとは言えぬな」

迦楼羅かるらが吐き捨てるように言った

「な…緊那羅きんならはなあっ！！！」

迦楼羅かるらの態度にムツとした京助が大声を上げた

「このたわけ！！！！ お前が、栄野兄弟が今死んでは駄目なのだ！

今日みたいな事がまた起こらぬとも限らん！！ 確実にお前等を

守れなければ意味が無いのだ！」

京助の大声に負けじとも劣らない大声を迦楼羅かるらがあげた

「やかましいこの鳥類！」

それに対抗する京助

「落ち着いてくださいッ！」

口では丁寧口調で止めていても『テメエらええ加減にせんかい…ワレ』という最凶、最強オーラを全身にまとった乾闥婆けんだつばの一声はまさ

に鶴の一声だった

乾闥婆けんだつばの一声ですくみあがっていた迦楼羅かるらがコホと咳を一つして京助を見た

「とにかく…だ。お前達兄弟は何としてでも【時】までに守らねばならないのだ…そして【時】が来たならば、更に守らなければならぬ…今はまだ早い…なんだ…その…」

うまく言いたいことがまとまらないらしく迦楼羅かるらの話はやたら間が多かった

「簡単に言うとか貴方と弟さんを【時】がくるまでしつかりまもらないとしてことです」

見るに見かねた乾闥婆けんだつばが横から簡潔にまとめて話した

「…あのさあ…【ソーマ】だの【時】だの…意味の分からない業界用語あるんすけど…」

頭を掻きなら恐る恐る聞いてきた京助にプチ切れかけた迦楼羅かるらが

「【ソーマ】は【ソーマ】！！ 【時】は【時】だ！ たわけ！」

と怒鳴ると乾闥婆けんだつばが迦楼羅かるらを笑顔で睨む

「今の貴方はまだ多くを知らなくてもいいんです。むしろ知らないで下さい」

乾闥婆けんたつぽが立ち上がり服についた砂埃を払い京助に手を差し出した
「どうやら立たせてくれるらしい」

京助は乾闥婆けんたつぽの手をとって立ち上がった

「：てか俺本当少しどころか何も知らねえから少しは知りたいんだけど」

「：知らないで下さいって言いませんでしたっけ？」

『少しは知りたい』そういった京助の手を乾闥婆けんたつぽが笑顔で凄い力を入れギリギリと握り返してきた

「：京助とやら：一つだけ教えてやろう」

その様子を見ていた迦楼羅かるらが『ちよいちよい』と京助を招くところ耳打ちした

「乾闥婆けんたつぽには逆らうな。乾闥婆けんたつぽを怒らせるな：」

もう、少し音の外れたおっさんの歌声も笛の音も聞こえてこない
一体今何時なのか：辺りはまっくらでさっきまでの出来事が嘘のように静まりかえっていた

ここからじゃ時計も見えない

「：そろそろ帰らねえと悠起きてるかもしれないしな：風呂も入ってえし湿布貼りてえし：それに：」

今だ気を失ったままの緊那羅きんならを見下ろす

「：緊那羅きんならの手当て：まあ傷は治ったとしても体休ませないとだしな」

「緊那羅きんならを連れて行く必要は無い」

緊那羅きんならを抱き起こそうとしてしゃがんだ京助に迦楼羅かるらが言った

「緊那羅きんならは【天】に連れて帰る」

【天】から来たと言った

そう言った緊那羅きんならが【天】に帰るのは当たり前のこと

【自分の家】から来た友達が【自分の家】に帰るのと同じこと

「緊那羅はお前を守れなかったからな。だから連れて帰る」

「だあから緊那羅は俺を庇って…」

「たえそうであつても貴方を守れなかったのは事実です」

また大声をあげそうになつてしまった京助だったがさっきの迦楼羅の忠告を思い出し口をつむいだ

「…後日緊那羅に代わるお前たちを守る輩がまた来るだろう」

迦楼羅が自分の体より大きな緊那羅を肩に担ぎ京助に背を向け静かに言った

「な…んだよそれ…ッ！」

京助が迦楼羅の前にまわり迦楼羅の胸倉を掴んだ

「京助！」

乾闥婆がそれを止めた

「…何だよ…それ…俺は…」

乾闥婆（けんだっぱ）に止められると京助は膝をつき迦楼羅の胸倉から手を放した

「…先程も言ったであろう確実にお前等兄弟を守らねばならぬと」

京助は俯いたまま黙っていた

「緊那羅は理由はどうであれお前を守れなかった…お役目御免なのはお前もわかるだろう」

迦楼羅が俯いたままの京助の横を通り過ぎた

緊那羅の髪飾りが触れた

「【天】…」

京助が呟くと乾闥婆が京助を覗き込んだ

「【天】…って…どこにあるんだ？」

やっと聞き取れる位のボリュームで京助が聞いた

「…【天】は【天】にあるんです…」

緊那羅も似たような事を言っていた

「…大丈夫ですよ」

乾闥婆が俯いたままの京助の耳に小さく優しく言った

その声で顔を上げた京助の目の前で迦楼羅かるらと乾闥婆けんたつば、緊那羅きんならの姿がまるで見えない部屋に入るように消えた

チャルメラの音がやんで庭に下げてある風鈴の微かな音色まで聞こえるくらい静かな夕方

再びチャルメラの音が鳴り始めそれがだんだん近くなりそして遠くなくなっていく

「京様〜！ 京様〜！！」

ヒマ子がまだ京助を探して叫んでいた

「…栄野…京助…」

京助は自分の名前を口に出して言った

自分がもし【栄野京助】という名前じゃなかったのならあんなヘンテコリンなことは起こらなかったのではないか

【あんなヘンテコリンなこと】があつてから三日が過ぎていた

悠助の風邪も完治して明後日からは学校も始まる

『宿題なんか鞆から出してもねえから始業式の前に誰かのを写させてもらわねえとなー…始業式っていつても6時間だから弁当いるし…忘れないように…』

極力【あんなヘンテコリンなこと】を思い返さないようにしていてもどうにもこうにも思い出してしまう

そこから色んなことを考えてもまたその【あんなヘンテコリンなこと】へと還って来てしまう

折角買ったわたあめを台無しにされ、玉ぶつけられて殺されそうになり、クソまずい液体を飲まされ、鳥類に馬鹿にされ…緊那羅きんならがいなくなった

弁当のことを考えていて緊那羅きんならが浮かんだ

思えば緊那羅きんならとの出会いは弁当絡みだった

京助の頭の中では【弁当Ⅱ緊那羅きんなら】という式が組み立てられそこか

ら更に【緊那羅^{きんなら}】あのヘンテコリンなこと【】に結びついた
「…どうしてんだろ…」

【ソーマ】とかいうクソまずい液体のおかげで外傷は治ったものの
結局気を失ったままで【天】に帰ってしまった緊那羅^{きんなら}は今どうして
いるのか

あの独特の【キンナラムちゃん語】を初めて聞いたときの笑いのト
ルネード

台無しにされたエビフライ（弁当）

妙に懐かしくなった歌

実は笛だったあの棒

母さんにいいように使われている姿…

なんだかんだでまだ一ヶ月くらいしか経っていないんだと京助は日
数を数えて少し驚いた

もつとずっと昔からいたようなそんな感じさえする

「何似合いもしないのに黄昏て哀愁に浸っているんですか。京助」

…何処からか声がした

どっかで聞いた事のある声だったが…気のせいだと思い返事をしな
かった

「名前を呼ばれたのならばまず返事してくださいね」

突き刺さるような殺気を窓の下に感じて目をやると乾闥婆^{けんだつば}が立っ
ていた

「な…一体いつから…」

「たった今です。…怪我の具合は…大丈夫そうですね」

腕と足の薄くなってきた青痣を乾闥婆^{けんだつば}が軽く突付きながら言った

「なあ…」

「緊那羅^{きんなら}なら元気ですよ」

「あ…さいですか…どうも」

これから聞こうと思っていたことの返答を先に貰ってしまった

何かを言いたいらしい京助を乾闥婆けんだつばは上目遣いで見ると足の青痣を強く押した

「いってえっ！； 何すんだよッ！！」

足を庇い乾闥婆けんだつばに怒鳴った

「あの時言った僕の言葉信じられませんか？」

「あの時：？ ってどの時だよ？ ッてえッ！；」

今度は腕をつねられて京助は涙目になる

「もう忘れたんですか。本当に馬鹿なんですね。その頭には一体何が入っているんですか。たった9文字の言葉も覚えていられないんですか：ッ」

乾闥婆けんだつばがつねる力を更にあげた

「痛てえって！；マジ痛てえっ！；」

乾闥婆けんだつばが手を放すとつねられていたそこは真っ赤になっていた

「：お前コアラみたいな性格してんな：」

（コアラⅡ可愛いけど性格キツくて攻撃的）

京助はつねられた所をさすって乾闥婆けんだつばをコアラに例えた

「僕を外国の有袋類に例えないで下さい」

今度は顔面にチョップを食らわされた

『乾闥婆けんだつばには逆らうな。乾闥婆けんだつばを怒らせるな』

京助の頭には乾闥婆けんだつばではなく迦楼羅かるらの言葉が浮かんた

「：乾闥婆けんだつばは『大丈夫』っていったんだっちゃ」

キンナラムちゃん語が聞こえた

「やっと来ましたか：まったく：照れくさいだの合わせる顔が無いだの散々言っていたくせに、いざ他の人を送るとかになったら：」

「乾闥婆けんだつばッ！；」

しれっとした顔で【天】で緊那羅きんならがとっていた行動を暴露していく
乾闥婆けんだつばに緊那羅きんならが真っ赤になって食ってかかった

乾闥婆けんだつばにつねられ赤くなった腕をさすっていた京助はどうして緊那羅きんがここに來ているのか把握できていないようで目が点になっていた

「蚊取線香とか忘れ物とか：意味の分からないこと連呼して」

「蚊取線香？」

乾闥婆けんだつばの口から出た【蚊取線香】に反応して京助の目が元に戻った

「乾闥婆けんだつばッ！；」

緊那羅きんならは真っ赤になりながら乾闥婆けんだつば8けんだつば（を揺すって話させないようにしようとするが乾闥婆けんだつばは動じない

「ええ、自分は蚊取線香で忘れ物残してきたとか。まあ忘れ物って何かは大体わかりますけど：それと蚊取線香が何の関係があるのか僕にはわかりません」

左右に揺すられながらも乾闥婆けんだつばは淡々と話した

「：緊那羅きんなら：お前：」

京助に名前を呼ばれて乾闥婆けんだつばから手を離しふいっと顔をそらす

「：何純情乙女きんならやってるんですか蚊取線香」

緊那羅きんならの後頭部に乾闥婆けんだつばのチョップがのめり込んだ

よっぱど痛かったのか緊那羅きんならが頭を押さえてしゃがみこんだ

「：お前：つええな；」

「それほどでも」

乾闥婆けんだつばのその最強（凶？）　　っぷりを京助が引きつりながら褒め

称えた

「元々緊那羅きんならは確認のために来ていたのに向こうの相手がいきなり矜羯羅こんがらだったということ：これはどう考えても緊那羅きんならだけが悪いと

いうことにはなりませんし」

乾闥婆けんだつばがしゃがんでいた緊那羅きんならの腕を引っ張り立たせ、背中を押して京助と対面させた

が：二人して視線をそらして沈黙が続く

「貴方達きんだつばは昭和純情カップルですか」

再び乾闥婆けんだつばの容赦ない突っ込みチョップが緊那羅きんならと京助に食らわされた

「：じゃあ僕はこれで帰りますから。迦楼羅かるらがたぶんまた暴走して
ると思いますし」

そう言う乾闥婆けんだつばは数歩歩いて消えた

「京助」「あのさ」

同時に口を開いてまた沈黙した

「あのさ…何でお前が蚊取線香なんだ…？」

今度は京助のほうが早かった

「蚊取線香は…忘れ物を取りに帰るっちゃ…私も…取りに帰りたいか
ったから…ここに」

やっぱり照れくさいのか…緊那羅きんならは俯いたまま話した

「京助と…悠助って忘れ物だっちゃ。私は…二人を守りたい…だから…」

だんだんと聞き取りにくくなっていく声で緊那羅きんならが泣いているのが
わかった

緊那羅きんならが体の横で握り締めていた手で顔を覆うと肩が小刻みに震え
始めた

「ッ…二人を…守れるように強くなる…から…」

手で顔を覆ったせいで余計聞き取りにくくなった緊那羅きんならの声を京助
は黙って聞いていたが…

「…何か俺が女役みてえなセリフ…」

『強くなって君を守る』とかいう元祖ヒロインをオトすならこのセ
リフ！って感じのことを言われて京助がボソッと呟いた

「どっちかってえとさ緊那羅きんならのほうが女役似合うとおもわねえ？」

「な…どういう意味だっちゃッ！！！」

京助の言葉に緊那羅きんならが大声を上げてついでに顔も上げた

「…よ」

顔を上げた緊那羅きんならにヒラヒラと片手を挙げて笑顔を返す京助

「な…ひっかけたっちゃねッ！！！」

緊那羅きんならの目に溜まっていた涙が瞬きで流れたが後は流れてこなかった
「引っかかるヤツが悪い」

に…と意地の悪い笑みで京助は笑う

「京様…今緊那羅様…————！！！！？」
（今緊那羅様きんならの声
がしませんでしたか？と聞きたかったらしい）」

$\vee$
 i
 1
 9
 5
 7
 1
 $|$
 2
 5
 7
 5
 $\wedge$

【第三回・弐】玉。（前書き）

単独で迦楼羅^{かるら}がやってきた
それも乾闥婆^{けんたつぽ}に隠れてきたという
後から地獄を見るとわかっててもこっちにきた理由とは…

【第三回・弐玉】

「敵将！！ 討ち取ったりイ！」

高らかにこだましたのは坂田の声

ガッツポーズを決めて上機嫌でコントローラーを握っている

「次、次ギエーンの武器とるべ。ギエーンの」

その横でペラペラと攻略本を捲りながら南がいった

明日から学校ということで宿題合宿の時にできなかった（というかやろうともしなかった）宿題を一気に片付けてしまおうと再度栄野家に集結したのはいいが、社会の問題に三国志が出てきたことで中島、南、坂田、京助の勉強への入れ込みがゲームへと移ったのはこれこれ一時間前

「おお！ 操ちゃんが！」

とか

「シャホウ！」

とか叫び盛り上がりつつ交代制でプレイしていた

ガラッ

いきなり窓が開いた

その音に全員が反応して窓を見たが特に何も無い

「…怪談タイムにはまだ早いよなあ…ヒマ子さんか？」

中島が立ち上がり窓に近づくとしばらく固まって窓を閉めた

「窓をしめるなわけッ！」

閉めた窓が再び勢いよく開いて窓のレールに手が掛かった

どうやら登ろうとしているらしいがなかなか登れないらしい

「…なんだかちっこいのが潜入しようとしておりますドウゾ」

中島が無線機を持つマネをして何が起きているのか知らせる

「何だ何だ」

南がおもしろがって近づく

「うっわ！　ちっちゃええ！」

そして笑いながら叫んだ

「どらどら」

続いて坂田も近づき

「おお！　金時小豆！！！」

そういつて爆笑した

その途端

「やかましい！！たわけッ！！！」

という怒鳴り声と共に紅蓮の炎が噴出した

「うおおおお！！？；」

3人が慌ててその場から離れると逆に京助が窓に近づいて下を見た
そこにいたのは

「…鳥類…；」

迦楼羅かるらだった

「で…何の用で？」

迦楼羅を引っ張りあげて部屋に入れると京助は何をしていたのか聞いた

「玉を探しているのだ」

椅子に座り腕を組んだまま迦楼羅が言った

「…玉…」

その迦楼羅かるらの言葉を聞くと3馬鹿と京助は各々の股間に目をやった

「その玉ではない！たわけがッ！！；　誰がそんな汚いもの探るかッ！」

3馬鹿と京助が何を想像しているのかわかったらしい迦楼羅が怒鳴る

「汚いですって」

「失礼しちゃうわーちゃんと毎日洗っているのに」

それを聞いた坂田と中島が女言葉でブーイングした

「やかましいッ！！！」

迦楼羅かるらの口から再び紅蓮の炎が坂田、中島めがけて出た

「のわあああッ；！」

二人が避けるとふすまに炎がついた

「うおお！ 水！ 水！；」

京助が座布団で鎮火を試みている横で南がズボンのファスナーを降ろそうとしていた

「何してんじゃおのれはッ！；」

「いや…水をばと」

「なるほどお小水だな」

どうやら小便で鎮火を試みていたらしい南に坂田と中島も参戦しようとしている

「やめんかッ！；」

座布団で必死にバフバフやりながら京助が怒鳴った

「何の騒ぎだ…火ー！ー！！？；」

騒ぎを聞いて見に來た緊那羅きんならが火をみて叫んだ

「緊那羅！ 水！ 水！；」

京助が緊那羅きんならに向かって叫ぶと緊那羅きんならは慌てて水を取りにいた

「水ならここに…」

「もうそれはえーっちゅーんじゃーッ！！！！；」

尚もまだお小水鎮火をやりたがっている3馬鹿に京助がキレる

「さわがしいな」

迦楼羅かるらが椅子に座ったままでしれっと言った

「誰のせいやねんッ！；」

京助はさっきから怒鳴りっぱなしだ

「もーえろよもえろーよー」

3馬鹿が手を繋いで輪になり歌いだす

「火の土気上昇させるなー！ッ！！；」

緊那羅きんならが持ってきたバケツの水で火が消えるまで京助の怒鳴り声は止まらなかった

ふすまの焦げたキナ臭い匂いと水を吸い取るための新聞紙が敷かれた畳

大騒ぎして叫び続けた京助はうつ伏せになり伸びていた

その京助の上に南と悠助が腰掛けている

「…迦楼羅一人できたんだっちゃ？」

いつも隣にいるはずの乾闥婆の姿が見えないのを不思議に思い緊那羅が聞いた

「乾闥婆って…そのちっこいのの保護者さんか？」

坂田が壁に寄りかかり足に止まったハエを片足で追い払いながら緊那羅に聞いた

「保護者…ってよりは…制止役兼お目付け役みたいな感じだっちゃ」
緊那羅が説明すると一同『ほおう』と声を上げた

「…乾闥婆に隠れてきた」
迦楼羅がボソツと言った

「隠れて…ってどうしてだっちゃ； ばれると後から怖いのに；」
「どうやら緊那羅も乾闥婆の最凶っぷりを知っているらしく…」

「たわけッ！ ここに來たことがばれるより玉なくしたということ
がばれた方がやっかいなのだッ！；」
「どうやらその玉をなくしたのを乾闥婆にばれる前に探して帰ろうと
いうことらしい」

「なあ…」

中島が手を上げて発言権を貰おうとした

「ハイ、中島柚汰君」

坂田が足で指名した

「その乾闥婆ってヤツ…そんなに怖ええのか？」

中島のその質問に緊那羅、迦楼羅それにうつ伏せになって伸びていた京助までもが顔を上げ黙って頷いた

「逆らうと後が怖いんだっちゃ；」

緊那羅が何かを思い出しながら苦笑いを浮かべる
「どうなるかわからんからな」

迦楼羅8かるら）も多少引きつりながら過去を思い出しているらしい
「とにかく…強ええ…」

悠助と南に上に乗っかられているせいで京助の声は苦しそうだった
がその声が乾闥婆けんたつばの最凶さをよけいにリアルに感じさせた
しばらく沈黙が続いた

3馬鹿は今聞いた乾闥婆けんたつばの情報からそれぞれ乾闥婆けんたつばの姿を想像して
いるようで目が遠い

悠助は京助の髪で最近できるようになった三つ編みをしていたが京
助の髪が短いため上手くできないらしく新たなターゲットを探して
キョロキョロ周りを見ていたが…

ふと、迦楼羅かるらと目が合ったとたん京助から降りて迦楼羅かるらに近づいた
「…なんだ？」

迦楼羅かるらの長い前髪を目をキラキラさせて見た後、迦楼羅かるらに思いつき
り顔を近づけて

「三つ編みしたい！」

と言った

「はあ？」

いきなり今までの話題とは関係ないことを言われて迦楼羅かるらが変な声
を上げた

「長い髪してるから…えと…かる…か…」

「迦楼羅かるらだ」

迦楼羅かるらが『迦楼羅かるら』と言えない悠助に自分の名前を教えた

「かるらん！ かるらの髪長いから三つ編みしてもいい？」

「な…」

悠助が迦楼羅かるらの長い前髪をくいくいと引っ張っている

「かるらん…」

緊那羅きんならがプツと噴出した

「かるちゃんだとランドセルだしな…ナイスネーミングだ悠！」

南が拍手した

続いて坂田、中島も拍手する

緊那羅きんならは後ろを向いて肩を震わせ声を押し殺して笑っている

京助もうつ伏せで南を乗せたまま『うへへへ』と変な笑い声を上げた

「ねゝかるらんゝ」

顔を引きつらせている迦楼羅かるらの前髪をくいくい引っぱりつつ悠助が三つ編みしていいかねだる

「かるらんではなく迦楼羅かるらだッ!; 【ん】はいらぬ!! たわけ!

!! 誰が三つ編みなど:」

迦楼羅かるらに怒鳴られ一瞬きよとした悠助は

「じゃあこっちの何もついてないほうなら駄目?」

とさっきまで引っぱり張っていたのとは逆の前髪を引っぱり張る

と:その悠助の行動を見た緊那羅きんならが何かに気づいて迦楼羅かるらを見た

「:迦楼羅かるら:もしかしてなくした玉って:」

「:宝珠だ」

「緊ちゃん変な顔ー」

くいくいと迦楼羅かるらの髪を引っぱり続ける悠助が緊那羅きんならの顔を見て笑う

「な:なにしてるんだっちゃッ!; 宝珠なくすなんてッ!! 乾け

闍婆んだっぱに知れたら:」

なくした当本人の迦楼羅かるらより慌てふためいている緊那羅きんなら

「だから探しに来たのだ。って:何をしている栄野弟」

自分より慌てている緊那羅きんならにさも他人事のように言う迦楼羅かるらがなに

やら三つ編みを開始した悠助を見る

「三つ編み」

三等分した迦楼羅かるらの前髪を交互にゆっくり編んでいつている

「やめんか! たわけッ!;」

迦楼羅かるらが怒鳴って髪を引っぱり張ると悠助がしょぼくれる

「あゝ:悠、ホレ俺のでやれ俺ので」

見るに見かねた結構面倒見のいい坂田が髪を解いて悠助を手招きした

「で:どこでなくしたのか大体の見当とかついてるんだっちゃ?」

「たぶんここだ:と思う。【天】にはなかったからな」

当の本人がアツケラカンとしているのに対し何故か焦っている緊那羅きんなら

「もしこのまま見つからなかったら…」

「…乾闥婆けんだつぱに殺されるかもしれんな」

「それもあるっちゃけどッ；でもそれ以上に大事なことがあるじゃないっちゃ!？」

3馬鹿と京助はなかなかどうして話に入っていけずただ緊那羅きんならと迦か楼羅るらのやりとりを傍観している

「…俺等無視ですねえ」

南が天井を見てボソツと言った

「蚊帳の外ですねえ」

中島も南に続いて言った

「南…どける…」

京助が南に言った

「でーきたっ」

悠助の嬉しそうな声に一同振り向くとちよつと斜めではあるが立派に『三つ編み』をされたおさげの坂田がいた

「おお！上手いじゃん悠！」

中島が坂田の三つ編みを持って悠助を褒めると上機嫌で

「今度は緊ちゃん！」

と緊那羅きんならの腰に抱きついた

「わ…私もだっちゃ?」

悠助のキラキラしてる目を見ると嫌とは言えず苦笑いを返して髪を解き緊那羅きんならが座った

「緊ちゃん髪坂田より長い」

嬉しそうに三つ編みし始めた

「…あいかわらず嫌とは言えない性格だな緊那羅きんなら」

呆れたように言う迦楼羅かるらに緊那羅きんならはまた苦笑いを返した

「…とにかくコレと同じ玉をさがしているのだ」

片方の前髪についている赤く小さな玉を一同に見せた

「どれどれ…」

玉に近づきまじまじと玉を見る

「…ビー玉っぽいな」

ちよっと大きな目のビー玉にふさふさした飾りがついており結構高級
そうな玉が光の加減でキラリと光る

「どこかで見たこと無いかな？」

迦楼羅^{かるら}がたずねると3馬鹿と京助は顔を見合わせた後思い出そうと
しているのかからかっているのか『うゝん』と声を上げながら腕を
組み考え込む（皆同じ格好）

「あ！ 思い出した！」

いきなり南が手を叩いて声を上げた

「見たかけたのか！！？」

迦楼羅^{かるら}が期待いっぱい顔で南を見た

「テンちゃんだ！」

「は？」

「ホラ！ ラムちゃんのイトコだかで火イ吐くジャリッコいたじゃ
ん！ そいつテンちゃんっていわなかったか？」

どうやら何か別なことを思い出したらしい

「おお！ そうそう！ テンちゃんだ！」

中島が迦楼羅^{かるら}を見てプツと噴出しながら手を叩く

「火イ吐くし、ちっこいし…ラムちゃんもいるし…完璧じゃん！！」

坂田がおさげをいじりながら緊那羅^{きんなら}を見て親指を立てる

「…一体何の話なのだ？」

一向に3馬鹿の会話が理解できない迦楼羅^{かるら}が京助に聞いた

「…まあぶっちゃけお前の期待している玉の話題ではないのが事実
だな」

緊那羅^{きんなら}も頷いた

「緊ちゃん、動いちゃ駄目ッ」

「あ、ごめんだっちゃ；」

悠助が怒ると緊那羅^{きんなら}が謝った

「…ワシは…」

迦楼羅^{かるら}の肩が震え始めた

「ワシは玉を見たことがなかったのかときいているのだ！たわけー
ー！ー！ー！ー！ー！」

迦楼羅かるらが大声を上げるとともに金色の羽根が部屋いっばいに広がり
辺りのものを散らばらした

「こんな狭い所でキレるな阿呆ー！ー！ー！」

京助の怒鳴り声が再び響いた

キィキィと音を立てて揺れている室内灯

ハアハアと息を切らせている京助の片手には何かの雑誌が丸められ
て握られている

どうやらソレで迦楼羅かるらをぶっ叩いたらしい

「何をする！ 痛いではないか！ このたわけッ！」

「そりゃあこっちのセリフじゃ！ この鳥類ッ！； チビ！ ジャ
リッコ！！！」

迦楼羅かるらが怒鳴ると京助も怒鳴る

「あゝ…ビックリした…」

机の下にすばやく非難していた南が這い出してきた

「もしかして緊那羅きんならの言ってた【天から来る誰か】ってコレか？」

座布団をかぶって防御していた坂田が迦楼羅かるらを『コレ』と指差し緊
那羅んならに聞いた

「坂田…お前なんだか終戦記念日」

悠助に編まれたおさげと防空頭巾の様に被っていた座布団…坂田の
姿はパツと見戦時中の女学生だった

京助が坂田のその格好に突っ込むと坂田は

「蛭…何ですぐ死んでしまふん？」
「言い小首をかしげた

「節子ー！ー！」

中島が両手を広げる

「にーちゃん！」

坂田がそれにしっかと抱きつく

どうやらアニメのワンシーンを演じているらしい

「ええ話や…」

南と京助が涙を拭う演技をした

「…コイツらはいつもこうなのか？」

迦楼羅かるらが片眉をヒクヒクさせながら緊那羅に聞いた

「まあ…そうだったちゃ；」

再び悠助に三つ編みをされながら緊那羅きんならが呆れ笑いで答えた

「で！」

いきなり坂田が振り向いて緊那羅きんならを指差した

緊那羅きんならがビクツと目を丸くすると中島と抱き合ったまま迦楼羅かるらに近づき

迦楼羅かるらの頭をポフポフと叩いた

「コレは？」

ポフポフと叩きながら緊那羅きんならに聞く

迦楼羅かるらの怒りゲージが溜まっていくのが何となく見えるような気がする

「え…と…迦楼羅かるらはその…ただ玉を探しにきただけだったちゃ；」

怒りゲージを溜めていく迦楼羅かるらを気にしながら緊那羅きんならが答えた

「つかさあ…その玉見つけて俺等に何か利益あるわけ？」

南が立ち上がり京助に寄りかかりながら迦楼羅かるらを見下ろす

「…上から見下ろすなッ！ このたわけども！」

小さく炎が出た

「見下ろすなといわれましてもな」

中島が坂田を見る

「だってちっこいから」

坂田が隣の京助を見る

「それに鳥類だし」

京助が更に隣の南を見る

「ちっこいし」

「うん、ちっこいし」

「そうとも、ちっこいし」

「何はなくともちっこいしな」

「鳥類鳥科だし」

「テンちゃんだし」

「シャホウだし」

「いや、ソレ関係ねえし」

3馬鹿と京助は『ちっこい』を連呼し迦楼羅かるらを見下ろす（一部関係の無い語句有）

「やかましいわ！たわけーーーーッ！！！！！！！！！！」

迦楼羅かるらが怒鳴ると紅蓮の炎が吐き出された

「うおおお！ 火炎放射！！！」

3馬鹿と京助がしゃがんでソレをかわした

「…馬鹿だっちゃ…」

悠助に三つ編まれながら緊那羅きんならが呟いた

「でーきたっ！」

悠助が嬉しそうに声を上げて緊那羅きんならの前に回ると満足そうに満面の笑みを浮かべた

「緊ちゃん可愛いー！」

「ははは…ありがとだっちゃ；」

坂田と同じようにおさげにされた緊那羅きんならは『可愛い』といわれて複雑な心境で悠助の頭をなでた

「俺には負けるがなかなか似合ってるじゃん緊那羅きんなら」

坂田がしゃがんだままそういうと一同緊那羅きんならに注目したが悠助だけは迦楼羅かるら（の髪）に注目していた

なにやら痛いぐらいの視線を感じて迦楼羅かるらがチラリと横を見ると悠助がそおと迦楼羅かるらの髪を触ろうとしていた

「…何をしている…」

悠助が迦楼羅かるらの一言にビクッとして手を止め、エヘへと笑う

「諦めの悪い輩だな…三つ編みなど…」

ぐきゅるるるるる…

迦楼羅かるらの言葉がその音にかき消された

その音：それは腹の虫の鳴き声

「…誰だ今のでっけえ音」

一同腹の虫の飼い主を探して『お前か』を連呼している

「…ワシだ」

『お前か』の嵐の中、迦楼羅かるらが言った

「…体のわりにでっけえ音…」

京助が呆れ顔で言った

「宝珠なくしたのに羽根出したり火吹いたりするからだっちゃ」

緊那羅きんならも呆れ顔でそう言った

「何々？ その【ホウジュ】とかいうの無いとどうなんの？」

南が迦楼羅かるらと緊那羅きんならに聞く

「宝珠にはワシの力がそれぞれ分割して蓄えられてあるのだ」

迦楼羅かるらが答える

「そしてそれは4つあり、ワシの力のバランスをとる役目もしている」

「その宝珠が一つなくなったから迦楼羅かるらは無駄に力出していることになるんだっちゃ」

緊那羅きんならが付け足す

「…さっぱりワツカリマセーン」

京助と3馬鹿が【マイツタネ☆】という顔をして首をかしげた

「えと…つまり…4つの戸の一つなくなってそこから中身がもれてるって感じだっちゃ」

エセ外国人になっている4馬鹿に緊那羅きんならが更にわかりやすく説明する

「おお！ そうか！ 俗にいうアレか、垂れ流し？」

中島が ポン！ と手を打った

「で、力を垂れ流してるから腹が減ったと…そうなのか鳥類」

京助が迦楼羅かるらを見ると迦楼羅はムスツとして

「そうだ」

と答えた

「かるらん、おなか減ってるの？ 何か食べる？」

悠助が心配そうに迦楼羅かるらの顔を覗き込んだ

「待ってて今何か持ってくるから」

そう言うのと悠助は立ち上がって駆け足で台所へ向かって行った

「…この間のときはまだあったんだっちゃん？」

緊那羅きんならが迦楼羅かるらに小さい声で聞いた

この間とは【ヘンテコリンなこと】のことだろう

「…わからん」

迦楼羅かるらが言い切ると緊那羅きんならはガツクリと肩を落とした

「じゃあもしあの時矜羯羅こんがらと闘うことになっていたら…」

「途中で力が切れていたかもしれない」

しれっと言いつつ迦楼羅かるらに緊那羅きんならは力なく床にへたり込んだ

ぐきゅぐくるるる…

迦楼羅かるらの腹の虫が再び鳴いた

「…食いモン何かなかったっけか？」

あまりにも体とは不釣り合いな腹の虫の鳴き声に迦楼羅かるらに何か食い物を与えようということにした京助と3馬鹿は辺りを見回したが先ほどの迦楼羅かるらがキレた際の大騒ぎでしっちゃんかめっちゃんかになっている室内から食い物を探し出すのは…

「お、飴発見！」

サクマ式ドロップの缶を中島が発見した

「ろろっぷ、ろろっぷ！」

坂田が再び座布団を被って映画のワンシーンを演じている

中島が缶を拾い上げ蓋を取ろうとすると

「駄目〜！」

部屋に丁度入ってきた悠助に止められた

両手でなにやらお盆を持っている

匂いからしてこれは

「：昨日の晩飯の残りか」

きゅるるるくくうく：

匂いに反応したのか迦楼羅^{かるら}の腹の虫が『早く食わせろ』とばかりに大きく鳴いた

「はい、かるらん！」

迦楼羅^{かるら}にお盆を押し付けて悠助はにつこり笑うと続いて中島から缶を取り上げた

「これ、僕の宝物なの！勝手に開けないでよう！」
と言って怒った

「：食べないんだっちゃ？」

お盆とにらめっこしている迦楼羅^{かるら}に緊那羅^{きんなら}が声をかけた

「：何だコレは」

お盆の上の皿にのっているのは昨日の栄野家の食卓の残り物を電子レンジで温めなおしたものだった

きちんと爪楊枝もついている

「毒なんか入ってないっちゃ。私も昨日食べたし」

緊那羅^{きんなら}を横目で見ながらツンツンとしばらくソレを爪楊枝で突付いていた迦楼羅^{かるら}だったが腹の虫を鳴きやませるために意を決して口に入れた

「：なんという料理だ？」

口に入れてしばらくしてから迦楼羅^{かるら}が聞いてきた

「竜田揚げ。美味いか？」

京助が横から口を挟む

迦楼羅^{かるら}がコクリと頷いた

「ケフツ」

迦楼羅^{かるら}が竜田揚げを綺麗に平らげ軽くゲップをし何もなくなった皿を黙って見ている

「…満足したか？ 鳥類」

京助が声をかけると迦楼羅かるらが皿を差し出して

「もう無いのか？」

と言ってきた

どうやら竜田揚げがお気に召したらしい

「それで終わりなんだ…ごめんねかるらん。でもでもね！またハルミママに作ってもらうから！ 今日頼んでみるから！」

悠助が【宝物】が入っているという缶を持って迦楼羅かるらに謝った

そんな悠助を迦楼羅かるらは少し驚いた顔で見ている

「悠、皿置いて来い。栄養補給した鳥類がまた何かやって割られたら俺が母さんにどやされるからな」

「はあいつ」

京助が迦楼羅かるらから皿をとって悠助に渡すと嬉しそうに受け取りパタパタと部屋を出て行った

「…あやつ…栄野弟はいつもあんな感じなのか…？」

迦楼羅かるらが緊那羅きんならに聞いた

「悠助のことだっちゃ？ …そうだっちゃよ？ 悠助はいつつもあ

だだっちゃ」

「…そうか…」

迦楼羅かるらは目を細めて悠助の出で行った後を見た

そんな迦楼羅かるらを見て緊那羅きんならがフツと笑った

「でさあ…玉はもういいのか？」

南が竜田揚げに負けて忘れ去られつつあった本題を掘り起こした

「あ…玉ね…」

京助が迦楼羅かるらをチラリと見た

「この辺りで変わったこととかなかったか？ 宝珠の力で何か起こっているかもしれんからな」

迦楼羅かるらがそう言うのと3馬鹿と京助の視線が迦楼羅かるらと緊那羅きんならに注がれた

「…なんだっちゃ？…」

緊那羅きんならがその視線を受けてたじろく

「変わったことっていえば…なあ？」

南が視線を逸らさず他の三人に言った

「一番変わったことっていやなあ？」

中島も同様

「…コイツらだよなあ？」

そして坂田も

「羽根生えて、火吐いて、だっちゃだしなあ？」

京助がそういう終わるとそろって深く頷いた

「何が言いたい？」

3馬鹿と京助の行動に迦楼羅かるらがムスツとして問いかける

「…あゝ…つまりはですねえ、君たち以上に変わった人…というか変わったことは特に無いということなんですねえ」

中島が某有名推理ドラマの主人公のモノマネをしながら言った

「中島、それ結構古いぞ」

坂田が突っ込むと

「名作なんだしいじゃ〜ん！」

と中島がへらへら笑った

「…緊那羅きんなら…」

迦楼羅かるらが静かに、でもきつと（絶対）キレているであろう口調で緊那羅きんならの名前をよんだ

「…何も知らないみたいだっちゃんね…宝珠のことは； それ以上に真面目に探す気あるのか無いのか…；」

緊那羅きんならが迦楼羅かるらから少しづつ離れながら言った

「…お前ら…」

迦楼羅かるらが拳を握り締め方を震わせている

3馬鹿と京助は気づいていない

迦楼羅かるらの背中に光が集まり始めた

「お前等いいかげんに…！！！！！！！！！！」

ガラッ

迦楼羅^{かるら}が怒りを爆発させようとしたその時歴史が動いた

「京様。ハルミ母上様がお昼そうめんできおいしいかと聞いておられるのですが」

窓が全開に開いてヒマ子が顔を出した

「お、いいねえ！ そうめん最高！」

中島が『グッ！』と親指を立てる

「ああ、いいって伝えて」

京助が言う

「わかりましたわ」

ヒマ子は上機嫌で窓を閉めて去っていった

「…迦楼羅^{かるら}？」

緊那羅^{きんなら}が固まっている迦楼羅^{かるら}の肩をポンポン叩いて名前を呼ぶとハ

ッ和我に返った

「な…なんだ今のは…」

迦楼羅^{かるら}が青い顔をして緊那羅^{きんなら}とその他に聞く

「ヒマ子さん」

すると一同口をそろえて返した

「3サイズは上からオール14cm」

「趣味は光合成」

「京助大好きなお茶目な向日葵だ」

3馬鹿が順にヒマ子について説明をしていく

「…私も最初腰抜かしたっちゃ…」

今だ青い顔をしている迦楼羅^{かるら}に緊那羅^{きんなら}が遠い目で話しかけた

「アレは…変わったことにはいらんのか？」

迦楼羅^{かるら}が3馬鹿と京助を振り返り聞くと

「だって向日葵だし？」

と坂田が返す

「うん、向日葵だし」

南もそういつて頷いた

「なんで俺よ； 南！」

京助が南を呼ぶと南は顔の前で手を振って『パス』の合図をした
「…中島…」

中島は京助と目を合わせないように遠くを見ている

「緊那羅…」
きんなら

緊那羅も中島と同様目を合わせないように明後日の方向を見ていた

「京様？」

わけがわからないヒマ子が京助の名前を呼んだ

「さっさと聞かんか！ たわけ！」

中島の小脇で迦楼羅8（かるら）が怒鳴った

「わーかったよッ！； 聞きゃあいんだろ聞きゃあッ！；」

京助がもうどうにでもなれという感じで縁側にしゃがみヒマ子と視線を合わせると辺りがしん…と静まってサワサワという風の音だけになった

「…ヒマ子さん」

「はい？ なんですか？ 京様」

サワサワ…

「あの…」

「はい？」

サワサワサワ…

「その…鉢の中…」

「鉢？」

サワサワサワサワ…

「長い」

スパーンと坂田が京助の後頭部を引っ叩いた

「一気に言えよ一気に」

南も引っ叩く

「じゃあお前等が言えつちゅーんじゃッ！；」

京助が二人に食って掛かった

「京様？ 私の鉢の中がどうなさいましたの？」

ヒマ子が京助に聞くと

「お前の鉢の中が見たい」

と迦楼羅かるらが中島の小脇から言うヒマ子が一瞬劇画風の顔になった
「な…何とおっしゃいます？ その小脇の方…わ…私の…」

「鉢の中が見たいと言ったのだ」

動揺するヒマ子を迦楼羅かるらが少し睨みつつ言うヒマ子は京助を見て
そして迦楼羅を見た

「私は京様に操を立てましたの！ 京様以外の男性にそうやすやす
と肉体を見せてなるものですか！」

ヒマ子が声を張り上げて宣言した

「愛されてるねえ…京様」

坂田が京助の方をポンと叩いた

「…んなもん立てるなよ…」

京助が半分灰色になりながら遠くを見た

「向日葵の分際でなにたわけたこと言っている！ さっさと見せん
か！」

中島の小脇からすると抜けた迦楼羅かるらがヒマ子に近づく

「きやああああ！ 痴漢ですわーーーーー！」

ヒマ子が身をくねらせて叫ぶと迦楼羅かるらが凍った

「…痴漢…」

緊那羅きんならがボソツと言った

「かるらん痴漢なの？」

悠助が緊那羅きんならの服を引っ張って聞いた

「誰が…誰が痴漢だ！！ たわけーーーーーッ！！！！！！！！！！」

迦楼羅かるらが怒鳴ると金色の羽根が屋根より高く大きくあらわれ同時に
強風が吹き荒れた

「やめんかーーーーーいッ！！」

「のおわあああ！！！！」

「きやーーーーー！！」

巻き起こった強風で木々が揺れ葉が飛び、窓はガタガタと音を立てている

「迦楼羅！ 迦楼羅ストップだっちゃー！；」

緊那羅が悠助を庇いながら声を張り上げて迦楼羅を止めようとする
「きやあッ！」

ヒマ子の悲鳴が聞こえゴトリ、と何かが倒れた音がすると風が止まった

コロコロコロコロ：

ヒマ子の鉢から赤く小さな玉が転がり出てきた

「ウチを壊す気か！ この阿呆鳥ッ！！；」

京助が怒鳴ったが迦楼羅は京助を見ようともせずヒマ子の鉢から転がり出てきた赤い小さな玉を拾い上げた

「迦楼羅：それ：宝珠だっちゃ？」

迦楼羅の拾い上げた赤い玉を見て緊那羅が迦楼羅に聞いた

「：ヒマ子さん？」

緊那羅にしがみついていた悠助が倒れたまま動かないヒマ子の名前を呼んだ

「ヒマ子さん：ねえどつか痛くしたの？ 立てないの？」

悠助がヒマ子に駆け寄る

ヒマ子から返事は無い

「京助：ヒマ子さん動かない：よ：？」

「あたりまえだ」

泣きそうな顔で京助を見た悠助に迦楼羅が言った

「その向日葵が動いていられたのはワシの宝珠の力でだからな。宝珠がなくなったとなれば動かなくなるのは当然だろう」

ヒマ子の鉢からこぼれた土が風で少し飛んだ

「じゃあ何か？ ヒマさんは：」

つかかけを履いて庭に降りた京助は迦楼羅の横に立ちヒマ子を見た

「：もう動かない：の？」

目に溢れそうなくらい涙を溜めつつ必死にそれを流すまいとしている
悠助がヒマ子を抱きしめたまま聞いてきた

「…そうだ」

迦楼羅がどこか気まずそうに言った

3馬鹿も何とかこの重苦しい空気を軽くしようとしているらしいが
顔を見合わせるだけだった

「…悠助…」

緊那羅きんならが裸足で庭に降りて悠助の横にしゃがんで頭をなでた

「う…つく…」

途端に悠助は涙と鼻水を少し流して緊那羅きんならの服に顔をなすりつけた

「やら…ヒマ子さん喋ってくれないとやらあ…」

ズズッと鼻水を吸いながら悠助が泣き出した

「…迦楼羅…」

悠助の頭を撫でながら緊那羅きんならが迦楼羅かるらを見上げた

「…そんな顔してワシをみるな!;」

迦楼羅が怒鳴る

「なあ…なんとかならねえのか？」

坂田が迦楼羅かるらに聞いた

「何とかとは何だ？ 何とかなるならその何とかを言ってみろ」

迦楼羅かるらが坂田に聞き返した

「あ…例えば代用品つかうとか？ どうよ？」

南が横から提案する

「ナイス南！ それいいねえ！ どうよ！」

坂田が南を指差してその後迦楼羅かるらを指差した

「ようは乾闥婆けんたつばに玉なくしたことバレなきやいいんだろ？」

京助が迦楼羅かるらの持つ宝珠を指で突付いて言った

「…コレ…少し貸しておいてくれねえ？」

「な…ッ!!?」

再び怒鳴りそうになったが緊那羅きんならに頭をなでられながら泣いている
悠助が目に入り怒鳴るのをやめた

「：悠をあんまり泣かせたくないんだ：」

京助が聞き取れるか聞き取れないかの声で言った

「母さん昼間は神社の仕事で家にはいないし、俺は学校で悠より帰りが遅いだろ？　悠はずっと『おかえり』って言ってくれるヤツが欲しかったんだ：その相手が何であれさ：」

自分が悠助くらのときはまだ赤ん坊だった悠助のために母ハルミは神社に行かず家にいて京助が学校から帰るといつも『おかえり』という言葉が迎えてくれた

「緊那羅きんならが来て：ヒマ子さんが家にいるようになって悠がすつげえ嬉しかるらそうだった」

迦楼羅が目を細め無言で悠助を見る

「：無垢だな」

ボソッとそう言い放つと迦楼羅かるらは悠助に近づいた

「：か：りゆらん？」

ぐしよぐしよになった顔をあげて迦楼羅かるらを見あげた

「迦楼羅かるら：？」

緊那羅きんならも迦楼羅かるらを見る

「：えええい！　泣くな！　鼻水を拭け！　たわけッ！！！」

迦楼羅かるらが怒鳴りながら自分の服で悠助のぐしよぐしよになった顔をゴシゴシ拭いた

「かりゆらんゝいたいゝ；」

もの凄い勢いで悠助の顔を拭く迦楼羅かるらを止めるに止められない緊那羅きんはただオロオロしている

「あのテンちゃんは悠を新ジャガ芋か何かと間違えてねえか？」

中島が言った

「一皮剥くつもりなのかしらん？」

南が中島に寄りかかりながらその様を見ている

「俺等あんまり突っ込めねえなあ：」

坂田がおさげを触りながら遠い目をした

「あんま関わらん方がいいかもだぞ」

京助が呟いて縁側に腰掛け柱に寄りかかった

「：俺に近づくとか怪我するぜ」

京助が3馬鹿を見上げてそう言って笑った

その言葉は3馬鹿には冗談にも本気にも聞こえたが今は前者にして
おいて笑い飛ばした

「ホレ！」

迦楼羅かるらが悠助に向かって何かを差し出した

「：かるらん：？」

迦楼羅かるらに思い切り拭かれたせいで赤くなっている顔で悠助は迦楼羅かるら
を見上げた

「：さっさと受け取らんか！ たわけ！」

なかなか手を出そうとしない悠助の手をとって無理矢理その手の中
に【何か】を入れた

「かるらん：コレ：」

悠助の手の中にあつたのは小さな赤い玉：宝珠だった

「：貸すだけだからな：なくすなよ」

迦楼羅かるらが踵を返し悠助に背を向けた

「：乾闥婆けんたつばには何て説明するんだっちゃ？」

緊那羅きんならが静かに怒れる乾闥婆の姿を想像して迦楼羅かるらにたずねた

「：な：んとかなるだろう；」

迦楼羅かるらが引きつりながら答えた

悠助は迦楼羅かるらと緊那羅きんならを交互に見た後いきなり立ち上がると家の中
に入っていた

「：さんきゅ」

京助が迦楼羅かるらに声をかけた

「：フン」

迦楼羅かるらが照れくさそうにそっぽを向いて鼻を鳴らした

「かーるーらんー！」

という声と共に悠助が玄関の方から走ってきて迦楼羅かるらの前で止まった
「：何事だ栄野弟：；」

息を切らせてでも笑顔の悠助を見て迦楼羅が少し後ろに下がった
「はいっ！」

悠助が差し出した手の中には赤い小さな玉があった

「これは…宝珠か…？」

「ううん。かるらの貸してくれたのはこっちだよ。これは僕の宝物」

悠助がもう片方の手にある迦楼羅の宝珠を見せた

「掃除した時に見つけたんだ…綺麗だから宝物にしたの。でね、

かるらも宝物貸してくれるから僕も貸すよ」

迦楼羅の手をとって【宝物の玉】を渡した

「…迦楼羅8かるら）の宝珠そっくりだっちゃんね…」

緊那羅が玉を見比べて呟いた

「これなら乾闥婆にも…」

「僕がなんですか？」

迦楼羅と緊那羅、そして京助が固まった

屋根の上からした聞き覚えのある最強 (凶) 人物の声

「…乾闥婆…いつからそこに…」

「たった今来たばかりですが…何か僕のこと話していたみたいです
ね」

ストンと屋根から地面に着地すると3馬鹿から拍手が巻き起こった

「なんだ。とにかく最強とかいうからすげえゴツツイ奴想像してた
のに普通の奴じゃん」

坂田が乾闥婆を見ていった

「…最強なのは中身だっちゃー…」

京助が遠い目をしながら緊那羅の口真似をした

「迦楼羅」

乾闥婆に名前を呼ばれると気まずそうに迦楼羅が顔をそらした

乾闥婆はにっこりと笑うと迦楼羅の前髪を引っ張った

「何してるんですか？ こんな所で。僕がどれだけ探したと思って
いるんですか…ッ」

「いだだだだだだだッ！ 痛いわ！ たわけっ！！！！；」

「たわけは貴方でしょう。まったく…っ」

乾闥婆けんだつばが最凶オーラを出しつつかるら迦楼羅かるらの両方の前髪を思いっきり引っ張る

「痛いといってるだろうがッ！；」

迦楼羅かるらが怒鳴ろうが乾闥婆けんだつばは動じず尚もどこか怖い笑顔で前髪を引っ張り続ける

「…つええ…；」

「…な？」

3馬鹿けんだつばが乾闥婆けんだつばの最凶っぷりに思わず拍手をした

「で…宝珠は見つかったんですか？」

全員がドキンとし固まった

「な…何故それを知っている…？」

迦楼羅かるらがたずねると

「…有るべきものが無かったら誰だって気づくと思いますけど」

乾闥婆けんだつばが呆れたようにいった

「いや…まあ…その…；」

乾闥婆けんだつばから視線を逸らし手の中にある【悠助の宝物の玉】を握った

「かるらん…」

悠助が心配そうに迦楼羅かるらを見つめる

「…貴方は…柴野悠助くんですね？ はじめまして僕は乾闥婆けんだつばと申します」

乾闥婆けんだつばは悠助に自己紹介をすると再び笑顔だけどどこか禍々しい目を迦楼羅かるらに向けた

迦楼羅かるらは乾闥婆けんだつばと目を合わせないようにしながら手の中で玉を転がす

「けん…け…」

「いらいのならば省略して呼んでくれていいですよ」

乾闥婆けんだつばの名前を言えずにいた悠助に乾闥婆けんだつばが微笑みながら言った

「けんちゃん…あのね…かるらんは…」

カッーン…コロコロ…

悠助が何か言おうとしたその時迦楼羅の手から【悠助の宝物の玉】
が落ちて乾闥婆の前まで転がっていった

「…なあ…今の状況、かなりやばくね？」

中島がボソツと言った

「…ヤバイヤバイ…」

坂田と南、そして京助も頷きながら口をそろえた

「…これは…」

乾闥婆が転がってきた玉を拾い上げると迦楼羅と緊那羅が雷に打た
れたような顔をした

「…ヤヴァイっスね…」

坂田がその様子を見て言った

「これからどうなるんでしょうか…栄野さん」

南が手でマイクを作り京助に向けた

「…血の雨かなにかが降ると思われます」

京助が遠い目をしながら答えた

「けんちゃん！ あのね！ かるらんは…」

悠助が乾闥婆に駆け寄りさっき言いかけた何かを言おうとしている
乾闥婆は玉を見たあと悠助を見てそれから緊那羅のそばにある倒れ
ている向日葵を見ると悠助を撫でた

「…迦楼羅が貴方の育てた向日葵を台無しにしてしまったんですね
？ すいません何しろ短気なものですから」

にっこりと笑って乾闥婆が悠助に言った

「迦楼羅」

そして顔を上げると迦楼羅に近づき

「宝珠が見つかったのならばさっさと戻りますよ」

といいながら迦楼羅の前髪を引っ張った

【悠助の宝物の玉】を【宝珠】と言っている乾闥婆を見て
「…バレてない…？」

坂田が呟いた

「…みたいだな」

中島が坂田の肩に寄りかかりながら言った

「まったく…」

乾闥婆は溜息をつくと迦楼羅の前髪に【悠助の宝物の玉】をつけた

「ほら、帰りますよ。お騒がせしました」

「髪を引っ張るな！たわけっ！」

迦楼羅の前髪を手綱のように引っ張りながら乾闥婆は緊那羅を見

「…早くその向日葵、起こしてあげたらどうですか？」

と言った

「けんちゃん…あのね…」

悠助が乾闥婆の服を掴んでやっぱり何かを言おうとしている

「…大事に…してくださいね？くれぐれも失くさない様に」

悠助の頭を撫でにつこり微笑む乾闥婆を迦楼羅は黙って見た

「乾闥婆…お前…」

「さあ、帰りますよ迦楼羅」

「いだだだ！…！引っ張らなくとも帰るわ！！！たわけッ！！！」

ギャーギャー騒ぐ迦楼羅の前髪を引っ張ってスタスタと歩く乾闥婆

の様はまるで犬かなにかを連れて散歩に行くようだった

「…ペットとご主人…」

南が呟いた

「…けんちゃん…かるらん…」

乾闥婆はチラリと後ろを振り返り微笑むと迦楼羅と共にスウッと消

えた

「…驚かないのか」

京助が3馬鹿に聞いた

「…今更…」

3馬鹿が口をそろえた

「動いて話す向日葵に口から火を吐くテンちゃん、だっちゃんラムちゃん、最強飼主…こんだけ色々ありましたから」

中島が指折り言った

「これ以上何に驚けと」

南が京助の頭に顎を乗せて聞く

「実は俺ムガムツチヨ星人だったんだ」

京助が言った

「うわーそりゃあびつくりだー」

坂田が棒読みの言葉でわざとらしく驚くと4人そろって笑い出す

「ヒマ子さん起こしてやらないとな」

京助が立ち上がると3馬鹿も庭に裸足で降り倒れているヒマ子の周りに集まった

ヒマ子を起こしてこぼれた土を手で掬い入れそこに悠助が【宝珠】を埋めた

「…何も起こらないっちゃね」

緊那羅きんならがヒマ子を突付いた

「…ヒマ子さん…」

悠助の眉毛が下がってきた

「よし！ こうなったら最終手段だ！ 京助！」

中島が勢いよく立ち上がり京助を指差した

「…嫌な予感がするんですけども」

京助が中島を見上げ嫌そうな顔をする

「目覚めのキスだー！ーッ！ー！」

中島が叫んだ

「やるかー！ー！ー！ーッ！ー！！！」

京助が拒否の大声を負けじと張り上げたが3馬鹿に押さえつけられたのと悠助のお願いの眼差しに負けて半泣き半怒りの顔でヒマ子にキスをした

するとなんということでしょう！

葉がピクリと動きヒマ子が目を開けた

「ヒマ子さんっ！！」

悠助がヒマ子に抱きつく歓声が上がる

「私…一体何が…？」

悠助に抱きしめられきよんとしているヒマ子

「…愛の力は偉大だな」

坂田が白くなっている京助の肩を叩いた

「愛は地球を救う…か…」

中島が同じく京助の肩を叩くと京助がパタリと倒れた

>i19640—2575<

【第三回・参】無視から始まるサバイバル （前書き）

坂田の家はいわゆる【組】の分家にあたり、坂田はその【組】の次期組長、いわゆる【若】という立場
これはそんな坂田のお家事情という話

【第三回・参】無視から始まるサバイバル

夏休みが手を振りながら去っていった今日で2日目

『おはよー』とかいう声があちこちから聞こえる通学路で中島は前を歩く見慣れた制服の尻尾髪を見つけた

「よっす坂田！」

小走りで駆け寄ると隣に並んだ

「はよさん」

坂田が片手を挙げて挨拶した

「若ー！ー！ー！！」

突然ゴツツイ大声がしてそこら辺の人々が声の方向を振り返った
中島と坂田もしっかり

目に入ったのはオールバックの黒髪に紺色のスーツを着て片手にB5サイズの封筒を持ったちよつとガタイのいい青年

「…三浦…；」

封筒を振りながら坂田めがけて駆けて来る【三浦】というらしい青年を見て坂田がガツクリ肩を落して溜息をついた

「忘れ物っス！ 若！！！」

三浦は坂田の前で止まり頭を下げて封筒を差し出した

「…若って呼ぶな…；」

周りの痛い視線を受けながら封筒を受け取り坂田が言った

「じゃあ若組長」

「もつとヤメロ」

封筒を縦にして三浦の頭をチョップした

「…新人さんか？」

中島が三浦を見て坂田に聞いた

「…ああ、この前まで本家にいたらしいんだ」

封筒を肩からかけた鞆に入れながら坂田が言った

「若のご友人で！ 俺は三浦っつうモンです！！ 以後よろしゅう

たのんます!!」

三浦が大きな声で中島に挨拶した

坂田の家はいわゆる【組】というもので坂田はその三代目の息子
いわば【坂田組四代目組長】ということになる

坂田の家は分家にあたるが本家というのは結構でっかい組織で人数
もかなりいる

「…ところで若…組長のことなんですが…」

三浦が顔を上げて坂田を見た

「…放っとけ。アイツが悪いんだ」

坂田の機嫌が悪くなる

「でも若…」

三浦がオロオロし始める

「放っておけてんだろが!!」

巻き舌加減がすこし入った口調で坂田が怒鳴ると三浦が頭を下げた

「…封筒サンキュ。いくぞ中島」

早足で歩き出した坂田を中島が追いかける

「…オヤジさんとまた何かあったのか？」

中島が恐る恐る聞いてみる

「…別にいつものソフト無視してるだけだ」

【説明しよう【ソフト無視】とは完全無視の一步手前の無視で話しかけられても『ふーん』とか『あっそ』とかいうつれない返事を返すだけの事をいうのだ】

「おーいっす!! はよーう! 遅刻すんぜー!!」

シャーという車輪の音と共に南が二人の横を自転車で通って電信柱の近くに止まった

「なあさつきゴツイスーツマンみたんだけどさ」

南が自転車を押して二人に駆け寄る

「三浦ってんだとさ」

中島が『よ』と片手を挙げて挨拶すると南がその手を叩いて『オス』と言った

「やっぱり坂田んトコのか」

三人並んで歩き出す

「にしても坂田のオヤジさん人望あるんだなあ…そのうちこっちが本家になるんじゃないの？」

南が坂田の父親を褒めると中島も頷いた

「…あんなクソ親父…」

それに引き換え坂田は機嫌が悪い

キーンコーン…カーンコーン…

スピーカーの調子が悪いのかかすれかすれのチャイムが聞こえた

「…京助は今日も遅刻らしいな」

駆け足で校門を通りながら中島が言った

「いつものことだっちゃーん」

南が笑いながらキンナラムちゃん語で言うのと自転車置き場まで置きにいった

「…記録更新だな」

中島が呟いた

「京助！ 弁当忘れてるっちゃーッ！！！」

緊那羅きんならの声響くいつも通りの栄野家の朝

京助が弁当片手に玄関からつんのめるように飛び出して石段を駆け下りていく

「京助ー！！ 鞆きんならー！！！」

その後から緊那羅きんならが通学鞆を持って追いかけて石段の下に向かってぶん投げる

夏休みボケとは関係なく京助は今日も遅刻決定だった

弁当箱を鞆に入れ全力疾走で学校に向かう

京助の運動神経のよさはこんなところで鍛えられているのかもしれない

もう生徒の姿が見られない通学路には犬を連れたおっさんやご高齢のマダムが優雅に歩いていた

「ちくしょー…眠みい…」

ぶつくさ文句を言いながら正月町のメインストリートに通じる路地に入った京助の横を黒い高級車が通過し止まった

「この狭めえとこにでっかい車のつてくるなよな」

京助は走る速度を落さずその高級車の横を通り過ぎようとして

「京助くん」

呼び止められ足を止めた

ンガー…っ という音と共に車のパワーウィンドが下がって見覚えのある顔が現れた

「…柴田…さん？」

柴田さんといわれた青年は『や』と片手を挙げた
その柴田の奥にもう一人見覚えのある顔…

「…坂田の親父さん…」

坂田組三代目組長だった

何度か見かけたことはあるが話したことは無い

柴田はその側近…右腕的存在でいつも坂田父の傍にいる愛想のいい青年だ

坂田父はいつも黒いスーツか着物姿で幅広のサングラスをかけている

「どうしたんスカ？ 坂田ならたぶんもう学校…」

「いや君に用があるんだよ」

につこり笑うとドアを開け柴田が車から降り京助の腕を掴んだ

「一緒に来てもらいたいんだ」

二時間目と三時間目の間の休み時間南と中島が教室にやってきた

「京助今日休みか？」

京助はまだ来ていない

「無断欠席か？」

中島が京助の椅子に座って机の中を見た授業道具は入っていない

「ウニ（担任）は別に何も言ってなかったし：何かあったんかね？」

坂田が腕を組んで椅子をギーギーさせた

「またテンちゃんとかきてるとか？」 「最強のお方がいらっしやっ
てるとか？」

南と中島がハモってお互いを指差すと親指を立てた

「帰りにでも寄ってみるか？」

坂田が眼鏡を上げながら二人を見た

「そうだなー：そうすつかー：」

三時間目のチャイムが鳴り響いた

「……；」

車内は思った以上に広がったが京助は肩身が狭かった

抵抗したが無理矢理車に押し込められたのだ

「：どこに連れていくんスカ。俺学校あるんスけど」

柴田に聞くと

「おとなしくしていてくれれば手荒なことはしないから」

といつてにつこり笑うだけだった

京助は落ち着かず車内をぐるり見渡した

革張りのシート、運転手もサングラスをかけた怖そうなおっさんだ
った

助手席には場違いというか：この車内には似合わない小さくでも綺
麗な花束がある

坂田父の方を見ると坂田父が顔を背けた

「：あのー：」

京助は思い切って声をかけてみると

「あ、駄目だよ京助くん」

慌てて柴田が止めた

「：組長と話したいならコレ使ってくれないかな」

そういつて柴田が取り出したものは携帯電話だった
手渡された携帯と坂田父を交互に見て柴田を見る

「…なんで隣にいんのに携帯…;」

「組長は極度の…重度の人見知りなんだ。それで今朝も若と…」

その時柴田の胸のポケットからバイブ音が聞こえてきた横を見ると坂田父が窓の方を見ながら携帯をかけている

「…まさか…」

京助が携帯のボタンを押した柴田を見ると坂田父の声が柴田の携帯と生の声とがハモって聞こえた

「…もういい柴田、後は俺が自分で話す」

そういうと坂田父は携帯を切った

「…マジかよ…;」

京助が呟くと同時に柴田から手渡された携帯が鳴った

画面には【組長】の文字が表示されている

「ホラ、とってとって」

柴田が通話ボタンを押して京助の耳に無理矢理押し当てた

「…も…もしもし?;」

京助が恐る恐る電話の向こう…といっても実際は隣にいる坂田父に話しかけた

「…手荒なことをしてすまん…柴田が言ったように俺はかなりの人見知りでね…人と目が合うと何を話していいかわからなくなるんだ…携帯が出てきていい時代になった…昔は紙コップと糸が必需品だったからな…そうは思わないかい?」

隣から電話から同じことをハモって言われて京助は

「はぁ…;」

としか言いようがなく…困った顔をして柴田を見てもただ笑顔を返してくるだけだった

「で…俺に何の用なんスか?」

「深弦のことなんだが…」

「坂田?」

いきなり声のトーンが下がりガツクリと肩を落として溜息をついた坂田父はサングラスを指で押し上げてゆっくり話し出した

「な…冗談じゃないっスよ!;」

話を一通り聞いた京助が大声を上げた

「そんなことで俺連れてこられたんスカ!;!;」

「そんなこととはなんだね。俺にとっては重大問題なんだが」

携帯を握り締め直で坂田父に言った京助の携帯から坂田父の声が聞こえる

しかし話している坂田父は隣にいたので充分声は聞こえているのだ
「とにかく!付き合いきれねえんで降ろしてくれないですか」

京助が運転手のおっさんに声をかけると運転手のおっさんの携帯がなった

「:戻るぞ」

坂田父が指示を出した

「ごめんねおとなしくしてくれないかな」

柴田が京助の肩を掴んで座らせたが京助はその手を振り払い柴田を睨む

「坂田がキレるの当たり前じゃん!! 俺だってたぶんキレるっての!! そんなことされたら!! 降ります!降ろしてください!

!! むしろ降ろせ!!」

京助が運転手の肩を掴んで揺すると

「:しかたないな:」

トントンと柴田が京助の肩を指で突付く

「なん:!!!??」

みぞおちクリーンヒット

「:ごめんね京助君」

遠のく意識の中で京助は謝る柴田の声を聞いた
柴田の携帯が鳴った

「:戻ったらひとまず縛って客間にいてもらいます:若には俺から連絡しておきますか?」

「いや:深弦には俺から連絡する」

「いいんですか? 大丈夫ですか組長」

近くにいるのに携帯で会話し、会話がハモって聞こえてくるおかしな車内

京助はおかしな会話のキャッチボールの飛び交う中ノビていた
もうすぐ三時間目が終る

京助の腹の虫がキュウと鳴いた

結局放課後になっても姿を見せなかった京助を五分の一心配し後の半分はなにやら他の事を思いながら3馬鹿は市街からちよつと離れた坂の上にある栄之神社へと足を向けた

「風邪でも引いたんかねー…」

南が自転車を押しながら言った

「でも昨日は元気だったぞ？」

中島が昨日の京助の様子を思い出して呟いたその時だった
チャーンチャーンララーンチャーンララーン…♪

坂田の鞆から聞こえてきた着信音に3馬鹿は足を止めた

「…お前いいかげん親父さんからの着信葬送行進曲にするのやめろよ…」

南が半笑いで坂田の肩を叩いた

「アイツはコレで充分なんだ」

坂田がブスツとして携帯を取り出し通話ボタンを押した

「…なんだよ」

あからさまに不機嫌な声で対応している坂田を中島と南が黙って見ている

五分が経過した

坂田の第一声『…なんだよ』から全く会話が無い

「…通じてるのか？」

中島がボソツと言った

「…さあ…」

南が首をかしげて答えた

いっぽう坂田父は携帯を持ったまま固まって五分が経過していた

「…組長…やはり俺が若に言います」

見るに見かねた柴田が固まっている坂田父の手から携帯を抜き取り

「若、柴田です」

話し始めた

「…柴田？」

ようやく会話が始まり南と中島も坂田の近くによって耳を澄ませ向
こうの声を聞き取ろうとしている

「若。京助君を捕獲しています」

「…は？」

柴田の言葉に3人が顔を見合わせた

「今客間で…少し抵抗されたもので眠って貰っています」

柴田は淡々と話す

「な…そりゃどういことだ！？ 柴田！ どうして京助…」

坂田が声を張り上げた

「組長と若のためです…そして俺の意志でもあります」

今だ固まったままの坂田父…組長をチラリと見て柴田が言う

「…若一人で帰ってきてください。そうすれば…」

まだ何か言いかけていた柴田を無視して坂田は携帯を切った

プー…プー…という音しかしなくなった携帯を切り坂田父に手渡す
と柴田が自分の携帯を取り出しどこかにかけている

「…俺だ。…若がもうすぐ帰るだろうから捕まえておくように…他
に誰かついてきたのなら追い返せ。抵抗したら少々痛い目にあわ
せても構わない責任は俺が取る…ああ…頼んだぞ」

「…京助が…誘拐…？」

携帯を握り締めたままおそらく（絶対）キレているであろう坂田を
見つつ南が言った

「…しかも坂田組に…どうして…」

中島も言った

「…んのクソ親父…！」

坂田が大声で叫ぶと自宅方向に向かって走り出した

「…俺等どうしましょう」

中島が南を見た

「中島は俺のニボシ（自転車名）で京助ン家いってくれ。俺は坂田について行く」

南が中島に自転車を渡して坂田の背中を追いかけた

中島もニボシ（自転車名）に跨ると全力で漕ぎ出し京助宅を目指す

「…柴田まで…何考えてやがるんだ…」

走ると授業道具とその他モロモロでガチャガチャいう鞆を邪魔にならないよう後にやって自宅へと急ぐ

後から南が追いかけてきていることにも気付いていないだろう

「…クソ…ッ!!」

坂田は小さく呟くと走る速度を上げた

デン！ とそびえる大きな木製の無駄にでかい門の前に来ると坂田が速度を落した

ハアハアと荒い息をしながら門を睨みあげる

【坂田】

そう書かれた古い木の表札が柱に打ち付けてある

そうここは坂田組の本拠地兼坂田の家である

息のある程度整えてでっかい門の横にある小さな出入り口に手をかけ開けようとした時さっきまでの自分と同じように鞆をガチャガチャいわせながら走ってくる南が目に入った

「…南…」

一旦開けようとしていた出入り口から手を離しかけてくる南の方向に体を向けた

「さ…坂田…っ…おいてっちゃ…いっや…ン；」

南はゼーゼーいいながら坂田の肩に手をかけて息を整えようと必死になっている

「…御老体…」

坂田がそういって南の背中をさする

「やかましい…」

肩で息をしながら南が言った

「…どうして来た？ 何されるかわかんねえのに」

坂田が南に聞いた

「んな…当たり前前のこと聞きなさんなよな…；コチトラ話すの辛えんだから…」

だいぶマシになってきたがまだ苦しそうな南が半ば呆れ顔で答えた
「…お前が俺の立場だったら…どうよ？」

ニツと笑って咳をした南の背中を再度さすりながら坂田は少し考えた後笑って

「…家帰って無双る」

そういつて南の背中をパシッと叩いた

「ひっでえの」

南が腰に手を当てて伸びをし笑った

「しっかし…なんで京助なんか拉致監禁したんだ？」

汗で額にくっついていた前髪をかきあげながら南が門を見上げた

「…俺のせいだと思う」

坂田が呟いたその時だった

門の横の出入り口が開いてスーツに身を包んだ【いかにも】な組員が顔を出した

「…若…！！！！ 若が帰ったぞー！！！！」

一瞬坂田と目が合って沈黙していた組員だったが大きな声で叫ぶと坂田の腕を掴んだ

「な…離せッ！！」

坂田の腕を掴んだ組員は坂田の腕を掴んだまま出入り口から中に連れて行くとしている

「坂田！！ …んのヤロっ！！」

南が組員に体当たりすると組員がよろけて坂田がするりと逃げ出したつかまれていた腕がほんのりだが赤くなっている

「逃げろ坂田！！」

体当たりしてコケた南が坂田に叫んだ

「阿呆！！俺が逃げたら何しにここに來たのかわかんねーだろがッ！！」

「…あ、そうか」

坂田と自分は京助救出に來たということを南はすっかり忘れていたらしい

坂田の一言で思い出しポンと手を叩いた

「うおわッ；」

さつき体当たりをくらわせた組員が南の首に腕を回して捕獲した

「南！！…南を離せ吉川！！用があるのは俺に难道ろ！？」

吉川と呼ばれた組員は南を離す様子はない

「…俺男に抱きしめられても嬉しくねえ…；」

南がボソツと呟いた

出入り口からもう一人組員が現れ坂田に近づく

「若、組長がまってやす」

坂田がにらみ返したが組員は動じず先ほどの吉川同様坂田の腕を掴んで引っ張った

「坂田！！…つきしよ…離せて！！…たくらんけーーーーッ！！；」

「坂田ーーーーッ！！…南ーーーーッ！！」

南の怒鳴り声と重なって聞こえた中島の声

もの凄い勢いで激チャリしてくる中島の後ろには緊那羅きんならが立ち乗りしていた

【解説しよう。激チャリとは激しくチャリンコをこぐという事の省略形である】

「…中島、背中借りるっちゃ」

「は？の…ッ；」

緊那羅きんならは中島の背中に足をかけると思い切り中島の背中を踏んで飛

び上がった

中島の後ろから緊那羅きんならが消えたと思った次の瞬間

ゴスッ　　っと言う音と共に南を捕まえていた吉川の力が緩んだ

吉川の腕から逃げ出した南が振り返ると緊那羅が空中で一回転して着地した

吉川はそのまま後に倒れた

「…京助はどこだっちゃ」

緊那羅きんならが坂田の腕を掴んでいる組員に近づいていく

「…クソッ!!」

組員が坂田の腕を引っ張り出入り口から中に入った

「坂田!」

「待つっちゃ!!」

南と緊那羅が後追う

中島もニボシ　（自転車名）と止めてその後を追った

「若捕獲!!　部外者進入!」

「離せ!!　痛てえ!!!!」

組員が大声で叫んでいる

坂田はつかまれている腕を押さえて必死に逃げ出そうとしているがやはり力では大人にはかなわないらしくただ引っ張られていく

「…っんの…離せーッ!!!!」

坂田が今までに無い大声を上げると　ヒュン　という風を切る音とバキッという何かが何かに思い切りぶつかった様な音がして腕が離された

いきなりつかまれていた腕が離されて前につんのめった坂田を中島が支えた

「…な…んだ?」

顔を上げた坂田は緊那羅きんならにふんずけられて伸びている組員を見た

「…漫画みてえだな」

後から追いついた南がボソリと呟いたのはたぶん自分達に迫ってくる大勢の坂田組組員を見てだろう

「若を捕まえろ！部外者は多少痛い目みせてでも追い返せ！」

「お前等！ いい加減にしろ！！」

坂田が中島に支えられながら向かってくる組員達に怒鳴ったが組員は動きを止めず、挙句走り出し3馬鹿と緊那羅きんならに迫ってくる

緊那羅きんならが踏みつけていた組員から足をどけて向かってくる組員達の方に体を向けた

「逃げろ！！ 緊那羅きんなら！！」

「ばっ…お前が行ってどうするよ！」

中島の手を振り払って組員達に向かって行こうとする坂田を中島が止める

「俺がいきやあ解決すんだ！ 俺が…」

ヒュン！ バキバキ！！

坂田が中島に向かって大声をあげているその後を何かがものすごい勢いで通過し植え込みに落ちた

「…お前等下がった方がいいとおもうぞ」

南が二人を手招きする

「巻き込まれるで」

南の指差した方向を見ると緊那羅きんならの回し蹴りが組員の顔に大当たりしている所だった

あの細い足の何処から大の大人がふっ飛ぶほどの蹴りが出るのか組員の寄ってたかったの攻撃を軽く交わしてはほぼ一発で組員を伸きんならしていく緊那羅を3馬鹿は口を開けてみていた

「…キナラムちゃん強ええなあ…」

南が坂田と中島の傍まで来て言った

「…そーいやあ緊那羅きんならって学校破壊してたよな…前田のヅラ飛ばしてたし」

中島が組員の後頭部に肘鉄を食らわせている緊那羅を見ながら思い出して呟く

「…その後こつてり絞られたっけなあ…」

坂田が空を見上げ遅くまで説教されたことを思い出した
ガスッ　とか　ゴリッ　という物々しい効果音と組員の『グフ！』
とか『ガハア』とか言うむっさい声をBGMに3馬鹿は緊那羅きんならとの
ファーストコンタクトを思い出していた

「…なんだかよくわからんが俺きんなら緊那羅ムカついてきた」
しばし想い出に浸った後南が言った

「俺も」

中島が手を上げる

「…アイツの後始末…俺等がしたんだよな…」

坂田が最後の組員を蹴り飛ばした緊那羅きんならを見て言うところ馬鹿の額に
同時に『怒』マークが出た
スパパパン！！

「な…何するっちゃッ！！…」

緊那羅きんならはいきなり3馬鹿に丸めたノートで連続攻撃を後頭部に受けた
「いや何、ちょっとした甘酸っぱく塩辛く太田胃酸ッばい匂いの想
い出のお返しだと思ってくれ」

坂田が片手を挙げて嘘っぽく『ハハハハ』と笑いながら言った

「太田胃酸はイイ薬です」

南が腕を組んで頷いた

「…意味わかんないっちゃ……」

「君はまだわからなくていいんだ…太田胃酸…いい薬だ…匂いが後
引くけどな…」

中島が後頭部をさする緊那羅きんならの肩を叩いた
バタバタと廊下を誰かが走る音で京助がうっすらと目を開けた
「イツ…て……」

体を動かすと腹部に痛みが走った

手と足をロープで縛られて痛む腹をさすることもできない

「そうか…殴られたんだっけ…腹…」

遅刻して拉致されて殴られて監禁

「…なんだかヒロインになった気分…」

京助は天井を見上げた

室内灯の紐がゆらゆらと揺れている

部屋の外がやけに騒がしいが確認することもできない

京助が大きく溜息をついた時部屋の戸が開いた

「京助ー！！ どこだーッ！！」

坂田が大声を上げながら片っ端から襖や障子を開け京助を探す

南、中島と緊那羅きんならはそんな坂田についていく

一応他人のお宅ということで勝手に部屋を開けるような事はしないらしい

「ここで客間ラストだ…」

ラストの客間にも京助の姿はなかった

「一体何処に連れて行かれたんだ？ 北朝鮮か？」

南が顎に手を当てて言った

「ウチは北朝鮮とかかわりねえぞ」

坂田が南に突っ込む

「後いそうな所わかんねえのか坂田」

中島が坂田に聞いた

「…大広間か離れか…事務所かトイレか風呂か物置か…」

「ありすぎ」

ブツブツといそうなところ（というか行ってない所）を上げていく

坂田に南と中島が突っ込んだ

「とにかく…探すっちゃ」

緊那羅きんならが歩き出すと3馬鹿も後に続いた

緊那羅きんならがほぼ全員組員を伸ばしてしまったためか人の気配がない

チャ～ンチャ～ララ～チャ～ンチャ～ララ～♪

「…坂田…」

坂田の胸ポケットから聞こえてきた葬送行進曲

通話ボタンを押し坂田が携帯を耳に当てる

南、中島、緊那羅きんならが坂田に注目した

「…いい加減にしろよ」

坂田が携帯の向こうに静かにでも確実にキレている様子で言った
携帯の向こうでなにやらいっているらしいがよく聞こえない

坂田が携帯をいきなり切ると走り出した

「おい！！ 坂田！！」

いきなり走り出した坂田を三人が追いかける

靴下のまま庭に降りて庭を斜め横断して近道をする

庭にあるこけ落しがカコンとなった

ある襖の前で坂田が止まった

「…ここ…」

追いかけてきた緊那羅きんならも足を止める

「…大広間だ」

坂田が襖に手をかけた

少し遅れて追いついた中島と南も足を止めて襖を見る

ガラッ！！！！

スパパパパパーン！！

坂田が襖を開けると同時に鳴り響いた沢山のクラッカーの音に四人
の目が点になった

舞い落ちるクラッカーの中身の向こうに柴田と坂田父、そして京助
の姿があった

「おめでとうございやす！ 若！」

気づけばさつき緊那羅きんならに伸された組員が手にクラッカーや鳴り物を
持って騒ぎながら坂田に群がってきた

「…何事…」

南が呟いた

「京助！」

緊那羅きんならが京助に駆け寄った

組員に群がられている坂田を残して南と中島も京助の元に向かった
「生きてたか」

「一応な」

南が笑いながら緊那羅きんならにロープを解いてもらっている京助を見下ろした

「：一体何がどうなっておめでたいんだ？」

中島が今だ組員に群れられている坂田を見ながら京助に聞いた

「今日は若の誕生日なんだ」

柴田がポケットに片手を入れ近づいてきた

「だからってどうして京助を攫ったっちゃ」

緊那羅きんならが柴田を睨んだ

「金髪の：ああ君か。ウチの組員を一人で伸したっていうからどんな奴かと思ったら：強いんだな。もう少し大きくなったらウチの組に入らないかい？」

クックツと笑って緊那羅きんならを見た柴田を更に緊那羅きんならが睨んだ

「大丈夫か京助」

やっと組員から開放されたらしい坂田が京助の所にやってきた

「お前んとこの奴等って愉快なんだか何考えてんだかわかんねえ：；」

坂田を見るとドツと疲れが出たのか京助が溜息をついて坂田を見上げる

「どうしてたかが息子にプレゼント渡すっただけで俺を攫うかね：」

京助が物陰に隠れてコッソリと見ている坂田父を見るとその他一同もそろって坂田父を見る

「ああ！！ ほらお前等！！ 見るなって！！」

柴田が慌てて組員に注意する

「：プレゼントって：京助と何か関係あったのか？」

どうして坂田父が物陰に隠れているのか、どうして京助を攫ったのか等モロモロがさっぱりわからない南と中島が坂田の肩を叩いて聞

いた

「…クソ親父…」

そんな中島と南には目を向けず坂田は物陰から黙ってみている坂田父を睨んだ

坂田に睨まれた坂田父はサッと顔を隠した

「今の若は若いときの姐さんそっくりですから」

柴田が半分呆れ顔で坂田父が隠れた方向を見た

「だからって普通友達ダシにするか？」

京助が立ち上がり縛られていた手をさする

「そうでもないかと若が組長と話してくれないですから」

『ね?』と柴田が笑う

「…どうということだちゃ？」

緊那羅が京助に聞いてきた

「あゝ…つと話してもいいっスか？」

京助が柴田に聞くと一同も柴田を見た

「まあ仕方ないか…」

柴田が頭を掻いて承諾した

坂田はまだ坂田父を睨んでいる

それを見た柴田が苦笑いで坂田の肩を叩いた

「まあ…なんだとにかく坂田の親父さんは坂田にプレゼントが渡したかったんだよな」

京助が考えながら話し出す

「ソレとお前を拉致監禁したの何か関係あんのかよ」

南が聞いてきた

「まあ話し全部聞いてからにしてくれ…んで朝に渡そうとしたらしいんだけど…」

「どこに家の中にいるのに携帯で息子に『おめでとう』言う親がいるんだ」

京助が途中まで話すと坂田が怒った様に（というか怒って）その先を言った

「しかもプレゼントは柴田を通してだぞ」

「…ということで例のごとく坂田がキレまして…」

京助が坂田を指差すとその先はどうやら話さなくても何となくわかつたらしく

「ソフト無視ですか」

中島が今朝の三浦とのやり取りを思い出す

「そんなでもって強硬手段つーことでコイツを誘拐…」

南が京助を親指で差した

「そうすれば状況とかは置いて置いて話だけでもできるだろ？」

柴田が京助の頭を軽く叩くと緊那羅に睨まれ柴田は苦笑いで手を離す

「若…組長がどんな性格かってことは若が一番わかってるはずですよ？」

柴田が坂田に言った

「…どんな性格なんだ？」

南が京助に耳打ちした

「…かなり…っつーか重症の人見知り」

京助は車の中で柴田に手渡された携帯を取り出して柴田に渡した

「どんなに近くにいてもコレで会話。携帯がなかったときは糸電話だったとか言ってたぞ」

「糸…」

南と中島は糸電話に向かってドスの聞いた声で話す坂田父を想像して口の端を上げて笑った

「若…姐さんに結婚申込んだ時の組長想像してみてください？」

柴田が坂田の耳元で言った

「…まだ携帯もなかった時代です…」

「…俺は母さんじゃねえ」

坂田が柴田を睨んだ

「…そーういや…坂田のおふくろさんどうしたとよ？」

中島が思いついたように言った

「婦人会の旅行。今週はこの区域だから」

京助は母子家庭のせいか婦人会に妙に詳しい

「奥さんとも携帯ではなしてるんか？」

南が坂田と柴田に聞く

「姐さんとはなんとか（強調）直で話してるよ。今はね：新婚当時は筆談とかが多かったけどソレするたびに姐さんに平手打ちくらってたっけなあ：まあ：慣れたというか：」

柴田が思い出話を語り始めると柴田の携帯がなった

「あまり余計なことを話すな柴田」

物陰と携帯から坂田父の声がハモって聞こえる

柴田の携帯を坂田が取り上げ電源を切った

「若？」

携帯を床に叩きつけ坂田父が隠れている物陰に早足で近づいていった

「んのクソ親父！！」

ゴスツ という音からして坂田が坂田父を殴ったことがわかる

「若！！！！」

柴田が小走りで坂田に駆け寄ると京助達も後に続く

握り拳を作ったまま坂田父を見下ろす坂田の目つきはきつかったが

どこか寂しそうだった

「：深弦：」

幅広のサングラスがずり落ちて見えた目は坂田そっくりだった

「組長」

柴田が坂田父の腕を掴み立たせる

「：頑張ってください」

柴田は坂田父に向かいそういうと坂田父の手から携帯を抜き取った

「君等はこっちきてくれるかな。お前等は各自持ち場に戻れ！」

南と京助の背中を押して坂田父と坂田から離れると柴田は組員に向かって叫んだ

「ウース！！」

むさい声がそろって聞こえぞろぞろと組員が部屋から出て行く

京助達も柴田と共に部屋を出た

沈黙が続き坂田父の顔が真っ赤になり顔をそらすと坂田が睨んだ

「み…」

必死に何かを言おうとしだした坂田父を坂田は鋭い目つきのまま黙って見る

「み…つる…」

「なんだよ」

名前をやっと口にした坂田父に坂田がやや早口で返事をした

「…み…つ…」

「名前は一回でいい」

ズバツと坂田が言った

「…た…お…お…」

「話すときは人の目を見て大きな声で！」

坂田が声を上げる

「…どっちが親なんだよ…」

少し開けた襖から中の様子を見ていた南がボソッと呟いた

「…アレで組長務まってるんだから不思議だよな…」

京助が呆れ顔で言う

「あんな組長だからこそ組長務まっているんだよ」

柴田が笑顔で京助の肩に手を置くと緊那羅の痛い視線を感じたのかすぐ手をどけた

「…おめ…でと…う」

「……さんきゅ」

一体何分かつたのかやつのことで坂田父が坂田に直接おめでとうを言った時一斉に周りの襖が開いて組員歓声を上げながらがなだれ込んできた

「持ち場にもどれって言ったのに…」

柴田が襖を開けながら溜息をついた

「…これから宴会になる様子だけど…参加していつてくれるかい？
お詫びもかねて」

柴田のその言葉に顔を見合わせていた京助達の元に小さな花束を持

った坂田がやってきた

「あ：それ」

京助が車の中で見た花束だった

「14の息子に花束って：」

中島が苦笑いした

「それ組長が姐さんに告白した時の花束と色違いなんですよ」

柴田の言葉に花束に視線が集まる

「組長は本当に大切な人にだけこの花贈るんです」

坂田が坂田父のほうを振り返ると組員に背中を向け壁にへばりついていた

「ああ；組長！」

柴田が坂田父の携帯を持ってきてしまったために何もできずにいる坂田父の元に走った

「お前等！！ どけ！ どけって！！」

柴田が組員をかきわけていく

「お前の親父さんロマンチストだな」

「うっさい」

南の言葉に坂田が照れくさそうに言った

「：なあ：」

京助の声に振り向く

「：柴田さんって：いくつなんだ？」

坂田父と坂田母の馴れ初めを知っていた柴田

「：そーいや柴田：俺が小さいと時から外見変わってねえ気が：」

坂田が花束を肩に乗せて呟いた

>i19807—2575<

【第三回・四】学び舎の誘惑（前書き）

毎朝【学校】へと通う京助と悠助を見送る緊那羅^{きんなら}は【学校】という所がどんな所なのか気になっていた
そんな緊那羅^{きんなら}を学校に連れて行くという計画が持ち上がる
そして緊那羅^{きんなら}は学校へ行くことになる
ちよっと 問題あり な格好をして

【第三回・四】学び舎の誘惑

「でねーそれからねー」

悠助が楽しそうに緊那羅きんならに学校であつた出来事を話している

「悠助は本当学校が好きなんだっちゃね」

友達のこと先生のこと授業のこと……学校から帰るとまずその日にあつた出来事をヒマ子と緊那羅きんならに話すのがいつの間にか悠助にとって習慣となつていた

「京助は毎日行きたくないとかいつてるっちゃのに」

緊那羅きんならが思い出して笑つた

「僕は学校好きだよー！！　楽しいもん！！」

悠助がにこーつと笑う

「そっか……」

緊那羅きんならも笑い返す

「緊ちゃんも学校いきたいの？　京助と一緒に行けばいいのに」

悠助が言つた

「え……？」

たしかに少し『学校』というものに興味があつた

悠助にとっては楽しいところ、京助にとって行きたくないところ一体どんなところなのか

「京助に言ってみればいいのにー行きたいって」

悠助がそういったときタイミングよく京助が3馬鹿を引き連れて帰宅した

「何を俺に頼むって？」

京助がやたらでかい荷物と鞆を床に置いた

「おかえりなさいませ京様」

ヒマ子が窓から顔を覗かせ愛のおかえりなさいを言つた

「おかえりだっちゃ京助」

「おかえりー坂田たちいらっしやいー」

緊那羅きんならと悠助もおかえりを言った

「ちス悠、キンナラムちゃんもちース」

南が緊那羅きんならと悠助の頭をパスパスと軽く叩いた

「その大荷物なんだっちゃ？」

京助と3馬鹿きんならが持ってきた大きな荷物を緊那羅きんならが触る

「ああ コレは文化祭の準備道具」

坂田が大きな荷物をパシパシ叩きながら言った

「間に合いそうに無いから各自持って帰って作成」

中島がボール紙を広げ始める

「ここでやるのかよ； 奥の部屋のが広いし：奥いくべし奥」

京助が荷物を持って歩き出した

3馬鹿もその後続く

「緊那羅きんならそこにある俺の鞆持ってきてくんねえ？」

京助が廊下から叫んだ

「わかったっちゃ悠助も行くっちゃ？」

鞆を持ちながら悠助に声をかけた

「うん！」

鞆を持って悠助と手をつなぎ奥の【元・開かずの間】に向かった

京助が窓を開けて換気をしている後ろで南は何やらでかい布に印をつけている

坂田は何やらノートに書いていて中島はというとボール紙を広げ線の通りに切り離している

「お、サンキュ！そこ置いておいてくんね？」

京助が振り向き緊那羅きんならに言った

「：なんだか忙しそうだっちゃね」

いつもより馬鹿騒ぎがない3馬鹿を見て緊那羅きんならが言う

「まあラストスパートだしな：で、さっき何か俺に頼みがあるとか言っただけだったか？」

京助が鞆をガサガサさせて何かを探しながら聞いてきた

「あのねっ緊ちゃん学校行ってみたいんだって」

「ちょ：悠助；」

悠助が『ねー？』と緊那羅きんならを見上げた

「：学校？」

3馬鹿と京助が同時に顔を上げて緊那羅きんならを見た

「あ：いや：ちよつと：興味があるだけだっちゃん；」

緊那羅きんならがあわてて言った

「学校：お前一回行った事あんぞ？」

京助が立ち上がり『な？』と3馬鹿を振り返った

「初めてキンナラムちゃんと会ったのが学校」

南がメジャーを伸ばしながら言う

「え：？」

きよとんとする緊那羅きんなら

「あの時の後始末：大変だったよなあ：」

中島がしみじみ言った

「ご：ごめんだっちゃん；」

緊那羅きんならが少し後ずさりして頭を下げた

「まあ：それは置いておいて：何でまた学校いきたんだよ」

京助が鞆から取り出したペンケースで肩を叩きながら聞いた

「え：つと悠助は楽しいっていつてるのに京助は行きたくないって

いつてるっちゃ：だから：どうなのかなって：」

緊那羅きんならが小さな声で答えた

「ふくん：だとさ」

「いんじゃねえ？ 今準備期間でバタバタしてるからクラス関係な

く入り乱れてるし：一人くらいはれないって」

意見を求めた京助に中島が言った

「問題は：制服だよなあ：買うわけにも：」

坂田がシャープペンを回しながら言う

「制服ねえ：ジャージだと目立つからなあ：うくん：」

3馬鹿と京助が考え込んでしまったために緊那羅きんならは立ち尽くしている

「緊ちゃん：いけるといいね」

くいくいと服を引っ張り悠助が見上げてきた

「…いきたいっちゃけど…京助たちが困るなら私は…」

「そうだ!!」

南が大きな声を上げた

「どうした参謀長官」

坂田がシャープペンで南を指した

「去年のが!!　ホラ去年の出し物のヤツ!　あれまだ確かウチに残ってた!　ちよつくらとって来る!!」

南は立ち上がるとバタバタと玄関に向かっていった

「去年…ってまさか…」

京助が南の出で行った方向を見ている緊那羅きんならを見た

南が家に戻ると栄野家を出て行ってから20分

「…そろそろ南帰ってくるんじゃないかね?」

坂田が携帯の時計を見て言った

ヒマ子はお日様を追いかけて庭から玄関隅の辺りで日光を浴びていた
キキーイ、というブレイキの音がした

「あら…どなたでしょう?」

参拝客に見つかってはいけないと京助に言われているヒマ子は物陰に身を隠した

石段を登る足音が近づく

その足音は境内のほうではなく栄野家へとやってきた

「日本郵政公社の方でしょうか…」

ヒマ子が物陰から顔を出して足音の人物を確かめようとした

「…!!」

ヒマ子は言葉を失った

紺色のプリーツスカート、白いハイソックスに肩甲骨の辺りまで伸びた長い黒髪、胸には黄色いスカーフがゆるく締められている

「じょ…女性が…女性が…ッ!!」

思わず後ろに倒れてしまった

ゴトリと音がした

その音に気づいたらしくその女子はヒマ子の方に近づいてきた

「大丈夫？ ヒマ子さん」

聞き覚えのある声

向かって右の目の下にはほくろ

「驚いた？」

ピンクのヘアバンドを外すと長かった黒髪がなくなり…

「…南様…？」

「似合う？」

南はくるっと一回転して笑った

「よ、南ちゃん」

目が点になっている緊那羅きんならの前をプリーツスカートが横切る

「紹介しよう。喫茶『踊るすね毛』の看板ウェイトレス【アサクラ・南】ちゃんだ」

坂田が司会者のごとく女装南を紹介すると京助と中島、悠助が歓声を上げる

「南でえゝす」

南がポーズを決めると歓声が大きくなる

緊那羅はまだ目が点のままだった

「ちなみに今日は黒チェックのトランクス！」

「見せんな」

南がスカートを捲り上げ中を見せると京助が消しゴムを投げた

「えゝ：コレが正月中きんなら学がの女子制服でございます」

坂田が南の隣に立ち緊那羅きんならに向かって説明する

「紺色のスカートは膝上10センチが男のロマン！！ それに良く映える白のハイソックス！！ チラリを期待させる短めの上セーラーの中は只今冬服仕様です！ 残念！！」

坂田の説明にあわせて南がポーズを決める

「…きよ…；」

南から目をそらさず緊那羅きんならが京助の肩をたたいた

「去年の文化祭の出し物で女装喫茶やっただ俺ら」

中島が言った

「男子が女子の制服を着て女子が男子の制服を着ただけど女子の制服足りないのとサイズの関係でいくらか作っただ。コレがそんな時のヤツ」

南が付け毛を外して座った

「ちなみに店の名前の『踊るすね毛』はまさにハイソとスカートの間のすね毛をさしている」

「俺剃って来た」

京助の言葉に南が足を上げる

「南ちゃんパンツ丸見えよーイヤン」

中島が指摘すると南が

「いやーん」

といって更に足を出した

「やめいキシヨイわ」

坂田がノートで南をどついた

「ということで…キンナラムちゃん」

どつかれた頭をさほど気にもせず南が緊那羅きんならに近づいた

「明日貴方は【きんなラム子】となるのよ！」

某女子テニスアニメのたて巻きロール婦人のごとく南が緊那羅きんならを指差した

「…センスねえ名前だなあオイ…」

南に指を突きつけられたまま緊那羅きんならは呆然としている

「ちなみに漢字で書くと…：こるか」

坂田がノートに【金名 羊子】と書いた

「『ひつじこ』？」

京助が読み上げると坂田がチツチツと指を振った

「ひつじラム！！ これで【きんなラム子】だ！！」

「おおお！！！！ ナイスだ坂田！」

中島と南、京助が歓声を上げる

「緊ちゃん？」

悠助が固まったまま動かない緊那羅きんならを揺する

「っとまあ一日だけだしコレで我慢しろって」

コレと自分の着ている女子制服を指差して南が笑った

「不安なら俺も明日【アサクラ・南】になってやろうか。学校の倉庫にまだ残ってるし」

再び付け毛をして南がウィンクすると緊那羅が引きつって笑った

「いやゝゝ明日が楽しみですなあ」

坂田が言った

「：俺一緒に登校すんのか？；」

京助が焦点の定まらない目のまま引きつって笑う緊那羅きんならを見てため息をついた

「……似合うなお前」

早朝……といっても一般の通学タイムに珍しく京助の姿が玄関にあった

「……嬉しくないっちゃ……」

重い足取りで玄関から緊那羅きんなら……いや金名羊子が出てきた

悠助に編まれた三つ綱が制服とマッチしている

ヒマ子に見つかるそなた色々厄介だということと家で後にする

「……スースーするっちゃ；」

まだ日中は残暑が厳しいとはいえ朝方は結構冷える

「まあ普段は着ないからな……そのうち慣れてくるって」

「慣れたくないっちゃ；」

はあとため息をついて緊那羅きんならが項垂れる

「でも学校行きたかったならよかったじゃん。なにはともあれさ」

京助が慰め（？）の言葉をかける

信号待ちをしているとき微かに坂田の声が聞こえた

道路を挟んで向こう側の左方向から坂田が南の自転車漕いでくるのが見えた

坂田の後ろには横すわりで南：アサクラ・南が乗ってこっちに向かって手を振っている

「ヨッ！！　ご兩人ー！！」

南が叫んだ

「やかましい！！！！」

京助が叫び返す

信号が青になりやや小走りで京助と緊那羅きんならが道路を渡り坂田と南と合流する

「よっす」

坂田が自転車を両足で支えながら片手を挙げた

「早えじゃん」

京助が坂田の上げた手をたたいて言った

「はあい羊子」

南が自転車から降りて緊那羅きんならに抱きついた

それを横目で見て坂田と京助は

「はたから見ればほほえましいこの光景も実は結構しよっぱいよな
…色々と」

「実際は男同士だしな…しよっぱいよな
というて頷く

【解説しよう。しよっぱいとは男女がイチャイチャすることを甘い
というように男同士で仲良くしている様を表現する用語である】

左から坂田、南、緊那羅きんなら、京助と並んで学校に向かう

「中島は？」

ふと思ひ出したように京助が坂田に聞いた

「アイツ大道具だから先に行ってるぞ。朝一緒に一回学校来てコレ
に着替えたんだ」

南がコレとスカートの裾を持った

「あまりにも臭かったんで坂田宅でファブってきた」

南が手でファブリーズを吹きかける真似をした

「組員さん大騒ぎで面白かったぞー若の彼女がきたーとか」
南がケラケラ笑うと坂田がどついた

「ひっどーおい!!」

「ご愁傷様だな坂田……。緊那羅？」

さつきからやけに静かな緊那羅に京助が声をかける

「あ：何だっちゃ？」

名前を呼ばれて緊那羅が顔を上げた

「何か妙に静かだから：なしたん？」

京助の言葉で坂田と南も緊那羅を見る

「いや：別：うわぁッ!」

緊那羅のスカートで南が捲った

「うーん：青か」

南が顎に手を当てて呟いた

「な：何するっちゃッ!!!」

真っ赤な顔でスカートを押さえながら緊那羅が声を上げた
周りにいた何人かの男子が足を止めている

「やだもう羊子ったら京助の前だからってかわいこぶっちゃって」
えいと可愛らしくしかしかなりの力を込めて南が緊那羅を京助に
押し付ける

「のわッ!」

緊那羅を押し付けられて京助がよろけた

「：実にしよっぱい光景だ：」

坂田がそれを見て呟くと

「坂田！私も羊子と京助みたいにラブラブしたあいVV」
と南が坂田の腕に抱き付いてきた

「：やめい」

坂田が南の足を蹴った

「いつも通りのキンナラムちゃんていいんだよ」
南が緊那羅に向かって笑った

「そーそー…着る物変わったって中身変わったわけじゃねえんだし」
京助が緊那羅の肩をつかんで離しながら言う

「で、余裕が出来たら俺みたく遊んでみるとか」

南が再度坂田に抱きつく

「遊ぶな；」

そして肘鉄を食らう

「たった一日の体験入学なんだし…楽しくいこうぜ楽しく」

坂田が笑った

「格好はどうあれな。楽しく楽しく」

京助も笑う

「…楽しく…そう…だっちゃね」

つられたのか緊那羅きんならも笑った

「にしても羊子…青のパンツはいただけないわ。今日みたいに特別な日はとっておきの下着つけないと駄目なの！！ 女の子は！！」

「つきや…；」

南が緊那羅きんならのスカートを再度捲った

「…今緊那羅きんならきやあって言ったよな」

坂田が呟いた

「ああ…」

京助もそれに呟くように返す

そして意味の深そうな沈黙をする二人

「…しよっぱいな…」

京助がまた呟いた

「俺らもな…」

坂田が遠い目で返した

登校時間終了10分前を知らせるチャイムがやっぱり調子が悪そうに鳴り響いた

校内は朝からバタバタしていた

文化祭準備期間特別授業時間割ということで朝のHRもない

「じゃ俺部門の方に顔出してくるからハンコ押しておいてくれ」
玄関で上履きに履き替えながら京助が坂田にハンコを渡す

HRがないということは出欠確認もしないということになり

生徒は各自名前の書かれた小さい長方形型のハンコを教卓の上にある紙に押すことによって出席、ということになる

「了解。緊那羅きんならは京助についていくのか？」

坂田が京助のハンコをポケットにしまいながら玄関内をきよろきよろ見ている緊那羅きんならに言った

「あ…えと…」

焦った様に緊那羅きんならは京助を見た

「ついてくるならついてきていいぞ」

京助がカムカムと手招きすると緊那羅きんならが小走りで京助に駆け寄る

「…しよっぱいよなあ…」

南が腰に手を当てて口の端で笑った

「お前らもな」

京助が坂田と南を指差して同じく口の端で笑うと坂田が南を押し離れた

「どこに行くんだっちゃ？」

生徒で賑わう廊下を歩く京助に緊那羅きんならが聞いた

「視聴覚室、一応俺ゲーム担当だから」

階段を上り三階にあがる

廊下の壁のあちこちに出店や出し物のポスターが貼られていた

「楽しそうだっちゃね京助」

緊那羅きんならが京助を見て言った

「そうか？まあ…授業やってるよりは楽しいわな。俺さ当日ってよりも準備期間が好きなんだよな。学年とか関係なくワイワイやるのがさ」

京助が笑いながら話すと緊那羅きんならも笑った

「お！！ 彼女か？ 京助」

ダンボール箱を抱えた男子生徒が声をかけてきた

「ちやうちやう；」

京助が手を振って否定すると男子生徒は『照れるなよ』と言い去っていく

視聴覚室に着くまでにそんなことを男子生徒女子生徒問わず何回も言われた

「：私はここで待ってるっちゃ」

視聴覚室のドアに手をかけた京助に緊那羅きんならが言った

「？なしたよ」

苦笑いを浮かべる緊那羅きんならに京助が聞く

「また言われたら京助困るっちゃ；」

「また：ってああ；彼女ってヤツか：別にどうでもいいんだけどな俺は。でもま：入りたくないならちょこっと待っててくれ。すぐ来るから」

京助はそういうと教室内に入り戸を閉めた

「よっス」

カーテンを閉めて真っ暗にした視聴覚室のでっかいスクリーンにはリズムを取りながら踊るウサ耳と猫耳のキャラクターが映っている京助はなにやら調整をしている部門員に近づいた

「はよっス先輩。他のヤツらは？」

「でっかいアケコン借りれないか最終交渉に行ったりクラスの方行ったりしてる：俺もコレの音量調節したらクラスの方行くつもりだ」先輩と呼ばれた男子生徒がつまみを回すと視聴覚室内に音楽が流れ始める

「いい感じっスか先輩」

京助が机の上にある9個のボタンが並んだコントローラーの真ん中の赤いボタンを押した
ジャン！

という音とともに画面が切り替わる

「ためしにお前ちょっとやってみろ」

先輩と呼ばれた男子生徒が京助に言った

「んじゃま：軽くノーマルモードでレッツポップンー！」

京助は鞆を横に置くと椅子に座り巨大なスクリーンと向き合ったその時

「杉山ー！ー！！！！！」

という叫び声とも聞き取れる声と何かが派手にぶちまけられた音が廊下から聞こえ先輩と呼ばれた男子生徒が電源を切った

「…何だ…？」

静かになった視聴覚室内に廊下の騒ぎ声が微かに流れ込んでくる

「…何スかね？」

京助が立ち上がり戸に近づく

戸に手をかけて京助は何かを思い出して勢いよく戸を開けた

散乱している資料と思われる紙やノート類

左方向を見たり指差している生徒達

そしてスカートの後ろを押さえ震えている緊那羅きんならこと金名羊子

「…しよっぱなからやっちゃったみたいですね…」

京助が生徒達と同じく左方向を見ると友達にガクガクゆすられながらも白目をむいている男子生徒の姿があった

「きよ…」

緊那羅きんならが京助を見つけた

「…何やってんだ；」

京助が緊那羅の手を引っ張って視聴覚室に入れる

「だってっ！！ アイツ私の…ッ！！」

引き入れるなり緊那羅が赤い顔で大声を上げそして

「…お：尻撫でた…っちゃ…っ」

続きを小声で言った

京助がコケた

「だはははははは！ー！！！」

付け毛を外してスカートのまま芝生に胡坐をかいた南の笑い声が校

庭横の倉庫裏から高らかに響いた

「なんつーか：ご愁傷様だよなあ：ソイツ」

中島が食べ終わったパンの袋を丸めながら言った

「触ったのが男の尻で？　しかも蹴りくらって吹っ飛んで？　…ブクスー」

坂田が妙な噴出し笑いをして口から何か出した

「汚ねッ；」

中島が声を上げると坂田が口をぬぐいながらまた笑い始める

「だってッ；…うああ…：思いだしたら鳥肌立ってきたっちゃ…；…；

」
緊那羅^{きんなら}が腕をさすり泣きそうな顔をする

「後処理はどうしたんよ？」

ヒーヒーいいながら南が広げてあるお菓子を摘んだ

「知らん；俺らずっと視聴覚室に隠れてたし；」

京助が箸をくわえて空になった弁当箱の蓋を閉めた

「結構騒いでたよな…：俺ソイツが白目むいて人間タンカで運ばれていくの見たぞ」

【解説しよう。人間タンカとは4～6人の人間がそれぞれ頭、足、そして胴を持ち運ぶという人肌MAXの運び方のことをいうのである】

「羊子もうお嫁にいけないな」

坂田が寝そべりながらからかう

「京助にもらってもらえ」

中島が後追いからかうと京助が箸を中島の額に刺した

「俺なんか朝からスカート捲られまくりのケツ触られまくりのなんだけどな。いやぁアイドルはツライねえ」

南が困ったような顔をしてヤレヤレと首を振った

「お前は自分から見せてるんじゃないやねえか；」

京助が突っ込んだ

「サービスサービスう」

南が足を上げると坂田と中島、京助がそろって南をどついた

「昼から俺ヒマになるから学校内案内してやるからさ」

京助が今だ腕をさすっている緊那羅きんならに言った

「俺らんとコに遊びに来てもいいし？ 俺と中島は演劇にいるし坂田は放送にいるし：いなかったらクラスの方にいると思うからさ。こいよ」

そういつて南が付け毛をつけた

「あ：うん」

そろそろ昼休みも終わるということで一同立ち上がり校舎に向かう

「んじゃ帰りにな」

3馬鹿と別れて京助と緊那羅きんならは歩き出した

「さあてと：どっからいきますかねえ：」

この先は廊下と階段で3つ股にわかれている

「なあどこに：緊那羅？」

どっちに行きたいか聞こうと緊那羅きんならを振り返ると緊那羅きんならが左側の廊下を黙って見ていた「そっち渡り廊下だぞ？ 行くのか？」

「：音：」

京助の声が聞こえたのか聞こえてないのか緊那羅きんならはただ黙って渡り廊下の方向を見ている

「あ、おい緊那羅きんなら！：」

緊那羅きんならが小走りで駆け出した

京助も慌てて後を追う

「どうしたんだよッ；」

追いついて京助は緊那羅きんならの手をつかんだ

「音が：聞こえるんだっちゃ」

緊那羅きんならが言った

「おとお？；何の；」

つかんだ手を離し京助は耳を濟ませたが周りの生徒の話し声とかしか聞こえなかった

「泣きそうな音が…笛の音…」

辺りを見回して緊那羅きんならが笛の音を探す

「笛…って縦笛か？ それとも吹奏楽か…だから待っててば！！
オイっ；」

再び駆け出した緊那羅きんならを再び京助は追いかけた

握り締めていたフルートに女子生徒は息を吹き込んだ

非常階段の下で一人楽譜も見ずただ吹く

一通り吹くと口を離し空を見上げ溜息をつきそしてまたフルートに口をつけ吹き始める

「吹奏楽部員だな」

京助が言った

「…吹奏楽…？ …あの子の音泣いてるっちゃ…」

緊那羅きんならが悲しそうな顔で女子生徒を見る

「音が泣くのか？」

京助が聞いた

「…泣くっちゃ」

ふっと笑って緊那羅きんならは女子生徒に向かい歩き出した

「笛、好きだっちゃ？」 「きゃあ！！！」

緊那羅きんならに突然声をかけられて女子生徒は小さく飛び上がり悲鳴らしき声を出した

「あ…ごめんだっちゃ；」

驚いた顔で緊那羅きんならをじっと見る女子生徒に緊那羅きんならが謝った

「あ…えと笛…が…」

「笛…？」

緊那羅きんならが女子生徒の手にあるフルートを指差すと女子生徒はクスッと笑って

「これはフルートっていうの」

そういつてフルートを見せた

「フルート？」

「楽器だよ楽器。外国の」

物珍しそうにフルートをまじまじと見る緊那羅きんならに京助が後ろから言った

「…えと…君は…フルート…？　が好きだっちゃ？」

「宮津さんだとき」

京助が女子生徒の名札を見て緊那羅きんならに名前を教えた

「宮津さん…私はきんなら…む子だっちゃ；」

緊那羅きんならが少し口ごもりながら名前を言った

「きんなラム子さん？　…転校生？」

「まあそんなところ」

宮津の質問に京助が答えた

「そっか…見たことないから…私はフルートっていうか音楽が好きなの。エレクトーンも小さいころからやっているし…でも…」

宮津が俯いてフルートを握り締めた

「…私ね…決めないといけないの」

「決める…って？」

悲しそうにフルートを見つめる宮津に緊那羅きんならが聞いた

「進路だろ」

京助が言った

「三年生だろたしか」

京助の言葉に宮津が頷いた

「進路？」

「えーっとな…将来何になるか具体的に決める…高校どこ行くかとか？　いわばこれから何をしたいかっていうの三年になったら決めねえと駄目なんだ」

緊那羅きんならが聞くと京助が考えながら答えた

「…音楽一本で行くか…それとも音楽をあきらめて他に進むか…それで昨日もお父さんと喧嘩しちゃって…。あ、ごめん；私ったら…」

本当…ごめんね…」

泣きそうな笑顔で京助と緊那羅きんならに謝ると宮津は再び俯いた

「こんなこと聞いても嫌になるだけなのにね…私…」

宮津の声は震えていた

「…その笛…ちよつと貸してくれないっちゃ？」

「え…？」

緊那羅きんならが宮津に言った

「お前吹けるのか？；」

京助が緊那羅きんならに聞く

宮津からフルートを受け取ると緊那羅きんならはフルートを優しく撫でた

「…宮津さんが好きなんだっちゃね…だから泣いたんだっちゃ…」

緊那羅きんならがフルートに口をつけ息を吹き込むと優しい音色が風に乗った
何という曲なのかはわからない

でも優しく懐かしく温かい…

京助は前に縁側で緊那羅きんならが歌っていた歌を思い出していた

「…きれいな…」

宮津が呟いた

緊那羅きんならがフルートから口を離し宮津に笑いかける

「宮津さんに笑ってほしいって…この笛の気持ちの音だっちゃ…」

「え…？」

緊那羅きんならからフルートを受け取ると宮津はフルートをじっと見た

「ずっと一緒だったんだっちゃね。この笛とは…」

緊那羅きんならの言葉に宮津が顔を上げて緊那羅きんならを見、泣き出しそうな顔をした

「…そう…一年のときからずっと…コンクールも吹奏楽祭も行事も…
…ずっと一緒に…私…音楽やめたくない…」

フルートを握り締めた手を額につけて宮津が泣き出した

「この文化祭で終わりたいなんて私…っ…」

「やめなきゃいいじゃん」

宮津の言葉に京助がさらりと返した

「好きなこと やらんでどうする いつするの」

京助が腰に手を当てて5・7・5で即席俳句を詠んだ

「あ、最後と最初逆でも可。：好きなら続ければいいじゃん」

「簡単に言わないで！！」

京助に宮津が怒鳴った

「私だって続けられるものなら続けたい！ でもどうしようもないんだよ！！」

「続けたいなら続けろよ！！ 好きなんだろ？ すっげえ好きなんだろ！！？ 自分の好きな事なんだろ！！？ 父さん母さんが何なんだよ！！ どうしようもないって何だよ！！ そんなん逃げてるだけじゃん！ 泣くだけ好きなら続ければいいだろ！？」

むきになって怒鳴り返す京助を緊那羅きんならが押しのけて宮津と向き合った

「宮津さんは：」

真剣な顔で宮津を見る

「何を思ってて音を出すっちゃ？」

「え：？」

緊那羅きんならが宮津に聞いた

「何をって：？」

宮津が聞いた

「何を思っててその笛と一緒に奏でてきたっちゃ？」

緊那羅きんならが宮津の持っているフルートを撫でた

「私：」

宮津が答えに困って俯く

「私はさっき京助たちを思ってて吹いたっちゃ」

緊那羅きんならが笑う

「俺かよ；」

そこに京助が突っ込む

「音は奏でる人の思いをそのまま届けるんだっちゃ。さっき：さっき宮津さんの音は泣いていたっちゃ：そして笛も。宮津さんが音楽好きなようにこの笛も宮津さんが好きなんだっちゃ」

宮津の手からそつとフルートを抜き取ると緊那羅きんならはフルートを額につけた

「：思いを乗せてない音なんてないんだっちゃん。悲しい気持ちで奏でれば悲しい気持ち伝わるし、嬉しい気持ちで奏でればそれが伝わるんだっちゃん。：私は進路：？ってよくわからないっちゃんけど：」
緊那羅きんならがフルートを優しい目で見ると

「：好きなことはやめられないってことはわかるっちゃん。たとえば何があっても」

宮津が顔を上げると緊那羅きんならが微笑んだ

「そーそー：結局はそうなるんだからやめるとか考えるのは時間の無駄なんだよな」

京助が溜息混じりに言う

「だから俺はやりたいことは、好きなことはやる！！」

「：みんながみんな京助みたいな性格じゃないんだっちゃん；」

宮津に指を突きつけて主張する京助に緊那羅きんならが突っ込んだ

「：やりたいことは：やる：」

宮津が京助の言葉を繰り返す

「：宮津さんのやりたいことは？」

緊那羅きんならが宮津に聞くと宮津が手を伸ばした

「：吹きたい：音楽やりたい：私：」

宮津が真っ直ぐ緊那羅きんならを見て言った

「やっちゃんえ」

京助が言うと緊那羅が宮津にフルートを渡した

「うん！ やっちゃん！！」

フルートを受け取り宮津が満面の笑みで京助に返事をする緊那羅きんなら、
京助も笑った

「そうだよね：好きなんだもの：好きで好きで。だから悩んでんだもんね：やめられないから：」

宮津がフルートを口にあて息を吹き込んだ

「：なあ」

京助が緊那羅きんならに声をかけた

「今この音：泣いてるんか？」

楽しそうにフルートを吹き続ける宮津を見て緊那羅きんならは

「ううん」

と嬉しそうに笑った

「進路ねえ…」

付け毛を外してでも制服は女子制服のままで南が自転車をおしなが
ら言った

「坂田は組長だしな」

「決めんなよ；」

中島が坂田の肩を叩くと坂田がその手を叩いた

「まあ好きなことはやめられないってのはあるよな」

中島が叩かれた手を振りながら言った

「女装とか？」

「いやコレ趣味ちゃうし」

京助が南を見ると南が手を振って否定する

「京助たちは進路：あるんだっちゃ？」

緊那羅きんならの一言に京助と3馬鹿が顔を見合わせた

「俺ら？ 中島がきよんととして聞いた

「保育所のおときは漁師だったっけかなあ」

坂田が言った

「海の男ですか組長！ うみんちゅ（海人）ですか組長！！」

南が笑う

「おうよ！ 獲るぜ獲るぜ！ 大漁！！」

「組長！ ソレどじょうすくいです！！ 間違いです！！」

坂田がどじょうすくいの格好をすると京助が突っ込み全員が笑う

「で、学校の感想は？」

南が緊那羅きんならに聞いた

「感想：だっちゃ？；」

緊那羅きんならが考え込む

「特にありませんはナシですぜイ？」

中島が緊那羅きんならの肩に手を置いて言う

「学校は…」

緊那羅きんならが口を開いた

「学校は？」

坂田が聞き返す

「学校は学校だったっちゃ」

緊那羅きんならの答えに京助と3馬鹿が大げさにコケるリアクションをした

「んだよソレ；」

苦笑いで京助が緊那羅きんならを軽く叩いた

「今度は授業受けてみるか？ もち！！ 金名羊子で」

「わあっ！！；」

南が笑いながら緊那羅きんならのスカートを捲る

「…あ、青」

京助、中島、坂田がハモって呟いた

>i19990—2575<

【第四回】 わき道・寄り道・帰り道（前書き）

夕飯のおつかいを頼まれた悠助が帰り道に出会ったのはちよつと変わった話し方をする眠そうな少年

誰かを探しているらしく悠助と一緒に探すことに
少年が探していた人物は…

【第四回】わき道・寄り道・帰り道

いきなり降り出した雨の中京助は走ることもなく家に続く坂道を濡れながら歩いていた

「おかえり〜京助〜」

その声に坂の上を見ると鮮やかなオレンジ色の傘をさして悠助が小走りでやってきた

「コケるぞ〜」

笑いながら腰に抱きついてきた悠助を受け止めた

「京助ずぶぬれ〜風邪ひいちゃうよ?」

黄緑色のカッパを着た悠助が京助を見上げた

「引かねえよ。…どっかいくのか?」

「僕お買い物いくんだ」

「買い物?」

京助が聞くと悠助がカッパのポケットから紙切れを取り出して京助に見せた

【とりのものにく 500グラム】

紙切れにはそう書いてあった

「一人で大丈夫か?」

京助が濡れた前髪をかきあげながら聞くと悠助は紙切れをポケットにしまいながら少し膨れて

「大丈夫だよう一年生だもん。ついてきたら怒るからね!」

と言った

「まったくもう…緊ちゃんもけんちゃんも京助もハルミママも心配性なんだから〜」

「けんちゃ…乾闥婆けんだつばいるのか!?!」

乾闥婆は悠助に『けんちゃん』と呼ばれている

「うんいるよ? だから僕がお買い物行くの」

「乾闥婆と鶏肉の繋がりがわかんねえ…」

どう考えても【乾闥婆^{けんだつば}Ⅱ鶏肉】式がなりたたず京助は坂の上の我が家を見る

「じゃあ僕もういくね〜」

オレンジ色の傘が京助の横を通り過ぎる

「気をつけろよー」

オレンジ色の傘に向かって京助が声をかけると悠助が振り返り手を振ってやや小走りで坂を下っていった

悠助の傘が見えなくなると京助は家に向かって歩き出した

「…何しにきてんだ…？」

乾闥婆^{けんだつば}が何しにきているのか気になったのか歩く速度を少し上げ石段は一段飛ばして登って玄関前まで来た

「ただいま〜と…」

玄関を開けると夕飯の支度なのか家の中に籠っていたいい匂いが外へと流れ出る

京助の声を聞きつけたのかヒマ子が庭から鉢をゴトゴトいわせながらやってきた

「まあ！！ 京様！ ずぶぬれじゃございませんか！ いけませんわ！！ お風邪を召してしまいますわ！！」

ヒマ子が声を荒げて言うのとパタパタという足音と共に緊那羅^{きんなら}が出てきた

悠助にやられたのか今日もポニーテールが三つ編みだった

「水の滴るいい男ですわ京様」

「…緊那羅^{きんなら}タオルくれ；」

ヒマ子が京助にそっと抱きつくとき京助は顔を引きつらせる

「わかったっちゃ」

その様子を見て緊那羅^{きんなら}が笑いながらタオルを取りに向かった

「おかえりなさい」

ヒマ子を引き剥がしていた京助の耳に聞こえた一言
顔を上げると京助が止まった

「：なんつー：格好してんだお前：；」

声の主は乾闥婆けんたっぱだった

「こんな格好ですけど？」

【なんつー格好】、京助が見た乾闥婆はエプロンをしいつもの帽子の代わりに手ぬぐいで姐さん巻きをした格好だった

「：一体何してんだよ：；」

「この格好で料理以外何するんですか」

乾闥婆けんたっぱがいつもの口調で京助に答えた

「迦楼羅かるらが：」

「迦楼羅かるらが竜田揚げが食べたいって言ってるらしいんだっちゃ」

緊那羅きんならがタオルを持って話しに入ってきた

「何があったのかわかりませんが：言い出したらきかないもので」

乾闥婆けんたっぱが溜息をついた

「それでハルミママさんに作り方教えてもらいにきてるんだっちゃ」

緊那羅きんならが京助にタオルを渡すとヒマ子から恋敵的視線を向けられた

「【天】にはないものですからね。まったく：」

妙にエプロン姿が似合う乾闥婆けんたっぱを見て京助が口の端で笑うと乾闥婆けんたっぱ

に睨まれ顔をそらした

「それで悠助が肉買いに行ったのか」

タオルで髪をワシワシ拭きつつ京助が言うとき緊那羅きんならが頷いた

「ついてくっていったんだっちゃ だけど：」

「来るなって言われたんだろ？ 俺も言われたし：さっきそこで」

京助はだいぶ水気の取れた頭を振って拭いたタオルを首にかけ家にかかる

「まあ京助よりしっかりしてますし大丈夫でしょう」

乾闥婆けんたっぱがさりとった

「そうだっちゃね：遅いって思ったら迎えに行けばいいっちゃね」

「お前らな：」

乾闥婆けんたっぱの言葉に同意したように話す緊那羅きんなら

「しっかりしていなくとも私は京様を愛しておりますわ：なんちゃ

って：キャー！！！！ 私ったらッ！！」

ヒマ子が一人盛り上がっているのを懸命に見ない聞かないふりをして京助は部屋へと早歩きで向かった

栄野家から一番近くの【正月スーパー】までは歩いて大体30分くらいかかる

悠助は傘を回して傘の端っこについた雨の水滴を飛ばしながら歩いていた

途中何度か車に水をかけられそうになりその度に傘で防御していたためにカッパも髪も微妙に濡れている

雨が降っているせいかいつもより人通りがない道を悠助はてくてく歩く

「…やっぱり誰かと一緒に来ればよかったかなあ…」

雨の音と自分の足音しか聞こえなく悠助は少し寂しくなったらしい

「…大丈夫：僕は一年生になったんだもん…」

自分に言い聞かせると

「よしっ！！」

と気合を入れて大股で歩き出す

「気をつけて帰るんだよ？」

スーパーで買い物を済ませレジのおばさんからチロルチョコを5つもらって悠助は傘を広げた

片田舎で比較的小さな正月町は町全体が知り合いみたいなものでよその子だろうがどこの子だろうがお構いなしに可愛がってくれる人が多い

特に悠助くらいの子どもは中高年の年齢層にはやけに可愛がられていた

悠助はもらったチロルチョコをひとつ口に含むと家への道をまたてくてくと歩き出した

「ハルミママほめてくれるかなあ…」

帰宅したときの母ハルミや京助たちの反応を想像して悠助が笑顔になる

「早く帰ろっ」

水溜りをジャンプして越えると悠助は早歩きで歩き出した

「…の」

雨の音に混じって声が聞こえ悠助は足を止めて振り返った

しかしそこには誰もいなく雨でばやけた景色が見えるだけだった

「…気のせいかな…うん…そうだよね…」

ぎゅっと傘の柄の部分を握り締め再び歩き出す

「…のって」

今度ははつきり声が聞こえて悠助の顔が泣きそうな顔になる

「…っ…」

おそろおそろ振り返ってもやっぱり誰もいなかった

「…や…だよう…」

悠助の目尻に涙がたまってきた

「やだよう…きょうすけえ…」

前を向きなおしたら何かありそうで悠助はその場から動けずベソをかきだした

「…こわいよう…」

傘で視界をさえぎって何も見えないようにして泣き出すとパシャっという音がした

「…のさ…ちよっといい？」

頭の上から声がした

涙でばやけてよく見えない目を拭うと足が見えた

「…わがらせたなら…謝る」

声の主がしゃがんで悠助の傘の中を覗き込んできた

「…めんね」

薄朱の髪に黒い布を微妙な巻き方で頭に巻いた少年（？）が眠そうな目で悠助を見ている

「…誰…？」

目をごしごしこすって悠助が聞くと薄朱の髪の少年は自分の服の袖で悠助の鼻水を拭いた

「…いたか」

「いたか…?」

ボソツと言った薄朱髪の少年の言葉を悠助が繰り返すと少年がコクリと頷いた

「いたか…さん？」

悠助が言い直すとまた少年が頷いた

「…いたか…」

再びまた悠助が口に出すとまたまた少年が頷く

「…タカちゃんってよんでいい？」

悠助が聞くと【たかちゃん】はまた頷いた

「…僕に何か用？」

「…よつと…一発叩いてくれない？」

タカちゃんが自分の顔を指差して言った

「…きおいよく、ばしっと」

今度は手をぶんぶん振って叩く真似をする

「…え？　なんで…?」

いきなり自分を叩けといってきたタカちゃんにきよんととして悠助が聞いた

「ちやう…?」

「…ちやうから」

さつきからタカちゃんの話し方はどこかおかしく喋り出しの最初の一言が聞き取れないくらい小さく悠助も首をかしげる

「…たら駄目なんだよ僕は…」

悠助が困った様にタカちゃんを見つめる

「…にかく…叩いてくれない？」

タカちゃんがまた手をブンブン振って叩く真似をする

「う…ん…」

悠助は躊躇いがちに頷くときゅっと目を瞑って手を思い切り振り上

げた

「痛かった？ 痛かった？」

悠助に思い切り叩かれた右頬をさすってタカちゃんがコクリと頷いた

「…も覚めたから」

心配そうに何度も聞いてくる悠助にタカちゃんが笑顔を返した

「…くが頼んだんだから気にしないで」

「うわ」

ひょいと悠助を抱き上げタカちゃんは

「…りがと」

と言った

「…まえは？」

「え？」

最初の出だしの一言がやはり聞き取れず悠助が首をかしげる

「…みの名前。何？」

どうやら悠助の名前を知りたいらしいということがなんとなくわかった

悠助が自分を『僕？』と指差しながらタカちゃんを見るとコクリと

頷いた

「僕は栄野悠助だよ」

悠助がにっこり笑って名前を言うのとタカちゃんが一瞬止まって何か

考え

「…みが？ …いの悠助？」

少し驚いたように聞いた

「？ うんそうだよ？ 悠助だよ？」

タカちゃんの微妙な表情の変化に悠助が首をかしげると傘が『ゴッ

とタカちゃんに当たった

タカちゃんが悠助を下におろして傘の刺さった額を撫でる

「…つか…じゃあこの辺にいるのかな」

額を撫でながらタカちゃんがボソッと呟いた

「タカちゃん誰か探してるの？」

悠助がタカちゃんを見上げ聞く

「…ん、僕の相方みたいなものなんだけどね…いきんよく出かけるから」

タカちゃんが悠助の傘をつつきながら言った

「この辺に来てるの？」

悠助が聞くとタカちゃんがコクリと頷いて

「…いの兄弟がどうのって言ってたし…みが栄野なら君の近くにいると思う」

タカちゃんが傘の皮の部分を摘んで引っ張る

「僕は栄野悠助だけ…」

悠助が周りをぐるっと見渡すと傘がタカちゃんに何度か当たった

「僕の近くにはタカちゃんしかいないみたいだよ？」

傘が当たった腹部をさすりながらタカちゃんも周りを見る

「…んそうみたいだね」

納得してタカちゃんはコクリと頷き悠助を見た

「…こいったんだろ」

フウと溜息をついてタカちゃんが再び傘をつついた

「…僕も…僕も一緒に探してあげようか？」

悠助が顔を上げると再び傘がタカちゃんに当たった

「…いの？ ソレ」

タカちゃんが悠助の持っていたスーパーの袋を指差して言うとう悠助は少し考えて

「…よくないけど…けど…タカちゃん困ってるからきつとハルミママも京助もけんちゃんも繁ちゃんも許してくれると思うんだ…だから大丈夫！」

悠助が満面の笑みをタカちゃんに向けた

「…りがと悠助」

タカちゃんも笑顔で悠助に言った

「…の前に」

タカちゃんがしゃがんで悠助と目線を合わせると少し驚いた悠助の

傘がタカちゃんのドタマに『ゴッ』と刺さった

「…の前にまた叩いてもらおうとおもったんだけど」

タカちゃんが傘の刺さった箇所を撫でると悠助も一緒に撫でた

「…まのでもいいや」

コクリと頷いて何か納得しているタカちゃんの頭を撫でながら悠助が首をかしげると

また傘がタカちゃんに当たった

オレンジ色の傘と黄緑色のカップが少し小降りになってきた雨の中を並んで歩いていた

「もう濡れているけどこれ以上濡れないように」

と悠助がタカちゃんに傘を貸した

借りた傘をタカちゃんは指でつついたり皮を引っ張ったりしている

「タカちゃんの探している人ってどんな人？」

傘の皮をはじいて水滴を飛ばしていたタカちゃんに悠助が聞いた

「…っと…背はこんくらい」

タカちゃんが自分の額辺りで『こんくらい』と高さを表すジェスチャーをする

「…みはこんくらい」

次に悠助の髪を指差した

「…とは…」

「あとは？」

探しているという人物の特徴を思い出そうとしているタカちゃんを見て悠助が次の言葉を待つ

「…もいつかないや」

タカちゃんはハハッと笑って欠伸をした

「…るいけどまた一発お願いしていい？」

タカちゃんがしゃがむと悠助が目を瞑って思い切り叩く
パチーン！！

という音をさせてタカちゃんを叩いたのはコレで6回目

「…ん痛い」

「ごめんねごめんね」

叩かれた頬をさすりながらタカちゃんが言うのと悠助が謝る

こんなことがタカちゃんが叩いてくれというたびに繰り返されていた

「…うすけ手痛くない？」

自分の頬をさすりながらタカちゃんが傘を肩に挟み空いた手で悠助の手をとった

「…いきり叩いてるから手痛いでしょ」

そういつて悠助の掌を撫でる

「ううん？ 大丈夫だよ？」

悠助が首を振って笑った

「…やくみつけないとなあ悠助の手が真っ赤になる…」

悠助の掌を撫でながらタカちゃんがボソッと呟く

「二人で探せばきつと見つかるよ！！ 大丈夫！！ あ、そうだ！

！ 公園とかにいるかもしれない！！ あとは…」

そんなタカちゃんを励まそうとしたのか悠助が大きな声でいそうな所を言う

「とにかく探そうよ！ 見つかるよ！ 二人だもん！！ 一人より二人のほうが早いからって京助よくいつてるもん！！ 大丈夫だよ！！」

「…ようすけ…」

悠助が必死につなげている励ましの言葉の中にあつた『京助』の名前にタカちゃんが微妙に反応した

「うん！ 僕のお兄ちゃん」

悠助が笑う

「あとねーハルミママと緊ちゃんがいてねー…あ、そうそうヒマ子さんという向日葵もいるんだ！！ あとコマとイヌも！！」

悠助が家族の話話をするとタカちゃんは目を細めて笑い悠助の頭を撫でた

「…っぱり…君なんだね」

「…?」

タカちゃんが小さく言った一言に悠助は首をかしげる

「…んでもないよ」

フツと笑ってタカちゃんがまた欠伸をした

「…めん…またお願い」

タカちゃんが人差し指を立てて言うとうと悠助がまた目を瞑って手を振り上げる

パチーン!!!

という音が再び響く

そして頬をさすりながらタカちゃんが悠助を撫でた

「…やまらなくていいから」

叩くたびに謝る悠助が謝る前に止めて笑った

降っているか降っていないかがわからなくなってきた雨の雲間から夕焼けが現れ辺りをほんのり赤く染めていく

「タカちゃんの髪赤くてきれいだね」

元々薄朱色のタカちゃんの髪に夕焼けのほんのり赤が加わって鮮やかさを増した髪を悠助が触って笑った

「…かくて綺麗…?」

自分の髪を引っ張り目の前に持ってきてタカちゃんが呟く

「うん!!! 綺麗!!!」

まじまじと自分の髪を見ているタカちゃんに悠助が笑顔で言う

「…うすけは赤が好き?」

タカちゃんが聞くと悠助は笑顔のまま頷いた

タカちゃんが嬉しそうに笑った

「…うすけなら…好きでいてくれるかもしれない僕を」

「? 僕タカちゃん好きだよ?」

小さく言ったタカちゃんの言葉に悠助が笑顔のまま言った

「…ようすけと僕どっち好き?」

タカちゃんが笑いながら自分を指差して聞いた

「え? うーん…比べられないよ。僕はみんな同じくらい好きだも

ん。京助もタカちゃんも緊ちゃんもヒマ子さんも：（略）」

指を折りながら次々に名前をあげていく悠助から顔をそらしほんのり赤く染まった辺りを見たタカちゃんの顔は少し険しかった

チャーンチャンチャンチャチャチャラチャチャララ…♪

いきなり町中に鳴り響いた『夕焼け小焼け』の音楽にタカちゃんの肩がビクッとなった

「あ、愛の鐘だ…もう5時なんだ…」

「…いの鐘？　びっくりした…」

少しノイズが入って聞こえる『夕焼け小焼け』の音楽

【愛の鐘】とは児童生徒の帰宅時間の目安になると正月町の教育委員会が実行しているもので秋～春は午後5時、夏は午後6時になると毎日流れる音楽のことだが突然鳴り響くからいくら聞きなれていてもボーッとしていたときはかなりビビらされる迷惑なか役に立っているんだかよくわからないモノだ

「…んなの？　コレ」

タカちゃんが悠助に聞いた

「【愛の鐘】って言ってねコレが鳴ったら家に帰らないといけないんだ…でも…」

悠助がチラッとタカちゃんを見る

「…大丈夫だよ！！　タカちゃんの探してる人見つけるから！　ちやんと見つけてから帰るから！　僕ちゃんと謝るから許してくれるから大丈夫だからね？」

『大丈夫』と連呼して悠助が言った

「…うすけ…」

タカちゃんが悠助をじっと見た

「…うすけ…足踏んでる…」

「え？」

タカちゃんの指差した足元を見ると力説のあまり前にちよっと前進

していたらしい悠助の靴がタカちゃんの足の上にあった

「お…【愛の鐘】」

ノイズ混じりで聞こえてきた【愛の鐘】を聞きながら京助が春雨サラダに手を伸ばすと

ペシッという音と共に額に痛みを感じた

「やめてください。まったく行儀が悪い」

ペシペシペシと同じところを乾闥婆けんだっぽがしゃもじで連打する

「一回叩きやいいだろが！！ 連打するな連打！！」

京助がしゃもじを払って言い返した

「一回言っても聞かなかったじゃないですか。コレで四回目ですよ？ やっぱりコノ頭は空ですか」

乾闥婆けんだっぽがピシヤリと言う

「けんちゃんの言う通りよ京助」

母ハルミも京助の頭を軽く小突いて冷蔵庫を開け何かを探し始めた
「…んだよ二人して」

二人に言われて京助は椅子に腰掛けて分が悪そうな顔で頬に手をつく

「腹減ってるんだから少しくらいいいじゃんか」

京助がブツブツ文句を言った

「何も手伝わないで文句だけ一丁前に言わないでください」

乾闥婆けんだっぽがにつこり笑いながら振り返った

「助かったわ…ありがとうねけんちゃん」

母ハルミがレタスをはがしながら乾闥婆にお礼を言った

「いえ僕が無理を言って教えてもらうんですからこれくらいは」

乾闥婆けんだっぽが頭の姐さん巻きを外しながら母ハルミにも笑顔を向ける
同じように見えるがさつき京助に向けたものとはどこかが違う

「もう少しで晩御飯だから我慢しなさい」

「ヘイヘイ…」

母ハルミの言葉に京助が悪たれた返事をする
と
スパーン！！！！

ペシッ！！

「返事はハイ！　と一回ッ！！」

気持ちいいくらい同時に京助はこの言葉と母ハルミからはレタスの葉、乾闥婆⁸けんだっぱ）からはしゃもじスイングをそれぞれ後頭部と顔面にくらった

「…にしても悠ちゃん遅いわね…」

母ハルミが壁に画鋏で止めてある時計に目をやった

「…しゃーねーなあ…；　　いっちょ怒られに行きますか；」

京助がレタスの葉を啞えて椅子から立ち上がった

「僕も行きます」

乾闥婆^{けんだっぱ}がエプロンを外し捲くっていた袖を下ろした

辺りはもう結構薄暗くなっていた

顔面に投げつけられたレタスに乾闥婆^{けんだっぱ}にチョップをくらいながらも

根性で春雨サラダを巻いて口に詰めた京助は玄関に向かった

「ほら！！　汁たれてるじゃないですか！！　汚いですよまったく

…垂れ流すのは馬鹿だけにしてください」

「ふふへーッ！！　（うるせー！！）」

口に突っ込んだものの端から汁をたらして歩く京助に乾闥婆^{けんだっぱ}が声をあげる

ギャーギャー騒ぎながら玄関まで来ると緊那羅^{きんなら}がもうサンダルを履いて待っていた

「…京助口の端に春雨ついてるっちゃ；」

緊那羅^{きんなら}に言われて手の甲で口を拭うと床に春雨が一本落ちた

「汚い」

乾闥婆⁸けんだっぱ）のチョップが京助の後頭部にのめりこむのを見て緊那羅^{きんなら}が苦笑いをする

「バコバコ叩くなっつーのッ！！；」

京助が後頭部を抑えつつ怒鳴る

「ほら京助；　早く悠助探しに行かないと…暗くなってきたっちゃ」
ギャーギャー乾闥婆^{けんだっぱ}に抗議している京助に緊那羅^{きんなら}が声をかけ宥めて

いると乾闥婆けんだつばがふいに玄関の引き戸をガラリと開けた

「…何してんだ？」

突然の乾闥婆けんだつばの行動に京助と緊那羅きんならがきよとんとする

「…まったく…意地っ張りなんですから…」

乾闥婆けんだつばが溜息を吐きながら言った一言に緊那羅きんならと京助は顔を見合わせて首をかしげた

「…ほら、いきますよ」

きよとんとしている二人を振り返ると乾闥婆けんだつばは外に出た

「公園にいくには本当はこの道をずーっと真っ直ぐ行かないといけないんだけど僕こうちゃんに近道教えてもらったんだ」

雨が上がり不要になった傘を畳んで悠助がタカちゃんの手を引っ張ってやや早歩きで道を進む

「こっちこっち」

「…っちどっち」

「こーっちっ！！」

悠助が振り返り笑顔でタカちゃんを見上げるとタカちゃんも笑顔を返す

家と家の間の狭い道を通り草の生い茂っている原っぱにでると明らかに誰かが通ってるといったような感じで草が折れて細い道が出来ていた

周りはイタドリが高く生えていてまるでトンネルのようになってい
るその道に悠助が足を踏み入れた

ペシパシペシパシ

「…うすけ待って；」

タカちゃんに呼ばれて振り返るとタカちゃんの顔に何か草が色々ついている

「…う少しゆっくり；」

悠助にとっては丁度いいトンネルなのだが悠助より背が高いタカちゃんは足を進めるたびイタドリの葉や何かの草が顔面にモロにぶつ

かっけていたらしい

所々赤くなっている顔をタカちゃんがさすりながら苦笑いを浮かべた

「じゃあゆっくりいくね？」

そういつて悠助が歩く速度を落として歩き始めるとタカちゃんは少し前かがみになってその後ろをついていく

「もう少しだから!!」

ゴッ

出口が近づいたことを知らせようと悠助が笑顔でタカちゃんを振り返ると傘がタカちゃんに当たった

「あ…ご…」

謝ろうとした悠助の口にタカちゃんが人指をつけた

「…ようど頼もうと思ってたから」

傘が当たったところをさすりながらタカちゃんが笑う

「…イスタイミング悠助ありがと」

ぶつけてお礼を言われてなんだかおかしな感じがしたが悠助も笑った
高いイタドリが少なくなってきたトンネルが終わると土手が現れ下
を見るとそこにはブランコが見えた

「ついたー!!」

「…いたー?」

悠助が両手を挙げて言うのとタカちゃんも笑いながら両手を挙げて言った

「うん!公園ー!!タカちゃんの探してる人いるかなあ…」

悠助が土手の上から公園を見渡す

「…がめいいねココ…」

土手の上からは港、そして正月町が結構いい感じに見渡せる

太陽が沈んだ紫色の空と海の境界線には漁船の明かりがちらほら見える

パッパッ…

と数回単発にツいたり消えたりしていた公園の外灯が灯ると町の外灯もあちこちでつき始める

「暗くて…よく見えないや…おりてみ…うわっ；」

『降りてみようか』と言いかけた悠助を抱えてタカちゃんが土手から跳んだ

そしてスタツとそのまま着地すると悠助をおろして周りを見渡した
「…ないなあ…どこにいるんだろ…」

ぐると辺りを見渡してタカちゃんが溜息をつき悠助を見た

まだ何が起こったのかわかっていないのか悠助がぼーっとしてタカちゃんを見ているとタカちゃんはしゃがんで悠助の頬を軽く引っ張った

引っ張った悠助の頬をふにふしながらタカちゃんが微笑んでいた
「…っくりした？ もう一回やる？」

タカちゃんが楽しそうに【もう一回】を表す人差し指を立てた時だった

「離れろ！！ 栄野弟！！」

という声と共に強風が起きた

「っわ；」

タカちゃんに庇われながら悠助はぎゅっと目を瞑って強風が止むのを待ちゆつくりと目を開けた

「…かる…らん？」

金色の羽根を背に迦楼羅かるらがタカちゃんを黙って睨んでいた

「…タカ…ちゃん？」

悠助もタカちゃんを見上げた

タカちゃんは悠助を見て微笑んだ後迦楼羅かるらを見た

「…無事か栄野弟」

タカちゃんからは目をそらさずに迦楼羅かるらが悠助に言った

「え…？ あ…うん？」

わけがわからずにでもとりあえず悠助は頷きながら返事をした

「…るら…」

タカちゃんが悠助を離して立ち上がった

「…タカちゃん…？」

悠助が呼びかけるとタカちゃんはニコリと笑って悠助の頭を撫で再び迦楼羅を見た

「…相変わらずしまりの無い顔をしているな制多迦」

「せい…たか…?」

悠助が迦楼羅の言った【制多迦】という名前を繰り返すとタカちゃん…制多迦は悠助の頭から手を離し迦楼羅に近づいた

「…るら…縮んだね」

制多迦はポフと迦楼羅の頭に手を乗せポップポップと軽く連打した

「やめんかつ…!」

その手を迦楼羅が払うと制多迦がしゃがんで迦楼羅と目線を合わせる「…え会ったときは僕より大きかったのにね。悠助と同じくらいだ」

「やかましいッ…!」

ゴウっという音と共に迦楼羅が炎を吐いた

制多迦はソレをブリッヂしてかわすと反動をつけて後ろに飛び起きた

「…タカちゃん…かるらん…知り合いなの? タカちゃんの探して

た人ってかるらん?」

悠助がタカちゃんと迦楼羅に聞いた

「…りあいだけど…僕が探しているのは迦楼羅じゃない」

制多迦が手首を振りながら答えた

「栄野弟から離れんか!!」

迦楼羅が怒鳴りながら悠助と制多迦に近づく

「…るら…ヤキモチ?」

「なっ…!?!」

プッと噴出しながら制多迦が迦楼羅に言うのと迦楼羅が目を見開いて固まった

「…やきもち?」

悠助が制多迦を見上げそれから迦楼羅を見る

「…ぼし?」

制多迦がクスクス笑いながら悠助の頭に手を置く

きよんととして悠助が首をかしげると迦楼羅の肩が震えだした

「…誰が…誰がヤキモチを焼いているのだ!!! ; たわけ――
ーッ!!!」

ぐ――――

迦楼羅が叫んだのと同時に何か別の音が聞こえた

「…んの音…?」

きゅるるる…

制多迦せいたかと悠助の視線が迦楼羅かるらの腹に集中した

「…なか減ってるの? 迦楼羅かるら」

「かるらんおなか減ってるの?」

悠助と制多迦せいたかが同時に聞いた

「し…仕方なかう!! 乾闥婆けんだつばが遅かったんだッ!!! ;」

迦楼羅かるらが腕を激しく上下させて弁解の行動をした

「あ…そっか僕がお肉持って帰ってないから…ごめんねかるらん…」

悠助が手に持っていた袋に気づいて迦楼羅かるらに謝った

「え…あ… ;」

しゅんとなった悠助を見て迦楼羅かるらがうろたえていると

「…うすけは悪くないよ。僕が探しているの手伝ってくれていたんだから。悪いのは僕だよ」

悠助の頭を撫でて制多迦せいたかが悠助を慰める

「…ワシが悪者なのか? ;」

その様子を見ていた迦楼羅かるらがボソツと呟いた

「ごめんねかるらん…」

「あ…謝るなっ ; …別にお前を責めているわけでは… ;
俯いて悠助が謝ると迦楼羅かるらが慌てて悠助に言った

「…るらが悠助泣かせちゃった」

「まだ泣いておらんわ!! たわけっ!!! ;」

しゃがんで迦楼羅かるらと悠助の視線にあわせると制多迦せいたかがポフポフと迦楼羅かるらの頭を再び軽く連打した

「ごめ…」

ふえっと息を吐いて悠助が目を潤ませると迦楼羅と制多迦せいたかがぎよつとして慌てだす

「…うすけ； 誰も怒ってないから大丈夫だから；」

「そ…そうだ大丈夫だぞ！！ 栄野弟！！；」

必死に泣かせないように迦楼羅と制多迦せいたかは悠助に『大丈夫』を連呼する

「でも…僕のせいでかるらん…おなか…っ」

目をこすって悠助が迦楼羅を見る

「ワ…ワシならだいじょ…」

ぐう…きゆるる…

迦楼羅の言葉が迦楼羅の腹の虫の声にかき消された

「…るら…タイミング悪すぎ」

制多迦せいたかが迦楼羅に突っ込んだ

悠助の目に涙のダムが出来始めた

「ごめんねごめんね…っ」

悠助の目のダムが決壊して涙が溢れ出した

「…かしたな…かした…」

制多迦せいたかが泣き出した悠助の頭を撫でながら迦楼羅を指差して軽くりズムをつけて言った

「や…っ…やかましいっ！！；」

おろおろしつつも制多迦に向かって迦楼羅が怒鳴ると悠助が声を上げて泣き出した

「悠…！！ …おのれはなに人の弟泣かせとんのじゃ」

泣き声を聞きつけたのか京助が公園に駆け足で入ってきた

そしてペシッと迦楼羅の頭を叩くと悠助と迦楼羅の間に立った

「何をする！ たわけっ！！；」

「たわけはどっちだ！！ …たたく…おおお！？；」

叩かれたことに抗議してきた迦楼羅かるらに言い返しながら悠助を振り返った京助が驚いて声を上げた

「こ…矜羯羅こんがら！?； …って…ずいぶん日に焼けましたね? 髪も染めちゃって…イメチェンですかい?；」

まじまじと制多迦せいたかを見ている京助のパーカーを悠助がくいくいと引っ張った

「悠?」

「…タカちゃんと…一緒に探してたから…僕…ごめんなさい…」

京助が自分を探しに来たのだとわかった悠助が謝った

「…まあ…無事だったみたいだし…って…タカちゃん?」

溜息を吐きながら悠助を撫であきれたように笑った後ふと【タカちゃん】という言葉に京助は反応した

「タカちゃん…って…」

「…く」

制多迦せいたかが『ハイ』と手を上げながら立ち上がった

「…矜羯羅こんがら…じゃないのか?；」

悠助を自分の後ろに庇いつつ京助が制多迦せいたかに言った

「…んがらを知ってるんだ? どこにいるか知らない?」

確かに目元は似ているものの明らかに雰囲気が違う

「そいつは制多迦せいたかだ」

迦楼羅かるらが京助の前に立ち制多迦せいたかを睨む

「せい…たか…後ろにノッポとかつけたくなる名前だな…」

京助がボソッと言った

「こん…こ…」

「こんがら」

悠助が【矜羯羅こんがら】と言うに言えないでいるのに気づき京助が【こんがら】と大きめの声で教える

「こんがらさんって人探してたの?」

まだ多少泣いた後のしゃっくり地獄が後を引いてる悠助が制多迦せいたかに聞いた

「…ん、そう」

制多迦せいたかがコクリと頷いた

「ってことは…やばくないか?」

京助は【あんなヘンテコリンな出来事】を思い出していた

口元に笑みを浮かべながら小さな玉を操り自分と緊那羅きんならに攻撃をしてきた矜羯羅こんがら

自分を『消す』と楽しそうに玉を飛ばしてきた矜羯羅こんがら

坂田組組員を軽く一人で全滅させた緊那羅きんならに重傷を負わせた矜羯羅こんがら

「…京助…?」

いつもの京助と何かが違う京助を見上げ悠助が小さく名前を呼ぶと腕を引っ張られ京助の体に引き寄せられた

「…かるらん…?」

京助の後ろから迦楼羅かるらの名前を呼ぶと金色の羽根が京助と悠助の前に広がった

「…やはり狙いは栄野兄弟か?」

迦楼羅かるらが制多迦せいたかを睨みながら制多迦に言う

「…くはただ矜羯羅せいたかを探しにきただけなんだけど…」

制多迦が目をこすりながら欠伸をした

「…あ…タカちゃん」

「あっ!! こら! 馬鹿!! 悠っ!!」

悠助が小走りで駆け出し制多迦せいたかの元に向かう

「栄野弟!!?」

迦楼羅かるらが声を上げたその時だった

どてっ

「…あ」

京助、迦楼羅かるら、制多迦せいたかが同時に言った

しばしの沈黙の後三人はコケた悠助の周りに集まってそろってしゃがみこんだ

「…悠?;」

京助が声をかけると悠助が泥だらけの顔を上げた

「…いじょうぶ?;」

制多迦せいたかも声をかける

「…雨で地が滑るからな…;」

そういつて迦楼羅かるらが手を差し出した

無言のまま悠助が迦楼羅かるらの手に手をのせると迦楼羅かるらが引っ張って起こす

「あ…; こりや派手にやったなあ;」

全身泥パック状態の悠助を見て京助が苦笑いした

「…いきなり走り出すからだ! たわけ!」

迦楼羅かるらが手を離し自分の服の裾で悠助の顔を拭き始める

「鳥類、服汚れんぞ? 乾闥婆けんだつばになにか言われるんちゃうか?」

「…んだつば…」

京助が迦楼羅かるらにからかい半分で言うのと制多迦せいたかがボソツと言った

「何? ノツポさんだか…オマエ乾闥婆けんだつばも知ってるんか?」

京助が笑いながら制多迦せいたかに聞くと

「…ツポさんじゃなく僕は制多迦せいたか 乾闥婆けんだつばそこにいるし」

欠伸をしながら言った制多迦せいたかのその言葉に京助と迦楼羅かるらが固まった

ギ…ギギ…と音が聞こえそうな感じに首を動かし制多迦せいたかのしている

方向を向くと爽やかに（怖い）にっこりと（殺気）微笑んだ

（悪魔の微笑み）乾闥婆がゆっくりこっちに向かってきていた

まさに天使のような悪魔の笑顔

「…かるらん?」

悠助の頬に服の裾をつけたまま固まっている迦楼羅かるらに悠助が声をかける

「なにやってるんですか? 迦楼羅かるら? 僕なんていいましたっけ?」

微笑んだまま迦楼羅かるらに近づく乾闥婆けんだつば

その様を見た京助はBGMはジョーズのテーマがぴったり合うと思

迦楼羅かるらとの距離が30センチあるかないかまで近づくとジョーズ：
いや乾闥婆けんたつぱが迦楼羅かるらの前髪をひっぱった

「僕はおとなしく待っていてくださいっていいませんでしたっけ？」

「いだだだだッ！！！」

顔は笑っていてもなにくそ！それでもか！という力で引っ張っている
のであるう

「…いかわらずだなああの二人」

「っおおお？！！！」

いつの間にか隣にいた制多迦せいたかに京助が驚き声を上げた

「…みが京助だね？　ちよつといい？」

制多迦せいたかが目をこすりながら欠伸をする

「…くを叩いてくれない？…うバシっと思いつきり」

「はあ？；」

ブンブンと手を振って叩いてくれのジェスチャーをする制多迦せいたかに京助がワケがわからないという返事を返す

「何だよ？；」

いきなり叩けといわれて京助がその理由を聞き返す

「…んでもいいから…はやく…もう…げん…か…」

制多迦せいたかの体がふらつと傾いた

「タカちゃん！！」

迦楼羅かるらと乾闥婆けんたつぱの口喧嘩にちよつと巻き込みを食らっていた悠助が
制多迦せいたかの名前を呼ぶと迦楼羅かるらと乾闥婆けんたつぱも制多迦せいたかを見た

「いかん！！　制多迦せいたかを叩け！！　京助！！」

迦楼羅かるらが声を上げた

「え…な…？！；」

ゆっくり倒れていく制多迦せいたかと叩けと叫んでくる迦楼羅かるらにどうすれば
いいのか戸惑う京助の横を未確認亜高速飛行物体が通り過ぎ制多迦せいたか
にヒットした

スコーン　という小気味いい音が京助の耳に届いた

「…なにしてるんだよ」

その後、聞こえた京助にとってちよつと、いやかなり聞きたくないような声

「だから待ってろっていったのに」

パシヤンと水溜りに足を入れた音がした方向を振り返る

「…んがら…」

未確認亜高速飛行物体がヒットし赤くなっている額をさすりながら、
制多迦が名前を呼んだ

「久しぶり…」

矜羯羅がにっこりと京助に笑いかけた

相変わらず口元には笑みを浮かべながら、矜羯羅が京助に近づいてきた
「安心しなよ。何もしないから…」

エリマキトカゲに例えるとエリを元祖ツツパリののようにピンピンに
立てて威嚇しているといったような京助をみて、矜羯羅が笑った

「…まだ【時】がきていないからね」

ポンと京助の肩を叩き横を通り過ぎると、矜羯羅は額をさすっている
制多迦に手をさし伸ばした

制多迦をひっぱて起こしている途中で、矜羯羅が迦楼羅と乾闥婆、
そして悠助をチラリと見た

「その子が【栄野悠助】？」

矜羯羅が悠助と京助を交互に見てフツと笑った

「なんだよ…」

また小馬鹿にされているのか、と思い京助が矜羯羅に言った

「別に？」

「矜羯羅!!!」

にっこりと笑いながら言葉を返した、矜羯羅に乾闥婆に前髪を引っ張
られながら、迦楼羅が怒鳴った

乾闥婆に前髪を引っ張られながら、迦楼羅が矜羯羅を睨む

「…その格好で凄まれても逆に笑えちゃうんだけど」
確かに。

「や…やかましい!! たわけッ!!!」

クスクスと笑う矜羯羅こんがらに迦楼羅かるらがさつきより大きな声で怒鳴った

「…んがら…お願い」

制多迦せいたかが矜羯羅こんがらの肩を突付いて言うと矜羯羅こんがらが制多迦せいたかに裏手拳を食らわせる

「…りがと…ん…」

頬をさすった後伸びをして制多迦せいたかが肩をぐるぐる回した

「今までよく眠らなかったね…自分で叩いたりしてたの？」

「…うすけに起こしてもらってたんだ」

制多迦せいたかが言うと矜羯羅こんがらが悠助を見た

きよんとしている悠助に矜羯羅こんがらがにっこり笑いかけると悠助も笑い返した

「矜羯羅こんがら。さっさとその眠そうな人連れて帰ったらどうですか？」

悠助の前に立ち乾闥婆けんだつばが笑顔で矜羯羅こんがらに言った

「そっちこそ。さっさとその若年寄連れて帰ればいいんじゃない？」

「ご老体に無理させちゃ駄目だと思っただけど？」

矜羯羅こんがらもにっこりと笑いながら乾闥婆けんだつばに言った

ピシッという空気の凍る音が聞こえた様な気がして辺りの空気が変わった

明らかにさっきまでとは違う重苦しいというか息苦しいというか…とにかく怖い

迦楼羅かるらがそおつと悠助の手を引っ張って乾闥婆けんだつばから離れた

「…ようすけ逃げたほうがいい」

「へ？ うっわ；」

制多迦せいたかも京助の腕を引っ張ると矜羯羅こんがらから離れて鉄棒のところまで避難した

「京助ー」

互いに笑顔を向けつつもオドロオドロした空気に包まれ一触即発といった雰囲気けんだつばの乾闥婆けんだつばと矜羯羅こんがらを黙ってみていた京助に悠助が駆け寄る

「けんちゃんどこ…きょん…」

「矜羯羅^{こんがら}」

悠助はまだ上手く【矜羯羅^{こんがら}】と言えないらしい

「けんちゃんとかんがらん喧嘩してるの？」

悠助が京助を見上げて聞いた

「…つもの口喧嘩…顔をあわせるといつも始まるんだ；」

制多迦^{せいたか}が言う

「ワシらまでとばっちりを食らわされるからな…； 逃げるに限る」

迦楼羅^{かるら}が腕を組み今だ笑顔で睨みあう乾闥婆^{けんたっぱ}と矜羯羅^{こんがら}を見た

「…悠ちよい傘貸してくれ」

京助が悠助から傘を借りると鉄棒の柱を叩いた

カーーーン

という乾いた音が公園に響く

その音を聞いてまず矜羯羅^{こんがら}が口を開いた

「相変わらずイイ性格してるよね君」

腕を組み乾闥婆^{けんたっぱ}に笑いかける

「貴方ほどではないですよ。にしてもその衣長すぎませんか？ 名

前のようにこんがらがらないように気をつけてくださいね？」

乾闥婆^{けんたっぱ}もにっこりと微笑みながら矜羯羅^{こんがら}に言葉を返す

バチバチッという火花が見えそうなくらいにそこだけ空気が明らかに違う

「…止めなくていいのか？；」

京助が傘で肩をトントン叩きながら迦楼羅^{かるら}と制多迦^{せいたか}に聞いた

「…められるなら…」

「とつくとめているわ。たわけ；」

制多迦^{せいたか}と迦楼羅^{かるら}が顔を引きつらせて言った

「喧嘩駄目だよ！！ 京助…止めさせて！！！」

悠助が京助の体をゆすって頼んできた

「お前は俺を殺す気か；」

京助が遠い目をして言った

「タカちゃん！！ かるらん！！」

制多迦せいたかと迦楼羅かるらも遠い目をしている

「…もううゝ…いいよ!! 僕が行く!!」

悠助は頬を膨らませると走り出した

「あ! こら悠!!!」 「…うすけ!!!」 「栄野弟!!!」

三人が同時に悠助を呼び止めようと声をあげ後を追いかける

「ばっかお前死ぬ気か!?!? 殺されるぞ!?!? 場の空気読め!

! 場の空気を!!!」

京助が悠助を捕まえた

「離して!!! 喧嘩は駄目なんだようっ!!! 喧嘩ゝ!!!」

ジタバタと腕のなかで暴れる悠助を京助がしっかりと押さえる

そんな悠助を見て迦楼羅かるらと制多迦せいたかが顔を見合わせると深く溜息をつ

き何やら気合を入れた

「…行くぞ;」

迦楼羅かるらが言うのと制多迦せいたかがコクリと頷いた

「…あ…おい…鳥類?;…制多迦…?」

バチバチしている空気の中に向かっていく制多迦せいたかと迦楼羅かるらに京助が

声をかけた

「…ご武運を…;」

京助がボソッと呟いた

「そのピョン毛前より成長したんじゃない? そのうちなにか釣れ

るかもね」

「釣れたらいいですね。それは楽しみですよ」

「釣れたら是非僕もソレほしいんだけど」

「誰がやりますかってんですよ」

顔はにっこりとしかし回りの空気はオドロオドロしている

「…覚悟はいいか?;」

でろでろと渦を巻くオドロオドロした空気を前に迦楼羅かるらが制多迦せいたかに

聞いた

「…ん;」

制多迦せいたかがコクリと頷き返事をする『せーのっ』という感じにオド

ロオドロした空気の中に入った

「…け…乾闥婆^{けんたっぱ}；」

「…んがら…；」

「うるさい！！」「うるさいですよ！！」

名前をちよつと呼んだだけで怒鳴られ二人はビクツとすくみあがった
乾闥婆^{けんたっぱ}と矜羯羅^{こんがら}はまたにっこりと笑い合うと

「君のところの鳥さん騾^ろがなっていないみたいだね」「貴方のところ
の万年眠気さん何とかしてくださいよ」

ほぼ同時に言うで一瞬キツと睨みあいそしてまた笑顔に戻る

「…お…お前らしい加減に…」

ぐううううう…

公園中に響き渡ったなんとも間拔けな音

「…アイツまた腹減らしてるのか；」

悠助を捕まえたまま京助が呆れる

「僕がお肉持って帰らなかったから…僕…ハルミママ怒ってた？」

悠助がしゅんとなったのをみると京助がポンポンと頭を軽く叩き

「探すの手伝ってたんだろ？俺からも母さんに謝ってやるから…
とりあえず鼻水拭け」

悠助の鼻からタリと垂れている鼻水をみて京助が言う

「ティッシュとかないのか？学校から帰ったまんまならポケットに
入ってねえか？」

京助に言われて悠助があちこちのポケットに手を入れてティッシュ
を探す

「あ…」

悠助が小さく声を上げた

「ないのか…しょうがねえなあ；」

京助が自分のパーカーの袖の部分で悠助の鼻水を拭いた
外灯の明かりで照らされた袖口がテカテカ光る

「…悠？」

ポケットに手を入れたまま動かない悠助に京助が声をかけた

「…ちゃんとエサあげてるの？」

矜羯羅こんがらがクスクス笑いながら乾闥婆けんだつばに言った

「あげていますよ？　ただちよーーーーーっとながまなんです」

につこり笑って矜羯羅こんがらに言うとその笑顔のまま迦楼羅かるらを見た
もはや完璧にペット扱いの迦楼羅

顔は笑っていてもなにやら背後に般若面が見える様な気がする
怖い

「…んがら…」

制多迦せいたかが矜羯羅こんがらの名前を呼ぶと矜羯羅こんがらは指をはじき小さな玉を飛ばして制多迦せいたかにぶつけた

「…りがと」

額をさすりながら矜羯羅こんがらにお礼を言う制多迦せいたか

「あんまりバコバコぶつけると馬鹿になりますよ？　まあ…これ以上
ならないかもしれませんけどね」

乾闥婆けんだつばが首を少しかしげて笑顔で矜羯羅こんがらに言った

「ちゃんと力加減してるから」

につこり笑って乾闥婆けんだつばに返すとその笑顔のまま制多迦せいたかを見た
顔は笑っていてもなにやら背後に仁王像が見える様な気がする

怖い

そんな二人を前に制多迦せいたかと迦楼羅かるらが立ち尽くしていると

「こら！！　悠！！！！」

悠助が走ってきた

「手！！」

走りながら悠助が叫んだ

「…手？」

迦楼羅かるらが自分の掌を見た

制多迦せいたかも迦楼羅かるらと同じく自分の掌を見る

「手出して!! けんちゃんもきよんがらさんも!!」

やっぱり上手く【矜羯羅こんがら】と言えないらしい

悠助に名前を呼ばれて乾闥婆けんだつぱと矜羯羅こんがらも悠助の方を見る

「早く!! 手!」

首をかしげながらも四人が手を出すと悠助がポケットから何かを取り出して掌に乗せていった

「:何? これ」

自分の掌に乘せられた小さな四角い物体を矜羯羅こんがらがつまみ上げて見た

「チョコだよ! 買い物したら荒木さんのおばさんがくれたの!」

まじまじと四角い小さなチョコを見る四人を見て悠助がにこにこ笑う
「おなか減つてるとイライラするって。だからチョコ食べればイラ

イラしないでしょ?」

「:食べ物なのか?」

迦楼羅が四角いチョコをそのまま口に入れようとした

「あ!! 待ってかるらん! 紙はがさないと:貸して?」

迦楼羅かるらからチョコを受け取ると包み紙をはがし再び迦楼羅かるらに渡す

ソレを見ていた制多迦せいたか、矜羯羅こんがら、乾闥婆けんだつぱも包み紙をはがした

「:おんもしれえ:」

その様子を見ていた京助がプツと噴出した

「あ、ゴミはちゃんとゴミ箱に投げないと (北海道弁) 駄目だか

ら僕にちょうだい?」

包み紙を受け取ると悠助がゴミ箱に向かって駆け出す

「:甘い:匂いですね」

乾闥婆けんだつぱがチョコの匂いをかいだ

「おいしいんだよ」

戻ってきた悠助がにっこり笑いながら言った

「僕大好きなんだチョコ。早く食べないと溶けちゃうよ?」

悠助に催促され四人は顔を見合わせるとほぼ同時にチョコを口に入れた

「どう? どう?」

悠助が四人の顔を見て聞いた

「：竜田揚げには負けるが：美味しいな」

迦楼羅かるらが指を舐めながら言った

「へえ：こんな食べ物あるんだ：」

矜羯羅こんがらも美味かったらしくいつも笑顔だが優しい笑顔になっている

「でしょ？」

悠助が満面の笑みで満足そうに言う

「：いしかった」

制多迦せいたかが悠助に笑いかける

「：悠お前地味にすっげえな：：」

「何が？」

悠助の頭にポンと軽く手をのせて京助が言った

迦楼羅かるらと制多迦せいたかが二人がかりでもどうにも出来なかったあのオドロ

オドロした険悪な恐ろしい空気をチョコで一掃してしまった悠助

「おいしかったですよ悠助」

乾闥婆けんたつばがにっこり笑った

その笑顔の後ろに般若面は見えない

「みんなおなか空いてたんだんだね」

悠助が京助を見上げて言った

「いや：まあ：そうかもな：」

京助が苦笑いで返すと

ぐきゅう：

と迦楼羅かるらの腹の虫が鳴いた

「：鳥類：」 「迦楼羅かるら：」

京助と乾闥婆けんたつばがはあと溜息をついた

「いや、でも俺も腹減ったわ；今何時なんだよ：：」

京助が自分の腹をさすりながら言った

辺りはもうすっかり暗くなっていて少し肌寒くなってきている

「早く帰らないと。ハルミママさんが心配していますし…迦楼羅のおなかもうるさいですし」

乾闥婆がチラリと迦楼羅を見る

「や…やかましい！！ たわけっ！！； 腹は減るものなんだっ！

！！；」

迦楼羅が怒鳴ると乾闥婆が迦楼羅の前髪を引っ張った

「き・ち・ん・とわがまま言わないで食事していればまだもったはずですよ？」

につこりしながらそれでもかなりの力を込めて乾闥婆が迦楼羅の前髪を引っ張っている

「…んとにあいかわらずだね」

制多迦が笑いながら言った

「…なあ…お前らって…敵同士なんだよな？」

京助が聞くと悠助以外の四人が京助を見た

「…まだ（強調）…本当には【敵同士】じゃないよ。今はね…」

矜羯羅が言う

「…今は？」

京助が聞き返す

「…きがくれば【敵】になる」

制多迦が言った

「【時】…ってなんなんだ？てか…」

「京助」

京助が更に聞き返そうとすると乾闥婆に名前を呼ばれた

その乾闥婆の方向を見ると迦楼羅の前髪を引っ張ったまま笑顔で京助を見ている

しかしその笑顔の後ろには大魔神が『ウー！！ ガンダーー！！』と憤怒の形相で見える様な気がする

「…僕が前言ったこと覚えています…よね？」

乾闥婆が首をかしげて笑顔で聞くと後ろに見える様な気がする大魔神も首を傾げた様な気がした

「…は…い；」

京助が引きつりながら頷いた

「タカちゃんとかるらんとけんちゃんときょんがらさんは敵同士なの？」

悠助が京助に聞いた

「…きじゃないよ。だからもう喧嘩もしない大丈夫」

制多迦^{せいたか}が悠助の頭を撫でながら言った

「本当？」

「…ん本当」

悠助が聞くと制多迦^{せいたか}が笑顔で返した

ぐくきゆるるるりい…

「…迦楼羅^{かるら}…貴方^{あなた}って人は…ッ」

いい場面で必ずと言っていいほど泣き喚く迦楼羅^{かるら}の腹の虫

「あだだだだだだ！…；　し…仕方ないだろうが！たわけ！…；」

迦楼羅^{かるら}がぎゃーぎゃーわめくのをお構いなしに乾闥婆^{けんたつば}が前髪を引っ張る

「…本当相変わらず」

矜羯羅^{こんがら}がクスクス笑った

「…うすけ…もう帰ったほうがいい」

制多迦^{せいたか}が笑顔で言った

「そうだな…暗くなったら母さんも待ってるしそれに…」
ぎゆるるるる…

「…なにより鳥類の腹の音がやかましいしな；」

怒鳴り声と混ざって聞こえてくる体のわりにやたらとでっかい迦楼^{かる}羅^らの腹の虫の声

「…タカちゃん…」

悠助が制多迦^{せいたか}を見上げた

「…うすけお願いあるんだけど」

眉を下げて見上げてきた悠助に制多迦^{せいたか}が言った

「…くを叩いてくれない？」

2007-09-25 15:57

【第四回・弐】召しませ玉子酒（前書き）

雨の中を濡れたままで帰ってきた京助が馬鹿のくせに風邪を引いた
そんな京助に母ハルミが作ったのは玉子酒
それをもってきた緊那羅^{きんなら}が玉子酒を飲んで：

【第四回・弐】召しませ玉子酒

「えーいっきゅしゅー!!」

秋晴れの空に高らかに響いたのは京助のでっかいくしゃみの音だった
物置の中から縁側の外戸を運び出していた京助はズツと鼻をすすった
「京助風邪?」

母ハルミが京助の額に手を当てる

「あーちゃうちゃう; 埃っぽく…て…ひ…ひえくしょっ!!」
「汚ッ!!」

再びくしゃみをした京助に母ハルミが手を引っ込める

昼間は残暑が厳しいといっても朝晩はかなり冷え込むようになって
きたということで縁側に外戸を取り付けることになった栄野家では
母ハルミと京助が夏に物置にしまいこんだ外戸を運び出していた
「アンタこの間濡れて帰ってきたでしょ? だから風邪引いたんじ
やないの?」

肩で鼻水を拭っている京助に母ハルミが言う

「だから違うって; 埃が…ほ…ひ…いえっきゅしゅっ!; …す
まん;」

母ハルミにかからないよう後ろを向いてくしゃみをした京助だった
がそこには緊那羅きんならがいて緊那羅きんならにくしゃみがかかった

「京助昨日からくしゃみしてるよ?」

緊那羅きんならの後ろにいて京助のくしゃみの洗礼を免れた悠助がひょっこ
り顔を出す

「馬鹿は風邪引かないっていうけど念のため熱測ってきたら?」
母ハルミが腰に手を当て言った

「大丈夫だつての; っとに…」

そういつて京助は外戸を持ちあげた

「…ふ…えいっきゅしゅいっ!!」

ゴス

京助の足の上に外戸が落下した

たり…ズズズ…

…たり…ズー…

「京助…」

「あ？」

ひっきりなしに鼻をすする京助に緊那羅きんならが声をかけた

「…やっぱ風邪ひいてるんじゃないんだっちゃ？」

緊那羅きんならがティッシュの箱を渡すと京助は勢いよく鼻をかんだ

「引いてねえって；」

フンと鼻を鳴らしてティッシュをゴミ箱に向かって投げたが外れ結局立って拾ってゴミ箱に入れた

「でも顔赤いっちゃ」

緊那羅きんならが立ち上がり京助の額に手を当てる

「…熱…あるんじゃないっちゃ？」

緊那羅は京助の額から手を離すと自分の額にも当て温度を比べる

「お前の手が冷てえからだろ…？； 熱なんてねえって；」

京助が苦笑いで緊那羅きんならの横を通り過ぎた

「…京助」

「あ”？ ん”んんっ」

悠助に呼ばれて返事をした京助だったが声がかすれている

「…声変だよ？」

悠助は心配そうに京助の顔を覗き込むと

ゴン

「…悠；痛えんだけど；」

熱を測ろうとしたのか悠助がいきなり頭突きをかましてきた

「熱いよー！！ 熱あるー！！」

「ねえっ…ひ…ふくしゅっ！！」

反論しようとした京助だったがくしゃみで出来なかった

「風邪ね」

「風邪だっちゃね」

「かーぜー!!」

母ハルミ、緊那羅^{きんなら}、悠助に【風邪】と判断された京助は三人によって自室の布団に強制連行された

「明日は学校休みなさいね」

母ハルミが振り返っていった

「な：明日はダメだっ； 絶対休めんっ！； …ひくしょっ！！」

掛け布団を押し上げて京助が起き上がる

「寝ないとダメっ！！」

起き上がった京助の上に悠助がのしかかる

「珍しいわね学校いきたいとか」

「明日最終打ち合わせなんだよ；」

「最終打ち合わせ？」

悠助に布団に強制的に寝かされ（倒され？）た京助に緊那羅^{きんなら}がきいた

「文化祭。ソレのクラスの屋台の最終打ち合わせあんだよ：俺焼き係りだから絶対参加なんだ」

京助が悠助を自分の上からどかす

「総合で勝てば焼肉食えるんだぞ！？」 全学年対抗だから気合いれねえと勝てねえんだ」

鼻水をすすりながら京助が燃えている

「…なら：きちんと寝て明日までに熱下げるのね」

母ハルミが呆れ顔に笑顔を浮かべて言った

「ホラホラ悠ちゃんも緊ちゃんも風邪うつたら大変よ？ さあ出て出て」

母ハルミが言うのと悠助が立ち上がって戸口に小走りで向かい振り返って

「あとでお見舞いに来るからね？寝ててね？」

そう言って部屋から出ていった

「…ちゃんと寝てるんだっちゃよ？」

緊那羅^{きんなら}も立ち上がり笑ってそういうと部屋から出て行く

「後で玉子酒作って来るから」

母ハルミはそういいながら戸を閉めた
上を向くと鼻が詰まって息苦しくかといって横を向くと鼻水が垂れ
てくる

そして何より暇でしかたない

「こーゆー時ってどうして眠れないものかね；」

もぞもぞと布団にもぐりこんで目を閉じてても眠気が来ない

そして浮かんでくるどうでもいいようくだらない考え

アトムはどうして十万馬力なのかとかどうして世界制服を目論む悪
者は東京しか襲わないのか別に田舎からせめてもいいと思うとかそ
んな本当にくだらない事を京助の頭は考えていた

そしてソレがだんだん【Ⅱ（イコール）】式に換算されてくる

『悪者Ⅱ敵Ⅱ矜羯羅Ⅱでも今は敵じゃないらしい』

この間：乾闥婆けんだつぱのエプロン姿がちよっと笑えたあの日

迦楼羅かるらの腹の虫が絶好調だったあの日

自分を叩けと言って来る制多迦せいたかにあったあの日

緊那羅きんならを攻撃してきた時とは雰囲こんがら気が違った矜羯羅こんがらにあったあの日
そしてその矜羯羅こんがらが言った一言

『まだ【時】がきていないからね』

【時】：そーいえば迦楼羅も言っていた

『お前達兄弟は何としてでも【時】までに守らねばならないのだ…
そして【時】が来たならば、更に守ら
なければならぬ…』

「…【時】ってなんなんだ…？」

【時】と自分と悠助の関係式がまったく成り立たないでも少しだけわかったこと

「…【時】が来なければ…あいつらは敵じゃないんだよな…」

「京助？」

緊那羅きんならの声にハッとして布団をはぐった

「…寝てた…っちゃ？」

湯気の立ち上るコップを持った緊那羅きんならが戸口に立っていた

二つもっていたうちの右手のほうのカップを京助に手渡すと緊那羅きんならが布団の横に腰を下ろした

「玉子酒。ハルミママさんが熱いから気をつけて飲めって言ってたっちゃ」

体育座りの様に膝を抱えて座った緊那羅きんならが玉子酒を息で冷ましはじめた

「そんな子供じゃねえんだからんなこと言わなくてもわかってるっつーの；」

京助も鼻をすすりながら玉子酒に息を吹きかけた

「…コレ…【ソーマ】に似てるっちゃ」

玉子酒を一口飲んだ緊那羅きんならが呟いた

「…ソー…マ…：ああ！！ 思い出した！！」

京助が大声を上げると緊那羅きんならが驚いて目を丸くした

「あのクッソ不味いやツ！ 乾闥婆けんたつばのもってた だろ？」

京助の問いかけに緊那羅きんならはまだ目を丸くしたままコクリと頷いた

「一体何なんだ？ その【ソーマ】って」

ズツと玉子酒を一口飲んで京助が聞く

「【ソーマ】は…葉…みたいなものだっちゃ…私は【ソーマ】を使ったあいつも気持ち悪くなるんだっちゃ；」

緊那羅きんならが苦笑いを浮かべる

「そして…普通の人には…何の効き目もないらしいっちゃ」
付け加えた一言はかなり小さかった

「ふうん…【ソーマ】ねえ…」

だいぶ冷めた玉子酒を京助が一気に飲み干した
それを見た緊那羅きんならもぐいっとカップを傾けて飲み干す

「あゝ；あつつうゝ；」

アルコールと玉子酒の温かさで体温が上がった京助がシャツの襟元を引っ張って手で仰ぎ始める

「：けふっ」

玉子酒を一気した緊那羅きんならが小さくゲップをした

その音を聞いて京助が緊那羅きんならのほうに目を向けると緊那羅きんならがカップを持ったままポーっとしている

「：緊那羅？」

緊那羅きんならに声をかけるとゆっくり瞬きをした後いきなり涙を流した

「な…?!；」

「う…えええええ」

緊那羅きんならが滝の様に涙を流して泣き出した

「ごめんだっちゃー」

耳まで赤くして謝りながら泣き始めた緊那羅きんならに京助はどうしていいかわからずただうろたえる

「お…おーい； 緊那羅きんなら！；」

京助が声をかけると一瞬泣き止んだが再び泣き出す

「私はまた守れなかったんだっちゃー…うえええ」

涙を拭おうともせずただ声を上げて涙を流す様はまるで幼稚園児だった

「守れなかった…って…何が?； 何からよ；」

京助が再び声をかけるとまた一瞬泣き止んで京助を見て

「風邪」

「は?；」

きっぱりと『風邪』と言った緊那羅きんならに京助が口をあけたまま止まった

「：風邪…から守れなかったのか?；」

「そうだ…っ…ふえええええ」

「いや…ソレ…何だか…；」

【風邪】から京助を守れなくて悔しいらしくそれで泣き喚くきんなら緊那羅に京助が顔を引きつらせる

「ごめんだっちゃー…」

「てか…風邪からどうやって守る気だったんだよ…」

京助が聞くときんなら緊那羅はまた一瞬泣き止んで

「…さあ？」

と首をかしげた

「…さあって…なあ…」

はああと溜息をついて京助が俯いて肩を落とす

「…怒ってるっちゃ？」

いきなりどアップで顔を覗き込まれた京助が固まる

「ねえ京助。怒ってるっちゃ？ 怒ってるちゃ？」

「ちよ…； な…きんなら緊那羅…；」

ずずいと迫ってくるきんなら緊那羅に京助が後ずさる

「怒ってる…？」

とうとう壁に背中がついた京助にきんなら緊那羅が迫る

「…お前酔ってるだろ…」

「酔ってないっちゃっ！」

酔っているといわれたきんなら緊那羅が京助に頭突きを食らわせた

「いっ…； お前なあっ…；」

しかし自分も痛かったらしくきんなら緊那羅が頭を押さえて小さく震えている

「…大丈夫か？」

自分の頭をさすりつつ京助がきんなら緊那羅の頭に手を置いた

ガラッ！！

窓の開いた音がした

窓の開いた音につられて窓の方を見た京助ががっくり肩を落とした

「な…ななななな…」

窓の外には両葉をわなわな震わせながらヒマ子がいた

「何をなさってるのですか…！…ッ…！？」

ヒマ子が大声を上げるときんなら緊那羅がヒマ子を見た

「き…緊那羅様!! 一体何を…っ!! 京様とな…とにかくお離れになってくださいッ!!」

声を荒げて騒ぐヒマ子に

「やだっちゃ」

といつて京助にくつついた

「ぎゃあああああああー……」

ヒマ子が今だかつてない悲鳴を上げる

「オイコラ」

その緊那羅を京助が引き離すと緊那羅がまた目を潤ませた

「京助が嫌う…」

「あのなあ…」

「なっ泣けばいいものじゃありませんわよ! 緊那羅様っ!!」

京様がお困りではありませんかっ!! 離れてくださいっ!!」

泣き出す緊那羅にわめくヒマ子

「やっぱり怒ってるんだちゃー」

うわーんと幼稚園児並の泣き方で緊那羅が泣く

「いい加減京様から離れてくださいましッ!! 緊那羅様ッ!!」

ヒマ子が窓の枠に捕まって身を乗り出しわめく

鉢が壁にぶつかっているのかたまにゴンゴンという音も聞こえる

「…俺一応病人なんスけど」

たり…と鼻水をたらしながら京助が呟く

「緊那羅様ッ!! 今すぐ京様から離れてくださいませッ!! さあッ!!」

ヒマ子が再び京助から離れるよう緊那羅に言った

すると緊那羅がピタッと泣き止んでヒマ子を見てに…と笑った

「…いやな笑顔だなあオイ」

京助のいやな予感が大当たりした

「い・やだっちゃっ」

「ぐはっ」

「ぎよええええええええええー！！！！！ツ！！；」
ヒマ子に見せ付けるかのように（見せ付けたんだろうが）緊那羅きんならが
京助に勢いよく抱きついた
途端に響き渡るヒマ子の悲鳴はまるでラスボスに捨て駒として使わ
れて挙句役立たずといわれて消された部下の断末魔のようだった

：ゴトリ

ヒマ子が窓から消えた：というか気を失って窓枠から落ちた

「：お前酒癖トコトン悪いのな；」

ヒマ子の消えた窓を見ながら満足そうに笑みを浮かべる緊那羅きんならを見
て京助が呟く

「ひ：へえくしょッ！！；」

窓から流れ込んできた秋の涼しい風にせつかく玉子酒であつたまつ
た体が冷えたらしく京助がくしゃみを連発した

「あゝ：とに：；　：いい加減離れろ；風邪うつるぞ」

緊那羅きんならを引き離そうと緊那羅きんならの肩に手をかけようとした京助の手を
振り払い緊那羅きんならが立ち上がる

「：許しませんわ：」

窓の外から聞こえた震えるヒマ子の声

窓枠に葉がかかりヒマ子がゆっくりと姿を現した

その様はまるで井戸から這い上がってきた某ロン毛の女ばりの怖さだ

「緊那羅様！！　お覚悟！！」

カッ！　と目を見開いたヒマ子が自分の種を勢いよく緊那羅きんならに向か
ってマシンガンの様に飛ばしてきた

「甘いっちゃ！！！！」

緊那羅きんならがそういいながら　ダン！！　と畳を強く足で踏むと畳が立
ち上がった

ズガガガガガ　という音と共に畳に種が突き刺さる

「：やりますわね：」

ヒマ子の右目がキラーンと光った

「…お前らなあ；」

京助が咳とくしゃみをしながらいい加減にしてくれと肩を落とした
「今度はこっちからいくっちゃ…」

フラフラしながら緊那羅きんならが足を一步踏み出した
ざく

「あ」

ヒマ子と京助が同時に声を出した

緊那羅きんならが蹲って震えだした

さつきヒマ子の放った種が刺さった畳をモロに緊那羅きんならが踏み種が足に刺さったらしい
相当痛かったのか声も出さずただ震えている緊那羅きんならに京助が静かに近づいた

「…お前実は馬鹿だろ」

足を抑え目を潤ませている緊那羅きんならに京助が言った

「…京助…」

潤んだ目のまま緊那羅きんならが京助に顔を向け

「…京助に…」

唇を震わせながら何かを言おうとしている

「馬鹿京助に馬鹿って言われたっちゃー！！ 私
は馬鹿以上の馬鹿なんだっちゃー！！！」

「オイコラ；」

またも声を上げて泣き出した緊那羅きんならに京助が関西突っ込みをする

「だから【宝珠】もないんだっちゃー！！ 京助の馬鹿——！！！」

「いやソレと俺の馬鹿って関係あるのか？；」

京助の言葉に緊那羅きんならが泣き止む

「関係ないっちゃ。私が未熟だからまだないだけだっちゃ」

さらりと何事もなかったにかのように緊那羅きんならがいった

「未熟？ お前が？」

京助が聞き返す

「そうだったちゃ。私はまだ未熟だから【宝珠】がないんだっちゃ」

緊那羅きんならが肩を落とす

「【宝珠】があれば【天】とこっちの扉も自分で開けられるし…なにより強くなれるんだっちゃ」

「へえ…だから鳥類が必死こいて探してたのか…」

鼻をすすりながら京助がヒマ子を見た

ヒマ子の鉢の中には迦楼羅かるらの【宝珠】が埋まっている
それでヒマ子が動いているのだった

「…強くなれば…京助も悠助も守れるっちゃ…私…ふ…ええええええ」

緊那羅きんならが再び幼稚園児泣きを始めた

「あー！！ 京助が緊ちゃん泣かせてるー！」

悠助が戸をあけて京助を指差して言った

「…俺が悪者デスカー？」

たり…と鼻水をたらして京助が呟く

「大丈夫？ 緊ちゃん…」

悠助が緊那羅きんならに近づいて頭を撫でた

「…悠助…」

緊那羅きんならが悠助に抱きついた

「…緊ちゃん…お酒臭い…」

緊那羅きんならの頭を撫でながら悠助が言った

「…玉子酒で酔っ払ってるんだよ； ソイツ；」

種の刺さった畳をどかしながら京助言った

「酔ってないっちゃっ！！ 京助のばーか」

緊那羅きんならが悠助に抱きついたまま京助に向かって舌を出した

「まあ！ 京様に向かってなんてことを…！」

ヒマ子が緊那羅きんならに向かって叫んだ

「私はよって…ない…っちゃ」

緊那羅きんならの声がだんだん小さくなっていき悠助の体から手が離れそのままぱたりと倒れた

「緊ちゃん？」

「すー…」

悠助が名前を呼ぶと寝息が返ってきた

「緊ちゃん寝ちゃったよ京助」

足元ですーすと寝てしまった緊那羅きんならを見て悠助が京助に言った

「…みりやわかる； …ひ…つくしっ！…」

開けっ放しの窓、一枚だけはがれた畳

「…俺病人なんだけどなあ…ちく…しよ…へ…へくしよっ！！」

「京助汚い；」

唾が飛んできたらしく悠助が顔を服の袖で拭う

「まあ！ 京様！ お風邪を召しておられたのですか！！ まあ…それならば早くお休みに…」

「や・す・ん・で・た・ん・だ・よ・ッ！！；」

ヒマ子が顔に両葉を当てて慌てると京助が怒ったように区切り区切り言った

「京助…緊ちゃんどうするの？ 起きないよ？」

悠助がしゃがんで寝ている緊那羅きんならの頬や髪を突付いている

が緊那羅きんならは起きる気配はない

幸せそうな顔してすーすー寝息を立てている

「緊ちゃんも風邪引いちやうよ京助」

悠助が緊那羅きんならの頬をみょーんと引っ張りながら京助に『どうする』

アイフル♪』のCM犬のような眼差しで訴えてきた

「…しやあねえなあ…；」

ゴホっと一回咳をして京助は寝こけている緊那羅きんならの腕を引っ張った

「京様」

ヒマ子に名前を呼ばれて京助は緊那羅きんならの腕を持ったままヒマ子を振り返った

「…私は…京様にご迷惑をかけているのでしょうか…」

「は？」

いきなり『迷惑か』と聞かれて京助は思わず緊那羅きんならの腕を放した
「痛い」

その緊那羅きんならの腕が悠助の足の上に落ちて悠助が膨れる

「私がいなければ京様は緊那羅様きんならとラ…」

「ハイ!! ソコ!! それそこから強制終了!!;」

ヒマ子の言葉を京助が止める

「…とにかく私は京様にご迷惑をかけているのではないかと…そして…京様はそんな私のことはお嫌いなのではないかと…」

ヒマ子が窓枠から姿を消した

悠助が窓に駆け寄り下を覗き込む

「ヒマ子さん…京助…ヒマ子さんが…」

悠助が京助を振り返って眉を下げる

「…あのなあ…」

ズツと鼻をすすって京助が窓に近づく

「一回しか言わないからな」

京助が窓の下で小さくなって泣いているヒマ子に言った

「俺は嫌いなヤツにはこんな風に声かけたりしねえよ…たしかに多少呆れたり手えつけられないようなことされてるけど…それはそれで…まあ何とかなってるし…楽しいっちゃ楽しいし」

そう言いながら京助は垂れてきた鼻水を服の袖で拭う

「僕も!! 僕も楽しいよ? ヒマ子さんがいて緊ちゃんがいてみんないて!! 迷惑じゃないよ? 全然! 大丈夫だよ!!」

悠助が身を乗り出して笑いながら言った

「…京…様…悠様…」

ヒマ子が顔を上げるとちよつと呆れ顔で笑う京助と思いきり笑顔の悠助がヒマ子を見ていた

「…ってと…俺は緊那羅部屋きんならに連れて行ってくるか」

京助が寝こけている緊那羅を振り返ると緊那羅が寝返りを打って襖にぶつかった

「…酒癖最悪」

京助が緊那羅きんならに近づいて再び緊那羅きんならの腕を持った

「悠ちよつと戸開けてくれ」

緊那羅きんならをおぶった京助が悠助に言う「悠助が駆け寄って戸を開ける
「京様!!」」

部屋から出ようとした京助にヒマ子が叫んだ

「私! やはり貴方様を愛しておりますわ!! あきらめませんわッ
!! 京様っ!! 愛しておりますわー!!」

ヒマ子のラヴラヴフラッシュをモロに受けた京助がおぶっていた緊那羅きんならを落として固まった

「:頭痛いっちゃ:気持ち悪い:」

翌日青い顔をして緊那羅きんならがふらふらしていた

「二日酔いだな」

京助が鼻水をすすりながらベルトを締める

「お前酒弱いし酒癖悪いし」

本日文化祭最終打ち合わせということで珍しく早くから京助が起きていた

まだ完全ではないもの一応は復活ということで母ハルミに登校許可を得たらしい

「:玉子酒って:【ソーマ】じゃないっちゃ?」

壁に寄りかかりながら緊那羅きんならが聞いてきた

「玉子酒は玉子酒だぞ?」

京助が鞆を肩にかけながら緊那羅きんならに言った

「【ソーマ】飲んだ後にもこうなるっちゃ:」

ずるずると壁伝いに緊那羅きんならが下がる

「:【ソーマ】って酒か:」

京助に問いに答える気力もないらしい緊那羅きんならがそのまま蹲った

「:おだいじに」

蹲った緊那羅きんならにそう声をかけると京助は玄関に向かった

「:そーういや:あん時:乾闥婆けんたつばが緊那羅きんならに【ソーマ】飲ませたんだよな:」

靴を履きながらふとそんなことを思い出した京助は迦楼羅達かるらが緊那羅きん

羅を【天】に連れて行った後【ソーマ】のせいではっちゃけている
緊那羅きんならをどうしていたのか少し気になった

>i20195—2575<

【第四回・参】恋のタコヤキ合戦（前書き）

焼肉がかかった文化祭の出し物は【タコヤキ】の屋台
その焼肉勝負とは別に男と男の戦いが繰り広げられることになろう
とは誰も想像してもしなかった

【第四回・参】恋のタコヤキ合戦

黒板にあげられている名前の下にはそれぞれ役割が書いてあった

たこやき処アシハポーン役割

坂田 (タコヤキ神)

池田・は (タコヤキ王)

阿部 (タコヤキ魔人)

栄野 (タコヤキ会長)

高橋・ミ (タコヤキあゆみ)

本間 (タコヤキ班長)

浜本 (タコヤキ浣腸)

「俺のどう見ても食い物屋台の役割じゃない様な気がすんだけど；」

【浜本】と名札をつけた少年が黒板に向かって文字を書いていた坂田に言った

「細かいこと気にしないーい」

そういつて浜本の肩をポンポンと叩いた女子は【阿部】という名札をつけている

「まあ最高責任者がわかればいいんだから…ねえ？ タコヤキ神」

「そーそーミヨコの言うとおりにしない。な！！ 浣腸！！」

ショートカットの『ミヨコ』と呼ばれた女子に鼻水をすすりながら京助が同意する

「そいやタコの方どうなってる？ もらえそうか？」

坂田が浜本に聞いた

「今日はナギたから船でたし…大丈夫だと思うぞ」

【解説しよう。『ナギている』とは海が穏やかだという意味で反対

に荒れている場合には『シケている』という漁師用語である」

「タコがないんじゃないし始まらないしなく……ウチも漁師だけど今大船だからアキアジ獲ってるからなく……」

【本間】とかかれた名札をつけた女子が爪をかじりながら言った

「【タコ】ない【タコヤキ】なんてただの【ヤキ】だし……うっわ売れねえ……!!」

京助が笑いながら言うともわりも頷いて笑った

「目指せ焼肉!! 目指せ総合優勝!!」

さっきまで一言も話していなかった【池田】の名札をつけた長身の少年が立ち上がって燃えている

「……ハルなにかあったのか?」

「何もないサ!! さあ! キアイいれて!!」

無駄に大きな動きをする池田ことハル（本名・池田ハルヒコ）を見て京助が声をかけた

「……またミヨにフラれたか」

坂田がボソつと言うとハルが固まった

「ハイハイ!! ミヨまあたふっちゃいましたー!!」

ミヨコが手を上げて言うとはルがヨヨヨ……と床に泣き崩れた

「お前何回ミヨに告ったよ;」

浜本が椅子をギーギーさせながら呆れ顔で言う

「幼稚園からの片思いだしねえ……こんなガチャピンの何処がいいのか」

「ガチャいうな;」

ミヨコは目が大きく少し前歯が大きいゆえ某子供向け番組の緑色の怪獣にちよつと似ている

「純だと言ってくれ」

ハルが立ち上がり腰に手を当てながらフンつと鼻を鳴らした

「純は純でも単純」

「お!! 上手い!!」

本間が言うのと坂田が拍手した

「ハルもねー結構モテるのに」

阿部が笑いながら言った

「俺はミヨがいいの!」

ハルがキッパリと言い切ると歓声が沸き起こる

「ミヨ愛されてる」

ミヨコが恥らう真似をして笑った

「とにかくだ!! 何が何でも焼肉! 目指すは総合優勝!! 特

に2組なんざに負けられねえ! やるぜ!! お前ら!!」

坂田が机に足をかけて着気合の一言を言った

「ウッス! 若組長!!」

京助とハル、浜本が敬礼をしてハモって言った

「俺は神だッ!!」

坂田が丸めたノートで三人を叩いた

「明日何時に行けばいい?」

母ハルミが捲り上げていた袖口をおろしながら京助に聞いた

「あゝ? 何時でも? 生徒集合は普通通りだけど文化祭自体は9時半からだし?」

足の爪を切りながら京助が言った

「僕劇みたい!!」

悠助が手を上げていうと

「じゃあ劇に間に合うようにいくわ」

母ハルミが笑いながら言った

「…私も行っているっちゃ?」

さっきまで悠助の三つ編み修行の練習台になっていた緊那羅きんならが京助に聞いた

「まあ：明日は一般公開だから：来たきゃ来ていいぞ?」

京助がそういうと緊那羅きんならが嬉しそうに笑った

「緊ちゃんよかったねー!!」

悠助が緊那羅きんならに抱きつく

「せいぜい俺らの売り上げに貢献してくれ」
パチンと京助が爪を切った

「えー…というわけでー…今日は好天にも恵まれー…」

ところどころにキーンという音をはさみながら校長の長ったらしい
挨拶が続いていた

しかし生徒はおそらく（てか絶対）校長の話など右の耳から入れ
てはすぐに左の耳から抜けているだろう

あちこちでボソボソと話し声が聞こえている

その度に校長が　ゴホン！！　と咳払いをするのだがまるで効果が
ない

例えて言う　田んぼにカカシを置いているんだけど効果ないのよ
ね　みたいな感じだった

「…では今日はハメを外し過ぎない程度に盛り上がっていきましょ
う」

最後にキーンとい音を残して長ったらしい話が終わると生徒達
はよっしゃ！と心の中で思いながら姿勢を正して校長のいなくなっ
たステージを見た

「それではこれより第42回正月中学校文化祭二日目開始の言葉を
実行委員長の佐藤さんよりお願いいたします」

司会進行役がそういうとステージの上に【佐藤さん】と呼ばれた文
化祭実行委員長が立った

「皆さん今日は待ちに待った文化祭です。総合優勝クラスには毎年
恒例の焼肉食えんぞ権が与えられるので気合を入れて頑張ってくだ
さい…それでは…」

文化祭実行委員長の佐藤さんがマイクから一步後退しメガホンを手
にとって叫んだ

「正月中文化祭ー…スタート！！」

その掛け声とともに生徒は駆け出して体育館を後にする

「坂田！ 生徒玄関に親父がタコ持つてきているはずだからハルと取ってくる！！」

浜本がハルの腕を引っ張って生徒の波の中玄関に向かった

「窓から垂れ幕下ろしてから生地持ってくるね！」

阿部がミヨコと本間と共に階段を駆け上っていった

「じゃ俺らは：やりますか若組長」

「俺は神だ」

坂田と京助は生徒でこった返している廊下を屋台のある教室に向かった

【たこやき処あしはぽーん】

そう書かれた旗が立っている簡易屋台

屋台の名付け親はタコヤキ神の坂田だった

「ふっざけた名前だよナア：」

チャイナドレスを着た人物が腰に手を当てる旗を見上げてている

「：お前の格好もふざけるとおもうぞ」

京助が教室に入るなりチャイナドレスの人物に声をかけた

「お前らんとコは韓流ブームに乗っかって飲茶喫茶だっけか？」

「ピンポーン」

振り向き扇を広げたその人物は南だった

「今日は【ミナ・ミンミン】とよんでくれ！」

「：お前実は女装好きだろ」

坂田が京助の後ろから南に言った

「んやあ：お前らに勝つためならねえ？」

パチンと扇を閉じて南がニーっと笑う

「今日だけは敵同士ってことで：容赦なしに」

ビツと閉じた扇で南が坂田を指した

「のぞむところだ変態」

坂田もニツと笑った

ピンポンパンポーン：というメロディと共にザザ：という雑音がス

ピーカーから流れた

「只今より一般入場を開始いたします生徒のみなさんは各自の持ち場についてください。尚演劇の…」

放送が一般入場開始のアナウンスを流した

「…いざ…勝負！」

昨日の友は今日の敵でも明日はまた友
文化祭が幕をあけた

生徒でごった返している廊下に更に一般入場客が追加された

「ミヨ!!! 危ないって!!!;」

紙袋を片手にミヨコがそのごった返している廊下を足早に進んでいく

「早く行かなくちゃ坂田達まってるもん」

後ろを軽く振り返りながらミヨが言った

「だからって…馬鹿!!! ミヨ! 前!!! 階段っ!!!;」

「え? つわっ!!!」

本間が叫ぶとミヨコの体がグラツと傾いた

「ミヨ!!!」

落ちる…!! 周りの誰もがそう思ったに違いないのだろうが誰も助けようとはしなかった

あまりにも突然でただ宙に放りあがった紙袋と階段から足を踏み外して崩れたミヨコを見ているしか出来なかった

「や…っ!!!」

ミヨが痛さを覚悟してぎゅっと目を瞑った

トン…

何かにぶつかった

でもソレは痛くも冷たくもなくて逆に温度を感じた

「…気をつけなよ。危ない」

「え…?」

バサバサと紙袋が階段を転がり落ちて中に入っていた半被が散らばった

「ミヨ!!」

阿部と本間が駆け寄る

「ありがとうございます…あの…」

阿部が頭を下げる

「…別に…じゃあね」

ミヨコを本間に預けて頭を下げている阿部の横を静かに通り過ぎる

「…格好いい…人だったね…役得じゃんミヨ」

人ごみに消えていった後姿を三人がぼーっと見ている

「…高校生かな…」

ボソツと本間が言った

「でもあの格好…演劇？」

阿部が本間とミヨに近づきながら言った

「でも演劇ってたしかあんな服装じゃなかった様な気がする…。…ミヨ？」

固まったまま動かないミヨコの頬を本間がペチペチと叩いた

「…かっこいい…」

頬をほんのり赤く染めてミヨコが呟いた

「…惚れちゃった？」

阿部が半被を拾い集めてきてミヨコに言うミヨコがコクリと頷いた

「…お前やっぱ類友の類なんだな」

坂田が壁に寄りかかりながら京助に言った

その視線の先には悠助と緊那羅そして…

「…いとも？」

あいかわらず眠そうな制多迦^{せいたか}がいた

「ハルミママはバザー^{さんなら}見てから来るって」

悠助が制多迦^{せいたか}と緊那羅の間に挟まって二人と手をつなぎながら言った

「あ・そ;」

京助が顔を引きつらせながら返事をした

「コイツも緊那羅きんならと同類どうるいだろ？」

坂田が制多迦せいたかをタコヤキを返すアレで指した

「…同類…っていうか…同類…?;」

緊那羅きんならが横目で制多迦せいたかを見る

「…んならは【天】で僕は【空くう】なんだけど」

その視線に気づいたのか制多迦せいたかが緊那羅きんならを見ながら言う

「…【天】に【空】ねえ…よくわからんけどまあ同類にしとけ」

坂田が手をひらひらさせながら言った

「にしても…阿部達もハル達も遅えな」

京助が廊下に顔を出す

「お!! 来た来た!!」

発泡スチロールの箱をキュッキュ言わせながら浜本とハルが駆けてくる

「スマン!! 親父が生と茹でたやつ間違えてきやがってさ;」

「しっかり親父さん!!!」

浜本の言葉に京助が突っ込む

「あれ? 悠じゃん!!! 久々! …でこの方たちは…」

ハルが緊那羅きんならと制多迦せいたかを見て京助の方を向く

「京助の従兄弟ズだ」

坂田がハルの質問に答えた

「…コスプレが趣味なんだコイツ」

京助が制多迦せいたかの格好を突っ込まれる前にここぞと坂田の【従兄弟】

という答えに乗っかってつけたした

「…へえ…」

浜本とハルが制多迦をまじまじと見ていたところにミヨコ達が入ってきた

「ねえねえ!! 聞いて聞いて!! ミヨがね! ミヨがね!!」

本間が教室に入るなり話し出した

「ミヨが?」

【ミヨ】という言葉に反応してハルが言う

「ミヨが一目惚れましたッ!!」

阿部が言うと一緒にミヨコに視線が集まった

ミヨコは俯き加減で顔を赤く染めている

ハルはというと白く固まったまま動かない

「：誰に」

浜本が本間に聞いた

「さっきミヨが階段から落ちそうになったとき助けてくれた超格好いい人。高校生くらいなんだけど…」

「けど？」

本間の言葉に坂田が突っ込む

「：嫌な予感がするんだけど；」

京助の右の鼻の穴から鼻水がたりつと垂れた

「演劇に出るような格好してたんだけどね」

「演劇：」

本間のそんな言葉に京助が鼻水を啜って制多迦きんならの方向を見ると制多迦と目が合った

「あ!!!! ミヨ!! 見て見てっ!!」

阿部がミヨコをゆすって制多迦きんならを指差した

「きやああああ!!」

制多迦せいたかを見るなり悲鳴を上げてミヨコが阿部の後ろに隠れる

何で自分を見て悲鳴をあげたのかわからない制多迦せいたかがぽかんとミヨコを見る

「：に?；」

視線を集中させられて制多迦せいたかがあわわと挙動不審になった

「あ：でも違うよ似てるけど：髪の色とか服も…」

本間が制多迦せいたかの全身を見て言った

オタオタしている制多迦せいたかに京助がカニ歩きで近づいて小声で言った

「：矜羯羅こんがらもきてるのか?；」

制多迦せいたかがコクリと頷いた

「すいませーん…まだ開いてないんですか？」
髪にウェーブのかかった子連の女性が入り口から覗き込むように言った

「え？ …うっわ！ お客さんだよ！」

お客さん第一号が来店したもののまだ何も準備をしておらずわたわたと半被を着込み材料を準備する

「ママー見て見てこのお兄ちゃん変な格好ー！！」

3歳くらいの女の子がトテトテ走ってきて制多迦を指差した

「…んな格好？；」

女の子の言葉に制多迦せいたかが自分の全身を見る

「…私も京助達に散々言われたっちゃ； …こっちじゃこんな格好しないみたいだっちゃ」

「でも僕格好いいとおもうけどなあ」

緊那羅きんならが言うとお悠助が付け足していつて制多迦せいたかを見上げた

「すいません…あの写真撮らせていただいて構いませんか？」

女の子の母親が申し訳なさそうに制多迦せいたかに言う

「どうぞどうぞ俺シャッター押しますんで」

京助が親子に近づいてカメラを受け取った

「お兄ちゃん抱っこー」

女の子が制多迦せいたかを見上げてクイクイ服を引っ張った

制多迦せいたかがオロオロしながら京助を見ると京助は【やれ】というサインを出した

「ハアイ！！ チーズ！！ サンドイッチ！！」

ピロリン♪ という音がした

「…坂田…京助の従兄弟使えるんじゃないやねえ？」

浜本がタコヤキを焼きながら坂田に言った

「…使えるものは阿呆でも使え…だな」

坂田がニヤリと笑った

「ありがとうございますー！！」

女の子が制多迦せいたかに手を振りながらタコヤキを持って出て行った

「京助」

坂田と浜本が手招きして京助を呼び寄せそして何やら耳打ちをする
と京助がグッと親指を立てた

「緊那羅^{きんなら}」

そして今度は京助が緊那羅^{きんなら}を呼ぶと緊那羅^{きんなら}が首をかしげながらも京助の元に小走りで向かった
そしてやはり何か耳打ちされている

「ええええ!?!」

突然緊那羅^{きんなら}が大声を上げた

「そんなくらい協力しろよな」

京助が言うとしぶしぶながらも

「…わかったっちゃよっ!?!」

緊那羅^{きんなら}が承諾した

「階段降りて右がトイレだから。よろしく」

京助がヒラヒラ手を振ると坂田もヒラヒラ手を振って緊那羅^{きんなら}を見送った

「緊ちゃんどこいったの?」

悠助が制多迦^{せいたか}を見上げて聞くと制多迦^{せいたか}が首をかしげた

「あ!! いらっしゃいませーどうぞー!!」

第一号に続いて第二号のお客が顔を覗かせる

その後ろには第三号、第四号と続いている

そしてその後ろにはアノ格好の緊那羅^{きんなら}が続いて入ってきた

やはり目を引くのかタコヤキが焼けるまでの間制多迦^{せいたか}と緊那羅^{きんなら}の周りにお客が集まっている

「劇か何かに出るんですか?」

「コレ自分で作ったの?」

「変な格好ー!!」

マダムの質問攻めとお子様の相手で制多迦^{せいたか}も眠気の波が今のところ
きていないらしい

「…使えたなお前の従兄弟 (強調)」

坂田がクリンとタコヤキを返しながら言った

「使えるものは何でも使え」

京助が生地の中にタコを落としながら返事した

「ちよつと！ 京助！！」

阿部が京助の半被を引つ張つて京助を呼んだ

「何だよ今忙しいだろが」

「アタシが代わるからそっち行つて」

本間が京助からタコの入ったボウルを奪い取つた

「…何だよ」

屋台の隅にしゃがんだ京助が阿部に聞いた

「あの…背の高い色黒の人京助の従兄弟？」

「あ？… はあまあ…一応」

阿部の質問にドギマギしながら答えた

「双子とか兄弟とかいないの？」

今度は横からミヨコが聞いてきた

「…兄弟…」

京助がお客に囲まれてオタオタしている制多迦せいたかを見た

そして浮かんできたのは

「…矜羯羅…」
こんがら

制多迦と目元がそっくりな矜羯羅こんがら

「いるの！？」

「ぐえっ！！！」

ミヨコが京助の襟首をつかんで声を上げた

「いるの！？ いるんだね！？」

京助をガクガクゆすりながらミヨコが聞いてくる

どこにココまでの力があつたのか恋する女は恐ろしい

「母さんこの人動かないよ？」

男の子の言葉にふと顔を上げた面々は白く固まったまま忘れ去られていたハルの姿を目にした

コポコポコポ：

「もう7杯目よ？ いい加減にしたら？」

コトリと急須をカップのそばに置いてその人物は溜息をついた

「いいんだ：今は飲みたい気分なんだ」

グイッとカップの中身を飲み干すとズイッとカップを差し出した

「もう一杯」

「もうやめておきなさいよ。おねしよでもしたらおケツ：ペンペン
されちゃうわよ？」

差し出されたカップをそっと押し返す

「コレが飲まずにいられるかてんだッ！！ いいから！ ついでくれ
ッ！！」

「何しとんじゃワレ」

坂田の肘鉄が見事つむじ辺りにヒットした

「よー！！ ウチの売り上げ貢献に有難う組長！」

急須を持ったチャイナドレス姿の南が笑いながら言った

「神だっ！！ …おんまえは：何敵んトコでやさぐれてティータイ
ムしとんじゃ」

肘をそのままグリグリと押し付けて坂田が言った

「やー：ミヨが一目惚れしたって？ そりゃ飲みたくなる気持ちも
わからんでもないけどさあ：7杯でしめて700円になりまっせ」

南が坂田の下でつぶれているハルに手を差し出して請求した

「まいどおおきに」

ヒラヒラと手を振る南に見送られて坂田とハルは敵陣を後にした

「今戻ったぞ」

ハルの首根っこを掴んで屋台のある教室に帰還した坂田がチャッと
手を上げた

「ご苦労さん若」

「神だっつーの！！」

本間が手を上げて迎えると坂田がハルをペイッと離れた

「コイツ2組んとこに700円も貢献しくさっててさあ：どうよ」

坂田が頭を掻きながら溜息をついた

「700円は：でっかいな；」

京助が生地を混ぜながら言った

「何してんのさ！！ もー…この馬鹿ハル！！」

ミヨコがハルの頭を叩いた

「：元はアンタが原因でしょ」

阿部が突っ込んだ

「タコヤキ1セットが250円だから：3つ：か」

京助が呟く

「でももう昼時だから飯の方に客足いつてるしなあ：難しいよなあ：」

浜本がタコヤキを返しながら言う

「そーいやウチの看板どうした？」

坂田が教室内を見回して聞いた

「制多迦せいたかと緊那羅きんならなら母さんと悠助と一緒に飯に行った」

京助が答えた

「何ッ！？」

坂田が叫んだ

「痛いよなあ：看板までいなくなっちゃあ：」

浜本がはあと溜息とつく

「ハルミさんきてったのか！？； つああああ！！」

「そっちかい」

坂田が嘆きの叫び声をあげると本間がスパーンと突っ込んだ

「だって！！ ハルミさんきてたんだろ！？ ハルミさん！！ く

うううう…ハル！ これもそれもお前のせいだッ！！ 馬鹿野郎

！！」

坂田がハルに向かって怒鳴った

「つとに：ココの男どもときたら：アノ人みたいないのないのかしら」

ミヨコが言うのとハルがぴくつと反応した

「…そんなに格好よかったのかソイツ」

ハルがミヨコに聞いた

「え？ …そりゃあもう格好よかったよ？ 名前も言わないで助けて当たり前のように振舞って…ねえ？ 阿部！！」

ミヨコが思い出しながら話すと阿部の肩をバシッと叩いた

「…そっか」

ハルが俯きながら言った

「…ミヨ…俺は…」

ハルが何かを言おうとした時教室の後ろの戸がガラリと開いた

「若！！」

やたらとでっかく低い声が教室中に響いて一般のお客が静まりかえった

「馬鹿！！ 三浦！！」

そしてその後聞こえた声に三浦が誰かに引っ張られ戸口から消えた

「…若お客さん」

本間が壁にへばりついて今だ母ハルミに会えなかったことを嘆いている坂田に声をかけた

ぞろぞろと教室に入ってきたのは黒系スーツを身にまとった坂田組の面々

ソレを見ても何事も無かったかのようにタコヤキを購入していく客ココら辺で坂田組が町民とうまくいっていることがわかる

「ミッツ、半被少し大きかったんでないかい？」

髪をビシッと結び上げて眼鏡をかけ着物を着た女性が坂田の半被を引っ張って言った

「仕方ないですよ姐さん。組の者が着てたものですし」

柴田が言った

「半被有難うございましたおばさん」

阿部と本間、浜本が着物の女性に頭を下げた

「やだよお！！ 可愛い息子の出しモンだってえんだ。なんでも貸してやるさね」

カラカラと笑って坂田の頭を叩く

「じゃあその可愛い息子が焼いたタコヤキ買ってってくださいよ」
京助がココゾと売り込む

「まったく調子いいねえキョン助は。ハルちゃんと悠は来てないのかい？」

坂田母が京助に聞いた

「今さっきまでいたんすけど飯の方行っちゃったスよ」

客にタコヤキを渡してお金を受け取りながら京助が言う

「…親父は？」

坂田が柴田に聞いた

「ああ…組長なら…」

ガラガラガラガラガラ：

「…坂田：親父さん来るって言ってたのか？」

京助が坂田に耳打ちした

「…ああ； この前のヤツで母さんブチ切れてそれから人の多いところに強制的に連れ出してるんよ； で…今日も…つれてくるとか言ってたんだけど」

ガラガラガラガラ：

廊下の向こうからだんだんと近づいてくる台車の音

「…俺さあ…最近嫌な予感ってことごとく当たるんだわ…」

京助がフツと笑って坂田の肩を叩く

「…俺も今日、今、この音に関しての嫌な予感はノストラさんと対張るくらいの中すると思いますぜダンナ」

坂田と京助がそろって教室の戸口に目をやると丁度台車が止まった台車の上には【愛別産おいしいキノコ】と書かれた明らかにどっかのスーパーから持ってきたと思われる大きなダンボールが二つ繋が

ってガムテープで固定されている

「…どきな菅原」

坂田母が台車を押してきた組員に言い放つと大股で台車に近づきダンボールを掴んで投げた

「…坂田のお父さんって…」

阿部が小声で言う

「…何やってる人だっけ…」

ミヨがそれに続いていった

「…どこから借りてきたんだい…」

ダンボールの中にいたのは正月町のマスコットキャラクター【カモメのマーシー君】（の着ぐるみを着た坂田父）だった

「…相変わらずだなお前の親父さん」

京助がへつと笑って坂田に言った

「…おかげさまで」

坂田が顔をそらして返した

「今すぐ脱ぎなッ！！　この阿呆！！」

足をむき出しにして坂田母が着ぐるみに手をかけ脱がそうとする

「やめッ…母さん！！！！　勘弁してくれ！！」

坂田父が着ぐるみで必死に抵抗する

「…なあ坂田…アレ…ってかお前の親父さん新しく看板で使えんじやねえ？」

浜本が言った

ソレを聞いた坂田の眼鏡がキュピーンと光った

ガラガラガラガラガラ…

後ろに【タコヤキ処あしはぽーん】ののぼりを掲げマーシー君（坂田父）をのせた台車が教室から旅立った

「使えるものは親でも使え」

坂田が悟ったように言った

「ところで若」

柴田が坂田を呼んだ

「何だ？」

「若の彼女って誰です？ この間ウチまで訪ねてきたと組の者から聞いたんですが：俺見れなかったんで：文化祭に来れば見れるかと思っただんですが」

柴田がにっこり笑って聞いてきた

「：なあ：柴田さんの言ってるのもしかして：」

京助が笑いをこらえながら坂田に言った

「言うな」

坂田が引きつりながら京助の腹に肘鉄を食らわせた

「何？ ミツツ彼女いるのかい？ キョン助？」

坂田母がタコヤキを爪楊枝にさしたまま話しに入ってきた

「いますヨー隣のクラスで看板娘やってますヨー」

「京助デメエッ！！；」

爽やかに（エセっぽい爽やかさ満開）笑いながら京助が言うと坂田が京助の半被の襟を掴む

「照れるんじゃないよおこの子は：どれどれ：隣のクラスかい？」

坂田母がタコヤキを持ったままそくさと隣の教室に向かっていった

「ちよ：ま：っ母さんッ！！；」

坂田が慌てて後を追おうとするのを京助が笑いながら止めた

「若、俺も見てきます」

柴田も教室から出ていった

「俺も！」

「じゃあ俺も！！」

次々に組員が教室を後にする

「待てって！！； コラ！お前らーッ！！；」

坂田の叫び声が廊下まで響いた

「三番テーブルあんまんとカレーまんおねがいしまあすー」

だいぶ客足が飯に向かったとはいえ結構お客が入っている2組の教室
その半分以上がやたら黒い服を着ている

「…可愛い息子より敵に協力すんなよ…」

京助を振りほどいてやってきた坂田が2組の売り上げに貢献している
母等を見てがっくり肩を落とした

「いやゝっはっは！ まっさか南だとはおもってなんだよ！」

坂田母が豪快に笑ってカップのお茶を飲み干した

「あはははははは！！ まま！ ギョーと！！」

そして空になったカップに南が再び茶を注ぐ

「似合ってますよ南君。去年も可愛かったですけど」

柴田が笑いながら言う

「いやーん有難うございますうーサービスしちやおうかしらっ」

そう言いながら身をくねらせて南が笑う

「…駄目だこりゃ…」

はあと溜息をついて坂田は2組を後にした

「どうだった？」

ミヨが戻ってきた坂田に聞いた

「すっかり出来上がってましたヨ…こりゃ…かなり痛いぞ； …ど

うすんだ京助」

坂田が鼻水をティッシュでかんでいる京助に言った

「何で俺に振るよ」

丸めたティッシュをゴミ箱に突っ込みながら京助が言った

「元はお前が母さんを捲し上げて2組に向かわせたのが原因だ。何
とかしろ」

坂田が京助に指を突きつけて言った

「んなこと言っただって…」

「京助ー！！ たっだいまー！！」

トフッと京助の腰に悠助が抱きついた

「お客さんいないねー？」

教室内を見渡して悠助が言った

「いないだろう？　それはなく京助のせいなんだぞ」

浜本が悠助に言った

「お前な…」

京助がジトツとした目で浜本を見る

「そうそう。京助が悪いんだよ悠」

阿部が頷くとミヨコも本間も頷いた

「何やらかしたの京助」

母ハルミと制多迦^{せいたか}、緊那羅^{きんなら}が少し遅れて入ってくると坂田が目が大きくした

「ハっ…ハルミさんっ」

「あら坂田君。京助が何かやらかしたの？」

母ハルミがにつこり笑って坂田に話しかけると坂田の顔が緩む

「え…いや…その…」

頭をかきながら照れて俯く坂田を見て京助が

「坂田の彼女が見たいって言った坂田の母さんに坂田の彼女は隣にいますよ…って親切に教えたただけだ」

と母ハルミに言った

「なっ!?!?　京助ッ!!　お前ハルミさんにまでっ!?!?」

坂田が京助の肩を掴んでガクガク揺すった

「…うすけ」

ガクガク揺すられている京助の腰にくっついていて悠助に制多迦^{せいたか}が声をかけた

「…たいて…」

どうやら眠気がきたらしく自分を指差して悠助に言った

「え?　あ…うんわかった」

悠助が京助の腰から離れて手を振り上げた

「悠ちゃん!!」

母ハルミが声を上げた

「駄目でしょ!!　人を叩いちゃいけませんっ!!　京助も止めなさいッ!!　まったく…」

母ハルミが悠助に近づいて京助を小突いた

「何で俺が怒られるよ；」

「ごめんなさいねタカちゃん」

悠助の手を取って母ハルミが制多迦せいたかに謝る

「…や：あの：叩いて欲しいんだけど；」

制多迦せいたかが眠そうにそして困ったように母ハルミを見る

「…お前マゾか？」

坂田が京助の肩に両手を置いたまま制多迦せいたかに言った

「制多迦せいたかは寝ちゃ駄目なんだっちゃ； だから寝せないようにこう

やって…」

緊那羅きんらが近づいてきて悠助の代わりに制多迦せいたかを叩こうと手を上げると

「緊ちゃんまで！！ 何してるのッ！！ やめなさいッ！！」

母ハルミに怒鳴られて手を引っ込めた

「むやみに人に手を上げるもんじゃありませんッ！！」

ペシッと緊那羅きんらの手を叩いて母ハルミが怒る

「ご：ごめんなさい；」

緊那羅きんらが謝った

「京助のお母さん怒ると怖いね…」

阿部が京助に言った

「…ああ；」

京助が説教食らっている悠助と緊那羅きんらを見ながら言うのと坂田が京助の肩を叩いた

「なあ：お前の従兄弟（仮）頭ふらついてるぞ」

そういわれて制多迦せいたかに目をやるともはや限界らしく頭が一定のリズムで動いている

まるで制多迦せいたかの周りだけブラームスの子守唄が流れているかのようだった

「…寝かせちゃ駄目なんじゃなかったか？ お前の従兄弟（仮）」

「…たぶん；」

坂田が言うのと京助が頷いた

「：起さなくていいの？」

阿部が言った

「お前はあそこに俺を送り込みたいのか；」

京助が親指で【あそこ】と指した場所ではまだ母ハルミに説教を食らっている緊那羅きんならと悠助がいた

「俺なら喜んでいくね」

坂田が言った

「じゃあお前いけよ；　バシッと思いつきり。何ならハリセン作って」

京助が言うとき坂田がチツチツと指を立てて

「行ってもいいが行ったらハルミさんの俺に対する好感度下がっちゃいますから。残・念」

と言った

「あ！！」

ミヨコが声を上げた

「：いたい；」

制多迦せいたかが頭をさすっている

「：出やがった：；」

京助が目を背けながら呟いた

「ハル！　あの人だよ！！ミヨを庇ったの！！」

本間がハルに言った

「え：：？」

本間の言葉にハルが顔を上げた

ゆっくり手を頬に添えるとカチャリと手首にはめた輪がぶつかって音を立てた

お決まりの人を見下しているようなポーズ

そしてやつぱり口元には笑み

「：んがら：」

頭をさすりながら制多迦せいたかが名前を呼んだ

「だから一緒に行動しろっていったのに」

頬に手を当てたまま矜羯羅こんがらが呆れたように笑った

「きょんがらさん!!」

やっぱり上手く名前がいえない悠助が矜羯羅こんがらに駆け寄る

「悠助：僕は【こ・ん・が・ら】なんだけど」

につこり笑って一言一言区切りながら自分の名前を悠助に教える

「こ：んがら：」

悠助が繰り返す

「ハイ、言ってみて」

しゃがんで悠助に言う

「：きょんがら」

「……」

そしてそのまま固まる

「：仕方ねえよなすっげえ言いにくい名前してるし」

京助が言った

「：早口言葉になりそうだな：」

坂田も言った

「絶対早口で言ったらカムって」

浜本も言う

「言いにくいナア」

三人がハモって言った

「：人の名前にケチつけないでくれる？」

矜羯羅こんがらが微笑みながらでもどこかムカツときているっぽく言った

「矜羯羅こんがらこんがらがってころがりおちてこんがらがる」

京助がボソツと言う

「おお!! いいじゃんソレ!! こんがらきよ……」

「いや言えてねえし」

京助の即席で作った早口言葉に挑戦した浜本があえなく撃沈した

「だーかーらー!! こんがらこんぎゃ：こ：きゃ?」

坂田も挑戦してこれもまたあえなく敗れる

「：怒るよ?」

矜羯羅こんがらが笑顔のまましかしドスの聞いた声で言った

「アイツか…」

ハルがボソツと言う

「え？ ……そうだよ？」

ミヨコがソレに気づいて返事をした

「格好いいでしょ。…名前言いずらいっぽいけど」

チラッと矜羯羅こんがらのほうを見てミヨコが赤くなる

「きよ…ここ…矜羯羅こんがらさんっていうんだ…言いにくいけど…名前わかって嬉しい」

そんなミヨコを見てハルが俯いた

「ハァーイ！！ 皆さんリピーツアフターミィ？ 【矜羯羅こんがらこん

がらがってころがりおちてきよんがらがる】！！ OK？」

京助がネイティブなエセ外国人になってレクチャーし始める

「先生言えてません」

本間が突っ込んだ

「ハァイそこ！！ 突っ込まナァーイ」

京助が本間を指指して言うときスコーンという小気味いい音が自分の後頭部から聞こえその直後ジンジンと痛み出した

「本気で僕を怒らせたい？ 京助」

振り向くと【エエ加減にせんかワレ】オーラをかもし出しながらも

矜羯羅こんがらが笑顔で指を弾いている

どうやら高速で玉を飛ばしたらしい

「…指パッチン上手いなアイツ…」

浜本が感心して呟いた

そして矜羯羅こんがらがもう一回指を弾くと今度は制多迦せいたかの額に玉がヒットする

「…りがとさん」

制多迦せいたかが額をさすりながら矜羯羅こんがらに言う

「…以心伝心してるなお前の従兄弟（仮）達…双子か？」

坂田が後頭部を押さえてしゃがんでいる京助に聞いた

「知るかッ；」

涙目で京助が怒鳴った横をハルが無言で通り過ぎ矜羯羅こんがらの前で止まった

「…ハル？」

ミヨコがハルの名前を呼んだ

「…何？ 君…」

矜羯羅こんがらが頬から手を離し腕を組んでハルを見た

矜羯羅こんがらより背の高いハルは矜羯羅こんがらを少し見下ろすようにして黙って見る

「…ぶだ」

ハルがボソツと言う

「は？」

矜羯羅こんがらが聞き取れなかったらしく聞き返す

「勝負だ！！ きょんからだか言うお前ッ！！」

ハルが大声で矜羯羅こんがらに宣戦布告をした

「勝負って…ハル！？」

浜本がハルに駆け寄って肩を掴む

「無理だハル！！ 名前の言いずらさじゃお前はもう負けている！
！ 考え直せ！！」

坂田も駆け寄ってハルを宥めてんだかわからないがとにかく言った

「…勝負？ 僕と？」

矜羯羅こんがらがクスクス笑う

「…ばっか…ハル…ッ；」

京助が【あのヘンテコリンな出来事】で見た矜羯羅こんがらの強さを思い出す

「京助！！」

緊那羅きんならが京助に駆け寄ってきた

「あの人止めないと…もし本当に勝負とかになったら私じゃ…矜羯羅こんは止められないっちゃ」

緊那羅きんならが悔しそうに言った

「わかってる…っけど；」

止めないとヤバイという事は京助でもわかる

しかしハルがミヨコの事となると猪突猛進でもうどうにも止まらない山本リンダになってしまうということもわかっている

「とめるったって………制多迦………!! 制多迦なら………」

京助が制多迦を振り返ると制多迦が眠そうな顔のまま胸の前に両手でペケを作っている

「……っつかえねえ………」

京助と緊那羅きんならがそろって肩を落とした

「何か穏便に解決………」

京助が辺りをきよろきよろしてハルと矜羯羅こんがらの勝負をやめさせれないかとする

「とうちゃく……ご苦労様でした組長……!!」

その時【たこやき処あしはぼーん】ののぼりをつけたマーシー君

(坂田父)を乗せた台車が校内一周客集めツアーから帰還した

「……!! そうだッ! いゝこつと考えたッ!」

坂田父を見て京助が何かを思いついたらしくハルを止めようとしている坂田と浜本の元に走って何やらモソモソ伝えている

「ナアイス……!! 京助……!! よく思いついたッ……!! 一石二鳥じゃん……!! 偉い……!! 褒めてつかわす……!!」

坂田が京助の背中を笑いながらバシバシ叩く

「な? な? いいだろう? いや俺って天才………」

京助が浜本と坂田そしてハルに指を差しながら自分の考えのすばらしさを主張する

「ハイハイハイハイ……!! 注目……!!」

坂田が手を叩きながら言った

「レディ……ス……!! アーンドジェントルメ……ン………」

坂田が両手を広げてエセ司会を開始する

「うっわ微妙に疑問形な呼びかけだし………」

それに対して阿部が突っ込む

「これより! 我がたこやき処あしはぼーん主催……!! 高橋ミヨコ

争奪！！ タコヤキ大食い大会を開催イタシマス！！」

坂田が大声で言うのと廊下を歩いていた生徒や客が覗き込み始めた

「それでは！！ 選手の紹介！！ まずは……あゝあゝコオオナア

！！ ミヨの事となると猪突猛進山本リンダ！！ 風林火山も力

二歩き！！ 身長184センチ！ 結構モテてるけどミヨ以外は眼

中になし！！ 池田ハルヒコー！！」

坂田がよくわからない言葉を並べてハルを紹介する

「続いてあゝおコオオナア！！ キダムからの使者か！！ はたま

た中国雑技団か劇団四季の役者か何か！！ 俺には負けるが結構

美形！！ 名前のいいずらは天下一品！ 栄野京助の従兄弟（仮）

！！ きよ……とにかくコイツ……！！！！」

名前を言うところでかんでしまった坂田が矜羯羅を指差して紹介する

そんな坂田の大声の紹介に教室前の廊下にはギャラリが集まりだしていた

「……一体何？」

坂田に指を指されたまま矜羯羅が言った

「いいか？ よおく聞けよ？」

京助が矜羯羅に近づいて小声で話し出した

「……ハルはお前と違って普通のヤツなんだ」

「わかってるよそんなこと……だから何？」

矜羯羅が溜息混じりに聞き返す

「そんな普通のヤツとお前が戦ってどっちが勝つかなんて俺でもわかる」

京助が矜羯羅に指を突きつけて言った

「そこでだ。ココは一つ力と力の戦いではなく他のことで戦ってみたらどうだ？」

「他？」

矜羯羅が京助の手を掴んで突きつけられていた指を下ろさせる

「そ……他」

に……と京助が笑う

「：別にいいよ：？」

矜羯羅こんがらがにっこりと笑ってハルを見た

「どんな勝負でも勝つのは僕だから」

そう言っただけでいた京助の手を離れた

京助が坂田と浜本に向かって親指を立て【やったぜ！丸め込み成功！！】と合図すると坂田と浜本も親指を立てて返した

「ルールは簡単！！どっちが多くタコヤキを腹中に収められるかで勝敗が決まるだけ！！負けたヤツは勝ったヤツの分までお会計御願ひ致します！！審判は俺！タコヤキ神坂田深弦が担当させていただきます！」

そう言っただけで坂田がお辞儀するといつの間にか教室の中まで入ってき
ていた客から歓声が沸き起こった

「頑張れ！！池田ンとこの一番下！！」

「ハルちゃん！頑張るんだよ！！」

さすが地元とあってハルに対する声援が多い

「ヘンな格好の人！！頑張っ！！」

「こっちむいて！！」

ソレに対して矜羯羅こんがらに声援を飛ばすのは比較的若い女性とお子様だった

携帯でバシバシ写真も撮られている

「：うるさいなあ：」

矜羯羅こんがらが溜息をついて言った

「おい：お前」

ハルが矜羯羅こんがらを呼んだ

「ミヨは渡さないからな」

「：よくわからないけど僕は負けないよ」

ハルのミヨは渡さない宣言に矜羯羅こんがらが不敵な笑みで返した
ガタガタと机を移動させて決戦の場を作ると矜羯羅こんがらとハルが席に着いた

「ねえねえ何やるの？」

悠助が京助の半被を引つ張って聞いた

「俺らの栄光の焼肉ロードへの足掛け」

京助が顎に手を添えてフツと笑った

「…んがら負けず嫌いだから…」

頭をふらふらさせながら制多迦^{せいたか}が呟いた

「…寝るなよお前…」

京助が叩こうとして手を上げるとふと母ハルミが目に入り手を下ろす

「…つに頭叩かなくても他のところでいいんだけど…叩いてくれな

い？」

制多迦^{せいたか}のその言葉に悠助と京助は顔を見合わせて同時に制多迦^{せいたか}の尻を叩いた

「…りでいいんだけど…」

二人に片方ずつ尻を叩かれた制多迦^{せいたか}が尻をさすりながら言った

「なんの騒ぎだい？」

隣でお茶していた坂田組の面々が騒ぎを聞きつけて戻ってきた

ふと柴田が京助のほうを見るとペコリと頭を下げた

「…柴田さん？」

京助は柴田の行動に疑問を持ちつつも次の瞬間には忘れていた隣からただならぬ気配を感じて目をやると緊那羅^{きんなら}が柴田をじっと睨んでいる

「お前…まだ柴田さん嫌いなのか…」

京助の問いかけに緊那羅^{きんなら}は力強く頷いた

「大っ嫌いだちやッ！！！」

ハルと矜羯羅^{こんがら}の前に焼きたてのタコヤキがのっそりと積みあがった皿が置かれた

「…何コレ…匂的にすっぱいんだけど」

矜羯羅^{こんがら}が山盛りでんこ盛りのタコヤキを突付いた

「しかも熱そうだし…何の勝負なわけ？」

ソースのついた指をペロっと舐めながら坂田に聞いた

「…人の話聞けよアメリカンクラーツカー頭め…振って鳴らすぞ」

坂田が言う

「鳴らせるものなら？」

そんな坂田に矜羯羅こんがらがにっこりと笑顔で言った

「…ムツカ…：…まあ簡単に言うとかレ！！　コレをたくさん食ったほうが勝ちなわけだ」

坂田が【コレ】とタコヤキを指差して説明する

「…ふうん…」

矜羯羅こんがらが目を細めてタコヤキを見た

「二人の男が決闘するようない女なのかねえ…このガチャ」

阿部がミヨコを見る

「…ハル…馬鹿…」

ミヨコが大きな目を半分閉じて呟いた

「…本当は好きなんですよ。ハル」

阿部が小さな声で耳打ちするとミヨコが飛びのいた

「な…；」

「ばればれだよ。何年アンタと友達やってるとおもってんの？　い

い加減のトコで素直にならないと」

阿部がミヨコの鼻を摘んで言った

「みんななくすことになるよ？」

阿部がそう言って手を離れたとき金属製のボウルを叩いた乾いた音が教室に鳴り響いた

沸き起こる歓声の中ハルがタコヤキをものすごい速さで口に運んでいく

「…お前食わないのか？」

京助が机に肘をついている矜羯羅に言った

「…まずそうだし？」

矜羯羅こんがらがにっこり笑ってタコヤキを指差した

「俺が焼いたタコヤキにケチつけるたぁいい度胸だ！！　口あけろ

口ッ！！」

京助がタコヤキを爪楊枝に指して矜羯羅こんがらに突きつける

「い・や・だ・よ」

その手を掴んで矜羯羅こんがらが言うと後ろから坂田と浜本が押さえつけた
「…食べ」

押さえられていない方の手で直手掴みで矜羯羅こんがらの顔にタコヤキを押し付ける

周りから沸き起こる【食べ食べ】コール

「…助けないんだっちゃ？」

緊那羅きんならが制多迦せいたかに聞くと制多迦せいたかが苦笑いを返してきた

「きよんがらさんタコヤキ嫌いなのか？」

悠助が制多迦せいたかを見上げて聞いた

「…んない； 僕も初めてみる食べ物だし」

制多迦せいたかがタコヤキを押し付けられている矜羯羅こんがらに目を向けた

「いいか…ムグ!？」

矜羯羅こんがらがいい加減にしろと口を開き言いかけて【か】のところで京

助がタコヤキを押し込む

そして

「ヨッシャー!!!」

つと声を上げると拍手が起こった

矜羯羅こんがらはというと机に手をつけて口を押さえたまま動かない

隣ではハルがタコヤキを周り気にせずかつ食らっている

「きよんがらさん負けちゃうよ？」

悠助が緊那羅きんならと制多迦せいたかを見ていった

「…怒ったんじゃないんだっちゃ?；」

動かない矜羯羅こんがらを見て緊那羅きんならが制多迦せいたかに聞いた

「…かかない；」

制多迦せいたかが首をかしげた

ゆっくりと口から手を離して矜羯羅こんがらが顔を上げた

口の端に微妙にソースが着いていたらしくそれを手で拭うとタコヤキに刺してあった爪楊枝を掴んだ

「これで食べればいいんだね？」

矜羯羅こんがらがにつこりと笑った

矜羯羅こんがらを見たまま周りの観客そして京助達も止まってしまった

「…すごい…」

悠助が目をきらきらさせて矜羯羅こんがらを見ている

「…これで終わり？」

クィっと手の甲で口を拭うと矜羯羅こんがらが微笑んだ

「お前…爪楊枝持った意味ねえじゃん…」

京助が矜羯羅こんがらの持っている爪楊枝を指差して言う「と観客がどよめきだした」

「あの山盛りてんこ盛りのタコヤキを一気にかきこみやがった…」

「…どこに入ったのかしら…」

「すげえ…」

「やっぱり雑技団の人なのかしらねえ…格好もアレだし」

客がざわざわと話し出す

「お…おかわり追加ッ!!」

坂田が屋台の中でタコヤキを焼いている本間と浜本に向かって叫んだ

「ッ…俺もッ!!」

最後の3個のタコヤキを口に突っ込んでハルも手を上げると客から拍手が起こった

「…不味そうで食うの嫌だったんじゃないのか？」

矜羯羅こんがらの前に再び山盛りてんこ盛りのタコヤキを置きながら京助が言った

「いいじゃない？ 別に…それに僕は不味そうって言ったんであつ

て不味いとは言っていないからね」

「…ようは気に入ったわけか」

ヘッと口の端で京助が笑った

「きょんがらさん頑張れー!!」

悠助がピョンピョン跳ねて矜羯羅こんがらを応援すると制多迦せいたかがひよいと悠助を肩車した

そんな悠助に矜羯羅こんがらが笑顔で手を振る

「…面白いね…」

矜羯羅こんがらが呟いた

「は？ 何が」

京助が聞き返す

「…悠助も京助も」

矜羯羅こんがらが京助に向かって微笑みながら返す

「僕が君を殺そうとしたこと…いくら馬鹿だからって忘れちゃいないでしょ？」

「…そりゃあなスツゲエ痛かったし？」

京助が自分の肩をさすりながら言った

「それなのに自分から僕に近づいてくるんだから…面白いよ京助は…。そして悠助も…制多迦せいたかがあんなに懐いてる」

矜羯羅こんがらが目を細めて制多迦せいたかを見ると京助も同じく制多迦せいたかを見た

「俺には悠が懐いてるように見えるけどな…どっちにしろいいんじゃない？ 仲がいいんだからさ」

制多迦せいたかに肩車をされてはしゃぐ悠助を見て京助は目を細めて微笑む
「俺ン家父親いねえから…悠は父親の顔もしらないし父親がどんなものののかもわからないだろ？ …俺も顔覚えてねえんだけどさ；

…だからなのかな悠には笑っていて欲しいんだわ俺。笑ってる悠を見terると俺も嬉しいし」

「…やっぱり面白いよ京助は…僕にそんな話しちゃうんだから…」

矜羯羅こんがらがフツツと笑う

「なっ…いいだろ別に！… …早く食えよ負けるぞ」

京助が矜羯羅こんがらに食って掛かった

「…でも…わかる気がするよその気持ち…僕にも…」

矜羯羅こんがらが呟いてタコヤキに爪楊枝を刺した

「こんな僕にも大切なものがあるからね…でさ話し変わるんだけどいきなり話題転換宣言をして矜羯羅こんがらが京助を見た

「この勝負なんの為にしてるわけ？」

矜羯羅こんがらのその言葉に京助が勢いよく肩を落とした

「…あのな；」

机に手をついて起き上がった京助が隣でタコヤキを一心不乱に口に運んでいるハルを指差した

「…コイツの」

そして次に屋台の横で二人の勝負を見ているミヨコを指差す

「…コイツにとってそこにいるのが大切なものなんだ。コレはソレをかけた戦いなわけよ。OK?」

「ふうん…」

矜羯羅こんがらがハルとミヨコを交互に見て溜息をついた

「僕の大切なものがなくなるわけじゃないからどうでもいいんだけど…勝負に負けるってのは嫌だからね」

爪楊枝に刺してあったタコヤキを口に入れて矜羯羅こんがらが言った

「…本気でいくから」

そういうと山盛りでんこ盛りのタコヤキが乗った皿を口元に運んだそしてまたも沸き起こる歓声

一瞬で消えたタコヤキの山

そして口の端を手の甲で拭って矜羯羅こんがらがハルを見て微笑んだ

「別に君の大切なもの欲しいわけじゃないんだけど…勝負だからね…僕が勝たせてもらうよ？」

そんな矜羯羅こんがらを見てハルがタコヤキを一気に口に押し込んだ

「だから…爪楊枝いらねえじゃん；」

京助が矜羯羅こんがらの爪楊枝を指差して言った

【保健室】

廊下に突き出してある微妙に緑かった黒い板にはそう書いてあった

「馬鹿騒ぎするからよ。反省なさい！」

胸に【保健・山本】というネームバッヂをつけた中年の女教師が水の入ったコップをハルに差し出した

「すんません；」

白いベッドの上でハルはそのコップを受け取ると手の中にあつた錠剤と一緒に水を飲んだ

「文化祭で気分が盛り上がるのはわかるけど…体壊したら元もこのないでしょう？ 一体何個その腹にタコヤキが詰まってるんだか…」
山本先生が溜息をつきキュルつと音をさせて椅子に座りペンを走らせる

「単なる食べすぎ」

そう言ってペンを置きハルに【来室者症状票】と印刷された用紙を差し出した

「ご迷惑かけました」

「本当だよ」

ハルが戸口で言うとうと山本先生が笑いながら言った

「ひつでえ優子ちゃん；」

「山本先生だろ！！ …まったく」

名前で呼ばれて山本先生が声を上げたがハルはそのまま戸を閉めた
「よー」

ふと声をかけられて顔を上げると坂田と京助…屋台チームの面子がチャツと手を上げた

「大丈夫か？」

京助がハルに近づき腹をさするとハルは腰を引いて苦笑いを浮かべた
「格好悪いから慰めんなよ？」

ハルが引きつり笑いのまま言うとうとミヨコが京助を押しつけてハルの前に立った

「ばっかじゃない！？」

大きな目を吊り上げてミヨコが怒鳴った

「廊下では静かに！！」

保健室の戸が開いて山本先生が怒った

「す…すいやせくん；」

浜本が顔の前に手を立てて謝るとそそくさとその場を離れて教室に戻った

「：静肅に穩便に和やかに」

坂田がミヨコを宥める

「：アイツは？」

ハルが誰もいなくなつてあとは屋台の解体だけとなつた馬鹿騒ぎの後の教室をぐるツと見渡してまた正面を見ると左頬に平手打ちを食らつた

「だから穩やかにつてゆゝたろが！！ ミヨツ！！！」

坂田がミヨコの腕を掴んで本間がハルとミヨコの間割に割つて入りミヨコを止める

「矜羯羅こんがらならいねえよお前がぶつ倒れたあとで悠達と先歸つた」

京助が言ふとハルが左頬を押させえながら俯いた

「負けたんだ俺……」

「まだ言う！？」

ハルがボソツと呟くとミヨコがまた手を振り上げた

「ノーノー！！！！ 暴力反対！暴力反対！！！」

ソレを浜本と坂田そして本間が止める

「アンタなに考へてるの！？ なんであんなことしたの！？」

「おーちーっけーつて；」

怒鳴り散らすミヨコに京助が言つた

「元はアンタが素直にならないから悪いんじゃない」

さつきまで黙つていた阿部が言ふとミヨコが振り上げていた手を下ろした

阿部がハルに近づきハルの腕を引っ張つてミヨコの前に押し出した

「とつくの昔にカップル成立してたはずなのにこのガチャが変なところで乙女するもんだからこんなことになつたんでしょ」

ミヨコ以外には阿部がなにを言つてゐるのかわからなくて顔を見合わせる

「不安だつたんだもん」

ミヨコが俯いた

「だって！！ だって不安だつたんだもん！！ ハルがあんまり好

きって言うてくれるから…ミヨは…」

言葉に詰まったミヨコの頭を阿部が撫でる

「…え…ハイ?;」

坂田が手を上げた

「…つまりは両思いだったってこと」

阿部がさらっというと同が固まる

「このコは天邪鬼だから。ハルがすこたま好き好き言うてくるのが本当なのかわからなくなってたわけ。それを隠すため変な意地はっちゃってたんだよね?」

阿部がフォローするとミヨコが鼻を噉って頷いた

「…ねるとん…」

「古ッ;」

浜本がぼそつと呟くと京助が突っ込んだ

「でもミヨはき…名前がいいづらいアイツを…」

ハルが小さく言う和阿部がハルを見た

「懂れと好きとは別モンでしょが阿呆」

その言葉にミヨコが頷く

「言えるね?」

阿部がミヨコの耳元で囁くとミヨコが目をこすって顔を上げた

「いやゝあ…青春でしたな!!」

坂田が伸びをしてしみじみと言った

「焼肉は逃したけどな」

その横で愛車【にぼし】を押しながら南が言う

「お前らだって」

京助が突っ込んだ

「屋台部門の優勝がまさか取り消し食らうとはな…;…まあ売り上げの半分以上があれの分だったし…仕方ないけどさ」
はぁと溜息をついて京助が言う和阿部が頷いた

【あれ】とはタコヤキ大食い勝負のことであまりにも馬鹿騒ぎをし

たために売り上げ的には優勝だったにもかかわらず2年3組の屋台部門は失格となってしまった

「いい線いってただけどなあ…坂田組のおかげで」

中島が坂田の肩を叩いた

2組の飲茶喫茶は売り上げ第三位だったらしい

「露出が足りなかったんかなあ…」

南が遠い目をして言うと

「いやたぶんソレは関係ない」

三人がハモって言った

「…お!! ユキムシ!!」

京助がふわふわと飛び回る綿毛に包まれたような小さな虫を見つけた

「冬ですナア…」

坂田がユキムシを目で追いかけて言うと京助が勢いよくくしゃみをした

「っだ! 汚ったねッ!!!」

三人が京助から離れる

「今のでユキムシどっかいっちゃいましたかな…」

中島がユキムシを探してキョロキョロする

「また出てくるって; あとはもう冬待つだけだし」

ズブーッと鼻を吸いながら京助が言う

「…その前に中間テストですよー…」

南のその一言で固まった三人に冷たくなった夕暮れの風が吹き付けた

>i20414—2575<

【第五回】 垂れ流しからの恩恵（前書き）

栄野家で飼われている二匹の犬

名前はそれぞれ コマ と イヌ

京助が小さい頃から居るらしいその二匹には実はとんでもない秘密が…

【第五回】 垂れ流しからの恩恵

「ただいまー!!」

ガラッという音と共に家中に響く悠助の元気な声

しばらくしてトタトタトタトタをいう足音が聞こえソレがだんだんと悠助に近づいてくる

「コマ！ イヌ！ ただいまっ！」

靴を脱いで玄関に上がり二匹の犬を抱きしめる

「ふいふ…あったかあ…」

冬が近いせいか最近は気温が低くいくら上着を着ているからといっても結構寒い

帰宅したばかりの悠助は頬が赤く少し鼻水も垂れてきていた

「おかえりだっちゃ悠助」

玄関に座り込んだままコマとイヌで暖を取っていた悠助に緊那羅きんならが声をかけた

「ただいま緊ちゃん!!」

悠助が笑ってただいまを言うのと鼻水が垂れてイヌについた

「やー!! ついたんだなッ！」

聞いたことのない声が聞こえて緊那羅きんならと悠助が止まった

「馬ッ鹿！」

そして今度もまた聞いたことのない声が聞こえた

「…悠助何か言ったっちゃ？」

緊那羅きんならが悠助に聞くと悠助が首を横に振った

「緊ちゃんじゃないの？」

今度は悠助が緊那羅きんならに聞いた

「私じゃないっちゃ…じゃあ一体…」

少しの間沈黙が続いた

悠助が二匹の犬を抱いたまま緊那羅きんならに駆け寄った

「緊ちゃん…」

緊那羅きんならがそんな悠助の頭を撫でて微笑む

「大丈夫だっちゃ。きつと空耳だっちゃ」

不安がる悠助に言った

「…悠助は私を守るっちゃ」

そして緊那羅きんならが自分に言い聞かせるように呟くとガタガタと縁側の外戸が音を立てた

「緊ちゃんく；」

悠助きんならが緊那羅にしがみつくのと二匹の犬が悠助の腕から飛び出し縁側のほうに走っていった

そして聞こえはじめた二匹の犬の吠え声に混じって

「吠えるなッ！！ やかましいわたわけ！！」

聞き覚えのある怒鳴り声と御馴染みになった口癖が聞こえた

「…かるらん？」 「迦楼羅かるら…？」

緊那羅きんならと悠助が同時に迦楼羅かるらの名前を呟いて顔を見合わせる

「こら！ 吠えるなッ！ だああッ！！ 離れんか！！ たわけッ！！；」

ドタドタと聞こえる走りまわっているような足音とハモって聞こえる二匹の吠え声

そして

「だあッ！；」

という声と ドタッ！！ ゴン！！ という大きな音

「…コケたっちゃね」

緊那羅きんならがボソッと呟くと悠助が緊那羅きんならの腰から離れて縁側に向かった
悠助の後をおって緊那羅きんならも縁側に向かう

「…何やってるんだっちゃ…；」

縁側がある和室の戸口で緊那羅きんならが見たものは額を押さえて蹲る迦楼羅かるらとその周りを吠えながら回っているコマとイヌ

どうやら和室に入る際段差に躓いてそのまま倒れた時にテーブルに頭をぶつけたらしい

相当痛かったらしく額が赤くなっていて目が少し潤んでいる

「かるらん大丈夫？」

悠助が赤くなっている迦楼羅かるらの額に手を当てて顔を覗き込んだその周りをなおも二匹の犬が吠えながら回っている

「ええい！！ やかましわッ！！；」

涙目のまま迦楼羅かるらが二匹に向かって怒鳴る

「やかましいのは貴方です」

ビンッ と後ろ髪を引っ張られて迦楼羅かるらの首が ゴキッ と鈍い音を立てた

「けんちゃん！」

迦楼羅かるらの後ろ髪を持ったまま乾闥婆けんだつばが悠助に笑顔を向けた

「だから玄関から入れといったんですまったく；」

乾闥婆けんだつばが引っ張っていた後ろ髪を離すと迦楼羅かるらがそのまま後ろに倒れた

「だからといって引っ張るなわけッ！！；」

乾闥婆けんだつばを見上げて迦楼羅かるらが言う

「どうしたんだっちゃ？ 二人とも；」

緊那羅きんならが二人に歩み寄る

「別にどうもしませんが；ただ；」

そういつて乾闥婆けんだつばがチラリと迦楼羅かるらを見る

「遊びに来たの？ かるらん？」

悠助が仰向けに倒れている迦楼羅かるらの顔を見て聞いた

「だ；誰がッ！！！」

迦楼羅かるらが飛び起きるとタイミングよく乾闥婆けんだつばが言った

「迦楼羅かるらが駄々をこねるものですから」

古典的表現をすると今まさに阿呆面をした黒いカラスが『あほーあほー』鳴きながら【；】を引き連れて和室を横断したであろうそんな変な空気が流れた

「；遊びにきたんじゃないっちゃか；；」

緊那羅きんならが呆れ顔で溜息混じりに言った

「ち；違うといっているだろうが！！ たわけッ！！；」

その言葉に迦楼羅かるらが反論する

「まったく：最近わがママがすぎますよ迦楼羅かるら」

乾闥婆けんたつばがピシヤリという迦楼羅かるらが凶星だったのか黙ってむくれた

「：ここはいつから託児所になったんだ？；」

「京助」

緊那羅きんならの後ろから帰宅した京助が和室の中を見て言った

「おつかえりー京助ー！」

悠助が手を振るとコマとイヌが京助の元に走っていく

「おかえりなさい京助」

乾闥婆けんたつばが笑顔で言った

「ウィツス：で今日は何の用で来たんだ？ また竜田揚げか？」

京助が足元で尻尾を振っている二匹を抱き上げて和室に入る

「遊びに来たの！！ ね？ かるらん？」

「はあ？；」

悠助の言葉に京助が素っ頓狂な声を上げて緊那羅きんならと乾闥婆けんたつばを見ると

二人がそろって頷いた

「：い：いいではないかッ！！ 別に用が無くともッ！：；」

迦楼羅かるらが声を上げる

「：開き直ったっちゃ：」

緊那羅きんならが呟いた

「：ごくろうさん」

京助が乾闥婆けんたつばの肩を叩いて言った

「：ありがとうございます：でもまあ：いつものことですから」

乾闥婆けんたつばがにっこりと笑って言う迦楼羅かるらを見る

「迦楼羅かるらに：置いていかれるよりはマシです」

一瞬乾闥婆けんたつばの表情が曇った様な気がした

「痛ッ；」

突然胸に痛みを感じて京助が声を上げた

「痛エ；：なんだ？；」

抱いていた二匹を下ろして胸をさする

「どうしたんですか？」

乾闥婆けんだつばが聞いた

「いや…何か…チクッとして…なんだったんだ？；」

京助が制服のワイシャツのボタンの隙間から自分の胸元を覗いた

「見せてください」

乾闥婆けんだつばが京助に近づいて制服を脱がせた

「…寒いんだけど；」

上半身スッポンポンにされた京助が乾闥婆けんだつばに言った

「何かに刺されたみたいだっちゃ」

「そうですね」

乾闥婆と緊那羅きんならが京助の胸の辺りにできている赤い跡を見て言う

「…気分はダビデ像…；」

京助がボソッと呟いて溜息をついた

「ねーねー」

悠助がむくれている迦楼羅かるらに声をかける

「…何だ」

迦楼羅かるらがちらっと悠助を見た

「何して遊ぶ？」

につこり笑って悠助が迦楼羅かるらに近づく

「わ…ワシはだから遊びに来たのではないと…ッ！…；」

そう言って後ろに下がっていく迦楼羅かるらにコマが吠えそしてイヌが尻尾を振りながら飛び掛った

「だあっ！…；」

「あ！」

悠助と迦楼羅かるらの声に京助と緊那羅きんなら、乾闥婆けんだつばがそろってそっちを見ると尻尾を振りながら押し倒された迦楼羅かるらの額をイヌが舐めている

「…ほほえましい光景だな」

京助が呟いた

そんなほほえましい光景を見ていた乾闥婆けんだつばが何かに気づいて迦楼羅かるら

に近づいた

「…角？」

迦楼羅かるらの額を舐めていたイヌの頭の毛から飛び出している突起を触る

「…こっちにも」

そして今度はコマを見て同じように出ている突起にも触った

「京助…これが刺さったんじゃないんですか？ 胸」

赤くなっている自分の胸とコマとイヌの頭の突起を交互に見て京助がポンッと手を叩いた

「そっか…さっき抱き上げたときか…」

さすさすと胸を撫でて納得する

「にしても…妙ですね…この角みたいなのは前から？」

乾闥婆けんだっぱが京助と悠助に聞いた

「ああ。ずっと前からだぞ？ …てかコイツらは俺の生まれる前からいるらしいからそれよか前はわかんねえけど…でも」

京助コマを抱き上げる

「…なんだか伸びてるような…」

頭の突起の先端を指でつくとコマが嬉しそうに尻尾を振る
ぐきゅうううううう…

「…迦楼羅…」

もう御馴染みとなってしまうたのか迦楼羅かるらのその体とは正反対の馬鹿でっかい腹の虫の声に乾闥婆けんだっぱが溜息をつく

「…おかしい」

むくりと起き上がった迦楼羅かるらが呟く

「いくらなんでも早すぎる」

迦楼羅かるらが腹を撫でる

「どこかで力使ってきたとかじゃないんだっちゃ？」

緊那羅きんならが迦楼羅かるらに聞くと迦楼羅かるらは首を横に振った

「ココに来る前に渋々ながらも食べてきたばかりですが…本当に力使っていないのですか？」

乾闥婆けんだっぱが迦楼羅かるらの前に座って聞く

「使っておらんと言っているだろう；」

迦楼羅かるらが膨れて言った

ぐうううう…きゅうううう…

「…あいかわらずやかましいな」

和室に響く迦楼羅かるらの腹の音に京助が口の端で笑う

「京助ーコマが下ろしてくれて」

京助の腕の中でジタバタしていたコマに気づいた悠助が京助に言った

「お？ あ…ハイハイ」

京助がコマを下に下ろすと縁側の廊下に向かってコマが走り出した

「…トイレか？」

コマの走り去った方向を見て京助が呟いた

「ずるいんだやなッ！！」

突如聞こえた怒鳴り声

「早いもの勝ちだやな」

そしてその怒鳴り声に対する返事だと思われる声

「…この声…」

緊那羅きんならが悠助を見ると悠助はきよんとしている

「悠助…今の声さっき玄関で聞いた声に似てないっちゃ？」

緊那羅きんならにそう聞かれて悠助は少し考えたあと何かを思い出したらし

く大きく頷いた

「何？ 緊那羅きんならと悠助の知り合いの声か？」

京助が縁側の廊下に向かって歩いた

「さっき玄関で声だけ聞こえたんだっちゃ。その声に似てる…っち

や」

緊那羅きんならも京助の後に続く

「声だけ…ですか？」

乾闥婆けんたつばも立ち上がった

「そうだよ…声だけ聞こえて…でも誰もいなくて」

悠助が素晴らしいながら京助の隣を歩く

「それは…妙だな」

バツと起き上がった

「何なんだ!! お前等はッ!!!;」

舐められていた額を服の裾でゴシゴシ拭いながら迦楼羅かるらが怒鳴る
「何なんだっていわれてるんだなや?」

さかさまになっていた少年(?)がクルンと体を回して着地した

「ゼン等はお守り役なんだやな」

着地した少年(?)の傍にコマが駆け寄る

「なー?」

そして笑顔ではハモるとコマが後ろ空中宙返り…いわゆるバック宙をした

「…な…」

和室にいる全員が目を丸くした

コマが一瞬で少年(?)の姿に変わった

「我はゼン!!」

「我はゴ!!」

「栄野の前後は我等が守る!!」

シャキーン! と言う効果音が聞こえそうな勢いで二人の少年(?)がポーズと決め台詞的言葉を言った

「やー! 久々にもどれただなやー!!」

【ゼン】と名乗った髪の赤いほうが伸びをして体をクイクイと軽くひねる

「何年ぶりだなや?」

【ゴ】と名乗っていた少年も肩をぐるぐる回しながら言った

「…すいません…どちら様でしょう?;」

京助がおそろおそろ敬語で二人の少年(?)に声をかけた

「…どう見ても…人間ってえナマモノじゃないですよ? あなた達;」

普段言いなれてないせいか京助の敬語は微妙におかしいが京助のその言葉に一同が頷く

確かに二人の少年(?)は京助や悠助だけでなく摩訶不思議服集団

の迦楼羅かららや緊那羅きんなら、乾闥婆けんだつばとも外見が異なっている
まず目に付いたのが腰の辺りに付いているふさふさしている尻尾
そして明らかにそれは反則だろうという萌え要素の一つに数えられ
る獣のようなふさふさした耳

も一つオマケに額のチョコツと上から出ているとがった角らしき物体
「：何者でございますか？；」

京助が言うのとゼンとゴが顔を見合わせる

「京助覚えてないみたいなんだなや」

ゴがゼンに言う

「しょうがないんだなや。まだこーんなちっこかったんだなや」

ゼンが胸の前に両手で【こんくらい】と10センチくらいの大きさを表した

「それはちっこすぎなんだやな！」

ゴがゼンに突っ込んだ

「：何なんだ？；」

京助達はわけもわからずゼンとゴのやり取りを見ている

「：漫才してるみたいだっちゃんね…」

緊那羅きんならがボソツと呟いた

「ねーねー！！ どっちがコマ？」

いつの間にか悠助がゼンとゴの目の前にいた

「っだ！？； 悠？；」

京助が悠助の名前を呼ぶ

「君達コマとイヌでしょ？」

悠助がにっこり笑って二人に聞いた

「さっすが悠なんだやな！」

「ゼンがコマでゴがイヌなんだやな悠！」

二人同時に悠助の頭に手をのせた

「：は？；」

「：あの二人が：さっきの犬二匹：ってことらしいですね…」

さすがの乾闥婆けんだつばも理解に苦しんでいるようで言葉にいつもの切れが

無い

「…まさかとは思うが」

ずっと黙っていた迦楼羅かるらが呟く

「…あいつ等は…」

ぐきゅうううううう…

折角真顔で言っていた言葉を腹の虫がかき消した

「…【あいつ等は】なんですか？ 迦楼羅かるら」

迦楼羅かるらを支えるように後ろに立った乾闥婆けんだつばが迦楼羅かるらに聞いた

「…あいつ等は【式】だ」

迦楼羅かるらが言った

「劇団？」

京助がすかさずそういったが誰もギャグわかってくれなかった

「…坂田…中島…そして南…俺今ほどお前等との友情が恋しくなつたことねえかもしれねえ…」

和室内には【劇団四季】という団体を知っているものはいなくそれで京助のギャグに誰も気づかなかったと思われる

「どうしたんだっちゃ？ 京助」

遠い目をして四人で育んだ阿呆い日常…ボケたら誰かしろが必ず突っ込んでくれる幸せを思い出している京助に緊那羅きんならが声をかけた

「…友達って…いいよな…」

そういつて遠い目のままほくそ笑む京助を見て緊那羅きんならが首をかしげる

「…【式】ってあの…」

乾闥婆けんだつばがゼンとゴを見て呟いた

「そうだ【式神】だ」

迦楼羅かるらが乾闥婆けんだつばに言う

「ピンポーン！！！！ なんだやな！！ さっすが馬鹿でつか

い力もってるだけのことはあるんだなやー」

ゴが尻尾を振って迦楼羅かるらを指差しながら言った

「緊那羅きんならからはちよこっとししか吸えなかったんだなや」

ゴが緊那羅きんならを見た

「吸うって：私から？； え？；」

「ようは緊那羅きんならの力が弱いつてことだなや」

ゼンが笑いながら緊那羅きんならの肩を叩いて言った

「緊那羅きんならが京助んトコ来たときやつと戻れると思ったんだけど：な？」

ゼンがゴを振り返った

「緊那羅きんならの力はゴ等をこの姿に戻すまでの量じゃなかったんだなや」
ゴが頷きながら言う

「宝珠ももってなかったし、期待はしてなかったんだやな」

「まあ話せるまでにはなったんだなや」

ゼンがゴの隣に戻る

散々【弱い】といわれて緊那羅きんならが座り込んで黄昏始めた

「：ワシから吸っていたわけか？」

迦楼羅かるらが言った

「吸っていたというか：」

ゼンがゴを見る

「傍に行くとな勝手に流れ込んできたんだなや」

ゴもゼンを見てその後そろって迦楼羅かるらを見た

「いわば垂れ流しのおこぼれ拝借？」

ゼンとゴがハモって言った

その言葉を聞いて迦楼羅かるらが固まった

そしてなるべく顔を動かさないように乾闥婆けんたっぱを見る

「迦楼羅かるらの力はかなりのものですからあなた達をその姿に戻す分なんてほんの一部でしかないと思いますが：」

乾闥婆けんたっぱが迦楼羅かるらを見た

「【宝珠】を一つ貸し出し中なものであなた達が傍に寄れば寄るほどあなた達に流れ込んでいってしまうのでしょうか？」

「：知っていたのか？；」

迦楼羅かるらが乾闥婆けんたっぱを見上げて聞いた

「あたりまえです」

乾闥婆けんだつばがしれっとした顔で返した

「【宝珠】と普通の玉の区別くらい僕にもわかりますよ馬鹿にしないで下さい」

「…そうか…すまんんだ」

ふっと笑いながら迦楼羅かるらが乾闥婆けんだつばに謝った

「…とにかくです。こんな状態なのであまり迦楼羅かるらの傍に寄らないでほしいんですが」

乾闥婆けんだつばがゼンとゴに向って言った

「寄るなといわれても…」

ゴがゼンを見る

「ゼン等は栄野を守らないとなんだなや」

ゼンが悠助の頭を撫でながら言った

「…ちよつと待つつちゃ」

【弱い】を連呼されて黄昏ていた緊那羅きんならがゼンとゴに近づいた
「なんだなや？」

「京助と悠助は私が守るんだっちゃ！」

緊那羅きんならが言った

「緊ちゃん？」

悠助が緊那羅きんならを見上げる

「私が守るって言われても…」

ゼンがゴを見る

「ゴ等が（強調）栄野守るんだなや。緊那羅達きんならは用無しなんだなや」
ゴが笑いながら緊那羅きんならに言った

「な…ッ」

「聞き捨てなりませんね」

何か反論しようとした緊那羅きんならより先に乾闥婆けんだつばが言った
乾闥婆けんだつばの周りの空気が変わった

例えて言うなら暖房が一気に冷房に切り替わったという感じだ

「…けん…」

緊那羅きんならが乾闥婆けんだつばに声をかけようとして途中で言葉を止めた

「：勝手に迦楼羅かるらの力を吸ってなにがお守り役ですか」
乾闥婆けんたつぱが言った

「吸ったんじゃなく勝手にながれこんできたんだやな」
ゼンがすかさず言う

「許可無く他人のものを自分のものにするということには変わりないでしょう」

乾闥婆けんたつぱが静かに言った

しかしその声は微妙に震えており怒りがたんまりとこもっているということがわかる

「：けん：ちゃん？」

悠助が乾闥婆けんたつぱの名前を呼んだが乾闥婆は返事をしなかった
ただ黙ってゼンとゴを見据えている

完全にキレてる

和室にいる全員が瞬時に察知した

「お：おい？； けんだ：」

迦楼羅かるらが乾闥婆けんたつぱに恐る恐る声をかけようと見上げるとさっきまで支えるようにそえてあった乾闥婆けんたつぱの手が迦楼羅かるらの体から離された

「他人の：迦楼羅かるらの力がないと実態を保ってられないくせに何が
：」

乾闥婆けんたつぱが袖口をくくってあった細長い布を解いた

「：！； 乾闥婆けんたつぱ！！ こら！！ ソコの二人！！ 乾闥婆けんたつぱを止め

るのを手伝え！！；」

迦楼羅かるらが京助と緊那羅きんならに向かって叫んだ

しかし時すでに遅し
乾闥婆けんたつぱが両方の布を解くとその布が乾闥婆けんたつぱの体の周りをまるで生きているように飛び出した

「：なんだ？；」

京助がソレを見て呟いた

「悠助！！ 京助！！ 離れるっちゃ！！； 迦楼羅！ 悠助をッ
！！」

緊那羅きんならが京助の手を引っ張って縁側の戸を開け外に走る

「栄野弟！」

緊那羅きんならに続き迦楼羅かるらも悠助を引っ張って外に出る

「な…何なんだよっ！；」

境内の前あたりまで来たところで緊那羅きんならの手を振り解き京助が言う
と同時に家の中から

何かが壊れる…というか壊されているというような音が聞こえ始めた

「…乾闥婆くわんた8けんだっぱ）がキレたっちゃ…；」

緊那羅きんならが言った

「そんなもん空気でわかるけど…上着着る時間くらいよこせ；」

上半身スッポンのまま連れ出された京助が鼻水を啜りながら言う

「たわけ！； 死ぬよりは風邪を引いたほうがマシだろう！！ …

コレでも羽織っている！！」

迦楼羅かるらが自分の上着（？）を京助に放り投げた

「…サンキュ」

京助が迦楼羅かるらの上着を羽織る

「かるらん大丈夫？ 寒くない？」

悠助が迦楼羅かるらに聞く

「…ワシより自分の心配をしろ栄野弟。…鼻水を拭け；」

タリ… と垂れてきた悠助の鼻水を迦楼羅が自分の服で拭った

ドガシャー…！！！！

今までに無い大きな音がして一同家に目を向けると庭からは巨大な
水柱が立ち上っていた

「な…ッ！？；」

京助が口を金魚のようにパクパクさせた

「…すっごおい…」

悠助が目をキラキラさせる

「…本気で怒らせたみたいだっちゃねあのふ…二匹?;」

緊那羅きんならが悠助と京助を後ろに庇いながら立ち上る水柱を見上げた
ゼンとゴが同時に飛びのくとソコに水の刃が無数突き刺さった

「危ないんだなや!;」

ゴがただの水に戻っていく刃を見ながら言った

「この青い人も結構力あるみたいなんだなや」

ゼンが乾闥婆けんたっぱを見て言う

乾闥婆けんたっぱは元いた場所から一步も動いていなく動いているのはあの布
だけだった

「乾闥婆は水を操れるんだっちゃ」

緊那羅きんならが言った

「…ってことは何か?; さっき出たでっけえ噴水みたいな水柱っ
て…」

「乾闥婆だ」

京助が鼻水を吸って庭を見ると迦楼羅かるらが言う

「けんちゃん凄いだね〜!!」

悠助が呑気に目をキラキラさせている

「おそらく地下水か何かだろう…しかし…」

迦楼羅かるらがそう言いかけたときゼンとゴがそろって走ってきた
その後水を追いかけてくる

「ばっ…!!; こっちくるなってッ…!!;」

京助が叫んだ

「来るなといわれても」

「仕方ないんだなや」

ゼンとゴはそういうと京助の前で飛び上がって京助の後ろに着地した
「京助!!」

いきなりゼンとゴが避けたせいで水が京助めがけて迫ってきた

緊那羅きんならが武器笛を構え京助の前に立ち水を止める

「緊ちゃん!! 京助!!」

悠助が叫ぶと水が地面に流れ落ちた

「いや一危なかったんだなや」

ゴが京助の後ろからひょっこり現れた

「緊那羅も結構やるんだなや」

ゼンが緊那羅に向かって言った

「：お前等な；」

鼻水を垂らしたまま京助がゼンとゴに言うきんならと緊那羅が武器笛でゼンとゴを カカーン！！ と叩いた

「緊那羅？；」「緊ちゃん：？；」

京助と悠助が驚いて緊那羅の名前を同時に呼んだ

「い：痛いんだなやッ！！；」

ゼンとゴがハモって叫んだ

「黙れッ！！」

緊那羅の声が響く

「：何がお守り役だっちゃ：」

緊那羅きんならがゼンとゴを睨んだ

「：あそこで避けたら京助に当たるってわかってて何で避けたんだ
つちや！！」

緊那羅の言葉にゼンとゴは顔を見合わせてそろって俯いた

「：緊ちゃんが怒ってる：」

悠助が呟いた

「お守り役なら：お守り役なら：っ」

武器笛を握り締めて緊那羅きんならが肩を震わせた

「緊那羅」

京助きんならが緊那羅の肩を叩いた

「なん：」

振り向いた緊那羅きんならの頬に京助の指が刺さる

「サンキュな」

京助が笑いながら緊那羅きんならの頬を軽くつねった

「お前のおかげで俺は怪我してねえしもういいだろ」
「でもッ！！」

声を上げた緊那羅きんならのもう片方の頬も京助が軽くつねった

「済んじまったことは気にするなつての」

そういうながら緊那羅きんならの頬を引っ張る

「緊ちゃん変な顔」

悠助がそれをみて笑った

「な？ 了解？」

手を離して京助が言う

「…わかったっちゃ…けど…」

緊那羅きんならがゼンとゴに目を向けると二人がしょぼくれたまま俯いている

「…その二人。京助に何か言うことあるんじゃないんだっちゃ？」

緊那羅きんならの言葉にゼンとゴが顔を見合わせる

「言う…こと…？」

「なんだや…？」

首をかしげたゼンとゴに悠助が駆け寄った

「間違ったことしたときに言う言葉だよコマ、イヌ」

そういつて二人の手を引っ張って京助の前に連れてきた

「…ほら」

緊那羅きんならがゼンの背中を軽く叩くと顔を見合わせ二人同時に

「ごめんなんだやな」

京助に向かって頭を下げた

外戸が外れて（というか吹っ飛んで）いる縁側

割れた蛍光灯

水のしみ込んだ畳

庭に開いた穴からいまだちよろちよろと流れている地下水と思われる水

「…落ち着いたか？」

そう言った迦楼羅かるらの視線の先には座り込んで顔を下げている乾闥婆けんたつばがいた

迦楼羅かるらの服はずぶ濡れで髪からも水滴がポタポタ落ちている

乾闥婆けんだつぱの周りを飛んでいた布は迦楼羅かるらの手の中にあった

「：すいません：でした」

乾闥婆けんだつぱが小さく言った

「：気にするな。ホラ、腕を出せ」

迦楼羅かるらが言うけんだつぱと乾闥婆は黙けんだつぱって腕を出した

乾闥婆の服の袖を引っ張かるらって迦楼羅が手首に布を巻く

キュツと軽くしかし解けない位の力で止めるともう片方も同じように止める

「迦楼羅：」

布を巻き終えた迦楼羅かるらに乾闥婆けんだつぱが声をかけた

「何だ」

ぬれている前髪が顔にくっついて邪魔くさいのか手で後ろにやって迦楼羅が返事をした

「：僕はもう：居場所を失いたくないんです」

迦楼羅が巻いた手首の布を掴けんだつぱんで乾闥婆が言った

「僕の居場所は：貴方の隣です」

俯いたまま言った乾闥婆けんだつぱの頭を迦楼羅かるらが撫でた

「：ああ：そうだな：」

乾闥婆が迦楼羅の服の裾を掴むと水が搾り出された

「：あの二匹に実態を保たせる力くらい：竜田揚げを食べればすぐだ」

迦楼羅が乾闥婆の頭を撫でながらしゃがんで

「：お前には本当世話ばかりかけているな」

そう言った迦楼羅かるらに乾闥婆けんだつぱが顔を上げる

「ワシの前で強がるな乾闥婆」

乾闥婆けんだつぱの大きな目には涙が今にも流れそうなくらい溜まっていた

「貴方の前だからこそ強がるんです：ッ」

乾闥婆の目から涙が零れた

「ワシの前で弱音を吐かずして誰の前で吐くのだ！！ たわけ！」
迦楼羅が怒鳴けんだつぱって乾闥婆の頭を抱き寄せる

「子供扱いしないで下さいッ!!」

乾闥婆けんだつばが暴れて離れようとするが迦楼羅かるらは手を離さない

「僕は…っ!! 貴方の隣を歩いていたんです!!」

そう言った乾闥婆けんだつばを迦楼羅かるらは更に抱きしめる

「…っ 離して…下さい…ッ…」

抵抗する力が弱くなり乾闥婆けんだつばの肩が小さく震えだした

そんな乾闥婆けんだつばの頭を迦楼羅かるらが撫でると小さく嗚咽が聞こえ始めた

ぐううううう…

「…乾闥婆けんだつば」

迦楼羅かるらが乾闥婆けんだつばに声をかけた

「…まったく…貴方という人は…」

体に似合わない大きな腹の虫の音をさせた迦楼羅かるらに乾闥婆けんだつばが溜息を

つきながら目が少し赤いだけでいつもと変わらない顔で迦楼羅かるらを見た

「うっわ； どーすんだこの穴…!!」

戻ってきた京助が庭の穴を見て言う

「…片付けないと…だっちゃね；」

和室中心にしっちゃんかめっちゃかになつて様を見て緊那羅きんならが言った

畳に風が当たるように固定された栄野家の二台のドライヤーが
ゴーっ という音をさせて温風を噴出し濡れのひどいところを乾か
していく

比較的水害の少ない所に敷かれた新聞紙の上を悠助とゼンゴが走り
回りその後には染み出した水であしあとが新聞紙に残る

「コラ!! 悠そっち蛍光灯割れてんだからあんまいくな！」

京助が吹っ飛んだ外戸をはめながら悠助に向かって叫ぶ

「ちよい緊那羅きんならそっち先に掃いてくれ」

外戸をはめて身を乗り出し和室内を掃いていた緊那羅きんならに蛍光灯の残
骸が散らばるところを指差していった

「わかったっちゃ。ホラ悠助もゼンもゴも危ないっちゃ」

ちり取と箒でお子様三人を隅に追いやる

「つまないんだなや」

ゼンが口を尖らせる

「んなら手伝えッ！！」

京助が怒鳴った

「遊びたいお年頃なんだやな」

ゴが笑いながら言う

「なー？」

ゼンとゴがハモって言った

「僕も手伝いますよ」

廊下から乾闥婆けんたつばが和室に入ってきた

「あれ？ 迦楼羅かるらは…まだ風呂だっちゃ？」

緊那羅きんならが聞く

「ええ…まだ浸かっています」

いだけ水を吸った新聞紙を集めながら乾闥婆けんたつばが言った

「…本当にすいませんでした」

乾闥婆けんたつばの言葉に一同動きを止める

「まだまだ…僕も子供ですね」

集めた新聞紙を近くに置いてあったゴミ袋に入れながら乾闥婆けんたつばが小さく言った

そしてまた新聞紙を集めようと顔を上げると目の前には二つの顔

「…な…んですか？」

乾闥婆けんたつばもさすがに驚いたらしく言葉が詰まってしまった

「ゼン等は栄野を守りたいんだやな」

「青いのは馬鹿でっかい力のヤツを守りたいんだやな」

ゼンとゴが言った

「…は…あ」

乾闥婆けんたつば8けんたつばがわけもわからず頷くと

「ごめんだったんだやな」

ゴス

ゼンとゴが頭を下げて謝り二人の頭が乾闥婆けんたつばの頭に当たった

「：痛いんですけど。角が」

二人の角が乾闥婆けんたつばの額に赤く二つの点を残した

「けんちゃん緊ちゃんとおそろい〜!」

悠助がソレを見て言うのと京助が乾闥婆けんたつばの額を覗き込み緊那羅きんならを見てまた乾闥婆を見、

「ブッ」

と噴出した

「失礼ですね」

乾闥婆けんたつばの必殺技といてもいい容赦ないチョップが京助に直撃した

「そいや緊那羅きんならも栄野守りたいとかいつてたんだなや?」

ゴが言うのと揃って緊那羅きんならを見る

「：じゃあ緊那羅きんならは栄野のワキをまもるんだなや!」

「は!?!」

ゼンの言葉に緊那羅きんならが声を上げた

「前後はゼン等が守ってワキは緊那羅きんならが守るんだなや! 完璧なんだなや!」

「ナイス考えなんだなや!」

ゼンゴが勝手に【栄野お守りポジション】を決定した

「：お守り戦隊マモルンジャー!」

京助がぼそつと呟いた

「戦隊物には人数足りないんだなや」

ゴが言う

「あの馬鹿でっかい力のヤツも入れてしまっていていいんだなや」

ゼンが言う

「じゃあここの青いのも入れるんだなや。おお! 丁度五人なんだなや!」

ゴが目をキラキラさせた

「：勝手に組み込まないで下さい」

乾闥婆けんたつばが溜息混じりに言った

「…なあ話変えていいか？」

京助が言う

「…何だっちゃ？」

京助に視線が集まった

「…知ってるか？ 鶏肉って茹でるとカプチーノみたく灰汁がでるんだ」

「…何ですかそのカプチーノって…」

京助の言葉に乾闥婆けんだつばが突っ込む

「…まあいいや；単刀直入に言いますと…」

ネタをわかってもらえなかった京助が手をヒラヒラさせた後人差し指を立てた

「…のぼせてんじゃねえ？」

立てた人差し指を風呂の方向に向けて京助が言った

「…三時間と二十三分」

箸で傍にあった切干大根を摘んで京助が言った

「…長すぎだろう；」

その切干大根を口に運ぶ

「何を言う。ゆっくり浸かってこそその風呂だ」

迦楼羅かるらが竜田揚げを齧る

「今日はまだ短いほうですよ」

乾闥婆けんだつばが湯気のたった味噌汁を啜りながら言った

本日の栄野家の晩餐のメニューは白米に始まりフノリとじゃが芋の味噌汁、切干大根、竜田揚げにほうれん草の御浸しとなっている

「京助！お肉とってー！！」

悠助が飯粒のついた箸で竜田揚げの皿を指して言った

「ほら悠ちゃんご飯粒おちたわよ」

母ハルミがおかわりをした京助に茶碗を渡しながら悠助に向かって言った

悠助が落としたご飯粒を緊那羅きんならが拾い皿の隅に載せる

「：お前等はそれでいいのか？；」

悠助の皿に竜田揚げを二つ乗せて後ろで犬の姿のまま味噌汁ぶっかけご飯を食べているゼンとゴ（コマとイヌ）に声をかけた

「ゴ等は箸苦手なんだなや」

鼻の先に飯粒をつけて尻尾を振りながらゴが言った

「こっちのがいいんだなや」

空になった皿をゼンが舐める

「：そうか；」

京助がそういいながら軽くゲップをした

「ハルミ殿は肝が据わっているな」

夕食後京助の部屋で迦楼羅かるらが言った

「ああ：母さん細かいこととか気にしないから」

京助が小さなハロゲン式ヒーターのスイッチを入れる

「ヒマ子さんの時も全然驚かなかったしな」

「私が来た時もそうだったっちゃ」

緊那羅きんならが言った

「：でさお前等一体何なんよ？ 【式】 って何？」

京助が緊那羅きんならの膝の上で丸くなっている二匹に言う

「眠いんだなや：」

ゴが欠伸をしてもそもそ動く

ゼンはもう夢の中だった

「：コイツら：；」

ゼンの角をつつくと乾闥婆けんだつばと悠助が部屋に入ってきた

「片付けご苦労様だっちゃ」

緊那羅きんならが乾闥婆けんだつばに向かってい言った

「：オイ；それ外して大丈夫なのか？；」

京助が袖口を止めてあった布を指差して乾闥婆けんだつばに聞く

昼間その布が乾闥婆けんだつばの周りを飛び始めると緊那羅きんならと迦楼羅かるらが自分たちを連れて避難した事を思い出していた

「大丈夫ですよ」

そう言つて乾闥婆けんたつばが袖を下ろし布で縛つて止めた

「：ならいいんだけどよ：で：早速だけど」

京助が乾闥婆けんたつばから迦楼羅かるらに視線を移した

「：【式】とは【式神】という一種の術のようなものだ」

迦楼羅かるらが話し出した

「そしてコイツ等はその【式神】の【前鬼】と【後鬼】であろう」
緊那羅きんならの膝で寝ている二匹に視線が集まった

「【前鬼・後鬼】は術者の命によりその者の前と後を守るものだ：
が」

迦楼羅かるらがふと考え込んだ

「：一体誰が：」

迦楼羅かるらのその呟きからしばらく沈黙が続いた

「：京助」

乾闥婆けんたつばが京助に声をかけた

「：貴方が生まれる前からこの二匹はいるんでしたよね？」

乾闥婆けんたつばの言葉に京助が頷く

「：ならばハルミさんに聞けばわかるのではないですか？」

乾闥婆けんたつばの言葉に今度は全員が大きく頷いた

「：なんだこの修学旅行のお泊りのように敷かれた布団は；」

ゼンとゴが乗っていて動けない緊那羅きんならを残して京助達は母ハルミが
いると思われる明かりのついている部屋にやってきた

そこで見たものは襖を全部開いて繋げた部屋に敷かれた5組の布団

「何って：見ての通りでしょう」

母ハルミが腰に手を当てて言った

「今日はもう遅いからかるらんとけんちゃんも泊まっていきなさい
？」

京助の後ろにいる迦楼羅かるらと乾闥婆けんたつばに母ハルミが言う

「え：いやワシ等は：；」

「かるらん！！ けんちゃん一緒に寝よう！！」

丁重に断ろうとした迦楼羅かるらの前に悠助が万歳をして布団にダイブする

「朝方は冷えるから後からヒーターもって来なさい」

布団の上で転がる悠助を見て微笑んだ母ハルミが廊下に出た

「あ…母さん！」

京助が呼ぶと母ハルミが振り返る

「なあに？」

「…ぜ…じゃない；コマとイヌっていつからウチにいるんだ？」

京助が聞くと母ハルミは一瞬目を大きくして驚いたような表情をした

「…ずっと前からよ？ …コマとイヌ…ゼンちゃんとゴちゃんだっ

たわね…あの子達はアンタの父さんが連れてきたの」

ゆっくりと母ハルミが言った

「アンタは覚えてるかどうかわからないけどねアンタの父さんにはちよつと不思議な力があつたの。よくその力でアンタをあやしていたのよ」

京助は黙って母ハルミの言葉を聞いていた

「…あの子達はウチの神社をずっと守っていた前の狛犬なの」

母ハルミのその言葉に迦楼羅が反応した

「…狛犬に式神を入れたのか…」

ボソッと迦楼羅かるらが言くと母ハルミが頷いた

「自分に何かあつた時…代わりに京助と悠ちゃんを守るようになって

…でもまさかあんな可愛い姿になれるなんて知らなかったわ。母さんびつくりしちゃった」

母ハルミが笑う

「…さ…もう九時になるわ。お風呂入って寝なさいね」

「京助」

月明かりでぼんやりかろうじてそこにいるのが誰なのかがわかった

「…寝ないのか？」

仏壇の前に座っていた京助の隣に緊那羅きんならが立った

「京助こそ…また遅刻するっちゃよ？」

「…も少ししたら俺も行くから…」

京助が仏壇を見ながら言った

「なあ」

部屋に戻ろうとした緊那羅きんならを京助が呼び止める

「…俺って…俺と悠って何なんだ？ どうして…お前等も父さんもそんなに必死で俺と悠を守るって言うんだ？ 俺は大統領でも殿でも有名人でもねえのに…」

風で窓がカタカタとなった

「…京助…私は…」

「あ…あゝそっか； 忘れてたお前何も知らないって言ってたっけな； スマン；」

言葉に詰まった緊那羅きんならに京助が笑いながら謝った

「きよ…」

「さーって！！ 寒みいし寝るか！」

何か言おうとした緊那羅きんならの背中を押して仏間から出ると廊下からに迦楼羅かるらの姿があった

「…何してんだ？；」

京助が緊那羅きんならの背中に手を当てたまま迦楼羅かるらに聞いた

「今はまだ多くは言えないがな…一つだけ言っておきたいことがある」

迦楼羅かるらがゆっくり京助に近づいた

「…京助…これから何があっても自分の存在理由から逃げ出すな」

迦楼羅かるらの言葉に緊那羅きんならがきゅっと唇を噛み締めて俯いた

「…存在…理由？」

京助が繰り返すと迦楼羅かるらは背を向けて暗い廊下を歩いていった

「…何なんだ…？；」

いきなりわけのわからないことを言われた京助はしばらく呆然とその場に立っていた

「騒がしくてごめんなさいね」

母ハルミが京助の弁当を包みながら言った

「はい緊ちゃん」

そしてその弁当を京助ではなく緊那羅きんならに手渡すと緊那羅きんならが小走りで玄関に向かつていった

「つてきまーすッ!!」

玄関から聞こえた京助の声と

「京助! お弁当忘れてるっちゃー!」

それに続く緊那羅きんならの声

栄野家の毎朝の恒例

「:毎日こうなのですか?」

戻ってきた緊那羅きんならに乾闥婆けんだつぱが聞いた

「え? あ:うん; そうだっちゃ」

緊那羅きんならが答えた

「京助は朝によわいんだやな」

部屋の隅でゴ(イヌ)が言った

「昔からかわらないんだやな」

ゼン(コマ)も言う

「:貴方たちは:」

「お前たちの主は誰なのだ?」

乾闥婆けんだつぱの声に迦楼羅かるらの声がかぶさった

「迦楼羅:」

緊那羅きんならが降り向くと迦楼羅かるらが近づいてきた

「京助と悠助の父親:というのは昨日ハルミ殿から聞いた」

迦楼羅かるらの言葉に二匹が顔を見合わせた

「そうなんだやな」

ゼン(コマ)が頷く

「:栄野兄弟の父親:まさかとは思うが:」

迦楼羅かるらがチラッと乾闥婆を見た

「:その可能性は大きいです:丁度時期的にも合いますから:だとしたら京助と悠助が選ばれた理由も幾分か納得いきますし」

乾闥婆けんたつばが言う

「：彼なら：【式】を使えてもおかしくはないですから」

「：そうだな：どちらにせよ：緊那羅きんなら」

迦楼羅かるらに名前を呼ばれて緊那羅きんならが顔を上げた

「：わかつているな？ この事は二人に話すな：【時】がくるまでは：そして：」

「わかつてるっちゃ」

緊那羅きんならが迦楼羅かるらの言葉を止めた

「京助と悠助は：何があっても守るっちゃ」

緊那羅きんならのその言葉に迦楼羅かるらが頷く

「：迦楼羅かるら」

乾闥婆けんたつばが迦楼羅かるらに声をかけた

「：また：あんなことが繰り返されるのですか：？」

乾闥婆けんたつばが自分の服の裾を握り締めた

「今度は京助と悠助が僕と同じ思いをするのですか：？」

乾闥婆けんたつばの肩が小さく震える

「：乾闥婆けんたつば」

緊那羅きんならが乾闥婆けんたつばの顔を覗き込んだ

「：すまなんだ：わ：」

ぐきゅるるるるるるる：

シリアスな場面が音を立てて崩れた

「：迦楼羅かるら」

乾闥婆けんたつばと緊那羅きんならがハモって言った

「ハラヘリなんだやな？」

ゼン（コマ）が迦楼羅かるらを見上げて尻尾を振った

「だっ：誰のせいだッ！！；」

迦楼羅かるらがゼン（コマ）に向かって怒鳴った

「ゴ等は悪くないんだやな」

ゴ（イヌ）が言うと

「なー？」

といって二匹揃って首をかしげて笑うと緊那羅きんならも苦笑いを浮かべる

「お：お前等はっ：っ；」

迦楼羅かるらが顔を引きつらせながら言った

「かるらーん、けんちゃん、緊ちゃん朝ごはん食べちゃいなさい」
台所から母ハルミの声が届いた

「はーいっ迦楼羅かるら丁度よかったっちゃね」

返事を返して緊那羅きんならが迦楼羅かるらに言う迦楼羅かるらの顔が何処となく嬉し
そうな顔に変わる

「ゼン等もハラヘリなんだやな」

ゼン（コマ）とゴ（イヌ）がトテトテ走って台所に向かっていく

「私たちも行くっちゃ」

緊那羅きんならが迦楼羅かるらと乾闥婆けんたつばに言った

「：：そうですね：：行きますよう」

乾闥婆けんたつばが迦楼羅かるらの背中をトンと押した

「うむ：」

迦楼羅かるらが歩き出すと緊那羅きんならが部屋から出た

最後に部屋を出た乾闥婆けんたつばは誰もいなくなった部屋を見渡して眉をひ
そめた

「乾闥婆けんたつば：？」

迦楼羅かるらに呼ばれて乾闥婆けんたつばが部屋の戸を静かに閉めた

>i20459—2575<

【第五回・弐】中島君家の家庭の二乗（前書き）

中島には姉が二人いる

双子だけどちよつと理由ありの双子

ほぼ正反対の性格の姉二人そして中島の姉弟

その中島が家出して京助の家へやってきた

中島の家出の原因は姉にあった

【第五回・弐】中島君家の家庭の二乗

外が暗い午後四時ちよつとすぎの正月中学校二年三組の教室

教壇の前に集まって京助と3馬鹿がいつもは滅多に見せない真剣な顔で黒板を見ていた

「俺はやっぱコッチが本体説がかなり有力だと思うんだがな」

坂田が黒板にカリカリと何かを書いた

「そうかあ：やっぱソレが一番有力だよナア：」

南が腕を組んで唸る

「でもだとしたらコッチ：体は何でできてるワケ？」

中島が突っ込むと坂田が頭を掻きながら黒板を見る

「そうだよなあ：濡れても平気なんだもんナア：体は」

そう言つて京助も黒板を見た

黒板に書かれていたのは微妙に似ているが何処となく似ていない愛と勇気だけが友達で長時間風にさらして硬くなっているであろう自分の顔をハラヘリな方々に分け与える正義の食えるヒーロー【アンパンマン】

「もともと確かコイツつてジャムントコに流星に乗ってきたんだよな？ たしか」

南が言う

「お前よく知ってるナア；」

京助が言つた

「だてに幼稚園のとき飽きるほど紙芝居読み聞かせされてないぜ？

：そんでバイキンマンはゴミ捨て山に落ちたんだよ。んでもって一人で生きてあそこまで大きくなったんだってさ」

南が聞かれてもいないバイキンマンの過去を話した

「：バイキンマン：苦労してたんだナア：そりゃ捻くれるわな」

坂田がうんうんと頷いた

「一緒に降ってきたアンパンマンは幸せにぬくぬく暮らして育てら

れて：自分は一人でかあ：」

中島がしみじみ言つてふと時計に目をやった

「っあああああ！！やっべえ！！；」

叫んだ中島に何事かと京助と南、坂田が驚く

「わっり！！先帰る！！；」

机に乗せてあつた鞆の肩掛け紐を掴むと走り出したが紐が机に引っかけて机を倒した

「落ち着けよ！！；」

京助が呆れ顔で言うと言機も直さず中島が暗い廊下を駆けていった

「：なんなんだ？；」

キュッキュツという上靴の足音が遠のいて聞こえなくなる

今日は正月町にある正月スーパーの特売日で夕食支度時の買い物客が黄色いカゴを手に店内にあふれている

そしておばちゃんたちがほとんどの買い物客の中に紺のブレザー姿の女子高生が一人長いストレートの黒髪を耳にかけて【本日の広告の品】と手書きで書かれた張り紙を見ていた

カゴの中には豆腐と大根、そしてたまねぎ

「んしょっ：」

重そうにカゴを持ち直す

「いらっしやいませえ〜！！」

ンガーっと店の自動ドアを開けて中島が小走りで店内に入ってくるなり

「ミカ姉！！」

そっういいながら女子高生に近づいた

「ゆーちゃん遅い！！」

ずいっと中島に向かって女子高生がカゴを差し出すと中島が黙ってソレを持つ

「お米売り切れちゃうところだったんだから！四時って約束したじゃない」

中島の鼻に指をつけて【ミカ姉】と呼ばれた女子高生が怒る

「まあまあ蜜柑ちゃん、柚汰ちゃんだって忙しいんだから許してやんな？」

発泡スチロールの箱に【本日の広告の品】らしいほうれん草を入れた店のパートのおばちゃんが蜜柑に言った

「お米なら確保したんでしよう？ いいじゃないのさ」

「んもう…斉藤さんはゆーちゃんに甘いんだから…」

蜜柑が膨れると中島が苦笑いを浮かべた

「ゆーちゃん何か欲しいものある？」

カゴを持って蜜柑の後ろをついて歩いていった中島を蜜柑が振り返った
「ん…俺は別に…」

中島が何気に店内を見渡しながら言う

「…じゃあアイスでも買っていこうか。そろそろりっちゃんも帰ってくる頃だし…お風呂上がったらみんなで食べよ？」

そういつてアイスの入っている冷凍庫のスライド式のドアを開けて6本入りの箱アイスをカゴに入れた

緑色でほんのり柚子の香りのする湯船でポケットとしていた京助の耳に悠助の声と聞こえるはずのない声が微かに聞こえた夕食後のまったりタイム

気のせいだと思いい口まで湯船に浸かりぶくぶくと空気を吐き出した

「京助…」

ガラッと風呂の戸が開けられ湯気が一気に外に流れた

「…何だよ…」

まだ湯気でよく見えないが声でソレが悠助だとわかった

「中島が来てるよ？」

悠助の声が響く

「中島？ こんな時間に？」

京助が湯船の中で膝を立てて身を乗り出して悠助に聞いた

「うん…なんかねおっきな鞆持ってきてるけど…どうする？」

「：おつきな鞆：ねえ：：：まあいいやすぐ上がるから部屋に行つてろって言ってくれ」

そう言うとき京助はと浴槽の淵に手をついて湯船から出たタオルでガシガシと頭を拭きながら廊下を歩いていると緊那羅きんならが京助の部屋から出てきた

「京助」

名前を呼ばれて京助が片手を上げると緊那羅きんならが小走りで京助に近づいてきた

「中島：」

京助と歩幅をあわせて並んで歩きながら緊那羅きんならが言った

「知ってる　悠から聞いた：けど何の用だ？」

京助がタオルを首にかけて自室の前で止まって緊那羅きんならに聞く

「私もわからないっちゃ：ただ：」

緊那羅きんならが苦笑いを浮かべる

「：ただ？」

そんな緊那羅きんならの表情に首をかしげながら京助が聞き返す

「若干：人数が：」

「人数？」

緊那羅きんならの言葉を最後まで聞かずに京助は自室の戸を開けた

「：何してんだお前等」

室内にはいつもの面々が京助の顔を見るなりチャッと片手を上げて笑顔を向けた

「俺は中島が来たって事しか聞いてねえんですが緊那羅きんならさん」

京助が勢いよく自室の戸を閉めて廊下きんならにいる緊那羅に言う

「いや：始めは中島だけだったんだっちゃけど：：」

「君が優雅にバスタイム満喫してるときに俺と坂田が参上仕ったワケでございますよ」

閉められた戸を少し開けて南が言った

「仕るな；」

京助が振り返って南に言う

「つてか風呂くらいゆつくり入らせろ；」

部屋に入りながら京助が3馬鹿に向かって言った

「…で？ 何なんだよこんな時間に」

畳んだだけの布団に寄りかかって京助が言うとき中島が身を起した

「コイツ家出してきたんだってさ」

中島が何か言おうとした矢先に南が中島の傍にあったドラムバックをポフポフと叩いて言った

「…はあ？；」

緊那羅きんならと京助が揃って声を上げる

「蜜柑さんと林檎さんと何かあったらしいんだけどさ」

坂田が言った

「ウチにいきなり林檎姉さんから電話きて『柚汰行ってない？』って言われて」

南が言う

「俺ン家には蜜柑さんから電話きたし」

坂田が言う

「俺等んトコにいないってことは京助んトコに中島がいるんだろうなーとか思ってた」

南が笑いながら言った

「…来たわけか；」

京助が言うとき坂田と南が頷いて笑う

「…それで？ お前等のその鞆の中身は何ですかい？」

坂田と南の傍にある鞆を京助が指差した

「いや、面白そうだなと思ひまして」

坂田がハッハと笑う

「帰れ」

京助が言った

「京助」

坂田と南にお帰り願おうと鞆を窓から投げようとしているところに

母ハルミが京助を呼んだ

「お客さんよ」

戸越しにそう言う足音が遠のいていった

「…客…？　これ以上の客…？」

いつもの面々が揃っているにもかかわらずまた来た自分の【客】と
いうのは一体誰のことなのかと京助が首をかしげた

「…鳥類とかは遠慮しないで勝手に上がってくるしナァ…」

京助が腕を組んでしばらく考える

「…りん姉かミカ姉だろ」

中島がボソツと言った

「林檎さんと蜜柑さん？」

京助が聞き返すと中島が頷いた

「…いいのか？　お前出なくて…」

南が中島に言う

「俺は！　家出してきたってゆーとるやん　！出て行ってどうする
よ！」

中島が怒鳴った

「…まあとにかく行ってくるけど…」

京助が首に下げていたタオルを丸めて床に投げ部屋を出た

「あ…きょうちゃん」

玄関には蜜柑ともう一人蜜柑と同じ歳くらいの女性がいた

「京助柚汰きてるでしょ」

緑色の眼鏡をかけた女性が京助に率直に言ってきた

「つれて帰るから今すぐ呼んで」

「りっちゃん！！　…ごめんきょうちゃん…ゆーちゃんきてる？」

【りっちゃん】と呼ばれた眼鏡の女性の言葉を蜜柑がさえぎる

「あ…来てる…けど…」

京助が言うとりっちゃんが溜息をついて眼鏡を押し上げた

「やっぱり…ゆー！！　でてこい！！　帰るぞ！！」

りっちゃんが奥に向かって叫んだ

「林檎!!」

蜜柑がそれを即座に止める

「もう夜なんだよ!!? やめて」

蜜柑が林檎に向かって言った

「何よ! 元はといえば蜜柑のせいでこんなことになったんじゃない!!」

林檎が蜜柑に言い返した

「な…アタシのせいなの?!」

それに対して更に蜜柑が言い返す

「…あ…あの…」

二人のやり取りを見ていた京助がおそろおそろ声をかける

「大体!! アンタは性格キツすぎなの!!」

蜜柑が声を上げた

「な…悪うございましたね!! 仕方ないじゃない!! コレが私なんだから!! アンタこそ一日だけ年上だからっていい気にならないで!!」

林檎が負けじと声を上げる

「……」

もう何も言えなくなってしまった京助はただ二人の口喧嘩を特等席で見ている

「やめろよ!!」

中島の声に二人の声が止まった

「…ゆーちゃん…」

蜜柑が中島の名前を小さく言った

「…柚汰…」

林檎も少し遅れて言う

「他所ん家まで来てやめろよな!! …俺は帰らないからな」

そういう残すと中島は大股で奥に歩いていった

「…だ…そうです」

京助が言うとうと蜜柑が鼻を吸った

「ゆーちゃん：怒らせちゃった…。ごめんねきょうちゃん：ゆーちゃん：御願いしてもいいかな？」

蜜柑が眉を下げた笑顔で京助に頼む

「え…あ…うん」

京助が言うど蜜柑は頭を下げてお辞儀をして玄関を出た

「：りっちゃん帰ろ？」

呼ばれた林檎も玄関を出てお辞儀をして戸を閉めた

「：俺の部屋は不思議なポケットですかい…；」

六畳の部屋に新たな顔が四人：と二匹

「どうしてこう部屋の戸を開けるたびに人数増加してんだよこの部屋は…ってか狭いだろ；」

京助が部屋に入って戸を閉める

「本当：狭いね」

窓の傍に立っている矜羯羅こんがらが溜息混じりに言った

「なら帰ったらどうですか？」

間髪いれず笑顔で乾闥婆けんだつぱが言う

「ハイハイハイハイ！…；…んでお前等は何の用できたんだよ」

また毒舌バトルが開戦しそうな勢いだった乾闥婆けんだつぱと矜羯羅こんがらを止める意味も込めて京助が仕切りの合図で手を叩き増加した四人に聞いた

「別に？ 暇だったから」

矜羯羅こんがらがにっこり笑う

「：僕等は…」

乾闥婆けんだつぱがチラリと迦楼羅かるらを見た

制多迦せいたかの膝の上に座っている悠助が広げた教科書を覗き込んでいた

迦楼羅かるらが乾闥婆けんだつぱの視線を感じて顔を上げそしてわざとらしく顔をそらした

「：鳥類のわがままですか」

南が笑いながら言った

「ようは特に用はないんだけどおーってヤツですな」

坂田が言う

「まあそうだね」

矜羯羅こんがらが言った

「…俺ん家は溜まり場かよ;」

京助が戸の近くに腰を下ろし溜息をつく

「二酸化炭素充満しますな」

坂田がコマを抱き上げる

「どうせだからヒマ子さんも呼べば? 植物だから二酸化炭素吸収してくれるぞ?」

南がニヤニヤして京助に言う。京助が傍にあった丸めたタオルを南めがけて投げつけた

「…中島」

京助が中島に声をかけた

「林檎さん達帰ったけど…よかったのか? 本当に」

中島に視線が集まる

「…ああ…」

中島が怒ったように返事をした

「何あったんだ?」

緊那羅きんならのわきを通して京助が中島の前まで行きしやがんで中島と視線合わせる

「姉弟喧嘩か?」

南がいう。悠助が教科書から顔を上げて中島を見た

「…喧嘩したの? 中島…」

悠助の言葉に中島が顔をそらす

「…南ピンポンみたいだな…珍しいよなお前が蜜柑さんと林檎さん相手にキレるなんて」

京助が言う

「…んごと蜜柑?」

制多迦せいたかがボソツと言った

「中島の姉ちゃんの名前。一日違いで蜜柑さんが上なんだ」

坂田が制多迦せいたかに説明する

「一日：違いですか？」

乾闥婆が坂田に向かって聞いた

「そ。蜜柑さんが4月1日生まれで林檎さんが4月2日生まれ学年にしたら蜜柑さんが上なんだ」

「おもしろいだろう？ 双子だけど双子じゃないカンジで」

坂田の言葉に南が付け足した

「ゼン等も双子みたいで双子じゃないみたいなんだなや」

「：おおおおおお！！？」

いきなりコマが話して坂田が一瞬黙った後コマを投げるとコマが一回転してゼンに変わった

「投げることはないんだやなー！」

机の上に着地してゼンが頬を膨らませる

「：新顔さん！」

南がゼンを指差して京助に聞くと

「コレとセット」

京助がイヌをゼンめがけて放り投げるとイヌも一回転してゴに変わ
り机に着地した

「おおおお！！！」

坂田と南が歓声を上げる

「ゴ等は双子であって双子じゃないようなもんなんだやな」
ゴが言う

「なー？」

つと二人でハモる

「：また狭くなったね」

矜羯羅こんがらが腕を組んだままゼンとゴを見て言った

「そういや矜羯羅こんがらと制多迦せいたかって兄弟じゃないのか？」

京助が矜羯羅こんがらに聞いた

「：くと矜羯羅こんがらは兄弟じゃないよ？」

制多迦せいたかが言う

「…兄弟…よりも深い関係ってトコかな」

矜羯羅こんがらがにっこり笑って言った

「…何ですかその意味深そうな言葉は…」

坂田が矜羯羅こんがらに聞くと矜羯羅が坂田に向かって微笑んだ

「お前らは兄弟いないのか？」

南が迦楼羅かるらと乾闥婆けんたっぱに聞くと迦楼羅かるらをはじめ摩訶不思議服集団が驚いた顔をして乾闥婆けんたっぱを見た

「…いますよ」

乾闥婆けんたっぱが言くと摩訶不思議集団の面々が表情を曇らせた

「…え?; 何?; : 俺何かマズイこと聞いた?;」

南が空気を読んで焦る

「いきなり重くなっただなや」

ゴが足をプラプラさせて言った

「俗に言うシリアスってヤツなんだやな？」

ゼンが同じく足をプラプラさせて言う

「重苦しくてこの空気嫌なんだやな」

ゴが言うと

「大丈夫なんだやな」

ゼンがにーっと笑って迦楼羅かるらを見る

ぐきゅるるるるる…

迦楼羅かるらの腹の虫が大声を上げた

「な? ぶち壊しなんだやな」

シリアスな空気を一瞬で流し去った迦楼羅8かるらの腹の音を聞いてゼンが言った

「…と・に・か・く! だ…中島何があって家出なわけよ」

重い空気が流れたのはいいがしばらく脱力して沈黙が続いていたところを京助が仕切り直す

「喧嘩したってのはわかったけどさ…原因は何なわけ? まさかと

っておいたプリン食われたとかじゃねえだろ？」

南が中島に聞いた

「…ミカ姉が進学やめたんだ」

中島が呟いた

「蜜柑さんが？ 進学…って推薦決まってたんだろ？ 何でまた…」

南が少し驚いて言う

「…ねえ僕らよくわからないんだけど」

矜羯羅こんがらがコックリと頭を傾げた制多迦せいたかを叩きながら言った

「あゝ…つと…なんていやぁいいんだ？… …なんつーか…坂田！

！ 任せる！ タコヤキ神！！」

京助が坂田に振った

「俺かよ； ってかこんな時だけその呼びかたしてくれて有難うよ京助君。まあ例えて言うのだな王様になれるぞ…っっていう権利を断ったってえカンジか」

坂田が摩訶不思議服集団に向かって説明する

「前の…宮津さんと同じだっちゃ？」

緊那羅きんならが京助に聞いた

「宮…ああ…まあそんなとこかな…進路には変わらないし似たようなモンだろう」

京助が思い出して緊那羅に返す

「今日いきなり言い出してさ…そしたらりん姉が怒って…それで話し聞いてたらミカ姉が進学やめたの俺のせいなんだ」

中島が言った

「お前の…？」

京助が聞き返す

「…俺ん家母さん看護婦で夜遅いしあんまり家にいねえだろ？ 父さんは単身赴任で帰ってこないし今までミカ姉が家のこと全部しててさ…それで自分がいなくなったら誰も家のことできないからって…」

中島がそう言って頭を掻いて溜息をついた

「りん姉は家事とかでんで駄目だから進学しないって言ってさ…それにもりん姉がキレて喧嘩になって…」

中島が話し続ける

「…結局ミカ姉は俺がいるから進学やめたらしいって…わかってさ」「だったらお前がいなくなれば蜜柑さんも進学するんじゃないかってえことか？」

坂田が言った

「…お前頭に血上ると後先周り考えないからナァ…； 家出したってお前は中島柚汰なんだからその場しのぎでしかねえだろが；」

京助が呆れながら言った

「わかってる…っけど…」

中島が俯く

「…ようすけ」

蛍光灯の光がさえぎられて制多迦せいたかの声がした

京助が見上げると寝息を立てている悠助を抱いた制多迦せいたかが京助を見下ろしていた

「…うすけ寝ちゃったんだけど…」

時計は午後10…30を過ぎていた

「ああ…サンキュ」

京助が立ち上がり制多迦せいたかから悠助を受け取る

「緊那羅きんなら戸開けてくれ。悠寝せてくる」

京助がそう言って戸に近づくと緊那羅きんならが戸を開けた

「ついていくっちゃ？」

緊那羅きんならも立ち上がり京助に聞くと

「ああ頼むわ」

そう言って部屋から出た

仕切っていた京助がいなくなったことでまた沈黙がやってきた
机の上ではいつの間にかコマとイヌに戻った二匹が丸まって眠っている

年中眠そうな制多迦せいたかがコックリするたびにパシンと矜羯羅こんがらが叩く

迦楼羅^{かるら}は悠助の忘れていった教科書を捲っていた

「…中島…でしたっけ」

その沈黙を破ったのは中島を呼んだ乾闥婆^{けんだっぱ}の声だった

「…なんだ？」

中島が返事をする

「貴方はお姉さんに進学…とかしてほしいのですか？」
乾闥婆^{けんだっぱ}が聞いた

「そりゃあ…保母になるってのがミカ姉の夢だったし…」

中島が小さく言った

「…そうですか…」

乾闥婆^{けんだっぱ}が同じく小さく呟くとそこからまた沈黙が続く

「…重いな」

南が目を擦っていた坂田にボソつと言った

「ああ…」

坂田も南に返す

「…京助早く帰って来い…」

そして二人してそうハモった

矜羯羅^{こんがら}が溜息をついていきなり窓を開けた

「うおお?!?! 寒みいッ!?!」

流れ込んできた夜の冷たい風にあくびをしていた坂田が震える

「…上がったら？」

矜羯羅^{こんがら}が窓の外に声をかけるとパキッと小枝が折れる音がした

「…りん姉…？」

姿を見せたのは中島家次女の林檎

「いつからいたんだ？ ミカ姉は？」

中島が小走りで林檎に近づく

「蜜柑は母さんと話してる…」

林檎が呟くと中島が俯いた

「…ねえ…寒いんだけど」

矜羯羅^{こんがら}が言々と坂田と南も頷いた

中島に引っ張られて林檎が部屋に入る

「…ねえゆー…あんた等仮装大会でもやるわけ？」

部屋に入って摩訶不思議服集団を見た林檎が中島に聞いた

「いやいやハロウィーンの名残なんで気にしないで」

南がすかさず言った

「…そう…」

外に長時間いると身につく独特の匂いが林檎からした

「…京助に何か温まるものもらってくる」

そう言って中島が部屋を出た

「中島？ 便所か？」

部屋を出て2、3歩歩くと京助に声をかけられた

「…京助ちよつといいか？」

中島が京助に言う

「…先戻ってるっちゃ」

気を利かせたのか緊那羅きんならが中島の横を通過って部屋に入っていた

「あれ？ 京助と中島は？」

部屋から坂田の声が聞こえる

「あゝちよつと…」

それに答える緊那羅きんならの声も聞こえた

「…ちよつと寒みいけどあっち行くか」

京助が廊下の奥を指差して言うとか中島が頷いた

「なあ…京助」

歩きながら中島が京助に声をかけた

「…お前がミカ姉と同じ立場だったらお前どうする？」

「はあ？」

いきなり聞かれた京助が【元・開かずの間】の戸をに手をかけたまま疑問形の返事をした

「俺が蜜柑さんの…っては？」

部屋に入り明かりをつけると散らばっている雑誌が目につく

雑誌を適当に避けて京助が座ると中島も座った

「：下に兄弟がいるヤツってお前だけだからどうなんかなって」

中島の問いに頭をかいて何かを考えた後溜息をつき

「ああ：そうゆことか：俺なら進学するね」

京助がキツパリと言った

「好きなことは好きな時にしたいじゃん？ それに後々しなかったことに後悔してグチグチ文句言ってみろ？ そっちのが周りが嫌だろが：しなかったのは自分のせいなのにな」

京助がスンッと鼻を吸った

「蜜柑さんの気持ちもわからなくはないけどさ：偉そうなこと言っただけで俺だって：悩むんだろうなあ：」

それまで黙って聞いていた中島がふと顔を上げた

「：なあ：お前悠が：悠がいなくなればいいとか思ったことあるか？」

「あるぞ」

そう聞いてきた中島に躊躇いなく京助が言い切った

「悠がいるから母さん参観日にも親子レクにもこれなくて昔は散々悠なんかうって思ってたさ」

腕を組んで京助が言う

「でもソレが兄弟だと思っただよな」

京助の言葉に中島が少し驚いた顔をする

「どんなに喧嘩して突き放して憎たらしくていなくなればいいとか思ってもさ：何つーか：あるだろ？ ほら：可愛さ余ってゝっての」
上手い言葉が思いつかないのか京助が途切れ途切れに言う

「お前蜜柑さんと林檎さん好きだろ」

京助が中島に聞いた

「：まあ：嫌いでは：ない：」

中島が何処となく照れながら言った

「じゃあたぶんわかるよな誰が一番つらいのかって」
立ち上がった京助を見上げて中島も立ち上がり

「…たぶんな」

と言った

「京助」

部屋の明かりを消そうとしている京助に中島が声をかける

「…あったつけえコーヒーか何か一つもらえるか？」

苦笑いで中島が言った

「うわー！ー！んッ！！」

ガシィィィ！！！！！！！！！！

「ガフッ！！！！」

そして ドターン

手に持っている湯気のたったカップを死守した中島とその横で南と

坂田に押し倒された京助

「何やってたんだ馬鹿！ーッ！！ この浮気者！ーッ！！」

南が京助の胸倉を掴んでゆっさゆっさ揺すりながら言った

「俺たちがこの気まずい空気の中で過ごした時間は人類が米を作る

ようになる時間より長く感じたんだッ！！ どうしてくれるッ！！」

坂田が京助をバスバス叩く

「んな事言っただってしゃーねーだろッ！！ なら帰りゃよかったじ

ゃんかッ！！！！」

京助が怒鳴る

「いやソレはできない」

坂田と南が揃ってハモる

「やかましいぞ！！ たわけ！！」

ぐきゅうううううう…

迦楼羅の怒鳴り声と同じく迦楼羅かららの腹の虫の怒鳴り声

「…お前もな」

中島がボソツと言うと京助、南と坂田も頷く

「っ…； 仕方なからうッ！！！！； …何かないのか？ 竜田揚げ

とか」

迦楼羅^{かるら}が教科書を閉じて聞いた

「竜田揚げ？ 何ソレ」

矜羯羅^{こんがら}が迦楼羅^{かるら}に聞く

「美味しい食べ物だ」

迦楼羅^{かるら}が竜田揚げの味を思い出しているのかどことなく嬉しそうに答えた

「…ふーん…この前僕が食べたのも結構おいしかったけどね…コツチの食べ物ってあんまり食べたことないから…今度食べてみたいな」
矜羯羅^{こんがら}が微笑みながら言った

「…お皿は残すようにしてくださいね？」
それに乾闥婆^{けんたつば}が喧嘩を吹っ掛けるように言う

「…んがらは凄い食べるから」
制多迦^{せいたか}が乾闥婆^{けんたつば}の言葉に付け足す

「あの名勝負凄かったヨナア…」

坂田が文化祭を思い出して言うのと京助が頷いた

「…りん姉、ココア」

部屋のスミニいた林檎に中島がカップを差し出す

「…ありがと…」

林檎がカップを受け取ると中島がその横に腰を下ろした

「…りん姉…俺さ…」

中島が話し出した

「…ミカ姉進学やめるの止めないことにした」

カップに口をつけようとしていた林檎が顔を上げて中島を見た

「俺一番下だから上のヤツの気持ちとか考えとかわからなくて…さつき京助に聞いたんだわ」

中島が天井を見上げる

「…そしたら一番悩んで一番つらいのはミカ姉ってわかった…悩んで出した結果なのに俺達が反対してるから本当つらいんだってのもなんとなくだけどわかった様な気がするんだ…だから俺はもう何も言わないことにした」

カップの湯気で林檎の眼鏡が曇る

「…蜜柑…ね私が進学するからそれならなおさら自分は進学しないって言ったの…」

林檎がカップを両手で包んで一口飲んだ

「りん姉が進学する…ってのは？」

中島が聞き返す

「ゆーには初めて話すんだけど私教師になりたいんだ…先週の進路調査で決めたんだけどそれを蜜柑に話したら…だったらアタシは本当進学やめるって…私の方がなれる見込みあるからって…さ」

林檎が溜息をつく

「…学費だけでも馬鹿にならないから教員…」

最後にそう付け足した林檎がまたカップの中身を飲む

「一日…ううん一時間位しか生まれた時間違わないのに姉ってことで蜜柑ずいぶん我慢してるんだ…そして私もそれに甘えているんだ…」

グイッと一気にココアを飲み干す

「りん姉…」

中島がカップから口を離した林檎を見つめた

「中島！！　よけーいッ！！！！」

南の声に顔を向けた中島に枕が直撃した

林檎が驚いてカップを落とすとそれを乾闥婆けんたっぽが拾った

「…大丈夫ですか？」

乾闥婆けんたっぽが林檎に声をかける

「あ…うん私は…」

林檎が乾闥婆けんたっぽと中島を交互に見て言った

「…お…まえらなッ！！」

中島が枕を掴んで立ち上がり3馬鹿の輪に加わる

「…貴方もお姉さんに進学して欲しいのですか？」

乾闥婆けんたっぽが林檎に聞いた

「…そりゃあ…」

林檎が少し戸惑いながら言う

「：そうですか：でも：お姉さんの気持ちも考えてみてくださいね

：」

乾闥婆^{けんだつば}が林檎の手を取ってカップを手渡した

「迦楼羅^{かるら}帰りましょう」

3馬鹿と京助に茶化されていた迦楼羅^{かるら}に声をかける

「：制多迦^{せいたか}」

矜羯羅^{こんがら}が寄りかかっていた壁から身を離すと制多迦^{せいたか}が立ち上がった

「お先」

矜羯羅^{こんがら}が窓から飛び降りた

「：たね」

それに制多迦^{せいたか}が続く

「：ほら！！ いきますよ」

乾闥婆^{けんだつば}が迦楼羅^{かるら}の髪をビンッと引っ張った

「痛いわ！！； 髪を引っ張るな！！；」

半ば引っ張られながら迦楼羅^{かるら}が乾闥婆^{けんだつば}の後ろを歩く

「それでは」

につこりと笑顔を向けると乾闥婆^{けんだつば}は窓から飛び降りた

「覚えていろお前らッ！！；」

迦楼羅^{かるら}が逃げる悪役のようなセリフを残して乾闥婆^{けんだつば}に続いて飛び降りた

りた

急に広くなった部屋に開けっぱなしの窓から冷たい風が流れ込んできた

「急に静かになったナア；」

京助が窓を閉めて言った

時間はもうすぐ日にちが変わってしまう位にまで進んでいた

「：私も帰るね」

林檎がそばに置いていた靴を持って立ち上がった

「今から？ 危ねくね？ いくら林檎さんだって一応女だし…」

南が言う。林檎が靴で南を叩いた。

「俺も帰るから……ごめんな京助迷惑かけて」

中島が鞆を持って林檎の隣に立った。

「何!? お前家出は!?!」

南が驚いて中島に言う。

「一日家出もうすぐ終了」

中島が笑いながら言った。

「……はあ?; ……しゃあねえ……俺等も帰るか坂田……ってオイ;」

南が溜息をつきながら坂田を振り返ると坂田が畳んだだけの布団に寄りかかって眠りこけていた。

「……相変わらず夜に弱いヤツ;」

京助が足で坂田の尻をポスポス蹴った。

「坂田は泊まらせるわ……南はどうする?」

京助が南に聞くと南がしばらく考えて

「俺も泊まらせてもらうかな……」

そう言って欠伸をした。

「……じゃ俺等帰るから」

緊那羅きんならが部屋の戸を開けると中島と林檎が廊下に出る。

「途中まで送るか?」

歩きながら京助が言う。中島が振り返って手を振った。

「ねえ……ゆー」

街灯が一定間隔でついている道を二人並んで歩く。

「……あの髪の青い子……兄弟いるの?」

林檎が中島に聞いた。

「髪の青い……ああ乾闥婆けんだっぽか……いるみたいだけど? なした?」

中島が答える。

「……うん……ちょっとね……」

林檎が呟くと中島が首をかしげる。

「蜜柑と……同じような我慢してたような気がしたんだ……あの子」

林檎が白い息を吐いた

「じゃあアイツ下にいるんだな弟か妹が：似てるのかなあ；毒舌とか」

中島が苦笑いで言った中島の息も白い

「にしても変わった名前なんだねその子」

林檎が突っ込む

「え：あ：ああ！！ あだ名みたいなもんでさ；」

中島が慌てて言った

「昔は私と蜜柑ゆーを取り合ってよく喧嘩したっけなあ」

林檎が何かを思い出してくすくす笑い出した

「何！？；何俺を取り合ってた；」

少し離された中島が林檎に駆け寄って聞く

「おしめ換えるとかミルクあげるとかでもしよっちゅう喧嘩して母さんに怒られてもまた喧嘩して」

林檎が嬉しそうに話す

「実物大のじゃじゃ丸見て大泣きしながらお漏らししたゆーがこんなでなくなっちゃって」

笑いながら中島を肘でつつく

「な：っ；何だよそれっ！！；」

赤くなって聞きかえす

たまに伸びてまた縮む二つの影が笑い声と一緒に角を曲がった

「京助！！ 坂田！！ 南！！ お弁当だっちゃー！！」

いつもと違うのは緊那羅きんならが抱えた弁当箱が3つだということ
そして京助の額に絆創膏が貼られていることだった

南が【愛車・ニボシ】に飛び乗り漕ぎ出すと坂田と京助が走ってそれを追いかける

「起きてたんなら起せよなッ！！；」

京助が怒鳴りながら走る

「いっやああまりにも安らかに眠っていらしたもので」

ハッハと坂田が笑いながら走る

「だからって寝てるヤツにやるお約束の悪戯をするな悪戯を！！！；

しかもマツキーで！！」

「筋肉ニクニクにくじゅうはちゅ♪」

怒鳴る京助に歌う南

どうやら京助の額の絆創膏の下には【肉】と油性ペンで書かれているらしい

しかも三枚使って隠しているということは結構大きな文字で書かれているのだろう

「お？ アレに見えるは短期家出少年！！ おーーーーい！！ なっかじまーーーー！！」

南が前方を走る後姿に向かってニボシを走らせる

「中島？」

南を追いかけるように坂田と京助も少し速度を上げて走った

「はよさん中島！」

南がニボシに乗りながら中島の背中を叩いた

「よっス！ 南！」

それに対し笑顔で返す中島

「おーっス！！ 家出少年！」

坂田が中島にタックルをして挨拶をする

「はよさん京助坂田：ってお前デコどうしたよ；」

走りながら中島が京助の額を見て言った

「コイツは今朝筋肉星の洗札を受けたんだ」

坂田が京助を指差して言う

「…肉か」

中島が言う

「ピンポン！」

南と坂田がハモった

「やかましい！！；」

京助が坂田を叩くと中島が笑った

「で？蜜柑さん…」

「ゆーちゃーん！！」

南が蜜柑の名前を口にするると蜜柑の声が後ろから聞こえた

「ゆーちゃん筆入れわすれてる——！！」

スカートを思い切り風になびかせて蜜柑が自転車を立ち漕ぎして近づいてきた

「蜜柑！！ パンツ見えてるってば！！」

その後ろから同じく自転車を漕いで林檎が叫んだ

「…白」

坂田と京助が言うとき中島が二人を叩いた

「に紫の花柄」

それに南が付け足す

「ほら！！ もう…どうして筆入れが洗面所にあるわけ？」

蜜柑が中島に筆入れを手渡す

「さんきゅミカ姉」

筆入れを受け取って中島が笑う

「蜜柑！！ 遅刻！！」

いつの間にか蜜柑を追い越した林檎が自転車を止めないで蜜柑に向かって叫んだ

「わかってる！！ じゃね！ …あ！ そうだ今日は忘れないでよ！！？ お醤油買うんだから！！」

蜜柑が自転車を漕いで林檎の後を追いかける

「…朝からいいもん見たナァ…」

坂田が頷くと京助と南も頷いた

「…俺のも見せるか？」

中島が言うとき

「丁重にお断りいたします」

京助が顔の前で手を振った

「結局蜜柑さんってどうしたわけ？」

京助が中島に聞く

「ああ：5年たったら進学するんだって」

中島が言った

「5年！？」

中島以外の三人がハモる

「5年って：今生まれたお子様が幼稚園に上がる年ですよね？」

南がなぜか敬語で言った

「そ。5年経ったら俺も高校でてるしそれまで働けば学費貯まってるからって」

「考えやっぱ大人だよナア：そうだよなー：別に今すぐ進学しなくていいんだもんな」

坂田が感心して頷く

「俺とりん姉それを聞かないで昨日：：」

中島が苦笑いする

「：お前と林檎さん間違いないく兄弟だよな」

京助が笑って中島の肩を叩く

「周り見えなくなるってとことか？」

南がにかつと歯を見せた

「仕方ねえじゃん；兄弟なんだから；」

中島が苦笑いで返す

「：ところで今何時よ」

坂田が和やかムードに水を差した

そして始まるしばしの沈黙

遠くから聞こえる途切れ途切れのチャイムの音と近くから聞こえる

どこかの阿呆犬の吠え声

チャイムが鳴り終ると同時に歩き出した四人

「：人生急がば回れだよナア」

妙に悟ったように京助が言った

「今ココで使っているもののなかは別としてな」

中島がそれに突っ込んだ

$\wedge$ 5 7 5 2 | 3 2 5 0 2 i $\vee$

【第五回・参】ヘリカメ様（前書き）

北海道には本州で恐れられている【イニシャルG】という虫は居ない
そのかわり【臭い】【とぶ】【キモい】と三拍子揃った悪魔が大量
に発生する
その名は…

【第五回・参】ヘリカメ様

「母さんガムテープあったっけ？」

京助が茶の間の戸を開けてTVを見ていた母ハルミに聞いてきた
「ガムテープ？」

母ハルミが立ち上がり茶箆笥の戸を開け始める

「たしか…このへんに…あら…？」

次々と箆笥の戸を開けてガムテープを搜索し始めた母ハルミを見て
京助も近くの棚を探す

「京助コレ？」

緊那羅きんならがTVの下きんならの棚から何かを出して京助に見せた

「それはゼロテープ！ ガムテープってのはこう…：…でかい」

京助が手で丸を作り緊那羅きんならにガムテープを説明する

「…でかい…んだっちゃ？」

緊那羅きんならが京助の真似をして手で丸を作りそれをまじまじと見た

「おかしいわねえ…この前新谷のお婆さんの所に荷物送ったときに
使って…この辺に置いたはずなんだけど」

母ハルミが何処に置いたのか思い出そうとしている

「母さん結構あっちこっちにおきっぱだからなあ…しっかり；」

棚という棚を探したが一向に姿を見せしてくれないガムテープ

「仕方ねえ； 買ってくるか…；」

京助が溜息をついて立ち上がる

「じゃあ丁度いいわ！！ 牛乳と何かおやつ買ってきて！」

母ハルミが【その言葉を待っていた！】的に嬉しそうに財布を取り
出した

「…この母親は…；」

京助が呆れながらも母ハルミから千円札二枚を受け取る

「暗いから気をつけて行くのよ？」

母ハルミが財布をパチンと閉めた

「…へいよ；」

京助が少し厚手のパーカーを羽織って返事をする

「行くぞ緊那羅^{きんなら}」

「へ？； 私もだっちゃ？；」

薪ストーブに薪を追加していた緊那羅^{きんなら}がご指名されて驚きの声を上げた

「荷物持ち！！ 母さん緊那羅^{きんなら}に何か着る物貸してやって」

「うええ；； 寒いっちゃ；；」

緊那羅^{きんなら}が外に出るなり嘆いた

「お前な…；；これからもっと寒くなるのにこんくらいで寒い言うなよ；」

石段を降りながら京助が緊那羅^{きんなら}を振り返る

「うゝ；」

パーカー一枚羽織っただけの京助に対し緊那羅^{きんなら}はマフラーも巻いて拳句手袋までしている

「私寒いのは苦手なんだっちゃ；」

早足で京助に追いついて隣を歩きながら緊那羅^{きんなら}が言った

「まだ今日はあったけえ方だぞ？」

「これで！？；」

京助の言葉に緊那羅^{きんなら}が信じられないという声を上げた

「だってまだ息がそんなに白くねえし」

京助がは一つと息を吐くと少し白くなってすぐ消える

「…私…凍死するかもしれないっちゃ…；」

緊那羅^{きんなら}が立ち止まって遠い目をしながら呟いた

「しねえしねえ；」

京助も立ち止まり【それはない】とばかりに顔の前で手を横に振った

「まあ…寒いならパツパと買うものかって帰るべし」

緊那羅^{きんなら}が京助の言葉にのりくらりと足を動かす

「…しゃきつとしろよししゃきつと；…ったく；」

そんな緊那羅^{きんなら}の手首を掴むと京助は大股で歩き出した

田舎町の正月町は午後八時ともなるとメインストリートといえど車も人も滅多に取らない

そして大抵の店は七時かそこらでシャッターやらカーテンを閉めて
いる

「：遅かったか；」

近所の小さな商店はもうカーテンが閉まっていた
時間は午後七時と十五分を少し過ぎた所

「：しゃかねえ：セブンまで行くか：今からじゃスーパーも閉まる
だろうし」

京助が溜息をついて向きを変えると歩き出す

「ちよっくらセブンまで行って来るって母さんに伝えといて」
後ろをチヨコチヨコとついてきていた緊那羅きんならに言う

「え：伝えとけ：って：？」

緊那羅が立ち止まって京助に聞いた

「お前寒いんだろ？ 先帰ってろ。悪かったな連れ出して。帰って
風呂でも入ってあったまってる」

そう言って京助が走り出した

「あ！ ちよ：っ；」

遠ざかっていく足音を緊那羅きんならが慌てて追いかける

「京助！；」

「うえっ；」

緊那羅きんならが京助のパーカーのフードを掴んだ

「何だよ；」

掴まれて伸びたフードを軽く直して京助が聞く

「私も行くっちゃ」

「は？； だってお前：」

「行くんだっちゃッ！」

声を上げた緊那羅きんならの息が白く吐き出された

「散々寒がつてるのに：変なヤツ；」

京助が頭を掻きながら少し早足で歩き出すと緊那羅きんならもそれに合わせ

て歩く

海岸線を歩いて行くと数字の【7】の看板が見えてきた

暖房の為に片方が締切になっている反対の戸を開けて中に入る

「いらっしやいませー」

数人いた店員が一斉に言った

「あったかいっちゃー…」

中に入るなり緊那羅きんならが安心したように呟いたのを聞いて京助が口の端で笑う

「あれ？ 京助？」

雑誌コーナーから聞き覚えのある声で名前を呼ばれて京助が顔を向ける

「阿部？」

白い短めのコートにブーツを履いた阿部がファッション誌を開いて片手に持ったまま手を振った

「何してんだよ」

京助が阿部に話しかけた

「何って…塾の帰りだけど？ アンタこそ何してんの？ ってか…ほっぺ真っ赤じゃん； まさかと思うけど歩いてココまで？」

阿部が雑誌を閉じて京助を見る

「そのまさかだ」

「うっわ；」

京助が何気に威張ると阿部が呆れ半分驚き半分の声を上げた

「…あれ？ その子…たしか…」

視線を感じて緊那羅きんならが顔を上げると阿部と目が合ってペコリと頭を下げた

「……イトコ…なんだよね？」

阿部が京助に聞く

「へ？ …あゝ…ああまあ；」

京助が緊那羅きんならをチラッと見て生ぬるく答えた

「ふん…そっか…」

緊那羅きんならの全身を見ながら阿部がボソツと呟いた

全身を見られて緊那羅が少し後ずさる

「…で？ 何でココまで歩いてきたわけ？ こんな時間に…」

阿部が鞆を持ち直して聞く

「あゝガムテープと母さんの菓子とか買いに来た」

京助が雑誌コーナーの向かいにあった日用品の棚からガムテープを手を取った

「ああ…そろそろ時期だしね…出たときはよろしく」

阿部が笑いながら言った

「まあな…一応は心に留めておいてやるよ」

京助も笑いながら返すと阿部の横を通って飲み物が並べられた棚に向かった

「…イトコ…か」

緊那羅きんならが阿部の横を取ると小さくそう聞こえた様な気がして緊那羅きんならが振り返ると阿部が戸を開けて外に出て行った

「…何してんだお前；」

会計を済ませてやや大きめのと小さな袋を一つずつ持った京助が店のある一点に立っていた緊那羅きんならに声をかけた

「ここからあったかい空気が来るんだっちゃ」

そう言って緊那羅きんならが嬉しそうに指を差した先には温風暖房機の吐き出し口があった

「…そうですか； …帰るぞ」

京助が戸口に向かって歩き出すと名残惜しそうに振り返りながら緊那羅も（きんなら）後を追いかける

店に入ろうとしてきた若い男を先に入れて店を出た

「さゝむゝいゝ；」

緊那羅きんならがまた嘆きの声を上げた

「ほらよ」

京助が小さい袋を緊那羅きんならに差し出して歩き出した

「…この袋あったかいっちゃ…？」

両手で袋を受けとった緊那羅きんならが袋の温度に驚く

「肉まん。冷めないうちに食うなりなんなりしろ」

お菓子や牛乳の入った袋を右手から左手に持ち替え京助が緊那羅きんならに言った

「カイロにするもヨシ！ 食っても美味しい！ 最高じゃん肉まん」

ニツと笑って京助が歩き出すと緊那羅きんならが小走りで隣に並ぶ

「コレ…」

緊那羅きんならが袋から肉まんを取り出した

「火傷すんなよ」

まじまじと湯気のたつ肉まんを見ている緊那羅きんならに京助が言う

「京助のは？」

袋に入っていたのは肉まん一つだった

「俺はいいよって…何？」

京助が顔を向けると半分に割れた肉まんを目の前に差し出された

「半分こだっちゃ」

半分の肉まんを差し出して緊那羅きんならが笑う

「…さんきゅ」

袋をまた持ち替えて京助が半分の肉まんを受け取って口に運ぶのを見て緊那羅きんならも肉まんを齧った

「きゃあああああああ！！！！！！」

「うわッ！」

「出たッ！！！！」

翌日の三時間目

正月中学の二年三組の教室に生徒の悲鳴が響いた

「いやー！ーッ！ コッチ来る！ 来た！！来たー！ー！！！！」

一人の女子生徒が半泣きで机を倒しながら友達の近くに逃げる

「ヘリカメ！ 覚悟！ 行け！！ 選ばれし勇者京助！！」

ハルが叫ぶと京助がガムテープを取り出して10センチ位の長さに切った

「ニフラム!!」

京助が叫びながら壁にガムテープを貼り付けると教室内に安堵の溜息があふれた

「ご苦労だったな京助。ホラホラ机直して! 続けるぞ」

こげ茶色の背広を着た教師が黒板に文字を書き始めると生徒達がガタガタと机を直し始めた

「今年もやってきましたナア:本格的にヤツの季節が」

坂田がガムテープを机にしまっている京助に言った

「去年は少なかったから今年は多いんだろうなー:」

「やめてよ!! もー:いやだなあ」

京助の言葉に阿部が突っ込む

「ちゃんと庇ってよね京助!! 隣なんだから」

阿部が京助に向かって言った

「じゃないともうノートとか見せてやらないんだから」

肩にかかる髪を後ろにやって阿部が黒板の方を向いた

「:ヘイヘイ;」

京助が椅子に座りながらやる気のない返事をする

壁に貼り付けられたガムテープの真ん中からカサカサと何かがうごめく音が小さくしていた

壁に貼られたガムテープの数は6箇所

どれも真ん中が微妙に膨らんでいるそのガムテープ

「今日の収穫は6匹か:一日で6つてやっぱ結構な数だよな」

京助が箒でガムテープをペソペソ叩くと坂田が頷く

「ウチんトコは今日2匹だったぞ」

中島と南が【二階廊下】と書かれたゴミ箱を片手に教室に入ってきた

「やっぱ昨日寒い思いしてガムテープ買っておいて正解だったな

!::まさかこんなに出現するとは」

京助がしみじみ言った

「よくもまあ歩いてあそこまでいくよねー」

後ろから阿部の声がした

「何？ お前どこまでガムテープ買いに行ったわけ？；」

阿部の言葉に坂田が京助に聞く

「セブン」

京助がさらっと言った

「しかも可愛いコつれて」

「可愛いコ！！？」

阿部のその言葉に教室中の視線という視線が京助に集まった

「そお！！ 金髪で：こう：この辺だけちょっと色の違う髪してブ
ーッ履いたアタシより少し小さいカンジの」

阿部が前髪の一部を持って説明する

「あ！！ 俺そのコ見たことある！ 三つ編みしてなかったっけか
？」

男子の一人が阿部を指差して言った

「昨日はポニーテールだったけど：文化祭に来てたよね？ 京助」

阿部が京助を振り返る

「来てたよね：って俺見たとき制服着てただけど生徒じゃねえの
？」

「うそー！！ だって文化祭じゃ：ほら！ ミヨも見たじゃん！

仮装して客集めてくれたコ！」

男子の言葉を聞いて阿部がミヨコに聞いた

「：おい京助」

南が京助にカニ歩きで近づいた

「：まさかと思うけど」

坂田も同じくカニ歩きで京助に近づく

「金髪、三つ編み、制服、文化祭：んでヘンな仮装：次に来るワ
ードは何でしょう京助君」

中島もカニ歩きで近づき京助に聞いた

「：だっちゃ」

京助が口の端で笑って言う

南が言うのと教室が一瞬静まり返った

「：お前二股してんのか？」

男子生徒がボソツと言った

「はぁ?!」

その男子生徒の言葉に京助が声を上げる

「ヒマワリとイトコ（オス）：どっちを取る気だね？ ん？」

坂田が京助の肩を叩いて聞いた

「今夜のご注文はどっち!!」

中島が言った

「うっわ何だかその台詞エロくない？ 中島：今夜て」

ミヨコが中島に突っ込む

「桃色吐息の世界だなゝあゝン」

坂田が身をくねらせたその時

ブー……ン……という音が聞こえた

【カメムシ（別称・ヘリカメ、ヘツタレプップ等）】：晩秋に大量に家の中に入ってきて、いやな臭いを出す。（マルカメムシ、クサギカメムシなどがよく見られる）普段は樹木や雑草に付き、樹液や草の汁を吸っている。家まわりの雑草に付く種類に問題となるものが多い。

冬の寒さの厳しい地方（東北、北海道など）で、特に被害が大きい。

ゴキブリが出ない北海道にとってのゴキブリレベルの害虫扱いを受けるヘリカメ

上記にもある様に秋から冬にかけて出現するヘリカメ

掃除機で吸ったら後がくさいヘリカメ

潰すと余計くさいヘリカメ

死んだ後も触るとくさいヘリカメ

そんなヘリカメが阿部の肩に止まった

それに気づいたミヨコがそおくと阿部から離れてマイ・ダーリンとなったハルの後ろに隠れると

「あ…阿部…肩…」

小さく言って阿部の肩を指差した

「肩？」

阿部が初めは左肩を見て次に右肩を見て…

固まった

阿部を中心に生徒がサークルを描くように後ずさる

阿部の肩に蠢く茶色くい2センチほどの悪魔…いや魔王…いやいや邪神

「…い」

涙目になりながら何かを言おうとしているが声にならないらしく只右肩を指差して助けを求める阿部

「騒ぐなよ?…」

京助が掃き掃除の為に下げられた机をガタガタ動かし自分の机の中からガムテープを取り出した

「行け!! 勇者!」

ミヨコを後ろに庇いながらハルが何処となく偉そうに京助に言う

「そう言うお前が取れよお前が…後からガムテープ代全員からもらうぞ? ったく…」

生徒が見守る中京助が少し長めに切ったガムテープをそつと阿部の肩につけてゆっくりはがすとソコには仰向けになり足をバタバタさせるヘリカメがくっついていた

ソレを潰さないよう器用に周りだけをくっつけてガムテープにヘリカメを閉じ込めると中島の持っていた【二階廊下】のゴミ箱に投げ入れる

「あっ!; ばっかお前臭せえじゃんか;」

中島がゴミ箱の中を見て言った

邪神（ヘリカメ）が（ガムテープに）封印され教室中に和やかムードが戻る

「しかしお前よく平気だよナア：」

南が倒れた箒を拾う京助に言った

「只の虫だろうが」

手首にガムテープをはめて拾い上げた箒の柄で肩をトントン叩きながら京助が言う

「臭いだろうへリカメ。ソレが嫌なんだよへリカメ」

坂田が京助をイチイチ押しながら言った

「匂いついたらなかなか取れないしさあ：最悪最低。飛ぶし臭いしキモいしの三本立てだぞ？」

南が指を三本立てて京助の前に出す

「何にもしなきゃ臭くもなんともないだろう？無意味に騒ぐからだろうが：；」

京助が南を指差して言った

「アレ見て騒がない奴の方がおかしいって」

京助の指に自分の指を合わせてE・Tの名場面をやりながら南が言う
そんな3馬鹿と京助のやり取りを黒板消しを持ったまま阿部が黙って見ていた

「きょうすけえ：：」

家に帰って着替えている京助の部屋の戸が少しだけ開いて半泣きの悠助の声が聞こえた

「：：出たのか？」

トレーナーの首元に顔を引っ掛けたまま京助が振り返ると悠助が目をこすって頷いた

「今行くから：：ってガムテープ学校だ；」

トレーナーから頭を出して裾を軽く直して京助が部屋から出る

「茶の間にいるの；；」

悠助が京助を見上げて言った

「緊那羅は（きんなら）？」

そう言いつつ茶の間に入ると緊那羅きんならが立ったまま部屋を見回している

「：何してんだお前：ウチに温風器なんざねえぞ？」

京助が声をかけると緊那羅きんならが振り向く

「ブーンって：聞こえて：そしたら悠助がいきなり部屋から出ていったんだっちゃ：って悠助？」

おそろおそろ部屋に入ってきた悠助が京助のトレーナーを掴んで部屋を見渡した

「：どうしたんだっちゃ悠助？」

緊那羅きんならがしゃがんで悠助に聞いた

「へりカメが出たんだとさ」

京助が部屋を見渡しながら言った

「へりカメ？」

緊那羅きんならが首をかしげる

「そ。さっきのブーンってのはへりカメの飛んでる音だったんだろうよ」

一通り部屋を見回して京助が悠助の頭を撫でる

「なんだっちゃ？ その：へーなんとかって」

緊那羅きんならが聞いてきた

「へりカメは臭いんだよそして嫌なの」

悠助が答える

「：臭い？ 京助の屁より？」

緊那羅きんならが悠助に聞くと悠助が少し考えてから頷いた

「：俺の麗しき屁とへりカメを一緒にするなよな；」

京助が緊那羅きんならの頭を軽く叩く

ブー：ン：

部屋の何処からか音が聞こえてきた

「音はせども姿は見えずってかあ？」

京助が部屋中を見渡す

「そんなに嫌な物なんだっちゃ？」

悠助のあまりの脅え様に緊那羅きんならが京助に聞いた

「俺はそんなでもないんだけどな：嫌なヤツにとっちゃ嫌なんだ

ろうさ」

悠助が京助に思いっきり身を寄せて天井を黙って見る

ブー…ン…コツン…

何かに当たった音がした

「この部屋ん中にいるってのは間違いないだろうな…お？」

京助が何かを見つけて腰に悠助をつけたまま歩き出した

「めっけ…ってかあるじゃんガムテープ…」

新聞紙が畳んで入れてある袋の横に立てておいてあったガムテープを拾い上げて京助が言う

「あつたところに戻して置けよな…ったく；母さんも人のこと言えないじゃん…」

ブツブツいいながらガムテープを15センチくらい伸ばして切った

「どうするんだっちゃ？」

緊那羅きんならが切ったガムテープを見て聞く

「コレでヘリカメを封印するんだ」

ブーン…

しばらく音がしなかったのはどこかに止まっていたからなのだろうかそれとも【コツン】とどこかに当たって気を失っていたからなのだろうか

またも聞こえ出した音に京助、緊那羅きんなら、悠助の三人が部屋を見渡し
ていると

「お邪魔します。きよ…」

スコーン

戸が開いて丁寧な口調の言葉が途中で止まった

「…けん…ちゃん？」

悠助が乾闥婆けんだっぱに駆け寄った

「な…んですか今の…額に何か…」

乾闥婆けんだっぱが自分の額を押させて部屋に入ってきた

「ヘリカメタックルだな…たぶん」

京助が言うと悠助が後ずさって乾闥婆けんだっぱから離れる

「ヘリカメ…？」

乾闥婆けんだつばが額から手を離し首をかしげた

「臭くて嫌なんだって悠助が言ってるっちゃ」

緊那羅きんならが言うのと悠助が何度も頷いた

「…何なんですそれは…生き物なんですか？」

乾闥婆けんだつばが京助に聞く

「虫」

京助が一言で答える

「虫…って言いますが特徴とか…こう他に何かないのですか？」

乾闥婆けんだつばが更に聞き返す

「そうだなあ…ってか今お前のそのピョン毛の先っちょにぶら下がってるのがヘリカメ様であらせられます」

悠助が京助の後ろに完全に隠れた

「え？」

乾闥婆けんだつばが目を上に向けるとピョン毛の先に蠢く何か

「コレが…？　こんなのが怖いのですか？　悠助」

乾闥婆けんだつばが手を伸ばしてピョン毛にぶら下がっているヘリカメに触った

「あ…！」

悠助が声を上げる

「…あゝあ…！」

京助も【やっちゃった】という言葉が後につきそうな声を出した

「…何ですか；」

兄弟二人のそれぞれの反応に乾闥婆けんだつばが怪訝そうな顔をした

「…虫だっちゃね」

緊那羅きんならが乾闥婆けんだつばの手の中のヘリカメを見て呟いた

「触るなよ緊那羅」

京助が緊那羅きんならに言う

「…僕は触ってるのですが…何かあるのですか？」

乾闥婆けんだつばが京助に近づくと

「いやー！ー！！；」

と言って悠助が緊那羅きんならのほうに逃げた

「…手、匂い嗅いでみる」

京助がヘリカメをガムテープにくっつけながら乾闥婆けんだっぱに言う
「手…？」

京助がヘリカメの封じられたガムテープを薪ストーブにくべた

「……………」

自分の手の匂いを買いだ乾闥婆けんだっぱが小さく声を上げた

「乾闥婆？」

緊那羅きんならが恐る恐る乾闥婆けんだっぱに声をかける

「何ですかコノ匂いッ！；」

乾闥婆けんだっぱが声を上げる

「ヘリカメ臭。あ、ちなみに洗ってもなかなかとれないんだわなコレが」

京助が口の端をあげて言った

「だから僕ヘリカメ嫌いなの；」

悠助が緊那羅きんならの後ろから言う

「…嫌な匂いだっちゃね；」

乾闥婆けんだっぱの手の匂いを嗅いだ緊那羅きんならも顔をしかめて言った

洗面所から聞こえてくる水の流れる音

「…手の皮剥けるんちゃうか？；」

京助がそう呟くと乾闥婆けんだっぱは水を止めて手を鼻に持っていた
「…っ；」

どうやらまだヘリカメ臭が取れないらしい

「どうしてこうもしつこいんですか！この匂いはッ！；」
乾闥婆けんだっぱが京助に言った

「俺に言うな俺に；」

京助が傍にあった手拭タオルを放り投げて言う

「その匂いがあるから嫌だってヤツ多いんだよなヘリカメ」
「僕も嫌です」

京助が言うけんだっばと乾闥婆が間髪いれず言い切った

「てかお前何か用事あつてきたんだろ？何だ？」
袖口をおろす乾闥婆けんだっばに京助が聞く

「……………」

乾闥婆けんだっばの動きが止まった

「オ―イ？」

京助が乾闥婆けんだっばの顔を覗き込む

「…っさっきの騒ぎで何のために来たのか忘れちゃったじゃないで
すかッ！」

少し顔を赤らめながら乾闥婆けんだっばが言った

「…さいでつか；」

京助が口の端で呆れたように笑うと乾闥婆けんだっばは少し膨れて袖口に布を
結んだ

「な――！；」

悠助の変な声が聞こえて次にバタバタと走る足音が近づいてきた

「出た――ッ！；」

悠助がそう叫びながら京助に飛びつく

「またか？；」

ヘリカメの恐怖に脅える悠助を腰につけたまま京助が戦地に赴く

「出たって…あの虫ですか？」

乾闥婆けんだっばが歩きながら京助の腰に半分引きずられながら掴まっている
悠助に聞くと悠助が頷いた

それを見るや否や乾闥婆けんだっばが大股で歩き出して京助を追い越し茶の間
に入る

「…なんだアイツ…；」

京助が呟いた

少し遅れて京助が茶の間に入ると戸口に緊那羅きんならが立っていた

「あ…京助…」

そして茶の間の照明灯の下で照明灯を見上げる乾闥婆けんだっば

「あの中にいるんだっちゃ…ヘリカメ」

緊那羅きんならが乾闥婆けんたつばの見上げている照明灯を指差した

「京助」

乾闥婆けんたつばがいきなり振り向いて京助を呼んだ

「な…んだよ；」

少しビビリながら京助が返事をする

「貴方に教えられるって言うのは不本意なのですがこの際です」

「はあ…；」

乾闥婆けんたつばの言葉に京助が気の抜けた返事をする

「…ってかお前今何だか俺をけなしたこと言わなかったか？；」

しばらくして京助が反論した

「本当のことを言っただけです」

それに対してさらっと乾闥婆けんたつばが返す

「…相変わらずだなお前；」

京助が口の端を片方あげて言った

「それはどうも」

乾闥婆けんたつばがにっこり微笑んだ

「本題いいでしょうか？」

その笑顔のまま乾闥婆けんたつばが京助に言う

「あ？ ああ」

京助が頷くと乾闥婆けんたつばが棚の上に置いてあったガムテープを手を取った

「…けんちゃん？」

悠助が乾闥婆けんたつばを見上げる

「乾闥婆…まさか…ヘリカメ…？；」

ガムテープと乾闥婆けんたつばを交互に見てそう言った緊那羅きんならに乾闥婆けんたつばは（

最凶の）微笑を向けて頷いた

「先程コレを使ってヘリカメとかいう虫を捕まえていましたよね？

京助」

乾闥婆けんたつばがガムテープを指差して言う

「…ということはコレは対あの虫用の武器なんですよね？」

「…武器っていうか…いや…まあ…；」

真剣に言ってくる乾闥婆けんだつばに京助が曖昧な返事をする

「ガムテープはくつつける道具なんだよ」

悠助が京助の後ろから顔を出した

「くつつける？」

乾闥婆けんだつばが首をかしげた

「こうやって：伸ばして：触ってみ？」

京助がガムテープを伸ばして乾闥婆けんだつばの前に出す

「：ベタベタしますね：トリモチみたいな感じで」

指で突付きながら乾闥婆けんだつばが言った

「このベタベタで捕獲するのですね？」

にっこりと（悪魔の）微笑で乾闥婆が京助を見上げた

「本当にやるんだちゃ？；」

「当たり前です」

緊那羅きんならの言葉に乾闥婆けんだつばが笑顔のまま即答する

「でも：何だか：かわいそうだったちゃ：そりゃ私もあの匂いは嫌だ

っちゃけど：でも」

緊那羅きんならが照明灯の中の茶色い小さなヘリカメを見上げていった

「緊那羅」

乾闥婆きんならが緊那羅の名前を呼んだ

「：優しいのはいいことですが優しただけじゃ何も守れないんです」

乾闥婆けんだつばが京助の手からガムテープを取った

「優しさは諸刃の刃にもなりかねないということ：覚えておいて下

さい」

「でもそれが緊那羅きんならのイトコどと俺は思うぞ」

乾闥婆けんだつばの言葉が終わるか終わらないかのタイミングで京助が言った

「京助：」

京助の言葉に悠助も頷く

「僕緊ちゃん優しくて好き」

悠助が京助の後ろから笑顔を緊那羅きんならに向けた

「：ありがとだったちゃ」

緊那羅^{きんなら}が少し赤くなって笑った

ブー……ン…

そんな和やか平和ムードをぶち壊したその音
悠助が京助にしがみつく

「動いたか…」

照明灯の中から消えた茶色い影

「空襲警報発令だな」

京助が部屋を見渡しながら言った

静まり返った部屋に一旦やんではまた響き渡る不気味な【ブーン】
という音

古いつくりの栄野家の壁や天井とほぼ同じ色をしているヘリカメラ
ましてや飛行中とあらば見つけるのは困難極まりない

何処からいつ来るのかわからない緊張感の中一同目を凝らす

「いたッ!!」

京助がすばやく乾闥婆^{けんだつば}からガムテープを奪い取り適当な長さに切っ
てTVの方向に近づき

「捕獲！」

ガムテープを貼り付けた

中心が少し膨らんでそこヘリカメラが捕らわれているということがわ
かる

「…よく見つけられますね…」

乾闥婆^{けんだつば}が感心する

「慣れたな」

京助がそおととゆっくりガムテープをはがすとひっくり返って足を
ばたつかせるヘリカメラがくつついていた

それを先程のように畳んでストーブにくべようとしたその時
ガラッ

窓が開き外の冷たい空気が茶の間に流れ込む

「ひよっう!!」

緊那羅^{きんなら}が変な声を上げて廊下に非難した

「おお！；」

流れ込んできた空気（というか風）でヘリカメのついたままのガムテープが京助の手から離れ宙に舞う

「あ！ 逃げたッ！；」

そしてそのガムテープから飛び立つヘリカメを見て悠助が叫んだ
一同開いた窓に目を向ける

「母さん：京助です：過去に同じような光景を目にしたことがあります：」

窓のサッシにかかった手を見て京助がボソつと言った

たまに見える金色の触覚（正確には前髪）

一息ついてはサッシにかかる手に力がこめられ必死によじ登ろうと
していることが伺えるのだが誰も手を貸さない

開けっ放しの窓からどんどん冷たい空気が流れ込んでくる
バサバサとそこら辺にある紙類、雑誌類が音を立てている

「手：貸さないのか？」

京助が乾闥婆^{けんたっぱ}を肘でつついて言った

「貴方こそ」

乾闥婆^{けんたっぱ}が返す

「：かるらんだよね？」

悠助が京助の服を引っ張って聞く

「まあ：間違いないだろうな」

京助が【ヘッ】と口の端で笑った

「手を貸さんか！ たわけッ！！！！！！；」

「あ、降参した」

かれこれ十数分格闘していた迦楼羅^{かるら}がついに怒鳴った

京助が窓に近づき覗き込むと眉間にしわを寄せ迦楼羅^{かるら}が京助を見上げた

「上がれないなら玄関から来いよ：；」

迦楼羅^{かるら}の手を引っ張って室内に入れると窓を閉めた

ストーブの前では緊那羅^{きんなら}が薪を追加しつつ暖を取っていた

「何しに来たんですか迦楼羅」

服の裾を直している迦楼羅に乾闥婆が言った

「お前がすぐに帰ってこないからだろうが！」

迦楼羅が怒鳴る

「渡したらすぐに帰るからと言われておとなしく待っていれば…なかなか帰ってこないわ…」

ぶつぶつ文句を言いながら腕を組み横目で乾闥婆を見た

「何かあったかと思うだろう！ たわけ！！」

そしてまた迦楼羅が怒鳴る

「…すいませんでした…」

珍しくしおらしい乾闥婆に京助と緊那羅が少し驚く

「…まあいい…それで？ 緊那羅に渡したのか？」

いきなり迦楼羅の口から緊那羅の名前が出た

「私？」

緊那羅が自分を指差して言う

「…思い出しました。緊那羅」

乾闥婆がゴソゴソと何かを取り出して緊那羅に近づいた

「何だ何だ？」

京助と悠助も緊那羅に近づく

「手を出してください」

そう言われて緊那羅が手を差し出すとその手首に乾闥婆が何かをつけた

「これ…宝珠…？」

手首につけられた腕輪に3つ並んだ透明な玉

「そうだ。だがまだ完全な宝珠ではない」

迦楼羅が言った

「コレに完全とか不完全とかあるのか？」

京助が迦楼羅に聞く

「色がないだろう？ 宝珠はもともと水晶の様に透明なのだ。それに色がついて初めて完全な宝珠になる」

京助と緊那羅きんならをかしげた

「：つまりです。緊那羅きんならのその宝珠はまだ完全な宝珠ではないという事です。完全な宝珠にするためにはそれなりの試練というか：修行というか：とにかくその透明な宝珠に色をつけないといけないのです」

迦楼羅かるらの説明に乾闥婆が付け足す

「色：」

緊那羅きんならが自分の腕にある宝珠を見る

「色をつけるって：絵の具とかじゃないんだろ？ やっぱ」

京助が聞く

「当たり前です」

乾闥婆けんだっぱが言い切った

「宝珠は己の心の色を映ししそれを色とする」

迦楼羅かるらが言う

「己の：心の色：」

透明な宝珠に映った自分の顔を見て緊那羅きんならが呟く

ブー……ン：

忘れていた恐怖がまた聞こえてきた

やんでは聞こえやんでは聞こえるその音に悠助が京助にしがみつ

「：何の音だ？」

迦楼羅かるらが聞いた

「お前のせいで封印がとけた魔王の飛んでる音」

京助が風で飛んで床に落ちていたガムテープを拾い上げた

「コレにくっつけてただけどさ。お前が窓開けたせいで吹っ飛んで。んで開放されて。そんでもって飛び回ってるわけ」

ヒラヒラとガムテープを振って京助が言うと悠助がじとおうつとした眼差しで迦楼羅かるらを見た

「：かるらのばか」

「なっ；」

ボソツと言った悠助に迦楼羅かるらが口をあけた

「迦楼羅」かるら

乾闥婆けんたつばが迦楼羅かるらを呼ぶ

「…何だこれは…」

乾闥婆けんたつばが迦楼羅かるらの前にガムテープを差し出した

「責任もってヘリカメ退治してください」

につこりと微笑みながら迦楼羅かるらの手を取りガムテープを持たせる

「…コレで…か？」

迦楼羅がガムテープを物珍しそうに上下左右から見て真ん中の穴を覗きこんだ

「この穴は何だ？ 何に使うんだ？」

迦楼羅が京助に聞くと乾闥婆けんたつばと緊那羅きんならも迦楼羅かるらの周りに集まって真ん中の穴を見た

「…無知なヤツの行動っておんもしれえよなあ…」

京助が口の端をあげて笑う

「京助このあ…後ろ…」

緊那羅きんならがガムテープの穴を指差して顔を上げるとその指を今度は茶箆せんぴに向かつて刺した

振り返るとそこにはヤツがいた

昔こんなカンジのタイトルのドラマがあつた様な気がするがまずそれは関係ない

そこにいたのは紛れもなくヘリカメだった

「きやー！！！」

悠助が悲鳴を上げて廊下へ逃げる

「な？ なんだ？」

悠助が逃げ出したのを見て迦楼羅かるらが焦る

「…出ましたね…」

乾闥婆けんたつばが黒い微笑を浮かべた

茶箆せんぴをやや斜めに上り始めたヘリカメに京助が近づくとヘリカメが動きを止めた

「鳥類。逃がした責任」

ヘリカメを指差して京助が迦楼羅かるらを振り返る

「な：ワシが？；」

ご指名されて迦楼羅かるらが目を丸くする

「頑張ってくださいね迦楼羅かるら」

乾闥婆けんたつばがそつと迦楼羅かるらの背中を押した

「触ると凄くくさいっちゃ」

緊那羅きんならも迦楼羅かるらの背中を軽く押す

「お前ら…」

迦楼羅かるらが二人を見上げる

「ちゃんと取ってねかるらん」

廊下から悠助が言うかるらと迦楼羅がしぶしぶ歩き出した

「あ、飛んだ」

京助の声に一同茶筆筒を見たがソコにヘリカメの姿はなかった

「鳥類がもたもたしてるから…」

京助がヤレヤレと溜息をついた

「かるらんのばかー！ー！！」

悠助が叫んだ

「なッ！？；」

怒鳴り返すにも返せない迦楼羅かるらが詰まる

「見つけるの一苦労なんですよ？何してるんですかまったく…」

乾闥婆けんたつばが溜息をついて腰に手を当てた

「…ワシが悪者か？；」

迦楼羅かるらがガムテープを持ったまま呟く

「音がしないってことはどっかにとま…ってたよオイ」

京助が悠助の方を見て言うかるらと悠助がすみあがった

そして恐る恐る自分の周りを見渡して

「やー！ー！ーッ！！；」

服の腕の部分に蠢くヘリカメを見て叫んだ

「取って取って取ってー！ーッ！！；」

泣きながら腕をブンブン振るとヘリカメがまた飛び立って今度は迦か

楼羅めがけてタツクル体勢に入った

「迦楼羅！」
かるら

乾闥婆が叫んだ
けんだつぱ

「のあ?!?!;」

乾闥婆の大声といきなり突進してきたヘリカメに驚いた迦楼羅かるらの口から小さく炎が出た

ジュツ:

「…火葬…」

京助が呟いた

迦楼羅かるらの足元には茶色から黒に色が変わってしまったヘリカメが落ちて
ちている

一同ソレを取り囲み見下ろした

辛うじて原形は留めているもののもはやヘリカメに息はなく

「:ヘリカメは?」

恐る恐る近づいてきた悠助の歩く振動でヘリカメの足がポロリと取れた

「昇天なされました」

京助がヘリカメに向かい合掌した

「:何だ?;」

何がどうでどうなっているのかさっぱりわからない迦楼羅かるらがガムテープを持ったまま京助が合掌してるのを見て一緒に合掌しながら首をかしげる

「ヘリカメ退治した様ですよ迦楼羅が」
かるら

乾闥婆けんだつぱも何気に合掌しながら言った

「燃やすと匂いしないのですか?」

合掌したまま乾闥婆けんだつぱが京助に聞く

「何でかしないんだわな燃やすと。だから俺ストーブにくべてるじゃない?」

手に持っていた切れっぱしのガムテープにヘリカメをそっとくっつけながら京助が言った

「京助ゝヘリカメの足残ってるゝ」

悠助がしゃがんで落ちているヘリカメの足を指差すと京助が素手で足を拾ってガムテープにくつつけた

「触っても大丈夫なんだっちゃ？」

その行動を見ていた緊那羅きんならが京助に聞くと足を拾い上げた手を緊那羅きんの顔の前に出した

「嗅いでみ？」

緊那羅きんならが恐る恐る京助の手に鼻を近づけると京助が緊那羅きんならの鼻を摘んだ

「に”っ；」

緊那羅が鼻を押さえて飛びのくと京助が笑う

「してやったり」

笑いながらガムテープをストープにくべる

「：そんなに臭いのか？あの虫の匂いは」

少し興味があるのか迦楼羅かるらが乾闥婆けんたつばに聞く

「嗅ぎたいですか？」

乾闥婆けんたつばはそういうといまだ匂いの取れない手で迦楼羅かるらの鼻と口をふさいだ

「ふがっ！！？；」

迦楼羅かるらが声を上げる

「どうです？」

手を離して乾闥婆けんたつばがにっこりと微笑んだ

「；；；」

開放された迦楼羅かるらが床に手をつきハーハー言っている

「な：何なんだ！その匂いはッ！；」

涙目で怒鳴った迦楼羅かるらの前に乾闥婆けんたつばが匂いつきの手を出した

「ヘリカメの匂いです」

そう言った乾闥婆けんたつばの顔は相変わらず笑顔だったが明らかに：

「八つ当たりというかハライセに見えるのは俺だけだろうか」

京助がボソツと言うと

「：私もそう見えるっちゃ：」

自分だけがヘリカメ臭に侵されているということが結構ムカついて
いるらしい乾闥婆けんだつばが執拗に迦楼羅かるらに向かって匂いのついた手を嗅が
せようとしている

「やめんか！； やめろといっているだろう！たわけッ！！；」

ついに後ずさりから駆け足に変えて迦楼羅かるらが逃げる

「遠慮しないで下さい。ヘリカメの匂いに興味があったのでしょう
？」

それを（黒い）笑顔のまま乾闥婆けんだつばが大股で追いかける

「一回嗅げばいいわ！；」

迦楼羅かるらが怒鳴る

「追いかっこ〜」

乾闥婆けんだつばの後を悠助が追いかけ始める

「お子様は元気ですナア：」

京助がハッハと笑いながらその光景を見ていた

> i 2 0 5 9 5 — 2 5 7 5 <

【第五回・四】履くモノ・履かれるモノ（前書き）

正月町にとうとうふった雪

喜んでるヤツもいればそうでないヤツもいる

物置の中で半年間眠っていたストーブの封印を解く日がついにやってきた

【第五回・四】履くモノ・履かれるモノ

洗濯機が洗濯終了の音を響かせた土曜の午前

変な寝癖のついた頭のまま歯ブラシを動かしていた京助を押しつけて母ハルミが洗濯機の蓋を開けた

「おそよう」

母ハルミが洗濯物をカゴに移しながら京助に言った

【解説しよう。「おそよう」とは「おはよう」の反対の意味で遅く起きてきた人に対して使う言葉である】

「ほひゃひよ」

歯を磨きながら返した京助の口の端から液体となった歯磨き粉が垂れた

「ちゃんと拭いて来なさいよ？ ソコ」

母ハルミが顎で床を差し洗面所から出て行く

「あら緊ちゃん：最近お寝坊さんしてるわね」

廊下から母ハルミの声がする

「目は覚めてるんだっちゃ； だけど：布団から出られないんだっ

ちゃ；」

続く緊那羅きんならの声

「わかるわあ：最近寒いものね」

笑って言う母ハルミの声が遠のいて

「あ：おはようだったっちゃ京助」

髪を解いたままの緊那羅が洗面所に入ってきた

「おそようだろ」

口を濯いで顔を上げながら京助が言う

「：すごい寝癖だったちゃね；」

緊那羅きんならが四方八方に跳ねている京助の寝癖を見て笑った

「俺髪硬いからなく：まあすぐ直るんだけどさ」

蛇口をお湯の方にして頭からお湯をかぶり手で撫で付けるといつもの髪形になっている

「私は髪が柔らかいから寝癖がつかない代わりにこんんがらがるっちゃ」

緊那羅きんならが傍にあったゴムで髪をゆるく一本に束ねて歯ブラシを手に持った

「まあソコまで長けりゃそうだろな」

タオルで顔と髪を拭きながら京助が言う

「あれゝ？ ハルミママは？」

悠助がひょっこり洗面所を覗いて言った

「母さんなら洗濯物干してると思うぞ？ なした？」

使ったタオルを洗濯機の中に入れて京助が悠助に近づいた

「踵が痛い」

悠助が片方の足で片方の足の踵をさすった

「踵？ 見してみ？」

京助が悠助に言うとうと悠助がその場に座って足を上げ踵を見せた

「あゝ：乾燥してカサカサ：ところどころ切れてるし：こりや痛いわな」

悠助の踵を撫でて京助が言うとうと歯ブラシを咥えたままの緊那羅きんならも悠助の踵を見て撫でる

「くすぐったいゝ」

眉を下げて悠助が笑うとうと京助が更に足の裏をくすぐる

「にゃー！！ やー！！」

悠助が声を上げて笑い出す
ゴン

「あ」

暴れた悠助の頭が壁にぶつかった

「：スマン；」

京助が悠助を抱き起こして謝る

「とにかく踵何とかしねえとな〜…」

悠助を抱き上げて京助が言う

「…話そらしたっちゃ…」

齒ブラシを口から出して緊那羅きんならが呟いた

「母さん」「ハルミママ〜」

京助と悠助が同時に母ハルミを呼んだ

「なあに？」

茶の間の隣の部屋に洗濯物を干していた母ハルミが後ろは振り向かず声だけで返事をした

「悠が…」 「踵が…」

兄弟がまたも同時に言った

「悠ちゃんの踵がどうしたの？」

兄弟それぞれの言葉をたして何が言いたいのかわかるところがさすが母親

「かさかさで切れてんだ」

京助が悠助を下に降ろした

「痛い〜…」

床に座った悠助が自分の踵をさする

「ああ…京助。テレビの横の引き出しに雪の元かケラチナミン軟膏入ってるはずだから塗ってあげて？悠ちゃんはきちんと靴下履いてね」

肩に京助のシャツを掛け悠助のパーカーをハンガーに掛けながら母ハルミが言った

「雪の元―雪の元〜」

変な歌を小さく歌いながら京助が引き出しの中を探し始める

「悠助大丈夫だっちゃ？」

身支度を終えたらしい緊那羅きんならが悠助に声を掛けた

「歩くと痛い…」

悠助が眉を下げると緊那羅きんならが悠助の踵を優しく撫でた

「毎年のことなのよね」

洗濯物を干し終わった母ハルミが悠助の隣に座って踵を見た

「はいよ雪の元」

京助が母ハルミに雪の元とかかれた軟膏を手渡した

「何だっちゃ？ それ」

緊那羅きんならが雪の元を見て言う

「これはねお薬よ。昔ながらの：はい悠ちゃん踵出して」

母ハルミが雪の元の蓋を開けて指で掬い悠助の踵に刷り込む

「京助悠ちゃんの靴下とって」

悠助の足を持ったまま母ハルミが京助に言った

「コレでいいか？」

京助が畳んだばかりの洗濯物の中から悠助の靴下を取って放り投げると緊那羅きんならがソレをキャッチする

「あとはお風呂入ったときによく揉んで寝る前にまた雪の元塗って」
悠助に靴下を履かせながら母ハルミが言う

「きちんと靴下を履いていれば治るわ」

靴下を履かせ終わると母ハルミが悠助の頭を撫でて立ち上がった

「僕靴下履くのなんか嫌：」

悠助が靴下を引っ張って呟いた

「まあ：夏の間ずっと裸足だったしな：何となくわかるっちゃわかるけどさ：痛いよりはマシだろ悠」

京助の言葉に悠助が頷いた

「コッチの着るものって面白っちゃ」

緊那羅きんならが悠助の靴下を摘んで言った

「あのな；ソレは俺らにとってのお前らの格好にもいえることだぞ
？；」

京助が言う

「文化祭ん時とかそれがよくわかったんじゃ御座いませんこと？」

京助が言うと緊那羅きんならが何処となく頬を膨らませた

「人を見世物にして：」

緊那羅きんならがボソツと言った

「使えるものは使うのだ」

京助が緊那羅きんならに指を突きつけて言う

「でも僕緊ちゃんの服好きだよ？」

悠助がにっこり笑って緊那羅きんならを見上げた

「まあ俺も嫌いじゃないけどさ：面白いしコスプレみたいで」

京助も言う

「面白ってなんだっちゃ：；」

褒められてるのかけなされてるのかまたはからかわれているのかわからない京助の言葉に緊那羅きんならがジト目で京助を見た

「とうとう降りやがったか：」

教室の窓から外を見ながら坂田が言った

五時間目と六時間目の境の休み時間窓の外にははらはらと雪が降り始めた

「なんでこう帰るようになってから狙ったように振りますかね」

窓を開けて降っているものが本当に雪なのかと確かめるように坂田が手を伸ばし空から降ってくる白い物体を掌に乗せるとソレはすぐに溶けて消え雪だということが証明された

「やだなあ：アタシ今日塾なのに」

阿部が坂田の隣に立ち窓から顔を出す

「結構積もりそうだよナア：」

坂田も顔を出し空を見上げた

「京助お前ん家ストーブ変えるんだろ？ 今日帰りにやるか？」

六時間目に提出するプリントを阿部から借りて写している京助に坂田が言った

「あゝ：そうだなア：雪降ったなら薪じゃ寒みいしなあ：」

写すのを一旦止めて京助がシャープペンを回しながら言う

「中島と南にも俺言ってきたよ。ハルミさんが風邪でも引いたら大変だしな」

坂田がそう言うや否や早歩きで教室を出て行った

「何？ 京助ン家ストーブ変えるって…」

阿部が自分の席に座って京助に聞いた

「ああ。俺ん家今薪ストーブなんだけどさ石炭…ってかコークスストーブに変えるんよ。雪降ったら…それを毎年あいつ等に手伝ってもらってるんだわ」

写し終わったプリントを阿部に返しながら京助が言う

「ふうん…ね！ アタシも行っている？」

阿部が聞いた

「は？… だってお前塾…」

「いいの！ ね！ いいでしょ？ 夕飯支度くらい手伝えるし…煙突とか掃除するの見たことないんだもん…プリント写させてあげたよね？」

阿部の言葉に京助が困ったように考えて溜息をついた

「…まあ…いいけどさ…」

京助が目をそらして承諾した

「あつれ？ 阿部ちゃん…と本間ちゃん？」

玄関にやってきた南と中島が+aでいる女子二人を見て言った

「何？ この二人も行くの？」

中島が言う

「悪い？」

本間が半ガン飛ばしで中島を見る

「…滅相も御座いません…」

中島が本間から顔をそらした

「おし！！ じゃあメンツも揃ったことだし…行きますか」

坂田が床に置いていた鞆を肩に掛けて言った

「毎年スマンねえ…」

京助も立ち上がり歩き出す

「ソレは言わねえ約束でしょおとつあん」

南が京助の肩を叩いて言った

「おお！ 微白銀世界！！」

アスファルトの上にうつすらと積もった雪の上に先に帰っていった生徒の足跡がチラホラと残っている

「こりゃ本当積もりそうだな」

南が空を見上げて言った

「変えないと緊那羅が喚くよナア」

京助がボソッと呟いた

「…イトコ？」

阿部がその呟きを聞き取り聞き返す

「あゝ…まあ…そんなトコ」

京助が苦笑いで返した

「…栄野ってすぎゅ顔に出るタイプだね」

本間が阿部と京助の間に割って入ってボソツと言い歩き出す

「…アタシもそう思う」

阿部が京助をチラッと見た後本間の後を追いかけた

「……女性を侮るなかれ」

中島がそう言いながら京助の肩に手を置くと坂田、南も同様に京助の肩に手を置き大きく頷いた

「…なあお前等寒くないんか？； いや…俺に取っちゃ嬉しい限り

なんで御座いますが生足」

南が前を歩く阿部と本間に言った

「寒いよ？」

本間がそれにさらっと返す

「…女ってわかんねえ」

京助が言う

「寒いのにどうして出したがるんだ？；」

京助の言葉に本間と阿部が顔を見合わせる

「なんでって…別に」

ほぼコートに隠れている短めのスカートとブーツの間から出ている二人の女子の足は少し赤くなっている

「女心少しわかって欲しいよね」

本間がボソツと言った

「俺等男だし：一名片足女に突っ込んでるヤツいるけどな」

坂田が南をチラ見して言った

「突っ込んでナイナイ；」

ソレを南が力いっぱい否定する

「お！ アレに見えるは：」

坂を上っていた中島が何かを見つけた

「キンナラムちゃーん！ーん！」

南がぶんぶんと手を振って叫ぶとソレに気づいた緊那羅きんならが小走りで坂を駆け下りてきた

「ラムちゃん：？」

阿部が呟くと坂田がほくそえみながら

「そ！ 京助のイトコ （仮）の金名羊子で通称キンナラムちゃんだ」

と説明する

「：ふうん：まあそういうことにしておくわ」

本間が何か感づいているように言ったが阿部は何も言わなかった

「：お前寒がりのクセに何してんだ？；」

完全防備でやってきた緊那羅に京助が聞いた

「石段の雪払いしてたんだっちゃ； ：私の仕事だし」

そういう緊那羅きんならの手には竹箒が握られていた

「えらいわねえラムちゃん鼻水まで垂らして」

南が緊那羅きんならの頭を撫でた

「：はい」

緊那羅きんならの目の前にポケットティッシュが差し出された

「鼻水拭いたら？」

阿部が差し出したポケットティッシュを恐る恐る緊那羅きんならが受け取る

「あの：」

「アタシは阿部郁恵あべいくえでこっちが本間香奈ほんまかなって言うの。文化祭とかセ

ブンで会ってるよね？ …羊子さん？」

【羊子】と呼ばれて緊那羅が止まった

その後ろで京助と3馬鹿が声を殺して笑っている

「っ…京助ッ！！！」

緊那羅が振り返って叫んだ

「だははははははははは！！！」

途端に大声で四人が笑い出した

「あ！ 京助だー！！！」

石段の方から悠助が顔を出して走ってきた

「悠助〜！」

阿部が両手を広げて悠助を抱きしめた

「ちみッ子は役得ですなあ…」

笑いすぎて流れた涙を拭いながら中島が呟いた

「阿部ちゃん〜！」

悠助が阿部に抱きしめられたままピョンピョン跳ねる

「みんな何しに来たの？」

悠助がぐるり見渡して聞く

「ストーブ取替えに来たんよ」

坂田が一息ついて言った

「ストーブ変えるんだっちゃ？」

緊那羅がどこか不安そうに聞いてきた

「ああ。薪だとさすがに雪降ると寒みいから…安心しろ今よりあつ

たかくなるから；」

【あつたかくなる】という京助の言葉に緊那羅の顔がぱあっと明るくなった

「あつたかくなるんだっちゃ？ 今より？ もっと？」

緊那羅が尋問するかのように京助を問い詰める

「そうそう；…めっちゃ嬉しそうだなお前；」

箒とポケットティッシュを握ったまま緊那羅が嬉しそうに笑顔を浮かべた

「…阿部ちゃん？」

緊那羅きんならと京助のやり取りを黙ってみていた阿部に悠助が声を掛ける
とはっとして阿部が悠助に笑顔を返した

「…ちゃっちゃと取り替えようよ」

今まで黙っていた本間が仕切りの一言を言った

悠助を除いた一同石段の上を見てしばしの沈黙

鳥居の丁度真ん中あたりに二人の人影

カクンと首が下がった人影の頭をもう片方の人影が叩いた

「…ねえ…あの…」

「言うな…」

本間が石段の上の人影を指差して京助に何か言おうとしたのを京助
が遮った

「タカちゃんときょんがらさんだっ！！！」

悠助が人影の名前を言いながら石段を駆け上がる

「…何しに来たんだと思う？」

坂田が呟いた

「暇つぶしという理由にヨッちゃんイカ5枚」

南が答えた

「俺もその方向で同じく5枚」

中島も言う

「じゃあ俺もその方向で3枚」

「少なッ！」

京助が言うのと南が突っ込んだ

「…で？ 何しに来たんだ？ …一応聞くけど」

石段を登って制多迦こんがらと矜羯羅きんがらに聞いた

「緊那羅きんならが宝珠持ったって聞いたから」

矜羯羅こんがらに名前を呼ばれきよんとする緊那羅きんならに向けて矜羯羅こんがらがにっ

こり微笑んだ

「…にきた」

悠助を肩車せいたかしたまま制多迦こんがらが言った

「…これは【暇つぶし】の部類に分けてOKですな」

中島が言う

「で？ 緊那羅宝珠は…ああそれ？」

「…シカトで一すかー」

中島の言葉には反応せず緊那羅の腕についている腕輪に矜羯羅は反応した

「キレー…何処で買ったの？」

阿部が緊那羅の腕輪を見て緊那羅に聞く

「え…つと…もらったんだっちゃん」

慌てて緊那羅が答える

「誰に？」

更に阿部が突っ込んで聞く

「え？ え…つと…」

「彼氏？」

返答に困っていた緊那羅に本間まで聞いてきた

「…彼氏…って？」

本間の言葉に緊那羅が首をかしげる

「ボーイフレンドのことだラムちゃん」

坂田が緊那羅の肩を叩いて教える

「ボー…？？」

緊那羅がまた首をかしげて考え込む

「直訳で男友達」

坂田が更に補足で教えると緊那羅が少し考えた後

「まあ…そう…だっちゃん…？？」

阿部と本間にそう答えた

「…彼氏いるみたいで何より」

本間がにっこり緊那羅に笑顔に向けた

「…まあ…鳥類も乾闥婆もオスだしなあ…モノは言い様だな」

京助がヘツと口の端で笑った

「…だ色はついてないんだね…」

制多迦せいたかが緊那羅きんならの宝珠を見て言った

「あ：うんもらったばかりなんだっちゃ」

緊那羅きんならが自分の宝珠を見て言う

「：に色になるのか楽しみだね」

制多迦せいたかが緊那羅きんならに笑いかけた

「あら？ おかえりなさい：どうしたの？」

自宅から境内に向かう途中の母ハルミが鳥居の下の集団に声を掛けた

「はるみさ：っ！」

坂田がその声にいち早く反応する

「毎年恒例のストーブ変え！」

京助が叫んだ

「あらあ！ そうなのー？ 御願いねー！ 晩御飯食べていって頂

戴ねー！！」

母ハルミはそう返すと境内の裏に歩いていった

「よっしゃー！ 張り切っていきますかッ！！」

坂田が気合を入れた

「若、士気上昇」

雪がまたチラチラと降ってきた

「とりあえず物置から本体出してー：煙突替えて：」

京助がガタガタと物置の引き戸を開けながら言う

「アタシ等は？」

阿部が京助に聞いた

「あ：悠と遊んでくれ。ストーブ本体結構重いし：」

引き戸が開けられて少し埃っぽい匂いが物置の中からする

虫取りアミやら何やらすでに今年の役目を終えた季節を感じる物体

があちこちに置いてある物置の一番奥に約半年の眠りについていた

ストーブがあった

「そーいや今年は泳がなかったナア」

南が吊り下げられていた浮き輪をポスポス叩きながらいった

「男ばかりの水泳大会って：嫌だナア；」

中島がストーブの上に乗っていた箱を下におろした

「じゃあ誘ってよねえ香奈？」

阿部が戸口からそう言った

「阿部ちゃんビキニ一丁で御願います」

南が手を上げて言う

「馬鹿いつてねえでそっち持て；」

京助と坂田が向き合ってストーブを持ち上げようと手を掛けている

「ヘイヘイホー」

軽く返事をして南と中島も空いていた二辺に立ち手を掛ける

「：何してんの？」

戸口に手を掛け腰に手を当てて矜羯羅こんがらが物置の中に声を掛けた

「見りゃわかるだろ； コイツを：」

「：こべばいいの？」

「のーのーのーのー！！？；」

坂田の言葉の途中に言葉を掛けてきた制多迦せいたかに4馬鹿が驚いて飛びのいた

「いきなり現れんな阿呆ッ！！；」

中島が叫ぶ

「：ここに運ぶの？」

制多迦せいたかがストーブに手をついて聞く

「：まずは庭の：ってオイオイオイオイ；」

京助の言葉を最後まで聞かないうちに制多迦がヒョイと片手でストーブを持ち上げた

「：やっぱ雑技団なんじゃ：」

南がボソツと言った

「：アイツらはもう人の域越えております」

坂田も言う

物置の外に出ると降り続いていた雪が結構いい具合に積もっていて悠助と女子2人が雪玉を転がして雪だるまを作ろうとしている

「積もるの早ええなあ；」

その光景を横目に男一同はギュイギュイと鳴く雪に足跡を付け庭に向かう

「…なあ…」

南が前を歩く矜羯羅の足元を見て声を掛けた

「何？」

矜羯羅こんがらが足を止める

「足：真っ赤ですが」

南の言葉に傍を歩いていた坂田と京助が矜羯羅こんがらの足元を見た

「…今時期にこんなズツパみたいなヤツじゃなあ；寒くねえのか？」

【解説しよう。【ズツパ】とは【スリッパ】、【サンダル】系の履物を指す用語で靴の踵を潰して履く履き方のこともたまにこ
う言うのである】

坂田が聞くと矜羯羅こんがらが片足を上げて

「冷たいといえは冷たいよ？ 感覚ないし」と言った

「でもまあ我慢できない程度じゃないし」

そう言うところり笑う

「アカギレるぞ？」

京助がしゃがんで矜羯羅こんがらの足に手を置いた

「うっわ冷てえ！」

「どれどれ：おお！ 氷じゃん！」

坂田と南も矜羯羅こんがらの足を触って言った

「…僕の足に群れないでくれる？」

矜羯羅こんがらが見下ろして言う

「京助靴下か何か貸してやれば？」

南が立ち上がり京助に提案した

「…靴下ねえ…」

京助が矜羯羅こんがらの足を見て顎に手をやりながら言う

「…あの京助」

後ろにいた緊那羅きんならが京助に声を掛けた

「ハイ！ ソコ！ 発言は手を上げて！」

南が緊那羅きんならに向かって言うきんならと緊那羅が半ば呆れ加減で手を上げた

「ハイき…んな羊子さん」

坂田がソレを緊那羅きんならではなく羊子として指名した

「…靴下って靴の上にはいてるのにどうして靴下って言うんだっ
ちゃ？」

少しの間坂田をジトツと見ていた緊那羅きんならが京助に聞いた

「くつ…の上…」

南と坂田そして京助それにつられてか矜羯羅こんがらまで各々の足元を見る

「ソレは…」

「それは…」

「…そーれーはー」

京助、坂田、南の三人がかわるがわる【それは】を言いそして

「…なんでだっちゃ？」

緊那羅きんならのその一言に揃って回れ右をして歩き出した

「そーいやもうすぐアレだな」

坂田が言う

「そうそう！ アレだよな！」

京助がソレに返す

「アレかあ…じゃあアレしないとな！」

南もその会話に乗る

「…【アレ】ってなんだっちゃ…」

緊那羅きんならが箒を握ったまま庭へと向かう京助立ちの後姿を見て呟く

「逃げたね」

矜羯羅こんがらが溜息混じりに言った

「遅い！！ 何してたんだ馬鹿め！！」

制多迦せいたかの後を一人追いかけて一刻早く来ていた中島が大股で近づいてきた

「コイツ何言ってんだか微妙な話し方するから会話できねえしよッ
!!!」

中島が制多迦せいたかを指差して怒鳴る

「…みょうって…」

制多迦せいたかが苦笑いを浮かべた

「モノは慣れだ慣れ。何事も経験だ中島君」

そんな中島に対し【ハッハ】と笑いながら京助が中島の肩をポンポン叩く

「せめて誰か通訳つけてくれよなあ…； スッゲエ気まずかったし
! ばか——!!」

中島が泣き真似をしながらしやがみこむ

「…しよし」

そんな中島の頭を制多迦せいたかが撫でて慰める

「…オマエ…実は激しくいいヤツなのか？」

中島が制多迦せいたかを見上げて言う
と制多迦せいたかが【ぐっじよぶ】というカンジに親指を立てた

「心の友——————ッ!!!!」

中島が大声で言いながら制多迦せいたかに飛びついた

「青春だけど…塩加減がしよっぺえ…」

勢いで庭に倒れた制多迦せいたかと中島を見て京助が言う

「…何してんのさ…」

お決まりのあのポーズをした矜羯羅こんがらが庭に倒れた二人を見下ろして
言った

「…ころの友だって」

制多迦せいたかが矜羯羅こんがらを見上げながら嬉しそうに言う

「…心の友でもなんでもいいけど…何かするんじやなかったの？」

チラリと庭に放置されているストーブを矜羯羅こんがらが見ると一同ストーブの存在を思い出す

囲いの外からは楽しそうな女子二人と悠助の笑い声が聞こえている
「…寒いっちゃ…」

緊那羅きんならが鼻水を啜った

「：重いつちや；」

寒いと言った緊那羅きんならの体には3馬鹿と京助の上着が掛けられていた
「寒いって言うから掛けてやったのに今度は重いか：我がままさんめ」

その上に更に京助が制服の上着を乗せた

「限度つてもものがあるんじゃないっちや？；」

ずり落ちてきた上着を押さえながら緊那羅きんならが言う

「おーい！ 京助ー！ コレ外していいんかー？」

屋根の上から南が叫ぶ

「おー！ オッケイだー！」

南と坂田が軍手をはめた手で煙突を外した

「俺らはコッチだ心の友！」

「：ツケイ」

中島が親指を立てると制多迦せいたかもソレに返す

「僕らはどうしようか：」

緊那羅きんならの肩から落ちそうになっていた上着を取って矜羯羅こんがらが言った

「どうしよう：って：言われても私もわからないっちや；」

鼻水を啜りながら緊那羅きんならが言う

「まあ僕あんまり体動かすの好きじゃないから手伝う気はないんだ
けどね：っ」

一歩足を踏み出した矜羯羅こんがらがピクツと何かに反応したのに緊那羅きんならが
気づいた

「：矜羯羅？」

自分の踵に目をやっている矜羯羅こんがらに緊那羅きんならが声を掛けそして矜羯羅こんがら
の踵を見た

「：悠助とおんなじだっちや」

一箇所だが結構深く切れている矜羯羅こんがらの踵をそつと緊那羅きんならが触る

「：うしたの？」

「何だ何だ？」

制多迦せいたかと中島が煙突ブラシを持ったままやってきた

「うっわ！ アカギレか？； いったそー；裸足でいるからだぞー；

」
中島が身震いして言った

「：カギレ？」

制多迦せいたかが矜羯羅こんがらの踵に触る

「だから：僕の足に群れないでくれる？」

矜羯羅こんがらが溜息をつく

「コーラー！！ ソコとソコとソコとソコ！！ サボるな！」

屋根の上から坂田が叫ぶ

「名前のいいずらいヤツがアカギレの攻撃受けてるんだけどさー！
！」

中島が屋根に向かって叫び返す

「：矜羯羅こんがらだよ」

矜羯羅こんがらが不機嫌そうに言うのと制多迦せいたかがプツと小さく笑いソレに対して矜羯羅こんがらが玉を飛ばした

「：たい；」

玉の当たった頭を制多迦せいたかがさする

「アカギレ？」

梯子を降りて京助が矜羯羅こんがらの踵を見た

「おおお！； 結構さっくりいつてるな；」

京助が矜羯羅こんがらの踵に触ると京助の手についていた煤で踵が少し黒くなった

「この雪ん中裸足でいるからだろ？ だから忠告したのによー」

そう言いながら南と坂田も屋根から下りてきた

「アカギレですね。ええコレは確かにアカギレです」

坂田も矜羯羅こんがらの踵を触った

「：あのさあ：だから群れないで欲しいんだけどくすぐったいし」

矜羯羅こんがらの足元にしゃがみこんでいる一同を見下ろして矜羯羅こんがらが言う
「痛くないっちゃ？」

緊那羅きんならが矜羯羅こんがらを見上げた

「……………」

矜羯羅こんがらが黙もくって緊那羅きんならを見る

「矜羯羅？」

何も言わない矜羯羅こんがらに緊那羅きんならが首をかしげた

「…少し…痛いかな」

矜羯羅こんがらが目をそらしながらボソツと言った

「京助あの…ほら悠助の踵かかとに塗ぬった薬…」

緊那羅が京助に言う

「雪の元か？ 塗ぬってみるか…物は試しで」

京助が立ち上がった

「…僕で試しさないで欲しいんだけど」

矜羯羅こんがらが溜息ため息をついた

ストーブを小脇せいたかに抱かかえて制多迦せいたかが廊下ろうかを歩く

「お前まへ力あるんだな…すげえな」

ソレを中島が褒め称たたえると制多迦せいたかがにっこり微笑えいごうんだ

「薪ストーブどかしてあるからソコに置いてくれ。お前はこっち」

茶の間の方かたに向かおうとしていた矜羯羅こんがらの布ぬいをチョイと引ひつ張はつて

京助が隣の和室に入る

襖ふすまを開けると茶の間に繋がつっていて制多迦せいたかと中島が見えた

「そうそうそこに置いてくれ。雪の元雪の元…めっけ」

京助が制多迦せいたかに指示ししながら引き出しから雪の元を取り出し矜羯羅こんがら

のいる和室に向かった

「…変わった着物だよね…」

干ぬしてあった洗濯物を矜羯羅こんがらが引ひつ張はつて言う

「俺おれらからすればそれが普通の着物！ お前等の着てる物の方が変

わってる着物なんだっつーの； ホラ！ 座まつて足出あしせ」

京助が先に座まつて矜羯羅こんがらに言ういと膝ひざをつき矜羯羅こんがらが京助に向かつて

足を出した

「…流血れっけつしてるじゃん； 中島…ティッシュ取とってくれ」

茶の間で制多迦せいたかとストーブのガタつきを調整していた中島がテレビの上にあつたティッシュの箱を京助めがけて放り投げる

「血…赤いんだな」

京助が呟いた

「…一応ねがつかりした？」

目を細めて矜羯羅こんがらか笑う

「いんや…俺らと同じなんだナアと安心いたしやした」

京助が血を拭いたティッシュを丸めて横に置いて雪の元の蓋を開けた

「着る物とか何だかんだ違つても血の色は一緒だったし生きてるんだなあ」と

矜羯羅こんがらの踵に雪の元を塗りながら京助が言う

「面白いこというよね…京助は…だから用がなくても来なくなるの

かもしれない…」

雪の元を塗られた自分の踵を矜羯羅こんがらが撫でた

「悠助と京助に僕らは何かを求めているのかもしれないね…今までを変える何かを」

矜羯羅こんがらが制多迦せいたかに目を向けると制多迦せいたかが中島に何かを教えたれていた

「君達になら制多迦せいたかを…僕らを…」

「…矜羯羅こんがら…？」

顔をゆがめた矜羯羅こんがらに京助が小さく呼びかけた

「…これ以上言うとうと迦楼羅かるらに怒られるね」

矜羯羅こんがらが立ち上がり歩き出す

「ちよ…待てって矜羯羅こんがら…」

京助が慌てて声を掛けるも矜羯羅こんがらはそのまま廊下に出て

ズルッ

ドターーーン！！

滑って仰向けに倒れた

「…だから待てって言ったのに…；」

仰向けになって倒れている矜羯羅こんがらに京助だけではなく制多迦せいたかと中島も近づいた

「雪の元塗ったばかりだから滑るぞ」

「…早く言ってくれない？」

矜羯羅こんがらが制多迦せいたかに起されながら京助に言う

「いや…言おうとしたのにお前が聞かなかったんじゃん；」

京助が矜羯羅こんがらに返した

「…かじま人間タンカしたほうがいい？」

制多迦せいたかが中島に向かって言う

「この場合は一人人間タンカ、いわゆるお姫様抱っこでいいと思うぞタカちゃんや」

中島が制多迦せいたかに言う「制多迦せいたかがヒョイと矜羯羅こんがらを抱き上げた

「お前等何コンビ組んでんだよ；」

いつの間にか親密度が上がっていたらしい中島と制多迦せいたかに京助が突っ込むと二人して親指を立てた

「僕自分で歩きたいんだけど」

抱き上げられて何だか何処となく不機嫌そうに矜羯羅こんがらが言う

「んじゃコレ履け」

頭の上に干してあった洗濯物の靴下を外して京助が矜羯羅こんがらに差し出した

差し出された靴下を摘むように受け取って上下左右から矜羯羅が靴下を見る

「…なにこれ」

片方ずつ手に持って矜羯羅こんがらが京助に聞く

「さっきも話してた靴下ってえヤツ。足に履くんのだ」

京助が制服のズボンの裾を少し捲くって靴下を矜羯羅こんがらに見せた

「ちなみにこんな使い方もできる！」

中島が矜羯羅こんがらから靴下を奪い取って両手にはめた

「パペットマペット！！」

中島が靴下をはめた両手を動かし始めると矜羯羅こんがらを下に降ろして制せいたか

多迦が拍手する

「：何だかナア； 凸凹コンビ成立か？」

やたら盛り上がりつつある制多迦せいたかと中島を見て京助が呟く

「京助煙突ー…って何しとん？；」

顔に煤をつけた南が煙突を抱えて茶の間に入ってきた

「中島君の一人パペマペ劇場In栄野家」

京助がへツと笑いながら言う

「今日はしゃぶしゃぶらしいぞ！」

ドタドタという足音とともにやってきた坂田が大声で言った

「マジ！？」

京助が目を輝かせる

「さっきハルミさんと悠たちが買い物行ったんよ！」

「イエーイ！！ 肉ー！！！！」

坂田の言葉に中島も靴下をはめたまま両手を挙げて喜ぶとそれを制せ多迦いたかが真似した

「何の騒ぎなのさ」

喜々としている3馬鹿を見て矜羯羅こんがらが京助に聞く

「今日の晩飯がしゃぶ…まあ結構豪華なんで喜んでるんだ」

京助が笑顔で言う

「…ふうん…」

視線を制多迦せいたかに移した矜羯羅こんがらがフツと微笑んだ

「本当：面白いね：こんな小さなことでココまで喜ぶなんて」

そして今度は京助に微笑みながら言う

「どんなに小さなことだって嬉しいから喜ぶ。あたりまえじゃん」

ソレに対して京助はニツと笑いを返した

廊下から鼻をかむ音が聞こえて京助が顔だけを廊下に出した

「寒いか？ 緊那羅きんなら」

廊下で鼻をかんだティッシュを丸めていた緊那羅きんならに聞くと緊那羅きんならが大きく頷いた

「まだつかないんだっちゃ？；」

鼻をかみすぎたのかそれとも寒いせいなのか緊那羅きんならの鼻の頭が赤い
「もうしばらくお待ちあれ」

京助が言うと緊那羅きんならが溜息をついた

「そこ！ そうそこにコレはめて」

「中島もうちよつと左」

「針金！ 針金とつて」

ワイワイ騒ぎながらしかし確実にストーブを取り付けていく3馬鹿
と京助を制多迦せいたかと矜羯羅こんがらが見ている

「…面白い？ ソレ」

靴下を両手にはめてパペマペっている制多迦せいたかに矜羯羅こんがらが聞いた

「…や：よくわからないんだけど手はあったかい」

制多迦せいたかが靴下をパクパクさせながら言った

「ソレ：足に履くものらしいけど」

矜羯羅こんがらが言うと制多迦せいたかが靴下を見つめる

「…んがら履いてみる？」

制多迦せいたかが手から靴下を外して矜羯羅こんがらに差し出した

「…変な形」

靴下を摘み上げて矜羯羅こんがらが呟いた

「取り付け終了ー！！ ご苦労様でしたッ！！」

南が言うと坂田、京助と中島が歓声を上げて手を叩き合わせる

「着火着火チャッカマァン」

変な歌を歌いながら京助がストーブに火をつける

「ラムちゃん火イついたぞー」

中島が廊下に向かって声を掛けると緊那羅きんならが顔を出した

「ねえ緊那羅きんなら」

茶の間に入ろうとした緊那羅きんならを矜羯羅こんがらが呼び止めた

チョイチョイと手招きをされて緊那羅きんならが首をかしげつつも矜羯羅こんがらの

傍に歩み寄ると耳に顔を近づけてきた

「…君は…【時】がきても受け入れられる？」

耳元でそう囁かれて緊那羅きんならがバツと矜羯羅こんがらを見る

「また繰り返すのかな…前みたいにな…そっくりだよ」

目を細めて微笑んだ矜羯羅こんがらの笑みはどことなく憂いていて緊那羅きんならは目をそらした

「今の君は…昔の迦楼羅かるらと一緒にだね」

矜羯羅こんがらが緊那羅きんならの頭を撫でて通り過ぎた

ズルツ

「…すげえ…」

何かが滑る音に目を向けた南が呟いた

「体柔らけえ…」

中島がゆっくり拍手をし始めるとそれを制多迦せいたかが真似て拍手をする

「だから靴下履けっていったのによ…」

足を前後に思いっきり開脚して座っている矜羯羅こんがらに京助が言った

「履けって言われても履き方教えてくれないじゃない？」

矜羯羅こんがらがゆっくり立ち上がる

「だーかーらー………たたく面倒臭え…」

京助が自分のはいていた靴下を片方脱いだ

「いいか？　こう…手繰ってつま先突っ込んで…上げる！！　OK
？」

矜羯羅こんがらの目の前で靴下を履いて見せるとフンフンと何かを納得したのか矜羯羅こんがらが服の裾を捲り上げて京助の履き方を真似して履き始める

「…お前すね毛ないのな」

坂田が矜羯羅こんがらの脛をみて言った

「俺はあるぞ」

京助が再び脛を出す

「俺も薄いながら一応生えてます」

南もズボンを捲り上げた

「甘い！　男ならコレくらいのもジャッティがナイス！！」

中島が誇らしげに脛を出す

「うっわ!! 濃ッ!」

中島の脛を見て坂田が爆笑する

「中島って全体的に存在薄い代わりにすね毛濃いんだなー」

京助がボソツと言う

「やかましいよ栄野君」

京助の脛に自分の脛をこすりつけて中島が言った

「のー!ー!ー!」

京助が後ろに飛びのくと制多迦にぶつかった

「わりい; 失敬」

京助がなんとなく制多迦の服の裾を捲くった

「…に?;」

いきなりの京助の行動に制多迦が戸惑っていると

「タカちゃん! こんな時は【キャー! イヤーン!! エッチー

!!】とでも叫んでやれ!!」

と中島が制多迦にアドバイスを送る

「制多迦に変なこと教え込まないで欲しいんだけど」

いつの間にか中島の後ろにいた矜羯羅が中島の肩を叩いて言った

「: ヤー!! イヤーン! エッチー!」

中島に言われ頷いた制多迦がいわれたとおりに実行する

「おお!! 何だか可愛らしいぞ! 眠そうだけど」

制多迦が中島の言った通りに真似をすると南が笑いながら言った

「ノリいいじゃん! タカちゃんとやら! 眠そうだけど」

坂田が言う

「結構やるじゃん! 制多迦!! 眠そうだけど」

京助も言う

3馬鹿と京助に讃えられて何処となく照れている制多迦に矜羯羅が

玉を当てる

「: たい;」

玉の当たった箇所をさすって制多迦が呟いた

「…緊那羅？」

茶の間の馬鹿騒ぎから離れて隣の和室にたたずんでいる緊那羅に京助が声を掛けると緊那羅がハッとして顔を上げる

「どうした？ 寒くて固まったか？」

京助の言葉に緊那羅は首を横に振って

「なんでもないっちゃ」

そう言って笑顔を作って返した

取り替えられたばかりのストーブの上でヤカンの蓋がカタカタと小さく音を立て始めていた

「あッ！ てめえそれ俺の肉！！」

鍋を二つそしてテーブルを二つつなげての本日の夕食は寒い季節にはもってこいのしゃぶしゃぶ

育ち盛りが集まれば決まって起こるのが肉争奪戦

3馬鹿と京助が寄って集って肉を奪い合っている

「座って食べなさいよ座ってッ！」

大騒ぎの男子のテーブルに向かって阿部が言う

「京助！ 僕もお肉！」

悠助が皿を差し出して言った

「…食べないんだっちゃ？」

湯気のたっている鍋を挟んで反対側から緊那羅が矜羯羅と制多迦に声を掛けた

「お皿貸して？」

緊那羅が手を伸ばして制多迦の皿を取り鍋の中の野菜とさつと湯に通した肉を持って差し出した

「…りがと」

ソレを制多迦が受け取ると今度は矜羯羅の皿にも同様に盛り付ける

「さっき…」

皿を矜羯羅に手渡しながら緊那羅が口を開いた

「迦楼羅と一緒に言ってたっちゃよね？ …私は私だっちゃ…迦

楼羅じゃなく。昔 迦楼羅^{かるら}に何があったのか知らないけど：【時】
がきても私が迦楼羅^{かるら}と同じ行動を取るのかなんてわからないっちゃ
：でも」

隣のテーブルはあいも変わらず肉を巡っての仁義なき戦いが続いて
いる

「：でも？」

それと反対にクツクツと静かな鍋の煮立つ音しかない緊那羅^{きんなら}たち
のテーブル

途切れた緊那羅^{きんなら}の言葉に矜羯羅^{こんがら}が声を掛ける

「京助と悠助は私を守るっちゃ。何があっても」

緊那羅^{きんなら}が真っ直ぐ制多迦^{せいたか}と矜羯羅^{こんがら}を見て言った

「：二人とも？」

矜羯羅^{こんがら}が聞き返すと緊那羅^{きんなら}が強く頷いた

「：てるよ：やっぱり」

いつの間にか空になった皿を置いて制多迦^{せいたか}が呟いた

「：るらもそうだった：でもあの人たちが許さなかった：そしてま
た繰り返そうとしてる：」

タレだけが残っている皿を箸でつつきながら制多迦^{せいたか}が言う

「【時】がきたら僕らはそれに従うしかできない：それが当たり前
で使命なんだと仕方がないと思っていたよ」

矜羯羅^{こんがら}の腕の輪がカチャリと鳴った

「京助！お肉！！」

「この肉は俺んだからな！」

「うっわ！！ 三枚同時かよ！！」

「野菜も食べなさいよ！ 野菜！ 煮えすぎて透明になってるじゃ
ない白菜ッ！！」

隣のテーブルからとめどなく聞えてくる【肉肉肉！】という肉連呼
の声

「：でもそれがおかしいと思う様になってる」

矜羯羅^{こんがら}の言葉に緊那羅^{きんなら}が顔を上げて矜羯羅^{こんがら}を見た

「僕も君と同じ考えになってきてるってことだよ緊那羅^{きんなら}」

矜羯羅^{こんがら}が言う^{せいたか}と制多迦^{せいたか}も頷いた

「…私と…同じ…?」

緊那羅^{きんなら}がきよんととして聞き返す

「僕もあの二人を守りたい」

そう言^いって矜羯羅^{こんがら}は隣のテーブルで肉を争奪している京助と悠助に目をやった

「…くも…あの二人は守りたい」

制多迦^{せいたか}も矜羯羅^{こんがら}同様二人に目をやると緊那羅^{きんなら}も顔を向ける

「…何だよ;」

かなりの集中した視線を察知したのか京助が隣のテーブルで自分を見つめている三人に言った

その京助の一言で茶の間にお互い見つめあつての沈黙の時間が流れた
「おッ! ってかさつち肉大量にあまつてるんじゃんかッ!」

その沈黙をうちつけたのがやはり【肉】の一言
3馬鹿と京助がやれ奪え!! との勢いで肉に箸をかける

「アンタ達まだ食べるわけ?」

その様を見て阿部が呆れて言う

「京助く僕もお肉く!!」

悠助も隣のテーブルに移動して京助の服を引っ張りながら肉をねだる

「ちよ…京助;」

緊那羅^{きんなら}を押しのけて鍋に群がる3馬鹿と京助

「タカちゃん食ってるか?」

制多迦^{せいたか}の隣に無理矢理居座った中島が肉を鍋で泳がせながら制多迦^{せいたか}に言った

「…君らがきたら食べれないじゃない?」

矜羯羅^{こんがら}が微笑みながら言う

「こーいうもんは早い者勝ちなんだ!! 弱・肉・強・食!!」

坂田が自分の皿に肉を取りながら力説する

「京助く!」

後ろで悠助が足をバタバタさせる

「…ごちそうさまでした」

今まで一言も話さなかった本間が箸をおいて両手を合わせた

> i 2 0 6 8 3 — 2 5 7 5 <

【第五回・伍】スノー・スマイル（前書き）

雪が積もった街中で必死に南が探すのは
不思議の国から届いた可愛いラブレター
意外と広い街の中ではたして手紙は見つかるのか

【第五回・伍】スノー・スマイル

「走れソリよ、道の上を♪ ほーれ！ 頑張れー！！」
「るっさいッ！」

ズズズズ：と音を立てて白く積もった雪の上に三本の線が残る

「いやあ悪いねえ京助君！ 君のじゃんけんの弱さに乾杯で完敗だよ」

南がケラケラと笑うと京助が足を止めて溜息をついた

ソリの上には10キロの米とその他イロイロなモノが積んである袋から飛び出している長ネギにはうっすらと雪が積もっていた

「俺が弱いからあ」

ソリを引つ張る京助の隣を歩きながら南が言う

「ニボシ（自転車）はもう冬眠させちゃったしさあ：助かったぜ本当」

南の長い睫毛にも雪が積もっていた

「まさか米頼まれるとは思わなくて一言二言で返事したのはいいんだけどさ；」

南が鼻を吸りながら笑う

「力尽きてあそこにいたわけか；」

京助は母ハルミの（半ば強制的な）頼みごとで郵便局に行った帰りポストの傍で休んでいた買い物帰りの南に遭遇しじゃんけんで負けた為に南の家まで配達員をするハメになったらしい

「あ、上がっていけよ。なんか出すから」

米以外の入った長ネギの飛び出した袋を手にも南が自宅の引き戸を開けた

「んじやお言葉に甘えて」

米を肩に担いだ京助が南の開けている戸から南家の中に入る

「お：林檎のにおいか」

玄関に置いてある芳香剤を見て京助が何故かにやついて言った

中戸を開けて南が袋を置いた

「部屋チヨ汚ねえけどいいか？ それとも母さんいるけどあっちにするか？」

南が親指で茶の間の方を指差した

【解説しよう。【チヨ汚い】とは【小汚い】の進化系で意味としては凄く汚いということである】

「部屋でいいぞ？ 俺の部屋とドッコイドッコイだろ」

京助が上着についていた雪を払い靴を脱いだ

「んじゃ先行ってろや。何か持っていくからさ」

そう言うとき南は袋を持って茶の間に入っていく

「誰か来たの？」

「京助。コレとか米運ぶの手伝ってくれたんだ」

南と母親の会話が聞えてくる

微妙に螺旋を描いている階段を登ると部屋が3つ

その左側のドアを開けて京助が中に入った

「…冗談抜きでチヨ汚ねえ…」

ミシンの周りには布やら糸が散乱していてエライことになってる

床は床で型紙やら本が広げられていて足の踏み場が本当になかった
ベッドには網かけなのか毛糸が編み棒についたまま放置されている

「だからチヨ汚ねえったろ？」

戸口に立ったままだった京助に南が言った

「適当に自分の場所確保しろや」

京助を押しつけて南は部屋に入ると足でテーブルの上の本と型紙を
床に落としてそこに持ってきたお盆を乗せると机の椅子に腰掛けた
京助も辛うじて居座れると判断したベッドに腰掛けた

「何だか久々にお前ん家来たナア…」

京助がお盆の上から湯気立つココアの入ったカップを取り口をつける
「まあいっつもお前ん家にたかってたらな」

南が足で暖房のスイッチを入れた

「しかしお前器用だよナァ…」

ベッドの上の編みかけの編み物を手にとって京助が感心して言う

「俺これっきゃとりえねえし…好きだしな」

南が背中を反らせると椅子がギイイと音を立てた

「体力ないわ頭悪いわ一般人だわで」

ケラケラと南が笑う

「俺だってそうだぞ？」

京助がココアを飲み干して言った

「お前体育得意じゃん足速いし運動神経いいし」

南が軽くゲップをする

「お前のコレだって生まれ持った才能だろうが一緒じゃん」

床に落とされた本を手にとって京助が言った

「…お前ってさあ…」

少し黙った後南が苦笑いを浮かべた

「何だよ」

そんな南の顔を見て京助がきょとした顔をする

「お前ってたまにスッゲエクッサイ台詞言うよな」

南がそう言いながらカップを机に置いた

「はぁ?； 俺はただ思ったことまんま言ってるだけだしよ;」

「それがクッサイんだってば」

京助の言葉に南が笑いながら突っ込んだ

「お前はクササの塊だなサンキュ」

南が何処となく照れくさそうに言った

「昼飯食ってきゃいいのに」

玄関で靴を履く京助に南が声を掛けた

「長居したから母さんにどやされるしよ; また今度食いに来る」

靴を履きつま先をトントンと鳴らして履き加減を調節しながら京助が言った

「食いに来るだけかよ」

玄関の戸に手をかけた京助を見送ろうと南も靴を履く
引き戸を開けるとバイクの音がして郵便配達員が南の家の前で止ま
った

「手紙きたぞ南」

京助が体を避けて南に言う

「あーハイハイっと」

京助が体を避けた間を南が通って外に出る

「ちわー…」

配達員に軽く挨拶をして手紙を受け…取ろうとした時

「あ」

南と京助そして配達員が同時に声を上げた

ピンクの封筒が配達員の手から離れ宙に舞い上がりそのまま落ちる
ことなく飛んでいく

「あゝあ…飛んでいっちゃった」

南がのほほんと他人事のように飛んでいく手紙を見送る

「いいのかよ； 追わなくて」

京助が戸口から言った

「いいのいいのどうせ母さん宛てのダイレクトメールとかそのへん
だろうし？」

「お前なあ；」

京助が呆れ顔で戸を閉めた

「あれどう見てもダイレクトメールとかの封筒じゃなかったぞ？」

手渡された残りの郵便物を見ている南に京助が言う

「ピンクで可愛らしいウサギのシールついてたし」

京助の言葉に南が止まった

「…何？」

そしてゆっくりと京助に聞き返す

「何って？」

京助も聞き返した

「今お前なんつった？」

南が顔を近づけて再び京助に聞く

「いや：だからピンクで可愛いウサさんのシールついてるダイレクトメールなんて無いかと：；」

「郵便屋さんッ！ アレ！ アレ誰宛！！？」

京助を押しつけて3軒隣に郵便物を届けていた配達員に南が大声で聞く

「す：すいません； 名前まではちょっと：；」

配達員の言葉がまだ続いているにもかかわらず手に持っていた手紙類をその場に放り投げて南が走り出した

「おい！ 南！？；」

放り投げられた手紙を拾って郵便受けに入れた後京助も南の後を追いかける

走り行く二人の少年の後姿を配達員が黙って見送っていた

ジャクジャクと音を立てて半分濡れた雪を後ろに蹴り上げて南が周りをキョロキョロ何かを探しながら走る

その後ろには京助

「こっちに飛んできたよな！？ な！？」

南が走りながら振り返り京助に聞く

「あ：ああ」

京助も走りながら応えた

行き交う人は何事かと二人の少年の走りを見ている

「なあ：探してるのってアノピンクの封筒だろ？ 飛んでいったヤツ」

少し速度を上げて南に並んだ京助が言う

「そ：うだよ！ アレたぶんありすからの：っ；」

息一つ切れてない京助に対しもはや限界が近い南が苦しそうにでも走るのはやめないままで言った

「ありすって：あの入院してた？」

京助が思い出して言うとなが頷いた

「…栄野と南だ」

「え？」

ローソンで雑誌を読んでいた本間がボソツと言うと隣にいた阿部が顔を上げて外を見た

「何してんのアレ； 雪中マラソン大会？」

雑誌を適当なところに押し込んで本間が外にでるとそれに阿部も続いた

「…ついていってみよ」

阿部が走り出した

「アンタ昼から塾じゃなかったっけ？」

本間も小走りで阿部に追いつくと一緒になって南と京助の後姿を追いかける

「いいのっ！」

阿部がどことなく嬉しそうに本間に言った

「京助ー！！ 南ー！！！」

名前を呼ばれて京助が振り返る

南にはもうそんな余裕はないのかただひたすら周りを見ながら走っている

「何してんの？」

本間が京助に追いついて聞いた

「簡単単刀直入に言いますと飛んでった宝探し」

「はあ？」

京助が言う和阿部がわけわかんないというような声を返した

「南の大事な人からの手紙が飛んでいって…それを追ってるんだ」

京助が訂正して説明する

「大変じゃないそれ！ アタシ達も手伝うよ！！」

阿部が走る速度を上げて南に並んで何か言っている

「…【アタシ達】ねえ…」

本間が溜息混じりに言った

「なあアレ…」

「あん？」

浜本がハルの腕を引っ張って道路の反対側を指差した

「あれって…」

ハルを風除けにしてバスを待っていたミヨコが一步前に出て

「おー！ー！いッ！！」

と大声で叫んだ

その声が聞えたのか聞えなかったのか見間違いかそうでないのかはわからないが道路の反対側を走っている四人は間違いなく同じ学校、しかも同じ学年で同級生…先頭を走るのは隣のクラスのヤツだということはわかった

「なにしてんだ？」

浜本が解けたマフラーを巻きなおして駆け出した

「…どうする？」

ハルがちらっとミヨコを見て言った

「…邪魔者が走り去ったのはいいけど…私も気になるッ！！」

そう言ってミヨコも駆け出すとハルも笑いながら駆け出した

分かれ道に差し掛かると南が足を止めて息を切らせ風向きを見てまた走り出す

「おい！ 南！！」

走り出した南の肩を京助が掴んで止めた

「大丈夫かよお前」

もはや息をするたびに喉がヒューヒュー音を立てている南の背中をさすりながら京助が言った

「…い…じょうぶ…ッ」

そう言って笑ったのはいいがその後南が激しく咳き込んだ

「やだちょっと！！； しっかりしてよ南！！！！」

阿部も京助と同じように南の背中をさすった

「走るの嫌いな南がここまでになるまで追いかける…何追いかけて

るんだ？」

後からついてきていた浜本、ハルとミヨコが追いついた

「手紙。ピンクでウサギのついたラヴレター」

京助が答えた

「ラヴレター！？ 誰！誰からのさ！」

ミヨコがハルを押しつけて京助に聞く

「不思議の国のありすからの」

「はあ？」

京助がニツと笑いながら言うと同が【なにそれ】的声を上げた

「嘘じゃないぞ？ いっとくけど。な？ 南？」

京助が南の背中を軽くポンポンと叩くと南が頷いた

「そ…ありすからの…大事な手紙なんだ…さ」

胸をパスパスと叩いて呼吸を整えると南が小走りで走り出した

「…ピンクでウサギがついてるんだよね？ …ハル！ 私達はこっ

ちいこ！」

ミヨコが南とは反対方向の道にハルを引っ張って行った

「手分けした方早く見つかるでしょッ！」

徐々に駆け足になりながらミヨコが叫んだ

「頼んだぞーッ！！」

浜本がマフラーを振り回して二人を見送る

「じゃ俺らは南について行くか」

京助が南を追いかけると阿部と本間、浜本も走り出す

雪が静かにゆっくり降り落ちてきた

ガコン

黒い車が横付けしてある【BOSS】と白く書かれた自動販売機からジョーシアのブルーマウンテン（HOT）を取り出して振り返った柴田がタブを起そうとしていた手を止めた

「…あれ？ 京助君…に南君に…」

「ちわーッ！」

「ども」

「こんにちは」

「じゃっ」

声を掛けた柴田に対し京助、阿部、本間、浜本が単発で挨拶して通り過ぎる

「…はあ…」

タブに手をかけたまま走り去る少年少女の後姿を眺めていた柴田の携帯が鳴った

「…もしもし？ …ああ若…ええ…今ですか？」

どうやら相手は坂田らしくジョージアを片手に話し始めた

「組長が？ …はい…はい…わかりました。あ、それでですね…今…」

柴田が黒い車に乗り込み戸を閉めた

積もった雪に足を取られて転びそうになりながらも南は足を止めずに周りを見ながら走っている

「ねえ…っありすちゃんて…どこの子？」

少し息の切れてきた阿部が京助の上着を掴んで走りながら聞く

「あ…んと夏くらいにさ南が病院で仲良くなった子で…悠よか少し下くらいで今は福島だか福岡だか京都だかにいるらしいんだけどさ」

京助が答える

「ふうん…そうなんだ…」

阿部の長い睫毛に雪が積もって白くなっている

「そのありすちゃんて南にとって大事な子なんだね…名前からして可愛いし」

阿部が瞬きをすると積もっていた雪が落ちて黒い睫毛になった

「お前だって可愛いじゃん」

「な…ッ」

京助が笑って言う和阿部が目を大きくして足を止めた

「…阿部？」

本間が声を掛けると阿部がマフラーで顔を隠した

「痛てッ！； 冷てッ！！；」

後頭部に【痛い】と【冷たい】という感覚がいきなりした京助が振り返ると阿部が腕の中に雪玉を数個抱えてそれを京助めがけて投げつけようとしていた

「なあッ！； 何してんだお前はッ！！；」

飛んできた雪玉を走りながら避けて京助が怒鳴る

「るっさいッ！！ 馬鹿ッ！！」

それに負けじと少し巻き舌が入った大声で怒鳴りながら阿部が雪玉を投げつける

「うゝん…白い冬なのに青い春か…」

本間がそれを見てほくそ笑みながら呟いた
ボスッ

「あ」

京助が避けた雪球が南に直撃して南が滑って転んだ

「なー！！！； ごめ…大丈夫南！？；」

雪玉を下に落としてコケた南に阿部が駆け寄る

「あゝららこゝらゝらゝいゝけないんだいけなんだゝ♪ せえゝ
んせいにいってやろゝ♪」

浜本と京助が歌いながらコケた南を引っ張り起した

「ごめん！； 本当ごめん；」

阿部が南の服に付いた雪を払って謝る

「や…べ…つに…」

ゼーゼーという低音の音とヒューヒューという高音の音が入り混じった息をして【大丈夫】と南がヒラヒラと手を振った

「何してるの？ こんなに雪つけて…雪合戦？」

ガサガサという音とどこかで聞いた声に一同が体ごと声の方向に向く

「蜜柑さん…？」

【正月スーパー】の袋を手袋をはめた手で持った蜜柑が近づいて南の服の雪を払い始める

「いや…雪合戦じゃなく宝探しとかけっこの併用ってカンジですか
この場合」

京助が浜本に同意を求めて目を向けると浜本が頷いた

「…宝探し…とかけっこ？」

蜜柑が首をかしげる

「そ…だッ！！ 蜜柑さんッ！！ 封筒見なかった！？ ピンクの
ッ！！」

だいぶ息が落ち着いた南がやたら大声で蜜柑に聞いた

「ふう…とう？ …ごめんアタシ周り見てこなかったから…；
それが宝探しなの？」

蜜柑が申し訳なさそうに言うとなが軽く頷いて周りを見る

歩道に一定間隔で植えられた街路樹には雪と赤いナナカマドの実しかなく道路もただ所々黒くなっている他は一面真っ白でどこにもピンクの物体は見えない

「…だーーーーッ！！ もう！！ ちつくしよー！！！」

いきなり南が大声を上げて走り出した

「ごめん蜜柑さん！；」

京助が走り出した南を追いかける

「見つけたら拾っておいてください」

本間が蜜柑に一礼をして走り出す

遠ざかる5人の背中を見送りながら

「…ゆーちゃんに言った方…いいよね」

小走りで蜜柑も駆け出した

「へい！ タクシー！！」

片手を上げて待っていた坂田の手に南が走りながらタッチすると坂田も走り出す

「何してたんだこんなトコで；」

京助が坂田に聞く

「好きだあゝったのよあゝなたゝ」

「待ち伏せですな」

坂田の歌に浜本が突っ込む

「ピンポン」

坂田が浜本を指差して笑った

「柴田さんから情報がいったと思われませんが」

京助が走りながら言う

「そっちもピンポン！！　で？　何がどうで必死こいて走ってるわけ？　体力向上ならこの後寒風摩擦でもするのか？　女子も含めて」

坂田が阿部と本間に手を振る

「いや：お前ありすちゃんって覚えてるか？」

京助が聞くと坂田が頷いた

「その子からの手紙が風にさらわれてしまいましたてそれを探してるんで御座います」

京助に言われて坂田が南の背中を見た

「それであんなに必死こいてるわけか：体力ねえのに無理してんなあ：」

「ここはアレやるしかなかとでしょ」

やけに聞いたことのある声に振り向くとソコには中島

「：いつからいたよお前；」

浜本が阿部たちに並んで走っていた中島に聞いた

「本当影薄いよなお前：忍者になれるぞ忍者！」

坂田が笑いながら言うとか中島が坂田の後ろ髪を引っ張った

「メンバーも揃いましたし：いっちょアレ、やっちゃいますか：このまんまじゃ南がヤバイしな：おーいッ！！　南ストーップ！！」

京助が南に向かって叫ぶと南が足を止めて振り返った

「ジャジャンジャン！　ジャジャンジャン！　チャラッチャッチャ
チャラチャラチャラン♪」

浜本の手作り即席BGMはマジंगाーZのOP

「今こそ蘇れ！！ 伝説の14・5人抜きを決めた我等が英雄たち！！」

正面に中島、右には京助、左は坂田そしてその上には南

「：騎馬戦じゃん」

本間がボソッと呟いた

「去年三年生をも打ち破った最強馬ここに復活！！」

坂田が言う

「：コケたら全員コケるよね」

またも本間がボソツと言う

「とりあえずリズムとスピードは【お猿のカゴ屋】でいきますか」

京助が言うと中島と坂田が頷いた

「ではー…えーっさえーっさえさほいさっさッ！！」

浜本が【お猿のカゴ屋】のリズムを歌い始めるとそれにあわせて小走りで走り始める

「ねえ：アンタら恥ずかしくないの？」

阿部が京助に並んで聞いた

「何で恥ずかしいよ？」

京助が聞き返す

「だって街中でこんな…」

街中で騎馬戦の格好をして更にはBGMは【お猿のカゴ屋】

これで人の視線を集めないわけはない

通り過ぎる人も車も目を向けていた

「俺らは別に間違ったことしてるワケじゃねえし？ 恥ずかしいなら少し離れてろ」

京助が言う

と阿部が足を止めて少し俯いた

騎馬の上に乗ったおかげで前より視界が広くなった南がピンクの封筒を探す

走っていたときには見えなかった低い塀の内側や街路樹の枝の間も見えるようになっていたがそれでも見つからない

「…空でも飛べたらなあ…」

南がボソツと言うと京助がいきなり足を止めた

「だッ！！」

「のッ！！」

そのせいで中島が前につんのめり馬が崩れた

「何してんの」

本間が少し息を切らせながら崩れた馬に向かって突っ込む

「空…！ 空だ空！」

京助が【空】を連呼する

「…空がどうした？」

あまりにも京助が【空】を連呼するので一同が空を見上げる

今日の空は薄曇で雪が静かに降りてくるそんな空

「空から探せればいいんだろ？」

京助がニツと笑う

「…ヘリでもチャーターするのか？」

浜本がマフラーを巻きなおしながら言った

「そんな金はないが竜田揚げ作る程度の金ならある」

京助が言うところ馬鹿が顔を見合わせて笑った

「…竜田揚げとヘリコプターって何か繋がりあるの？」

阿部が聞くと3馬鹿と京助がニカツと笑ってそろって親指を立てた

「まずは直談判だな…俺ちよっくら家に戻るからお前等は引き続き
搜索してろ。浜本バトンタッチな」

京助が浜本の肩を叩いてそのまま自宅方向に走り出す

「…直談判って…竜田揚げって…一体何？」

阿部が坂田に聞く

「見た目はちっこいが態度はでかいお茶目な鳥さんが来てくれるこ
とを祈りつつ俺らは搜索いたしましょ」

坂田が言うところ中島が再び騎馬を作る体勢になりそれに南が掴まると
坂田と浜本もそれぞれ南を支える

「わかるように説明してよね…まったく」

本間が溜息をついた

「なあ：俺もよくわからないのですが；」

浜本も一体何がどうなのってヘリコプターが竜田揚げなのかわからないらしく3馬鹿に聞く

「まあ：とりあえず心の準備と消火活動の心構えだけしておけ」

南が笑いながら言った

ガラッ！

ガタン！！ ドン！！！！

ドタドタドタドタ：

「：もう少し静かに帰ってこれないの？」

開けようと手をかけた茶の間の戸が勝手に開いて目の前には母ハルミの呆れ顔があった

「遅かったじゃないお昼片付けちゃったわよ？ お茶漬けで我慢してくれる？」

京助を押しつけて母ハルミが廊下に出る

「そんな暇ねえんだ！ 腹は減ってるけど：ッ；」

京助がそう言つて茶の間の中を見渡す

「悠は？ 緊那羅きんならは？」

TVがつけばなしの茶の間には誰もいなかった

「アンタが遅いからって迎えにいったわよ？ 会わなかったみたいだけど：寒いから閉めて頂戴」

京助が昼飯はいらないうという返事をしたので母ハルミが茶の間に戻る

「迦楼羅かるらとか来てねえ？」

茶の間の戸を閉めて京助が隣の和室を覗きながら母ハルミに聞いた
「かるらん君？ 来てないわよ」

母ハルミがTVを消して壁にかけてあった上着を羽織った

「母さん仕事に戻るから家出るとき石炭くべて行ってね？」

そう言つて母ハルミは茶の間を出て行った

「：いらねえ時に来ててどうしてこう必要な時に限って来てないか

ねあの鳥類は：」

ガシガシと頭を搔いて京助はストーブの傍い置いてある石炭をストーブにくべはじめた

「あれ：キンナラムちゃんじゃないか？」

軽やかな【お猿のカゴ屋】ステップで搜索していた騎馬の上から南が言った

「悠もいる：けど京助はいないぞ？ ついでに最終兵器鳥類も」

南が言うのと騎馬隊が足を止めて南を降ろす

「どうしたの？ あったの？」

少し離れてついてきていた阿部と本間が追いついて聞く

「いや：ないけど：」

それに浜本が返す

「じゃあなん：」

阿部が再び聞き返そうとして緊那羅きんならに気づいたらしく言葉を切った

「よっす緊那羅！ 悠！」

坂田が緊那羅きんならに手を上げる

「京助はー？」

「京助：はいないみたいだっちゃね：」

ぐるりと面子を見て緊那羅きんならが言う

「京助なら竜田揚げがどうのこうの言って家に戻ったよ？」

阿部が言う

「竜田揚げ：？：」

緊那羅きんならが首をかしげた

「竜田揚げってかるらの好きなものだよね？」

悠が言うのと緊那羅きんならが頷いた

「いや実はサア：」

南が苦笑いで話し始めた

「：それで遅かったんだっちゃね。あんまり遅いから心配してたんだっちゃ：そっか：よかったっちゃ」

緊那羅きんならが笑顔で言った

「んもう!! 羊子ったら心配性なんだから」

南が腰で緊那羅きんならを押した

「かわいいなあ金髪かア：変な話し方だけど」

イマイチ3馬鹿と緊那羅きんならの話題についていけない浜本がぼそつと呟いた

「羊子ちゃんって言うんだって」

阿部が浜本に言った

「だから【ラムちゃん】なのかな？ それとも話し方？ あの髪地毛？」

浜本が阿部に聞き返す

「んなこと知らないわよッ!!」

阿部が大声をあげると全員の視線が阿部に集まる

「：阿部?;」

坂田が恐る恐る声を掛けると阿部が本間の後ろに隠れた

「手紙探さないの？」

しばらくの沈黙の後悠が中島のジャケットを引っ張って言った

「探すには探すんだけど：最終兵器がまだこないからナア：」

坂田が悠助の頭をポフポフと軽く叩きながら苦笑いをした

「最終兵器：ってまさか；」

緊那羅きんならが3馬鹿を見ると揃ってニカッと笑った

「なにになに? 何が？」

悠助が中島を揺すって聞く

「：絶対火吐かれるっちゃ；」

緊那羅きんならが呆れ顔で言う

「だっいいじょうびん!! 水分ならまわりに嫌というほどあるし空からも降ってきてるし」

南が掌で雪を受け取って笑う

「ねえ：一体何の話してるワケ？ アタシ達全然わからないんだけど」

阿部が少し怒ったように3馬鹿と緊那羅きんならに言ってきた

「説明してもいいんだけどさ実物見ないとぜってえ信じてくれねえと思うからサア…でも…緊那羅きんならがここにいるってことは…来てなかったんだろウナア；」

坂田が緊那羅きんならに目を向ける

「今日か迦楼羅かるらは来てないっちゃ」

緊那羅きんならが言うと3馬鹿が溜息を吐きつつ肩を落とした

「うああああ；やっぱ地道に探すしかないのか…」

南が空を見上げて嘆く

「…あ…あの…」

緊那羅きんならがそんな南に声を掛けてきた

「…手を貸してくれるかは別として…呼ぶことはできるっちゃ…たぶん」

「マジ!!?」

緊那羅きんならが言うの間髪いれずに3馬鹿が緊那羅きんならに集った

「う…ん；」

「ヒョー!! やたね! でかしたね！」

緊那羅きんならが少し後ろに反ったまま頷くと3馬鹿が狂喜乱舞し始める

「呼ぶって…携帯とかで? ならアタシも持ってたのに…言ってくれば貸したよ? 羊子ちゃん」

阿部がポケットから携帯を取り出した

「少し下がって欲しいっちゃ」

緊那羅きんならが言うと3馬鹿が悠助をつれて阿部や浜本、本間のいる位置まで下がった

「何…?」

本間が目を凝らして緊那羅きんならを見つめる

「お前等ほっぺつねる準備しておけよ？」

中島が言った

緊那羅きんならがゆっくり手を前に出すと緊那羅きんならの手が部屋に入ったように見えなくなる

「なッ!?!」

浜本が声を上げた

「…開いた…開けた…」

緊那羅きんならが嬉しそうに呟いた

「ちよっと待っててっちゃ」

笑顔で振り返るとそのまま緊那羅きんならが消えた

声を上げるでも何か行動するでもなく阿部と本間、浜本が固まっている

「…つねってやろうか？」

坂田がそんな三人に笑いながら言う

「な…んなの…」

やっと声が出せた阿部が坂田に聞く

「いったろ? 説明しても信じてくれないって。こーいうことなんだわ」

南が笑う

「ミスターマリックどころの騒ぎじゃねえよ…コレ」

浜本が呆然と緊那羅きんならが消えた場所を見ながら言った

「言っとくけど…まだまだ序の口だぜ」

中島が浜本の肩を叩いて言う

「かるらん来てくれるかな？」

悠助が笑いながら中島を見上げた

しんしんと降り続いて確実に辺りを白く覆う雪

「…一体私達何してるわけ？」

本間がいきなり口を開いた

「手紙探してたんじゃないかったっけ？」

緊那羅きんならがマジックの様にいなくなってから数十分

道端には悠助と3馬鹿+浜本で作った雪だるまが6個ズラリと並んでいた

「栄野も帰ってこないしあの金髪の子もどっかいっちゃうし…」

本間が少し怒っているっぽい口調で言った

「んなこと言ってもなあ；」

坂田が立ち上がって腰をひねるとパキパキと音がした

「あ：」

塀に寄りかかってメールを送っていた阿部が声を上げた

「お待たせだっちゃ；」

やや疲れた顔をした緊那羅きんならが摩訶不思議服を着ていつの間にかそこにいた

「お帰り緊ちゃんっ！！」

悠助が緊那羅きんならに飛びつく

「で？ 最終兵器は？」

南が聞くと緊那羅きんならが軽く後ろを振り返った

「誰が最終兵器だ誰が」

「鳥ーーーーーッ！！！！」

迦楼羅かるらが姿を現すと南が迦楼羅かるらめがけて抱きついた

「だあっ！！；」

南に抱き疲れた勢いで迦楼羅かるらが後ろに倒れる

「待ってたぜ鳥！！ ありがとう鳥！！」

「やめんかッ！！； 放せ！たわけッ！！；」

頬擦りする南の顔を手で押して迦楼羅かるらが怒鳴る

「…なにこの子…」

阿部が迦楼羅かるらを立ったまま見下ろす

「かるらんだよ阿部ちゃん」

阿部の隣に立って悠助が迦楼羅かるらに笑顔を向ける

「…んはいらんとやっているだろうが栄野弟」

迦楼羅かるらが起き上がり服についた雪を払う

「ずいぶんと遅かったじゃん緊那羅きんなら」

坂田が緊那羅きんならに言った

「乾闥婆けんだつばの目を盗んで迦楼羅かるらをつれてくるのにちよっと…；」

緊那羅きんならが苦笑いと言う

「…後が怖いっちゃ…」

遠くを見つめる緊那羅きんならの肩に坂田が哀れみ100%の感情を込めて手を置いた

「ねえねえこの服って文化祭ん時に着てた服だよね？　いつ着替えたの？　ってか…」

坂田を押しつけて浜本が緊那羅きんならに質問する

「いっとくけど浜本。その子彼氏いるらしいよ」

本間が言うのと浜本が一步後退した

「…ちえー…」

そんな浜本を見て坂田が噴出したいのを我慢している

「でさ！！　早速なんだけど…鳥さん」

南が一旦立ち上がりそしてしゃがんで迦楼羅かるらと視線の位置を合わせる

「…大体の話は緊那羅きんならから聞いた。…大切なものなのだろう？」

迦楼羅かるらが溜息をついた後に呆れ笑顔を南に向ける

「…ああスッゲエ大事なものだ」

南が言った

「今回だけだから…少し離れている」

迦楼羅かるらが言うのと南が数歩後ろににさがる

「何…？」

南につられて阿部も本間も迦楼羅かるらから離れる

「阿部ちゃんスカート抑えてた方がいいと思う」

「え？　な…っやあッ！！」

いきなり巻き起こった強風で阿部の巻きスカートが捲れ上がる

「おおお！　ピンク！！」

「見んなッ！！」

歓喜の声をあげた男子に阿部が真っ赤になりながら怒鳴った

「ホラ！　いくぞ」

強風が止んで迦楼羅かるらの声がした

「…誰…」

3馬鹿が声をそろえて言った

「…ってか…何者?;」

浜本のマフラーが地面に落ちている

「…現実…なんだよね?」

本間が自分の手の甲をつねりながら呟いた

「かる…らん?」

悠助が恐る恐る迦楼羅かるらを呼んだ

「驚いたか?」

悠助をはじめ緊那羅きんなら以外全員が首を縦に振った

目の前にいたのは3馬鹿とさほど背の高さが変わらない少年

口調と摩訶不思議な服装そして髪型でコレがあの迦楼羅かるらだということ
とがわかる

「…いきなり育ったなアオイ;」

南が迦楼羅かるらの全身を見ながら言った

「あの姿では一人抱えるのがいいところだからな」

少年迦楼羅かるらが言う

「抱えるって…」

坂田が迦楼羅かるらに聞く

「ワシはお前等の探し物がどんなものなのか実物見ていないんで知らんからな。わかる輩を2人位連れて飛べば手っ取り早いだろう」

迦楼羅かるらが南の手を取った

「え…俺?;」

南が自分を指差して言う

「お前の大切なものだきんならと緊那羅きんならから聞いたが?」

迦楼羅かるらが緊那羅きんならを見ると緊那羅きんならが頷く

「探し物は俺のだけど…実物を見てんのは京助…ってか京助!;」

南が京助というこの話の主人公（一応）の存在を思い出した

「そうだ!! 京助どうしたのよ!;」

阿部も京助が駆けて行った方を振り返り言う

「では京助とお前を連れて飛べばいいことなのだな?」

「それはそ…のおおお!;」

「きゃあッ!;」

「にーにーっ;」

「うおおお!;」

降ったばかりの雪が目を開けていられないほどの強風で舞い上がり
そこだけ吹雪のように何も見えなくなる

「:目を閉じていては探せないだろうが!! たわけ!」

迦楼羅かるらの声に南が目を開けると眼下に広がるわが町【正月町】

「たっけえ:;」

雪が降っているせいか人通りがいつもより少ないメインストリート
信号待ちをしている車

学校、港、公園、畑や田んぼ、果樹園、自宅:いつも見ていて飽き
飽きしていた風景でも見方を変えるだけでこうも新鮮味が増すもの
なのだろうか

「:すげ:結構広いんだな:この町も」

南が小さく呟いた

「あ!! 京助!!」

栄野神社に続く坂を下り公園方面に続く道を小走りな速度で動いて
いる京助らしい生き物を南が見つけた

「:誰かコイツにビクライトでも使ったんか?」

自分とあまり身長が変わらない迦楼羅かるらを見て京助が地面に尻をつい
たまま南を見上げて聞く

「驚いたか」

迦楼羅かるらが何気に勝ち誇ったように言う

「ハイハイ驚きました驚きました」

京助が立ち上がり尻についた雪を払いながら言った

「で:見つかったのか?」

京助が聞くと迦楼羅かるらが南と京助の手を掴んだ

「これから探しにいくんだ」

南が空を指差す

「…俺も?;」

京助が自分を指差して【まさかよ】的顔を見ると南が親指を立てて満面の笑みを返してきた

「お前しか実物を見ていないのだろう?」

京助が頷こうとした瞬間再び強風で雪が舞い上がった

「しかしまあよく乾闥婆けんたつばが許してくれたよな」

京助が下を見下ろしながら言った

「…隠れて来た」

迦楼羅かるらがボソツと呟くと南が両手を合わせて合掌した

「なっ…; またかよ…後が怖いんじゃない?;」

左側に抱えられた京助が迦楼羅かるらを見て言う

「血の海…のーお； ナンマンダブナンマンダブ…;」

南が何を想像したのか右側でお経を唱え始めた

「…お前等…; …乾闥婆けんたつばは妖怪かその類ではないぞ? あやつは

ワシをただ心配しているだけなのだ…昔の出来事に縛られてな」

迦楼羅かるらが言う

「…昔って…何? 何かあったの?」

南がまるで噂好きの近所のマダムのごとく目を輝かせて迦楼羅かるらに聞く

「…昔のことだ…もう遙か昔…ホラ! しっかり探さんか!」

一瞬悲しそうな目をした迦楼羅かるらだったがその後二人に向かって怒鳴った

「…言葉のごとく飛んで行っちゃったナア…」

迦楼羅かるらの飛び去った方角を見て坂田が言う

「俺らも地道に探しますか?」

浜本が坂田の隣に立って言うと言いつつ坂田が後ろを振り返った

「そうだねココにこうやっていても仕方ないし…」

阿部が言うと言いつつ中島が頷いた

「…緊ちゃん?」

悠助が緊那羅きんならの名前を呼ぶと一同が緊那羅を見る

「ちよ：どうしたよ緊那羅！！；」

しゃがみこんでいる緊那羅に坂田と中島が駆け寄る

「さ：寒い：っちゃ：；」

摩訶不思議服だけの緊那羅が体をさすって震えていた

「緊ちゃん大丈夫！？」

悠助が緊那羅を抱きしめて暖めようとするがなにぶん小さくて用が足りない

「浜本」

本間が浜本を呼んだ

「何？　：アゝレゝ；」

近づいてきた浜本からマフラーを奪い取るとそれを緊那羅にかけた

「：ありがとだっちゃ；」

緊那羅の唇が紫色になってきている

「本当寒さに弱いんだなお前；」

中島が自分のジャケットを脱いで緊那羅にかける

「寒いのが苦手なのに何でわざわざ出向くかね」

坂田も自分の上着を緊那羅にかけた

「だっ：て京助が：心配だったんだっちゃ」

悠助の腕の中で緊那羅が眉を下げて微笑んだ

「京助と悠助は：私が守らないと：」

「だから自分はどうでもいいんですか？」

緊那羅にさっきまで緊那羅の着ていた上着がかけられたそれを見て中島と坂田が後ずさる

「：また：増えた」

本間がボソツと言った

「けん：」 「けんちゃん！！」

乾闥婆が悠助に向けて微笑みを返した

「：あの：えつと：；」

気まずそうに緊那羅が何かを話そうとしている

「：その：；」

「緊那羅」
きんなら

乾闥婆に名前を呼ばれて恐る恐る緊那羅が顔を上げた
けんたつば

名前を呼ばれたのは緊那羅なのに何故か坂田と中島が気を付けをする
きんなら

「守られる方の気持ちも…考えて守るようにしてください」

手に持っていた緊那羅がしていたマフラーや手袋を手渡しながら乾
きんたつば
闥婆が言った

「…けん…」

「先に戻ります」

呼び止めようとした緊那羅の言葉を最後まで聞かないで乾闥婆が消
けんたつば
える

「…けんちゃん…何だか…泣きそうな顔してた」

悠助が俯いて呟いた

「守られる方の…気持ち…」

手渡されたマフラーを握りしめて緊那羅が呟く
きんなら

「…話の展開についていけない…なんなわけ？　どういうこと？　何？」

阿部がいまだ気を付けをしている坂田と中島に聞いた

「あの子何？　さっきの子は何でいきなりでっかくなったの？　そして何で飛べるのよ？　一体なんで…もー！ー！！　わけわかんないッ！！」

坂田の胸倉を掴んで揺すりながら阿部が声を荒げて言う

「落ち着いて阿部；」

本間がそれを止めると阿部が本間に抱きついた

「…俺らもよくはわかんないんだけどさ…京助と悠はあいつ等にと
って何だかスッゲエ大事な存在って言うか…いや…何なんだろう；」
説明しようとした中島が考え込む

「害はないと思う…たぶん」

それに坂田が付け足した

「たぶんって何よ！」

阿部が怒鳴った

「害あるなら京助はかわらないだろ。アイツの性分からして」

坂田が言う

「…っもー…何なのさあ…ッ」

混乱して泣きそうな阿部の頭を本間が撫でる

「ッだーーーーー！！」

いきなり大声を上げて浜本が雪だるまを一つ破壊した

「雪だるまー！！」

悠助が叫んだ

「浜本？；」

中島が浜本に近づいて声を掛ける

「雪だるま…」

壊された雪だるまの前に座って悠助が俯く

「落ち着けて浜本；」

坂田も駆け寄って浜本を宥める

「落ち着け！？ 冗談！！ 消えるわ飛ぶわ成長するわ！？ 夢じ

やないのになんだよ！！」

「現実だろ」

背中に迦楼羅^{かるら}を背負った京助が南と共に歩いてきた

「京助…」

阿部と緊那羅^{きんなら}がハモって名前を呼ぶ

「THE現実。夢でもなんでもなく現実」

京助がしゃがんでいた緊那羅を引っ張って立たせると迦楼羅^{かるら}を背負いなおす

「信じる信じない別として現実なんだろ夢じゃないんならさ」

そう言って京助は笑った

「…栄野ってさ」

本間が呟いた

「…栄野って何だか不思議だよね」

本間の言葉に阿部が本間を見る

「いるだけで周りがまとまってない？」

そして今度は京助を見た

「：早くしないと取られちゃうかもよ？　ミヨの事とやかく言ってたけど」

阿部が驚いたように本間を見ると本間が不敵な笑みを返した

「：お見通しだよ何年友達やってると思ってるの。：どっかで聞いた台詞」

笑う本間に阿部が少し赤くなってマフラーで顔を隠した

きゅううううう：

迦楼羅^{かるら}の腹の虫が力なく鳴いた

「：かるらんお腹減ってるの？」

悠助が京助に背負われている迦楼羅^{かるら}に心配そうに聞いた

「大きな力出せばそれだけ力が流れだす速さも増すからな：」

迦楼羅^{かるら}がぐったりとして呟いた

「だからっていきなり落ちるのはやめてくれよな；　屋根の上で助かったぜ；　：横木のばあさんビックリしてたけどな」

南が溜息をつきながら言った

「仕方ないだろう！！；　：はあ；」

怒鳴ったのはいいがそれ以上言い返す気力もないらしい迦楼羅^{かるら}が再び京助の背中に頭をつける

「結局：見つからなかったな：手紙：」

南がボソツと言うと一同が俯いて沈黙が始まる

「まあ：仕方ねえよな雪降ってるし！　：ありがとな：」

南が笑いながら言った

「南：」

中島が南に声を掛ける

「：まだ：」

阿部が口を開いた

「まだ明るいもん！　まだ探せるよ！　アタシ探す！！」

「ちょ：阿部！？」

駆け出した阿部を本間が追いかける

「俺らも探すよここまできたら見つけたいじゃん？」

坂田がニカツと笑って言う中島と浜本、京助も笑って頷く

「私も手伝うっちゃ」

上着を着た緊那羅がそれでも寒そうに言った

「僕もー!!」

悠助が元気よく手を上げて言う

「手分けした方よくね？」

「そうだな…おいみな…南?;」

京助が南の方を振り返ると南が俯いたまま立ち尽くしていた

「どうした? 南？」

浜本が南の肩を叩く

「お前等…っ…」

上げた南の顔は泣きそうだけど笑っていて

「ちくしょー!! 大好きだお前等ッ!!」

男泣きの格好で叫んだ南に顔を見合わせて笑い出す

「僕も南好きー!!」

意味が分かってるのかわかっていないのかは別として悠助が南に抱き

つく南が思いつき悠助を抱きしめる

「愛してるぜー!!」

そのまま悠助を抱き上げて涙目のまま南が言う

「この浮気者ーありすに言いつけんぞ」

京助が笑いながら言った

「二股かけてる殿方に言われたくありませんわ京助」

南が悠助を下ろして京助に言う

「何だよ二股って;」

京助が聞き返すと

「羊子とヒマ子」

坂田が言う

「はあっ!!?;」

緊那羅と京助が素っ頓狂な声をあげて京助は背負っていた迦楼羅を

「あつた…」

南がボソツと呟く

「あつたー……ッ!!」

そして今度は叫ぶ

少し湿っている封筒を頭上高く掲げて南が笑う

封筒の封の部分にはウサギのシール

ひらがなだけで書かれた宛名

少し曲がつている切手

「よかったな南」

坂田が声を掛けると少ししてれたように南が手紙を顔の前で振って笑う

「もう飛ばすなよ？」

京助が落とした迦楼羅かるらをもう一度背負いなおして言った

「…何だかわからないけど…いいこと？」

宮津が緊那羅きんならに聞くと緊那羅きんならが微笑んで頷く

「じゃあ見つかったって阿部達に連絡しねえと…坂田!!」

浜本が坂田に言う

「なんで俺よ…」

坂田が緊那羅きんならにかけた上着から携帯を取り出して開いて…止まった

「…どうした？」

止まったままの坂田に中島が何事かと携帯を覗き込む

「…メアドと番号しらねえ」

坂田が遠い目のまま言った

結局阿部と本間、ミヨコとハルを手分けして探した後の解散という

ことになって家につく頃には当たりは真っ暗になっていた

きゅくるるる…

ぐう…

「…ピークだな…」

石段を登りながら京助が呟いた

「帰ったらすぐ晩御飯食べられるよかるらん！」

台所に明かりがついているのを見て悠助が言う

「…そうか…」

浜本のマフラーをかけられ京助の上着を羽織った迦楼羅が悠助に向かつて力なく微笑んだ

「無理させて悪かったなサンキュ」

京助が言う

「緊那羅も寒い中あんがとな悠も」

家の戸をあけて待っていた緊那羅に京助が言うきんならと緊那羅が微笑んだ

「おかえりなさい」

「だっ！！；」

玄関に入った京助が再び迦楼羅を落とした

「け…」けんちゃん！」「乾闥婆！？；」

京助 悠助 緊那羅が同時に言った

「けんだ…；」

そして少し遅れて迦楼羅が言う

前にも見たような格好で手には箸を持った乾闥婆が一同を出迎えた

「【天】に帰ったんじゃ…；」

緊那羅が玄関の戸を閉めて言う

「先に戻るとは言いましたが【天】にとは言っていないですよ？」

乾闥婆がにっこり微笑んだ

「…いつまで地べたに座っているんですか迦楼羅」

しゃがんで迦楼羅に向かつて微笑む

「あ； スマン；」

京助が迦楼羅を抱き上げた

「コイツヘロヘロなんだわ； 飯できてるか？」

迦楼羅を小脇に抱えたまま京助が家に上がる

「…京助」

名前を呼ばれて京助が振り返ると乾闥婆が笑顔のまま京助と迦楼羅の額に箸を刺した

「痛ってえッ！！！！」 「だッ！！！！」

京助と迦楼羅かるらが悲鳴を上げる

「…怒ってるちゃ…；」

緊那羅きんならがボソツと呟く

「ご飯だよー！！」

いつの間にか家の中に上がっていた悠助が呼びに来た

>i20828—2575<

【第五回・禄】 白い天使に懷かれた（前書き）

ちよつとあつたかいとある日に栄之神社にやってきたのは
小さな天使だった

【第五回・祿】白い天使に懷かれた

12月だというのに今年は暖かく今日に限っては雨という天気で緊き那羅んならが久々に早く布団から出て新聞を取りに玄関に降り立った

玄関を開けると雨の日特有の匂いがする
昨日まで真っ白だった栄野家の前はコンクリートの地面や土がところどころ顔を覗かせていた

「…このままの気温ですつといてくれればいいのに…」

雨の中を小走りで新聞の差し込めである郵便受けに取りに行く
はみ出していた部分が少し雨で濡れている新聞を取って緊那羅きんならが振りかえるとそこには傘を差し大きな荷物を持った一人の若い女性が立っていた

「…お：おはようございますっ；」

参拝客だと思い緊那羅きんならが頭を下げるとその女性が近づいてきた

「すいません：参拝の間この荷物預かっていてくれませんか？」

そう言っって大きな荷物を緊那羅きんならに差し出した

「あ：はい…」

両手で緊那羅きんならが荷物を受け取ると女性が境内に向かって歩いていった
小脇に挟んでいた新聞を玄関の中に入れて荷物を玄関の床に置くと
緊那羅きんならもその場にしゃがんで女性を待つ

「うえ：ふえっ」

「……？」

微かに何か泣き声のような声が聞えた

「ふえっふえっ」

今度はハッキリと泣き声が聞えた

「荷物：からきこえるっちゃ…」

女性から預かった荷物から聞える泣き声

脚からの預かり物ということと開けるのが少し怖いということを開けるのを躊躇さかんっていた緊那羅きんならが荷物のファスナーを動かすと

「ふええええ!! ふええええ!!」

泣き声が玄関中に響いた

「…あ…赤ちゃん!?!」

小さな手袋をはめた手で懸命に宙を掻き何かを探して泣いている顔が赤いのは泣いているせいかな息苦しかったせいか

「は…ハルミママさん!; は…もう境内…にいつてる時間だっちゃ…; …京助—ッ!;」

「ふええええええええ!!」

緊那羅が京助を大声で呼ぶと赤ちゃんがそれに驚いたのか一層大きな泣き声をあげる

「どっ…どうしよう;」

オロオロと赤ちゃんの入った大きな鞆と家の奥を交互に見る

「…とりあえず…ここから出して…;」

泣き喚く赤ちゃんの背中に手を入れてゆっくりと鞆から出すと危なっかしい手つきで背中を軽く叩きながらリズムを取ると泣き声が止んだ

「…泣き止んだ…;」

緊那羅が安堵の息を吐く

静かになった玄関には雨の音しか聞こえず

誰かがやってくる足音はいっこうにしない

「…まさかとおもうけど;」

緊那羅は最悪の予想を頭の中で考えていた

「……」

休日なのに緊那羅きんならの声で起された京助が数回瞬きをして目をこすり脇腹を搔いた後に目を細めて緊那羅きんならの腕の中をじっと見る

「……赤ちゃんくらいで起すなよ…」

でっかい欠伸をして緊那羅きんならに背を向けて歩き出そうとして京助が止まった

「…お前が産んだとか?」

「ちがうつちゃッ!;」

「ふええええ!;」

緊那羅きんならが京助の言葉に怒鳴り返した声に驚いたのか赤ちゃんが泣き出した

「うあああ!;!; よしよし」

慌きんならてて緊那羅があやす

「:お前妙に似合ってるぞソレ」

必死で泣き止ませようとしている緊那羅きんならに京助が口の端をあげて笑いながら言った

「どれ、かしてミソ」

一向に泣き止まない赤ちゃんを緊那羅きんならから受け取ると京助が手馴れた手つきで背中を軽く叩きながら体を揺らし始める

「:あ:泣き止んだっちゃ:」

まだフンフン鼻は鳴っているものの泣き止んだ赤ちゃんに緊那羅きんならが微笑む

「ほれ」

泣き止んだ赤ちゃんを再び緊那羅きんならに返すと京助が寝癖のついた頭を掻きながら赤ちゃんの頬をつついた

「で:コレはどうしたんよ?」

やっと本題に入るらしく京助が聞いてきた

「あ:んと:さっき新聞取りに行ったら参拝の間預かってくれて言きんならって渡された荷物の中に入ってたんだちゃ」

緊那羅が赤ちゃんの入っていた鞆に目をやった

「:その参拝客コウノトリだったりしてな」

京助が笑いながら赤ちゃんの入っていた鞆の中を見て鞆の中に手を入れる

「:紙おむつ:粉ミルクの缶 (携帯サイズ) :哺乳瓶に:」

次々に鞆の中身を出していく京助の傍に緊那羅が座って一緒に鞆の中を見る

「:手紙」

最後にタオルの下にあった手紙を京助が取り出した

「…京助：私さっきから凄く嫌な予感するんだっちゃ；」

緊那羅きんならの言う【嫌な予感】というのは緊那羅きんならの髪を口に含んで吸っている赤ちゃんのことではないと思われる

「…俺もです緊那羅さん…」

京助も遠くを見つめながら手紙を開いた

「…京助：緊ちゃん赤ちゃん産んだの？」

茶の間に入ってきた京助に悠助が真顔で聞いてきた

「産んでないっちゃっ！！；…つと；」

悠助の言葉に再び大声をあげた緊那羅きんならが慌てて赤ちゃんを見ると緊那羅きんならの髪を吸いながら寝息を立てていた

「沙織嬢さおりというらしい」

一通り手紙を読んだ京助がちゃぶ台の前に胡坐をかいて座る

「悠、ちよっくら社務所に電話して母さん呼んでくれ；マジでこれ捨て子だ；」

京助が大きく溜息をついて手紙をちゃぶ台に乗せた

「捨て子？」

電話の子機を手を持ったまま悠助が言う

「…捨て子って…」

緊那羅きんならが自分の腕の中で眠っている沙織という名前の赤ちゃんを見た

「…育児に疲れましたとさ…緊那羅きんならその女の人何歳くらいに見えた？ 若くなかったか？」

京助が言うきんならと緊那羅が頷いた

「…若い女の人だったっちゃ」

袍を開けたとき小さな手が必死で探していたのはきつと母親だったのだろうと緊那羅きんならは思った

「…うゝ…；」

緊那羅きんならが沙織という赤ちゃんを抱きしめて俯いた

「ハイそこ泣かない；」

「泣いてないっちゃッ；」

京助に軽く頭を叩かれた緊那羅きんならがやや小さな怒鳴り声を上げながら上げた顔は半べそだった

スパーン！！！！

「緊ちゃんや赤ちゃん持ってきたってどういうこと!?!」

「っふええええ!! ふえええええ!!」

勢いよく開けられた茶の間の戸息を切らせている母ハルミ

泣き出した沙織という赤ちゃん

「:母さんや母さんや:」

京助がジト目で母ハルミを見た

「ええ:はい:は? :構いせんが:」

母ハルミが警察に電話をしている後ろで京助が沙織という赤ちゃんに哺乳瓶でミルクをやっている

「:上手いっちゃね京助」

慣れた手つきで哺乳瓶の角度を変えて飲みやすいように調節している京助を見て緊那羅きんならが感心する

「まあな:悠の面倒とかしよっちゅう見てたし:やってみるか?」

京助が緊那羅きんならに聞く

「僕やってみたい!!」

悠助が手を上げた

「ホレ、ゆっくり:そうそう」

京助から沙織を受け取り危なっかしい手つきで抱くと哺乳瓶の先を口につけた

「ぷ:ふえ:」

沙織の顔が歪んだ

「ふええええ!! ふええええ!!」

「えっ!; きよ:京助!;!」

いきなり泣き出した沙織に悠助が困って京助を見た

「…ご指名有難う御座います；」

悠助の手から沙織を抱き上げて軽く数回ポンポンとおしめのしてある尻を叩くと沙織が泣き止んだ

「何で僕だと泣くのには京助だと泣かないのかなあ…」

悠助が哺乳瓶を持ったまま頬を膨らませる

「…はいよろしくおねがいします」

電話を切った母ハルミが近づいてきた

「もしかしたら母親が戻ってくる可能性もあるから今日と明日ウチで預かってそれで来ないなら警察の方で迎えに来るって」

母ハルミが溜息混じりに言った

「…ということでもよろしくね京助。緊ちゃんと悠ちゃんも」

「はあッ！？；俺主体ッ！？；」

哺乳瓶を傾げつつ京助が反論的返事した

「沙織ちゃんも京助に懐いているしいじゃない？　じゃ母さん戻るから」

京助の反論を耳に入れてもすぐ反対から出したように母ハルミが茶の間から出て行った

「…マジかよ；」

空になりつつある哺乳瓶をほぼ垂直にさせて京助が肩を落とした

「…休みの日くらい休みてえ…；」

雨が湿った雪に変わった頃正月スーパの赤ちゃんコーナーに京助がいた

「京助！お菓子買っている？」

悠助がポッキーをもってやってきた

「200円以内な」

紙おむつをカゴの中に放り込みながら京助が言うのと悠助がポッキーをカゴに入れた

「…緊ちゃんは今？」

姿が見えない緊那羅きんならを悠助が探す

「あそこ」

京助が指差した方向はレジ会計の向こう側で商品を袋につめかえる
台の傍

そこに緊那羅きんならが立っていた

「…何してるのかな」

悠助が小走りで緊那羅きんならの傍に駆け寄る

「緊ちゃん!!」

緊那羅きんならの腰に抱きついて緊那羅きんならを見上げたが顔が見えない

「悠助？」

少し顔を横に逸らすと緊那羅きんならの顔が見えた

「緊ちゃんお母さんみたいだね」

「…嬉しくないっちゃ；」

沙織を背負い紐で前に固定している緊那羅きんならが苦笑いを浮かべた

「意味なく似合ってるよな」

会計を済ませた京助が袋を持ってやってきた

「寒くないかー？」

京助が沙織を覗き込んで頬をつつくと沙織がわかったのかわかって
いないのか手をバタバタ動かしてヨダレをたらした

「…ヨダレ…」

緊那羅きんならと京助が同時に言った

「…京助ポッキー」

悠助が何だか面白くなさそうに言う

「あ？ 家帰ってからにしろ」

京助が言うとう助が頬を膨らませた

「おかしいなあ…さっきまで…」

暗くもなく明るくもないそんな雰囲気の良い廊下で呟いた言葉が妙
に響いた

「お二人ならあそこだよ」

その呟き声に対しての答えが聞えた

「ばか…」

「上の名前を抜かすな！！折角親切に答えてやったのにッ！！」

【ばか】というのが下の名前だという声の主が怒鳴る

「またあそこに？」

下の名前が【ばか】ではない声の主が下の名前が【ばか】という声の主に聞き返す

「そうついさっきね…」

下の名前が【ばか】という声の主が答えた

「…最近よくあそこに行かれるようになったよね…俺だけの方達のだったのに…よく話に出てくる悠助とかって俺より可愛いのかな」
下の名前が【ばか】ではない声の主がどこか悔しそうに言った

「誰がお前のだよお二人は…ってオイっ！！」

薄紫色の布が風を切って下の名前が【ばか】という声の主の前を通り過ぎて行った

「…本当 慧喜^{えき}は嫉妬^{えき}深いんだから困るよ」

下の名前が【ばか】という声の主が溜息混じりに呟いた

「……どっちに似てるんだ？」

そう言って京助と緊那羅^{きんなら}と沙織を見比べた中島を京助がパンパース
(30枚入り)でどついた

「可愛いねえ女の子？」

蜜柑が沙織の頬を撫でて微笑んだ

「沙織っていうらしいっちゃ」

京助達はスーパーから出ようとして偶然にも中島姉弟に遭遇した

「やーん笑ったー可愛いー」

蜜柑が顔を思いつきり緩ませて声を上げる

「ミカ姉…」

顔が緩みきっている蜜柑を見て中島が苦笑いを浮かべた

「…京助」

悠助が京助の上着の端を引っ張った

「どうした？ 悠」

中島が悠助に声を掛けると悠助が俯いた後に首を振って

「何でもない…」

そう呟いて京助の上着から手を離れた

「…：そっか？」

中島が首をかしげて悠助の頭を撫でた

「早く帰らないと沙織ちゃん風邪ひいちゃうね…：またね？」

蜜柑が沙織の頬に軽く口付けてスーパ―の中に入って行くと中島も蜜柑について中に入って行った

「…：僕先に行くね」

悠助が小走りで駆け出した

「走ると転ぶぞ悠ー！」

京助が叫んだが悠助は振り向きもせず信号が点滅している道路を渡って行った

「…：悠助…：？」

いつもと様子が違う悠助の姿を緊那羅きんならは見えなくなるまで見ていた

「便所か？」

歩き出した京助にあわせて緊那羅きんならも歩き出す

「…：何だか嫌な予感がするっちゃ」

緊那羅きんならが呟いた

「嫌な予感の中か？」

母ハルミが詩織のおしめを手際よく替えている横で緊那羅きんならが苦笑いをしている

「はい！！ すっきりしましたね」
どうやら詩織が緊那羅きんならに抱かれたまま大きい方をしたと思われる

おしめを替え終わった母ハルミが詩織を抱き上げて頬擦りした

「…：悠は？」

先に帰るといって駆け出した悠助をまだ見かけていなかった京助が母ハルミに聞いた

「悠ちゃん？ まだよ？」

詩織を座布団の上に寝かせて母ハルミが答えた

「まだ…って…」

きんなら緊那羅と京助が同時に壁にかけてある時計に目を向けた

「…いくらなんでも…もういい時間だろ…」

京助ときんなら緊那羅が家に着いたのが今から約30分前

その間に悠助の帰って来たような気配はない

そして玄関に入った時悠助の靴はなかった

「…嫌な予感…的中ですか…?…」

京助が言おうときんなら緊那羅が頷いた

白く積もった道に足跡が続き転んだと思われる跡の傍からまた足跡が続いている

「…京助も緊ちゃんもハルミママも詩織ちゃんばかり…」

何だか自分が要らないような気がして悠助の顔が歪む

「僕…」

悠助の眉毛が下がり視界がぼやけた

「…っ…」

真っ白な迷い込めば自分が何処にいるのか見失いそうな音もない真っ白な空間

そこにだたぽつんと精巧な人形の様にも見える人物が一人膝を抱えて浮かんでいた

薄青の長い髪で顔は見えない

身にまよっている物は今のものではない

膝を抱えたその人物の周りには無数の玉が浮かんでいた

白い息を吐きながら泣く悠助

その悠助が呟いた言葉にあわせるかのように白い空間の人物の膝を抱えていた手の指がピクツと動いた

「沙織ちゃんなんかいなくなっちゃえばいいのに……」

「ふええええええ!! ふええええええ!!」

一向に泣き止まない沙織を交代であやす緊那羅きんならと京助そして母ハルミ「おしめは替えたしミルクもやった……ぬわぜ泣く;」

疲れきった表情で母ハルミに抱かれて大泣きする沙織に京助が言った「お母さんが恋しいのかもね……」

母ハルミが体を揺らして沙織をあやす

「いくらなんでも泣きすぎだろ; 血管切れるぞ?;」

京助が母ハルミから沙織を受け取った

「ふええええええ!!!! ふえ……ふええええええ!!」

顔を真っ赤にして泣く沙織をみて京助が溜息をつく

「……脅えてるっちゃ……」

京助に抱かれた沙織を見て緊那羅きんならが呟いた

「は? 脅えてるって……俺に?;」

京助が聞くと緊那羅きんならが首を横に振った

「違うっちゃ。京助じゃなく……もっと違う何か……」

緊那羅きんならが沙織の頬に手を当てると沙織がすぐるように緊那羅きんならの手を小さな手で掴もうとする

「赤ちゃんは敏感だから……何か見えているのかもしれないわね」

母ハルミが石炭をくべながら言った

「……悠ちゃんもアンタもよく天井とか指差して泣いたりしてたわ」

笑いながらストーブの蓋を閉めた母ハルミが京助の頭を軽く叩いた
「おもしろいのよー悠ちゃんてばどんなに泣いていても京助がヘツ
タクソな子守唄歌うとすぐ泣き止むの」

母ハルミが思い出話を話し始めた

「…子守唄…?」

緊那羅きんならが咄くと京助が緊那羅きんならを見た

「なあ…前歌ってたアレ子守唄か?」

京助が緊那羅きんならに聞く

「前?」

緊那羅きんならが首をかしげた

「ホラ! かなり前に縁側で…:悠が寝ちまった時の」

京助が言うとしばらく考え込んだ後緊那羅きんならが口を開いた

「…この歌…どこかで…」

母ハルミが目を閉じた

日本語なのかそれともどこかの言葉なのかそれすらわからない言葉
がメロディーを刻み茶の間に響き渡る

そんなに大きな声で歌っていないにもかかわらず部屋全体を包み込
む緊那羅きんならの声

歌い終わる頃には沙織に小さな寝息が聞えていた

白い白い場所

でもその白さは雪じゃないくでもその場所は全てが白かった

「…誰…?」

自分の目の前に膝を抱えて浮かんでいる人物に悠助が声を掛ける

『来ては駄目…』

頭に直接聞えた言葉に悠助が周りを見渡す

周りにはただ白く何もない見えるものは白

「…ここどこ?」

悠助が目の前にいる人物に再び聞く

『戻って…戻って…来ては駄目…ッ!』

だんだんと大きくなるその声に悠助は耳を塞いで目を閉じた
声が聞えなくなり悠助はうつすらと目を開けた

辺りは白かった

比較的近くで犬が吠える声がする

結構遠くでバイクの走る音が聞こえる

それは雪の白さでまわりは見たことのある景色

「…あれ…?」

振り返ると一人のおばさんが足早にやってきて悠助の横を通り過ぎ
ていく

空を見ると灰色の雲から白い雪がゆっくり降ってきている

前を見てもさっきまでいた膝を抱えて浮かんでいる人物の姿はなく
あるのは電信柱と道とその上に残るさっき通っていたおばさんの足跡

「…なんだったんだろ…」

悠助が白い息を吐きながら呟いた

公園に続く秘密の抜け道も雪で埋まって何処にあるかわからなくな
っている

「…はあ…」

帰りたいけど帰りたくないそんな気持ちで悠助は抜け道を後にする
特に行く宛てもなく…というか行き場所がないらしい暗くなりつつ
ある雪道に残る足跡を雪が埋めていった

「遅いッ!!」

京助がいきなり言った

「…うん…遅すぎだっちゃ」

沙織を抱いたまま緊那羅きんならも言った

「誘拐か?」

「物騒なこと言わないで頂戴ッ!」

呟いた京助に母ハルミが投げた蜜柑が直撃する

「俺探してくるわ」

京助が立ち上がると緊那羅きんならに抱かれていた沙織が顔をゆがめた

「っふ…ふえ…」

「………」

京助が無言でまた座ると沙織の顔が元に戻る

「じゃあ私が…」

今度は緊那羅きんならが母ハルミに沙織を渡そうとするとまた沙織の顔が歪んだ

「………」

緊那羅きんならが無言で沙織を抱きなおすと何事もなかったかのように沙織が手を緊那羅きんならに向かって伸ばし嬉しそうな顔をする

「…困ったわねえ…」

母ハルミが苦笑いを浮かべた

「しゃあない…捜査員に踊っていたか…」

京助が手を伸ばして電話の子機を取った

「その代わり今度なんかおこれよ？」

掃除機の音が響く部屋の隅で中島は電話を切った

「誰から？」

口に飴玉を入れながら林檎が聞いて来た

「京助。ちょっと現場に行つて来る」

中島が立ち上がり戸に向かって歩き出すと掃除機の音が止まった

「ゆーちゃん出かけるの？ 今から？」

髪を一本にまとめた蜜柑が中島に近づいて聞いた

「ああ悠助がまだ戻らないんだとき。で京助も緊那羅きんならも家から出られないから」

ジャケットを羽織ながら中島が説明する

「悠助ちゃんが？ あれからずいぶんたってよ？ アタシも探そうか？」

蜜柑が捲くっていた袖を下ろして髪も解いた

「何？ 悠助帰らないの？ ってか京助はなんで家から出られない

のさ」

林檎も話しに入ってくる

「子守」

マフラーを二回首に巻いて中島が答える

「は？ 子守？ 誰の」

林檎が再度中島に聞く

「お客さんがね置いていった赤ちゃん：沙織ちゃんって言うんだけどめっちゃくちゃ可愛くってっ」

蜜柑が顔を緩ませて林檎に言う

「：はあゝん：そっかそっか」

蜜柑の言葉に林檎が頷きながら笑った

「：りん姉？」

そんな林檎に中島が声を掛ける

「柚汰京助ん家の電話番号何番？」

林檎が受話器を手に取った

ツー：ツー：という回線が切れた音しかない電話の子機を持ったまま京助は何かを考え込んでいた

「京助？」

緊那羅きんならが声を掛けるとゆっくりと子機を充電器に戻す

「怒られた；」

京助ははあと溜息をついて肩を落とすと立ち上がって緊那羅きんならを見下ろした

「俺が一番分かってることだろって言われた；」

「京助が？」

緊那羅きんならが聞き返すと京助が戸に向かって歩き出した

「ふえ：」

途端に沙織の顔が歪みはじめる

「悪い緊那羅きんなら；」

京助が苦笑いを緊那羅きんならに向けて部屋から出て戸を閉めると途端に響

く沙織の泣き声と混ざって聞え始めた緊那羅きんならの歌声を背に京助は玄関に向かった

「緊那羅きんならしかいないの？」

靴を履こうと身をかがめた京助に聞き覚えのない声がかけられた

「：誰よ；」

目の前には少し赤くなった太腿

徐々に視線を上に向けていくと明らかになってくる摩訶不思議な格好

「アンタが悠助？」

京助より10cmくらい背の低い薄青銀色の髪に二つの玉のついた被り物をした人物がにっこりと笑っている

「馬鹿っぽい顔：俺の方が格好いいし可愛いし性格もよさそうなのに…」

京助の全身を見ながらその人物はかなり大きな独り言を言った

「どうしてこんなヤツがお気に入りなんだろうお二方は」

はあと溜息をついて考え込んだ人物を京助が黙って見る

「：まあいっか：とにかくアンタを何とかすればお二方はまた俺だけのものになるんだから」

一人で納得したその人物は京助に向かって満面の笑みを向けた

「【時】がどうのとか言っていたけど俺は知ったこっちゃないし？

いなくなればそのうちお二方もアンタなんかすぐ忘れるだろうしね」

微笑むその人物の左手の中指についている玉が明るく光る

その光を見ていた京助の体が動かなくなった

目はどこかを見たままうつろで手は靴を履こうと踵に指を差し込んだまま動かない

そして京助を見下ろしていたその人物の左手の中指の玉からどうやって収納していたのか大きな三又かきの鉤が現れたがあまりの大きさに

玄関の天井にぶつかって消えた

狭いなあ」

天井を見上げてその人物が笑う

「一瞬でなくしちゃおうと思ったのに仕方ないか：狭い自分の家を恨んで？」

そう言いながら京助の首にゆっくりと手を伸ばしてきたその人物の顔は無邪気な子供の笑顔だった

「これでお二方は俺の元に返ってくるんだ」

「京助！！」

ダブルスピーカーで響いた自分を呼ぶ声と首根っこを思い切り引く張る力で京助は我に変えた

ゴン！！

「っだッ！！！！」

後頭部を思い切り玄関に叩き付け京助が声をあげる

「何なんだやな！！ お前！」

「誰なんだやな！！ お前！」

ゼンゴが犬の姿のまま京助を庇うようにその人物の前に立ちはだかった

「きょう…」

騒ぎに気づいた緊那羅きんならが沙織を抱えたままやって来た

「慧喜…！！」

そしてその人物を見るなり口にしたその人物の名前と思われる言葉

「あいかわらず綺麗な声してるね俺には負けるけど」

【慧喜えき】と呼ばれたその人物は緊那羅きんならを見るとそう言った

「京助になにしてるっちゃ！！ 京助は…っ」

「知ってるよ？ 【時】が来るまで何もあっちゃいけないヤツだっ

てコトくらい。でも俺には関係ないんだ俺はお二方が俺の側にいて

くださればそれでいい…って京助？ 悠助じゃないのアンタきんなら

緊那羅の言葉を止めて話していた慧喜えきが京助に聞いた

「コイツは京助なんだやな」

「悠助はまだ帰ってきてないんだやな」

ゼンゴが慧喜えきに言った

「悠助はもっと可愛い顔してるんだやな」

ゼンが言うどゴが頷いた

「…可愛い…ふうん…可愛いんだ悠助」

慧喜えきが小さく呟いた

バス停の小さな掘建て小屋の中で悠助はしゃがんでボーっと外を見ていた

たまに通る車と人とカラス

近づいてくる足音を耳にすると迎えに来てくれたのかという期待が高まりそれが外れるとがっかりするのだけどこか安心するそんな気持ちのまま悠助はかれこれ一時間そのバス停にいた

「やっぱり沙織ちゃんのほうがいいんだ…」

前ならこんな風に帰りが遅かったり家を飛び出したりしたら必ず京助や母ハルミ、3馬鹿が探し出してくれた

それなのに今回はいつもの倍待っているのに誰も来てくれない

「僕はもう…いらなくなったのかな」

掘建て小屋の隙間から入ってきて少し積もった雪で小さな雪玉を作るとそれを外に向かって放り投げた

バスン

「…?」

何かに雪球が当たって砕ける音がして悠助が顔を上げた

「…じゃあ俺と悠助どっちが可愛い?」

真顔でゼンゴに向かって慧喜えきが聞く

「悠助」

ゼンゴがハモって言った

「ふうん…そう…じゃあ尚更」

慧喜えきが京助達に背を向けて玄関から外に出た

「慧喜!」

緊那羅きんならが裸足のまま慧喜えきを追いかけて外に出る

「サザエさんじゃないんだからよ;」

そばにあったサンダルを手にも京助も緊那羅きんならに続いて外に出た

慧喜えきが左手を上げるとさっきは天井にぶつかって消えた三又の大きな鉤が現れた

「悠助に何する気だっちゃ」

京助が沙織を抱いたままの緊那羅きんならの足元にサンダルを置くと緊那羅きんならがそれを履く

「さっき言った【時】なんて知ったこっちゃない：あの方達は俺のものなんだ」

三又の鉤を手にして慧喜えきがにっこり笑う

「俺以外のヤツに目を：興味を向けているなんて嫌なんだよ」

口元は笑っていても目は笑っていない慧喜えきを見て緊那羅きんならが沙織を片手に抱き直す

「京助沙織ちゃん抱いてて欲しいっちゃ」

緊那羅きんならが慧喜を睨んだまま京助に言った

「俺と戦う気？ 宝珠もないのに？」

慧喜えきが笑いながら三又の鉤を緊那羅きんならに向ける

沙織を京助に渡すと緊那羅きんならの両手に武器笛が現れた

「私は京助と悠助を守るんだっちゃ」

一瞬にして摩訶不思議服になった緊那羅きんならの髪飾りが風に靡く

「ゼン等も栄野を守るんだやなッ！！」

その緊那羅きんならの両脇にいつの間にか人型になったゼンゴが駆けつけた

「お前等：どうやって：鳥類いるのか？」

いつもなら迦楼羅かるらの力を借りて（吸って？）人型になっているゼンゴに京助が聞く

「ヒマワリのところの宝珠の力をちょびっと借りたんだやな」

ゴが京助に言った

ゴが言う【ヒマワリ】とはおそらく：いや確実にあの【ヒマ子さん】の事だと思われる

ヒマ子さんの鉢の中には迦楼羅かるらの宝珠が一つ埋まっていてそれがヒマ子さんを動かしている

「…非常食…」

京助がボソツと呟いた

「なんだか知らないけど邪魔するなら容赦しないよ？」

慧喜えきが三又の鉤を振るとフォンと風が起こりそれが緊那羅きんならやゼンゴの元にも届いた

「来るっちゃよ二人とも」

緊那羅きんならが構えるとゼンゴもいつもは滅多に見せない真顔で構えた

「ゴ！ 簡易結界その三やるんだやな！！」

ゼンが京助の左側に立つ

「了解なんだやな！」

そしてゴは京助の右側に

「何だ…？；」

沙織を抱いたままゼンゴを交互に見て京助が言った

「ヨッ！！」

京助の頭上を飛び越えてゼンゴが場所を入れ替わると京助を中心に直径1メートルくらいの壁らしきものが京助を囲んだ

「やー！！ 久々にやったからチョコツと不安なんだやな」

ゼンがその壁を軽く小突く

「大丈夫なんだやな！ できたんだやな！！」

ゴもその壁を小突いて笑った

「じゃあ今度は…」

ゼンが真顔に戻って緊那羅きんならと対峙している慧喜えきを見た

「アイツなんだやな」

ゴも同じく慧喜えきを見る

自分の身長よりはるかに大きく重そうな三又鉤を片手で持ち慧喜えきは微笑んだ

緊那羅きんならの両脇にゼンゴが構える

「…ゼンとゴはさがって欲しいっちゃ」

緊那羅きんならが慧喜えきから目を逸らさずゼンゴに言う

「何でなんだやな！」

ゴが緊那羅きんならに返す

「今私に何かあった時京助を守れるのはゼンゴしかないんだっ
ちや」

緊那羅きんならが一步前に出た

「…ね？」

軽く振り向いてゼンゴに笑顔に向けた緊那羅きんならが再び慧喜えきの方に顔を
向ける

「その二人の助けは借りないんだ？」

慧喜えきが三又鉤を構えた

「見くびられたもんだね俺も」

慧喜えきの口元が笑った

「私は京助と悠助を守るって決めたんだっチャッ!!」
緊那羅きんならの手首についていた腕輪が光った

「阿部：ちゃん？」

悠助が見上げた顔は不思議そうにでも微笑んでいる阿部の顔
「なにしてんの？」

声をかけられて安心したのか阿部の顔が滲んでいった

「や：やだ!； 何!？ どうしたの!？」

しゃがんで悠助の頭を撫でながら阿部が慌てる

「京助になんかされたの？ 誰かにいじめられたの？」

悠助の頭を自分の胸に抱えて阿部が聞く

「いらなくな：っ：さおっ：」

阿部が嗚咽で上手く話せない悠助の背中と頭を撫でる

「ね：とにかくアタシン家いこ？ ね？ 寒いし：」

悠助に優しく阿部が言うとうと悠助が軽く頷いた

丁度その時バスのクラクションが聞えた

「…驚いた：いつ授かったのさそれ」

うつすらとでもまだ透明に近い緑色になった腕輪の宝珠をみて慧喜えき

が目を丸くする

「：まあいいや：まだ完全な宝珠じゃないしね」

ブンツと三又鉤を振って慧喜えきが言う

「じゃあ：いくよ？」

慧喜えきのその言葉で両者が同時に後ろに飛んだ

「：家は壊すなよ：？；」

ゼンゴのはった結界の中で沙織を抱いた京助が呟く

お互いの武器をそれぞれ自分の武器で弾く音が何度も聞こえ風が起き積もった雪が舞い上がる

「緊那羅きんなら——！！ 頑張るんだやな——ッ！！」

ゼンゴがハモって緊那羅きんならにエールを送った

「：お前等に聞いてもわからないと思うんだけどさ：」

結界の中 緊那羅きんならと慧喜えきの戦いを見ていた京助がゼンゴに言う

「：俺ってなんなわけ？ 何で必死こいて守ってくれてるわけ？」

京助の言葉にゼンゴが顔を見合わせてそして笑い出した

「京助は京助なんだやな！」

ゼンが笑顔で言った

「そうなんだやな！！ 京助は京助！！ なんなわけとか言われても京助は京助なんだから京助なんだやな」

ゴも笑顔で言う

「悠助でも緊那羅きんならでもばかでっかい力のヤツでも青いのもなくて京助は京助なんだやな」

ゼンが言う

「緊那羅きんならもゴ等も京助を守りたいから京助を守るんだやな。悠助を守りたいから悠助を守るんだやな。当たり前なんだやな」

ゴが頷いて言う

「そんなこともわからないんだから京助はやっぱり立派な馬鹿なんだやな」

そして最後の台詞は二人ハモって笑って言う

「そっか：でも最後は少々ムカつきましたな」

京助が口の端を上げて言った

地面に付いた手に反動をつけバク宙をして後ろに着地した慧喜えきが三又鉤を構え直した

「…助けは要らないって言っただけのことはあるね」

頬にできた擦り傷を撫でながら慧喜えきが微笑む

「今日のところはここまでにしておくよ。この傷跡が残ったら嫌だしね」

慧喜えきがそう言いながら三又鉤を振るとアラ不思議フツとあの大きな

三又鉤が跡形も無く消えた

「慧喜えき！」

緊那羅きんならが慧喜えきを呼んだ

「…何？」

眼光鋭くしかし口元は微笑んでいる慧喜えきが緊那羅きんならを振り返る

「京助と悠助…は…」

「…あの方達の興味を惹くのは俺だけでいいんだよ…あの方達は俺だけ見ててくれればいいんだ…」

「時」

慧喜がゆっくりと緊那羅きんならに近づいてきた

「…【時】なんか来ないほうがいいと思わない？」

緊那羅きんならの顔に慧喜えきの顔が思い切り近づいた

「あ」

京助とゼンゴが同時に声をあげ京助が沙織の目を手で隠した

「…ちゅーしてるんだやな…」

ゼンが呟いた

「チッスと言えなんだやな」

ゴがゼンに突っ込んだ

「接吻ともいうんだやな」

京助がゼンゴの話し方で言った

固まったままの緊那羅きんならの両手から武器笛が落ちた

「…ごちそうさま」

目を大きく見開いたまま立ち尽くしている緊那羅きんならの髪飾りにも口付けて慧喜えきが笑う

「最近のお子様は進んでるんだやな」

ゴが腕組をして頷くと京助とゼンも頷いた

「少なくともアンタよりは年上だよ」

はっとして顔を上げた京助の目の前には慧喜の顔

「やっぱり久々にやっただけのことはあるんだやな。カンッペキ失敗だったんだやな」

ゼンゴが揃って頷いた

「な…おま…ふぐっ!?!」

失敗作の結界の中にいた京助にも慧喜えきは口付けてきた

京助の手からずり落ちてきた沙織をゼンがキャッチすると途端にゆがみ始める沙織の顔

「ふええええええええええ!!!!」

沙織の上げた大きな泣き声に緊那羅きんならが我に返って振り向きそしてまた固まった

「…緊那羅きんならとしたときより長いんだやな」

ゴが耳を塞ぎながら言った

「慧喜えき!! 京助から離れるっちゃッ!!」

「何してんのよッ!!!!」

「ふええええええええええ!!!!」

3つの声が重なって響き京助の頭に雪球が直撃する

「…あ…阿部さん…?!」

雪球が飛んできた方向に緊那羅きんならが目を向けると石段の一番上から少し下がった所に顔を真っ赤にして息を切らせた阿部が両手を握り締めたまま慧喜えきと京助を睨んでいた

阿部はそのまま足早に京助を慧喜えきに近づくと思いきり二人を押した

「っ最ッ低!!!!」

倒れた京助の胸倉を掴んで阿部が怒鳴る

「何で俺が怒鳴られないとあかんねんッ!!!!」

被害者だろ俺はッ

「!!!」

「ならすぐ離ればよかったじゃないッ!! 何長々やってたのさッ! 馬鹿ッ!!!」

「パーンッ というなんとも軽快な音が京助の右頬から発せられた
「痛てえッ!!!」

右頬を押さえて京助が声を上げる

「…修羅場なんだやな…」

「ふええええ!!」

「大混乱なんだやな」

「ふええええええ!!!!」

ゼンゴが沙織をあやしなから大きく溜息をついた沙織の泣き声と阿部と京助の怒鳴り声が響く少し暗くなってきた栄之神社の広場

「だからって何でお前にビンタされなアカンねんッ!!!」

京助が阿部に怒鳴る

「っそれは…そもそも! ああいうことは外で!! しかも彼女の
前で他の人とすること自体最低ッ!!」

「どこに彼女がいるっつーんだ! どこにッ!!!」

「ふええええ!!」

京助が怒鳴ると沙織の鳴き声が一層大きくなる

「小さい子だっている前でッ!!」

阿部がゼンゴと沙織を指差して怒鳴り返す

「あ…阿部さん…あの…」

「何ッ!!」

阿部と京助を落ち着かせようとして恐る恐る声を掛けた緊那羅きんならが手を引つ込めた

「緊那羅きんなら…赤んぼ泣き止まないんだやな…」

ゼンゴが緊那羅きんならに泣き止まない沙織を押し付けた

「ふええええええ!!」

顔を真っ赤にして手をばたつかせて泣きまくる沙織を受け取ると緊那羅きんならが一呼吸置いて歌いだした

「…いい歌なんだやな」

ゼンが尻尾をパタパタと振った

「和む歌なんだやな」

ゴも同じく尻尾を振る

決して大きな声で歌っているわけではないのに怒鳴っている声より泣き喚いでいる声より緊那羅きんならの声は耳に届く

「さすが」

阿部に胸倉をつかまれたまま京助が言った

その京助の胸倉をつかんでいた阿部の手から力が抜ける

「…いい声してるだろ」

京助が言うと阿部が無言のまま頷いた

沙織の鳴き声もだんだんくすぶったような泣き方になりそして完全に泣き止んだ

「タンポポなんだやな!…!」

いきなりゴが足元を見て声を上げた

「コッチにはツクシが生えてるんだやなッ!…!」

ゼンも足元を指差して言った

「え…」

そして京助の視界を横切った薄い桜色の花卉

「桜…咲いてる…」

鳥居から境内までの通り道に植えられている桜の樹が花を開いている
「…うそ…」

阿部がフラフラと立ち上がって桜の樹に近づく

「…造化じゃない…よコレ…本当に咲いて…」

舞い落ちてくる花卉を手を受けて阿部が信じられないというように京助を振り返る

「…緊那羅さん?…」
きんなら

京助が歌い終わった緊那羅きんならを呼んだ

まるで栄之神社にだけ春が来た様に花が咲き緑が芽吹いている

「どうということナンデシヨ?…」

立ち上がった京助が緊那羅きんならの肩を叩くが緊那羅本人も驚いているらしく呆然としている

緊那羅に抱かれた沙織が笑い声を上げて緊那羅の髪飾りにじゃれて
いる

「私：にもわからないっちゃ；；ただいつも通りに歌を：」

呆然と一点を見据えたまま緊那羅きんならが呟いた

「これって：宝珠の：力？」

緊那羅きんならが自分の腕についているほんのり緑色になった宝珠を見た

「ふいゝだゝ：ぷぷう」

おそらく赤ちゃん同士でも理解できないであろう意味不明な言葉を
発しながら沙織が笑う

「おゝお笑ってる笑ってる」

沙織の頬を指でつつきながら京助も笑う

「：言っちゃなんなんだけど：」

「夫婦みたいなんだやな。両方オスだけど」

ゼンゴが緊那羅きんならと京助を見て言った

「：なんだか……！？；」

背後にただならぬ気を感じたゴが振り向いて言葉を失った

そこにいたのは阿部郁恵

片手を桜の樹について握り締めた片手をフルフルと震わせて黙って

緊那羅きんならと京助を見て（睨んで？）いた

「こ：怖いんだやな；」

ゼンが身震いした

「ズエラシーメラメラなんだやな；」

ゴも身震いする

「ちよつとッ！！」

「ハイイッ！？；」

阿部が唐突にゼンゴに向かって声を掛けた

「悠今日はウチに泊めるって京助に言っといってくれるッ！？」

「いえっさーッ！！；」

阿部の言葉にゼンゴがシャキーンと背筋を伸ばして敬礼し返事を返す

「阿部さんっ」

大股で石段の方に歩き出した阿部に緊那羅きんならが気づき呼び止める

「…何？」

精一杯の笑顔で振り返った阿部に緊那羅きんならが沙織を抱いたまま小走りで近づいた

「ありがとだっちゃ」

そして満面の笑みでお礼を言う

「…え…？」

何に対してのお礼なのかわからず阿部が疑問形の返事をした

「さっき京助を助けてくれて本当にありがとだっちゃ。あのままだったら…」

そう言って緊那羅きんならが唇を噛み締めた

「…別に…あれは…ただ…」

阿部も自分の行動を思い出して赤くなり俯く

「ぷぷうう…」

ヨダレまみれの手が阿部の前に現れた

「…可愛いね」

その手を優しく掴んで阿部が笑う

「ねえ…ラムちゃん…貴方たちって一体…何者？」

阿部が静かに緊那羅きんならに問いかけた

「いきなり消えたり周りを春にしたり飛んだり…そんな格好してるからはじめは本当サーカスか何かの人かと思ってたけど…いくらなんでもこんなこと人間じゃできないってアタシでもわかる」

手は沙織の小さな手を包んだまま顔は緊那羅きんならに向けて阿部が言う

「ねえ…一体何者？　なんで…」

阿部の問いに緊那羅きんならが俯く

「いいじゃん何者だろうと」

ひょいっと京助が犬に戻ったゼンゴ（コマイヌ）を抱えて話題に入ってきた

「エイリアンだろうとスライムだろうとダンビラムーチョだろうと俺は俺で阿部は阿部ってカンジにコイツはきんな：ラム子なんだからさ」

そう言った京助に緊那羅きんならが軽い肘鉄を食らわせた

「京助：アンタ今DQしてるでしょ」

阿部が言うのと京助が親指を立てた

「そう：だよね：ごめんねラムちゃん変なこと聞いて」

阿部が緊那羅きんならに笑顔を向けた

「いや：あの私の名前は：；」

「アナタが何者でも負けないんだから」

本当の名前を言おうとした緊那羅きんならの言葉に阿部の言葉がかぶさった

「さって：悠でも迎えに行くか：そーいや慧喜とかってヤツ：は？」

コマとイヌを下に降ろして京助が伸びをして辺りを見渡した

「：帰ったっぽいっちゃ」

緊那羅きんならも辺りを見渡して言う

「だあぷういゝ」

沙織が緊那羅きんならの髪飾りをヨダレでぬらしていった

コート という暖房の音が足元から聞えてくる

羽根布団の柔らかさが心地いいのかもぞ動いてまた動かなくなる

「：あれ：？」

そしてふと自分の家の匂いとは違う家の匂いで目が覚める

「僕：」

泣いたせいで目が痛くあまり擦れない

しよぼしよぼする目を開けて周りを見渡して悠助は考えた

薄紫色に白いチェックの入ったベッドカバー、所々に飾ってあるガラス細工、壁にかけられた制服は女子の物

「そっか：阿部ちゃんの家なんだっけ：」

ゆっくりと体を起して伸びをする

「：すけ：」

声が聞えた様な気がした

「…緊ちゃん…？」

悠助の頭に緊那羅きんならの顔が浮かんだ

「悠助」

今度ははっきりと聞こえた緊那羅きんならの声

「緊ちゃん…迎えに来てくれたんだ」

笑顔で部屋を出てすぐの階段を駆け下りて悠助は揃えてあった自分の靴を履いた

「…待ってたよ…悠助」

ガチャリと玄関の戸が開いて悠助が顔を出した

「沙織…！」

着替えた緊那羅きんならに抱きついてきた少し太めの女性

「うわっ…！」

突然のことで後ろに倒れそうになった緊那羅きんならを阿部が支えた
その女性の後ろには警察の制服を着たおっさんと母ハルミそして若い女性が立っていた

「母さん…？」

「…貴方は…今朝の…」

緊那羅きんならと京助がほぼ同時に言った

「畑福さんよ」

につこりと笑って母ハルミが言うのとやっと女性が緊那羅きんならから離れた

「もしかして…沙織ちゃんのお母さん…だっちゃ？」

緊那羅きんならが言うのと女性が何度も首を縦に振り泣き出した

「じゃあ…あの…あっちの…」

緊那羅きんならが警察の横に俯いて立っている高校の制服を着た女性に視線を向けた

「私の娘です…このたびはとんだご迷惑を…」

太めの女性が涙を拭って緊那羅きんならに頭を下げた

「義理のね」

若い女性がキツイ口調で言った

緊那羅きんならが太めの女性：畑福さんに沙織を手渡すと女子高生はフィッと背を向けた

「朝起きるとこの子がいなくて：あの子に聞くと捨ててきたなんていうものですから：よかった：」

眠っている沙織を抱きしめて畑福さんが笑みを浮かべる

「：なんだかなあ：同じなんだなあ：いくつになっても」

京助がボソッと呟いた

「：京助？」

阿部が京助を見る

「わかってなかったのかね：わかってたはずなのに：まだまだなあ俺も」

一人で言って一人で納得している京助を見て阿部が眉を下げて笑う

「：高校生でコレだけなんだから：小学生の悠は：もつとだったんだろうな」

京助が言う和阿部が京助の背中を軽く叩いた

「悠待ってるよ？ 早く行こ？」

そして先頭を切って阿部が歩き出す

「あ：阿部さん！！ 京助！！」

畑福さんに掴まっていた緊那羅きんならも小走りで後を追いかける

「：あんまり怒らないでやってっあのおばさんに言っというて？」

誰だっ構って欲しいのは同じだと思っし？」

京助が母ハルミにそう告げて阿部と緊那羅きんならと共に石段を駆け下りていく

「：伝えておくわ」

フフツと笑って母ハルミが三人を見送った

「待っていたよ？ 悠助」

緊那羅きんならの声から聞いたことのない声にグラデーションのように変わっていく声

「：誰？」

阿部家の戸を閉めた悠助がきょとんとして立ち尽くす

「知りたい？」

口元だけがゆっくりと微笑んだ

> i 2 0 9 7 7 — 2 5 7 5 <

【第六回】探し物はなんですか？ （前書き）

見たことあるようで見たことのない
知っているようで知らない世界で目を覚ました京助
そして目の前に緊那羅きんならが現れるの だ が

【第六回】探し物はなんですか？

ギョヒヒー！ ギョヒヒー！！

という何とも爽やかとは程遠い何かの鳴き声で京助は目を覚ました体を起し伸びをして異変に気づく

「…何処だここ…」

そこは見慣れた自分の部屋ではなくピンクや黄色、よくわからないものや見たことあるもの小さいもの大きいものがまるで幼稚園児の絵画の様になっている空間

「…悠？」

悠助の名前を呼んでみる

「…緊那羅？ 阿部？」

次に緊那羅と阿部を呼んでみた

「なんだっちゃ？」

「うおお！？」

いつからそこにいたのか返事をした緊那羅に驚いた京助が後ろに数メートルずり下がる

「…京助？」

緊那羅がきょとんとして京助を見た

京助も緊那羅を見て緊那羅の格好の異変に気がつく

「…なんだその格好…」

【なんだ】と指摘されて緊那羅が自分の格好をぐるりと見る

「その格好って…いつもと変わないっちゃ」

立ち上がりくると一回転して緊那羅が首をかしげた

「なんなんだよ！！ そのトラビキニはッ！！」

頭に角の代わりにウサギの耳がついていたがその格好はまるでそう某宇宙ギャグラブコメディのヒロインそのものだった

「なんなんだよっていわれても…コレが私のいつもの格好だっちゃ」

緊那羅きんならがしゃがんで京助と目の高さをあわせた

「着替えろ；」

そう言つて京助きんならが緊那羅を軽く押した
ふにっ

「……」

掌全体で感じたのはかたすぎずも柔らかすぎずのさわり心地

「……」

ゆっくりとその感触の正体を確かめるべく京助が目を向けた
ふにっ

そしてもう一度その感触を確かめる

「緊那羅さんきんなら」

それはたぶん男のロマンの要素に数えられるもので

「なんだっちゃ？」

本来なら緊那羅きんならにあつていいものなのかと悩むもので

「：何ですかね？ コレは」

「何でもできる証拠だっちゃ」

その感触の正体は二つの胸の膨らみの片方の物だった

「乳————！！?；」

京助が叫んで立ち上がった

サイズにしてC弱といったところだろう的 緊那羅きんならいわく何でもで

きる証拠である胸を上から見下ろして京助が止まる

「京助？」

緊那羅きんならが京助を見上げる

京助は自分の目線が何でもできる証拠でできた谷間に行ってしまう
辺りで若さを実感する

さっき感じた感触を思い出しつつ何がどうなっているのか考え始める

「：ナイス感触」

しかしさっきの感触のインパクトが強かったのか感触のことしか考
えられないらしい

「年相応の反応なんだやな」

「うおっ；」

心地よかった感触を思い返ししみじみしている京助が聞き覚えのあ
る声に驚く

「ゴ…じゃないお前はゼン…?；」

「ピンポンなんだやな」

ニカツ　と笑ったゼン

「ゼン」

緊那羅きんならが立ち上がってゼンに近づく

「待ってたんだやな」

そう言っきんならて緊那羅を見た

「じゃあやっぱり【時】がきてしまったんだっちゃね？」

緊那羅きんならが言々とゼンが頷いた

「だからむかえにきたんだやな。早く追いかけないと手遅れになっ
ちやうんだなや…早く…アイツのところまで」

ゼンが京助の腕を引っ張って歩き出した

ゼンに手を引かれてただその後ろについて歩いていた京助が足を止
めて目の前に現れたものを見上げた

「…豆腐?；」

白くそれでいて微かに香るは昔懐かし大豆の香り

桁外れの大きさ意外はそれは紛れもなく豆腐だった

「でけエ…；」

空高く豆腐そびえ立つ森　(?)の中

「もたもたしてられないんだなや」

ゼンが躊躇いもなくその巨大な豆腐の中に足を進める

「ちよ…な…おおお!？；」

「早く入るっちゃ」

入るのを足を踏ん張って拒絶していた京助を緊那羅きんならが思い切り押す

とメヌン　という感触と共に京助の体が巨大豆腐の中に消えた

そして京助に続いて緊那羅きんならも巨大豆腐の中に入っていった

「だっ!！；」

緊那羅きんならに押されて中に入った京助が顔面から倒れた

「何してるんだっちゃ；」

その京助を緊那羅きんならが引っ張って起す

「お前が押したからだろうに！； お前がッ！！；」

緊那羅きんならの手を振り払って京助が怒鳴る

「静かにせんか！！ たわけッ！！」

聞き覚えのある声が頭の上から聞こえた

「…鳥類？」

迦楼羅かるらの声だと気づいた京助が上を見上げたがそこに迦楼羅かるらの姿はなくあるのは見覚えのある蛍光灯と天井

「…ってかここ教室じゃん；」

ぐるり見渡すと結構余計なものがあつたがそこは自分の通っている
正月中学校2－3の教室だった

「こっちなんだやな！！ 早く来るんだやな！！」

ゼンが教壇のすぐ近くから京助に向かって叫んだ

「あ…ああ…；」

京助が首を傾げつつもゼンの元まで小走りでやってきた

「ゼンが京助達を迎えに言っている間に…遅かったんだやな…」
ゼンが悔しそうにこぶしを握り締めた

「そんな…」

緊那羅きんならもそんなゼンをみて俯いた

「…なあ…何がどうなってるんだ？；」

ただ一人何がどうなってるのかさっぱりわからない京助がどう
なっているのかを二人に聞いた

「【時】がきたのだ」

頭の上から迦楼羅かるらの声がまた聞こえ京助が上を見上げた

「…鳥類…？ どっかにいるのか？」

蛍光灯の並ぶ天井を見上げ京助がどこかにいるらしい迦楼羅かるらに声を
掛ける

「…何寝ぼけているのだ！ たわけッ！！」

その声と共に京助の目の前に迦楼羅かるらの顔が逆さまになって現れた

「…ちよ…うるい? ; …何だか…かなり小さくなられて…」

大きさ約10センチ 推定)

「前々からワシはここにいるだろうが! まったく…」

背中に生えている金色の羽根を動かして飛んでいるミニ迦楼羅かるらが溜息をついて言った

「こっつて…」

京助が聞き返すと迦楼羅かるらが京助の頭を指差した

「…目玉のオヤジかよ…;」

京助が口の端をあげて言う

「…ゼン?」

掃除用具入れの中からゼンを呼ぶ声が聞こえた

「誰だっちゃッ!!」

緊那羅きんならが京助を庇うように前に出て構えるとその肩に迦楼羅かるらが止まり小さいながらも戦闘体勢に入った

ガコン! という音と共に掃除用具入れの戸が開いて中から出てきたのはゼンによく似た…

「ゴ!」

ゼンが名前を叫んで掃除用具入れから出てきたゴの元に駆け寄った胸にはなぜか醤油の一升瓶

緊那羅きんならもゴに駆け寄る

「アイツはどこなんだやなッ!」

「わからないんだやな…ゴが醤油を探している間に…」

ゴが醤油瓶を抱きしめた

「な…じゃあ!」

ゼンがゴの腕を掴んだ

「濃口醤油しかなかったんだやな…」

迦楼羅かるらが緊那羅きんならの肩の上から言うゴが頷く

「…本格的にきたんだっちゃね…【時】が…早く追いつかないと…」
緊那羅きんならが難しそうな顔で言った

「…醤油…なにがどうして醤油…」

いよいよ話がわけわからなくなってきた京助がボソリと呟いた
落書きとしか思えない絵やらが描かれた黒板

「様は何？」 【時】 って言うのが来て…」

京助が黒板に書いてある 【時】 とう文字を指で指した

「アイツが」

ゼントゴが同時に互いが 【アイツ】 と口を揃えた

「…いなくなったと」

それに京助がシメの一言をつけると二人が頷いた

「で…俺は何を追いかければいいんだ？」

京助が溜息混じりに聞いた

「まずは【3ケンジャー】に会って詳しく話を聞くんだよな」

ゼンが黒板の 【時】 の字から伸びている矢印の先に書いてあった 【
3ケンジャー】 という文字をコンコンと小突いた

「3ケンジャーは全て知っているようで知らない凄いのかよくわからないが凄い方達なんだやな」

ゴが醤油の一升瓶を背中に背負う

「いや…なんかソイツら駄目なんじゃ…」

ゼンの3ケンジャーの説明に京助が突っ込んだ

「3ケンジャーはここから東の正月町に住んでいるはずだ」

廻楼羅かららが京助の頭によじ登り髪の毛を引っ張って言った

「正月…ってじゃあここは何処なんだ？」

京助が聞くと

「正月町」

一同が声をそろえて返した

「…あ・そ…」

京助が口の端をあげた

ゴが出てきた掃除用具入れの中に入るとそこは見覚えのある風景

「公園…」

ブランコがあり回転塔がある正月町の公園だった

「このどこかに3ケンジャーの一人が隠れているはずだっちゃ。

京助早く言うっちゃ」

緊那羅きんならが京助に言う

「言うっちゃって：何を言えいいんだっちゃよコレ；」

京助が緊那羅きんなら（の胸の谷間）を見て言った

「たわけ！！ 決まっているだろう！ 隠れている物に尋ねる言葉

だ！！」

迦楼羅かるらが頭の上から怒鳴った

「その言葉は京助にしか言えないんだやな。早く言うんだやな」

ゴが京助に言う

「隠れているものに：って：；」

京助がしばらく黙って考え込んだ後ゆっくり口を開いた

「も：もーいーかーい？」

京助がそう言った途端に公園中の遊具が光った

「な：ツ；」

まぶしさで目が開けていられない京助達の耳に聞こえた言葉

「もーいーよー」

ようやく目を開けられるようになった京助が恐る恐る目を開けるとそこは公園ではなくコンビニの店内らしい場所で陳列棚には弁当をはじめ色々なものが並べられていた

「コマ！！」「イヌ！」

ゼンとゴの声に京助が振り返ると丁度レジのところには二匹の見たことのある犬

「だつめじゃーん大事ならしっかり守ってやらないとさあ」

ジャーっと水の流れる音がして声がした

「：この声：」

京助が水の流れる音がした方向に目を向けた

「…れ?;」

声はすれどもなんとやらでその声の主の姿がない

「…なか…じまだよな?;」

聞いたことのあった声の主の名前を京助が言った

「そうだぞ? 3ケンジャーが一人!! 中島様だ!!」

【W・C】と書かれた戸がキィキィと開け閉めを繰り返しているがそこにはやはり人の姿はない

「中島様は影が薄すぎて見えないんだやな」

イヌを頭の上に乗せたゴがケラケラと笑った

「どうやら中島様が助けてくれたらしいんだやな」

コマを抱いたゼンが言う

「そーそー! 俺が影が薄いのをいいことに連れて行かれる途中だった二匹を救出したわけよ」

中島 (の声) が崇めよ! という感じに言った

「さすが3ケンジャーの一人だっちゃ」

緊那羅きんならが尊敬の眼差しを中島 (がいらっしゃるき場所) に向けた

「でも何でイヌが…」

ゴが頭の上のイヌを見上げた

「ソレを言うんなら何でコマも…なんだやな」

ゼンがコマを撫でる

「何か共通点とか…あるっちゃ?」

緊那羅きんならが聞くと二人と二匹が揃って首をかしげた

「なあ…中島」

京助が中島 (がいらっしゃるき場所) に向かって言う

「俺は何を追いかければいいんだ?」

そういうと京助は肩をポンと軽く叩かれた

「悠だろ? 悠」

「は…?」

中島の言葉に京助が目丸くした

「お前は今悠を追いかけていたはずだろう?」

中島（の声）が言った

「…悠…？ …そうか…俺…緊那羅！」

京助が緊那羅を振り返る

「…でも待てよ…確かに俺は緊那羅と阿部と…悠を迎えに行くって家を出たけど…」

そして考え込む

「…ここ何処だ？」

それでもって顔を上げてぐるり見渡して京助が聞いた

「正月町」

「あ・そ…」

ハモって返ってきた答えは同じだった

「…そういや阿部は…」

京助が緊那羅に聞いた

「阿部さん？ 知らないちゃよ？」

緊那羅が返す

「どこいったんだ…？」

京助がボソッと呟いた

「とにかく早く悠助を追わないとなんだやな」

ゼンが言う一同が頷く

「ここから一路正月町を目指すんだやな！！」

「わおーんッ！！」

ゴが言うコマトイヌが元気よく返事をした

「そだ！ コレ連れて行け」

中島がそういうと指を弾く音が聞こえジュース類が入った冷蔵庫が勝手に開いた

「…コレとはなんですか」

出てきて速攻中島（がいるらしい場所）に向かって歩き中島の頬（らしき場所）を思い切りつねり始めたのは乾闥婆

「け…」

京助が乾闥婆の名前の最初の一字を口にした瞬間何処からともな

く歌声が聞こえてきた

「歌が聞こえる」

京助が言うと同が頷いた

「何処から聞こえてくるんだやな？」

ゼンが窓を開けると波の音が聞こえた

「…海?」

京助がゼンを押しつけて窓の外を見るとそこは太陽の光を受けてキラキラと輝く大海原のド真ん中だった

「そこ！ 身を乗り出したら駄目なんだや!!」

いつの間にか【航海士】と書かれた腕章をつけたゴが陳列棚に並べであった即席ラーメンを京助に投げつけた

「落ちておぼれてアッププになって知らないんだやな」

腰に手を当ててゴが少し眉を吊り上げる

「いつの間に…」

「さっきの間っ」

京助が即席ラーメンの直撃した箇所をさすりながら呟くと耳元に吐息がかかった

「っだああッ!?!」

耳を押さえ京助が飛びのく

「いやあん京助かわいー!」

そこにいたのは南…もとい【アサクラ・南】

「おっ！ 南ヒッサー!」

中島（声だけ）が南に声を掛ける

「ひさー！ 相変わらず影薄すぎて見えないなあお前」

自慢の長い髪（ツラ）を海風に靡かせて南が笑う

「3ケンジャーが二人もいっぺんに二人も拝めるなんてすごいんだやなっ!!」

ゼンがキラキラさせながら言う

「ラムちゃんもひさー！ 相変わらずだねえ」

「っうわっ!」

南が振り向くと同時に緊那羅きんならの胸を掴んだ

「うんうん成長期」

そのままふにふにと揉み始める

「…羨ましいんだやな？」

ゴが京助を見た

京助が無言で少し頷く

「ん…っや…」

顔を赤くして緊那羅きんならが力なく床に座り込んだ

「…ってか…コレ本当はしょっぱい光景なんだよな…」

頭ではわかっていてもついつい目が離せなくなってしまう辺り僕、男の子

「そこから先はR-18で」

スパアーンという軽快な音で京助はハッと我に返った

「いってーッ！！！！」

乾闥婆けんたつばが丸めた雑誌で南の頭を叩いたらしい

「こちらは表ですのであくまで健全…なのかはわかりませんがそういう行為はきちんとそれ相応の場所ですて下さい」

トントンと丸めた雑誌で手を打ち乾闥婆けんたつばが南を睨んだ

「ちよっとしたスキンシップじゃんー」

南が頭をさすって口を尖らせた

「そのスキンシップで興奮している方々がいるんですから」

乾闥婆けんたつばがチラッと京助と中島（見えない）に目を向けた

「だって男の子ってやつなんだやな？」

ゴが京助の服を引っ張って言う

「だってラムちゃん相変わらずなんだもん」

紺色のプリーツスカートを靡かせて南がアイスの入ったフリーザーの上に腰掛けた

「緊那羅きんならも緊那羅きんならです…まったく」

乾闥婆けんたつばが溜息をつく

「やかましいわ！たわけッ！！ ゆっくり竜田揚げも食えないでは

ないかつ!!」

迦楼羅^{かるら}が京助の頭の上から怒鳴った

「おんまえは人の頭の上で食うなっつーのッ!!」

京助が迦楼羅^{かるら}を掴んで投げた

「あ」

一同がそろって声を上げた

京助が投げた迦楼羅^{かるら}が綺麗に弧を描き窓の外、海にトポン

「…やっちゃった…?」

振り向いた京助の顔は不二家のペコちゃん風に舌を出してウイंकをしたオチャメな顔だった

「まあ…いっかなんだやな」

ゼンが笑っていうと一同が頷いた

「では改めて正月町を目指すんだやなッ!」

航海士ゴが声を上げた

「それにしても何でこの二匹がさらわれたんだ?」

京助がコマとイヌ見た

「何か共通点…とか心辺りとか…」

京助の言葉にコマとイヌが顔を見合わせて首を横に振った

「ぜんっぜんないんだやな」

ゼンが変わりに答える

「でもさらわれたって言うからには…」

「ばーーーーーか」

京助の質問を遮って南と中島（の声）がハモった

「まだわかんないのかお前」

南がゆっくり歩いて京助の前まで来ると鼻の頭に指を突きつけた

「この二人とそこ二匹ぱつと見どんな関係に見える?」

中島（の声）が京助に聞いた

「どんな…?」

「なんか…兄弟みたいだっちゃね」

に迦楼羅^{かるら}が窓に四角い枠内に姿を見せた

「：何アレ」

そしてその迦楼羅^{かるら}の服の裾を齧って　（？）　いる何だかよくわからない生き物（？）

「駄目だつてば！　そんなもの食べちゃおなか壊すよう！！」

ザッパアーンという水しぶきを立ててその生き物が太陽の光を浴びながら迦楼羅^{かるら}に向かって大きく口　（？）を開けた

「だー！ーッ！！；」

ピーー！ー！ー！ーッ！

まさに迦楼羅^{かるら}が食われようとしたときに乾闥婆^{けんたつば}が何処から取り出したのか笛を吹いた

「ここはあなたの来るべき場所じゃないハズですおとなしく森へお帰り？」

乾闥婆^{けんたつば}がその生き物　（？）に向かって声を掛けると何処からとも

なく聞こえ始めた曲

：ランランラランランラン♪ランランララン♪

「…ナウ●カ…」

京助と南、中島（の声）がハモって言った

乾闥婆^{けんたつば}の声が聞こえたのかその生き物　（？）は乾闥婆^{けんたつば}の近くにやってきた

「いい子ですね」

乾闥婆^{けんたつば}がその生き物を撫でると

「キャサリンに触らないで！！」

またあの声が聞こえた

「キャサリン〜？」

一同がその生き物　（？）を見、そしてその生き物　（？）を【キャサリン】と呼ぶ声の主を探す

「キャサリンは私のなの！」

その声と共にその【キャサリン】という生き物　（？）が大きく口を開けると中から出てきたのは

「宮津：さん？」

「わんっ！！」

コマが宮津を見るなり吠えた

「何？ お前知ってんの？」

京助がコマに聞くとコマが唸る

「コイツがコマとイヌを連れて行こうとしたらしいんだやな」

「コイツが：？」

ゼンが答える

「どうしてコマとイヌを連れて行こうとしたんだやな？」

ゴが宮津に聞く

「：【時】が来たから：悠助君が寂しがってるから」

宮津が【キャサリン】に顔をくっつけて小さく言った

「悠助君はね：もう京助君は自分が要らないと思ってるんだよ：だから新しい【京助】を私が見つけてあげるって約束したの」

京助が止まった

「寂しさが【時】を早めたの」

宮津が京助を見た

「二つの心離れれば離れていくだけ【時】は早く近くなる：」

宮津の髪がだんだんと伸びて床についた

「嫉妬に駆られ孤独になれば誰だって甘い声にすがりたくなるでしょう？」

声がだんだんと変わってきていつしか宮津の声は聞いたことの無い女性の声になっていた

「寂しかったの：寂しくて：抱きしめて欲しかったのに！！」

何かがはじけて宮津だけど宮津ではない誰かがあげた悲鳴にも似た声に京助は耳を塞いで目を閉じた

「：どうして：【私】じゃなく：……」

小さく消えていく声が京助の頭に残った

ツンツン：

ツンツン：

何かに何かで突付かれている感じがする

「…う…」

重いまぶたを開けると覗き込んでいる二つの同じ顔

「気付いたんだやな？」

覗き込んでいたのはゼンとゴ

「…ここ…は？」

京助が体を起こす

「正月町」

ゼンとゴがハモって答えた

「…あ・そ…」

何度聞いても変わらない質問の答えに京助も変わらない言葉が出る

「…あいつ等は…？」

さっきまでうじゃうじゃといった仲間（？）が数人見当たらず京助

が二人に聞いた

「知らないんだやな」

ゼンが答えた

「ゴ等が見つけたのは京助だけなんだやな」

ゴが京助に向かって手を差し出す

京助がその手をとって立ち上がった

「とにかく案内するからついてくるんだやな」

ゼンが京助に向かって笑うと歩き出す

「案内…ってどこに？」

京助が聞くとゼンが京助の背中を押して歩き始める

「黙ってついてくればいいんだやな」

ゴが言った

「気にするってのッ；」

「そんなに気になるもの？」

小馬鹿にしたようなクスクスという笑い声とともに聞こえた声

それは聞いたことのある声で京助が上を見上げた

「…矜羯羅^{こんがら}?;」

木の枝の上にいたのはたぶんおそらく間違はなく矜羯羅^{こんがら}

「何？」

京助に名前を呼ばれ矜羯羅^{こんがら}が返事をして微笑んだ

「…矜羯羅で…いんだよな？」

京助が木の枝の下まで来て矜羯羅を見上げる

「そうだけど？」

そう言った矜羯羅^{こんがら}の腰辺りには紫と白の縞模様の長い紐のようなものがついていていた

そして耳に当たる部分には紫色の獣耳

「チシャねこんがらなんだやなッ!!!!」

ゼンが叫んだ

「京助! 離れるんだやなッ!!」

ゴが京助に向かって叫ぶ

「…チシャ…猫…んがらあ?;」

京助がゼンの言った名前を繰り返す

「そう。【チシャ猫】の【矜羯羅^{こんがら}】でチシャねこんがら」

そういつて京助の目の前に降りてきた矜羯羅^{こんがら}…もといチシャねこんがらの首には鈴がついており降りてきた時にチリリと鳴った

「誰かを探しているんでしょ？」

につこり笑いながらチシャねこんがらが京助に言った

「僕の相方ならきつと見つけられると思うよ? なんとって魔法猫

だから」

長い尻尾が京助の体に巻きついた

「京助!!」

ゴが再度叫ぶ

ブンッ とゼンが足元の石を投げつけるとそこに居たチシャねこんがらが消えた

「…逃がしたんだやな」

ゴが呟いた

「誰が逃げたって？」

はっとして振り返るとゼンの後ろにチシャねこんがらがいた

「ゼン！！」

ゴがひざを曲げた

「ストーーーーーッップ！！」

京助が声を上げた

その声一同が京助をみて一時停止した

「矜羯羅」

京助が矜羯羅に目を向けると矜羯羅が微笑んだ

「…みんなは何処にいる？」

「京助！」

ゼンとゴが同時に京助に向かって叫んだ

「大丈夫きつと見つけれられるよ？　そう…僕の相方なら…ね」

ゼンから離れたチシャねこんがらの鈴がいつの間にか京助のすぐ隣で鳴った

「だって魔法猫だから」

チシャねこんがらがそういうと辺りが暗くなった

「な…?;」

京助が辺りを見渡すと一本の木がライトアップして暗闇に浮き出てきた

「…っほー」

独特の最初の一言が聞き取れないという話し方がスピーカーを通してときのように大きく響いた

「何なんだやな」

ゼンがライトアップされている木に注目する

「最高の天才児！」

何処からともなく聞こえた坂田の声

「坂田…？」

京助がその声を元に坂田を探す

「誰もが驚いたもんだ！ 素晴らしいヤツさ！！ 俺――――！！！」

カッ！！ とライトの光が濃くなり照らされた一本の木の上に二つの人影

「3ケンジャー坂田！」

ゴが目をキラキラさせて叫んだ

「隣にいるのはもしかして奇跡の魔法猫の……制多迦^{せいたか}なんだやなッ！！」

ゼンが言う

「そうアレが僕の相方……魔法猫 制多迦^{せいたか}だよ」

チシャねこんがらがくるっと宙返りをするとうつとその姿が消えそして今度は木の上に現れた

「小さくはないけど可愛い黒猫」

チリンとチシャねこんがらの首の鈴が鳴った

「とう！！」

坂田がジャンプして木の枝から離れた

「ばっ！！； お前高すぎ……ッ！！；」

ゆうに5mはある高さから坂田が飛んだのを見て京助が叫んだ

「心配後無用！」

坂田のその声に制多迦^{せいたか}も飛び降りて坂田を小脇に抱えて着地した

「はいッ！！」

右掌に坂田が立ちソレを高らかに掲げて制多迦^{せいたか}と坂田がキメのポーズを取る

「……阿呆か……」

呆れている京助とは反対に目をキラキラさせている妃偉と

「すごいんだやな……」

ゴの声に頷いているゼン

どうやら痛く感動しているらしい

「やーやー！！ 有難う有難う」

坂田がゼンとゴの間を通って京助の前に来た

「南と中島には会ったんだろ？」

何故か夏服の坂田が京助に聞いた

「あ…ああ…はぐれちまったけどな…」

「不安だったろ？」

京助がしどろもどろ答えを返すと間髪いれずに坂田が次の質問をしてきた

「いきなり一人になるってのは」

坂田が言うと同が京助に注目した

「中学生の俺らだって不安で寂しいだろ？ 小学生の悠は？」

坂田がまた付け足す

「俺は昔お前が大嫌いだった」

坂田の言葉に京助が目を大きくして驚いた

「お前が羨ましくて大嫌いだった」

辺りが静まり返ったかと思うと京助は一人白い空間に立っていた
目に入ったのは真っ白人

髪は長く銀に近い青い色

「坂田…？ ゼン？ ゴ…？ 制多迦！ 矜羯羅…ッ！；」

辺りを見渡し叫んでもただ白いその空間に声が吸い込まれていく

『…ああ…また…』

頭に響いた声に京助が振り向く

『こないで…来ては駄目なの…ごめんなさい…ごめんなさい…』

ついさっき聞いた女性の声

『私は…私はただ抱きしめて…抱きしめてほしかっただけなの…ッ
！！』

だんだんと大きくなってくるその声に京助は耳を塞いだ
どれくらい耳を塞いでいたのか手を離れた京助の耳に聞こえたのは
微かな歌声

「…この歌…さつき…」

海の上で窓の外から聞こえた歌が聞こえた
顔を上げると目の前には大きな鳥かごがあり中には白い布を頭から
かぶった人がいた

「あの…」

京助がその人物に声を掛けると歌が止んだ

「…ここは…？」

京助の質問が聞こえたのかその人物がゆっくりと京助の方を向いた

「正月町…」

「あ、そ…」

やはり変わらない質問への回答に京助が溜息で苦笑いする

「待ってたっちゃ京助…」

その人物が鳥かごの柵に手つくと口元だけにっこり笑った

「おま…緊那羅ッ!?!…」

頭にかぶっていた布を取るとその人物は摩訶不思議服を着た緊那羅
キィと音を立てた鳥かごを京助が見上げた

一体何処から下がっているのかそれは【アルプスの少女ハイジ】の
OPのブランコ並の謎だった

「待ってたって…いったよな？」

京助が緊那羅に聞いた

京助が聞くと緊那羅は頷いて口を開いた

「子守…歌？」

緊那羅があの日縁側で歌っていた歌

緊那羅が沙織を泣き止ませるために歌った歌

その歌は【子守唄】ではないのかもしれないけれど京助には【子守
唄】に思えた

何を歌っているのかわからないが妙に頭に残るその旋律

緊那羅きんならの歌声が響く中京助は頭の中で一瞬誰かの声を聞いた

『ごめんな』

若い男の声

ハッとして辺りを見渡すと緊那羅きんならの歌がいつの間にか止んでいた

「何…」

京助が呆然としたまま緊那羅きんならを見るとそこに緊那羅きんならの姿はなく大きな鳥かごの中には

【上を見ろ】と書かれた布が一枚ヒラヒラと風に靡いていた

「…上？」

京助が上を見上げると今度は空一面に【下を見ろ】という言葉が書かれていた

「…下？」

そして書かれてあるがまま下を向いた京助の目に入った次なる言葉

【ざまあみろ】

「……」

沈黙してその【ざまあみろ】という言葉を見つめる京助

「引っかったね」

ガサツという音とともに現れたのは

「…し…柴田…さん？」

ザカザカパキパキ音をさせて藪中を京助に向かってきた柴田

「引っかったね京助君」

にっこり笑って柴田が言う

「…って」

今度は上からガサツという音が聞こえて同じく京助は腕を掴まれた

「おや…」

柴田が京助の腕を掴んでいるもう一人を見る

「制多迦せいたか…」

髪に葉やら小枝をつけた制多迦が京助の腕を掴んでいた

「ついて行っちゃ駄目だよ京助」

後ろから声が聞こえて振り向くとそこにいたのはチシャ猫の格好をした通称【チシャねこんがら】

よくよく見ると制多迦にも黒い猫のような耳を尻尾があった

「他のみんなは？」

腕を二人につかまれたまま京助が矜羯羅こんがらに聞いた

「あの二人のと3ケンジャー坂田なら大丈夫……」

フツとチシャねこんがらが笑った

「俺が先に見つけたんだけどな」

そう言いながら柴田が京助の腕を思い切り引っ張った

「だッ!;」

京助がよろけて柴田の方に傾くと今度は制多迦せいたかが京助の腕を引っ張る

「だッ!;」

そして今度は制多迦せいたかの方に傾いた京助をまた柴田が引っ張る

「放してくれるかな？」

柴田が言っても制多迦せいたかは無言のまま引っ張っている

「いてーって!;… いてーってッ!;…」

綱引きのごとく両腕をひばられて京助が声を上げる

「ハイそこまで」

(ス) パパーン!! という軽快な音がして京助の両腕が解放された

「ひどいなあ;」

柴田が頭を押さえて言う

どうやら誰かに頭を叩かれたらしく制多迦せいたかも頭をさすっている

「…誰も呼んでないんだけど？」

チシャねこんがらがそう言うのとパチパチッと何か電気のようなものが小さくはじける音がした

「ええ。少なくとも貴方には呼ばれていませんよ? むしろ呼ばれても来ませんけど」

薄い水色の布が風に靡いて座り込んでいる京助の顔に当たった

「誰が君を呼ぶって？」

パチパチッという音が今度は少し大きくなって聞こえた

「さあ誰でしょう？」

手に握られていたのは何処から持ってきたのか【正月中】と書かれた来客用のスリッパ

「そんなので叩かれたのか；」

柴田がスリッパを見て溜め息をつくとその人物が手に握っているスリッパをもう片方の手にポンポン叩きつけゆっくりと振り返る

「乾闥婆……」

にっこりと微笑んでいるにもかかわらずその笑顔は何故か怖い

「少し黙っててください」

柴田に向かって乾闥婆が微笑んで言うとき柴田にもその怖さが伝わったのか後ずさりして頷いた

「何しに來たの？」

チシャねこんがらがが微笑んで乾闥婆に聞いた

しかしその後ろでカミナリが落ちそうな勢いで鳴いているように思える

「貴方には関係ないでしょう？」

乾闥婆も笑顔で返した

しかその後ろでは同じくカミナリが落ちそうな勢いで鳴いているように思える

「そう……」

チシャねこんがらの眉毛がピクッと動いた

「ええ関係ないですので口挟まないで下さい」

乾闥婆が眉をピクピクさせて微笑んだ

「……ようすけ……」

制多迦が京助の肩を叩くと京助が頷き柴田の手を取って木の後ろに隠れるとまもなく特大のカミナリが落ち（たように思え）た

「……どうするよ……」

ゴロゴロという雷の音が聞こえてきそうな背後を気にしつつ京助が制多迦せいたかに聞いた

「…うしよっか；」

ソレに対して制多迦せいたかが苦笑いを返す

「何なの？」

京助につれてこられた柴田が聞く

「君：魔法猫とかいうのだとか：何とかできないの？」

柴田が制多迦せいたかに指を突きつけて言う

「…うだけどコレばかりは僕にはなんとも…；」

そう言って制多迦せいたかがチラリと横目で背後を見た

物々しい空気の中に恐ろしい笑顔の二人

デロデロという効果音が聞こえてきそうなそんな光景に制多迦せいたかが目
を逸らした

「…手上げ；」

両手を挙げて制多迦せいたかが苦笑いする

「俺は早く京助君を連れて行かないといけないんだけどなあ」

柴田が言うときシャネこんがらと乾闥婆けんだつばが同時に柴田をキッと刃物
のような目つきで睨んだ

「うるさいですよ！！」「うるさいよ！！」

二人同時に怒鳴られ睨まれた柴田が苦笑いをした

「ハモらないでいただけますか？」

乾闥婆けんだつばがにつこり笑ってチシャネこんがらに言った

「そっちこそ。今のは僕のほうが早かったんだから」

チシャネこんがらも負けじと笑顔で言い返す

「…触らぬ神にたたりなしだ；」

京助が言う

「…悠か？」

ボソッと京助が言うとき数秒間を空けて柴田が頷いた

「わかった行く」

京助が立ち上がった

「…ようすけ；」

制多迦^{せいたか}が京助の服を引っ張った

「悪い制多迦^{せいたか}。俺行くわ。俺何だかんだ言ったって悠の兄貴だし悠は俺の弟だし」

服についた土を払いながら京助が言う

「元は俺が原因だしな」

そして苦笑いを制多迦^{せいたか}に向けた

「…かった…じゃあちよつと待って」

【よいしょ】と小さく言って制多迦^{せいたか}が立ち上がり左足についている小さな鞆のようなものをゴソゴソ漁りだした

「…ったあった」

そして何かを見つけた制多迦^{せいたか}がにっこり笑って京助を見る

「…割り箸？；」

制多迦の手にあったのは【おてもと】とミミズののったくったような達筆でかかれた袋に入った割り箸が一膳

「…これは魔法のステッキ」

制多迦^{せいたか}がそう言いながら割り箸…魔法のステッキを振ると【ピロリロピロリン♪】というよく玩具から聞こえる音が鳴った

「今から京助を悠助の元へ」

いつの間にか手にハエ叩きを持った南が制多迦^{せいたか}の隣にいた

「しっかり謝ってこい」

後ろから坂田の声が聞こえ京助が振り返ると手に箒を持った坂田に肩を叩かれた

「やっぱり俺見えてない？」

中島の声が聞こえ辺りを見渡すと靴べらが宙に浮かんでいた

「京助」

京助が名前を呼ばれて振り返るとそこには緊那羅^{きんなら}とゼンとゴが立っていた

「自分の存在理由から逃げないで…」

緊那羅^{きんなら}が京助を真っ直ぐ見ていった

「：ソレ前に鳥類にも言われた」

京助が言うきんならと緊那羅きんならが小さく歌った

さっきも聞いた妙に頭に残る旋律

「ちゃっちゃといきますか」

坂田が言うせいたかと南せいたかと制多迦せいたかと中島：というか靴べらが京助を囲んだ

「ピリカ●リララ…」

「ちょっと待て」

坂田が呪文（かも知れない言葉）を唱えだすと京助がソレを止めた

「なんだよ」

坂田が言う

「何の呪文だ何の！；」

京助が怒鳴る

「うるさい！！！！！！！！！！」

ゴウっという強風とともに乾闥婆けんたつばとチシャねこんがらの声が響き全

員が固まった

「：っかり忘れてた；」

制多迦せいたかが苦笑いを浮かべて割り箸を振ると今度は【ユ（ウ）アツ

シャー！！】という某北斗七星拳の使い手の声がして京助を光が

包んだ

「おおお！！？；」

自分を包んでいる光に驚いて京助が自分の全身を見る

「ドッキリドッキリドンドン！ 不思議な力がわいたらどーする♪」

南がハエ叩きを掲げながらウィンクしつつ歌った

「：どうもしねえよ；」

ソレに対し京助が裏手拳を交えて突っ込む

「何だかとても素敵ねーでしょ♪」

南に続いて中島（の声）も靴べらを掲げて歌う

「よくねえって；」

そしてその中島（の声）に対しても京助が突っ込む

「まあいいってことにしておけよ」

坂田がハッハと笑いながら箒を掲げた

「…ジカルステージ！」

制多迦せいたかが叫ぶと京助の足元だけぽっかり穴が開いた

「…マジ?;」

その穴を指差して京助が周りを見ると一同がさわやかな笑顔で手を振り頷いた

「…ってらっしやい」

制多迦せいたかがパチンと指を鳴らすと無重力が京助に押し寄せた

「どこまで落ちるんだっちゃ?」

緊那羅きんならが長い髪飾りをを上に靡かせて京助に聞いた

「俺が知るか; ってかおま…いつの間に…」

京助が答える

「栄野弟がいるところまでに決まっているだろう」

いつの間にそこにいたのか京助の頭の上から迦楼羅かるらの声がした

「鳥類?; おまえもいつの間に…;」

「話は後だ」

京助の言葉を途中で止めると迦楼羅かるらが京助の頭から離れ京助の目の前にやってきた

「…悠はこの下にいるのか?」

京助が話を元に戻した

「下にいるか上にいるか何処にいるかはわからんがコレは絶対に栄野弟かるらの所まで続いている」

迦楼羅かるらが言った

「どうしてそんなことわかるんだっちゃ?」

緊那羅きんならが迦楼羅かるらに聞いた

「これは栄野弟の心だからな。暗いのは寂しさの表れだ」

迦楼羅かるらが答えると京助はまだ終わりの見えない出口を見つめた

「どれだけ悠助が寂しかったか…わかる?」

「阿部…?」

そこに居たのは阿部

「大切なものをなくす…ということが悲しいことだというのはアタシも知ってる」

阿部がちらつと緊那羅きんならを見て静かに言った

「アタシじゃ京助の代わりになれないってことも」

そして緊那羅きんならの隣に並んだ

「早く行ってあげて」

微笑んだ阿部がすうっと消えた

「…消え…だあッ!?!」

阿部が消えたとはぼ同じに無重力が終わった

「大丈夫だっちゃ?」

思いつきり顎を強打して無言のままの京助に緊那羅きんならが心配そうに声を掛けた

「…つてえ;」

顎をさすりながら差し伸べられた緊那羅きんならの手を掴んで立ち上がった京助が辺りを見渡した

「ここ…俺ン家じゃん…」

畳が敷き詰められた和室に積み上げられたダンボール箱目の前には室内灯の電気の紐がゆらゆらと揺れている

「とーさんっ俺も俺もー」

外からは子供の声が聞こえてきた

確か冬だったはずの外の景色は何故か緑がざわざわと風に鳴かされその風はついでに軒下に下げられた風鈴もチリリと鳴かせる

「…どうして…」

一歩後ろに下がった京助の足が何かを蹴った

【コロリンコロリン♪】という音がしたそれは赤ちゃん用の玩具でよく見る起き上がりこぼしだった

「…これ…」

京助がその起き上がりこぼしを持ち上げると【ころりん♪】と再び

音がした

「とーさんてばっ!!」

風の入ってくる窓から風と一緒に入って来た子供の声に京助が顔を上げると周りには誰もいなくなっていた

「悠助ばかりずるいよー!!」

【悠助】という言葉に京助は急いで窓辺に駆け寄って身を乗り出して外を見た

「悠!」

京助は身を乗り出しながら悠助の名前を呼んだがそこに悠助の姿はなかった

悠助の代わりにそこにいたのは額に絆創膏を貼ってミ●キーマウスのTシャツを汚したまま着ている少年と後姿の男が一人そしてその男が両腕を上げると両手足をばたつかせて笑う赤ちゃんだった

「おーれーもー!!」

少年が地団駄を踏んで男を見上げ男の服を掴んでブンブン振っている

「こーら京助! あんたまた服汚してきて!」

青いワンピースを着た女性が少年の頭を小突いて男から赤ちゃんを受けとる

「…かあ…さん…?」

その女性は少し幼いが間違いなく母ハルミでその母ハルミが名前を呼んだということはその少年は間違いなく京助で母ハルミが抱いている赤ちゃんは悠助ということになるだろう

「じゃあ…」

後ろ向きのまま母ハルミと会話している男

「…父さん…?」

母ハルミから悠助が生まれてからすぐに他界したと聞いていた父親のこと

計算したら7年は一緒にいたのに姿も声も全くといっていいほど覚えていない父親の面影

悠助より少し濃い目の髪を襟足だけ少し長めにした髪型

母ハルミより背が高く中年太りには程遠い体型

履いていたのは下駄

その足元にはコマとイヌが尻尾を振って男を見上げている

頭の上で風鈴が【チリリ】と鳴る

幼い京助が男に抱き上げられ高い高いをされて嬉しそうに笑っていた
そしてそれを見て優しく笑ったまま悠助をあやす母ハルミ

「……」

記憶にない父親の姿をどうして今こうして見てどうしてその男が父親だと思えるのか少し混乱しつつも京助は黙ったまま幸せそうな家族の図を見つめていた

「父さん……」

京助が小さく呟くと辺りが急に暗くなり何も見えなくなった

「な……」

突然のことに京助が慌てて周りを見渡すと歌が微かながら聞こえてきた

「この歌……この声……は……」

よくよく聞いているとその声はきんなら緊那羅の声だった

「きんなら緊那羅……」

京助がきんなら緊那羅の名前を呼ぶと目の前にきんなら緊那羅の代わりに黄金の玉があった

「……キンタマ……」

京助がボソツと呟く

「じゃない!!!!; きんなら緊那羅ッ!!? どこいったきんなら緊那羅ッ!! い

るんだろッ!?

気を取り直して歌声の主を探す京助の耳に歌声に混じってふと聞こえた言葉

『ごめんな』

パァン！！

と音を立てて黄金の玉が砕けると途端に止んだ歌声と聞こえ始めた赤ちゃんの鳴き声

「ふえええええ！！ふえええええええ！！」

その声がだんだんと大きくなって

「京助ッ！！！！京助ってばッ！！」

泣き声に混じって聞こえ始めた自分と呼ぶ声

「…っ；」

背中に感じた冷たさと後頭部に感じた鈍い痛み
そして何故か醤油の匂い

「ふええええええ！！」

泣き声が最大ボリュームで京助の耳に届いた

「京助！！」

緊那羅きんならが呼ぶ声がして京助はその声のしたほうに顔を向けると泣き
そうな顔をしていた緊那羅きんならの顔がほころんだ

「…何…」

「馬鹿ーーーーー！！！！」

突然阿部に抱きつかれて京助が目をぱちくりさせた

「心配したんだから馬鹿ッ！！　阿呆ッ！！」

「ふええええええええ！！ふええええええええ！！」

阿部の喚き声と沙織の鳴き声のコラボが響いた

「一体…；」

わけがわからず呆然としている京助がボソツと呟く

「アンタ石段から落ちて気を失ってたのよ？」

母ハルミが呆れ顔で京助を見下ろした

「ごめんねえ京助；　ウチのキャサリンが飛び掛ったからビックリ
したんでしょ？」

何だかどこかで聞いたことのあるような声で謝られ京助がその方向
に目をやるとピンクの服を着た犬　（シーズーっばい）を抱いた
恰幅のいいおばさんが買い物袋を腕にかけて苦笑いしていた

「…あ…いや；」

京助が阿部をつけたまま起き上がろうとするのを緊那羅きんならが手伝い京助は身を起した

「ほらほらお兄ちゃん大丈夫でよかったでちゅねー」

泣き止まない沙織を女性があやして泣き止ませようとしている

「大丈夫だっちゃ？」

緊那羅きんならが京助の背中の雪をを軽く払った

「あ？ …ああ…」

身を起し辺りを見るとたぶんおばさんの買い物袋から飛び出したらしき袋が破れたホットケーキミックスと割れた醤油のビン（小）が散乱している

「悪運つっよいわねえアンタ…」

悪態をつくのは安堵からなのか母ハルミが微笑んだ

「…母さん…」

そんな母ハルミを見て京助の頭にさつき気を失っている中で見た光景が浮かんできた

「そうだ母さん！！ キンタマ！！」

京助が母ハルミに向かって大声で言う

「…潰れたの？」

母ハルミの一言で一同の視線が京助の股間に集中した

「ちっが…！！； 金色の玉が割れて…俺…父さん見た」

「アンタ頭打った？」

京助が言うの間髪いれずに母ハルミがそう言って京助の頭に手を置いた

「割れたのは醤油のビンだけだよ？」

おばさんが言うときヤサリンという犬が吠えた

「そうじゃなく…ッ…」

頭ではまとまっているはずなのにいざ言葉で伝えようとすると言葉が上手く出てこないという事態に陥って京助が頭を掻いた

「ふええええ！ ふええええええ！！」

その苛立ちに追い討ちをかける沙織の鳴き声

「だー！っ！！！」

抱きついてた阿部を引き離して京助が意味もなく声を上げる

「沙織ちゃんが余計泣くでしょう！」

母ハルミが京助の頭を叩いた

「んなこといったってよッ！！」

それに対して京助が反論すると小さく聞こえてきた歌

「…ラムちゃん…？」

半べそのまま阿部が緊那羅を見ると呟くように緊那羅きんならが歌い始めていた

「…緊那羅…」
きんなら

緊那羅きんならが歌う歌を聞いているとどうしてか凄くホッとする

泣いていた沙織もいつの間にか泣き止んで眠そうに欠伸をしている

「そうだ…歌！！」
緊那羅きんなら！！」

突然京助は緊那羅きんならの両肩を掴んだ

「な…んだっちゃ？；」

ビックリして歌うのをやめた緊那羅きんならが京助を見る

「えーつと…その歌…お前…」

京助が緊那羅きんならに何かを聞きたいらしい

「どこで覚えた？」

緊那羅きんならが何かを思い出そうと考えると母ハルミが緊那羅きんならの歌った旋律を鼻歌で歌った

「母さん…それ…」

京助が母ハルミを見ると母ハルミが微笑んでこう言った

「これはねアンタの父さんがよく歌ってた子守歌」

その母ハルミの言葉で京助の頭の中に蘇ったさっき気を失っている中で見た光景

幼い自分と悠助と母ハルミとそして父親らしき人物と

「ごめん…私はどこで覚えたかわからないっちゃ；」

緊那羅きんならが申し訳なさそうに言う

「懐かしいわあ…」

母ハルミがどこか寂しそうに笑った

「アンタはこの歌沢山聴いたからかしら？　悠ちゃんは覚えてないでしょうねえ…」

母ハルミが言うのとハツとして京助は緊那羅きんならを見た

「…京助？」

そしておもむろに緊那羅きんならの胸の辺りに手を置いた

「な…何してんのよッ！！」

阿部の怒鳴り声とともに　パアン　という小気味いい音が京助の左頬から生まれた

「痛てえッ！！」

左頬を押さえて京助が叫ぶ

「…京助…何がしたかったんだっちゃ？…」

緊那羅きんならがわけがわからず京助に聞く

「こんなヤツ放つといていこ！！　ラムちゃん！！」

阿部が立ち上がり緊那羅きんならの腕を引っ張った

「あ…う…ん？…」

阿部に引っ張られて緊那羅きんならが立ち上がりそのまま阿部についていく

「あ！！！！　コラ！　ちよいまちっ！！」

左頬を押さえつつ京助も立ち上がり二人の後を追うように駆け出した

「晩御飯までには悠ちゃん連れて帰ってくるのよー！！？」

母ハルミが叫ぶと京助が後ろ向きのまま手を振った

>i21161—2575<

【第六回・弐】感情性長期（前書き）

阿部の家にいるという悠助を迎えにいく京助と緊那羅^{きんなら}
途中 緊那羅^{きんなら}が嫌な予感を感じて走り出した

【第六回・弐】感情性長期

「雪止んだけど寒いねー…ラムちゃん大丈夫？ 寒いのが苦手なんですよ？」

除雪車が入ったのか車道の雪が歩道の方に押しやられて人がやっと一人歩ける間隔の道を京助と阿部と緊那羅きんならが一行になって歩いている

「あ…うん大丈夫だっちゃ」

声を掛けてきた阿部に緊那羅きんならが笑顔を返した

「悪かったな阿部」

京助が阿部に言った

「いいのいいのアタシ一番下だから悠の気持ちもわかるし…それに…」

そう言っただけで後ろを歩いている緊那羅きんならを阿部はチラッと見た

「…なんでもない」

途中まで言いかけた言葉を切った阿部に首を傾げつつ京助は【しばのストアー】と書かれた看板が立っている曲がり角を曲がった

「…緊ちゃんは？」

確かに聞こえたのは緊那羅きんならの声だったはずなのにいるのは緊那羅きんならではなく見たことのない人物で悠助は緊那羅きんならの姿を探す

「緊那羅きんならはいないよ」

クスッと笑った人物を悠助がきょとんとして見上げた

「でも緊ちゃんの声が…」

悠助が言うと

「聞こえたの？ …こういう風に？」

笑った口元から発せられた声がグラデーションのように緊那羅きんならの声に変わっていく

「…え…？」

わけがわからないという顔をして悠助が立ち尽くす

「初めまして俺は慧喜^{えき}…」

そして再び元に戻っていく声

「特技は声真似」

そして今度は京助の声に変わる

「…悠」

京助の声で呼ばれて悠助がピクッと反応する

「俺はお前いないんだ」

悠助の両手がだらんとなった

「きょう…すけ？」

頭では慧喜^{えき}が言っているということとはわかっているのに心では京助から言われた様な気がした悠助がそのまま慧喜を見つめる

「…俺の大事な人たちを俺から取った…」

京助の声から慧喜^{えき}の声が変わった

「どう？ 大好きなお兄さん京助にいないっていわれた気分」

満面の笑みを浮かべて慧喜^{えき}が悠助に近づいた

「嫌だよ？ 俺も嫌なんだ」

そして慧喜^{えき}はしゃがんで悠助と目線をあわせた

「俺は悠助、アンタも嫌いだけど京助も嫌いなんだ」

慧喜^{えき}が焦点のあわない目をした悠助の頬を撫でた

「だから…」

顔を近づけ悠助の唇に慧喜^{えき}が唇をつけた

「二人ともいないんだよ」

しばらく口付けた後 慧喜^{えき}が口の端を上げて微笑んだ

「…慧喜^{えき}さんは外国人なの？」

悠助の突拍子のない質問に慧喜^{えき}が目を丸くした

「外国の人ってちゅーが挨拶なんだよね？」

悠助が慧喜^{えき}を見て笑う

「…違うけど…っていうか…アンタ今の状況わかってる？」

慧喜^{えき}がにっこり微笑んで言った

「慧喜^{えき}さんは物まねが上手い？」

「……なんなんだよ;」

首をかしげながら言った悠助の言葉に慧喜^{えき}が顔を引きつらせる

「あのねえ…俺は！ アンタとアンタの兄さんが邪魔なの」

「？ うん」

慧喜^{えき}が一言一言を区切りながらやたら大きな声で悠助に言う

「だーかーら！ いらないの！ わかる？」

【だーかーら】の三言葉を言いながら慧喜^{えき}が同じ回数同じリズムで

指で悠助の鼻を押した

「でも僕 慧喜^{えき}さん邪魔じゃないよ？」

悠助が首を傾げつつ言うと言と慧喜^{えき}が頭に手を添えて俯いた

「…アンタ…馬鹿」

ボソツとそういうと慧喜^{えき}がいきなり顔を上げた

「俺はアンタが邪魔なんだって！ アンタが俺をどう思っているかわからないけど！ 俺は！ アンタが邪魔でいらなのッ！」

慧喜^{えき}が怒鳴った

「わかる？」

再び笑顔で悠助に聞くと悠助が笑顔で首をかしげた

「……」

慧喜^{えき}が溜息をついて悠助の顔から目を逸らすとこぶしを作ったまま微かに震えている悠助の両手が目に入った

「…なあんだ…ちゃんと怖いんじゃない」

慧喜^{えき}が呟き口の端をあげて笑うと立ち上がった

「怖いときは怖いと思っちゃいけないとか言われたりした？」

悠助の体がピクツと反応した

「大好きなお兄さんに？ それともお母さん？」

慧喜^{えき}の声が聞き覚えのある声に変わっていく

「僕は京助が大好き」

慧喜^{えき}の声が悠助の声に変わった

「でも京助は僕が要らないの」

慧喜^{えき}が悠助の声で悠助の耳元で囁いた

「ちが…！」

慧喜^{えき}を押しのけた反動で悠助が尻餅をついた

「違わないよ？　だってこんなに待っているのに京助こないじゃない？
い？」

クスクスと笑いながら慧喜^{えき}が悠助の声で言う

「来ないのほもう必要ないから」

今度は悠助の声から京助の声に変わっていく

「要らないから来ないんだよ」

「違うもん！　違うもんッ！！」

慧喜^{えき}が京助の声で言った言葉をかき消そうとするかのように悠助が
大声を上げる

「違わない」

今度は緊那羅^{きんなら}の声で慧喜が言う

「いや…だあ…っ」

悠助が耳を押さえて膝を抱えた

「…僕はもう誰にも必要とされていないんだよ」

悠助の声で慧喜^{えき}が囁き悠助の頭を撫でた

「僕…」

悠助がゆっくり顔を上げながら呟いた

「…もう…いらなの？」

焦点の合わない目のまま小さく言った悠助の耳元で慧喜^{えき}京助の声で
囁いた

「そう…いらなの」

悠助の鼻から鼻水が少し垂れてきた

そんなに強くない風が吹くと緊那羅^{きんなら}が足を止めた

「…悠助…？」

緊那羅^{きんなら}が呟くとさっきより強い風が吹き電線が泣き声のように鳴った
「ラムちゃん？」

阿部が数歩戻って緊那羅きんならに声を掛けると緊那羅きんならがいきなり走り出した
「ちょ：おい！！ 緊那羅きんなら！！！」

おそらく全力疾走しているのであろう超特急の緊那羅きんならの後を追いかけて京助も走り出す

「な：なんなのよッ！！」

置いていかれまいと阿部も走りにくいブーツで走り出した

「嫌な：予感がするっちゃ」

呟ささやきながら緊那羅きんならはジャンプして平屋の屋根に乗ると再び走って次はその後ろ隣の二階建ての家の屋根へと飛び移る

いくら運動神経のいい京助でも緊那羅きんならの真似はできないらしく緊那羅きんならの行く方向に続いていそうな道をひた走り緊那羅きんならについて行く

「もーッ！！」

阿部も必死で二人の後を追いかける

「寒中マラソンかい？」

途中雪かきをしていたおっさんに声をかけられたが返事を返す暇がなく片手を上げて対処した

何軒目かの家の屋根に着地して緊那羅きんならが止まり下を見下ろすとそこには小さな足跡ともう一つの足跡が残っていた

「：悠助」

はあと緊那羅きんならが息を吐くとその息は白く残ってそして消えた

緊那羅きんならが屋根から飛び降りてその足跡に近づき辺りを見渡した

「お前；アレは反則；」

追いついてきた京助が緊那羅きんならの肩を叩いて言った

「ごめんだっちゃ；：それより：」

苦笑いで謝った緊那羅きんならが残っていた足跡に再び目を向けた

「：悠助の足跡と：」

緊那羅きんならがしゃがんで小さい方の足跡に手を乗せた

「何よ； アタシん家じゃない；」

息を切らせてやっと阿部がやってきた

「じゃあこの足跡は阿部のか？」

京助が悠助の足跡ではない足跡を見て阿部の足元を見る

「え？ アタシ？」

阿部も京助に釣られたのか自分の足元を見た

「違うっちゃ：阿部さんじゃない：」

明らかに残っていた足跡と阿部の足跡は異なっていた

「っていうか：変じゃない？ この足跡：歩いた形跡ないよ？」

阿部が足跡を見て言うきんならと緊那羅と京助も足跡を見る

「本当だ：ここだけ：」

京助が言う

「お母さんかなあ：でも今日仕事のはずだし：」

阿部が二人を横切って家の戸へと歩いていく

「おい阿部あんま：」

京助が阿部に声を掛けようと顔を上げて止まった

「：京助？」

京助の言葉が途中で止まったのを不思議に思いきんなら緊那羅が京助を見ると京助はどこかを真っ直ぐ見たまま止まっていた

「：……？」

首をかしげながらきんなら緊那羅が京助が見ている方向に体ごと向けた

「：阿部さん：？」

ついさっきまでそこにいた

ついさっき自分たちの横を通った阿部の姿は何処にもなかった

家まで後数歩というところで足跡は消えていた

「阿部！」

京助が戸口に走り戸を開け玄関に入ってみるが家の中に人の気配はなく玄関にも靴はない

「阿部ッ！！おいっ！」

家の中に向かって京助が阿部を呼ぶが返事はない

「：マジかよ：」

京助が呟いた

「…慧喜…」

緊那羅が思い出して言う

「なあに？」

その瞬間 緊那羅の耳元で聞こえた悠助の声に緊那羅が一步後ずさ
って振り返る

「よくわかったね俺だって」

悠助の声から慧喜自身の声に変えながら慧喜がクスクスと笑った

「阿部さんは関係ないっちゃ」

慧喜に横抱きされて気を失っているらしい阿部を見て緊那羅が慧喜
を睨みながら言った

「そうだね関係はない…けど」

「あ」

京助が小さく声を上げた

慧喜が気を失ったままの阿部に口付けてそしてにっこりと笑った

「キス魔…」

ぼそっと京助が呟く

「使えそうだったから」

阿部の声で慧喜が緊那羅に言う

「…悠助はどこだったちゃ」

緊那羅の手にはいつの間にか武器笛が握られていた

「やだな…そんな怖い顔しなくてもいいでしょ？」

慧喜が阿部を地面に寝かせ緊那羅と向き合う

「悠はどこだよッ！」

京助が慧喜に大股で近づきながら言った

「京助！」

緊那羅が京助を呼び止めようと名前を呼ぶ

「うるさいなあ…そこにいるじゃん」

慧喜クイツと顎で差した所に悠助が蹲っていた

「悠！」

電信柱にもたれかかるようにしている悠助の元に京助が駆け寄るの

をみて緊那羅きんならが安堵の息をついた

「おい！ 悠！！悠！ ！栄野悠助君ッ！！」

京助が悠助の名前を呼びながら肩を叩いて体を揺するが悠助は返事をしない

「…悠…？」

顔を覗き込むと赤くなった目がうつろにどこかを見ている

「悠ってばッ！」

京助が悠助の目の前に手をかざし上下に動かすが悠助は返事をしない

「悠助に何したんだっちゃ！」

緊那羅きんならが慧喜えきに向かって怒鳴った

「何も？」

いつの間に取り出したのか三又鉤をブンッと振って慧喜がしれっとした顔で言った

「ただ俺の特技を披露しただけだよ」

慧喜えきがにっこり笑って自分の喉を指差した

「こうやって」

慧喜えきが緊那羅きんならにすばやく近づいて耳元で何かを囁くと緊那羅きんならが真っ赤になった

「な…ッ！」

耳まで赤くなつた緊那羅きんならが腕で顔を隠そうとするのを見て慧喜えきが笑う

「面白いね」

慧喜えきは京助の声で何かを言ったらしくその名残が言葉に出ていた

「…何言われたんだ？」

悠助を背中に背負った京助が緊那羅きんならに聞いた

「…っ…；なんでもないっちゃッ！； 危ないからはなれてッ！；」
シッシッと追い払うようなジェスチャーをしながら緊那羅きんならが言う

「本っ当…純だよね緊那羅きんならは」

ふわっと慧喜えきの頭の布が風に靡いた

「からかいがあるというか…」

緊那羅きんならがまだ赤い顔のまま慧喜えきに目を向けた

「でも：少しは汚れた方強くなれるって知ってる？」

目は笑ったまま笑っていない慧喜えきの口から出たどことなく悲しそうなその言葉

「言うでしょ？ 綺麗なもののほど壊れやすい：って」

そう言いながら慧喜えきが京助に背負われている悠助を見た

「簡単だったよ：すぐに壊れてくれた：ソレだけ綺麗だったんだ」

京助が悠助を見た

「心がね」

意識があるようでないような悠助は京助の背中であだうつろな目をしたままピクリとも動かない

「一言二言言っただけで：壊れたんだから」

三又鈎を立てて慧喜えきが微笑んだ

「悠助：」

緊那羅きんならが京助に背負われた悠助に近づいて悠助の髪を撫で上げる

「目：真っ赤だちゃ：」

少し腫れた悠助のまぶたをそっと撫でて緊那羅きんならが呟いた

「帰ったら冷やさないと駄目だっちゃね：悠助」

何を話しかけても何も返事をしない悠助にそれでも緊那羅きんならは話かけ続ける

「ごめんだっちゃ：ごめん：」

悠助の頭に自分の頭を付けて緊那羅きんならが悠助に謝った

「無駄だよ心はもう：」

慧喜えきがにっこり笑いながら言うとき京助が慧喜えきを睨んだ

「何その目：ムカつくな」

慧喜の目つきが変わった

「俺もお前のことはがっぺんムカつく」

京助が言うとき慧喜えきが京助を睨む

「あまりにもムカつきすぎて方言なまりで言っちゃいますが」
へッと京助が口の端をあげた

「京助：悠助降ろして欲しいっちゃ」

緊那羅きんならが京助に言う

「へ？ あ：ああ」

一瞬にして摩訶不思議服になった緊那羅きんならが京助の背中から悠助を抱き上げる

「無駄だと思うけど？」

慧喜えきが履き捨てるように言った

「いくら宝珠をもらって力がついているとしたってまだまだ完璧な宝珠じゃないんだから」

くすくすと慧喜えきが笑う

「お前少しだーっとれ」

京助が慧喜えきに向かって言った

「…悠：悠ごめんな…」

京助がしゃがんで緊那羅きんならの腕に抱かれている悠助に謝った

「自分の心配したら？」

慧喜えきが三又鉤を持ち直し京助に向ける

「緊那羅きんならには三人いっぺんに守れるような力はまだないと思うし？」

慧喜えきの足元で気を失っている阿部と京助、悠助で三人

その三人を順番に見て慧喜が笑う

「さあどうする？」

「こうします」

慧喜えきの声の後半部分と誰かの声が重なった

「乾闥婆けんたつば！」

阿部を抱えて乾闥婆けんたつばがにっこりと（怖い）笑顔を慧喜えきに向ける

「相変わらず自我が強いようだな慧喜えき」

風が起きて迦楼羅かるらが空から降りてきた

「…迦楼羅かるら：乾闥婆けんたつば…」

慧喜えきの目つきが変わった

「3対1って卑怯だと思っただけど」

三又鉤を構えて慧喜えきが迦楼羅かるらを睨む

「ワシが…」 「僕がお相手します。1対1なら文句はないでしょう」

？」

迦楼羅かるらの言葉を遮さへって乾闥婆けんたつぱが言った

「…乾闥婆けんたつぱ…；　ワシの見せ場…」

迦楼羅かるらが不満そうに言う　と乾闥婆けんたつぱがにっこりと　（怖い）笑顔を迦か楼羅るらに向けた

「迦楼羅かるらは京助達を御願いします」

乾闥婆けんたつぱは阿部を京助に受け渡すと慧喜えきに顔を向けた

「…ご近所にご迷惑かけない程度にな？；」

阿部を受け取りながら京助が乾闥婆けんたつぱに言った

「一応気をつけます」

京助の言葉に笑顔を返すと乾闥婆けんたつぱが足を前に進めた

「…栄野弟…」

迦楼羅かるらが緊那羅きんならに抱かれている悠助を覗き込んだ

「……」

しばらく無言で悠助を見た後　迦楼羅かるらが悠助の手を撫でその手を自分の額に付ける

「…もう沢山だ…」

誰にも聞こえないような小さな声で迦楼羅かるらが呟ささやいた

赤く腫れた目は今だ何を見ているのかわからないままの悠助を抱えたまま緊那羅きんならが小さく歌いだした

阿部を抱えたまま京助も緊那羅きんならに近づき悠助を覗き込む

心なしか緊那羅きんならの周りの空気が暖かく感じられる

ゆっくりと悠助の頭を撫でながら悠助に語りかける様に緊那羅きんならが歌う子守唄にも似た優しい歌

やっぱり何を歌っているのかわからないのだけれど何故か懐かしく何故か癒されるその歌

「ん…」

京助に抱えられていた阿部が小さく体を動かした

「阿部…？」

京助が阿部の名前を呼ぶと阿部がうつすらと目を開けた

「…きょう…すけ？」

京助を見上げて阿部が呟く

「…アタシ…」

頭の中がまだ整理できない阿部がボーっとしたまま何かを思い出そうとしている

「歌…？」

緊那羅きんならの歌が聞こえ阿部が緊那羅きんならを見る

「…！ そうだ！ アタ…！！！」

何か思い出したらしく京助にその思い出したことを言おうとして阿部が真っ赤になった

「な…降ろしてッ！；」

京助に抱えられていることに気付き阿部が怒鳴った

「ヘイヘイ；」

溜息をつきながら京助が阿部を降ろすと阿部が赤くなりながらもスカート裾を直す

「…ありがと…重かったでしょ」

阿部がポソつと言った

「別に？ ってかお前いい匂いするな…香水とか付けてるのか？ やっぱ」

京助が笑いながら言う和阿部が更に赤くなった

「お久しぶりです」

乾闥婆けんたつぱがにっこりと慧喜えきに笑顔を向けた

「こんなことをして…これは貴方の単独判断と…見られるのですが？」

乾闥婆けんたつぱのその言葉に慧喜えきがピクツと反応した

「…貴方達にとっても僕達にとっても【時】までは栄野兄弟という存在を傷つけるということはあってはならないはずなのですが？」

乾闥婆けんたつぱの周りの空気が変わる

「…ああでも俺は知ったこっちゃない…あの方達の興味を惹いてい

る、それが嫌なだけ」

慧喜えきが言う

「だから知らない」

そう言いながら地面を蹴り上げると慧喜えきが三又鉤を乾闥婆けんだつばめがけて振り下ろした

「とんだ我俣ですね」

薄水色の布が宙を舞い電信柱の上に乾闥婆けんだつばが着地した

「あいつ等がいなくなれば俺だけの方達に戻るんだ！」

体勢を立て直した慧喜えきが再び三又鉤を構え乾闥婆けんだつばに向ける

「空中ビックリショー……」

乾闥婆けんだつばと慧喜えきの戦いを見ている京助がボソッと呟いた

「なん…なの…? ;」

京助の後ろでどう考えてもおかしい事続きのことを目にしていた阿部がさらに混乱しつつ呟く

「どうしてあんなに飛べるの! ? どうしてあんなでっかいの持ったまま…」

阿部が【どうして】を繰り返しながら京助を揺する

「落ち着け娘」

迦楼羅かるらが阿部に言う

「巻き込んで悪かったな阿部」

京助が苦笑いで阿部に言った

「…ねえ教えて何が起こってるの? 京助と悠助って…この子やラムちゃんって…」

阿部が真顔で京助を見つめた

「いや、俺もよくわからんのだけど…;」

京助が頭を掻きつつ迦楼羅かるらを横目で見た

「この子とはワシのことか? ; …まあいいだろう; …【時】だ」

迦楼羅かるらが京助と阿部に向かって言った

「【時】…って一時二時とかのあの?」

阿部が首を傾げた

「あゝ…； …とにかくだな栄野兄弟は…；；」

迦楼羅^{かるら}が懸命に言葉を搜している

「…お前説明するのヘタだろ」

京助が突っ込んだ

「なっ…！；」

迦楼羅^{かるら}が凶星だったらしく少し顔を赤らめた

「そーいやりつつも乾闥婆^{けんたっぱ}がフォローしてたもんなあ…」

口の端をあげて京助が【ヘッ】と笑った

「阿吽の呼吸っての？ ナイスコンビネーション？」

京助が笑いながら言う

「…ワシと乾闥婆^{けんたっぱ}がか？」

迦楼羅^{かるら}が京助に聞いた

「他に誰と誰がいるっつーんだよ」

京助が返すと迦楼羅^{かるら}が少し俯いた後どこか悲しげにでもどこか安心した様な笑みを浮かべて乾闥婆^{けんたっぱ}を見て

「…そうか…」

小さく呟いた

「逃げてばっかじゃ駄目だと思っただけど」

三又鈎をクルッと回して慧喜^{えき}が乾闥婆^{けんたっぱ}に言った

「無駄な争いごとは嫌いなんです」

乾闥婆^{けんたっぱ}がにっこりと笑った

「…つまらないんだけど」

慧喜^{えき}が溜息をついて言う

「なら帰ったらどうです？ 今ならまだ…」

「じゃあこーやったら戦いたくなる？」

乾闥婆^{けんたっぱ}の言葉を遮って慧喜^{えき}がゆっくり口を開いた

「沙紗…」

慧喜^{えき}が声を変えて言った言葉に青い大きな目が慧喜^{えき}を見たまま動かなくなる

「あ…」

カタカタと震えながら乾闥婆けんたつばはその場に座り込んだ

「：ど？　懐かしいでしょ」

慧喜えきがにっこりと笑いながら乾闥婆けんたつばを見下ろす

「ずっと聞きたかったんじゃない？」

慧喜えきは笑いながらしゃがむと乾闥婆けんたつばの顎を掴んで上を向かせた

「ねえ？　：【人殺し】」

電線が風で鳴いた

電線が大きく鳴いて大きく振れ雪が舞い上がった

「1対1って言ってなかった？」

片手を押さえて慧喜えきが上に向かって言う

「早ええ：；」

阿部を背中に庇いつつ空を見上げた京助が呟いた

瞬きができたかできなかったかという感じのコンマ何秒かの時間

気付くと暗くなりかけた空に広がっていた黄金の羽根

「慧喜えき：貴様きさま：いつその声を手に入れた？」

ピリピリとした空気が空一面に広がる

腕の中に震えたままの乾闥婆けんたつばを抱えた迦楼羅かるらが慧喜えきを睨むと慧喜えきが

じりっと後ろに下がった

「さすがの迦楼羅かるらも動揺したみたいだね」

慧喜えきが迦楼羅かるらを見上げて言う

「でも懐かしかったでしょう？　【迦楼羅かるら】」

慧喜えきがまた声を変え迦楼羅かるらの名前を呼ぶと迦楼羅かるらの羽根が更に大き

くなり空気が震えた

「京助：」

阿部が京助の服を掴み身を寄せる

「怖いなら家の中にいた方がいいぞ」

京助が阿部に言う和阿部は緊那羅きんならの方を見た

今だ悠助を撫でながら歌い続けている緊那羅きんならを見た後阿部はキュッと唇を結んだ

「怖いけどアタシもここにいます」

京助の服を強く握って阿部が言う

「…何で」

阿部の言葉に振り向いた京助が聞いた

「いいじゃない…いたいのに！」

阿部が怒鳴った

「アタシだって…役に立ちたい」

聞き取れないくらい小さな声で言った後阿部は京助を真っ直ぐ見た

「…変なヤツ」

へッと笑った後京助は空を見上げると南と京助を抱えて飛んだ大きな
さになった迦楼羅が慧喜を睨んでいた

その迦楼羅が片手を空に掲げたとその手を乾闥婆が掴んだ

「…乾闥婆？」

驚いた迦楼羅が乾闥婆を見た

「…大丈夫…夫…です…すいませんでした…」

まだ震えている手で迦楼羅の腕を下に降ろして乾闥婆が笑顔を向ける

「大丈夫…僕は大丈夫ですから…もう…」

明らかに大丈夫ではないような乾闥婆を迦楼羅が黙って見る

「もう力は…」

「ワシの前で強がるなど言っただろうたわけが！」

いきなり迦楼羅に怒鳴られて乾闥婆がギョっとして迦楼羅を見る

「ワシの前で弱音を吐かず誰の前で吐くのだ！ たわけッ！」

「な…」

迦楼羅が続けて怒鳴った

「貴方の前だから強がるって言ったじゃないですか！！ この耳で
聞きませんでした！？」

ソレに対して乾闥婆も怒鳴り返しながら迦楼羅の耳を引っ張った

「痛いではないかたわけッ！！！！； 引っ張るなッ！！ だから強
がるなどいっているだろう！！！！」

またも迦楼羅怒鳴る

「強がります！」

そして乾闥婆けんたっぱも怒鳴る

ギャーギャーと空中で怒鳴り合いを始めた迦楼羅かるらと乾闥婆けんたっぱをポカンとした顔で見上げている京助と阿部と慧喜えき

「…何してんだ?;」

京助が拍子抜けた様に呟いた

「少しは可愛らしく弱音を吐け！ たわけッ！」

「可愛くなくて結構です！ 吐きませんッたら吐きませんッ！！」
ギャーギャーと怒鳴り合いを続ける迦楼羅かるらと乾闥婆けんたっぱ

「…低レベル…」

阿部がボソツと言った

風鈴の音が聞こえた

足元には緑だけが妙に使い込まれたクレヨンが散乱している
そのクレヨンで落書いたのか開かれっぱなしの絵本にピカソもビツクリな絵とも文字とも取れないもの
見覚えがあるその場所

「…ここ…僕の家…？」

悠助はゆっくりと歩き引き戸に手をかけた

「とーさん！ 俺も抱きたい！ だーきーたーいー！」

戸を開けると同時に聞こえてきた床をドタドタと踏み鳴らす音と声

「まだ京助にはむーり！ 首据わってからにしなさい」

続いて聞こえたのは笑い混じりの若い女性の声

「…ハルミ…ママ？」

悠助の頭をよぎったのは微笑みながら自分の頭をなで名前を呼んでくれる母ハルミの姿

「だーくーのー！」

さっきより力のこもった声がする

「じゃあ座って抱くのよ？ いい？ こう…手を添えて…」

呆れた様子の母ハルミの声に悠助はゆっくりと足を進めた
そっと壁に手をつき覗くように顔を半分だけ出す

「悠助頭いい匂い…」

縁側に面している和室から聞こえてくる声

「…僕と同じ名前？」

恐る恐る和室の中を見た悠助が見たもの

赤ちゃんを足の間に抱えるようにして座っている自分と同じくらいの
の少年と長い髪の女性、そして見たことがない男の姿

「悠助」

名前を呼ばれた

「…あれは…僕？」

悠助は無意識で手を男に向かって伸ばす

「ゆうすけ」

届きそうで届かないその手を懸命に伸ばす

不思議と足は動かせない

「ユウスケ」

「っ…お父さんッ」

どうしてか口に出た【お父さん】という言葉
すぐそこにいるのに届かない手

悠助の声に気付いたのか男は顔を上げた

逆光から顔は良く見えないがはっきりと聞こえた言葉

『ごめんな』

一瞬にして辺りが暗くなり誰もいなくなった

「…え…？」

突然のことに悠助はうろたえながら辺りを見渡す
トン…

少し後ろに下がった悠助の背中に何かが当たった

「…玉…？」

そこにあつたのは大きな金色の玉

それに触ろうと悠助が手を伸ばそうとした時いきなりその玉が砕けた

「あ…」

目の前に広がる砕けた玉の欠片

『悠助…』

聞こえた聞き覚えのある声と聞いたことのある歌

「きん…」

「悠助！」

緊那羅きんならの顔がぼやけて見える

「…きん…」

数回瞬きをして目をはっきりとさせた悠助は安心感からか泣きそう
な緊那羅きんならの顔を見た

「悠助…よかったっちゃあ…」

思い切り緊那羅きんならに抱きしめられた悠助の目に京助の背中が映る

「…京助…」

悠助が呼ぶと京助がピクッと反応した

「京助…」

もう一度京助を悠助が呼ぶ

「悠助…」

緊那羅きんならが悠助を抱きしめていた腕を離した

「京助…」

もう一度呼ぶと京助がゆっくり振り向いた

迦楼羅かるらの口元が笑った

「…もう大丈夫そうだな」

迦楼羅かるらの前髪を掴んで何かを言おうとしていた乾闥婆けんたっぱの目が点になる

「いつものお前に戻ったな乾闥婆」

ポンと背中を軽く叩かれ乾闥婆けんたっぱが迦楼羅かるらを見る

「…迦楼羅…」

小さく名前を呼ぶと迦楼羅かるらはフツと笑って乾闥婆けんたっぱを屋根の上に降ろした

「…結局僕は…貴方に助けられてばかりですね」

俯き唇を噛み締めた乾闥婆けんたっぱが慧喜えきに向かい合う

「…もういい？」

慧喜えきが電信柱の上に足を組んで座っていた

「ええ…お待たせしました」

乾闥婆けんたっぱが笑顔で言った

「悠助！ 気がついたんだ!？」

阿部が嬉しそうに言った

「…京助…」

京助と顔をあわせるのが怖いのか悠助は俯いたまま京助の名前を繰り返す

「悠助」

緊那羅きんならが悠助を呼んだ

「大丈夫だっちゃ」

どこことなく疲れたような顔に優しい笑みを浮かべて緊那羅きんならが言う
悠助は顔を上げた

「京助…僕…」

「ごめんな」

言葉を途中で遮られたのと思いもしなかった謝りの言葉に悠助がきよとんとする

「怖かったろ」

暖かくほんのり冬の外独特の香りがする手で両頬を包まれた

「ごめんな…悠」

眉を少し下げた笑顔で京助が再び謝ると悠助の顔が歪んだ

「ひっ…えっ…」

一呼吸目で鼻水が出て二呼吸目で涙が出てきた悠助は三呼吸目で京助に抱きついた

その反動で京助が地面に尻餅をつく

「早めに泣き止めよ？ ケツ冷てえから」

笑いながら京助が悠助の頭を撫でるのを見ていた緊那羅きんならの体が傾いた

「ラムちゃん！？」

阿部きんならが緊那羅の名前を叫ぶと同時にいつもの大きさに戻った迦楼羅かるらが緊那羅を抱きとめた

「力の使いすぎだたわけ！」

青い顔をした緊那羅きんならに迦楼羅かるらが怒鳴った

「まだ宝珠に十分な蓄えがないというのに……」

緊那羅きんならの右腕についている腕輪の宝珠はまだ透明に近い緑色だった

「…よく頑張ったな」

緊那羅きんならの耳元で迦楼羅かるらが囁いた

「娘！ 何か羽織るものはないか？」

迦楼羅が阿部に聞く

「え…あ…ちよっと待って；」

突然指名された阿部が慌てて家に向かおうとする

「ほれよ」

その阿部に京助が自分の上着を放り投げた

「あ…」

栄野家の匂いのする京助の上着を受け取ると少し強く抱きしめた後

阿部はそれを迦楼羅かるらに渡した

「…心を直した…？」

悠助の泣き声で下を見た慧喜えきが信じられないという顔をする

「壊れた心を直した…まさか…」

動揺しまくりの慧喜えきが唇を噛んだ

「慧喜」

乾闥婆けんだつばの声に慧喜えきがハツとして振り向く

「…何？ 【人殺し】」

慧喜えきが再び声を変えて言葉を口にするが乾闥婆けんだつばは笑顔のまま慧喜えきを見る

「だからなんです？」

乾闥婆けんだつばが慧喜えきに近づく

「…っ…」

電信柱から隣の屋根に飛び移った慧喜えきを乾闥婆けんだつばが追うように同じくと飛び移る

「…僕は確かに【人殺し】ですが…僕の名前は【乾闥婆けんだつば】です」

そう強くまるで自分に言い聞かせるように言った後 乾闥婆けんだつばが袖を止めてある布に手をかけた

「沙紗ささはもういないんです」

乾闥婆けんだつばが言った

「沙紗？」

聞いたことのない【沙紗】という名前を京助が呟きながら悠助を撫でる

「……」

迦楼羅かるらが無言のまま乾闥婆を見上げた

「なあ沙紗って…」

京助が迦楼羅かるらに聞くと迦楼羅が首を横に振った

「…過去の人物だ…ワシにとっても乾闥婆けんだつばにとっても忘れえぬ…名前」

小さく迦楼羅かるらが言った

「無駄な争いは避けたいと言いましたが…不服そうなので」

乾闥婆けんだつばの周りをいくつかの様に解いた布が飛ぶ

「軽く遊ぶことにします」

にっこりと笑った後その目が慧喜えきを睨んだ

「…っ…」

慧喜えきプレッシャーからか一步後退した

「言っておきますがもう貴方の特技は通用しませんからね？」

怖い笑顔で乾闥婆けんたつばが言う

「そう：みたいだね」

頭では敵わないとわかっていつつもプライドが許さないのか慧喜えきが強がって言った

「：俺は：」

慧喜が乾闥婆けんたつばから目を逸らす

「俺は：」

慧喜が片腕えきを動かした

「っ：！！ 迦楼羅かるら！！」

「ただお二方を俺の元に戻したいだけだッ！！」

乾闥婆が叫ぶとほぼ同時に慧喜えきが京助と悠助目掛けて三又鉤を投げた

「京助！ 避けて！」

乾闥婆けんたつばの声で気付いた迦楼羅かるらの腕には緊那羅きんならが

尻餅をついたまま悠助を抱いている京助はすばやく動けずに

「むちゃぬかせ：ッ！；」

悠助を庇うように思い切り抱きしめた京助の前に阿部が両手を広げて立った

「ぼっ：阿部！」

「アタシだって：ッ：役に立ちたいッ！」

「娘！」

「阿部さんッ！」

各々の声が混ざって冬の暗くなった空に響く

京助の視界から阿部の白いほんのり赤くなっていた足が消え目に映ったのは赤

そして【どさっ】という音が耳に届いた

沈黙に次ぐ沈黙は独特の話し方で破られた

「：ぶない危ない；」

「タカちゃん重いゝ；」

京助と制多迦せいたかの間に挟まれている状態の悠助が声を上げる

京助の目に映った赤は阿部を抱えて後ろに倒れた制多迦せいたかの宝珠の赤だったらしく

「…え？」

制多迦せいたかに抱えられ状況がわからずきよんとしている阿部の目の前には後もう3センチ程で阿部の体に刺さっていたであろう三又鉤がキラリと光っている

「ひッ！」

ソレを見た阿部が小さく声を上げた

「阿部！ 怪我無いか！？」

後ろから聞こえた京助の声に阿部が振り向いた

「きょう…すけ…」

「…っんの馬鹿ッ！」

無事な阿部の姿を見た京助が怒鳴ると阿部の眉が下がった

「だって…ッ…アタシだって…っ」

グスッと鼻を吸る音が聞こえ顔を上げた阿部はキッと京助を見ると

「…っだ；」

制多迦せいたかを押しつけて悠助ごと京助に抱きついた

「阿部ちゃん痛いゝ；」

またも板ばさみになった悠助が声を上げる

「…色々怖かったんだからッ！」

阿部はそう大声で言うと言を切ったように泣き出した

「…ようすけ泣かしたー」

三又鉤を杖代わりにして立ち上がった制多迦せいたかが京助を指差して責める
「るっさい！；」

ソレに対して京助が怒鳴った

「…制多迦せいたか…様…」

慧喜えきの言葉が震えた

「慧喜えき」

突如背後から名前を呼ばれた慧喜えきがピクッと反応する

「：何してるの？」

カチャリという音がした

「：だんまり？」

段々と近づいてくるその声に慧喜えきが小さく震えだした

「：こ：矜羯羅様：」

振り向いた慧喜えきの顔は嬉しさと怖さが混ざった様に見える

「：乾闥婆」

袖を再び布で止めている乾闥婆けんだっぱに矜羯羅こんがらが声を掛ける

「なんです？」

乾闥婆けんだっぱが淡白に返事した

「悪かったね」

矜羯羅こんがら小さく言うけんだっぱと乾闥婆はフイッと背中を向けて屋根から下りた

「：矜羯羅様：」

慧喜えきが矜羯羅こんがらをまっすぐ見る

「慧喜：」

矜羯羅こんがらの目つきが変わった

「何してたの？」

蛇に睨まれた蛙の様に動けなくなった慧喜えきの体が小刻みに震える

「：それなりの理由でしたことなんだろうけど：」

矜羯羅こんがらの顔に笑みはなく慧喜えきをほぼ睨むと同じようなカンジで見つめる

「：：んがら怒ってるや：」

制多迦せいたかが屋根の上の矜羯羅こんがらを見上げて言った

「きよんがらさん何で怒ってるの？」

阿部と京助の間から抜け出てきた悠助が制多迦せいたかを見上げて聞いた

「：ようすけと悠助をいじめたから？」

制多迦せいたかが悠助の頭を撫でながら言った

「違うよ！ 慧喜えきさんは：僕：」

悠助が慧喜えきを見上げた

タツと走り出した悠助は慧喜と矜羯羅こんがらがいる屋根の家の下でピョンピョンジャンプし始めた

「…うすけ?;」

制多迦せいたかが悠助を呼ぶと悠助が不満たっぷりな表情で振り向いた

「…いくらなんでもそりゃ無理だ悠;」

京助が阿部の背中をさすりながら言うとう悠助が迦楼羅かるらと制多迦せいたかをジツと見た

「…登りたいのか? 栄野弟;」

迦楼羅かるらが聞くと頬を膨らませたまま悠助が頷いた

「…仕方がないな;」

そう言うとう迦楼羅かるらは腕の中の緊那羅きんならに目をやった

「私は…大丈夫…だっちゃ」

よろよろとう迦楼羅かるらの腕から身を起し緊那羅きんならが苦笑いを浮かべた

「…くが行くから」

まだ大丈夫そうではない緊那羅きんならを見て制多迦せいたかが言いながら悠助をひよいと抱き上げた

「…かまってて」

制多迦せいたかがトンと地面を蹴るとそこはもう屋根の上だった

「滑るからなー! 気をつけろよ悠ー!」

下から京助が叫んだ

「きよんがらさんッ!」

名前を呼ばれた矜羯羅こんがらが振り向く

「悠助…大丈夫なの?」

驚きと心配が混ざった顔と口調で矜羯羅こんがらが悠助に聞いた

「うん…あのね…」

頷きと同時に返事をして矜羯羅こんがらの後ろにいる慧喜えきを見た

「…慧喜さん…」

悠助が慧喜えきの名前を言うとう慧喜えきが睨む様に悠助を見た

「…謝らないからな」

吐き捨てるように言い悠助から顔を逸らした

「違（え）うんだよ：僕（えき）も慧喜（えき）さんだから」

悠助が少し大きな声で言った

「僕（えき）も慧喜（えき）さんと同じなんだもん：同じだったんだもん：沙織ちゃんなんかいなくなればいいって思っちゃったんだ：」

悠助が慧喜（えき）を真（ま）っ直（ち）ぐ見（み）ながら話し始めた

「だからね僕（えき）慧喜（えき）さんと同じ：でも邪魔（じゃま）とかいらないとか僕（えき）言（い）われて凄（すご）く悲（かな）しくて：だからそれは言（い）っちゃいけないんだってわかったんだ」

慧喜（えき）がゆっくりと悠助に顔（かお）を向（む）けた

「でね：僕（えき）考（かん）えたんだよ？　ちゃんと：そう言（い）われたらそう言（い）った人も寂（さび）しいと思うからその人も僕（えき）好（こ）きになろうって。だから：」

だんだん言（い）いたいことが上手（うまい）く表（あらわ）現（げん）できなくなってきたのか悠助の声（こゑ）が小さ（こ）くなっていく

「：僕（えき）　慧喜（えき）さん好（こ）きだよ」

笑顔（えがこ）で悠助が言（い）った

「：うすけ：」

制（せい）多（た）迦（か）が目（め）を細（こ）めて微（こ）笑（わら）んだあと欠（か）伸（の）をすすると矜（こん）羯（が）羅（ら）に頭（かぶ）を叩（たた）かれた

「俺（おれ）は：お前（まえ）なんかに：」

慧喜（えき）が小（こ）さく言（い）う

「だからえ：うわっ；」

「悠助（ゆうすけ）！；」

さつき京助（きやうすけ）が言（い）った【滑（な）るから氣（き）をつけろ】という言（い）葉（は）

慧喜（えき）に語（かた）りかけるので忘（わす）れていた悠助（ゆうすけ）が足（あし）を滑（な）らせた

雪（ゆき）下（くだ）ろしの手間（てま）を省（は）くためか昔（むかし）のトタン屋（や）根（ね）は斜（しや）めに取（と）り付（つ）けてあり絶（た）好（こう）調（てう）に滑（な）る

「悠助（ゆうすけ）！」

そう叫（こゝろ）んで悠助（ゆうすけ）を捕（と）まえたのは慧喜（えき）

ソレを見（み）て一同（いどう）が安堵（あんこ）の息（いき）を漏（も）らした

「あ：ありがと慧喜（えき）さん」

宙（そら）ぶらりんのまま悠助（ゆうすけ）が笑顔（えがこ）で慧喜（えき）を見（み）上げお礼（れい）を言（い）った

「…っ…」

自分でもどうして悠助を助けたのわからない慧喜えきが悠助から顔を逸らした

「大丈夫？」

矜羯羅こんがらが横から手を出して悠助を引っ張り上げた

「…あ…うん」

屋根に引き上げられた悠助が慧喜えきを見る

「…慧喜さん」

悠助が慧喜えきを呼んだ

「…何…」

慧喜えきが顔を上げるとふわっと冬の外の匂いがする悠助の髪が慧喜えきの顔に触れた

「あ」

一同が慧喜と悠助を見て声をハモらせた

「…や…ちよ…」

ソレを見て阿部が何故だか赤くなり京助から離れた

「…悠」

京助は口の端をあげながら屋根の上を見ている

「…あのね僕たちはちゅーって好きな人とするんだってハルミママが言ってたんだ。慧喜えきさんは外国の人…？　なら挨拶になっちゃうのかな…でもね僕は今のはね慧喜えきさんが好きだからのちゅーでね」
悠助が慧喜えきの手を取りながら言う

「…プッ」

矜羯羅こんがらと制多迦せいたかが同時に吹き出して後ろを向き肩を震わせて声を殺して笑い出した

「…さすがとか何というか…悠助ですね」

屋根から下りてきた乾闥婆けんたつばが素晴らしいながら迦楼羅かるらの腕の中の緊那羅きんの顔を見る

「…明日には体力も元に戻ってると思います…今日一日は安静にしてください？」

乾闥婆けんたつばが緊那羅きんならの前髪をかきあげて微笑んだ

「僕は体の傷や病気は治せますが…心は治せませんから…頑張りましたね緊那羅きんなら…ゆっくり休んでください」

乾闥婆けんたつばの笑顔を見た緊那羅きんならも笑顔を返した

「…俺アンタを殺そうとしてたんだって…知ってるの？」

慧喜えきが俯いて言うとう悠助が慧喜えきの頬を両手で包んだ

「慧喜えきさんの大事な人達ってきよんがらさんとタカちゃんでしょ？
…ごめんなさい…僕も京助や緊ちゃんやハルミママ…沙織ちゃんに取られて寂しかったから…だからごめんなさい…慧喜えきさんの大事な人とっちゃってごめんなさい…だからもう泣かないで？」

悠助の両手で包まれた慧喜えきの頬は濡れていてそれは大きな二つの目から流れたもので

「あのねあのね僕が泣いたときはね京助とか緊ちゃんとか…ずっと泣き止むまでこうしててくれるんだ…」

悠助が慧喜えきの頭を自分の小さな胸に抱き寄せてそれを撫で始めた

「慧喜えきさんが泣き止むまで僕が撫でるから…」

慧喜えきが頭を抱えられたまま手を動かし悠助の服を掴んだ

「僕は慧喜えきさんが好きだよ」

悠助の服を掴んでいる慧喜えきの手の力が少し強くなった

「…やっぱり…面白いよ…君達は」

矜羯羅こんがらがフツと笑って目溜まっていた笑い泣きの涙を拭った

「…うすけ…慧喜えきはね」

そう言いかけた制多迦せいたかの肩を矜羯羅こんがらが叩く

「…んがら…？」

制多迦せいたかが振り向くと矜羯羅こんがらがゆっくり首を横に振った

「…悠助がいるよ…これからは」

矜羯羅こんがらがそう言って悠助と慧喜えきを見ると制多迦せいたかも頷いて二人を見た

「…キス…か」

阿部がボソツと呟いて屋根の上を見た

「…好きな人…と」

人差し指で自分の唇をなぞりながら阿部は横目で京助を見た

「……やっだもうッ！」

しばらく何かを考えた後阿部が声を上げて雪を蹴り上げた

「…阿部?」

京助に名前を呼ばれてハッとなって我に返った阿部に視線が集中する

「どっか痛いんか？」

「いや！ちが！キスが！じゃなくてあのね!」

阿部が両手を【なんでもないなんでもない】と動かしながら言った

「ああそーいやお前 慧喜えきとキスしたんだって…覚えてるか？」

京助が思い出して笑いながら言った

「そうなんだ? ……はぁッ!??」

阿部が声を上げると京助が吹き出し声もなく笑い出す

「うそ…」

阿部が驚きの表情で京助の胸倉をつかんでガクガクと揺する

「嘘!! マジで!? 本当に!」

揺すられて頷いてるのかただガクガクしてるのかわからない京助は阿部の手を掴んで離そうとするが阿部のこの細い手には不釣り合いな馬鹿力で揺すられ合えなく抵抗を諦めてされるがままになっている

「…決めた」

慧喜えきが悠助の服を更に強く握り顔を上げた

「慧喜さん？」

悠助がきょとんとして慧喜を見る

「俺悠助の子供産む」

慧喜えきがキッパリと言い切るとそれを聞いた一同が固まった

「…子供？」

悠助が首をかしげると慧喜えきが微笑みながら頷いた

「僕の手？」

悠助が反対側に首をかしげながら慧喜えきに聞く

「そう。俺と悠助の子供、俺が産む」

慧喜えきが悠助の手を取って両手で包んだ

「いないか？」

慧喜えきが悠助に聞くと悠助は少し考えたあと笑顔で慧喜えきの手を握り返した

「いるゝ僕 慧喜えきさんと僕の子供欲しい」

「待て待て待て待て；」

悠助の言葉に一同がそろって【待て待て】と突っ込んだ

「悠助：俺嬉しい」

周りの声が聞こえていないらしい慧喜えきがほんのり頬を染めて笑った

「だから：待ちなよ；」

矜羯羅こんがらが慧喜えきと悠助の手を縦割りチョップで離れた

「矜羯羅様！ 何：」

慧喜えきが矜羯羅こんがらに向かって怒鳴った

「順番飛ばし過ぎだよ慧喜：」

矜羯羅が溜息をつく

「第一悠助はまだこ：」

「てか生物学上無理じゃない！ 男同士なんだからッ！：！！」

矜羯羅の言葉を阿部の声がかき消した

「：男同士？」

慧喜えきと悠助が同時に呟いた

「男同士だと子供産めないの？」

悠助が阿部に向かって聞く

「誰と誰のこと言ってるの？」

慧喜えきも阿部に向かって聞く

「アンタと悠助のことよッ！ ってか何でアタシがこんなこと言ってるのよッ馬鹿ッ！」

阿部が京助の胸倉をつかんだまま怒鳴る

「：知るか； ってか離せ；」

京助がボソッと言った

「娘。慧喜は女だぞ？」

迦楼羅かるらがさりとと言う

「だからなんなのよ！ 第一…は？」

阿部が素っ頓狂な声を出して迦楼羅かるらを見た

「慧喜えきは女だと言っている」

再度 迦楼羅かるらが言う和阿部が慧喜えきを見た

「…マジかよ；」

京助も慧喜えきを見上げる

「失礼なヤツだねアンタ」

いつの間にか阿部と京助の前に立っていた慧喜えきが阿部に言った

「…な…ら女らしく【俺】とか使わないでよ！！ ややこしいじゃない！！！」

阿部が怒鳴ると慧喜えきが手を伸ばし阿部の胸を揉んだ

「なあッ！？；」

「…ペチャパイ」

慧喜えきがフンと鼻で笑い阿部の手を自分の胸に持っていく

「俺が自分のことなんて言おうが勝手だろ？ こうやってアンタより胸があるんだから立派な女なんだけど？ ペチャパイ」

につこりと慧喜えきが笑う

「阿部ちゃんペチャパイなの？」

制多迦せいたかに抱きかかえられて屋根から下りてきた悠助が阿部に聞く

「ペチャパイとはなんですか？」

乾闥婆けんだつばが京助に聞いた

「あ…乳が小さくて膨らみが足りないこ…」

「説明すんなッ！」

京助の頭を阿部が思い切り叩く

「ほ…」

迦楼羅かるらが感心した様に頷き阿部の胸を見ると乾闥婆けんだつばが迦楼羅かるらの前髪を思い切り引っ張った

「だッ！；」

迦楼羅^{かるら}が声を上げる

「じゃあ慧喜^{えき}さん僕の子供産めるの？」

悠助が慧喜^{えき}を見上げて嬉しそうに聞く

「うん産める」

慧喜^{えき}が悠助に抱きついた

「だから待ってんよ」

京助が悠助の服を引っ張った

「何さまだ何かあるわけ？」

慧喜^{えき}が京助を睨む

「ってかさっきまで殺すだの邪魔だの言ってるいいのかコレで」

京助が言う^{えき}と慧喜と悠助が顔を見合わせる

「…悠助怒ってる？ 俺のこと…」

慧喜^{えき}が聞くと悠助は首を横に振った後笑顔を返した

「怒ってないよ？ 僕 慧喜^{えき}さん好きだよ？」

それを聞いた慧喜^{えき}がまた悠助に抱きつく

「俺も悠助好きッ！ だから子供産むッ！」

「だからソレはちょっと待って；」

悠助に抱きついて嬉しそうに子作り宣言を繰り返す慧喜^{えき}に京助が突っ込んだ

「京助！ お弁当忘れてるっちゃッ！」

ドタドタという廊下を力いっぱい走る音は年中平日変わらないの栄野家の朝

「きよ…何してるんだっちゃん？ ちこ…」

玄関先で止まっている京助の背中を発見した緊那羅^{きんなら}が弁当箱を持って話しかけようとして京助と同じように止まる

「俺も行く」

「慧喜^{えき}さんは駄目だよ； 僕より大きいもん；」

「俺も行くッ！」

慧喜が少し大きい服を着て悠助の手を掴んで悠助と何やら言い争っている

「…何してんだ；」

京助が声を掛けると慧喜えきと悠助が京助を見た

「あ、義兄様」

慧喜に【義兄様】と呼ばれ京助が再び止まる

「あ？； 何だソレ；」

京助が慧喜えきに聞く

「ヒマ子義姉様が京助のことはそう呼べって言ったから」

慧喜がさらっと笑顔で言った

「旦那の兄弟は様を付けて呼ばないと駄目なんですよ？で、ヒマ子義姉様は京助…義兄様の奥さんだから義姉様」

「はあッ！？；」

慧喜えきの説明に京助が疑問系の声を出した

「慧喜さん僕もう行かなくちゃ…遅刻しちゃう；」

慧喜えきに掴まれている腕を軽く振って悠助が訴える

「…どうしても駄目なら行ってきますの…」

慧喜えきが少し顔を赤らめて目を閉じる

「…緊那羅回れ右」

京助がそう言って後ろを向くと緊那羅きんならも同じく後ろを向いた

「…ラブラブだっちゃね；」

緊那羅きんならが呆れたように笑う

「いってきますッ！」

ガラガラという玄関の引き戸を開ける音がして悠助が学校へ向かって家を出た

「早く帰ってきてねッ！」

慧喜えきが悠助に向かって叫ぶ

悠助と離れるから【空】に帰りたくないと思いをこね通して慧喜えきが栄野家に居座るようになって三日目

毎朝同じような悠助と慧喜えきのやり取りはほぼ日常茶飯事となってきた

ていた

「：じゃまあ俺も行ってくるわ；」

京助が靴のつま先をトントンと床に当てて履くと緊那羅きんならが弁当箱を手渡す

「滑って転ばないように気をつけてっちゃ」

そのやり取りを慧喜えきがじっと見ている

「：何だっっちゃ慧喜？」

慧喜えきの視線に気付いた緊那羅きんならが慧喜えきを見ると京助もつられたのか慧喜えきを見た

「アンタ等は何ってきますのちゅーとかしないの？」

「はッ！？；」

京助は弁当箱を床に落とし緊那羅きんならは目を大きくして同時に言った

「何だか本当夫婦みたいだし？ 義兄様二股？」

慧喜えきが二人を見ながら言う

「お前なあ：；」

落とした弁当箱を拾いながら京助が呆れたように溜息をついた

「じゃあ緊那羅きんならも義姉様？」

慧喜えきが緊那羅きんならを見る

「：私は男だっっちゃ；」

緊那羅きんならが言うと体を起した京助が緊那羅きんならを見た

「：いやお前もつと他に突っ込むべき箇所があるだろう；」

鞆に弁当箱を入れふと顔を上げた京助が止まった

「京助？」 「義兄様？」

緊那羅きんならと慧喜えきがほぼ同時に京助に声を掛け京助が見ている方向にゆっくりと体を向けた

「：あ：義姉様；」 「ヒマ子さ：ん；」

そこにいたのは真冬に咲く可憐な（？）向日葵ヒマ子さん

「：誰と誰が夫婦なのですか？」

嫉妬の炎がいい具合に暖房となって玄関の温度が上昇していく（様な気がする）

「い…いつてきますッ!;」

逃げるように京助が玄関を出る

「いってらっしゃいだっちゃッ!;」

後ろを振り返らずに戸を閉めた京助にさんなら緊那羅が声を掛けた

>i21592—2575<

【第六回・参】大菓の改心（前書き）

バレンタインが近づいて 悩める乙女がここにひとり

【第六回・参】大菓の改心

「…どこ見てんのさ？」

休み時間阿部の視線を胸に受けた本間が阿部に聞く

「…やっぱり牛乳とか飲むとそんなになるの？」

本間の胸を羨ましそうに見た後自分の胸を見て阿部が溜息をつく

「揉むと大きくなるって聞いたことあるけど」

足を組んでイカソーメンを一本口に咥え本間が言った

「はやく彼氏作れば？」

横から手を伸ばしてきたミヨコが笑いながら言う

「彼氏…かあ」

意味もなく伸びをして机に突っ伏した阿部がチラッと斜め後ろを見る

「無理無理こう見えてこの子結構一途だから」

本間が阿部の頭を撫でながらミヨコに言った

「まあ…なんたってかれこれ7年越しだしねえ？」

ミヨコも本間と同様阿部の頭を撫でる

「そろそろいんでないのかい？ 郁恵ちゃん」

目線を斜め後ろに向けたままの阿部に本間が耳元で囁いた

「时期的にも…告るのに丁度いいイベントあるじゃん？」

そう言っミヨコが壁に貼られたカレンダーに目をやった

「…も…勝手に進めないでよッ！」

足をバタバタさせて阿部が完全に突っ伏した

「…できるならとっくにしてるもん…」

阿部がボソッと呟いた

「しょうがないなあ…」

本間が席を立ち阿部の斜め後ろへと歩いていく

「…香奈？…」

席を立つ【ガタン】という音で顔を上げた阿部が本間の姿を追って

斜め後ろを見た

「栄野」

本間が京助に声を掛けるのを見た阿部が声も無く驚く

「あ？」

浜本の席でU N Oをしていた京助が返事をする本間がなにやら話し始めた

「：そうありがと」

しばらくして本間が戻ってくると阿部がすぐさま身を乗り出して本間に顔を近づけた

「なに聞いてきたのッ！！？；」

小声で本間に聞く

「暑寒岳しよかんだって」

本間が意味ありげな笑顔で言った

「：は？」

意味がわからない阿部とミヨコが疑問系の声を出す

「エベレスト、富士山、大雪山、桜島、十勝平野の中でどれがいいって聞いたら栄野は暑寒岳が一番だそうです」

イカソーメンを数本手に掴んでその内の一本を阿部に口に入れながら本間が言った

「：何ソレ：」

ミヨコが本間に聞くと

「胸の大きさ」

本間がさらっと答えた

「香奈がエベレストだとするとー：」

「：アタシはどれなわけ？」

阿部が真剣に聞く

「：公園の砂山くらい？」

ミヨコが阿部の胸を見ながら答える

「：十勝平野はあんまりでしょうからね」

そう付け足したミヨコをジトツと横目で見た後阿部はイカソーメンをまとめて口に入れた

「目指せ暑寒岳だあね」

本間が足を組みなおして阿部に言った

「ハルにも聞いてこよーっと」

イカソーメンを数本持ってミヨコがマイダーリンの元へ向かう

「はあ…」

阿部が溜息をつくときチャイムが鳴った

「きょううすけえー!!!」

校門を出たところで聞こえた悠助の声

「悠? と…慧喜?」

ぼふっと音をさせて悠助が京助に飛びつく

「義兄様ずるいッ!!!」

そんな悠助を慧喜が京助から引っぺがした

「お? 新顔だね誰々?」

南が慧喜を見て京助に聞く

「慧喜さんだよ」

悠助が慧喜に抱きしめられながら答えた

「へえ…」

坂田が慧喜をまじまじ見る

「…じろじろ見るな」

むすっとして慧喜が坂田に言う

「あれか? 緊那羅の仲間?」

中島が京助に聞いた

「んにゃ何だかコイツは制多迦とか矜羯羅側らしいけどようわからん」

「ほーうほうほう」

京助が言うとき馬鹿が揃って数回頷いた

「…で…? さっきコイツお前のこと【義兄様】って呼ばなかったか?」

思い出したように坂田が言う

「呼んだよ？　だって京助は悠助の兄弟だから。旦那の兄弟は様つけるんだってヒマ子義姉様言ってたし？　ねー？　悠助ッ」

悠助を思い切り抱きしめてすりすりしながら慧喜えきが言う

「…旦那…って…」

南が無言で悠助を指差しながら京助を見ると京助が頷いた

「慧喜えきさんはねー僕の子供産んでくれるんだってー」

下校時間真っ最中だった校門前の視線が悠助の一言で一斉に注がれた

「あああ；痛い痛い！　視線が痛い！！！！」

坂田が声を上げて後ろを向いた

「産むって…あの…女の子なわけ？；」

南が慧喜えきの全身を見ると慧喜が悠助を離し腰に手を当てて身を起した

「失礼なヤツばかりだな」

手を当てた腰にはきちんとかくびれがありそのくびれの上には二つの胸の膨らみがあった

「何気にスタイルよくね？」

中島がボソツと呟くと坂田と南が頷く

「大雪山ってとこですかね」

「うおおおお！？；」

ひょっこりと現れた本間に3馬鹿と京助が驚く

「ほ…本間；」

胸を押さえて落ち着きを取り戻そうとしている中島が言った

「あの子はいないの？　金髪の変な話し方の細い子」

あくまでマイペースな本間がしれっとして聞く

「緊ちゃんきんちゃんは寒いから家にいるよ？」

悠助が言う

「そうならいいの」

につっこり笑って本間が回れ右をしてスタスタと歩いていった

「…何なんだ？；」

その後姿を見て呟いた京助に3馬鹿がが首をかしげた

「キンナラムちゃんに用事あったみたいだね」

南が言う

「…アイツ俺より胸あった」

慧喜^{えき}がボソツと言う

「ムカツク」

慧喜^{えき}が去っていく本間を睨んだ

「…悠助は大きい胸の方好き？ 俺嫌い？」

慧喜^{えき}が聞くと悠助が首をかしげて少し考えた後

「僕は慧喜^{えき}さん好きだよ？」

そう言つて満面の笑みを慧喜^{えき}に向けた

「悠助…ッ」

慧喜^{えき}が思い切り悠助を抱きしめる

「…典型的馬鹿ツプル」

坂田が言つた

「毎朝行つてきますのチューしてたりしてな」

中島が冗談半分で笑つて言つた

「してる」

京助が頷いて言うのと3馬鹿が揃つて慧喜^{えき}と悠助を見た

「…小1なのに妻有かア…やるな悠助！ その兄は二股かけてるつてのに！ …向日葵とオスに」

坂田が言うのと京助が坂田にパンチを入れた

「あ、やっぱり義兄様二股かけてたんだ？ じゃあ緊那羅^{きんなら}も義姉様？」

慧喜が納得したように言う

「かけてねえしかけた覚えもねえッ！； 勝手に人の経歴汚すなッ！！；」

京助が怒鳴つた

「で？ なしたんよ」

滅多に車の通らない車道に横一列になつて歩きながら京助が慧喜^{えき}と悠助に聞く

「お使いゝスーパー行つてほうれん草とレノアとゝ……」

悠助は頼まれたものを二つほど上げその後ポケットをゴソゴソして紙を取り出した

「モヤシとシーチキンとレタスと特売品の豚肉ゝ」

ピンクの色上質紙に印刷されている広告を見ながら悠助が言う

「重いから中学校寄つて京助と行きなさいってハルミママが言ったの」

ポケットに広告をしまいながら悠助が笑顔で言った

「さいですかー……」

京助が遠い目をする

「ねえねえ慧喜とかいったっけ？」

南が悠助にべつたりの慧喜に話し掛けた

「そうだけど何」

慧喜がそつけない返事をする

「あのさ俺服作るの好きなんだけど今度着てみてくれない？」

南が目を輝かせて慧喜に言った

「何で俺が……」

慧喜がブスツとして答える

「俺が着てもいいんだけどさ……さすがに着て歩くとヤバイから；

俺一応男だし」

南が苦笑いで言った

「服って着てこそなんぼだしさ……な？ 頼むって」

両手を合わせて慧喜に南が頭を下げた

「慧喜スタイルいいしさー似合うと思うんだよな……なー？ 悠？」

南が悠助に同意を求めた

「うん！」

おそらく意味はわかっていないのだろうけど悠助が元氣良く返事をした

「悠助が言うなら……いいよ」

悠助が一言返事しただけで慧喜があっさりOKする

「やっり！」

南が嬉しそうに指を鳴らした

「ってかお前等どこまでついてくるんよ…； 中島と南逆方向じゃん；」

どこまでも同じペースでついてくる3馬鹿に京助が言った

「いーじゃん暇だし」

南が言った

「そー…ってか今時間ならたぶんミカ姉買い物に来てると思うから」
中島が道路の反対側に見えるスーパーを指差して言う

「あれ？」

坂田が声を上げた

「あれって…阿部ちゃんと本間ちゃんとミヨコじゃん」
トラックが一瞬視界を遮った

「あーべーちゃー…ん！！」

悠助が阿部を大声で呼ぶと慧喜がむすつとふてくされた

「…栄野達だ」

本間が軽く手を振ると阿部も振り返った

信号が青に変わると京助達が小走りで道路を渡って来た

「何してんの？」

南が聞く

「チヨコ買いにね」

ミヨコがスーパーの自動ドアをあけながら言う

「チヨコ？ …ああ！ バレンタインか！！」

坂田が入ってすぐ目の前に設置されているピンクと金で飾られた特

設商品棚を見て言った

「…バレ…って何？」

慧喜えきがきよんとんとして呟いた

「…好きな男の子にチヨコあげる日」

阿部が慧喜えきの横を通りながら言った

「好きな…？」

慧喜^{えき}が悠助を見ると悠助が笑顔を返した

「：ちよつとペチャパイ！」

慧喜^{えき}が阿部に向かつてそう大きな声で言うとか客の視線が阿部に集まり当の阿部は顔を赤くしてキツと慧喜^{えき}を睨んだ
そして大股で慧喜^{えき}に歩み寄ってきた

「なによッ！」

怒りを最小に押さえつつ阿部が慧喜^{えき}に言う

「：詳しく教えて」

慧喜^{えき}が言った

「バレンタインってのはね好きな男の子にこれ：こんな風にハート型とかしたチョコをあげて気持ちを伝えるの」

ふてくされてる阿部の代わりにミヨコが慧喜^{えき}に説明する

「買っちゃう人も多いけどやっぱり手作りだよねえ」

阿部の肩に寄りかかりながら本間がしんみりと言った

「手作り：」

慧喜^{えき}がラッピングされて並んでいるチョコを眺める

「：女子盛り上がってんナア；」

買い物カゴにモヤシを放り入れながら京助が呟いた

「年に一度のドキドキイベントだしね」

南がハッハと笑う

「俺今年ももらえるんだろうか：」

中島がボソツと言うと三人が止まった

「：俺母さんからくらいかなア：」

坂田がフツと鼻で笑う

「同じく」

京助が言う

「なんなら俺がやろうか？ アサクラで」

南が開き直ったように笑顔で言った

「遠慮します」

中島、京助、坂田が同時に顔の前で手を振って拒否の姿勢を示した

時計の針が午後十時を示した

「さって…風呂にでも入るかな」

くあと大きな欠伸をして京助が首をポキポキ鳴らす

「アンタで最後だからお風呂の電源落としてきてね？」

母ハルミがテレビを見ながら言った

「ヘイヘイ…つと慧喜？」

タオル片手に茶の間から出ようとした京助が戸をあけたところにたつていた慧喜に多少驚く

「悠は？」

京助が慧喜を茶の間に入れた

「悠助は寝たよ…ハルミママ様」

京助の質問に答えたあと慧喜が母ハルミに話しかけた

「なあに？」

につこりと笑顔で返事をした母ハルミの隣に慧喜が座った

「あのね…チョコ…ってどうやって作るの？」

慧喜が母ハルミを真っ直ぐ見て聞いた

「チョコ？ …ああ！！ もうすぐバレンタインだものね」

母ハルミが笑った

「そうねえ…久々に作ってみましようか」

そう言った母ハルミの顔は青い春の頃に戻ったようにイキイキとしていた

「悠にか？」

京助が戸口に立ったまま言う

「うん」

慧喜がキツパリと即答した

「あらあら」

慧喜の即答に何故か母ハルミが嬉しそうに笑った

「お前本当に悠好きなんだな」

へツと口の端をあげて言った京助に慧喜えきが大きく頷いた

「好きだよ？　大好き…だって悠助は…」

「うっわ；　びっくりしたっちゃ；」

茶の間に入ろうと戸を開けたところに京助がいて驚いた緊那羅きんならの言葉で慧喜えきの言葉が途切れた

「わりい；」

京助が緊那羅きんならに謝りながら廊下に出る

「電源忘れないでよー？」

母ハルミが少し大きな声で京助に向かって言った

「何の話してるんだっちゃ？」

戸を閉めて緊那羅きんならが慧喜えきの隣に腰を下ろした

「バレ何たらっていうチョコをあげる話」

慧喜えきが答える

「本当は何だか違う日らしいんだけど…日本じゃ好きな人にチョコをあげる日になってるのよね」2月14日って」

母ハルミが笑った

「慧喜えきは悠助に？」

緊那羅きんならが言くと慧喜えきが頷く

「俺悠助好きだもん」

慧喜えきが迷いもなくはっきりと言い切った

「…悠助…俺を好きだって言ってくれた…」

俯うつむいて慧喜えきが小さく言った

「今まで誰からも言われた事がなかったんだ…好きなんて…好きだって言われて…俺…」

慧喜えきが照れくさそうにでも嬉しそうに何かを思い出して微笑む

「嬉しかったんだ…好きって言われてこんなに嬉しいものなんだって…初めて悠助が俺を見つけてくれた様な気がして…だから俺は悠助が好き…大好き」

緊那羅と母ハルミがそう嬉しそうな話す慧喜を笑みを浮かべながら見ていた

「矜羯羅様と制多迦様は俺を拾ってくれたから好きだけど…悠助はもっと好き」

母ハルミが組んだ手に顎を乗せて慧喜の話を聞いている

「俺…悠助が笑って俺の名前を呼んでくれるのが凄く嬉しくて悠助が俺のそばにいてくれるのも嬉しくて」

「ありがとう」

母ハルミが微笑みながら言った

「悠ちゃん…悠助のことそんなに好きになってくれてありがとう。」

母として凄く嬉しいわ」

本当に嬉しそうな微笑で母ハルミが言うと慧喜が顔を赤くした

「孫が楽しみだわ」

母ハルミが冗談っぽく言って笑うと緊那羅も笑った

「期待してて」

慧喜が笑って言った

「ヒマ子さんは京助にチョコあげるんだっちゃ？」

緊那羅がヒマ子に水を与えながら聞いた

「チョコ？」

与えられた水を吸収しながら真冬に咲く向日葵は首をかしげた

「何でも好きな人にチョコをあげて好きって言う日があるらしいんだっちゃ」

最後の一滴を鉢の中に入れた緊那羅がジョウロを置いた

「昨日ハルミママさんと慧喜が話してたんだっちゃ」

ザカザカと肥料を鉢の中に入れて緊那羅が言う

「…そう…そんな日があるんですの…」

しばらく黙ったあとヒマ子が何かを思いついてにやりと笑った

「緊那羅様はいかが致しますの？」

「私？」

ヒマ子に突然聞かれて緊那羅がきよとしたままヒマ子を見上げた
「京様にはあげないのですか？」

何かを確認するかのよう^{きんなら}にヒマ子が緊那羅に聞く

「私…は…」

手に肥料の袋を持ったまま緊那羅が考える

「…あげた方…いいのかな…」

ぼそつと緊那羅^{きんなら}が呟く

「京助が喜ぶならあげたいな」

「やはり…!!」

ヒマ子の背後に突如嫉妬の炎が燃え上がった（様に思える）

「キイイイッ!!!! やはりお二人はッ!!!」

ヒマ子がどこから取り出したのか白いハンカチを噛んで悔しがる

「…チヨコ…」

鉢から肥料を溢れさせながら緊那羅^{きんなら}が小さく言った

「…やっぱり手作りがいいのかなあ…でもなあ…う…」

スーパーのバレンタインコーナーで阿部はかれこれ数十分行ったり来たりをしている

「どうしよう…」

肩に掛けた鞆を握り締めて阿部が悩みに悩んでいる

「京助だけ…って…う…ん…」

「義兄様がどうかしたのか？」

「…!!…?… ツいやあああああああッ…!!…!!…」

阿部の叫び声がスーパー中に響き渡った

「あ…阿部さん…?…」

鞆振り上げた阿部におそるおそる緊那羅^{きんなら}が声を掛けた

「ラ…ラムちゃんと…慧喜^{えき}…?…」

鞆を振り上げたまま阿部が言う

「あら阿部ちゃん? どうしたの大きな声出して」

買い物籠を持った母ハルミが後から来て阿部に声を掛けた

「あ…おばさん…;」

まだ鞆を振り上げたままの阿部が母ハルミに向かっていった

「…鞆おろせば？」

阿部が鞆を振り上げたのを避けてよろけて緊那羅きんならに支えられていた
慧喜えきがぶすつとして言う

「慧喜えき何かしたんだっちゃ？」

緊那羅きんならが慧喜えきに聞く

「何もしてないよ！　ただコイツがあに…」

「なーーーーーッ!!!」

慧喜えきが言いかけた言葉を阿部が大声を出してかき消した

「京助？」

「なんでもない!!!；　なんでもないのッ!!!；」

両手を前に出してブンブンと振って阿部が言う

「ラムちゃん達こそ何買いに来たのッ？」

そして話題を変えようと阿部が聞いた

「チョコ」

慧喜えきが答えた

「バレンタインのね。阿部ちゃんもそうなんじゃないの？　ずいぶん悩んでたみたいだから本命かしら？」

母ハルミがクスクス笑いながら言う

「ちっ…ちが…」

顔を赤くして阿部が口ごもる

「とっ…父さんに！　あげようかなあ…なんて…」

ハハッと笑いながら阿部が言った

「俺は悠助にあげる」

慧喜えきが言う和阿部が緊那羅きんならを見た

「…ラムちゃんは？」

いきなり話題を振られて自分を指差したまま緊那羅きんならが阿部を見ると
阿部が頷いた

「私は…」

阿部が息を吞んで答えを待っている

「…京助」

阿部が止まった

「…と悠助とハルミママさんと迦楼羅かるらと乾闥婆けんだつばと…あと…」

次々に緊那羅きんならの口からでてくる名前に阿部がぽかんとした

「ちょ…ちょっと待って待ってッ!!!」

阿部が待ったをかけた

「何だっちゃ？」

指を折りながら名前を言っていた緊那羅きんならが阿部を見る

「本命はッ!!! 本命! ほ・ん・め・いッ!!!」

阿部が少し怒ったように言った

「本命って…何だっちゃ? バレンタインって好きな人にチョコあげるんだってハルミママさんがいつてたっちゃ…だから…あ! 阿

部さんにも…」

緊那羅きんならが笑顔で言う和阿部がはあと溜息をついた

「あのねえ…; アタシが聞きたいのは本命は誰なのかってこと!

本命ってのは一番好きな人のことでッ!!!」

阿部が怒ったように少し大きな声で説明する

「じゃあ俺は悠助」

慧喜えきがまたも言う

「アンタには聞いてないッ! 誰!??」

慧喜えきに怒鳴ったあと緊那羅きんならの方を向いた阿部が緊那羅きんならにじり寄る

「え…ええと…; そう言う阿部さんは誰が本命なんだっちゃ?」

緊那羅きんならに聞き返されて阿部が止まり一気に顔が赤くなった

「あ…アタシは…ッ!!! アタシはいいのッ!!! てかいまアタシ

が貴方に聞いてるんでしょッ!!!」

赤い顔のまま阿部が怒鳴る

「まあまあ…若いわねえ」

隣で製菓用のチョコをカゴに入れながら母ハルミが笑うと周りにいたおばさんや店員もクスクス笑っているのに阿部が気付き更に顔を赤くした

「あ、ラムちゃん!!」

自動ドアから荷物を持って母ハルミ、えき慧喜と共にスーパーを出ようとしていた緊那羅きんならを阿部が呼び止めた

「ちょっと…話いいかな?」

緊那羅きんならがきよんととして母ハルミを振り返ると母ハルミは笑顔で頷き自動ドアが閉まった

「なんだっちゃ?」

買い物袋を持ち替えて緊那羅きんならが阿部に聞く

「あのね…ラムちゃんと京助…って」

もごもごと小さな声で阿部が言う

「私と京助?」

緊那羅きんならが聞き返す

「って…イトコなんだ…よね? それだけ?」

ちらつと緊那羅きんならを見ながら阿部が聞く

「それだけって…何がだっちゃ?」

そして再度 緊那羅きんならが聞き返した

「恋人とか…許婚とか…ないよね?」

俯いたまま阿部が小さく言うきんならと緊那羅は少し考えて口を開いた

「私は京助を守りたいだけだっちゃ」

顔を上げた阿部に緊那羅きんならが笑顔で言った

「…それは好きだから?」

阿部が緊那羅きんならに聞く

「そう…なるのかな」

緊那羅きんならが考えながらいうと阿部が溜息をついた

「そっか…じゃあ負けない。アタシだって京助守れるってわかったもん」

口元に笑みを浮かべて阿部が緊那羅きんならに向かって言った

「え…?」

意味が深そうな笑顔で言われて緊那羅きんならが少し逃げ腰になる

「絶対負けないんだから」

そう強く笑顔で言う和阿部はスーパーから出て行った

「……?;」

緊那羅きんならがぼかんと買い物袋を下げたまま阿部の背中を目で追った

「諸君!! グッモー!!」

眠そうに白い息を吐きながら大あくびをした坂田の背中を南が叩いた
「元氣だねえ…」

坂田の隣でこれまたあくびをした中島が言う

「お! めっずらしー! 京助がいらっさる!!」

連続であくびをしている京助を南が見つけて言った

「あくびうつすなよ…自分だけで余ってるんだからさあ…」

京助がそう言ってまたあくびをした

「やたら眠そうだなオイ;」

南が笑いながら京助の顔を覗き込んだ

「あゝ…朝っぱらから泡だて器の音で起された」

頭をかきながら京助がまたあくびをする

「泡だて器?」

中島が聞く

「そゝ…ウチの女性陣がなんだか張り切っててさあ…;」

はあと京助が溜息をつくと坂田がピクッと反応した

「女性陣ってことはハルミさんも入ってるんだよな!？」

そして中島を押しつけ京助に聞く

「母さんどころか緊那羅きんならまではいっちよるわ;」

京助が答えた

「うーわー…」

3馬鹿がそろって言いながら笑った

「京助もつてもて?」

中島が言う和阿助がどつく

「ハルミさんの手作りかア…京助…いや京助君!! 仲良くしよう
じゃないか!」

坂田が京助の手を握って言った

「ひっどーいみつるん！ 私からのチョコは拒否したくせにいー！」
南が小指を立てて言う

「キシヨいわ！」

体育ジャージの入った袋で坂田が南を殴る

「いたーいん！！」

南が笑いながら言った

「なんにせよ…ある意味闘いの日だよなア…男にしても女にしても
バレンタインって…俺…甘い物好きじゃないくせに欲しかったり」

中島が言う

「わかるわかる」

残りのメンバーが揃って頷いた

「なんでなんだろうねえ」

南が鼻から息を出した

「バレンタインにもらうチョコって何の変哲のないチョコにしろも
らえるかももらえないかで結構アレじゃん？」

中島が言う

「まあ…なんでだろうなあ…うん」

【結構アレ】で一応通じたらしい京助が頷く

「そこら辺なんていうか不思議だよなア？」

坂田が言うところって頷く

「イツア、ヴァレンタインマジック？ シャランラ」

南がどこかで聞いたことのある呪文のようなものを唱えつつ一回転
する

「コケるぞ」

坂田が言うとき中島がこけた

「…身代わり地蔵…」

京助がボソツと言う

「決心はついたのかい」

3馬鹿と京助の後ろを歩いていた本間が隣にいる阿部に声を掛けた
「…まだ」

阿部がむすっとした顔で答えた

「でも宣戦布告はしてきた」

スタスタと歩く速度を速めて阿部が言う

「ふうん…」

本間が阿部にあわせて速度を上げた

「ラジオ体操のの男の子」

ボソッと本間が言う和阿部がビクツとした後顔を赤くして本間を見た

「…がまさか一緒の中学の同じクラスにいうとはねえ…」

ニヤッと本間が笑う

「…っ…香奈ッ!」

阿部の大声で3馬鹿と京助が振り返った

「お? 阿部ちゃんと本間ちゃん? おハロー」

南がヒラヒラ手を振る

「お前最近よく怒鳴るよなア…元気だなあ」

京助があくびをしながら言った

「いいじゃない別に…っ」

マフラーをクイッと引っ張って阿部が顔を隠す

「今は絶対ラジオ体操に間に合わないよね」

本間がボソッと言った

「ラジオ体操?」

中島が本間のソレを聞き取って聞き返す

「な…なんでもないの! 何でもッ!…!」

阿部がバシッと中島の背中を叩いて小走りで校門をくぐった

「うん何でもないから」

そんな阿部に本間もついて校門をくぐっていく

「…乙女の秘密ってえヤツ?」

坂田が言う

「この時期の女子はようわからん」

京助がまたあくびをする

「お前あくびしす…ぎ」

突っ込んだ南にも京助のあくびがうつる

「一時間目なんだっけ」

京助が坂田に聞く

「確か数学…ってか何でも寝る気だろうお前」

坂田が答えた

「おうよ」

京助が伸びをした

「うわあああッ！！！！；」

ガタン！ ガシャー！

三時間目が半ばに差し掛かった頃窓際の席の男子が叫んだ
何事かと思いい教室中がその男子生徒に目を向ける

「どうした？ 西村…おおおおお！！？；」

声を上げた西村という男子生徒を見た教師も声を上げた

「…おい…起きろ京助」

一時間目からぶっ通し眠っている京助を坂田が丸めたノートで一発叩いた

「…んだよ…四時間目終わったのか？」

前髪に微妙な寝癖と頬に赤い跡をつけた京助が突っ伏していた机から身を起した

「お客さん」

丸めたノートで坂田が指す窓の方を目をこすりながら京助が見た
「義兄様」

窓の外でヒラヒラ手を振っている慧喜えきに京助が手を振り返す

「…で？ なんだよ？ 俺はまだ眠いんだけど」

慧喜えきに手を振りながら京助があくびをする

「しっかり起きろ」

坂田がもう一発丸めたノートで京助を叩いた

「……慧喜^{えき}！?;」

しっかり起きたのか京助が慧喜を見て叫んだ

窓にダッシュして開けると冷たい風が教室に流れ込んできた

「何してんだお前はッ!;」

「お届け物」

京助の問いかけに返事するより先に慧喜^{えき}が何かの包みを差し出した

「何だ何だ?」

坂田が京助の肩にあごを乗せてソレを見る

「なんたら: っていうチョコのお菓子」

慧喜^{えき}がにっこり笑った

「: お菓子はいいけどお前一人できたのか?;」

京助が包みを受け取りながら慧喜に聞くと慧喜^{えき}が下を指差した

「: 緊那羅;」

下には防寒に対しての完全防備の服装でで上を見上げている緊那羅がいた

「おわ!! ラムちゃんじゃーんじゃーん!!! やほー!!」

浜本が京助を押しつけて緊那羅^{きんら}に手を振った

「こら授業中だぞ」

教師が一応教師という立場からか無駄だとわかっていつも一応注意する

「ラムちゃんも来てるみたいです」

本間がシャープペンをクルクル回しながら阿部に言う

「: だからなんなのよ」

不機嫌そうにして阿部が言うとは本間がにやっと笑った

「相手は手作りっぽいナアって?」

本間がノートに何やら落書きを書いた

「対抗?」

ちらっと阿部を見ると阿部は頬を膨れさせたまま騒がしい窓際を見ている

大きな三又鉤を立ててその上にバランスよく乗っかっていたえき慧喜が飛び降りる

「じゃあね義兄様！」

京助に向ってえき慧喜がブンブン手を振る

「おー…； …あ！ …ちよつと待て」

京助が自分の鞆の中から取り出したモノにゴソゴソと何かをしている

「きんなら緊那羅！」

そしてソレをきんなら緊那羅に向って放り投げた

京助がきんなら緊那羅の名前を呼んだことに阿部がピクツと反応すると本間がフツと笑った

「面白…」

ボソツと言った本間を阿部が睨む

「カイロ！ あつたけえだろ」

京助が叫ぶときんなら緊那羅が頷いた

「ありがとだっちゃ！」

カイロを握り締めきんなら緊那羅が笑顔で言う

「氣イつけて帰れよー！」

「ラムちゃんまったねー！」

坂田と浜本がほぼ同時に二人に向って叫んだ

「…お客が帰ったなら席に着けその三人…京助包みは休み時間に開けるようにな。今は駄目だぞ今は」

ハアと溜息をつきつつ教師が言うとチャイムが鳴った

「アレ？ 何ラムちゃんとえき慧喜きてたんだ？」

鳴り終えると同じくらいにガラツと隣のクラスの窓が開いて南が顔を出した

「差し入れもらったから中島引き連れてこい」

坂田がそう言っ窓を閉めた

「均等に分ける均等にツ…！！」

「あッ！！ …テメー！！ …今ツバつけたろツ…！！」

「やかましいッ!!!; 騒ぐなッ」

「スゲー!!! 手作りだってさ」

休み時間が始まったと同時に窓際の席に黒い人だかりができた

「タイムバーゲンに群がる主婦みたい」

本間がソレを見て言う

「うめー!!!」

しばらくしてその人だかりの山から歓声が上がった

「ぞりゃそうだ! ハルミさんの指導だしな! マズイとか抜かしたヤツはケリ飛ばすぞ!」

坂田の声が中心付近から聞こえる

「何? さっきのあの子京助関連なワケ?」

一人の男子生徒が京助に尋ねた

「悠の嫁。ねーお・に・い・さ・ま」

中島が京助の首に抱きついて言った

「そういや【義兄様】って言ってたナア: 子供生まれたらお前14にしておじさんか」

男子生徒が言う

「京助だって一緒にいた金パの子が彼女なんでねーの?」

ダンッ!!!! ガン!!!! バン!

大きな音がして群れていた男子他教室中が音の方向に目をやると教室の戸口を見ている本間がいた

「: なんでもないの」

ゆっくりと振り返った本間がにっこり笑顔で言った

「手作り無理だね」

保健室のベッドに腰掛けて保健医に手首に包帯を巻かれている阿部にミヨコが言った

「まったく: あんだけ力入れて机叩けば手首も捻挫するよ」

ヤレヤレと溜息をつくミヨコに阿部が膨れる

「はい! お嬢様方! 保健室ではお静かに」

保健医が包帯をテープで止めながら注意した

「…だって…はぁ」

阿部が包帯の巻かれた右手首をさすりながら大きな溜息をついた

「…勝ち目ないのかなァ」

そのまま阿部がベッドに倒れこんだ

「らしくない」

その阿部のスカートを本間が捲る

「…何してんのよ香奈」

女だけしかないからなのか悲鳴も上げず阿部が小さく突っ込む

「宣戦布告してきたアンタどこにいったのさ」

本間が腰を下ろした

「だって…」

「弱音吐くのは当たって砕けた後でもできるでしょ」

パンッ！ と小気味いい音を立てて阿部の尻を本間が叩いた

「当たらないと砕けもしないしね」

ミヨコも言う

「栄野も結構鈍感だしねえ」

保健医が笑いながら言う和阿部とミヨコが驚いて保健医を見た

「何でゆうこちゃん知ってんの！？」

阿部が大きな声を出すと保健医ゆうこちゃんが人差し指で【シー】

というジェスチャーをした

「何年女やってると思ってんの」

そう言って笑うゆうこちゃんを阿部がぽかんとしたまま見る

「別に決心がつかないなら焦らなくてもいいんじゃないかねえ？ 取

られたら取り返すって手もあることだし」

「うっわ大人の意見」

ゆうこちゃんが言うミヨコが突っ込んだ

「恋ってそんなものだよ」

フツとゆうこちゃんが笑う

「でも…」

阿部がまたベッドに顔をうずめた

「取り返せないような気がする…」

ゴロゴロと意味もなくベッドの上を転がる阿部の制服を掴んで本間が止める

「強敵？」

ゆうちゃんがミヨコに聞く

「金髪で京助の家に一緒に住んでる」

ミヨコが答えた

「付き合ってるの？」

ゆうちゃんがまた聞いた

「らしい…けど本人には聞いてないからわからないの」

ミヨコがまた答えた

「ならまず栄野に聞いてみたら？」

ゆうちゃんがさらっと言った

「聞いてもちゃんとしたこと教えてくれないんだもん…」

阿部が天井を見上げて呟いた

「ねえ…ゆうちゃん…どうして人を好きになるのかなア…」

ボソッと阿部が呟いた

「悩んで苦しくて怒ってさあ…そこまでしてどうして好きなんだろう」

そう言った阿部の最後の方の言葉がどことなく震えている

「好きだからだろう？　好きだから好きになるんじゃないの？」

それに対してさらっと保健医ゆうちゃんが返した

「好きなもの聞かれてどうして好きなのか理論的に説明できるやつの方が少ないんじゃないかな？　…世の中白黒はつきりできないものの方が多いんだよ…四時間目はここにいなさい。香奈、連絡宜しくね」

ベッドのカーテンを閉めながら保健医ゆうちゃんが本間に言った

「アンタ等まだ若いんだから」

ゆうちゃんが苦笑いを浮かべて言った

「そーいやゆうこちゃん…もうすぐよ…」

「はーいーチャイムなるよー」

ミヨコが言いかけた言葉をわざとらしくゆうこちゃんが遮った

「あ、復活」

昼休み弁当の中の玉子焼きを箸で持ち上げていたミヨコが教室に入
って来た阿部を見つけた

「考えはまとまったの？」

タラコが顔を出したおにぎりを片手に本間が聞くと近場の席から椅子
を失敬した阿部がソレに腰掛けながら頷いた

「チヨコは渡すけど…言わない」

ミヨコが差し出した玉子焼きを食べて阿部が自分の弁当を開いた
「いいの？」

本間が聞く

「チヨコは渡すの？」

ミヨコも聞いた

「…今はまだ…もう少し…この関係でいたいような気持ちになって
きたの」

パチンと箸箱を開けて阿部が言う

「その間に取りられたら？」

本間が食べ終えたおにぎりのアルミ箔をクシャクシャ丸めながら聞
いた

「もちろん取り返してやるわよ」

阿部が笑っていった

「それでこそ阿部！」

ミヨコが蓋を開けたばかりの阿部の弁当からから揚げを一つ奪って
口に入れた

「好きなものは好きだからしょうがないって何かあったよね」
本間がボソツと言った

バレンタイン当日朝阿部は机の上に置いてある薄いピンクの包みを撫でた後鞆に入れた

「渡すだけ渡すだけなんだからさりげなくさりげなく…よしっ！」
自分に呪文のように言い聞かせ鞆を肩に掛けて部屋を出た

「…もう五時間目ですよ」

本間がペシペシと阿部の頭を叩いた

「わかってるわよッ！！； …だって…」

そう言っただけで阿部がチラッと目を横にやるとソコには坂田や浜本達と笑いながら話している京助の姿

「京助っていつも誰かといえるんだもん…」

机に突っ伏してはああと大きな溜息をついた

「昼休みは昼休みでいつもの面子でご飯食べてたり休み時間は休み時間でああでしょ？」

ぶつぶつ小さく言う阿部の頭を本間がなでた

「確かに…栄野の周りにはいつも誰かいるんだよね…一人でいるのあんまりみたことないし」

南に抱きつかれている京助をみながら本間が言った

「…なんなら放課後私と一緒にやる？」

本間が自分の机の中から紙袋を取り出した

「…香奈…？」

その紙袋の中には青い包みが一つ入っていた

「私は坂田に用事があるんだけどね。どうせ一緒に帰るんだろうから」

「さか…ッて…香奈…初耳…」

本間の衝撃告白に阿部が驚く

「言っていないもの」

紙袋を机に戻して本間がしれっと言った

「香奈も女だったんだね」

阿部が頷きながら言う

「：少なくとも外見は阿部よか女だよ」

豊満な胸をさりげなく主張させながら本間が言うと阿部がその胸を叩いた

「何々？ 何の話？」

ミヨコが阿部に肩に手を置いて話しに入って来た

「彼氏持ちには関係ない話し」

本間が言う和阿部が頷く

「なにさあゝもゝ…」

ミヨコが膨れた

「お前等今日ヒマ？」

帰りのHRが終わり廊下で待っていた南と中島に京助が声を掛けた

「何？ 何かあんの？」

ポケットに手をつ突っ込んだまま中島が聞く

「ハルミさんの手作りチョコ食いにいくんだけど来なくてもいいぞ」

坂田がやたら軽い足取りで踊りながら言う

「：やたら作ってんだよ母さん：と慧喜えきと緊那羅きんら； 面白いらしく

て； ：で食いに来ないか聞いて来いってさ」

京助が半ば呆れ顔で言った

「ナイス！！ いこうぜ！」

南がガッツポーズをした

「くんのかよ…」

坂田が舌打ちをする

「坂田」

「うおおおお！！；」

いきなり本間に声を掛けられた坂田が声を上げて南に抱きついた

「イヤンみつるんたらこんな公衆の面前でダ・イ・タ・ン」

南が坂田を抱きしめ返す

「：どっかいくの？」

そんな光景に突っ込みも笑いもせず本間が坂田に聞く

「俺ン家。処理活動に協力してもらおうかと思ってさ」

京助が答えた

「ふうん…私らも行ってもいい？」

本間が京助に聞いた

「私ら…って阿部もか？」

本間の後ろにいた阿部を見つけて京助が本間に聞いた

「うん駄目？」

阿部をチラッと見た後本間が京助に聞き返した

「いいんじゃない？女子って甘い物好きだし」

中島が言うとは間が中島を見てにっこり笑った

「助言ありがとう。どう？ 駄目？」

本間が京助に更に聞く

「いや…俺は別にいけど」

その京助の言葉を聞いた阿部の顔がすこし嬉しそうにほころんだ

「阿部塾とか大丈夫なのか？」

京助に聞かれて阿部が慌てて

「う…うん！ 今日7時からだし」

鞆を抱きしめて笑いながら答える

「ならいくか」

玄関の方向に向って歩き出した京助にぞろぞろと続いて歩き出した

3馬鹿の後ろを阿部と本間が歩く

「…きっかけは作ったからね」

本間が阿部の尻をペシッと叩いた

「…かえり」

茶の間の戸を開けると温かな空気とほんのり香るお茶の香りそして独特の話し方が京助達を出迎えた

「…何してんだお前等…」

「一服」

尋ねた京助に茶を一口飲んだ矜羯羅こんがらが答えた

「京助おかえりーみんないらっしやい」

「おかえり義兄様：あれ？ ペチャパイ達もいんの？」

慧喜えきが奥の和室から顔を出した

「うるさいっ！」

阿部えきが慧喜えきに向って怒鳴る

「おじゃまします」

本間が部屋に入って戸を閉めた

本間の顔を見るなり膨れた慧喜えきが悠助を抱き上げる

「慧喜さん？」

抱き上げられた悠助が慧喜えきを見る

「アイツ俺より胸あるから嫌い」

慧喜えきがフンつと顔を振った

「あれ？ 緊那羅きんらは？」

ぐるり部屋を見て緊那羅きんらの姿が見えないのを疑問に思った京助が悠

助に聞くと阿部がピクつと反応した

「緊ちゃんはねー」

「うっわ； …なんだか大人数だちゃね；」

タイミングよく部屋に入って来た緊那羅きんらの手にはタオルが握られて

いた

「ヤッホ！ ラムちゃん」

南が片手を上げる

「いらっしやいだっちゃ。京助おかえりだっちゃ」

南に手を振り替えしながら緊那羅きんらが言った

「何してたんだお前」

上着を脱ぎながら京助が聞く

「んー…手洗ってたんだっちゃ。さっきまでお菓子作ってたから…」

緊那羅きんらが手をヒラヒラ振りながら言うところなく甘い香りが漂っ

ていることに気付く

「また作ってたのか？；」

京助が呆れ顔で聞いた

「またって…そんなに作ってるのラムちゃん？」

阿部が緊那羅きんならに聞いた

「え…あ…でも殆ど矜羯羅が…」

チラッと緊那羅きんならが矜羯羅こんがらに目を向けた

それに合わせるかの様に京助や3馬鹿の面々もゆっくりと湯気の立つ湯飲みを口につける矜羯羅こんがらに目をやった

「…食ったんか…？」

小さく京助が聞くと矜羯羅こんがらは湯飲みをテーブルに置いて小さく息を吐いた

「…あんだだけの量をか…？」

「悪い？」

にっこりと笑みを向けて矜羯羅こんがらが言った

「京助の母さんが食べていいって言ったんだもの」

そういうながら矜羯羅こんがらは欠伸をしている制多の頭を叩いた

「一体どんだけの量だったんだ…？…」

南が顔を引きつらせながら苦笑いを浮かべる

「俺が朝見たときにはこんくらいのケーキ5つと…生チョコっぽいのが大量に…」

京助がジェスチャーも交えて説明すると呆れたような驚いたような顔で一同 矜羯羅こんがらを見る

「何さ」

少しムツとしたような声で矜羯羅が言った

「いえ。別に。何も」

3馬鹿と京助がハモって言う

「じゃあ何か？ もうアレ…ハルミさんのチョコはないのか…？」

坂田が嘆く

「ハルミママさんのはないっちゃけど…ちょっと待っててっちゃ」

緊那羅きんならが茶の間から出て小走りにどこかに向っていった

「少しくらい…残しておいてくれたってっ…」

床に手について坂田が激しく落ち込む

「坂田」

そんな坂田に本間が声を掛けた

「ハイこれ」

そして差し出された紙袋と本間を坂田がきよとした顔で交互に見る

「本間ちゃん：それって：」

南が紙袋を指差して言う

「チヨコ」

本間がさらっと言ったのに対し3馬鹿と京助がどよめく

「：本気で？」

坂田がほんのり顔を赤くして本間を見る

「そう」

本間が頷きながら言った

「俺に：」

「ううん柴田さんに」

周りが一気に凍りついた

「：柴田さん？」

中島がボソっと言うと本間が頷く

「よろしく」

にっこりと笑って坂田に紙袋を押し付けて本間が阿部の隣に戻る

「：ど：ドントマイーン；」

鳩が豆鉄砲食らったような顔をしている坂田の肩を南と中島、そして京助がかわるがわる叩いた

「今度はアンタの番」

本間が阿部の耳元でボソッという和阿部が鞆を握り締めた

「あれ？ 坂田：どうしたんだっちゃ？；」

何かをお盆に載せて茶の間に戻ってきた緊那羅きんならが今だどっかから還ってこれていない坂田を見て言った

「何だソレ」

京助が緊那羅きんならの持っていたお盆を見て言う

白いさつきまで緊那羅きんならが持っていたタオルが上にかけてあり何が乗っているのかわからない

「…んと…」

緊那羅きんならがそのお盆をテーブルに置きタオルを取った

「坂田」

緊那羅きんならに名前を呼ばれて半分還ってきた坂田が振り向くと目の前に差し出された小さな包み

「南と中島も」

同じく名前を呼ばれた南と中島にも緊那羅きんならが小さな包みを差し出した

「悠助、慧喜…に矜羯羅こんがらと制多迦せいたか」

緊那羅きんならがポンポンと名前を挙げつつ小さな包みを各々の前に置いていく

「これは阿部さんと…本間さんの」

ぽかんとして緊那羅きんならの行動を見ていた阿部の前にも包みが差し出された

「そしてこれが京助の分だっちゃ」

最後に京助の手の上に小さな包みをおいて緊那羅きんならがにっこり笑った

「おお！ トリュフだ！」

包みを開いた中島が声を上げた

「ラムちゃんお手製？」

南が聞くとすこし照れながら緊那羅きんならが頷いた

「ハルミママさんみたくはいかなかったんだっちゃけど…」

「いや美味いわ」

口にトリュフを放り込んだ中島が頷いた

「うん美味しい美味い」

坂田も言うきんならと緊那羅がホッとして笑う

「ホラ先こされた」

トリュフの包みを畳みながら本間が言うと阿部が横目で本間を見た

「お邪魔しましたー」

微妙にハモった挨拶と同時に玄関が開いて中島が出てきた
それに続いて南、坂田、阿部、本間が次々に出てくる

「…はあ」

抱いていた鞆を肩に掛けて阿部が溜息をつくると本間が阿部の頭を撫
でた

「何か悪かったなせつかくきてもらったのにさ」

京助がジャケットを羽織りながら言う

「いんや？別にいいさ…てお前どっか行くの？」

南が靴の踵に指を入れて履き心地を調節している京助に聞いた

「あゝ？ ああ」

トトンと爪先と地面に当てて靴を履くと京助は顔を上げた

「緊那羅きんならー俺ちよっくら阿部送ってくるわ」

京助が家の中にそう言うのを聞いて阿部が驚く

「…え？」

そして思わず本間の方を見ると本間はにっこり笑って阿部の背中を
叩いた

「京助やっさしー」

坂田が京助に抱きついた

「送って…って…いいの？」

肩に掛けた鞆の取っ手を握り締めて阿部が聞く

「お前も女だしな一応」

京助が笑って言った

「…最後のチャンス到来」

本間が言う和阿部が深呼吸した

「ラムちゃんのチョコおいしかったね」

除雪のせいでやっぱり細くなっている歩道を歩きながら阿部が言った

「あんだだけ作りや上手くなるわな」

京助がヘッと笑って言う

「足元気イつけろよ」

除雪車が固めていった割と大きく堅い雪の塊がゴロゴロしている箇所を歩きながら京助が言った

「うん…」

交互に出される足にあわせて無造作に振られている京助の手を見ながら阿部が小さく返事をした

「京助って昔は早起きだったよね」

「は？」

阿部が唐突に言った一言に京助が足と止めて振り返った

「夏とかラジオ体操欠かさず行ってたじゃない？」

阿部も足を止めた

「…あゝ…昔はな…ってかどうしたよ急に昔話始めて」

再びゆっくりと京助が歩き出すと阿部が小走りで京助の隣に並んだ「ううん何でもない。ただそうだったなあって」

何気なく歩道を阿部に譲って自分は車道を歩く様にした京助が阿部を見る

「…変なヤツ」

鼻から白い息を吐いて京助が呟いた

「いっぱいトンボがいたっけ…」

カチッ

チャ〜ララ〜チャ〜ララ〜チャ〜ララ〜ララ〜…♪

正月町に毎度おなじみ【愛の鐘】が鳴り響いた

夏には夕焼け小焼けだったメロディーが冬には遠き山に日は落ちてに変わっているのには一体何人氣付いただろう

【柴野ストアー】の立て看板のところで阿部が足を止めた

「ここでもいいよありがと」

京助に笑顔を向けて阿部が言った

「そうか？ …んじゃ氣いつけて…」

「あ…京助！」

背中を向けた京助の名前を無意識のうちに呼んで阿部はハッとした

「何？」

振り返った京助を見て阿部は鞆の取っ手を強く握る

「あ…あのね…」

深呼吸した後阿部は鞆のフアスナーをあけた

「手作りじゃないんだけど…お礼」

京助の目の前に差し出されたピンクの包み

「…爆弾？」

「チヨコッ!!」

その包みを指差して京助が冗談を言うと阿部が怒鳴った

「いらぬならあげないッ！」

真っ赤になりながら阿部が怒鳴る

「…サンキュ」

阿部の手から包みを取って京助が笑う

「…うん」

阿部の顔がほころんで笑顔になる

「じゃあね」

軽く手を振って阿部が駆け出す

「コケんなよー！」

京助が後ろから叫ぶのを聞きながら阿部はなんだか嬉しくなってきた
ゆっと鞆を抱きしめた

>i22060—2575<

【第六回・四】On泉（前書き）

三連休を利用して坂田の母方の実家である温泉旅館にやってきた京助たち

しかしやっぱりなんだかんだ事件が起こるわけである

【第六回・四】On泉

「駄目ッたら駄目ッ!!;」

少し渋めの揃いの浴衣を着た3馬鹿と京助が必死で宥めている相手は慧喜えき

「何でだよッ!!」

「きゃー! えきっちゃん! 前! 前ッ!!;」

中島に後ろから押さえられジタバタする慧喜えきの浴衣の前を南が慌てて自分の着ていた上着で隠す

「俺も悠助と一緒に入るッ!!」

「アカー——————ン!!;」

赤と紺色の暖簾にそれぞれ【姫】と【殿】という文字が書かれているその前でかれこれ10分は大騒ぎが続いている

「おーれーもー!!」

どうやら男湯に悠助と共に入りたがっている慧喜えきを止めようとしているらしい

「慧喜さん…;」

どうしていいのかわからない悠助が同じくどうしていいのかわからずただ3馬鹿と京助の活躍を見学している緊那羅きんならの横で困った顔をしている

「だから!! 悠助も俺らも男で!! お前は一応女だから駄目な

んだってばッ!!;」

タオルを首にかけた京助が怒鳴る

「一緒に入るッ!!」

負けじと慧喜えきも怒鳴り返す

「駄目だってーのッ!!;」

坂田と京助がハモって言う

「や————だ————ッ!!」

慧喜えきが暴れるたびに浴衣が乱れていく

「えきつちゃーん； 俺らとしても一緒に入るのは心の中では万々歳なんだけどさー；」

南が中島に手を貸して一緒になって慧喜を押さえる

「…悠助がそっちの方にはいればいいんじゃないんだっちゃ？」

緊那羅きんならが何気に言った一言に一同ピタッと動きを止めた

「え？」

悠助がきよんととして自分を指差した

「…いいなあ…って思ってるだろ」

棚の中の青いカゴに脱いだ浴衣を入れながら中島が言うきんならと緊那羅以外が頷く

「俺サア…銭湯の番台に一回でいいから座ってみたいんだよねえ…」
南が言うきんならとまたも緊那羅以外が頷いた

「男の子ですからね」

京助が言うきんならとやっぱり緊那羅以外が頷く

「何でもできる証拠の膨らみは懂れですよ、うん」

坂田が髪をいつもより高めのところで括るとタオルを手を取った

「…どうした緊那羅？」きんなら

坂田の行動を見ていた緊那羅きんならに京助が声を掛けた

「私も髪結いなおした方がいいっちゃ？」

自分の髪を引っ張って緊那羅きんならが聞く

「湯船につかないくらいにあげた方がいいかもだよね」

南が言うきんならと緊那羅が髪を解きいつものようにポニーテールを作った後それを団子に結いなおした

「…ラムちゃんうなじきれいだね…」

南がボソツと言う

「中島は相変わらずだなそのスネ毛」

そして中島の足を見てまたも南がボソツと言う

「スネ毛があってなんぼだろう男は」

パーンッ と自分の足を叩いて中島が言う

「いやお前は濃すぎ」

京助が突っ込む

「蟻作れ蟻」

坂田がしゃがんで中島のスネ毛に蟻を作り出すと南も反対の足に蟻を作り出した

「あッ!! 馬鹿やめろって!!; 結構痛えんだからよッ!!;」
両足を押さえられた中島が騒ぐ

「こんだけ濃いスネ毛みたらやりたくなるってやっぱ」

京助も南の方に一緒になって蟻を作り始めた

「:風邪引くっちゃよ?;」

緊那羅きんならがその光景を見て小さく言った

事の始まりは三日前に遡りその日の放課後

「なあお前等今度の土日祝日三連休ヒマ?」

一呼吸で一氣に聞いてきた坂田に靴を持ったままで南と中島そして京助が顔を見合わせた

「:先に君がどうして俺らの三連休の予定を知りたがっているのかお聞きした後にお答えいたしましょう?」

中島が靴を玄関の床に落として履きながら言った

「温泉行かね?」

坂田が言うともたも南と中島んでもって京助が顔を見合わせた

「温泉?」

京助が聞く

「そう」

坂田が答える

「何でまた」

南も聞く

「母さん方の実家に正月行かなかったから遊びに来いって」

坂田が答える

「俺らも行っているのか?」

中島が聞く

「駄目なら誘わんつーの；母さんもオヤジも柴田も行けないから俺一人で行ってもナアって：来るのか？来ないのか？山ン中だから何もねえけど」

坂田そう言いながら靴を履いて体を起した

「なんなら緊那羅きんならとか悠えきとか慧喜？だかもいいぞ？：ハルミさんも」

「：お前今最後の【ハルミさん】だけ声のテンション違ったぞ：；母さんは無理かなア；仕事あるだろうし：緊那羅とかなら：」

鞆を背負いなおして京助が言う

「ん：まあ明日か明後日くらいまでに返事くれや。送迎バス付だから金の心配はしなくてOKだしよ」

坂田が生徒玄関の戸を開ける

「温泉かア：湯煙：混浴：卓球：」

南が温泉と聞いて思い浮かぶワードを次々にあげていく

「温泉卵、温泉饅頭、露天風呂：」

中島も南に続く

「いいねえ：」

ホウつと白い息を吐いて京助が言うと南と中島が頷く

「特に予定もないですし」

南が言うと京助と中島が頷く

「金も要らないとおっしゃってますし」

中島が言うと京助と南が頷く

「行っちゃいますか」

そして三人揃って坂田に言った

「そうこなくっちゃ」

笑いながら携帯を取り出し坂田がどこかにメールを送った

「男ばかりてのが寂しいけどな」

中島が言う

「えきっちゃん来るかな？京助」

南が京助の肩を叩いた

「悠が来るって言やあ駄目だ言ってもくるだろうさ；」

京助が口の端を上げて言う

「あ、そうだ坂田」

携帯を開いたまま返信を待っているらしい坂田に京助が声を掛けた

「：もしかしたらただけど：人数：が：」

京助が躊躇いがちにごによごに言う

「：人数？　：ああ！！；　オツケオツケ！　わかった」

坂田にはそれだけで通じたらしく再度メールをどこかに送った

「人数？」

理解できなかった南が疑問系に言う

「：できればちょっと変わった服装と特技ありますってことも宜しくお伝えくださいませ；」

京助が深々と頭を下げて言うとなと中島にも理解できたのか納得したような表情をした

「お宅も大変ですわねえ」

中島が京助の肩を叩くと京助が横を向いてフツと苦笑いで息を吐いた

「坂田と一緒にいるあの男の人が来ないなら行きたいっちゃ」

「悠助が行くなら俺も行く」

栄野家の居候の返事はこんな感じだった

「同行決定な」

京助がティッシュで作ったこよりを鼻の中に入れて故意にクシャミを出した

「温泉っていいわねえ：迷惑かけないようにね？」

案の定仕事だからといって断った母ハルミが湯飲みを両手で持って言った

「んじゃ坂田に電話しとく」

立ち上がった京助が電話の子機を持ちふと止まった

「…やっぱ…なんか…人数増加しそうな気がモリモリ…」

ボソツというきんならと緊那羅のほうを振り返った

「？なんだっちゃ？」

きよとんとした顔をしたきんなら緊那羅が京助を見る

「…思うに鳥類や乾闥婆とかこんがら矜羯羅とか制多迦せいたかっていつつーもタイミングよく現れるけどお前ら連絡とかしてんの？」

【お前等】とひとくくりにされたえき慧喜ときんなら緊那羅が少し顔を見合わせて首を横に振った

「じゃあなんだ…偶然？」

京助が子機を持ったまま聞く

「…にしてはちよつとなあ…」

ピッピツと音を鳴らしながら京助は親指で短縮登録されている坂田家の番号を押した

「俺前に宝珠が全て知らせてるってこと聞いたけど」

えき慧喜が自分の膝で眠っている悠助を撫でながら言った

「宝珠が？」

きんなら緊那羅と京助がハモった

「うん…何でも力が大きくなると宝珠の声が聞こえるんだって」

自分の指についている宝珠を見てえき慧喜が言う

「俺はまだ聞いたことがないんだけどね…制多迦せいたか様やこんがら矜羯羅様や迦か楼羅るら辺りなら聞こえてるんじゃないのかな」

「宝珠の声…」

きんなら緊那羅も自分の腕についている宝珠を見た

「全ての宝珠は元々大きな一つの結晶で…それを宝珠にしてるんだって」

えき慧喜が言う

「ほー…共鳴ってヤツ？」

京助が子機を耳に当てたまま感心して頷く

「だから俺の宝珠もきんなら緊那羅の宝珠も元は一つだったんだよ」

えき慧喜が言うきんならと緊那羅が自分の宝珠とえき慧喜の宝珠を交互に見た

「あ、坂田？ 俺」

電話が通じたらしく京助が立ち上がり廊下のほうに歩きながら話し始める

「【天】も【空】も元を辿れば同じなんだっちゃん」

緊那羅きんならが言うきんならと慧喜えきが頷いた

「緊那羅は：【時】がきても二人共を守るの？」

慧喜えきが聞く

「【時】が来れば俺はアンタの敵になるけど：けど俺は：もし敵になっても：敵でも悠助は守りたい」

慧喜えきが悠助の頭を撫でると悠助が少し体を動かした

「俺には悠助が必要なんだ：【時】なんて来ないでくれればいいのに：」

悔しそうに言う慧喜えきを見て緊那羅きんならも俯いた

「俺は前の【時】の時もいた：今回もあなるのかな：」

「おーっしー！！ 準備しろよー！」

慧喜えきの悲しげな言葉が京助の声で止められた

「ほえ？」

その声で起された悠助に慧喜えきが無言で抱きついた

「そーいや先行くとか言ってたヤツ：」

南がカラカラと浴場への引き戸を開けると湯気がもわっと出てきた
「のぼせてるんじゃないのか？」

ザーツという音が響いている浴場の中に中島の声も響いた

「いんや：ソコで元気に打たれてますヨ：」

いつもは顔の前に垂らしている長い前髪の一部も頭に巻いたタオルの中に突っ込んでいるのか耳についている飾りだけが打たせ湯の勢いに軽く揺れて迦楼羅かるらが気持ちよさそうに湯に打たれていた

「じじくさー：」

南がぼそつと言う

「馬ッ鹿！！ 地味に気持ちいいんだぞアレ！！ 修行もできるし」

「何の修行だよ；」

坂田が主張した後 迦楼羅^{かるら}の隣に並んで湯に打たれ始めた

「お前なかなか味のわかる輩のようだな」

迦楼羅^{かるら}が坂田に言う

「俺も温泉とかには結構うるさいんでね」

坂田が首をコキコキ鳴らした

「若年寄りが二人並んですまし顔」

南がおひなさまの替歌を歌いながら風呂椅子に腰掛けてシャワーを出した

「うわーひろー！！！！」

高い壁の向こう側は男子の夢の花園女湯らしくさつき別れた慧喜^{えき}の
声が響いて聞こえた

「慧喜^{えき}さん走るところ…わっ！！；」

続いて聞こえた悠助の声と何かに驚いた声

「…コケたか悠…」

髪をぬらしたまま京助が壁を見た

「でもドターンとかガシャーンとか聞こえてこないってことは…」

中島が自慢のスネ毛の生えた足をガシガシと洗いながら言う

「悠助のほうが気をつけないと」

慧喜^{えき}の声が聞こえた

「…抱き留め？」

南と京助そして中島がハモって言う

「裸で」

京助が言う

「女体に」

南が言う

「抱き留められた…」

中島が言う

「羨まッ！！」

そして三人して一斉にそう言ってシャワーを浴び始めた

「京助京助!! 外にも風呂あるっちゃ!!」

緊那羅きんならが嬉しそうに外を指差した

「ああ：露天だろ？ 行つてこいよ」

顔面にシャワーをかけながら京助が言う

「気をつけてねラムちゃん！行くまでが寒いから」

南が髪をオールバックにまとめて耳に入ったらしい水を掻き出そうとタオルに方耳を当てて頭を揺らしながら言った

「え：寒い：んだっちゃ？」

露天に繋がる通路を見ながら緊那羅きんならが考え込んだ

「当たり前だろ外だし；」

シャワーを止めた京助が立ち上がった

「前隠せ前； 丁度俺の目の前じゃん；」

中島が京助の尻を叩いた

「何を今更同じもんついてるくせに」

ヘツと笑いながら京助が腰にタオルを巻いた

「：アイツらいつまで打たれてる気だ？；」

同じく立ち上がった中島が腰にタオルをつけながら今だ打たせ湯に打たれてほけえ！と気持ちよさそうにしている坂田と迦楼羅かるらを見た

「：行動そろってるねえ；」

ほぼ同時に溜息を吐いた坂田と迦楼羅かるらを見て南が言った

「うへえええー!!；」

露天に繋がる通路を緊那羅きんならが変な声を上げて駆け抜け湯気の立つ露天風呂の中に足を突っ込んだ

「寒い寒い寒いさむーいっ！；」

そして肩まで一気に浸かる

「ほう：；」

チラチラと舞い落ちてくる雪を見上げて緊那羅きんならが一息ついた
「静かに入ってこれないの？」

肩にタオルを掛けて腰から下だけが湯の中に入ってる矜羯羅こんがらが言う

「だって寒かったんだっちゃ；；」

矜羯羅こんがらとは対照的に顎までお湯に浸かった緊那羅きんならが小さく言う

「…むいのも露天の醍醐味って中島が言ってた」

すいーっと泳ぐようにして制多迦せいたかが緊那羅きんならに近づく

「…うすけは？」

潜ったのか髪全体が濡れている制多迦せいたかが悠助の姿を探す

「悠は慧喜えきと向こう側」

後から来た京助と中島がざばざばとお湯の中に入って来た

「…こう？ あの壁の？」

竹製の仕切りを指差して制多迦せいたかが聞く

「そー男児禁制の夢の花園女湯」

中島が湯に沈むとスネ毛が湯の中でゆらゆら揺れた

「…おいこら；」

京助が制多迦せいたかの腕を引っ張った

「…どこへ行くどこへ；」

腕を引っ張りながら京助が聞くと制多迦せいたかが仕切りを指差した

「…うすけに会いに行くんだけど」

「あかんっての；」

京助が制多迦せいたかの腕を思い切りぐいっと引っ張るとよろけた制多迦せいたかが湯の中に座り込んだ

「男禁制ってんだろが；」

濡れたタオルで制多迦せいたかの頭をベシッと叩くと制多迦せいたかが竹製の仕切りの方をじっとみる

「悠助は男じゃないの？」

足を組みなおして矜羯羅こんがらが話しに入ってきた

「10歳以下は男でも女でもあんまり関係ない…様な気がする風呂に關してはだけど；」

中島が言う

「ふうん…」

矜羯羅こんがらが立ち上がり湯船に入る

「…ういえば緊那羅きんならって…たしか…」

「え？」

「さっむー…ッ！…！」

何か言いかけた制多迦せいたかの声を慧喜えきの声が掻き消した

「慧喜！…！」

京助と中島、そしてタイミングよく露天に入って来た坂田と南が慧喜えきの声に反応した

「中のあの壁は無理でも」

中島が湯から上がった

「外のあの高さの壁ならば」

京助も湯から上がる

「覗いて見せよう肩車！…！」

通路を足早にやってきた坂田が言う

「そこに女湯ある限り！…！」

南が言うのと四人揃って竹製の仕切りに目をやった

「何を覗くの？」

慧喜が聞く

「そりゃあ女湯…うおおおお！…？」

竹製の仕切りのから男湯の方を見ている慧喜えきに気付いて3馬鹿と京助が声を上げた

「きやー！！ 慧喜えきっちゃんのえっちー！！…！」

南が慌てて前を隠す

「あ、制多迦せいたか様ー矜羯羅こんがら様ー！！…」

身を乗り出して慧喜えきが制多迦せいたかと矜羯羅こんがらに手を振った

「湯加減いかがですかー？」

慧喜えきが笑いながら聞くと制多迦せいたかが笑顔で手を振り返す

「慧喜さん！！ 駄目だよ！！； 怒られるよー！！；」

悠助の声が聞こえる

「慧喜ー！！ もう少し前に！！ 前に！！…」

坂田と中島が両手で手招きをする

「そそ！ ずずいっと！！」

京助と南も同じく両手で手招きをした

「慧喜えきさーんっ；」

「あ…ごめんね悠助」

悠助の困った声に慧喜えきが振り向いて竹製の仕切りから消えた

「あゝあ…；」

慧喜えきが消えたと同時に3馬鹿と京助の肩ががくつと下がった

「いくわよ！！ ヒロミ！！」

「はいッ！！ お蝶婦人！！」

カコーン！！

「甘いわよヒロミ！！」

卓球のラケットを突き出し坂田が南に向って言う

「監督…」

南がチラッと自動販売機の横の椅子に座っている京助を見た

「…エースを狙え」

京助が言った

「お約束だよなあ…」

坂田側の得点版を捲りながら中島が言う

「ラムちゃん具合どお？」

京助の隣で額にパックのお茶を乗せて赤い顔をして横になっている

緊那羅きんならに南が声を掛けた

「気持ち悪いっちゃ…；」

どうやらのぼせたらしい

「寒い寒いってなかなか上がらなかったお前が悪い」

半ば呆れ顔で京助が旅館のご案内パンフレットで緊那羅きんならを仰いだ

「だって…；」

緊那羅きんならが力の抜けた声を出した

「鳥さんはまだ入ってるんだろ？」

中島が得点版を卓球台の上に置いて腰に手を当てた
「たぶん」

京助が言う

「そーい、や乾闥婆けんだつばって一緒じゃなかったよな？」

卓球のラケットで肩を叩きながら坂田が言った

「散歩行くとかいってたっちゃ？」

緊那羅きんならが小さく言った

「散歩？」

京助と南が同時に聞くと緊那羅きんならが頷く

「迦楼羅かるらが上がる頃には戻るっていつてたっちゃ」

ゆっくりと体を起して座った緊那羅きんならが溜息をついた

「何も今いかなくともいいじゃんねー…裸の付き合いしよぜ裸のさあ」

中島が言う

「裸見られたくないとか」

南が言った

「実は着やせしてるとか女だとか」

「誰がですか」

坂田が言うと後ろから声がした

「だれが女でだれが着やせなんですか？ 坂田」

につこりと笑顔で乾闥婆けんだつばが立っていた

「い…いっやーん！！； けんちゃんおかえりなさい！！；」

坂田が引きつりながら笑顔で言った

「ただいま…迦楼羅かるらはまだ…のようですね」

ぐるり部屋を見渡して乾闥婆けんだつばが言う

「いや部屋の方にいるのかもしれないし…」

京助が言った

「お前風呂は？」

中島が声を掛けると乾闥婆けんだつばが振り返った

「入りますよ？ 男湯に」

にっこり笑った（でもどこか怖い）　ままだ乾闥婆けんたつばが坂田を見ながら答えた

「一緒にはいりゃよかったのによー」

京助が言う

「：僕は静かに入るのが好きなんです」

そう言って部屋から出て行った

「つれないなあ：」

南が苦笑いで言った

ドン

「あ：すみません」

部屋を出て行った乾闥婆けんたつばの謝る声が聞こえた

「なんもよ気にすんね」

続いて聞こえたのは女性の声

「婆ちゃんの声だ」

坂田が部屋の出入り口に向って歩き出した

「みつつ！！」

坂田が廊下にでると嬉しそうな女性の声がした

「いんやー！！　でっかくなって！！　ますますみのりにてきちゃーのー！！」

坂田の母の漁師なまりが入った言葉は婆ゆずりなのだろうか

「婆ちゃん痛えって；」

京助と南、中島がこっそりと廊下に顔を出すとぽかんとしている乾闥婆けんたつばの横で坂田に頬すりしている小柄だけど恰幅のいい女性が顔を上げた

「お：お邪魔ぶっこいてます！！；」

中島が言う　と南と京助が頭を下げた

「いーえ！！　こっちこそみつつが世話になって」

浅黄色の着物を着た坂田婆が笑いながら礼を返した

「ってか婆ちゃん：他にあんまり客見えなないんだけど」

婆に抱きつかれて少し乱れた浴衣を直しながら坂田が聞いた

「そりゃアレさね：組員さんが来るかとおもってたから今日明日と予約取らなかつたンよ。今いるのは予約外の客だけさね」

坂田婆が坂田の頭をグリグリ撫で回して言った

「んだとも最近の子供ってエのはみんなメンコイ顔しとんやねえ：男も女もわからんに」

【なあ？】と言って坂田婆が乾闥婆けんだつぱに向って同意を求めた

「：僕は男ですからね」

さつき坂田が言ったことをまだ根に持っているのかにっこりと（
怖い）笑顔で乾闥婆けんだつぱが言った

「女将」

若い仲居さんらしき紺色の着物の女性が小走りで坂田婆の元にやってきた

「旦那が呼んでます」

若い仲居さんはそう言って足早に戻っていく

「いいなあ：着物姿」

南が溜息混じりに言うのと京助と中島が頷く

「そいや：爺の顔まだ見てねえな」

坂田がボソツと言った

「：一緒にこいや。爺は私じゃなくたぶんみつつに用があるんだと思うぞ」

坂田婆が言うのと坂田が自分を指差した

「おめえ等も来るけ？」

坂田婆に聞かれた京助、中島と南の三人が顔を見合わせた

「俺ら？」

そしてそういいながら坂田婆を見る

「どっかいくんだっちゃ？」

ふらふらしながらやってきた緊那羅きんならが聞く

「あんれ！！ 外人さんかい！！ やーやー：はろーはろー？」

「婆ちゃん：外人みんなに第一声でハローっていうのやめようぜ？；；

「過去に何かあったのか坂田が引きつりながら坂田婆の肩を叩いた
「そーそーニーハオかもしれないしアンニョンハセオーかもしれないな
いしねー」

南が笑って言う

「：一応言葉通じるし日本人カッコ飯で」

京助が言った

「まあどんでもいいんだけどな：ホレ！！　いくぞ」

浅黄色の袖で風を切って歩き出した

「：性格おばさんソックリだな」

「まあな」

中島が坂田に耳打ちすると坂田が遠い目をして言った

【関係者以外立ち入り禁止】と書かれた戸を開け長く続く廊下から
少し横に入ると小さな出入り口に長い暖簾がかかっていた

「へー：へー：」

南がもの珍しそうにあちこちを見ながら歩く

「俺旅館の裏側見たのはじめて：」

中島も南同様足元から天井壁などをもの珍しそうに見る

「俺旅館の人って旅館に住んでるのかと思ってた：」

京助が言うと南と中島が頷いた

「ほれ、足元気いつけんよ？」

坂田婆が戸を開けて手招きする

「おじゃましまー：」

中島が坂田に続いて中に入る

いかにも老夫婦が暮らしていますという少しレトロで懐かしい家の中
温度計のついた木彫りの熊の置物の横には【登別熊牧場】の文字

「なあ明日帰るとき時間あるなら俺熊かにゃんまげに会いたい」

南が手を上げて言った

「天気よかったらな」

坂田が靴を脱いで家に上がると京助達もソレに続く

「奥の座敷にたぶんいるとおもうから。婆はお菓子持ってくるからな」

そう言って坂田婆が反対方向に歩いていく

「こっち」

坂田が坂田婆とは反対方向に足を進める

少し線香の匂いがする茶の間を横切って旅館が見える廊下を歩く

「爺」

ガラツと木でできたすこし重そうな引き戸を開けると石油ストーブにかけられたヤカンがシュンシュンと音を立てていた

「深弦か」

紺色のドテラを着た少し白髪が生え方が少ない痩せ型の男性が背中を向けたまま坂田の名前を呼んだ

「…なんだよ」

京助と中島、南と緊那羅きんならが無言のまま坂田を見た

「…そーいや」

「お前」

「深弦っていうんだっけな」

「一瞬誰のことかわからなかったっちゃ…」

四人が言う

「…お前等な…；じゃあ南と中島はどうなんだ？」

坂田が中島と南を指差して言う

「朔夜と」

中島が南を指差す

「柚汰」

南が中島を指差す

「んで京助」

南と中島が京助を指差しながら答えた

「…なんで俺の名前だけ忘れてるか」

坂田が両手ブツチャーを中島と南にかました

「戸、閉めんかい」

坂田爺がタンの絡んだような声で言う。と緊那羅が慌てて戸を閉めた。「よくきたな深弦」

読んでいた雑誌のようなものを閉じて坂田爺が振り向いた

「またエロ本か？」

坂田が座ると京助達も各々に腰を下ろした

「俺はホレ、こ赤いビキニの子いいとおもうんだがよ」

坂田爺が嬉しそうに一旦は閉じた雑誌を開いて坂田に見せた

「爺ちゃん若いねー」

南が笑う

「まだま下も現役だがね!!」

坂田爺が自分の股間を叩いた

「健全な中学生にこんなん見せていーんかい」

坂田が笑いながら坂田爺に突っ込む

「元氣そうだな」

雑誌を座布団の下に隠しながら坂田爺が笑う

「爺もな」

坂田が坂田爺の肩を叩いた

「お前外人さんのガールフレンドなんかどうやって作ったんだ？爺にも教えろ？」

坂田爺が坂田に聞く

「いやアレは…」

おそらく緊那羅きんならのことだろうと思った坂田が緊那羅きんならを見てすこし考えた後京助を見てニヤリと笑った

「この子は俺じゃなく京助（強調）のガールフレンドなんだー（わざとらしく棒読み）」

「はっ!!!!?;」

「ブプーーーーー!!!!!!」

坂田が言う。と南と中島が吹き出した。その様子を見て緊那羅きんならが慌てる

「何？なんなんだっちゃ？；」

畳に手をつき声を殺して笑っている南の肩を揺らして緊那羅きんならがうろたえる

「坂田てめえッ！；」

京助が坂田の肩を掴んで激しく揺すった

「ほー：やるなお前」

坂田爺が京助を見て感心したように言った

「あいらいヴゅー？　へろー？」

坂田爺が緊那羅きんならの手を握って話しかけている様子を婆がおいでいた温泉饅頭を食いながら3馬鹿と京助が眺めている

「えっと：その：あの：京助く；」

ものすごく困った顔で緊那羅きんならが京助に助けを求める

「つれねえのお：冗談でもあいらいヴゅーくらい言って欲しいもんだなや：やっぱ彼氏が一番ってか？」

ようやく開放された緊那羅きんならがホッとした顔をする

「爺。話ってなんだ？」

一応一区切りついたっぽいカンジを見計らい坂田が坂田爺に聞いた

「おお！！　そうだそうだ！！　深弦」

体の向きを緊那羅きんならのほうから坂田のほうに変えて坂田爺がアグラをかきなおす

「転校する気ないね？」

「は？」

笑顔でさらっと言った坂田爺に坂田が一言返した

「お前まさかあのヘタレ男の跡継ぎになる気にいるのか？」

坂田爺が側にあったお茶を飲む

「俺はゆるさねえからな。たった一人の孫を組長なんぞにさせてたまっか。お前はココを継ぐんだろ？」

【ココ】とはこの旅館のことだろう

「みのりが俺の反対押し切って正月町に出て行って早17年：俺はあの男を許したわけじゃアねえ」

食べかけの温泉饅頭を手を持ったまま坂田が止まっている

「あんな組継ぐよりこの旅館継いだ方がお前のためだど？」

南と中島、京助と緊那羅きんならが坂田を見た

「…坂田…？」

南が坂田に声を掛けた

「みのりって誰だっちゃ？」

緊那羅きんならが京助に聞いた

「坂田のかあさん…この爺さんの娘」

京助が小声で緊那羅に返す

「文化祭の時にいた人だっちゃ？」

緊那羅きんならも小声で再度聞く

「そー…」

京助がまた小声で返す

「冗談じゃねえッ！！！」

坂田が突然怒鳴った

「うおお！？？」

その声に驚いた京助達が思わず声を上げた

「俺は組も旅館も継ぐ気はねえッ！！」

坂田が食いかけの温泉饅頭を持ったまま立ち上がった

「坂田！！ パンツ見えてる見えてる！！！」

中島が坂田の浴衣の裾を直した

「頑固なところはみのりそっくりだな…だがな！！ コレだけは譲れん！！ お前はココを継ぐんだ！！ なにがなんでも継がせる！！」

坂田爺も負けじと怒鳴る

「継がねえったら継がねえッ！！ 俺は神社を継ぐ！！」

坂田が怒鳴り返す

「ちよっとまってえーい！！！」

ソレに対して京助が突っ込む

「なんだ息子（将来の）」

坂田が京助に言う

「今はボケ禁止!!!; 冗談禁止!!!;」

京助が立ち上がって坂田に言う

「いや京助ヤツはマジだ」

南が京助の浴衣を引っ張って言った

「安心しろお前も悠もついでに幸せにしてやる!!!」

坂田が【ついで】の部分強調しながら京助の手を握って強く頷いた

「よかったな京助未来のパパでちゅよー」

中島が笑いながら温泉饅頭を食っている

「サア!!! 父と呼んでくれ!!! 息子!!!」

「呼ぶか阿呆」

坂田が清々しいさわやかな笑顔で京助の肩を叩くと京助も清々しくさわやかな笑顔で坂田の頭を叩いた

「…本題からずれてるような気がするっちゃ…;」

緊那羅きんならがボソツと言う

「そのうち元に戻ると思うからほっといていいと思いますよん?はいこれラムちゃんの分」

南が緊那羅きんならに温泉饅頭を差し出した

「とにかくだ!!!! 俺の将来は俺が自分で決めつからなッ!!!」

漁師になろうとスパイになろうとも仙人になろうとも勝手だろッ!

!

坂田が坂田爺に向って怒鳴る

「イカンッ!!! お前はココを継ぐんだ!!! 継げ!!!」

坂田爺も負けじと入れ歯を少しカコカコさせながら怒鳴る

「嫌だったら嫌だッ!!! このクサレ頑固ジジイ!」

坂田が怒鳴ると眼鏡が外れて宙ぶらりんになった

「黙らんか! このへふあつふあふいー!!!!」

怒鳴った拍子にとうとう坂田爺の入れ歯が外れて後半が聞き取れなかったがあまりお上品な言葉を言ったわけではないということがないとなわかった

「…止めなくていいんだっちゃ?;」

緊那羅きんならが温泉饅頭を手を持ちながら京助を見る

「どうやって止めろと」

湯飲みを少し傾けて中身を飲みながら京助きんならが緊那羅に聞いた

「…えと…;」

緊那羅が温泉饅頭を持ったまま考え込む

「しょうがないなあ…中島」

南が苦笑いで中島を呼んだ

「アイアイサー」

すると中島が側にあったよく旅館や会館に置いてある安っぽいアルミ製の灰皿2つを手を取った

「第一ラウンド…終了!!」

カー…カー…カー…!!!!

部屋中に灰皿と灰皿を叩き合わせた音が響き渡ると坂田と坂田爺がフンツと言ってはなれた

「一旦休憩、一旦休憩」

南と中島が坂田と坂田爺にお茶を手渡した

「闘いにはゴングが付き物だ」

京助が言うと緊那羅きんならが感心したように浅く頷いた

「言い合いばっかじゃ解決しないだろう? 何か他に方法ないの?」

南が坂田の肩を揉みながら言う

「あるなら教えろ」

坂田が坂田爺を睨みながら眼鏡をかけなおした

「ないから聞いてんじやーん;」

南が肘で坂田の肩のツボを押した

「何かないのかー? 早食いで我慢比べでも」

中島も南同様に坂田爺の肩を揉みながら言う

「フオふえーふあふあふいふいふおふあふあふふー!!」

「爺さん入れ歯入れれば?;」

坂田爺が言うと京助が突っ込んだ

「おめーらが口をとっこむなってんだ！…我慢比べ？」

入れ歯を装備した坂田爺がふと何かを考え込んだあと膝をパーンと叩いた

「よし！！ 深弦！！ 我慢比べだ！！」

「は？」

坂田と南が坂田爺を見た

「風呂で俺と我慢比べだ！！」

坂田爺が自分を親指で指しながら言う

「そっちは何人でもかまわん！！ 一人でも俺より長く風呂に入っていることができたらここを継がなくてもいい！！ だがな！！ もし俺が勝ったら何が何でも継がせるぞ！！ 勝負は今日これからだ！！」

坂田爺はそう言うと言と坂田の意見も聞かずして部屋から出ていた

「…マジかよ…」

坂田が頭を抱えて溜息を吐いた

「でもいいじゃんー！！ 勝ちゃいいんだろ？」

南がそんな坂田の背中を叩いた

「馬ッ鹿！！； 爺はこの辺りでも有名な長風呂なんだ； 勝てっこねえし…ッ；」

坂田がまたも大きな溜息をついた

「…ってか俺らも参戦せにゃあかんわけ？；」

京助が言う

「ワタシを一人にしないで…」

坂田がそういいながら畳の床にうつぶせに伸びた

「私は辞退するっちゃ；」

さっきまでのぼせていた緊那羅きんならが手を上げて辞退宣言をした

「…はあ」

脱衣場の片隅で背中^{けんだっぱ}で結んである布を解きながら乾闥婆が溜息をつく
ガラッ！！！！！！

勢いよくあいた戸に大きな目を更に大きくして乾闥婆けんたっぱが驚いた

「よっしゃー!! やるか!!」

【五十嵐亭】とかかれたタオルを肩に掛けた坂田爺が大声で脱衣場にはいつてきたかと思うとなんの躊躇いもなくポイポイと服を脱ぎ全裸になった

「爺：マンモスくらい隠せ；」

後からノロノロ続いて入って来た坂田が呆れたように言う

「同じもんついてるだろうか!!! ホレホレ!!! いくど!!!」

そのまま大股で浴場へ向う坂田爺の尻を見て坂田ががっくり肩を落とした

「：何の：騒ぎですか？」

一旦は解きかけた背中けんたっぱの布を再度結びなおした乾闥婆が聞く

「あれ？ まだ入ってなかったのか？」

京助が聞くと乾闥婆けんたっぱが頷く

「これから：入ろうとしていたのですが：」

乾闥婆けんたっぱが困ったような顔で黙り込んだ

「：また後からにします」

くるっと回れ右をして出口に向う乾闥婆けんたっぱの腕を坂田が掴んだ

「逃がすか戦力」

「は？」

腕をつかまれたまま乾闥婆けんたっぱが疑問系の声を出した

「戦力：？」

坂田の手を振り払って乾闥婆けんたっぱが聞く

「実はな：」

京助が口を開いた

「嫌です」

一通り説明を聞いた乾闥婆けんたっぱが笑顔で即答した

「いったでしょう？ 僕は静かに入るのが好きなんです」

乾闥婆けんたっぱが再び出口の方に体を向けた

「そこをなんとかーッ!!」

中島が出口に立った

「頼む!!!; お願い!!!; 俺らあがったばかりでたぶんすぐ

のぼせるッ!!!;」

南が乾闥婆けんだつばにすがりつく

「い・や・で・す」

乾闥婆がすがり付いている南を引きずって尚も出口に向おうとする

「たーのーむー;」

南に続いて坂田も乾闥婆けんだつばに抱きついた

「はなしてくださいッ!!!;」

乾闥婆が坂田と南にチョップを食らわせたが坂田も南も一向に放し
てくれる様子がない

「いいじゃん; 風呂入るくらいさー」

京助が言う

「嫌なものは嫌なんです!!! いい加減にしてくださいッ!!」

乾闥婆けんだつばが珍しく怒鳴った

「男同士じゃーんッ!! ってか俺らとけんちゃんの仲じゃーん!

!!」

南が乾闥婆けんだつばによじ登るようにして抱きつく

「どんな仲ですかッ!! 放してくださいっ!! いい加減怒りますよ
ッ!!!;」

必死に抵抗する乾闥婆けんだつばに中島もついに参戦した

「頼むってッ!!!; ただ入ってるだけでいいんだからいいじゃん;

」

中島が乾闥婆けんだつばに両手を掴んで宥めながら頼む

「俺を助けてけんちゃん!!!;」

坂田が更にすがりつく

「:コレは俺も参加したほうがいい?」

京助が乾闥婆けんだつばに聞く

「しなくていですッ!!!;」

「カマン京助!!」

南と乾闥婆けんだつばの声が被った

「どっちやねん…」

京助が口の端を上げて言った

「放してくださいってばッ!!;」

3馬鹿に押さえつけられ助けを求められている乾闥婆けんだつばが必死に抵抗する

「あ、いたいた京助…なにしてるの？」

手にイチゴ・オレをもった悠助が脱衣場に入ってきた

「坂田の人生をかけた闘いに一人でも多くの戦力をキャンペーン中…一口」

京助がそう言いながら手を出すと悠助がイチゴ・オレを手渡した

「けんちゃん嫌がつてるよ？ 助けてあげないの？」

悠助が京助を見上げる

「どうやって;」

京助がストローを囓んだ

「何の騒ぎさ」

いつもの布ではなくタオルで頭を包んだ矜羯羅こんがらが腰に手を当てながら近づいてきた

「タカちゃーんっ」

矜羯羅こんがらの後ろにいた制多迦せいたかを見つけると悠助が制多迦せいたかに抱きついた

「制多迦様せいたかずるいッ!!!」

その瞬間 慧喜えきが脱衣場に入ってきた

「…悠に監視カメラでもつけてるんかよお前は;」

京助がイチゴ・オレのパックをベコベコ膨らませた

「義兄様もッ!! それ悠助飲んでたヤツじゃんッ!!」

慧喜えきが京助の啜ええていたパックを指差しながら怒鳴った

「悠助は俺のッ!!!」

眉を吊り上げて怒鳴る慧喜えきに京助が溜息をつく

「…で…結局なにもめてるわけ？」

頭のタオルをはずして矜羯羅こんがらが3馬鹿にすぎりつかれてる乾闥婆けんたつばを見た

「嫌だったら嫌ですからッ!!! 他当たってくださいッ!!!」

乾闥婆けんたつばは矜羯羅こんがらの視線にも気付かないくらい必死で抵抗している

「…んだっぱが大声上げるなんて…よっぱどのことなの?」

制多迦せいたかが悠助の頭を撫でながら聞く

「俺の一生にかかわることッ!!! オロロ〜ン!!!」

坂田がわざとらしい泣き真似をする

「君の一生にかかわることなのにどうして乾闥婆けんたつばが必死なのさ」

矜羯羅こんがらが坂田に聞いた

「戦力」

坂田ではなく南と中島がハモって答えた

「戦力?」

矜羯羅こんがらが首をかしげる

「我慢比べのな。俺ら上がったばかりだから負けるの目に見えて

るだろ? だからまだ入ってない乾闥婆けんたつばに助けも止めてる最中」

京助がイチゴ・オレのパックを悠助に手渡した

「あー!!! 京助一口って言ったのに全部飲んだー!!!」

悠助が頬を膨らませて怒る

「ワリ; 後で買ってやるから;」

京助が苦笑いで謝ると悠助がじとつと京助を見た後パックをゴミ箱に捨てた

「僕は一人ではいるのが好きなんですッ!!!」

「そこをなんとかー!!!」

一向に進歩のない交渉がかれこれ十数分続いている

「まあ…仕方ないのかもね乾闥婆けんたつばにとっては…まだ慣れないんだね」

矜羯羅こんがらがボソツというとき制多迦せいたかが頷いた

「何が」

京助が何気に耳に入った矜羯羅こんがらの言葉に突っ込む

「なんでもないよ…それより誰と我慢比べするのさ」

さりげなく矜羯羅こんがらが話題を逸らした

「坂田の爺さん」

京助が言う

「…つき大声で入っていった人？」

制多迦せいたかが聞くと京助が頷いた

「…のさ」

制多迦せいたかがスツと手を上げた

「ハイ、タカちゃん」

中島が指名する

「…るらまだ中にいるけど…迦楼羅かるらなら勝てるんじゃないかな？」
全員が浴場への戸を見た

「まだ…って…アレから結構経ってんけど…まだ?;」

中島が浴場を指差して聞くと制多迦せいたかが頷いた

「俺らより前に入って…まだ?;」

南も聞くと同じく制多迦せいたかが頷く

「放っておけば一日中いるんちゃうか?;」

京助が言う

「…勝てる…」

坂田がボソッと呟いた

「勝てる!! 勝てるツ!!」

勢いよく立ち上がった坂田が浴衣のまま浴場に向ってダッシュして
いた

「ビバ!! 鳥!!」

南と中島も小躍りしながら坂田に続いて浴場に入っていく

「…僕たちも行く?」

腰に手を当てて矜羯羅こんがらが残されていた一同に声を掛けた

「鳥ッ!! いや! 迦楼羅君かるらッ!!」

微妙にエコーのかかった坂田に声が浴場に響いた

「…何事だ;」

檜風呂に浸かっていた迦楼羅かるらがいつもは絶対呼ばれない呼び方をされて多少顔を引きつらせながらも返事をした

「お願いがございますの！！」

浴槽の枠にかけてあった迦楼羅かるらの手をとって坂田が迦楼羅かるらを見た

「：あまり聞きたくないのだが；」

迦楼羅かるらが顔を逸らした

「一緒に打たせ湯で修行した仲じゃないッ！」

坂田が迦楼羅かるらの手に頬擦りしながら言う

「やめんかッ！！ たわけ！！； 気色悪い！！；」

迦楼羅かるらが手を引っ込めながら怒鳴った

「ひどいッ！！」

坂田が両手で顔を覆いながら中島に抱きついた

「：お前が女の子ならココで抱きしめてるんだけどなあ：」

中島がフツと遠い目をしながら笑った

「で：何の用だ？ あまり聞きたくないが：」

溜息をつきながら迦楼羅かるらが聞く

「坂田の爺さんと我慢比べしてほしいんだわ」

南が答えた

「：は？」

迦楼羅かるらが聞き返す

「坂田の爺さんとどっちが長く風呂に入ってられるか我慢比べして欲しいんだとさ」

後から入ってきた京助が話しに入ってきた

「何故ワシがコヤツの爺さんと我慢比べをしなければならないのだ？；」

「お前しか勝てそうなやつがないから」

迦楼羅かるらが聞くと3馬鹿と京助がハモった

「俺ら上がったばっかだしまだ入ってない乾闥婆けんたつばがスゲエ拒否してるしで：」

京助が口の端を上げてヘツと笑いながら言う

「…まあ…当たり前だろうな」

迦楼羅かるらがボソツと言った

「何が」

迦楼羅かるらに京助が聞く

「…いや…何でもない…が…そもそも話しの主旨が見えないからにはなんとも言えん。何故我慢比べなどすることになったのだ？」

迦楼羅かるらが湯から上がり浴槽の枠に腰掛けた

「実はですな…カクカクシカジカなんでございます」

南が言った

「わかるか！！ たわけッ！！！！」

迦楼羅かるらが怒鳴る

「漫画ならコレで通じるのにねー不便だよねえ…」

南がハツハと笑う

「…のさ」

制多迦せいたかが手を上げた

「ハイ、タカちゃん」

中島がまた指名する

「…かたの爺さん…見当たらない？」

制多迦せいたかが言う全員で浴場の中を見渡した

「…露天か？」

坂田が露天に続く戸に手をかけた

坂田が戸越に露天の方を見ても誰かが入っている様子はなく

「…サウナか？」

そう呟いて露天への戸からサウナの戸の方へ歩き戸を開けた坂田が中を見て戸を閉めた

「いねえ…」

キョロキョロと広い浴場を見渡してもザーっという打たせ湯の音しか聞こえず

「お前誰か入ってきたの気付かなかったのか？」

京助が頭に巻いていたタオルを巻きなおしている迦楼羅かるらに聞いた

「：そんなものイチイチ気付いてられるか」

垂れてきた前髪をグイグイとタオルの中に押し込みながら迦楼羅かるらが言う

「探す？」

慧喜えきが悠助にべったりくっつきながら言った

「そうだね～：～：ってえきっちゃんえきっちゃん；　ここ男湯；」
何の違和感もなく男湯に入ってきていた慧喜えきに南が突っ込んだ

「探すって言っても：」

矜羯羅こんがらがふいっと露天の方を見た

「：あっちしかないんじゃない？」

そして露天を指差す

「まあ：そうなんだけど；」

さつきは覗いただけだった露天への戸に坂田が手をかけた

「ひょー：；浴衣着てても寒みいッ！；」

少し吹雪き模様になってきていた外に出ると坂田が叫ぶ

「風呂までの距離長すぎじゃねえ？思ってたけど」

中島が続いて出て言う

「寒いから走って滑って転んじゃうよねー」

南も笑いながら言った

「：おい」

京助が前を歩いていた中島の肩を掴んだ

「なんだよ？」

中島が京助を振り返ると先頭を歩いていた坂田も振り向いた

「：足」

「足？」

京助が言うのと全員自分の足を見た

「いや：あれ：」

京助が指差した方向を全員が揃って見た

「足：だな」

「足だよね」

「…し…」

「どう見ても足だよね…」

満場一致で京助が指差したものが【足】だと認められた

「…誰の？」

矜羯羅こんがらがボソツと言う

「…お前の？」

中島が京助に言う

「いや、しっかりついていきますから」

京助が浴衣を巻くり上げ足を見せた

「じゃあ…もしかして…」

南がゆっくり坂田を見た

「…もしかして…もしかなくて…坂田爺？」

中島も即席の俳句を言いつつ坂田を見た

「爺ッ！？…」

坂田が【足】目掛けて走り出すと中島と南、京助も駆け出した

「おおお！！！！ ビンゴッ！！！！」

中島が大声を上げた

「救急車ッ！！ 救急車ッ！！！！」

南も大声を上げる

「の前に隠すもの隠すものッ！！！！」

京助も大声で言う

「爺ッ！！ 爺ッ！！！！」

坂田が坂田爺を呼ぶが坂田爺はぐったりとしたまま動かない

「落ち着け！！ たわけ！！」

迦楼羅かるらが頭に巻いていたタオルを坂田爺の腰の辺りにかけた

「栄野弟…乾闥婆けんたつぱを呼んでこい」

迦楼羅かるらが慧喜えきにべったりくっつかれている悠助に言う

「けんちゃん？ うん！！」

元氣よく返事をした悠助が中へと入っていく

「乾闥婆けんだつぱより救急車だろッ!!;」

中島なかじまが迦楼羅かるらに言った

「…かじま…乾闥婆けんだつぱは…」

制多迦せいたかが中島の肩を叩いて何かを言いかけた

「乾闥婆けんだつぱは医者より役に立つ」

迦楼羅かるらが言うとき京助と3馬鹿がきよとした顔をした

「…乾闥婆けんだつぱって…医者なのか？」

坂田さかたが迦楼羅かるらに聞いた

「正確に言くと【迦楼羅かるら専属の医者】みたいなものだね」

矜羯羅こんがらが答えた

「何!?! 鳥さんどっか悪いの?!;」

南みなみが迦楼羅かるらを見た

「誰が鳥だ!! 誰がッ!;!;」

迦楼羅かるらが怒鳴ると口から小さく炎が出た

「軽い脳震盪ですね。しばらくすれば気付きます…が…ここでは風邪引きますね…頭動かさないように中に運んでください。お尻の方の処置は気づいてからですね」

乾闥婆けんだつぱが駆けつけた従業員にてきぱきと指示を出している

「…医者みてえ…」

3馬鹿と京助が感心して頷いた

「だから乾闥婆けんだつぱは迦楼羅かるら専属の医者見たいなものなんだってば」

矜羯羅こんがらがソレに対して突っ込みを入れる

「さっきも南が聞いてたけど鳥類どっか悪いのか？」

京助が思い出したように矜羯羅こんがらに聞いた

「態度？」

「性格？」

「根性？」

坂田、南、中島が冗談交じりで言う

「…まあ…ソレもあるかもしれないけど本当ドコ悪いんだ？」

京助が再び聞く

「：僕が言うわけにはいかないよ：【時】がくれば迦楼羅かるらが直接話す時期が来ると思うから」

矜羯羅こんがらがにっこりと微笑んで言った

「また【時】かよ：；」

京助が頭をかきながら溜息をついた

「え？ 何？ 何？ 【時】って何？」

南が京助に聞く

「：うすけと京助にとっても僕達にとっても：南達にとっても凄く

大事な事」

制多迦せいたかが小さく言った

「え？ 何：俺らにも関係あんの？」

坂田が聞く

「というか：生きとし生けるもの全てだね」

矜羯羅こんがらが答える

「特に京助と悠助：【時】は君たちを待っているから君達が目覚めるのを」

そう付け加えた矜羯羅こんがらが目を伏せた

「目覚め：って俺起きてるンですが」

京助が言う

「：うじゃなく」

京助にすかさず制多迦せいたかが裏手ツツコミを繰り出した

「おお！！ ナイス突っ込みタカちゃん！！」

中島が親指を立てると制多迦せいたかも笑って親指を立てた

「：だから：制多迦せいたかに変なこと教え込まないでくれる？」

矜羯羅こんがらが溜息をついた

「ドクダミの葉をよく洗って汁が出るまでよく揉んでソレをつけてください」

翌日見送りに起きだしてきた坂田爺けんだっぱに乾闥婆くんとらが言う

「本当に効くのか？」

京助が乾闥婆けんたっぱの肩に寄りかかりながら聞いた

「やって見るやって見ないはご本人の自由です」

乾闥婆けんたっぱがにっこりと笑った

「いやゝゝさんきゅさんきゅ　これ俺の尻の穴も安泰だ」

坂田爺がハッハと笑って乾闥婆けんたっぱの肩をバシバシ叩いた

「…痛いんですが」

笑顔で言った乾闥婆けんたっぱだったがあからさまに嫌がっている様子がヒシヒシと伝わってくる

「深弦！！」

坂田爺が坂田婆と話していた坂田を呼んだ

「いいか！今回はオジャンになってまったが…俺は諦めたわけだねえからな！」

そう言って坂田爺が笑う

「…また来てくれな」

坂田爺が乾闥婆けんたっぱの頭をクシャクシャと撫でて坂田の方に歩いていく

「…早くよくなるといいな坂田の爺さんの痔」

京助が笑をこらえている様子で言った

「ドクダミは結構効きますから」

乾闥婆けんたっぱがさらッと言う

「お前…何でもできんだな」

京助が言う乾闥婆けんたっぱが首を振った

「…僕が一番したいことは僕には絶対できないことですから」

いつもの同じ様な笑顔で言った乾闥婆けんたっぱだったがどこか悲しそうだった

「おーい！！！！　京助ー！！　出発すんぞー！！」

中島が京助に向かって叫んだ

「じゃあ僕はそろそろ迦楼羅かるら連れて先に戻りますね」

乾闥婆けんたっぱが旅館の方に向って歩き出した

「…もしかしてまた風呂はいつてたのか？」

乾闥婆けんたっぱの後姿を見ながら京助が呟いた

$$\begin{array}{c} \vee \\ i \\ 2 \\ 2 \\ 5 \\ 1 \\ 8 \\ | \\ 2 \\ 5 \\ 7 \\ 5 \\ \wedge \end{array}$$

【第六回・伍】茶柱の心（前書き）

お茶を飲むと何故かほっとする

それはどこの国でもどこの時代でも同じのようです

【第六回・伍】茶柱の心

コポコポという音をさせながら急須に注がれていくお湯の湯気で向こう側がぼやけて見える

「…眼鏡曇った；」

その湯気で坂田の眼鏡が白く曇った

「粗茶で御座います」

京助が淹れたてのお茶がはいった湯飲みを差し出した

「結構なお手前で」

南が受け取って深々と頭を下げた

「三回まわすんだっけか？ 茶」

中島が湯飲みを取って聞く

「四回じゃなかったか？ アレ？」

京助も急須を置いて湯のみをもった

「ってかまわす事に何か意味あんのか？ アレ」

曇った眼鏡を拭いてかけなおした坂田が言う

「…さあ？」

南がズツと音を立てて茶を一口飲んだ

「お邪魔するっちゃ」

緊那羅きんならが手にお盆を持って部屋きんならの戸を開けた

「お！ まってました羊羹！」

京助にお盆を手渡すと緊那羅きんならが戸を閉めて座った

「この年寄りくさいカンジがまたいいですなあ…緑茶に羊羹…ンベリグー！」

中島が一口サイズに切ってある羊羹を口に入れた

「なんだかんだ言ってもうまいんだよねえ…やっぱり俺たち日本人だしねえ」

南も羊羹を一つ手に取った

「お前も飲む？」

京助が緊那羅きんならに聞いた

「あ：うん欲しいっちゃ」

緊那羅が答える

「ちょこつと劇場！　：茶、ほしいっちゃ」

「：くだらねー！ー！ー！ー！ー！ー！」

中島が言うのと坂田がくだらないといいながらも笑って突っ込んだ

「：中島；」

緊那羅きんならが溜息をついた

「真面目にくだらねー！ー！ー！ー！ー！ー！」

急須から湯飲みに茶を淹れながら京助も突っ込んだ

「ほれよ」

湯気の立つ湯飲みを京助が差し出した

「あ、ありがとだっちゃ」

ソレを緊那羅きんならが笑顔で受け取る

「あ」

口をつけようとして緊那羅きんならが声を上げた

「なした？」

坂田が緊那羅きんならに聞く

「目玉のオヤジでも入浴してた？」

南が冗談を言いながら緊那羅きんならの湯のみを覗き込んだ

「お！　茶柱！」

緊那羅きんならの持つ湯飲みの中にプカプカと縦に浮かんだ茶の葉の茎の部分

「へー！めっずらしー！」

中島が言う

「俺はじめて見たー：本当に縦に浮かんでやがんのー」

南が感動している

「淹れたの俺！淹れたの俺！」

京助が少し興奮気味に自己主張する

「ハイハイわかったわかった：にしても：今時の急須で茶柱なんかめったにできないんだぞー：俺も微妙感動」

坂田が湯飲みを覗き込むと湯気でまた眼鏡が曇った

「俺おかわりしていいか？ 茶ー…」

中島が湯飲みを差し出した

「申し訳ございませんが二杯目からはセルフとなっておりますおりますのん」

京助が急須を中島に差し出した

「ケッチーでございますのん」

中島が急須を受け取りポットからお湯を注いだ

「ついでにおねがいますのん」

南が便乗！！　といわんばかりに自分の湯飲みを中島に差し出す

「俺も欲しいで御座いますのん」

坂田も同じく差し出す

「てめえらずるいで御座いますのん」

中島が二人にチョップをした

「のんのんのんうざいですのん」

京助が言う

「言い始めたのは貴方ですのん」

京助に坂田が突っ込んだ

「…馬鹿だっちゃ…」

緊那羅きんならが小さく呟いた

「ってか茶ッ葉変えないと薄いんじゃないか？」

「早く言えー…」

京助の言葉に中島が急須（お湯入り）を片手に裏手で突っ込んだ

「さすがに四人入れると出がらしだよねー…」

南が頷く

「よし！変えてこい京助」

坂田が京助の腰を叩いた

「俺かよ；」

京助が湯飲み片手に坂田の腰を叩き返す

「私がいくっちゃ；」

緊那羅きんならが立ち上がった

「手間かけるねえ…ラム子」

南が病弱な母親（仮）を真似しながら言う

「…本当にそう思ってるんだったらラム子はやめてほしいっちゃ；」
苦笑いとそんな言葉を残して緊那羅きんならが急須を持って部屋から出て行った

「ほんに京助いい嫁もろうて…母さん嬉かとよ」

南がまた病弱な母親（仮）の真似をしながら今度は京助に言った
「誰が嫁だ誰の嫁だ；」

京助が二回南を蹴った

「ラムちゃんって中性だよな何かさ…こう…ねえ？」

南が【こう…ねえ？】といいながら坂田を指差した

「何故俺に指を向ける；…まあ確かに…最近特にだな…ねえ？」

坂田が南の指を掴んで中島に向けた

「初対面の時はパツと見男だってわかったけどさ…ねえ？」

今度は中島が南の指を掴んで京助に向けた

「こないだ温泉行ったときにすっかりついてただろが；…ねえ？」

そして京助も南の指を掴んだ

「…ねえ？」

全員で言う

「まあ何だっていいじゃん緊那羅きんならは緊那羅きんならだろ」

京助がそう言って南の指を離れた

「私京助のそんな細かいこと気にしないところ好きよ」

坂田が頬に手を当てて少し体をねじった

「いやーんずるいわミツコ！私だって好きなのに！」

南が坂田を押した

「そういうなら私だってそうよ！京助君！私の愛っていうか私を受け取ってー」

中島が京助にガバツと抱きついた

「私貴方たちのそんな超馬鹿っぽいところ大好きよ」

中島に抱きつかれたまま京助が投げキッスをした

「あれ？ 乾闥婆…？」

急須を持って台所にきた緊那羅が先がクルンとなっている後ろ髪を見て声を掛けた

「…緊那羅？」

振り向いた乾闥婆が緊那羅に歩み寄る

「他の方たちは？ いらないのですか？」

台所に入ろうと足を進める緊那羅について乾闥婆も歩く

「京助の部屋に中島達がいるっちゃ。ハルミママさんと慧喜と悠助は買い物だっちゃ…迦楼羅は？」

急須をシンクの上に置いて戸棚から茶っ葉の入っている円柱の缶を取り出した

「迦楼羅は【上】に呼ばれて…それはお茶ですか？」

乾闥婆が円柱の缶を珍しそうに見た

「あ…そうだっちゃこの中にお茶の葉がはいってるんだっちゃ」

ポンっという音をさせて緊那羅が蓋を外した

「貸してください」

乾闥婆が手を差し出した

「え？」

緊那羅がきよとした顔で乾闥婆を見る

「僕が淹れます」

につこりと乾闥婆が笑って言った

「…うまー…」

一口お茶を飲んだ3馬鹿と京助が声をそろえてハモった

「これ本当さっきと同じ茶？」

南が乾闥婆に聞く

「淹れ方にも各々のお茶にあった淹れ方があるんです」

乾闥婆が湯飲みを持って言った

「へー…ただお湯入れて色出ればうまいってわけじゃねーんだ？」
中島が湯飲みの中を見ながら言う

「いや、まいった：真面目にうまいわコレ」

坂田が拍手すると南、中島と京助も湯飲みを置いて拍手した

「うん：おいしいっちゃ」

緊那羅きんならも乾闥婆けんたつばに笑顔を向けた

「お茶一つで拍手もらえるんですかここでは」

口ではそう言っているけどことなく嬉しそうな乾闥婆けんたつば

「さっきは茶柱で感動、今度は味で感動：茶って感動が尽きないナ
ア」

南がしみじみといった

「お茶の心は日本の心ってか」

京助が湯飲みの中のお茶を飲み干した

「茶柱？」

乾闥婆けんたつばが京助を見た

「そ、さっき立ったんだ」

中島が言う

「ラムちゃんのお茶にさーだから感動してたんだ」

南が残っていた羊羹を摘んだ

「茶柱見たら縁起いいんだよな？」

中島が聞く

「あれ？ 願いかなうんじゃなかったっけ？」

坂田がソレに対して答える

「なにしろおめでたいんだよな？ 茶柱」

京助が言う

「ガッフツ」

「汚い」

中島が大きなゲップをすると乾闥婆けんたつばがすかさずチョップを繰り出した

空になった湯飲みが6つ、空になった皿が一枚

「お邪魔しましたー！！」

南が片手を上げて玄関の戸を閉めた

京助が部屋に戻ると乾闥婆けんだつばが湯飲みをお盆に乗せているところだった

「わりいな；」

京助もしゃがんで湯飲みをお盆に乗せる

「いえ：いいですよ」

乾闥婆けんだつばがにっこり笑って最後の湯飲みをお盆に乗せた

「：なあ」

立ちあがろうとした乾闥婆けんだつばに京助が声をかけた

「：なんです？」

乾闥婆けんだつばがお盆を持ったまま京助を見た

「いいかげん教えてくれないかね？」

京助が真顔になった

「お前たちのこと、そして：【時】のこと」

京助が言うとき乾闥婆けんだつばが表情を曇らせた

「一体なんでお前等は来てるんだ？ どうして俺と悠助なんだ？
な
んで：」

「いっぺんに聞かないで下さい」

次から次へと質問を投げかけてくる京助の頭を乾闥婆けんだつばが湯飲みの乗ったお盆で潰した

「：わかりました：少しだけ：話します」

溜息をついて乾闥婆けんだつばがお盆を床に置いた

「その前に」

乾闥婆けんだつばが窓の方に目を向けた

「その窓、たぶん凍ってて開きませんよ迦楼羅かるら」

京助が窓を見ると見覚えのある布がハタハタと風に靡いていた

「：よくわかったな；」

「毎度のことですから」

顔を引きつらせながら京助が言うとき乾闥婆けんだつばがにっこり笑って言った

「また窓から入ろうとしたっちゃ？；」

服の裾に雪をつけた迦楼羅かるらを見て緊那羅きんならが苦笑いで言った

「だってだなッ！；」

雪を払いながら迦楼羅かるらが声をあげた

「積もった雪で窓に届くようになって入ってこれると思ったんだろ」
京助が言くと凶星だったらしく迦楼羅かるらはふいっと横を向いた

「学習能力皆無なんだやな」

ゼン（コマ）がケラケラと犬の姿のまま笑った

「な…ッ！…！」

迦楼羅かるらが顔を赤くしてゼン（コマ）を見た

「駄目駄目なんだやな」

同じくケラケラとゴ（イヌ）が笑う

「やかましいッ！！ たわけッ！！！」

ガ…ッ！！ と迦楼羅かるらが怒鳴ると紅蓮の炎が口から吐かれた

「だあッ！！！」

「火…ッ！…！」

京助と緊那羅きんならが爪先立ちになって炎を避けた

「やめてください」

「だっ！！！」

乾闥婆けんたつばが迦楼羅かるらの髪を引っ張った

「どうしてきちんと玄関から入ってこないんですか」

グイグイと髪を引っ張りながら乾闥婆けんたつばが言う

「わざわざ雪の中に入って服を濡らさなくても入ってこられたでしょう？」

につこり笑っているがかなりご立腹のよう乾闥婆けんたつばがさらに迦楼羅かるらの髪を引っ張っている

「いだだだだッ； 髪を引っ張るなどいっているだろうがッ！！！」

髪を押さえて迦楼羅かるらが怒鳴る

「…引っ張りやすそうな髪してるから悪いんだやな」

ゴ（イヌ）がボソつと言った

「まずは何から話せばいいのだ？」

迦楼羅かるらが胡坐をかいて床に座ると京助、乾闥婆けんたつばそして緊那羅きんならも腰を

下ろした

「ってかまず何から聞けばいいんだ?;」

京助が迦楼羅かるらに聞く

「聞きたいこと沢山あるみたいだっちゃね;」

緊那羅きんならが苦笑いをした

「そりゃそうだろ; いくら俺が細かいこと気にしないってもさあ
:ねえ? 空飛んだり水操ったりいきなり消えたり:」

京助が指折り数えて言う

「弟に妻ができたり?」

「そうそう:って:お前等なあ;」

京助が振り返ると悠助と慧喜えきが買い物袋を手てに部屋に入ってきた

「ただいまー!! けんちゃんかるらんいらっしゃいー」

悠助が笑顔で二人に手を振った

「おかえりなさい悠助」

乾闥婆けんだつばがにっこり笑顔を返した

「やっぱ話すんだ?」

慧喜えきが迦楼羅かるらを見た

「:少しだけだがな:」

迦楼羅かるらが表情を曇らせた

「【上】に何か言われた?」

慧喜えきが言ういと迦楼羅かるらが小さく頷いた

「:じゃあ話すのもう少し待ったら? :お二方もここに来ると思

う」

慧喜えきが上着を脱いだ

「先、越されたね」

矜羯羅こんがらが机の上に腰掛けて微笑んだ

「:うだね:」

制多迦せいたかが壁に背を付けてそのままずると床に座った

「お前たちも【上】に:呼ばれたようだな」

迦楼羅かるらが言うせいたかと制多迦せいたかが頷いた

「おっし！！ 面子もそろったし：話してもらおうか」

京助が膝をパンッと叩いて言った

「何から？」 「何からです？」

その京助の言葉に対して乾闥婆けんたつばと矜羯羅こんがらが同時に聞き返しそして顔を見合わせるとお互いにっこりと微笑んだがどこか怖い

「：：： 一番何を聞きたいのだ京助」

迦楼羅かるらが京助に聞く

「：じゃあまず： 【時】 ってやつから：」

京助が迦楼羅かるらを真っ直ぐ見て答えた

「：いきなり核心か：まあ：いいだろう」

迦楼羅かるらが一呼吸おいて口を開いた

【時】 というのはだな：その：なんだ： 【時】 だ」

「わかんねえよ」

迦楼羅かるらが言うと京助が突っ込んだ

「【時】 というのはいわば一種の境目です」

乾闥婆けんたつばが言う

「境目？」

京助が迦楼羅かるらから乾闥婆けんたつばに視線を移した

「そう：そしてその境目である 【時】 がきて：これからが決まるんだ」

矜羯羅こんがらが付け足した

「：わかったか？」

そして迦楼羅かるらが締めた

「：いやお前説明してないし：」

京助が迦楼羅かるらにすかさず突っ込む

「ってえとアレか？ その境目である 【時】 が来たときに何かやってこれから：がどうなるか：ってのか？」

京助が頭でまとめながらブツブツ言う

「【時】 に関して答えられることは今はコレくらいです」

乾闥婆けんだつばが言った

「：他には？」

矜羯羅こんがらが頬に手を当てると腕の輪がカチャリと鳴った

「他：他：；」

京助が次に何を聞こうか必死で考えている

「もう終わりか？」

迦楼羅かるらが言った

「終わりじゃねーけど聞きたいことテンコブリモリでどれから聞けばいいんだかわっかんねーんだよ！！；」

京助が怒鳴った

「慧喜えきさんとかとかるらとかってどこからきたの？」

悠助が慧喜えきの膝の上で言うと言と視線が悠助に集中した

「【天】です」「【空】だよ」

乾闥婆けんだつばと矜羯羅こんがらの言葉が重なると両者再び（どことなく怖い）笑

顔をかわした

「：別々なのか？」

京助がボソツと言う

「：う。僕と矜羯羅こんがらと慧喜えきは【空】から迦楼羅かるらと乾闥婆けんだつばと緊那羅きんならは

【天】からココに来てる」

制多迦せいたかがあくび混じりに言うと言と矜羯羅こんがらが制多迦せいたかの頭をどついた

「ぶっちゃけ：お前等って敵同士なのか？」

京助が言うと言と悠助が体を捻って慧喜えきを見た

「慧喜えきさん：」

眉毛を下げた悠助の頭を撫でて慧喜えきがにっこり笑う

「今は敵同士じゃないよ悠助：だからそんな顔しないで？それにもし悠助が【天】にいても俺は悠助の味方だから」

慧喜えきの言葉に安心したのか悠助が笑顔になる

「【今は】って：なんだよ；　ってか俺らも関係あんのか？」

京助が悠助と慧喜えきのバカップルぷりから何気に目を逸らして迦楼羅かるらを見た

「貴方たち：京助と悠助は【時】の：そうですね：例えるならば【時】を鍵のかかった扉として：京助と悠助はその扉を開ける【鍵】ということにしておきましょう」

乾闥婆けんだつばが説明する

「君たち二人どちらかが【天】でどちらかが【空】の鍵になる：」

矜羯羅こんがらが付け足した

「：京助：私が初めて京助に会ったとき言った事覚えてるっちゃ？」

緊那羅きんならが京助に聞いた

「覚えてると思うか？」

京助が即答すると緊那羅きんならが溜息をついた

「私は京助を【滅するもの】か【守るもの】かって言ったんだっちゃ」

緊那羅きんならに言われてしばらく考え込んでいた京助が思い出したように顔を上げた

「ああ！　そういうそんなこと：ってか待てよ：滅するってことは：【滅する】の【滅】って【消滅】の【滅】だよな？」

京助が聞くと迦楼羅かるらが頷いた

「もしもだ：もしも京助：お前が【空】側の鍵とわかったらワシ等

【天】は【天】の鍵である悠助を守りつつ：」

迦楼羅かるらの声がだんだん小さくなっていく

「：【空】の鍵のお前を：」

小さな声なのに部屋の中に迦楼羅かるらの声が響いた

シン：となった部屋の思い空気が流れる

「：慧喜さん：あの：僕：」

その空気に耐えられなくなったのか悠助が慧喜を見た

「：大丈夫：」

慧喜えきが精一杯の笑顔で悠助を抱きしめる

「悠助は俺が守るから：大好きだよ悠助」

小さく慧喜えきが言った

「京助：私は：」

そんな慧喜えきを見ていた緊那羅きんならが京助に声を掛けた
「私は…っ…」

パンツ！！

手を叩き合わせた軽い音が沈黙を流した
その音の主は乾闥婆けんだつばだった

「…けんちゃん…？」

悠助が乾闥婆けんだつばをに声を掛けると乾闥婆けんだつばがにっこりと笑顔を返した
「お茶淹れますね」

そしてそのまま立ち上がり戸口へと歩く

「お茶…って…」

京助が少し驚いた表情で乾闥婆けんだつばを見た

「…京助、緊那羅きんなら…そして悠助…手伝ってくれませんか？」

体を半分廊下に出して乾闥婆けんだつばが京助と緊那羅きんなら、悠助を指名した
「うん！」

悠助が元氣よく返事して慧喜えきの膝から立ちあがった

「悠助がいくなら俺もいく」

悠助の後を追って慧喜えきも立ち上がる

「え…あ…うん」

緊那羅きんならも立ち上がり戸口に向って歩く

「俺も…」

京助が自分を指差して言うのと乾闥婆けんだつばが微笑みながら頷いた

「…乾闥婆…」

迦楼羅かるらが乾闥婆けんだつばを呼ぶと乾闥婆けんだつばがその笑顔のまま迦楼羅かるらを見た

「…僕に話させて下さい」

京助が廊下に出ると乾闥婆けんだつばが戸を閉めた

カチチチチ…ボツ

という音がしてガスコンロに青い火がついた

火力を最大にしてその上にやかんを乗せる

「湯のみさつき下げたやつ洗ってつかっていいっちゃね」

緊那羅きんならが腕まくりをして食器洗い用のスポンジを手に取った

「俺はなにすりゃいいんだよ； やることねえなら戻って；」

京助が頭をかきながら言う

「手を動かしながら聞いてください」

乾闥婆けんだつばが言うと同が揃って顔を見合わせその後 乾闥婆けんだつばに視線を

向けた

「慧喜えきは…知っていると思いますですが口を挟まないで下さいね」

乾闥婆けんだつばが慧喜えきを見て言った

「…わかったよ」

少し膨れて慧喜えきが言う

「ありがとうございます…京助、そして悠助、緊那羅きんなら…今から僕が話すことは前の【時】の出来事です」

乾闥婆けんだつばがお茶ツ葉の缶を手話し始めた

「え？ 何？ 前の【時】って…前にもあったのか？」

京助が乾闥婆けんだつばに聞く

「【時】は繰り返します…何度も何度も…そうやって今ができていくのです」

コトリとお茶ツ葉の缶をテーブルに置き乾闥婆けんだつばが目を伏せた

「…わけわからん；」

京助が緊那羅きんならを見た

「私も前の【時】の事は全然わからないんだっちゃ；」

湯飲みを洗い終えた緊那羅きんならがまくっていた袖を下ろしながら苦笑いを京助に返した

「だから貴方も呼んだんです」

乾闥婆けんだつばが言う

「僕全然わかんない…」

悠助が慧喜えきを見上げた

「後からわからないところおしえてあげるよ悠助」

慧喜^{えき}が笑顔で言って悠助を抱きしめる

「前の【時】が訪れた時：緊那羅^{きんなら}貴方が今おかれている状況に迦楼^{かる}羅^らがいました」

乾闥婆^{けんたつば}が緊那羅^{きんなら}を見た

「え：私の今の状況：て」

緊那羅^{きんなら}が首をかしげる

「【天】か【空】かの見極め役です」

「あ：」

乾闥婆^{けんたつば}に言われて緊那羅^{きんなら}が何か思い出したように小さく声を上げた

「そして前の【時】の：【時】という扉を開ける為の二人の【鍵】の名前が：」

乾闥婆^{けんたつば}が少しの間沈黙した

「：けんちゃん？」

心配した悠助が乾闥婆^{けんたつば}をの名前を呼んだ

「：名前は【沙羅^{さろ}】と【沙汰^{さた}】：」

乾闥婆^{けんたつば}が小さく二つの名前を口に出した

「名前のつながりからわかるかもしれませんが：姉弟でした」

カタカタとヤカンの蓋が鳴り出した

「そして：血の繋がりのない：しかし兄弟のような存在がもう一人

：」

乾闥婆^{けんたつば}が一旦言葉を切るとしばしの沈黙が訪れた

「：【沙紗^{さしや}】？」

京助が前に慧喜^{えき}が、そして迦楼羅^{かるら}が口にした【沙紗^{さしや}】という名前を小さく言った

「：そうですね：よくその少ない脳みそで覚えていましたね」

乾闥婆^{けんたつば}が笑顔で頷いた

「ねえねえ鍵になったのは誰なの？」

悠助が言った

「【鍵】になったのはね：」

「慧喜^{えき}」

慧喜^{えき}が悠助に向って答えようとしたのを乾闥婆^{けんたつば}が止めた
「…わかったよっ!!」

ぷくーっと頬を膨らませて慧喜^{えき}がフンっと横を向いた

「悠助は京助が好きですか？」

乾闥婆^{けんたつば}がいきなり悠助に聞いた

「うん！」

悠助が笑顔で大きく頷いた

「京助は？」

「は？」

そして今度は京助に聞く

「京助は悠助が好きですか？」

悠助が京助の方を見た

「…まあ…うん」

何を照れているのか何が恥ずかしいのか少し顔を赤らめて頭をかきながら京助が頷く

「俺は？」

慧喜^{えき}が悠助に聞く

「僕^{えき} 慧喜^{えき}さんも好き」

慧喜^{えき}を見上げて満面の笑みで悠助が答えると慧喜^{えき}が安心したように笑顔で悠助を抱きしめる

「ハイハイ； ごちそうさま；」

京助がそんな二人から目を逸らしていい加減カタカタとうるさくなってきたヤカンの火を止めた

「緊那羅^{きんなら}」

突然に名前を呼ばれて緊那羅^{きんなら}が慌てて乾闥婆^{けんたつば}を見る

「…貴方の行動…昔の迦楼羅^{かろうら}そっくりです」

「え」

乾闥婆^{けんたつば}が言うと視線が一気に緊那羅^{きんなら}に集まった

「…お前そのうち【たわけ】とか一人称【ワシ】とか竜田揚げとか

好物になったりするんの？」

京助がヤカンをコンロから下ろしながら緊那羅きんならに言う

「…想像できない」

慧喜えきが悠助の頭に顔を埋めて笑を噛み締めているからなのか肩を震わせている

「やっぱり後ろに【っちゃ】がつくとして…口癖…たわけだっちゃ？」

「あははははははは！！」

京助が言うとき慧喜えきが声を上げて笑い出した

「なっ…」

緊那羅きんならが顔を赤くして慧喜えきと京助を見た

「そんなこと言わないっちゃッ！！」

緊那羅きんならが怒鳴る

「慧喜さん楽しそう」

悠助を抱きしめたまま大笑いしている慧喜えきを見て悠助も笑う

「…まったく…僕は笑い話をしたわけではないのですけれど」

乾闥婆けんだつばが溜息をつく

「乾闥婆けんだつばが変なこと言うからわるいんだっちゃッ！！」

緊那羅きんならが乾闥婆けんだつばに向かって怒鳴った

「何を騒いでいるのだ」

緊那羅きんならの声か慧喜えきの笑い声かはたは両方かが京助の部屋まで届いていたらしく部屋に残っていた面々が台所の暖簾をくぐってきた

「うっわ狭ッ！！」

京助がシンクの上に座った

「本家本元登場…プクク」

慧喜えきが迦楼羅かるらを見てまたこみ上げてきた笑いを必死で押し殺している

「慧喜ッ！！」

緊那羅きんならがそれを見て怒鳴る

「一体何なんだ」

迦楼羅かるらが首をかしげた

「いえ：ただ昔の貴方と今の緊那羅きんならが似ているということを話していたのですが：ご覧の通り笑い話になってしましまして」
乾闥婆けんだつぱが溜息をついた

「というか：この面々に真面目に話を聞けっということ自体はじめから少し無理っぽいとか思わない？」

矜羯羅こんがらがしれっと言った

「：確かにな」

迦楼羅かるらが矜羯羅こんがらに同意する

「ちよっとした可能性にかけてみたのですが：まだ早かったみたいですね」

再び深く溜息をついた乾闥婆けんだつぱが急須にお茶ッ葉を入れる

「話し終わりなの？」

今だクツクと微妙に笑っている慧喜えきに悠助が聞いた

「：ようはもう終わりみたいだよ」

制多迦せいたかが笑いが止まらない慧喜えきの代わりに答えて悠助の頭を撫でた

「せっ：制多迦せいたか様ずるいっ！！」

笑いすぎて目尻に涙を溜めながらも慧喜えきが悠助の頭の上から制多迦せいたかの手を払った

「僕全然わかんなかった：」

悠助がしゅんとなる

「安心しろ悠。俺もサッパリわからなかった！！」

「：そこは威張るところじゃないと思うっちゃ：」

京助が胸を張って主張すると緊那羅きんならが横で小さく突っ込んだ

「どこまで話した？」

迦楼羅かるらが乾闥婆けんだつぱの横に立ち小声で聞いた

「：沙汰と沙羅：そして：沙紗との関係：の冒頭のみです」

急須に湯を注いで乾闥婆けんだつぱが静かに急須を回しながら答えた

「そうか：」

乾闥婆けんだつぱの手の動きを黙ってみながら迦楼羅かるらが呟く

「辛いなら：ワシが話すぞ？」

迦楼羅かるらが言うけんだつぱと乾闥婆けんたつぱの手が止まった

「…いえ…自分の…僕の【過去】ですから」
につこりと乾闥婆けんたつぱが笑う

「…ワシの【過去】でもある」

まっすぐ乾闥婆けんたつぱを見た迦楼羅かるらが言う

「…そうですね…でも…僕が伝えたいんです」

並べられた湯飲みに少しずつ急須の中身を注ぎながら乾闥婆けんたつぱが言った

「…あんまり気負いしないほうがいいんじゃない？」

突然 矜羯羅こんがらが乾闥婆けんたつぱの肩を叩いて言った

「な…」

いきなりのことで少しテーブルにお茶をこぼした乾闥婆けんたつぱが顔を上げて台所から出て行く矜羯羅こんがらの背中を見た

「…まはまだ【敵】じゃないしね喧嘩したら悠助が困るから」

制多迦せいたかが迦楼羅かるらの両肩に手を置いてにつこり笑って乾闥婆けんたつぱを見た

「…んがらも…前の矜羯羅こんがらとずいぶん変わった。たぶん京助と悠助が変えたんだと思う」

迦楼羅かるらの両肩に置いた手を動かして迦楼羅かるらの肩を揉みながら制多迦せいたかが言う

「…きは止められないし変えられないけど僕も矜羯羅こんがらも緊那羅きんならと同じく【二人】を守りたいんだ…」

そう言いながら制多迦せいたかが乾闥婆けんたつぱに目を向けた

「…めんね…前の【時】の時にこんな考えもってなかった…だから…」

「いいんです」

こぼれたお茶を拭きながら乾闥婆けんたつぱが制多迦せいたかに笑顔を向けた

「もう…過ぎたことです」

湯気の立つ人数分の湯飲みを見て乾闥婆けんたつぱが言った

「あ…」

乾闥婆けんたつぱが声を上げると一同が乾闥婆けんたつぱに目を向けた

「どうしたの？ けんちゃん？」

悠助が乾闥婆けんたつばに声をかけた

「乾闥婆けんたつば…？」

迦楼羅かるらも続いて乾闥婆けんたつばを呼ぶ

「…？」

京助が乾闥婆けんたつばの視線の先の湯飲みを覗きこんだ

「お！ 茶柱ちすゑ！！ 本日二回目ッ！」

プカプカと緑色の鮮やかな茶の中に浮かぶ小さな柱が浮き沈みするたびに波紋が広がっては消えていく

「ほお…珍しいな」

迦楼羅かるらが椅子の上に上って上から見下ろした

「僕も見たい」

悠助が言々と制多迦せいたかが悠助を抱き上げようとした

「俺がやります制多迦せいたか様ッ！」

悠助を奪い取るかのように慧喜えきがすばやく悠助の腰に手を回して抱き上げた

「あ…ありがと慧喜えきさん」

悠助が笑顔で慧喜えきに向って言うのを制多迦せいたかが苦笑いで見ている

「すっかりライバル視されちゃってるっちゃね」

緊那羅きんならが制多迦せいたかに言う

「…うだね…； でも…あんなに嬉しそうな楽しそうな慧喜えき今まで

見たことないから…」

制多迦せいたかが慧喜えきを見ながら微笑んだ

「…あ いいや」

悠助を抱き上げてにこにこしている慧喜えきは本当に嬉しそうでおもわ

ず緊那羅きんならも笑顔になった

「…んとう…京助と悠助って…不思議」

制多迦せいたかが小さく言った

「…くも…変われるかな…前の僕じゃない僕になれるかな」

胸に下げてある飾りを握って制多迦せいたかが言う

「…制多迦せいたか…？」

目を閉じて飾りを握ったままの制多迦せいたかを緊那羅きんならが覗き込むと同時に制多迦せいたかの頭から小気味いい音がした

「…たい；」

頭をさすりながら制多迦せいたかが向けた視線の先には台所の入り口に背中を預けている矜羯羅こんがら

どうやらいつものごとく玉を飛ばしたらしい

「…てたわけじゃないんだけど；」

制多迦せいたかが懸命に寝てはいなかったことを矜羯羅こんがらに訴える

「…変われるんじゃない？ 僕だって変わりつつあるの…自分でもよくわかるもの」

手を腰に当てて制多迦せいたかの方に体ごと向いた矜羯羅こんがらの口元が微笑を浮かべる

「…りがと」

制多迦せいたかが矜羯羅こんがらに向って微笑んだ

「茶柱とは…縁起がいいな」

迦楼羅かるらが茶柱の立った湯飲みを手にとった

「しかも今日は二回目なんだぜ！一回目は俺が淹れたヤツにたつてさあ〜」

京助が迦楼羅かるらの肩に手を置いて笑う

「茶柱立つと何かいいことあるの？」

慧喜えきに抱きかかえられたまま悠助が聞く

「願い事がかなうとかいいことが起こるとか何だかんだいってたぞ？」

京助が3馬鹿がいた時に言い合ったことを思い出して言う

「誰が？」

悠助が京助に聞いた

「は？」

京助が聞き返す

「お茶を淹れた人の願いがかなうの？」

飲んだ人の願いがかなうの

？」

悠助が再び聞く

「あゝ…？ …どうなんだべ？；」

京助が頭を掻きながら何気に迦楼羅を見た

「…ワシを見るな；」

迦楼羅かるらが京助の視線から逃げて乾闥婆けんたっぱを見る

「どっちなんでしょうね」

乾闥婆けんたっぱがにっこり笑って悠助に言った

「淹れた人ならけんちゃんの願い事がかなうんだね」

悠助が笑顔で乾闥婆けんたっぱに言う

「僕の…願いですか…？」

乾闥婆けんたっぱがボソツと言う

「けんちゃんの願い事って何？」

悠助が乾闥婆けんたっぱに聞く

「僕の願いは…」

乾闥婆けんたっぱがちらりと目を向けた先には湯飲みの中を見たままの迦楼羅かるら

「…お茶冷めますね」

乾闥婆けんたっぱがにっこり笑ってお茶の入った湯飲みをお盆に乘せだした

「けんちゃん？」

悠助が乾闥婆けんたっぱに声を掛けると笑顔だけが返ってきた

「てかさ全員ここに集まってんだし別に茶ココで飲んでもいいんじゃないねえ？」

京助が言う

「駄目です行儀悪い」

乾闥婆けんたっぱがピシヤリと言い切った

「でも…かるらん飲んでるよ？」

悠助の声に一同の視線が迦楼羅かるらに集まった

ズツという音が迦楼羅かるらの口元から聞こえた

「…なにやってるんですか」

乾闥婆けんたっぱが迦楼羅かるらに向かって言う

「あゝあゝ」

京助がこれから起こるであろう乾闥婆けんたっぱの制裁を思い浮かべて口の端を上げた

「やはりお前の淹れる茶は美味しいな」

ホウと息を吐いて迦楼羅かるらが言った

「：せめて座って飲んでください」

想像していた制裁がなかったことに京助は少し驚いた

「かるらの飲んでるのって茶柱立ってたヤツだよねゝじゃあかるらの願いがかなうのかな？」

悠助が笑って言う

「ワシの願い？」

立っていた椅子に座って迦楼羅かるらが悠助に聞き返す

「茶柱のたったお茶を飲んだ人の願いがかなうならかるらの願いがかなうってことだよね？」

悠助が慧喜えきを見上げると慧喜えきが笑って頷いた

「でも淹れた人の願いがかなうならけんちゃんの願いがかなうんだよね？」

悠助が今度はそういいながら京助を見た

「まあそうなるわな」

湯飲みを一つ手にとって京助が答える

「かるらの願い事って何？」

悠助が目をキラキラさせながら迦楼羅かるらに聞いた

「：願い：か」

湯飲みの中に浮かんでいる茶柱を見ながら迦楼羅かるらが呟く

「けんちゃんの願い事は？ さっき聞けなかったから」

悠助が今度は乾闥婆けんたっぱに向って聞く

「え：あ：そうですね：」

笑顔で乾闥婆けんたっぱが返事をした

「：悠」

京助が悠助に声を掛けた

「なあに？」

きよんととして悠助が京助を見る

「願い事って言うのはな人に話せば話すだけ叶うのが遅くなるんだぞ」

京助が言う

「ええ！！　　そうなの！？　　かるらん！！　　けんちゃん！！　　言わないでッ！！；」

悠助が慌てて耳を塞ぎながら言う

「…本当にそうなんだっちゃ？」

緊那羅きんならが京助に小声で聞いた

「さあな」

京助がへつと口の端を上げて笑う

「言いたくないことだってあるだろ」

そういうながら京助が横目で乾闥婆けんだつばと迦楼羅かるらを見た

「そうだっちゃね」

緊那羅きんならが眉を下げて笑う

「お茶、冷めるんじゃない？」

矜羯羅こんがらが湯飲みを手を取った

「たまには立ち飲み茶ってのもよかちゃう？」

京助が湯飲みに口をつけた

「僕も飲むー」

悠助が手を伸ばすと慧喜えきが湯飲みを悠助の前に持ってきた

「…仕方ないですね…今回けんだつばだけですからね」

乾闥婆けんだつばの言葉に制多迦せいたかと緊那羅きんならも湯飲みを手を取った

「飲み格好はどうであれお前の淹れた茶の美味さは変わらんだろう」

迦楼羅かるらがそう言って笑うと乾闥婆けんだつばがどことなく照れた素振りで湯飲みを手を取った

>i22859—2575<

【第七回】感想肌の君（前書き）

学校から帰ると聞こえた悲鳴
駆けつけた京助たちが見たものは…

【第七回】感想肌の君

元開かずの間は今現在本来ならば真夏に咲く可憐な向日葵が使用していた

「…何だっっちゃコレ…」

そんなヒマ子さんの肥料&水分補給係りとなった緊那羅きんならが床の間っぽくなっている板の間の上の棚に置いてあるなんとも不思議な置物を見つけた

「ヒマ子さん…コレ…」

その物体を指差してヒマ子さんを振り返る

「ああ…それは京様のご友人の方が御造りになった…なんでしたっけ何だか伝統の在る人形のようなですわ」

ヒマ子さんが両手で肥料を丁寧ていねいに土に埋め込んでいく

「ふうん…面白っちゃね形が」

上から下からその置物を見て緊那羅きんならが笑った

「きーんちゃーん」

ガラスと戸が開いて悠助が顔を出した

「あら悠様」

ヒマ子さんが軽く悠助に向かって会釈する

「こんにちはヒマ子さん」

悠助もヒマ子さんの真似をして頭を下げた

「どうしたんだっっちゃ悠助」

置物を手を持ったまま緊那羅きんならが悠助に近づく

「あのねハルミママがお使い行ってほしいんだって…僕も行っている？」

ハイと差し出された紙と財布を受け取ろうとして緊那羅きんならは手に持っていた置物に気付いた

「あ！ ハニワ！！」

悠助がその置物を見て言う

「はにわ？」

緊那羅きんならもその置物を見た

「…ハニワっていうんだっちゃ？」

緊那羅きんならが財布と紙を受け取ってハニワを悠助に渡した

「そうそう！ ハニワ様でございましたわ！ 中島様お手製だとおっしゃっていましたわ」

ヒマ子さんが両葉をあわせて言った

「悠助ー！！ どこ？」

慧喜えきの声が聞こえる

「…悠助呼ばれてるっちゃよ？」

紙を財布をポケットに入れて緊那羅きんならが悠助の背中を軽く叩いた

「あ、うん。…コレどこにあったの？」

悠助がハニワをもったまま緊那羅きんならを見上げた

「その棚だっちゃ」

緊那羅きんならが指差した棚に悠助は小走りで近づきハニワを置いて再び小走りです部屋から出て行った

「あ、悠助！」

慧喜えきの嬉しそうな声が聞こえた

「じゃあ私もいくっちゃね」

緊那羅がヒマ子さんに笑顔で言う

「ええ、ありがとうございました緊那羅様きんなら」

ヒマ子さんが深々と礼をした

「寒い！」

雪の上に紺色の足が二本肩幅に開かれて立っている

「そりゃそうだろ；」

サクサクと雪を踏む音がして呆れ顔の青年が腰に手を当てて溜息をついた

「しかし相変わらずだなヨシコの方音痴ッぷり。ってかオライマで巻き込みやがって」

青年が溜息混じりに言う【ヨシコ】と呼ばれた人物が振り返る

「だって確実よ！！　確かよ！　間違いないわよ！！　この辺からりゅー様の気配がしたのだから！！　私がりゅー様の気配まちがうわけないでしょ？」

なんとも冬の北海道には似合わない格好の少女が自信満々に言う

「それにあっくんが勝手についてきたんでしょ？　それとヨシコってやめてくれない？」

指を突きつけられて【あっくん】が腰に置いていた手を頭の後ろで組んだ

「お前がオライのこと【あっくん】って呼ばなくなったらオライも【ヨシコ】はやめてやるさね」

片足でもう片足をポリポリ掻きながらあっくんがしれツとして言った「てかさあ：アイツの気配っていうよかは：アレだろ？」

あっくんが再び腰に手を当てて言う

「アイツっていわなんでッ！！」

ヨシコがあっくんに食って掛かる

「でも：アレよね：きつと絶対そうよ！　生き写した様にそっくりなんだろうと思うわけよ」

うんうんと頷きながらヨシコが言うとおっくんが呆れたように横を向いて溜息を吐いた

「あっくんだって見てみたいでしょ！？　だからきたんでしょ？　ね？」

背伸びをして言い寄るヨシコを避けるようにあっくんが後ずさる

「：オライはただ暇つぶしに來ただけだしな」

「んっもう！！」

あっくんが言うとおシコがあっくんの足を思い切り踏んだ

「微かだけど宝珠も反応してるから絶対確かに確実にこの辺りなのよ」

ヨシコが相当の力で踏んだのか声も無く疼くなって足先を掴んだまま震えているあっくんをそっちのけにヨシコが辺りを見渡す

「：お前少し体重減らせ；」

涙目であつくんが言うとは今度は無言でヨシコが後頭部に蹴りをかました

「おっかしいわ：」

何事も無かったかのように呟くヨシコの後ろには雪に顔面から埋まったあつくんの姿があった

「あら、慧喜ちゃんえきと悠ちゃんえきも行くの？」

石段を降りようとしていた緊那羅きんならと慧喜えき、悠助が母ハルミの声で止まった

「うん！！」

悠助が元気に返事をした

「そう、気をつけてね？」

につこり笑った母ハルミに一同手を振って石段を降りはじめた

「：ねえ緊那羅きんなら」

慧喜えきが歩きながら小声で緊那羅きんならを呼ぶ

「？ 何だっちゃ？」

緊那羅きんならが返事をするえきと慧喜えきが緊那羅きんならの耳元まで顔を近づけてきた

「悠助とハルミママ様えきって全然似てないよね」

慧喜えきに言われて緊那羅きんならが先頭を歩く悠助の背中に目をやった

「義兄様とハルミママ様はそれなりに似てるけど：」

慧喜えきが呟く

「：きつとお父さん似なんだっちゃ」

緊那羅きんならが笑顔で言った

「俺悠助の父さんえきって見たこと無い」

慧喜えきが少しむすつとして言う

「私きんならだっえきて見たこと無いっちゃ； それに：」

緊那羅きんならが足を止めた

「京助あんまり父親については話してくれないんだっちゃ； ：知らないって事もあるかもだけど：」

苦笑いで緊那羅きんならが言う

「聞いても？」

慧喜えきが聞く

「…私は京助が自分から話してくれるまで聞かないつもりだっちゃ」
どんだん離れて行っている悠助の背中を追いかけて緊那羅きんならが小走りで慧喜えきの横を通り過ぎた

「知りたいって気持ち満々のくせに…」

溜息えいきについて慧喜も小走りで駆け出した

「あれ？ 中島お前どこいくんよ？」

下校途中自宅とは反対方向に足を向けた中島に南が声を掛けた

「京助ン家」

中島が隣にいた京助の肩を軽く叩きながら言う

「何しに」

坂田と南がハモった

「愛を語りに」

中島が京助を抱きしめると京助も中島を抱きしめ返す

「まあ！！ 奥さん！ 見てくださいますえ！！ こんな公衆の面前で破廉恥な！！」

南が【きゃあ】と声を上げて顔を両手で覆いながら言う

「本当！ 何を考えておりますの！？」

坂田が片手を口元に当てて【いやーねー】のポーズをする

「ってか公衆いねえし」

中島が突っ込む

「まあ…うんそうなんだけどね」

さすがは田舎の正月町人通りが滅多に無い

「貸してたCD取りに行くんだ」

京助との抱擁をといて中島が鞆を肩に掛けなおす

「明日持ってきてもらえばいいじゃん」

坂田が言う

「…忘れる可能性はいくつですか京助君」

中島が手でマイクの形を作って京助に向けた

「100%は軽く越えると思われます」

京助が胸を張って言う

「100%軽いのか…」

南が苦笑いした

「もうかれこれ10日は出張してるんでそろそろな」

雪の溶けてきた道を歩きながら中島が京助を見る

「ハイハイ； お返しいたしますヨ；」

京助がへつと口の端を上げる

「…てか…なんでお前等もコッチきてるんよ」

違和感無く一緒に並んで歩いている坂田と南に京助が聞く

「なんとなく」

南が言うと坂田が頷いた

緊那羅きんならに入れてもらった肥料を丁寧に根元に埋め込んだヒマ子さんが軽く伸びをした

「そろそろ京様にご帰宅なされますわね」

ガタッ

「…?」

京助を出迎えようと気合を入れて鉢ごと体を戸に向けたヒマ子さんが窓の方からの物音に振り向いた

「どなたですか？ ゼン様？ ゴ様？」

ヒマ子さんが物音のしたほうに向ってゼンゴの名前を呼んだが返事は無く

「風でしょうか…」

再び戸口に向けて鉢ごと動こうとヒマ子さんが気合を入れる

「開かないんだけど」

聞き覚えの無い声がしてヒマ子さんが振り返った
ソコには紺色の二本の足

「凍ってるんちゃうかい？ 壊しても…って」

その足のほかに見えたのはしゃがみこんだ青年の顔

「やは」

その青年はヒマ子さんに向って笑顔で手を上げて挨拶をした

「何？」

すると紺色の二本の足が折れて今度は少女が顔を覗かせた

「…何あれ」

少女がヒマ子さんを見るなりヒマ子さんを指差して隣の青年に尋ねた

「あ…あれとは失礼なッ！！ 私には悠様のくださった【ヒマ子】

というれっきとした名前がございましてよ！！」

ヒマ子さんが鉢に書かれているミミズ文字を見せて怒鳴った

「いやゝそりゃ悪かったよな；」

青年が苦笑いで謝った

「オライは【阿修羅】あしゅらんでこっちがヨシコ」

阿修羅あしゅらと名乗った青年が隣の少女を指差して言うतोヨシコの踵落し

が阿修羅あしゅらの頭にヒットした

「ねえねえヒマ子さんだっけアナタ」

ヨシコガ阿修羅あしゅらの頭の上に踵を乗せたままヒマ子さんに聞く

「そうですわ」

ヒマ子さんが答えるとヨシコが少し何かを考え込んだ後部屋の中を

覗き込んだ

積もった雪のせいでで部屋の中を見下ろす形で真剣に室内を見渡す

ヨシコをヒマ子さんが怪しい目で見ている

「…なんですか？」

躊躇いがちにヒマ子さんが声を掛けるとヨシコが体を起した

「間違いないここよ。ここだわ絶対そう」

ヨシコが嬉しそうに両手を合わせて笑った

「ここだわって…ヨシコお前…まさ…」

踵落しのダメージがまだ抜けてない様子の阿修羅あしゅらが顔を引きつらせてヨシコを見ると時すでに遅しヨシコの紺色の片足が高らかに上が

っていた

「安心しろく？ 茶とお菓子食ったら帰るだによん」

南がハッハと笑って石段を登り始めた

「お前が俺ン家に求めてるものは茶か」

京助が南に続いて石段を登る

「なんなら晩飯も求めてやろうか？」

坂田と中島がほぼ同時に石段に足をかけた

ガシャーーーーン！！！！！！

「きゃああああ！！」

これが火曜サスペンス劇場ならばここで ジャジャーーン！！ と
いう迫力の BGM が流れ始めるのであろう 物的物音と悲鳴が聞こえた
「…今のって」

石段の途中で足を止めた 3 馬鹿と京助が顔を見合わせた

「…ヒマ子さん？」

五秒ほど沈黙した後揃って全力で残りの石段を駆け上がり 栄野家の
玄関の戸を思いきりあけるや否や履いていた靴を一応脱いで京助と
中島がヒマ子さんのいる元開かずの間の前まで来たが止まりきれず
にそのまま戸ごと室内になだれ込んだ

「京様！！」

ヒマ子さんの声で顔を上げた京助の目の前には割れたガラスと入り
こんだ雪そして嬉しそうなヒマ子さんの顔

「うっわ！ 窓割れたの？； コレ」

後から来た南が室内を見るなり声を上げた

「あゝあゝ怪我不いか？ ヒマ子さん」

「ぐえ；」

坂田が倒れこんでいる京助と中島を踏んで室内に入る

「起そうって気持ちはないんかい；」

中島と京助が起き上がって坂田に聞く

「ないね」

坂田が舌を出して答える

「おんやあ：おかえり」

窓の外から聞こえたおかえりという言葉に3馬鹿と京助が振り返った

「：誰アンタ」

南が言う和阿修羅あしゅらがヒラヒラと手を振った

「南：誰アンタじゃなく：誰アンタ等だ：」

京助が阿修羅あしゅらの横にある二本の紺色の足を指差して言う

「オライは阿修羅あしゅらってんだ」

ニツと笑って阿修羅あしゅらが割れた窓から室内に入ってきた

「そんで：アソコに見えているのがヨシコ：の足」

阿修羅あしゅらが親指で紺色の二本の足を差す

ゴキッ

鈍い音と同時に紺色の二本の足が阿修羅あしゅらの後頭部にのめりこんだ

「ヨシコじゃないって言ってるでしょッ！！」

「おおおお！！！」

ヨシコの格好に3馬鹿と京助から歓声が上がった

「すごい！！ 露出高っ！！」

「寒そうだけど嬉しい格好ですなあ！！」

「今までに来た奴らの中で一番嬉しい格好ですね京助さん」

「そうですね坂田さん」

興奮気味の3馬鹿と京助をヨシコがじっと見ていた

「ねえ貴方たち：りゅー様って知らない？」

阿修羅あしゅらを踏みつけたままヨシコが3馬鹿と京助を見た

「りゅー：？」

顔を見合わせた4人が首をかしげたあと首を横に振った

「：おつかしいわ：確かにここなの！！ 絶対そう！間違いないの

！！ ねえ隠してるとかじゃないわよね？」

ずいっと3馬鹿と京助に顔を近づけてヨシコが再び聞く

「京様からお離れになってくださいましッ!!」

ヨシコと京助（3馬鹿も）の間に割って入ってヒマ子さんがヨシコを睨んだ

「京様？　って栄野京助？」

ヨシコが言うのと3馬鹿が揃って京助を指差した

「あなたが？　…待って待って？　…栄野…父親の名前とかかわからない？」

ヨシコがヒマ子さんを押しのけて京助に迫る

「俺の?」

京助が聞くとヨシコが頷いた

「…わりい；　覚えてねえんだ；」

京助が苦笑いで言うのとヨシコがむすっと頬を膨らませた

「つかえな…いっ！　自分の父親の名前くらい覚えておきなさいよ!!」

「…ちよい待てよ」

立ち上がって腰に手をあててヨシコが言うのと中島が同じく立ち上がってヨシコを見た

「…なによ」

自分より20センチくらい背の高い中島を上目で睨んでヨシコが言う

「京助のオヤジさんはなッ!!　京助が悠くらいん時に死んでるんだよッ！」

中島が怒鳴るとヨシコが目を丸くした

「…し…って…死んだ…って…うそ」

ヨシコが京助を見た

…初対面のお前に嘘ついてどうするよ；　…ってか何で中島がキレるわけさ；

京助が頭を掻きながら言う

「お前がキレないから代わりにキレてるだけだろが」

中島が言うのと南と坂田が頷いた

「…ねえ…本当に父親の名前覚えてない…?」

さつきとは打って変わって小さな声でヨシコが聞く

「…悪い…」

京助が言うとヨシコが泣きそうな顔を上げた

「じゃあ！！　じゃあ…アナタ栄野京助じゃないんでしょ！！　そうよね！！」

ヨシコが京助に再び顔を近づける

「失礼な！！　この方はれっきとした栄野京助様でございましてよ！！」

ヨシコと京助の間に再び割って入ったヒマ子さんが怒鳴る

「だってッ！！　…それじゃあ…りゅー様…は…」

「どうしたのこの窓！！」

ヨシコが俯くと同時に後ろから驚きの声がした

「母さん…」

外れた戸に割れた窓そして雪が溶けて畳の上にできた水溜り

「…京助」

母ハルミが京助を睨んだ

「俺じゃねえよッ！！」

京助が思いきり否定の声を上げて手を振る

「ハルミさん！！　マジで京助じゃないから！！　本当に！」

南が慌てて京助を庇った

「母さん…？」

力なく垂れていたヨシコの手の指がピクッと動いた

「あら…京助の友達？」

母ハルミがヨシコとヨシコにとび蹴りをくらって今だ起き上がらない阿修羅あしゅらに目を向けた

「京助の母親…？」

ヨシコが顔を上げて母ハルミを見た

「え？　ええ…そうだけど…寒くないの？　そんな格好で」

母ハルミがヨシコに笑顔を向けた

ヨシコが母ハルミにツカツカと迫ってじっと顔を見た

「：アナタの旦那のお名前は」

きょんとんとしていた母ハルミに視線が集まる

「え…？　旦那…って竜之助のこと？」

「りゅう…のすけ…」

母ハルミの口から聞く初めてでは無いんだろうけど忘れていた父親の名前を京助が小さく繰り返した

「お前の父さん【竜之助^{りゅうのすけ}】っていうんだな」

中島が京助の頭に手を置いた

「竜之助に京助に悠助か…：スケスケ親子め」

南が京助の脇腹を軽く小突いた

「ハルミさんが好きになったヤツかあ…：竜之助」

坂田がなんとなく残念そうに言うとか中島が坂田の頭にも手を置いた

「ほら…！　そうよ！　やっぱりよ…！　聞いたでしょあつく…」

ヨシコが嬉しそうに阿修羅^{あしゅら}を振り返って止まった

「：何してんの」

棚に向って熱視線を送っている阿修羅^{あしゅら}にヨシコが言う

「…いい…」

阿修羅^{あしゅら}が呟く

「は？」

小さな呟きに一同が目を向けると微かに頬を赤らめた阿修羅の視線の先には

「あ、俺のハニワ」

中島が製作したハニワがのへ〜んという間の抜けた表情で置かれていた

「この今にも吸い込まれそうな間のぬけた表情…今にも踊りだしそうな格好…」

阿修羅^{あしゅら}がふるふるとハニワに向って手を伸ばす

「惚れたぜチクショー…！！！」

叫びながらハニワを抱きしめた阿修羅^{あしゅら}に一同哑然とした表情を向ける

「これ…！　これオライにくんかねッ…！」

阿修羅^{あしゅら}が目を輝かせて京助を見る

「や…それは…;」

そして京助は中島を見る

「俺じゃなく作ったコイツに聞いてくれ;」

京助が中島を指差すと坂田と南も中島に指を向けた

「まあ!! 人を指差すものじゃないぞます!」

中島が京助、南、坂田の頭をスパパーンと流れる様に叩く

「もうッ!! あっくん!! 今はそんな話…ッ!!」

ヨシコが怒鳴って片足を高く上げた

「駄目でしょッ!!」

高らかに上がったヨシコの片足を掴んで母ハルミが声を上げる

「女の子がそんな格好で足を上げないの!!」

そしてそのままヨシコの足を下げる

「な…!! なにすんのよッ!!」

ヨシコが母ハルミに食って掛かる

「危ないし駄目でしょッ!! まったく…そんな格好して風邪でも

引いたら大変でしょう!」

母ハルミはそう言うと後ろのダンボールを開けて何か探し出した

「…あった」

しばらくして母ハルミはダンボールの中から何かを取り出しヨシコ

の足元にしゃがんだ

「コレ巻いていなさい? 少しはあったかいでしょう?」

白く長い布をヨシコの腰にゆっくりと巻きつけながら母ハルミがヨ

シコに笑顔を向けた

「あ、京助のオシメ」

坂田がヨシコに巻かれた布を指差した

「あ、違いわよ? 京助のオシメは全部雑巾にしたもの」

母ハルミがふふつと笑った

「コレはね竜之助が持って来た物なの」

「父さんが?」

京助が聞くと母ハルミが頷いた

「りゅー様が…？」

ヨシコが自分の腰から下に巻かれた布を見て呟く

「大事なものらしいんだけど置いていっちゃって…どうしようもないじゃないのねえ？」

どことなくさつきよりも悲しそうに母ハルミが笑った

「じゃあ…もしかしてコレ…このさわり心地…そうよ…これ！！
これもしかなくても！！」

ヨシコが腰から下に巻かれていた布を剥ぎ取り割れた窓から外に飛び出した

「あ！　ちよつと？！」

慌てて母ハルミが窓に駆け寄る

「ハルミさん！！　下！　足元ガラスガラス！！！」

坂田が叫んだ

「…母さん？」

窓から空を見上げたまま動かなくなった母ハルミに京助が声を掛けた
それでも返事をしない母ハルミに首をかしげて京助が近づき窓から空を見上げた

「…うおあ；」

京助が変な声を上げた

ガサガサと音を立てて買い物袋が軽く前後に揺れる

「もうすぐ春だねーだいぶ明るいもんね」

冬ならばもうとつくに夕日が沈んでいる時間だった

「そうだちゃね」

緊那羅きんならが笑顔を悠助に向けた

「悠助は春がすきななの？」

悠助の手を握って歩きながら慧喜えきが悠助に聞く

「うん！！　あ、でもね夏も好きー秋も…寒いけど冬も好きだなー」
「全部好きなんだっちゃね」

悠助が言うきんならと緊那羅が突っ込んだ

「：あれ？」

石段を登って玄関まできた悠助が開きっぱなしの戸を見て首をかしげた

「京助：？」

きんなら緊那羅が悠助と慧喜を見て言う

「と：何人かいるみたいだよ」

玄関の中には散乱している靴が数えて4人分

「坂田たちかなあ？」

トテト歩いて靴を脱いだ悠助が家の中に入ると慧喜えきもソレに続いた

「：トイレでも我慢してたんだったちゃ？」

散乱している靴を揃えながら緊那羅きんならが呟いた

「間違いないわ：そうよ！　これ！！　羽衣ッ！！」

天高く浮かびながらヨシコがくるっと回り竜之助の忘れ形見だという布に頬刷りした

「怖くないのかしら：」

母ハルミがぽかんとヨシコを見て呟いた

「もうちょい驚くことあるんじゃないか？　母さん：」

京助が母ハルミに突っ込んだ

「あら！！　失礼ね！！　高所恐怖症の人間にとっちゃ重大問題なのよ？」

母ハルミが京助の頭を軽く小突いて言う

「あの布：オシメから羽衣にクラスチェンジしたなあ：」

南が京助の後ろからヨシコを見上げた

「羽衣纏って飛ぶハルミさん：綺麗だろうなあ：まさに天女？」
ほうっと溜息をついて坂田が何かを想像している

「ありゃあ竜がいつも身に着けていた羽衣だとおもうぞ」
ハニワをしっかと抱きしめながら阿修羅あしゅらが言う

「この世にもあの世にもどこにも2つとない羽衣だ」

阿修羅^{あしゅら}が目を細めてヨシコを見上げた

「阿修羅^{あしゅら}！！！？？」

突然聞こえた緊那羅^{きんなら}の声に一同が振り向いた

「な…なんで…」

阿修羅^{あしゅら}を指差して緊那羅^{きんなら}が言う

「…緊那羅^{きんなら}側のヤツだったみたいだな」

中島が言う

「ってえと【天】か…これで…えーと鳥類、緊那羅^{きんなら}、乾闥婆^{けんたつば}にコイツら入れて5人…？」

京助が指折り数える

「…俺思うにまだ増えると思うんだけど」

南が言う

「…俺もそう思う；」

立てていた指をぐっと握って京助が肩を落とした

「なんで阿修羅^{あしゅら}がいるんだっちゃ？；」

部屋に入ってきた緊那羅^{きんなら}が阿修羅^{あしゅら}に聞いた

「ヨシコの御守り」

くいつと阿修羅^{あしゅら}が親指で窓の外を差すと緊那羅^{きんなら}が窓から外を見た

「吉祥^{きつしょう}…」

がくつと緊那羅^{きんなら}が肩を落とした

「きつしょう？ ヨシコちゃんじゃないの？」

母ハルミが緊那羅^{きんなら}に聞き返した

「吉祥^{きつしょう}ってのがアイツの本当の名前で。ヨシコはオライが呼びやす

いからってえことと呼んでるンよ」

阿修羅^{あしゅら}が答える

「漢字で書くとこう…吉に祥だからヨシコ」

雪に指で書いて説明していた阿修羅^{あしゅら}の頭に上にヨシコが着地した

「…コラ； ヨシコ；」

阿修羅^{あしゅら}がヨシコの足を掴んだ

「久しぶりだね緊那羅^{きんなら}」

足を掴んでいた阿修羅あしゅらの手の甲を思い切りつねりながらヨシコが緊き那羅んならに笑顔えきようを向けた

「吉祥きつしょうもあいかわらず元気そうだっちゃね；」

緊那羅きんならが苦笑いで答える

「：安心してよ別にアナタを連れて帰ろうと思っていないから。迦か楼羅るらが何も言わないんだもの私は勝手できないわ；　ただ：マゴがちょっとグレ気味だけど」

阿修羅あしゅらの頭を踏み付けてヨシコが部屋の中に入る

「ほおらまた出た新しいお友達のお名前【マゴ】さんだって」
坂田が言う

「案の定やはし増加するみたいだねえ」

南がはっはと笑う

「要はアレだ京助、お前は類友の【類】なんだな」

中島が言う

「俺主体？；」

京助が自分を指差すと3馬鹿が揃って親指を立てる

「：不名誉だ；」

部屋の中の面子を見渡して京助が溜息をついた

「：緊那羅きんならちよっと」

ヨシコ：もとい本名　吉祥きつしょうが緊那羅きんならの腕をグイと引っ張った

「なんだっちゃ？」

少しよろけた緊那羅きんならに吉祥きつしょうが小声で何かを言うと緊那羅きんならの顔がほんのり赤くなった

「やっぱり…？」

ふふっと笑う吉祥きつしょうを緊那羅きんならが困ったような笑顔で見た

「慧喜えきといい吉祥きつしょうといい：どうしてわかったんだっちゃ；」

緊那羅きんならが聞くと吉祥がにっこり笑った

「京助ーおかえりー」

「のっ；」

唐突に悠助のお帰りタツクル不意打ちをくらった京助が驚きの声を上げた

「義兄様ずるいッ!!」

そしてそれを慧喜えきが頬を膨らませて抗議する

「坂田と南と中島もいらっしやい」

慧喜えきに京助から引き剥がされながら悠助が3馬鹿に向って言う
「あいかわらずだなあ」

南が笑う

「おかえりなさい悠ちゃん、慧喜ちゃんえき」

母ハルミが悠助の頭を撫でた

「あ：袋もって来ちゃったっちゃ」

右手に持ったままだった買い物袋を見て緊那羅きんならが言う

「おかえりなさいませ悠様、慧喜様えき」

ヒマ子さんが礼をした

「ただいまヒマ子義姉様」

慧喜えきがヒマ子さんに礼を返した

「窓われてる」

悠助が窓を見て言うところらりと京助を見上げた

「：悠：お前まで俺が割ったと思ってるだろう」

京助が言う

「違うの？」

悠助が首をかしげると京助がぐくと肩を落とした

「日頃の行いが悪いからよ」

母ハルミが言う

「：りゅー様と：同じ髪の色」

吉祥きつしやうが悠助をじっと見て呟いた

「：あれ？」

吉祥きつしやうの視線に気付いたのか悠助が吉祥きつしやうに目を向けた

「：あなた名前は？」

吉祥が悠助に聞いた

「悠助は俺のだぞ!!」 吉祥!!」

慧喜が悠助を悪者から庇うかのように警戒して抱きしめる

「悠助…そう…悠助…」

吉祥が手に持っていた羽衣をぎゅっと握って苦笑いを悠助に向けた

「お姉さんはなんていうの？」

慧喜の腕の中から吉祥に向って悠助が笑った

「私は…」

「ヨシコ」

踏みつけられたままだった阿修羅が反撃というかのようにすかさず答える

「ヨシコさん？」

その名前を悠助が繰り返すと慧喜がプツと吹き出して悠助の頭に顔を埋めたまま肩を震わせて笑い出した

「あつくんッ!! もうッ!!」

「ガハッ!!!!」

吉祥が阿修羅の上で飛び思いきり全体重をかけて両足で再び阿修羅を踏みつける

「二代にわたって失恋してショックなんだから怒らせないでッ!!」

そのままガスガスと阿修羅を踏みつけて吉祥が怒鳴る

「吉祥; 落ち着くっちゃッ;」

緊那羅が吉祥を後ろから押さえて制止させる

「今ヨシコちゃん二代にわたってって言ったけど…」

南が京助を見た後

「京助も入ってるのか？」

そう言いながら南が中島と坂田を見る

「二代ってことは一応（強調）はいるんじゃないか？」

坂田が答える

「京様には私がおりますもの」

いつの間にか京助の隣にいたヒマ子さんが京助の腕にそっと葉を絡ませてきた

「いや：いないから；」

絡められた葉を京助がゆつくりと引き剥がした
ヒマ子さんの葉を接ぎ終えた京助がふと吉祥きつしょうに目を向けた

「：お前父さん知ってるのか？」

緊那羅きんならに後ろから押さえられ足で阿修羅あしゅらを踏みつけていた吉祥きつしょうが顔を上げた

「知らなかったら恋も失恋もできないでしょう？」

吉祥きつしょうが軽く京助を睨む

「ごもつとも」

坂田が頷いた

「りゅー様は：その子と同じ様な髪の色で：」

吉祥きつしょうが言うと母ハルミが頷く

「そして性格は結構破天荒」

そして母ハルミと吉祥きつしょうの声がハモった

「でもさりげなく優しくて」

吉祥が言う

「結構抜けてて」

母ハルミが言う

「そうそう！！」

吉祥きつしょうが嬉しそうに笑った

「：二人とも楽しそうだっちゃね」

やつのことで吉祥きつしょうの踏みつけから開放された阿修羅あしゅらを起す手助けをしながら緊那羅きんならが呟いた

「ねえ阿修羅あしゅら：吉祥きつしょうの言う【りゅー様】って：あの？」

起き上がり首をコキコキ鳴らしている阿修羅あしゅらに緊那羅きんならが聞く

「ああ：たぶん間違いないって迦楼羅かるらが言ってたしな：だからヨシ
コも確かめたくなったんだろうさ」

阿修羅あしゅらが楽しそうに母ハルミと話している吉祥に目を向けた

「：俺さっぱり話の内容わからなんだあにー」

南が言う

「俺もだあにー」

中島も言う

「俺は一個だけわかっただあにー」

坂田が【ハイ】と挙手した

「ハイ、坂田君」

南が指名する

「京助は類共の類だってことだあに」

「オイ、コラ、待てソコ；」

坂田が京助を指差して言うのと京助が坂田に裏手ツツコミを入れる

「それはいえてる」

中島が頷く

「主軸♪主軸♪」

南がアフリカかどつかの民族の踊りのような踊りを踊る

「類共♪類共♪」

中島と坂田も同じく踊りだした

「俺は生贄かッ！！！；」

京助が怒鳴った

【りゅう様】こと栄野家の父親【竜之助】の話で大いに盛り上がった

ている母ハルミと吉祥を見て悠助が無言で慧喜を見上げた

「僕のお父さん……りゅうのすけって言うの？」

悠助が慧喜に聞いた

「竜之助……っていうか……竜？　とにかくそうみたいだね」

慧喜が笑顔で答えた

「お父さんも慧喜さんと同じところから来たの？」

悠助が再び聞く

「竜は【天】からだから緊那羅とかと一緒に」

さりげに慧喜が緊那羅の名前を口に出すと緊那羅が反応して慧喜を見た

「緊ちゃん？　じゃああるらんとかと一緒になんだ？」

悠助が緊那羅を見る

「? どうしたんだちゃ?」

悠助に視線を向けられて緊那羅が悠助に声を掛けた

「ねえねえ緊ちゃん：僕のお父さんってどんな? どんな?」
をキラキラさせて悠助が緊那羅に聞いてきた

「竜のボン／＼緊那羅はたぶん竜のことはあんま知らないと思うぞ?」
ハニワを片手に阿修羅が言う

「：ゴメンだっちゃ；」

緊那羅が苦笑いで答えた

「緊那羅が来てからすぐ：いや：くる前か? とにかく突然姿くら
ませたからナア：まあ変わりにオライが教えてやるよ」

阿修羅がへへつと笑う

「本当!!!!?」

悠助が嬉しそうな笑顔を阿修羅に向けると慧喜がどことなく不機嫌
そうな顔になる

「そっちの竜のボンもこっち来て聞くか?」

京助を振り返り阿修羅が京助に声を掛けた

「竜のことだ殆ど壊してんだろうな記憶：全然覚えてないんだろ?

竜：オヤジのこと」

悪戯っぽく笑った阿修羅を真っ直ぐ見て京助が頷いた

「話して：迦楼羅に怒られないっちゃ?」

緊那羅がボソツと小声で阿修羅に言う

「ここまでおおっぴらに名前まで出しちまって今更：。コイツらに
は知る権利があるだろ?」

阿修羅がハニワを撫でながら言った

「だがそれにはまだ早いというのだたわけ!!!」

割れた窓の方からした怒鳴り声はやつとスムーズに窓から登場でき
たのが嬉しいのかどことなく気合が入っているかのようにも聞こえた
「今日はこちらから失礼します」

割れた窓からするりと室内に入ってきた乾闥婆けんたつばがにっこりと笑った

「阿修羅あしゅら！ 吉祥きつしょう！！」

乾闥婆けんたつばに続いて念願の窓からの登場を果たした迦楼羅かるらが室内に入ってくるなり阿修羅あしゅらと吉祥きつしょうの名前を呼んだ

「よー！！ かるちゃん」

へらへらとした笑顔で阿修羅あしゅらが迦楼羅かるらに手を振る

「お兄さん違うよー！！ かるちゃんだとランドセルだからかるらんだよう」

悠助が迦楼羅かるらのことをかるちゃんと呼んだ阿修羅あしゅらに抗議する

「そうそう！ かるらんかるらん」

坂田がうんうん頷く

「そうかじゃ…よ！ かるらん」

阿修羅あしゅらが訂正して再び迦楼羅かるらに手を振る

「ちゃんもんもらんッ！！； たわけッ！！」

迦楼羅かるらが怒鳴ると口から小さな炎が出た

「むやみに火出さないで下さい」

乾闥婆けんたつばが笑顔のまま迦楼羅かるらの髪を引っ張った

乾闥婆けんたつばが迦楼羅かるら8かるら）の髪から手を離して部屋の中を見渡して溜息をついた

「…窓は吉祥きつしょうの仕業ですね…僕が片付けておきますから迦楼羅かるら、それに…」

ときばきと行動し始めた乾闥婆けんたつばが阿修羅あしゅらの方を見た

「よー！！ だっば」

阿修羅あしゅらがハニワで乾闥婆けんたつばに挨拶した

「たった二文字を略して呼んで下さっていつもながら有難う御座います阿修羅あしゅら。迦楼羅かるらの手助けお願いしますね」

にっこりと （でも怖い）笑顔で乾闥婆けんたつばが阿修羅あしゅらに向かって言う

「了解りょうかいくん」

阿修羅あしゅらがハニワ片手に敬礼をして迦楼羅かるらの服を掴みそのままひよいと小脇に抱えた

「なっ； 降ろさんかたわけ！；； 自分で歩けるわ！；；」
迦楼羅かるらが怒鳴る

「おい、竜のボン其の一、どこで話せばいい？」
阿修羅あしゅらが京助に聞いた

「え：あ：あ：：じゃあ茶の間：；」

京助が戸惑いながらも足を進めて茶の間に案内しようと部屋から出る
「俺らも行っていわけ？」

南あしゅらが阿修羅と京助に聞く

「来てもいいけど一個だけ約束してくれや」
阿修羅あしゅらが笑顔を3馬鹿に向けた

「何聞いても竜のボンの友達でいてやってえな？」

へらッと笑って言う和阿修羅あしゅらは先に出ていた京助の後を追った

「：今更：だよねえ？」

南が中島と坂田をちらつと見ながらボソつと呟いた

「まあ：心臓が飛び出してイスカンダルにいくようなことあっても
切れない腐れ縁だと思いますからねえ？」

坂田が足を進めた

「ぶっちゃけ親友？ 悪友？ 俺らって」

中島が同じく足を進めて言う

「超悪親友？」

南が笑いながら歩き出す

「うわー何か戦隊モノの怪人みてえ」

坂田が笑って部屋から出ると中島と南も坂田に続いた
そんな様子を見ていた乾闥婆けんだつばがふっと笑ってそれから緊那羅きんならを見た

「：乾闥婆？」

乾闥婆けんだつばに視線を向けられて何か言われるのかと思った緊那羅きんならが乾闥婆けんだつばに声を掛ける

「：ハルミママさんも吉祥けいしやうも：それにヒマ子さんと慧喜えきと悠助も一緒に話、聞いてきたらどうですか？ ここは僕と緊那羅きんならで片付けておきますから。暗くなってきましたし女性にこの部屋の寒さは体に

悪いと思いますし」

乾闥婆けんだつばがにっこり笑って言う

「相変わらず優しいのかキツイのかわからないのよね乾闥婆けんだつば」

吉祥きつしょうが笑顔で言う

「じゃあ：お言葉に甘えようかしら？　そのかわり晩御飯食べていてねけんちゃん？」

母ハルミがにっこり笑って言い乾闥婆けんだつばに背中を向けて部屋から出た

「では失礼いたします乾闥婆様けんだつば」

ヒマ子さんと慧喜えきが同時に礼をする

「けんちゃんまたねっ」

慧喜えきに抱きしめられている悠助が笑顔で手を振って部屋から出て行った

「：乾闥婆？けんだつば」

悠助に向って笑顔で手を振っていた乾闥婆けんだつばに緊那羅きんならが声を掛けた

「：緊那羅きんなら」

振っていた手をゆっくり下ろしながら乾闥婆けんだつばが緊那羅きんならの方を向く

「：貴方は：」

乾闥婆けんだつばが口を開いた

茶の間に最後に入ってきた慧喜えきが戸を閉めて戸のすぐ側に腰を降ろしてその膝の上に悠助を招き座らせる

「えゝ：あれ？　緊那羅きんならは？」

揃った面子を見渡して緊那羅きんならがいないことに気付いた阿修羅あしゅらが言う
「緊ちゃんけんちゃんとお掃除するんだって」

悠助が言う

「：任せたんか？」

阿修羅あしゅらがボソッと迦楼羅かるらに耳打ちすると迦楼羅かるらが小さく頷いた

「そっか：じゃ：こっちはこっちで始めますか」

阿修羅あしゅらがコトリとハニワをテーブルに置いた

「まずは」「竜は死んではいない」

阿修羅あしゅらと迦楼羅かるらの声が重なった

「…お先ドウゾ」

阿修羅あしゅらが迦楼羅かるらに言う

「…竜は死んでなどいない」

迦楼羅かるらが再び言ったが何も反応が返ってこない

「…いきなりそれかいかるらん；」

阿修羅あしゅらが苦笑いで迦楼羅かるらの頭に手を置いた

「…つてかマジ？ 本当に竜生きてんの？；」

阿修羅あしゅらが聞くと頭の上の手をうざったそうに払いのけながら迦楼羅かるらが頷いた

「嘘でもなんでもない。竜は生きている…のだが…」

迦楼羅かるらが京助と悠助、そして母ハルミを見る

「…記憶喪失とか？」

「…重症？」

「行方不明？」

3馬鹿がボソボソと意見を言い始める

「…そのうち会えばわかるだろうが…その…なんだ…」

迦楼羅かるらが案の定言葉に詰まって口から出てくる言葉の間隔が開いてくる

「竜之助は生きているの…？」

母ハルミが迦楼羅かるらに聞いた

「…そうだ」

迦楼羅かるらが頷く

「…そう……」

迦楼羅かるらからの返事を聞いた母ハルミがゆっくりと目を閉じた

「母さん…」

京助が母ハルミを呼んだが母ハルミは目を閉じたまま何かを思っているらしく返事をしなかった

「悠助の父様生きてるんだって」

慧喜えきが言うえきと悠助が慧喜を見上げた

「僕の：お父さん生きてるの？」

悠助が慧喜えきに聞くと慧喜がにっこり笑って頷いた

「：会いたいな：お父さん：」

そう言った悠助を慧喜えきは思い切り抱きしめた

「なあ鳥類：生きて：父さんが生きてるんならどこにいるんだよ」

京助が迦楼羅かるらに聞く

「【天】だ」

「うっそ！！！」

迦楼羅かるらが答えると吉祥が立ち上がった

「うっそ！！　だって私見たことないわ！！　うん！！　見たこと

ないもの！！　本当にいるの！？　宝珠も反応しなかったのよ！？」

吉祥が迦楼羅かるらを指差しながら大声で言う

「やかましいわ！！　たわけ！！！！　：まあ：宝珠が反応しないの

は宝珠が壊れているからだろう：」

迦楼羅が吉祥に向って怒鳴った後咳をひとつして言った

「壊れたア？」

阿修羅あしゅらが立てた小指を右耳に突っ込み動かしながら言う

「壊れた：よりは自ら壊したのだろうな」

迦楼羅が言う

「どうして！！　宝珠：」

吉祥が泣きそうな顔になる

「守りたいものの為だろうな」

そう言って迦楼羅かるらが京助と悠助、そして母ハルミを見て微笑んだ

「あの式神達を残していったのもそうだろう」

迦楼羅かるらが胡坐をかきなおす

「誰だろうと自分の守りたいものが危険に曝されるのは嫌だからな

：」

シンとした茶の間にキシキシと廊下を歩いてくる音が聞こえた

慧喜えきが膝でずって少し横にずれると茶の間の戸が開いて乾闥婆けんだっぱと緊那羅きんならが入ってきた

「二酸化炭素急激に増加傾向」

慧喜えきがずれたことで隣にいた南も少しずれながら言う

「こちらは一通り終わりましたが…」

乾闥婆けんだっぱがちらりと迦楼羅かるらを見る

「こっちはまだ序盤だよん」

阿修羅あしゅらがテーブルに置いたハニワを動かして乾闥婆けんだっぱに返事をした

「竜のことをだな…」

迦楼羅かるらがコホと軽く咳をしようと言っていると乾闥婆けんだっぱが溜息をつきながら迦楼羅かるらの隣まで足を進めた

「緊那羅きんなら、座れば？」

坂田が横にずれて緊那羅きんならが座れる位のスペースを作る

「あ…うん…」

ワンテンポずれて返事と苦笑いをした緊那羅きんならがゆっくりそこに座った

「何か言われたのか？」

中島が身を乗り出して緊那羅きんならに聞く

「え…あ…ちよっと」

緊那羅きんならはさっきと同じくワンテンポずれて返事と苦笑いを中島にもするとそのまま中島の隣に座っている京助に目を向けた

「なした？」

何か言いたそうな感じの緊那羅きんならに京助が笑いながら聞くと緊那羅きんならが首を横に振った

「…なんでもないっちゃ」

そしてあからさまに作った笑顔を京助に向けた

「…そっか？」

京助が首をかしげながら緊那羅きんならから目を逸らすと緊那羅きんならが俯く

「ラムちゃん…本当ににもなかったんか？」

心配そうに緊那羅きんならの顔を覗き込んだ南が声を掛けると俯いたまま緊那羅きんならが頷いた

「ちょっとまとめますね」

乾闥婆けんたつばが手をパンパン叩きながら茶の間に集合した一同に言う

「竜：京助と悠助の父親が死んではいないということはわかったんですよね？」

乾闥婆けんたつばの言葉に一同が頷く

「そして京助と悠助は純粋な人間ではないということも」

今度は乾闥婆けんたつばの言葉に一同が京助と悠助に視線を向けた

「まあ：そうなるんだろうねえ？」

南が言う

「ハーフだハーフ」

中島が京助の肩を叩きながら言う

「ってか何？ 人間じゃないわけ？」

坂田が乾闥婆けんたつばに言う

「細かく言うतそうですね。人間：ではないです」

乾闥婆けんたつばが答える

「じゃあ大雑把に言うた人間なワケ？」

坂田が更に突っ込む

「外見とかあんまかわらねえし血とか赤いみたいだし？ いいんじ

やねえの大雑把で人間で」

京助が前に矜羯羅こんがらの血が赤かったことを思い出して言う

「ってことはお前と悠助は微ハーフな！！ 微ハーフ！」

中島が京助と悠助を交互に指差して笑いながら言った

「これまた微妙な言葉生まれたよ？」

南がハッハと笑いながら言う

「話逸れてきたので元に戻します」

3馬鹿と京助の会話の骨をぼつきり折って乾闥婆けんたつばが仕切りなおす

「京助と悠助は細かく （強調）言えは僕らと同じ力を持つっ

ているのです。まだ目覚めてはいないにしろいずれは力が目覚める

はずです：【時】が来れば」

乾闥婆けんたつばの声がだんだん小さくなっていった

「じゃあアレか京助と悠助は竜田揚げばっか食ったり空飛んじやったり口から火イ出したり前髪が異様に伸びたりするわけか」

坂田が迦楼羅かるらをチラッと見て言う

「そこ!!! 何故今ワシを見た!!!;」

すかさず迦楼羅かるらが坂田を指差して怒鳴る

「つうかすげくねえ?」

南が笑いながら言う

「そんな力が目覚めるかもよ なヤツと友達?」

南が京助を見る

「いや違うぞ南【超悪親友】だろが」

中島が元開かずの間から出る際に話していたことを思い出して言う

「んだよそれ;」

京助が半分呆れ顔で突っ込むと3馬鹿が揃って口元に人差し指を立てて

「乙女のヒ・ミ・ツ」

そう言って笑った

「ひとつ聞いてもいいかしら」

それまで黙ったままだった母ハルミが口を開いた

「竜之助は元気?」

一同の視線が向けられる中母ハルミが一言 迦楼羅達かるらに聞いた

「元気といえば元気だ」

迦楼羅かるらが答える

「そう:」

迦楼羅かるらの答えを聞きどことなく嬉しそうに微笑むと母ハルミは立ち上がり

「晩御飯の用意してくるわ」

そう言って茶の間から出て行った

「さっきのハルミさんめっちゃ嬉しそうだったナア」

坂田がボソツと言う

「…あの人…本当にりゅー様のこと好きなんだ…」

吉祥きつしょうが手に持ったままだった羽衣を握り締めた

「そりゃそうだろう？　好きなヤツのだから子供産んだんだろう？」

慧喜えきがさらッと言う

「俺は悠助が好きだから悠助の子供産むんだ」

慧喜えきの発言に照れた3馬鹿と京助が明後日の方向を向いたり軽く咳をしたりしている

「そして好きなヤツとの子供だから好きなんだろう？　ハルミママ

様は竜が好きでその竜との子供の義兄様と悠助が好きなんだ…好きじゃなきゃ…俺だったら嫌だ」

慧喜えきはそう言うのと悠助をぎゅっと抱きしめた

「いいこというねえ慧喜えきちゃん…過激発言込みだけど」

南がウンウンと頷く

「…私ハルミママさん手伝ってくるっちゃ」

いきなり緊那羅きんならが立ち上がり振り返りもせず茶の間から出て行った

「…乾闥婆けんだつばお前緊那羅きんならに何ゆーたんよ；」

緊那羅きんならが出て行った後京助が乾闥婆けんだつばに聞く

「事実と現実そして過去です」

「…サザエさんの予告のような三本立て」

乾闥婆けんだつばの答えに中島が突っ込む

「緊那羅きんならは知らないことが多い」

迦楼羅かるらが言う

「知ることによって傷つくこともある…遅かれ早かれ知ることを乾け

闥婆んだつばは教えたただけだ」

その迦楼羅かるらの言葉から少しの間沈黙が茶の間にやってきた

コチコチという時計の音たまに吹く風の音や台所からなのかたぶん

鍋の蓋を落とした音

「なあ竜のボン等」

阿修羅あしゅらが京助と悠助に声を掛けたところで沈黙が終わった

「お前さんたち緊那羅きんならとか慧喜えきとか…好きか？」

「は?;」

「うん!!」

突然の阿修羅あしゅらの質問に素っ頓狂な返事を返した京助と笑顔で大きく頷いた悠助

「俺も悠助好き」

慧喜えきが笑顔で悠助の頬にキスをした

「あゝハイハイそこは熱い熱い…お前は？」

阿修羅あしゅらが京助を見る

「京様!! 私のこととは如何に!!?」

ヒマ子さんが真剣に聞いている

「何照れてるんだよ」

中島が京助の首に腕を巻きつける

「照れてねえッ;」

京助が怒鳴る

「照れてるよねえ?」

南が笑いながら京助の脇腹を突付く

「やめいッ!!!;」

「ウゝラウラ白状しろゝスキデスカ?」

南に向かって怒鳴った京助の反対の脇腹を坂田が突付きながらハッハと笑う

「やめいゆゝとるやろがッ!!!;」

京助が首を左右に振って更に怒鳴る

「京様!! 私ハッ!!」

ヒマ子さんが更に聞いてくる

「えええい!! やかましいわ!! たわけッ!!!;」

3馬鹿と京助のドタバタ騒さわぎに迦楼羅かるらが怒鳴った

「貴方もうるさいですよ迦楼羅かるら」

そして乾闥婆けんたつばが迦楼羅かるらの髪を引っ張る

「俺はッ!! 嫌いなやつと話すような広い心はもってねえよッ!

！；」

京助がそう大声で言うのと3馬鹿含め茶の間にいるものの動きが止まった

「訳します。【俺はみんなが大好きよ】」

そして坂田が京助の言葉を解釈する

「そっか」

阿修羅^{あしゅら}はニツと笑い

「オライはコレも好きだぞ」

そしてテーブルの上のハニワを軽く指で弾いた

夕食が終わったあとのなんともいえない匂いがする茶の間で後片付けをしているのは乾闥婆^{けんたっぽ}と緊那羅^{きんなら}

3馬鹿を見送りにちよつとソコまで出向いているのは京助と阿修羅^{あしゅら}コマとイヌの枕になっているのが迦楼羅^{かるら}

あくびをした悠助の頭を撫でているのは慧喜^{えき}

「…それは貴方が持っていて？」

元開かずの間の割れたガラス部分に即席補修をしていた母ハルミが羽衣を返そうとした吉祥^{きつしょう}に言った

「それは元々ヨシコちゃん達の国のものなんでしょう？」

ビーーーーっとガムテープを伸ばしながら母ハルミが言う

「でも…これは貴方がりゅー様からもらった…」

吉祥^{きつしょう}が羽衣を握り締めて言う

「私は思い出と京助、悠助をもらったんだもの。それにその布…どう考えても私は有効につかえないと思うの…ホラ、言うじゃない？」

モノは使ってこそなんぼのもんって」

母ハルミが振り向いて笑った

「だから…ね？」

羽衣ぶ顔をうずめた吉祥^{きつしょう}がコクリと頷いた

石段の下からがふつというゲップが短発で聞こえてくる

「ちよい食いすぎたかなア；」

口元に手をやりながら南がまた軽くゲップをした

「俺も：ツぷ」

坂田も同じく

「俺ン家食堂とかじゃねえんだけどねえ；」

京助も微かなゲップ混じりに言う

「本当か！！ 本当がいいんきにツ！？」

阿修羅あしゅらのめちやくちや嬉しそうな声がゲップに混じって聞こえる

「おーい！！ 竜のボン！ もらった！！」

そういつて阿修羅あしゅらが嬉しそうに高らかに掲げたのは中島作のあのハニワ

「あゝハイハイ；よかったな；」

ハニワを両手で掲げヘラヘラと笑う阿修羅あしゅらを見て京助が口の端を上げる

「んじゃま、ごっそさんでした」

「明日なー」

坂田と南が手を振って歩き出すと中島が小走りしながら京助の背中を叩いて坂田と南を追いかけた

「ありがとなー！ そのでつかいの！！」

阿修羅あしゅらがブンブン手を振って3馬鹿を見送った

「…確かに大、中、小だな…」

並んで歩いていく3馬鹿の後姿を見て京助が呟いた

3馬鹿の後姿が豆くらいになったのを見計らって京助が石段に足をかけた

「…お前…阿修羅あしゅらだっけ？ 本当気に入ったんだなハニワ」

大事そうにハニワを手を持つ阿修羅あしゅらに京助が言う

「おうさ！！」

ソレに対し親指を立てて嬉しそうに阿修羅あしゅらが返事をした

「…なあ俺の父さんってどんなヤツ？」

遠くで聞こえる豆腐のチャルメラがやたら大きく聞こえた

「竜か…」

阿修羅がハニワを片手で持ち空いた手で頭を掻いた

「性格はお前ともう一人のボン足したようなもんで…外見もお前ともう一人を足したようなもんだ」

阿修羅が答える

「似てるのか？ 俺と悠と父さんって」

京助が聞く

「そりゃな親子だしな…似てるぞ」

阿修羅が言うとき京助の顔がほころんだ

「…そっか」

そんな京助を見て阿修羅が微笑む

「今の笑った顔とか結構似てたんぞ？」

石段を登り京助の横を通り過ぎながら阿修羅が言うとき照れ隠しからなのか京助が一段飛ばしで石段を駆け上って行った

洗い桶の中に溜まった水に蛇口から水滴が落ちて波紋ができそれがゆっくりと消えて緊那羅の顔が映った

「……私は…」

水面に映った顔がゆらゆらと揺れる

「緊ちゃん？ テーブル拭いた？」

母ハルミに呼ばれて慌てて振り返った緊那羅の手が洗い桶に当たり水面が波立つ

「あ、さっき乾闥婆が…」

そういいながら台所から出て行った緊那羅揺れる水面にまた水滴が落ちた

>i23257—2575<

【第七回・弐】焼き焦げ（前書き）

自他共に認めている悠助と慧喜のラブラブカップルに訪れた試練とは

【第七回・弐】焼き焦げ

玄関で膝を抱えたままピクリとも動かない慧喜えきの横をゼンゴがパタパタと通り過ぎて器用に玄関の戸を開けて外に出て行く

数分後 緊那羅きんならが箒を片手に玄関掃除を始めたが慧喜えきには声を掛けない

慧喜えきが栄野家に来てから慧喜えきの悠助帰宅待ちは日常化していた
朝悠助を送り出した後は玄関でただひたすらこうして悠助が学校から帰るのを待っている

「……」

そんな慧喜えきが顔を上げて立ち上がるとおもむろにサンダルを履き戸の前に立った

「あ、もうそんな時間だっちゃ？」

緊那羅きんならが箒を持って一步戸から離れるとタタタタ…という足音が近づいてくると慧喜えきの顔がほころんでくる

「ただいまっ！」

「悠助っ！」

戸を開けると同時に慧喜えきが悠助に抱きつく

「おかえりだっちゃ悠助」

慧喜えきに抱きしめられている悠助に緊那羅きんならが言う

「ただいま慧喜さん緊ちゃん」

悠助は笑顔でただいまを言った後 慧喜えきと共に家の中に入った
「……」

そんな二人の後姿をどことなく悲しそうな表情で見ていた緊那羅きんならが再び箒を動かし始めた

「今日は学校どうだった？」

壁に寄りかかり伸ばした足の上に悠助を座らせて慧喜えきが聞く

「今日はね〜まず朝の会で転校生がきてね〜」

悠助が学校での出来事を嬉しそうに話すのを慧喜えきが嬉しそうに聞く

「明日一緒に遊ぶ約束したの」

悠助の髪を撫でていた慧喜えきの手が止まった

「…一緒に遊ぶのって女？」

慧喜えきが不安げな目で悠助を見る

「男の子もいるよ？皆で遊ぶの」

悠助が答えるとホッとして慧喜えきが再び悠助の髪を撫でると悠助が眠そうに目をこすった

「眠いの？悠助」

その後あくびもした悠助に慧喜えきが聞く

「少し…わ；」

慧喜えきが少し眠いと言った悠助の頭を抱き寄せて自分の胸につけると悠助の腰の辺りを軽くポンポンと叩き出した

「寝ていいよ？」

悠助の頭に自分の頭を付けて慧喜えきが優しく囁いた

「…風邪ひくっちゃね；」

玄関掃除を終えて茶の間に入ってきた緊那羅きんならが寝息を立てている慧喜えきと悠助にかけるものを探しにいった

「何だまだ悠帰ってないのか？」

カラカラという戸が閉まる音と京助の声に慧喜えきが顔を上げた

「義兄様…おかえり」

膝を抱えたまま慧喜えきが京助を見上げた

「珍しいな悠が四時過ぎて帰らないなんて」

靴を脱ぎながら京助が言う

「今日友達と遊ぶとか言ってたっちゃ。お帰りだっちゃ京助」

家の奥から出てきた緊那羅きんならの手には大きめのタオルがあった

「へえ…そっかまあ雪溶けてきたしな…【愛の鐘】なったら帰ってくるだろうしな」

京助が頭をかきながら言う

「慧喜えき寒くなってきたからこれ…」

緊那羅きんならが大きな目のタオルを慧喜えきの肩に掛ける

「ありがと…」

慧喜えきがふつと微笑んでまた膝に顔を埋めた

「…なあいつもこんな？」

鞆たもとを肩から降ろして京助きんすけが緊那羅きんならに聞く

「うん：毎日悠助ゆうすけがいない間の慧喜えきはいつもこうだっちゃ」

「ふうん…」

緊那羅きんならの説明に京助きんすけが何度か頷いて慧喜えきを見た

「悠えきは慧喜えきにとっての活力源なんだな」

鞆たもとを引きずりながら京助きんすけが自室に向い歩き出す

「慧喜えきは本当悠助ゆうすけが好きなんだっちゃね」

先を歩く京助きんすけに小走りで追いついた緊那羅きんならが言うと京助きんすけが足を止めた

「…京助？」

京助きんすけが急に止まったせいで京助きんすけより一歩進んだ緊那羅きんならが京助きんすけを見た

「緊那羅きんならお前さ…無理してんだろ」

京助きんすけの言葉に京助きんすけに向けられていた緊那羅きんならの目が大きくなる

「え…なん…」

【何でもない】そう言おうとしたらしいが凶星きんせうだったのか緊那羅きんならは言葉をかんだ

「作り笑いバレバレ」

京助きんすけはそういながら緊那羅きんならに指を突きつけた

「乾闥婆けんたつばになんか教えられただかされてからお前ずつとそうだろ」

またも凶星きんせうだったららしく緊那羅きんならは黙って俯いた

「俺でよかったら話してみてもいいし？ 一応【関係者】なんだろ？ 俺もその【時】だかいうのに。少しでも話すと結構楽になるかもだぞ」

俯いたままの緊那羅きんならの横を通して京助きんすけは再び自室に向って歩き出した

「…ま、気が向いたらでいいけどさ」

ズルズルという鞆たもとを引きずる音とに混じって聞こえた言葉に緊那羅きんなら

が顔を上げる

そしてきゅつと唇を噛み締めた後二歩後退して茶の間の戸を開けた顔を上げた慧喜えきが玄関の戸の方を見て顔をほころばせた後何故か顔をこわばらせた

聞こえてきたタタタタ：という足音は二人分で足音に混じって笑い声も聞こえてきた

「ちよつと待っててね」

悠助のそんな声とともに玄関の戸が開いた

「おかえり悠助」

息を切らせながら玄関に入ってきた悠助にどことなく不器用な笑顔で慧喜えきがいう

「ただいま慧喜さん！！」

悠助は満面の笑顔を慧喜えきに向けた後せわしなく靴を脱いで家の奥に走っていく

「あ：悠助？」

悠助を抱きしめようとした手を伸ばして後を追おうとした慧喜えきが開けっ放しの戸の方から視線を感じて動きを止めた

「悠助のお姉さん？」

慧喜えきが振り向くとソコには髪をツインテールに結んだ小さな女の子が一人慧喜えきを見ていた

「：誰アンタ」

そんな女の子を慧喜えきが軽く睨む

「高橋麻衣：」

【たかはしまい】と名乗った女の子が慧喜えきの睨みに脅える様子もなくそれどころか玄関の中に入ってきた

「お姉さんは？」

「：どうして俺がアンタに名前教えないといけないのさ」

慧喜えきが見上げてきた麻衣からふいっと顔を逸らせた

「麻衣ちゃんはい！」

パタパタと何かを持って走ってきた悠助が麻衣にその何かを手渡した
「ありがとう悠助」

麻衣が悠助から受け取ったのは一冊のノートで表紙には何人かの名前と【こうかんにつき】という大きな文字が書かれていた

「あ、慧喜さんこの子はね昨日いった転校生の麻衣ちゃんっていつてねー同じ班なの」

悠助が嬉しそうに慧喜を見上げた

「隣の席なんだよねー」

麻衣が悠助に言う

「今日僕が交換日記ノート忘れたから取りに来てくれたんだ」

そう言いながら悠助が靴を履き出した

「…どこか行くの？ 悠助…」

慧喜がしゃがんで悠助に聞いた

「うん！麻衣ちゃん送っていくの」

立ち上がった悠助を慧喜がしゃがんだまま見上げた

「俺も行く」

慧喜が立ち上がると

「麻衣…このお姉ちゃん嫌い」

麻衣が慧喜をチラッと見ていった

「俺だってアンタ嫌いだよ」

そんな麻衣を慧喜が睨む

「いこ、悠助」

慧喜をジトツと睨んだ麻衣が悠助の腕掴んだ

「な…ちよ…！！」

そのまま麻衣に引っ張られて悠助が玄関から出たのを慧喜が裸足のまま追いかけると悠助のもう片方の腕を掴んだ

「悠助は俺のツ！！」

慧喜がそう言いながら悠助を引っ張る

「慧喜さん！？；」

慧喜の行動に驚いた悠助が麻衣に引っ張られながらも慧喜を見た

「駄目だよ！ 裸足だもん！！ 足冷たいし怪我…うわっ；」

力比べを本気ですれば当たり前前に結果がわかる

慧喜えきの方に思い切り引っ張られた悠助と麻衣が倒れ慧喜えきが悠助だけを抱きとめた

見事に顔から転んだ麻衣はそのまま動かない

「麻衣…ちゃん？」

慧喜えきの腕の中から悠助が麻衣を呼んだ

「ふ…うわああああ！！」

顔を上げずに麻衣が大声で泣き出した

「麻衣ちゃん！！」

慧喜えきの腕からすると抜けて悠助が麻衣に駆け寄った

「悠助…」

自分の腕から抜け出した悠助に慧喜えきが手を伸ばす

「大丈夫？ どっか怪我したの？ どっか痛い？」

膝を地面について麻衣に思い切り顔を近づけている悠助を見て慧喜えきが伸ばしていた手を下げた

「あのお姉ちゃん嫌ーッ！！ 怖いーッ！！」

悠助にすぎるように抱きついて麻衣が慧喜えきを指差した

「悠助から離れろよッ！！ 悠助は…！！」

「慧喜さんッ！！」

悠助に抱きついてた麻衣の服の襟に手をかけた慧喜えきに悠助が怒鳴った

「駄目だよ！ 麻衣ちゃん泣いてるんだから」

悠助の言葉に慧喜えきが目を丸くした

「悠助…」

そのまま一歩後退した慧喜えきを悠助の腕の中から麻衣がチラリと見た

「お姉さん怖いお姑さんみたい」

麻衣が涙を拭いながら言う

「違う！！ 俺は悠助の子供産むんだから嫁だッ！！」

麻衣の言葉に慧喜えきが怒鳴る

「姉さん女房が好きなの？ 悠助」

きよとんとしている悠助に麻衣が聞いた

「姉さん女房ってやめたほうがいいよ？ オッパイすぐ垂れるんだよ

？ お姉さん大きいからすぐ垂れるね」

麻衣が慧喜えきの胸を見て言う

「麻衣と付き合って？」

そして悠助を真っ直ぐ見て麻衣が告白した

「駄目ッ！！ 悠助は俺のッ！！」

状況がイマイチ飲み込めない悠助を慧喜えきが後ろから抱き寄せた

「慧喜さん？；」

力いっぱい抱きしめられて悠助が手をバタバタさせる

「まだ【さん】って呼ばれてるじゃない。麻衣は【麻衣ちゃん】って呼ばれてるもんね。【ちゃん】の方仲良しなんだから」

立ち上がり服についた泥を叩き落して麻衣が慧喜えきを見た

「：：そうなの？ 悠助：：」

麻衣の言葉に慧喜えきが悠助に聞く

「え：：？；」

不安げな顔で見下ろす慧喜えきを悠助が見上げる

「俺より：コイツの方が好きなの？」

少し震えた消えそうな声で慧喜えきが聞く

「きまつてるじゃない」

麻衣が答えると悠助を抱きしめていた慧喜えきの腕の力が抜けた

「：：慧喜さん：：？」

ゆっくり悠助を放すと慧喜えきは無言のまま家の中に入ってしまった

「慧喜えきが部屋から出てこない？；」

箸を持ったまま京助が声を上げると悠助がコクリと頷いた

「：：何かあったっちゃ？」

京助と顔を見合わせた後 緊那羅きんならが悠助に聞く

「麻衣ちゃんが：でも僕 慧喜えきさん好きだもん：：」

小さな声でボソボソと慧喜えきが出てこない理由らしきことを話す

「麻衣ちゃん？」

聞いたことのない名前を京助が繰り返す

「転校生…麻衣ちゃんえきは慧喜さんより僕と仲良しだから付き合ってた」

「…あ…あゝあゝ； ハイハイ； なんとなく…なとなあゝくお前の言いたいことはわかった；」

京助が箸を上下に動かして言った

「よくわかるっちゃね；私は全然…」

緊那羅きんならが苦笑いを京助に向けた

「まあ一応兄弟ということまで…で？」

緊那羅きんならに答えた後京助は悠助を見た

「悠はどうしたいんだ？」

箸を置いて悠助に京助が聞く

「え…僕…は…」

悠助が京助からだんだん視線を下に下げて俯いた

「…ふう；」

そんな悠助を見て京助が溜息をついた

「ちよっと難しい展開だあねえ…コリヤ；」

両手を頭の後ろで組んで軽く緊那羅きんならに寄りかかりながら京助が呟く

「そうなんだっちゃ？」

「超稀に見る微妙な三角関係」

緊那羅きんならが聞くと京助が口の端を上げて言う

電話の子機の画面が明るく光った

プルルル…プルルル…

「お…」

緊那羅きんならに寄りかかっていた体を起して京助が子機に手を伸ばした

「ハイもしもし…なんだ南か」

かかってきた電話の相手は南らしく京助がそのまま話し始める

「…もう一回 慧喜えきを呼びに行くっちゃ？」

俯いたままだった悠助に緊那羅きんならが声を掛けると悠助が頷きゆっくり立ち上がると緊那羅きんならも一緒に立ち上がる
「もう一回いつて来るっちゃ」
一応京助にどこに行くのかを継げた緊那羅きんならに向って京助がヒラヒラと手を振った

『でさあサイズ測りたいわけよ』

電話越しに南が話す

「サイズってもなあ…;」

京助が壁に寄りかかり天井を見た

「今 慧喜えきさんは引き籠もりなんですわ」

『は?』

南が素っ頓狂な声を出すと京助が溜息をついた後 慧喜えきが引き籠もった理由を話した

「慧喜えきさん…ご飯だよ?」

慧喜えきの部屋の前で悠助が部屋の中に向って言う

「慧喜えき…」

緊那羅きんならも呼びかけるが応答がなく戸を開けようとしても何かがつかえていて戸は開かなかった

「慧喜えきさん…」

俯いた悠助の頭を撫でて緊那羅きんならが開かない慧喜えきの部屋の戸を見つめた

「…緊ちゃん…僕…」

俯いたまま悠助が呟いた

「…大丈夫だっちゃよ」

そんな悠助に緊那羅きんならは微笑を向けて軽く背中を押した

「明日はきつと出てくるっちゃ」

ゆっくりと慧喜えきの部屋から離れつつ緊那羅きんならは慧喜えきの部屋を軽く振り返った

「…大丈夫」

緊那羅きんならが二回目に呟いた言葉はどこか自分にも言い聞かせているような感じだった

翌日の土曜日

栄之神社の石段の前に自転車きんならが止まった

「やー雪解けてって最高！」

約半年の眠りから復活した愛車の【ニボシ】から降りて南が伸びをする

「あれ？ 南？」

自転車のブレーキ音に気付いた緊那羅きんならが石段の上から南を見下ろした
「おっはーラムちゃん！！」

まだほんのり息が白く残る気温の中南のやたらテンションの高い挨拶が響く

「京助ならまだ寝てると思うっちゃけど…」

箒片手に石段を駆け下りてきた緊那羅きんならの後ろにはコマとイヌがついてきていた

「いんや俺今日は慧喜えきちゃんに用事あるんですわ」

ニボシのカゴから鞆を取り出して肩に掛けると南が笑った

「慧喜えきに？」

一緒に石段を登りながら緊那羅きんならが南に聞く

「そー」

南が鞆の中からメジャーを引っ張り出した

「…何だっちゃソレ」

足を止めて珍しそうにメジャーを見る緊那羅きんなら

「あ、そっかラムちゃん初めて見るのか…コレはこうやって…サイズ…長さとか測るんだ。へー！ ラムちゃん細いんだなア…ミナミ負けそう」

緊那羅きんならの腰にメジャーをまわして南が説明する

「…何だか昔ヒマ子さんに同じ様なことされた覚えがあるっちゃ」
緊那羅きんならが過去を思い出して呟いた

「あ…でも慧喜えきは今…」

「わかつてる」

慧喜えきが今どんな状況か言おうとした緊那羅きんならに南がにっこりと笑顔を向けた

「だからこそ何とかしたくて」

南が玄関の戸を開けた緊那羅きんならの後ろを通って庭の方に向う

「南？ どこいくっちゃ？」

少し開けた玄関の戸をそのままに緊那羅きんならが南の後を追う

「庭からはいるんだやな？」

コマが南に話しかけた

「おおお； 忘れてたお前等話せたんだっけな；」

まだ雪の残る庭を横切って屋根から落ちた雪が積もってできた雪山に埋まりながら南が辿り付いた所は

「ここだっけ？」

少し息を切らせながら南が後からついてきていた緊那羅きんならに聞く

「え…ここって…」

箒片手に緊那羅きんならが南の指が差している窓を見た

「慧喜えきツちゃんの部屋」

ニーっと南が笑った

ココンコン…

「慧喜えきツちゃーん！ あ・け・て」

南が慧喜の部屋だという所の窓をノックして声を掛けた

「南…たぶん慧喜えきは…」

緊那羅きんならが南に声を掛けると南が振り返り笑った

「見えないかもしれないけど俺結構しつこいんだよねえ？

粘るよ

？ 山芋」

南がハハッと笑って再び窓の方を見る

「慧喜えきツちゃーんってばー！！ あーけーてー！！」

二回目の南の呼びかけにも慧喜えきは反応がない

「：ここは大丈夫だからラムちゃんは掃除してきなよ。まだ途中なんだろ？」

緊那羅きんならに笑顔で言った南を緊那羅きんならが黙ってみる

「慧喜えきツちゃん：じゃあ開けなくてもいいから話だけチヨロツと聞いてくれない？　ってか勝手に話すから」

そういうと南は上着を思いっきり引っ張ってそのまま雪の上に座った

「京助から少しだけ慧喜えきツちゃんのヒッキーの原因聞いたんだけどさ…」

手に持っていた袋を側に置いて南が話し始めると緊那羅きんならもしゃがんで話を聞き始める

「悠には境界線っていうか誰にでも平等に優しいって言うか：とにかく俺も悠に助けられたんだよね慧喜えきツちゃんと一緒に」

少し気温が上がってきたのか屋根に残っていた雪が水になってポタポタと垂れてきた

「俺サア：今でこそこうやって明るく元気でよい子でやってるけど昔はスッゲェおとなしくて暗くて友達なんていなくてサア」

ハハツと苦笑いをした南を緊那羅きんならが見る

「：しかも俺実は正月町の生まれじゃなくていわゆるアレ：前は別のところに住んでてさ今はもういないけど婆ちゃんと同居するって言うから引越してきたんだ。小学校4年の時だったかなア前にいたところでも一人だったのに引越してきたばっかのコッチに知り合いとかいるわけないだろ？　だからいつも一人でさ…」

南が過去を思い出したのか少し表情が暗くなった

「そうして何日か過ごして：悠に会ったんだ」

南が顔を上げた

「なにそれ？」

両膝に生暖かく少し湿ったような感覚がして南が顔を上げると見知らぬ子供が大きな目で南の手を見ていた

「え…」

いきなり見ず知らずの子供に話しかけられて南が慌てる

「見して〜」

その子供は満面の笑みを惜しげもなく南に向けた

南の膝に両手を付いて身を乗り出して何とか南の手の中のものを見ようとしている子供を南はどうすればいいのかわからずただ戸惑っていた

「悠！！ 何して…てアレ？ お前確か南とか言う…何してんだ？」

今度は自分と同じくらいの歳の少年がやってきて南に声を掛けた

「え…あ…あの…」

それまで滅多に人に話しかけてもらったことなんてなかった南が返答に困っていると【悠】と少年に呼ばれていた子供が南の手の中のものを取った

「あ…」

「すごおい！！ うさぎしやんだ！」

縫いかけだったウサギのマスコットを目をキラキラさせながら悠が笑った

「おお！！ すげえ！ なにこれお前が作ってるん？」

少年も悠の手に行っているウサギのマスコットを見て声を上げた

「あ…針…ついてるよ？ 危ない…」

南が悠の手にそっと触れた

「ねえねえ！！ 僕にも作って〜？」

ウサギのマスコットを南に返しながら悠が言う

「え…」

「こおら悠！ 困ってるだろ？？」

悠の言葉に固まっていた南を見て少年が悠を軽く小突いた

「あ…」

「だって〜凄いいんだもんこのお兄ちゃんのうさぎしやん！！ 可愛
いねえ凄いいねえ」

笑顔で南を見上げて悠が言う

「えと…もう少しでできるから…そしたらコレあげる…よ？」

「ほんとう!!!? お兄ちゃんあいがとー!!!」

小さく消えそうな声で南が言う。悠が南に抱きついた

「いいのか?」

南の隣に腰を下ろした少年が聞く

「うん：別にただ作ってただけだし」

そう言って南が針を動かし始めるとそれを少年と悠が黙って見る

「：すげえ：器用だなお前」

「ウサギしゃん♪ ウサギしゃん♪」

感心する少年と嬉しそうな悠をチラッと見て顔を赤くしながら南はウサギを縫っていった

「あ：慧喜^{えき}」

ふと窓の方を見た緊那羅^{きんなら}が窓に手をかけて鍵をあけようとしている慧喜^{えき}を見つけた

「：ありがと慧喜^{えき}ッちゃん」

南が笑顔で慧喜^{えき}に言う

「窓から失礼しまっせ」

靴を脱いで部屋の中に入った南が外に置いていた鞆も部屋入れる

「：ラムちゃんは? 入らないの?」

外にいる緊那羅^{きんなら}に南が聞くと緊那羅^{きんなら}が窓の側まで来て顔だけを中に入れた

「さて慧喜^{えき}ッちゃん：悠と喧嘩したんだって?」

「ちがう!」

南が言う。と慧喜^{えき}が声をあげた

「俺は：ッ：俺は悠助が好きだけど：悠助は：」
声をだんだん小さくして慧喜^{えき}が言った

「ねえ慧喜^{えき}ッちゃん：悠が言ったの? ソレ」

黙り込んだ慧喜^{えき}に南が聞く

「え：：?」

問われて慧喜が顔を上げた

「慧喜ッちゃんよりそっちの女の子の方が好きだって悠が言ったの？」

南が再度聞く

「違う：けどでも：」

慧喜が答えると南が大きな溜息を吐いて苦笑いを向けた

「じゃあ悠が直接言ったわけじゃないんじゃない？」

「でもッ！！」

苦笑いのまま南が言うのと慧喜が何か言おうと口を開いた

「慧喜ッちゃん悠の考えがわかるの？」

南が聞くと慧喜が首を横に振った

「：わからないけど：でも：」

そしてまた黙り込んだ慧喜に南が近づいた

「：悠の気持ち知りたい？」

南の言葉に慧喜がすばやく顔を上げた

「：お前は悠助の考えがわかるの？」

慧喜が南を真っ直ぐみて言うのと南がにっこり笑う

「わかるわけないじゃん？」

そしてその南の言葉で慧喜がムツとなる

「でも確かめることに協力は出来るよ」

付け足した言葉に慧喜がきよとした顔をする

「それには：もう少し協力者が必要かなあ？」

南が窓の外にいる緊那羅に目を向けた

「：相変わらずチョ汚ねえのなお前の部屋；」

京助が南の部屋を見渡して呟いた

「まあ適当に居座ってくりやれ」

慣れた足取りで足元のものを避けつつ南がクローゼットから丸めた大きな紙を取り出した

「居座れってもナア；」

京助の後ろから顔を出した中島も南の部屋を見渡して言う

「少し片付けろよお前；」

中島を押しのけて南の部屋に第一步を踏み入れながら坂田が言った
「仕方ないじゃん；京助ン家はいつ悠が帰ってくるかわからないしさあ」

南が鉛筆と消しゴムを持ち戸に向って歩いてきた

「ハイハイどいてどいて」

そして南が廊下に紙を広げる

「あ、ラムちゃんその長い定規とって」

緊那羅きんならのすぐ後ろに立てかけてある定規を南が指さした

「あ：うん；」

慧喜えきが取った定規を受け取り緊那羅きんならがソレを南に渡す

「サンキュ：：でこんなところに集まってもらったのはほかでもない
んだ：：56ツと」

広げた紙にいくつかの数字を書いたあと長い定規を当てて印を付け
ながら南が言った

「他でもなかったらなんなんだよ；」

緊那羅きんならに叩き起こされた京助があくびをしながら聞く

「作戦名は：ビバセイシュン In g！ヤキモチひっくり返し大作戦
！っていつてだな」

南が線を引きながら言った

「お前ソレ絶対今即席で考えただろ」

中島が南に突っ込んだ

「まあいいじゃん？　：そしてこの作戦には君達の協力が必要不可
欠なんですわ」

南がにーツと笑って慧喜えきを見た

「悠助元気ないね？」

並んで歩いていた悠助に麻衣が声を掛けた

「：：そうかな？」

明らかに無理してます的笑顔を麻衣に向けた悠助が足を止めた

「麻衣というのつまらない？ 麻衣のこと嫌い？」

悠助の顔を覗き込んで麻衣が聞く

「嫌いじゃない…けど…けど…」

俯いた悠助が口ごもる

「あのお姉さんの方が好きなの？ 麻衣は嫌い？ ねえ？」

そんな悠助に麻衣が容赦なく質問攻めをする

「悠助ーッ！！」

前方から自分の名前を呼ばれて悠助が顔を上げると緊那羅きんならが走ってきた

「緊ちゃん？」

悠助と麻衣の前で足を止めた緊那羅きんならがポケットから何か紙切れを出してブツブツ言った後紙切れをしまい息を吸った

「大変だっちゃー！！（棒読み）慧喜えきが無理矢理連れていかれたっちゃ（棒読み）」

傍から聞けばあきらかに演技だとバレバレの緊那羅きんならのセリフに悠助が目を丸くした

「慧喜えきさんが…？」

「そうだっちゃー！！（棒読み）慧喜が心配なら一緒に来てくれないとうわーお！！ ビックリ！！ 慧喜があんなことやこんなことされちゃうかもしれないっちゃ（棒読み）…ってなんなんだっちゃこの文；」

さすがの緊那羅きんならも最後の方の文章に突っ込んだ

「慧喜さんが…」

そんな緊那羅の明らかに演技ですセリフを完全に信じているような悠助が顔を上げて緊那羅を見た

「一緒に行けばいいの？」

真顔で見上げてきた悠助に緊那羅きんならが頷いた

「一緒に行けば慧喜さん助かるんだね？」

いつものほほんとしている悠助の顔がいわゆる【漢】の顔になった

「悠助：行くの？」

麻衣が悠助に聞く

「ごめんね麻衣ちゃん！！ またね！！」

麻衣に悠助が手を振って緊那羅きんらが走ってきた方向に走っていく

「：ごめんだっちゃ」

麻衣の頭を軽く撫でて緊那羅きんらも悠助の後を追った

「：子供だましね」

ふうと溜息をついて麻衣は悠助と緊那羅きんらに背中を向けて歩き出した

「情報によると慧喜えきは坂田の家にいるらしいっちゃ（棒読み）」

悠助に速さにあわせて走りながら緊那羅きんらが紙切れを見て言う

「じゃあ坂田に連れて行かれたの？」

悠助が走りながら聞く

「えーと：えーと：；あ、コレだ：柴田……」

紙切れに書いてある【柴田】の二文字を見た緊那羅きんらの表情が変わった

「し：柴田さんにくわしいことはきいてほしいっちゃ：ッ」

そしてめちゃくちゃ嫌そうに続きのセリフを言った

「柴田さんに？」

悠助が振り向いて聞くと慌てて紙切れを隠しながら緊那羅きんらが頷いた

「わかった！！」

そんな緊那羅きんらの行動を微塵も怪しいとは思っていないらしい悠助はただ走っている

「：ごめんだっちゃ悠助；」

悠助の後姿を見ながら緊那羅きんらが小さく謝った

「よぉーしヨシ！！」

南が満足気に大きく頷いた

「：あいかわらずトコトン器用だよなお前……」

京助が感心したように言う

「後はもう一人の主役を待つのみだな」

中島が言うと南が頷いた

「…俺は何すればいいんだ？」

慧喜えきが南に聞く

「慧喜えきツちゃんはただ悠助を待ってればいいよ」

南が笑った

「…待つ…」

慧喜えきが小声で繰り返し眉を下げた

「…来るのかな…来てくれるのかな…悠助は…」

いつになく全身から不安オーラを出している慧喜えきを見て3馬鹿と京助は顔を見合わせた

「俺…待ってたんだずっと…でも…でも来てくれなかった…ッ」

膝えきの上の両手に力が入り慧喜えきの声が震えた

「誰が来てくれなかったんだよ；」

坂田が慧喜えきに聞く

「俺はずっと待ってたのに…まって…」

「悠は来るよ」

坂田の質問に答えず【待っていた】を繰り返し慧喜えきに南が言う

「悠は来る」

顔を上げた慧喜えきに南が笑顔で言った

「…なんでいい言い切れるんだよ…」

そんな南を慧喜えきが睨む

「え？ 信じてるから」

何の戸惑いもなく南がさらっと答えると京助と坂田、中島も頷いた

「…ソレだけ？」

言い切った南に慧喜えきが聞く

「うん」

南が頷くと京助と坂田、中島も頷いた

「慧喜えきは悠を信じられないのか？」

京助が聞く

「…俺は…俺…は…好きだけど…信じたいけど…」

「ど？」

小さく聞こえる慧喜えきの声に一同は耳を澄ませた

「…怖い…信じて裏切られて傷ついて捨てられて…もう嫌なんだ俺…」

「捨てられたならまた僕等が拾うよ」

「うおおおおおう！！！！！！！！」

突如聞こえてきた矜羯羅こんがらの声に3馬鹿と京助がビビりまくりの声を上げた

「きよ…きよんがらしゃん；」

「矜羯羅」

矜羯羅こんがらが中島を睨んだ

「…し…捨てられても僕と矜羯羅こんがらがまた拾うから…信じてもいい」
矜羯羅こんがらの少し後ろから制多迦せいたかが言う

「でも…」

「でもない。せっかく僕等がまた拾ってあげるって言ってるんだから…信じてみなよ」

不安いっぱいの顔で矜羯羅こんがらを見上げる慧喜えきに矜羯羅こんがらが言う

「…うすけは絶対裏切らない…だから大丈夫」

制多迦せいたかが微笑みながら慧喜えきの頭に手を置いた

「…ってかお前等いつから…」

坂田が制多迦せいたかと矜羯羅こんがらを指差して言う

「お二方を指差すなよ」

慧喜えきが坂田に言った

「とにかくさ！！ そのお二方もこう言って下さってる事だし…慧喜えきちゃんは全力で悠を信じてもいいと思うよ？」

南が慧喜えきに笑顔で言った

「そーそー！ お二方のお心使い無駄にしちゃアねえ？」

京助が口の端を上げて言う

「なんだ！！ 無駄にしちゃんねえ！！」

中島もハッハと笑って言った

「…ね？」

南が慧喜えきの肩を軽く叩くと慧喜は少し赤くなりなりながら小さく頷いた

緊那羅きんならから聞いたことを疑うこともせず走り続けて坂田家の前に来た悠助が膝に手について荒く乱れた息を整えた

「し…柴田さんに…会えばいいんだよね？」

顔を真っ赤にして少し息苦しそうな悠助の背中をさすっていた緊那羅きんに悠助が聞いた

「え？ …あ…うん；」

緊那羅きんならが慌てて頷く

「…本当にごめんだっちゃ悠助；」

悠助の背中をさすりつつ緊那羅きんならがボソツと謝ると悠助が門の隣にある小さい方の出入り口に足を進めた

「…慧喜さん…」

ぐっと握りこぶしを作った後ソレを解いてインターホンに指を伸ばした

「柴田さんお見えになりやした」

三枚目のチーズおかきを半分に分けていた柴田に三浦が声を掛けた

「わかった。お前は若に伝えて来い」

側にあった番茶を一口口に含むと割りかけていたチーズおかきを啜え柴田が歩き出した

「…変わりつつあるな…」

柴田が独り言をいふと笑った

玄関まで通じる長い石畳の道に通された緊那羅きんならと悠助の前に笑顔で現れた柴田を緊那羅きんならが思いつきり睨む

「やだなア； まだ嫌われてるみたんだな；」

苦笑いで緊那羅きんならを見て柴田が言う

「柴田さん！…！ 慧喜えきさんは！？」

そんな柴田のスーツの裾をつかんで悠助が聞いた

「大丈夫今は無事だよ悠助君」

ポフッと悠助の頭の上に置いた柴田の手を緊那羅きんならがペシッと叩いた
「…ははは； 本当に嫌われてるんだね俺…； …さてつと…」

緊那羅きんならに叩かれた手を振りながら柴田が悠助を見た

「悠助君は慧喜えきさんをどう思っているんだい？」

「え…？」

しゃがんで悠助の目線にあわせるようになった柴田が笑顔で聞く

「難しいかな…じゃあ悠助君は誰と一緒にいたい？」

質問を変えて柴田が再び聞いた

「一緒…に？」

悠助が質問を繰り返して俯いた

「…視線がちよつと痛いかな緊那羅君；」きんなら

突き刺さるような視線を絶えず柴田の背中に送っている緊那羅きんならに柴田が言った

「…僕はみんなと一緒にいたい…慧喜えきさんとも一緒に…京助とも緊ちゃんとも…」

悠助が答える

「うん、そうだね…じゃあ今一番会いたい人は？」

柴田が笑顔で再び聞いた

「今…？」

「そう、今一番会いたい人…悠助君は誰に会いに何のためにここに来たのかな？」

顔を上げた悠助に柴田が笑顔を向けた

「…じれったい」

矜羯羅こんがらが吐き捨てるように言った

「じれったいって言ってもしょうがねえじゃん；」

京助が矜羯羅こんがらに言う

「悠も悩んで…ってオイ！！；」

「矜羯羅様？；」

慧喜えきの手を掴んだ矜羯羅こんがらが部屋から出て行く

「コラ！！； 主役連れてドコ行くんだよ！！；」

中島と坂田が追いかける

「：っこう短気だから矜羯羅こんがら」

半分呆れたような笑顔を南と京助に向けた制多迦せいたかも矜羯羅こんがらたちの後を追って部屋から出た

「：そのようで」

へツと笑った京助も南と共に部屋から出る

「矜羯羅様：」

「今回だけだからね：面倒くさいことは嫌いだから」

慧喜えきを振り返りもせずに矜羯羅こんがらが言う

「オイってば！！；」

追いついた坂田が矜羯羅こんがらと慧喜えきの手を掴んだ

「どこ行くなってんよ；」

同じく追いついてきた中島が聞く

「決まってるじゃない：悠助の所」

ゆっくりと振り返った矜羯羅こんがらが坂田の手を振り払う

「は？；」

「僕面倒なこと嫌いなんだよね」

再び慧喜えきの手を掴むと矜羯羅こんがらが歩き出す

「ちよい待ち！！； 行くならせめてコレ着て！」

南が両手に何やら持って追いついた

「コレ：」

慧喜えきがソレを少し摘んで持ち上げる

「即席だからあんま見栄えはよくないけど勘弁ね； お姫様？」

南が笑った

「悠助：」

慧喜えきの声がして悠助が顔を上げた

「え…慧喜…その格好…」

真っ白いドレスの裾を引きずらないよう軽く持った慧喜の隣には矜羯羅がいた

「慧喜さん…」

悠助に名前を呼ばれたからなのか嬉しそうに眉を下げた慧喜を見て矜羯羅が慧喜を片手で抱き寄せた

「こ…んがら様？」

「きよんがらさん…？」

目をぱちくりさせて矜羯羅を見上げる慧喜と呆然としている悠助に矜羯羅が微笑を向けた

「矜羯羅…？」

緊那羅と柴田も矜羯羅を見る

「コッチの世界で結婚する時に着る服なんだってねこれ…」
矜羯羅がにっこりと笑ったまま悠助に言った

「え…うん…ウェディングドレスだよ？」

悠助が答える

「結婚…？」

緊那羅が慧喜の格好を改めてまじまじと見た

「南君の手作りだね…相変わらず器用だなあ」

柴田が立ち上がり目を細めた

「あの服は女性が一番幸せになりたい男性と幸せになるために着る服なんだ」

腰に手を当ててさりげなく柴田が緊那羅に説明する

「幸せになるために着る服…だっちゃ？」

真っ白く長く時たま風に靡くそのウェディングドレスを緊那羅が見つめる

「着たい？」

柴田がいたずらっぽく緊那羅に笑いかける

「な…ッ！！ 私…は男だ…っちゃッ！！」

緊那羅が怒鳴った

「似合うと思うよ緊那羅君」

ハハッと笑って柴田が緊那羅に背中を向けた

「…ッ…」

何かまた怒鳴ろうとして緊那羅が口を開こうとすると肩を叩かれて振り返る

「よ、ご苦労ご苦労：台本と違うけどな」

京助が緊那羅の肩に手を置いたまま悠助を見る

「ラムちゃんお疲れ」

ヒラヒラと手を振って3馬鹿もやってきた

「若：展開違うんですけどいいんですか？」

柴田が坂田に聞く

「…いんじゃない？ 予定は未定で決定じゃなきに」

坂田が柴田に言う

「そんなもんなんですか？」

「そんなもんだ」

坂田が答えると南と中島、京助も【同感】とばかりに頷いた

「その服を着た慧喜の隣に僕がいる…ということだね」

悠助の目が大きく見開いた

「矜羯羅様！？」

同時に慧喜も声を上げた

「わかる？ 慧喜は僕と結婚するの」

慧喜をいわゆるお姫様抱きをして矜羯羅が悠助に笑みを向ける

「…役者だな」

「…上手いな」

「…劇団四季に売り飛ばすか」

「…アドリブ大王」

3馬鹿と京助が矜羯羅を見て言う

「…んだかんだいって面倒見がいいとか世話焼きなんだよね矜羯羅って」

あくびをしつつ制多迦が矜羯羅を見て微笑んだ

「…ぶんから悪役を買って出るとか…よくある」

自分で自分の頬をつねって制多迦せいたかが小さく言った

「…んとうはね矜羯羅こんがらは凄く優しいんだ…でも不器用なんだよね；だからよく人に恨まれたり憎まれたり…矜羯羅こんがら言い訳もしないから」

そして制多迦せいたかがうんうんと頷く

「それはそれは…やたらいいヤツじゃん；」

中島が矜羯羅を見た

「…ん、いいヤツ」

制多迦せいたかが笑う

「…くの相方が矜羯羅こんがらでよかった」

そう言って目を細めた制多迦せいたかを3馬鹿と京助、緊那羅きんならが見て顔を見合わせた後自然と笑顔になる

「…そうですね…」

軽く会釈のように頭を動かして柴田が微笑みを制多迦せいたかに向けた

「…ん」

制多迦せいたかも柴田に微笑みで返した

「慧喜えきさん…」

悠助が慧喜えきを見た

「…矜羯羅様こんがら…」

矜羯羅こんがらに抱き上げられたまま慧喜えきが困った顔で矜羯羅こんがらと悠助を交互に見た

「きよんがらさん…」

名前を呼ばれて矜羯羅こんがらが笑顔を悠助に向けた

「何？」

慧喜えきを抱えなおして矜羯羅こんがらが返事をする

「…慧喜えきさん…と結婚するの？」

悠助が聞く

「悠助…俺は…」

「黙って」

慧喜えきが悠助ゆうすけに何か言おうと口を開くと矜羯羅こんがらが慧喜えきの耳元で小さく言った

「悠助には可愛い子がいるんでしょ？ ならいいじゃない…」
矜羯羅こんがらがにっこり笑う

「麻衣ちゃんは…僕は…」

悠助の両手がぎゅっと握られた

「僕は…慧喜えきさん…」

そんな悠助を慧喜えきが不安そうな顔でじっと見ている

「なんだか俺今スゲエドラマ見てるような気がしてならないのです
が」

中島が隣にいる京助に言う

「…なんだかなあ…」

京助が頭の後ろで手を組んで口の端を上げた

「どうですか京助さん自分の弟が今一皮剥けようとしている現場を
目の当たりにして」

坂田が京助の前にマイク（と思ってください的右手）を出して聞く

「いやあ…本人二股してますし」

南が言うのと京助が南をどつく

「しかも男とヒマワリに」

坂田がハッハと笑う

「してねえッてんだろがッ！！！！…」

京助が怒鳴る

「どうですか緊那羅きんならさん二股かけられている感想は」

中島が緊那羅きんならにマイク（と思ってください的左手）を出して聞く
「へっ！？？」

いきなり話題にいれられた緊那羅きんならが素っ頓狂な声を出した

「私…が何だっちゃ？？」

「反論しねえのかよッ！！！！…」

自分を指さしてうろたえる緊那羅に京助が怒鳴る

緊那羅きんならが耳を塞いで京助に言う

「誰が誰と夫婦だ……！」

坂田の胸倉をつかんでガクガク揺すりながら怒鳴る京助に何が何だか把握できていない緊那羅はただ京助を見る

「なんなら：此処で誓いの口付けとか：してみようか？」
えき 慧喜
こんがら 矜羯羅が言うのと悠助が目を大きく見開いた

悠助に負けないくらいに目を大きく見開いた慧喜えきが矜羯羅こんがらを見る

えき　　こんがら
そんな慧喜を矜羯羅が笑顔で見ると顔を近づける

「ッ！！！！」

突然悠助が叫んで駆け出して

ドテツ

「悠助!!!」

えき
慧喜が悠助の名前を呼んで矜羯羅の腕から離れようとする
こんがら

「悠……」
「悠助……」
「悠助君……」
「……うすけ……」

京助と3馬鹿、そして緊那羅と柴田、制多迦も慧喜とほぼ同時に叫んだ

慧喜えきが必死ひしになつて悠助ゆうすけに伸ばした手を矜羯羅こんがらが掴んで引き寄せた

えき
慧喜が泣きそうな顔で矜羯羅を見る

「…駄目…」

悠助の声が聞こえて慧喜えきが振り向くと膝から血を流している悠助が立っていた

「悠助…血…」

「慧喜は僕の子供産むだもんッ!!」

悠助が叫ぶと辺りがシン…となった

「だから…だからきよんがらさんと結婚したら駄目…ッ」

転んだ痛さをこらえているのかはたはまた別の何かを我慢しているのか悠助の目には涙が溜まっている

「…もういいね」

矜羯羅こんがらが慧喜えきを降ろして掴んでいた腕を放した

「…矜羯羅様…」

慧喜えきが矜羯羅こんがらを見上げた

「行けば？」

フツと笑みを浮かべると矜羯羅こんがらは慧喜えきに背中を向けた

「お疲れさん」

京助が矜羯羅こんがらの背中を叩いた

「…何が」

3馬鹿の後ろで大あくびをしていた制多迦せいたかに玉をぶつけながら矜羯羅こんがらが言う

「ご苦労様でした」

柴田が矜羯羅こんがらに言った

「…別に…僕が何かした？」

横目で制多迦せいたかを見つつ矜羯羅こんがらが言う制多迦せいたかが笑顔を向けた

「悠助…血でて…」

白いドレスを引きずりながら悠助の元に来た慧喜えきがしゃがんで悠助の膝にそっと触った

「慧喜…さ…」

「慧喜えきって呼んでくれたね」

慧喜えきが本当に嬉しそうな笑顔で悠助を見た

「…初めて…だね」

白いドレスを少し破いて悠助の膝に巻きながら慧喜えきが鼻を吸った

「…僕…」

悠助が慧喜えきの頭を抱きかかえた

「僕 慧喜えきと一緒にいたい…一番一緒にいたい…」

「…うん…俺も」

悠助の背中に慧喜えきが手を回して抱きしめた

「俺悠助の子供絶対産む…」

少し血がにじんできた白い布を膝に巻いたまま悠助は地面に膝をついて慧喜えきと視線を合わせた

「はい皆さん回れ右」

中島が声を掛けると一同規律よく回れ右をして悠助と慧喜えきに背中を向けた

「そのまま静かに退散!!」

坂田が言うのと小走りで一同が駆け出す

「ハッピーエンドでよかよか!! 本当の結婚の時にはもっと豪華なドレス作りたいもんだあね」

「うわ…」

南がチラッと振り返って満足気に笑った横で緊那羅きんならが躡く

「ホレ!!! しっかりせんかい…」

京助が緊那羅きんならの腕を掴んで立ち直らせる

「…うん…; ごめんだっちゃ…」

苦笑いを返した緊那羅きんならを制多迦せいたかと矜羯羅こんがらが黙って見る

「…お茶でも用意しますか? 若」

柴田が坂田に言う

「いいねえ〜!!」

中島と南、京助が柴田の背中を叩いて親指を立てた

「チーズおかきでいいですか？」

柴田が笑いながら言う

「：チーズおかき本当好きだなお前、」
坂田が口の端を上げて笑った

＞i23746—2527＜

【第七回・参】 幸せ捜査網（前書き）

花粉の季節、もとい桜の季節がやってきた
そんな桜にまつわる一寸不思議なジंकス

【第七回・参】 幸せ捜査網

「ぷしょっ!!」

目玉焼きの黄身に箸で穴を開けて醤油をたらし混ぜて白米の上に乗せた悠助がくしゃみをした

「大丈夫だっちゃ?」

緊那羅きんならが箸をおいて側にあったティッシュの箱を差し出した

「そろそろ悠ちゃんマスクの季節かしら」

母ハルミが立ち上がり茶箆ちへの引き出しを開けて何かを探し始めた

「ありがと慧喜えき」

垂れていた悠助の鼻水を慧喜えきがふき取ると悠助が笑顔を返す

「新婚さんいらっしやうい」

テーブルに両肘を付いて味噌汁を飲みながら京助が言う

「やうやくコッチも桜の季節かア：まあ：早咲きの桜は見たけどすぐ枯れたしな」

チラッと横目で緊那羅きんならを見つつ京助が言った

「あれは…：桜の木に悪いことしちゃったっちゃ…よ…ね…：」
慧喜えきが初めて此処に來た時 緊那羅きんならは榮之神社の桜の木に真冬だといふのに花を咲かせた

「もう一回咲いてくれるといいんだっちゃけど…」

その桜の木は茶の間からは見えないとわかっていても緊那羅きんならは窓を見た

「：まあ大丈夫だろ気にすんな」

そんな緊那羅きんならに京助が言う

「そういえば京助アンタ珍しく早起きだけど何かあるの?」

引き出しを閉めて母ハルミが悠助にマスクを手渡しながら京助に聞く

「何かないと早く起きちゃ駄目なんか俺は：」

箸を咥えて食べ終わった食器を手に持ち立ち上がった京助がブツブツ言う

「駄目じゃないけど珍しいわねって：あ、食器ちゃんと桶の中に入れておいてね？乾くと取れにくいから」

「へいよ」

器用に肘で戸を開けて京助が茶の間から出て行った

「ごちそうさまでした」

そのすぐ後 緊那羅きんならが箸をおいて両手を合わせた

「悠助と慧喜えきの分も下げていいっちゃ？」

自分の食器を重ねつつ緊那羅きんならが慧喜えきと悠助に聞く

「あ、うんありがと緊那羅きんなら」

マスクをした悠助の頭を撫でながら慧喜えきが言う

「ありがと緊ちゃん」

悠助も鼻水を啜りながら笑った

「わるいわねえ：ついでに洗ってくれないかしら？」

母ハルミが湯飲みを持って緊那羅きんならに聞いた

「いいっちゃよ？」

それに対し緊那羅きんならが笑顔で答える

「あら～！ ありがとう！！ 助かるわア」

母ハルミが心底嬉しそうに言った

「何？ 押し付けられたんか；」

台所で水を飲んでいた京助が全員の食器を持ってきた緊那羅きんならに聞いた

「ううん？ 私がやるって言ったんだっちゃ：って京助； 一回水で流してから入れて欲しかったっちゃ；」

卵の黄身と飯粒が浮かんでいる桶を見て緊那羅きんならが溜息をつき中から食器を取り出した

「悪いい；」

ハハッと笑って京助は水を飲み干した

「：お前主婦化してきたよな」

京助の言葉に桶の中に必要以上に洗剤を入れた緊那羅きんならが京助を見た
「はッ！？；」

片手に持った台所洗剤（白いジョイ）からシャボンの泡を出しつつ
緊那羅が声を上げた

「なんつーか…いつ嫁に行ってもおかしくないというか…掃除、洗濯から料理まで…」

京助が指を折りながら言う

「…ハルミママさんに教えられたんだっちゃけど…」

そういった緊那羅の手には今だシャボンを出しているジョイが握られている

「母さんだいぶ楽しいぞ？ サンキュな」

京助が笑いながら水が入っていたコップを桶の中に沈めた

「や…私は…ただ…」

緊那羅がジョイの蓋を閉めて俯いた

「私は…ただ…」

「京助ー！！ 電話よー！！」

何か言いかけた緊那羅の声きんならが母ハルミの声でかき消された

「こっちこっちー！！」

公園の入り口付近で大きく手を振っている南に京助も手を上げて答えた

「いやしかし雨降るかも知れないなあ…京助が九時前に起きてたなんてさ」

ガサガサとコンビニの袋を鳴らしながら中島が言う

「どいつもこいつも俺が永遠の眠り姫みたいなこといいやがって…」

京助がケツと悪態をついた

「全国の可愛いお子様が描いている眠り姫の可憐なイメージが関東大震災のごとく崩れ落ちるぞ的発言は控えてください？ ミスター？」

坂田が肩に担いでいた丸めたシートで京助をどつく

「ねえねえ！！ 本当に桜咲いてるの？」

マスクをして慧喜^{えき}と手を繋いでいた悠助が3馬鹿に聞く

「ああ！ たぶん正月町で一番咲きの桜だろうな！ 昨日偶然見つけたんだ」

「灯台下暗しというか穴場というか…だな」

南と中島が言う

「…でも…この人数じゃ少し狭いかもしれないけどね」

南がチラリと後ろを振り返った

「何？」

腕を組んだまま歩いていた矜羯羅^{こんがら}と目が合い南が矜羯羅^{こんがら}に手を振った

「本当監視カメラか何かついてるんじゃないのかお前！」

坂田が京助のズボンを引っ張って中を覗く

「…今日はチェックですか京助君」

中島と南も京助を取り囲み中を覗く

「俺今日紺色だっぴょん！ 見る？ 見る？」

南がハイ！と手を上げる

「…これから桜見に行くって言う時に汚いものの話題はよしてください」

背後からグッサリと突き刺さるトゲのある乾闥婆^{けんたつば}の言葉が飛んできた

「っ…ひどいわ！！ まだ五回くらいしか履いてないおパンツなのにッ！！ なぐさめてラムちゃ〜ん！！」

南が緊那羅^{きんなら}に駆け寄って抱きついた

「五回も履けば充分だとおもうっちゃ；」

苦笑いで緊那羅^{きんなら}が言う

「監視カメラついてるのは俺じゃなくて緊那羅^{きんなら}と慧喜^{えき}だと思うぞ」

「何！？ 慧喜に！？」

京助がさらっと言った言葉に3馬鹿の視線が慧喜^{えき}に集まる

「む…胸の間とかにあったりして？」

中島が京助にコッソリと聞く

「…緊那羅^{きんなら}には胸ねえだろうが」

京助が中島に言った

「宝珠が知らせるとか何とか…言つてたよな慧喜^{えき}」

京助が慧喜^{えき}に聞く

「そうだ」

迦楼羅^{かるら}が慧喜^{えき}の代わりに答えた

「…ふうん…つてかこうチョコチョコくるつてことは…やっぱり…」

坂田が摩訶不思議服集団をぐるつと見渡した

「…暇人集団なんだあね」

南が言うのと3馬鹿と京助が頷いた

「…こつちにいたほうが退屈^{こんがら}しないしね」

南の言葉を否定しないで矜羯羅^{こんがら}が言うのと隣にいた制多迦^{せいたか}も頷いた

「そうだな…騒がしいのはあまり好まんだが…お前等というのは嫌いではないぞ」

迦楼羅^{かるら}も言う

「…僕はあまり貴方がこつちにいるのはオススメできないのですが

迦楼羅^{かるら}」

乾闥婆^{けんたつば}がボソツと言った

「…すまん」

乾闥婆^{けんたつば}の言葉に迦楼羅^{かるら}も小さく返した

「あ、そういえばさ！！　こんなジンクス知ってる？」

南が何かを思い出して手を叩いた

「じんくす…ってなんですか？」

乾闥婆^{けんたつば}が聞きなれない言葉に対し京助に聞いた

「ジンクスって懐かしいナアオイ；　俺も久々に聞いたぜ…ジンクスっていうのは…まあ…言い伝えとか伝承とか…」

京助が言う

「昔よく試したよなア…佐川急便のフンドシに触ると願いが叶うとか…今佐川さん皆パンツスタイルだしなあ」

中島が懐かしさをも少し出しながら言った

「あつたあつた！！」

南が笑いながら言う

「…で？ そのジンクスが何？」

矜羯羅こんがらが垂らしている布を後ろにやりながら馬鹿と京助に聞く

「あ、うんそれがさ…一番最後に咲いた桜の花って…他の花より多少色が濃くてその花を押し花にすると一生幸運に恵まれるんだとか」

南が思い出しながらのかすこし途切れ途切れに言った

「へえ…それは初耳…よく桜の木の下には死体かが埋まっているとか聞くのになあ」

坂田が言う

「ジンクスは時代の子供が作るからねえ…常に新しいモノが生まれるもんなんだよ」

南がウンウンと頷いた

「コレはありすから教えてもらったんだ」

そしてありすの名前を口にする南の顔がにやけた

「…それは他人にあげた場合その人に幸運がもたらされるのですか？」

乾闥婆けんだつばがにやけている南に聞いた

「あ？ …う…ん…； そうじゃないのかな？ たぶん；」

南が自信なさげに答えた

「…一生の…幸運ね…」

矜羯羅こんがらがボソツと呟いた

「馬鹿馬鹿しい；」

ぐきゅるるるる…

迦楼羅かるらが悪態をつくと腹の虫も一緒になって文句を垂れた

「おおー！！ 咲いてる咲いてる！！」

少し藪の中にいり込んだところに立っていた三本の桜の樹には満開の桜の花がついていた

「昨日よか咲いてるなあ…綺麗綺麗」

中島が桜の樹を見上げて言う

「よっしゃ！ 花見だ花見！！」

坂田が手を叩いて言った

「ウチのデカ桜には劣るけど結構綺麗だよな」

京助が桜の樹を見上げて言うさんならと緊那羅も桜の樹を見上げた

「でも君の方が綺麗だよハニィ」

「京助ったら…」

「…オイコラそこ！！ 変なアフレコすんな！！；」

揃って桜の樹を見上げていた京助と緊那羅さんならに対し南と中島が想像でアフレコを入れた

「だってそんな感じだったんですもん」

ハッハと南が笑うと中島も頷いた

「綺麗だね悠助」

慧喜えきが落ちてきた桜の花弁を見て目を細める

「慧喜も綺麗だよ？ 花弁についてお嫁さんみたい」

悠助えきが慧喜を見上げて言う

「…こっちはごちそうさま」

慧喜と悠助の相変わらずのラブラブッぷりに対し3馬鹿と京助が手を合わせて【ごちそうさま】と頭を下げた

「ほら！！ タオル！！ かるらんくんも！！ 矜羯羅君達もちやこんがら

んと拭いて！！ 今お風呂沸かしたから」

玄関に並んだ面々に母ハルミがタオルを手渡していく

「…雨降ったっちゃね」

「うるへい；」

緊那羅さんならが言うさんならと京助が言い返した

「…僕は空に帰ればいいんだけどね」

頭の布を外して髪を拭いた矜羯羅こんがらが髪をかきあげながら言う

「なら帰ったらどうです？」

同じく帽子を外して髪を拭いている乾闥婆けんだつばが矜羯羅こんがらに笑顔で言った
「そっちこそ」

微オールバックな髪形になった矜羯羅こんがらも乾闥婆けんたつばに笑顔で言った

「ハイハイハイハイ！；　とにかく茶の間にレッツラー！！」

そんな二人の間をわざと通って京助が家に上がる

「風呂沸いたらまず慧喜えきと悠入れよ？」

首にタオルをかけて京助が振り返って言った

「結構降るわねえ：」

湯気の立つ湯飲みをテーブルに置きながら母ハルミが外を見る

「桜も花散ってまうんだろうな」

立ったまま湯飲みをもった京助が窓に近づき空を見上げた

「にしても：順番待ちしている間にこれじゃ風邪引くわね：」

母ハルミが制多迦せいたか、矜羯羅こんがら、迦楼羅かるら、乾闥婆けんたつばの順に目を向ける

「よし！！　脱いで！！」

「は？」

母ハルミがパンッと手を叩いて立ち上がると四人が疑問系の声を出した

「濡れた服のままだと風邪も引くし：着替えるの！！　ホラホラ！

！　脱いだ脱いだ！！　京助と悠ちゃんの部屋も空いてるからそこ

で着替えてもいいし：着替えは：」

母ハルミが隣の和室の襖を開ける

「：着替えは適当に見繕ってくるから好きなの着て頂戴ね？」

意見も聞かずして笑顔を向けられた摩訶不思議服集団がぼかんとしたまま頷いた

「なんならお泊りしていく？　どうせ洗濯すると乾くの待っていないといけないでしょ？　そうしなさい？　ね？」

半ば強制的にお泊りを決定した母ハルミが和室にかけてあった洗濯物を外し始める

「：その服って普通に洗濯しても色落ちとかしないわよね？」

靴下に手をかけた母ハルミが聞いた

「：母さんや母さんや：；」

京助が口の端を上げてボソツと言った

「少し小さいか？」

「…や大丈夫」

制多迦せいたかが肩をぐるぐる回して答える

「そっちは？」

京助が矜羯羅こんがらの方を見た

「大丈夫だよ…着て着れない事はないから」

黒いトレーナーに袖を通した矜羯羅こんがらが珍しそうに自分の全身を見ている

「動きにくくないか？」

矜羯羅こんがらと制多迦せいたかが脱いだ服を集めながら京助が聞く

「…ん…大丈夫ありがと」

制多迦せいたかが笑顔を返した

「…あ…そういやお前等宝珠だかい玉外して大丈夫なのか？ 前

に鳥類が外すと力がなくなるだか言ってたけど」

京助が思い出したように二人に聞いた

「…迦楼羅かるらはね特別だから」

矜羯羅こんがらが小さく言う

「…くらは外しても別になんともない…」

そう言いながら制多迦せいたかが髪についている宝珠を外しはじめた

「…も迦楼羅かるらは…外すと…」

ぱさつと制多迦せいたかの髪が解けた

「…外すと？」

京助が息を呑んだ

「…」

「京助ー！！！！洗濯物頂戴ー！！！！！！！！」

何か言ったらしいが制多迦せいたかの最初の一言が聞き取れない独特の話し

方は悠助の元気な声で一言も聞こえなかった

「…聞かないほうがいいってことかもね」

矜羯羅こんがらが京助の肩を軽く叩いてフツと笑った

「京助ハイ」

「…で？」

母ハルミが笑顔で紙切れとサイフを京助に差し出した

「言わないとわからないかしら？」

そう言った母ハルミの片手には京助のパーカーがしっかり持つてある

「…俺風呂上がったばっかなんですが」

「今の時間行けばたぶん30%割引とかになってるはずだし…ほうれん草は特売のヤツお願いねそれとー…」

持つていたパーカーを京助の肩に掛けて手にサイフと紙切れを握らせる

「…問答無用ですか；」

溜息をつきながら京助がパーカーに腕を通した

「気をつけてね」

母ハルミがにっこりと笑った

雪の時には不要で下駄箱の隣に追いやられていた傘を手にとると京助は玄関の戸を開けた

「つつたく…息子使いの荒い…乾闥婆？」
けんたっぱ

まだ咲かない桜の木の下にいる乾闥婆を見つけた
けんたっぱ

「なあにやっとなだお前； 風邪引くぞ？；」

「…京助」

雨で顔に張り付いた髪を指で耳にかけ乾闥婆が見上げた
けんたっぱ

「風呂、入ってないんだろ？ 俺で最後だったからいつてくれば？」

さしていた傘の半分に乾闥婆を入れて京助が言う
けんたっぱ

「…そうですね」

乾闥婆が笑顔を返した
けんたっぱ

「…南の言ってたジンスカ？」

京助が桜の樹を見上げた

「最後に咲く桜の花って言っても…わかんねえよなあ； 四葉のクローバー見つけるよか難しいと思うぞ」

まだ蕾もつけていない桜の樹は雨を受ける葉もまだ充分に育って
なく見上げれば曇った空が見えた

「…着替え俺のタンスから適当に持ってけな？ …でかいと思うけ
ど；」

京助がポケットに手を入れて言う

「ええ…有難う御座います」

そう言って笑顔を向けると乾闥婆は家の方に歩いて行った

「…なんだかなあ；」

頭を掻いた京助が再び桜の樹を見上げる

「…ジンクス…ねえ」

京助はボソツと呟くと石段に向けて足を進めた

「桜の樹…見てたの？」

玄関に入るなり乾闥婆に声を掛けてきたのは矜羯羅

「…そうですが何か」

しれっとして乾闥婆が答える

「昼間の話？」

矜羯羅が聞く

「…どうでもいいじゃないですか。貴方には関係のないことでし
ょう」

「…君だけのせいじゃないでしょ？」

髪を絞って水分を抜き靴を脱いで矜羯羅の横を通り過ぎようとした
乾闥婆に矜羯羅が言った

「…っ…」

乾闥婆が矜羯羅を振り返る

「もうそろそろ自分を許してあげても…いいと思うんだけど」

「貴方に…言われたくありませんよ…貴方だって…」

矜羯羅の言葉に乾闥婆が返す

「貴方だってそうじゃないですか」

今度は乾闥婆の言葉に矜羯羅が目を大きくする

「貴方だつて…自分を…つくしよつ！ …すいません」

言葉の途中でくしゃみをした乾闥婆けんたつばが口元を手で押さえたまま小走りこ走りで奥に入っていく

「…僕も…ね…」

矜羯羅こんがらが笑みを浮かべて天井を見た

「つくしよんっ！！」

ザカザカと境内への道を箒で掃いていた緊那羅きんならが悠助のクシヤミの声を聞いてクスリと笑った

「大丈夫？ 悠助」

境内に腰掛けて慧喜えきに鼻水を拭いてもらいながら悠助は鼻を吸る

「らいじょうぶ」

鼻声でも満面の笑みで返事をした悠助の頬に慧喜えきが軽く口付けて抱きしめる

「…見ているコッチが照れるっちゃ；」

何故か緊那羅きんならが照れて顔を逸らしたまた箒を動かし始めたがふと手を止めた

「……」

無言で空を見上げれば青い空にカモメとカラスと雲が気持ちよく泳いでいる

「掃除終わったんですか？」

足音と共に聞こえた声に緊那羅きんならが振り向いた

「乾闥婆…あ…桜はまだ…」

「そうですか…」

緊那羅きんならがまだ咲き始めない神社の桜の木に目を向けると乾闥婆けんたつばも同じく目を向ける

「…またきますね」

乾闥婆はにっこり笑うとそのまま数歩歩きスウツと姿を消した

「今日もきたね乾闥婆」

慧喜えきが言う

「…南の言ってた…こと信じてるみたいだっちゃ」

「まだ咲かないんだね」

「！！！！？」

緊那羅きんならが呟いたすぐ後に矜羯羅こんがらの声がして緊那羅きんならが驚き飛びのく

「きょんぎゃ…へっしっ！！」

矜羯羅こんがらの名前を言いかけてたがそれを悠助はクシヤミに遮られた

「…鼻の下真っ赤だよ悠助」

プツと笑って矜羯羅こんがらが言う

「乾闥婆けんたつばは毎日来てるみたいだね」

慧喜えきの隣に腰掛けながら矜羯羅こんがらが言った

「はい来てますよ」

慧喜えきが答える

「他の桜はもう咲いてるのに…けんちゃんこの桜の木がいいのかな」
悠助が桜の木を見る

坂の上にある神社から見える景色の中にはところどころに薄紅色が混じっている

「…私が…先に咲かせちゃったから…だっちゃね」

緊那羅きんならが俯いた

「…まったく…緊那羅きんならといい乾闥婆けんたつばといい…」

矜羯羅こんがらが呆れたように息を吐いた

「あんまり自分を責めるものじゃないよ…」

桜の木の下まで歩いてきた矜羯羅こんがらが桜の木に手をついた

「でも…私は…」

「どうして緊那羅きんならはこの桜を咲かせたの？」

矜羯羅こんがらが緊那羅きんならを振り返って聞いた

「え…？ …私はただ…あの時は…まさかでも桜が咲くなんて…わからなかったっちゃ…」

緊那羅きんならが箒を持ったまま戸惑いながら答えた

「なら緊那羅きんならが全て悪いわけじゃないんじゃない」
矜羯羅こんがらが言う

「その時はこんなことになるなんてわからなかったなら…君が全部背負い込まなくていいと思うよ？ね？京助？」

にっこり笑い矜羯羅こんがらの視線の先には片手をヒラヒラと振りながら近づいてくる京助がいた

「あ…おかえりだっちゃ」

「京助お…くっしょ!!」

くしゃみで遮られたお帰りという悠助の言葉に京助が手を振って返す

「あん時はお前のおかげで助かったんだからさ」

悠助に手を振りながら京助が緊那羅きんならに言う

「…助けられた俺とかにも責任はあるわけだ」

京助が手を振るのをやめて緊那羅きんならを見た

「連帯責任!! わかったか？ …むしろお前は悪くねえと思う俺

…むしろ悪いのは俺？」

京助が頭をかきながら言う

「京助は何も…」

「だからだよ」

緊那羅きんならの言葉を京助が遮った

「何もできないからお前が助けなきゃいけなかったイコール!!」

…原因は俺の無力さじゃん？」

『イコール』の部分で緊那羅きんならに指を突きつけて京助が言う

「だから悪いのは俺だろ？ 俺」

その指を今度は自分に向けて京助が言った

「…キリねえんだよな…誰が悪いワレが悪いとか…だからさ!!」

ヤメヤメ!! な？ OK？」

バフバフと緊那羅きんならの背中を叩きながら京助が笑う

「…理屈あるのかなのか…だね」

矜羯羅こんがらが小さく笑った

「それはそうと矜羯羅様も最近よくいらっしやいますよね？」

慧喜えきが言う

「まさかお前も南のジnkス信じてたりしちゃってる部類？」

京助が矜羯羅こんがらに聞く

「悪い？」

それに対しさらっと矜羯羅こんがらが答えた

「…なにその顔」

突っ込むタイミングを失った上に想像外の答えが変えてきたという
ショックで京助が阿呆面のまま固まった

「僕が信じちゃいけない？」

矜羯羅こんがらがにっこり笑って京助に近づく

「僕だって時には現実以外にすがりたくなるよ？　生きているんだ
もの」

「だあああッ！！！！；」

固まっていた京助の耳にフツと息を吹きかけて矜羯羅こんがらが言う

「耳に息かけるな耳にッ！！！！；」

京助が耳を押させて怒鳴る

「京助耳が弱いんだっちゃね」

緊那羅きんならが笑う

「お前は脇腹な」

「によおあッ！！！！；」

少しムカツときたらしい京助が緊那羅きんならの脇腹を突くと緊那羅きんならが変な
声を上げて箒を手放した

「い…いきなりなにするんだっちゃーッ！！！！；」

脇腹を庇うようにして緊那羅きんならが怒鳴る

「しいていえば八つ当たり？」

京助がヘツと笑う

「だって俺　矜羯羅こんがらの弱点しらねえし」

「だからってッ…；」

矜羯羅こんがらをチラ見して言った京助に緊那羅きんならががつくり肩を落とした

「…思えば俺お前等のこと全然知らねえや」

ふと思いついて京助が言う

「…そう？」

緊那羅きんならと京助の漫才っぽいやりとりを傍観べいかんしていた矜羯羅こんがらが京助を見る

「それ言うなら僕だってそうだけど？」

矜羯羅こんがらが言う

「そうなのか？」

京助が聞く

「そう」

矜羯羅こんがらが頬に手をやるとカチャリと腕輪が鳴った

「…そういや…そうかもな…緊那羅きんならのことも俺全然知らねえや；」
箒はきを拾っていた緊那羅きんならを京助が見る

「？　なんだっちゃ？」

視線を感じたのか緊那羅きんならが顔を上げた

「…知ったら知っただけ何かが得られて何かが壊れる」

矜羯羅こんがらがボソツと言った

「得ようとするとか何が壊れ壊れることによって何かが得られ…簡単だけど難しいよね」

何がおかしいのか矜羯羅こんがらが口元に笑みを浮かべた

「…なんだか小難しいこと言ってるよオイ；」

京助が矜羯羅こんがらを横目で見た

「ひえくしよいんっ！！」

ひととき大きく響いた悠助のクシャミに京助と緊那羅きんなら、矜羯羅こんがらも悠助に目をやった

「大丈夫悠助？；」

「らいりよるゝ」

マスクの中はおそらく鼻水大洪水だろうと言う鼻声で悠助えきが慧喜えきに笑顔を返す

「だいぶ冷えてきたっちゃね」

緊那羅が空を見上げると青空にほんのりオレンジが混ざり始めている
「今のクシャミは寒さからか？それともアレルギーからか？」

京助が悠助に聞く

「わかんない」

ズズッと鼻を吸りながら悠助が答えた

「…お前今鼻水飲んだろ」

京助が口の端を上げて言った

「…僕だって…ね？」

矜羯羅こんがらがまだ咲かない桜の木を見上げ目を細めた

「僕だって…そう…生きてるんだよ…制多迦せいたか」

ゆっくり目を閉じた矜羯羅こんがらの頭の布が風にふわっと靡いた

「よーっし！！…腹減ったし撤収ー！！」

京助が人差し指を立てて家の方に歩き出した

「…矜羯羅こんがらもくる…あれ？…」

さっきまでいた矜羯羅の姿はソコにはなく

「相変わらず神出鬼没だっちゃね；」

緊那羅きんならが小さく溜息をつくとき京助の背中を追いかけた

ガタン！！！！

バタバタバタバタ…

スパア—————ン！！！！！！

「緊ちゃんッ！！」

やたらテンポよく続いた物音が緊那羅きんならの名前で止まったのは火曜日の昼過ぎのことだった

「…な…んだちゃ？…」

目を丸くして緊那羅きんならが悠助を見る

「もうっ！！…俺をおいていかないでよッ！！」

悠助を後ろから抱きしめた慧喜えきが頬を膨らませる

「ごめんね慧喜…で！！…緊ちゃん！！…けんちゃん呼んで！！」

呼んでッ！！」

悠助が声を上げる

「乾闥婆けんだつばを？」

緊那羅きんならがきょとした顔で首をかしげ慧喜えきと顔をあわせた

「桜ッ！！ 桜咲いてる！！」

玄関の方を指差した悠助は少し興奮気味で声大きい

「本当だっちゃ！？」

そんな悠助の声に負けずとも劣らないくらいの大きさで緊那羅きんならが聞き返した

「うんッ！ 咲いてる！ 今咲いてるのっ！！」

慧喜えきの抱きしめからするりと抜けて玄関の方に走っていく悠助に慧喜えきと緊那羅きんならも続いた

「あれ？ けんちゃん…？ けんちゃんッ！！」

靴をズッパしながら外に飛び出した悠助が桜の木の下にいた乾闥婆けんだつばに声を掛けた

「ゆう…うわ；」

名前を呼ばれて振り向こうとした乾闥婆に悠助が飛びついた

「あ…危ないですよ？；」

（けんだつば）よろけたが辛うじて転倒を免れた乾闥婆（けんだつば）が9が悠助を抱きとめて笑顔を向けた

「乾闥婆けんだつばずるいッ！！」

そしてお約束の慧喜えきの罵声が飛んでくる

「けんちゃん！！ 桜咲いてるの見た！？ ホラ！！ そこ！！」

乾闥婆から慧喜えきに引っぺがされながら悠助が【そこ】と指さす先には咲きたてホヤホヤの桜の花が小さく群れを成していた

「…本当ですね…やっとう咲いて…」

見上げた乾闥婆けんだつばの顔が優しく綻んだ

「でも南の言ってたのって…一番最後に咲いた花ってことだったっ
ちやよね？」

緊那羅きんならが乾闥婆けんだつばの隣に立って思い出しながら言う

「ええ…一番最後に咲く花です」

乾闥婆けんだつばが言う

「今日明日辺りには咲くと思います…ので」
「ので？」

乾闥婆けんだつばが一呼吸おいて振り向き緊那羅を見た

「今日明日僕はココに泊まります」

【ココ】と言いながら桜の木に手をついた乾闥婆けんだつばがにっこり笑った

「ココ…って…まさか…」

緊那羅きんならが桜の木と乾闥婆を交互に見てうろたえる

「この木です」

さらりと乾闥婆けんだつばが答えた

「か…っ迦楼羅かるらには何て…」

嫌な予感的中した緊那羅きんならが最初一言を噛みながらも聞き返した

「おとなしくしているよう言ってきました…が…僕がココに来るということは言っていないので…もし来たとしても言わないでくださいね」

「なあ」

「なんです？」

「家入れば？」

「結構ですよありますがとうございます」

緊那羅きんならから一部始終を聞いた京助が魔法瓶の水筒とおにぎりを持たまま桜の木を見上げた

「風邪引くだろが；」

春と言ってもさすがは北海道

日が暮れると吐く息は白く吹いてくる浜風は冷たかった

「…差し入れ」

さっきの言葉に返答がなかった乾闥婆けんだつばに京助がおにぎりを差し出した

「降りてこいよ」

スタンと軽やかに着地した乾闥婆けんだつばが京助を見た

「母さんも悠も緊那羅きんならも…たぶん慧喜えきも心配してるぞ」

自分の着ていた上着を乾闥婆けんだつばの肩に掛けながら京助が言う

「ったく…ほったすげえ冷てえじゃん」

フニッと乾闥婆けんだつばの頬をつまみ京助が溜息をつく

「…何するんですか」

ペシッと京助の手を叩いて乾闥婆けんたっぽが言う

「鳥類も心配してるんちゃうか？」

【ホレ】と京助が乾闥婆けんたっぽにおにぎりを渡しながら言う

「…ありがとうございます」

受け取ると乾闥婆けんたっぽは迦楼羅かるらの話題には触れずお礼だけを返した

「…京助」

「なした？ やっぱ家はいる…」

苦笑いしながら振り向いて見た乾闥婆けんたっぽが別人に見えて京助が止まる

「…乾闥婆けんたっぽ…だよな？」

一瞬、ほんの一瞬見えたのは黒髪の…

「そうですが？」

京助は目をこすり思い切り乾闥婆けんたっぽに顔を近づけた

「…離れてくれませんか」

鼻と鼻がついたところで乾闥婆けんたっぽが京助に言った

「月曜日にお風呂を沸かし火曜日にお風呂に入るトウルトウルトウルトウルトウルララ♪…って曲あんじゃん？ 沸かし
たらすぐ入れってカンジしねえ？」

ガチャガチャと音がするのはおそらく鞆の中の筆箱だろうと思われ
る放課後の帰り道

南が歌いながら言った

「いや、ソレはアレだ！！ 月曜の夜中11時59分に沸かして入
って時計見たら火曜になってましたってえオチかもしれないぞ」

坂田が答えた

「ロツシーの曲じゃなかったか？ ロツシーって風呂あんのか？」

中島が言う

「知らねえよ； なあきよう…」

坂田が京助に同意を求めようとさっきまで京助が確認されていた方
向に顔を向けた

「：れ？ 京助は？；」

しかしそこにいない京助を3馬鹿がキヨロキヨロと探し

「：いたし」

歩いてきた道の電信柱に頭を付けて口を半開きにしたまま寝息を立てている京助を発見した

「コイツ今朝からずっとこんななんだよな：一時間遅刻してき
たと思ったら机に座るなり爆睡さね」

坂田が京助の頭を叩きながら言った

「そういや俺今日京助の声聞いてない気がする；」

南が苦笑いで京助の尻を叩いた

「昼に行ったときも寝てたしな」

中島が京助の脇腹を突付いた

「：何かあったんかね？」

スカーつと一向に起きそうにもないですよというカンジの寝息を立てる京助の顔を下から覗き込んだあと京助の鼻の穴に指を突っ込んでツツペしながら中島が言う

「：……ゲハッ！！；」

呼吸困難に陥った京助が鼻水とツバを吐いて目を覚ました

「中島エంగాチョー」

「同じくエంగాチョー」

南と坂田が一步後退して言う

「懐かしいナアエంగాチョー：おはよう京助君」

京助のパーカーに手を拭いながら中島がハッハと笑って言った

「っ：はあ；：おのれ等はッ！！；」

涙目で呼吸を整えた京助が怒鳴る

「眠気すつきりシゲキックス」

南が可愛らしげなポーズで舌をチロリと出して言った

「：った：く：ふああ：」

大あくびをして京助が眠そうに目をこすった

「やたら眠そうじゃん京助：何かあったん？」

中島が聞く

「いや…ジンクスがな；」

思い切り伸びをして京助が答えた

「ジンクス？ 何？ 夜通しおきてると何かなるのか？」

「いんや」

坂田の質問に首をコキコキ鳴らした後一呼吸おいて京助が話し始めた

「南が言ってた桜のジンクスあるだろ？ 最後に咲いた桜がどうの
ってえの…あれを信じて夜通し桜の木観察していやがる方がいまし
て…」

京助の言葉に南がきょとんと目を大きくして何かを思い出そうとし
ている

「…ああ！！ アレか！ 桜！！」

そして思い出したのか声を上げた

「誰が信じてるんだ？ 悠か？ 緊那羅きんならか？」

坂田が聞く

「いんや…乾闥婆けんだつば。外で一晩中一睡もしないでじっと桜の木見てる
んだよなア；」

「それに付き合ったわけか」

アクビしながら答えた京助に中島が突っ込むとアクビをしながらも
京助が頷く

「それはそれは…俺らも手伝ってやりたいけど本人が見つけないと
いけないみたいだしナア」

南がヤレヤレと両手を挙げて肩をすくめた

「…俺って本当何も出来ねえんだなってさあ」

ボソッと京助が言うところ馬鹿が顔を見合わせた

「…京助？」

いつになく弱気な京助に中島が少し驚きながら声を掛けた

「…うし！！ 帰って寝るッ！！ アデユウ！！ 諸君！！」

チャッと手を上げて意味もなく大きな声で言うところ京助が走り出した
「あ…んじゃなー！！ しっかり寝ろよー！！」

ワンテンポずらして南が手を振る

「：んなこと言っちゃ俺らだって何も出来ないと思わねえ？」

京助の背中を見送りながら中島がボソツと言うと坂田と南が頷いた

「おかえりなさい」

眠そうにあくびをしつつ帰宅した京助が布団よりも何よりも先に桜の木へ向うと眠そうな京助とは正反対にいつもどおりの乾闥婆けんだっぱがおかえりと言う

「：眠くないのか？；」

京助が目尻に溜まったあくび涙を拭いながら聞く

「ええ：大丈夫です」

乾闥婆けんだっぱが笑顔を返す

「だいぶ花開いたな」

京助が見上げた桜の木は白とも薄紅とも取れる花を広げた枝に惜しげもなく咲かせていた

「今日は暖かったですからね：一斉に咲きました」

一本の太い枝に腰掛けていた乾闥婆けんだっぱが側にあった桜の花に触れた

「でもまだ：最後の桜の花は咲いてねえのか？」

出掛かったアクビを噛み殺して京助が聞くと乾闥婆けんだっぱが頷いた

「今日も：貫徹するんかお前」

眠さのピークがきたのか目をこする回数が増えた京助が乾闥婆けんだっぱを見上げた

「ええ：咲くまでは：貴方は今すぐ寝た方がいいと思いますよ」

大あくびを数回繰り返して伸びをする京助に乾闥婆けんだっぱが言った

「：ありがとうございます」

小さく聞こえた乾闥婆けんだっぱの感謝の言葉に微笑んだ後京助は家に向って歩き出した

春先によく見られるという朧月が空に浮かんだその日の夜

「：迦楼羅かるらが心配してるんじゃないの？」

緊那羅きんならから差し入れされた厚手のタオルを膝にかけていた乾闥婆けんたっぱが
ゆつくりと下を見下ろした

「…貴方こそ制多迦せいたかが探しているんじゃないんですか？」

丁度 乾闥婆けんたっぱの腰掛けている枝の真下に矜羯羅こんがらが腕を組んで木に寄りかかっていた

「二日間【天】に戻ってないみたいだけど」

乾闥婆けんたっぱの質問には答えず矜羯羅こんがらが言う

「…貴方には関係ないでしょう」

愛想のない返事を返した乾闥婆を矜羯羅こんがらが見上げる

「相変わらず可愛げないね」

「貴方に可愛いどうのこうの言われる筋合いは全く皆無でしょう？」
につこり（でもどこことなく怖い）笑顔で言った矜羯羅こんがらに対し乾闥婆けんたっぱ
もにつこり（でもやっぱりどこことなく怖い）笑顔で言い返した後には
だんまりが続いた

たまに聞こえる車の通る音や猫の喧嘩する鳴き声そして波の音と風
が桜の木の葉の間を通り抜ける音

「…似てるよね」

矜羯羅こんがらが口を開いた

「…ええ…僕も不本意ながら…そう思っています」

乾闥婆けんたっぱが言う

「僕と君は」「僕と貴方は」

そして同時に言った

「…どうせ君も南とか言う京助の友達が言ったジンクスとかいうの
を信じてるんでしょ」

矜羯羅こんがらが桜の木に寄りかかりながら微笑んだ

「貴方こそ」

乾闥婆けんたっぱが桜の花弁を一枚取るとそれを風に乗せた

「願いもきつと同じ様なことなんだろうね」

クスリと笑いながら矜羯羅こんがらが言う

「僕は貴方に自分を重ねていたように思えます」

乾闥婆けんだつばが言った言葉に矜羯羅こんがらが驚いた顔で乾闥婆けんだつばを見上げた

「：自分に似ている貴方が：正確には自分：僕自身が僕は嫌いなんです」

乾闥婆けんだつばが静かに言う

「だから：喧嘩売ってたってわけ？」

矜羯羅こんがらが聞くと乾闥婆けんだつばが躊躇いもなく頷きすると矜羯羅こんがらが俯いて肩を震わせ始めた

「ッ：あははははははははは！！！！」

珍しく声を出して笑い出した矜羯羅こんがらに乾闥婆けんだつばが目を丸くする

「な：ッ；」

滅多に大きな声を出さない矜羯羅こんがらが口を開けて大笑いしているのをあっけにと取られてみていた乾闥婆けんだつばがだんだん不機嫌そうな顔になる
「何がおかしいんですかッ！！」

そしてとうとう怒鳴った

「っ：ごめんごめん：僕も本当同じだったのがおかしくて：っ」

くくく：っと噛み締めた笑い声を所々に入れつつ矜羯羅こんがらが言う

「：同じ：？」

乾闥婆けんだつばが聞き返した

「そう：僕も君に僕の嫌いな僕を重ねていた気がしてね」

やっと笑いが収まったらしい矜羯羅こんがらがいつものように口元だけに笑みを残して言った

「こんなところまで似てたんだなって思うと：」

ソコまで言うともまた笑いがこみ上げてきたらしく矜羯羅こんがらが口元を押さえた

「：まだ笑い足りないんですか」

さらっと言った乾闥婆けんだつばの顔もだんだんとほころんできていつの間にか口元に手があった

「本当：似すぎて腹立たしいね」

矜羯羅こんがらが笑いをこらえて言った
ガサガサという音に矜羯羅こんがらと乾闥婆けんだつば8けんだつば）がほぼ同時にそ

の音の方へと顔を向けた

「あ：矜羯羅こんがらもきてたんだっちゃ？」

完全防備した緊那羅きんならの手にはポットと買い物袋が握られていた

「：今日は君が付き合うの？」

矜羯羅こんがらが緊那羅きんならの荷物を見て言う

「そのつもりできたんだっちゃ」

木の根元に荷物を置いて緊那羅きんならが上を見上げた

「別に付き合ってくれなくても大丈夫なんですけど」

乾闥婆けんだつばが緊那羅きんならを見下ろした

「：プッ」

矜羯羅こんがらが小さく噴出したのを見て乾闥婆けんだつばはムッとして緊那羅きんならは首を

かしげた

「何がおかしいんですか」

乾闥婆けんだつばが言々と矜羯羅こんがらが片手を横に振った

「別に？」

そして笑顔を乾闥婆けんだつばに返す

「：；」

苦笑いのままいつ言い合いになるのかをハラハラしながら緊那羅きんならが見守る

「：え：とお茶：持ってきてるんだっちゃけど；」

何とかその言い合いを避けたい緊那羅きんならがポットを指さした

桜の木の周りを取り囲むようなカンジに腰を下ろした三人の手には湯気のたつ紙コップがあった

「花見茶ですね」

朧月のやわらかな光に照らされた桜の花を乾闥婆けんだつばが見上げて呟いた

「：そうだね」

矜羯羅こんがらがボソツと言う

「綺麗だっちゃ：」

桜の木を見上げた緊那羅きんならが自然と笑顔になった

「あ：」

緊那羅きんならが何かを見つけ声を上げた

「どうしたの？」

矜羯羅こんがらが聞く

「…あの枝だけ…まだ蕾っぽいような…」

下枝の内側下からでなければ見えないような場所を緊那羅きんならが指さした

「…あれがもしかして…」

乾闥婆けんたつばが立ち上がり見上げる

「一番最後の花…だっちゃ？」

緊那羅きんならも立ち上がると数歩後ろに下がって桜の木を見た

「…最後の花は色が濃いつか言ってなかった？」

矜羯羅こんがらが座ったまま顔だけを乾闥婆けんたつばに向けた

「…咲けばわかりますよ」

乾闥婆けんたつばが言う

「…見上げてばかりいると首…疲れるんじゃない？」

桜の木を見上げたままの乾闥婆けんたつばと緊那羅きんならに矜羯羅こんがらが言った

「…その花は緊那羅のものだね」

立ち上がり服についている土を払いながら矜羯羅こんがらが言った

「え…っ私…?」

緊那羅きんならが驚いて返事をする

「…そう…いうことになりますね見つけたのは緊那羅きんならですし」

「そんなッ!」

乾闥婆けんたつばも言うきんならと緊那羅きんならが声を上げる

「だって乾闥婆けんたつばも矜羯羅こんがらも私よりずっと…っ…」

「見つけたのは君」

必死になって言う緊那羅きんならの胸に矜羯羅こんがらが指を付けて言った

「そうですよ? 緊那羅きんなら…見つけたのは貴方です」

乾闥婆けんたつばがにっこり笑って緊那羅きんならの肩を叩いた

「でも乾闥婆けんたつばも矜羯羅こんがらもずっと…待ってたんだっちゃよ!」

さわさわと風が吹いて先に咲いていた桜の花弁を地面へと導く

「運がなかっただけです緊那羅きんならが悪いわけではありません」

そういうと咲きかけているおそらく一番最後の花を乾闥婆は見上げた

「私：が見つけたから：っ：」

緊那羅が俯いて小さく言った

「ほらまただ」

矜羯羅が溜息をついて言う

「京助に言われたばかりなんじゃない：キリがないんだよ：責め続ける」と

腕組みをした矜羯羅がチラリと乾闥婆を見た

「：花を見つけた君が悪いなら：」

「：ここで待つといって貴方に差し入れを持ってこさせてしまった僕等も悪い：」

乾闥婆が言う

「そう言う事」

矜羯羅がふっと笑った

「でも：っ！！　でも二人は：っずっと待って：咲くの：を：」

小さな声が震えによって余計に聞き取りにくくなった緊那羅の肩を乾闥婆が軽く叩いた

「：幸せや願いというものは大きければ大きいほど見つけるのも手に入れるのめかなえるのも難しいものなんです：それだけ：僕等の願いは途方もないものなんでしょうね：」

俯いたままの緊那羅の頭を撫でながら乾闥婆が静かに言った

「：途方もないから：たまに甘えたくなるんだよね：絶対叶わないってわかっていても夢を見たくなるんだ」

矜羯羅が緊那羅に近づき乾闥婆と同じ様に静かに言う

「：泣きながら帰ったんじゃ悠助が心配しますよ？」

乾闥婆が笑顔で言う「緊那羅が服で目を擦った」

「少し時間を置いて：帰りなよ？」

背中を向け片手を上げた矜羯羅がスウッと消える

「：僕もそろそろ戻りますね：迦楼羅がまた何かやらかしていないとも言い切れませんから」

ゆつくりと緊那羅きんならの頭から手を離すと乾闥婆けんたつばもスウッと消えた
「…っ…」

残された緊那羅きんならの肩がまた震えだしてその場にしゃがみこんだ

「…何してんだお前；」

京助に上から声をかけられて緊那羅きんならがもぞっと動いた
「乾闥婆けんたつばは？」

今度はすぐ隣から京助の声がした

「…帰ったんか？」

京助に聞かれて緊那羅きんならが無言で頷いた

「で…お前は何してんだよ」

あくびを噛み殺して京助が聞く

「…私…っ」

ズズッと鼻を吸る音と共に緊那羅きんならが顔を上げた

「…変な顔」

京助がすかさず言う

「どうセッ！！ …花…私が見つけたんだっちゃ…」

怒鳴った後俯きながら緊那羅きんならが答えた

「へえ…んだからへしよげてるわけか」

京助が言うきんならと緊那羅が頷く

「乾闥婆けんたつばも矜羯羅こんがらも…ずっと待ってたのに…私が…っ」

そしてそのまままた膝に顔をうずめた

「…そっか…」

京助が頭を掻きながら桜の木を見上げそして再び緊那羅きんならを見る

「…っ…」

たまに息を吐き泣き続ける緊那羅きんならに京助はかける言葉が見つからないのか頭を掻いたまま溜息を吐き

「だ————————————————————ッ！！ …っ
くッ！！」

大声を上げると木に寄りかかって座り緊那羅きんならの頭を自分の足に押し

付けた

「きよ：？：」

驚いて身を起そうとした緊那羅きんならを押し付けて京助は緊那羅きんならの頭をポンポン叩く

「：しよっぺえなあ；」

ぼそつと京助が呟いた

「：お前今いっぱいいいにみえる」

緊那羅きんならの頭をポンポン叩くのはやめないで京助が言った

「何でもかんでも自分のせいにして詰め込んでんだろ：泣いてるついでだし泣けるだけ泣いとけ。付き合ってやるからさ」

ポンポン叩いていた頭を今度は撫で始めると緊那羅きんならが体を縮めた
「言いたくないなら聞かんけど言いたいなら聞くからな」

京助が言うと緊那羅きんならが小さく頷く

「：つか：付き合ってやる代わりに泣き終わったら笑えよな」

鼻を吸った緊那羅きんならから目を朧月へと向けながら京助が言うと小さく嗚咽が聞こえ始めた

「コレがおそらく最後だろうと思われる花か」

緊那羅きんならが取ってきた桜の花をしげしげと見つっ京助が言う

「うん：たぶんそうだったちゃ」

泣き止んだもののまだ目が赤い緊那羅きんならが答える

「まあ：どことなあく濃いようにも思えるけど：さあ：：」

上下左右くまなく花を見て京助が言う

「：その花京助にあげるっちゃ」

「は？」

緊那羅きんならが言うと京助が間拔けな顔で答えた

「だってひとつしかないし：乾闥婆けんたつばも矜羯羅こんがらも同じくらい待ってたのにどっちかだけになんて：あげられないし：だから京助が：」

緊那羅きんならが苦笑いを向けた

「：お前は？」

花の茎を持ってくるくる花を回しながら京助が緊那羅きんならに聞いた

「私は：いいっちゃ：さっきの御礼ってことも含めて京助がもらってくれれば…」

一部分が濡れている京助のズボンをチラッと見ながら緊那羅きんならが言った
「：まだしびれてるっちゃ？」

「だあッ！！； 突付くな！！ 触るなッ！！；」

長時間座っていたせいでしびれているらしい京助の足に手を伸ばした緊那羅きんならに対し京助が怒鳴る

「：しかし：どうしたもんか：ねえ」

桜の花をくるくる回して溜息をつき京助が言った

「：なんかいいアイディア（ネイティヴに）ないもんか：」

桜の木に寄りかかり上を見上げると静かな風にもかかわらず花卉が落ちてくる

「：おお！！！ グットアイディア！！ ナイス！！」

京助が声を上げて立ち上がると緊那羅きんならが驚いて目を丸くした

「：足：大丈夫なんだっちゃ？；」

緊那羅きんならが小さく聞くとひとつ間を置いて京助がしゃがみこんだ

桜の木の下に広げたレジャーシートには所狭しとお菓子やらなにやらが広げられている

「今回は雨降りそうにないな～よかよか」

南が晴れ渡った空を見上げてそれから京助を見た

「：なんだよ；」

エビセンベイを一枚啜えた京助がジト目で南を見返した

「僕等まで参加してよかったんですか？」

乾闥婆けんたっぱがお茶の入った紙コップを手に聞く

「黙ってても来るくらいなら最初から誘うってえのもよかきに？」

中島が乾闥婆けんたっぱにペットボトルのお茶（伊右衛門）を差し出した

「入ってますよ」

注ごうとした中島に乾闥婆けんたっぱが言った

「そういえば坂田は？」

「便所」

南の質問に京助が速攻答える

「…手洗いとかいうもう少し気のきいたいいかたはできんのかたわけ；」

竜田揚げを爪楊枝に刺した迦楼羅かるらが言う

「無理だと思ふよ」

矜羯羅こんがらが突っ込むと制多迦せいたかも頷く

「わかってんんじゃないん」

京助が笑いながら言う

「…緊那羅きんならの姿が見えませんが…」

乾闥婆けんたつばが面子を見て言った

「そのうち来るって」

南がエビフライの尻尾を皿の隅に置く

「尻尾残すなよ尻尾」

その尻尾を京助が摘んで口に入れた

「…間接ちゅー？」

南が流し交じりの横目で京助を見る

「京助さんついに三又ですか？」

坂田も同じく京助を見る

「みつるんヤキモチ？」

南が坂田に向って言うとき坂田が南をどつく

乾闥婆けんたつば！！ 矜羯羅こんがら！！ と…京助！！ ちよつときてほしいっ

ちゃー！！」

玄関先から緊那羅きんならの声がして一同が振り向いた

「…呼ばれてるみたいだけど」

矜羯羅こんがらが立ち上がった

「そうみたいですわね…」

乾闥婆けんたつばも紙コップを置き立ち上がる

「ホレ！！ 愛人が呼んでまっせ旦那」

中島が京助の背中を叩いた

「ヘイヘイ；」

齒にエビフライの尻尾が挟まってるのかチツチツと言いながら京助もスニーカーをズツパ履きして緊那羅きんならの元に向っていく

「これは乾闥婆けんたつばにそしてこっちは矜羯羅こんがらで：」

矜羯羅こんがらと乾闥婆けんたつばに何かを手渡した緊那羅きんならが京助に目を向けた

「これが京助のだっちゃ」

そして京助の手を取り何かを握らせた

「これは：中に入っているのは花卉？」

乾闥婆けんたつばが聞く

「そうだっちゃたぶん最後に咲いた花の花卉を押し花にして：」

緊那羅きんならが説明する

「どうやってこの透明なヤツに入れたの？」

不思議そうに桜の花弁の入った透明の板を見ながら矜羯羅こんがらが聞く

「プラ板ってんだソレ。二枚で花卉挟んで熱加えると縮んでこうなるの」

京助が説明する

「：二枚？」

乾闥婆けんたつばが二枚重なっているのに気付いて緊那羅きんならを見た

「矜羯羅こんがらと乾闥婆けんたつばは誰かにあげるために探していたみたいだっちゃ

から：二枚ずつ」

緊那羅きんならが指を二本立てて言う

「花卉は五枚だから：京助にも作ったんだっちゃ」

緊那羅きんならが京助に笑顔を向けた

「お前のは？」

京助が緊那羅きんならに聞く

「私は見つけたからそれでいいんだっちゃ」

どこことなく照れくさそうに緊那羅きんならが答えた

「：いいの？」

矜羯羅こんがらが聞く

【第七回・四】うさもさ（前書き）

いつも眠そうな制多迦

そんな制多迦が庭で見つけたのは

【第七回・四】うさもさ

眠そうにあくびをした制多迦^{せいたか}が伸びをして目を擦った

「…ったかい…」

栄野家の縁側で一人春の日差しの中でポケポケ日光浴をしている制多迦^{いたか}はいつ眠ってもおかしくはない感じでコックリと頭を動かしては柱にぶつかりまた頭を上げるということを繰り返していた

「先客がいたんだやな」

トタトタという足音が聞こえ制多迦^{せいたか}が顔を上げるとコマとイヌが制多迦を挟んで左右に座る

「ここは一番昼寝に最適な場所なんだやな」

前足を思い切り伸ばしてアクビをするとコマが丸くなった

「…ここに座る？」

制多迦^{せいたか}がにっこり微笑みながら自分の膝を指さした

「いいんだやな？」

イヌが嬉しそうに尻尾を振って聞き返すと制多迦^{せいたか}が頷く

「ゼンもなんだやな！」

それを見ていたコマも制多迦^{せいたか}の膝に飛び乗った

「人肌は落ち着くんのだやな…」

イヌが制多迦^{せいたか}の膝の上で丸くなり大きくあくびをした

「…頭変形すんじゃないかねえのか？」

パックの伊右衛門を片手に持った京助がさつきからゴンゴン頭をぶつけている制多迦^{せいたか}に声を掛けた

「…ようすけ…」

だんだん痛くなってきたのか京助を見上げながら制多迦^{せいたか}は自分の頭を撫でた

「よいこらせっと」

そんな制多迦^{せいたか}の隣に腰を下ろすと京助がパック伊右衛門の中身を一気に飲み干す

「どうしてわざわざ眠気誘うような場所にいるかねお前さんも」
ベコベコと空になったパックに空気を入れつつ京助が聞く

「…って…気持ちいいし」

ほえほえした笑顔で制多迦^{せいたか}が答えた

「いや…気持ちいいのはわかるけど…眠っちゃ駄目なんだろお前」

京助が聞くと制多迦^{せいたか}が頷く

「だから何で気持ちいいと眠くなるのにわざわざ…」

何を聞きたいのか自分でもわからなくなってきているらしい京助を見て制多迦^{せいたか}が首をかしげる

「………；　…もういいや；」

ついに諦めたのか京助が口からストローを放して溜息をついた

「…今日はお前一人か？」

気を取り直して話題転換なのか京助が制多迦^{せいたか}に聞いた

「…ん…矜羯羅^{こんがら}何か用事あるみたいで見えなかったから」

膝の上で寝ているコマとイヌを撫でて制多迦^{せいたか}が目を細めた

「…ってか何でお前は眠ったら駄目なわけ？」

京助が聞くと制多迦^{せいたか}の手が止まり少しだんまりが続いた

「もしかして…聞いちゃアカンかったか？；」

京助が制多迦^{せいたか}の顔を覗き込みながら言う

「…くが眠ると目覚めた時は…周りがみんな赤かった」

制多迦^{せいたか}が目を閉じて答えた

「…ままで何度か眠ったけど起きるといつもその赤い中に矜羯羅^{こんがら}が悲しそうな顔でいるんだ」

再びコマとイヌを撫でながら制多迦^{せいたか}が言う

「…夢か？」

京助が聞くと制多迦^{せいたか}が苦笑いを返した

「…して言うんだ矜羯羅^{こんがら}が…【僕がいるから】…って」

京助がパックから抜いた（こんがら）ストローを咥えたまま制多迦^{せいたか}の話聞いていた

「…くは寝ちゃ駄目なんだ」

スコーン

そういいながら眠そうにあくびをする制多迦せいたかの頭に京助がパックを投げつけた

「…起きたか？」

「…こし中身かかったよ；」

制多迦せいたかが自分の袖口で中身がかかったらしい頬を拭った
ガサッ

ふいに庭先から聞こえた音に制多迦せいたかが片腕を京助の前に出した

「…制多迦？」

いきなりの制多迦せいたかの行動に京助が制多迦せいたかを呼ぶ

「…にかいる」

制多迦せいたかがボソツと言うと京助も庭を見渡した

「何かいるんだやな」

いつの間に目を覚ましたのかコマとイヌも尻尾を立てて庭に降り立った

「…がって京助」

制多迦せいたかも庭に足を下ろした

「そこなんだやなッ！！」

イヌが勢いよく駆け出した

「あ…オイ！？；」

イヌが駆けていった方向を制多迦せいたかと京助が見る

「…なんなんだやな…コレ」

ピンと立っていたイヌの尻尾がヘタリと地面についた

「なしたんだやな？」

コマが駆け出しイヌの元に向った

「…生き物…なんだやな？」

コマが何かに鼻を近づけて匂いをかいでいる

「…なしたよ？」

京助がサンダルを履いて庭に降り二匹の元に向う

「…まっくらクロスケ？；」

まだ新芽が出たばかりの庭木の下にあったのは黒く丸くそして

「…あったけけど…生きてるんだよね?;」

京助が恐る恐る手で触るとその黒く丸い (たぶん) 生き物がピク
っと動いた

「…ウサギ?;」

動いたことにより後ろに倒れていた長い耳がピンと立った

「ウサギなんだやな」

コマが言う

「黒ウサギなんだやな」

イヌも言う

「…サギ?」

制多迦^{せいたか}が京助の肩に手を置いて覗き込んできた

「そ! ホレ」

抱き上げて制多迦^{せいたか}の顔の前にウサギを突き出した

「…サギ?;」

いつも半分閉じているようなうつろな目を大きくして制多迦^{せいたか}がウサ
ギを見る

「…抱いてみ?」

京助に言われて制多迦^{せいたか}が両手をゆっくり伸ばした

「…子供のウサギだなっ」と

ウサギを制多迦^{せいたか}に渡して京助が言う

「…ったかい」

ウサギを両手に抱いた制多迦^{せいたか}が微笑んだ

「そりゃ生きてるからあったかいんだやな」

コマがケラケラ笑った

「あったかいから生きてるんだやな」

イヌもケラケラ笑う

「…きてる…」

制多迦^{せいたか}がそっとウサギを撫でた

「…っか…だからあったかいんだ…」

ボソツと呟くと数回小さく頷いてまたウサギを撫で始めた制多迦せいたかが何かを思い出したようにふと空を見上げた

「…ようすけもあったかいから生きてるんだね」

「はあ?;」

ヘラリと笑った制多迦せいたかに京助が呆れた声を出した

「…お前って;」

ヘラヘラと笑顔を京助に向けている制多迦せいたかを見て京助が肩を落とした

「目えあけないんだやな」

制多迦せいたかの足に掴まって伸びをしたコマが言った

「寝てるんだやな?」

イヌも同じく伸びをする

「いや…ちょいまち…」

京助が制多迦せいたかに抱かれているウサギの顔をじっと見た

「…起きてはいるぞ」

京助がウサギの鼻を触ると鼻がヒクヒクと動きウサギが体を起した

「…も目…開けないね」

制多迦せいたかがウサギを撫でた

「…開けないんじゃないって…開けられないんだな」

京助がウサギの目にそつと触った

「…けられないって…?」

制多迦せいたかがきよんととして京助に聞いた

「病気か何か…だと思う…けどさ;…そのうち開くかなア;」

フンフンと何かを鼻先で探すような行動をするウサギを制多迦せいたかと京

助が見る

「…お前等ウサギ語とかわからないのか?」

京助がコマとイヌを見下ろして言う

「無理言うななんだやな」

イヌがむすつとした顔で言う

「わかるわけないんだやな」

コマが膨れてそっぽを向いた

「たっだいまー！！」

縁側で日向ぼっこを再開していた制多迦^{せいたか}が玄関先から聞こえてきた元気のいい声にビクツとなり拍子で柱に頭をぶつけた

「おかえりだっちゃ悠助、慧喜^{えき}」

緊那羅^{きんなら}の声がしてバタバタと廊下を走る音がした

「あれー…タカちゃんだッ！！」

「…わ；」

そして制多迦^{せいたか}を見つけた悠助が後ろから制多迦^{せいたか}に抱きついた

「制多迦^{せいたか}様ずるいッ！！」

しかし速攻 慧喜^{えき}によって制多迦^{せいたか}から引き剥がされると悠助が制多^{せい}迦^{たか}の腕の中を見てきよとした

「…ぬいぐるみ？」

制多迦^{せいたか}が首を横に振って微笑みながら腕の中の物を撫でるとソレが動いた

「ウサギだあ！！」

悠助がキラキラした笑顔でウサギを見た

「ちいさーいっ」

ウサギに近づいて悠助が恐る恐る手を伸ばす

「制多迦^{せいたか}様…どうしたんですか？これ…」

慧喜^{えき}がウサギと制多迦^{せいたか}を交互に見て聞く

「…ここにいた」

庭の木を指さして制多迦^{せいたか}が言う

「黒くてタカちゃんとおそろいだねー」

悠助が笑顔で言った

「…くど？」

悠助の言葉に制多迦^{せいたか}が自分を指さして首をかしげた

「うん！ 黒いしっ」

悠助が笑うと慧喜^{えき}が笑いたいのを我慢しているのか口元を押さえて

蹲った

「：っか」

しばらく何か考えた後 制多迦^{せいたか}がへらりと笑った

「ねえねえ！ 名前なんていうの？」

悠助がウサギを撫でて制多迦^{せいたか}に聞いた

「：かんない；さっき見つけたばかりだし：」

制多迦^{せいたか}が苦笑いを悠助に返した

「じゃあつけようよ！ 名前！！ なにがいいかなあ：」

悠助がパンつと手を叩きウサギを見ながら名前を考え出した

「ピョン：とかありきたりだし：」

何個か候補があるのかソレとも思いつきなのか悠助がいくつか名前をあげていく

「タゴサクとかは？」

いつの間にかいたのか京助が悠助の頭に手を置いてウサギを覗き込んだ

「駄目ゝそんな名前ッ！」

悠助が京助の手を払いのけて怒る

「そんなって：お前：全国のタゴサクさんが嘆くぞ？ そんなって」

京助が悠助の頭をポフポフ軽く叩いて制多迦^{せいたか}の隣にしゃがんだ

「どっかの家から逃げてきたのかなア：コイツ」

京助がウサギを撫でるとウサギが鼻をヒクヒクさせる

「：だ目：開かないね」

制多迦^{せいたか}が指でそつと開かないウサギの目元を撫でた

「え？ 目開かないの？」

悠助と慧喜^{えき}が同時に言うのと制多迦^{せいたか}が頷いた

「もし逃げてきたんなら飼い主探してやらないとナア：心配してるだろうし」

チヨイチヨイとウサギの鼻を突付いて京助が言う

「家で飼えないかなあ？」

悠助がチラッと京助を見上げた

「：たぶん駄目って言うと思うぞ；」

京助が悠助から目を逸らしてボソツと言うと悠助が膨れた

「…ようすけ」

制多迦せいたかが京助を呼んだ

「なした？ …ハイハイ；」

京助が制多迦せいたかを見るなり数回頷き歩き出した

「…どうしたんですか？ せいた：」

上から制多迦せいたかを覗き込んだ慧喜えきが言葉を止めた

「…うんこ…」

悠助が制多迦せいたかの膝にあつた5つのこげ茶色の玉を見てボソツと言った

「硬めでよかったじゃん」

へツと笑いながら戻ってきた京助の手にはティッシュの箱があつた

「…なにそれ」

制多迦せいたかの腕の中の黒い生き物を見て矜羯羅こんがらが顔を歪めた

「…サギ」

へラりと笑って制多迦せいたかが答える

「…どうしたの？」

腰に手を当てる矜羯羅こんがらが再び制多迦せいたかに聞く

「…わにいた」

へラり笑顔は矜羯羅こんがらに向けたまま制多迦はウサギを撫でた

「…で？」

矜羯羅こんがらが言う制多迦せいたかが首をかしげた

「どうするのさソレ…まさか連れてはいけないよ？」

しゃがんでウサギを突付いた矜羯羅こんがらに制多迦せいたかが少し上を向いて何か

を考えている

「…うしようか；」

そしてへラりと言う笑顔をもた矜羯羅こんがらに向けた

「…制多迦…だんだん…馬鹿になってきてない？」

矜羯羅こんがらが溜息をついて制多迦せいたかの髪を引っ張った

「…たいよ；」

制多迦せいたかが髪を掴んでいる矜羯羅こんがらの手を掴んだ

「：なんだかお前等：だんだん鳥類と乾闥婆けんたつばに似てきてねえ？：」
二人のやり取りを見ていた京助が口の端をあげて言った

時計が示した時刻は午後八時

「：はあ」

矜羯羅こんがらが溜息をついて制多迦を見るとウサギを撫でながら笑みを浮かべていた

「：仕方ないね」

呆れたように呟くと戸口へ向って歩き出した矜羯羅こんがらの足音に京助が見ていたテレビからその足音の方向に目を向けた

「帰んのか？」

矜羯羅こんがらに向って声を掛けると矜羯羅こんがらが振り返った

「今回は何も告げないで来てるからね：僕だけ戻るよ」

口元に笑みを浮かべて矜羯羅こんがらが言う

「：連れて戻るわけにはいかないし：」

そしてチラッと制多迦せいたかの腕の中のウサギを見た

「ずいぶんと懐かれたなお前」

制多迦せいたかの腕の中で安心しきって眠っているウサギを覗き込んで京助が笑った

「：んがら：」

制多迦せいたかが矜羯羅こんがらを申しわけなさそうに見上げた

「：くれぐれも制多迦せいたかを寝せないようにね」

そんな制多迦せいたかにっこりと微笑を返すと矜羯羅こんがらが部屋から出て行った

「：そういやさ：矜羯羅こんがらって寝てんのか？」

京助が矜羯羅こんがらの出て行った戸を見て制多迦せいたかに聞いた

「：まにしばらく目を閉じてることがあるけど：横になって寝てる
ところ僕は見たことないな：」

制多迦せいたかが小さく言う

「：…っと僕が寝ないようにずっと見ててくれてるんだと思う」

ゆつくりとウサギを撫でて制多迦せいたかが言う

「なのは何であんなに元気なんだろうなア；」

「義兄様と一緒にしないでよ」

いつの間にか後ろに立っていた慧喜えきが頬を膨らませて言った

「矜羯羅様こんがらは義兄様とは違うの」

そして座ると制多迦せいたかを見る

「矜羯羅様こんがらと制多迦様せいたかは俺達とも義兄様達とも：違うんだよ」

慧喜えきが言う

「は？ そりやどいう意味なんだよ；」

ガコン！！

京助が阿呆面で慧喜えきに聞くと制多迦せいたかが（たぶん力は加減したんだろうと思われるんだけど）テーブルを叩きテーブルが少し反動で浮いた

「…き…」

制多迦せいたかが慧喜えきをゆつくりと見た

「…す…いません…」

慧喜えきが慌てて謝る

「…途中まで言って最後まで言わないっていったちゃん気になるのですが；」

京助が慧喜えきと制多迦せいたかを見る

「…ぶん…そのうちわかるよ…」

制多迦せいたかがヘラツと笑って京助を見た

「…お前等そればっか；」

はあと溜息を吐いて京助が寝転がった

「タカちゃん…それ最新ファッション？」

校門前で悠助と慧喜えきと共に京助達を待っていたらしい制多迦せいたかの頭の上を見て南が笑いをこらえながら言った

「…や…なんだか気に入ったらしくて…降りてくれない；」

いつもの摩訶不思議服ではなく京助の服を着た制多迦せいたかの頭の上には黒いあの子ウサギが気持ちよさそうに居座っている

「生きたウサギの帽子ってこれまたオツシヤレ」

坂田が茶化すように制多迦を肘でつついた

「しかしよく落ちないでいるよなア：コイツ；」

京助がウサギの鼻を指で突付きながら言う

「あのね、タカちゃん、の髪僕が結んだんだよ」

悠助が制多迦^{せいたか}を見上げて笑う

「だいぶ上達したよな、凄いぞ悠！」

坂田が悠助の頭をわしゃわしゃ撫でると慧喜^{えき}に睨まれた

「赤毛のアンみたいで可愛いぞタカちゃん！」

中島が言う、と絶対わかっていないんだろうが制多迦^{せいたか}がヘラリ笑顔を中島に向ける

「ってかコイツ名前は？」

背伸びをしてウサギを撫でた南が聞く

「いやまだついてない：んだよな？」

京助が制多迦^{せいたか}を見ると制多迦^{せいたか}が頷いた

「我輩は黒ウサギである、名前はまだない」

坂田がボソツと言う

「あ、それ確か旧千円札の：リンカーン？」

中島が言う

「ちゃうだろ？ 夏樹さんだか：アレ？；」

言った坂田が何かおかしいと考え込む

「西城ヒデキだったか？」

京助も答える

「ソレはワ、イエムシエ、のヤツじゃん！：なんつったっけなあ；
タカモリだっけ？」

坂田が丁寧にも【Y M C A】と振り付けも交えて突っ込んだ

「土方歳三」

「聖徳太子」

「碓シンジ」

「諸葛亮」

「南と京助の人物はあからさまに違うと思います先生」

帰り道で【吾輩は猫である】の著者の名前が思い出せない3馬鹿と京助の思いつく名前をあげていこう作戦が実行されていた

「…制多迦様首疲れませんか？」

慧喜が制多迦を見上げて聞く

「…いじょうぶ」

上目を使ってウサギが頭に乗っていることを確認しながら制多迦が笑う

「そのウサギ本当タカちゃんが好きなんだねッ」

慧喜と制多迦と手を繋いで挟まれるように歩いていた悠助が制多迦を見上げて笑う

「俺は悠助が好き」

慧喜がそんな悠助に笑顔を向ける

「僕も慧喜好き」

そんな慧喜に悠助も満面の笑みを返した

「でもタカちゃんも好きだよ」

またも笑顔を向けてきた悠助に制多迦がきょとした

「一番は慧喜だけどタカちゃんもきょんがらさんも好き」

【タカちゃんも好き】発言に少々ムツとした顔をした慧喜だったがその後の【一番】という言葉聞いて顔を赤らめ嬉しそうに笑った

「…く？」

制多迦が自分を指さして悠助に聞く

「うん！」

悠助が笑顔で頷く

「俺も制多迦様好きですよ？あ、一番は悠助ですけど」

慧喜も制多迦に向かって言った

「…んとうに？」

制多迦が信じられないというような顔で二人を見た

「本当！ 僕タカちゃん好きだよ？」

悠助が言うえきと慧喜も頷いた

「俺もタカちゃん好きよ！」

「…わ；」

いきなり抱きついてきた中島に制多迦せいたかが頭の上のウサギを押さえて足を踏ん張った

「危ないじゃないか！ でっかいの！！」

悠助を庇った慧喜えきが中島を睨む

「まあまあ慧喜えきツちゃん落ち着いて； コレが愛情表現だということとで」

南がヘラヘラ笑ながら制多迦せいたかの肩を叩いた

「タカちゃんは？ 俺等のこと好き？」

中島が抱きついたまま制多迦せいたかを見る

「あ、中島の方若干背え高えんだな」

京助がボソツと言う

「…くも好き」

しばらく間をおいてヘラリと笑いながら制多迦せいたかが言った

「…本当気に入られたんだね…」

制多迦せいたかの頭の上から降りようとしないうサギを見て矜羯羅こんがらが言うせいたかと

制多迦せいたかが困ったようなしかしどことなく嬉しそうな笑顔を向けた

「…これからどうするのさ…まさか慧喜えきみたくココに居座るって言わないでよね」

矜羯羅こんがらが流し目入りの視線で制多迦せいたかと慧喜えきを見た

「あらあ！ ウチは構わないわよ？」

矜羯羅こんがらの話をきいていた母ハルミが嬉しそうに言う

「私大家族に憧れていたんだもの！ にぎやかで！！ なんなら矜羯羅こんがら君も居座ってもいいのよ？」

「オイオイオイオイ；」

につこりと矜羯羅こんがらに笑顔を向けた母ハルミに京助が裏手突っ込みのポーズで突っ込む

「あら京助：アンタお兄さん欲しいって言ってたじゃないの」
母ハルミが言う

「いつの話しだ；いつの；　：第一：矜羯羅こんがらと制多迦せいたかが俺の上って
：さあ；」

京助が矜羯羅こんがらと制多迦せいたかを見て言う

「格好いいお兄さんで自慢じゃない」
母ハルミがにっこり笑う

「：あのなあ；」

溜息をつきながら京助が肩を落とす

「タカちゃんときよんがらさん一緒に住むの？」
話に入ってきた悠助が嬉しそうに矜羯羅こんがらを見た

「：住めないよ：僕達は」

微笑みながら矜羯羅こんがらが言う

「なんで？」

残念そうな顔をして悠助が聞く

「：なんでも」

悠助の頭を撫でて矜羯羅こんがらが言うとぷうっと悠助が膨れた

「じゃあこのウサギはどうするんですか？」

慧喜えきが少し怒った様に矜羯羅こんがらに聞く

「ハルミママ、飼っちゃ駄目？」

悠助が母ハルミに向けておねだりビーム　（と言うか眼差し）を放った

「：そうねえ：このまま飼い主がみつからなかったら：考えてもいいわよ？　でも：」

母ハルミの次の言葉に一同が耳を傾けた

「：ウサギってね：寂しいと死んじゃうのよ」

眉を下げて言った母ハルミを一同が見る

「：死んじゃう：？」

悠助が制多迦せいたかの頭の上のウサギを見た

「だから飼うのは結構難しいの：甘えん坊さんなのよ」

母ハルミが更に言う

「……」

制多迦せいたかが頭の上からそつとウサギを降ろして腕に抱いた

「もしあん時：見つけてなかったら死んでたかもな：ソイツ」

京助がボソツと言った

「人間だってそうでしょ？ 誰にも構ってもらえないで生きていけはしないんじゃないかしら：どんな小さな事だって誰かに手を借りているものじゃない？ 一人では生きてはいけないの：どんな時も誰かしる手を差し伸べてくれてるんじゃないかしら」

母ハルミの言葉に制多迦せいたかが矜羯羅こんがらを見た

「…何？」

制多迦せいたかの視線に気付いたのか矜羯羅こんがらが制多迦せいたかを見た

「…つか：だから僕には矜羯羅こんがらがいるんだね」

ヘラリと制多迦せいたかが笑った

「俺には悠助がいる」

慧喜えきが思い切り悠助を抱きしめる

「慧喜えき苦しいよ；；」

抱きしめられた悠助が足をバタバタさせた

「義兄様きんがらには緊那羅？」

「は？；」

我関せずのごとくハナクソをほじっていた京助の片鼻からたらりと鼻血が流れた

「つくしよッ！！；；」

「まあ！ 緊那羅様きんがらお風邪を召しましたのではないのですか？」

元・開かずの間でヒマ子さんに水をやっていた緊那羅きんがらがくしゃみをして鼻を吸った

「や：違うと思うっちゃ；；」

微妙な鼻声で緊那羅きんがらが言った

「：どうしたんだっっちゃ京助：；」

片ッポの鼻にティッシュでツツペをした京助に緊那羅きんならが聞く

「なんでもねえよ；」

京助はほんのり鼻血がにじんできたティッシュを抜いてまた新たなティッシュをつめた

「変なこと考えてたんじゃないんだっっちゃ？」

緊那羅きんならが突っ込む

「：お前：言うようになったよなア；」

クイクイとティッシュを詰めてフンッと鼻を鳴らした京助が緊那羅きんならにいった

「君が変えたんじゃないの？京助」

矜羯羅こんがらが言々と京助がきよんとして矜羯羅こんがらを見た

「：は？」

阿呆面で自分を指さした京助の鼻からしっかり詰めたはずのツツペが抜けて床に落ちた

「君と悠助が：」

微笑みながら矜羯羅こんがらが悠助を見ると悠助が慧喜えきと共に矜羯羅こんがらを見る

「僕？」

につこり頷いた矜羯羅こんがらに悠助が慧喜えきを見上げる

「緊那羅きんならだけじゃない：慧喜えきも制多迦せいたかも：そして僕も君たちに変えられてる様な気がする」

口元に笑みを浮かべたまま矜羯羅こんがらが目を閉じて言う

「：もう少し早くこの空気に出会いたかったよ」

ボソツと聞こえないくらい小さな声で矜羯羅こんがらが言った

「ハイ、矜羯羅先生」

京助がスチャッと挙手した

「：何？」

矜羯羅こんがらが京助を指さすと手を下ろし矜羯羅こんがらに尻歩きで近づく

「：それはいい方に変わったんですか？ それとも悪い方に変わったんですか？」

真顔で聞いてきた京助に矜羯羅こんがらが少し目を大きくしてしばらく止まった

「……プツ」

そして小さく噴出すと制多迦せいたかの肩に手を置いて声なく笑い出した
「なっ！！；　　なんで笑うか！！」

京助が怒鳴る

「……いきん矜羯羅こんがらよく笑うよね」

ヘラヘラと笑いながら制多迦せいたかが嬉しそうに言う

「笑うことは体にも心にもいいのよ？」

そんな様子を見て母ハルミが言う

「……んがらが笑うと僕も嬉しい」

ウサギの鼻に自分の鼻を付けて制多迦せいたかが笑顔で言う

「僕も……！　僕もみんなが笑うと僕も笑いたくなる……！」

悠助が言った

「それはつられて笑ってるんじゃないんですかね？　悠助君」

京助が床に落ちた元ツツペをゴミ箱に向って投げながら言う

「……はあ……本当に……」

落ち着いたのか矜羯羅こんがらが顔を上げた

「……変えられちゃったみたいだよ僕は」

少し耳が赤くどことなく照れたような顔で矜羯羅こんがらが言う

「……くも……」

そんな矜羯羅こんがらを見て笑った制多迦が口を開いた

「……くも変わってる？」

そう矜羯羅こんがらに向って聞いた制多迦せいたかの腕の中でウサギがモゾモゾと動いた

「あら？　おトイレかしらウサギさん」

「……」

母ハルミの言葉に制多迦せいたかが慌ててウサギを体から離す

「あ……あ————————！！！」

悠助が大声を上げた

「：ひいゝらいたひらいた：でっけえ目ゝ：」

悠助が指さしたウサギの目は大きくどこを見ているのかしきりに鼻をヒクヒクさせて顔を小刻みに向きを変えている

「赤い目だったんだねゝ可愛いゝ」

悠助がウサギに近づき撫でると慧喜がむすつと膨れた

「：タカちゃん？」

ウサギを抱いていた制多迦せいたかの手が震えていることに気付いた悠助が制多迦を見上げた

「：っ」

いつも半分閉じかけの眠そうな目から一転して見開かれた制多迦の目は黙って赤いウサギの目を見ていた

「おい：大丈夫か？？」

あからさまにいつもの制多迦せいたかとは違う制多迦の様子に京助が声を掛けた

「僕は：」

矜羯羅こんがら以外の全員が自分の耳を疑ったのは制多迦独特の最初の一言が聞き取れない前消し喋りではなかったからだ

「今：はつきり最初の言葉：言ったっちゃよね：？」

緊那羅きんならがもしかして自分だけだったのではと思い京助を見た

「：あ：ああ：俺も聞こえた：」

京助が呆気にとられた顔で頷く

「あっ！ ウサギっ！：」

制多迦せいたかの手の力が弱まったのかウサギが床に落とされたのを見て悠助が声を上げた

「矜羯羅様：！！」

慧喜えきが尋常じゃない制多迦せいたかの様子を見て矜羯羅こんがらの服を掴んだ

「制多迦様は：」

「：大丈夫」

そんな慧喜えきの手をゆっくり放して矜羯羅こんがらが制多迦（せいたか）の額

に人差し指をつけた

「…【僕がいるから】…」

矜羯羅こんがらが制多迦せいたかに言った言葉を聞いて京助きやうすけが制多迦せいたかを見た

『…くが眠ると目覚めた時は…周りがみんな赤かった』

縁側で聞いた制多迦せいたかの話を思い出す

『…ままで何度か眠ったけど起きるといつもその赤い中に矜羯羅こんがらが悲しそうな顔でいるんだ』

「…でもね…」

矜羯羅こんがらは更に何かを言おうとしていた

「今は僕だけじゃない…皆いるから…だからホラ…【帰って】おいで」

トン…と軽く制多迦せいたかの額を突いて矜羯羅こんがらが言った

「…催眠術か…？」

しばらくして京助が口を開いた

「違ふよ」

矜羯羅こんがらが制多迦せいたかの額から指を離した

「僕はただ制多迦せいたかを呼んだだけ」

そして矜羯羅こんがらが指を鳴らすと玉が勢いよく制多迦せいたかの頭に気持ちいい音と共に当たった

「…たい；」

そして頭をさすりながら制多迦せいたかが言う

「…最初の言葉は…」

緊那羅きんならが京助を見た

「…聞こえなかったな」

ホッとした空気が茶の間に流れた

「タカちゃんどっかいたの？」

ウサギを抱えて悠助が制多迦せいたかの顔を覗き込んだ

「…？」

きよとした制多迦せいたかが悠助を見る

「だってきよんがらさんが…」

「悠助」

途中まで言いかけた悠助の言葉を矜羯羅こんがらが遮った

「ウサギの名前考えようか」

につこりと笑顔で言ってきた矜羯羅こんがらに悠助が躊躇いながらも頷く

「まだ飼うって決まったわけじゃないんだけどなあ；」

鼻血が中で固まっているのがいくいのか京助がしきりに鼻をフンフンと鳴らしながら言う

「京助…ウサギみたいだっちゃね」

同じく鼻をフンフンさせているウサギを見て緊那羅きんならが言う和一瞬茶の間が静まった後

「…ブッ！！」

慧喜えきの噴出しと共に笑いが巻き起こった

「あははははははは！！ 緊ちゃん！ 上手いこと言うわね！！」

座布団4枚！！」

母ハルミが手を叩いて笑う

「…う…さっ…義兄様ウサギ…ッ！！」

何がそんなにツボに入っただのか慧喜えきが苦しそうに震えながら言う

「慧喜笑いすぎ」

悠助もまわりにつられたのか笑い出した

「…バニーボーイにでもなろうか？ え？」

そんな一同を見て京助が言う一更に笑い声が大きくなる

「…んがらも笑いすぎ；」

自分も涙を流して笑っているのにもかかわらず畳をバンバン叩いて声を出さずに笑っている矜羯羅こんがらの背中をさすりながら制多迦せいたかが言う

「…本当にバニースーツ着るぞコラ」

一向に笑いが止まない茶の間で京助がボソツと言った

きんなら
ヒーヒー言いながら緊那羅が京助に聞く

「義兄様もうや——
——
——
——
——
——
——
——
——
——
——
——

もうヤケになったのか京助が立ち上がりコマネチラインをクイっとなぞりながらバニースーツの説明をすると慧喜えきが倒れこんで涙を流しながら笑い出した

母ハルミも涙を流しながら笑っている

蹲こんがらった矜羯羅の背中に突っ伏して制多迦せいたかも限界とばかりに肩を震わ
せて笑い続ける

悠助が京助を指さして笑う

京助が笑いながら誰かの真似をするとえき慧喜がひっくり返って足をばたつかせて笑う

栄野家の茶の間発爆笑トルネードが落ち着いたのはそれから結構経ってからだった

でべろ／＼と床に長まつた京助が氣力なく呟いた

一番笑い転げていたと思われる慧喜えきが悠助に膝枕されて疲れきった顔おもてをしている

ペシつと隣にいた緊那羅の足を京助が叩いた

ズリズリと緊那羅がずり落ちてきて京助の背中に頭をつけて同じく

長まった

「…笑うのって結構体力使うよね…」

矜羯羅こんがらも壁に寄りかかって溜息を吐いた

「…も」

制多迦せいたかが体を起した

「…くは笑うの好き」

ヘラリと笑顔で制多迦せいたかが言うと同感とばかりに皆笑顔になった

「ホクロ？」

悠助がきよとした顔で坂田を見上げた

「そ！そのウサギの名前…黒い子ってかいて【ホクロ】ってどうよ？」

坂田が制多迦の頭の上で目を閉じているウサギを見ていった

「…羊の子って書いて【ラム子】といい勝負だなア…」

そう言いながら京助がチラリと緊那羅きんならを見た

「私は緊那羅きんならだっちゃッ！」

聞こえたのか緊那羅きんならが京助に食って掛かる

「ホクロかあ…」

結構長身の制多迦せいたかの頭の上でバランスを保ちながら安心しきったように目を閉じているホクロ（仮）をを悠助が見上げる

「…クロ…」

「いや、タカちゃんが言うとしたの【クロ】にしか聞こえねえし；」

制多迦せいたかが言う和中島が突っ込んだ

「…クロ？」

制多迦せいたかがもう一度言うとうサギがピクッと反応した

「あ、ホクロ（仮）がお目覚め？」

南がソレに気付き言う

「ホクロおはよ」

悠助が笑顔でピョンピョン跳ねながら言うとうサギ（仮）はまた鼻をヒクヒクさせただけで蹲る

「…クロおはよう」

制多迦せいたかが悠助同様ホクロ（仮）に声を掛けると今度は目をパツチリと開けた

「…クロ？」

京助がホクロではなくクロと呼んでみると京助の方向をウサギが向いた

「クロだっちゃね…」

緊那羅きんならがボソツと言う

「ホクロ却下、クロ決定」

中島が言う

「…んにゃろ…」

坂田が多少悔しそうな顔でウサギを見た

「…ロ…」

制多迦せいたかがヘラリと笑って上目で頭の上のウサギを見ようとする

「いや…お前はホクロでいい；」

京助が制多迦せいたかの肩を叩いた

「…んで？」

制多迦せいたかがウサギを押さえつつ首をかしげる

「ロじゃあんまりにも…だねえ？；」

南がハッハと笑いながらウサギを見上げた

「一文字だもんな」

中島が制多迦せいたかの頭の上のクロ（仮）を撫でた

「じゃあクロ！ クロだね〜」

悠助が満面の笑みで制多迦せいたかを見上げる

「…んなはクロで僕だけホクロ？；」

制多迦せいたかが自分を指さして呟く

「タカちゃん微妙な話し方だからねえ」

中島が笑いながら制多迦せいたかの背中を叩いた

「でもその話し方じゃないと制多迦せいたかじゃないっちゃ」

緊那羅きんならが言うとき京助が頷く

「その話し方があってこそのお前だ」

そういうながら京助が結構強く制多迦せいたかの背中を叩いた

「…たいよ」

制多迦せいたかが苦笑いを京助に向けた

キシキシと廊下が鳴る音がして制多迦せいたかが顔を上げると春の日差しの逆光に矜羯羅こんがらが浮かび上がった

「…っほ」

片手を上げてヘラリ笑顔を返した制多迦せいたかの隣に矜羯羅こんがらが腰を下ろす

「…京助達は？」

足を組んで頬に手を当てた矜羯羅こんがらが制多迦に聞く

「…ら山に浅葱とかいうの取りに行った」

春先一番に取れる食べられる浅葱は細いネギのようでおひたしにするもよし刻んでネギの代わりにするもよしの結構何でも使える山菜である

「…制多迦せいたかは行かなかったんだね」

矜羯羅の言葉に軽く頷くと腕の中のウサギに目を向けた

「…うだ…名前決まったんだよ」

思い出して制多迦せいたかが言う

「…ふうん…何？」

矜羯羅こんがらが頬から手を放しウサギを覗き込んだ

「…ロ…だけど僕だけホクロ」

「は？」

制多迦せいたかがヘラヘラ笑いながら言うのと矜羯羅こんがらが呆れ顔で疑問形の返事をした

「クロ？なんで制多迦せいたかだけホクロ？」

やはりワケがわからないのか矜羯羅こんがらが聞き返す

「…かんないけど中島がそうだったから僕はホクロってよばなきやいけないんだ…ねー？　ホクロ」

ヘラヘラ笑顔はそのまま制多迦せいたかがホクロ（クロ）を撫でる

「…僕はクロでいいのかな」

矜羯羅こんがらが言うときクロ（クロ）がピクツと鼻を動かして目を開けた

「本当綺麗な赤い目だね」

矜羯羅こんがらがボソツと言うとき制多迦せいたかが小さく頷いた

「…うだね…ホクロの目は綺麗」

フンフンと鼻を制多迦せいたかに向けて動かしたホクロ（クロ）の鼻を制せ

多迦いたかが指で触った

「…も僕は…」

鼻を触った指を力なく横に落として制多迦せいたかが俯く

「僕は制多迦せいたかが好きだよ」

突然 矜羯羅こんがらが言った

「全部ひっくるめて…ね」

言ったのはいいが照れくさいのか矜羯羅こんがらはそっぽを向いていた

「…りがと」

制多迦せいたかの顔がほころんだ

「…僕がいなくなっても今は皆がいるから」

につこり笑った矜羯羅こんがらが制多迦せいたかの手を取って何かを握らせた

「…にコレ？」

透明な薄い板の中には桜の花弁が一枚

「お守り」

矜羯羅こんがらが自分の分のソレを制多迦せいたかに見せた

「…そろいなんだね」

太陽に透かして制多迦せいたかが嬉しそうに言う

「緊那羅きんならがくれたんだ…願いが叶うらしいけど」

矜羯羅こんがらも制多迦せいたかの真似をしてなのか太陽に透かしてソレを見る

「…がい…」

薄い花弁が太陽の陽射しを通し制多迦せいたかの顔に当てる

「…くの願いはね矜羯羅…」

「…臭いよ」

茶の間に充満しているなんともいえないネギ類独特の匂いに^{こんがら}矜羯羅が顔をしかめた

「仕方ないじゃーん；」

南が買い物袋いっぱい浅葱をゴミと浅葱とに分けながら言った

「なにこれ？ 食べられるの？ やたら臭いんだけど」

新聞紙の上に広げられた分けられた浅葱を一本摘んで^{こんがら}矜羯羅が匂いを嗅いだ

「食えないものワザワザ泥だらけになりながらとりやしないだろうが；」

京助が浅葱ではないゴミを買い物袋に入れて口を縛る

「おひたしにしてさくかつおぶしと醤油かけて食うと美味いんだなあコレが」

坂田がハッハと笑う

「でも臭いね」

^{こんがら}矜羯羅が手に持っていた一本の浅葱をペイツと投げた

「ドリアンよかは臭くないとおもうぞ」

綺麗に分けられた浅葱を持って立ち上がった京助が言う

「嗅いだことあんのかお前」

中島が辺りに散らばった木っ端木やらを手でかき集めながら京助を見上げた

「否！…でもまあ…うん…いいじゃん」

ヘラヘラと手を振りながら京助が言う

「ドッドドドリアン臭つさくってプウ！」

南が分けの輪返らない即席のドリアンのテーマらしき歌を歌った

「…君たちやっぱり馬鹿だよね」

^{こんがら}矜羯羅がフツと横を向いて笑った

「そーいやタカちゃんは？」

中島が^{こんがら}矜羯羅に聞く

「…いつものところ」

^{こんがら}矜羯羅がボソツと答えた

「喧嘩でもしたのか？」

坂田が冗談交じりに言うこんがらと矜羯羅が流し目加減で坂田を見た

「…凶星？」

「ウメボシ？」

「流れ星？」

京助、南、中島が言うと茶の間に沈黙がやってきた

「…何だか制多迦せいたか…左側のほっぺ…腫れてないっちゃ？；」

浅葱を茹でようと台所に向っていた緊那羅きんならが制多迦せいたかを見つけ聞いた

「…ん；　ちよつと矜羯羅こんがらにこう…」

制多迦せいたかが右手でグーを作り自分の頬に当てた

「…なんでまた…；」

緊那羅きんならが聞くと制多迦せいたかが腕の中のホクロ　（クロ）を撫でた

「…クロが原因なんだっちゃ？」

浅葱でいっぱいのザルを持ち直して緊那羅きんならがホクロ　（クロ）を見た

「…れ…」

制多迦せいたかが緊那羅きんならに何かを差し出した

「…あ…これ私があげた…矜羯羅こんがらは制多迦せいたかにあげたんだっちゃね」

桜の花弁が挟まれた透明な板を制多迦せいたかが太陽にかざした

「…がいが叶うって言ったから僕の願いを言ったら…」

「殴られたんだっちゃね；」

苦笑いで言きんならった緊那羅きんならに制多迦せいたかが頷く

「何て言きんならったんだっちゃ」

あの矜羯羅こんがらがグーで殴るほどの制多迦せいたかの願いはどんなものなのか気

になったらしい緊那羅きんならが聞く

「…くの願いは僕が…僕が僕でなくなるきんならこと」

緊那羅きんならが制多迦せいたかを見たまま止まった

「なん…で…そんな…矜羯羅こんがらが怒るの当たり前だっちゃッ！！」

そして次の瞬間　緊那羅きんならは持っていた浅葱入りのザルを制多迦せいたか目掛けて投げつけた

「…ラムちゃんの声聞こえなかった？」

沈黙が続いていた茶の間で南が言った

「聞こえたな」

中島が言う

「しかも怒鳴ってたな」

坂田も言う

「…なんだか…ややこしいことが巻き起こりそうじゃないですか…；」

京助が立ち膝に手をつき立ち上がる

「そのややこしいことに首突っ込んでんじゃう俺らって相当暇人？」

南がケラケラ笑った

「京助」

茶の間の戸に手をかけていた京助に中島が声を掛けた

「緊那羅きんならの方は俺等がいくからさ…その…お前は…」

そう言った中島がチラッと矜羯羅こんがらを見る

「…あいさ」

京助が苦笑いを返すと中島も苦笑いを返した

「じゃ、まあ頼んだ」

「了解」

茶の間の戸を開けると南と坂田に続き中島が廊下に出た

「おんまえもいだけ意地っ張りだよなア；」

茶の間の隣の和室に向いながら京助が言う

「ホラよ」

ほんのり柚の香りがするバスタオルが宙を飛んで矜羯羅こんがらにかかるとそのバスタオルを矜羯羅が掴んで顔を隠す

「…俺最近泣きに付き合ってたばっか」

テーブルを挟んで反対側に京助が座った

「きゃー！ 浅葱散乱！…；」

南の声に緊那羅きんならと制多迦せいたかが振り返る

「あ：ごめんだっちゃ；」

緊那羅きんならがはっとして慌てて浅葱を拾い出した

「タカちゃん最近変わったファッション多いねえ；」

中島せいたかが制多迦の頭やら肩についている浅葱を払いながら言う

「で？ 何が原因」

坂田きんならが緊那羅に聞くと緊那羅が浅葱を拾う手を止めた

「：さっきの矜羯羅こんがらから繋がってるように思えるんだけどさ」

更に坂田が聞く

「矜羯羅こんがらは：矜羯羅は制多迦せいたかだからあげたと思うっちゃ：なのに：

ッ」

緊那羅が浅葱を握り締める

「ラムちゃん落ち着いて落ち着いて； ハイ深呼吸」

南が緊那羅きんならの背中を撫でながら言う

「：タカちゃん：ほっぺ腫れて話しくいかもしれねえけど：」

中島せいたかが制多迦を見た

「：くは：僕の願い事を話しただけで；」

片手で頬をさすりながら制多迦せいたかが言う

「っ：あんな願い事なんて認めないっちゃッ！！」

「ラムちゃんどーどー！！；」

怒鳴った緊那羅きんならを南が宥める

「制多迦せいたかが制多迦せいたかじゃなくなったら矜羯羅こんがらは一人になるんじゃない

っちやかッ！！」

南の宥めを振り切って緊那羅きんならが言った

「：も僕がいなくても皆がいるし：僕がいなくても：」

「：ッ阿呆——————————————————————」

「——————————————————————！！！！！！！！」

正月町中に聞こえたかもしれない緊那羅きんならの声に3馬鹿が耳を塞いだ

「：スッゲエ音量；」

坂田が目を丸くして呟いた

「：俺モロ耳元；　うえあ；」

緊那羅きんならのすぐ隣にいた南が小指で耳の中をほじっている

「なんで矜羯羅こんがらが制多迦せいたかにあのお守りを渡したのか：どうして考えないんだっちゃ：矜羯羅こんがらは：ッ」

「落ち着けメガホンいらす；」

京助きんじうが緊那羅きんならのポニーテールを引っ張った

「いっ：；　：京助：と：矜羯羅こんがらだっちゃ？：；」

京助の後ろから逮捕された時の容疑者のごとく頭からバスタオルを被っている矜羯羅こんがらを見て緊那羅きんならが言う

「：んがら：」

制多迦せいたかが矜羯羅こんがらに声を掛けると矜羯羅こんがららしきバスタオルを被った人物がピクツと反応した

「お前声でかすぎ；」

京助が頭を掻きながら言う

「だってッ；」

「だってもヘチマもヘツタクレもあるか；」

はあと溜息をついた京助に緊那羅きんならがしゅんとなる

「制多迦せいたか」

京助がカムカムポーズで制多迦せいたかを呼ぶと制多迦せいたかが首をかしげながら

京助に近づいた

「さってと：じゃもう一回言ってくれないかね？　お前の願い事」

京助が制多迦せいたかに言うと矜羯羅こんがらがバスタオルを払って制多迦せいたかを見た

「皆の衆耳の穴かっぽじってよお聞くようにの」

京助が3馬鹿に向って言うると3馬鹿が揃って耳を制多迦せいたかに向けた

「：京助：何：」

緊那羅きんならが【もう一回同じ願い言ったらもう一回殴るぞ】的目せで制多せい迦いを見ている矜羯羅こんがらを見て京助の肩を掴んだ

「：いいから」

そんな緊那羅きんならの手を掴んで京助はニカツと笑うと制多迦せいたかを見た

「：くの願いは僕が僕でなくなること：」

「ッ……!!」

制多迦せいたかの言葉に矜羯羅こんがらが眉を吊り上げた

「ハイ！ 皆聞きましたか？ 聞こえましたか？」

京助がパンつと手を叩いた

「はいせんせー！ しっかり聞こえましたー!!」

坂田が元氣よく手を上げた

「よちよちいいこでちゅねー」

そんな坂田の頭を京助が撫でる

「僕も聞こえましたせんせー!!」

ハイハイと南も両手を上げ中島は足を上げた

「ハイ！ みんないい子でちゅねー。緊那羅君はどうかなく」

京助がきよとんとしている緊那羅きんならを見るとおずおずながら緊那羅きんならが頷いた

「まあ！ なんてこと！ なんていい子達なんでしょう！ せんせ

ー感激だわ」

緊那羅きんならの頭をグシャグシャに撫でて京助が笑う

「や…何するちゃッ!!!」

京助の手を振り払って緊那羅きんならが言う

「矜羯羅こんがらも聞こえたか？」

緊那羅きんならに払われた手を振りながら京助が矜羯羅こんがらに聞く

「…聞こえたよ…しっかりね」

誰が聞いても怒っていると思えない口調で矜羯羅こんがらが答えた

「ってことだ制多迦せいたか…残念だったな」

京助が制多迦せいたかの肩を叩く

「…んで？」

京助がどうして【残念】と言ったのかわからない制多迦せいたかが首をかしげる

「願い事って人に話したら叶う確立大幅に下がるんだ」

京助が言うと矜羯羅こんがらがバスタオルを床に落とした

「こんだけの人数がしっかり聞いちゃったんだからタカちゃんの願

い事叶わないかもねえ」

中島が言う

「…うなの？」

制多迦せいたかが中島を見て聞く

「願いは密かについてよく言うじゃん？」

坂田が笑う

「ま、この願いは諦めるんだな制多迦せいたかさん」

京助がバシバシ制多迦せいたかの背中を叩いた

「…んがら…」

叩かれながら制多迦せいたかが矜羯羅こんがらを見る

「…僕もしっかり聞こえたからね」

床に落ちたバスタオルをまた頭から被って矜羯羅こんがらが小さく言う

「…つか…」

しばし黙り込んだ後 制多迦せいたかがヘラリ笑顔を矜羯羅こんがらに向けた

「…京助…って…」

緊那羅きんならが京助を見た

「なんだよ」

京助も緊那羅きんならを見る

「…なんでもないっちゃ」

緊那羅きんならが笑顔で首を振ると京助が首をかしげた

「なあ」

南がハイと手を上げた

「はい、南君」

中島がソレを指名する

「…浅葱…拾わない？」

足元にいいだけ散乱している浅葱を指さして南が言う

「…やっぱり臭いね」

床に落とした時についてきていたのかバスタオルについていた浅葱を矜羯羅こんがらが摘んでペイツと投げた

シャクシャクという音が昼下がりの縁側から途切れ途切れに聞こえてくる栄野家の日曜

「次オレ〜!!」

なんとも触り心地のよさそうな坊主刈りの少年がスティック状の人参を高らかに掲げた

「じゃあこうちゃんの次は麻衣ね？ いでしょ？ ね？ ね？」

黄色いスカートをヒラヒラさせた麻衣がこうちゃんと呼んだ少年の肩を掴んで揺すった

「クロ〜クロ〜クロ〜」

こうちゃんが人参をクロ（ホクロ）の前でチラつかるとクロ（ホクロ）が鼻をヒクヒクさせて目をあける

「可愛い〜!!」

ソレを見て麻衣が言った

「でしょ？ でしょ？」

悠助が笑いながら言う

「ねえタカちゃん!! オレにも抱かして？」

こうちゃんが制多迦せいたかを見上げて聞くとヘラリ笑顔で制多迦せいたかが頷いた

「ああん! ずるい!! 麻衣も〜!!」

「…大盛況だな」

「おかげさまで」

部屋まで聞こえてくる縁側の賑わいに京助がヘッと口の端を上げた

「で？ 結局飼うことになったんか？」

南が椅子をギーギー鳴らしながら聞いた

「まあ…一応な； …飼い主見つかるまでって条件付で」

京助がかりんとうを齧りながら言う

「最終手段学校って手もあったんだけどな」

中島がテレビ画面から目を離さずに言う

「一匹だけってかわいそうじゃん」

南が笑いながら言った

「そうだよなあ…一人って寂しいよなあ…だからバイキンマンもグレたんだよなあ…」

坂田がコントローラーの○ボタンを連打しながら言う

「ってかアンパンマンの体って何で出来てるんだろな？」

ふと南が言うと中島と坂田の手が止まった

「…何って…」

京助が口を開いた

「…何だろな」

そして真剣に考え込む3馬鹿と京助

「…愛と勇気しか友達いないって言ってるけど話しの中に愛ってのも勇気ってのも名前でてきてねえしな…空想の友達か？」

中島が言う

「…なんかそう言うとき…アンパンマンってやたら怪しい正義の味方になるナア；」

南が苦笑いで言った

「奥が深いな…アンパンマン」

坂田が言うと京助と中島、南が頷いた

「…クロ取られたの？」

微かな風を感じて制多迦せいたかが横を見ると足を組み頬に手を置いた矜羯羅こんがらが隣に腰掛けてクロ（ホクロ）を触りあう悠助達を見ていた

「…んがら…いつ来たの？」

制多迦せいたかが少し驚いたように聞いた

「今」

それにさらっと答えた矜羯羅こんがらがゆっくりと制多迦せいたかの方を見た

「…だ怒ってる？」

制多迦せいたかがボソッと聞くと矜羯羅こんがらが立ち上がった

「…もうその願いは叶わないんだからね」

腕を組み制多迦せいたかに背中を向けた矜羯羅こんがらが言う

「…ん」

制多迦せいたかが頷く

「…つの願い事…しても大丈夫かな」

制多迦せいたかが花卉の入った板を取り出して太陽に透かして見る

「…いいんじゃない？ 一つ目は叶わないんだし」

矜羯羅こんがらが背中を向けたまま答える

「…うだね」

ヘラツと笑った制多迦せいたかが立ち上がった

「…めん…矜羯羅こんがら」

ボソツと謝って矜羯羅こんがらの背中に制多迦せいたかが頭をつけた

「…運命って変えられると思う？」

矜羯羅こんがらが俯いて制多迦せいたかに聞いた

「…制多迦せいたか…僕は生きたい…」

小さく矜羯羅こんがらが言う

「…ん」

それに対し制多迦せいたかが目をとじて返事をする

「僕は生きてるんだよ」

さつきよりは大きな声で矜羯羅こんがらが言う

「…ん知ってる…だってあったかいもん矜羯羅こんがらは生きてる」

目を閉じたままで微笑んで制多迦せいたかが言うと制多迦せいたかの頭から矜羯羅こんがらの

背中が離れた

「…生きたいって願ってもいいんだよね」

そう言った矜羯羅こんがらの手には花卉の入った板

「…ん」

微笑んで制多迦せいたかが頷く

「…ありがとう」

振り向いた矜羯羅こんがらが笑顔で言った

>i24330—2575<

【第七回・伍】ごー・あ・(田)うえい(前書き)

田舎ならではの小中学校合同行事の日事件は起こった

【第七回・伍】ごー・あ・（田）うえい

よく晴れた空の下紺色の学校指定ジャージを着た集団と私服を着た集団とが規律よくならんでいた

「それでは小学生の皆さんは中学生のお兄さん、お姉さんのいうことをよく聞くようにしてくださいね」

ガーガーとノイズ交じりの声が響いた

「二年生と五年生は一組、三年生と四年生は二組、そして一年生と六年生は三組が担当します。それぞれの委員長と副委員長は小学生を誘導してください」

その声と共に紺色の学校指定ジャージ集団から計九人の生徒が私服軍団の元に小走りで向かう

「：南／＼中島／＼ウチの康平【こうへい】頼むな」

浜本が丁度近くにいた南と中島に言う

「お／＼バッチリ可愛がってやつからなッ」

南がまかせろ！とばかりの笑みを浜本に向けた

「その点京助は悠と一緒になんだな」

中島が頭にタオルを巻いていた京助に言った

「みたいだな／＼：まあ：どうなるってわけでもねえし」

頭の後ろでしっかりタオルを縛った京助がジャージの袖を捲り上げる

「京助／＼！！」

やたら元気のいい悠助の声が聞こえ京助含め周りの皆が声の方を振り向くと悠助が大きく手を振っていた

「お／＼コッチコッチ」

坂田が大きく手を振り替えして悠助を呼んだ

「よかったねー悠助／＼京助と一緒にで」

指定ジャージを膝下で切ったいわゆるハーフパンツをはいた阿部が本間とミヨコと共に悠助の後ろからついてきた

「うんっ！」

坂田が京助と悠助を見ながら言った

「：でもアタシ反抗的な悠助って想像できないわ」

阿部が悠助をチラッと見て言う

「何？」

悠助が笑顔のまま首をかしげると阿部も悠助に笑顔を返した

今日は京助達の通う正月中学校の二年生と悠助の通う正月町立別荘小学校児童との合同田植えというなんとも田舎町ならではの行事が行われている

正月町には小学校が5校、中学校が2校、高校が1校ある
年々少子化が進んでいく中でせめて兄弟がいるように思っしてほしいという小学中学の校長、そして教育委員長の計らいの下代々行われてきたんだかそれなりに伝統のある行事だという

「京助！僕もタオルでぎゅってやりたい！」

悠助が自分の持っていたタオルを京助に差し出した

「俺が結んであげるよ悠助」

慧喜が悠助ににっこりと微笑みかけながらいう

「いいねえ：ラブラブ」

本間が阿部をチラッと見て言った

「：何よ」

そんな本間に阿部がむすっとした顔を向ける

「ね！　ね！！　あのさラムちゃんは？」

浜本が悠助の頭にタオルを巻いていた慧喜に聞く

「ラム：？　ああ緊那羅ならいいよ？」

優しくでも解けてこない程度の力でタオルを縛った慧喜が浜本に淡々と答えた

「んじやお前どうやってここまで…」

京助が慧喜に聞く

「よ！　竜のボンボン」

やたら明るい声に一同が振り向く

「あつくんにいちゃん！」

悠助が阿修羅あしゅらに向かって手を振った

「…変態」

本間がぼそつと呟く

「変態だな」

坂田が口の端を上げて言った

「なんつー格好してんだよ…何だよその背中の物体は；」

京助が呆れ顔で聞く

「コレか？ コレはほら…ツジャー—————」

「—————ンVV」

阿修羅あしゅらが嬉しそうにそして高らかに掲げたのは

「…ハニワ？；」

阿部が引きつったような顔で阿修羅あしゅらの掲げた埴輪を見る

「ハニワじゃなきによ！！ 嬢！」

阿修羅あしゅらが阿部を指差した

「ハニワじゃなきや何なんだよ」

緊那羅きんならではなく見知らぬしかもハニワを背負った阿修羅あしゅらに向かって

浜本がどことなく不機嫌そうに聞く

「コレはだな…オライの最愛の恋人なんつって」

そういうながらハニワに頬擦りし始めた阿修羅あしゅらに対し一同が固まる

「…変態だな」

浜本が言うのと揃って頷く

「コラ！ そこ！！ さっさと取り掛かりなさい！」

先生に言われて周りを見ると自分達以外が皆キヤーキヤーワーワー
言いながら田んぼの中に入っている

「くっそ！ 出遅れた！！；」

京助と坂田がジャージの裾を捲り上げてスタンバるのを見て悠助も
真似をする

「おっそいぞ〜ソコ〜」

中島と南を始め他のクラスからも野次や笑いが飛んでくる中笑いながら京助が田んぼに足を入れる

「今年の一年生少ないんだね…8人？」

阿部が紺色のジャージ集団の中にぽつぽついる小学一年生を数えて言う

「六年だって4人だろ」

浜本が歩きながら言った

「俺達の時が一番人数いたんだね」

南が言う

「15人だっけ」

坂田がおいてあった苗の株を適当にもぎ取って田んぼの中にいる京助に投げ渡す

「なげんなっの！；」

京助が怒鳴る

「俺ー南ー京助ー中島ーにしばぴー…」

浜本が指折り別荘小学校出身の同学年の名前を挙げていく

「少なくなったよねー…」

南が溜息混じりに言った

「で…何の用があつてきたんだよ変態」

坂田が田んぼの中から阿修羅あしゅらに向かって聞く

「オライ？ オライはだな…」

「俺は悠助に会いに来た」

阿修羅あしゅらが答えるより先に慧喜えきが聞かれてもいないのに答える

「ありがとゝ慧喜えき」

悠助が笑顔を向けると慧喜えきがほほを赤らめて微笑む

「…麻衣の入る隙間ないじゃない」

その様子を見ていた麻衣が頬を膨らませる

「あれ？ 麻衣ちゃん悠助好きなの？」

阿部が植えやすいよう苗を小分けにしながら隣にいた麻衣に聞く

「うんだって優しいし可愛いし」

都会から越してきたというだけあってどことなく他の子達よりませている麻衣が阿部の質問にさらりと答える

「…そっか…でも悠助にはえ…」

「負けないもん」

言いかけた阿部の言葉を麻衣が止めた

「だって麻衣だって悠助好きだもん」

そう言って立ち上がると麻衣が悠助に向かって小走りで駆け出した

「…強い子だね」

追加の苗を持ってきた本間が阿部をチラッと見て言う

「…何よ」

視線に気づいたのか阿部が本間を見上げる

「別に？」

苗を地面に置き本間がふっと笑った

「オライはでっかいのに用があって来たんきに」

阿修羅がハニワを背中に背負いながら笑う

「でかいの？」

浜本が田んぼの中で今にもコケそうになっているハルを見た

「中島か？」

坂田が腰に手を当てて後ろに反りながら言う

「そうそう！！ ソイツさ！ ありがとさんメガネ」

阿修羅が笑いながら坂田に言う

「俺はメガネかよ…」

坂田があきれたような顔で阿修羅を見た

「んで？ 中島に何の用だよ？」

端まで植え終わった京助が泥のついた足のまま土手を歩いて阿修羅の隣に立って聞く

「おおお帰り竜のボン！ いやあ…コノ…愛しい人のことを詳しく聞こうと思ってさ」

阿修羅^{あしゅら}が京助に背中を向け背負っているハニワを見せた

「：何をどう詳しく聞くんのだ？；」

乾いた泥がついている手を腰に当てて京助がハニワを見る

「何って…まあ…何かを？」

ハッハと笑うと阿修羅^{あしゅら}が止まった

「でっかいの見つけ————————————————————！！！」

「あつくん見つけ——————————————————————ッ！！！」

バキッ

「あ」

そして

バシャ

「もう！ 信じらんない！！ 私を置いていくなんてッ！」

田んぼの中に沈んでいく阿修羅^{あしゅら}の頭の上にそびえる紺色の二本のス
ラリとした脚

「おおおおおお！！！」

他のクラスの男子からも上がる歓声

「ヨシコお姉さん！」

白い布（羽衣）のオプションがついたヨシコ^{きつしよ}こと吉祥^{あしゅら}が阿修羅の
頭から飛び上がり土手に着地する

「：やっぱお前類は友を呼ぶってな」

坂田が京助の肩を叩き言う

「コラ！！ そこ！」

この騒ぎを先生達が黙って見ているわけはなく

「：キタキタキタ：；」

京助と坂田が迫ってくる先生集団を見ないようにして目をそらした
「何を騒いでいるんだ：やっぱりお前か京助に坂田；」

メガネをかけて髪を微妙にオールバックにした男性教諭が呆れ顔で
京助と坂田を見る

「順ちゃん：やっぱって何やっぱって；」

坂田が【順ちゃん】と呼んだ男性教諭の後ろから女性教諭がやって

きた

「悠くん、お兄さんお姉さんの言うこときかないと駄目でしょ？」

中年の結構キャリアがありそうな女性教諭が悠助の頭をなでながら注意する

「悠助に触るな！！ 悠助を怒るなッ！！」

途端 慧喜えきが悠助を抱き上げて女性教諭に怒鳴る

「慧喜えき！ いいの！ 渋谷先生は先生だからいいの！！」

抱き上げられた悠助が慧喜えきに必死に説明する

「…で…京助…この方々は？」

順ちゃんあしゅらが阿修羅あしゅらとヨシコ、そして慧喜えきを一通り見て最後に京助を見た

「従兄弟です」

京助が何のためらいもなくきっぱりと真顔で答えた

「…随分変わった格好の従兄弟なんだな」

順ちゃんあしゅらがヨシコと阿修羅あしゅらの格好を見て言う

「えゝあゝ…」

京助が説明に困っているのを見て坂田のメガネが光った

「順ちゃん実はコノ京助の従兄弟達中国雑技団なんだ」

「マジ！！？」

坂田の言葉に周りの一同が阿修羅あしゅらとヨシコを取り囲んだ

「だからそんな色っぽい格好してんのかー！！」

「ねね！ 何かやってやって！！」

「にーはお！ にいはおー！！」

あちこちから誰が言ったのかわからない言葉が阿修羅あしゅらとヨシコに降りかかっていく

「…悪化してないか？」

京助が横目で坂田を見る

「…そう…かもですね」

坂田がその京助の目から逃れるように顔をそらした

「ちょ…何！？； 何なの！？；」

ヨシコがわけもわからないまま生徒達にもみくちやにされている

「…オライ等が中国人とか主張せばいいんかね？」

阿修羅あしゅらが手を上げて京助に聞いてきた

「…まあ…うん；」

京助が躊躇いがちに頷く

「ほーほーう…え…じゃあ…」

阿修羅あしゅらがコホッと軽く咳をした

「***** (たぶん中国語)」

「おおおおお！！」

阿修羅あしゅらの言った言葉に生徒達がどよめいた

「*****！*****」

「***** (たぶん中国語)」

さらに阿修羅あしゅらが何か言った

「順ちゃん何ていつてるかわかる？」

阿部が順ちゃんに聞く

「…阿部…先生は英語専門だ；」

順ちゃんが苦笑いと言う

「*****？*****…*****」

「***** (たぶん中国語) …！！でっかいの…」

「…」

阿修羅あしゅらが中島を見つけぶんと手を振った

「ちよーごめんなーハイハイ」

阿修羅あしゅらが生徒達を掻き分けて中島の元に行こうとする

「あ！ もう！ 待ってってば…ッ！！」

ヨシコも必死に阿修羅あしゅらを追いかけて生徒達を掻き分ける

「中島…ご氏名…」

坂田が中島に向かって手を振る

「あ？」

泥だらけの手で苗を植えていた中島が顔を上げた

「俺を呼ぶのは誰ぞ？」

ぬちゃりぬちゃりとぬかった泥をこいで中島が生徒の垣根ができて
いる土手に近づく

「んも…きゃあッ!;」

生徒の垣根を掻き分けてきたヨシコが何かに足を引っ掛けたのか前
のめりになって中島めがけて倒れてきた

「だあッ!;!;」

バシャー—————

春を半分過ぎた時期にちょうどいい風が少し強めに吹く中小声での
ざわめきが広がった

「…オイ…;」

耳元で聞こえた声にヨシコがゆっくりと目を開ける

「重い」

二言目の言葉でヨシコが目を見開いて起き上がった

「な…」

ヨシコの下には半分田んぼに埋まった中島

「…何してんの？」

そんな中島の上からどうとせずにヨシコが真顔で中島に聞く

「お前が勝手に俺に倒れ掛かってきたんだろが!;!;」 早くどけ
よ重い」

頭だけを何とか起こして中島が怒鳴る

「…どけって…言われても…」

周りを見てヨシコが呟いた

「…俺の体踏んで飛びやあいいだろ。お前ならできんだろ？」

中島が言う

「…踏んでって…いいの？」

ヨシコが中島を見る

「いいってんだろ;」 俺は早くどいて欲しいんだよ…;」

中島が疲れたのか頭をまた泥に落として再びまた頭を起こした
「それともどっか怪我とかしたんか？」

中島が聞くとヨシコが驚いた顔をした後首を横に振った

「救護班へ到着へ」

板を持った南と京助、坂田が中島とヨシコの周りに集まった

「ハイハイへヨシコちゃん立ってへ板に乗ってへ飛ぶ！」

南がヨシコの手を引っ張って立たせると板を田んぼの上に置いた

「ハイハイへ柚汰君は俺等につかまってへ」

坂田と京助がヨシコのどいた後に中島の両腕を持って引っ張って中島を起こした

「いんやへ災難だったなでつかいの」

土手の上で阿修羅あしゅらがひょうひょうと笑いながら言った

「うっへえへ； 泥臭せえ；」

中島が背中全体泥まみれになった自分の匂いをかいで顔をしかめる

「あつちにたしか小川あっただろ？ 洗いに行くか？ 頭だけでも」

京助が右方向を指差して言う

「おい！ 皆の衆へ使ってないタオルとかあったら貸してくりやれへ」

南が生徒群に向かって叫ぶ

「何へ誰かカッパしたん？」

【解説しよう。『カッパする』というのは『ひっくりがえる』または『水の中で転ぶ』という意味である】

「中島へ」

南が中島の名前を出すとタオルを手を持った生徒が数名笑いながら集まってきた

「うっわへ泥だらけやへん；」

南にタオルを手渡しながら男子生徒が苦笑いで中島を見る

「名誉あるカッパなんだぞへ」

先に土手に上がった京助が中島の手を引っ張る

「人命救助さ人命救助」

中島の尻を押しながら坂田が言う

「おうよ」

土手に上がった中島が腰に手を当てて胸を張った

「なっかじつまくんッおっはいんなさいっ」

南が手招きして小川の中に中島を招きいれようとする

「いい感じに冷てえぞゝい； 風邪引かねえか？；」

京助が先に小川に手を突っ込んで洗い中島に言う

「泥乾いてきて後ろカッパカペで重てえんだわ；」

中島の髪や服についた泥が乾いて固まってきている

「でもさゝなんだかんだ言ってもヨシコちゃんを抱いたわけだし役得じゃん中島さんよ」

小川の中に入った中島をしゃがみこんで見下ろすと南がニヤニヤ笑った

「抱くっつーか；別に；ただ倒れてきただけだし？」

借りたタオルの一枚を小川の水につけて下を向き頭をぬらして泥を流しながら中島が答える

「柔らかかったんじゃねーの？ 乳とか乳とか」

手を洗って小川から上がった京助が中島を見下ろして聞いた

「柔らかいものにも感じ取るヒマねえってんよ；；まあ；；しいていうなら；；」

もう一枚タオルを濡らして仕上げに髪を拭きながら中島が頭を上げた

「しいて言うならなんだよ」

早く次の言葉を言わない中島に坂田が突っ込む

「重；」

ミシ；ッ

中島が言い終わらないうちに何かが軋む音がして京助達の視界から中島の頭が消え紺色の二本の足が現れた

「最ッ低！！ 沈んじゃえ馬鹿ッ！」

真っ赤な顔をしたヨシコがガスガスと中島の頭を踏む

「ヨシコちゃん！ ストップストップ！！； 死ぬって！！ 中島

死ぬ！！！」

南と坂田、京助が必死にヨシコの足を抑えてヨシコを宥める

「コラコラヨシコ；恩人になにしちゃん；」

苦笑いで阿修羅^{あしゅら}がやってきてヨシコに言った

「：生きてるかゝ中島ゝ；」

春の冷たい雪解け水で出来た小川の中に浮かぶ中島に向かって京助が声をかける

「：まあ：生きてはいます：」

中島がヒラヒラ手を振った

「よ：よかったじゃん；背中綺麗になつてゐるぞ？；」

坂田が手を差し伸べて中島を引っ張りあげようとする

「いやゝ； 散々だなでっかいの」

阿修羅^{あしゅら}も坂田を手伝い中島を引っ張り上げた

「ホラ！ ヨシコ！ お礼とスンマセンは？」

阿修羅^{あしゅら}がヨシコに向かって言う

「ありがとうは言うわ！！ でも謝らないんだから！！ そうよ！

絶対謝ってなんかやらないわ！！」

眉を吊り上げてヨシコが怒鳴る

「んな：ヨシコ：お前が重いのはじじ：」

バキッ

阿修羅^{あしゅら}が言い終わる前に坂田の顔面スレスレを紺色の二本の足が風を切って飛び阿修羅^{あしゅら}の顔面に見事なまでの両足キックをお見舞いしていた

「：乱暴な女ー：」

中島がボソツと言うとヨシコがキツと中島を睨んだ

「何よ！ 何よ何なのよッ！！ 乱暴で悪かったわねッ！！」

ヨシコがズカズカと大股で歩き中島に近づく

「別に誰も悪いとか言ってねえだろ；」

タオルを首にかけた中島がヨシコに言い返す

「私にはそう聞こえたわ！！ うん！ そう！ 聞こえたんだもの

!!」

背の高い中島を上目で睨む形でヨシコが再度怒鳴る

「いちいちそんな大声出さなくてもいいじゃん! やかましい…」

さつきより少し大きな声になった中島がソレに言い返す

「怒鳴らせてるのはあなたじゃない!! そう! あなたが悪いんでしょ!？」

さらにヨシコが怒鳴ると中島がむっとした顔になった

「なんかスッゲームカツク」

中島が言う

「何よ! 私だってムカついてるわ!! うん! そう!! すごく嫌なヤツじゃない?！」

ヨシコが中島を睨みながら言った

「ハイハイハイハイ…」

阿修羅^{あしゅら}がパンパンと手を叩いて二人の間に割ってはいる

「復活早えなあ;」

さつきヨシコの見た目にも相当威力のありそうな両足キックを喰らったばかりの阿修羅^{あしゅら}を見て南がつぶやく

「でっかいのもヨシコもまあ座る座る」

阿修羅^{あしゅら}が二人の肩をつかんで押しなが座ると御互いを睨みあったままで中島とヨシコも座った

「竜のボンとメガネと…ちっこいのもコッチコッチ」

阿修羅^{あしゅら}が京助たちを手招きする

「お前はちっこいのだぞうだぞ南」

坂田が南の肩を叩いて阿修羅^{あしゅら}のほうに歩き出した

「…傷つくなあ; まだこれから成長期なのに…たぶん」

南が苦笑いで坂田の後に続く京助もソレについていく

「まあ…こないない天気の下喧嘩すんのもいいけど」

「いいんかい;」

阿修羅^{あしゅら}の言葉に坂田と京助が同時に両方から突っ込んだ

「もっと気分良くなることしようや」
バンバンとヨシコと中島の背中を叩くと阿修羅あしゅらが二人の間にハニワを置いた

「…俺のやったハニワじゃん」

中島が置かれたハニワを手を取った

「返せいつても返さなんだぞー？」

阿修羅あしゅらが笑いながら言う

「言わねえよ；」

中島がハニワを置いて溜息をついた

「ヨシコ…いい加減睨むのやめんさ；」

阿修羅あしゅらが中島を睨んだまま顔つきを変えないヨシコに言う

「無理よ無理無理…だって私ムカついているもの」

中島を睨んだままヨシコが阿修羅あしゅらに言った

「ガキ」

中島がへツと挑発的な笑いを浮かべながらヨシコに言う

「お前は…；」

そんな中島の頭を坂田がペシッと叩いた

「まあヨシコはまだ子供っちゃー子供だけでもさ」

阿修羅あしゅらがヨシコを見て言う

「な…私のどこが子供なのよッ！！」

ヨシコが阿修羅あしゅらに向かって怒鳴った

「そんなところ」

阿修羅あしゅらがヨシコの頭を小突いた

「我俣、自己中心的、攻撃的…その他」

言いながら阿修羅あしゅらがコツンコツンとヨシコの頭を小突き続ける

「教育係りとしては結構頭を悩ませてるんだよなオライは」

「教育係！？；」

阿修羅あしゅらの言った【教育係り】という言葉に3馬鹿と京助が声を揃えて言う和一斉に阿修羅あしゅらを見た

「…お前…教育係って」

京助が阿修羅^{あしゅら}を指差すと阿修羅^{あしゅら}がにーっと言う笑みを返した

「一応オライはヨシコ…吉祥^{けいしょう}の教育全般を任せられてんだわな」コレが

3馬鹿がヨシコと阿修羅^{あしゅら}を交互に見た

「…信じられねー…」

南が呟く

「うわー…傷つくってちっこいの…； お前さん達にオライがどう思われてんのか知らないけどさー； 優秀なんよ？ コレが」

阿修羅^{あしゅら}が苦笑いで言う

「んじや阿修羅^{あしゅら}って…」

京助が阿修羅^{あしゅら}を見る

「…ただの変態じゃなく」

南が付け加える

「優秀な変態？」

中島が更に付け加えた

「…変態なのは変わらないんだけどな」

坂田がハニワを撫でている阿修羅^{あしゅら}を見てシメの一言を言った

「ヨシコはコレでもアレでさ」

阿修羅^{あしゅら}がヨシコを見て言う

「…アレってなんだよ；」

坂田が聞いた

「あっくん！！」

ヨシコが声を張り上げた

「…それ以上言わななで」

しかし次に発したヨシコの言葉はかなり小さいものだった

「…悪りかったな」

阿修羅^{あしゅら}がポンポンヨシコの頭を叩いて謝った

「…アレって何よ；」

中島が呟くとヨシコがキッと中島を睨んだ

「何だっていいじゃない!!」

そして怒鳴る

「いちいち怒鳴んなよナア…; やかましい」

中島がため息と呆れ顔をセットにして呟く

「怒鳴らせてるのは貴方じゃない?!」

更にヨシコが怒鳴った

「まあまあ…; そろそろ戻らないとじゃない?」

南がヨシコを宥めながら立ち上がる

「そうだな…; いきですか」

京助も南に続いて立ち上がった

「…ほらよ」

立ち上がった中島がヨシコに手を差し伸べた

「そんなことしてくれなくなたって立てるわよ!!」

すつくと立ち上がったヨシコが大股で歩き出した

「…かわいくねえ…;」

中島がボソツと言う

「すまんねえ…; でっかいの」

阿修羅あしゅらが中島に申し訳なさそうに謝った

「俺の一番嫌いなタイプ」

ジト目でヨシコの後姿を追いながら中島が呟く

「まあ…; ヨシコも結構イロイロあんだわな」

ハニワを大事そうに小脇に抱えながら阿修羅あしゅらが言う

「あ! やつときた〜!!」

悠助が京助の姿を見つけて手を振った

「遅かったな…; って何やってきたんだ中島は…;」

少し太めで頭はイガグリ、そしてメガネをかけて顎鬚を微妙に生やした男性教員がずぶ濡れの中島を見て聞いた

「ちよっと早い川遊び」

坂田が笑って言う

「もう後はオリエンテーションと昼食会だけだぞ」

浜本が泥のついた手足でやって来て言う

「そっかーそりゃーさんねーん」

南が全然残念とは思っていない様な口調で言った

「で…この二人と…こっちの悠助にべったりなのがお前のイトコか」
少し太めで（略）男性教員が阿修羅あしゅらとヨシコえきそして慧喜えきを見て京助に聞く

「…まあ…一応；」

京助が男性教員の顔を見ないようにして答える

「なあウニくコイツらも一緒に昼飯食ってもいい？ ミナミのお・ね・が・い」

南がアイドルポーズで【ウニ】と呼んだ男性教員に聞いた

「…色気が足りないぞ南…まあ…昼飯はジンギスカンだしな…いいぞ」

ウニがあっさり承諾する

「さっすがウニ！」

坂田がウニに向かって拍手した

「お前等の食いブチが減るだけだからな」

ハッハと笑いながらウニが言うのとハッとした顔で3馬鹿と京助の動きが止まった

「ジンギスカンってえヤツは羊肉やんか？ 実はコレの肉って牛と

か豚とかよか食べられてんでく？」

阿修羅あしゅらがヒョイと肉を箸でつまんで言った

「マジ？ そうなん？」

南が阿修羅あしゅらの取った肉の後にまた肉を焼き始める

「そうなんさくイスラム教やヒンズー教っちゅう世界の宗教じゃ牛や豚を食べることを禁じてんやん？ でもさ羊はどの宗教でも食べることを禁じられてないわけで？ なんだもの豚牛食えなくても羊食うわけだから当たり前っちゃーあたり前なんだわいな」

口を動かしながら阿修羅あしゅらが言う

「へえゝゝ」

ジンギスカンの鍋を囲んでいた一同が感心して声を上げた

「もう一丁いきますと羊は中国とか中東にかけて広い地域で飼育されて食用とされてきたんだわ。まあ毛を使うためもあったしなゝゝでもなおもしろいことにジンギスカンっつゝ料理名は世界中どこにもないんだわな」

阿修羅あしゅらが端を上下に動かして言う一同が顔を見合わせた

「まあゝなんだゝそもそもは中国料理【コウヤンロウ（鍋羊肉）】がジンギスカンのルーツであろうともいわれてるちゃーいわれてるんだけどさゝゝその料理を元に食いやすいよう味とか変えてできただわなゝ」

「へえゝゝ!!」

阿修羅あしゅらが言い終わると心底感心しました!というカンジの声が上がった

「お前もしかしくなくても頭いい?」

坂田が汁を吸って茶色くなった玉ねぎを紙皿にとって聞く

「あんなあゝ だからオライは一応ヨシコのの教育係りなんだってば

阿修羅あしゅらが苦笑いで答えた

「歩く辞典ってよばれてんぜ? オライ」

クイツと自分を親指で指して阿修羅あしゅらが言う

「あつくくんは私達の中でも一番賢いかもしれないの」

ヨシコが紙コップの中のお茶を飲んで言う

「かもじゃなく賢いんだってばよヨシコ; じゃなきやかるらんもオライをお前の教育係りなんぞにせんで」

阿修羅あしゅらがヨシコに突っ込んだ

「何? 鳥さんってやっぱお前等のボスかなんかなワケ?」

南が肉をひっくり返しながら聞いた

「まあゝ中ボスくらいかね?」

阿修羅^{あしゅら}が答える

「うっわー； 中間管理職かよ；」

京助が本当に嫌そうな顔で言った

「アレだね一番胃をやられるポジション…あ！ だから乾闥婆^{けんだつば}がついてるんじゃないのか？」

坂田が言う

「かるらん胃悪いの？」

慧喜^{えき}に肉をあーんされている悠助が聞く

「胃悪い割には良く食うよな〜」

中島が箸を噛んだ

「…なあ」

南がハタと鍋を見つめたまま言う一同が南に注目する

「…俺今スゲエこと思いついちゃった…話し全然変わるんだけど言っている？」

真顔で言う南に京助たちが顔を見合わせる

「…なんだよ…」

中島が聞く

「…何？」

ヨシコも気になっているのか南を見て聞いた

「…あのさ…」

ジュウジュウと肉の焼ける音と周りの生徒の声だけが少しの間聞こえていた

「勿体つけないで言えよ；」

中島が南を肘で小突いた

「…じゃあ言うぞ？」

南が真顔で顔を上げた

「…コレ何の肉？」

南がジنگスカンの鍋の上でいいカンジに食べごろになった肉を箸で指して言う

「…ヒツジ」

京助が答える

「…外来語で」

南がそんな京助を見て更に言う

「…なんだかお前の言いたいことがわかったような気がする。」

坂田が箸を紙皿にトントンつけて言った

「…俺も；」

京助も口の端をあげて言う

「何さ？」

阿修羅が京助達の顔を見て聞く

「…ヒツジはラム…ラム肉…ラム…キンナラムちゃん…」

南がボソボソと言いうと坂田と京助が案の定だったというカンジの顔をした

「…緊那羅^{きんなら}か」

中島が南の答える前に言った

「そう！！俺等さっきからラム肉！イコールキンナラムちゃんを食ってるー！！」

南が大声で言う

「これ緊ちゃんなの？」

悠助がきよとした顔で焼けている肉を見た

「違^{ちが}うよ悠助；」

慧喜^{えき}が言う

「…あなた達馬鹿でしょ」

ヨシコが呆れ顔で言った

「おうよ！！」

3馬鹿と京助が【そうともさ！！】と胸を張った

「あっはっは！！おつかしいなあお前等！最高！」

阿修羅^{あしゅら}が笑う

「あっくん…；」

そんな阿修羅^{あしゅら}を見てヨシコが更に呆れる

「僕は馬鹿じゃないもん」

悠助が言う

「うん悠助は違う」

慧喜えきが悠助を抱きしめた

「コッチは熱いねえ……」

阿修羅あしゅらがそんな慧喜えきと悠助を見ながら言った

騒がしく昼食会が終わって紺色の指定ジャージ集団の中にチラホラと私服が混ざった列が出来た

「オリエンテーションって何やるんだっけ？」

浜本が爪楊枝を咥えながら聞く

「確か宝探しとか」

阿部が答える

「チーム制？ 個人？」

「今からソレを説明するんだろうが；少しおとなしくしろよなくお前等は；」

坂田が聞いているとウニが坂田の頭を小突いて言った

「ウニく児童虐待く！！」

坂田がブーイングする

「残念お前はもう児童じゃないんだなコレが」

ウニがハッハと笑いながら言う

「宝物ってなにかなあ？」

悠助が京助を見上げて聞いた

「俺の宝物は悠助」

慧喜えきが豊満な胸に悠助を抱きしめるのを見て阿部が自分の胸を見る

「……目指せ暑寒岳」

本間がボソツと言うと阿部がハッとして胸を隠した

「それぞれ小学生も含めて7く8人のチームを作ってください。そして何かアイテムに名前を書いてソレを近くにいた先生に渡してく

ださい」

ノイズ交じりの声が昼下がりの空に響いた

「7ゝ8人ってことは…俺ゝ京助ゝ坂田ゝ中島ゝ悠に慧喜っちゃん…に…」

南が名前を言いながら指をさしていく

「…ヨシコちゃんと阿修羅あしゅらだかも入れるとちょうど8人？」

南が阿修羅あしゅらとヨシコを指した

「いんじゃない？　これで」

京助が言う

「…いいのか？　コレで…」

中島がヨシコと阿修羅あしゅらを見て言う

「…何よ！！」

中島と目が合ったヨシコが怒鳴る

「何でもねえよ；　…イチイチ怒鳴るなよなあ…ったく」

中島がヨシコから顔をそらせてため息をついた

「で…何かアイテムって言ってたけど」

坂田が言う

「アイテムっていつでもさあ…」

ぐるり各持ち物を見渡した京助が阿修羅あしゅらを見て止まった

「…京助？」

坂田が止まった京助に声をかけた

「何？」

阿修羅あしゅらが京助を見る

「ソレに決めた」

京助が指差す方向を一同が揃って見る

「…なんだかすっごくイヤな予感がするんですが竜のボンや…」

阿修羅あしゅらがどことなく引きつった笑顔で言った

「いやああああああああああああああああああ！！！」

勘弁な——————————————————！！！！
駄

「のああああああああああああああああああああああ
ああああああ！！！！」

そんな集団の中から大声とともに猛ダッシュで飛び出す一人の変態

それに続くは男子生徒の視線をコレでもかというくらいに浴びる少女

京助がのたりくたりやる気なさそうに二人の後を追いかける

「いやあ：ヨシコちゃんの格好見てると男の子はみんな元気になりますって」

南が笑いながら言った

「なあ？ 中島」

そして中島にふる

「別に」

中島がさらつと答えた

「悠助も吉祥の格好好き？」

3馬鹿と京助の会話を聞いていた慧喜が悠助に聞く

「ヨシコお姉さんも好きだけど慧喜はもっと好き」

悠助が笑顔を慧喜えきに向ける

「麻衣も悠助好きだよ」

「うわっ；」

後ろから麻衣にいきなり抱きつかれた悠助が前のめりになる

「あっ！！
悠助から離れろ！！」

前のめりになった悠助を抱きとめてえんぎ慧喜が麻衣に怒鳴る

「ふーんだ！」

えき
そんな慧喜に麻衣が舌を出した

「ツ」

慧喜えきの後ろに見えるのが孫悟空（ドラゴンボール）なら麻衣の後ろに見えるのはベジータ（同じく）

共に多分スーパーサイヤ人4であろう女の恋のバトルオーラが爆発

している

「離れろったら離れろ！！ 悠助は俺のだっ！！」

「麻衣だって悠助好きだもん！ 嫌っ！！」

「俺のほうが好きだッ！！」

「麻衣だもん！」

マシンガンのごとく ズガガガガガガガッ と言え返す返して言うが繰り返される慧喜えきと麻衣をオロオロしながら見る悠助

「慧喜えきも麻衣ちゃんもやめてよう；」

何とかとめようと試みる悠助の肩を京助が叩いた

「：ほっとけ； その内治まる：と：思う；」

そして悠助の手を引いて京助が慧喜えきと麻衣から遠ざける

「俺のほうが悠助と一緒にいるんだっ！！」

「だからなんなの！？」

だんだん遠くなるマシンガンの口喧嘩を聞かないようにして京助が3馬鹿と合流する

「もてる男はつらいナア悠」

坂田が悠助の頭をぐりぐり撫でた

「僕のせい：？」

坂田の背中を押されながら歩きだした悠助がうつむいて言う

「ちゃうって； さあ！ 宝さがし宝探し！ な？」

南が悠助に笑顔で言う

「早くいかねえとあの二人見失うぞ」

先頭を歩いていった中島がすばやく行ったり来たりを繰り返す阿修羅あしゅらを指差して言う

「アノ体形からして時間的に一キロ行くのは絶対無理だとして：」
ブツブツ言いながら阿修羅あしゅらがガサガサと草むらを掻き分ける

「だからといって教師というくらいだからすぐに見つかる場所に
やか隠さんだろし」

今度は木の枝に飛び乗って下を見下ろす

「おゝい見つけたかゝ」

微妙に斜めになった林の中を京助と阿修羅、それに中島が続いて駆け上る

「いや…面目な…;」

阿修羅が苦笑いで言いながら走る

「ハニワ探してる場合じゃなかったな;」

中島が阿修羅を追い越して先を走る

「いや！ 場合だったんよ！ オライには!!」

グツと握り拳を作って阿修羅が頷く

「こんのヘンタイ;」

そんな阿修羅の後頭部を京助がどつく

「何すん!! 竜のボン;」

後頭部を押さえて阿修羅が言う

「さっさと探さねえともっと迷子になるんじゃない?;」

微妙にドツキ漫才と化してきていた京助と阿修羅のやり取りに中島が突っ込んだ

「戻ってもわかるように南と坂田残してきたからまあヨシとして;」

「んじゃオライは上から行くさね」

京助がもしも戻ってきた時の為に残してきた南と坂田の名前を口にする

すると阿修羅が地面を蹴って飛び上がった

「竜のボンとでっかいのは下頼むわ!!」

そして枝に着地するとバサバサと葉を落としながら枝から枝へと飛び移り林の奥へと入っていく

「: やっぱ中国雑技団だよなあ;」

中島が落ち行く葉を見ながら呟いた

「: まあヨシコだってそれなりに破壊力ある蹴りとかあるわけだから熊に出会っても平気だと思いますが;」

京助がことあるごとに阿修羅に向けて繰り返されていた結構強力そうなヨシコの蹴りを思い出して言う

「: あんな蹴り持ってるっても: 女だろうが一応」

中島が言う

「…え…？」

ヨシコが足を下げて目を開けそして顔を上げた

「…あなた…確か京助の…」

ヨシコの目線の先には腕で顔を防御しつつヘッピリ腰の中島がいた

「俺を殺す気か；」

ハア…と溜息をついて中島が腕を下ろした

「なんで…」

ヨシコが中島を見上げる

「悪かったな阿修羅^{あしゅら}じゃなくて。探しにきたんだよ方向音痴」

汗でくっついていた前髪をかき上げて中島がヨシコを見下ろす

「私を…？」

ヨシコが自分を指差して聞く

「他に誰を」

中島が言う

「…頼んでないわ」

ヨシコが言うとか中島がむっとした顔をした

「あゝハイハイそうですね！！ 頼まれてねえですよ！ お前には
な」

中島が怒ったように言う

「でも悠とか阿修羅^{あしゅら}には頼まれたんだよ」

腰に手を当てる中島がヨシコを見た

「だから言っただろうが。阿修羅^{あしゅら}じゃなくて悪かったなってよ…つ
いてこいよ」

中島がフイッと背中を向けた

「…嫌なら俺を見失わない程度に離れて歩けばいいだろ」
背中を向けたまま中島がヨシコに言う

「…わかってるわよッ！！ …そんなこと言われなくなつて…」

「なら早く来い」

立ち上がったヨシコに中島が言った

「お礼なんて言わないんだから…そう！ 絶対言わないわ！！ だ

って私は頼んでないもの!!」

「ヘイヘイご自由に」

声を張り上げたヨシコに対し中島が手をヒラヒラさせて言う

「…言わないわ…」

ヨシコが今度は小声で言った

パキッという小枝が折れる音が歩くたびに足元から聞こえる

「…何よ」

チラッと振り返った中島をヨシコが睨む

「別に…ちゃんとついてきてるか見ただけ」

歩きながら中島が言う

「ついて来てるわよ!!」

「今見たからわかってるっての」

ヨシコが怒鳴ると中島が前を向いて言った

「…ムカつくわ…」

ヨシコが呟く

「ご勝手に」

中島がさらっと返す

「…大ッ嫌いッ!!」

「ヘイヘイそりゃドウモ」

中島が目の前にあった枝を手でどけると見覚えある景色が広がった

「中島!! おっかえり!! ヨシコちゃん大丈夫だった!？」

中島の姿を見つけるなり南がすっ飛んできて二人を交互に見て言う

「京助と阿修羅は？」

中島が南に聞く

「まだ…まあそのうち戻ってくるって」

南が笑った

「ヨシコお姉さん!!」

悠助が慧喜と手をつないでやってきた

「大丈夫? 怖かったでしょ?」

心配そうに見上げる悠助をヨシコが黙って見る

「：うん：怖かったけど：大丈夫だったわ：」

声は悠助に向けたものだったと思われるがヨシコの視線は中島の背中に向けられていた

「本当！？　よかったあ：：」

むっとしたままの慧喜えきをよそに悠助が笑う

「コレで京助と阿修羅あしゅらが迷子になったって言ったら笑い事だよナア」
坂田が笑う

「一緒にしなさんなって」の

ザザツという音がして阿修羅あしゅらが木の枝から飛び降りてきた

「つとに：よかったナア　ヨシコ」

首をコキコキ鳴らしながら阿修羅あしゅらがヨシコに近づいた

「つだ！！！；　戻ってるなら戻ってるってなんか連絡よこせ！！」

阿修羅あしゅらとは逆方向から文句と共に京助が現れた

「連絡って：もなあ？」

坂田が南を見た

「携帯は坂田しかもってない上に圏外だし？」

南が中島を見る

「以心伝心しかなかったんじゃないですかね？」

中島が京助を見た

「：はあ；」

大きな溜息をついて京助がその場に座りそして何かを思い出したように顔を上げて再び立ち上がった

「どうしたの京助？」

悠助が京助に聞く

「そうそう：途中で：」

「あああああああああああああああああああああああああああああ
あ！！！！！！！」

阿修羅あしゅらがジェット機にも負けないであろう大声を上げた

「∴やかましい；」

あしゆら
揃って耳を塞いだ一同が阿修羅を見る

「りゅ……竜のボン……それ……ソレ……
「……！！」

「やかましいッ！！；」

ワナワナと体を震わせて京助に阿修羅が近づく

「あ、見つけたんだ？」

南が塞いでいた手を離して京助の手の中のものを見た

「ハニワ」

京助がペイッと阿修羅に向けてハニワを投げた

「うあああああああ！！
お帰りいう！！」

しかとハニワを抱きしめて阿修羅が歓喜の声を上げる

「あつくくん……私の無事よりソレのが大事？」

ヨシコが腕を組んで阿修羅に聞いた あしゅら

「おうよ!!」

ガスツ

カラスが数回鳴いた

「自業自得だな」

地面にまるで海水浴に来て砂に埋められちゃったの V V 的食い込み方あしゆらをしている阿修羅を坂田が見下ろした

「∴女心は難しいからねえ」

南が側にあつた枝で阿修羅を突付きながら言う

「やっぱ女じゃないかもしれねえ……」

中島がヨシコを見て言う

「何よ！！」

そんな中島に気づいたヨシコが怒鳴った

「何でも」

ふいっと顔をそらした中島にヨシコがむっとした顔をする

「オーイ！ 閉会式やるぞーって」

浜本が小走りでやってきた

「…オイ」

中島が振り返らずに呼びかける

「痛いから；」

そんな中島の後ろにいたのは鋭く中島を睨むヨシコ

「ヨシコちゃん； せっかく可愛い顔してんのになんで睨んでんのさ；」

現地解散ということでそれぞれ帰路についた生徒達の群衆の中一際目立つ衣装のヨシコとそんなヨシコの睨み視線を背中に受ける中島の少し後ろを歩いていた南が言う

「ムカツクからよ！！ そうよ！ きまってるじゃない！？」

ガーーーーーと食いつくようにヨシコが南に言った

「…こっちはコッチで…」

坂田がチラッと視線を後ろに向ける

「ああ…お帰り…お帰り…！！」

涙目になりながらハニワに向かい呼びかけ頬擦りを繰り返す阿修羅あしゅらを呆れ顔で見て坂田がヘツと笑う

「結局田植えという田植えはやってなんだな俺等；」

京助が鞆というには薄すぎる袋を背中でブラブラさせながら言った
「そうだねえ…ただ昼飯食って踊る大走査線やっただけっばいねえ」

南が笑った

「あつくくんお兄さん」

悠助が阿修羅あしゅらの服の裾をクイクイ引っ張った

「何だ？ 竜のボン？」

阿修羅あしゅらがハニワに頬擦りしたまま悠助を見下ろした

「ハニワに何か書いてあるよ？」

悠助が言う

「ああ、ソレはホラ、名前か何か書けって言われたじゃん？」
京助が足を止めて振り返った

「そーい、やゝで？　なんて書いたんだ？」

中島が足を止めた

「たっ！！！」

中島にヨシコがぶつかる

「いきなり止まらないでよ！！！」

そしてヨシコが案の定怒鳴る

「避けていきやいいだろが！イチイチ怒鳴んなってーの」

ヨシコの横をすり抜けて中島が阿修羅あしゅらの側に歩いていく

「っ……ムカつくわ……！」

ダンッ！！　と地面を踏んでヨシコが言った

「……お前……なんでこんな言葉思い浮かぶかナア；」

南が呆れた笑いを京助に向けながら裏手で突っ込む

「やっぱお前【類友】の類体質なんだな」

坂田が京助の肩を叩いた

「竜のボン……なんつー……！」

阿修羅あしゅらが深い溜息をついた

「いいじゃんか！；　何となくだよ何となくッ……！」

京助が言う

「なんて書いてあったんだ？」

少し遅れてきた中島が背丈を利用して南の上からハニワを見た

「……カンブリ」

プッと噴出しながら慧喜えきが言う

「はあ？；」

中島がすつとんきような声を上げた

「カンブリ」

京助がリピートして言う

「……カンブリ……」

「何でまたカンブリ…」

「命名カンブリ？」

3馬鹿が京助を見る

「…油性で書いたんだな」

坂田が聞くと京助がエセっぽい爽やか笑顔で親指を立てた

【第七回・禄】祭男爵奇談（前書き）

待ちに待った祭りの季節

正月中学男子による毎年恒例のヨサコイソーラン踊りの練習にも熱が入っていた

【第七回・祿】祭男爵奇談

ダン！！　　っという足踏みの音が薄暗くなった外へと明かりの漏れている体育館から揃って聞こえる

「腕はまっすぐ！　そう！！　　そうそう！！」

気合の入った女性の声と揃って聞こえ続ける足音とたまに聞こえてくるカチャカチャという鳴り物の音

「やってるやってる！！」

薄い上着を羽織った悠助が嬉しそうに漏れている明かりの元へと駆け出す

「待って悠助！」

慧喜えきが悠助の後を追った

「うっわ～…」

悠助が目をきらきらさせて体育館の中を見た

「はい！！　　足上げて！！　　そこは腰を落とす！！」

手拍子の中揃う足音と鳴り物の音

「…何コレ…義兄様どこ？」

慧喜えきが悠助を後ろから抱いて聞く

「よさこいっていつてね～…あ！　京助だ！！」

悠助が体育館の壁に寄りかかって3馬鹿と話している京助を見つけた

「慧喜えきも悠助もそんなに急がなくても…」

緊那羅きんならがコマとイヌと共にやってきて言う

「今年も見ものなんだやな」

コマがひょいっと体育館の中を見て言った

「見てると踊りたくなるんだやな」

イヌもコマの隣に落ち着く

「踊り？」

緊那羅きんならが体育館の中を見た

「ただ足踏みして飛んで跳ねてしてるだけじゃない」

慧喜^{えき}が言う

「コレに曲がつくんだやな！ ソーランソーランなんだやな！！」
イヌが尻尾を振って身を乗り出した

「その曲聞くと自然と体が踊りだすんだやな！！ 最高なんだやな！！」

コマも前足を上げて踊りらしい動きをした

「あ、気づかれた」

悠助が呟き緊那羅^{きんなら}が体育館の中を見ると坂田がヒラヒラ手を振って南が指差して中島が京助の肩を叩いていた

「次！！ グループ3！！ 駆け足！！」

パンツという手を叩く音が一回体育館に響くと京助たちが立ち上がった

「京助達の番みたいだっちゃね」

緊那羅^{きんなら}が言う

「格好いいんだよう！ 去年もすごかったんだ！！ アンコールとかね！ かってね！」

悠助が興奮気味に言うとなんな悠助を慧喜^{えき}が嬉しそうに抱きしめる

「悠助可愛い」

慧喜^{えき}が悠助に頬擦りして言う

「僕も中学校行ったら踊れるかな？」

規律よく並んだグループ3の面々を見て悠助が言った

「あれ？ ラムちゃん…？」

ガサガサという音をBGMにして名前を呼ばれた緊那羅^{きんなら}が振り返った

「こんばんは」

につこり笑った本間の手には大きく膨れたビニール袋

「ペチャパイ？」

「やかましいッ！！」

慧喜^{えき}の言葉に本間の隣にいた阿部が怒鳴る

「練習見に来たの！」

悠助が笑顔で言った

「じゃあいっくと香奈は2と4にね？ 私達は3と1行ってくる」
髪を緩く後ろに結んだ女子が靴を脱いで体育館の中に入るとそれに
続いて数人の女子が体育館の中に入っていった

「アイスだー！！」

悠助が阿部の持ったいた袋の中をのぞいて言った

「差し入れなの」

本間が緊那羅きんならの横を通して靴を脱ぎ体育館の中に入った

「…残念だったね阿部」

そして振り向きニーっと笑う

「…別に」

阿部が少し膨れッ面をして本間にく

「じゃあ…10分休憩！！」

体育館に一回手を叩く音が響いた

「何しに来たんだよ；」

カップに入ったアイスを片手に3馬鹿と京助が少し肌寒い体育館の
入り口にやってきた

「練習見に来たの！ いいなあ…アイス」

悠助が京助の手の中にある【爽】ブルーベリィを見て言う

「…半分な；」

悠助のたぶん本人は無意識なんだろうけど全身から出ている【僕も
アイス食べたいナア】オーラに京助がアイスを手渡した

「踊りの練習してるんだっちゃ？」

緊那羅きんならがそれぞれ何人かのグループに分かれて床に腰を下ろしてい
る生徒を見て聞く

「そー！ もう来週だしねお祭り！ 毎年恒例なんだよ正月中学男
子全員参加のヨサコイソーラン踊り」

南が木のへらを咥えて言う

「それ何？」

慧喜が3馬鹿と京助のポケットに入っている見たことない物体をしげしげと見る

「鳴子なるこなんだやな」

イヌが悠助からアイスをもらいながら答えた

「あつ； お前ッ！！；」

京助が大人気なくイヌに怒鳴る

「鳴子：？」

緊那羅きんならが京助のポケットの中から顔を出している鳴子を見る

「こうやって：ホッ！」

中島が両手に鳴子を持ってポーズを決めると鳴子がカチャンと鳴った

「ソレもって踊るの？」

慧喜えきがいつの間に受け取ったのか悠助の（もとい京助の）アイスを悠助にあーんしてながら聞く

「コレがなくちゃヨサコイじゃないって」

南が言う

「でも本場稚内南中もってねえんだよな」

坂田が軽くゲップをした

「本場？」

緊那羅きんならが聞く

「そ！ 元祖？ なんだかスゲェ荒れてた中学を救ったのがコノヨサコイソーランなんだとか：聞いてない？」

中島が同意を求めて見る

「金八センセー！！ 俺にアイス恵んで；」

ほぼ完食されつつある慧喜の手の中のアイスを見て京助が中島のアイスを狙う

「私：どんな曲なのか聴いてみたいっちゃ」

緊那羅きんならが目をきらきらさせて言った

「何？ ラムちゃん音楽好きなの？」

南が食べ終わったアイスに蓋をして緊那羅きんならに聞く

「ソーランソーラン！ ハイ！ ハイ！！ っての」

京助が軽く歌った

「…そー…?」

緊那羅きんならが首をかしげる

「…最後の方で曲にあわせて踊ると思うから聞いていけばいいじゃない」

坂田が木のへらを二つに割って言う

「あつと！ ラムちゃん!」

「のあ!!!」

京助と中島の背後から飛び掛ってきたのは浜本

「あ…こんばんはだっちゃ」

つぶれた中島と京助の上の浜本に緊那羅きんならが挨拶する

「何? 踊り見物? 俺の勇姿も見てってね? そしてホレてくれたらなお最高!」

浜本が親指を立てて言った

「重いわ!」

京助が浜本に向かって怒鳴る

「…楽しそうだね」

本間が買い物袋の中に食べ終わったアイスの容器を捨てながら阿部に言う

「…だから何よ」

むすつとして阿部がいっぱいになった袋の口を縛る

「せっかく応援ボランティアになったのにね」

本間も袋の口を縛った

「…いいのッ!」

阿部が力いっぱい二回目の結び目を作った

「ハイ! 休憩終わり!!! 八時まで通してやるからね!」

その声で男子が腰を上げて体育館の中央に集まりだす

「ハイ! ってきますか」

中島と坂田も体育館中央へと向かい歩き出した

「八時ってことは後15分かゝ：その後反省会あるとして帰るの九時くらいか：先帰ってていいぞ？」

京助が緊那羅きんならに言う

「私は待ってるっちゃ」

緊那羅きんならが笑って言う

「僕もゝ!!」

「じゃ俺も」

悠助が元気よく言う^{えき}と慧喜が笑って同意する

「へいへいゝゝ」

京助は呆れ顔で悠助の頭を撫でると南と共に小走りで体育館の中央へと向かった

体育館の前方に取り付けられているスピーカーから聞こえ始めたのは笛の音

そしてソレがだんだん大きくなるとあわせて足踏みの音がしてくる

「きたきたきたんだやなゝ！」

コマが身震いをした

「これこれ！ これなんだやなッ！」

イヌも同じく身震いする

笛の音に太鼓の音や三味線の音が混じり曲となって聞こえ始めた頃
男子生徒の顔つきが変わった

「ソイヤ!!」

一人の男子の掛け声と共に一斉に鳴子を前に突き出すとソレと共に
ダン！という足踏みの音が揃って体育館中に響き渡る

たまに入る合いの手の掛け声とスピーカーから流れてくるよく響く
男性の歌声に合わせて鳴子が鳴り足踏みの音が響く

激しく動き切れのあるその踊りは不思議な魅力がある

「…義兄様格好いい…」

慧喜えきがボソツと言った

「でしよゝ？」

悠助も興奮しているらしく体が【ソーランソーラン!!】という掛け声にあわせて動き始めている

「我慢の限界なんだやな!」

コマがそういつてバック宙をしゼンへと姿を変えた

「ゴもなんだやな!!」

それに続いてイヌもゴへと姿を変える

カチャカチャという鳴子の音が軽快な手拍子にも聞こえさらに場の雰囲気盛り上げているようにも感じられる

腰を落とし地引網を引っ張り上げる様子を表した踊りから魚を網からはずし陸へと揚げる踊りに変わりそれが今度は日本海の荒波を表現した踊りへと変わる

「…すごいっちゃ…」

緊那羅きんならが呆然とした顔で呟いた

「コレだからいいんだやな!」

曲にあわせてゴが踊る

「最高なんだやな!!」

ゼンも踊る

「僕の次の【どっこいしょ】ってところの踊りがすきなんだ!!」

悠助が慧喜えきの腕の中体を動かす

「ソイヤ!!」

今度は男子生徒全員の掛け声が響き揃って腰を落とし飛び上がり腕を前で組んで真横に鳴子を突き出す

「これこれ!!」

それを見た悠助が嬉しそうに言った

「阿部」

本間が阿部の頬をつついた

「…顔赤い上に視線の先変わってないよ」

ハッとして阿部が本間を見る

「な…」

「しかし不思議だよね…いつもはお馬鹿な男子がこうも格好よく

見えるもんなんだね」

阿部より少し背の低い女子生徒が呟いた

「本当不思議だよねえ……」

ステージに腰掛けていた女子も言った

「これぞヨサコイマジックなんじゃない？」

本間が言う

「ね？ 阿部？」

そして阿部をみてにーっと笑った

「……うん……」

まさに【恋】という視線を一点に向けつつ阿部がうなずいた

チキチキチキという自転車のチェーンの音と足音しか聞こえない帰り道

体育館を出た時計は午後八時半を少し過ぎていた

「思えば俺チャリできてたんだからやっぱ先帰らせればよかったな；

」

京助が振り返り慧喜えきの背中で寝息を立てている悠助を見た

「興奮して疲れたんだっちゃね；……こっちも；」

緊那羅きんならが悠助を見てそしてそれから自分の腕の中で寝こけているコマとイヌを見た

「義兄様って毎日あんなことしてたんだ」

慧喜えきが悠助を背負い直して聞く

「あ？ ……ああゝまあ……うん毎日っていうかここ一ヶ月くらい前位から？」

京助が言う

「だからたまに帰り遅かったんだっちゃね」
緊那羅きんならが言う

「でも最近は毎日だね？ ヒマ子義姉様寂しがってたよ？」
慧喜えきが言う

「……さいですか；」

京助がへつと笑って鞆を肩にかけ直すとカチャリという音がした

「…鳴子」

緊那羅きんならが呟いた

「…持ってみるか？」

京助が自転車を止めて鞆から鳴子を取り出した

「そいつ等かせよ」

そして寝こけているコマとイヌを緊那羅きんならから受け取った

「…なんだか…これ…変わってるっちゃね」

カチャカチャと鳴子を鳴らして緊那羅きんならが笑う

「コレもって京助…とか踊ってたんだっちゃね」

緊那羅きんならが鳴子を京助に返そうと前に出した

「鞆に入れてお前持ってて。俺こいつ等チャリに積んでいくから」

そう言うとき京助はコマとイヌを自転車の籠に押し込んでストッパーを上げた

「義兄様も緊那羅きんならも遅い…!!」

先を歩いていた慧喜えきが京助と緊那羅きんならを呼んだ

「へいへいヨ」

そしてそのまま京助が歩き出すと緊那羅きんならも京助の後を追いかける少しジメツとした空気の暗闇の中にチラホラ見える家の明かりとか
なりの間隔を置いて立っている数少ない街灯

時折聞こえる車の音

「…夜って静かだったんだっちゃね」

「はあ?」

緊那羅きんならの言葉に京助が疑問系の声を出した

「あ…いや; あ…私京助のところに住む様になってから…楽しくてだから…夜がこんなに静かだったなんて…って思ったただけだ
ちや;」

緊那羅きんならが慌てて言う

「なんだソレ; 俺ン家が年中騒がしいみたいじゃん;」

京助が言った

「俺も楽しいよ」

慧喜えきが会話に入ってきた

「だからもう戻れない」

慧喜えきが言う

「戻りたくない」

また慧喜が言う

「：好きなだけいりゃいいじゃん」

京助が自転車を押して慧喜えきの横を通った

「母さんも言ってただろ？ 大家族が好きだってさ」

足を止めて京助が振り返る

「戻りたくないならいれば？」

そして呆れたように笑う

「：いいの？」

慧喜えきが京助を見た

「お前悠から離れねえだろが；」

溜息をついた京助が笑う

「：私も：？」

緊那羅きんらがおそろおそろ京助に聞いた

「今更；」

へツと笑った京助を見て緊那羅きんらが目を細めて嬉しそうに笑った

「さあって：明日も学校だし：帰るぞ」

再び自転車を押し出した京助の後に慧喜えきと緊那羅きんらも続く

「義兄様ってどんなに早く寝ても絶対寝坊するよね」

慧喜えきが緊那羅きんらを見て言う

「うん」

緊那羅きんらが笑いながら先を行く京助の背中を見た

「でも寝坊してくれないと私の朝の調子が狂うつちゃ」

「いえてる」

慧喜えきと緊那羅きんらが揃って笑った

窓が少しだけ開いた室内は物抜けのカラでTシャツと短パンが敷きっぱなしの布団の上に脱ぎ散らかされていた

「…京助？」

顔だけを室内に入れた緊那羅きんならが部屋をぐるりと見渡して部屋の主の名前を呼んだ

「…まだ七時前なのに…トイレでもいったんだっちゃ？」

緊那羅きんならは呟くと戸を閉めた

「おはようございますだっちゃ」

洗面所に入ろうとしていた母ハルミに緊那羅きんならが声をかけた

「あら おはよう」

今から顔を洗うのか母ハルミの手にはタオルがあり前髪がターバンで上げられていた

「そうそう緊ちゃんにお願いがあるの」

母ハルミが洗濯機の上にタオルを置いて歯ブラシを手にとった

「何だっちゃ？」

緊那羅きんならが聞く

「後で京助にお弁当届けてくれないかしら」

クリアクリーンを歯ブラシにつけながら母ハルミが言う

「届ける…？」

緊那羅きんならが首をかしげた

「そうなの。今日から朝の練習もあるらしくてもう出ちゃったのよ…お弁当忘れて」

母ハルミが苦笑いで言った

「朝も…練習あるんだっちゃ？」

緊那羅きんならが聞く

「もう来週だからねお祭り…ココの境内でも踊ってくれば盛り上がるんだろぅけど狭いでしょ？ 本殿の前の境内と港と…8箇所くらいで踊るらしいんだけど皆楽しみにしてるから先生も気合はいいてるんじゃないかしら」

そう言って母ハルミが歯ブラシを口に入れた

「何だか朝の義兄様と緊那羅きんならのあのやり取りがないと変」

悠助を見送った慧喜えきが玄関先で座ったまま緊那羅きんならを見て言った

「『京助く！ 弁当忘れてるっちゃく！！』 『サンキュー！！』 っ
ての…」

慧喜えきが得意の声変えをわざわざ披露して緊那羅きんならと京助のやりとりを
真似た

「そんなわざわざ声変えてやらなくても；」

玄関を掃いていた緊那羅きんならが苦笑いをして言う

「だっていつも聞いてたのに無いと本当変」

慧喜えきが伸びをして言った

「祭りが終わればまたはじまるんだやな」

トテトテと犬が歩いてきて緊那羅きんならの横を通った

「開けて欲しいんだやな」

コマも歩いてきて玄関に下りる

「散歩だっちゃ？」

緊那羅きんならが戸を開けてやると二人（二匹？）揃って外へと出て行った

「…調子狂った」

慧喜えきがだら～と寝そべった

「慧喜…； 下着見えてるっちゃ；」

緊那羅きんならが溜息混じりに言う

「もう少ししたら弁当届けにいくっちゃけど…」

「俺行かない…」

緊那羅きんならの言葉を最後まで聞かずに慧喜えきが答えた

昨日夜に通った道を一人歩く緊那羅きんならの手には袋に入った京助の弁当
のほかにおにぎりが二つ入っていた

「朝ごはん毎度だけど食べていかなかったんだけど…朝から踊って
おなか減ってると思うから」

そういつて母ハルミが即座に作ったおにぎりが袋の中でころころ転

がる

「さすがハルミママさん…やっぱりわかってるんだっちゃね…京助のこと」

アルミ箔に包まれたおにぎりを見て緊那羅きんならが微笑んだ

「…風が気持ちいいっちゃ…」

昨日は暗くて見えなかった農道の脇に広がる田植えを終えたばかりの田んぼの中から聞こえるカエルの鳴き声

一本向こうは国道でその向こうに広がるは青から深緑へとグラデーションを作る日本海

その日本海からの風を緊那羅きんならは思い切り吸い込んだ

見上げれば霞の雲とカモメとカラスが青い空を泳いでいる

「…私もここにいたいっちゃ」

足を止め目を伏せた緊那羅きんならが呟いた

「できればずっと…」

プァン！！

「わッ！；」

いきなりしたクラクションの音に緊那羅きんならが驚いて飛びのくと白い軽トラックが緊那羅きんならの横を通り過ぎていった

「…つくりしたっちゃ…；」

ワインカーを左に上げて国道へと通じる道へと入っていった軽トラックの後ろを見て緊那羅きんならがドキドキと高鳴っている胸をなでおろした

「…もうココにはいないみたい…だっちゃね」

木に飛び乗ってそこから体育館の中を覗き込んだ緊那羅きんならが呟いた

「…だとすると…教室…だっちゃ？」

緊那羅きんならがザッと木から下りて赤レンガ造りの校舎を見上げた

今は生徒が減って使われていない教室が多いのだが正月中学校の校舎はやたらでかくそして古い

「…確か…海に面した方だったはず…」

うろ覚えの記憶を引きずり出しながら緊那羅きんならは歩きだした

所々ひび割れたレンガの校舎に沿って歩くと緊那羅きんならは見覚えある景色に出くわした

「ここ…は…」

懐かしい記憶とスースーした記憶が蘇り緊那羅きんならは無意識に尻を押さえた

「…この階段…登ったら京助の教室わかるっちゃかね？」

片足を階段の一段目に乗せて躊躇いながらもう一段足を進めた緊那羅きんが上を見上げる

キンコンカンコン…

ザザザ…という雑音交じりのチャイムが鳴り響くと校舎のほうからガタガタという音やガララという音、そして生徒の声や足音が聞こえてきて緊那羅きんならが後ろを振り返ると廊下には教室から出てきた生徒達が見えた

「京助…は…」

2、3段階段を上がって校舎の廊下に出ている生徒の中に緊那羅きんならは京助を探す

「あれって…ラムちゃんだよね」

理科の教科書とペンケースを持った本間が廊下の窓から外を見て呟いた

「え？」

同じく理科の教科書を持った阿部が本間の声に反応して返事をした

「ほら、あそこ…非常階段のところ」

本間が指差すと阿部が窓に近づいた

「あ…うん…ラムちゃん…だよな？」

窓の鍵を開けて窓を開けた阿部が緊那羅きんならに向けて軽く手を振った

「あ…阿部さん？」

それに気づいた緊那羅きんならが手を振り返す

「どうしたのー？」

緊那羅きんならだと確認した阿部が今度は大声で聞く

「弁当届けにきたんだっちゃー！」

緊那羅きんならが手に持った袋を指差して言った

「…京助にー？」

何か一瞬止まった後阿部が再び緊那羅きんならに聞き返した

「そうだったちゃー!!」

そう言って笑った緊那羅きんならに阿部が複雑そうな顔をして教室の方を見た

「…待っててー!!」

そして緊那羅きんならに一言そう言うのと窓から顔を引っ込めた

「京助、ラムちゃん来てるよ？」

教室の中で案の定空腹でヘタレていた京助に阿部が声をかけた

「あゝ…？ ……緊那羅？」

やる気なさそうに顔を上げた京助が頭を掻きながらしばらく黙り込む

「…緊那羅きんならが来てるってことは弁当じゃないのか？」

坂田が机の中から理科の教科書をペシッと机の上に出して言う

「……!! どこに!？」

坂田のその一言で覚醒したのか京助がいきなり立ち上がった

「非常階段に…」

阿部が言うのと椅子を勢いよく倒して京助が猛ダッシュで教室から出て行く

「…空腹は盲目…っ」と

坂田も立ち上がると教科書を丸めて持ちのらりくらりと京助の後を追って教室を出た

しばらくして非常階段の緊那羅きんならの元に京助がたどり着いて何やら話しているのを阿部が窓からじっと見ていた

「…怪しいよアンタ」

本間が阿部の尻を叩いて言う

「次!! 理科ッ！」

阿部が無駄に大声で言う

「そうだけど？ だから教科書持ってきてるんじゃない」

それに本間が淡々と返す

「行くよ！ 理科室ッ！！」

眉を吊り上げてまたも無駄に大きな声で言った阿部が大股で歩き出した

「：ハイハイ」

本間が溜息をついて阿部の後ろを追いかけた

「サンキュー！！ 待ってましたッ！」

緊那羅きんならから奪い取るように袋を取りながら京助が言う

「本当に待ってたみたいだっちゃね；」

緊那羅きんならが呆れたて笑った

「おうよ！ おっ！ おにぎりもあるじゃん！！ さっすが！！」

京助が常階段に腰掛けてアルミ箔に包まれたおにぎりをひとつ手に取った

「ココで食べるんだっちゃ？」

その横に腰を下ろした緊那羅きんならがイソイソとアルミ箔をはがしている

京助に聞いた

「ったりまえ！！ いただきまーす！」

福神漬けを混ぜ込んだおにぎりに京助がかじりついた

「生き返るゝ」

口をモゴモゴさせながら京助が心底幸せそうな顔をしたのを見て緊那羅きんならが笑う

「：実にしょっぱい光景だ」

丸めた教科書で肩をトントン叩きながら京助の後を追ってきた坂田が言う

「坂田」

緊那羅きんならが坂田を見て言う

「お前等遠巻きに見ても近くから見ても傍から見ると立派なカップルに見えるぞ」

「ゲッハッ!!;」

坂田の言葉に京助が思い切り咽た

「汚ッ!;」

京助が発射した米粒弾をよけて緊那羅きんならが言う

「ハッハ」

苦しそうに咽ている京助を見て坂田が笑った

「おま:っ;」

緊那羅きんならに背中を叩かれながら京助が口をぬぐう

「うんうんセイシュンIng現在進行形」

腕を組んだ坂田がウンウンと頷いた

「何一人で納得してんだよッ!;」

「京助ご飯粒ついてるっちゃ; みつともない;」

怒鳴った京助の頬についていたご飯粒を緊那羅きんならがヒョイと摘んだ

「:お前な; 馬鹿にされてる片っ端からソレをするか;」

京助の頬についていたご飯粒を持ったままきよんとしている緊那羅きん
羅ならに京助が溜息をついた

「今日も帰り遅いんだっちゃ?」

アルミ箔を丸めて袋に入れている京助に緊那羅きんならが聞く

「本番近いからさ:遅いと思うぞ?」

坂田が言った

「晩御飯は? 何か持っていくっちゃ?」

「今日も来る気か?;」

立ち上がった緊那羅きんならに京助が聞く

「お前ら冗談抜きで夫婦の会話」

坂田がプツと噴出した

「やかましいッ!;!;」

京助が怒鳴る

「来るなっていうなら:いかないっちゃけど:アノ曲もう一回聞きたいんだっちゃ」

緊那羅きんならがボソツと言った

「アノ曲って：ソーラン節か？」

坂田が聞く

「そうだっちゃ。もう一回：というかなんだか…」

緊那羅きんならが口ごもる

「何だか？」

京助きんならが緊那羅を見た

「：吹いてみたい：かなって」

「は？」

頬をほんのり赤くしながら小声で言った緊那羅きんならに京助と坂田が同時に同じトーン同じテンポで声を上げた

「：ソーラン節の：笛か？」

しばらく間をおいて京助が聞くと緊那羅きんならが小さく頷いた

「何でまた：？」

坂田きんならが緊那羅を見る

「何となく：だっちゃけど：でも：」

赤い顔のまま目をそらして緊那羅きんならがボソボソと言う

「：まあ：いいんじゃない？ 見に来るくらい」

「本当だっちゃ！？」

京助が言うと緊那羅きんならが顔を上げてついでに声も上げるとつられたのかなんなのか校舎もチャイムを鳴らす

「うお！； 俺まだ教科書教室じゃん；」

京助が慌てて駆け出した

「6時から体育館でやってるからさ：なんならハルミさんも連れてきてOKだぞ！」

坂田が親指を立てて言う

「聞いてみるっちゃ；」

緊那羅きんならが苦笑いで言った

開けっ放しの体育館の非常口から漏れる明かりで緊那羅きんならの影が地面に映されている

「腰低く！」

相も変わらず気合の入った女性の声が体育館の中に響き鳴子の音と揃った足踏みの音が間隔をあけて聞こえてくる

「今日もきてるね」

本間が阿部に言う

「…だから何よ」

ステージの上で練習風景を見ていた阿部がむすっとした顔で返事をした

「香奈〜！ いっく〜！！」

小走りで女子生徒が近づいてきてステージの上ってきた

「なしたの？ 香奈美」

胸に【黒瀬】のネームをつけ香奈美【かなみ】と呼ばれた女子生徒が阿部の隣に腰を下ろした

「先輩をつける先輩を」

そう言って香奈美が体育館入り口のほうを見て手を振った

「宮津ちゃんとみかも来たの？」

男子が踊っている中央を避け端を通って女子生徒二人がステージに向かって歩いてくる

「…あれ…？ …みかちよっと待ってて」

そのうちの一人が緊那羅きんならのいる非常口へと駆け出した

「やっぱり！」

「へっ？？」

いきなり声をかけられた緊那羅きんならがびくつとした

「金名さん！！」

緊那羅きんならが目を大きくしたまま声の主を見る

「…み…やつさん？」

肩につく軽くウェーブのかかった髪が非常口から入ってくる風にふわっと靡かせた女子生徒が笑顔でうなずいた

「なあ…ラムちゃん連行されてるぞ？？」

南が体育館の後ろから宮津によってステージにつれてこられた緊那きんなら

羅を見つけて京助の肩を叩いた

「：何してんだアイツは；」

京助が鳴子で肩を叩きながら口の端を上げた

「緊那羅きんなら：女子に囲まれてパラダイスっぽいけど：そうは見えないのはどうしてなんだか；」

中島がステージの上に座らされた緊那羅きんならを見て言う

「うん：違和感まったくねえな；」

坂田も中島に同意する

「うわー！！ 金髪！」

緊那羅きんならの髪を香奈美が触って言う

「どこのクラス？ 染めてて怒られないの？ 地毛？」

宮津と共に体育館に入ってきた女子生徒も緊那羅きんならの髪を触りながら聞く

「京助のイトコのラムちゃん」

聞き覚えのある声に緊那羅きんならが身を前に倒して右方向を見ると阿部が手を振った

「阿部さん！」

知ってる顔を見たせいか緊那羅きんならの顔が自然と笑顔になった

「今日も練習みに来てたんだ？」

本間がステージから降りて緊那羅きんならの前に立って聞く

「あ：うん」

緊那羅きんならが答える

「で：どうして宮津が知ってたの？」

香奈美が宮津に聞いた

「ちよつとね：」

宮津がふふつと笑う

「そういえばみかと宮津ちゃんはまだ残ってたんだ？ 6時過ぎてるのに」

阿部が宮津ともう一人【みか】と呼ばれた女子生徒に言った
「あわせるのに残ってたの」

みかが言う

「あわせ：ああ！ そっか！」

阿部が何か思い出したのか声を上げた

「もう日にち無いからね：っじゃーん！！ YOSAKOIソー

ラン笛！」

宮津が赤く塗られた和笛を取り出した

「本殿前では生演奏だしね」

みかが言う

「歌は石塚先生が歌うんだよね」

本間が言うと言津がうなづく

「：どうしたのラムちゃん？」

宮津の持つ和笛をじっと見ていた緊那羅きんならに阿部が声をかけた

「えっ！？ あ：ううん；」

緊那羅きんならが慌てて手を振った

「：吹いてみる？」

宮津がにっこり笑って和笛を緊那羅きんならに差し出した

「え：？」

きよとんとした顔で緊那羅きんならが差し出された和笛を宮津を交互に見る

「あの時の音もう一回聞きたいって思ってたの。あ、コレはフルー

トじゃないけどね」

そう言っ宮津が緊那羅きんならの手に和笛を握らせた

「いいん：だっちゃ？」

緊那羅きんならが躊躇いながら自分の手の中に握らされた和笛を見た

「うん！ 私もう一本持ってるし：ねえ！ そうだ！！ 金名さん

も一緒にどう？」

「へ？」

「宮津！？；」

宮津がパンっと手を叩いて言うと言津きんならは素っ頓狂は声をそしてみ
かが宮津の肩をゆすった

「お前何考えてんのさっ！； 部外者に：；」

「いいじゃない？ 上手なんだよ」

ガクガクと肩をゆするみかに対し宮津が笑顔のまま言う

「だってお囃子責任者私だもん。あとは先生の許可取ればいいんでしょ？」

宮津がみかの肩を両手で叩いて言う

「…宮津っておとなしそうな顔して結構とんでもないこととかやるよね…」

香奈美があぶら取り紙で鼻の頭をふき取りながら「ボソツと言った

「ラムちゃん笛吹けるの？」

阿部が緊那羅きんならを見て聞く

「あ…うん」

緊那羅きんならが返事をして宮津から渡された和笛に口をつけた

緊那羅きんならが息を吹き込んだ一本の筒から生まれた音が体育館の中に響いた

空に鳴くは白いカモメ

歌うは白波日本海

吹くは潮風、磯の風

その風になびくは大漁旗

引き上げられた網に輝くは鯨の鱗

体育館が一瞬のうちに漁場に変わったよう感覚にその場にいた全員がとらわれた

海が近いといえどもココまで聞こえるはずのない波の音

かつてはこうだったのだと教科書でしか見たことのない鯨で栄えたという正月町の風景

大漁祈願で神社に参る大漁旗を掲げた鯨舟の群

大漁に沸く港…

まるで本当にソーラン節の歌詞の中の情景の中にいるような…

緊那羅きんならが和笛を口から放すと体育館中の視線が自分に集まっているのに気がついた

「あ…；」

真っ赤になつた緊那羅きんならが俯く

「…凄い…」

宮津が目をキラキラさせて言った

「凄いよ！ 金名さん！！ やっぱり一緒にやろうよ！」

緊那羅きんならの手を取って宮津が興奮気味に言う

「ラムちゃんって…歌上手いだけじゃなく笛も上手かったんだ…」
阿部があっけにと取られた顔をして呟いた

「あ…でも笛なら迦楼羅かるらのほうが…」

「何？ 鳥類って笛吹けるのか？」

言いかけた緊那羅きんならの言葉が京助によって遮られた

「京助」

阿部がいつの間にかステージに上ってきていた京助と3馬鹿を見て言う

「何やってんだお前は；」

京助が軽く緊那羅きんならの頭を小突いた

「思いつき目立っちゃったね」

南が笑いながら言う

「ご…ごめんだっちゃ；」

緊那羅きんならが京助に小突かれた頭をさすりながら俯き加減で謝る

「この子京助のイトコなんだって？」

香奈美がかなり短いスカートで足を組みながら聞く

「一応」

京助が答える

「いろんな意味で一応」

「そうそういろんな意味で一応」

「何が何でもいろんな意味でい・ち・お・う」

3馬鹿が腕を組みながら付け足した

「：一応にいろいろがつくの？」

が首をかしげる

「そうそうくもしかしたらイトコより深い仲：」

「えッ!？」

南が笑いながら言いかけるとどこからとも無く聞こえた驚きともな
んとも取れるそんな声

「：ばあか」

その声の主を探してきよろきよろしている面々に対し本間が肘で阿
部を突いて呟く

「：；」

阿部が軽く咳をした

「ハイ！ 練習再開するよ！」

パンツという一回手を叩く音が体育館に響いた

「さって：いきますか」

京助が伸びをしてステージから飛び降りる

「あ：京助！」

歩き出した京助を緊那羅きんならが呼び止めた

「：ごめんだっちゃ：」

申し訳なさそうに緊那羅きんならが言う京助はヘツと笑って手を振りまた
歩き出した

「ごめんね金名さん； 私が：」

宮津が苦笑いで緊那羅きんならに言う

「そうそう宮津が悪い」

みかがしれっと言う

「あゝあ：ほら京助囲まれて質問攻め受けてるんじゃない？ アレ」
香奈美が顎を手に乗せて指差す方向には浜本を筆頭に京助に群れて
いる男子群

「きつと【彼女?】とか【誰アレ】とか聞かれてんだね」

みかが言う阿部が密かに膨れる

「…顔に出てるよ」

そんな阿部の頬を本間がつついた

「今日のアレも宝珠だかいソレの力なのか？」

3馬鹿と別れた帰り道で京助が緊那羅きんならに聞いた

「アレ？」

緊那羅きんならがきよんととして聞き返す

「なんつーか…海？； 海っていうか…港にいるような…」

京助がどもりながら言う

「…わからないっちゃ； …そう…なのかな；」

緊那羅きんならが右腕についている宝珠を見た

「わかんねえって…自分で持ってたわかんねえのか？；」

京助も宝珠を見た

「うん；」

緊那羅きんならが苦笑いをする

「…で？ どうすんだ？」

「へ？」

京助が聞くと緊那羅きんならが素っ頓狂な返事をした

「お前誘われたんだろ？ 笛吹かないかって」

京助が言うきんならと緊那羅が思い出したように『ああ！』という顔をした

「丁度いじゃん」

「え？」

京助が笑った

「吹きたかったんだろ？ 笛」

足を止めて京助が言う

「でも…」

緊那羅きんならが俯く

「やりたいことはやるべし！！

やらずに後悔よりもやって後悔の

方が何となく俺は好きだ」

京助が言った

「：何だっちゃソレ；」

緊那羅きんならが呆れ顔で京助を見た

「俺の考え」

京助がへつと笑う

「ま：お前がやりたいならやればってことだ」

そう言うのと京助がまた歩き出した

「いいんだっちゃ？」

緊那羅きんならが少し大きな声で聞く

「お前がやりたいなら俺は止めねえし？」

歩きながら京助が言う

「：吹きたいんだろ」

歩きながら振り向いた京助が笑いながら言った

「：うん！」

緊那羅きんならが強く頷く

「京助！」

遅れていた距離を駆けて緊那羅きんならが京助に追いつく

「ありがとうだっちゃ」

そして満面の笑みでお礼を言った

「：何が；」

どうして緊那羅きんならがお礼を言ったのかわからない京助が聞く

「何でもだっちゃ」

緊那羅きんならが嬉しそうに笑って石段を駆け上った

「あ、おかえり京助！緊ちゃんも」

茶の間の戸を開けると慧喜の膝に上半身を預けた悠助が言った

「：なんだっちゃソレ：」

テーブルの上におかれたピンクの紙で作られた花が三枚ずついた

緑色の棒飾りを見て緊那羅きんならが聞く

「コレは祭りの時に玄関ントコに飾る花」

ヒョイとソレを持ち上げて京助が緊那羅きんならに言う

「：コッチは？」

そしてその隣に畳まれていた濃い紫色の布を指差す

「コレも玄関に飾るヤツ」

京助が言う

「いろいろあるんだっちゃね」

緊那羅きんならがしゃがんで棒飾りをまじまじと見る

「準備もイロイロあるけど当日とかもイロイロあるんだぞ」

京助が座って靴下を脱いだ

「京助臭い」

悠助えきが脱ぎ捨てられた靴下を見て言う

「ウーラウラ」

そんな悠助に京助がわざと靴下を近づけた

「義兄様汚いッ！；」

慧喜えきが悠助を庇いながら言った

「：イロイロってたとえば何があるんだっちゃ？」

緊那羅きんならが京助の靴下を片方拾いながら聞く

「緊ちゃん汚いよう；」

悠助えきが緊那羅きんならに言うきんならと緊那羅が苦笑いを返した

「後で手、洗うっちゃ」

京助に手渡されたもう片方の靴下を畳み込んで緊那羅が言う

「神輿ありの旗持ちありの：後はヨサコイだろ、鼓笛隊に：」

天狗行列に漁業青年部の何か出し物とか宝引きとか：」

京助が【イロイロ】を指折り上げていく

「沢山あるんだね」

慧喜えきが悠助の頭に顎を乗せながら言う

「僕のうちにも旗が立つんだよ、おっきなの」

悠助が楽しそうに言う

「まあウチも一応神社だしな」

そう言いながら京助は制服を脱ぎ始めた

「お店屋さんも沢山来るんだ！ 僕クレープと綿飴と型抜きやる

んだ〜！」

悠助が笑う

「京助制服しわになるっちゃ；」

脱ぎ散らかされた制服の変わりに干してあった洗濯物のTシャツと短パンを身につけた京助に緊那羅きんならが言う

「緊那羅が義兄様甘やかすからいけないんだよ」

慧喜えきが言う

「…慧喜えきほどではないと…；」

悠助を一向に放そうとしない慧喜えきを見て緊那羅きんならがボソツと言った

「浴衣着ていこうかな〜」

悠助が心はすっかり祭りですというカンジで言う

「浴衣？」

慧喜えきが悠助に聞く

「うん！！ 慧喜えきも着たいならハルミママに言ってみる？」

悠助が慧喜えきを見上げて言った

「うん！！」

慧喜えきが悠助を抱きしめる

「楽しそうだっちゃね」

緊那羅きんならが京助の脱いだ靴下と制服のワイシャツを手にとって立ち上がった

「楽しくなきゃやらんて」

京助が新聞を広げて言う

「楽しいよ〜！ 僕今年から神輿担げるんだ〜」

悠助が言うきんならと緊那羅が微笑んで茶の間から出て行った

「…ずるいですわ」

洗濯機に京助の脱ぎ捨てた靴下とワイシャツを入れていた緊那羅きんならが背後からのオドロオドロした空気に身をすくませた

「ひ…ヒマ子さん？；」

振り向くとソコには柱の影から顔をのぞかせた真夏の妖精ヒマ子

(年中咲きっぱなし)

「本当なら!! 本当なら私が!! 私はその京様のお脱ぎになった衣類を洗濯して! 着せて!! 膝枕等をいたしますのに!!」

ヒマ子が葉を上下に振って言う

「や…あの…私はただ…」

緊那羅きんならが困ったように両手を振った

「ただなんですの!?! しかも緊那羅様きんならだったらここ数日夕食前になると外出なさって帰宅時はいつも京様とご一緒じゃありませんこと?!」

葉を緊那羅きんならにずっと突きつけてヒマ子が言う

「それは…」

緊那羅きんならが後ろに反りながら苦笑いをする

「キ—————!! 夏

は私の季節なんですのよ!?!」

何処から取り出したのか可愛らしいワンポイントの刺繍がしたハンカチを嚙んでヒマ子が叫ぶ

「……」

もはやこうなってしまうては手に負えないと察した緊那羅はただ黙ってハンカチを今にも破りそうな勢いで嚙むヒマ子を見ていた

「私がッ! 私きんならが緊那羅様のような人間でしたらこうはいかなかつたですわ!! ええ! そうですとも!!」

ヒマ子が緊那羅きんならに言う

「…え?」

その言葉に緊那羅きんならが止まった

「私…みたいな…?」

緊那羅きんならが聞き返した

「そうですね! 不利ですわ!! 明らかに私の方が不利ですわ!!」

ヒマ子が葉で緊那羅きんならをペシペシと叩きながら言う

「…私…の様にはならない方がいいっちゃよ」

緊那羅きんならがヒマ子の葉を軽く掴んで呟いた

「：きつと私の様になりたいなんて思わない方がいいっちゃ：」
そして顔を上げた緊那羅きんならが泣きそうな笑顔をヒマ子に向けた

「：緊那羅様：？」

葉を放されたヒマ子が緊那羅きんならを見る

「それにヒマ子さんは今のままの方が私は好きだっちゃ」
さっきとは打って変わっての笑顔を緊那羅きんならがヒマ子に向けた

「な：なんですよ！？；　いきなり何を：！；」

ヒマ子が照れたように慌てて緊那羅きんならから放れた

「何騒いでんだお前は；」

肩にバスタオルを担いだ京助が洗面所の暖簾を上げて顔を出した

「京様——————————！！」

途端に上がるヒマ子の歓喜の声

「やかましい；　：風呂はいりたいんだけど」

脱衣籠を出してバスタオルをその中に入れた京助きんならが緊那羅とヒマ子を見た

「私に構わずどうぞお脱ぎになってくださいませ」

ヒマ子が京助のシャツに手をかけた

「俺が構うんだよ；　出てけ；」

京助がヒマ子の引っ張っていたシャツを逆に引っ張ってヒマ子の背中を押した

「んもう京様ったら照れ屋さんなんですから」

ヒマ子が京助に向けて投げキッスをした

「：照れ屋なら皆がいる前で着替えたりしないと思うっちゃ；」

閉められた洗面所の戸を見て緊那羅きんならが呟いた

「ヒマ子さんは本当京助が好きなんだっちゃね」

ゴトゴト鉢を引きずって縁側にたどり着いたヒマ子に緊那羅きんならが言う

「当たり前ですわ！！　　それでもなければ操を立てたりしませんもの！！」

ヒマ子がきっぱり言い切ると緊那羅きんならが笑う

「緊那羅様きんならはどのようなのですか？」

縁側から庭に降りる時用にと取り付けられた板の上をゴトゴト渡りながらヒマ子が緊那羅きんならに聞く

「私は：好きだっちゃよ」

緊那羅きんならが縁側に腰掛けて答えた

「ソレはどんな風に好きなんですか？」

ヒマ子が緊那羅きんならの前に立って静かに聞いてきた

「：ただ：好きじゃ駄目なんだっちゃ？」

緊那羅きんならがふつと笑うとヒマ子が頷いた

「私の好きは：正直私にもわからないっちゃ」

少し冷たい夏の浜風が緊那羅きんならの髪をなびかせた

「でも好きには変わりないっちゃ：だから守りたい」

緊那羅きんならがそう言いながらヒマ子に笑顔を向けた

漁師さんの作業小屋やいたるところに貼られた手書きの文字だけの告知ポスターによって祭りムードが高まっている正月町

「小島さきえって誰だよ：；」

そのポスターに書かれていた多分駆け出しの演歌歌手らしい人物の名前を見て中島がボソツと言う

「同じインディーズならレトロ本舗とか呼んでほしいよねえ」

南が手を腰に当てて苦笑いをする

「爺婆ノリノリすぎて救急車沙汰になるだろうが；」

坂田が南に突っ込んだ

「そーいやお前ら御輿と旗持ちどっちにでるんだ？」

京助が3馬鹿に聞く

「俺御輿」

坂田が挙手して言う

「俺も」

中島も手を上げた

「俺も今のところ御輿かな」

南も言った

「：全員御輿かよ；」

京助が口の端を上げて笑った

「まあ男子は基本的御輿だろうよ」

中島が言う

「制服でひたすら練り歩くより半纏着てハッチャけてた方が祭り祭りしてていいじゃん」

坂田が歩き出した

「それもそうそう」

南も足を進める

「にしても私服で学校来るって何だか変な感じ」

校門をくぐったところで南が言う

「緊那羅きんならもいるってのが更に変な感じ」

坂田が京助の後ろを歩いていた緊那羅きんならを見た

「え？；」

緊那羅きんならがきよんととして坂田を見返す

「一組のカップル見ているみたいで何だか変な感じ」

中島が言うとき京助が中島のハラに勢いよくブツチャーをかます

「祭りって準備期間があつてこそその祭りだよねえ」文化祭といい体育祭といい地区祭りといい：準備期間のほうが燃えるのはどうしてなんだろうねえ」

生徒玄関を開けながら南が言う

「いつもなら休みの日に学校集合とか言われたらバックレ上等な気分になるもんな」

京助が自分の靴箱の前で靴を脱ぎ始めた

「そうそう！」

南が嬉しそうに京助を指差して言う

「不思議だよナア：祭りパワー」

下駄箱の前に敷かれたスノコの上に上靴で上がった坂田が爪先をトントン打ち付けて上靴を履く

「あ、緊那羅はスリッパいるよな…職員玄関から借りてくるわ」
一足早く上靴を履きおえた中島が緊那羅きんならを見て言った

「頼んだ中島」

京助が言う

「このお礼は午後からの暇つぶし場所提供でチャラな」

中島が京助に言った

「ヘイヘイ；」

京助がヒラヒラと手を振った

「凄い凄い！！」

青いTシャツを着た宮津が黒い和笛を片手に手を叩く

「ほお…いい音出すな」

白髪の男性教員が感心した声を出した

「ね？ 石塚先生凄いでしょ？」

赤い顔をして和笛を握り締めた緊那羅きんならの肩に手を置いて宮津が石塚先生に笑顔で言った

「笛は自分で？」

石塚先生が緊那羅きんならに聞く

「あ…えと…迦楼羅かるらから…；」

緊那羅が慌てて答えた

「君の腕も大したものだがそんな君に教えたその迦楼羅かるらとか言う人も凄いんだろな」

石塚先生が頷きながら言った

「そういえば君の名前はまだ聞いてなかったな。俺はここで音楽を教えている石塚というものだ」

石塚先生が握手を求めるように右手を差し出して名乗る

「あ…私は緊那羅きんなら…だっちゃ」

その手を握り返して緊那羅も名乗った

「にしても金名さん…ラムちゃんでもいい？ ラムちゃんってこの生徒じゃなかったんだね」

【燃燒系アミノ式】の文字が書かれた段ボール箱に油性マジックで書かれた【ヨサコイ備品？】の文字を外側にして坂田がトラックの荷台にいた男子生徒に手渡す

「コレで最後だな」

男子生徒がそう言って段ボール箱を重ねた

「じゃ今日は夜に備えてコレで解散！ 夜宮だからって浮かれて怪我しないように」

女性の声に各々返事を返して男子生徒が散っていく

「いやゝゝ腹減った」

京助が伸びをして言う

「帰りになんか買ってく？ まだまだ夜宮開始時間には結構あるし」

南が自転車置き場から愛車【ニボシ】に乗ってやってきた

「今日の予定ゝ提案あるヤツ挙手」

中島が言う

「まずはとりあえず京助ン家いってゝ今日は本殿前で一回踊るのに7時集合だろ？ それまではゝやっぱ京助ン家？」

坂田が京助を見た

「ヘイヘイ； まあウチに来たって準備手伝わされたりする可能性が大きいぞ？」

京助がへッと笑って言う

「なんたっていつも手伝ってる緊那羅ゝアレ？ 緊那羅は？」

京助が姿の见えない緊那羅を探してあたりを見渡した

「あ、いたいたアソコ」

南が指差した体育館の方を見ると緊那羅が誰かに手を振って小走りでやってきた

「お疲れさん」

坂田が緊那羅に言う

「あ、うん」

緊那羅が笑顔で返事をした

「靴持ってきてやったからこっから履いて帰るべし？ スリッパソ

コにおいて」

京助が緊那羅きんならの靴を置いた

「ありがとだっちゃ」

緊那羅きんならはその靴を少しよろけながら履くと爪先をトントンとして足にあわせる

「なんつーか：溶け込んだな緊那羅きんなら」

坂田が緊那羅きんならに言った

「よかったじゃん」

京助が笑いながら言う

「前に来た時はただ京助について歩いてただけだったしな」

中島が歩き出した

「学校って：なんだか楽しいっちゃね」

緊那羅きんならが体育館を見上げて言う

「勉強さえなきやな」

京助が言うところ馬鹿が【まったくだ】という感じで頷ずくと正午を告げるサイレンが正月町に鳴り響いた

「ひーるー」

そのサイレンにあわせて坂田が叫ぶ

「はーらへーりー！！」

それに京助も続く

「：やっぱ何か買っていかね？；」

中島が自分の腹を押さえて【ちよいと】という風に手で合図する

「じゃ梅田商店に寄りますか」

京助がTシャツの袖を捲り上げて肩を出しながら言った

バサバサと白い布が青い空に靡く

「：遅いな：」

低くも高くもない声で誰かが呟いた

白く靡いていた布から黒い手がスツと伸び指で宙に何かをなぞるとまた白い布に手を隠す

宙に生まれた黒い玉が何かを探すように飛んでゆく
風に乗って聞こえてくる演歌がかすれかすれに正月町に響いていた

【第八回】お祭りマンボウ（前書き）

ヨサコイの準備のためにあつまった正月中の生徒達
まさか思いも寄らない出来事がまっていたとは

【第八回】お祭りマンボウ

「財布よろし！」

南が黒い自分の財布をイソイソと鞆の中に入れた

「着替えよろし！」

坂田が黒いタンクトップと黒い短パン姿で腰に手を当てて言う

「胃袋よろし！！」

京助が腹を一回叩いて言う

「遊ぶ気やる気よろしッ！！」

中島が腕を上げて言った

「じゃ出発！」

夕方午後五時栄野家の玄関前で3馬鹿と京助がたむろっていた

「緊那羅きんならは？」

ふと坂田が言った

「ラムちゃー————ん！ おいていくよ————」

「——？」

南が家に向かって叫ぶとバタバタという足音が聞こえてガラツと戸が開いた

「ごめんだっちゃ；」

緊那羅きんならが苦笑いで戸を閉めた

「あれゝ京助もう行くの？」

お神酒用の一升瓶を持ったえき慧喜と共に悠助が境内から歩いてきた

「おうよ」

京助が返事をする

「ちよっと待って僕も行きたいゝ」

悠助が言う

「じゃ速攻準備して来い」

「はあいっ！」

中島が笑いながら言う。悠助が慧喜えきの手を引いて家の中に入っていた。

「遅い；」

かれこれもう30分は待っているであろうまだ出てこない慧喜えきと悠助を3馬鹿と京助と緊那羅きんならはしゃがんだり即席ゲームをしたりして待った。

「…ちよつとみてく…」

ガラッ

様子を見てこようと立ち上がった緊那羅きんならが戸の開く音に顔を上げた。「おおお!!」

坂田が声を上げた

「可愛い可愛い!!」

南が立ち上がって拍手をする

「浴衣カァ：祭りだナァ」

京助が口の端を上げて言った

「僕は甚平〜!!」

白地にアザミ模様の浴衣を着た慧喜えきの後ろから紺色の甚平を着た悠助が顔を出した

「悠助可愛い」

慧喜えきが悠助を抱きしめる

「いや慧喜えきツちゃんも可愛いよ」

南が笑う

「ソレ着てたから遅かったんだっちゃね」

緊那羅きんならが言った

「ハルミママ様が女の子は浴衣着ないって」

慧喜えきが帯を軽く叩きながら言う

「少し苦しいけど…」

帯の間に指を入れながら慧喜えきが息を吐いた

「慧喜えき似合うよ〜可愛い〜」

悠助が満面の笑みで言うと言顔を赤くしたえき慧喜が嬉しそうに微笑んだ
「じゃ行くか…慧喜と悠離れるなよ？ 緊那羅きんならも」

京助が歩き出す

「人多そうだしねえ？」

南が言う

「本当； 毎年何処にこんなにいたんだっちゅーくらい湧いてくる
しな」

中島が肩に袋をかけて言った

「そういや…最近アイツ等こないな」

坂田がボソツと言う

「…そういえば…」

京助が言う

「今日あたり来るんじゃない？ 祭りだし」

中島が頭の後ろで手を組んで言った

「なんつたって暇らしいからね」

南が言うと3馬鹿と京助がハッハと笑い緊那羅きんならも苦笑いをした

「待つんだやな！！」

コマの声がして一同が振り返った

「ゴ等もついていくんだやな」

イヌが京助の足元まで駆けてきた

「何？； お前等もくんのか？」

京助がしゃがんでイヌに言う

「…嫌な予感がするんだやな」

コマが尻尾をピンツと立てて言った

「…嫌な予感？」

緊那羅きんならが眉をしかめた

「…コレから祭りではっちゃけようって時にこんなシリアスいや
ん；」

南が苦笑いで言う

「まあ…ついてきたいなら…別にいいけど」

京助が溜息を吐きながら立ち上がった

「栄野の前後は我等が守るんだやな」

いつもの無邪気な笑顔から一転真顔でイヌが言った

「悠助は俺が守る」

慧喜^{えき}が悠助を抱きしめた

「ってかさ：そろそろ行かねえ？ 集合7時じゃなかったか？」

坂田が携帯の画面を見せて言う

「：うっわ； ヤッベェ！！；」

携帯の画面に表示されている時刻は午後5時47分

「まだ時間あるじゃない」

慧喜^{えき}が悠助を抱きしめたまま言った

「何を言う！！ 祭りだぞ！ 夜宮だぞ！ 遊ぶ時間が欲しいだろ
う！！」

中島が胸を張って言うとき京助と坂田、南も頷く

「踊る前にチョコッと型抜きとかヨーヨー釣りとかすんのがまた味
があつていいんだよねえ」

南がヨーヨー釣りの手真似をしながら笑った

「ってことで出発！！」

京助が走り出した

「レッツらゴウ！！」

坂田が手を上げて京助に続いた

「まあ〜つりだ祭りだ祭りだ〜♪」

南が北島三郎の有名な曲を口ずさみながら中島と共に石段を降りて
いく

「：一応注意はしたんだやな」

コマが駆け出すとイヌもソレに続く

「慧喜：」

緊那羅^{きんら}が慧喜^{えき}を見た

「わかつてる」

慧喜^{えき}が悠助の手をしっかりと握った

「慧喜^{えき}？」

悠助がきよとした顔で慧喜^{えき}を見上げると慧喜^{えき}が目を細めた笑顔を向ける

「俺は悠助を守るよ」

そしてそのまま慧喜^{えき}は悠助の額に口付けた

石垣には正月町に5つある小学校の生徒が書いた書道や絵画が飾られその下には名前が張られている

神社の本殿に続く石畳には吊るされた寄贈者の名前が書かれた桃色の提灯が薄暗い中ぼやつという光を放っている

鳥居には真新しい注連飾りが飾られ神社前には本祭り当日に担がれる御輿が三台置かれその前には魚や果物、お菓子などのお供え物がされていた

天狗行列に使われる旗が通路に立てられ風にハタハタとなびいている神社の社務所からは祭り実行委員のオッサンの酔っ払った笑い声が聞こえ取り付けられたスピーカーからは演歌がひっきりなしに流れている

「京助の家より大きいっちゃね」

緊那羅^{きんなら}が本殿を見て言った

「まあなあ、こっちが本家というか：まあ神社にもなんだか神社の神社による神社のなんとらがあるっぽいしな」

京助が言う

「何だっちゃそれ；」

緊那羅^{きんなら}が呆れ顔をして言った

「慧喜^{えき}と同じ格好してる人結構いるっちゃね」

行き交う人の中に浴衣を着ている人を見かけて緊那羅^{きんなら}が言う

「祭りといえは浴衣でしょう」

坂田が言った

「でも慧喜^{えき}が一番可愛いね」

悠助が笑顔で言う

「その浴衣はハルミママさんの浴衣なんだやな」

「何!？」

イヌが言うと坂田が異常な反応をして慧喜えきを見た

「京助がまだちっこい時にその浴衣着て主と一緒に祭りに行ってたんだやな」

コマも慧喜えきを見上げた

「主って…京助パパン？」

南がコマに聞く

「そうなんだやな」

イヌが頷く

「久しぶりにこの浴衣見たんだやな」

イヌが尻尾を振った

「主がいなくなってからハルミママさん着てなかったんだやな」

コマが言うと慧喜えきが浴衣の袖を持ってまじまじと浴衣を見た

「ハルミママも似合ってたんだろぅね」

悠助が笑って言う

「当たり前だ悠！」

坂田が強く言った

「ハルミさん慧喜えきちゃんのこと本当の娘えきってしてるのかもねえ…
そんな大事な浴衣着せたってことは…すげえ状態いいしねコレ。保
存法がよかったんだね…全然色あせてないもん」

南が浴衣を見て言う

「娘…」

慧喜えきが浴衣の袖の匂いを嗅いだ

「ハルミママ様の匂いがする」

慧喜えきが呟く

「俺にも!!」

坂田が真顔で慧喜えきに言うとか中島がスパンと坂田の頭を叩いた

「いるいるいる…； 本当何処から湧いて出たんだ人々よ…；」

石垣の上から人の波を見下ろして坂田が言った

「今年もお前んトコ協力してるのか？」

京助が坂田に聞いた

「ああ…まあ…爺イの代からずっとしてるみたいだし？」

坂田が石垣に取り付けられている手摺に寄りかかりながら答えた

「お！…！ 噂をすれば…しっぱたさ—————」

南が人の波の中に見かけた柴田に向かって呼びかけた途端 緊那羅

の表情が変わる

「…お前本当柴田さん嫌ってんなあ；」

京助がそんな緊那羅を見て言う

「大ッ嫌いだっちゃッ！ …京助はどうして怪我させられたのに嫌わないんだっちゃッ！」

緊那羅が京助に言った

「怪我？ …あゝ…あん時のか？」

京助が自分の腹をさすった

「じゃ俺も聞くけど…なんでお前は柴田さん嫌ってるわけ？」
今度は京助が緊那羅に聞いた

「だって京助を…」

「俺のせいかな」

言いかけた緊那羅の言葉が京助の言葉で止められた

「俺がなんだ…怪我とかしなきゃお前は柴田さん嫌ってなかったんだな」

京助が頭を掻きながら言う

「ごめんな」

そして苦笑いを交えて謝る

「な…んで京助…！！」

「若！」

柴田の声がすると緊那羅が一步下がった

「ばんわ！柴田さん今年も似合ってるう！」

腕に【正月町祭り警備委員】と書かれた腕章をした柴田が坂田組と書かれた半被を着てやってきた

「緊那羅君も今晚は」

柴田が笑顔を緊那羅きんならに向けると緊那羅きんならは京助の後ろに隠れるようにして逃げた

「ははは； まだ嫌われてるんだね俺は」

柴田が苦笑いをする

「ご苦労さん柴田」

坂田が柴田の肩に手をかけて言った

「踊りは七時半からでしたっけ？ 今年も楽しみにしてますよ姐さんも：あ今年から組長も」

柴田が笑いながら言う

「お前の親父さんがこんな人がごっちゃりいるところに出てくるなんて珍しいな」

中島が坂田に言う

「どうせ母さんに無理やり引っ張ってこられたんだろうさ；」

坂田が口の端を上げてヘツと笑った

「何も起こらないといいんだけどねえ？」

南が不吉なことを笑いながら言った

「慧喜？」

悠助が慧喜えきに浴衣の袖を引っ張った

「え：あ：何？ 悠助」

ハツとして慧喜えきが悠助に笑顔を向けた

「どうしたの？」

不安そうな顔で悠助が慧喜えきを見上げた

「なんでも：なんでもないよ？ ちよつと…考え事…」

慧喜えきが顔を上げて3馬鹿と京助の方を見た

「：まさか：ね」

そう呟くにつっこり笑って悠助の手を握った

「じゃあ俺は持ち場に戻ります皆頑張って」

柴田が坂田の頭を撫でて背中を向けた

「コルア柴田！； 子ども扱いすんなってんだろが！！；」

坂田が柴田に向かって怒鳴ると柴田が手をヒラヒラ振った

「よちよちみちゆるくんいいこでちゅね」

京助が坂田の頭を撫でながらからかう

「やめい！；」

坂田が京助の手を払いのけて怒鳴った

「いけまちなんよ！ホー！いい子いい子」

南が京助とは反対側から坂田の頭を撫でた

「坂田赤ちゃんみたい」

悠助が笑いながら言う

「どお！れ高い高い」

中島が坂田を持ち上げた

「ワッシヨイワッシヨイ」

中島に持ち上げられた坂田の足を京助が持って人間タンカを始めた

「やめいっつーの！！； ゲハッ！； コラ！！ 悠！！ 乗っか

るな！！；」

その坂田の上に悠助がよじ登ってきた

「出発！！！」

そして神社本殿を指差して悠助が掛け声をかけると京助と中島が坂

田を人間タンカしたまま歩き出す

「ホラ！ ラムちゃん置いていかれる！ 乗り遅れる！！」

「えっ！！； あ…うんっ！！；」

南が緊那羅を手招きしながら駆け出すと緊那羅も駆け出した

「おーろーせーっ！！；」

坂田が悠助を落ちないように支えつつも抗議の声を上げる

「義兄様俺ものついていい？」

「アカン！！；」

慧喜が京助に聞くと坂田が間髪いれずに怒鳴った

本殿前にチラホラ見える正月中学校の生徒らしき男子群の集まりの中から誰かが駆け寄ってきた

「ラツムちゃんッ!!」

緊那羅きんならの名前を呼びながら浜本が手を振った

「遅かったじゃん」

もう半纏を着たハルがミヨコと共に浜本の後についてやってきた

「ミヨも浴衣着てくればよかった〜可愛い〜い」

ミヨが慧喜えきの浴衣を見て溜息混じりに言った

「お前等やけに早いじゃん」

ようやく坂田の足を離れた京助が浜本とハルに言う

「なんだか体が勝手にあああああ!　ってカンジでさあ…」

浜本が足踏みをしながら言った

「わかるわかる!!　こう…何かキュンキュンすんだよな!」

坂田が浜本と同じく足踏みをして言う

「そうそう!　何だかムズムズってカンジもあるキュンキュン!」

南も同じく

「コレこそ祭りパワー!!　キュン!!」

京助が自分の体を抱きしめて言った

「僕も〜」

悠助も足踏みをして笑う

「いくつになっても祭りは楽しいもんだ」

中島が妙に年寄りくさいことを言った

「俺等まだ中学生ですよ中島さん」

そんな中島に京助が裏手で突っ込む

「お前等早く半纏持って来いよ。灯籠の下に鳴子と一緒にまとめて置いてあるから」

境内の方からやってきた半纏を来た男子生徒が京助たちにそう言っ
て騒がしい出店の立ち並ぶ方向へ向かっていった

「そうだそうだ!;　半纏半纏!!」

南がパンツと手を叩いて言った

「鳴子鳴子！」

中島も同じく手を叩いてまとめて置いてあるという灯籠を探した
「ヨサコイメイクもあんだぞ？」

そう言って浜本が自分の顔を指差した

「優子ちゃんが境内の方でしてくれるからついで行ってこい？」

ハルが言う

「了解！悠と慧喜はちょっとここで待ってな」

京助が悠助の頭を撫でて言う

「僕も化粧したい……」

チラッと上目で悠助が京助を見た

「してくれるんじゃない？化粧くらい……いいじゃん行ってこいよ悠」

浜本が鳴子をポケットに入れながら言う

「本当！？」

悠助が目をキラキラさせて浜本を見た

「そんなどっかの厚塗り壁造りマダムみたいなレベルの化粧じゃないんだし……まあ頼んでみようか」

南が言う

「わーいっ……！」

悠助が嬉しそうに万歳をする

「じゃいくか……遊ぶ時間本当になくなっちゃう……」

坂田が境内の画面を見てそれから携帯を閉じて歩き出した

「……来るんだやな」

「あ？」

ふいに聞こえたコマの声に京助が振り返った

「……つてか来てるんだやな……」

イヌが威嚇のポーズをし始める

「おッ……；　なんだお前コマイヌコンビまで連れて来たのか……？」

浜本がしゃがんでコマを撫でようと手を伸ばした

「ワンッ……！」

「うおおお!;」

コマが大きく吼えたせいで浜本が後ろに尻餅をついた
「なしたよコマ;」

京助も驚いた顔でコマを見た

「ワンッ!! ワンッ!!」

コマだけではなくイヌまでもが威嚇ポーズで吠え出す

「どうしたの? コマもイヌも:」

悠助が不安そうな困ったような顔で慧喜の浴衣の裾を掴みながら言う

「尋常じゃない吼え方じゃない?;」

南が苦笑いで言った

「:一体なんなんだ?;」

吼え続けるコマとイヌの声を聞いた生徒達が集まりだす

「:緊那羅:」

慧喜が悠助を抱き寄せて緊那羅に呼びかけた

「:うん: 凄く嫌な感じがするっちゃ」

緊那羅の顔が陰しくなる

「上なんだやな!;!」

イヌが叫んだ

ヒュルルルルル: ドッパパラパララ:

「うわあ:」

悠助が見上げた空に咲いたのは大輪の花

「:花火やん;」

坂田がボソツと言った

「なんだ〜お前等花火怖かったのか〜ハッハッハ」

浜本が笑ながら立ち上がった

「違う:」

慧喜が足を肩幅に開いて構えの姿勢をする

「…来たんだやなッ!!」

「!?!?; 今イヌがしゃべ…!!」

イヌが浜本に体当たりして後ろに倒すとそのままゴへと姿を変えた

「下がってッ!!」

緊那羅きんならの声にわけがわからずただ立ち尽くす3馬鹿や京助そしてその他正月中の生徒

「悠助ッ!!」

慧喜えきが悠助を抱えて跳ぶと今まで慧喜えきと悠助のいた場所にカツー

ー――ーと音を立てて何かが落ちた

「…玉…?」

南がボソッと呟いた

「…若…?」

柴田が空を見上げた

「柴田さん!! 組長が…どうしやした?」

人にぶつかられながらもただ空を見上げている柴田を見た若い組員が不思議そうな顔で声をかけた

「……いや…なんでもない…」

そう言いながらも柴田は空から顔を逸らさない

「花火っスか? 今年は本数も増えてるみたいですよ」

先ほどから上がり始めた花火を見て若い組員が笑ながら言う

「…そうか…」

上がる花火に照らされながらも柴田は空を見ていた

「玉…だよな?」

京助が一步その玉に近づいた

「京助!!」

緊那羅きんならが京助を呼ぶ

「大丈夫だって; ただの玉っぽいし」

京助が緊那羅きんならに向かって言った

「黒豆じゃないの？ 黒豆ココアイソフレボンジュール♪」

南も落ちてきた玉に近づいた

「離れるんだやな馬鹿ッ！！；」

「だぁッ！！；」「うおわッ！！；」

くるつと一回宙返りしたコマがゼンへと姿を変えてそのまま京助と南の首根っこを掴んで放り投げた途端黒い玉が何もしていないのにふわりと宙に浮いた

「おおお！！ 何だ何だ！？」

見ていた生徒達からざわめきが起き始める

「人を投げるなッ！！；」

思い切り尻から着地した京助が怒鳴る

「忠告を聞かないからなんだやなッ！！」

ゴがゼンの隣で京助に言った

「だからって…ッ！！；」

「何だッ！？；」

再び怒鳴り返そうとした京助の声が誰かの声で止められふと玉の方を見ると玉からドロドロとした物体が大量に流れ出てきていた

「うっわキッショッ！！；」

中島が鳥肌を立てた

「逃げてッ！！」

いつの間にか両手に武器笛を持った緊那羅きんならが叫ぶと生徒達が顔を見合わせた後小走り、駆け出し、本気走りで散っていく

「京助達も早く逃げるっちゃッ！！」

武器笛を構えて緊那羅きんならが言う

「いてッ！！；」

先頭を切って駆け出した男子生徒が何かに弾かれた様に尻餅をついた

「何だこれ…カベ？；」

数人の生徒がまるでパントマイムの様に宙をぺたぺたと触っている

「…結果…！！」

緊那羅きんならが顔をしかめた

「結構やりそうなんだやな…どろろっちょ」

ゼンが一步足を引いて構える

「倒すしかないみたいなんだやな」

ゴがゼンと同じく一步足を引いて構える

「そう…みたいだっちゃん」

武器笛に息を吹き込み一瞬にして摩訶不思議服姿になった緊那羅きんならが
まっすぐ黒い玉から生まれ出た黒くドロドロした物体を見た

「さあ…どうなるかな？」

花火が咲く夜空に浮んだ白い布が花火の光で七色に輝いて見える
その白い布の間から覗いた口元には微かな笑みが浮んでいた

黒い玉から生まれた物体は本殿境内前の鳥居を遙かに超える高さ、
大きさまでになった

「な…なんだ…」

今日の前で起きていることが自分達の今まで見てきた育ってきた体
験してきた物事からはかけ離れ過ぎているせいなのか【結界】らし
き空間に閉じ込められたらしい生徒達はただ呆然、漠然として立ち
尽くしている

「何かの出し物…だよな？」

一人の生徒が呟いた

「祭りだもんな…そうだよな」

誰かに同意を求めるように生徒が言う

「そう…だ！ 出し物だ！ 出し物ッ！！」

不安をかき消すかのように誰かが大声で言った

『ギューイイイイイイイイ！！！！！！』

その途端黒い玉から生まれた物体が鳴き声とも取れなくはない声を
上げた

「い…いやあああああああ！！」

糸が切れたかのようにミヨコが悲鳴に近い声をあげハルにしがみつ

「悠助には近づけさせない…ッ!!」

浴衣のままその物体よりも高く飛び上がった慧喜えきが宙返りをする
と浴衣が一瞬で摩訶不思議服に変わり手には大きな三又の鉤が握ら
れていた

「はぁッ!!」

そしてそのまま鋭い鉤をその物体に向け振り下ろす

「慧喜えき!!」

悠助が叫んだ

「ゴ等はとりあえず…」

ゴが結界の壁に沿ってざわめきだした生徒達を見た

「アイツ等を守るんだやな」

ゼンが駆け出すとゴもそれに続く

「コレもお前等の仲間か?」

打った尻がまだ痛むのか尻をさすりながら京助が緊那羅きんならに聞いた

「違うっちゃッ!!; 下がってるっちゃ京助!!」

緊那羅きんならが声を上げて京助に言う

ズジャー————————————————————ッ

という音がして慧喜えきが地面に着地し体制をすぐさま整え玉から生ま
れた物体を見上げた

「やった!」

慧喜えきの鉤によって深く切り裂かれた物体を見上げて慧喜えきが声を上げる

『キョウ…ユウ…』

ゴポゴポと何かが湧き出るような音と共に聞こえたその声はおそら
くその物体が発したもので

「もしかして…御指名はいっちゃってませんか?; 京助君…」

坂田が京助に言った

「俺ってばもててもててでまあ…;」

京助が微かながらも後ずさった

「悠も…みたいだったけど」

南が引きつった笑顔で言う

『ギ
ユ
イ
イ
イ
イ
イ
イ
イ
イ
！
！
！
！
！
！』

さつきと同じような鳴き声を上げた物体から黒い触手の様な物が数本生まれ勢いよく地面を走り出した

「うわあああッ！！！！；」
「きやああッ！！」
「ギャ——————」

無差別に走るその触手の様な物を見て生徒達が声を上げた

「起・承！」

ゼンが叫んだ

「**轉・結！！**」

ゴが続いて叫ぶとゼンゴの両手が光り始めた

「連結界！！」

生徒の群れを囲うようにゼンゴが走り出した

「発！」

反対側で出会ったゼンゴがパンツと手を合わせるとゼンゴが走った後に赤と青の光の帯ができた

「きたー
ー
ー
ー
ー
ー
ー
ー
ー
ー
ツ！
！
；
」

青と赤の光の壁の向こうに迫った黒い触手の様な物を見て生徒が声を上げる

[illegible]

さまざまな泣き声とも取れる生徒達の叫びがし始める

バチイイツ！！！！

その音と共に生徒達の泣き叫び声が治まった

「成功なんだやな」

ゼンが二一と笑みを浮かべた

「コノ中にいればたぶん安全なんだやな」

ゴが呆然として半べそをかいている一番前の生徒に笑いかけた

「悠助！！」

えき
慧喜が悠助の前に立ち鉤で走ってきた触手を切り裂いた

「え……ち……」

ミヨコが生徒を掻き分けて一番前まで来ると慧喜えきの名前を呼ぶ

「オイッ!;」

「大丈夫かっ!?;」

ミヨコにつられたのかなんなのか生徒達の中からも慧喜に声をかけるものが出始めた

「慧喜…?」

慧喜えきの腕の中に守られた悠助が慧喜えきの名前を呼んだ

「慧喜!!」

緊那羅きんならが慧喜えきに呼びかける

「ラムちゃん前!!;」

浜本が叫んだ

「え…ッ!？」

「だッ!!;」

ヒュンと緊那羅きんならの前を触手が通り京助の足に絡みつき京助がコケた

「だぁッ!!;」

「なぁッ!!;」

「ギャー! 重いッ!;」

京助がコケたせいで3馬鹿も次々と倒れ南が中島の下敷きとなって声を上げる

『…ト…キ…』

ゴポゴポさせながらまた言葉らしき声をだした物体を京助が見上げた

「っ…;」

「京助!!」

緊那羅きんならが京助に駆け寄り京助の足に絡みついた触手のようなものに手を伸ばした

「いっつ…; …!! 緊那羅きんならッ!!;」

中島が緊那羅きんならの名前を叫ぶのと京助の目の前から緊那羅きんならが一瞬で消えたのはほぼ同時だった

「ラムちゃんッ!!;」

土埃が京助の視界を遮り聞こえたのはズシャっという何かが落ちる

ような音と緊那羅きんならの名前を呼ぶ3馬鹿の声

「っ：きしよ； 放せッ！！」

自分の足に絡み付いている触手はずそうと京助が奮闘する

「う：」

3馬鹿の声がやかましいほど届いたのか吹き飛ばされた緊那羅きんならが身を起こした

「痛えって！ もげるって！！；」

京助の声が響く

「我慢しなさいッ！； 足の一本や二本！！」

中島が京助の上半身を引っ張りながら言う

「そうそう！ チンコ取られるわけじゃなし：っ！」

南が触手に手をかけ引っぺがそうとしながら言う

「死ぬよりマシだろがッ！！；」

坂田も南と共に触手を引っ張っている

「おわッ！！；」

「京助！！；」

触手がいきなり京助の足を引っ張った

「ギャー————————！！；」

京助が3馬鹿にしがみついた

「京助ッ！！；」

緊那羅きんならがバツと立ち上がり走り出した

「キヤー！！； キャトルミューテーション！！；」

南が京助を引っ張りながら言う

「いて——————————ッ！！；」

綱引きの綱、もしくはバーゲンセールで主婦に両方から引っ張られるブランド品の様になりながら京助が叫ぶ

「オーエス！ オーエス！！」

ゼンゴの結界の中から浜本がコールを送り始めると生徒達が浜本に続き声を出し始めそれが大合唱のようになった

「京助！」

緊那羅^{きんなら}が武器笛で触手を攻撃した

「ラムちゃん！！　だいじょう：うおああッ！？；」

「でええッ！！；」

触手が京助を3馬鹿をつけたままで空中へと持ち上げた

「重いッ！！　重いし痛えッ！！；」

3馬鹿をくっつけた京助が宙ぶらりんで喚く

『キョウ：』

だんだんと京助を持った触手が物体へと近づいていった

「お前等放れろ！！；　この高さからならせいぜい捻挫くらいで済む！！；」

宙ぶらりんで3馬鹿をぶら下げた京助が3馬鹿に言った

「やだねッ；」

坂田が必死で京助にしがみつきながら答えた

「はッ！？；　怖くねえのかよッ！！；」

京助が怒鳴る

「怖いさ！！　怖くねえっていったら鼻がM88星雲あたりまで伸びちゃうってッ！！；」

今度は南が言った

「捻挫がそんなに嫌なのかッ！？；　いいから放せてッ！！；　このまんまじゃお前等も：ッ！！；」

間近に迫ってきた物体本体を京助がチラッと見ながら言う

「捻挫も嫌だしスッゲ怖いけどなッ！　お前に化けて出てこられる方がよっぽど怖ええんだよッ！！；」

中島が京助にしがみつきながらも足で触覚を何とかはずそうとしながら言った

「慧喜^{えき}：ねえ：慧喜^{えき}？」

悠助がくたつとなったまま動かない慧喜^{えき}の名前を呼んだ

「悠！！　ねえ慧喜^{えき}の鼻ントコに手当ててみて！？」

ミヨコが悠助に言う

「息してる!?!」

ミヨコに言われるがまま悠助が慧喜えきの鼻に手をそつと伸ばした
「…してる…」

悠助が泣きそうな顔でミヨコを見た

「よかったあゝ…； 氣い失ってるだけなんだ…」

ミヨコがほつとして胸をなでおろした

『ユウ…』

ゴポツという音と共に聞こえた悠助の名前

「悠!! 逃げろッ!!;」

京助が悠助に向かって叫んだ

「いやだ…」

悠助が動かない慧喜えきの手を握りながら呟いた

「いやだッ!!」

そして今度は大きな声で叫んだ

「悠!?!;」

めったに大声を出さない悠助が大声を出したことに3馬鹿と京助他の生徒が少し驚いている

「悠助…」

緊那羅きんならが物体のすぐ側から悠助を見た

「慧喜えきは僕を守ってくれたんだもん!! 今度は僕が慧喜えきを守るんだッ!!」

目に涙を溜めながら顔を上げた悠助が立ち上がり物体をキッと睨んだ

「おお…漢の顔だ…」

坂田がぼそつと呟いた

「うおい悠!!; よけろッ!!;」

再び地面を走り出した触手が悠助を目指す

「悠助!!」

緊那羅きんならが駆け出し悠助の前で武器笛を交差させた

「緊ちゃん!」

ズザザザザザー————
交差させた武器笛で触手と居切合いをしている緊那羅きんならを悠助が見上げた

「は…やく慧喜えきを連れて…ッ；」

押されている緊那羅きんならが悠助に言う

「う…んッ；」

悠助が慧喜えきの体を引きずって緊那羅きんならから放れる

「悠助！！ こっちなんだやなッ！」

ゼンが悠助を手招きする

「結界は張れないけど守ることはできるんだやな」

ゴが足を一步引いて構えた

「栄野の前後は我等が守る！」

同じく足を一步引いたゼンと共にゴが叫んだ

「オイコラ！！； 俺ン時はどうした！！ 俺ン時はッ！！；」

そんなゼンゴに京助が突っ込む

「面白かったからみてたんだやな」

ゴが構えながらさらっと言った

「正直に生きてるナァ…；」

中島がへっとながらボソッと言う

「ッ…；」

慧喜えきと悠助が無事ゼンゴの後ろに回ったのを見て緊那羅きんならが側転をして触手から逃げるとその触手が今度は躊躇うことなくゼンゴの方向へと向きを変えた

「行っただぞーッ！！；」

坂田が京助によじ登りながら言う

「いでっ！！； 坂田お前ソコ大事なところ膝で踏んでるってッ！！；」

「

京助が怒鳴る

「ああ…まあ…落ち着け？ な？」

そんな京助にハッハとエセっぽい爽やかな笑顔で坂田が言った

「悠助は任せたっちゃッ!!」

「オツケイなんだやなッ!!」

「任されたんだやなッ!!」

緊那羅きんならが走りながらゼンゴに言うとうさふさの尻尾を立てて前後が触手を睨んだ

「緊那羅!!」

高く飛び上がった緊那羅きんならが京助を掴んでいる触手の上に着地した

「ラムちゃんッ」

待ってましたというカンジで南が緊那羅きんならを見上げた

「早く何とかしろッ!!」 じゃないと俺の息子が坂田に殺されるッ!!」

右手をプルプルさせながら京助が坂田の膝から自分の大事なところを守りつつ緊那羅きんならに言う

「下と比べると緊張感が一気に薄れてるっちゃねココ」

緊那羅きんならが団子になっている3馬鹿と京助を見てボソツと言った

「なんとかっても緊那羅きんならの攻撃一時しか効いてなかったみたいじゃん?; どうすんだ?;」

中島が触手を足で突付いた

「そーいやさあ:ゲームでもこんなドロドロした敵にや殴るとかの攻撃あんまり効かなかったよねえ:ラムちゃんの攻撃ってまさに殴ってますってのだし:」

南が緊那羅きんならの手に握られている武器笛を見て言った

「じゃあアカンやんッ!!」

「ギャー————!!」 動くな坂田ッ!!」

坂田が動くとき京助が怒鳴った

「私だってコレだけが武器ってワケじゃないっちゃ」

そういうとき緊那羅きんならが二本の武器笛のうちの左手に持っていた武器笛を腰に戻した

「緊那羅?」

3馬鹿と京助に背を向け物体を見る緊那羅きんならの名前を中島が呼ぶ

『キヨウ…ユウ…』

物体がまた京助と悠助の名前を発すると緊那羅きんならが武器笛に口をつけた

「ハッ！」

ゼンの着物の袖が翻りゴの爪が触手を切り裂いた

「やれ——————ッ！！」

「いけいけッ！！　そこだっ！！」

結界の中から生徒達の声援が巻き起こる

「慧喜…」

ゼンゴが触手を攻撃している場所から少し後ろに下がった場所で悠助が慧喜えきの頬に手を当てた

「大丈夫だよ悠」

そんな悠助にミヨコが笑いかける

「この子お前のこと大好きだっていつてるしお前残していかねえって」

背の高いハルが悠助を見下ろして言う

「うん…」

擦りむけた慧喜えきの頬の血を自分の甚平の裾でふき取るとソコに水滴がひとつ落ちた

「悠？」

浜本がしゃがんで結界越しに悠助の顔をのぞきこんだ

「僕が…僕がもうすこし強かったら…もう少し…っ」

白い布、ソコから見える口元が再び笑みを浮かべた

「…【来た】かな…？」

高らかに響いた緊那羅きんならの笛の音

「何だ？；」

京助、そして京助にしがみついている3馬鹿、結界の中の生徒達が

緊那羅きんならを見る

「こんな時に笛なんか…」

坂田が言いかけたその時 緊那羅きんならの周りに現れた5つの緑色の光

「ば…万国びっくりショー…」

南が呟く

「今更だろ…」

京助が口の端を上げて言った

「京助」

緊那羅きんならが武器笛から口を離して京助の名前を呼んだ

「守るから」

突然名前を呼ばれてきょとんとしていた京助に緊那羅きんならが振り返らずに言う

「…お…おう?…」

どもりながら京助が返事をした

「でも…捻挫くらいは許してほしいっちゃ」

そう言って振り返った緊那羅きんならが苦笑いを3馬鹿に向けた

「…へ?…」

3馬鹿と京助がそろって声を上げると緊那羅きんならが触手の上からまた飛び上がった

5つの光が楕円形になり多方向に向けて散らばる

「おおお!…!…」

ソレを見ていた全員から声が上がった

『ギューイイイイイイイイ!…!』

緊那羅きんならが放った光が物体を切り裂いていく

「何で早くやらなかったんだよ! そんな技もってんならさッ!…!…」

中島が言った

「笛吹くヒマなかったんだっちゃッ!…」

「あ…なるほどね」

南が妙に納得したように言う

「すげえ!!;」

「だから動く:」

スパッ

坂田がまた動いたことに怒鳴ろうとした京助が足に絡んでいた触手から力が抜けたことで怒鳴るのを途中で止めた

「:捻挫:くらいね;」

中島がほくそえんだ

「そういうことですか:;」

南が同じくほくそえんだ

「だ——————————————————————」
「——————————————————————ッ!!;」

緊那羅きんならの光が京助の足を掴んでいた触手を切ったらしく京助と3馬鹿がお約束のごとく落下を始めた

「う:」

「慧喜!~?」

微かに動いた慧喜えきのまつげを見て悠助が慧喜えきの名前を呼ぶ

「悠助:~!! 怪我は!~? どこも怪我してない!~?」

慧喜えきが飛び起きて悠助の体を見る

「僕は:全然:でも慧喜:~」

「よかった:」

言いかけた悠助の体を慧喜えきが抱きしめた

「俺は悠助が怪我してないなら大丈夫:」

悠助の手を取って慧喜えきが微笑んだ

「:悠:いい嫁さんもらったなあ:チクショウ;」

浜本が口の端を上げて言った

「:アイツは!~?」

慧喜えきが思い出したように物体の方向を見た

「…何してんだアイツ等…」

ハルがぼそつと呟いた

「…さあ…」

ミヨコが答えた

「義兄様…馬鹿っぽい」

慧喜^{えき}が顔を上げてみたのはいいだけ団子になってこんがらがってウゴウゴしている京助と3馬鹿

「見てないで助けんかいッ!!!」

坂田が怒鳴る

「…ッ」

どうやら落下した時に誰かの何かが当たったのか中島が大事なところを抑えて振るえている

「重いッ!!!」

一番下敷きになっている京助が怒鳴った

「いや…だって出られないし」

結界内の一人の生徒が言うのと生徒一同揃って頷く

「ギャー!!! 南が白目むいてるッ!!!」

隣にいた南を見て坂田が叫ぶ

「早くバラけろバラけろ!!!」

ウゴウゴ蠢きながらなんとか絡みを解除し南を人間タンカしつつ京助達が結界の側にやってきた

「悠助…ここにいて」

慧喜^{えき}が悠助の肩に手を置いて立ち上がった

「慧喜…?」

悠助が慧喜^{えき}を見上げた

「お前等悠助に怪我させたら毛皮にするからな」

ゼンゴを睨んで慧喜が言った

「…本当にしそうなんだやな」

ゼンが呟いた

「慧喜^{えき}； お前大丈夫なんか？；」

京助が南を下ろしながら慧喜^{えき}に聞く

「俺はそんなにヤワじゃないよ義兄様：言っただでしょ？ 俺は悠助

の子供を産むって：」

慧喜^{えき}が手を上げると投げ捨てたはずの鉤が現れた

「だから：大丈夫。：待ってて悠助」

泣きそうな顔で慧喜^{えき}を見上げた悠助の頭を慧喜^{えき}が笑顔で撫でた

「僕：僕は：僕も何かできないかな：ツ：僕だって慧喜^{えき}を守りたいよ：っ」

悠助が慧喜^{えき}に抱きついた

「：悠：」

白目をむいてる南を突付いたり頬を引っぱったりの手厚い看護（飯）をしながら京助達が悠助を見た

「：じゃあ悠助：」

慧喜^{えき}がしゃがんで悠助と目線を合わせた

「アイツを倒したらね：」

慧喜^{えき}が微笑んだ

「俺を思い切り抱きしめてそして【おかえり】って笑って言って？」

地面に着地した緊那羅^{きんなら}が物体を見上げた

『キヨ：ギヨ：』

ゴボツと大きな音を出しながら京助を探しているようなその物体に緊那羅^{きんなら}が顔をしかめた

「緊那羅！」

隣にスタンという着地音と微かな風を感じて緊那羅^{きんなら}が隣を見る

「慧喜^{えき}：！大丈夫なんだっちゃ！？」

いたるところに擦り傷を作った慧喜^{えき}を見て緊那羅^{きんなら}が慧喜^{えき}に聞いた

「大丈夫：それより：」

慧喜^{えき}が物体を見上げる

「コレの元になった黒い玉って：宝珠だと思う」

慧喜^{えき}が言う^{きん}と緊那羅^{きん}が驚いた顔をした

「な…じゃあ…【天】か【空】の仕業^しってことになるっちゃよ!？」

緊那羅^{きん}が言う

「だってそうとしか考えられないじゃない…黒…赤に並んで最強の宝珠^{ほうしゆ}って聞いたことある…だから持つてるヤツ^{やつ}っていったら…」

『ギギギギギギギ…』

慧喜^{えき}の言葉が終わらないうちに物体が触手を走らせてきた

「でも私は黒い宝珠^{ほうしゆ}なんて見たことないっちゃ!！」

触手をバク転でかわしつつ緊那羅^{きん}が言う

「俺^{おれ}だってそうだよ!!！」

慧喜^{えき}が鉤^{かぎ}を軸^{えき}に高く飛び上がり物体に鉤^{かぎ}を振り下ろす

「でも! でもだとしたらどうして…【時】^{とき}がくるまでは…ッ」

緊那羅^{きん}が触手を避けつつ言った

「そんなの俺^{おれ}にだってわからないッ!! でも…俺^{おれ}は【時】^{とき}がこようがどうなるうが悠助^{ゆうすけ}を守るだけッ!!！」

御輿^{ごよ}の上に着地^{えき}した慧喜^{えき}が叫んだ

「慧喜^{えき}…」

悠助^{ゆうすけ}が土埃^{えき}の向こうの慧喜^{えき}をじっと見ている

「京助^{けいすけ}…僕^{ぼく}…」

言いかけた悠助^{ゆうすけ}の頭に京助^{けいすけ}が手を置いた

「何もできないのは俺^{おれ}だって同じ」

そう言いながら京助^{けいすけ}が悠助^{ゆうすけ}の頭を軽くポフポフと叩いた

「俺等^{きん}は緊那羅^{きん}や慧喜^{えき}みたいにあんな風^{ふう}にや動けないし戦えない」

京助^{けいすけ}が物体の周りで激しく素早く動いては物体に向かって攻撃して
いる二人^{ふたり}を見て言う

「だから俺達^{おれたち}は俺達^{おれたち}にできることをやるしかないんだ」

悠助^{ゆうすけ}が京助^{けいすけ}を見上げると京助^{けいすけ}が悔^くしそうな顔で言った

「できる…こと?」

悠助^{ゆうすけ}がふと京助^{けいすけ}から顔をそらすと坂田^{さかた}と目が合った

「ま…ぶっちゃけ応援とお祈り？」

坂田が苦笑いで言う

「お祈り…」

坂田の言葉に少し考え込んだ悠助がキョロキョロと周りを見始めた
「悠？」

浜本がそんな悠助に声をかけた

「あった！！」

そして何かを見つけたのか悠助が駆け出した

「おい！？； 悠！！！？；」

駆け出した悠助を京助が追いかける

「京助！！； 悠！！；」

中島が叫んだ

「危ないぞッ！！；」

「もどってこー————い！！；」

生徒達も声を張り上げて呼びかけるが悠助は止まらずどこかに向か
って走っていく

「悠助！！； どこいくんだやなッ！！；」

気付いたゴが低い姿勢で走り出す

「悠助に怪我させたらゼン等は毛皮になるんだやなッ！！；」
ゼンもゴに続く

「おい！！； 何処行くんだよ悠ッ！！；」

悠助の手を掴んだ京助が悠助に聞いた

「神社ッ！！ お祈りするんだもんッ！！」

悠助が向かっていた方向には本殿の神社の社が御輿の向こうに立っ
ていた

「ばっかッ！！； アソコいくには…；」

京助が御輿のすぐ側で動いている物体を見てそして少し考え込む

「…振り落とされんなよッ！！；」

「え…わッ！！；」

悠助を担いだ京助が全力疾走で御輿の横を通り過ぎた

「義兄様!?!」

慧喜^{えき}が自分の後ろを通り過ぎた京助に驚き名前を呼んだ

「速ッ!?!」

浜本が声を上げる

「さすが年中早朝マラソン（遅刻）で鍛えてるだけあるナァ…; 速い速い」

坂田が言った

「京助!;; つなにしてるんだっちゃッ!?!」

物体の触手の上にいた緊那羅^{きんなら}が京助を見て言った

『キヨ:ユ:トキ:』

緊那羅^{きんなら}を乗せた触手を含め三本の触手が動き出した

「悠助!?! 義兄様!?!」

慧喜^{えき}が叫ぶと一斉に触手が京助と悠助に向かって走り出した

「ん:馬鹿ッ!?!」

緊那羅^{きんなら}が触手の上を走りだしたその時

『ギューイイイ!! ギギギ:』

物体が声を上げ御輿をなぎ倒した触手二本が動きを止めた

「:何だ?;」

よく見ると二本の触手から白い煙が上がっている

「:なんだか:痛がってない?」

ミヨコが呟いた

「:もしかしてお供え物の中に何か苦手なものあったんちゃう?」

浜本が言う

「:紅生姜」

「ソレはお前の苦手なもんだろ」

中島が言うと坂田が突っ込んだ

「:答えは:」

南がぼそつと声を出した

「あ、気がついた：」

生徒の一人が南に向かって手を振った

「あそこにいきやわかる：な」

坂田が立ち上がった

「お祈りは悠と京助に任せて」

中島も立ち上がる

「俺達は俺達にできることやりませう」

南が中島と坂田の手を借りて立ち上がった

神社の社に辿り着いた京助が悠助を下ろし振り向いた

「好きなだけ祈れ悠ッ！！；」

半分ヤケになっているのか京助が両手を広げて触手を向かえる

『キョ：ウ：』

ゴポツと音をさせた物体から新たに5本の触手が生まれた

「京助！！」「義兄様！！」「京助ッ！！」

ゼンゴと慧喜^{えき}そして緊那羅^{きんなら}が叫んだ

「来るなら来いッ！！；」

ガラガラと鈴をを鳴らす音が結界の中に響いた

「神様ッ！！　お願いしますッ！！」

パンパンと手を叩き合わせて悠助が大きな声で祈り始めた

「緊那羅^{きんなら}！　そっちは頼むんだやな！」

ゼンゴが一番近い触手2本に攻撃をし始める

「わかったっちゃッ！！」

自分が走っていた触手を緊那羅^{きんなら}が思い切り叩く

「こっちくるなッ！！」

そして慧喜^{えき}がもう1本に向かって鉤を振り下ろした

「後1本残ってるッ！！；　京助ッ！！」

結界の中からミヨコが叫ぶとハッとしたようにゼンゴ、緊那羅^{きんなら}、慧^え喜^きが勢いよく京助に向かっていく触手を見た

「京助——————————————ッ！！」

『ギューキイイイイイ!!』

緊那羅きんならの叫んだ声と同じくらいの物体の悲鳴らしき声に全員が動きを止めた

「な…」

シュウシュウと白い煙が上がっている物体の下の方にはお供え物とされていたお菓子やら果物やらを両手に持ってポカンとしている3馬鹿

「…どれかがやっぱ効いたみたいだぞ;」

中島が自分の腕の中のお供え物を見と言う

「…どれだろ;」

南が持っていたキュウリを試しに物体に投げつけてみるが軽く跳ね返って地面に落ちただけだった

「どれだ?;」

坂田が手に持っていた塩を物体に向かってぶちまけた

『ギューイイイイイ!!』

「うおおお!!;」

坂田が塩をかけた部分から白い煙が上がり物体が声を上げた

「…塩?」

南と中島が坂田の手の中にある御輿の時に撒く塩をみた

「…塩…だな」

坂田が呟くと3馬鹿が顔を見合わせた後ニヤツと笑って一斉に物体を見上げた

「いっくぜえッ!!」

中島が倒された御輿に盛られていた塩がのった皿を手を持ち勢いよく物体に塩を投げつけた

「健全一般中学生をなめんなよッ!!」

南が同じく倒されていた子供御輿の塩が乗った皿を手を持って塩を撒きつけた

「はっかったの塩————————————————————ッ!!」

坂田が皿ごと塩を物体に向かって投げた

『ギュギイイイイ！！』

塩がかけられた部分から大量の白い煙を上げながら物体が悲鳴を上げる

「おおおお！！ 効いてる効いてるッ！！」

「でかした！！」

「やれやれ——ッ！！」

意外な活躍をしている3馬鹿に向かって結界内の生徒から歓声と声援が巻き起こった

「あいつら……」

京助が苦笑いで3馬鹿を見た

「京助……」

悠助が京助を呼んだ

「どうした？ 祈ったんか？」

京助が悠助を見た

「お賽銭忘れた」

「……」

眉を下げて言った悠助に京助がポケットから無言で10円玉を取り出し賽銭箱に投げ入れた

「神様ッ！！ お願ひします……ッ」

真剣に両手を合わせて祈る悠助を見て京助が頭を掻いた後両手を合わせ目を閉じた

「ギャ————————！！！！； ソルトショ
ック——！！；」

南の声に京助が振り返ると塩を投げつくした3馬鹿が塩の代わりになるような物をお供え物の中から探している

「ばッ……； 逃げろお前等ッ！！……」

京助がまだ祈っていた悠助を抱えて階段を飛び降りた

『ギョ……ユウ……』

ゴボゴボと物体が再び動き出す

「京助！！　まだお祈り終わってないよッ！！」

悠助が足をバタバタさせながら言った

「こっからでも届くッ！！」

動き出した触手から全力で逃げながら京助が叫んだ

「義兄様ッ！！」

すぐ近くにいた慧喜えきが京助を追ってきた触手に鉤を振り下ろした

「慧喜！！」

悠助の顔がぱあっと明るくなった

「サンキュ慧喜；」

京助が慧喜えきに向かって言う

「何してたんだっちゃッ！！　危ないじゃないっちゃかッ！！」

緊那羅きんならが京助の隣を走りながら言った

「俺達にできること」

京助がへっと笑いながら答える

「は？；」

緊那羅きんならが疑問系の声を出した

『ド…トキ…：ギューイイイイ！！』

今までにない大きな声を上げた物体が京助と悠助めがけて覆いかぶさろうとしはじめた

「ッ——————————————！！；」

京助と悠助を背中に庇いながら緊那羅きんならが武器笛2本を交差させ物体を迎え撃とうとする

「京助ッ！！；」

「悠助————————ッ！！；」

「ラムちゃんッ！！　京助！　悠！！」

もはや誰が誰を呼んだのかわからない声が結界内に飛び交ったその時

パァン！！！！！！！！！！

「なあああッ！！；」「だあッ！！；」「きゃあッ！！」「うおお！！；」

というまるで巨大風船が割れたような音と強風、そして生徒達の悲鳴やらが巻き起こった

「うわあッ！！；」

悠助が京助にしがみついた

「わッ；」

「ッ！！！！；」

その強風でよろけた緊那羅きんならを支えつつ京助が足を踏ん張って悠助をしつかり掴みながら強風に耐える

「なんな…んだッ！！；」

京助が細く目を開けていった何が起こっているのかを見ようとする

「たぶん結界が壊されたんだっちゃッ；」

緊那羅きんならが京助の腕につかまりながら言った

『ギューイイイイイ！！』

強風の中聞こえた物体の声

「ってか結界だか壊れたって…じゃあ…あいつは…！！」

京助が物体の方に顔を向けたが強風で巻き上がった砂埃で目が上手く開けられない

「目に砂はいった…っ；」

悠助が言々と京助が悠助を下ろし緊那羅きんならと自分の間に匿う

スカカカカカカカカ

パチン

誰かに抱きしめられたかと思うと硬い何かが軽快に続けて落ちるような音と指をはじく音が聞こえ強風がピタッと止まった

「……？；」

京助がおそろおそろ目を開けると目の前にふわっと靡いた布

「タカちゃん!! きよんがらんツ!!」

悠助が言った

「オライ等もいるんだがね」

ひょうひょうとした声が聞こえて京助が振り返ると頭にポフツと置かれた手

「あ…」あしゅら「阿修羅…」

きんなら緊那羅と京助が同時に言う

「結界はこんがら矜羯羅つちよが張り直してくれたし…」

あしゅら阿修羅がニツと笑った

「こんがら…つちよ…」

きんなら京助と緊那羅がこんがら矜羯羅をチラッと見た

「…ブツ；」

そして京助が噴出すとソレを見ていたせいたか制多迦がヘラリ笑いこんがら矜羯羅にお約束の玉をくらう

「…殴るよ？」

こんがら矜羯羅が振り返ってあしゅら阿修羅に笑顔（殺意100%）を向けた

「京助!! きんなら緊那羅!! 悠!!」

3馬鹿が京助達の元に走ってきた

「お前等無事だったか」

京助がホツとした様な顔をした

「慧喜えきっちゃんの怪我はけんだっば乾闥婆が見てくれてるぞ悠」

南がクイツと親指で後ろを指した

「けんちゃん…?」

悠助が京助から離れて南が指した方を見るとけんだっば乾闥婆がえき慧喜に何かしているのが見えた

「んで…後はコイツの処理か」あしゅら

あしゅら阿修羅が物体を見上げた

「…ってか今コイツ動いてねえんじゃねえ?」

中島が呟いた

「ああ…そりゃ動いてるわけないわ〜見てみ?」

阿修羅あしゅらがケラケラ笑って物体を指差した

「…かるらん！！」

阿修羅の指差した方を見た悠助が名前を呼ぶと悠助の声が聞こえたのか掲げていた右手を下ろし迦楼羅かるらが京助達に近づいてきた

「無事のような」

ふっと笑って迦楼羅かるらが悠助の頭を撫でた

「遅いんだよ； 来るのがッ；」

京助が呆れた苦笑いで言った

「まあまあ…とにかく先にあいっだろ？」

阿修羅あしゅらが言うと同が物体を見上げる

「問題はどうかやって倒すか…」

阿修羅あしゅらがブツブツ言った

「弱点はわかってるんだけどねえ； もう塩ないし」
南が言う

「何？ アイツは塩弱点なん？」

阿修羅あしゅらが聞くと3馬鹿がうなずいた

「…ほほうほうほう…そっかそか」

阿修羅あしゅらが何かに納得して何度も頷くと物体を見上げた

「なあ矜羯羅こんがらっちょ…一時的に結界一瞬だけ開けるか？」

何か考えがあるのか阿修羅あしゅらが矜羯羅こんがらに言った

「…できるけど…その呼び方やめてくれない？」

矜羯羅こんがらが阿修羅あしゅらを軽く睨みながら言う

「そっかそか…後は…だっぱ——————————————————————」

「！！」

大声で阿修羅あしゅらが乾闥婆けんたつぱを呼ぶと顔を上げた乾闥婆けんたつぱの後ろで笑いを堪えているようなしぐさをしている慧喜えきも見えた

「ちよいちよい——————————————————————」

ツカツカとあからさまに怒っていますという歩き方で乾闥婆けんたつぱがやってきた

「なんですか？」

そしてやってくるなり阿修羅^{あしゅら}に必殺チョップを笑顔で放った

「相変わらずイイ切れ味の…；　で…とどめはかるらんと」

乾闥婆^{けんたつば}にチョップされた頭をさすりながら阿修羅^{あしゅら}が迦楼羅^{かるら}を見る

「んはいらんといっているだろぅがッ！…；　たわけッ！…；」

「むやみに炎を出さないでください」

迦楼羅^{かるら}が怒鳴ると小さく炎が出て乾闥婆^{けんたつば}が笑顔で迦楼羅^{かるら}の前髪を引っ張った

「じゃ…いくよ？」

矜羯羅^{こんがら}がスツと左手を前に出した

「いいですよ」

乾闥婆^{けんたつば}が一步足を下げる

「は…い残りの下がって下がって」

阿修羅^{あしゅら}が3馬鹿の背中を押して迦楼羅^{かるら}、乾闥婆^{けんたつば}、矜羯羅^{こんがら}から離れる

「しっかし…よく思いつくよなア；　頭いいんだなお前」

中島^{あしゅら}が阿修羅^{あしゅら}に言う

「だ…か…ら…；　オライは一応ヨシコ^{あしゅら}の教育係で…」

パチン

言いかけた阿修羅^{あしゅら}の言葉が矜羯羅^{こんがら}の指をはじく音で止まり先程と同じように物凄い強風が巻き起こった

「何とかならねえのかこの風ッ！…；」

阿修羅^{あしゅら}と制多迦^{せいたか}に守られながら京助が言った

「結界の中は空間^{あしゅら}が違うから仕方ないんだわな…；」

慣れているのか阿修羅^{あしゅら}が笑いながら答える

「いでっ；　今なんか固いの当たったッ！…；」

坂田^{あしゅら}が頭をさすっている

乾闥婆^{けんたつば}が手首の布を解いて地面を蹴り飛び上がった

「…っといっけね；　忘れてたわ…タカちゃんここ任せていいか？」

阿修羅あしゅらが制多迦せいたかを見て言う

「…ツケ」

制多迦せいたかが親指を立ててヘラリ笑うと阿修羅あしゅらが迦楼羅かるらの元に駆けて行く

「…くから離れないようにね」

そう言うのと制多迦せいたかが指で宙に何かを書き始めた

「何…；」

強風に踏ん張りながら3馬鹿と京助、緊那羅きんならと悠助が制多迦せいたかに注目すると制多迦せいたかがなぞった宙から光が生まれた

「おおおお！！；」

3馬鹿と京助が声を上げる

「…んがらみたく上手く張れないんだけどね；」

その光が一同を包むとソコだけ風が止んだ

「充分すげえ…タカちゃん；」

中島が自分を包んでいる光に手を伸ばしながら言う

「慣れた慣れたと思ってても…こう次から次にビックリショーが展開するとやっぱドッキリするよねえ；　いくら俺等でも」

南が苦笑いで言う

「てかさ…どうすんだ？」

中島が京助に顔を向けた

「何が」

京助が中島に返す

「いや…こんな出来事のフォロー…もう中国雑技団ですよくキダムですよ…は…いくらなんでも…もう…さ；」

中島がどもりながら言う

「…そう…だよね；　変な生き物が出て来て犬がいきなり話して人型になってゲームみたいな技使って…不思議な服着て戦い始めて…挙句人数増加して…だしね；」

南が緊那羅きんならと制多迦せいたかを見た

「…話すしかねえだろ」

京助がさらっと言った

「絶対何かかんか言われんぞ?;」

坂田が言う

「しょうがねえじゃん?; 信じる信じないってか…本当の事なんだし」

京助が緊那羅きんならを見た

「その方俺もスッキリするし…お前もスッキリすんじゃない?」

京助が緊那羅きんならに聞く

「え…?」

いきなり話題を振られた緊那羅きんならが京助を見た

「私は…」

「とにかく!! …たぶんアイツはおそらく…ってか間違いなく俺と悠を狙ってた」

緊那羅きんならの言葉を京助が遮った

「…悪かったな巻き込ん…」

スパン!

バシッ!!

ゲシッ!!

3馬鹿に向かって謝りかけた京助を3馬鹿が順に叩いた

「阿呆か」

坂田が言う

「京助阿呆なの?」

制多迦にしがみついていた悠助が聞く

「そうだぞ…悠!! 京助は阿呆も阿呆!! 超阿呆なんだぞ」

南が言った

「なっ…;」

京助が後頭部を押さえながら顔を上げた

「誰が巻き込まれたのが嫌だっていってますかね? 京助君」

「迦楼羅!!!」（かるら）

乾闥婆けんだつぱの声に上を見た迦楼羅かるらの目に入ったのは俗に言う【大波小波】の【大波】も大波のぶっちゃけ【大々波】と言ってもおかしくはないほどの海水の壁

「…まったく…」

阿修羅あしゅらを軽く睨にらんだ迦楼羅かるらが今度は大津波っぽい海水の壁を睨にらんだ

「おおお!!!」

ゼンゴの結界の中の生徒、京助や3馬鹿せいたかも制多迦の結界の中で声を上げた

「ねえねえ!!! この結界大丈夫なのッ!?!?」

ミヨコがゼンゴに聞く

「一応耐水性っぽいんだやな」

ゴがニツと笑って言う

「てかお前等はいいいのか?」

ハルがゼンゴに聞く

「ゼン等はイヌカキ得意なんだやな」

ゼンがニツと笑って答えた

「かるら…ん…ファイヤー…」

「やかましいッ!!!!!!」

阿修羅あしゅらが叫ぶと迦楼羅かるらが怒鳴った

「迦楼羅!!!」

今度は乾闥婆けんだつぱが怒鳴った

「…」

乾闥婆けんだつぱに怒鳴られた迦楼羅かるらが阿修羅あしゅらをギラツと睨にらんだ後思い切り息を吸い込むと思いい切り巨大な炎を吐き出した

「うっわ; ココまで暑い;」

南が迦楼羅かるらの吐いている赤い炎を見て言った
「迦楼羅かるらの炎は凄く熱いんだっちゃ」

緊那羅きんならが言う

「…まさに火気厳禁…竜田揚げが燃料のライターだな」

坂田がへッと笑いながら言った

迦楼羅かるらの炎に熱せられた海水の壁が白い粉状になって物体に降りかかる

『ギューイイイイ!!』

白い煙を上げながら物体が悲鳴のような声を上げた

「海水は熱せられると塩になるんだっぴょん」

阿修羅あしゅらが物体を見上げてニッと笑って言った

「…どうして邪魔した？」

白い布から見えた口元に笑みはなく

「それなりの覚悟があつてのことだろう？」

誰かに向かつての言葉らしく

「…まあ…いいさ…暇つぶしにはなつたし…しかし驚いたよ【天】

【空】両方がこんなにも仲良くなっているなんてね」

白い布がハタハタと夜風に靡く

「でも…やっぱりちよつと腹が立ったかな…折角面白かったのに…」

白い布からスツと伸びた黒い腕

「だから…オシオキだ」

白い布から見えた口元にはうつすらとした笑みが浮んでいた

ノイズ混じりの演歌がエンドレスで流れピンク色の提灯がぼやっとした光を放っている

「…信じられねえよな…； やっぱ」

浜本が言々と数人の生徒が頷いた

「でも見たし…実際…現実なんだよな」

一人の生徒が言った

「京助と…悠が生粋の人間じゃないかもってのも…」

ハルが京助を見た

「お前等は知ってたのか？」

浜本が3馬鹿に聞く

「まあ…うん」

坂田が頷く

「ラムちゃん…と慧喜^{えき}とか…きよ…矜羯羅^{こんがら}さんもミヨ達とはちよつと違うんだ…」

ミヨコが少し後ろの方にいる摩訶不思議服集団に目を向けた

「…あ……」

京助がガシガシ頭を掻いた後顔を上げた

「信じる信じないは勝手だけどさ…まあ…なんだ…その…また…こんなことがあるかも…知れねえんだわ」

生徒達がシン…となったせいかわりの雑音が大きく聞こえる中京助が話し始めた

「…だから…」

京助が口籠ると浜本が京助を後ろから羽交い絞めにした

「な……」

京助が驚いて浜本を見た

「はあい一人一回ずつ」

浜本が言うとうとハルが京助に軽くでこピンをした

「いっ…」

京助が小さく声を上げる

「ばあか」

ハルがふつと笑ってその場から立ち退くと今度はミヨコが京助の両頬を引っ張った

「なんでもっと早く言ってくれなかったのさ」

最後に京助の両頬を叩いてミヨコがその場をどけると男子生徒が京助の頭を叩いた

「何なんだよッ！…！」

京助が怒鳴る

「まだまだ!! ハイ! 次!!」

浜本が暴れる京助を押さえつけて言うといつの間にか列を成している生徒達が京助を叩いたり抓ったりしながら一言二言かけて次の生徒にバトンタッチしていく

「いい環境に生まれたんだナア竜のボン」

阿修羅あしゅらが笑いながらその様を見ている

「いくら叩かれてもあれ以上馬鹿になることはないと思いますし…

いいんじゃないですか?」

乾闥婆けんたつばが言う

「にしてもスゲかったよなあ…さすがに死ぬかと思ったけど」

中島が思い出して言った

「本当本当!! …でも夢じゃないんだよね…夢に思えても」

南が事前と何も変わっていない本殿前をぐるり見渡して言う

「結界の中は違う空間だからな…術者が倒れぬ限りどんなに壊れようが物は元に戻るのだ」

迦楼羅かるらが言った

「怪我は治らないんだな」

坂田がチラッと目を横に向けた

「あ…私のかすり傷程度だっちゃし…」

緊那羅きんならが苦笑いで言う

「俺のは乾闥婆けんたつばが大分看てくれたし悠助に怪我がなかったからもう平気」

浴衣に戻った慧喜えきが悠助の頭に頬すりしながら言った

「俺でラストだな」

浜本が京助かを放して間髪いれずに京助の頭を思い切り頭を叩いた

「って————————————ッ!!!」

京助が頭をおさて叫んだ

「俺等の怒り受け取れ」

浜本がさすがに痛かったのか手をプラプラさせながら舌を出して言う
「だから巻き込んで悪かったって…ッ；」

スッパパパン！！！！

京助が言いかけると今度は3馬鹿がそれぞれの履いていた靴で京助に叩きかかった

「全然わかってないようですが皆さん」

靴で自分の肩をトントン叩きながら中島が生徒達を見渡した

「何がだよ！； バコバコ集団で叩きやがってッ！； そんなに嫌だったなら…」

スッパパパパン！！！！

3馬鹿が再び京助を叩いた

「誰かが嫌だったって言ったか？」

坂田が言う

「さっきも言ったはずだけどな俺」

中島がトフトフを靴で軽く京助の頭を叩く

「俺だったら嫌なことあった場所にはいたくないんだけど」

南が言うとう京助が顔を上げた

「…一番ツライのお前だろ」

坂田が京助の肩を軽く叩いた

「ミヨたちが怒ってるのは今回のことじゃないよ京助が話してくれてなかったって事…そりゃ親友ってレベルじゃないかもしれないけど友達だよ？」

ミヨコが言う

「できることをするしかないならできるとするさ俺達だって」

ハルが京助の頭を撫でた

「…」

ぽかんとしたままの京助の肩に南が両手を置いた

「ラムちゃん達みたく戦いとかできない俺等がお前と悠にしてやれることっていったらたった一つしかないかもしれないけどいいですかね？」

南が京助の両肩を叩きながら言う

「何だよ…」

京助が小さく呟いた

「お前と友達でいることッ」

中島が京助の首に腕をまきつけて言った

本殿前にぐるりできた人垣

和楽器を手に持ったお囃子担当の生徒達が境内の階段に並んでいる

「ラムちゃん口の端切れてるみたいだけど…大丈夫？」

あの出来事の事後にきた宮津が緊那羅きんならの顔をのぞきこんだ

「あ…大丈夫だっちゃ；」

緊那羅きんならが苦笑いを返して言った

プツンとマイクの電源が入る音がしてお約束のキイイインという音が響く

「…無理なところは私がフォローするからね」

宮津が小さく緊那羅きんならに耳打ちした

「一体何が始まるのさ」

矜羯羅こんがらが規律よく並んでいる男子生徒群を見て言った

「ヨサコイって言うてね」

慧喜えきに抱かれた悠助が矜羯羅こんがらを見上げて答える

「ヨサコイ？」

乾闥婆けんたつばが悠助に聞き返す

「うん！ ソーランソーランって踊るんだ」

悠助が手だけを動かしてヨサコイの踊りをしてみせる

「楽しそうだな」

阿修羅あしゅらがカンブリを片手に笑った

「あ、はじまるんだやな！！」

イヌに戻ったゴが尻尾を振った

和笛の音色が夜宮の夜空に響いた

「ただいまー!!」

玄関の戸をあけた悠助が家の中に向かって元気よく言った

「おかえりなさい」

母ハルミが小走りで出迎える

「…あっ!!」

靴を脱いでいた京助と緊那羅^{きんなら}、そして悠助の後ろにいた慧喜^{えき}が悠助が上げた声に動きを止めた

「…忘れモンか? 買い忘れなら明日…」

京助が靴を脱ぐ動きを再開しながら言う

「慧喜^{えき}!!」

悠助が慧喜^{えき}を見上げると慧喜が笑顔で首をかしげた

「しゃがんで?」

悠助に言われるがまましゃがんだ慧喜^{えき}を悠助が思い切り抱きしめた

「おかえりっ」

「あ…:うん…:ただいま…」

慧喜^{えき}が幸せそうな顔で目を閉じた

チリリ…と風鈴がまだ少し肌寒い北海道の夏の夜風に鳴った

「あれ…?」

風呂があいたことを告げに来た緊那羅^{きんなら}が物抜けの殻の京助の部屋の戸を閉めた

「…どこいったんだっちゃ…」

顔を上げ右に行こうか左に行こうかと緊那羅^{きんなら}がまるで横断歩道でも渡るかのように首を振ると右に行くことが決まったのか向きを変え右方向に足を進めた

古い造りの栄野家はやたら広く部屋数が多いがすの殆どはまったく使われていなく掃除すらまともにされていなかった

「…京助?」

奥へ奥へを足を進めた結果 緊那羅^{きんなら}が辿り着いたのは【元・開かずの間】

「なにしてるんだっちゃ：明かりもつけないで」

月明かりだけが差し込んで薄暗い部屋の中窓際にいた人影に緊那羅きんならが声をかけ室内灯の紐に手を伸ばした

「つけるな」

京助が短く言った

「あ：うん：；」

緊那羅きんならが慌てて手を引っ込める

「：なしたよ」

小さく京助が聞く

「風呂：」

緊那羅きんならが躊躇いながらとりあえず主語を言った

「：ああ」

もぞつと動いて京助が返事をするところから長く沈黙の時間が流れた

「：もう少ししたらいくから：」

京助が小さく言った

「だから：」

ふわつと香ったのはたぶん今日の入浴剤で少し湿っているのはたぶん緊那羅きんならが使った後のタオルだからで

「：京助だって」

そしてその上から感じたのは緊那羅きんならの体温

「京助だっていっぱいいっぱいじゃない：」

すぐ側から聞こえた緊那羅きんならの声に京助がピクツと動いた

「顔は：見えないっちゃ」

緊那羅きんならがゆっくりと京助の頭を撫で始める

「：だからなんだよ：」

京助がタオルを掴んで顔を隠しながら小さく言う

「：泣きたい時は泣くんだって京助が言ってたじゃないっちゃ？」

緊那羅きんならが優しく静かに言った

「私が守るから：京助の心も全部守るからだから：泣いていいっちゃ」

京助の頭に自分の頭をつけて緊那羅きんならが言う

「：俺：ツ：」

鼻を吸る音が聞こえた

「俺って：何なんだよ：ツ！！！！俺が栄野京助じゃなかったら：

俺が栄野京助だからまた：ツ！！」

緊那羅きんならのシャツを掴んだ京助の手は震えていた

「俺：ツ：」

何かが切れたかのように小さな子供のように泣き出した京助の頭を
ゆっくりと緊那羅きんならが撫でる

「今私にできること：」

泣きしゃっくりが起こり始めた京助を緊那羅きんならが抱きしめた

「貴方を守ります：」

緊那羅きんならが小さく言った

本祭り当日子供御輿に出る小学生の付き添いや天狗行列の旗持ちを
して小遣いを稼ごうと名乗りを上げた正月中学校の生徒が本殿社務
所前に集まっていた

「あれ？ 坂田は？」

自分が一番最後だと思っていた京助が見えない坂田の行方を南と中
島に聞いた

「あゝ：なんだか柴田さんが昨日警備してて怪我したただかで：」

南が言う

「：それ本当？」

「うおおおお！！！！？：」

いつの間に後ろにいたのか本間の声に中島と南が飛び上がった

「ほ：本間ちゃん：」

南が苦笑いで本間に手を振った

「柴田さん怪我したって本当？」

旗持ちに参加するのか制服姿の本間の手には2メートルくらいはあ

ろうかという大きな紫色の旗が握られている

「あ：ああ； 今朝電話来た：んだ； 遅れるかもって」
中島が言うとなも頷いた

「俺ンそこにはきてねえぞ？」

京助が言う

「どうせかけても寝てるから無駄だって坂田だってソレくらいわかってるわよ」

赤い色の旗を持った阿部が本間の隣にきて京助に言った

「何だよソレ；」

京助が黄色い布でタスキをしながら口の端を上げて言う

「じゃあ聞くけど起きてたの？」

阿部が京助に聞いた

「ほっぺについた赤い跡が全てを物語っているなあ…； さっきまで寝ておりましたってサア；」

南が苦笑いで京助の頬を指差した

「仕方ねえじゃん； 寝る気は無かったんだけど泣き疲れ…」

言った京助がハツとして言葉を止めた

「泣き疲れ？」

中島が京助を見ると京助の顔が赤くなった

「：泣いたの？京助」

阿部が驚いた顔で京助を見る

「だ：っ； …俺が泣いちゃおかしいですかいッ！…；」

半分ヤケになっていているらしい京助が声を張り上げて言う

「俺だって泣く気なかったさ！； でも緊那羅が…」

緊那羅きんならの名前が京助の口から出ると阿部がぴくツと反応した

「ラムちゃんが？」

南が京助に聞く

「：なんでもねえ」

豆絞り手ぬぐいを首からかけた京助が呟いた

「…そういや緊那羅きんならは？悠と慧喜えきはさっき見たけど…」

中島が子供御輿の方を見て言った

「ああ：立てないから後で来るって言ってた」

京助がさらっと答えると中島と南が揃って京助を見た

「：なんだよその顔；」

京助が南と中島を見て言う

「：いや：うん：いいんだよ？　京助君：男の子だしね。若いしね。」

南が爽やかな笑顔で京助の肩に手を乗せた

「は？；」

京助が疑問系の返事を返した

「あんまり無理させんなよ？」

中島もウンウン頷きながら京助の肩に手を乗せた

「：お前等：何考えてるんだか手に取るようにわかってるんだけどさ：あえて教育上それに触れないでおくわ：」

京助が乗せられていた中島と南の手を静かに剥がしながら言う

「それにご期待に添えないようですが緊那羅きんならはただ膝枕してくれてただけだしそれに：」

ヒュッ

ガンッ

風を切る音が聞こえたかと思うと何かをおもいきり棒で叩いた音がした

「あ：べちゃん？；」

南が阿部を見た

「あっそー！！」

持っていた旗でおもいきり京助を叩いた：：とかぶん殴った阿部が眉を吊り上げながら言うとフイッと背中を向けて大股で歩き出した

「：坂田きたら柴田さんの容態聞いておいてね」

本間はそう言う和阿部の後を追いかけていった

「：：どうする：コレ？；」

中島が白目をむいてる京助を突付いた

「どうするってもナア；」

南も京助を突付く

社務所の中からおっさん達が祭り着に着替えて出てくるとスピーカーからまたノイズ混じりの演歌が流れ始め本祭りの開始を告げた

【第八回・弐】お祭り神社（前書き）

祭り当日

昨日の出来事を栄野家で話し合っていた摩訶不思議服集団
それとは別に起こっていた事件とは

【第八回・弐】お祭り神社

「開けなかった…って」

緊那羅きんならが驚いた顔で言った

「そうだ」

迦楼羅かるらが頷きながら答える

「【天】も【空】も…扉が開けられなかったんだよ」

矜羯羅こんがらが壁に寄りかかって言う

「どうして…」

緊那羅きんならがが呟いた

「迦楼羅かるらや矜羯羅こんがら…制多迦せいたかの力でもあけられなかったということは…それ以上の高等な人物が何らかの術か…方法で空間を切っていたということになります」

乾闥婆けんたつばが言う

栄野家の開かずの間には悠助えきすけについていった慧喜えき以外の摩訶不思議服集団が集合していた

「…黒い…宝珠…」

緊那羅きんならがぼそと呟くと迦楼羅かるらの目が見開いた

「緊那羅きんなら…今なんと…」

迦楼羅かるらが緊那羅きんならに聞く

「え…あ…慧喜えきが…黒い宝珠からアノ生き物が生まれたかもしれないって言ってたんだっちゃ」

緊那羅きんならが答えた

「黒…」

矜羯羅こんがらも何処と無く驚いた顔をした

「…くらが知る中で最高位の…」

制多迦せいたかが呟く

「じゃあやっぱり黒い宝珠ってあるんだっちゃ？」

緊那羅きんならが聞くと乾闥婆けんたつばが頷いた

「僕も実物は見たことはありませんが…赤、黒それともうひとつ金…これらは最高位の宝珠だと…」

乾闥婆けんたつばが迦楼羅かるらを見た

「…金色もあるんだっちゃ？」

緊那羅きんならが聞く

「正確には…あったということになるかな」

迦楼羅かるらが言う

「今はもう無いんだよ…金の宝珠は」

矜羯羅こんがらが腕を組み直しながら言った

「迦楼羅かるらと制多迦せいたかがつけている赤い宝珠…ソレと対を張る位の…黒い宝珠を易々と使えるヤツが…いるとしたら…」

矜羯羅こんがらの顔が険しくなる

「…上…ですね」

乾闥婆けんたつばが言った

「でも！ だったらどうして京助と悠助を…！！」

【時】までは…

！！

緊那羅きんならが声を張り上げた

「落ちて着いてください緊那羅きんなら」

「たッ！！」

緊那羅きんならに乾闥婆けんたつばの結構強めなチョップが振り下ろされた

「ソレがわかれば苦労はしないでしよう？」

乾闥婆けんたつばがにっこりと笑いながら緊那羅きんならの頭から手をどけた

「…く達がコツチに来れたのは…たぶん誰かが自分の宝珠の力を解放して作ってくれたからだと思う」

制多迦せいたかがいきなり話題を変えた

「僕はてつきり緊那羅きんならか慧喜えきだと思っていたのですが…」

「え？」

乾闥婆けんたつばが痛そうに頭をさすっている緊那羅きんならを見た

「黒い宝珠を使う輩に対抗するとなれば…宝珠をひとつ犠牲にする

くらいの覚悟が必要となる：それでも勝てるかどうかだ緊那羅：今のお前はな」

迦楼羅かるらが緊那羅きんならに言った

「：も緊那羅きんならは頑張ったよね。偉い偉い」

制多迦せいたかがヘラリ笑ながら緊那羅きんならの頭を撫でた

「僕と戦った時より強くなっているね：」

矜羯羅こんがらもふっと笑って言うきんならと緊那羅きんならが赤い顔で俯いた

「そうですね：でも緊那羅きんならや慧喜えきじゃないとすれば：いったい誰が

：

乾闥婆けんたつばが一瞬優しい笑顔を緊那羅きんならに向けた後真顔になって考え込む

「吉祥きつしやうとか：じゃないんだっちゃ？」

緊那羅きんならが言う

「：それがだな：吉祥きつしやうの姿が見えなくなつてな」

迦楼羅かるらがさらつと言うと乾闥婆けんたつばが溜息をつき緊那羅きんならがぽかんとした

顔をした

「阿修羅あしゅらが探しているのですが：」

乾闥婆けんたつばが言う

「昨日けんだつばももしかしたらコッチに来てるのではないかと探しに行こう

とした矢先宝珠に呼ばれてな：しかし扉は開かないで：：」

迦楼羅かるらが溜息をついた

「一体ドコにいったんだか：：」

そして乾闥婆けんたつばと迦楼羅かるらが同時に溜息をついた

畳の上に敷かれた布団の上で上半身を起こしていた柴田が自分の手を見てソレから天井を見て溜息をついた

「：ヤキが回ってきたか：俺も：それとも：」

ガラッ

「柴田」

ふすまが開いて顔を見せたのは七分のズボンをはいた坂田
「これから御輿ですか？」

柴田が坂田に聞く

「ああ…まあ…うん」

坂田が頭を掻きながら答えた

「すいません俺がこんな怪我なんかしたから；」

柴田が自分の左肩をさすりながら申し訳なさそうに言う

「左肩の脱臼に左足の骨にヒビ、右足骨折に…体中に痣…ったく…」

坂田がふすまを開けたまま柴田の近くに歩み寄る

「お前ともあろうヤツが何してんだよ…ばあか」

坂田が柴田を見下ろして言った

「スイマセン；　ちよつと猫を；」

「猫より自分だろ」

言いかけた柴田の頭を坂田が叩いた

「ったく…昨日は本当…寿命縮まりまくりだぜ…」

坂田が柴田の髪を指でいじりながら言った

「あんま心配かけんな馬鹿」

「いっ；」

そう言いながら坂田が柴田の髪の毛を一本抜いた

「なにするんですか若；ハゲるじゃ…」

「白髪」

柴田の目の前に抜いた白髪を差し出して坂田が言う

「まだ白髪生やすには早ええんじゃねえか？…俺まだ13だし…せめて俺が20になってから生やせ白髪」

坂田が言った

「若…」

「…いってくるッ」

柴田の手の上に抜いた白髪を置いて坂田が部屋を出てふすまを閉めた

「…あと…7年か…」

白髪を摘みあげて柴田が呟いた

「…お前も…あの時のお前もこんな気持ちだったんだろうな…」

「…で？」

京助が視線の半分を受けながら目の前の人物に聞く

「…でって何よ」

残り半分の視線を受けながら京助の目の前にいるヨシコが返す

「なんでお前がここにいるんだ…」

京助が溜息をついた

「りゅー様の氣辿ってきたの」

さらっとヨシコが言う

「じゃなく…!!」

京助が裏手でヨシコに突っ込んだ

「…迷った」

中島が言うと言シコがぴくつと反応した

「…凶星か」

更に中島が言うと言シコがキツと中島を睨んだ

「何よ!! 何!!? 何なのよ!! 本当アナタムカツクわ!!」

ヨシコが怒鳴る

「まあまあヨシコちゃん」

そんなヨシコを南が宥める

「やっぱ貴方達がいるんですか」

人垣を突き進んできた坂田が片手をスチャと上げて京助達に声をかけた

「よっす坂田、柴田さん大丈夫か？」

京助が同じくスチャと片手を上げて言うと言坂田がその手にハイタッチしてきた

「ああ…今部屋でおとなしく寝てた」

南と中島にもハイタッチして坂田が言った

「んで…今日はヨシコだけ？ 昨日いなかったみたいけど」

坂田がヨシコを見て京助に聞いた

「昨日？」

ヨシコがきょとんとして聞き返す

「昨日一騒動ありまして…って知らないの？」

南がヨシコに言うのとヨシコが頷いた

「だって私…」

ヨシコが小声で言いながら俯いた

「…コツチにきてたのよ…でも」

ボソボソと聞き取れるか聞き取れないかの声でヨシコが言う

「迷ってました」

中島が言うのとヨシコの顔が赤くなった

「…ッ！！」

「うおッ！！！」

そしていきなり繰り出された強力そうな後ろ蹴りを中島が変なポーズでかわす

「アナタやっぱりムカつくわッ！！」

ヨシコが赤い顔をして怒鳴った

歩くたびにシャンシャンと鈴が鳴りわさわさと飾りが揺れる

「ねえちゃん寒くねえのか？」

「何食ってそんな乳でkinda？」

御輿担当のおっさん達に質問攻めされつつヨシコが御輿の後をついて歩く

「…案の定セクハラってるねえ；ヨシコちゃん…まあ酔っ払いの言うことだし軽く受け…」

ドゴッ

苦笑いで南が言ったその矢先背後から聞こえた破壊音に全員が振り返る

「…しつこいわ…」

コンクリートの歩道に開いた穴と青い顔のおっさん達

「そんな格好してっからだろが；」

京助が溜息をついてヨシコに歩み寄った

「そんな格好ってなによ！」

ヨシコが開けた穴から足を抜いて言った

「確かに：男心を萌え萌えさせる格好だよねえ：ヨシコちゃんの」
南がヨシコの全身を見て言うとはんのり顔を赤らめる

「目のやり場に困るというか；」

そしてハハッと笑ってごまかした

「小学生には刺激強いかな」

坂田が御輿を持って歩く小学生集団をチラッと見て言う

「アノくらい歳のじゃ刺激なんてわかんねえって；」

中島が言うと言とヨシコが中島を睨んだ

「ソレって私に魅力がないって事？」

ヨシコが中島を睨みながら言う

「は？；」

ソレに対し中島が素っ頓狂な声を出した

「それってすっごく失礼なことよ！！　そうよ！　失礼だわ！　本

当アナタって何処までムカつくのよ！！」

ヨシコが怒鳴る

「誰もんなこと一言も言ってるねえじゃん；」

中島が溜息をついて言った

「オーイ！　ウチワ係ー！！　掛け声！！」

ある家の前で止まった御輿の方から一人のオッサンが京助達に向かって声をかけた

「ウィーッス」

巨大なウチワを持った京助が駆けて行く

「：コレでも着てろ」

中島が自分の半纏をヨシコに投げて京助の後に続いた

「なっ：；」

投げられた半纏を顔で受け止めたヨシコが半纏を掴む

「嫌かもしれないけど我慢してね；」

南がヨシコに向かって両手を合わせ【ゴメン】の仕草をした後御輿の方に駆けていった

「せーの！！」

京助の声が響くとソレに続いて小学生の元気のいい声に合わせて御輿が揺すられ上げられる

ほんの一分もかからない御輿の舞が終わると家の人が鞆を持ったオッサンに封筒を手渡し御輿の小学生軍団が再び歩き始める

「ヨシコちゃんーん！ おいていくよー？」

半纏を掴んだまま後ろの方で固まっていたヨシコに南が呼びかける

「方向音痴なんだからしっかりついてこーい！！」

坂田も同じく声をかけた

「ヨシコおねえさーん！ 早くー！！」

慧喜に手を引かれた悠助も手を振りながら呼ぶと他の小学生も手を振ってヨシコを呼ぶ

「あ…まって！」

半纏を手を持ったままヨシコが駆け出す

「おねえさんヨシコっていうの？」

「何歳？」

「おっばい大きいね」

小学生の集団に囲まれたヨシコが両手を小学生とつないで歩く

「ヨシコじゃないわ吉祥っていうの」

小学生と手をつなぎながらヨシコが答える

「じゃあ何で京助たちヨシコっていつてるの？」

四年生くらいの女子児童が後ろからついてきている中学生男子軍団の中にいるウチワを持った京助を見と言う

「私は嫌なんだけどね」

ヨシコがその女子児童に苦笑いで答える

「…結構優しいところあんじゃん」

中島がそんなヨシコの後姿を見て言った

「ヨシコちゃんって同性に好かれるタイプだねー姉御肌っていうか…」

南が言う

「アノ子お前等の知り合い？」

男子生徒が興味津々な目つきで聞いてきた

「ええ乳してまんなあ……」

男子生徒が言うのと数人が揃って頷いた

「おッ！ アレに見えるは中島家……！」

南が言った

「ゆうちゃー……」

南の指差した先には紺の巻きスカートの裾をヒラヒラさせながら白い封筒を片手に満面の笑みを向けている中島家長女の蜜柑

「ミカ姉……」

中島が溜息をついて肩を落とすと京助と坂田が揃って中島の肩を叩いた

「お前もゆうって言うのか？」

慧喜が中島に聞く

「そうそう！！ コイツ袖汰ってんの」

南が中島を指差して慧喜に答える

「ふうん……同じゆうでも悠助の方が可愛い」

慧喜がキツパリ言い切った

「ハイハイ……」

中島が右手を振ってやる気なく返事をする

「あいかわらずメンコイなあミツカ」

鞆を持ったオッサンが蜜柑に言った

「褒めても何もでないよ河合さん」

そう言って笑った蜜柑が封筒を手渡した

「いいなあ……お前美人双子姉妹の姉持ちって」

男子生徒が中島に言う

「美人……」

中島が口の端を上げた

「可愛いじゃん蜜柑も林檎も」

男子生徒が返す

「そうかぁ? ;」

中島が蜜柑の方を見ると目が合い蜜柑がにっこり笑った

「…わかんね」

蜜柑から目をそらした中島が頭を掻きながら言う

「俺だったら蜜柑派」

男子生徒が言った

「俺も」

別の男子生徒が言う

「俺は…」

やいのやいのと盛り上がっている男子生徒を中島が半分呆れ顔で見ていると蜜柑が中島に歩み寄ってきた

「あれ? ゆーちゃん半纏は?」

一人だけ半纏を着ていなかった中島に蜜柑が聞く

「ああ…貸した」

中島がクイツと顎でヨシコを指した

「へえ…相変わらず優しくていい子ッ」

蜜柑が背伸びして中島の頭を撫でた

「やめろってのッ!!! ;」

口ではそういつつ赤い顔をしている中島だったが蜜柑の手を払うことなく撫でられている

「女の子には優しく」

蜜柑がにっこり笑って言う中島が赤い顔のまま頭を掻いた

「…お前蜜柑さんに弱いよな…」

京助が中島に小さく言った

「… ;」

凶星なのか中島が黙り込んだ

「あッ! 蜜柑!!」

ヨシコと手を繋いでいた小学生が蜜柑の姿を見て声を上げた

「蜜柑ねえちゃんだー！」

一年生らしき男子児童が蜜柑めがけて駆け出した

「ほらほら転ぶよ〜？」

蜜柑が腰を低くして男子児童を迎える

「…さすが保母目指してるだけあってお子様に人気あんねえ蜜柑さん」

南が頷きながら言う

「家事ができて子供好きで性格も顔もいい…いいなあ…」

浜本が中島の首に腕をかけて言った

「っつかお前地味にシスコンだよな」

男子生徒が言う

「はあ？；」

中島が素っ頓狂な声を出した

「俺なら断るし米の買出しとか」

男子生徒が言うと数人揃って頷いた

「いや…それは親父が単身赴任でいねえし…男俺一人だし…；」

中島が答える

「でも…だからってなあ？」

男子生徒が言う

「ゆーちゃん！ 頑張ってるね？ 今日ちらし寿司作るから」

蜜柑が小学生に囲まれながら微笑んだ

「…ああ；」

中島が照れながらも返事をすると思本が中島を叩いた

「…誰アノ人」

ヨシコが蜜柑を見て言った

「なんだか私の時とは打って変わっておとなしいじゃない？ そうよ！ おとなしいわ」

ヨシコがむっとした顔で京助達を見た

「そりゃそうだろ； 姉さんだし」

京助が言う

「お姉さん？」

ヨシコが蜜柑を再び見ると蜜柑と目が合い蜜柑がにっこりと笑った
「蜜柑優しいんだよ」

ヨシコと手を繋いでいた女子児童がヨシコを見上げて言う

「…可愛いじゃない」

ヨシコが赤い顔で呟いた

「可愛い子じゃない。ゆーちゃんもスミに置けないね」

蜜柑が笑いながら言う

「何が；」

ソレに対して呆れ顔で中島が返す

「アレは京助ンとこの」

「きょうちゃんの？」

蜜柑が京助を見た

「でもきょうちゃんに彼女さんいなかったっけ？」

「マジ！！？」

蜜柑がさらっと言った一言にほぼ全員が京助を見た

「…またこのパターンかよ…；」

京助が巨大ウチワを地面に立ててぼそと呟いた

「ラムちゃんだろ？」

浜本が京助に寄りかかりながら言う

「ああ！！ あの前日必死で京助守ってた金髪の子？」

昨日のアノ現場にいたらしい男子生徒が言った

「おんまえ彼女に守ってもらっていいのかあ？；」

昨日アノ現場にいなかったと思われる生徒が言う

「だから…あのなあ； 緊那羅きんならは彼女じゃねえし…あ…；；

つえば…；」

京助が考え込む

「まあ…かの【じょ】ではないよな彼女では」

坂田が言う

「そうだねえ彼女ではないよね」

南も笑いながら言った

「え！？ 何？ もしかして奥さん…！？」

蜜柑が驚きながら言う

「ミカ姉ミカ姉」

中島が違う違うと手を振りながら蜜柑の肩を叩いた

「蜜柑さん相変わらず微天然」

南が言う

「オーイ！ 時間押してるから急ぐぞー！！！」

中島家の前で数分間止まっている御輿衆におっさんが声をかけた

「ウィーッス」

数人の生徒が返事を返すとのりくらりと御輿が動き出した

「いってらっしゃい」

蜜柑が手を振って見送った

「ヨシコさん？」

動こうとしないヨシコを女子児童が見上げた

「…先行ってて」

そういうとヨシコが女子児童の手を放して蜜柑の方へ歩き出した

「ちょっと！！」

家に入ろうとしていた蜜柑をヨシコが呼び止めた

「あれ…？ アナタはゆーちゃんが半纏貸した…？ 何？」

網戸になっている玄関の戸を閉めて蜜柑がヨシコに笑顔に向けた

「…アナタどうやってアノ人手なずけてるの？」

「…は…？」

真顔で言ったヨシコにわけがわからないという顔の蜜柑

「アノ人…って？」

蜜柑がヨシコに聞く

「アノ失礼な…アナタがゆーちゃんって呼んでる人よ！！」

ヨシコが答える

「ゆーちゃん？」

蜜柑が聞き返すとヨシコが頷いた

「別に私は…手なずけてなんかいないけど…どうかしたの？ ゆーちゃんが何かした？」

ヨシコに近付きながら蜜柑が聞く

「何かどころじゃないわ！ 人のこと重いだのうるさいだの…ッ！
！」

ヨシコが言う

「だから決めたのッ！！」

ヨシコが声を張り上げて言うのと蜜柑が首をかしげた

「アノ人が頭が上がらないみたいなのアナタみたいになるわ！！
そうよ！！ 決めたのッ！！ だから手なずけ方教えてもらおうわ！！」
ヨシコが蜜柑を指差して高らかに宣言した

「ギャー！！；」

坂田が悲鳴を上げた

「ハイ、ご苦労さん」

首からタオルをかけタバコを啜えたオッサンがミニ箒を坂田に手渡す
「あと…あと少して500円だったのに…ッ；」

がつくりと肩を落とした坂田の前には微妙な形をした型抜き（抜き型）の壊れた無残な姿

「ここでハブラシかけりゃよかったに…無理して画鋏で攻めるから」

オッサンが笑いながら言う

「でっきッ！！」

南が声を上げた

「おッ！！ どれどれ…あゝ！！ こりゃいい！ 完成！！」

「おおおお！！！」

オッサンが言うのと周りから歓声が起こる

「器用だよなアお前；」

南の隣で失敗した型抜きをポリポリ食いながら京助が言う

「ホイさ!! 400円」

オッサンが400円を南に手渡した

「くっそ;; ムカツクなあ;;」

坂田が渡された箸は使わず京助同様型抜きの型をポリポリ食い始めた

「根気だよ根気」

南が400円を財布に入れながら笑った

「にしても：結構ハードなスケジュールなのにまったく疲れてないのはアレですか：やっぱお祭りパワー？」

中島がヨーヨーをバインバイン打ちながら言う

「すげえミラクルお祭りパワー：ってことで次いこ次!!」

型抜きの型を食い終えた京助が立ち上がった

「京助!!」

ゴソゴソ動き出した京助が聞き覚えのある声に振り返ると3馬鹿もつられたのか一緒になって振り返った

「：うっわあ;;」

そして口の端を上げる

京助と3馬鹿の目の前にいたのは通行人の視線を集めに集めている摩訶不思議服集団と緊那羅

「：あ、タコヤキ」

矜羯羅が型抜き屋の隣にあるタコヤキの屋台に目を向けた

「ほう：コレがタコヤキ：」

背伸びをして迦楼羅がタコヤキ屋のガラスから焼いている様子を覗こうとしている

「おッ!! ベっぴんな兄ちゃん! 変わった格好だねえ!! どのうだい?」

タコヤキ屋のオッサンが矜羯羅に声をかける

「緊那羅さんや：」

京助が緊那羅を見た

「なんだっちゃ?」

緊那羅きんならがきよとんとして京助を見た

ぐきゅうううう…

その直後聞こえたかなり気持ちのいいくらいのでかい腹の虫の泣き声が更に通行人の視線を集めた

「…さつき型抜きでもらった400円…あるしね…」

そう言うと南がタコヤキ屋のオッサンに400円を手渡した

「南に礼言えよ？ 鳥類」

京助が迦楼羅かるらに言う

「ワシがか？…」

迦楼羅が自分を指差して聞く

「まあまあ； 腹が減ってはなんとやらって言うじゃん？ ハイ」

南が笑いながら迦楼羅かるらにパックに入ったタコヤキを手渡した

「…どうしたんです？」

乾闥婆けんたつばがタコヤキを見つめたままの迦楼羅かるらに声をかける

「…生きているのか？…」

「はあ？…」

迦楼羅かるらが言うと京助と3馬鹿が声を上げた

「何が；」

坂田が聞く

「この…上にのっている薄いものが動いているのだが…；」

迦楼羅かるらが指差したものはタコヤキの上で踊りまくっているカツオブシ

「…んきいいね」

制多迦せいたかがカツオブシを見てヘラリ笑ながら言う

「前に食べた時…こんなの乗ってた？」

矜羯羅こんがらがカツオブシを指差して京助に聞いた

「乗ってたけど…あんだだけ一気にかきこみやわからんわな；」

京助が言う

「ふうん…」

矜羯羅こんがらがひよいとひとつタコヤキを摘んで口に入れた

「…!!…」

そして次の瞬間 矜羯羅こんがらが口を押さえて制多迦せいたかの肩を掴んだ

「…熱かったんだな」

中島が呟く

「手で摘むからです行儀の悪い…」

乾闥婆けんたつばが言うとき矜羯羅が口を押さえたまま涙目で乾闥婆けんたつばを睨んだ

「僕が知ってる祭りとは随分違いますね…凄く…楽しそうで」

乾闥婆けんたつばが笑顔で通り過ぎていく人の波を見ている

「何？ お前等ンとこの祭りってどんななんだ？」

京助が綿飴を片手に乾闥婆けんたつばに聞いた

「僕の知っている祭りは…静かで…厳かで…そして悲しかったことしか」

乾闥婆けんたつばが小さく言った

「…そか…。…一口」

そんな乾闥婆けんたつばに京助が綿飴を差し出した

「…コレは？」

はじめて見るふわふわした綿飴を指差して乾闥婆けんたつばが京助に聞いた

「食える雲」

京助が少しちぎって乾闥婆けんたつばの口につけた

「…甘い…」

口についた綿飴を少し舐めた乾闥婆けんたつばの顔がほころんだ

「たまには息抜きしろや？」

そう言って京助が多めに綿飴をちぎると割り箸ごと乾闥婆けんたつばに渡した

「疲れてるときには甘いものって言うだろ？」

綿飴を口に突っ込んで京助が笑った

「だぁッ!!!; 逃げるな!!! たわけッ!!!;」

「ヘツタクソだなぁお前;」

金魚すくいの破れたポイを片手に迦楼羅かるらが声を上げると中島がその

横で赤い金魚を水に浮かべた茶碗に掬って入れた

「素早いぞ！」

迦楼羅かるらが怒鳴る

「…つかまるから逃げんのあたりまえじゃん；」

南が上から見下ろして突っ込んだ

「ムキになったら負けよく？ かるらん」

坂田がポフポフと迦楼羅かるらの頭を叩いた

「頭を叩くなッ！！ たわけッ！！；」

再び迦楼羅かるらが怒鳴る

「…タカちゃんタカちゃん； 入れたら上げないと…紙…ふやけるぞ？；」

一方水の中にポイを入れたのはいいがそのまま入れっぱなしの制多せい迦たに中島が声をかけると制多せい迦たがへ拉里笑顔を向けた

「…コレ掬ったら何かあるの？ 食べられるとか」

中島の掬った茶碗の中の金魚を見て矜羯羅こんがらが聞く

「食えん食えん；」

3馬鹿が揃って手を横に振った

「京助はやらないんだっちゃ？」

やいのやいの大騒ぎしながら金魚すくいに夢中になっている軍団を見て緊那羅きんならが京助に聞く

「あ？ ああ…やらねえ」

乾闥婆けんたつばに渡した綿飴を少しちぎりながら京助が答えた

「ホレ」

そしてソレを緊那羅きんならに渡す

「あ…どうもだっちゃ」

渡された綿飴を緊那羅きんならが受け取る

「掬って持って帰ったら悠助が喜ぶんじゃないんですか？」

乾闥婆けんたつばが京助に言った

「そりゃな…でも死んだ時悲しむのも悠だろ」

京助が言う

「…そう…ですね」

少し驚いた顔をした後 乾闥婆けんだつばが小さく言った

「…京助って…」

そんな会話を聞いていた緊那羅きんならが呟く

「…何だよ…」

聞こえたのか京助が緊那羅きんならを見た

「京助って不思議だっちゃ」

「はあ?; …不思議な格好をしたお前等に俺が不思議って言われ

ちゃいましたか?;」

緊那羅きんならが言うとか京助が口の端を上げて返す

「そう…ですね…」

「オイオイ; アナタも同意するのですかい?;」

乾闥婆けんだつばもボソッと緊那羅きんならに賛同すると京助が裏手で突っ込んだ

「…貴方と話していると…どうしてか…こう…暖かい気持ちになる

のです」

乾闥婆けんだつばが自分の胸に手を置いて言う

「上手く言えないのですが」

そして乾闥婆けんだつばが京助を見た

「…はあ…?;」

唐突に思いもよらないことを言われた京助が阿呆面を乾闥婆けんだつばに向ける

「私も同じだっちゃ」

緊那羅きんならが笑顔で言った

「だから貴方の周りには人が集まる…」

乾闥婆けんだつばが京助に微笑みながら言う

「…類は友を呼ぶとかか?;」

京助が最近散々3馬鹿に言われている台詞を呟いた

ぴゅひよろるうう…というなんとも気の抜けた音

「…何だソレは」

迦楼羅かるらが音につられたのか半分脱力したように悠助に聞く

悠助が吹いていたのは息を吹き込むと三本の紙が延びるという笛

「これ？ クジ引いたら当たったの」

そう言っただけ悠助が再び笛を吹いた

「お前また変なクジ引いたんか」

京助が悠助に言った

「いいじゃん、お祭りはくだらないものもお宝に見えるんだし……ない？ 悠？」

南が悠助の頭を撫でて言うのと悠助が嬉しそうに笛を吹いた

「矜羯羅様も……なんですかソレ」

慧喜が矜羯羅の手の中を見て聞く

「……坂田とかいうのに貰った……んだけど」

慧喜に聞かれて矜羯羅が自分の手の中にあるモノを見せた

「それ？ スーパーボールってんの」

坂田が言った

「す……？」

矜羯羅が聞き返す

「地面に思いっきり投げつけてみて？」

京助が矜羯羅に言うのと矜羯羅が首をかしげながらも手を振り上げ手の中のを地面に投げつけた

ガッ

「あ……」

勢いよくバウンドしたスーパーボールが乾闥婆にヒットした

「……」

周りの空気が一瞬で南極の温度になった

「だ……大丈夫か？……乾闥婆」

迦楼羅が乾闥婆の顔をのぞきこみスーパーボールが当たったらしき額に手を添える

「……ごめん」

矜羯羅こんがらが小さく何処となく何故か照れながら謝った

「乾闥婆けんだつぱ?」

緊那羅きんならも乾闥婆けんだつぱの顔をのぞきこんだ

「あ…アレだ!!!; ホラ!!! ツバつければ治るって!!! ツバ
」

中島が必死のフォローをする

「ツバ?」

そう言った悠助が笛を持ったまま乾闥婆けんだつぱに近づくと乾闥婆けんだつぱの額を舐めた

「ゆ…!」

慧喜えきが驚いて声を上げた

「…悠助?」

乾闥婆けんだつぱが目を丸くして悠助を見た

「治った?」

笛を片手に悠助が乾闥婆けんだつぱに笑顔に向ける

「え…あ…;」

返答に困っている乾闥婆けんだつぱの前に今度は制多迦せいたかがしゃがんで悠助と同じように乾闥婆けんだつぱに額を舐めた

「…おった?」

ヘラリ笑顔で制多迦せいたかが乾闥婆けんだつぱに聞く

「…え…わ…ツ;」

そして今度は迦楼羅かるらが同じように舐めた

「コレで本当に治るのか?」

真顔で迦楼羅かるらが中島に聞いた

「…俺の婆ちゃんに聞いてくれ;」

中島が苦笑いで答えた

「まあ全員で舐めれば治るんじゃないのか?」

京助がハッハと笑いながら言う

「ぜっ!!!;」

ほんのり顔を赤くした乾闥婆けんだつぱが珍しく大きな声を出した

「もうだい…」

言いかけた乾闥婆けんだつばの前に矜羯羅こんがらがしゃがむと軽く乾闥婆けんだつばの額を舐めた

「…悪かったね」

そして顔をそらして小さく謝った

「…ッ；」

真っ赤になった乾闥婆けんだつばが腕で顔を隠すと数歩後ずさった

「…俺等もやっとく？」

坂田がチロツと舌を出して京助に聞いた

「…ここは雰囲気に任せてやっときますか」

同じく舌を出した京助が南を見る

「踊る阿呆に見る阿呆同じ阿呆なら…ってヤツ？」

そしてやはり舌を出した南が中島を見た

「…決定！！」

中島が舌を出して言うとき京助達が乾闥婆けんだつばの肩を叩いた

「なん…まさか…；」

赤い顔のまま振り返った乾闥婆けんだつばが見たものは舌を出してエセっぽく

爽やかに微笑んだ京助と3馬鹿

「ま…そういうことで」

「何がですかッ！！； 放してくださいッ！！！！；」

坂田が言うとき怒鳴った乾闥婆けんだつばを中島と京助が押さえた

「俺もした方がいいの？」

慧喜えきが悠助に聞いた

「あれ？ 京助どうしたのそのデコ」

旗持ち行列を終えた阿部が京助の顔を見て聞いた

「…いや…うんまあ…なんだ」

京助と3馬鹿がエセっぽい笑顔で笑った

「…変なの」

ジトツと京助の顔を見て阿部が眉をひそめて言うとき本間と共に歩い

ていった

「…けんちゃん…強いッすね」

南が迦楼羅かるらにボソッと言うと迦楼羅かるらが頷いた

「まさかアソコで二人まとめ一本背負いたあ…本当可愛い顔して
ババンバン…； 参ったぜ；」

頬に擦り傷を作った中島が乾闥婆けんたばを見て言う

「貴方達が悪いのでしょうか？」

そんな中島にっこりと笑顔（しかし何処となく怖い）を返した

「俺達だってけんちゃんの怪我が早く治ればいいなって思っ…ッ」
南が泣き真似をするせいたかと制多迦せいたかが南の頭を撫でた

「気持ちだけ受け取っておきます」

乾闥婆けんたばがキッパリと言いつ切った

「だから言っただであろ…； 乾闥婆けんたばに逆らうなと…；」

迦楼羅かるらが溜息をつきながら京助に言う

「…身をもって了解いたしました；」

京助が口の端を上げて言った

「あれ？」

坂田がふと顔を上げて何かを見つけた

「アレって…ヨシコと蜜柑さんじゃね？」

坂田に言われて一同がその方向を見ると摩訶不思議服ではない服を
着たヨシコが蜜柑と共に近づいてきた

「…吉祥！！」

迦楼羅かるらが声を上げた

「あ…迦楼羅かるら…と乾闥婆けんたばも？」

キヤミソールにミニのパンツスタイルのヨシコがヒラヒラ乾闥婆けんたばと
迦楼羅かるらに手を振った

「なんだその格好は…； それよりお前…昨日はいったい何処に…」

「やーん！！ 可愛い…！！」

言いかけた迦楼羅かるらが頭に感触を感じて言葉をとめた

「ボク、何処の子？」

蜜柑が迦楼羅かるらの頭を撫でながら聞く

「ぼ：！：！：」

「ボク：」

迦楼羅かるらが驚いた顔で蜜柑を見ると迦楼羅かるら以外が迦楼羅かるらを見た

「：ブツ」

慧喜えきが噴出した

「ボク：」

リピートした3馬鹿と京助の顔が引きつり始め矜羯羅こんがらが後ろを向いて振るえはじめた

「かるらんって言うんだよゝ蜜柑ねえちゃん」

悠助が笑顔で言う

「かるらんちゃん？」

蜜柑が聞き返す

「か：！：？：」

「かるらん：ちゃん：」

迦楼羅かるらが更に驚いた顔で蜜柑を見上げると乾闥婆けんだつばが繰り返した

「：威厳も何もあったもんじゃないわね【かるらんちゃん】」

ヨシコがあからさまに笑いを堪えていますよというカンジに肩を震わせながら言う

「可愛いつてさ：よかったじゃん【かるらんちゃん】」

同じく堪えてますというカンジが目に見えてわかる京助が迦楼羅かるらの頭を撫でる

「：るらんちゃん：かるらんちゃん」

「やめんかッ！：！： たわけッ！：！：！：」

制多迦せいたかがヘラリ笑顔で迦楼羅かるらの頭を撫でると迦楼羅かるらが怒鳴った

「ミカ姉最強」

中島がヒーヒー言いながら呟いた

「いや：最強で最高だ蜜柑さん」

笑いすぎて呼吸困難になりつつある坂田が中島につかまりながら言う
「かるらんちゃん何歳？」

蜜柑がにっこり笑いながら迦楼羅に聞いた

「な…;」

迦楼羅が数歩後ずさる

「おねえちゃんと遊ぶ？」

「はッ!?!;」

蜜柑が言うのと迦楼羅が素っ頓狂な声を出し周りがまた笑いのスタンバイにはいった

「だ…ッ…誰が遊ぶかッ!! たわけッ!?!;」

迦楼羅が赤い顔をして怒鳴った

「こおら! 駄目でしょ」

怒鳴った迦楼羅の頭を蜜柑が軽く小突いた

「そんな偉そうに威張っていると誰も遊んでくれなくなっちゃうよ？」

蜜柑が言うのと乾闥婆と迦楼羅が同時に驚いた顔をして辺りが一瞬静まった

「

…? どうしたの？」

蜜柑が迦楼羅の顔を覗き込んで聞く

「…沙紗…」

「迦楼羅! (かるら)！」

迦楼羅がボソツと呟くと乾闥婆がまるでその迦楼羅の言葉をかき消そうとするかのように声を出した

「え…え?!;」

蜜柑が驚いて乾闥婆を見る

「すいません…この人はこう見えても貴方より遥かに年上なんです」
乾闥婆がにっこり笑って蜜柑に言った

「えッ!?!; そうなの!?!;」

蜜柑が慌てて迦楼羅の頭から手をどけた

「ゴメンナサイッ; 全然年上に見えなくて…可愛かったからつい…;」

そして頭を下げて謝る

「：そりやそうだろな；」

中島が迦楼羅かるらを見ながら呟くと周り一同も頷いた

「それはそうと：なんですか吉祥きつしょうその格好：」

乾闥婆けんたつばがヨシコの服装を見て聞いた

「これ？ 蜜柑の服、借りたの」

ヨシコがキャミソールの裾をひっぱって笑顔で言う

「可愛いでしょう？」

蜜柑がヨシコの肩に手を置いて言った

「お前は：；」

迦楼羅かるらが頭を押さえて溜息をついた

「阿修羅あしゅらが今でもたぶん必死で探していると思いますが」

乾闥婆けんたつばがヨシコに言う

「あつくくんが？」

ヨシコがきよとした顔で聞き返す

「私にかしたかしら：」

考え込んだヨシコを見て乾闥婆けんたつばと迦楼羅かるらが呆れ顔で肩を落とした

「貴方は少し：自覚というか自分の立場を考えてください；」

乾闥婆けんたつばが疲れたような顔を上げて言う

「何？ 吉祥きつしょうちゃんってお嬢様とか何か？」

蜜柑がヨシコを見た

「おじようさまあ？；」

蜜柑の言葉に3馬鹿と京助が揃ってヨシコを見た

「：じゃあ阿修羅あしゅらってアレか？ セバスチャンっぽいポジションになるわけ？」

坂田が言う

「ソレ言っちゃお前だって【若】なんだし」

中島が坂田に言った

「若言うなたわけ」

坂田がやる気なく中島に裏手で突っ込む

「：今お前等さりげなくワシの真似しなかったか？；」

迦楼羅かるらが言うとか中島と坂田が顔の前で手を横に振ってナイナイとジエスチャーした

「で：吉祥きつしょうはどうしてそんな格好してるのさ」

一向に話が進まないのを見ていた矜羯羅こんがらが言う

「私？」

ヨシコが顔を上げた

「これはね：貴方！！」

「へ？」

ヨシコが腰に手を当てて中島を指差した

「：貴方：ううん：ゆーちゃん！！」

「ブッハッ！！；」

ヨシコが言うとか中島が噴出した

「ゆーちゃんを手なずけるためよ！　そうよ！！」

ヨシコが得意げに言う

「手なずけるって：」

南が中島を見る

「お前犬か猫か？」

京助が同じく中島を見る

「な：んなんだソレはッ！！；」

中島が怒鳴った

「だって貴方ムカつくんだもの」

ヨシコがさらっと言う

「だから決めたのゆーちゃんは蜜柑に頭が上がらない。だから私は蜜柑になるの」

ヨシコが蜜柑を見て言うとか蜜柑がにっこり笑った

「ミカ姉ッ！！；」

中島が蜜柑を見る

「なあに？　ゆーちゃん？」

再度中島が怒鳴る

「ゆーちゃんッ!!」

蜜柑が怒鳴った

「…」

中島が気まずそうに蜜柑を見た後黙り込む

「…勝てるわ」

そんな中島を見てヨシコの目がキラリと光った

「駄目」

「何でよッ!!!!」

阿修羅^{あしゅら}がカンブリを片手に言うのとヨシコが怒鳴った

「あんのなあヨシコ…；何のためにオライがお前のお目付け役…基教育係になったのかわかるだろが；」

溜息を交えて言う阿修羅^{あしゅら}がヨシコの頭に手を置いた

「それは…でも!!!!」

「でもでもアレでもヘチマでもなく駄目ったら駄目だったの」

ヨシコが何か言おうとすると阿修羅^{あしゅら}がヨシコの頭をポフポフ叩きながら言う

「…なあ」

京助が緊那羅^{きんなら}を肘で突付いた

「ヨシコって…何？」

そして小声で緊那羅^{きんなら}に聞く

「吉祥は…その…えっと…上の嫁…？ 候補というか…」

緊那羅^{きんなら}が京助に小声で返した

「ほほ…じゃあやっぱりお嬢様みたいなもんなんだねヨシコちゃん」

南が納得したように頷いた後ヨシコを見た

「だから…吉祥^{けいしょう}は自由が限られてるんだっちゃ」

吉祥を見ながら緊那羅^{きんなら}が付け加えた

「私…吉祥^{けいしょう}がコッチに来てから吉祥^{けいしょう}の我俣が倍増している気がする

んだっちゃ…」

緊那羅きんならが言う

「…そうかもな…」

迦楼羅かるらが呟いた

「コツチでは吉祥きつしょうはただの吉祥きつしょうというだけで何の役目も肩書きもな
いからな…ワシ等もだが…だから吉祥きつしょうも羽が伸ばせるのだろう」
目を細めて迦楼羅かるらが言うと同がヨシコを見る

「【天】に戻れば僕等も吉祥きつしょうも【役目】や【地位】…肩書きに縛ら
れていますしね…迦楼羅かるらもコツチに来るようになってから本ッ当

（強調）我仨が増しましたし」

そう言いながら乾闥婆けんだつばが迦楼羅かるらを見た

「…そうか？；」

乾闥婆けんだつばに視線を向けられた迦楼羅かるらが気まずそうな顔で乾闥婆けんだつばを見返
すと乾闥婆けんだつばが頷いた

「じゃあ今日だけ！！ 今日だけならいいじゃない？ ね？ あっ

くん！！」

ヨシコが阿修羅あしゅらの腕を引っ張って言う

「だから…；」

「私からもお願い！！」

駄目出しをしようとした阿修羅あしゅらの腕に蜜柑がつかまった

「ミカ姉？；」

中島が思わず蜜柑の名前を言う

「な…んですかい； このべっぴんさん；」

阿修羅あしゅらが蜜柑を見て言った

「コイツのお姉さん」

京助が言うとは坂田と南が中島を指差した

「でっかいのの姉さん？ ……ってかオライ今両手に花？」

阿修羅あしゅらが蜜柑と中島を交互に見て言う

「お願いあつくん！！ 私ゆーちゃんを手なずけたいの！！」

「オイ；」

ヨシコが阿修羅^{あしゅら}に懇願すると中島が遠巻きに裏手突込みを入れる

「だってムカつくんだもの…凄くムカつくの！！　だから…」

「吉祥^{きつしやう}」

だんだん大声になってきたヨシコのお願いっぷりを見ていた迦楼羅^{かるら}がヨシコを呼んだ

「…今日だけだ」

迦楼羅^{かるら}が言うのと一瞬辺りが静かになった

「…かるらくん；」

静けさを打ち消した第一声は阿修羅^{あしゅら}の呆れたような声だった

「ほ…んと？　本当！？　いいの！？　いいのね！！　有り難う迦^か

楼羅^{るら}ッ！！」

「ブッ；」

阿修羅^{あしゅら}を突き放してヨシコが迦楼羅^{かるら}に抱きついた

「苦しいわッ！！；　離れんか！！　たわけッ！！；」

ヨシコより小さい迦楼羅^{かるら}が丁度ヨシコの胸に顔を埋められる状態で怒鳴る

「…ばふばふだな」

京助が呟いた

「ばふばふだね…」

南も呟く

「男なら一度は夢だよな…」

中島も呟く

「…苦しさは醍醐味…」

坂田が呟くと揃って頷く

「…まったく…迦楼羅^{かるら}は甘いんですから…ッ」

「だっ！！；」

乾闥婆^{けんたつば}が迦楼羅^{かるら}の後ろ髪を引っ張った

「あっ！！」

蜜柑が何かを思い出したように声を出した

「そろそろちらし寿司：作りにかからないといけないんだけど…ゆーちゃん…」

蜜柑がヨシコをちらつと見た後中島を上目遣いで見る

「：ハイハイ；：わーったよッ！！；」

中島が半ば投げヤリの返事をした

「ゆーちゃんいい子ッ！　じゃあヨロシクね」

そう言うのと蜜柑が駆け出した

「蜜柑…？」

駆け出した蜜柑をヨシコが見る

「吉祥ちゃん！また後でね！」

振り返ってヨシコに蜜柑が手を振った

「ねえ？　蜜柑は？」

ヨシコが中島を見た

「飯作りに行った」

中島が頭を掻きながら答える

「：飯？　じゃあ私はどうすればいいの？」

ヨシコが中島を揺すって聞く

「もう少しお祭り見て歩かない？　一緒にさ」

南が近づいてきてヨシコに言う

「今日一日好きにしていいたいし」

京助がチラッと迦楼羅を見ながら言うのと迦楼羅が小さく咳をした

「ついでだからお前等も今日は一日自由にしたら？」

坂田が摩訶不思議服集団を見て言う

「僕等も？」

矜羯羅が聞き返す

「そー！！　なんたって今日は本祭りだし？　いいじゃないじゃん

！！」

南が笑いながら言った

「自由…ですか…」

乾闥婆けんだつばがボソツと言うと迦楼羅かるらが無言で乾闥婆を見上げた

「たまにはいいんじゃないですか？ 矜羯羅こんがら様、制多迦せいたか様」

慧喜えきが悠助と手を繋いだまま矜羯羅こんがらと制多迦せいたかに言う

「ヨシ！ 決定！ …じゃあまずはその目立つ格好…なんとかしよつか」

南が摩訶不思議服集団の格好を見て言った

「着替えだな」

坂田が言う

「着替えだね」

南も言う

「乾闥婆けんだつばは南と背格好近いから南の服だな…鳥類は悠ので…制多せい迦たと矜羯羅こんがら…そして阿修羅あしゅらは俺の…か坂田のか」

京助が摩訶不思議服な面々を見て言った

「じゃあ…」

坂田と南と京助が誰に誰の服を貸すかでやいのやいのしている

「俺は？」

中島が聞く

「お前はヨシコちゃん任せられただろ？ しっかりやれ…じゃあ

タカちゃんと…」

南がお前はお呼びじゃないわよ的に中島に言う

「ホレ…ヨシコ」

阿修羅あしゅらがヨシコの手を掴んだ

「え…？」

ヨシコがきょとした顔で阿修羅あしゅらを見る

「つつうワケで…でっかいの」

そして阿修羅あしゅらが今度は中島の手を掴んだ

「へ？」

中島もきょとした顔をする

「仲良くなッ」

阿修羅あしゅらが中島の手にヨシコの手を握らせた

「はっ!?!」

中島とヨシコが揃って声を上げると阿修羅^{あしゅら}がヒラヒラ手を振って京助の後ろを歩き始めた

「30分くらい後にまたココでな〜!!」

南^{けん}が乾闥婆^{けんたつば}をつれて、京助^{あしゅら}が阿修羅^{あしゅら}と迦楼羅^{かるら}をつれて、坂田^{こん}が矜羯^{こん}羅^らと制多迦^{せいたか}をつれて散っていった

「ここであ〜…って…」

取り残された中島が呟く

「緊ちやん〜トイレ〜」

悠助^{きんなら}が緊那羅^{きんなら}を見上げて言った

「あ…えつと…わかったっちゃ」

緊那羅^{きんなら}が悠助の手を取って歩きだす

「俺も行くッ」

そしてお約束といわんばかりに慧喜^{えき}も悠助の手を握ったままついていく

「…わかったっちゃ…って…」

ヨシコが去り行く緊那羅^{きんなら}達の背中を見ながら呟いた

「……」

しばしの無言の後ヨシコと中島が顔を見合わせる

「……」

そしてまたそのまま沈黙

「あ! ヨシコさん!!」

後ろから名前を呼ばれたヨシコが振り返ると御輿の時に手を繋いでいた女子児童とその友達らしき児童が手を振っていた

「あ…」

手を振り返そうとしたヨシコが何かに引っ張られている自分の手の方を見た

「…ちよつと」

阿修羅^{あしゅら}によって中島に握らされたままの状態だったヨシコが中島を

見上げた

「あ？ …！？ わり…ッ；」

中島が慌てて手を放す

「中島だー！ 蜜柑姉は？」

児童の一人が中島に聞く

「中島じゃないだろ？ 圭介…中島【さん】だろ中島さん」

中島が圭介の頭に手を置いて言った

「え…：さんってつけるレベルじゃねえじゃん中島」

圭介の後ろからやってきた圭介より少し大きい児童が笑いながら言う

「ゆーちゃんはゆーちゃんよ」

女子児童に抱きつかれていたヨシコが言った

「…中島が女つれてる…」

圭介より少し大きい児童がヨシコを見て呟いた

「しかもこの人【ゆーちゃん】って蜜柑姉しか呼ばない呼び方で…」

圭介が中島を見た

「コイツは…」

「コイツって何よ！！」

圭介たちに何か言おうとした中島にヨシコが怒鳴る

「コイツって言い方気に食わないわ！！ そうよ！ やっぱりムカ

つくわッ！！」

ヨシコが中島を睨んで言った

「…オイ…中島…尻に敷かれてんぞ」

圭介より少し大きい児童が中島にささやいた

「最初が肝心だろ？」

そして中島を押す

「だあから； コ…ヨシコは…」

「ヨシコじゃないって言ってるじゃない！！」

言った中島にまたヨシコが怒鳴った

「じゃあなんて呼びゃあいんだよ；」

中島が疲れきった顔でヨシコに聞いた

「私は吉祥ッ!!」

ヨシコが自分を親指で指して言った

パン

「…ヘッタクソ」

圭介が射的の最後の玉を使いきると中島が後ろからからかうように言った

「うるさいッ;」

圭介が中島に怒鳴る

「惜しかったじゃない? そうよ、もう少しだったわ」
むくれている圭介にヨシコが笑いかけた

「慰めなくていいッ」

圭介がヨシコに言う

「慰めじゃないわ本当に惜しかったから言ってるの」

微笑みながら言うヨシコを見た圭介の顔が赤くなる

「圭介顔赤いッ!!」

ヨシコと手を繋いでいた女子児童が圭介の顔を指差して笑った

「うるさい亜沙子!」

圭介が怒鳴る

「ありゃ惚れたな」

中島の隣にいた圭介より少し大きな児童が言った

「誰が」

中島が聞き返す

「圭介がアノ人に」

児童が答える

「まだ手エしか繋いでないんだろ中島」

ニヤニヤしながら児童が中島を見上げた

「あのなあ…涉…俺は別に…」

「照れるな照れるな」

呆れ顔で言いかけた中島の背中を涉が数回叩いた

ヨシコが首を傾げる

「別にいいんじゃない？　そうよ、別におかしくなんかないじゃない」

ヨシコが言った

「恋は恋だもの。そうでしょ？　好きになったから恋でソレが初めてだったから初恋なんでしょ？　ゆーちゃんが初めて恋した相手は蜜柑、いいじゃない？」

言い終わるとまたヨシコが歩き出した

「私が初めて恋した相手はりゅー様で…ずっと見てきたの」
中島がヨシコの後ろをゆっくり歩き始めた

「私は今でもりゅー様に恋してるもの…ソレはおかしい？」

突然振り返ってヨシコが中島に聞いた

「京助の…親父さんだよな？」

中島が言うのとヨシコが笑顔で頷いた

「片思いだって恋は恋でしょ？　だったら私はずっと恋してるわ…もう凄く長い恋」

ヨシコの笑顔が一瞬悲しく曇る

「終わらなくてもいいの…私の恋は終わらないわ」

そう言ってヨシコが顔を上げ中島を見た

「こう見えて結構一筋なの。そう…私の恋はりゅー様への恋…もうずっと変わらないわ」

「…格好いいな」

ヨシコの言葉に中島が呟いた

「気付くの遅いわ」

ヨシコが腰に手を当てて言う

「恋すれば強くなるわ。ゆーちゃんも誰もかも」

ヨシコが笑顔で言った

「ゆーちゃんが蜜柑を好きになった時ゆーちゃんは強くなったと思うの。蜜柑を守りたいと思わなかった？　何かしてあげたいと思わなかった？」

自分の胸に手を置いたヨシコが中島を見上げた

「……」

見上げてきたヨシコを中島が黙って見た後顔をいきなり背けた

「…思った…」

顔を背けたまま中島が小さく答えた

「だから私はコッチにきたいの…一秒でも長くコッチにいたいわ…
だってりゅー様が一番したかったこと…私だってしたいもの」

中島がヨシコをチラッと見た

「一番したかったこと…って…」

中島が聞く

「京助と悠助…そしてハルミママさんを守るわ…幸せにしたい…りゅー様にずっと恋してずっと見てきたからわかるの…それがりゅー様の一番したかったこと…そう…それが私のしたいこと」

ヨシコが足を止めた

「ソレが私のりゅー様への恋なんだから」

数歩ヨシコより先に進んで足を止めた中島が振り返るとヨシコの右手が上がり目をこすった

「…っ…なんでりゅーちゃんに話してるのかしら…おかしいわ…止まらないじゃない…だって…私…私だって…」

いきなり泣き始めたヨシコに中島は驚き人々の視線が集まった

「痴話喧嘩かしら」

「若いの…」

「修羅場？」

ザワザワボソボソと人々の勝手な想像から生まれた言葉が聞こえ始める

「だぁッ！！！！」

耐えられなくなった中島がヨシコの手を引っ張って小走りで駆け出した

「逃げた…」

後ろから聞こえた誰かの声を耳にくっつけながら中島が足早にその

場を離れた

「いきなり泣くな； ビビるから；」

出店の最後にある綿飴屋の裏中島が足を止めてヨシコを振り返った
「泣きたくて泣いたんじゃないわ！！ だって…勝手に…」

怒鳴ったヨシコの目からポロポロと涙が頬を伝う

「泣くなつてのッ；」

中島がなすすべもなくただオロオロとしている

「もお…やだあ…っ…」

本泣きが入ったヨシコがしゃがんだ

「…俺ももうやだあ；」

中島が呟いた

膝に顔をうずめたままのヨシコにかける言葉が見つからない中島が
そのまま立ち尽くしてから早十数分

「…も…大丈夫か？；」

おそろおそろ中島がヨシコに声をかけた

「…大丈夫じゃないわ…」

くぐもった声でヨシコが返した

「…もうすぐ待ち合わせの時間だけど…」

中島が京助達と落ち合う約束を思いだして言う

「…行けばいいじゃない…私も後から行くわ…そうだから先に行つていいわ」

ヨシコが小さく言うとお中島がヨシコの隣に腰を下ろした

「…いけるわけねえじゃん…」

中島が言う

「…なんでよ」

少しだけ顔をあげたヨシコが聞いた

「お前方向音痴だし」

中島が答えるとヨシコが顔を上げた

「な…！」

「それに」

怒鳴ろうとしたヨシコの言葉が中島の付け加えの言葉で止められた
「…それに…泣いてるヤツ放っておけるか…」

そっぽを向いた中島が小さく言う

「もう泣いてないわ…っ！」

ヨシコが鼻を吸って強がった

「目腫れてるし」

中島がチラッとヨシコを見て言うと言いつつヨシコが目を押さえた

「こんな腫れすぐ引くわ！！　そうよ！　すぐ追いつくから先行っ
てもいいわ！！！」

顔を赤くしたヨシコが怒鳴った

「…そんなに嫌か俺というの」

中島が溜息をつきながら立ち上がった

「だってムカつくわ！　今だってモヤモヤしてるもの！！　そうし
てるのッ！！」

ヨシコが赤い目のまま中島を見上げて怒鳴ると中島がヨシコに背を
向けた

「そうよ…早く行っていいわ…」

歩き出した中島の背中から目をそらしてヨシコが呟いた

「…可愛くないわ…」

一人膝を抱えたヨシコが出店の最終である綿飴屋の影で呟いた

「私も蜜柑みたく可愛かったら…りゅー様は私と恋してくれたのか
しら…」

ザリ…と地面を足でこすってヨシコが空を見上げた

「…私だって…」

そしてそのまま目を閉じたヨシコの目じりからまたあふれ出そうと
した涙が冷たい何かで止められた

「な…に！？…」

驚いたヨシコが目を開けてついでに身を避けた

「目冷やせ」

赤色のシロップがかかったカキ氷を差し出した中島がしゃがんでヨシコと目線を合わせて言った

「…ゆー…」

「そしてその呼び方はやめろ；」

早く持てというカンジにカキ氷を動かした中島が言う

「…行ったんじゃないの？」

差し出されたカキ氷を両手でおそろおそろ受け取りながらヨシコが中島に聞いた

「別に…」

中島が小さく答えた

「目冷やした後食えよ」

中島がカキ氷を指差して言いながら立ち上がった

「…ガラパン見えてるんだけど…」

立ち上がった中島のズボンをヨシコが掴んだ

「…い…」

「い？」

ヨシコがうつむいたまま一言を言う中島がソレを繰り返した

「…いけないで…」

いつもの強気な顔ではなく弱気でまた今にも泣き出しそうな顔でヨシコが中島を見上げて言った

「……」

そしてゆっくり手を離すとヨシコがまた俯く

「行けていったりいくなつていったり…面倒くさい女」

「悪か…」

怒鳴ろうと顔を上げたヨシコの隣に中島が腰を下ろした

「置いていって迷子になったらまた…面倒くさいからいてやる」

顔を背けたまま中島が言う

「…いてくれるの…？」

ヨシコが中島の肩を揺すって聞いた

「ソレ食い終わったら行くぞ」

そういった中島の耳は少し赤かった

「あつ； ほら切れたじゃないですかッ！！；」

紺色のTシャツに着替えても変わらない頭のピョン毛の乾闥婆けんたっぱが言
った

「馬ッ鹿だなあ…こう…くいと…ホラ」

横から京助が手を出してヒョイとヨーヨーを釣り上げた

「僕も切れたんだけど」

乾闥婆けんたっぱの逆隣で白い七分のシャツを着た矜羯羅こんがらが針が取れて紐だけ
になったものを京助に見せた

「ヘタクソ」

ソレを見て南が笑う

「…タカちゃんタカちゃん…入れたら上げないと； 紐まで水吸っ
て溶けてる溶けてる；」

中島が言うシャツにタンクトップを重ねた服装の制多迦せいたかがヘラリ
笑った

「ココの位置で斜めに入れると…うりや二個！！」

阿修羅あしゅらが二個同時に釣り上げた

「おおおお！！」

見ていたギャラリーから歓声が起こった

「入れる角度と重さを計算してソレにオライの釣り上げる速度と…」

「ハイハイハイハイハイハイ」

阿修羅あしゅらが物理的説明を始めると京助と3馬鹿が声を揃えてソレを止
めた

ピョルフィルル

ピョロピュリル

「…気の抜ける音だっちゃ…；」

迦楼羅かるらと悠助が同時に吹いた三本の紙がピロ…と延びる笛の音を

聞いた緊那羅きんならが苦笑いで言う

「…変わった笛だな」

濃い緑色に白で渦巻きが書かれた甚平を着て後ろの髪を上げた迦楼羅からが笛を見て言った

「それかるらんにあげるね」

悠助が笑顔で迦楼羅かららに言う

「…いいのか？」

どことなく嬉しそうに迦楼羅かららが聞く

「うん！」

頷いた悠助がまた笛を吹いた

「迦楼羅かららずるいッ」

慧喜えきがぷくぷくと膨れて言う

「ずるいといわれても…」

迦楼羅かららが慧喜えきを見る

「またクジ引いて当たったら慧喜えきにも上げる」

そんな慧喜えきを見上げて悠助が笑った

「吉祥きしやう」

「えっ；」

わいわいしている京助達の群れから少し離れた所にいたヨシコに乾闥婆けんだつばが声をかけた

「浮かない顔をしています…」

乾闥婆けんだつばが言う

「そう？ そうかしら…なんでもない…そう何でもないの…」

そう言ってヨシコが乾闥婆けんだつばに苦笑いを向ける

「ムカつくの…」

ヨシコが手の中にある中身のなくなった紙コップを見て言った

「凄く凄くムカつくの…」

ヨシコが言う

「何にですか…」

乾闥婆けんだつぱが溜息をついた

「泣き顔見られたの：側にいてくれたの：優しくされて嬉しいのにムカつくのよ…」

ヨシコが紙コップを撫でた

「乾闥婆けんだつぱ：私：蜜柑になりたいわ…」

ヨシコが小さく言った

「貴方は吉祥きつしやうです」

乾闥婆けんだつぱがキツパリ言い切った

「…そう：よね：私は吉祥きつしやう…」

ヨシコが紙コップに頭をつけた

「コッチにきても吉祥きつしやうは吉祥きつしやう：肩書きがないだけで吉祥きつしやうだってことは変わらないわ：そう：わかってるの：それはわかってるの：でも私：蜜柑になりたい」

ヨシコが言った

「…コレはある人の受け売りなのですが…」

乾闥婆けんだつぱが言うとヨシコが乾闥婆けんだつぱを見た

「理想というのは理想：理想に近づくのはいいがソレ相応に失うこともある…」

乾闥婆けんだつぱがヨシコを見て言った

「…どういう意味：？」

ヨシコが聞き返す

「…簡単に言いますと…今の吉祥きつしやうを好いている人が…吉祥きつしやうが蜜柑さんという人物に近づけば今まで通りに吉祥きつしやうを好ってくれるかはわからない：ということですよ」

乾闥婆けんだつぱが答えた

「今の私…」

ヨシコが自分の手を見た

「ねえ：乾闥婆けんだつぱ：私…」

「なんです？」

手を握り締めたヨシコが顔を上げた

「…何でもないわ…」

今だヨーヨーの屋台でワイワイやっている群れを見てヨシコが微かに笑った

【第八回・参】試して合点（前書き）

明日からは待ちに待った夏休みという日の夕方
京助の元にかかってきた一本の電話
その内容は：

【第八回・参】試して合点

「…やってきましてありがとうございます！」

南が校門の前で言った

「本当にありがとう！」

その南に続いて京助が空を見上げて言う

「夏休み——————————————————————ッ！」

！

そして坂田が叫んだ

七月も半ばを少し過ぎて北海道の北部もやっと夏らしくなってきた
今日この頃

正月町の小中学校、そして高校が一斉に夏休みという心待ちにして
いた時を迎えた

「俺はもう今年の夏の自由研究決めてあるんだもんね」

南が愛車ニボシを押しながら言う

「めっずらしく！ 何やるんだよ」

中島が南に聞いた

「俺？ コレは誰もやらないと思って去年から暖めてたんだよね」

南がフッフと笑いながら言う

「勿体つけんなって」

京助が南を肘で小突いた

「聞いて驚け！！ 俺の自由研究！ 題して：【一年間の火曜サス

ペンス劇場のサブタイトルで一番長いのはどれか！！ そしてそれ

は何文字か！！】だ！！」

南が高らかに答える

「うっわぁ：スнгеェくだらなく…」

坂田がヘッと笑って顔をそらした

「コレやるために一年間火曜だけの道新溜めてたんだよねぁ…」

南がしみじみ言う

「：アノ部屋の何処にあったんだ：新聞；　ってかどこにおいてあるかわかんのか？　あのチョ汚い部屋の中で」

中島が南の魔境かつ魔窟となっているチョ汚い部屋を思い出して聞いた

「たぶん　（強調）クローゼットか押入れのどっか」

南が答えた

「お前ナア；」

京助がやる気なく裏手で南に突っ込みを入れる

「じゃあ俺は幻想○澁伝シリーズ通して【！　（ビックリマーク）】が何個あるのかっての数えてやってみようかね」

坂田が言った

「じゃ俺は何やろうかナア：」

京助が南を坂田に対抗すべく突拍子もない自由研究をしようと考え込む

「ヒマワリと人間の交わりそしてその子供とは」

中島が言うのと京助が回し蹴りを中島に放った

栄野家の台所にある冷蔵庫におじやる丸のマグネットで貼られたカラフルな夏休みの計画表にかかれたかろうじて読めるミミズ文字

「五時半に起きてラジオ体操行っって：」

悠助が自分で立てた夏休みの計画表を何度も嬉しそうに見返して確認をしている

「何してるんだっちゃ？　悠助」

母ハルミが茹でた昼飯用の冷や麦をざるに入れて持った緊那羅きんならが悠助の上から計画表を見た

「コレ？　夏休みをどうすごしますかっていうの書いたの」

悠助が緊那羅きんならに笑顔で答える

「夏：休み？」

緊那羅きんならが聞き返す

「そう、今日から…えっと…学校が長いお休みなの」

悠助が説明する

「じゃあ悠助ずつというの？」

慧喜^{えき}が膝を付いて悠助と視線をあわせて聞いた

「うん!!」

悠助が頷くと慧喜^{えき}の顔がぱあっと明るい笑顔になった

「本当！？ 本当にずつと悠助いるのか？」

慧喜^{えき}がずいっと悠助に近づいて再度聞く

「そうだよ？ ずつというの学校始まるまでだけど」

悠助が言うとき慧喜^{えき}がもうどうしようもないくらい嬉しいんだってば！！
というカンジで悠助に抱きついた

「京助も夏休みなんだっちゃ？」

慧喜^{えき}に思い切り抱きしめられている悠助に緊那羅^{きんなら}が聞く

「そうだよ」

悠助が答えた

「ハラヘッター；」

ガラガラと玄関の引き戸が開く音がして今まさに話題にしようとしていた人物が帰宅した

「夏休みってそんなに嬉しいものなんだっちゃ？」

冷や麦を半分汁につけた緊那羅^{きんなら}が京助を見て聞いた

「そらなく朝早く起きなくていいし勉強しなくてもいいし」

京助が刻んだキュウリを汁の中に入れてながら答えた

「何言ってるのあんたは…ラジオ体操！　そして宿題あるんでしよ
うが」

母ハルミが京助に言った

「緑の僕が食べる」

京助が摘んだ冷や麦の中にあつた緑色の麺を見て悠助が言う

「しゃあねえなあ；　味は一緒だろに…ってか俺中二になってもい
かねえとアカンわけ？；　ラジオ体操…」

悠助の汁の中に緑麺を入れながら京助が言う

「あたりまえでしょ!! 休みの時には休みの時なりに過ごさなさい!!」

母ハルミが言った

「ラジオ体操って何？」

悠助の隣で慧喜えきが聞く

「んとね、朝起きてね、皆で体操するとハンコもらえるの」

悠助が緑麴ろくを摘んで嬉しそうに答えた

「ってか、いつもより早く起きねえとアカンやん」

勢いよく冷や麦あわをすすった京助が言う

「緊ちゃんきんちゃんと慧喜えきも一緒にいこ？」

悠助が緊那羅きんらと慧喜えきを見て言った

「私もだっちゃ？」

緊那羅きんらが箸を止めて悠助を見る

「俺は行く」

慧喜えきがにっこり笑って悠助に言った

「皆で行ってきなさい？ ね？ 京助」

母ハルミが笑いながら言う

「…ってかまた俺主体かよ…」

箸に染みた汁をかみ締めながら京助が肩を落とした

灰皿の上で渦を巻いている蚊取線香から細く上がった煙の匂いが縁側付近に広がる

「ヒマ子さんに水の時間だっちゃね」

縁側下においてあったサンダルを履いて緊那羅きんらが庭に下りた

「あら、もうそんな時間なの？」

ゴトゴト鉢を引きずってヒマ子がやってきた

「もう7時だっちゃ」

緊那羅きんらが庭先の蛇口をひねると緑色のホースから水が出る

「まだ明るいすわね、まだ日光浴できそうですわ」

鉢の中に注がれる水を見ながらヒマ子が言った

身をくねらせてヒマ子が言った

「母さん俺ちよい行ってくる」

京助の声と足音が聞こえた

「どこに？」

母ハルミが聞き返している

「学校へあ、風呂のふた閉めてねえから閉めといて」

遠ざかる京助の声と足音

「…お出かけになられるようですわね」

ヒマ子が家の中を見て言う

「学校行くみたいだっちゃ」

緊那羅きんならが水を止めに蛇口の方に歩き出すとガラガラと玄関の引き戸

が開く音がした

「お、緊那羅」

蛇口をひねっていた緊那羅きんならに京助が声をかけた

「京様お出かけですよ？」

ヒマ子が鉢を引きずって緊那羅きんならの隣から聞いた

「ああ…学校行ってくる…来るか？」

ズボンのベルトを締めながら京助が緊那羅きんならに聞いた

「行きたいのは山々なのですが…夫のいない間に家を守るのが妻の務め…」

ヒマ子が言う

「…あのな…」

京助が肩を落とした

「何しにいくんだっちゃ？ 夏休み…というかもう暗くなるのに…」

緊那羅きんならがホースを置いて顔を上げて聞いた

夕焼けがようやく夕焼けになってきた空の下

「…そういえば京助って朝に学校行く時コレに乗らないっちゃね」

京助が漕ぐ自転車に立ってフタケツしている緊那羅きんならが京助に言う

【解説しよう。フタケツとはいわゆる二人乗りのことである】

「あゝ…んなチャリ引つ張り出してる時間ねえし…走った方裏道や
ら使えるしな」

京助が答える

「…早く起きればいいことだと思うんだっちゃけど」

緊那羅きんならがボソツと呟いた

「うるへい； 朝は眠みいんだよ； 弱いんだよ俺はッ；」

聞こえたのか京助が言う

「でもラジオ体操って朝早いって…」

京助を見下ろして緊那羅きんならが言った

「…いかねえとまた母さん怒んだろうなあ…；」

溜息混じりに呟くと京助は漕ぐ速度を上げた

「やーはー！！」

校門前に見えた二つの人影のひとつが手を上げた

「よっす」

キキィー————とブレーキをかけて京助が自転車を
止めると緊那羅きんならが後ろから飛び降りた

「ラムちゃんもやーはー」

南が緊那羅きんならに手を振る

「中島は？」

京助がいない中島を探す

「立ちション」

坂田が校門脇を指差すと中島が丁度土手から上がってきた

「で？」

京助が自転車から降りて坂田を見た

「明日でもよかったんだけどさあ…やっぱこう…スリルが欲しくな
いですか夏休みだし」

坂田が自分の自転車に寄りかかりながら言う

「夏だしね」

南がハッハと笑う

「稲川淳二の季節だし」

中島が頷く

「：何かするんだっちゃ？」

緊那羅きんならが3馬鹿に聞いた

「学校侵入」

京助がどこから取り出したのか懐中電灯を灯火すると3馬鹿も各々の手に持った懐中電灯を点けて顔の下から照らした

「ついでに肝試し？　みたいな」

南が笑いながら懐中電灯を緊那羅きんならに向ける

「ただ忘れ物取りに行くだけじゃつまんないと思ひまして：」

坂田が懐中電灯を消して言った

「ちょっとオプシヨンついたほうがお得だと思ひませんか？　奥さ

ん」

中島きんならが緊那羅に言う

「：よくわからないっちゃけど：学校の中に今から入るんだっちゃ？」

緊那羅きんならがもうだいぶ夕闇に染まった校舎を見た

「……；」

そして無言になる

「怖いのか？」

京助きんならが緊那羅に聞く

「こ：っ；　怖くなんかないっちゃッ！！；　ただ不気味だなんて
思っただけだっちゃッ！！；」

「声裏返ったヨー：」

緊那羅きんならが必要以上の声量で返すと坂田が突っ込んだ

「まあ何か出た時にはアレだお経」

中島が言う

「お：経？」

緊那羅が京助を見る

「：お前何か受け取り間違いつてんぞ緊那羅きんなら；俺に【お】をつけたつて成仏させれないからな；」

京助が緊那羅きんならに言った

「あのねラムちゃん； お経つて言うのは南無妙法蓮華経きんならとかいう呪文きんなら：みたいなので：」

南が緊那羅きんならにお経の説明をし始めた

「なんみようほうれんげきよう：だっちゃ」

緊那羅きんならがボソボソと南から聞いたお経を言い返している

「：最後にだっちゃついても効くんだっちゃかねえ」

坂田がそんな緊那羅きんならを見て言う

「でもさあ：鍵開いてねえんじゃね？」

生徒玄関前で京助が3馬鹿と緊那羅きんならを振り返った

「玄関はそりゃ閉まつてるだろ」

坂田がタタンと階段を駆け上がつて少し歩きそして飛び降りた

「中庭通つて渡り廊下の端つこの窓：鍵閉まらないんだわ」

ニツと笑つた坂田が歩き出す

「：お前：はなつから侵入目的だったんだろ」

そう言いながら中島が坂田の後に続いた

「ハッハッハ！！ 楽しいねえ」

南が笑つて同じく飛び降りた

「楽しくないっちゃ：；」

はあと溜息をつきながら後に続く

「やっぱ怖いんじゃねえか；」

あからさまに嫌がつていゝと思へない緊那羅きんならを見て京助が呟いた
中島の背を借りて窓を開けた坂田が先に中に入る

「へい！！ 京助！！」

坂田の手を掴んだ京助が中島に押してもらい中に入った

「次南」

そして京助と坂田に引っ張られ中島に押されながら南が続いて中に入る

「ほれ！ 緊那羅」

坂田が手を伸ばして緊那羅を手招きする

「…うええ…」

緊那羅が嫌々ながらも坂田の手を掴むともう片方を京助が掴んで同時に引っ張り上げる

「最後に中島…と」

京助と坂田が思いつきり中島を引っ張り上げた

「侵入成功ッ！！」

南が小さく拍手をした

「何だかルパンな気分？」

懐中電灯を点けた中島が言う

「誰が五右衛門？」

同じく懐中電灯を点けた京助が3馬鹿と緊那羅を照らしながら言った

「5人いるから銭形のとっつあんもでキンじゃん…って…ラムちゃん？」

フラッと歩き出した緊那羅に南が声をかけた

「お…い？； 緊那羅？；」

京助が緊那羅の腕を掴んで名前を呼ぶ

「放して」

緊那羅が京助の手を掴んだ

「ごめんね行かなきゃいけないの」

緊那羅が言うと3馬鹿と京助が驚く

「今…お前なんだった…？」

京助が再び緊那羅の手を掴んで聞く

「放してってば！！ 行かないといけないの！！ 待ってるの！！」

緊那羅が京助の手を振り解いて数歩下がった

「ラム：ちゃん？；　いつものだっちゃ：は？；」

南が懐中電灯を緊那羅に当てながら言う

「な：なあ：；」

坂田が隣にいた中島を揺すった

「い：稲川淳二？；」

中島が呟く

「むしろ：ギボアイコ？；」

京助が払われた手をさすりながら呟いた

「いけない：早く行かないと：ッ」

「あ！！　おい！！；　緊那羅！！；」

タツと駆け出した緊那羅が渡り廊下の暗闇に吸い込まれるように消えていく

「緊那羅！！；」

ワンテンポ置いて京助が緊那羅の後を追いかけると顔を見合わせた
3馬鹿も京助の後に続いた

走っているせいか懐中電灯の光を四方八方に忙しく飛び散らせて
京助が微かに見える緊那羅の後姿を追っている

「ば：ッ！！；　そっちかいだ：」

そう言いかけた京助が手を思いつきり伸ばして緊那羅の腕を掴むと
ガクンと緊那羅が階段を踏み外した

「だあッ！！；」

「でっ！！；」

「ちょ：ッ！！；」

「危なッ！！；」

緊那羅の腕を掴んで一緒に階段から落ちるところだった京助のシャッ
ツを坂田が間一髪掴み、その坂田のズボンを南が引っ張ってそして
その南の足を中島が捕まえた

「せ：セーフ：；」

階段の手摺につかまって中島が言う

「ナイスコンビネーション俺等；」

坂田が腕で汗をぬぐった

「大丈夫か京助；」

南が坂田の体の横から京助に声をかける

「一瞬あの世が見えたような気が；；」

坂田がシャツを引つ張った時に首が絞まったのか京助が涙目で首をさすっている

「緊那羅は？」

中島が上から言うと言京助がハツとして緊那羅を見た

「；いる；」

自分の手の中の緊那羅の腕を見てそしてその先に緊那羅の姿を見て京助がホウと安堵の息を漏らした

「；思い出した」

緊那羅が呟いた

「そう；私階段から落ちたんだっけ；」

「はい？；」

緊那羅の言葉に京助と3馬鹿が声を揃えた

「；じゃあ；この私は；」

緊那羅が震える声言いながら自分の手を見た

「この私って；お前は；誰だ？；」

そんな緊那羅に京助が聞いた

「；大沼妙子；アンタは？」

緊那羅が京助を見て言った

「聞いたことねえ名前だし；緊那羅がだっちゃ節じゃない話し方してるってことは；やっぱコレ稲川淳二？；」

坂田が顔を引きつらせながら言う

「俺は京助で；オカマと若とすね毛」

京助が3馬鹿を適当に紹介すると中島の投げた懐中電灯が京助の後頭部にめり込んだ

「俺は南ってん…だけど…さあ…その…本当にラムちゃんじゃないの? ;」

南が緊那羅きんならの近くまで階段を下りてきて緊那羅きんならを見る

「…ラム…ちゃん…っていうの? この子…じゃあやっぱり私じゃないんだ…」

緊那羅きんならが自分の両手を見てそして南を見て言った

「なんだって緊那羅きんならに… ;」

中島と共に緊那羅の近くまで降りてきた坂田が緊那羅きんならに聞いた

「ソレは私が聞きたい」

緊那羅きんならが坂田に言う

「友達待たせてたから走ってただけなんだもん…そしたら体がふわっと軽くなって…」

「階段から落ちたんだな」

京助が頭をさすりながら言った

「…ってことはやっぱ…」

中島が緊那羅きんならを見る

「…俗に言う…アレ? ;」

南が引きつった笑いをする

「可愛く言うとオバケ? ;」

坂田が手を幽霊お決まりのポーズにして言った

「オバケって嫌な言い方」

緊那羅きんなら…というか実際は妙子が口を尖らせた

「…というか…ここどこ?」

3馬鹿と京助の懐中電灯で周りだけが照らされている階段の踊り場を見て緊那羅きんなら（妙子）が聞く

「学校」

京助が答えた

「うっそ! だって凄くボロい!!」

緊那羅きんなら（妙子）が言う

「…もしかして正月の生徒じゃないんじゃない? えっと…」

南が緊那羅きんなら（妙子）を見て言った

「妙子だよ……正月……ってどこ？」

緊那羅きんなら（妙子）が南を見返して答える

「たえちゃん……ってどこの生徒？」

南が緊那羅きんなら（妙子）の前にしゃがんで聞いた

「千葉…の松戸…っていうか思えばアンタ達変な話し方…」

緊那羅きんなら（妙子）が京助と3馬鹿を見渡して言う

「千葉の幽霊が何でほっきゃーどーにまで遠征してきてるわけ? ;」

中島が聞いた

「だから！
ソレは私が知りたいんだって！！」

緊那羅きんなら（妙子）が中島を睨みながら言う

「まままま……；
とにかく……だ、
えつと……たえ……こ？、」

京助が途切れ途切れに緊那羅きんなら（妙子）を呼んだ

「何？」

緊那羅きんなら（妙子）が京助の方を向いた

「こいつの体から出られないわけ？」

京助がコイツと緊那羅を指差して聞く

「知らないよ! ! ! ;
気がついたらコノ体だったんだもん ;
私が

「教えて欲しいくらい!!」

緊那羅きんなら（妙子）が自分のシャツを掴んで京助に向かって言った

「うん…； 困ったねえ；」

南が苦笑いで言う

[illegible][illegible]

! ! ! ! ! ! ? ;

今まで黙っていた坂田がいきなり大声を上げると京助と南、中島に

緊那羅（妙子）が悲鳴を上げてお互いに抱きついた

「な……何……ッ；」

中島が坂田を見た

「出たか？」

坂田が緊那羅きんなら（妙子）を見た

「…な…にが？；」

南と京助に抱きつく体勢で緊那羅きんなら（妙子）が坂田に聞く

「だっちゃんがまだついてないってことは…駄目か」

坂田がフムと顎に手を添えて首をかしげた

「…おんまえは…； シャツクリじゃねえんだからよ；」

京助が呆れ顔で言う

「いやいや…物は試しつていうじゃあゝりませんか」

ソレに対し坂田がエセっぽい爽やかな笑顔で手を振りながら言った

「はあ…； ったく…」

京助が溜息をつく

「アンタ達…馬鹿でしょ；」

緊那羅きんなら（妙子）が呟いた

古い校舎の廊下は一応はタイル張りになってはいるものの所々が色が違ういかにも後から埋め込んで修正しましたというカンジになっている

「あ、ソコ剥がれてるから足気をつけろよ」

【ソコ】といいながら京助が懐中電灯で剥がれているというタイル部分を照らした

「ねえ…何しにきたのさ」

緊那羅きんなら（妙子）が京助の後ろを歩きながら聞いた

「忘れ物とりにきたついでの肝試しだったんだけどねえ…；」

緊那羅きんなら（妙子）の隣を歩きながら南が言う

「予想外の出来事がさ；」

緊那羅きんなら（妙子）の後ろで中島が言った

「まさか本物のオバケに出会うなんて思ってもみんかったし」

京助の隣を歩いていた坂田が振り返って言う

「だからオバケじゃないよ!!」

緊那羅^{きんなら}（妙子）が言った

「だってじゃあ何だよ;」

坂田が懐中電灯で緊那羅^{きんなら}（妙子）を照らした

「私は死んでないもん」

緊那羅^{きんなら}（妙子）が言う

「でも体は？ ソレラムちゃんの体だよ？ たえちゃんのは？」

南が緊那羅^{きんなら}（妙子）に聞いた

「知らないって…!! でも死んでないっ!!」

緊那羅^{きんなら}（妙子）が食って掛かる

「どうしたもんかねえ;」

中島が頭の後ろで手を組んで言った

「あつと…ちよいまち」

京助がいきなり足を止めた

「なした？」

京助より数歩先に進んだ坂田が振り返って聞いた

「寄ってく」

京助が懐中電灯を点けたままポケットに入れて親指で指したところには男子トイレのあのマーク

「じゃおーれもッ」

南も手を上げた

「ツレシヨン ツレシヨンたんのしいな」

坂田が軽やかな足取りでトイレの中に入っていく

「じゃあ…私も行ってくるから…懐中電灯貸して」

緊那羅^{きんなら}（妙子）が中島に向かって手を出した

「ほいよ」

緊那羅^{きんなら}（妙子）の手に中島が懐中電灯を手渡すと緊那羅^{きんなら}（妙子）が男子トイレの隣の女子トイレに入って行った

「ほおう…」

並んだ便器に並んだ3馬鹿と京助が何ともすがすがしい顔で用を足し始める

「いやゝゝ溜めてた溜めてた…」

南が言う

「…あれ？ 緊那羅は？」

用を足し終わってズボンのファスナーを上げていた坂田が言った

「ああ…さつき女子…」

「何————！！！」

中島が言いかけると聞こえた緊那羅（妙子）の声

「…の方に行ったけど緊那羅って…俺等の仲間だったんだよナア；」

中島が思い出したように言う

「じゃ今の声はアレか…未知なる物体を見た乙女の叫びか」

京助が手を洗いながら口の端を上げて言った

「ちよつとっ！！！」

「キャ————！！！」

いきなり男子トイレに殴りこんできた緊那羅（妙子）にまだ用を足していた南が可愛らしい悲鳴を上げる

「な…なな…っ；」

緊那羅（妙子）が自分の股間部分を指差して赤い顔をしている

「緊那羅もうお嬢にいけないな…」

坂田が洗った手を振って水を切りながら言った

「何かついてるッ！！！」

緊那羅（妙子）が言う

「チンコ」

中島がさらっと言うと緊那羅（妙子）止まった

「ち…」

「ち————ん————！！！」

「――――」

緊那羅^{きんなら}（妙子）の横で京助が言う

「こんななりしてんだけどコイツ俺等と一緒にの男の子でして」

京助が緊那羅^{きんなら}（妙子）の肩を叩いていった

「っ…；じゃあ私トイレできないじゃないッ…！」

赤い顔で緊那羅^{きんなら}（妙子）が怒鳴る

「簡単簡単！！ 摘んでシャーっ」と

坂田が笑いながら言う

「できないッ…！」

緊那羅^{きんなら}（妙子）が坂田を突き飛ばした

「見ちゃったんだしこの際触っても大丈夫大丈夫」

南が手を洗いながら言う

「イヤ――――ツ…！！；絶対イヤ

！！；無理ッ…！」

緊那羅^{きんなら}（妙子）が怒鳴った

「じゃ漏らす？」

京助が言うと緊那羅^{きんなら}（妙子）が再び止まる

「…う…；」

涙目で緊那羅^{きんなら}（妙子）が3馬鹿と京助を見ると一同がまるで面白

いおもちゃを目の前にしたような無邪気なお子様の表情で緊那羅^{きんなら}

（妙子）を見ている

「今夜の…ご注文は…ドツチッ！！」

南が緊那羅^{きんなら}（妙子）を指差して言った

「まあアレだ…何事も経験」

坂田が緊那羅^{きんなら}（妙子）の肩を叩いて言う

「…外で…待ってて；」

緊那羅^{きんなら}（妙子）が小声で言って俯いた

トイレから静かに出てきた緊那羅^{きんなら}（妙子）を3馬鹿と京助が見た

「どうだった？」

中島が緊那羅きんなら（妙子）に聞く

「…どうって…言われても…ッ；」

まだ感触があるのか自分の手を軽く握ったり開いたりを繰り返しながら緊那羅きんなら（妙子）が赤くなる

「簡単だったろ？」

坂田が笑いながら言った

「どこが！？； 軽く持ってたらトイレからはみ出そうになるし…
かといって…って何言わせんのさッ！！；」

妙子が赤い顔を更に赤くして怒鳴った

「んんゝいいねゝ新鮮な反応」

南が笑いながら言うきんならと緊那羅（妙子）が南を押した

「ひと夏の経験だな」

京助がうんうん頷く

「そうだ！！ たえちゃんコレ自由研究にしたらは？」

南が言った

「コレ？」

緊那羅きんなら（妙子）が首をかしげる

「題して…【女子禁制！！ 男子のヒミツ！！】」

「やらないッ！！；」

南が言うきんならと緊那羅（妙子）が怒鳴った

トイレを過ぎて職員室脇の階段を登ると三年の教室がありその奥にあるのが

「美術室…かあ；」

古びた扉のガラスから中島が中を覗き込んだ

「…さすがに不気味だぞ；オイ；」

そして振り返って言う

「こんなトコに何忘れたんだよお前；」

京助が坂田に聞く

「携帯」

坂田がさらつと言う

「え!？ こんなトコでも電波あるの!？」

緊那羅きんなら（妙子）が驚いて言った

「あのなあ…； そりゃ千葉…だかに比べたら田舎の中の田舎かもしれねえけど…；」

京助が言いかけて言葉を止めた

「どうした？」

中島が京助を見る

「…コイツの名前は」

京助が緊那羅きんなら（妙子）を指差して3馬鹿に聞いた

「コイツ…って…」

南が緊那羅を指差すと京助が頷く

「私は妙子」

緊那羅きんなら（妙子）が答える

「でも体は緊那羅きんなら…なんだよな」

中島が緊那羅きんなら（妙子）を見て言った

「でも私は大沼妙子!!」

緊那羅きんなら（妙子）が強く言う

「だったら…ラムちゃんはどうなるの？」

南がボソつと言った

「体はラムちゃんでも中身はたえちゃん…じゃあラムちゃんの中身は？」

南が言うと揃って緊那羅きんなら（妙子）を見る

「知らないよ!…!」

緊那羅きんなら（妙子）が一步引いて言った

「このまま妙子だかが緊那羅きんならの体に憑いたまんまだったら緊那羅きんならって…」

坂田が言うと同が緊那羅きんなら（妙子）を見たまま沈黙した

チャ～ンチャ～ンチャチャ～ン…♪

ンブブブブブ
（バイブ音）
ンゴガガガガ
（机の中にあるらしい）

「うおう！！；」

沈黙していた中いきなり鳴り響いた葬送行進曲とバイブ音に一同がオーバーリアクションですくみ上がった

チャ～ンチャ～ンチャチャ～ン…♪

ンブブブブブ
（バイブ音）
ンゴガガガガ
（やっぱり机の中にあるらしい）

「…親父…帰ったらノす…；」

ずり落ちたメガネをかけなおすと坂田が美術室の戸を開けた

「お前…いまだ親父さんの着信葬送行進曲なんだな；」

京助が言う

「変えるの面倒くせえし…えーと…」

後ろから三列目窓際から二列目の机の中がほんのり赤色の光を放っていた

「何でまた美術室に携帯忘れるかね…」

南が戸口で言う

「一学期に作った石膏の手え取りに来たとき忘れたみたいでさ」

坂田が机の中から携帯を取り出して開いた

「…親父さん何だって？」

中島が聞く

「…風呂はいれだとか」

坂田が携帯を閉じながら言った

「相変わらず携帯会話なのかお前ンところ」

京助が口の端を上げて言う

「前よりは直接会話増えたけどな…母さんがキレるから」
坂田がポケットに携帯をしまって戸口に向かってきた

「さって…忘れ物もとったし…かえ…れないんだよなあ； まだ；」

坂田が緊那羅（妙子）を見て言う

「もうひとつ…忘れ物あったな；」

中島も緊那羅（妙子）を見た

「忘れ物って…私？；」

緊那羅（妙子）が自分を指差すと3馬鹿と京助が頷く

「たえちゃんの忘れ物…たえちゃんの体？」

南が緊那羅（妙子）に向かって言った

「コレは緊那羅の体だから…返してもらわないとな」

京助が緊那羅（妙子）の髪を引っ張って言う

「私だって返したいよ！； もう次トイレしたくなる前に！！；」

緊那羅（妙子）が言った

「そんなにイヤだったのか？ チン…」

「言わなくていいッ！！；」

京助が言いかけると緊那羅（妙子）が京助の口を押さえた

「とにかく…どうして千葉のお前がここまで来たのか…そしてお前は生きてるのか死んでんのか…それくらいわからねえとなあ；」

中島が言う

「だよねえ…； せめてたえちゃんが生きてるか死んでるかくらいわからないかなあ；」

南が腕を組んで考え込む

「うゝん…；」

少ない脳みそをフルに使っているらしく3馬鹿と京助が唸った

「…なんとか向こうの誰かと連絡取れば…私の体…私が…」

緊那羅（妙子）が小さく言う

「連絡…かあ…」

京助が呟く

チャラッチャラッチャチャッチャーン！！ ズキューン！！♪
ンブブブブブブ （バイブ音）

「っおおおおおお!?;」

坂田の尻ポケットから軽快に流れたルパン三世のアノテーマ曲
(銃声音付) に再び一同が飛び上がって驚いた

チャララチャッチャッチャッ♪ルパンザサアズ♪
(声入り)

ンブブブブブブ (バイブ音)

「し…ばた;」

坂田が壁に手をつきながら尻のポケットから携帯を出した

「バイブにしとけ!! バイブに!! ってかマナー!!;」

京助が坂田に向かって怒鳴る

「文句なら柴田に言え!!; あゝ…チビるかと思った;」

坂田が携帯を開きながら言った

「…あるじゃない連絡手段」

きんなら
緊那羅 (妙子) が言う

「…どこに?」

3馬鹿と京助がきんなら緊那羅 (妙子) を見て口をそろえた

「…目の前に」

きんなら
緊那羅 (妙子) が坂田を指差して言う

「俺?」

坂田が自分を指差して聞く

「お前佐川急便でもやるのか?」

京助が坂田に言った

「…アンタ達…本当馬鹿だね…;」

坂田を指していた手を下げてきんなら緊那羅 (妙子) が溜息をつく

と3馬鹿と京助が顔を見合わせて首をかしげた

「携帯なら携帯って言えよナア;」

坂田が携帯を開けしながら緊那羅きんなら（妙子）に手渡す

「気づくでしょ：普通；」

受け取りながら緊那羅きんなら（妙子）が言った

「番号わかんの？」

南が緊那羅きんなら（妙子）に聞く

「わからなかったら貸せて言わないよ」

緊那羅きんなら（妙子）が携帯を開き素早く親指でボタンを押し始めた

「：神業：」

見ていた京助が呟いた

「コレくらい普通：あ、かかったかかった」

緊那羅きんなら（妙子）が言うところ馬鹿と京助が耳を澄ました

トゥルルル：トゥルルル：

「：つながらないね」

南が言う

「誰にかけたんだ？」

中島が聞いた

「自分：」

緊那羅きんなら（妙子）が小さく返した

「：あのナア； お前ここにいるのに誰が取るんだよ誰が；」

京助が溜息混じりに言う

「あ：そっか」

緊那羅きんなら（妙子）が携帯を耳から話して切った

「馬鹿に突っ込まれちゃった：」

ボソツと言うと緊那羅きんなら（妙子）が再び指を素早く動かす

「：今なんか言ったら」

京助が緊那羅きんなら（妙子）を見て言った

「：つながりますように」

呟いた緊那羅きんなら（妙子）が通話ボタンを押して携帯を耳に当てた

トゥルルルル…トゥルルルル…プッ

『誰？』

「出たッ!!」

「何ッ!!」

緊那羅^{きんなら}（妙子）が声を大きくして言うのと3馬鹿と京助が一斉に緊那羅^{きんなら}（妙子）を見た

『…誰だよ』

電話の向こうの人物が不機嫌そうに聞いてきた

「三春^{みはる}だよな？」

緊那羅^{きんなら}（妙子）が受話器の向こうの人物の名前なのか聞き覚えのない名前を口にした

『そうだけど…お前誰』

「信じてよ？ 私^{わたし}は妙子」

不機嫌そうな電話の向こうの三春というらしき人物に緊那羅^{きんなら}（妙子）が自分の名前を言うと3馬鹿と京助が息を呑んだ

『…は？ 何…だって妙子…』

「ソレはどうでもいいや…あのね!! わた…大沼妙子今なにしてる!？」

何か言いかけた電話の向こうの見張るの声を遮って緊那羅^{きんなら}（妙子）が聞いた

『…誰だか知らないけど…妙子は今病院…』

「生きてるの!？」

また言いかけた電話の向こうの見張るの声を遮って緊那羅^{きんなら}（妙子）が聞く

『意識ないけど生きてはいる…ってかお前誰?』

やっと聞けたというカンジの三春の声が聞こえた

「アンタの幼馴染! 大沼妙子!!」

緊那羅^{きんなら}（妙子）が言う

『はあ?;』

「ねえ!! いい? 聞いてよ? あのね:」

緊那羅きんなら（妙子）が携帯を左耳から右耳にあて変えて話し始めた

『マジで?;』

信じられないという三春の声が聞こえた

「信じれないかもだけど私は今:ボロい学校に違う体の中でこうして話してんの」

一通り説明を終えた緊那羅きんなら（妙子）が言う

『どうしてまた:』

三春が聞いてきた

「ちよい貸してくんね?」

京助が緊那羅きんなら（妙子）に向かって手を差し出すと緊那羅きんなら（妙子）が携帯を渡した

「もしもし私京助だっちゃ」

『は?;』

「遊ぶなたわけ」

京助が言うとは三春が声がいきなり変わったのと変な話し方をされたのとで素っ頓狂な声をあげその京助に対して中島が突っ込んだ

「じゃなく:初めましてだな俺柴野京助」

京助が三春に軽く自己紹介をした

「単刀直入にぶっちゃけて言うのだな緊那羅きんならと妙子だかのつながりがわからんのだよ」

京助が三春に言った

『そんなのは俺だってわからないっての!!』

ソレに対し三春が言う

「そうだよねえ:;」

南が苦笑いで言った

「ソレくらいわかれよ! 彼氏かなんかなんだろうが! このチン

カスくんめ！」

「彼氏じゃないッ！！」

京助が言うきんならと緊那羅（妙子）が怒鳴った

「三春は幼馴染の一人ッ！！」

緊那羅（妙子）が言うきんなら

「似た様なもんじゃん」

坂田が言った

「全ッ然違うッ！！」

緊那羅（妙子）が坂田に食って掛かるきんなら

「まあまああ…；　じゃああれ…？　もしかしてたえちゃんの待たせてた友達ってこの電話の？」

南が緊那羅に妙子がとり憑いたときにつけていた言葉を思い出して聞いたきんなら

「そう。でも三春だけじゃなくて…」

『俺とヤスとサットと英二だな』

緊那羅（妙子）が言いかけると三春がその前に緊那羅（妙子）が待たせていたというメンバーの名前を挙げたきんなら

「…全然繋がらないじゃん；　苗字とかは？」

全く共通点のない名前を聞いた京助が今度は苗字を聞いた

『俺は三春が苗字。名前は雅巳…で西村泰弘、三浦聡美、坂本英二…そっちは？』
まゆみ　にしむらやすひろ　みづらさとみ　さかもとえいじ

メンバーの名前を挙げた三春が今度は聞いてきた

「こっちは栄野京助が俺。んで坂田深弦、南朔夜、中島柚汰と…金名羊子」

京助が答えた

『…本当全然繋がらないじゃん；』

三春が溜息混じりに言うのが聞こえた

「あつてるといえば…人数くらい？　うゝむ；」

京助が唸った

「今度俺に貸して」

南が手を差し出すと京助が携帯を渡した

「コレ、スピーカー機能とかないのかよ;」

中島が携帯を指差して言う

「受信音量拡大くらいしかない;と思うけど;ココ押して;最大」

南の手の中の携帯のボタンを押して坂田が言う

『何して;』

「おお!! 聞こえた聞こえる!! ヘッロ!」

受信音量を上げたおかげで聞こえるようになった三春の声の中島が拍手した

「でも耳に当てるとうっさいねえ;」

南が言う

「文句垂れんな; :で;本題」

京助が南の頭を小突いて言った

『どうして妙子がそっちにいるのかってことだな?』

三春が言う

「そう;でね;今私病院なんだよね?」

きんなら
緊那羅 (妙子) が三春に聞いた

『そうだぞ? 学校に忍び込んだのはいいけどお前がトイレ行っ
てなかなか帰ってこなくて見に行ったら階段の下で倒れてて;』

三春が言うきんならと三馬鹿と京助が緊那羅 (妙子) を見た

「学校;」

南が呟いた

「忍び込んだ;」

中島も呟く

「;共通点;だな」

そして坂田がシメる

「俺等もなんだわ」

京助が言った

『は?』

三春が疑問系の返事を返す

「コイツ等も学校に忍び込んでるんだ…今」

緊那羅^{きんなら}（妙子）が言った

『へえ…じゃあ…アレか？　もしかしたらだけど…妙子が階段から落ちた時のこと再現したら戻ったりしてな』

三春が言うのと馬鹿と京助、そして緊那羅^{きんなら}（妙子）が顔を見合わせた

「同じ…かあ」

中島が考え込んだ

「同じシチュエーションねえ…」

南が携帯を持ったまま言う

『え？　何？　実行？；』

三春が電話の向こうで言った

「物は試し」

京助が緊那羅^{きんなら}（妙子）を見る

「え…マジで？；」

緊那羅^{きんなら}（妙子）が引きつった顔で京助を見返した

『オイオイ…；　本当にやる気か？；』

三春が言う

「だって他に何か方法思いつくか？」

坂田が三春に言った

『思い…つかないけど…でもその体…怪我するんじゃないか？』

三春がその体というのは緊那羅^{きんなら}の体のこと

「させねえよ」

京助が言う

「床にぶつかる前に受け止めればいいことだろうが」

京助が言うのと馬鹿も頷く

『…お前等チャレンジャーだな…；　俺はどうすればいい？』

三春がハハッと笑いながら聞いた

「たえちゃんの所にでも行っててやって」

南が言うきんならと緊那羅（妙子）がぎよつとした顔で南を見た

「な…」

そしてだんだんと顔を赤くする

『妙子の所に？ 何でまた』

三春が聞いた

「わっかんないかナア…もし成功して目が覚めたときお帰り言っ
てあげたくない？」

南が言う

「ねえ？ たえちゃん」

そして緊那羅きんなら（妙子）を見た

「し…しらないッ；」

緊那羅きんなら（妙子）が南を突き飛ばした

「ってことだ。俺等はこれから階段まで行くから」

中島が三春に言う

『わかったじゃあ俺も病院向かうわ』

そう言うのと三春から携帯を切った

「さあて…じゃ…」

坂田が南から携帯を受け取ると緊那羅きんなら（妙子）を見て腰に手を当
てた

「じゃ…？」

緊那羅きんなら（妙子）が一步後ずさって坂田を見返す

「どんなシチュエーションで落っこちたのか…だね」

南が緊那羅きんなら（妙子）の背中を軽く叩いた

「できるだけ細かく覚えてること話してくれ」

京助が言う

「…本当にやるの？；」

あからさまに嫌そうな顔で緊那羅きんなら（妙子）が3馬鹿と京助を見た

「戻りたくないの？」

南が言う

「…戻りたい…けど…本当に戻れるの？；」

緊那羅（妙子）が小さく言った

「んなのわかんねえ」

京助がキッパリ言い切ると緊那羅（妙子）が目を大きくした後キツと京助を睨んだ

「わかんないのにやるっていうの！？ 凄く危ないのに！？ この体の子怪我するかもしれない…」

「させねえっていっただろうが」

怒鳴った緊那羅（妙子）の言葉を京助が止めた

「悩んでたって始まらないし：初対面で俺等を信じろとか言っても無理かもしれねえけど」

中島が緊那羅（妙子）の肩を叩いた

「あの三春ってヤツも俺等も緊那羅とお前を待ってるんだよな」
坂田が言う

「肝試しにやってきて一人で便所行ける勇氣あんだから」

京助が笑いながら緊那羅（妙子）に言った

「そうそう！！ 嫌がってても最終的にはちゃんとチンコ挿んだわけだし」

中島が言うきんならと緊那羅（妙子）がエルボーを中島に繰り出した

「で：落ちたと」

京助が階段の上から暗くてよく見えない階段の下を見下ろした

「うん：そう」

緊那羅（妙子）が頷きながら言うきんなら

「：結構オッチョコチョイなんだあねたえちゃん」

南が言った

「じゃ：早速やりますか：俺と中島が下で受け止める役やるから」
京助が階段を降り始めると中島もソレに続く

「じゃあ俺と南はココに紐張ってればいいんだな？」
そう言うと坂田がどこから取り出したのかスズランテープをピンツ

と伸ばした

「お前：準備いいとかなんと言うか：どこに持ってたんだよ；」
テープの片側を受け取りながら南が言う

「まあ：アレだうん。備えあれば憂いなし？」

坂田がハッハと笑いながら言った

「私は走ってくればいいんだよね？」

きんなら
緊那羅（妙子）が南と坂田に聞く

「そ：」

チャッチャ〜ンチャラ〜ラ〜ピロリロリン♪

ンブブブブブブブブ：（バイブ音）

「なっ！？；」

「キヤー！！ 猛将現る！！；」

いきなり鳴り響いたのは某敵将討ち取ったりゲームの最強キャラの
テーマ

「：マナーにすんの忘れてた；」

坂田がそう言いながら携帯を取り出した

「：誰だコレ：もしもし？」

画面に表示され知多見たことのない番号に首を傾げつつも坂田が通
話ボタンを押した

『三春だけど』

「三春！？」

受信音量を最大にしていたままだった携帯から聞こえた三春の声に
きんなら
緊那羅（妙子）が反応した

『今病院ついた：そっちは？』

少し息が切れているっぽい三春が言う

「早ッ！！； コッチは今から：」

坂田が言った

『バイク飛ばしたから：そっか：じゃ俺妙子んとかいってるから』

南と坂田に指を指されたままの緊那羅きんなら（妙子）も聞いた

「いやね：たえちゃん今高校生なんだけど昔俺等と同じ歳の時にもこうやって学校に忍び込んだんだった。んでそんな時たえちゃんお経唱えてたって言うし：ラムちゃんも唱えてたろ？」

南が緊那羅きんなら（妙子）を指差していた指を今度は京助に向けた

「だから？」

京助が聞く

「：俺の推測だけど：たえちゃん：戻りたかったんじゃない？ 中学校二年生に」

南が緊那羅きんなら（妙子）を見た

「：え？」

いきなり話題を振られた上ソレが当たっていたのか緊那羅きんなら（妙子）が少し驚いた顔を南に向けた

「ホラ、高校三年って受験戦争に就職戦争だし：ぶっちゃけたえちゃん逃げたかったんじゃない？ 楽しかった時に」

南が【ねえ？】というカンジに手を振りながら緊那羅きんなら（妙子）に言った

「だから何か？ 中学二年で肝試し：もとい忘れ物取りに来てお経言ってた緊那羅きんならにつて？ ：緊那羅きんならは中二じゃねえけど：」

京助が南に聞く

「まあ俺の推測だけど」

南がハッハと笑った

「多分俺も逃げたくなると思うしね：勉強大嫌いだしこんな田舎じゃ就職もアレだしサア：」

南が遠い目で言う

「その点坂田は組長か旅館だろ？」

中島が坂田に振った

「いや神社だって」

「オイコラ；」

返した坂田に京助が間髪いれずに突っ込んだ

「：君ってエスパーか何か？ どうして私のことそんなにわかるの？」

緊那羅きんなら（妙子）が苦笑いを浮かべながら南に聞く

「俺？ 俺はいつでも女の子の気持ちを第一にって考えだから」

ニツと笑って南が答えた

ベイイイイイイイイイ：

「：何の音だ？」

突如聞こえ出した小さな音に中島が耳を澄ませる

ベイイイイイイイイイ：

「：坂田：お前いつから蛍になったんだ？」

京助が坂田の尻を叩きながら言った

「蛍：そーいや今日蛍の墓がロードショー：じゃなく； そうだそ
うだマナーにしてたんだっけ；」

坂田が尻のポケットから携帯を取り出して開いた

「三春」

そして相手の名前を言う

「：もしもし？」

『まだか？』

まだ受信音量を最大にしたままだったため三春の声が全員に聞こえた

「いや：何だか共通点が結構見つかって：これから」

坂田がうるさいのか携帯を少し耳から放しながら話す

『共通点？』

三春が聞いてきた

「高校生って大変なんだナァ：とか」

京助が言うと同が頷いた

『は？；』

聞こえたのか三春が疑問系の声を出した

「とにかく今からやるから：成功を祈っててくりやれ」

そう言うのと坂田が携帯を切った

「さって…とじゃ…今度こそ」

坂田が携帯をまた尻のポケットにしまったのを合図にしたのか受け止め役の京助と中島が階段を降り始める

「逃げてもいいと思う」

南がボソツと言った

「逃げてたってどうせつかまるんだし時には本当全力で逃げて逃げて…ソレでもいいと思うよ俺」

そして笑いながら緊那羅きんなら（妙子）を見る

「たえちゃんにはそうして逃げて疲れても受け止めてくれる人いるんだから」

きよとんとしてゐる緊那羅きんなら（妙子）に南が言った

「…ありがとう…」

少し間を空けて緊那羅きんなら（妙子）が微笑む

「馬鹿になりたきゃ協力するぞ」

坂田がスズランテープを伸ばしながら言った

「大丈夫、今日少し馬鹿を貰ったから」

緊那羅きんなら（妙子）が笑いながら親指を立てて言った

階段の一番上の端にスタンバイした南と坂田がスズランテープをピンツと張った

「全力疾走OK？」

坂田が暗闇の中ぼんやり浮んで見える緊那羅きんなら（妙子）に言った

「うん…OK」

緊那羅きんなら（妙子）が足を一步ひいて走る姿勢に入った

「一番似合いたい人の名前とか唱えながら走れば上手くいくかもよ？」

南が軽くウインクして言う

「勘弁してよもう；」

緊那羅きんなら（妙子）が苦笑いを返した

「じゃ：いくぞ——————！！！！」

坂田が受け止め役の京助と中島に向かって叫ぶと緊那羅きんなら（妙子）が駆け出した

「少し上げるぞ」

坂田が手に持っていたスズランテープを少し上げた

「了解：帰っておいでラムちゃん：っ」

南がぼそっと呟いてスズランテープを上げると丁度 緊那羅きんなら（妙子）の足の脛に引っかかった

「っわ：！！；」

ガクンとバランスを崩した緊那羅きんならの体が暗闇に向かって頭から落ちていく

「…三春：っ」

小さくその名前が聞こえると南が微笑んだ

何かに締め付けられている感じがして緊那羅きんならがうつすらと目を開ける

「ってかよくあんだだけ大騒ぎして先生に見つからなかったよナァ」

坂田の声が聞こえた

「日ごろの行いがいいからだろ俺の」

そして京助の声とチキチキという音

「あ：れ…」

体を動かそうとした緊那羅きんならが手足が何かで縛られているのに気づいた

「あ：ラムちゃん起きた：」

南が言うきんならと緊那羅が南を見た

「起きた：って：私：いっ；」

「イテッ；」

緊那羅きんならが頭を動かすと京助の頭とぶつかった

「いきなり動くな阿呆；中島解いてくりやれ；」

よくみると緊那羅の体はスズランテープで作られた即席おんぶ紐で京助に括りつけられていた

「コレ：ハサミかカッターじゃなきゃ駄目ちゃうか?;」

中島が結び目を見て言う

「ホレ、カッター」

坂田がカッターを差し出した

「：お前本当ドコにそんなん持つてるワケ?;」

南が坂田を見て聞く

「ボク ドラえもんです」

坂田がチキチキトカッターの刃を出しながら元祖の方のドラえものの真似をした

「ヤレヤレ：」

数箇所スズランテープを切ると緊那羅きんならが地面に足をつけた

「あの：私寝てたんだっちゃ?;」

「あ、だっちゃだ」

緊那羅きんならが言うきんならと中島が緊那羅を指差して言う

「へ?;」

指を指された緊那羅きんならがきよんとした

「だっちゃだっちゃ!!」

南が嬉しそうに緊那羅きんならの周りを回りながら言う

「だっちゃだっちゃ」

坂田も南に続いて回りはじめた

「ちょ：何なんだっちゃッ;」

そんな坂田と南に緊那羅きんならが聞く

「やっぱり緊那羅きんならといえだっちゃだよナア」

中島が笑いながら言った

「だからもう：何なんだっちゃッ!;」

全くわけのわからない緊那羅きんならがとうとう怒鳴る

「まあ：アレだとにかく：おかえりだっちゃ」

京助が言った

「ギャー!! 集中攻撃!!;」

栄野家の庭先に出されたビニールプールに入っていた南が叫んだ

「出る出る」

悠助と慧喜えきがキャツキヤと笑いながら南に水をかける

「慧喜えきの谷間がまぶしいですナア」

チリリと鳴る風鈴の下で中島が言った

「ほんに：エエ目の保養ですナア」

坂田がスイカバー片手に言う

「でりゃー！！　今だ！　きんなら緊那羅！　放水！！」

ホースを引っ張ってきた京助が蛇口のところにいるきんなら緊那羅に言った

「了解だっちゃ」

きんなら緊那羅が蛇口をひねるとホースから勢いよく冷たい水が出、太陽の光でキラキラと光りながら地面を濡らしていく

「気持ちいいー！！」

ホースの水を頭から被って悠助がはしゃぐ

「冷たいー！！」

えき慧喜が悠助に抱きついた

「京様も私にも少々お願いいたしますわ」

日光浴をしていたヒマ子がサングラスを外して京助に言う

「ほいさ」

「ああああああああああああ　愛が冷たくて気持ちいいですわー！！」

ホース口を潰して勢いを増した水を京助がヒマ子にかけるとヒマ子が歓喜の声を上げた

「あんまり昼間に水やるとお湯になるっちゃよ？」

きんなら緊那羅が苦笑いで言いながら坂田の隣に腰を下ろした

「：何だっちゃ？」

坂田と中島にじっと見られてきんなら緊那羅が聞く

「いや：やっぱりだっちゃがないときんなら緊那羅じゃなかったよなって」
中島が言う

「またその話なんだっちゃ？　：もういいっちゃ：」

緊那羅^{きんなら}が溜息をついた

「元氣してんのかナア：千葉って暑いんだろやっぱ」

中島が空を見上げながら言う

「元氣してるみたいだぞ？ 昨日：そうだそうだ！！」

坂田が何かを思い出して携帯を取り出した

「何がそうだそうだ？」

水が出っ放しのホースをビニールプールに突っ込んで京助と南が歩いてくる

「昨日三春から写メが来てサア：笑った笑った」

携帯のボタンを押しながら坂田が何かを思い出して笑う

「何だよ； 何に対して笑った笑ったんだよ；」

中島が上から携帯を覗き込みながら言った

「コレ」

坂田が携帯画面を見せると一同が覗き込んだ

「……うわ……」

そして揃って声を上げる

「…黒髪ラムちゃん」

「え？；」

南が言う^{きんなら}と緊那羅も携帯を覗き込んだ

「ドッペルだなドッペル」

携帯の画面の中でピースをしている寝巻き姿の少女の横には【たえこだヨ】の文字

「こりゃ：ドッペルだな」

京助が緊那羅を見てそしてまた携帯画面を見て言った

「緊那羅^{きんなら}の写メ送って見たらは？」

中島が言う

「トイレの鏡暗くて見えなかったんだね……びっくりするんじゃないかな？ たえちゃん」

南が緊那羅^{きんなら}を見て笑いながら言った

「…そんなに似てるっちゃ？；」

緊那羅きんならが携帯を見て言う

「デコポチが無いのと…髪型違うくらいじゃないか？」
坂田が言った

チャ～ンチャ～ンチャチャ～ン…♪

「…親父…」

鳴り響いた葬送行進曲を坂田が素早く止めた

「…なあそういうやお前…俺等からかかってきた時の着信とか設定してんの？」

中島が坂田に聞く

「もち」

坂田が言った

「中島からきたらゆずの夏色だろ？ 南からきたらタッチで…」

坂田が携帯を振りながらそれぞれかかってきた時に流れる着メロを答えていく

「…なんとなく俺からのヤツの着信想像つくよな…」

京助が口の端を上げて言った

「中島は柚の字入ってるからゆずなんだろ？… 南はアサクラ南でタッチ…」

京助が坂田を見ながら言うのと坂田がニツと笑った

「あ……なんだか俺もわかった気がする」

南が笑った

「俺も」

中島がそういいながら緊那羅きんならを見る

「…何だっちゃ？…」

緊那羅きんならが首をかしげた

「ラムのラブソング」

京助と南、中島が声を揃えて言うのと坂田が親指を立てた

「へ？…」

一人わけのわからない緊那羅^{きんなら}が自分を指差したままきよんと
して
いた

【第八回・四】ドンブラスココ（前書き）

北海道といえども夏は暑いといえは暑い
我慢の限界が来た京助が取った行動とは

【第八回・四】ドンブラスココ

「暑いよ」

蝉は鳴けども風鈴が全くといっていいほど鳴いてくれないそんな日の和室で矜羯羅こんがらが言った

「：暑いと思うから暑いんで：でも暑いから暑いと思う：んだよナア；」

【おしゃれな店・だるまや】と筆書きされたウチワで仰ぎながら京助が言う

「風が全然ないっちゃ；」

少しでも暑さをなくそうとしているのか緊那羅きんならがいつものポニーテールを団子にしている

「：制多迦よく縁側にいて暑くないよな：；」

京助が直射日光バリバリの縁側に座っている制多迦を見て言った

「：そういや：お前等ンところにも暑い寒いあんのか？」

京助が矜羯羅こんがらに聞く

「ないよ：いつも同じ」

暑さに我慢できなくなったのか矜羯羅こんがらが頭の布を外した

「だからつまらないんだよ：何も変化がない：そんな【空】よりはコッチにいたほうが退屈しないしね」

少し汗ばんだ矜羯羅こんがらの額に髪の毛がくっついていて

「：緊那羅きんならとこもか？」

京助が今度は緊那羅きんならに聞いた

「うん：そうだっちゃ」

畳みに汗で足がくっつくのか緊那羅きんならが座り直しながら答えた

「ふうん：に：しても：あっちいい！：！！：」

京助が足を投げ出して後ろに倒れるとパタパタという足音が和室に近づいてきた

「京助！：！！」

風通しがいいようにと開けっ放しにしていた戸口に悠助が顔を覗かせた

「あゝ?;」

京助がやる気なく返事をするとう悠助が京助の頭の方にしゃがんで顔を覗き込む

「暑い?」

そして笑いながら悠助が京助に聞く

「暑い;」

京助が即答した

「じゃあ海いこ?」

悠助が言った

「…海…海!! そうだ! その手があった!」

何回か【海】を繰り返した後京助が飛び起きた

「海?」

矜羯羅こんがらと緊那羅きんならが京助を見て言う

「そう!! 海!! でかした悠!!」

京助が悠助の頭をぐりぐり撫でながら言った

「坂田達も多分へばってるから呼ぶべし! ヨッシャー!!」

ウチワを手でパパンと叩いた後京助が和室から出て行く

「…元気だね」

矜羯羅こんがらが京助が出て行った後の戸口を見ながら呟くと緊那羅きんならが苦笑いをした

「…つい…;」

制多迦せいたかがフラフラしながら呟く

「…そりゃ暑いっちゃよ…; ヒマ子さんならまだしも…そんな日

の当たる所にいたら;」

緊那羅きんならが制多迦せいたかを見て言った

「暑い!!;」

「うるさいですよ」

「暑いのだ!;」

「だからって大声出さないでください」

「だッ!; 髪を引っ張るなわけッ!;」

「大声出すと余計に暑くなると思いますよ?」

「だからと言って髪を引っ張るな!;」

ポケットコミどつき漫才の会話が聞こえ乾闥婆けんたつばと迦楼羅かるらが庭先に現れた

「…暑いのに元気だね」

そんな二人を見て矜羯羅こんがらが言う

「何とかならんのかこの暑さは!;」

迦楼羅かるらが言った

「…そりゃそんな格好してれば暑いと思うっちゃ;」

迦楼羅の暑苦しい格好を見て緊那羅きんならが呟く

「お邪魔します」

乾闥婆けんたつばがにっこり笑って和室の中に入ってきた

「かるらんとけんちゃんも海いこ?」

悠助が乾闥婆けんたつばに抱きつきながら言うとう廊下を走る足音が聞こえた

「乾闥婆けんたつばずるいッ!;」

額えきにヒエピタを貼った慧喜えきが和室の中に向かって叫んだ後 乾闥婆けんたつばから悠助を引っぺがす

「…海?」

慧喜えきのそんな行動に動じもしないで乾闥婆けんたつばが悠助に聞く

「よおし! 行くぜ海!;」

京助が電話の子機を片手に和室の中の面々に向かって言った

「光るゝハゲゝ光る大空ゝひいかあるだいいちいゝつと」

南が腰に手を当てて伸びをしながら歌った

「ソレそんな歌詞だったっけか?」

肩からバスタオルを羽織った京助が南に聞く

「知らね」

ハッハと南が笑った

「で：海に来て何するわけ？」

腕まくりをした矜羯羅こんがらが京助たちに聞く

「そりゃお前：泳ぐに決まってるじゃん」

Tシャツに海水メガネを持った中島が足首を回しながら言った

「泳ぐ？」

さすがに暑いのか乾闥婆けんたっぱも腕まくりをしながら首をかしげた

「そ！ ザッパーンと：ってかお前等海で泳いだこと：」

坂田が腰をひねって鳴らした後摩訶不思議服集団を見た

「僕は：川でなら：」

乾闥婆けんたっぱが言う

「じゃ泳げるんじゃない乾闥婆けんたっぱ」

京助がトトンと爪先を地面に叩きつけて靴を合わせながら言った

「陸にいても暑いだけだよ？ 浮き輪持ってきたし：着替えがな

いんなら後から京助から借りるとかすればいいじゃん」

南が浮き輪をくるくる回しながら言う

正月町はいわば漁師町でよく整備された砂浜があるわけでもなく【

海で泳ぐ】といえば磯舟が並ぶ石浜が海水浴場となる

「：京助靴はいたまま水に入るんだっちゃ？」

緊那羅きんならが京助と3馬鹿の足元を見て聞いた

「そ：：じゃないとウニ踏んだりして怪我するんだよねえ：」

南が答えた

「涼しくなるのか？」

上に羽織っていた暑苦しく重そうな上着を脱いで来てもなお暑そ

うな迦楼羅かるらが海を見て聞いた

「まあ：水だし」

中島が答える

「：泳ぐんですか？」

乾闥婆けんたっぱが迦楼羅かるらを見た

「涼しくなるならばワシは行く」

迦楼羅かるらが腕まくりをした

「……んな泳ぎにくそうな格好で泳ぐのかよ……」

迦楼羅かるらの服装を見て坂田が呟く

「ではどうしろと言うのだ……； 暑いのだ……；」

迦楼羅かるらが怒鳴る

「一旦：戻るしかねえんちゃう？……」

中島がボソツと言った

「……だよナア……」

京助が溜息をつきながら歩き出す

「僕等も行くの？」

矜羯羅こんがらが制多迦せいたかと顔を見合わせながら言った

「タカちゃんと矜羯羅こんがらは俺のシャツと短パンでいいなら貸すけど」

中島が挙手して言う

「じゃ乾闥婆けんたっぱはまた俺のだね」

南が乾闥婆の肩を叩いた

「僕もですか？……」

乾闥婆けんたっぱが自分を指差して聞く

「どっちにしろお前のその格好見てるこっちが暑いし……着替えて来い」

京助が言った

「じゃ俺と緊那羅きんならは残ってるわ……悠と慧喜えきまだきてないし」

坂田がメガネを外しながら言う

「オツケ。じゃあ荷物頼むな緊那羅きんなら」

そう言うのと京助を筆頭にぞろぞろと磯舟の横を通って上にあがって行った

「あれ？ 京助どこ行くの……？」

「おお！ 慧喜えきナイス……！」

上から聞こえた声に坂田と緊那羅が顔を見合わせた後足をすすめた
「おおお……！！！！ いいじゃん慧喜えき……！」

白にピンクの花が小さく描かれた水着を着けた慧喜えきを見て3馬鹿と京助が拍手をする

「どうしたんだソレ」

京助が慧喜えきの水着を指差して聞いた

「私が貸したの」

「おおおおおおお！！！！」

声がして振り返った3馬鹿と京助が歓喜の声を上げた

オレンジのワンピースの水着に生えるは白く豊満な二つの山

「ナイス本間様————————！！！」

坂田が親指を立てた

「神様夏を有り難う…暑い日差しを有り難う…」

南と中島が手をあわせて青い空を見上げながら言う

「…アタシもいるんだけど」

本間の後ろにいた阿部がボソツと言った

「いや…こう女子がいるとやっぱり花がありますな隊長！！」

京助が坂田の方に腕を乗つけて言う

「阿部さんも可愛いっちゃ」

不貞腐れていた阿部に緊那羅きんならが笑いかけた

「あ…りがとう…」

阿部が複雑そうな顔で御礼を言う

「涼しそうだね…この服」

「うお！！！」

矜羯羅こんがらがそういういながら本間の水着を引っ張った

「…くしもコレ着るの？」

制多迦せいたかが阿部と慧喜えき、そして本間を見て聞いた

「…着たいのか？…」

京助が聞くと、制多迦せいたかがへラリと笑いを返した

「すこしオマタが危険かもよ？ 男の子は」

南が言う

「女子のポロリは嬉しいけど男のポロリ…カア；」

京助が遠い目をしながらボソツと言った

「暑い！！；」

迦楼羅かるらがいきなり怒鳴った

「うるさいですよ」

「だっ！！；」

そして案の定 乾闥婆けんだっぱに髪の毛を引っ張られる

「ああ； 忘れてた；」

何のために上にあがってきたのか思い出した中島がパンッと手を叩いた

「どっかいくの？ 京助；」

白い薄手のパーカーを羽織った阿部が京助の腕を掴んで聞いた

「あ？ ああ； コイツらこの格好じゃ泳ぎにくいから着替え」

京助が摩訶不思議服集団を指差して言う

「人を指差すものじゃないですよ」

乾闥婆けんだっぱが最凶の微笑を京助に向けた

「…ゴメンナサイ；」

京助が阿部の後ろに隠れながら謝る

「じゃあ私達先に泳いでる」

本間が腰に巻いていたバスタオルを外した

「おおおお…まぶしい…」

水着姿の本間に3馬鹿と京助がまるで眩しいものを見るかのような格好をした

「本間ちゃん…エベレスト…」

南が拍手をすると阿部がパーカーの前を閉める

「暑いと…！！；」

乾闥婆けんだっぱに一括されてからややしばらく黙っていたもののやはり暑さに耐えられなかったのか迦楼羅かるらが再び怒鳴ろうとしたその時

ゴトリ

「ふう…」

何か重い物を下に置く音がして一同が振り返った

「…慧喜さん…悠助さん…何ですかソレは」

京助が夏の風物詩だけど海にあったら少し違和感が無いのですか？というその物体を見て言う

「ヒマ子義姉様」

水着姿で慧喜がさらっと答えた

「…何コレ…なんでこんなところにヒマワリ…」

阿部がヒマ子に近づく

「気安くつかづかないでくださいませんか！？」
京様に集る小娘様！

阿部がヒマ子に触ろうと手を伸ばすとヒマ子がくるっと振り向いて葉で阿部の手を叩いた

「……ケバイ」

ヒマ子を見た本間がぼそつと呟く

「……阿部？」

動かない阿部の肩を京助が揺すった

「あゝ…固まってる…」

南が阿部の顔を覗き込んで苦笑いと言う

「どこか涼しい場所で気がつくまで休ませておいてはどうですか？」
乾闥婆が言った

「…ワシは暑い…」

迦楼羅かるらが小さく言うとかモメがミョーと一声タイミングよく鳴いた

波の音とバシャバシャという音が聞こえ始めると感じたそよそよという小さな風で阿部がうつすら目を開けた

「悠助早くっ」

慧喜えきの声が聞こえる

「慧喜早いようー！！」

そして悠助の声も聞こえた

一定の間隔で目に映るのはウチワらしき物体

「あ、気がついたっちゃ？」

ウチワが消えて見えたのは逆光を受けた緊那羅きんならの顔

「ラム：ちゃん？」

ゆっくりを体を起こした阿部がまだはつきりしない頭を振った

「アタシ：」

「まったく：私を見て気を失うなんて失礼な：」

言いかけた阿部の言葉が多少怒りのこもった言葉で打ち消された

「そういえば緊那羅様きんならも私を見て腰を抜かしてましたわね」

阿部の見ていた緊那羅きんならの顔が引きつった笑いになる

「それは：」

緊那羅きんならが苦笑いを向けている方向へと阿部がゆっくり顔を向けた

「本当：失礼ですわ」

そして固まる

ソコにいたのは二箇所には赤い細長い布を巻いた真夏の妖精ヒマ子さん

「い：」

阿部の口元がだんだんと引きつってくる

「いやあああああああああ！！！！！！！！！！」

「わッ！！」

大きく悲鳴を上げて阿部が緊那羅きんならに抱きついた

「あ：起きた」

浮き輪に乗って浮んでいた本間が岸を見てボソツと言う

「阿部さん； 阿部さん； 大丈夫だっちゃ；」

緊那羅きんならが阿部の背中を叩いて言った

「だっ：だってヒマワリ：ひまっ：」

最高潮にパニクルっている阿部は口が上手く回らないらしくただヒ

マヒマ繰り返す

「落ち着いて； はい息すって：大丈夫だっちゃ；」

そんな阿部の背中を撫でて緊那羅きんならが言った

「――――！」

海水メガネを手に中島が海へと駆け出した

「走ると転びますからね迦楼羅^{かるら}」

それに続きたいオーラ全開の迦楼羅^{かるら}に乾闥婆^{けんたつば}が溜息を吐きながら言う

「…制多迦^{せいたか}もね」

駆け出そうとしていた制多迦^{せいたか}に矜羯羅^{こんがら}がさらっと言った

「はーやーくー！！」

悠助が大きな声で言った

「ヒョー！！ 最高！！」

ダイブした中島が声を上げる

「俺もいこつと」

南が浮き輪片手に海へと向かう

「じゃ俺も…ってか坂田は？」

京助が見当たらない坂田の行方を緊那羅^{きんなら}に聞いた

「それよりアタシの質問に答えなさいよ！！ 何でヒマワリが話してるわけッ！？；」

阿部が立ち上がって京助のＴシャツの胸倉を掴んで聞く

「まあ！！ なんてことをするんですか小娘様！！」

ソレを見たヒマ子が叫んだ

「坂田は何か取りに行つたみたいだっちゃ」

ヒマ子と阿部の声の小休止に緊那羅^{きんなら}が京助の質問に答える

「だからアタシの質問に答えろってばッ！！」

阿部が京助をガクガク揺すりながら怒鳴る

「京様に何をなさいますの！？ お放しになってくださいませんかここッ！！？」

ヒマ子が立ち上がり阿部に葉を指した

「…何してんだか…」

海の上で浮き輪に乗りながら本間が呟いた

「…風呂じゃないんだからよ；」

海に入ったものの石に腰掛けたままの迦楼羅かるらの横を泳ぎながら中島が呟いた

「タカちゃん早い早い〜!」

「制多迦せいたか様早いですッ! そしてずるいッ!!」
悠助を背中に乗せた制多迦せいたかがすい〜っと泳ぐ後ろを慧喜えきが追いかける

「…涼しいな」

迦楼羅かるらが満足そうに青空を見上げた

「…カモメの爆弾に注意してね」

迦楼羅かるらの傍まで浮き輪に乗ってきた本間が迦楼羅かるらの頭をなでながら言う

「爆弾?」

迦楼羅かるらがきよんととして聞き返す

「うんこだよウンコ」

本間と同じように浮き輪に乗った南が言った

「黙ってると結構あたるの」

本間が浮き輪から降りながら言う

「泳ぐなら貸すわ」

そして迦楼羅かるらの体に浮き輪をはめた

「なんだこれは;」

迦楼羅かるらが浮き輪をまじまじと見て聞く

「足バタバタって動かしてみなよ鳥さん」

南が手を足に見立てた動きでバタ足を迦楼羅かるらに伝える

「…こうか?」

迦楼羅かるらが南の手を見てバタ足を始めた

「上手上手」

本間が拍手をして言う

「かるらん競争しよ?」

制多迦に乗った悠助が迦楼羅かるらに手を振った

「俺も参加すっぞー!!」

潜っていた中島が南の後ろから浮上して手を上げた

「じゃあ優勝者には一番デカイスイカ!!」

バンッと車のドアが閉まる音と坂田の声がした

「どこいったんだよ;」

阿部に胸倉をつかまれたままの京助がスーパーの袋二つを手に歩いてきた坂田に聞く

「母さんがスイカもって行けって言ってたの忘れててよ;」

「運転してきたのは柴田さんじゃないのね」

いつの間にか岸に上がってきていた本間が坂田が乗ってきた車を見て言った

「柴田はまだ療養中」

坂田が言う

「そう;」

本間が濡れた髪を掻きあげた

「おはよう阿部」

そして阿部の方を見て言う

「香奈：アンタなんで平然としてられるのかアタシわかんない;」

阿部ががつくり肩を落としながら言った

「私魔法とか信じないもの。現実だから受け入れるだけ」

本間がヒマ子を見てふっと笑う

「なあ; ; 俺も泳いできていいか? ;」

京助がボソツと言った

「アンタも頭冷やしてきたら?」

阿部の肩をたたいて本間が言う

「京助く!!! 競争く!!!」

悠助が制多迦せいたかに肩車されながら岸に向かって手を振っている

「お—————!!! 今行く—————!!!」

大きな声で返事を返すと京助が海へと下って行った

「緊那羅きんならはいかねえのか?」

スイカを手に坂田が緊那羅きんならに聞いた

「ラムちゃんも水着着てくればよかったのに」

阿部が緊那羅きんならの格好を見て言う

「胸の大きさ同じくらいだし…」

「え？」

最後に阿部がボソツと付け足して言うきんならと緊那羅が首をかしげた

「別にッ；」

阿部が海に向かって駆け出すと坂田もそれに続く

「ヒマならスイカ流されないように見ててくれ！」

思い出したように坂田が振り返って緊那羅きんならに言った

「あ…わかったっちゃ」

緊那羅きんならが立ち上がって小走りきんならで海へと下る

「…僕も行こうかな」

矜羯羅こんがらが立ち上がった

「君は？」

防波堤の上に腰掛けてけんだっぱいる乾闥婆に矜羯羅こんがらが聞く

「僕は遠慮します」

矜羯羅こんがらの方は見ないまま乾闥婆が答えた

「…爆弾落とされるよ？」

さつき迦楼羅かるらに言ったのと同じことを本間が乾闥婆けんだっぱに言った

「よっこいしょ」

本間が乾闥婆けんだっぱの横に腰を下ろした

「泳がないんだね」

本間が乾闥婆けんだっぱに言う

「ええ…僕は…」

「はい」

顔を本間に向けた乾闥婆けんだっぱに突きつけられたのは乾闥婆けんだっぱの目と同じような青い色のラベルが巻かれたペットボトル

「…これは？」

そのペットボトルに手を添えながら乾闥婆けんだっぱが本間を見た

「泳がないなら水分とりなさい」

本間がにっこりと笑った

「あ：りがとうございます：」

ペットボトルを受け取った乾闥婆けんだつばがどもりながらもお礼を言う

「大事な人の心配も大事だけど自分が倒れちゃその大事な人の心配もできないんだからね」

蓋の開け方がわからないのかただペットボトルを持ったままだった乾闥婆の手に手を添えると本間が蓋を開けた

「：ええ」

乾闥婆けんだつばの手から手を離しながら本間が言う

「私は魔法とか信じないから。アンタ達を特別扱いもしない：でも驚いているのには変わらないんだからね？ わかりにくいけど」

自らも持ってきたペットボトルの蓋を開けながら本間が言った

「だからなんです？」

乾闥婆けんだつばが本間を見た

「話してほしいの栄野にも私達にも」

ペットボトルに口をつけながら本間が言う

「：私阿部が泣くところ見たくないの」

本間と乾闥婆けんだつばが座る防波堤の下の海で笑う阿部を見て本間がふつとどこと泣く寂しい笑いを浮かべていった

「阿部は栄野が好きだから栄野に何かあると泣くってわかるよね」
本間が聞くと乾闥婆けんだつばが頷いた

「だから少しでも知っておきたい。そうすれば：」

「：あなたは：もしかして：」

ポトツ

言いかけた乾闥婆けんだつばの言葉が止まった

「：やられたね」

動きが止まった乾闥婆けんだつばの頭上には一羽のカモメ

そして乾闥婆けんたつばの水色の髪には白い：

「爆弾投下」

本間がペットボトルの中身を一口飲みながら言った

「あれ？ 乾闥婆けんたつば…」

南が大股で海にやってくると無言のまま海の中へと入ってきた乾闥けんた婆つばの名前を呼ぶ

「…泳がないんじゃないかったの？」

すっかり泳いだらしい矜羯羅こんがらが濡れた髪をかきあげながら言った

「…気が変わったんです」

そう言うといきなり乾闥婆けんたつばが海の中に潜った

「でも何で阿部ちゃん達俺等が海に来てるってわかったの？」

南が浮き輪の上から阿部に聞いた

「京助のおばさんから水着貸してくれないかって電話あったんだ」
立泳ぎをしながら阿部が答えた

「…へえ…そっかサンキュ」

南の浮き輪につかまりながら京助が阿部にお礼を言う

「ラムちゃんの分も一応持ってきてるんだけど泳がないんだね」

阿部が岸のほうを見て言うのと京助と南が顔を見合わせた

「水着…？」

「緊那羅きんならが水着…」

京助と南が小さく言う

「…どんなん？」

京助が阿部に聞いた

「え？ 普通の…ワンピースだよ」

阿部が答える

「トラビキニじゃなかったねえ」

南がハッハと笑った

「いろんな意味で犯罪だろう；」

京助が口の端をあげて言うのと阿部が首をかしげた

「…にか踏んだ；」

制多迦せいたかが背中に悠助をぶら下げたまま呟いた

「タカちゃん落ちるゝ；」

悠助が言うとは後ろから慧喜えきが悠助を抱っこする

「どうしたんですか？ 制多迦様せいたか」

悠助を抱きながら慧喜えきが制多迦せいたかに聞いた

「あゝウニかな」

坂田が泳いできて言う

「…ニ？；」

制多迦せいたかが聞いた

「コレコレ」

そう言うとは坂田が息を吸い込んで潜っていった

「…つぶはゝ…ホレ」

そして何かを手にして浮かんできた

「…れがウニ？；」

坂田の手の上で黒いトゲを動かしているなんとも奇妙な物体を制多せい迦たかと慧喜えきがマジマジと見る

「僕ウニの塩辛好きゝ」

悠助がウニを見ていった

「俺はやっぱ殻のまんま焼いて食うのがいいナァ…」

坂田が言う

「…べられるの？ コレ；」

制多迦せいたかがウニを指差して聞いた

「高級食材」

坂田が答える

「美味しいの？」

慧喜えきも聞く

「好き嫌いあるけど…俺は好き」

坂田がウニを海の中に落としながら言った

「ヘンなもの食うんだね」

慧喜えきが沈み行くウニを見てボソツと言う

「見ためより食い物は食って何ぼだから俺は」

坂田が笑いながら言った

「何コレ」

矜羯羅こんがらが迦楼羅かるらの浮き輪を見て言う

「不思議なものでな…浮かぶのだ」

浮き輪が氣に入ったのか迦楼羅かるらがうれしそうに答えた

「どういう原理なんでしょうね…」

濡れてもなお変化ないピョン毛の乾闥婆けんたっぱが浮き輪を撫でながら言う

「楽しいぞ？ 乾闥婆けんたっぱもやってみるか？」

迦楼羅かるらが乾闥婆けんたっぱに聞いた

「僕ですか？」

乾闥婆けんたっぱが目を大きくして自分を指差した

「やってみたら？」

矜羯羅こんがらがふっと笑って言う

「…僕は…その…」

乾闥婆けんたっぱが目をそらした

「…いいんですか？」

乾闥婆が少し照れたように上目使いで小さく聞くと迦楼羅かるらと矜羯羅こんがらが目を見開いたままぼかんとして止まった

「…なんですかその顔」

乾闥婆けんたっぱがむっとした顔で言う二人が顔を見合わせたあと乾闥婆けんたっぱを見た

「何なんですか；」

無言のまま見られ続けるのに耐えかねたのか乾闥婆けんたっぱが少し後ろに下がる

「いや…；」

迦楼羅かるらが軽く咳をした

「…僕先に上がりますっ；」

乾闥婆けんだつばがバシャバシャと水を掻き分けて岸へと向かっていく

「あんな顔…できたんだね」

矜羯羅こんからが呟くと迦楼羅かるらがゆっくり頷いた

「変わって…きたな」

ボソッと迦楼羅かるらが呟いた

「…ラツコか；」

悠助を腹に乗せた制多迦せいたかが波に揺られて岸についたのを見て坂田が言う

「…もちよくて」

制多迦せいたかがヘラリ笑いを浮かべて言った

「やっぱ夏は海だねえ」

南が浮き輪片手に上がってくると伸びをする

「浜風が少し痛いですけれども」

ヒマ子が日光浴をしながら言った

「あつれ…？　もしかして…ヒマ子さん…」

南がヒマ子をまじましと見た

「…ソレ…水着？」

ヒマ子の茎に巻かれた二つの赤い布を見て南が呟く様に聞く

「そうですねよ？　似合ってます？」

クイツと腰をひねってヒマ子がポーズを取った

「少し大胆にビキニですわ」

そして頬を赤らめた

「…大胆っていうか…普段はスッポンポンなんじゃないの？；」

南が言う

「黒にしようかと迷ったのですけれど…」

話を聞いていないヒマ子が語りだした

「京様の手前…悪い虫がついてはいけないと思ひ少々控えましたの」
そう言いながら顔を両葉で覆ったヒマ子の頭にハエが止まった

「…虫…ついたよヒマ子さん…ハエ」

南が言う

「ああ…なんて一途な私…」

やはり話を聞いていないヒマ子の頭でハエが両手をスリスリし始めた

「位置について…」

坂田が片手を挙げると京助と中島が息を吸った

「ヨ―イ…」

「…といったらスタートって言ったら…沈めるからな」

京助が坂田を見て言う

「…凶星か」

目をそらした坂田を見て中島が呟いた

「何をしているのだ？」

迦楼羅かるらが坂田に聞いた

「スイカをかけた競泳…お前もやるか？」

坂田が答える

「勝った方がデカイスイカを食えるってんだ」

京助が言った

「…おいしいの？」

いつの間にか中島の隣にいた矜羯羅こんがらが聞く

「夏といえど！！の食い物だしな」

中島が言う

「…うまいのか…」

迦楼羅かるらがぼそつと呟いた

「お前等も参加か？」

京助が迦楼羅かるらと矜羯羅こんがらに聞く

「あそこのテトラまで行って岸まで帰ってくる早さで勝敗決めるんだ」

坂田が遠くに見える防波テトラを指差した

「泳ぎ方は自由！！ 犬掻きでも平泳ぎでも」

中島が言う

「…勝負事なら…負けたくないね」

矜羯羅こんがらがテトラを見た

「うまいのか…」

迦楼羅かるらもテトラを見る

「正々堂々…いざ！ スイカ！！」

京助がテトラを指差して叫んだ

「さて今年もやって参りました！！ 食い意地張ったヤツ等全員集合スイカ争奪競泳大会！！ 実況はワタクシ坂田！！ レースクイーンはアサクラ・南さんです！！」

坂田が南の浮き輪に捕まりながらウニをマイク代わりに言う

「みんながんばれ」

「矜羯羅様！ がんばってください！！」

悠助が相変わらず波に浮かんでいる制多迦せいたかの上で慧喜えきとともに応援する

「毎年やってるの？」

阿部が坂田に聞いた

「そー！ 毎年恒例！！ 今のところ京助が強い…去年は浜本もいたけど」

南が阿部に言う

「食い物絡むと京助って強ええんだよなあ…」

坂田が口の端をあげて言った

「よかったね」

本間が阿部の肩を叩いた

「…何がよ」

阿部が本間を見る

「今は栄野色気より食い気みたいだね」

本間が阿部の胸をつついた

「なっ…！？」

阿部が目を見開いて赤くなる

「栄野の興味が食い気から色気に移る前に目指せ暑寒岳」
本間が後ろから阿部の胸を揉み上げた

「ちょ…； なにすンのよッ；」

阿部が水しぶきを上げて真っ赤になりながら抵抗する

「いいナァ…女子」

坂田が呟いた

「京様————————————————————！！ 頑張って
くださいませ————————————————————！！」

岸からヒマ子の熱烈な応援が届く

「…ライバル結構いるみたいだよ阿部」

阿部の耳元で本間が囁いた

「だから何よ；」

胸を押さえた阿部が本間に聞く

「大きくするの手伝う？」

「いらないッ！！！！；」

両手をワキワキと動かしながら本間が言う和阿部が大声で断った

「あれ？ 乾闥婆けんだつば…いかないんだっちゃ？」

スイカの見張りをしていた緊那羅きんならの横に乾闥婆けんだつばが立った

「…乾闥婆？」

自分の問いかけに無反応だった乾闥婆けんだつばを再度 緊那羅きんならが呼ぶ

「…緊那羅…僕の顔に何かついていますか？」

乾闥婆けんだつばが手で自分の顔を触りながら緊那羅きんならに聞いた

「え…？ …少し顔が赤いだけで別に何も…どうしたんだっちゃ？」

立ち上がり乾闥婆けんだつばの顔を覗き込んだ緊那羅きんならが言う

「…何でもありません…」

乾闥婆けんだつばが俯きながら顔をそらした

「僕も…変わってきていますか？」

乾闥婆けんだつばがボソツと言う

「え？」

聞き取れなかったのか緊那羅きんならが聞き返した

「いえ…」

乾闥婆けんだつばが顔を上げるとスウッと涼しい浜風が吹いた

「緊那羅…」

スイカを軽く転がして冷やす側を変えていた緊那羅きんならを乾闥婆けんだつばが呼んだ

「…京助と悠助は…【時】にとつての大事な存在…いわば【鍵】…」
乾闥婆けんだつばが言う

「…でも…もっと大きな…僕等にとつても大きな存在だと…思いはじめました」

岸から離れた海の中でワイワイやっている集団を見て乾闥婆けんだつばが言った

「うん…私もそう思うっちゃ」

緊那羅きんならが微笑んで言う

「馬鹿ですけどね」

はつきり言い切った乾闥婆けんだつばを緊那羅きんならが苦笑いで見ると乾闥婆けんだつばの顔はうれしそうな笑顔だった

「うん…馬鹿だっちゃけど…ソレが京助だっちゃ」

「エイ——————————————————————ックシヨおッ!!」

緊那羅きんならが笑いながら言うのと京助の軽快なクシヤミが響き渡った

「位置について…」

坂田が片手を挙げるとそれにあわせて中島と京助がテトラを見据えた

「…位置についてるけど」

矜羯羅こんがらが坂田に言うのと京助と中島が脱力して海に沈む

「…いや…うん； ついてるねついてんだけどねっ；」

南が矜羯羅こんがらの肩を数回叩いていった

「号令って言うか…まあ…合図だ合図ッ!；」

坂田が言う

「…ふうん…」

わかったのかわかってないのか矜羯羅こんがらが返事をした

「んはいらんと…!!;」

「スイカ食べたいんでしょ？」

いつものごとく怒鳴ろう本間を見た迦楼羅かるらがその一言で黙って足を動かし始める

「さつき見たく…そうそう」

バシャバシャと水飛沫を上げて迦楼羅かるらが泳ぐ

「…鳥さん…鳥さん…;」

ゆっくりと進んでいく迦楼羅かるらを見て南が苦笑いをする

「こんが…らは？」

坂田がさつきまでそこにいた矜羯羅こんがらの姿を探す

「あそこ」

阿部が指差す方を南と坂田が見る

「早ッ!!!;」

そして同時に声を上げた

「こりゃ…迦楼羅かるら以外のあの三人の勝負だな」

先にスタートした二つの水飛沫とそのすぐ後ろについたもう一つの水飛沫を見て坂田が言う

「迦楼羅かるら出遅れたみたいだっちゃね;」

岸から見ていた緊那羅きんならが言う

「…応援…しないんだっちゃ？」

緊那羅きんならが乾闥婆けんだつばを見ると乾闥婆の両手がゆっくり上がり

「…迦楼羅かるら——————!!」

そして迦楼羅かるらの名前を叫んだ

「…け…」

乾闥婆けんだつばの大声に一同が動きを止めて岸を振り返った

「頑張ってください——————!!」

その声を聞いて迦楼羅かるらがぼかんとした顔をする

「…乾闥婆けんだつばの今みたいな大声…はじめて聞いたかもしれない…」

慧喜^{えき}がボソツと言った

「…くも…」

制多迦^{せいたか}も言う

「ホラ…応援してくれてるよ」

止まったままの迦楼羅^{かるら}に本間が言った

「…勝たなきゃね」

そして本間が迦楼羅^{かるら}の背中を押す

「…そうだな…」

迦楼羅^{かるら}がふつと笑った

「…緊那羅^{きんなら}…」

両手を下ろしながら乾闥婆^{けんたつば}が緊那羅^{きんなら}を見た

「僕は…変わってもいいのでしょ…か…？」

どこか不安そうな笑顔で言った乾闥婆^{けんたつば}に緊那羅^{きんなら}が笑顔を向ける

「誰だって変わっていい時が来ると思うっちゃ…変わっていいから

変わる…そう思うっちゃ…私は」

緊那羅^{きんなら}が言う

「…ありがとうございます」

乾闥婆^{けんたつば}が目を細めて緊那羅^{きんなら}にお礼を言った

「娘、礼を言う…コレにつかまていろ」

迦楼羅^{かるら}が浮き輪をはずし本間に渡した

「…どういたしまして…」

ザザザザ：

という音と共に海面が波立った

「…溺れないようにね」

矜羯羅^{こんがら}が中島と京助に言う

「は…？」

立泳ぎをしながら京助と中島が顔を見合わせた

「迦楼羅^{かるら}が本気出すみたい」

慧喜^{えき}が悠助を支えた

「かるらんが？」

慧喜^{えき}に支えられながら悠助が波立つ海面の中心を見た

「…がったほういいかもね」

制多迦^{せいたか}が身を起こして慧喜^{えき}と悠助を抱き上げて岸を見ると海の中の岩を蹴って高く飛び上がり岸に着地する

「何?; 何;」

南が浮き輪に捕まりながら言う

「阿部ちゃんコッチコッチ」

坂田が南の浮き輪に捕まりながら阿部を手招きした

「何:?:;」

坂田の手招きに応じて南の浮き輪に捕まった阿部が不安そうな顔をする

「…くるよ」

矜羯羅^{こんがら}が中島と京助の手を取った

「へ:ッうおおおおお!?:;」

ズザザザザザザザザザザ——————————————

————!!

わけがわからないという返事を返そうとした中島と京助の体が波によって持ち上がる

「だ:っダイタルウェ————————————————————

————————ブッ!!!!!!;」

叫んだ南の浮き輪が阿部と坂田を連れて波に乗った

「きゃああ————————————ッ!!!!;」

阿部が目を硬く瞑る

「ほっほお————————————う;」

坂田が楽しんでいるのか怖がっているのか微妙な声を上げながら浮き輪に捕まっている

「…がんばってね」

本間がにっこり微笑みを向けた先には京助達とさほど大きさの変わ

らない少年の姿になった迦楼羅^{かるら}

「ああ…」

少年 迦楼羅^{かるら}がフツと笑った

「ゲハッ!!!」

海面に顔を出した京助が思い切り息を吐いた

「何なんだよッ!!!」

京助より少し先に海面に上がっていた中島が辺りを見回した

「ホラ…来るよ」

そんな二人に矜羯羅^{こんがら}が声をかけた

「へ…?」

横を通り過ぎていった矜羯羅^{こんがら}を見て京助と中島が顔を見合わせる

「何が…」

ザザザザザザザザ：

波音が近づいて来るのを感じた中島と京助がその方向を見た

「早ッ!!!」

「ギャー————————!!!」

迫り来ていた迦楼羅^{かるら}の姿を見て京助と中島が逃げるように再スタートする

「…早…」

頭からしっかり波をかぶった阿部がぼかんとして4つの水飛沫を見ている

「てか鳥さん反則…?」

南が濡れた前髪をかきあげて言った

「成長しただけでしょ」

何事もなかったかのように浮き輪に乗った本間が南に言う

「かるらんには変わらないじゃない」

にっこり笑いながら本間が4つの水飛沫を見た

「反則だって言ったら…呪いかけるかもよ私」

どこまでが冗談なのかわからない本間の言葉に坂田と南が苦笑いを

「お前泳げるなら泳げるって言えばよなッ!!!」

「誰がいつ泳げないと言ったのだ？」

「浮き輪使ってたじゃねーかよッ！」

「なかなか面白かったぞ」

[illegible]

「スイカは俺のモンだ——」

京助の叫びが水飛沫と共に響き渡る

岸に上がった悠助が嬉しそうに飛び跳ねながら言った

きんなら
緊那羅がボソツと言う

悠助が乾闥婆の腕につかまった

「乾闥婆ずるいッ!!!」

「うん！ ああ、あのね！ 僕も応援されると頑張ろうって気持ちになる」

えき
慧喜に抱きしめられながら悠助が言う

前方二つ、後方二つに分かれた水飛沫を見ながら乾闥婆が小さく言

「京様——！！！」愛して
ますわ——————————

ヒマ子の愛の応援が届いたのか京助が沈んでいく

坂田がボソツと言った

ソレを見た阿部が捕まっていた浮き輪から離れて泳ぎだした

阿部に続いて本間も浮き輪から降りて浮き輪をつかんだまま泳ぎだした

浮き輪につかまりながら南が言う

坂田が言った

南が迦楼羅に賭ける宣言をした

坂田は矜羯羅に賭けた

南が遠くなる水飛沫を見て聞いた

坂田が親指を立てて言う

「！！」
頑張れ
「！！！！」

ソレを聞いた南が手を振って中島を応援した

「まあ！！ 京様！！ 私 の 応援 が 届 け な っ た の で し ょ う か ！ ？ ；
あ あ あ ； 不 甲 斐 な い 妻 を 許 し て く だ さ い ま せ ； 京 様 ； 」

沈んだ京助を見てヒマ子が嘆いた

「俺 ； 届 いた から 沈 ん だ と 思 う 」

慧喜が言うとその場にいた悠助以外の一同が頷いた

「驚いたよ」

テトラに手をついてターンをしながら矜羯羅こんがらがすぐ後ろにいた迦楼かる羅に言った

「乾闥婆けんたつばが ； ね ； 」

少し速度落として矜羯羅こんがらが迦楼羅かるらと並ぶのを待っている

「ワシもだ ； 」

迦楼羅かるらが矜羯羅こんがらに並んだ

「あの兄弟の周りの空気は心地いい ； 今までの【時】とは違う【時】が ； くるのかもしれない」

迦楼羅かるらが言う

「今までとは違う ； 変わっている ； 僕自身もそう ； 」

矜羯羅こんがらがふっと笑った

「竜は ； わかっていたのかもしれない ； 」

迦楼羅かるらが泳ぐのを止めて言う

「自分の息子達が【時】にとっての ； 【鍵】になるということも ；
そして今回の【時】が今までの【時】とは違う【時】であるということ ；
こと ； 」

同じく泳ぐのを止めた矜羯羅こんがらが付け加えて言う迦楼羅かるらが頷いた

「竜はよく【時】を批難していた ； 来るべきものではないと ； 」

迦楼羅かるらが波に揺られながら顔を上げた

「あやつらは ； そんな竜の遺志を知らずのうちに継いでいるのかも
しれん ； もしかすると ； 最後の【時】になるやもだ ； 」

迦楼羅かるらが岸に目をやると慧喜に抱きしめられているらしき悠助の姿

「今までとは違う ； 最後の【時】 ； ね ； 」

矜羯羅こんがらが見つめる先には本間の浮き輪に捕まって阿部に背中をさす

られている京助の姿

「そうなたら…僕等は…」

ザババババ

言いかけた矜羯羅こんがらの後ろを水飛沫が通り過ぎた

「…ワシにもわからん…だが…」

迦楼羅かるらが悠助から乾闥婆8けんだっぱ）に視線を移した

「…もう…たくさんだ…」

そして顔を歪める

「…そう思っているのは君だけじゃない…」

矜羯羅こんがらが言った

「僕も思うようになったよ…【時】は来るべきものじゃないってね
…そして…あの二人を守りたいって」

矜羯羅がふっと笑う

「面白いよね今までそんなこと思った事なかったんだよ…ただ上の
命に従って【時】がくればそれに従っていた…それが当たり前だと思
っていたけど…京助と悠助…どちらかが欠けていたらこんな思い
は生まれなかったんだろうね…」

矜羯羅こんがらが迦楼羅かるらを見る

「…あの二人は…」

迦楼羅かるらの髪から水滴が滴り落ちた

「中島ゴ——————————————————————————————
ッ！！！」

坂田の声が高らかに響くとハッして矜羯羅こんがらと迦楼羅かるらが岸を見る

「…負けたね」

矜羯羅こんがらがボソツと言った

「お疲れ様でした矜羯羅様こんがら」

岸に上がってきた矜羯羅こんがらに慧喜えきが声をかけた

「凄（さい）いねー！！ きよんがらさんもかるらんも早いねー」

慧喜（えき）の腕（うで）の中で悠助（ゆうすけ）が言う

「…かえり」

制多迦（せいたか）が矜羯羅（こんがら）にタオルを渡した

「…ただいま」

タオルを受け取りながら矜羯羅（こんがら）が制多迦（せいたか）に笑顔を向ける

「惜（お）しかったですね矜羯羅様（こんがらさま）…迦楼羅（かるら）と何か話（わ）していたんですか？」

慧喜（えき）が矜羯羅（こんがら）に聞くと矜羯羅（こんがら）が乾闥婆（けんたつば）と迦楼羅（かるら）の方（かた）を見た

「…いや…別に？」

そして慧喜（えき）に笑顔（えがこ）を向ける

「…んがら？」

制多迦（せいたか）が矜羯羅（こんがら）を呼んだ

「【天（てん）】と【空（くう）】…いつかは…」

矜羯羅（こんがら）が呟（つぶや）く

「迦楼羅（かるら）」

乾闥婆（けんたつば）が元のサイズに戻った迦楼羅（かるら）に声をかけた

「おかえりだっちゃ」

少し間（ま）をおいて緊那羅（きんなら）が迦楼羅（かるら）に言う

「ああ…ただだだだだだッ！！！」

次の瞬間（しゅんかん） 乾闥婆（けんたつば）が迦楼羅（かるら）の髪（かみ）を思い切り引っ張り始めた

「け…乾闥婆（けんたつば）！？」

ソレを見ていた緊那羅（きんなら）が声を上げる

「…おかえりなさい」

乾闥婆（けんたつば）がボソツと言った

「普通に言えんのか普通に！！！」

迦楼羅（かるら）が髪（かみ）を押さえながら怒鳴（な）る

「…迦楼羅（かるら）…」

乾闥婆（けんたつば）が小さく迦楼羅（かるら）を呼んだ

「…僕は…」

乾闥婆けんだつばが口を開くとほぼ同時に緊那羅きんならが立ち上がって二人から離れた

「…僕は変わってもいいのでしょうか…変わっても…貴方の傍にいいのでしょうか…」

かるら けんだつば
迦楼羅の髪を握っている乾闥婆の手に少し力がこもった
けんだつば

「けんだつば変わっても乾闥婆にはけんだつば変わらぬだろう」

かるら けんだっぱ かるら
迦楼羅がさらつと言つと乾闥婆が顔を上げ迦楼羅を見る

「たとえ変わっても乾闥婆だという事は変わらん…お前は…
乾闥婆…なのだろう？」

かゝる
迦楼羅がどことなく悲しそうな顔で言った

「そう……言ったのはお前だろう……自分は【乾闥婆】だと……」
 かるら けんたつば
 迦楼羅の言葉に乾闥婆が俯く
 すんぞつぷ

「…そう…でしたね…僕は【乾闥婆】…あの時から僕は…」

ポタポタと乾闥婆が握る迦楼羅の髪から水が滴り落ちた

「……すまん」

伽楼羅かるらが謝ると乾闥婆けんたつばが顔を上げた

「え……？」

「せっかくお前が背を押してくれたのに勝てんで…すまん」
 きよとんとした顔の乾闥婆に迦楼羅が言う

「……嬉しかったぞ」

そしてそう付け加え背伸びをして乾闥婆けんたつばの頭に手を載せた

「……子ども扱いしないでくださいッ!!!」

「だっ！；」

乾闥婆けんだつばが顔を赤くして迦楼羅かるらの髪を思い切り引つ張る

「僕は……」

「おー！！！！」

「スイカ割るぞー！！」

優勝者の中島が叫んだ

比較的平らな地面に敷かれた新聞紙の上に置かれた二つのスイカ
「さて…ではコレより優勝者の中島君によってスイカ割が実施され

るわけですが!!」

坂田が【が】の部分で一同を振り返った

「：残念ながら棒を忘れました」

そして腰に手を当ててハッハと笑うと京助と中島が同時に坂田の両脇バラに裏手で突っ込む

「じゃあどうやって分けるの?;」

阿部がスイカを見て言った

「うーん::;」

南が考え込む

「：分ければいいの」

矜羯羅こんがらが一步前に出て聞いた

「そー：なんだけどねえ;」

南が矜羯羅こんがらに苦笑いで答える

「制多迦せいたか」

南の答えを聞いた矜羯羅こんがらが制多迦せいたかを振り返るとヘラリ笑った制多迦せいたかが頷いた

「何?」

そして制多迦せいたかがスイカの前にしゃがんでスイカを人差し指で弾いた
ボゴツ

「っおおおおお!!!;」

制多迦せいたかの弾いたスイカが割れて赤く熟れた果肉が姿を現した

「すげえ!;」

中島が拍手する

「すごーい::;」

阿部も声を上げた

「もう少し綺麗に割ってほしかったね::;」

矜羯羅こんがらが飛び散ったスイカの果肉をつまんで口に入れる

「：めん;」

制多迦せいたかが頭を掻きながら謝った

「じゃコツチも頼むわ制多迦せいたか」

坂田がもう一個のスイカを指差すと制多迦せいたかがヘラリ笑いで再び頷く
「じゃ！ まあ：お疲れサマー（夏）！！ いただけスイカツ！！」
中島がスイカ片手に言うのとソレが合図となったのか一斉にスイカに
手が伸びた

「あまゝいっ」

悠助がスイカを頬張って嬉しそうに言った

「種まで食うなよ？」

京助が悠助に笑いながら言う

「迦楼羅かるら：皮まで齧らないでください」

白い部分まで綺麗に食べていた迦楼羅かるらに乾闥婆けんたつばが言った

「赤い部分はうまいな」

ペロっと舌で口の周りを舐めながら迦楼羅かるらが言う

「まだ食べたいなら食べ欠けですがどうぞ」

乾闥婆けんたつばが自分が一口齧ったスイカを迦楼羅かるらに差し出した

「いいのか？」

迦楼羅かるらがスイカを乾闥婆けんたつばを交互に見て言う

「残念賞ということで」

乾闥婆けんたつばがにっこり笑って言った

「京助大丈夫なんだっちゃ？」

手で口をぬぐっていた京助に緊那羅きんならが聞いた

「あ？ あゝ：別に平気」

二個目のスイカに手を伸ばそうとしながら京助が答えた

「惜しかったですわね京様：私の応援が届かなかったばっかりに：」

ヒマ子が鉢を引きずりながら京助に言う

「や：しっかりバッチリ届きましたので；」

京助がヒマ子から顔をそらして言うのと緊那羅きんならが苦笑いを浮かべた

「いっやゝ：夏だあねゝゝ」

南が伸びをしてしみじみと言う

「短いけどな」

坂田が種を飛ばして言った

「終わりがあるから思いつきり楽しまなきゃねえ：終わりがいないものなんて楽しくないよねえ」

南がうんうん頷きながら言う

「お！！ 何だか南さんまじめ腐ったクッサイと言いますね」

京助が南に突っ込んだ

「終わり：ね：」

三つ目のスイカを一口齧った矜羯羅こんがらがボソツと言う

「お前：ソレ何個目よ：」

中島が矜羯羅こんがらに言った

「何で俺がお前等の為にスイカバー買わなアカンねん！！：」

ガサガサと買い物袋を提げた京助が怒鳴った

「負けたからに決まってるっしょ」

そんな京助についてきた南がハッハと笑いながら少し後ろを歩く

「阿部ちゃんと本間ちゃんが帰った分浮いたんだからいいじゃないじゃん」

石浜海水浴を終え栄野家でひとつ風呂浴びた後買出しに出向いた南と京助がジワジワと鳴く蟬に後押しされて石段を登る

「あああ：： 折角海行って涼しくなって風呂入ったのにまた汗でしっとりしてるしよ：：」

京助が網戸になっていた玄関の引き戸を開けながら溜息をついた

「ただいま！ あん：って：ヤケに静かじゃない？」

家の奥に向かって言った南が返ってこない返事に首をかしげつつもサンダルを脱ぎ家に上がる

「いくらなんでも全員で入るにはウチの風呂は狭いだろうしなあ：」
京助も南に続いて家に上がった

チリリ：：ン

という涼しげな風鈴の音が家に響き渡る

「…寝てるし…」

開けっ放しの縁側の和室で思い思いの格好で寝こけているのは坂田と中島そして慧喜えきの膝枕では悠助が寝息を立ててその慧喜えきも壁にもたれ掛かって眠っていた

「…かえり」

制多迦せいたかがヘラリ笑って庭先から手を振った

「おかえりなさいませ京様」

制多迦せいたかの後ろからヒマ子がゴトゴトとやってきて軽く頭を下げた

「残りの面々は？」

南が制多迦せいたかに聞く

「…るらは」

制多迦せいたかが縁側に腰掛け伸びをしながら答える

ミーンミーンという声とジワジワという声が競い合うように青い空に響いた

キシ…と床がきしむ

涼しい風が草の香りとともに流れ込むのは元・開かずの間

「…寝てるの？」

戸口に手をついた矜羯羅こんがらが言う

「ああ…疲れたのだろう」

窓際に腰掛け答えた迦楼羅かるらのすぐ下でピョン毛が風に揺れる

「寝顔は可愛いのにね…」

矜羯羅こんがらがふっと笑って言う

「そうだな…」

少し上に向いた乾闥婆けんだつばの寝顔を見て迦楼羅かるらも笑みを浮かべた

「強がりで頑固なところは昔から変わらないな…こやつは」

そしてその笑みが少し曇った

「まだ…忘れられない？」

矜羯羅こんがらが腕を組んで迦楼羅かるらに聞く

「…忘れられるものか…」

迦楼羅かるらが言った

「あやつは…沙紗は…」

迦楼羅かるらの手が乾闥婆けんたつばの頬に触れる

「ワシが愛し守り抜くと誓った唯一の…」

矜羯羅こんがらが目を閉じた

「…すぐ傍にいるのにもう会えない…」

矜羯羅こんがらが言う

「それならいつそあの時…」

「これはワシに課せられた罪だ」

矜羯羅こんがらの言葉を迦楼羅かるらがさえぎった

「【乾闥婆けんたつば】はワシの【罪】そのものだ…」

乾闥婆けんたつばの頬から迦楼羅かるらが手を離れた

「あの時から…」

乾闥婆けんたつばの頬から離れた手を迦楼羅かるらが強く握った

「【沙紗】が消えたあの時から【乾闥婆けんたつば】というワシの罪が生まれたのだ…」

小さく風鈴の音が聞こえ室内灯の紐が揺れる

「お！！ いたいた！！」

京助の声が聞こえ乾闥婆けんたつばがぴくっと動いた

「スイカバー買って…って寝てたのか…」

矜羯羅こんがらの横から元・開かずの間の中を見た京助が乾闥婆けんたつばを見て言う

「スイカバー？」

矜羯羅こんがらが京助に聞く

「さつき食ったスイカの…今度は皮も種も食えますってえヤツ？
食うなら和室にこいよ？」

チャット片手を挙げると京助が足早に去っていった

「…先行くね」

矜羯羅こんがらがそういい残して廊下をきしませながら和室に向かった

「…沙紗…」

迦楼羅かるらが小さく呟くとほぼ同時に乾闥婆けんたっぱがうつすらと目を開けた

「…あ…僕寝て…」

目をこすりながら乾闥婆けんたっぱが眩しそうに迦楼羅かるらを見る

「疲れたのだろう…ここは涼しいしな…寝やすかっただろう」

迦楼羅かるらが笑いながら言う

「迦楼羅かるらはずっと起きていたんですか？」

立ち上がった乾闥婆けんたっぱが迦楼羅かるらに聞いた

「ああ…少々話しこんでいてな」

迦楼羅かるらが腰掛けていた窓際から降りながら言う

「京助とですか？」

歩き出した迦楼羅かるらの後ろを歩きながら乾闥婆けんたっぱが聞いた

「…さあな」

少し間において迦楼羅かるらが答えると乾闥婆けんたっぱが首をかしげた

「ギャー!!!; 何すんだッ!!!;」

坂田の悲鳴が聞こえた

「いつまでも起きないからよみつるん」

そして明らかに何かを故意でやったような南の声

「だからってズボン中にアイス入れんなッ; 息子が風邪引くッ!

!」

ギャーギャーという騒がしい声が栄野家に響く

「ワシ等も行くか」

迦楼羅かるらが振り返り笑顔で言った

「そうですね」

乾闥婆けんたっぱもソレに笑顔を返すと元・開かずの間を出て行った

「第八回・伍」天体観測っぽく（前書き）

夏休みの学生にとっての最大の敵である【宿題】
その敵に果敢に挑む勇者が今、栄野家に集まった

「第八回・伍」天体観測っぽく

「なーんでこんなんわからんのかいのー； このXだかいいうバツテン印を8にすりゃコノ答えでてるってんだろや？」

阿修羅^{あしゅら}がシャープペンでコツコツと京助の広げた教科書を実付いた
「わからんっのッ！！；」

京助が怒鳴る

「基本はこのバツテン印とコッチの何だか両手広げてる印が比例することだろやがね？」

阿修羅が教科書の【X||Y】を丸で囲んだ

「…なんで一回基本説明しただけで解けるかねえ；」

南がシャープペンの頭を押して芯を出しながら言う

「うあゝ…； 頭痛してきたゝ；」

京助がちゃぶ台に突っ伏した

「俺ももうアカン； 吐き気が；」

坂田がプリントをそっと裏返ししながら溜息をつく

「あつくくん兄ちゃんこれでいい？」

悠助^{あしゅら}が阿修羅に夏休みの課題ドリルを見せた

「どれどれ…ほー！ よくやった竜のボン！ 全問正解！！！」

ドリルを見た阿修羅が悠助の頭を撫でた

「俺…小学生に戻りたい；」

中島が呟くと京助と坂田、南が揃って頷く

夏休み終了カウントダウンが近づき溜め込んだ宿題を持ち寄った3馬鹿と京助が少ない脳みそをフル活用していた最中ひょっこりやってきた阿修羅^{あしゅら}が家庭教師を買って出て早2時間…普段勉強という事には三分の一も活用していない3馬鹿と京助の脳みそは限界に達しようとしていた

「だあから…コレは【ぎつもくりん】じゃなくて【ぞうきばやし】」

だっちゅーのさ；　：さっきちっこいのが間違えたとき教えただろが；；」

阿修羅が中島のプリントを見て溜息をついた

「…ってか俺等に宿題をやれっていうこと事態が間違ってる」

京助がボソッと呟いた

「そうだなあ…普段でも宿題なんかやらねえし；；」

坂田が同意する

「そもそも夏休みって休みなんだから頭も休んでもいいのに何で頭動かさないといけないんだろぅねえ…休ませて頭；；；」

南が言った

「脳みそストライキ起こすぞ」

中島が言う

「俺もう起こしてる」

京助が麦茶を飲みながら言った

「ウブファブハァ；！！；」

坂田が意味のわからない言葉を発しつつ後ろに倒れる

「ホレホレしっかり」

阿修羅がパンパンと手を叩いて言った

「京様も皆様も頑張ってくださいませ」

庭先からヒマ子が声援を送ると南が苦笑いで手を振る

「そして暑いし；；」

寝転がった坂田が見上げた軒下の風鈴が鳴りそうで鳴らないそんなそよ風が風鈴の下についた紙をヒラリと揺らした

「…涼しくなっってからやったほうがいいと思う人ー」

中島が突然手を上げて言うとか京助と南が手を上げて坂田が足を上げた
「…ってことで…」

京助が静かに教科書を閉じると南がペンケースにシャープペンをし
まってファスナーをしめる

「一旦休止！！」

パンッと足の裏を合わせて音を出した坂田が飛び起きた

「カキ氷食うベカキ氷！」

中島が伸びをする

「僕ブルーハワイがいい〜！」

悠助が両手を挙げて言った

「…進まんねえ」

阿修羅^{あしゅら}がちゃぶ台に肘をついて笑った

「カキ氷にシロップかける〜トウらトウラトウラトウラトウラトウ
ララ〜」

南が緑色のシロップを白く細かい氷の山にかけながら歌う

「お前かけすぎ」

ゴリゴリとカキ氷機の取っ手を回しながら京助が突っ込んだ

「慧喜^{えき}あーん」

悠助が青いシロップがかかったカキ氷をスプーンにのせて慧喜^{えき}に差し出した

「あーん」

慧喜^{えき}が嬉しそうに口をあけると悠助が慧喜^{えき}の口にカキ氷を入れる

「悠助もあーん」

今度は慧喜^{えき}が赤いシロップのかかったカキ氷を悠助に差し出した

「あーん」

悠助が口をあけると慧喜^{えき}が悠助の口の中にカキ氷を入れる

「…暑い暑い暑い；」

中島が青いシロップのかかったカキ氷をシャクシャクと食べながら言った

「へい坂田」

こんもりと山になったカキ氷を坂田に差し出した

「サンキュカキ氷屋さん」

坂田がソレを受け取ると赤いシロップの入ったビンを開けた

「…誰もレモンはかけないんだねえ」

南が少し離れたところにおいてある黄色いビンを見て言う

「：おいしくないんだっちゃ？」

赤いシロップのカキ氷を食べていた緊那羅きんならが【レモン】とかかれたラベルのビンを持った

「いや：美味しいんだけどな：こう：何かを想像してしまうわけですよ」

坂田がカキ氷とシロップを混ぜながら言う

「何か？」

緊那羅きんならが首をかしげた

「季節は冬：真っ白く積もった雪の上：息子が描くは黄色い芸術」

京助がゴリゴリと再びカキ氷機の取っ手を動かしながら語る

「ぶっちゃけションベン」

中島が言った

「！?； コレ：!？」

緊那羅きんならが慌ててビンを手放した

「いや：待って待ってラムちゃん； その中身は違うから； ちゃんと食い物だから；」

南がスプーンを上下に振りながら緊那羅きんならに言う

「お前等：いくら緊那羅きんならが面白いからってあんまりからかいなさんなって」

阿修羅あしゅらがカラになった容器をスプーンで鳴らしながら言った

「別にからかってないよねえ？」

南が言うとき京助と坂田と中島が頷く

「可愛がってるだけだし」

中島が言う

「そうそう可愛がってるだけだよなあ？ 金名羊子」

京助が青いシロップをかけながら言った

「京助は特にな」

坂田が言う

「：どういう意味ですか坂田さん」

京助がシロップのビンで坂田の顎をゴリゴリと攻撃する

「まんまの意味ですよ栄野君：金名羊子が栄野羊子になるかもってことですヨ：ハッ！！ てことはアレか！ 俺 緊那羅きんならの義父になるんだな！！ そうか！！」

坂田が緊那羅きんならを見て言った

「へ？；」

緊那羅きんならがきよとした顔で坂田を見る

「お前も少し突っ込め！！；」

京助が緊那羅きんならに言う

「ほほー！！ 竜のボンと緊那羅きんならがねえ：そっかそか」

阿修羅あしゅらがスプーンをくわえて何かを納得したように頷いた

「何納得してんだよッ；」

京助がシロップのビンで阿修羅あしゅらの頭を叩く

「いやあ：だってな？ お前等：コノ地球でアレだ：同性別で愛し合ってるヤツらって六割位いんだぞ？」

「マジで！？」

阿修羅あしゅらが言うのと馬鹿と京助が声を上げた

「わ：私は：何をどう何処に突っ込めばいいんだっちゃ？；」

溶けて液体になったカキ氷の入った容器を持った緊那羅きんならがどうしていいのかわからずただボソツと言う

「よかったな京助！！」

中島が京助の肩を叩いた

「何がじゃ！；」

京助が中島の腹に肘をめり込ませた

「じゃあヒマ子さんは？」

南が言う

「異種族同士でも結構結ばれてる種族あるからして：オケ？」

阿修羅あしゅらが親指を立てた

「オケ！！」

「待てやゴルァ！！；」

3馬鹿も阿修羅あしゅらに続いて親指を立てると京助が怒鳴った

「そういえばヨシコちゃんは？」

南が阿修羅あしゅらとセットとなりつつあるヨシコがどうしたのかを聞いた
「ヨシコはアッチに残ってる」

阿修羅が小さくゲップをして答えた

「本当はなヨシコは【天】ってか：【宮】から好き勝手にちゃアカン立場なんよ」

阿修羅が言う

「それは緊那羅きんならから聞いたけど：そんなに束縛されてんのか？
アイツ」

中島が聞いた

「まあ：それなりにヨシコは：な」

阿修羅あしゅらが苦笑いで答えると中島が何故か黙った

「勝手が許されないんよな：自由っていう自由がないんよヨシコに
は」

阿修羅あしゅらが言うと周りが中島と同じように黙った

「こないだもヨシコがいないいで大騒動だったしな：しばらく
は：謹慎だ」

阿修羅あしゅらが静かに言う

「オライも今は面会許されていなんだよ」

「そんなに？；」

ヘラツと笑って言った阿修羅あしゅらに南が聞く

「俺だったら逃げるね；」

坂田が言う

「逃げる事もできないんだナアこれが」
阿修羅あしゅらが言った

「んだよソレ：」

中島がぼそつと言う

「そんなん生きてるっていえんのか？」

京助が言った

「自分の人生自分のために生きてなんぼだろがよ？　好きに生きてなんぼじゃん」

阿修羅あしゅらが京助を見てややしばらく止まった後顔をほころばせる

「やあ：やっぱ竜のボンだわ：」

阿修羅あしゅらが言った

「そんなトコ竜ソックリだぞ竜のボン」

ニツと笑った阿修羅あしゅらが京助の頭をぐりぐり撫で回す

「何者にも何事にも自分の意志を通す頑固モン：でも何故か憎めなくてのん」

チリンと軽く風鈴が鳴って涼しい風が和室に流れ込んできた

「へえ：京助は性格親父さん似なんだ」

南が撫でられ髪がもっさりとなった京助を見て言う

「：：そうなのか？」

京助がボソッと阿修羅あしゅらに聞いた

「言っただろが？　お前ともう一人のボンを足したらソレが竜だっ

て」

阿修羅あしゅらが笑いながら答えると京助の顔が微かに笑顔になる

「ちゃんと継いでるんよ：お前らは」

阿修羅あしゅらが笑った

「竜の周りには不思議な空気があったんよ：居心地がいい：何かを惹きつけるそんな空気がお前らにもあるぞ」

阿修羅あしゅらが言うと3馬鹿が揃って京助を見る

「：お前らが言いたい事は手に取るようにわかる：あえて言いますか？」

京助が3馬鹿に聞いた

「類は友を呼ぶ」

3馬鹿が京助を指差してハモって言う

「：言いましたか：」

京助がヘツと口の端をあげて言った

「アッハッハ！！ いやゝゝおんもしろいわ…」

阿修羅あしゅらが京助の背中をバシバシ叩きながら笑う

「イテエっつーの！！；」

京助が怒鳴る

「何騒いでるんだっちゃ；」

カキ氷屋さんの後片付けをしていた緊那羅きんならが和室に入ってくるなり聞こえた京助の怒鳴り声が何に対してのものなのかを聞いた

「よ！ 緊那羅きんならご苦労さん」

京助の首に腕をかけた阿修羅あしゅらが緊那羅きんならに向かって手を上げた

「ラムちゃんお疲れサマー」

南もひらひらと緊那羅きんならに向かって手を振る

「あ…うん」

笑顔を返した緊那羅きんならが南の隣に腰を下ろすと風鈴がまたチリンと軽く一回鳴った

チリリィン…という風鈴の音が辺りの虫の声と混ざって誰もいない和室に響いた

「坂田醤油とって」

京助が箸を持ったまま手を差し出した

「ういよ」

坂田が傍にあった醤油注しを京助に手渡す

「京助醤油たれてるっちゃ；」

緊那羅きんならが布巾を差し出す

「にてもラムちゃんすごいねえ…」

南が端をくわえたままテーブルに並べられた晩御飯のメニューを見て言った

「母さんに相当しこまれたしなお前」

京助がサンマを白米に乗せて口に運んだ

「いつでも嫁げるな」

坂田が肉巻き牛蒡を箸でつまんで言う

「とつ…って私はッ!!!;」

緊那羅きんならが声を上げると茶の間の戸がスパーンと景気よく開いた

「中島柚汰！ 只今帰還——————！！！！！」

長方形の箱を傍に立てかけて中島がグリコのポーズで帰還宣言をする

「もいっちょオライも只今な〜」

その中島の後ろから阿修羅あしゅらも顔を出した

「お〜！！ なんだか美味そうなモン並んでんな〜」

テーブルに近づくと阿修羅あしゅらがトマトをひよいとつまんだ

「ここに乾闥婆けんたつばがいたら間違はなくチョップだっちゃ〜」

緊那羅きんならがボソツと言う

「あら〜今日はサンマなのね〜いい匂いだわ〜」

玄関の方から母ハルミの声が聞こえた

「僕ねトマトの皮剥いたんだよハルミママ〜」

カランとサンダルを脱いだ音が聞こえてキシキシと廊下のきしむ音が近づいてくる

「偉いわねえ悠ちゃん」

悠助を褒めながら巫女意衣姿のままの母ハルミと悠助そして慧喜えきが

茶の間に入ってきた

「おかえり」

「おかえり」

「おかえりなさいハルミさんッ」

京助が箸を振って言うとか坂田が少し上ずった声で同じく言う

「ただいま。緊ちゃんありがとうね本当助かるわ〜」

膝を折ってテーブルについた母ハルミが白米を盛っている緊那羅きんならに

言った

「私はコレくらいしかできないし;」

悠助に茶碗を渡しながら緊那羅きんならが少し照れて言う

「竜のカミさんやってただけのことあるわなあ…うんうん」

阿修羅が小さく言いながらレタスの味噌汁をズズッと啜った

今榮野家の晩御飯の支度は母ハルミによって家事全般をいだけ仕

込まれた緊那羅きんならが請け負っている

「緊那羅きんなら：美味しいわ」

阿修羅あしゅらが【オカワリ】の合図なのかカラになった茶碗を緊那羅きんならに差し出した

「ありがとだっちゃ」

緊那羅きんならが嬉しそうに阿修羅あしゅらから茶碗を受け取る

「僕緊ちゃんの作るカレー好きー！！」

慧喜えきにサンマの骨を取ってもらっていた悠助が言った

「俺は肉じゃが」

慧喜えきが悠助の口にサンマの身を運びながら言う

「：料理上手は愛情上手：いいねえ」

南が最後の米粒を箸でつまんで口に運びながらしみじみと言った

「栄野兄弟はいい嫁さんもらったなア」

坂田が箸を置きながら言う

「私は男だっちゃ」

緊那羅きんならが箸を軽くかじりながらジト目で坂田を見た

「俺は悠助の嫁だもん」

慧喜えきが悠助に抱きつく

「沢山家族がいて嬉しいわ」

母ハルミが嬉しそうに笑って漬物をかじった

「おやつはさんびゃくえーん」

坂田が右手の指を三本立てて言った

「バナナはおやつにはいりませーん」

南が青い鞆を手にとって言う

「ゴミは持ち帰りましょう」

中島が長方形の箱を肩に担いだ

「午前二時じゃないですが始めようか天体観測ッ！！」

京助が肩掛け鞆を肩にかけて玄関の戸をあけた

「何だ？ どっかに移動するのか？」

頭の後ろで手を組んだ阿修羅あしゅらが聞く

「そー黒岩尻農道の方にな」

坂田がサンダルの踵のねじれた部分を指で直しながら答えた

「あそこ本当街頭がなくて真っ暗でよく見えるんだわ星」

先に玄関から出ていた京助が言う

「こっからでもまあまあ綺麗に見えるんだけど…どうせならねえ？」

南が笑いながら言った

「夏休みなんだし」

坂田が頷きながら言う

「せっかくだし…なあ？」

京助が笑う

「楽しくやりたいじゃん？ 宿題でも何でも」

中島も笑って言った

「ほっほー…それにはオライも賛成だ」

阿修羅あしゅらが親指を立てて笑う

「今度は僕も連れてってねッ！！」

遅くなったら絶対寝るからということでは今回は留守番になった悠助が縁側から叫んだ

「10時過ぎても起きてられるようになったらな」

京助が言う

「俺は眠気スツキリガム持ったから大丈夫さ」

夜に弱い坂田がキシリトール配合のガムを高らかに掲げて言った

「おこちゃまめ」

京助が坂田の頭を撫でながら言う

「そもそも人間は夜寝るものなんだ！！ そう！ 俺は決して間違っていない！！！」

坂田が力説する

「ラムちゃーん！ 行くよー！！」

南が緊那羅きんならを呼ぶと縁側の方から緊那羅きんならが駆けてきた

「うっし！ じゃレッツラー！！」

木々が隠しきれなかった夜空からのかすかな光で見えているそんな道を南が歌いながらその道を歩く

「いやゝゝ静かだな」

阿修羅あしゅらが虫の声とたまに吹く風の音しか聞こえないことにどことなくしみじみといった

「街から離れてるしな」

京助が言う

「街中でも7時過ぎたら滅多に人とか通らないからねゝゝココじやホフク前進してもだいじょうびん」

南が笑いながら言った

「もうちょいだぞゝ」

先を歩いていた坂田と中島が少し後ろを振り返って言う

ソレからしばらくして木々のトンネルが終わりドングイとススキの壁に変わった後少し開けた場所に出た

「うっし到着!!」

中島が長方形の箱を下ろして伸びをした

「おゝお! よく見えるよく見える!」

京助が空を見上げて言う一同も空を見上げた

「うおゝスゲエ」

坂田が声を上げる

「おちてきそうだねえ」

南が手を額につけて言う

「これ全部星なんだっちゃ?」

緊那羅きんならが聞いた

「そゝこれ全部星ゝ数えてみ?」

阿修羅あしゅらが緊那羅きんならに言う

「ゝ無理だっちゃゝゝ」

少し間をおいて緊那羅きんならが言った

「ゝアツチは?」

緊那羅きんならが指差した方向を一同が見る

「あゝアレは街の明かり」

中島が答える

「街…の明かりもきれいだったよね」

緊那羅きんならが言った

「まあ…こうしてみると結構な…100万ドルとはいかないけど」

京助が言う

「どのくらいだ？てかむしろ100万ドルって何円？」

坂田が京助に聞いた

「知らん；」

京助が即答する

「俺に為替市場わかるかい；」

坂田に突っ込みながら京助が言った

「まあ一ドル104・47円だとして104,470,000円か」

阿修羅あしゅらがさらっと言う

「…何でお前がわかってる…」

坂田が阿修羅あしゅらを見て言う

「竜の家にあった北海道新聞とかいう紙読んだんよ。アレ面白いや

な」

阿修羅あしゅらが言った

「俺新聞なんてテレビ欄しかみたことねえし」

中島が言うきんならと緊那羅以外の一同が頷いた

「…そういや南…火サスのアレやったのか？」

京助が南に聞いた

「…いっやゝソレがさあ…どこに新聞置いたのかわからんちんで」

南がハッハと笑いながら答えた

「…片付けろ」

京助が裏手で突っ込みながら言う

「片付けると何処に何あるかわからなくなるしさあゝ」

南がお手上げポーズで言う

「今もわからないんじゃない」

京助が再び南に突っ込んだ

リーリーという虫の声とざわざわという木々が風邪に揺すられる音
「寝るな；」

そしてスパンという軽快な音と京助の声

「眠気スッキリガム役に立ってねえし；」

悠助から借りたらしきピーポーくんの描かれた可愛らしいビニール
シートの上にメガネのずれた坂田が寝息を立てていた

「ガム噛みながら寝てるねえ；」

南がかすかに動いている坂田の頬を突付きながら言う

「まだ来てから30分もたってねえじゃん；；ってかまだ9時半だぞ？；」

京助が腕にしていたリストバンド型の時計を見て言った

「うら！！ 起きろメガネ！！！」

阿修羅あしゅらが坂田の上に乗って坂田の頬を引っ張る

「うへえによゝゝ」

坂田がわけのわからない言葉を発しながら阿修羅あしゅらの手を振り払う

「あつはっは！！ おんもろゝ！！！！」

阿修羅あしゅらが笑いながらさらに坂田の頬を引っ張り始めた

「何しに来たんだかわからないっちゃね；」

緊那羅きんならが苦笑いと言う

「サクサクセッティング完了！！」

中島の声に振り向くとソコには望遠鏡

「すげー！！」

京助が望遠鏡を撫でて言う

「買ったのいいけど父さん家にいねえから埃かぶってたんだよなあ
：ちよい型古いけど」

中島がレンズをシャツで拭きながら言った

「うわー！ すげー！！ 見える見える！！」

覗き込んだ南が声を上げた

「何が見えるんだっちゃ？」

南の後ろから緊那羅きんならが聞く

「星」

南が望遠鏡をのぞいたまま答えた

「星：なら見えてるっちゃ」

緊那羅きんならが夜空を見上げて言う

「おつきく見えるんだよ見てみる？」

南が望遠鏡を指差して緊那羅きんならに手招きした

「おつきく：？」

緊那羅きんならがおそるおそる望遠鏡を覗き込む

「え：えええ！？； え！？；」

覗き込んだ緊那羅きんならが【え】を連呼しながら夜空と望遠鏡を交互に見はじめた

「な：えええ！？；」

「落ち着け；」

【え】しかまともに言っていなかった緊那羅きんならに京助がチョップをかます
「だって！！！！；」

緊那羅きんならが頭を抑えながら京助を見た

「コレは遠くのをよく見えるようにするモン」

中島が望遠鏡に手を置いて言う

「筒の向こうに丸い玉があったっちゃ；」

緊那羅きんならが望遠鏡の反対側に回った

「それが星」

京助が夜空を指差すと緊那羅きんならが夜空を見上げた

「でも星ってこう：とげとげ；」

緊那羅きんならが指でお絵かきでおなじみの☆を中に描く

「本当の星って丸いんだよ」

南が指で丸を描いて言った

「俺等が今住んでるコノ地球だって星で丸いんだぞ」
京助が地面を数回踏んで言う

「丸いのに何で平らなんだっちゃ？」

緊那羅きんならが京助に聞いた

「あゝ……………」

京助が【あ】を伸ばして緊那羅きんならから目をそらす

「何で丸いのに落ちないんだっちゃ？」

今度は南に緊那羅きんならが聞いた

「…えつとねえ……………」

南が中島を見た

「…地球だから」

中島が答えた

「そう！ 地球だから！！」

南がパンツと手を叩いて言う

「そうだ！！ 地球だから平らだし落ちないんだ！！ わかったか

？ わかつとけ！！」

京助が緊那羅きんならの両肩を叩きながら言った

「そう…なんだっちゃ？；」

緊那羅きんならが小さく聞き返すと揃った爽やかな笑顔が返ってきた

「あれが金星だろ？」

教科書を懐中電灯で照らした中島が周りの星より多少明るい星を見上げた

「…わからん； みんな一緒に見える…」

望遠鏡を覗き込んでいた京助が言う

「だつめじゃーん；」

南が突っ込んだ

「起きないナァ…メガネ」

一向に起きる気配のない坂田にちよつかいをかけるのも飽きてきたのか阿修羅あしゅらがため息をついて立ち上がった

「ふう…お？ アレ天の川だろ」

阿修羅あしゅらが指差した先には細かい星でまるで川のように見えるミルキ

ーウェイ

「北海道の七夕って八月だしねえ…まだ見えるんだ」

南が天の川を見上げた

「織姫と彦星ってさあ七月に本州で会って北海道にくりやもう一回会えるじゃん」

京助が言う

「そうはいかないんじゃないか?;」

中島が突っ込む

「本当はどっちが本当の七夕なんだろうねえ;」

南が言った

「七夕は七月七日だ」

あしゆら 阿修羅が歩み寄りながら答えた

「そもそも五節句の一個なんだわ七夕。そもそも技芸の上達を願う中国の祭りだったんだけどなく…いつの間に短冊ってなったんだか」

「ほお…」

あしゆら 阿修羅が言うと一同がゆっくりと頷いた

「…あの川…広いんだっちゃ?」

きんなら 緊那羅が天の川を指差して言う

「広い広い! なんつったってお前…あの星ひとつがこの!! 地球と同じような大きさなんだぞ?」

京助が【この】の部分で地面を足で強く踏んだ

「え…じゃ…あ…」

きんなら 緊那羅が夜空を見上げて止まった

「超広い」

南が言う

「…そんなに広いようには見えないんだっちゃのに…」

きんなら 緊那羅が呟いた

「目に見えて届きそうでも届かないモンって…結構沢山あるんよ

きんなら 緊那羅

あしゆら 阿修羅が言う

「手を伸ばしてみ？」

阿修羅あしゅらが天の川を指差して緊那羅きんならに言った

「こ：うだっちゃ？」

緊那羅きんならが言われるがまま天の川に向かって手を伸ばした

「触れないだろ」

阿修羅あしゅらが言う

「当たり前だっちゃ；」

緊那羅きんならが苦笑いで返す

「でもさあ：こうみると：つかめそうなんだよな」

京助が緊那羅きんならと同じように天の川に手を伸ばした

「でもつかめないんだよねえ」

南も同じく手を伸ばしてスカスカと宙をつかむ

「近いようで遠い届きそうで届かないって：痛いんだよな結構」

阿修羅あしゅらがふっと笑った

「：なんだよ；」

いきなり緊那羅きんならに頬をつままれた京助が横目で緊那羅きんならを見て言う

「や：なんとなくだっちゃ；」

緊那羅きんならが慌てて手を離れた

「不安になったんだろ緊那羅きんなら」

阿修羅あしゅらが緊那羅きんならに聞く

「竜のボンに急に手が届かなくなったらって：すぐ隣に居るのに手が届かなかったらとか思ったんちゃうか？」

阿修羅あしゅらが言うきんならと緊那羅きんならがさっきまで京助の頬をつまんでいた自分の手を見た

「触れたろ」

京助が言った

「え：あ：うん：」

緊那羅きんならが顔を上げて頷く

「じゃあいいじゃん」

「へ?;」

京助が頭を掻きながら言う。緊那羅きんならがきよんとして京助を見た。「触れたんならいいじゃんての。触れたんなら俺はココにいるってことだろが…安心したか?」

京助が言う

「どれ」

南が京助に抱きついた

「暑苦しいからやめい;」

京助が南を引き離そうとするとソレに輪をかけて中島も抱きつく

「おお! 触れる触れる!!」

笑いながら中島が京助をさらに強く抱きしめた

「暑いっちゅーねんッ!;!;」

身動きの取れない京助が怒鳴る

「やかましいッ!;!」

その声で起こされた坂田が怒鳴った

「今まで寝てたやつに言われたくないですわん」

その坂田の頭に南が蹴りをかます

「やゝ! はよさんメガネ」

阿修羅あしゅらがしゃがんで片手を挙げ坂田に言った

「:なんで俺外で寝てんだ?」

シャツの中に手を入れてポリポリと胸の辺りを掻きながら辺りを見渡して坂田が言う

「しっかり起きろ」

京助が南と中島に抱きしめられたまま坂田を蹴った

「蹴るな!;!;」

蹴られた後頭部を押さえて坂田が怒鳴ると口から囁んでいた眠気スツキリガムが飛び出した

「汚ッ!;!;」

京助に抱きついたままの中島と南が絶妙な息を合わせてソレを避けると阿修羅あしゅらと緊那羅きんならもつられたかのように坂田から離れる

「ふあゝ…あ…つつく」

坂田があくびをした後伸びをして立ち上がった

「…あゝそっか天体観測」

伸びをしながら目を向けた先にあった望遠鏡を見た坂田が言う

「やつと思いい出したか馬鹿め；」

京助から放れながら中島が言った

「開始直後から素敵な寝息立ててましたよ」

南がハッハと笑いながら言う

「いやゝ…どうもアレでしてねえ」

坂田がヤレヤレポーズでため息を吐いた

「不安か」

自分の手を握り締めたまま3馬鹿と京助の漫才的やり取りを見ていた緊那羅きんならに阿修羅あしゆらが声をかけた

「今は触れてもいつかは手が届かなくなるかもしれないからの」

阿修羅あしゆらが言う

「竜のボンだけじゃなくもしかしたらオライにも」

阿修羅あしゆらが言うきんならと緊那羅が顔を上げて阿修羅あしゆらを見た

「今のうちに触っておきやいいさ」

眉を下げた顔で阿修羅あしゆらを見上げていた緊那羅きんならの頭を撫でる

「後悔しない様…忘れない様…いつかは…届かなくなるんやしな」

緊那羅きんならが自分の手を握り締めた

「届かなくするのは…お前かもしれないんだからな…」

阿修羅あしゆらが言うきんならと緊那羅が小さく頷く

「乾闥婆けんだつばから聞いただろ…お前の役目」

阿修羅あしゆらが聞くと緊那羅きんならがまた頷いた

「でも…私は…ッ…」

握った緊那羅きんならの手が小さく震えた

「…オライは何も手出しはできんしな…スマンけど」

緊那羅きんならの頭を阿修羅あしゆらが撫でる

「ひとついいこと教えちやるよ：緊那羅^{きんなら}」

阿修羅^{あしゅら}が言う^{きんなら}と緊那羅が少し目の赤くなった顔を上げた

「ほうき星は願い星ってな」

阿修羅^{あしゅら}が夜空を指差して笑った

「ほうき：？」

緊那羅^{きんなら}が鼻をズツと吸って夜空を見上げる

「たまになこう：尾っぽを引いた星が出るんよ」

阿修羅^{あしゅら}が指を斜め下にやりながら言った

「それが消える前に三回願い事繰り返して言うとな：叶うんよ」

阿修羅^{あしゅら}が三本指を立てた

「本当なんだっちゃ？」

緊那羅^{きんなら}が阿修羅^{あしゅら}を見て聞く

「さあなあ：オライも言った事ないし：」

阿修羅^{あしゅら}がハッハと笑いながら答えた

「何なに？ 流れ星の話？」

南が話しに入って来た

「流れ星？」

緊那羅^{きんなら}が聞き返す

「いろんな呼ばれ方してんよな。ほうき星、願い星、流れ星：シュー

ーテンスター（ネイティブ）とかな」

阿修羅^{あしゅら}が言う

「しゅー：？：？」

緊那羅^{きんなら}が阿修羅^{あしゅら}が最後に言った言葉をどもりながらも言おうとしている

「でもみんな一緒なんだよね」

南が言った

「お星様にお願いかあ：俺も小さい頃よくやったよ」

南が懐かしそうに言う

「ちいっこいのは今でもちっこいぞ」

阿修羅あしゅらが南の頭をポフポフ叩きながら言った

「ひっどゝ…；」

南がジト目で阿修羅あしゅらを見る

「南…その願い事は叶ったんだっちゃ？」

緊那羅きんならが南に聞いた

「え？ …ああ…叶ったよ？ しっかりバツチリ」

南が阿修羅あしゅらの手を払いながら答えた

「本当に叶ったんか？」

阿修羅あしゅらが半分驚きながら南に聞く

「嘘ついてどーすんのさ；…叶ったってんじゃん」

南が呆れた様な笑顔で見た先には今だふざけあっている京助、中島、坂田の姿

「ラムちゃん…俺が前に慧喜えきちゃんに話してた話…覚えてる？」

南が緊那羅きんならを見て聞いた

「え…？」

緊那羅きんならがきょとんとして声を出した

「俺が昔…友達が居なかったって話」

南が笑いながら言う

「ずっと…欲しかったんだよね…だから流れ星に願ったんだよ」

腰に手を当てた南が夜空を見上げた

「友達が欲しいってね」

夜空を見上げたまま南が言う

「南…」

緊那羅きんならが小さく南の名前を言うと南が緊那羅きんならを見て笑った

「そしたらばこんなに素敵にお馬鹿なお仲間が！！」

南が京助達を指差して言う

「誰が馬鹿じゃ」

聞こえた坂田が南に体当たりしてきた

「き・み・ら」

南も負けじと坂田に体当たりをし返す

「オイ； 今複数形だったろ；」

中島が言う

「そうそう！ 君等って」

南がハッハと笑った

「：俺も？」

京助が自分を指差して聞くと南が爽やかに親指を立てた

「そして何を隠そう君等もなのだよ！」

そして南が今度は緊那羅きんならと阿修羅あしゅらを振り返った

「わ：」

「オライもけ？」

緊那羅きんならと阿修羅あしゅらが同時に言う

「そう！！ 同じ馬鹿ってことでお仲間」

南がウインクついでに舌を出して親指を立てた

「いやゝゝありがたいね」

ぽかんとしている緊那羅きんならをよそに阿修羅あしゅらが嬉しそうに笑った

「てことで！！ ：気を取り直して宿題といきますかゝ：」

中島がまだ何も記入されていないノートを手を取った

「うへえゝゝ」

京助が本当に嫌そうに声を出した

「おゝ！ エライエライ！！」

阿修羅あしゅらが坂田と京助の頭を撫でる

「うわあい褒められたァゝ：」

坂田がやる気なさそうに万歳をした

「はあゝあゝっと」

京助が溜息をついて望遠鏡に歩み寄る

「じゃ：ハジメマス」

望遠鏡を覗き込んだ京助が言った

「ラムちゃん上ばっかり見てたら首疲れるからソコに寝ながら見て

るといいと思うよ」

南がソコと指差したところにはさっきまで坂田が寝ていたビニールシート

「ありがとさんちっこいの」

阿修羅あしゅらがひらひらと手を振ると南も手を振り返して望遠鏡の近くに駆けていった

「…いいな」

阿修羅あしゅらが呟いた

「こりゃ…変わるわな…」

ふっと笑った阿修羅あしゅらを緊那羅きんならが見上げた

「あのお堅いだっぱやかるらん…【空】の面々…すんげく変わった

…お前もな緊那羅きんなら」

阿修羅あしゅらが首をコキコキ鳴らして言う

「いくら【時】にとつての重要人物だからってそうチョコチョコいかんくてもいいような気がしてたんだけに…来なくなるのオライもわかった」

阿修羅あしゅらの言葉に緊那羅きんならが笑った

「…だから私は守りたいんだっちゃ」

緊那羅きんならが言う

「役目は…大事なのはわかるっちゃ…でも私は…」

「言うな」

阿修羅あしゅらが緊那羅きんならの口に手を当てた

「…こないだの事忘れてないだろや？ …上が何かしようとしてる

…かもしれないよな」

緊那羅きんならが目を見開いて阿修羅を見る

「…オライのカンが百発百中なら言い切れただけだな…そうもよくはないんで」

阿修羅あしゅらが緊那羅きんならの口から手を離した

「もしかしたらなんだけんな…上は無理矢理に竜のボン達を起こそうとしてんのかもしれんのさ」

阿修羅あしゅらが言う

「無理矢理…ってそんなことできるんだっちゃ？」
緊那羅きんならが聞いた

「まあ：オライの予測だけだな：でもアレだ：竜のボン達の役目としての力が起きれば【時】がくる：」
阿修羅あしゅらが言うきんならと緊那羅が眉をひそめた

「…【時】…」

緊那羅きんならが少ない脳みそを集めてあーでもないこーでもないと宿題をこなそうとしている3馬鹿の中にいる京助を見た

「お前が役目を投げ出して竜のボン達を守るって言うなら」
阿修羅あしゅらが緊那羅きんならの頭をポンっと軽く叩いた

「オライもお前につくさ」

「あ：しゅら：」
緊那羅きんならが阿修羅あしゅらを見ると阿修羅がニーっと笑って緊那羅きんならの頭をくしやくしや撫でる

「竜の守りたかったもん：オライも守ってやるさ」
もっさりくつしやくしやになった頭で緊那羅きんならが笑った

「うん：私は：京助と悠助を守るっちゃ：何があっても」
顔を見合わせて緊那羅きんならと阿修羅あしゅらが親指を立てて笑い合った

「しゅーーーーーーーーーーーーーーーーりよーーーーーーーーーーーーおッ！！！」

中島が両手を空に投げ出して高らかに宿題終わったぜ宣言をした
「いやゝ：よくやったよ俺等：あってるかはまた別として」
坂田がノートを閉じて頷きながらしみじみ言う

「後はコレを各自写して提出：だな」

坂田がノートで仰ぎながら言った

「コピーじゃ駄目なもんかねえ：んゝ…」

南が伸びをするとヘソが見える

「この後どうする？ 解散か？」

京助が屈伸した後立ち上がり3馬鹿を見た

「終わったんかい？」

阿修羅あしゅらが緊那羅きんならと共にやって来て聞く

「一応な～：俺は帰るわコレあるし」

中島がコレと言って望遠鏡をペンッと叩いた

「あ、じゃあ俺手伝うよってことで俺も帰るわ」

南が中島に言う

「じゃあ～：おれふおもへえるかな～：つと」

坂田が大欠伸をしながら言った

「じゃ解散なワケだな」

京助が悠助から借りたビニールシートを畳みだした

「流れ星：見れなかったねラムちゃん」

南が緊那羅きんならに言う

「まあそうちよくちよく見れんもんでもないからよく仕方ない仕方ない」

阿修羅あしゅらが笑いながら緊那羅きんならの頭をポンポン叩いた

「近いうちに見れると～：あ」

苦笑いで夜空を見上げた緊那羅きんならが声を上げる

「あ？ あ～：赤鬼」

緊那羅きんならの言った【あ】をつなげてなのか京助が言った

「に？ に～：にがり」

続いて南が言う

「りか～：」

中島が言う

「カマキリ」

「いや～：まだ俺言ってなかったんだけど～：」

坂田がすかさず言うとか中島が突っ込んだ

「うっお～：いや～：見てみ？」

そんな3馬鹿と京助に阿修羅あしゅらが上を指差しながら言う

「…上？」

阿修羅あしゅらの指差す上を3馬鹿と京助が見上げる

「…すげえ…」

京助がボソツと言った

「これ…全部流れ星なんだっちゃ？」

緊那羅きんならが空を見上げたまま誰かに聞いた

さっきまで紺色の空縫い付けられていたビーズのような星がまるでぶちまけたように小さく光りながら降り注いでいる

「そういや…竜のボントコで読んだ新聞だかに流星群がどうかいてたっけな」

阿修羅あしゅらが思い出して笑った

「うお！！ 願わんと！！！」

坂田が慌ててパパンと手を二回叩くと目を閉じた

「神社じゃねえんだから別に手は叩かなくてもいいと思うんだけどナァ；」

中島がそんな坂田を見て呟く

「こんだけ降ってるんだから連呼してればどれかが叶えてくれるかもねえ」

南が緊那羅きんならに言う

「願え願えッ！！」

京助もブツブツ何かを繰り返して星に祈りはじめた

「…緊那羅」

阿修羅あしゅらが緊那羅きんならに笑いかけると緊那羅きんならが夜空を見上げた

「…うん」

そして笑うと目を閉じて小さく何かを呟き始めた

「さって…オライも…やってみっかな」

真剣に流星群に向かって願っている3馬鹿と京助、そして緊那羅きんならを見た阿修羅あしゅらも流れ落ちる星に向かって目を閉じた

「すげえなあ…」

願い事を言い終えたのか京助がボソッと呟いた

「まだ降るか星よ…」

坂田が今だ降り止まない流星群を見上げて言う

「空から星がなくなっちゃいそうな勢いだなあ…降る降る」

中島が笑いながら言った

「なあ…俺さ婆ちゃんから聞いた話思い出したんだけどさ」

坂田が言う

「何で流れ星に願い事いうと叶うか知ってるか？」

坂田が一同を見て言った

「…知らん」

京助が答える

「教えてやっか？…コホン…坂田教授の…昔話でゴウ！！」

坂田が軽く咳をして拍手し始めると京助達も拍手をし始めた

「ハイ静粛に…コレはアクマで昔話として話すんだからな？」

死んだ人が星になるって聞いたことあるだろ？」

坂田が言うとなと中島が頷いた

「…そうなんだっちゃ？」

緊那羅きんならが京助に聞く

「まあ…そう言われれば聞いたことがあるようなないような…」

京助があやふやな返答をした

「んで…流れ星って言うのは生きてるときに悪い事してたヤツの星なんだって…その星が空で罪滅ぼしで地上を見守ってくれてて…生まれ変わりますって地上に戻ってくる時に生まれ変われるのが嬉しくてその嬉しさを分けようとして願いを叶えているんだってさ」

坂田が話し終わると一同が揃って夜空を見上げた

「じゃあ…こんなに沢山の星が降っているってことはこんだけ悪いことしたヤツがいるってことなんだあね」

南が言う

「まあ…俺達もチョコチョコ可愛い悪いことはしてるよな…」

京助が言った

「…だな；」

何か主思い当たる節があるのか中島が頷く

「誰だって悪い事の一個や百個してるもんだろ…と思う」

坂田が言う

「んだな…オライだって…そうだ」

阿修羅^{あしゅら}が笑って言った

「ごめんなさいって言った事ないヤツ挙手！！」

京助が言うところ馬鹿が揃って胸のところでペケ印を作った

「…小さくても大きくても悪い事には変わりないってことで…俺等もいつか星になって誰かの願いを叶えるんだな…」

中島が呟く

「ってか俺等の前世だかはちゃんと願い叶えてやったんだろうかね？」

南が言った

「…さあなあ；」

京助が口の端をあげて言う

「明日辺り世界中で出産ラッシュ？」

坂田が言った

「オンギヤア大出血サービス！！」

南が両手を夜空に広げて言う

「フェイントかまして祝ってやりましょう！！ 生まれ変わってお

つめだと————————————————————
——！！」

坂田が降り注ぐ星に向かって叫んだ

「今何時？」

坂を下った分かれ道で南が聞く

「あゝっと…もうすぐ明日になる」

京助が時計を見て答えた

「じゃそろそろさっきの流れ星のどれかが生まれ変わろうとしてい

るわけすな」

坂田が言った

「だねえ…」

南が夜空を見上げると何事もなかったかのように星が光っていた

「んじゃ俺等コッチ」

中島が長方形の箱を担いで右方向を指差した

「んで俺はコッチと…明日どうする？」

京助が左方向に体を向けて聞く

「そうだなあ…」

中島方向に足を進めつつ坂田が言った

「まあ明日考えましようって」

中島が笑いながら言う

「とりあえず俺は眠みいし…」

坂田がメガネを外して目を擦った

「みちゆるんオネムでちゅー」

南が坂田の頭を撫でながら笑う

「ってことで…解散！」

京助がチャッと手を上げると3馬鹿も同じく手を上げた

「星が死んだヤツねえ…」

阿修羅^{あしゅら}が歩きながら夜空を見上げて言った

「よお思いつくもんだあなあ…」

ハッハと阿修羅^{あしゅら}が笑う

「星になってまで見守りたいんだろ」

京助が言った

「ってか…そう考えると残ったヤツ…少しは気が楽だったんじゃないかねの？」

京助が足を止めて夜空を見上げた

「あそこにアイツがいるって思えば…寂しくねえじゃん…」

言った京助の頭を阿修羅^{あしゅら}が軽く一回叩いた

「竜のボンは…竜がコノ星のどれかだとか思ったことあるん？」
阿修羅あしゅらが聞く

「…昔な」

京助が笑って答えた

「…京助」

今まで黙っていた緊那羅きんならが突然京助を呼んだ

「なした？」

京助が返事をする

「手…繋いで欲しいっちゃ」

「は？」

緊那羅きんならが言うと京助がきょんとした

「何でまた…」

京助が聞く

「なんとなく…あ…駄目なら…いいんだっちゃ；」

緊那羅きんならが苦笑いをした

「ボン」

阿修羅あしゅらが肘で京助を突付くと阿修羅あしゅらが京助の手を握った

「…はあ…；」

京助が溜息をついて緊那羅きんならの手を掴んだ

「京助の手あったかいっちゃ」

手を握りなおした緊那羅きんならが言う

「お前が冷てえんだろが」

京助が言った

「おくてえてゝつうないでえゝ」

阿修羅あしゅらが嬉しそうに手を前後に振りながら歌い始める

「近所迷惑だっつーの；」

京助が阿修羅あしゅらに突っ込む

「ったく…；」

京助が阿修羅あしゅらに半分引きずられるようにして歩くとその京助に合わせ
て緊那羅きんならも歩く

「……なんだよ;」

視線を感じた京助が緊那羅きんならを見ると緊那羅きんならが嬉しそうに笑った

「起きるっちゃ京助ッ!!!!」

バサアッという音と緊那羅きんならの声が響く朝七時

「ほらほらっ!! 遅刻するっちゃ!!」

緊那羅きんならが京助の体をまたいで窓にかけられていたカーテンを全開にする
すると朝日が入り込んできた

「んあゝ:」

京助がうつすら目を開けて寝返りを打つとまた目を閉じる

「京助ッ!!」

「うごあッ!!;」

緊那羅きんならが敷布団を思い切り引っ張ると京助が転がり落ちた

「ハイ!! 起きた起きたッ!!」

戸口まで転がった京助の目に映るのは逆さまの世界の中でテキパキとさっきまで自分が寝ていた布団を片付けている緊那羅きんならの姿

「:お前ここ数日何か吹っ切れたのかの様に元気だナア;」

布団を片付け終わって近づいてきた緊那羅きんならに京助が言った

「そうだっちゃ? ほら! 起きて起きて」

緊那羅きんならが京助の手を引っ張って体を起こす

「へいへい:; つくふあゝ:あ」

起き上がった京助が大欠伸をした

「:あのね京助」

緊那羅きんならが部屋を出ようとした京助に声をかけた

「う?」

ポリポリと腹を掻きながら京助が眠気たっぷりの顔を緊那羅きんならに向ける

「守るから」

緊那羅きんならが朝日の逆光の中満面の笑顔で言った

「私は京助を守るっちゃ」

もう一度 緊那羅きんならが言う

「：あ？；」

寝起きに唐突に言われた京助が間を開けて声を出した

「ご飯盛っておくっちゃ」

緊那羅きんならが京助の横を通って廊下に出た

「あ：ああ？；」

京助が廊下を見て返事をするきんならと緊那羅が笑顔で振り返った

「目玉焼きは半熟だっちゃ」

緊那羅きんならが言いながら笑った

「：へんなヤツ；」

京助が呟いた

「あ！京助がおきてきてる〜」

悠！ が醤油に手を伸ばしながら茶の間に入ってきた京助を見て言
った

「何だよ；」

席に着きながら京助が悠助を見て言う

「義兄様最近早く起きてるよね」

慧喜えきが麦茶を悠助のコップに注ぎながら言った

「コレが世間一般の朝なのよねえ：」

母ハルミが頷きながら茶碗を手に取る

「ハイ京助」

緊那羅きんならが京助の茶碗を差し出した

「さんきゅ〜：ったまー」

茶碗を受け取った京助が【いただきます】を簡略して言うきんならと箸を持
った

「緊ちゃんは最近すごく元気だし：いいわねえ」

母ハルミがにっこり笑って緊那羅きんならを見る

「そう：だっちゃ？」

味噌汁茶碗をもった緊那羅きんならが母ハルミを見た

「すごくイキイキしてるわよ？」

母ハルミが笑う

「何かいいことあったの？」

悠助が緊那羅きんならに聞いた

「…いい…ことだっちゃ？」

緊那羅きんならが呟きながら京助を見る

「…なんだよ；」

朝日に納豆の糸を輝かせながら納豆をかき混ぜていた京助が緊那羅きんならの視線に顔を上げた

「何でもないっちゃ」

緊那羅きんならが笑うと漬物を箸でつまんだ

「ヨシコ」

白く長いカーテンを手で上げた阿修羅あしゅらがその先にいた吉祥に声をかけた

「…あっくん…？」

膝を抱えていたヨシコが顔を上げる

「ほいよ」

ヨシコの横に腰掛けながら阿修羅あしゅらが手を差し出した

「何？」

ヨシコがその手を見る

「お土産」

阿修羅あしゅらがニーツと笑った

「お土産…？」

ヨシコが首を傾げつつも手を伸ばすとチャリっという音とともにヨシコの手になにかが手渡された

「これ…」

「でっかいのから」

阿修羅あしゅらが足の裏を合わせながら手を引っ込めた
「でっかいの…ってゆーちゃんから？」

ヨシコが手を開くとあつたのは【ようこそ正月町へ!!】と書かれた観光土産としかとれないキーホルダー

「なあでっかいの」

阿修羅^{あしゅら}が先を歩く中島に声を開けた

「何だよ」

中島が足を止めて振り返る

「ヨシコのこと嫌わんといてな」

「はっ!?!」

阿修羅^{あしゅら}が言うとき中島が声を上げた

「何をいきなり」

中島が言う

「いやヨシコはその…なんだ」

阿修羅^{あしゅら}がどもりながら何かを言おうとしている

「別に嫌ってねえよ俺は」

中島が言う

「…そっかそか」

中島の言葉に阿修羅^{あしゅら}が微笑んだ

「…いつくる」

中島が阿修羅^{あしゅら}に聞く

「何が」

「アイツ」

阿修羅^{あしゅら}が答えると中島がまた言う

「ヨシコ」

阿修羅^{あしゅら}が聞き返すと中島が頷いた

「…さあなあ…どうだか」

阿修羅^{あしゅら}が苦笑いを返す

「…俺宿題とかで夏休みなのに自由がないとか思ってたんだけどさ
…アイツに比べたら俺等ってスゲー自由なんだなって…さ」

中島が笑いながら言った

「…でっかいの…」

「コレ」

阿修羅^{あしゅら}が言うのとはぼ同時に中島が何かを差し出した

「渡してくんね？　くだらないモンだけど」

中島が眉を下げて笑いながら阿修羅^{あしゅら}に何かを手渡した

「何で？」

ヨシコがキーホルダーから阿修羅^{あしゅら}に視線を移した

「さあ？」

阿修羅^{あしゅら}が笑う

「これアワビって貝から作ってんだとさ…かざしてみ？」

阿修羅^{あしゅら}がヨシコの手を持って上にキーホルダーをかざした

「…綺麗…」

小さく開いている穴から室内の明かりがヨシコの顔に小さな夜空を作った

「ねえあつくん…私…」

ヨシコが手を下ろして俯いた

「私…」

ヨシコがキーホルダーを握り締める

「お前は悪くないんよヨシコ…」

阿修羅^{あしゅら}がヨシコの頭を撫でた

「…お前は悪くない…」

阿修羅^{あしゅら}の視線の先には棚の上に置かれた紙コップ

「オライが近いうち連れてってやるさ」

笑いながら言った阿修羅^{あしゅら}が一瞬顔を曇らせた

「…いつか自由にしてやるさ…」

そして小さく呟く

「竜がしたかったこと…オライもしてえしな」

阿修羅^{あしゅら}の胸の飾りがチャリッと鳴った

【第九回】 ばかVSバカ（前書き）

居残りさせられてろのかなんなのか京助が帰ってこない
緊那羅と阿修羅が学校へと向かったのはいいが…そこではとんでも
ないことがおきていた

【第九回】ばかVSバカ

「飯の後の体育ってやめて欲しいもんナリ；」

南が横っ腹を押さえながら溜息を吐いた

「しかも鉄棒；」

同じく横っ腹をさすりつつ坂田が言う

生徒が少ない正月中の体育は男女別に全クラスで行う

男子が二時間体育をやっている間女子は家庭科一時間と技術一時間、女子が二時間体育をやっている間は男子が家庭科一時間と技術一時間というカンジの特殊時間割になっている

「そういや今日女子の家庭科って二時間使って調理実習だったよな」
ジャージの上着を腰に巻きつけた京助が自分の順番を終えて坂田と南の元にやってきた

「秋のお菓子だっけ」

南が言う

「たしかそんなん」

坂田が答える

「おすそわけとかないモンかねえ」

隣で寝転がっていた浜本が体を起こした

「六時間目始まる前の休み時間にちよろっと覗きに行ってみませんか？」

坂田が奥様口調で言う

「いいきますね」

京助が親指を立てた

「おーい！！ 二周目いくってさー！」

中島が鉄棒の下から京助達に声をかける

「うげえ； 出るって昼飯；」

南ががっくり肩を落とした

「頑張ってるねえ体育委員；」

坂田が立ち上がって尻についた土を払った

「俺らの順番来る前に休み時間はいんじゃないかね？」

京助が歩きながら言う

「俺一番最後でいいわ……」

南がよろり立ち上がってのらりくらりと歩き出した

「六時間目も鉄棒なワケ？」

南と同じペースで歩きながら坂田が聞く

「じゃねえの？」

坂田と南が来るのを待っていた京助が言う

「同じ棒なら鉄よりうまい棒がいいなあ俺」

南が言った

「次！ 京助！！」

体育教師が京助の名前を呼んだ

「はっ！？； なんで俺； さっきやったばかりじゃんエッチー；」

京助が【エッチー】というらしき体育教師に言う

「さっきできたヤツから逆回転」

エッチーと呼ばれた体育教師が答えた

「うっわ……」

京助が顔をそらして口の端を上げた

「逆上がり連続何回できるかな」

エッチーが笑いながら言う

「五回以上できたらジュースなエッチー」

京助が鉄棒の棒を掴みながら言った

「いや十回だなお前は」

エッチーが言う

「何でだよ；」

ソレに対し京助が反論すると問答無用のごとくエッチーの笛が鳴った

「片ッ腹痛てェ……」

京助が片腹を押さえながら教室へと続く廊下を3馬鹿と共に歩く

「調子に乗ってやりまくるからだろが」

坂田が言う

「本当運動神経はいいんだよなあ京助」

中島が京助の尻を叩いた

「性格もいいぞ」

京助がキュピインポーズで言うのと坂田がすかさず裏手で突っ込む

「何かいい匂いしない？」

そんな京助を無視して南が言う

「…忘れてた！ 調理実習！！！」

坂田が声を上げた

「どおりで教室に戻ってくるやつ少ねえワケだ！ 家庭科室！！！」

京助が向きを変えた

「おこぼれおこぼれ！！」

南も笑いながら方向展開して駆け足を始める

「残っててくれよッ！」

中島と坂田も階段を駆け下りた

「だあれにあげるのかしらん？」

ミヨコが阿部の肩を軽く叩いた

「え…や…別に；」

エプロンに三角巾をした阿部が慌てて背中に何かを隠した

調理実習が終わり後片付けに入っていた家庭科室に体育を終えおこぼれを授かろうとやってきた男子が班ごとに分かれていた親しい女子に声をかけている

「阿部っちゃん！！」

浜本とハルが阿部の班に近づいてきた

「何作ったんだ？」

ハルがマイハニーミヨコに聞く

「アップルパイだよ」

ミヨコがハルに残しておいたらしき切り分けられたアップルパイを

差し出した

「サンキュ」

照れながらもハルが受け取ると二人の周りだけが何処となく桃色幸せオーラに包まれた

「いいねえ…決まった相手がいるてのは…ってことで阿部ちゃん！
！」

浜本が阿部を振り返る

「あげないからね」

そんな浜本に向かって阿部がキツパリといった

「…本間」

阿部に断られた浜本が本間を振り返った

「…何？」

本間がにっこり笑って言うのと浜本が苦笑いを返した

「うるあ——————————！！！！！！」

急ブレーキで止まった事で上履きが廊下の床と擦れる音がして京助が家庭科室の中に入ってきた

「遅いぞ」

男子生徒が京助に続いて家庭科室内に入ってきた3馬鹿に向かって笑いながら言った

「余ってねえ？」

坂田が一番近くの班に声をかける

「石田が食った」

一人の女子が隣の男子を指差した

「吐け」

坂田が石田というらしき男子生徒に言う

「早い者勝ちいい」

石田が笑いながら言った

「くっそ…遅かったカァ」

南が溜息をつく

「…あげるんでしょ？」

「へっ?;」

本間が阿部に聞いた

「栄野に」

本間が阿部に小さい声で言う和阿部の顔がカッと赤くなる

「ななな…ん…ッ;」

どもりながら後ずさった阿部の手からラップに包まったアップルパイが床に落ちた

「あ…」

「三秒ルール発動!!」

アップルパイが床に落ちると同時に数人の男子が揃って【三秒ルール】を発動させ阿部の落としたアップルパイめがけて駆け寄る

「ちょ…だ…!!」

「だりゃー——————ッ!!!!」

阿部の言葉が男子の雄叫びでかき消された

「…もうらいッ;」

数人の男子にジャージを掴まれながら京助が言う

「判定は？」

南が坂田に三秒ルール判定を聞く

「…まあ…適応？」

坂田が適当に答えた

「ヨッシャー————————!!」

床に倒れたまま京助が叫んだ

「後から食べようと思ってたのに」

教室に向かう廊下を歩きながら阿部が言う

「焦げてんぞ阿部」

京助が三秒ルール適応で手に入れたアップルパイを食いながら言った
「うっさいッ!!!; 黙って食えッ!!」

文句を言った京助に阿部が怒鳴る

「まあ：結果オーライ？」

怒鳴った阿部の肩を叩いて本間が言う

「う…；」

阿部の顔が赤くなった

「うるさいなッ！！；」

そして本間に向かって怒鳴りながら阿部が教室の戸を開ける

「…阿部？」

戸をあけたのはいいが中に入らない阿部に本間が声をかけた

「どうした？」

その本間の後ろから坂田も声をかける

ヂ…：チキチキチキチキ…

という機械音らしき音が聞こえた

「何…コレ…」

阿部が小さく言うと言顔を合わせた京助と坂田が阿部の体を押しつけて教室の中を見た

「な…」

京助と坂田が同時に声を出した

「何じゃこりゃ————————ッ！！；」

坂田の声が廊下に響いた

「っ…だしよっ； あ”ゝ…；」

カンブリを布で拭いていた阿修羅あしゅらの鼻から鼻水が流れた

「汚いんだやな；」

コマが言う

「拭くんだやな；」

イヌが尻尾でティッシュの箱を阿修羅あしゅらの元に飛ばした

「あんがとさんワンコ」

ティッシュを二枚抜いた阿修羅あしゅらが勢いよく鼻をかむ

「風邪でもひいたっちゃ？」

洗濯物を取り込んでいた緊那羅きんならが阿修羅あしゅらに聞いた

「いんやゝ…どうだか…急に寒気がしたんよ；」

鼻をかんだティッシュをゴミ箱の方向へ投げ捨てながら阿修羅あしゅらが答える

「ヘンタイも風邪引くんだやな？」

イヌが言う

「コラコラワンコ； 誰がヘンタイだっちゅーん；」

阿修羅あしゅらがイヌの首根っこを掴んで持ち上げた

「京助達がいつてたんだやな」

イヌが言う

「竜のボンけ…；」

阿修羅あしゅらが苦笑いをした

「でも京助達も馬鹿だからどっこいどっこいなんだやな」

コマが耳の後ろを掻いて伸びをしながら言う

「馬鹿ねえ…」

阿修羅あしゅらがイヌを下ろすと足を組んで空を見上げた

「…そーいや…馬鹿っちゅーと…」

阿修羅あしゅらがハタと何かを思い出したのか足を組みなおした

「馬鹿がどうかしたんだっちゃ？」

「わぶ；」

緊那羅きんならがコマの上に洗濯物を下ろしながら阿修羅あしゅらに聞く

「緊那羅何するんだやなっ；」

洗濯物の下からイヌの手を借りて這い出してきたコマが緊那羅きんならに抗議の声を上げた

「そんなとこにいるからだっちゃ。ホラホラどいたどいた」

緊那羅きんならがサンダルを脱いで縁側に上がると洗濯物をかき集めて和室へと運ぶ

「…緊那羅だんだんハルミママさんに似てきたんだやな；」

イヌがボソツと言った

「京助が帰ってこない？」

仕事を終え自宅に戻ってきた母ハルミが悠助と慧喜えきに聞いた

「うん：もう六時なのに」

悠助が不安そうな顔をするえきと慧喜が悠助を抱きしめた

「どうせまたなんかやらかして居残りさせられてるんでしょ」

そう苦笑いで言いながら母ハルミが巫女服を脱ぎ部屋着に着替える

「そう：かなあ：」

悠助が呟いた

「ハルミママさん」

緊那羅きんならが部屋のふすまをノックしてひょいっと顔を覗かせた

「私ちよつと学校まで行ってくるっちゃ」

「僕も行く」

「悠助が行くなら俺も行く」

緊那羅きんならが言うえきと間を置かず悠助と慧喜が続け様に言った

「あらゝみんないっちゃうと母さん寂しいじゃない」

母ハルミが言うえきと悠助が考え込む

「：ハルミママ寂しい：なら僕待ってる」

「じゃあ俺も待ってる」

悠助が言うえきと慧喜も言う

「すぐ連れて戻ってくるっちゃ」

緊那羅きんならが悠助に笑いかけた

「よ」

「阿修羅？」

玄関の壁に寄りかかっていた阿修羅あしゅらが片手を上げた

「オライも行くわ」

壁から体を離して阿修羅あしゅらが軽く伸びをして言う

「ちよつと見に行くだけだっちゃよ？」

靴を履きながら緊那羅きんならが言った

「ヨシコがまだアレなんで教育係はヒマなわけさね」

阿修羅あしゅらが言うきつしょうと緊那羅きんならが顔をしかめた

「…吉祥はまだ…？」

緊那羅きんならが聞くと阿修羅あしゅらが頷く

「面会は許可されたんだけどな…まだ宮の中からはでらんないわけさ」

阿修羅あしゅらが言う

「つてことで同行すんわ」

緊那羅きんならの頭に手を置いて阿修羅あしゅらが笑った

ヂー…チキチキチキチキ…

そしてカタカタカタという音が教室に響く

「…腹減った…」

京助がぼそつと呟いた

「お前さっき三秒ルール適応でアップルパイ食っただろ」

浜本が小声で言う

「さっきって何時間前だッ； もう晩飯の時間じゃん；」

京助が小声だけど怒鳴る様に言った

「つてか俺等隣のクラスなんですが；」

南が遠い目をして呟く

「俺に言うな俺に；」

京助がまたも小声で怒鳴る

「あんな太陽にほえろみたいな何じゃこりゃーつての聞いて見に來ないほうがおかしいだろが；」

中島が言う

『ウリュサイ』

ジャキという音がすると小声の討論が静まり返った

「おいちゃんの計算ではもうすぐなんだ」

教卓の上で黒板に背を向けた赤いナイトキャップのような帽子をかぶった人物が言った

そんなにも大きな声ではなかったのだが静まり返った教室には充分響く

「そう：こうして捕獲しておけばきつと来るはず」

ヒヨイと教卓から飛び降りたその人物がチョークを持ち黒板にカリカリと何かを書き出す

「ここでもう：するとこういう状況ができて：」

カツカツとチョークを黒板に打ちつけながらわけのわからない数学のような科学のようなそんな式を組み立てていくその人物を教室の隅に固められた二年三組の生徒（一部二組も含む）が黙っている

「思うに：」

坂田が小さく言うのと京助を見た

「：これって」

南も京助を見た

「間違いなくお前関係だよな」

そして中島がトドメと言わんばかりの一言を京助に言う

ヂー：チキチキチキ：

また機械音が聞こえ3馬鹿が黙った

『ウリュサイ』

ジャキンという音ともに生徒たちに向けられたのはどう見てもバズーカ砲

ソレを持つのは20センチくらいの機械仕掛けの人形

「：今度こそおいちゃんの方が天才だってこと：証明するんだ」

計算式を見上げて赤いナイトキャップのような帽子を被った人物が呟いた

「おかしい」

本間が呟いた

「何が」

阿部が聞く

「…先生が来ない」

本間が言うとはたと生徒達が本間を見た

「そういや…そうだよな…ウニが来ない」

浜本が担任であるウニの姿を見ていないことを思い出して呟く

「それに静か過ぎない？」

更に本間が言うとは生徒達が耳を澄ませた

「…そう…だね…」

物音一つせず静まり返っている校内に南が首をかしげる

「当たり前。邪魔が入っちゃ困るから計算済み」

聞こえたのか帽子の人物が答えた

「何したんだ？」

京助が聞く

「丸一日眠ってもらっている」

帽子の人物が言った

「…アンタ誰？ 何がしたいわけ？」

阿部が帽子の人物に向かって喧嘩腰の口調で言う

「…うっさいなあ…」

帽子の人物が嫌そうに言うとはチキチキという音と共にバズーカ砲をもった人形が阿部の方を向いた

「ソコの馬鹿っ婆いのが栄野京助だろ？」

帽子の人物が京助の名前を口にすると生徒が一斉に京助を見た

「やっぱか…」

坂田が京助の肩を叩いて言う

「何？ 京助の知り合い？」

阿部が京助に聞く

「しらねえよ」

京助が口の端を上げて答える

そんな阿修羅あしゅらを緊那羅きんならが見た

「こりゃ：ちよつくら帰んの遅くなりそうださ」

阿修羅あしゅらが腰に手を当てて頭を掻くと地面を蹴って飛び上がり明かりのついた教室の窓に手をかけた

「やは」

爆笑の聲が響く教室内に向かって阿修羅あしゅらが片手を上げた

「ヒー…； …阿修羅！？；」

涙目で笑い転げていた京助が阿修羅あしゅらの姿に声を上げると爆笑トルネードがやや落ちついた

「やっぱりおいちゃんの計算どおりだった」

帽子の人物が阿修羅あしゅらの方を振り返る

「久しゅゝばか」

阿修羅あしゅらが教室内に入ってくるなり帽子の人物に挨拶をした

「上の名前を抜かすなッ！！ おいちゃんは鳥倶婆迦うぐばかだっ！！」

鳥倶婆迦うぐばかが阿修羅あしゅらに向かって怒鳴った

鳥倶婆迦うぐばかと名乗ったその人物がやたら無駄に長い袖口を引きずりながら阿修羅あしゅらの前に来た

「相変わらずオチャラケた顔してんのー」

阿修羅あしゅらが鳥倶婆迦うぐばかを見て笑った

「うっさいッ！！；」

鳥倶婆迦うぐばかが片足を踏み出して怒鳴る

「おいちゃんと勝負しろ阿修羅あしゅらッ！！ 今日こそおいちゃんの方が天才だってこと証明してやるんだッ！！ 嫌とは言わせないからなッ！」

そう言っうぐばかて鳥倶婆迦が背中に背負っていた鞆に繋がっているらしき腰の紐を引っ張ると鞆の中から一体どうやって入っていたのか何対もの機械仕掛けの人形が飛び出して生徒達を取り囲んだ

『ホウイホウイ』

人形がキャッキャと踊りながら生徒達の周りを回り始める

「めんこいなあ」

阿修羅^{あしゅら}がしやがんで人形の踊る姿を見て言う

「勝負だ阿修羅^{あしゅら}ッ！！ 嫌^{きら}」

「やだね」

鳥俱婆迦^{うぐばか}が言っている途中で阿修羅^{あしゅら}が早くも拒否の言葉を吐いた

「…っていったらって最後までいわせろよッ！！」

鳥俱婆迦^{うぐばか}がキーキー地団太を踏んで怒鳴る

「…馬鹿漫才だ…」

坂田がぼそつと呟いた

「馬鹿って言うな——————ッ！！！！」

坂田の言葉が聞こえたのか鳥俱婆迦^{うぐばか}が大声を上げると人形が一斉にジャキンとバズーカ砲を構えた

「竜のボン！！」

阿修羅^{あしゅら}が駆け出そうと床に手をつき体を前に倒すと同時に人形の目が光った

「ギャ——————！！； 何だかスッゲヤバ気————
————ッ！！！！」

生徒達が悲鳴を上げてできるだけ人形から放れようと隅っこまでおしくらまんじゅうの様にして逃げる

「…んの…ッ！！」

隅に立っていた掃除用具入れを開けて阿部が中から箒を取り出した
「いいかげんにしなさいよッ！！」

阿部がそう怒鳴りながら箒で人形に足払いをかけると人形が次々にすっ転んで足をバタバタさせる

「ウツチャンズ————！！；」

鳥俱婆迦^{あしゅら}が人形の名前らしき言葉を叫びながら人形に駆け寄った

「…つええ…」

箒を握り締めて息を切らせている阿部を見て中島が呟いた

「壊れたらどうするんだッ！」

人形に一つを手にとって持って鳥俱婆迦うぐぼかが怒鳴った

「大事ならしまっておきなさいよ!!」

負けじと阿部が怒鳴り返す

「こええ…;」

京助が口の端を上げて言った

「いやゝ見事見事」

阿修羅あしゅらが立ち上がって拍手をする

「アンタも!!」

阿部が今度は箒の柄を阿修羅あしゅらに突きつけた

「勝負の一つや二つ受けてやれないの!？」

そして阿修羅あしゅらに向かって怒鳴る

「いいストレス発散になったみたい」

本間がボソツと言う

「いや…あのな嬢…;」

「いやでもあのもないッ!!　してやりやいいじゃないッ!!」

そうすれば気が済むんでしょッ!？」

阿部が鳥俱婆迦うぐぼかに向かって怒鳴るとビクツとした後　鳥俱婆迦うぐぼかが頷

いた

「京助!!」

ガラッという音がして緊那羅きんならが教室の戸を開けた

「…何事…なんだっちゃ?;」

箒を持った阿部、隅っこで固まっている生徒、足をバタバタさせて

いる人形、それらが一気に視界に入ってきた緊那羅きんならが思わず教室内

の全員に向かって聞いた

「…何…やってるんだっちゃ?;」

緊那羅きんならがソロソロと教室内に入って静かに戸を閉める

「ンッン!!;」

阿修羅あしゅらがわざとらしく咳払いをするとハッとした生徒達がざわめきはじめた

「…あの…一体何あったんだっちゃ?;」

京助と馬鹿の元にやってきた緊那羅きんならが京助に聞いた

「…いや…女ってこええなあって…」

京助が小さく言うのと男子生徒が揃って頷く

「…女?;」

わけのわからない緊那羅きんならが箒を持って立っている阿部を見て首をかしげた

「あのなあばか…」

阿修羅あしゅらが頭を掻きながら鳥倶婆迦うぐぼかを見た

「前の名前を抜かすなって言ってるだろッ!;」

無駄に長い袖で見えないがおそらく阿修羅あしゅらを指差しながら鳥倶婆迦うぐぼかが怒鳴る

「おいちゃん**は**バカじゃないッ!! 天才なんだ!!」
ずずいと鳥倶婆迦うぐぼかが阿修羅あしゅらに向かっておそらく指を突きつけた

「…聞き捨てなりませんねえ」

南が言った

「馬鹿を馬鹿にすんなよな」

京助が口を尖らせて言う

「…馬鹿だから馬鹿にするんじゃないんだっちゃ?;」

そんな京助に緊那羅きんならが控えめに突っ込んだ

「それにさあ…お前知らないのか?」

坂田が鳥倶婆迦うぐぼかに近づき鳥倶婆迦の肩を叩いた

「…何をだよ?」

鳥倶婆迦うぐぼかが坂田を振り返る

「馬鹿と天才紙一重って言葉」

坂田が言うのと京助と南、中島とその他数人の生徒が頷いた

「…馬鹿と…天才…紙一重?」

鳥倶婆迦うぐぼかが言葉を繰り返す

「まあ要するに…馬鹿と天才は同じようなもんだってことだ」

坂田が鳥俱婆迦うぐばかの肩をポンポン叩きながら頷く

「そうなんだっちゃ？」

緊那羅きんならが京助に聞く

「おうよ！ 馬鹿は実は偉大なんだぞ？ だから俺は胸を張って言

う！！ 俺は馬鹿だ！！」

京助が自分に親指を向けて宣言した

「ハイハイ！ 俺も馬鹿————！！」

南が挙手して言う

「馬鹿ばっか————！！」

中島が笑いながら言った

「本当にね」

本間が溜息をつきながら言う

「だとさ」

しばらく黙っている鳥俱婆迦うぐばかに阿修羅あしゅらが声をかけた

「だからオライと勝負しなくても…」

「…お前ら馬鹿なのか？」

阿修羅あしゅらの言葉を聞くことなく鳥俱婆迦が生徒達の方に体を向けた

「まかせろ！！」

3馬鹿と京助そしてその他数人の生徒が揃って親指を立てる

「…何を任せるってのよ…」

阿部が呆れ顔で言う

「…馬鹿と天才は紙一重…」

「そうそう」

鳥俱婆迦うぐばかが呟くと坂田が頷く

「天才は馬鹿…馬鹿は天才…」

鳥俱婆迦うぐばかがブツブツ言いながら阿修羅あしゅらと生徒達を交互に見る

「馬鹿…天才…」

そして黒板の方に歩き出しチョークを手にとった鳥俱婆迦うぐばかが黒板になにやらまた計算式を書き出した

「…誰なんだっちゃあの子…」

緊那羅きんならが言う

「お前知らねえのか？」

京助が聞くと緊那羅きんならが頷いた

「つてことは…アレか矜羯羅こんがらとかの方か…」

「正解」

京助が言う和阿修羅あしゅらが笑いながら答えた

「アイツは【空】の鳥倶婆迦うぐぼかってえヤツ…前の【時】ンときにいなかった緊那羅きんならは知らなくて当たり前なんよ…滅多に出てこないんなアイツ」

阿修羅あしゅらが言う

「ヒツキーはよくないよ？ 子供はお外で遊ばないとさあ」

南が言った

「オライを勝手に敵視してんのさねー…； なんだか知らんけど」
阿修羅あしゅらが困ったねというカンジの顔で言う

「…本当一緒にいるよね」

本間が阿部に言う

「…だから？」

阿部が箒を持つ手に少し力が込められた

「別に？」

本間が阿部の肩を数回叩く

「素直になりなさい素直に」

ミヨコもやって来て同じく阿部の肩を叩く

「うっさいなッ！！！！」

「わかったッ！！！！」

阿部が赤い顔をして怒鳴ると同じくして鳥倶婆迦うぐぼかも声を上げた

「お前等！ おいちゃんと勝負しろ！！」

鳥倶婆迦うぐぼかが教卓の上に飛び乗って隅っこに固まっている生徒達に向かって無駄に長い袖を振った

「はぁ？；」

ワケがわからない顔をする生徒をヨソに鳥倶婆迦うぐばかが腰に手を当てて少し後ろにふんぞり返る

「嫌って言ったら…」

そして生徒達の足元でジタバタしている【ウッチャンズ】というらしき人形を見るなり教卓から飛び降りて一体一体大事そうに起こすとまた教卓に飛び乗って生徒達を見た

「嫌って言ったらま…」

「嫌だ」

鳥倶婆迦うぐばかの言葉が生徒達の見事なハモリで止められた

「だから最後まで言わせろっていつてるだろうッ!!」

教卓の上でキーキーと喚きながら鳥倶婆迦うぐばかが地団太を踏む

「危ないっちゃ!!」

「ばッ!!!!」

京助と緊那羅きんならがほぼ同時に声を上げ低い姿勢のまま二人の体が動いた

「うわッ!!」

古くてガタがきていた教卓の上で地団太を踏んだためかバランスを崩した鳥倶婆迦うぐばかが教卓から足を踏み外して落ちる

「…っんの馬鹿ッ!!」
ンなトコで暴れたら落ちんの目に見えて
んじゃねえかッ!!」

京助の背中に顔面から落ちた鳥倶婆迦うぐばかに京助が怒鳴る

「ナイススライディング京助!!」

中島が言った

「さすが体育馬鹿!!」

坂田も言う

「大丈夫? 京助…」

阿部が箒を持ったまま京助に声をかけた

「えと…大丈夫だっちゃ?」

京助に一步遅れた緊那羅きんならが鳥倶婆迦うぐばかに言う

「とりあえず降りてくれ」

京助が背中の鳥俱婆迦うぐばかに言った

「お前：なんで：」

「ホイホイ早く降りる降りる」

何かを京助に言おうとした鳥俱婆迦うぐばかを阿修羅あしゅらが抱き上げた

「なんでおいちゃん：」

阿修羅あしゅらに抱き上げられたままの鳥俱婆迦うぐばかが京助に向かって言う

「何でって言われても：条件反射？」

座った京助が答えた

「京助腕すりむいてるじゃない；」

阿部が京助の腕を見て言う

「あ？ ああ：まあこんなたいしたことねえし」

京助が手首をぷらぷらさせながら言った

「舐めときゃなお：」

「うおおおお！！！！；」

「キャー！！」

言いかけた京助の腕がグイッと引っ張られざわめきと黄色い悲鳴が広がった

「な：ッ！！！！！！；」

阿部の目が大きく見開かれた

「ほほお～：」

阿修羅あしゅらが感心したように笑いながら頷く

「うむ：今日の塩加減は塩一キロってトコですか中島さん」

坂田が中島に聞く

「いやいや：五キロは軽いですよ坂田さん」

中島が答える

「ラムちゃん素でやってるところがなんともはや：だよねえ？」

南がハッハと笑った

「：あの：緊那羅きんならさん；」

京助が自分の腕の擦り傷に口をつけている緊那羅きんならに声をかけた

「なんだっちゃ？」

緊那羅きんならがきよんととして返事をする

「何をなさっているんですかね？；」

京助が聞く

「舐めると治るって前に聞いた事あるし：今京助も言ったじゃない
ちゃ？」

緊那羅きんならが真顔で言った

「いや：あのですね：；　：なんだ：あゝ：ナンデモアリマセン；」

緊那羅きんならが本気で治ると思っっているという事がわかった京助が口の端
を上げて言う

「ッ：ここは教室ッ！！」

バシィッという音と阿部の怒鳴り声が教室に響いた

「ナイスバツティング」

本間が拍手して見る先には阿部の見事なフルスイングを頭に受けた
京助の姿

「あ：阿部さん？；」

「いつてえッ！！；　何すんだ阿部ッ！！；」

驚く緊那羅きんならに怒鳴る京助

「いちゃつくなら他でしてよ！！　馬鹿ッ！！」

「やーいばーか」

「ばーかばーか」

阿部の怒鳴り声に続いて3馬鹿含む生徒達が一斉に【馬鹿】コール
を京助に浴びさせる

「やかましいッ！！！！；」

京助が怒鳴った

「さつきは自分で馬鹿宣言してたんじゃないっちゃ？；」

緊那羅きんならが小さく突っ込む

「こうやって他人に言われると何だかめらのっそムカつくんだよッ
！！；」

京助が言う

「…お前が一番馬鹿なのか？」

阿修羅あしゅらに抱き上げられたままだった鳥倶婆迦うぐばかが京助に聞いた

「ザ・キングオブ馬鹿」

「誰がじゃー!!」

坂田が京助を指差して言うのと京助が怒鳴る

「キング〜キング〜ムテキング〜」

南が得意の即席ソングを歌った

「なら…」

鳥倶婆迦うぐばかが京助を見た

「なら栄野京助!! おいちゃんとしよ…」

「やなこった」

言いかけた鳥倶婆迦うぐばかの言葉を京助が止める

「だから最後まで言わせろっていつてるだろうッ!!」

阿修羅あしゅらに抱きかかえられたままで鳥倶婆迦うぐばかがキーキー暴れて怒鳴る

「コラコラ暴れなさんな;」

阿修羅あしゅらがそんな鳥倶婆迦うぐばかをなだめる

「お二方が怒る…けどおいちゃんと勝負しろ!! おいちゃんの方

が馬鹿だってこと証明するんだッ!!」

鳥倶婆迦うぐばかが京助に向かって怒鳴った

「…馬鹿っぷりを証明…ねえ;」

浜本が苦笑いで言う

「充分証明されてるような…」

ミヨコが呟く

「うん馬鹿だよね」

南が言う

「でもおもしろそうじゃん？」

坂田が言う

「んだな」

中島と数人の生徒が頷いた

「つてことで勝負しろや京助」

ハッハと笑いながら中島が京助に言った

「何で俺が…」

「キングオブ馬鹿だし」

怒鳴りかけた京助に3馬鹿と数人の生徒が見事なハモリで返す

「代表だぞ馬鹿の」

「嬉しくないっつーの!!!」

あしゅら阿修羅も便乗して面白そうに京助に言う

「馬鹿になれば天才にもなれるんだろう? だから勝負だ!!」 栄

野京助!

あしゅらまだ阿修羅に抱きかかえられたままで鳥俱婆迦うぐばかが長い袖で京助を指

差した

「何で勝負させる?」

「人の意見を聞いてくださいませんかッ!!!」

京助の意見を聞き入れず生徒達が3馬鹿中心に話を進めると京助が抗議した

「…馬鹿だから仕方ないじゃない」

阿部が京助の隣で言う

「あのなッ; って…」

阿部の方を向いた京助の腕を阿部が持った

「…本当に馬鹿なんだから」

擦りむいた京助の傷に阿部がハンカチを巻きながら言う

「バイキン入ると化膿する」

軽く縛って阿部が京助の腕を放した

「あ…お…?;」

少し混乱しているらしい京助が何故かハンカチの色を口にした

「お礼は!!!」

阿部が言う

「あ…ありがとうございます…?;」

どもりながら京助がお礼を言った

「ヨシ!!」

阿部が笑顔で言う

「じゃ：コレでいくか？もうグランド暗いけど外灯つければ見える
だろうし：京助が勝てるっていえば体育だし」

頭を寄せ合った生徒の群れから坂田の声がする

「楽しそうやなあ」

阿修羅あしゅらがそんな生徒達を見て言う

「：何見てるんだ？」

「あ：いや：」

阿修羅あしゅらに抱きかかえられている鳥倶婆迦うぐばかの顔を見ていた緊那羅きんならに鳥
倶婆迦うぐばかが聞いた

「さつき顔から落ちたから：その：大丈夫かなっておもっただけだ
っちゃ：」

緊那羅きんならが苦笑いで答えた

「：お前 緊那羅きんならだろ？」

「ほおよく知ってたなあ」

鳥倶婆迦うぐばかが言う和阿修羅あしゅらが感心したような声を上げた

「知ってるさおいちゃんだって一応【時】にかかわるんだ」
鳥倶婆迦うぐばかが言う

「そだな：お前もかわるんだしな：知ってるわな」

阿修羅あしゅらが鳥倶婆迦うぐばかを下ろしながら言った

「おいちゃん【時】は嫌いだよ」

鳥倶婆迦うぐばかが帽子を直しながら言う

「：みんな笑わなくなるから」

小さく鳥倶婆迦うぐばかが言う和阿修羅あしゅらがふと笑って鳥倶婆迦うぐばかの頭に手を置
いた

「だからおいちゃん：【時】は嫌いだから栄野ってのも嫌い：だ
と思ってた」

「私もだっちゃ」

緊那羅きんならがしゃがんで鳥倶婆迦うぐばかに笑いかける

「私も【時】は大嫌いだっちゃけど京助と悠助は好きだっちゃ。おそろいだっちゃね…えと…ばか…?;」

「鳥倶婆迦だッ!!!」

緊那羅きんならが言々と鳥倶婆迦うぐばかが怒鳴った

暗くなったグラウンド、その一角にできた生徒の壁、そしてその中心にあるのは

「鉄棒かよ;」

京助が本日嫌というだけ授業で回った鉄棒を見て横っ腹を押さえた
「体育馬鹿のお前に合わせてやったんだ感謝しろ」

坂田が言う

「…なんだこれ」

鳥倶婆迦うぐばかが鉄棒を見上げた

「コッチは京助用。おみゃーさんはコッチ」

南が三種ある高さの鉄棒の中で一番低い鉄棒を指差した

「…コレでどうやって馬鹿を決めるんだ?」

鳥倶婆迦うぐばかが聞く

「まあソレをこれから説明するんですよってことで坂田君」

浜本が坂田に自分の拳で作った即席マイクを向けた

「あゝ…コホン…コレより第一回馬鹿キング杯馬鹿決定戦を行ない
ます!」

「ワ—————!!!」

リリリリ…という涼しげな虫の鳴き声が生徒達の拍手と歓声でかき
消された

「黄土色コオオナアゝ!!! 栄野京助ゝ!!!」

「…微妙な色だナアオイ;」

坂田が京助を紹介すると京助が呟いた

「そして群青コオオナアゝ!!! 馬鹿—————!!!」

！」

「鳥倶婆迦だっ！！」
うぐばか

京助と同じく鳥倶婆迦を坂田が紹介すると鳥倶婆迦がキーキー地団太を踏んで怒鳴る

「落ち着けゝばかゝ」

阿修羅あしゅらが笑いながら鳥倶婆迦うぐばかの頭をポフポフと叩いた

「細胞が減るじゃないかッ！ 叩くな阿修羅あしゅら！！ おいちゃんは鳥倶婆迦うぐばかだっ！！」

鳥倶婆迦が喚きながら自分の頭に置かれた阿修羅あしゅらの手を引っぺがそうとする

「まあまあ…ホレ、馬鹿同士握手握手」

阿修羅あしゅらが鳥倶婆迦うぐばかの体を押して京助の方に向けた

「…真面目にすんのかよ…」

京助の顔が引きつった

「一回勝負すれば気が済むっていったからやってやんなさいよ

京助」

阿部が京助に言う

「ルールは簡単！！ 馬鹿でもわかる！！」

坂田が説明をし始めた

「この鉄棒でより多く逆上がりをやった方が体育馬鹿だ！」

鉄棒を手で掴みながら坂田が言う

「また逆上がりかよ…」

京助が溜息をついた

「逆上がり？」

緊那羅きんならが坂田に聞く

「あれ？ ラムちゃん逆上がり知らないんだ」

浜本が坂田を押しつけて緊那羅きんならに聞き返した

「うん…逆上がりって…坂を上るとはまた意味が違うんだっちゃ？」

緊那羅きんならがまた聞く

「あゝ【さか】違いだねえ； ……えっと…京助！！；」

南が京助を見た

「ヘイヘイ； …逆上がりってのはこう…この棒を掴んで…ッ
鉄棒を掴んだ京助の体が空に向かって一周する

「…っと…コレが逆上がり」

一回回って着地した京助が緊那羅きんならの方を見た

「やってみ？」

京助が緊那羅きんならに言う

「…こう…だっちゃ？」

地面を勢いよく蹴った緊那羅きんならが京助と同じように空に向かって一周して着地する

「すげー！ ラムちゃん！！」

浜本が言った

「ラムちゃん何でもできるねえ…料理も上手いし」

南が言う

「…だつてさ」

本間が阿部を肘で突付いた

「り…料理くらいアタシだって…ッ；」

「卵割ると必ず殻が入るのに」

阿部が言いかけるとミヨコが突っ込んだ

「バターを直火で溶かそうとするし」

ミヨコに続いて本間も言う

「剥いた林檎は最初から比べると三分の二くらいになるし」

またミヨコが言う

「い…いいじゃないッ；」

阿部が少し大きな声で言った

「これから上手くなるんだもん；」

そして小声で言う

「胸の大きさは互角だもん；」

阿部が更に小声で緊那羅きんならを見ながら言うきんならと緊那羅と目が合い緊那羅きんならが阿部に笑いかけた

「じゃまず京助いってみよー!!」

坂田が言うきんならと生徒達から歓声が上がる

「負けんなよ馬鹿!」

「やかましいッ! お前らも馬鹿だろうが!...」

鉄棒を掴みながら京助が怒鳴る

「馬鹿だけどキングレベルじゃないし?」

浜本が言うきんならと一同が頷く

「でも馬鹿なんですよ」

本間が言う

「まあねえ」

南が笑った

「何かしろ馬鹿なトコは誰だってあるさ」

中島が言う

「坂田はハルミさん馬鹿」

中島が坂田を指差して言うきんならと坂田がまかせろ!! というカンジで

親指を立てた

「南はあります馬鹿プラス裁縫馬鹿」

今度は南を見て言う

「そうそう! そして浜本は写真馬鹿」

南が浜本に言った

「一つでも馬鹿を作っておかないと疲れるよナア」

京助が言う

「馬鹿って...こう聞くといいものに聞こえるっちゃね」
緊那羅きんならが言った

「だろ?」

京助が笑う

「アンタは栄野馬鹿？」

「なっ！！！」

緊那羅きんならに向けた京助の笑顔を見ていた阿部に本間が突っ込むと阿部が真っ赤になった

「否定しない否定しない」

ミヨコがポンポン阿部の肩を叩いた

「ひ：ひていつてッ！！！」

「声裏返ってる」

阿部が言うとは本間がまた突っ込む

「いいじゃない馬鹿で」

ミヨコが阿部に軽く体当たりをして言った

「で！ ハイ！ 気を取り直して…レッツラ！！」

坂田が鉄棒の柱を叩いて言う

「ヘイヘイ！」

坂田に催促されて京助が地面を蹴った

「お：回る回る」

男子生徒が拍手を شدした

「やるねえ竜のボン」

阿修羅あしゅらが言う

「あんなのおいちゃんだってできるよ」

どこか拗ねた口調で鳥倶婆迦うぐばかが言った

「お！エッライ自信だなばか」

「鳥倶婆迦うぐばかだッ！！」

阿修羅あしゅらが鳥倶婆迦の頭に手を置いて言うのと鳥倶婆迦がキーキー地団太を踏みながら怒鳴る

「でもお前：本当にできるんかい？」

阿修羅が鳥倶婆迦うぐばかに聞く

「簡単だよただ回ればいいんだろう？」

そういうと鳥倶婆迦うぐばかが近くに落ちていた棒つきれでグラウンドにガリ

ガリと何かの式を書き出した

「栄野京助がこう回るってことは…ここに…おいちゃんの…」

長い袖をずるずる引きずりながら鳥俱婆迦うぐはかが式を拡大させていく

「よし！ おいちゃんの計算ではおいちゃんが勝つ！」

鳥俱婆迦うぐはかが嬉しそうに言う

「そっかそか」

阿修羅あしゅらが笑いながら言った

「京助18回！！」

坂田の声がすると生徒の歓声が上がる

「腹痛ツテェ〜；」

京助が鉄棒の下に座った

「大丈夫だっちゃ？；」

緊那羅きんならが駆け寄って声をかける

「出遅れ：」

「うっさいッ！！；」

一歩足を進めたが止まった阿部に本間が言う和阿部が怒鳴った

「ラムちゃん本当京助に付っきりだナァ：俺入り込めないじゃん；」

浜本が口を尖らせた

「まあ：緊那羅きんならと京助はな」

坂田が小さく言った

「ラムちゃんってある意味京助馬鹿なんだよねえ：過保護っていうか」

南が言う

「第二の母？」

中島が言う

「父じゃないよねえ：どう見ても」

南が笑う

「男だけどな」

「ヘッ！？；」

中島が言うとは本が素つ頓狂な声をあげた

「男…って…」

「緊那羅は男」
きんなら

本が聞くと3馬鹿がハモる

「マジで——————！！！！！！？」
「——————————」

本の叫びが夜空に響いた

「まじで…かよ；」

本が緊那羅の方をゆっくり見て言う
きんなら

「嘘ついてなんの特になるっちゅーん；」

坂田が言った

「だって…アレで？；」

本が緊那羅を指差した
きんなら

「ちゃんとしてたよ同じのが」

南が本の股間を触った

「…うわあ…お；」

股間を押さえつつ本が溜息をついた

「…まさかお前…」

中島が本に言う

「本…緊那羅の…」
きんなら

「言うな；」

坂田が言いかけるとソレを本が止めてしゃがみこんだ

「お前 緊那羅好きだったんか…；」
きんなら

「ダァ——————————」

「——ッ！！； 言うなってんだろがっ！！；」

止められてもなお続行して言った坂田に本が怒鳴る

「最悪の結末だねえ；」

南がハッハと笑う

「…しんじらんねー…； …一目惚れだったのによお；」

本が呟くと3馬鹿が同時に本の肩を叩いた

「何盛り上がってんだ？」

緊那羅きんならと共にやってきた京助が3馬鹿に聞く

「いや：ね：強く生きろと：」

中島が遠い目をして答える

「ラムちゃんたら罪なお方」

「へっ?;」

南きんならが緊那羅に抱きついた

「何があったんだ?;」

京助が3馬鹿と浜本を見て聞くと坂田が京助の肩に手を置いて無言で頷く

「はあゝあ：;」

浜本の重い溜息が聞こえた

「オーイ!! 司会者ー!!」

男子生徒が坂田に向かって手を振る

「おー!! 今行くー!!」

坂田が京助の肩から手を離して鉄棒のところまで駆けていった

「じゃ次はばかの番」

「鳥倶婆迦うぐぼかだっ!!」

坂田が一番低い鉄棒の前にいた鳥倶婆迦うぐぼかに向かって言ううぐぼかと鳥倶婆迦が例のごとくキーキー喚きながら地団太を踏んだ

「やり方はわかるよな?」

後から来た京助が鳥倶婆迦うぐぼかに聞く

「わかるさ」

鳥倶婆迦うぐぼかが鉄棒を見上げた

「おいちゃんの計算ではおいちゃんが勝つって答えが出たんだ」
鳥倶婆迦うぐぼかが鉄棒に向かって手を伸ばした

「袖捲くらないとすべるんじゃない?」

阿部が言う

「うるさいなあ：」

鳥俱婆迦うぐぼかが阿部に言った

「かつわいくないなあっ」

阿部がむっとして膨れた

「まま； 許してやってくんれ嬢；」

そんな阿部に阿修羅あしゅらが【スマン】と片手で謝る

「馬鹿になれば天才なんだ」

鳥俱婆迦うぐぼかが鉄棒を掴んで呟いた

「おいちゃんは…」

鉄棒を掴んだ鳥俱婆迦うぐぼかの手に力がこもって足が地面を蹴った
そして宙を蹴ってまわらず地面にまた足が戻る

「…できてないじゃん」

本間がボソツと言った

「な…んで…だっておいちゃんの計算じゃ…」

鳥俱婆迦うぐぼかが声を震わせながら言う

「おいちゃんの計算じゃ…ッ！！」

鳥俱婆迦うぐぼかがまた鉄棒を掴んだ

「簡単に勝てる…て…」

また地面を蹴った鳥俱婆迦うぐぼかの足がやはり回らず地面に戻る

「…勝てるって計算で…でたんだ…」

鉄棒から手を離れた鳥俱婆迦うぐぼかが袖にくるまれている自分の手を見た

「勝負になんねえじゃん；」

生徒の一人が言うとうと生徒達がざわめきだす

「一回もできないんじゃないねえ」

女子生徒が言う

「ダメ駄目」

「京助の勝ちか？」

「そらな…」

ザワザワと生徒達が話し出す

「おいちゃんは…」

鳥倶婆迦うぐばかが自分の手を見たまま止まった

「よっこいしょッ」

「うわっ；」

阿修羅あしゅらがいきなり鳥倶婆迦うぐばかを抱き上げた

「何するんだッ！！；」

鳥倶婆迦うぐばかが怒鳴る

「痛て痛て痛てッ； 暴れなさんなッばかッ；」

鳥倶婆迦うぐばかが手足をばたつかせて怒鳴りその手足が阿修羅あしゅらを攻撃する
ようなカンジになっている

「も一回やってみー？ 手伝ってやつから；」

少し鳥倶婆迦うぐばかから体を離して阿修羅あしゅらが言う

「もう一回…って」

鳥倶婆迦うぐばかがちょうど自分の胸のところにある鉄棒を見た

「手伝いなんて…っ； おいちゃんは…」

「蹴る力が弱ええんだよ…あと腕の力」

京助が言った

「蹴る力…でもおいちゃんの計算では…」

鳥倶婆迦うぐばかが京助を見る

「俺は計算なんかできねえからわからんけど…もう少し強く地面蹴
ってみ？」

京助が地面を踏んで言った

「計算では…」

鳥倶婆迦うぐばかが小さく呟く

「頭で考えるより行動してみたいときもあると思うよん？ ばか」

「鳥倶婆迦だッ！！」

南が言うと鳥倶婆迦うぐばかが怒鳴る

「いーから！ ホレ！ 支えててやつからまずやつてみ？」

阿修羅あしゅらが言った

「…おいちゃんの…」

鳥倶婆迦うぐぼかが躊躇いがちに鉄棒を掴んだ

「ちつがーう；　もち方はこう！！　逆！！」

男子生徒が京助の隣で逆上がりの持ち方をやってみせる

「…こ…う？」

ソレを見た鳥倶婆迦うぐぼかが手のもち方を変えた

「そうそうーそんで…引き寄せて蹴って回るッ！！」

一番高い鉄棒で中島が実践して見せた

「おーやるねえでっかいの」

阿修羅あしゅらが笑いながら言う

「ホレ！　次はばかの番」

中島を見ていた鳥倶婆迦うぐぼかに阿修羅あしゅらが言った

「おいちゃん…こんなの…」

鳥倶婆迦うぐぼかが鉄棒から片手を離れた

「こんなの計算に出なかった…」

「…なあにがさね」

ボソツと言った鳥倶婆迦うぐぼかを抱きなおして阿修羅あしゅらが聞く

「なんで…こんな…構うんだよ…」

聞こえるか聞こえないかの声で鳥倶婆迦うぐぼかが言った

「構いたいからじゃないのけ？」

阿修羅あしゅらがさらっと言う

「だっておいちゃんの計さ…」

ゴス

言いかけた鳥倶婆迦うぐぼかの丁度額の文字に阿修羅が指をつきたてた

「なにするんだッ！！；」

鳥倶婆迦が額を押さえて怒鳴る

「計算計算計算…計算で出るのは計算できるものだけなんでよ？」

ばか

阿修羅あしゅらが言う

「あんなあ…ばか…計算できないものもあるんよ？」

「何…」

鳥倶婆迦を下ろした阿修羅が腰に手を当てた

「ここ？」

阿修羅が自分の胸を親指で刺した

「うっわクッサー；」

ソレを見ていた京助と中島が同時に言う

「うっわヒッド； 竜のボンもでっかいのも；」

阿修羅が言った

「ココってことはアレでしょ？ ハーツ？」

南が指でハートを作った

「気を取り直しまして…いいか？ ばか…ココロっちゅーのは絶対

計算できないんよ」

阿修羅が鳥倶婆迦の胸を指で押して言う

「ココロは十人十色って…人それぞれそしてソレがまた変わってそれぞれ…わからないか？ こんがらっちゃとタカちゃんが変わった

って」

阿修羅が言うとき京助が手を叩いた

「そっか！ 思い出した思い出した【お二方】！！ 慧喜だ慧喜ッ

！！」

京助が言う

「その慧喜だってそうだがや？ 変わったぞ…びっくらすんぞ

ばか」

阿修羅が笑う

「…でも…おいちゃん…計算が…」

鳥倶婆迦が俯いた

「おいちゃん…計算ができなかったら…何もできないんだよ…だから計算…は…」

ペンッ

「な…；」

阿修羅が鳥倶婆迦の頭の上にのせた自分の手の上から鳥倶婆迦の頭を叩いた

「やってみ？」

にーっと笑った阿修羅が鉄棒を指さした

阿修羅の指差した鉄棒を鳥倶婆迦が黙って見る

「おいちゃんはできなかったんだ…」

鳥倶婆迦が俯いて呟いた

「初めてやったんだろ？ できなくてもいいじゃん」

京助が言う

「でも！！ でも：緊那羅はできてたんだ：おいちゃんはできなかったけど…」

そう言った鳥倶婆迦の声は震えていた

「私は…」

いきなり名指しで口に出された緊那羅がうろたえる

「ラムちゃんはラムちゃん！！ アンタはアンタでしょ」

阿部が鳥倶婆迦の顔を覗き込んだ

「アタシだってできるかできないかだもん今も」

「俺なんかできないよ？」

阿部が言うと言も言う

「できなかったから：おいちゃんは天才じゃないんだ：よ…計算も間違ってたし…」

鳥倶婆迦が鼻を吸りながら言った

「違うだろがばか」

阿修羅が鳥倶婆迦の頭を撫で言う

「お前さんが今なりたいてゆーて竜のボンと勝負してるのは何だよ？」

ポフポフと鳥倶婆迦の頭を軽く叩いて阿修羅が聞いた

「……馬鹿…」

鳥倶婆迦が小さく言った

「だろがな？ だからいいんよ」

阿修羅が鳥俱婆迦を抱きあげた

「馬鹿は一発でできなくてもいいんよ。何回も何回もやっていいんだよ…な？」

阿修羅が生徒達を振り返ってニーっと笑う

「まあ：そーいうことにしときますか」

坂田が口の端をあげて笑って言った

「計算一回間違えたってことはお前も馬鹿の秘めたる可能性があるってことだ！ 頑張れー！」

男子生徒が言う

「そー！ 馬鹿になれるなれる！！」

女子生徒も口を挟んだ

「おいちゃんも：馬鹿になれるの？」

鳥俱婆迦が鼻声で聞く

「なれるだろうさー！！ なんとって名前に馬鹿がついてるんだからさ」

京助が笑った

「お！ 上手い事いうなあ竜のボン！！」

阿修羅がカラカラと笑う

「あのね：私はただこんな風に体を動かすのが得意だったただけなんだっちゃ」

緊那羅が鳥俱婆迦に言う

「えと：だから：ばかみたく計算はできないと思うっちゃ；」

苦笑いで緊那羅が言った

「：おいちゃん：みたく？」

鳥俱婆迦が緊那羅を見ると緊那羅が頷いた

「俺もそうだぞ」

京助も言う

「オライもそうさね：小面倒くさいのは苦手なんよな；」

阿修羅が苦笑いを鳥俱婆迦に向けた

「：でもおいちゃん：計算も間違えたんだよ：？」

鳥倶婆迦うぐばかが言う

「：お！： そうだ！： いいかばかよおっく聞けよ？」

阿修羅あしゅらが何かをひらめいたらしく笑顔で鳥倶婆迦うぐばかを見た

「

お前は【計算の天才】じゃなくて【計算の馬鹿】になりやいいんよ」

「おお！！！！！ いいねえソレ！！！」

阿修羅あしゅらが言うと中島が言った

「だからお前はもう立派な馬鹿の仲間になってなさんのよな」

黙って阿修羅あしゅらの話を聞いていた鳥倶婆迦うぐばかが鼻を吸る

「計算：馬鹿：」

そして小さく言った

「ハイ！！ ようこそ馬鹿仲間！」

男子生徒が言う

「おいちゃん：馬鹿になったの：？」

鳥倶婆迦うぐばかが言うと阿修羅あしゅらが笑顔で頷いた

「：じゃこの勝負ってどうなるワケ？」

本間が言うと同がハタと止まった

「：司会者！：！！」

中島が坂田にふる

「ワタクシ、ただ司会進行するだけなのでワツカリツマセーシ」

坂田がエセ外国人口調で答えた

「引き分け？」

「いや：それもどうかと：」

「もういいじゃん；帰ろうよ」

生徒達がザワザワとし始める

「：ばか？」

ふと阿修羅あしゅらが鳥倶婆迦うぐばかに目をやると鳥倶婆迦がどこかを見ていた

「遅かったわね：：って：」

玄関から聞こえた物音を確かめに出てきた母ハルミが目を丸くした

「ただいまだっちゃ；」

緊那羅きんならが苦笑いで言った

「母さん：飯：；」

玄関に倒れこんでいた京助が力なく言う

「んで余ってる布団あったら敷いてほしいんだよな； 竜のカミさ
ん」

阿修羅あしゅらが京助に続いて言った

「ご飯は台所と冷蔵庫に残してるわ：そして：布団ねハイハイ」

阿修羅あしゅらのほうを見てふふっと笑った母ハルミが家の奥に歩いていった
「：寝る時もお面つけてんのかソイツ；」

のらりと体を起こした京助が阿修羅あしゅらの背中を見て言う

「本当に寝てるんだっちゃ？；」

緊那羅きんならが背伸びをして阿修羅あしゅらの背中であぐらで寝ている鳥倶婆迦うぐばかを覗
き込んだ

「まあ：コイツにもいろいろあるんよな：」

阿修羅あしゅらが微笑みながら背中の鳥倶婆迦うぐばかを見る

「誰にだって：イロイロあるわけさね」

少しずり落ちてきた鳥倶婆迦うぐばかの体を持ち直して阿修羅あしゅらが言う

「言えない事言いたくない事出来ない事：いろいろあるわけさ」

阿修羅あしゅらが緊那羅きんならの頭に手を置いてニーっと笑った

「：しっかし：ソイツ意外と根性あんだな」

京助が靴を脱ぎながら鳥倶婆迦うぐばかを見て言う

「うん：凄いいっちゃ」

緊那羅きんならが笑った

「だろ？ オライはコイツのそんなトコ気に入ってるんよな」

「布団準備できたわよ？ 味噌汁あっためてるから食べちゃいな

さい」

阿修羅あしゅらが言い終わると共に母ハルミの声が奥からした

「京助達帰ってきてるの？ ハルミママ」

悠助の声も聞こえる

「さって：飯ッ！」

京助が立ち上がった

「私もさすがにお腹すいたっちゃ；」

緊那羅きんならも靴を脱いで家に上がる

「ちゃんと手洗ってからね？ 阿修羅君あしゅらも一緒に行って手洗ってきなさいな」

母ハルミが京助の脱いだ靴をそろえながら阿修羅あしゅらに微笑んだ

「あんがとさん竜のカミさん」

阿修羅あしゅらが笑って靴を脱ぐ

「その子私が寝かせてくるから」

そう言って母ハルミが鳥俱婆迦うぐぼかを阿修羅あしゅらの背中から抱き上げた

「よいしょ：あらあらお面つけたままなのね」

足で鳥俱婆迦うぐぼかの体を支えて抱き直した母ハルミが鳥俱婆迦うぐぼかのお面顔を見て笑う

「安心して頂戴？ 外さないから」

まさに今何かを言おうとしていたかのような阿修羅あしゅらの方を見て言う
と母ハルミが鳥俱婆迦うぐぼかを抱いて奥へと歩いていった

「：さっすが：だなあ」

阿修羅あしゅらが笑いながら呟くと歩き出した

「やるって：逆上がりをか？；」

中島が聞くと鳥俱婆迦うぐぼかが頷いた

「おいちゃん中途半端は嫌なんだ」

腰に手を当てた鳥俱婆迦うぐぼかが言う

「おいちゃんは馬鹿だから一回で出来なくてもいいんだろう？」

生徒の半数が遅い家路につきはじめ自分達も帰ろうといっていた京助と3馬鹿が顔を見合わせた

「だったらやるんだ：だって悔しい」

鳥俱婆迦うぐぼかが鉄棒を見る

「せっかくの馬鹿なんだからおいちゃんはトコトン馬鹿になるんだ」
鉄棒に向かって鳥俱婆迦うぐばかが手を伸ばした

「…しゃあねえなあ；」

京助が溜息混じりに言うのと3馬鹿も顔を見合わせて笑いながら頷いた
「ココまできたら付き合っていきますわん」

南が鉄棒横の草むらに腰を下ろした

「コーチが必要だろ？」

京助が鉄棒を叩いて言う

「実況中継も」

「いやソレはあんま必要なさげ」

坂田が言うとき中島が突っ込む

「保護者も」

阿修羅あしゅらが笑って言う

「えっと…私は…」

緊那羅きんならも何か言おうとしてるのか必死で考えている

「…お前等…だからどうしておいちゃんにこんなに付き合うんだよ」
鳥俱婆迦うぐばかがボソツと言った

「…どうしてって…付き合いたいから？」

坂田が言うとき一同が頷き緊那羅きんならも一歩出遅れて頷いた

「…ヘンなヤツ等だね」

鳥俱婆迦うぐばかが言う

「だって馬鹿だし」

「そー馬鹿だし」

「うむ馬鹿だし」

「馬鹿だしねえ」

笑いながら京助と3馬鹿が言った

「いいねえー馬鹿って」

阿修羅あしゅらが笑う

「そうだったちゃね」

緊那羅きんならも笑って言った

「阿修羅^{あしゅら}は馬鹿の前か後にヘンタイがきます」

京助が言う

「オイオイ；」

ソレに対して阿修羅^{あしゅら}が遠巻きに裏手でなんでやねん突込みをした

「起きるっちゃー――――――――――ツ

！！！！；」

「いーやーだー――――――――ツ！！
！！；」

朝っぱらから掛け布団の引っ張り合いをしている緊那羅^{きんなら}と京助の声
が京助の部屋から聞こえる

「遅刻するっちゃよッ！！？；」

思い切り布団を引っ張りながら緊那羅^{きんなら}が言う

「後5分ッ！！；」

負けじと布団を体に巻きつけて京助が返す

「京助の5分は5分じゃないっちゃッ！！； 起きるっちゃー――

――――――ツ！！；」

足を踏ん張って緊那羅^{きんなら}が布団を引っ張る

「ホレ！頑張れ！」

部屋の入り口からいきなり聞こえたどちらに向けられたのかわから
ない声援に緊那羅^{きんなら}と京助が揃ってソチラを見た

「阿修羅^{あしゅら}？；」

布団を引っ張ったまま緊那羅^{きんなら}が言う和阿修羅^{あしゅら}がよつと片手を挙げた

「はよさん緊那羅、竜のボン」

部屋に入ってきた阿修羅^{あしゅら}が笑いながら言った

「ばかは？」

そして烏俱婆迦^{うぐぼか}のことを聞く

「あ：ばかならハルミママさんが…」

布団の横に置かれた救急箱

「痛くない？」

ポンポン綿球で母ハルミが鳥俱婆迦うぐばかの手に葉を塗っている

「うん：大丈夫：」

両手の平を出した鳥俱婆迦うぐばかが小さく言った

「こんなにマメが出来るまで頑張ったのね逆上がり：聞いたわよ」

母ハルミが包帯とガーゼを手を持って言う

「だっておいちゃん：馬鹿になったんだもん：だから」

くるくる自分の手に巻かれていく包帯を見ながら鳥俱婆迦うぐばかが言う

「馬鹿に？ あっははは！！ 面白いこというのねえ：アナタ名前
は？」

片手を巻き終えた母ハルミが鳥俱婆迦うぐばかのもう片方の手にも包帯を巻
き始めた

「：鳥俱婆迦：」

鳥俱婆迦が小さく答えた

「そう：鳥俱婆迦君：面白い名前ね」

テープで包帯を止めた母ハルミがにっこり笑う

「こんな可愛い馬鹿なら歓迎するわ？ さあご飯にしましょか：他
に痛いところはない？」

母ハルミが救急箱を片付けながら鳥俱婆迦うぐばかに聞く

「ない：」

鳥俱婆迦がボソツと答えると母ハルミが鳥俱婆迦うぐばかの頭を撫でた

「おばさん頑張り屋さん大好きだけど無理する子はあまり好きじ
ゃないの：わかるかしら？」

そしてお面うぐばかの上から鳥俱婆迦の頬を撫でた

「ね：？」

母ハルミの指が鳥俱婆迦うぐばかのお面を外すと同時に鳥俱婆迦うぐばかが母ハルミ
に抱きついた

「あらあら： おでこ赤くなってるわ：」

泣き声と共に母ハルミの何処となく呆れたような声が和室から聞こ
えた

「ホラ！！ やっぱり5分じゃなかったじゃないっちゃんかッ！！；」

「俺の中では5分だったんだよッ！！；」

ドタドタと廊下を走る音がして京助が玄関に現れるとソレに続いて
緊那羅きんならが弁当箱を手にとってきた

「あっはっは」

阿修羅あしゅらが面白そうに後をついてきて笑う

「いってらっしゃい義兄様」

悠助を見送っていつものごとく玄関にいた慧喜えきが京助に手を振った

「まあ遅刻なの？ 京助」

和室から繋がる縁側で母ハルミが玄関をあわただしく出てきた京助
に言う

「まだ遅刻してねえよッ！！； ってきま…お？」

怒鳴った京助が母ハルミにへばりついている鳥俱婆迦うぐばかを見て止まった

「…お前お面さかさま」

京助が言うとううぐばか鳥俱婆迦が慌てて母ハルミの後ろに隠れた

「ほお…外したんか…ばか」

「うっ…うるさいなあッ；」

お面を直した鳥俱婆迦うぐばかが阿修羅あしゅらに言った

「ホラホラ！！ 本当に遅刻するわよ！？」

立ち止まったままだった京助に母ハルミが大きな声で言う

「うっお！！； ってきまーッ！！；」

「京助弁当わすれてるっちゃんッ！！；」

駆け出した京助の後ろをサンダル履きの緊那羅きんならが追いかけていった

「…どうしたもんかねえ…」

生徒玄関前に出来た生徒の人垣

「っはよさ…んって何してんだ？」

息を切らせて玄関に入ってきた京助が人垣に向かって声をかけた

「いや…忘れてたけど…」

坂田が斜め少し下を指差して言う「京助がその指先を見る

「…：そういうや…：言ってたっけな；」

坂田の指の先には安らかに眠っている生徒達

廊下を見てもあちらこちらで生徒や先生が寝こけている

「丸一日って…：言ってたもんね；」

阿部が言う

「今日一日どうしませう？；」

男子生徒が言った

「どうしませうっても…：なあ？；」

中島が隣にいた京助を見た

「…：なあ？；」

そして京助が振り返り生徒達にふる

「臨時休校」

本間が言うとおそらく一時間目開始と思われるチャイムが鳴った

【第九回・弐】 パッパヤッパー（前書き）

御近所さんからもらった甘酒を飲み酔っ払った緊那羅とコマイヌ
それにヒマ子さんが加わって京助に絡み始めた
途中阿修羅がやってきてそしてゼンゴが何かに気付いて：

ゼンが乾闥婆の背中にかぶさった

「重いんですが」

ゼンを引つpegしながら乾闥婆が言う

「だらしのない；」

迦楼羅かるらが残っていた甘酒をくいつと飲み干した

急に甘酒が飲みたくなつて作ったのはいいが作りすぎちゃつてゝという木村さん宅の奥さんからおすそ分けという田舎近所特有の付き合ひでもらつた甘酒を飲んだのはいいがこの始末

[illegible]

「ガフツ!!!」

醉っているらしき緊那羅が京助に思い切り体当たりをして抱きついた

「痛ッてえ馬鹿!!!」

京助が怒鳴る

た

「だッ！！！」

ゼンとゴが緊那羅と同じように京助に体当たりつぽく抱きついた

「何で俺にくるかッ！！！」

京助が再び怒鳴る

「やははははははははははは！」

ゼンゴが揃って笑う

「ギヤ——————————！！」

何をなさっているの

ですかッ！；」

スパーンというなんとも心地いい音をさせて襖が開きヒマ子が現れた

「いいことなんだやな」

ゼンが京助に抱きつきながら言う

「そうなんだやな」

ゴも続いて言った

「んふふふふふふ」

京助の腰に抱きついていた緊那羅がいきなりまた奇妙な笑いをし始

めた

「キィィ!! お離れになってくださいませんことッ!!」

ヒマ子が鉢をゴトゴトとさせながら京助に近づいてくる

「いやだ っちゃ」

「いや な んだやな」

ゼンゴと緊那羅きんならが揃って言うのと更に京助に抱きつく

「俺を解放しろ!!!; 巻き込むな!!!; 甘酒飲ませろ;」

三人に抱きつかれて身動きの取れない京助が喚いた

「…迦楼羅かるら…何杯目ですか」

乾闥婆けんたつばが鍋から甘酒を酌んでいる迦楼羅に聞いた

「…うまいのだ」

迦楼羅かるらが指についた甘酒を舐める

「…懐かしい味がするのでな。お前は飲まないのか?」

迦楼羅かるらが甘酒を酌んだカップを乾闥婆けんたつばに差し出した

「飲んでみる美味いぞ」

迦楼羅かるらがにっこりと笑顔で言う

「…では…少し」

乾闥婆けんたつばが迦楼羅かるらの差し出したカップに手を添えた

「放れて下さいましッ!!」

「いだだだだだだッ!!!;」

ヒマ子が京助の頭を掴んでコレでもかッというくらいの力を込めて引っ張る

「いやだっちゃッ!!」

「いやなんだやなッ!!」

ソレに対する酔っ払った緊那羅きんならとゼンゴは京助の腰から下を掴み引っ張る

「いてえってんだろがッ!!!;」

京助が怒鳴り暴れる

「：甘いんですね」

そんなギヤースカ騒ぎの横で甘酒を飲んだ乾闥婆けんだつばが一息ついて言った

「美味いだろう？ お前は甘いものが好きだからな」

迦楼羅かるらが言々と乾闥婆けんだつばがどことなくムツとした様な顔になった

「どうせ僕は子供ですから」

乾闥婆けんだつばが淡白に言う

「いや別にそういった意味ではないのだが；」

乾闥婆けんだつばが不機嫌になったとなく感じたのか迦楼羅かるらが慌ててフ

オローらしく言った

「：何処まで行けば貴方に追いつくんですかね僕は」

乾闥婆けんだつばはにっこり笑って言ったが何処と無くやはり不機嫌そうだった

「乾闥婆：わ：」

「よ——————————————————————ッす

！！」

ガラッと今度は窓が開いて阿修羅あしゅらが笑いながら入ってきた

「：どうして貴方といい迦楼羅かるらといい：玄関から入るって事を知ら

ないんですか」

乾闥婆けんだつばが軽く阿修羅あしゅらを睨む

「いっやゝん； だっぱ怖いわゝ；」

阿修羅あしゅらが片足を上げて【キャッ】ポーズで言った

「痛えつつてんだろがッ！！；」

京助の怒鳴り声に迦楼羅かるらと乾闥婆けんだつば、そして阿修羅あしゅらが声の方を見る

「おゝおゝ：モッテモテだな竜のボン」

阿修羅あしゅらが笑って言った

「助ける阿修羅！！；」

京助が言う

「あはははははははは！！」

ゼンゴの笑いに緊那羅きんならも参戦したのか三人が笑い出した

「きい！馬鹿にしてッ！！大和撫子を甘く見ないでくださいましッ！！」

「貴方はひまわりですが」

ヒマ子の言葉に乾闥婆けんだつばが冷静に突っ込む

「突っ込むなら助けろやッ！！！！」

半分ガラパン（今日は緑）をさらけ出した京助がやはり怒鳴って言う

「いいじゃないけ面白いしオライが」

「俺は面白くないんじやッ！！！！」

ハッハと笑っていった阿修羅あしゅらに京助が指差して言った

「しゃあないなゝゝホレホレ緊那羅きんならとワンコ、そんでひまわりの姉さんもそんなにしたら竜のボン分裂すんぞ」

阿修羅あしゅらが言う

「よいせつとゝ」

「何すんだやなゝっ！！」

阿修羅あしゅらがゴを抱き上げて京助から引き離すとゴが阿修羅あしゅらの腕の中で暴れる

「コラコラ；暴れなさんなって」

暴れるゴを阿修羅あしゅらが小脇に抱えた

「はなゝ」

抱えられたゴがいきなり言いかけた言葉を止めた

「…主…」

そして耳をぴんつと立てて匂いを探るように鼻をひくつかせ始める

「ゼン！！」

ゴが今だ京助にへばりついているゼンを呼んだ

「主の匂いするんだやな！！」

ゴの言葉に緊那羅きんならとヒマ子を抜かした一同がゴを見る

「お前達の主…」

迦楼羅かるらが京助に視線を移した

「竜…ですね」

乾闥婆けんだつばも同じく京助を見る

「ヘンタイからするんだやなッ」

ゴがフンフンと阿修羅あしゅらの匂いをかぎだす

「阿修羅あしゅらから…父さんの…って…」

京助が緊那羅きんならとヒマ子に今だ引ッ張られながらも阿修羅あしゅらを見た

「…あっちゃ…」

阿修羅が痛いくらいに注がれる視線から顔をそらした

顔をそらした阿修羅あしゅらに痛い視線が降り注いでからかれこれ数分

「…脱兎ッ!!;」

阿修羅あしゅらがゴを放り投げて駆け出した

「まつんだやなッ!!」

ゼンゴがハモって声を上げると阿修羅あしゅらを追いかけ駆け出した

「ワシらも行くぞ!!」

迦楼羅かるらが立ち上がりゼンゴの後に続く

「わかりました」

乾闥婆けんだつばも迦楼羅かるらに続いて部屋を出て行った

「ちよ…!!; 俺も連れてけ——————————ッ!!;」

「

ヒマ子と緊那羅きんならに引ッ張られながら京助が皆が出て行った戸口に手を伸ばす

「うわぁッ!!;」

バシャ——————————
——————————

悠助の声と水音が玄関先から聞こえた

「悠助!!」

そして慧喜えきの声

「…なんだ?;」

声を音だけを聞きながら京助が開けっ放しの戸口を見た

「…だ: いじょうぶか?; ワンコも竜のボンも…」

阿修羅に飛びつこうとしたゼンゴを阿修羅がひらりとかわしたところ丁度玄関を開けて入ってこようとした悠助に体当たりする形になったらしく:

「大丈夫ですか悠助;」

後から来た乾闥婆けんだつばが慧喜えきに抱き起こされる悠助に声をかけた

「何なんだよもうッ!!」

慧喜えきが振り返って阿修羅あしゅらに怒鳴る

「危ないじゃないかッ!! 悠助に怪我させたらただじゃ済まさないからなッ!!」

本気で怒りながら慧喜えきが阿修羅あしゅらに言った

「いやゝゝハッハッハ;」

阿修羅あしゅらが苦笑いをする

「…ふいっく」

ポタタ: つと水滴の落ちる音と微かなしやつくりと思われる音

グゝログゝロ: と音を立てて地面に転がるのは【國稀】とかかれた地元で作られている地酒の一升瓶

「どうしよう; ハルミママ怒るかなあ…」

転がっていた空の一升瓶を悠助が拾って眉を下げた

「大丈夫だ栄野弟: コイツに謝らせるんな」

泣きそうな顔をした悠助に迦楼羅かるらが言う

「オライかい;」

迦楼羅かるらに親指で【コイツ】と指名された阿修羅あしゅらが自分を指差して言った

パチ: ツ

何かが小さくはじけるような音がした

「…今…何か聞こえませんでしたか？」

乾闥婆けんたつばが言うと同が耳を澄ます

「放せつちゅー————————ん！…！」

聞こえたのは京助の声

「別に…」

パチッパチパチ…ッ

【別に何も聞こえない】と言おうとした迦楼羅かるらが再び耳を済ませる

「…何か…はじけてる…様な…」

慧喜えきが顔を上げて辺りを見渡した

「…ひ…っく」

パチ…ッ

「…っ；」

迦楼羅かるらの体が何かにぴくつと反応した

「…迦楼羅…？」

乾闥婆けんたつばが迦楼羅かるらの異変に気付き迦楼羅かるらを見る

「な…んだ…？；」

迦楼羅かるらが膝をついた

「かるらん…？；」

阿修羅あしゅらも迦楼羅かるらの異変に気付き迦楼羅かるらに近づく

「かるらん…！」

悠助が一升瓶を抱えて迦楼羅かるらに駆け寄った

「ひいっく…」

パシャン…ポタタ…

「ひっく…」

尻尾から水滴を落としつつゼンゴがゆらりと立ち上がった

「いかん！； アレが外で騒いでは…ッ；」
迦楼羅かるらが言う

「いかんのは貴方ですッ！！」
「だっ！！；」

立ち上がった迦楼羅かるらの髪を乾闥婆けんたつばが思いっきり引っ張った

「力がほとんど残っていない状態で行ってどうするのですか！」

乾闥婆けんたつばが言う

「では放っておけというのか！？」

迦楼羅かるらが怒鳴る

「僕が行きます」

乾闥婆けんたつばがにっこり笑って立ち上がった

「一人でか？」

玄関けんたつばに下りた乾闥婆けんたつばに迦楼羅かるらが聞く

「すぐ戻りますよ」

靴を履いた乾闥婆けんたつばが振り返り言う

「やはりワシも行く」

迦楼羅かるらがおぼつかない足取りで玄関けんたつばに下りた

「：足手まといなだけです」

乾闥婆けんたつばがキツパリ言い切った

「まあまあ； 二人とも落ち着いてってん；」

阿修羅あしゅらが乾闥婆けんたつばと迦楼羅かるらの間に割って入って二人をなだめる

「貴方は自分の心配をしてください：僕の心配は無用です」

そう言う乾闥婆けんたつばが玄関けんたつばを出駆けていった

「ちよ…！！； コラ！ 乾闥婆けんたつば！！ 待たんかッ！！；」

乾闥婆けんたつばの後姿に迦楼羅かるらが怒鳴る

「：相変わらずだねえだっばは…」

阿修羅あしゅらが苦笑いで言う

「オライがついて行くからかるらんは休んどり？」

阿修羅あしゅらが迦楼羅かるらに言った

「ワシも行くといっているだろうッ!!」

迦楼羅かるらが怒鳴る

「かるらん大丈夫なの？」

悠助が心配そうに迦楼羅かるらに聞いた

「ワシは大丈夫だ!! …ワシより…」

迦楼羅かるらが乾闥婆けんたつばが出て行った後の玄関を見て顔をしかめた

「行くだけならいいんじゃないの？」

慧喜えきがさらっと言う

「つてもなあ…かるらん…ヘロヘロしてんじゃないけ…」

阿修羅あしゅらが迦楼羅かるらを見て言った

「アンタがおぶっていけばいいんじゃない」

慧喜えきが阿修羅あしゅらを指差して言うのと迦楼羅かるらと阿修羅あしゅらが顔を見合わせた

「…頼んだぞ」

「…頼まれちゃったねえ…」

迦楼羅かるらがにっこり笑って言うのと阿修羅あしゅらもハッハと笑った

「うええええええええええ」

「泣くなッ!!」

下半身トランクス一丁の京助が怒鳴った先には幼稚園児泣きをする
緊那羅きんなら

「勝ちましたわ…!!」

その横でガッツポーズ取るのはヒマ子

「ズボン脱げただけだろがッ! …首が抜けたらアカンだろ…」

どうやら京助綱引きに負けたことが悔しいらしく緊那羅きんならは泣いているらしい

「愛ですわ!!」

ヒマ子が京助を見て叫んだ

「何がだッ!!」

京助が怒鳴る

「…う」

緊那羅きんならが口を押さえて小さく言った「う」に京助が動きを止める

「……オイオイ……； まさか……；」

京助が口の端をひくつかせながら緊那羅を見た

「出る……」

[illegible]

「……待て待てッ！ 出すなッ！！」

叫んだ京助が緊那羅を抱き起こして廊下に出た

「う……え」

「うえじゃね——」

「……」

緊那羅の足を引きずりながら京助が目指すはおそらくトイレ

[illegible]

「うええええええ；」

トイレから聞こえたのは緊那羅ではなく京助の声

「…っ…；なんで俺がもらいゲロ…；」

きんなら
どうやら緊那羅の吐く姿を見て京助も吐き気を催したらしく

「コレって移るんだっちゃん…？」

狭いトイレの右側の壁にもたれながら緊那羅がボソツと言った

「移ってるから吐いてるんだっちゃんよ；」

京助が便座に腕をついて小さくゲップをする

「…何してるの緊ちゃんど…京助…」

少し前の方が濡れているシャツの悠助と慧喜えきがトイレの戸を全開にして中にいた二人に聞く

「…ゲロ吐いてんだよ。」

疲れきつた顔で京助が答えた

「義兄様匂いすっぱい…」

えき
慧喜が鼻をつまんで言う

「具合悪いの？ 京助も緊ちゃんも…大丈夫？」

悠助が京助の背中をさすりながら心配そうに聞いた

「あゝ…大丈夫； 俺はもらいゲロだから；」

京助が悠助の頭を撫でながら言う

「かるらんも具合悪そうなのに大丈夫だったのかなあ…」

悠助が眉を下げて言う

「鳥類が？ …そういやさっき玄関で何してたんだ？」

京助が悠助と慧喜えきに聞く

「あのね…僕がコマとイヌにお酒かけたら大きくなってソレをけんちゃんが追っかけててそのけんちゃんをあっくんにいちゃんとかるらんが追っかけてったの」

悠助が答えた

「…そういやお前酒臭えな；」

京助が悠助のシャツを嗅いで言う

「…って…待てよ…?；」

京助がハタと動きを止めた

「追いかけてった…?」

京助が慧喜えきと悠助に聞くと二人が頷く

「…ただでさえ目立つあの格好で？」

京助が再び聞くと再び二人が頷く

「しかも何だか知らんけどでっかくなった犬二匹を追っかけてった？」

またも京助が聞くとまた二人が頷いた

「……」

そしてしばしの沈黙

「うぶ；」

緊那羅きんならが口を押さえて京助を押しのかた

「お前まだ吐くのか；」

京助が緊那羅きんならの背中をさすりながら言う

「…それって…結構…ヤバイと思うか？」

京助が慧喜えきと悠助に聞くと顔を見合わせた後二人して頷いた

「止まりなさいッ!!」

乾闥婆けんたつばが前を走る大きなコマとイヌに呼びかけたが一向に二匹は止まる気配がない

田舎といえどまだ日中ということでソレ相応に人目がある

そんな正月町民の視線を受けつつ二匹と一人の追いかっこは続いていた

「遅いぞたわけッ!!; 見失ったではないかッ!!;」

阿修羅あしゅらの頭のミョンミョンした飾りを引っ張って阿修羅あしゅらの背中で迦か楼羅らが喚いた

「仕方ないやんけ; オライは飛べないんやし; しかもかるんおんぶってることで遅いんだし;」

仲良くお手々を繋いだ標識は通学路のマークでその標識の横を迦楼羅かるらをおぶった阿修羅あしゅらが走る

「屋根渡ろうにも家少ないから道走るしかないやんけ;」

阿修羅あしゅらが言う上を見上げた迦楼羅かるらが膨れた

「ではもつと早く走らんか!」

そして阿修羅あしゅらの頭のミョンミョンを思い切り引っ張る

「ヘイヘイホウ;」

溜息交じりで返事をした阿修羅あしゅらが強く地面を蹴った

「止まりなさいと言ったでしょう」

電信柱から二匹の前に降り立った乾闥婆けんたつばがにっこりと
(どこことな
く怖い) 笑顔を二匹に向けた

「グルルルル;」

二匹が威嚇と捕らえられるような声を出す

「…見物は結構ですが…怪我をしたくないならば下がっててください

いね」

乾闥婆けんだつばが今度はその笑顔を周りにいた正月町民に向けると正月町民からざわめきが生まれた

「酔っ払いには水をかけて目を覚ますのが一番ですね」

乾闥婆けんだつばが片手を上げると数メートル後ろにあった消火栓からポタタツと水滴が落ちた

「グルルルル…」

乾闥婆けんだつばを見つつ二匹は相変わらず威嚇をやめない

「いきますよ」

乾闥婆けんだつばが二匹を睨んだ

「さっきのやっぱ左だったんやかねー；」

阿修羅あしゅらがボソツと言う

「迷ってるではないかたわけッ！！；」

迦楼羅かるらがスパンッと阿修羅あしゅらの頭を叩いた

「仕方ないやんけ；　オライはコッチにまだ慣れ親しんでおらんきにー；」

阿修羅あしゅらが言う

「そんな言うならかるらんがだっぱの宝珠の力探ればいいやんけ」

阿修羅あしゅらが言う迦楼羅かるらが一瞬黙った後軽く手を叩いた

「どうしてソレを早く言わんのだたわけッ！！；」

そして阿修羅あしゅらの頭あしゅらのミョンミョンを再び引っ張り怒鳴る

「やっぱりなんにしろオライが悪いのかーい；」

頭あしゅらのミョンミョンを引っ張られながら阿修羅あしゅらが言った

「私も行くっちゃッ！！」

「そんなヘロケソ状態で来てどーすんだッ！！；」

緊那羅きんならが言う京助が倍の大きさの声で返した

【解説しよう。ヘロケソとはヘロヘロに疲れている、または力が入

らない、というようにいつもの元気がないぞという時に使う。また外見が弱々しいときにも使ったりする用語である】

「勝手についていくからいいっちゃッ!!」

強く言った緊那羅きんならが一步京助の前に出て速攻よろけた

「：駄目駄目じゃん；」

そんな緊那羅きんならに京助がボソツと突っ込む

「だあから!； お前は悠と慧喜えきと留守番してろって」

脱がされたズボンをはいた京助が緊那羅きんならに言う

「嫌だっちゃッ!；」

壁に手をついた緊那羅きんならが京助に向かって怒鳴る

「緊ちゃん大丈夫なの？」

悠助が緊那羅きんならに聞く

「大丈夫だっちゃッ!！；」

よろよろと立ち上がりながら緊那羅きんならが言う

「大丈夫そうには見えないよ」

慧喜えきが言うきんならと緊那羅が慧喜えきをキツと見た

「大丈夫だっちゃッ!！； 私きんならは京助と行くんだっちゃッ!！」

何が何でもついていく気の緊那羅きんならを見て京助が溜息を吐いた

「：しゃあねえなあ；」

京助が頭をかきながら言う

「何だってソコまでついてきたいよ：ホレ； シャキツとしろシャ

キツと」

京助が緊那羅きんならの脇の下を持って立たせた

「私は京助をま：ッ；」

言いかけた緊那羅きんならが口を押さえて俯く

「：悠； 洗面器持ってきて来い；」

京助が悠助に言った

「あっちだ!！」

迦楼羅かるらが叫んだ

「どっちッ!?!;」

阿修羅あしゅらも言う

「だからあっちだと言っているだろう!!」

再度 迦楼羅かるらが言う

「だから!!; どっちだっつの!!;」

そしてまた阿修羅あしゅらも言う

「あっちだと言っているではないかたわけッ!!」

怒鳴りながら迦楼羅かるらが阿修羅あしゅらの頭のミョンミョンを引っ張る

「あっち言われても見えないんだからどっちかわからんきに!!;」

阿修羅あしゅらが走りながら言った

「犬は犬らしく言う事を聞いてください!!」

振り下ろされた大きな前足を避けつつ乾闥婆けんたつばが言う

「クルルルル：カッフッ」

喉を鳴らした後コマの方がゲップをした

「ッ;; 酒臭い;;」

乾闥婆けんたつばが顔をしかめて腕で鼻をふさぐと見物していた正月町民も酒臭さからか手で仰いだりしている

「あははははははははは!!」

そのコマの後ろでイヌが笑う

「：何だか腹立ってきました：」

笑い転げるイヌを見た乾闥婆けんたつばがあからさまに不機嫌だという顔をする
「水でも被って反省しなさいッ!!」

バシャー————————————————————
——!!!!

乾闥婆けんたつばが腕を空に上げると消火栓から勢いよく水が噴出した
「冷たいのは嫌なんだやなッ!!」

さっきまで笑い転げていたイヌが立ち上がり迫りくる水を睨む

「ウオオオオオオオオ——————————！！！」

イヌの遠吠えが響き渡り青い光の壁が二匹の前に現れた

「甘いですよ！！！」

言った乾闥婆けんだつばが手を返すと水が壁すれすれを上り上からコマとイヌに降りかかる

「おおおお！！！」

見物していた正月町民から歓声が上がった

「水芸！！ 水芸！！」

「いいぞー！！！」

「何これ？ 何かのキャンペーン？ 猛獣ショー？」

歓声の中から聞こえるそんな声を気にもせず乾闥婆けんだつばが再び手を返した

「今なんか聞こえなかったか？ かるらん」

足を止めた阿修羅あしゅらが背中の迦楼羅かるらに聞いた

「…あっちからだな」

迦楼羅かるらが言う

「またアッチが始まったナア；」

阿修羅あしゅらがハッハと笑う

「あっちって本当どっち；」

阿修羅あしゅらが迦楼羅かるら（かるら）に聞く

「…こっちだ」

迦楼羅かるらが答えた

「…：かるらん…：；」

阿修羅あしゅらががっくりと肩を落とした

「ではどう答えればいいのだ！！；」

迦楼羅かるらが阿修羅あしゅらの頭のミョンミョンを引っ張って怒鳴る

「イロイロあるんでしょが； 右ーとか木の立ってる方とかさあ；」

阿修羅あしゅらが言った

「…最初からそうしてくれと言えば良かったではないか！ たわけ

ッ！！」

しばし間を置いてから迦楼羅^{かるら}が阿修羅^{あしゅら}の頭のミヨンミヨンを引っ張りつつ怒鳴る

「やあっぱオライが悪いんかい；」

阿修羅^{あしゅら}が溜息を吐きながら言った

ポタポタと水滴が水溜りに落ちる

「どうです？ 少しは目が覚めましたか？」

乾闥婆^{けんたっぱ}がにっこりと笑顔を向ける先にはビシヨ濡れになったコマとイヌの姿

「やりやがったんだやな；」

ブルルツと体を震わせて水気を飛ばしたイヌが乾闥婆^{けんたっぱ}を見た

「冷たかったんだやな」

コマも同じく体を震わせて水気を飛ばすと乾闥婆^{けんたっぱ}を見る

「：まだ足りませんか？」

乾闥婆^{けんたっぱ}が二匹を睨むような笑顔で見る

「仕返しするんだやな」

二匹が威嚇ポーズをとった

「：やりますね」

ヒラヒラと宙を舞っている薄水色の布を見て乾闥婆^{けんたっぱ}が言った

「今は褒められても嬉しくないんだやな」

コマが前足の爪^{けんたっぱ}についていた薄水色の布を払いながら言う

よく見ると乾闥婆^{けんたっぱ}の背中に結んであった布が千切れていて背中も少し服が切れうっすらと赤くなっていた

「あの人だからはもしかしくて：もって：何やって：；」

ようやくソレっぽい騒ぎにたどり着いた阿修羅^{あしゅら}が言葉を失った

「どうしたのだ；」

阿修羅^{あしゅら}の背中から迦楼羅^{かるら}が聞く

「何で戦ってるんかいな；」

阿修羅が呆然とした口調で返す

「な…ッ？；」

阿修羅の言葉に迦楼羅が身を乗り出すと目の前の人垣の間から見えたのは顔をゆがめながら後ろに飛ぶ乾闥婆の姿と乾闥婆に牙をむく二匹の大きな犬

聞こえるのは拍手と喝采と野次、そして興奮していると思われる攻撃的な唸り声

「だっ…だッ…！！；」

乾闥婆の元に駆け出そうとした阿修羅の頭を踏み台にして迦楼羅が飛んだ

「おおおお！！」

「凄い凄い！！」

突如大きくなった正月町民の歓声に乾闥婆が顔を上げる

「か…」

そして目を見開いてそのまま止まった

「

かるらのいいトコどり…；；」

地面にうつ伏せになったまま阿修羅が呟く

「退かんかッ！！」

迦楼羅の声が響くと一瞬コマとイヌがすくみ上がった

「何をしているのだお前等は！！」

乾闥婆の前に降り立った迦楼羅が二匹を睨みながら言う

「何をしてるのだけは貴方の方ですッ！！」

「だっ…！！；」

乾闥婆が迦楼羅の髪を思い切り引っ張って声を上げた

「何をするッ…！！；」

「何でしたんですか…！！」

迦楼羅かるらが怒鳴ると乾闥婆けんたっぱも負けじと言った

「貴方から力を吸い大きくなったということは貴方がココに来ればまた力を吸われることになるんですよ!？」

「いだだだッ!!!;」

乾闥婆けんたっぱが今度は両方の髪を引っ張って言う

「仕方なかるうッ; 心配だったのだッ!!!」

「僕の心配は無用だと言ったはずですッ!!!」

「しかし心配だったのだと言っているではないかッ!!!;」

「しかしでもカカシでもありませんッ!! 貴方は自分の心配をしてくださいッ!!!」

ギャーギャーと言い合いをはじめた二人に正月町民からざわめきが起こり始めた

「何? ドラマの撮影だったの?」

「猛獣ショーじゃなく?」

「そういえばあのでかい犬話してた気がする」

「最近の技術は進んでるね」

等という気の抜けた話し声が聞こえてきた

「ただでさえ貴方はッ!!!」

乾闥婆けんたっぱが言いかけて顔をゆがめた

「:けん:」

「下がっててくださいッ!!!!!!;」

「だあッ!!!;」

乾闥婆けんたっぱに声をかけた迦楼羅かるらの服を掴み乾闥婆けんたっぱが迦楼羅かるらを放り投げた

「口喧嘩は終わったんだやな?」

イヌが乾闥婆けんたっぱに聞く

「ええ:」

乾闥婆けんたっぱが立ち上がって笑顔を向けた

「:おかえりかるらん;」

うつ伏せに地面に倒れたままの阿修羅あしゅらが自分の背中に字のごとく飛

んで帰ってきた迦楼羅かるらに言う

「乾闥婆けんたつばめ：まったく可愛げのない；」

迦楼羅かるらがボソツと言った

「まあ：だっぱの気持ちも：わからんではないんだけどなあ…；」

阿修羅あしゅらが頬杖について言う

「心配するなという方が無理なのだ：ツ！！」

「ガフツ！！；」

反動をつけて飛び起きた迦楼羅かるらの踵が阿修羅あしゅらの後頭部に直撃した

「いつまで寝ている気だ！！ たわけツ！！」

再び人だかりに向かいながら迦楼羅かるらが阿修羅あしゅらに怒鳴る

「：ういっさー：；」

阿修羅あしゅらがのらりと起き上がった

「退けッ！！」

迦楼羅かるらが人垣に向かって怒鳴ったが完全無視をされた

「：っ：退けと：」

迦楼羅かるらがフルフルと震え出した

「退けと言って…！！！！」

「だあッ！！； かるらんスト——————————」

「——————ップツ！！；」

小さく炎の出た迦楼羅かるらの口を阿修羅あしゅらが慌てて手でふさいだ

「はにほふふ！！！！；」

口を塞がれたまま迦楼羅かるらが阿修羅あしゅらを睨む

「ココで火ィ吐いちや後々だっぱにしかられんでしよ；」

阿修羅あしゅらが言うけんたつばと迦楼羅かるらが目をそらした

「しかし乾闥婆けんたつばが…！！」

阿修羅あしゅらが手を離すと迦楼羅かるらが言う

「まあ：退かぬなら飛んで行け行け諦めず」

「は？；」

阿修羅あしゅらがにっこり笑って迦楼羅かるらを持ち上げた

「何をする気だ…;」

何だか嫌な予感がするらしい迦楼羅かるらが阿修羅あしゅらに聞く

「いってらっさい」

阿修羅あしゅらがにっこり笑って片足を上げた

「…キタロウ袋持ってきて正解だな;」

電信柱に手をついて紙袋の中に更にビニール袋を重ねた袋を口に当てている緊那羅きんならの背中をさすりながら京助が言った

【解説しよう。「キタロウ袋」とはその名のとおりの『ゲゲゲの〜』

…いわばゲロ袋のことである。作り方としてはゲロが見えないよう紙袋でビニール袋を覆うというただそれだけの代物なのだが中身だけ替えればまた使えるという画期的な物である。主に学校行事でバスで長距離移動というときに活躍をする】

「…一体どこにいるんだっちゃ…;」

涙目で緊那羅きんならが呟いた

「まあ…騒ぎがあるところにいるってことは間違いないだろうナア;」

京助が頭をかきながら言う

「早く見つけねえと…;」

緊那羅きんならが立ち上がると京助が歩き出した

「…京助ソレなんだっちゃ?」

緊那羅きんならが京助が手に持っている袋を見て聞く

「コレ? 最終兵器」

京助が袋を緊那羅きんならに見せた

「最終…兵器?;」

緊那羅きんならが袋をまじまじと見る

「どっちにしろ見つけないことには始まらないし…最終も何もあつたもんじゃないからナア;…走れるか?」

京助が緊那羅きんならに聞くと緊那羅きんならが頷いた

「…阿修羅あしゅらめ…」

フサフサの毛の上で迦楼羅かるらが口の端を引くつかせて呟いた
「痛かったんだやな」

コマが言った

「…貴方という人は…ッ」

コマの背中から飛び降りた迦楼羅かるらを乾闥婆けんたつばがキツと睨んだ

「どうして…!!」

「たわけッ…!!」

乾闥婆けんたつばの声より数倍もの大きさで迦楼羅かるらが怒鳴った

「ワシの隣を歩きたいならばワシもお前の隣を歩かせんかッ!!」

「痛ッ…!!」

迦楼羅かるらが乾闥婆けんたつばのピョン毛を引っ張った

「何するんですかッ…!!」

「だッ…!!」

負けじと乾闥婆けんたつばも迦楼羅かるらの前髪を引っ張る

「隣というのは一緒に歩いているからこそだろうがッ!! 一人で

歩いては…」

「迦楼羅かるらッ…!!」

迦楼羅かるらが言っていた言葉の途中 乾闥婆けんたつばが叫んだ

「下がれッ!!」

迦楼羅に振り下ろされようとした爪の主であるコマに迦楼羅かるらが声を
張り上げて言うとかマがビクッとした後爪を止めた

「ワシに勝てると思うか」

迦楼羅かるらがコマとイヌを横目で見ると

「勝てると思うならば来るがいい」

「何言ってるんですかッ!!」

「だッ…!!」

迦楼羅かるらが言うけんだっぱと乾闥婆けんたっぱがまた迦楼羅かるらの髪を引っ張った

「貴方は：貴方は自分の：ッ！！」

迦楼羅かるらの髪を引っ張る乾闥婆けんたっぱの手がかすかに震え始めた

「ッ：自分の心配をしていてくださいッ！！」

「いだだだだッ！！」

乾闥婆けんたっぱがコレでもかっという力で迦楼羅かるらの髪を引っ張った

「抜けたらどうする気だたわけッ！！」

よほど痛かったのか迦楼羅かるらが涙目で乾闥婆けんたっぱに怒鳴った

「また生えてくるのを待てばいいだけのことです…」

乾闥婆けんたっぱが迦楼羅かるらの髪から手を離れた

「：抜けても今の髪を同じ長さになるくらい：それ以上に僕は貴方に…」

ぐきゅるるるるるるるる：

乾闥婆けんたっぱの声が段々と小さくなっていくのと反比例して大きく響いた

迦楼羅かるらの腹の虫の声

「でかっ…」

そして誰がが言うのと同時に迦楼羅かるらの体がふらついた

「迦楼羅！！！！」

乾闥婆けんたっぱが迦楼羅かるらの体を支えて声をかける

「大丈夫だ； …少々腹が…」

きゅうううううう：

切ない腹の虫の声が迦楼羅かるらの声より数倍大きく鳴いた

「だから下がっていてくださいと言ったんですッ」

乾闥婆けんたっぱが言う

「だから心配だったんだと言って…！！」

ぐうううううう：

迦楼羅かるらが何か言う度に一緒になって腹の虫も鳴く

「相変わらず体に似合わず豪快な音なんだやな」

イヌが言った

「誰のせいですか」

乾闥婆けんたつばが二匹を睨んだ

「ゼン等はべつになにもしてないんだやな」

コマがさらっと言うと乾闥婆けんたつばがさっきよりも目つきを鋭くして二匹を見る

「そうなんだやなく勝手に力が流れ込んでるだけなんだやな」

イヌも言う

「…お：落ち着け乾闥婆けんたつば…」

自分を支えてくれている乾闥婆けんたつばの手に力がこもり始めるのを感じた
迦楼羅かるらが乾闥婆けんたつばを宥めた

「…もう一回水を被りたいですか…？ それとも…」

いつの間にか乾闥婆けんたつばの周りを二つの布が飛び始めていた

「それとも…なんなんだやな」

コマが聞く

「待て！！； 落ち着け乾闥婆けんたつば！！；」

ピシ…ピシッ…

という何かにひびが入るような音がすると正月町民がなんだなんだと辺りを見渡し始めた

「でっかッ！！；」

突如聞こえた聞き覚えのある声が響くとハッとした一同が声の方向を見た

「ホッホ…； 成長期かいな；」

人垣を掻き分けてきたのは京助と緊那羅きんならそして阿修羅あしゅら

「本当に：大きいっちゃね…；」

緊那羅きんならが二匹を見て呟いた

「つか何してんだ…って怪我してんじゃんお前…；」

京助けんだっぱが乾闥婆けんたっぱの背中を見て言った

「何！？」

迦楼羅かるらが目を見開いて乾闥婆けんたっぱを見た

「かすり傷です…心配には及びません」

乾闥婆けんたっぱが言う

「何故黙っていたのだ…！ たわけッ…！ 見せてみる…！」

迦楼羅かるらが立ち上がり乾闥婆けんたっぱの背中を見ようと乾闥婆けんたっぱの後ろに回る

「大丈夫です」

そんな迦楼羅かるらに背中を見せまいとするかのように乾闥婆けんたっぱが向きを変えた

「見せてみる…！ いるだろう…！ たわけッ…！」

負けじと迦楼羅かるらが乾闥婆けんたっぱの後ろに回る

「大丈夫だといっているんですッ…！」

対する乾闥婆けんたっぱも見せまいとまた向きを変えた

「大丈夫なら見せんかッ…！！」

「大丈夫だから見せないんですッ…！」

迦楼羅かるらが怒鳴ると乾闥婆けんたっぱも声を張り上げた

「…漫才だナア；」

京助がボソツと呟いた

「…とうか…どうして乾闥婆けんたっぱが怪我したんだっちゃ？」

緊那羅きんならが言うのと正月町民の視線がコマとイヌに向けたれた

「…お前等がやったんか？；」

京助がコマとイヌに聞く

「やったというか…仕返ししたただけなんだやな」

コマが言うといヌが頷いた

「仕返し…！」

京助が乾闥婆けんたっぱを見た

「酔っ払いの目を覚ますために水をかけたまでのことです」

迦楼羅けんだっぱから背中を隠しつつ乾闥婆が答えた

「冷たかったんだやな」

イヌが言う

「水なのだから当たり前でしよう」

乾闥婆けんたっぱが言う

「まま…； 双方落ち着いて…ようは仕返しでこうなったんだきに？」

阿修羅あしゅらが言う

「仕返し…というかこの二匹が止まらなかったのが…」

乾闥婆けんたっぱが二匹をチラッと見た

「追いかけてくるから逃げただけなんだやな」

コマが答えた

「勝手に酔っ払って飛び出したのは貴方達でしょう」

乾闥婆けんたっぱがにっこりと笑って言う

「勝手に酔っ払ったんじゃないんだやな！！ アレは…」

イヌが言いかけて言葉を止めると何かを思い出したのか阿修羅あしゅらを見た

「アレは…？」

正月町民も含めその場にいた一同がイヌの次の言葉を待っている

「…アレは主の…」

イヌが小さく言うと言がぐらついた

その後ろでコマのが倒れた

「お…おいッ！！；」

京助が倒れたコマに駆け寄り体を揺さぶった

「どうしたの？；」

「アレ神社の…」

ザワザワと正月町民がざわめきだした

「…ハイッ！！」

パンっという手を叩いた音と阿修羅あしゅらの声がざわめきを一刀両断した
「練習終わりッ!!」

「へ?;」

阿修羅あしゅらが言うのと京助と緊那羅きんなら、そして乾闥婆けんたつばと迦楼羅かるらがきょとんとした顔で阿修羅あしゅらを見た

「お騒がせしまして…ホレ! 撒収!!」

阿修羅あしゅらが倒れたイヌの前足を肩に担いだ

「あ…ああ?;」

京助が疑問系のようなそうでないような微妙な返事を返すと緊那羅きんならと顔を見合わせて首をかしげる

「通行の邪魔だろが? 急げや急げ?」

ズルズルをイヌの足を足を引きずりながら阿修羅あしゅらが振り返って言う
「…俺が運ぶのか?; やっぱ…コレ;」

京助が倒れているコマを見下ろして呟いた

「私も手伝うっちゃ;」

緊那羅きんならがコマの右前足を肩に担いだ

「はあゝあ;」

京助が溜息をつきながらコマの左前足を肩に担いで歩き出した

「んだば!!」

阿修羅あしゅらがぼかんとしている正月町民に片手を上げてハッハと笑った

「大丈夫ですか迦楼羅かるら」

乾闥婆けんたつばが迦楼羅かるらに聞きながら立ち上がった

「ソレはワシの台詞だ!!」

すっと立ち上がった迦楼羅かるらが乾闥婆けんたつばに言う

「僕の心配は無用と言った筈ですよ」

乾闥婆けんたつばが言った

「…ちよいまち緊那羅きんなら」

そんな二人のやり取りを聞いた京助が足を止めて着ていたパーカーを脱いだ

「ちょ…； 重ッ；」

さすがに一人では巨大化したコマを支えるのが無理だった緊那羅きんならが膝をつく

「ホレ」

「え…あ…」

バフッと頭にパーカーをかけられた乾闥婆けんたつばが驚いて京助を見た

「見せたくないんだろ？」

京助がそう言い残して緊那羅きんならの元に戻って行く

「あ…りがとうございます…」

乾闥婆けんたつばが京助の背中に向かって小さく言った

「…行くぞ」

迦楼羅かるらが不機嫌そうに言う

「何怒ってるんですか」

乾闥婆けんたつばが聞きながら足を進める

「怒ってなどおらん!!」

ぎゅきゅうううう…

「怒ってるじゃないですか」

「怒っていないと言っているだろう!!」

きゅうううううう…

「怒ってます」

「ない!!」

きゅるるるるる…

ギャーギャーと一方的に迦楼羅かるらが声を上げては一緒になって鳴く腹の虫に乾闥婆けんたつばがさらっと返すという口喧嘩あらしきことをしながら阿修羅しゅらと京助達の後に続く乾闥婆けんたつばと迦楼羅かるらを正月町民はただ見ていた

「…なんだったんだ？」

一人のオッサンがボソツと言った

「悪酔いですね」

元のサイズに戻ってはいるものの青い顔をしている二匹を見て乾闥婆けんたが言った

「酒が入っているのにあんなに暴れる走るをすれば酔いがまわりますよ」

京助のパーカーを羽織ったままの乾闥婆けんたがコマの頭を撫でた

「気持ち悪いんだやな…」

イヌが言う

「吐けば楽になるっちゃ」

「経験者は語る」

緊那羅きんならが言っていると京助がすかさず突っ込んだ

「お水持ってきたよ」

悠助と慧喜えきがボウルに水をくんで部屋に入ってきた

「コマもイヌも大丈夫？」

コマとイヌの傍にボウルを置いた悠助が心配そうに聞く

「しばらく休めば酒が抜けます大丈夫ですよ」

乾闥婆けんたがにっこり笑って言う

「よかったあ…」

悠助の顔がほころんだ

「…かるらなんで怒ってるの？」

顔を上げた悠助が部屋の隅っこでむすっとした顔をしている迦楼羅かるらに聞く

「怒ってなどおらん!!」

迦楼羅かるらが必要以上の声で返すと悠助がビクツとした後眉を下げた

「あ…」

悠助の表情の変化に気付いた迦楼羅かるらがおたおたと慌てだした

「お…怒ってはいな…」

慧喜えきに抱きしめられた悠助を見た後の乾闥婆けんたと慧喜えきの視線が迦楼羅かるら

に向けられた

キュツと音をさせて緊那羅きんならが洗面所の蛇口を閉めた

「ふう…;」

顔を上げると鏡に映った自分の顔を黙って見た後、後ろに映る阿修羅あしゅらに気付いて緊那羅きんならが振り返る

「緊那羅手えだし？」

口をぬぐう緊那羅きんならに阿修羅あしゅらが近寄って言う

「手…だっちゃ？」

拭って濡れている手を手拭タオルで拭くと緊那羅きんならが手を出した

「なくすなよ？」

そう言った阿修羅あしゅらが自分の首に巻いていた布の先についていた飾りを外して緊那羅きんならに手渡した

「これ…」

手渡された飾りを緊那羅きんならがまじまじと見る

「お前が時期見て竜のボンに渡したってくりやれ」

阿修羅あしゅらが緊那羅きんならの手の中の飾りの玉の部分を突付くと玉が割れて中には

「金色の…かけら…？」

中にあった玉のかけらのような小さな物体を見て緊那羅きんならが言った

「宝珠のかけら」

阿修羅あしゅらが言うと緊那羅きんならが顔を上げた

「オライから渡すよりお前からのほうがいいんじゃないかって」
阿修羅あしゅらが再び玉をしめた

「竜の忘れモン…なんよなコレ…」

「阿修羅あしゅら…もしかして全部知って…るんだっちゃ…？」
飾りごと玉を握らされた緊那羅きんならが阿修羅あしゅらに聞く

「ああ…知ってんよ…知ってたんきに…竜のボン等がまだ目覚めない理由も竜のことを何も覚えていないであやふやな理由も…オライは全部見てきたからな」

阿修羅^{あしゅら}が苦笑いで答えた

「でも教えられんのよな」

緊那羅^{きんなら}の頭に手を置いた阿修羅^{あしゅら}が言う

「ソレが竜との約束なんよ」

クシヤッと緊那羅^{きんなら}の頭を撫でた後 阿修羅^{あしゅら}が手を離した

「でも：これ：よく迦楼羅^{かるら}とかに見つからなかったっちゃね」

緊那羅^{きんなら}が飾りを見て言った

「特別結界：竜しか出来ない上級ワザかかってんよソレ：だから焦ったんよな；； ワンコ達に感じ取られたときは；」

ソレと阿修羅が玉を指差した

「：任せるぞ緊那羅^{きんなら}」

阿修羅^{あしゅら}がいつもはなかなか見せないんじゃないかという真面目な顔を緊那羅^{きんなら}に向けた

「お前が竜のボン等を【時】から守るんよ：竜の代わりに」

緊那羅^{きんなら}が強く頷いた

「：何してんだ鳥類；」

救急箱片手に部屋に入ってきた京助が座布団を頭に被って背中を向けている迦楼羅^{かるら}に声をかけた

「：気のせいだ」

迦楼羅^{かるら}が言う

「何がだよ； 何グレてんだお前；」

救急箱を床に置きながら京助が利く

「放っておきなよ義兄様！ 迦楼羅^{かるら}が悪いんだ」

慧喜^{えき}が怒った口調で言う

「違うの！ 違うの京助！！ 僕がね：っ」

慧喜^{えき}に抱きしめられていた悠助が口をはさんだ

「：何あったんだかしんねえけどさあ：；」

溜息をついた京助が乾闥婆^{けんたつば}を見た

「：なんですか？」

乾闥婆けんだつばが言う

「背中見せてみる」

「嫌です」

京助が言うけんだつばと乾闥婆が笑顔で即答した

「背中じゃいくらお前でも自分じゃ無理だろが；」

京助が救急箱の蓋を開けて消毒といえはマキロンを取り出した

「大丈夫だといっているんです」

乾闥婆けんだつばが羽織っているパーカーの前を握った

「誰も脱げて言ってるわけじゃねえだろが； 傷を見せてみろってんだよ…消毒だけ」

京助が言う

「…けんちゃん…ちゃんと消毒しないとバイキンはいっちゃうよ？」
悠助が心配そうな顔で乾闥婆けんだつばを見た

「…わかりました…」

乾闥婆けんだつばがパーカーを脱いで背中を京助に向けた

「…どこがかすり傷だたわけッ！…」

傷を見た迦楼羅かるらが座布団を掴んで立ち上がり声を上げた

「痛そう…」

悠助が泣きそうな顔で傷を見る

「少し捲くっていいか？ 服」

京助が聞くと乾闥婆けんだつばが小さく頷いた

「あ…コレ…一回風呂はいったほうがいいかもしれない…血が固まって…」

傷の周りにこびりついている血の塊をそっと触った京助が言う

「ソレかお湯でふき取るか…どっちにしる沸かさねえとな」

京助が立ち上がった

「ワシがやる」

立ち上がった京助に迦楼羅かるらが言った

「ワシがやるって…何をだよ」

京助が戸に手をかけたままで聞く

「手当てだ」

迦楼羅かるらが言った

「できるの？」

慧喜えきが疑うような目で迦楼羅かるらを見た

「：ワシがやるのといったらやるのだッ！！」

「むやみに大きな声を出さないでくださいッ」

「だっ！！；」

怒鳴るように言い返した迦楼羅かるらの後ろ髪を乾闥婆けんたっぱが引っ張った

「：ありがとうございます」

髪は引っ張ったままで乾闥婆けんたっぱが言う

「：わーったよ； とにかくお湯だなお湯」

京助が口の端を上げて言うのと部屋を出て行った

「俺達も行こうか悠助」

慧喜えきが悠助に言う

「でも僕けんちゃんが心配：」

悠助が乾闥婆けんたっぱを見ると乾闥婆けんたっぱがにっこり笑った

「ありがとうございます悠助：僕は大丈夫です：だからすいません

：少しだけ席を外してくれませんか？」

乾闥婆けんたっぱが言うのと少し考えた後悠助が頷いた

「すまん：栄野弟」

迦楼羅かるらも言う

「ううん：いいのけんちゃんもかるらんもかるらんとけんちゃんが

大事なんだね」

悠助が笑いながら言った

「え：：？」

「そうだぞ」

悠助の言葉に乾闥婆けんたっぱと迦楼羅かるらがそれぞれの反応をした

「僕も慧喜えき大事なの」

悠助が言うのと慧喜えきが嬉しそうに笑う

「乾闥婆は大事だ」
けんたっぱ

迦楼羅かるらが言うのと乾闥婆けんたっぱが眉を下げた後俯きそして顔を上げる

「…そうですね…大事です」

小さく乾闥婆けんたっぱが言った

「洗面器…洗面器…」

廊下から「アミダババァ」の替え歌を歌っている京助の声が聞こえた
「おつまた」

京助が足で戸を開けて部屋に入ると持ってきたヤカンと水の入った洗面器とタオルを床に置いた

「コレで温度調節して丁度よくしてやりよ？」

京助がヤカンを指差して迦楼羅かるらに言う

「わかった」

迦楼羅かるらが頷く

「ありがとうございます京助」

乾闥婆けんたっぱがお礼を言った

「じゃ…なんかあったら呼べよ？」

京助が言いながら立ち上がり開けておいた戸から廊下へ出ると悠助と慧喜えきも続いた

湯気の立つ洗面器に乾闥婆が手を入れた

「…丁度いいです…」

「そうか」

乾闥婆けんたっぱが言うのと迦楼羅かるらが目を細めて笑った

「痛かったら言うんだぞ？」

チャポッとタオルを湯に浸した迦楼羅かるらが言うのと乾闥婆けんたっぱが背中を向けたままで頷いた

「…痛いかな？」

迦楼羅かるらが黙ったままの乾闥婆けんたっぱに聞くと乾闥婆けんたっぱが首を振った
湯気にほんのり混じった血の匂いが部屋に広がる

「迦楼羅…」

ずっと黙ったままの乾闥婆けんだつばが口を開いた

「なんだ？」

迦楼羅かるらが手を止めて聞き返す

「今日：晩御飯竜田揚げにしてくれないかハルミママさんに聞いてみますね…」

乾闥婆けんだつばが言う

「…ああ…楽しみにしている」

迦楼羅かるらが笑った

「何で俺が付き合わないアカンねん；」

正月スーパ－の生肉売り場で黄色い買い物籠を持った京助が呟いた

「つべこべ言わないんだっちゃ」

緊那羅きんならが【本日のお買い得！！ 3時からのシークレットセール】と書かれている表示を見てそれから並べられている肉を見ながら言った

「今日は竜田揚げに決定したんだっちゃから…肉がなかったらはいまらないっちゃ」

買い物籠に二キロで780円だという鳥胸肉を入れて緊那羅きんならが歩き出す

「付け合せ…付け合せ…」

緊那羅きんならが野菜売り場のほうに足をむけた

「緊那羅味噌汁ふのりとイモがいい」

京助が緊那羅きんならに言う

「この間もそう言ってなかったっちゃ？；」

緊那羅きんならが足を止めて言った

「好きなんだよいいじゃん； 買い物付き合ってるんだし」

「…わかったっちゃ；」

膨れた京助に緊那羅きんならが承諾の返事をした

「すっかり主婦だよナアお前」

「ハイハイ」

京助が言うと緊那羅^{きんなら}が大根を選びながら適当に返事を返す

「お前等はすっかり夫婦だよナア」

「はッ!?!」

背後からいきなり言われて京助と緊那羅^{きんなら}が揃って振り返ったソコには中島

「聞いてて本当夫婦にしか聞こえねえもん会話」

米を小脇に抱えた中島が京助と緊那羅^{きんなら}に言う

「こんにちはラムちゃん」

中島の後ろから蜜柑が笑顔で緊那羅^{きんなら}に手を振った

「あ、蜜柑さん」

緊那羅^{きんなら}も笑顔で手を振り返す

「今日は？」

蜜柑が緊那羅に聞いた

「今日は竜田揚げなんだっちゃ」

緊那羅^{きんなら}が答えた

「へえー!! ウチは何にしようかなって…お肉安いならウチも竜

田揚げにしようかゆーちゃん」

蜜柑が中島を見上げた

「…なんだかスゲエ仲良くなってねえ?」

京助が緊那羅^{きんなら}と蜜柑を見て言う

「あ、よく会ったっちゃ買い物してると」

緊那羅^{きんなら}が笑顔で言った

「ねー?」

蜜柑も笑顔で言う

「…へえ」

京助が口の端を上げてやる気なく言った

「この前教えてもらった炒め物凄くおいしかったっちゃ」

「簡単でしょ? あとアレに少しナンバン入るとね…」

楽しそうに話し始めた緊那羅きんならと蜜柑を中島と京助はただ黙って見て
いる

「緊那羅が段々奥様化していつてますなあ…」

中島がボソツと言う

「まあ…な…」

京助が籠を床に置いて腰に手を当てた

「いい妻になりそうだな」

中島が言う

「欲しいのか？」

京助が中島を見て聞く

「浜本が欲しそうにしてたぞ」

中島が米を床に置いた

「ほお…」

京助がそうかそうかというカンジに数回頷く

「確かにいいヤツだぞ緊那羅は…少し抜けてたりするけどさ…」

京助が言う

「お前 緊那羅好きだろ…いや変な意味じゃなくて」

中島が聞く

「…さあな； どうだべ…わっかんね」

京助が籠を持ち上げた

「…でもいると和む」

京助が照れくさそうに笑いながら答える

「ホラ！！ n早く帰らねえと鳥類餓死すんぞ」

話し込んでいた緊那羅きんならに京助が声をかけた

「あ…わかったっちゃ；」

緊那羅きんならがはっとして京助を見た

「んじゃな」

中島が片手を上げると京助も片手を上げた

「ごめんだっちゃ京助；」

大根を籠の中に入れると緊那羅きんならが謝った

「別に」

京助が言う

「イモ」

「は?;」

京助がいきなり言った【イモ】に緊那羅きんならが思わず疑問系の声を出した

「味噌汁のイモでつかくしてくれればいい」

籠を持ち直しながら京助が言う

「わかったっちゃ」

緊那羅きんならが笑って答えた

「おうえええええゝゝゝ;」

「うおえええええゝゝゝ;」

「ハイハイハイハイ;」

阿修羅あしゅらに背中をさすられているのはゼンとゴの姿になったコマとイヌ

「ぎもぢわるいんだやなゝゝ;」

涙目で洗面器を抱えたゼンが言った

「甘酒でも酔っ払うのにまともに酒被ったからナアゝゝ; そら酔っ

払い悪酔いするんきに」

阿修羅あしゅらが言う

「アレはヘンタイが避けたからわるいんだやなゝゝゝつぷゝ;」

ゼンに同じく涙目で言ったゴが吐き気を催して洗面器に顔を突っ込んだ

「見事なゲロ吐き二重奏」

阿修羅あしゅらがハッハと笑って言った

「そもそもヘンタイから主の匂いがしたんだやなゝゝそっから始まったんだやなゝゝ;」

ゴが阿修羅あしゅらを見て言う

「ゝ懐かしかったんだやなゝゝ;」

クイツと口を手の甲で拭いながらゴが呟いた

「ゼンも嗅ぎたかったんだやな」

ゼンが尻尾を下げて言う

「ワンコ等の竜のボンを守りたいっつゝ気持ちがありや…また会えると思うぞ」

阿修羅あしゅらが言うゼンゴが揃って阿修羅あしゅらを見る

「主に？」

そしてハモって言った

「そ…竜に」

阿修羅あしゅらが笑う

「でも主は…」

ゴがしゅんとなりながら小さくこぼすと阿修羅あしゅらがゴの頭に手を置いた

「オライの言葉信じてみて」

二人を両手で抱き寄せた阿修羅あしゅらが笑いながら言った

「休んでくれっちゃッ!!;」

「嫌です」

台所からギャーギャー聞こえる乾闥婆けんたつばに言い合いの相手はいつもの迦楼羅かるらではなく緊那羅きんなら

「怪我してるんだっちゃよ!?!;」

「それがなんですか」

緊那羅きんならが言う乾闥婆けんたつばがさらっと返す

「怪我人は休んでるものだっちゃよッ!?!;」

「僕は怪我人になった覚えはありません。その箸取ってください」

「あんな怪我してれば立派な怪我人だっちゃッ!?!;」

声を上げる緊那羅きんならに乾闥婆けんたつばが言う箸を渡しつつ緊那羅きんならが更に声を上げた

「料理に唾が入りますよ緊那羅きんなら」

乾闥婆けんたつばが言う緊那羅きんならがハツとして口を押さえた

「…さすが;」

その様子を台所の暖簾の向こうから見ていた京助が呟いた

「口で乾闥婆けんたつばには勝てん;」

京助の隣で迦楼羅かるらがボソツと言った

「だろウナァ……」

京助が口の端を上げて言う

「まったく……可愛げのない……」

迦楼羅かるらが目を細めて言うと言つてスコーンという音と共に箸は迦楼羅かるらの額に突き立った

「可愛げがなくてすいません」

につこりと笑いながら乾闥婆けんだつぱが一本になった箸を手と言う

「……いえ……」

何故か京助が手を横に振って言った

「痛いではないかたわけッ……」

箸一本を握り締め額に赤くワンポイントチャクラを作った迦楼羅かるらが怒鳴った

「竜田揚げできなくてもいいんですか？」

乾闥婆けんだつぱがにつこり笑って言うと言つて迦楼羅かるらが止まった

「……迦楼羅……」

緊那羅きんならが炊飯ジャーのコンセントを持ったまま迦楼羅かるらを見て呟く

「……コレでも食べておとなしくしてください」

止まったままだった迦楼羅かるらの口に乾闥婆けんだつぱがミニトマトを一つ押し付けた

「……うむ」

少し間を置いてミニトマトを口に含んだ迦楼羅かるらが頷いた

「餌付けされてんじゃん……」

京助が言う

「貴方もですよ京助。手伝う気がないなら邪魔なだけです」
乾闥婆けんだつぱが京助に言った

「ヘイヘイ……」

スコーン

「返事はハイと一回、ですよ」
乾闥婆けんたつばが手に持っていたもう一本の箸が京助にヒットした

「まったりなまったりな」

阿修羅あしゅらが湯気の立つ湯飲みを持って迦楼羅かるらの隣に腰掛けた

「かるらんも飲むけ？」

縁側に一人座っていた迦楼羅かるらに阿修羅あしゅらが湯飲みを差し出した

「…うむ」

湯飲みの中は昼間の騒動の引き金となった木村さん宅の甘酒

「追い出されたんやねえ…」

阿修羅あしゅらが迦楼羅かるらの額を見て苦笑いで言った

「…うむ」

迦楼羅が湯飲みを持って小さく頷いた

「まったく…可愛げのない…強情なヤツだ…」

迦楼羅かるらが甘酒をぐいっと一気に飲み干して

「ぶはっ」

そして噴出した

「熱いぞ!!!」

迦楼羅かるらが怒鳴る

「そら熱いやよ； 湯気たつとーに；」

阿修羅あしゅらが言った

「初めに言わんかッ!!!」

服の裾で口を拭いながら迦楼羅かるらが言う

「オライのせいかい」

阿修羅あしゅらが甘酒を一口飲んで言った

「あ、かるらんとあつくんにいちやんく!」

玄関の方からした声に迦楼羅かるらと阿修羅あしゅらが反応する

「栄野弟…」

「よー!! 竜のボンー!」

ガラガラと玄関の戸を開け閉めする音が終わったかと思うとバタバ

タと廊下を走る音が近づいてきて和室の障子が開いた

「なにしてるの？」

悠助が迦楼羅かるらと阿修羅あしゅらの間から顔を出して聞く

「晩飯前のまったりまったり」

阿修羅あしゅらが言う

「甘酒だあ！！いいなーいいなー！」

悠助が湯気の立つ阿修羅あしゅらの湯飲みを見て言った

「熱いから気いつけよ？」

阿修羅あしゅらが自分の湯飲みを悠助に渡す

「かるらんみたく一気はしたら駄目だぞい？」

「やかましいッ；」

フーフーと息を吹きかけて甘酒を冷ます悠助に阿修羅あしゅらが言うと迦楼羅かるらが突っ込む

「慧喜えきはどうした？」

迦楼羅かるらがいつもなら悠助にべったりの慧喜えきが見えないことに気がついて悠助に聞く

「慧喜えきはハルミママのお手伝い」

悠助が湯飲みを口につけながら答えた

「おっ珍しい！！ 悠が単品じゃん」

開けっ放しだった和室から京助がやってきた

「ハイ暇人全員集合」

阿修羅あしゅらがハッハと笑って言う

「なんだそれは；」

迦楼羅かるらが言った

「あながち間違いないやねえよな； 飯はまだだし…ぶっちゃけ暇」

京助が阿修羅あしゅらの少し後ろに腰を下ろした

「…何か面白いことねえですか」

京助が聞く

「面白いことねえ…面白い…うーん…」

阿修羅あしゅらが頬杖をついて人差し指をトントン頬に当てながら考え込む

「僕も暇」

悠助が湯飲みを持ったまま言った

「慧喜^{えき}いないし」

ぷうっと頬を膨らませた悠助を迦楼羅^{かるら}が見る

「：栄野弟は慧喜^{えき}が好きか」

迦楼羅^{かるら}が悠助に聞く

「うん！！　だって慧喜^{えき}は僕の子供産んでくれるんだもん」

「オイオイオイオイ」

悠助が言うとき京助が裏手で軽く悠助の背中に突っ込んだ

「かるらんは好きな人いるの？」

悠助が聞くと迦楼羅^{かるら}と阿修羅^{あしゅら}がハタと動きを止めた

「：かるらん？」

しばらく動かなかった迦楼羅^{かるら}に悠助が声をかける

「竜のボンそら」

「いた：な」

阿修羅^{あしゅら}が何かを言おうとすると迦楼羅^{かるら}が口を開いた

「いた：の？　今は？　もう好きじゃなくなったの？」

悠助が聞く

「いや：そうではない」

迦楼羅^{かるら}が答えた

「悠；　そりやもしかして聞いちやいけない質問なんじゃないかとお兄さんは思うのですが」

京助が言う

「オライもそう思います」

阿修羅^{あしゅら}が京助に賛同した

「なんで？」

悠助がきよとした顔で聞く

「何でって：ああ：無垢無知って怖いよ阿修羅^{あしゅら}さん」

京助が言う

「かまわん」

迦楼羅かるらが言った

「構わんって…かるらん…」

阿修羅あしゅらが迦楼羅を見た

「いずれは全て知るのだ…栄野弟…ワシの話を聞きたいか？」

迦楼羅かるらが目を細めて微笑みながら悠助に聞いた

「うんっ！」

悠助が大きく頷く

「…そうか…」

迦楼羅かるらが空を見上げた

【第九回・参】瞳水晶（前書き）

悠助にせがまれて迦楼羅は【沙紗】について話し出した
それは遠く遠い記憶の話

【第九回・参】瞳水晶

迦楼羅かるらが見上げていた空から悠助へと視線を移した

「…名前は沙紗」

迦楼羅かるらが言った

「しゃしゃしゃん？」

悠助が言う

「さ・しゃ・だ」

迦楼羅かるらが区切って【沙紗】とはっきり言った

「しゃ：しゃ：」

ごによごによと悠助が何とか言おうと試みている

「…まあいい…」

迦楼羅かるらが溜息を吐いて言う

「沙紗ってたしか…」

京助が何かを思いだしたのか呟いた

「そうだ…乾闥婆けんだつばから前に聞いただろう？」

迦楼羅かるらが言う

「前の【時】の…犠牲の一人だ」

呟くように迦楼羅かるらが言った

「死んじやったの？」

「ばっ；」

悠助が迦楼羅かるらに单刀直入にズバッと聞くと京助が慌てた

「…そうなる…のかもしれない…」

迦楼羅かるらが言う和阿修羅あしゅらが何故か顔をしかめた

「実際は…そうなるな…沙紗はもういない…」

迦楼羅かるらがふっと笑って悠助の頭に手を置いた

「どんな人だったの？」

悠助が聞く

「：強かった：な； イロイロと」

迦楼羅かるらが少し顔を引きつらせながら答えた

「強かったな； 嬢は；」

阿修羅あしゅらも沙紗を知っているのかうんうんと頷き言った

「何？ 阿修羅あしゅらも知ってるわけ？」

京助が阿修羅あしゅらに聞く

「知ってるだろさ； オライだって前の【時】ん時にいたんだきに」

阿修羅あしゅらが答えた

「強かったの？」

悠助が再び迦楼羅かるらに聞く

「全てにおいて強かったなあ：嬢は； 本当に」

阿修羅あしゅらが言うあしゅらと迦楼羅かるらが今度は頷いた

「何度投げ飛ばされたことか：；」

迦楼羅かるらが遠い目で言った

「投げ：ですか；」

京助が言う

「初めて会ったときは思い切り説教されたぞワシは；」

ふつとどこか哀愁を漂わせながら迦楼羅かるらが言った

「：どないお嬢さんだったんですかい；」

京助が聞く

「沙紗は：何においても強くいる娘だった：」

迦楼羅かるらがまた空を見上げた

「沙紗姉様； 落ち着いて！！；」

「他人の家に無断でしかも窓から入ってくるとは行儀が悪すぎではないですか？」

黒く長い髪の少女が手に握るのは先に赤い飾りのついた金色の髪

「沙紗：；」

その後ろでは数人の侍女と共におりおりとしている青銀に近い髪をゆつたりと伸ばした少女と前髪の一部が上にぴょっこりと跳ねた薄

青の髪をした少年が手を出せないままでいた

「沙紗様；　どうかお怒りをお鎮めください；」

侍女の一人が黒髪の少女に言った

「かの方は天からの使者様と申しております；そんなことをされては；」

「では天からの使者様とやら；天では窓から他人の家に上がりこむのが礼儀なのですか？」

「だっ！！；」

【沙紗】と呼ばれる黒髪の少女が天からの使者だと言われる人物の金色の髪を思い切り引っ張った

「沙紗姉様ッ；」

薄青の髪の少年が沙紗の手を掴んだ

「もういいじゃないですか；」

「下がりなさい沙汰」

沙紗が言う【沙汰】と呼ばれる少年が肩をすくめた

「名も名乗らない方が天の使者なのですか？」

「名乗る時間さえくれなかったではないか！！　たわけがッ！！；」

沙紗が握る金色の髪の持ち主は触角のような髪型をした少年

「言い訳は聞きたくありません」

「いだだだだッ！！；」

「沙紗！！；」

容赦なく沙紗が少年の髪を引っ張ると後ろで見ていた青銀の髪の少女が止めに入った

「沙羅；」

【沙羅】と呼ばれた少女が沙紗の隣に並んだ

「もういいじゃない；ね？」

そう言いながら沙羅が沙紗の手から少年の髪を放させる

「；わかりました；では改めてお聞きします天の使者様とやら；貴方の名前は？」

沙紗がそれでもまだ怒っているのか鋭い視線で少年を見て聞く

「…迦楼羅だ…」

むすっとした少年が自分の名前を言った

「…つええな…」

京助がポソッと呟いた

「うむ…」

迦楼羅が頷く

「だが…それが沙紗なのだ」

迦楼羅が言った

「いつでも強く…誰より強くいたのが沙紗だった」

「沙紗様おやめください…!」

木の格子窓から上がる湯気と共に侍女の声がする

「旦那様に知れたら…」

「知られたら私を呼びなさい」

「沙紗様…!」

おろおろする侍女に構わず沙紗が竈にかかる鍋の蓋を開ける

「私が勝手に手伝っているのです」

長箸で鍋の中の野菜に火が通っているか確かめながら沙紗が言った

「何を騒いでいるのだ…」

「迦楼羅様…!」

迦楼羅が台所に入ってくるなり数人の侍女から黄色いざわめきが起
こる

「口より手を動かしてください」

迦楼羅に目もくれず沙紗が給仕の侍女に言った

「…何事なのだ？」

迦楼羅が近くにいた侍女に聞く

「はい…それが給仕の者が二人ほど流行の病で床につきまして…沙
紗様が…」

「余計なことは言わなくてもいいです」

沙紗がピシヤリという侍女が下がった

「ほら！！ 手を動かしてくださいと言ったでしょう！！」

沙紗が少し声を張り上げて言う侍女等が慌てて持ち場に着き始める
「台所は男子禁制即刻立ち退きなさい」

ようやくいつもの台所風景になったのを見た後沙紗が迦楼羅を鋭く見て言った

「な…；」

鋭い視線を向けられて迦楼羅が言葉をなくす

「ワシは何も…；」

「立ち退きなさい」

何か言おうとした迦楼羅を一瞥すると沙紗は背中を向けた

「何もしておらんではないかッ！！；」

迦楼羅が怒鳴る

「うるさいですよ天の使者様」

沙紗が背中を向けたまま言う

「迦楼羅だ！！；」

迦楼羅が再び怒鳴る

「何をして…迦楼羅様？」

布の擦れる音と共に沙羅が数人の侍女と台所に入ってきた

「沙羅様…！！」

台所にいた給仕の侍女が一斉に頭を下げる

「沙紗…貴方はまた…」

沙羅が沙紗を驚きの表情で見た後微笑を浮かべた

「今日は何かしら？」

沙羅が笑いながら沙紗に聞く

「食べてからのお楽しみ」

沙紗が背中を向けたままで言った

「わかりました…さ、迦楼羅様…ここは男子禁制です」

沙羅が迦楼羅に軽く頭を下げて言う台所から出て行った

「…あやつはいつもああなのか？」

沙羅の少し後ろを歩く迦楼羅かるらが利いた

「ええ…そうです」

沙羅が答えた

「名家の娘らしかぬ…とお思いでしょう？　でも私はそんな沙紗が

好きなのです」

振り返って沙羅が笑う

「見ておわかりのように沙紗と私と沙汰は本当の兄弟ではありません
ん…沙紗は体の弱かった私の話し相手として養女にきたのです」
ゆっくりと歩き出した沙羅が言った

「そうか…」

沙羅の後ろを沙羅と距離を置いて迦楼羅かるらが歩く

「私にないものを沙紗は全て持っている…私はそんな沙紗を誇りに
思います」

部屋の前で沙羅が足を止めた

「書の時間ゆえ…失礼いたします迦楼羅様かるら」

沙羅が軽く頭を下げて部屋に入っていた

「迦楼羅様かるら！！」

沙羅のが部屋に入ってすぐ背中から名前を呼ばれた迦楼羅かるらが振り返
った

「お前は…」

「沙汰ですっ！！」

廊下の欄干に足をかけてよじ登った沙汰が迦楼羅かるらの元に駆け寄って
きた

「沙羅姉様は…書の時間ですか？」

沙羅の部屋の戸を見て沙汰が聞く

「そうらしいな」

迦楼羅かるらが歩きながら答えた

「…なんだ？」

しばらく並んで歩いていた迦楼羅かるらが沙汰の視線が気になり足を止めた

「いえ!; ; なんでもありません; ;」

沙汰が慌てて言う

「…沙汰…とやら」

迦楼羅かるらが小さく沙汰を呼んだ

「はい!;! ; ;」

沙汰が姿勢を正して返事をした

「お前は【時】をどう思う?」

迦楼羅かるらが聞くと沙汰がきよとんといった顔をした

「お前とその姉…実の姉の方は【時】に関わると話したのは…」

「覚えています!;!」

沙汰が必要以上の声で迦楼羅かるらの言葉を止めた

「…ワシはもしかしたらお前を手にかけるかも知れぬことも…お前の姉を手…」

「それならば私がその前に貴方を手にかけます」

キッパリと言い切る形で沙紗の声がした

「沙紗姉様!;!」

沙汰の顔がぱアッと明るくなった

「沙羅と沙汰を手にかけるというならば私が貴方を手にかけます」
ツカツカと大股で迦楼羅かるらの横を通り過ぎた沙紗が沙汰を自分の背に隠した

「…しかし【時】が来れば…」

「ならば私は貴方からもその【時】からも沙羅と沙汰を守ります」

沙紗が迦楼羅かるらを鋭い目つきで見ながら言った

「沙紗姉様…僕は…」

沙汰が沙紗の服を軽く引っ張った

「私の大切なものに害をなす…私は貴方が嫌いです」

沙紗が言う

「害を…と…言われてもワシはただ役目を…」

「黙りなさい」

迦楼羅かるらの言葉を沙紗が切った

「理由はどうかあれ私は貴方を歓迎しません天の使者様
再び沙紗が迦楼羅かるらに鋭く視線を向けた

「少しくらいワシの話を聞いたらどうだ娘！！！；」

迦楼羅かるらが怒鳴りながら沙紗の手を掴んだ

「ッ！？ 私に触らないでくださいッ！！！！」

「沙紗姉様ッ！！；」

「うおッ！！？；」

ガツと迦楼羅かるらの服の襟首を掴んだ沙紗がそのまま迦楼羅かるらを投げ飛ばすと迦楼羅かるらが数メートル吹っ飛んだ

「迦楼羅様ッ！！；」

沙汰が投げ飛ばされた迦楼羅かるらの元に駆け寄る

「言ったでしょう私は貴方が嫌いです、と…天の使者様」

服の裾を直しながら沙紗が言う

「迦楼羅だと…！！；」

沙汰の手を借りて起き上がった迦楼羅かるらが言う

「もう一度言います私は貴方が嫌いなのです天の使者様。…沙汰食

事の時間です」

迦楼羅かるらを一瞥した沙紗が沙汰を見て少し優しい口調で言った

「今日は沙紗姉様を作ったんですか？」

沙汰が沙紗に聞くと沙紗がふっと微笑んで頷いた

「すぐ行きます！！」

沙汰が嬉しそうに言うのと沙紗が小さく頷いた後背を向けて廊下を歩いていった

「…なんなんだあの娘は…ッ；」

迦楼羅かるらが怒った口調で言う

「迦楼羅様…ごめんなさい； 沙紗姉様を怒らないで」

迦楼羅かるらを支えて立たせながら沙汰が言った

「何故お前が謝る…まったく優しさの欠片もない娘だな…」

「それは違います迦楼羅様！！」

「だっ!!;」

迦楼羅がボソツと言った一言に沙汰が思い切り否定する一言を發すると共に迦楼羅かるらを支えていた手を離した為 迦楼羅かるらが再び倒れた
「あ…ごめんなさい; でも…沙紗姉様程優しい女性は僕は見たことがないです」

沙汰が再び迦楼羅かるらを支えながら立たせた

「どこがだ;」

迦楼羅かるらが言う

「全てです」

沙汰がキツパリ言った

「…迦楼羅様…僕は沙紗姉様を慕っています」

沙汰が少し顔を赤らめて言う

「自分の姉をか…?」

迦楼羅かるらが聞くと沙汰が頷いた

「僕もう数え13:15になったら一人前となれます。その時僕は沙紗姉様を娶りたいのです…姉といっても血は繋がってないですから」

沙汰が照れて頭を掻きながら言う

「…アレを娶るとなれば苦勞すると思うがな…;」

迦楼羅かるらが引きつった顔で言った

「ちょっと待て;」

京助が片手をストップというカンジで前に出して話を止めた

「どうしたん竜のボン?」

阿修羅あしゅらが聞く

「…15で一人前って…いうのは…何?; 15で結婚とか…いう…」

「そうだ」

京助が言う迦楼羅かるらが頷いた

「どこの…いつの時代ですか;」

京助が聞いた

「…いつ…だった…といわれてもな…； あゝ…」

迦楼羅かるらが腕を組んで考える

「場所はな竜のボンたちが今中国だかつてよんどるところで…時代まではわからんきに」

阿修羅あしゅらが迦楼羅かるらの変わりに答えた

「ちゅ…って…お前等中国語できんのか！？；」

京助が驚きの表情で聞いた

「できるっちゃー…そうなのかもしれんけど…わかるっちゃーわかる？」

阿修羅あしゅらが言っかて迦楼羅かるらを見ると迦楼羅かるらが頷く

「言っかたであろう？ ワシ等は【人間】ではないのだ」

「…それでいいんかい；」

迦楼羅かるらが言かうと京助が突つ込んだ

「ねえ…続きは？」

半紙を途中で止められた為に悠助が膨れっ面で抗議した

「沙紗様！！ 沙紗様は何処ですか！」

侍女の慌てふためいた声が屋敷に響いた

「何事だ」

侍女の尋常ではない声に迦楼羅かるらが聞く

「ああ迦楼羅様！ 沙紗様の行方なぞは…」

頭を下げ侍女が迦楼羅に聞いた

「知らん…が何事かと聞いたのだが」

迦楼羅かるらが再び聞いた

「沙羅様が発作を起こされ…」

侍女が答える

「おられました！！」

向かいの廊下から男の声がすると侍女が顔を上げ迦楼羅かるらに一礼すると足早に去っていった

「ゆっくり飲んで：そう：そしたら息をゆっくり吐くのです」

天井からたれた布の向こうから沙紗の声が聞こえる

室内には香が焚かれていた

「：ありがとう沙紗：」

疲れきった沙羅の声も聞こえた

「今はあまり話さないほうがいい：」

沙羅の言葉を沙紗が止める

「：見事だな」

沙羅を治療する様を数人の侍女達と見ていた迦楼羅かるらが呟いた

「でしょう？」

何故か沙汰が嬉しそうに言った

「この香も沙紗姉様が沙羅姉様の為に作ったんですよ」

部屋に漂うその優しい香りは何処となく心静かになる：そんな香りだった

「花々（かか）を残し他の者は部屋を出なさい。 人氣があつては沙羅も心置きなく休めないでしょう」

天井から垂れている布を分けて沙紗が出てくるなり迦楼羅かるらや沙汰達に言った

「後は頼みましたよ花々」

花々と呼ばれた薄紅の着物を着た侍女に沙紗が言うと花々が深く頭を下げた

「沙紗姉様：」

沙汰が沙紗を呼び止める

「大丈夫ですよ沙汰：少し顔を見せてあげてください」

沙紗がふっと微笑んで沙汰に言う

「はい！！」

沙汰が嬉しそうに返事をして沙羅が休む布の向こうへと足早に向かった

「：あなたも早く部屋を出てくださいませんか天の使者様」

迦楼羅^{かるら}の横を通った沙紗が迦楼羅^{かるら}を見ずに言った後部屋を後にする
「っ…」

思わず怒鳴りそうになった迦楼羅^{かるら}が口を噤んで沙紗の背中をキツと
見た後大股で沙紗の後を追う

「待たんか娘！」

部屋を出るなり迦楼羅^{かるら}が声を張り上げて沙紗を呼び止めた

「…何ですか」

あからさまに嫌そうな顔で沙紗が振り返る

「……」

呼び止めたのはいいが何故呼び止めたのか自分でもわからない迦楼羅^{かる}が黙り込んで数分

「話すことがまとまってから呼び止めてください。私はあまり貴方
と話したくないのですから天の使者様」

沙紗がそう言って迦楼羅^{かるら}に背を向け歩き出した

「ちよ…待てと言っているだろう…！」

駆け足で沙紗に追いつくと迦楼羅^{かるら}が沙紗の肩を掴んだ

「私に触らないでください！」

「っおあッ…！」

胸倉をつかまれ見事な足払いを食らった迦楼羅^{かるら}が廊下の欄干を越えて庭に投げ飛ばされた

「私は貴方が嫌いだと言ったはずです」

沙紗がよろりと起き上がる迦楼羅^{かるら}に言う

「用がないならば呼び止めないでください」

「ワシは…ッ…！」

迦楼羅^{かるら}の言葉を聞こうともせず沙紗が廊下を歩いて行った

「…トコトン嫌われてねえかお前；」

京助が突っ込んだ

「まあ…な；」

迦楼羅かるらが何かを思い出したのか顔を引きつらせた

「でもかるらはしゃしゃんが好きだったんでしょ？」

いつの間にか阿修羅あしゅらの膝の上に座っていた悠助あしゅらが迦楼羅かるらに聞く

「…その時はまだ腹の立つ生意気な娘という感情しかなかったな…」

迦楼羅かるらが言う

「一体何があつてお前はそこまで沙紗とやらのゾッコンになったんだよ」

京助が胡坐をかきなおしながら聞いた

「…怒つたのだ」

迦楼羅かるらがボソツと言った

「怒つた…って誰が誰を」

京助が聞く

「沙紗がワシをだ」

迦楼羅かるらが答える

「…今まで聞いた話でもかッ…：なり怒られてるように感じるんですけど」

京助が溜めに溜めて言う

「本気で怒つたのだ…ワシはその時初めて沙汰の言っていた沙紗の優しさがわかった…」

迦楼羅かるらが自分の左頬に手を当てた

「…この香りは…」

広い屋敷内をふらふらと歩いていた迦楼羅かるらがかいだことのある香りをふと感じその方向へと足を向けた

しばらく奥ばった廊下を歩き小さな離れへと続く渡り廊下を渡り終えるとその香りが強くなった

「何だここは…」

母屋の屋敷とは正反対な簡素なその建物の扉を迦楼羅かるらが開けた
中は意外にもきちんと片付いており壁一面の書物、棚には薬草入りの小瓶や瓶が並べられていた

ふわっと風が香りを部屋中に運びついでに広げられた書物を悪戯している

ふと光が差す窓のほうに顔を向けた迦楼羅かるらが窓辺に腰掛け書物を読み耽る人影を見た

組んだ足を窓枠に置きその自分の足に書物を立てかけていたのは沙紗

「：用が無いならば出て行ってください」

沙紗が書物から目を離さず言った

「ここは…」

「私の部屋です」

迦楼羅かるらが聞くと沙紗が即答した

風が沙紗の長い黒髪を靡かせる

「何か用でも？」

相変わらず書物から目を離さずに沙紗が聞いてきた

「いや：ただ：香りがして…」

迦楼羅かるらがどもりながら答えた

「：香りですか：その香のことでしょう」

迦楼羅かるらを見ずに沙紗が言う

「これはお前が作ったと聞いたのだが」

白い陶器の入れ物から上る香りに迦楼羅かるらが言う

「そうですが」

沙紗がそっけなく返す

「この間の療法も見事だったな」

迦楼羅かるらが沙羅の発作を治めた時のことを言った

「ありがとうございます」

書物をめくりながら沙紗が淡々とお礼を言う

「：何を読んでいるのだ？」

しばらく沈黙が続いた後に迦楼羅かるらが聞いた

「書です」

それに対し沙紗がやはり淡白に答える

「：香りが嗅ぎたいならば静かにしててください」

また少し沈黙が続いた後沙紗が言った

「…うむ…」

少し間を置いて返事をした迦楼羅かるらがその場に座った
窓から入る風で靡く沙紗の黒髪が太陽の光で七色にも見える

「…お前は」

「沙紗」

迦楼羅かるらが口を開くと沙紗が自分の名前を名乗った

「沙紗…良い名だな」

迦楼羅かるらが言う

「それはありがとうございます」

書物を読み終えたのか沙紗が窓際から降りた

「私の気を惹こうとしても無駄ですよ天の使者様」

書物を置き近くの籠を手にとった沙紗が迦楼羅かるらが部屋に入ってきて
から初めて迦楼羅かるらを見と言う

「私は貴方が嫌いですから」

そう言うのと沙紗は部屋を出て行った

「…：嫌いというわりには…今話していたではないか…」

沙紗のいなくなった窓辺から入ってきた風が今度は迦楼羅かるらの髪で遊び始めた

「その日沙紗は葉となる葉草を探しに行つてな…」

迦楼羅かるらが言った

「その邪魔でもしたのかお前は」

京助が突つ込むと迦楼羅かるらが首を振った

「ワシは一匹の虎を殺めた…良かれと思ってやったことだったのだ
が…」

「かるらん虎殺したの？」

悠助が聞いた

「…ああ…そうだ」

迦楼羅かるらが答えると悠助が黙り込んだ

「…何かワケあったからだろ？」

悠助を見た後京助が迦楼羅かるらに聞いた

「沙紗を襲っていたのだ」

迦楼羅かるらが答える

紅蓮の炎が虎の体を覆い虎が地面を転がりまわっている様を一体何が起こったのかわからない沙紗はしばらく呆然と見ていたがハッとして立ち上がり自分の上着で虎を叩き始めた

「何を…!!」

迦楼羅かるらが声を上げた

「貴方こそなんてことを…ッ!!」

沙紗が懸命に虎を上着で叩きながら言う

「お前を襲っていたのだぞ!」

迦楼羅かるらが言うどぐつたりと動かなくなった虎を見た後沙紗が迦楼羅かるらを見た

「…貴方は…」

そして唇をかみしめて大股で迦楼羅かるらに近づいてきた
バキッ

沙紗の拳が迦楼羅かるらの左頬に当たったかと思うと痛々しい音と共に迦楼羅かるらが後ろに倒れた

「な…何をするのだたわけッ!!」

左頬を押さえた迦楼羅かるらが怒鳴る

「貴方は…ッ…」

迦楼羅かるらを睨む沙紗の目から涙が流れた

カサッという音に迦楼羅かるらが音の方を見ると草わらから何かが飛び出し黒い塊となった虎の傍に駆けて行く

「…ニ…」

まだ熱覚めやらぬ焼けた虎に擦り寄ることが出来ずにいたのは子虎

「…子供…か…?」

殴られたことで鼻から血が出てきた迦楼羅かるらがそれを拭いながら呟いた
「…ごめんなさい…」

沙紗が膝を付き子虎に手を差し出した

「何故お前が謝る」

迦楼羅かるらが聞いた

「この虎はお前を……」

「私がこの虎の領域に入ったから」

沙紗が言う

「お前を襲って……」

「大切なものがあれば害をなすものに向かい行くのは当たり前です」
迦楼羅かるらが言うと言った

「私も言いました沙汰と沙羅に害をなすならば貴方を手にかけると」
威嚇のポーズを取る子虎に手を差し出したままで沙紗が言う

「だからワシは……!!」

「死するべきは私でした」

沙紗がゆっくりと立ち上がった

「この虎は……何も悪くなかった……私がこの場所に来なければ良かったこと……」

黒い塊となった虎に沙紗が握っていた自分の上着をかけた

「貴方は私の運命にまで害をなす存在なのです」
天の使者様
背を向けたままで沙紗が迦楼羅かるらに言う

「ではお前はこの虎に殺されても良かったというのか!？」

迦楼羅かるらが怒鳴ると沙紗が振り向いた

「ならば! この虎が死しても良かったというのですか!？」

沙紗が怒鳴り返した

「言ったでしょう!？」 私がこの虎の領域に入ったと……!?!? なのに

何故この虎の方が……死ななければならなかったんです!？」

「ワシが悪いのか!？」

「誰の貴方が悪いとは言ってはいないではないですか!?!?!」

「そうきこえるのだ!?!」

「聞こえるだけでしょう!？」

「言っているから聞こえるのではないかたわけッ!?!」

「そんな口の利き方するから誰も貴方に近付こうとしないんですよッ!!」

「だッ!!; 髪を引っ張るなッ!!;」

二人がギャーギャーと言葉合戦をし始めた

「…貴方は…」

^{かるら}迦楼羅の髪から沙紗が手を離れた

「死の恐怖というものを感じた事がないのでしょいうね」

沙紗が静かに言った後子虎のほうを振り返った

「…ああ…そうかもしれん…」

^{かるら}迦楼羅が言う

「…そうですか…」

沙紗が小さく返事をした

「…先に戻ってください天の使者様…」

「^{かるら}迦楼羅だ」

沙紗が言う^{かるら}と迦楼羅が返したが沙紗は何も言わなかった

「…なんつーか…」

京助がボソツと言う

「何だ？」

^{かるら}迦楼羅が京助を見た

「…何でもねえ…続きは？」

あぐらをかき頬に手をついた京助が言った

「…帰ってきた沙紗はいつもと変わらなくてな…おそらく沙汰と沙羅に心配されぬように振舞ったのだろうが…手は所々に火傷があつて髪も少々焼けていた…」

「沙紗姉様…何があったのですか？」

沙汰が沙紗の手に布を巻きながら沙紗に聞いた

「火を使い少し…ありがとうございます沙汰」

布を巻き終えた沙汰に沙紗が笑顔で言う

「あの：沙紗姉様」

沙汰が沙紗の手を包むように自分の手を置くと沙紗を真っ直ぐ見た

「僕では沙紗姉様の力にはなりませんか？ 僕は：」

少し首をかしげた後沙紗が沙汰の頭に軽く手を乗せる

「優しい子ですね沙汰：ありがとうございます」

二、三回沙汰の頭を撫でると人の気配を感じた沙紗が戸口を見た

「あ：迦楼羅様：」

沙汰が言う

「：も：：」

「も？」

迦楼羅かるらが何故か何処となく恥じらう様な顔で【も】と一言言々と沙

紗と沙汰がその【も】を繰り返した

「：もがどうしたんですか？ 迦楼羅様かるら」

沙汰が迦楼羅かるらに聞いた

「も：も：ツ：：」

「桃ですか？」

沙汰がまた聞く

「戻られ：た：んですかッ；」

迦楼羅かるらが言々と沙紗と沙汰が止まった

「：か：るら様？；」

しばし間を置いた後沙汰がどもりながらも迦楼羅かるらに言う

沙紗はというとぽかんとした顔をしたまま動かない

「：どうしたんですか？；」

少し落ち着きを取り戻したのか沙汰が言った

「：別に：なんでもない：ですます；」

顔を引きつらせながら迦楼羅かるらが答えた

「：変な話し方になってますよ？」

沙汰が言う

「なッ：！：！；」

ワシはただ沙紗が偉そうな口調だというからだな

ッ！！！；」

迦楼羅かるらが怒鳴る

「だから…だな…その…；」

そして段々と声を小さくしていく

「…沙紗姉様が？」

沙汰が沙紗を見た

「…ッ； 戻っているならばいいッ！；」

顔を赤くした迦楼羅かるらが踵を返した

「…迦楼羅かるら」

「なん…」

沙紗が小さく迦楼羅かるらを呼ぶと迦楼羅かるらが怒鳴るように声を上げて振り返った

「…今…」

そして何かに気付きハッとする

「ありがとうございました…」

沙紗が頭を下げて迦楼羅かるらに言った

「え？ え？； 沙紗姉様？ 迦楼羅かるら様？；」

ワケがわからない沙汰が迦楼羅かるらと沙紗を交互に見る

「でも貴方がそんな口調だとかえって気持ち悪いですよ」

「な…ッ！！？；」

顔を上げた沙紗が言うのと迦楼羅かるらが阿呆面になった

「ね？ 沙汰」

沙紗が沙汰に同意を求めた

「え？； …あ…はい…？；」

沙汰がワケがわからないまままで同意する

「ッ…；」

言い返せない迦楼羅かるらの顔が段々と赤くなっていく

「お前も同意するな！ たわけッ！！」

顔を赤くした迦楼羅かるらが沙汰に向かって怒鳴った

「かるらんかるらん」

阿修羅あしゅらが迦楼羅かるらを呼んだ

「顔緩んでる緩んでる」

迦楼羅かるらがハツとした

「んんっ；」

軽く咳払いをして迦楼羅かるらが誤魔化す

「しゃしゃんの話してるかるらん凄く楽しそうだね」

悠助ゆうすけが迦楼羅かるらを見て言った

「な…； そ…そう…か？…；」

迦楼羅かるらが聞く

「うん！！」

悠助が頷いた

「…そうか…」

迦楼羅かるらがふっと微笑んだ

「ハイ先生」

京助が挙手した

「なんだ？ 京助」

迦楼羅かるらが京助を見て言う

「ぶっちゃけ単刀直入にお聞きします。沙紗さんとはどこまでいったんですか」

「ブハッ！！；」

京助が聞くと何故か阿修羅あしゅらが噴出した

「そんな遠くまでは行っではおらんぞ？」

「ブッ！！；」

迦楼羅かるらが真顔で答えるとまたも阿修羅あしゅらが噴出した

「あつくんにいちゃん大丈夫？」

悠助ゆうすけが阿修羅あしゅらを見て言う

「あのな鳥類この場合の何処まで行ったかってのはだな…手を繋いだとか抱きしめたとかの…」

京助が迦楼羅かるらに説明する

「最近のお子様は大人だねえ…」

阿修羅あしゅらが遠い目をして言う

「そこに腰掛けないでくださいと何度言いましたか？」

「いだだだだだッ!!!」

迦楼羅かるらの前髪を笑顔で沙紗が引っ張りながら言う

「仕方なかう!!!； 他に座る場所がないのだ!；」

迦楼羅かるらが返す

「では出て行ってください」

そんな迦楼羅かるらに沙紗が淡白に答えた

「沙紗姉様!!! …あ…迦楼羅様かるらもいらっしゃったんですか」

屋敷から離れた沙紗の部屋に駆け込んできた沙汰かたらが迦楼羅かるらに一礼をした

「いては駄目か」

迦楼羅かるらが言うのと沙紗がまた迦楼羅かるらの髪を強く引っ張る

「何をするたわけッ!!!；」

「言ったでしょうそんな口の利き方では誰も近寄らないと…何です

か? 沙汰かたら」

迦楼羅かるらの罵倒を軽く受け流した沙紗が沙汰に聞く

「あ…いえ…星が綺麗だったので一緒にと…」

沙汰が小さく答えた

「星?」

沙紗が迦楼羅かるらの髪を放し窓へと歩いて空を見上げた

「ここよりも庭の方がよく見えます! 沙紗姉様!!!」

沙汰が小走りで沙紗に近付くと手を掴んだ

「そんなに急がなくても星は逃げませんよ沙汰」

沙紗が笑いながら沙汰に手を引かれて部屋を出て行った

「…なんなんだ…」

二人が出て行った後 迦楼羅かるらがボソッと呟いた

「ね? 凄いでしょ?」

沙汰が嬉しそうに沙紗を見て言う

「本当：今日は星が：」

石段を降りて庭に足をつけた沙紗が夜空を見上げて微笑んだ

「星が綺麗に見える：」

そう言いながら沙紗が空に向けて手を伸ばした

「無理ですよ沙紗姉様：」

沙汰が笑いながら言う

「でも届きそうでしょう？」

両手を空に伸ばした沙紗が笑う

「二人して何をしているのかと思ったら：」

「沙羅姉様」

薄い上着を羽織った沙羅が庭に降りてきた

「大丈夫なのですか沙羅：そんな上着一枚羽織っただけでは寒くは
：」

沙紗が沙羅に駆け寄って聞く

「大丈夫ですよ本当に心配性なんだから：」

沙羅がふふっと笑って言った

「ごめんなさいね沙汰：沙紗と二人で見ていたのにお邪魔してしま
って」

沙汰の方を見た沙羅が言う

「いえ！； 別に僕はッ！；」

沙汰が両手を前に出してブンブン振りながら言った

「でも：本当綺麗：」

沙羅が夜空を見上げると沙汰と沙紗も一緒になって見上げた

「僕が空を飛べたなら星を一つ姉様達にとってあげられるのですけ
ど」

沙汰が呟いた

「ありがとうございます沙汰」

沙紗が沙汰の言葉を聞いて微笑んだ

「空か」

声がして三人が振り返った

「迦楼羅様」
かるら

沙汰が廊下から声をかけてきた迦楼羅を見て言った

「空を飛びたいのか？」
かるら

迦楼羅が聞く

「あ：いや飛べたらナァって話ですよ」

沙汰が笑って言う

「飛べたならもっと近く：綺麗に見えるのでしょ～ね：」

沙紗が目を細めて空を見て言った

「沙紗」

庭に下りてきた迦楼羅が沙紗に手を差し出せといわんばかりに自分の手のひらを見せた

「：何ですか？」

沙紗が手のひらを見た後 迦楼羅を見た
かるら

「沙汰：沙羅を支えている」

迦楼羅が沙汰を見て言う
かるら

「え？ あ：はい；」

沙汰が沙羅の隣に駆け寄った

「早く手を乗せんか！！ たわけッ！」

中々手を出さない沙紗に向かって迦楼羅が怒鳴ると無理矢理沙紗の手を掴んだ
かるら

「何：ッ！！；」

沙紗が驚いて手を払おうとすると強風が巻き起こった

「き～あ；」

沙羅が小さく悲鳴を上げて沙汰の体につかまった

「うわっ；」

沙汰の小さく声をあげ足を踏ん張って沙羅をかばう

「目を開けなければ見えないではないか」

迦楼羅^{かるら}の声がすぐ傍で聞こえ沙紗が恐る恐る目を開けた

最初に沙紗の視界に入ったのは迦楼羅^{かるら}の横顔

そして次に目に入ったのは目の高さにある小さく光る無数の星

「どうだ？」

迦楼羅^{かるら}に聞かれてはっとした沙紗が下を見た

「ひッ；」

そしてしゃっくりの様な声を上げると迦楼羅^{かるら}にしがみつく

「落としはしないから目を開けんか；」

迦楼羅^{かるら}に言われて沙紗が再びゆっくり目を開ける

「…綺麗…ですね…」

しばらくして沙紗が呟いた

「そうか」

迦楼羅^{かるら}が嬉しそうに言う

「街明かりも星明りも…凄く綺麗…」

さっきは怖がっていた下の景色を見て沙紗が微笑んだ

「そして貴方の羽根も」

沙紗が笑んだまま迦楼羅^{かるら}を見て言う迦楼羅^{かるら}が止まった

「…な…」

そして急激に焦りだす

「ありがとうございます」

沙紗が言う

「…お前が…」

迦楼羅^{かるら}が小さく口を開いた

「…お前が望むならいつでも何度でも飛んでも構わん…」

顔を背けながら迦楼羅^{かるら}がぼそぼそと言う

「だからワシの名前を呼べ」

ソレまでの小さな声と比べてはっきり聞き取れる大きさの声で迦楼羅^{かるら}

羅^らが言った

「…名前を？」

沙紗が首をかしげる

「そうだっ!!」

迦楼羅かるらが何故か声を張り上げた

「…用もないのにですか？」

沙紗が聞く

「そうだとやっているだろう!!;」

迦楼羅かるらが怒鳴った

「…迦楼羅かるら」

しばし間を置いた後沙紗が言った

「…なんだ」

迦楼羅かるらが何故か照れながら返事をする

「…呼んだだけです」

沙紗が言った

「そうか」

迦楼羅かるらが嬉しそうに笑った

「…変な人ですね」

沙紗が苦笑いを向けた

「…もう戻りませんか？」

沙紗が迦楼羅かるらに言う

「…もう少し…は駄目か？」

迦楼羅かるらが聞くと沙紗が少し黙った後 迦楼羅かるらを見た

「…そうですね…」

そしてそう言って笑った

「…クサさ最高潮」

京助がボソツと言う

「いいなーいいなー!! 僕も飛びたいー!!」

悠助が言った

「飛べることはワシにとっては当たり前だったのだが…飛べないも

のにとっては新鮮なものなのだ…知ったのだ」

迦楼羅かるらが言う

「そりゃ…そうだろうな未体験ゾーンだしなあ…」

京助が迦楼羅を見て言う「迦楼羅かるらが立ち上がり庭に下りた

「お前だってコッチに来て結構初めてってあっただろ？ 竜田揚げとかさ」

京助が言う

「そうだな…」

迦楼羅かるらが背を向けたまま言った

「かるらん…まだ話すのけ？」

阿修羅あしゅらが聞く

「…辛いんだろが…だって嬢は…」

「阿修羅あしゅら」

阿修羅あしゅらの言葉を迦楼羅かるらが止めた

「…【沙紗】はもういないのだ」

しばし間を置いて迦楼羅かるらが小さく言った

「どんなに想っても手を伸ばしても届かないのだ…【沙紗】には…な」

【安くておいしいマルチの豆腐】の宣伝車からのチャルメラが遠くから聞こえた

「だからワシは話すのだ…京助とその弟…竜の子」

迦楼羅かるらが振り向いた

「いくつもの今までにない【モノゴト】が重なりし今までにない【時】の【鍵】となる確率がある…お前達に…今までの【時】がどんなものだったかということを」

少し肌に冷たい秋風が落ち始めた庭木の葉を散らかす

「…俺難しいことは頭に入れたくねえんだけど…」

京助が口の端を上げて言う

「阿修羅あしゅら…お前も知っている事は話しておくことだ」

迦楼羅かるらに言われた阿修羅あしゅらが目を見開いた

「かるらん…そりゃ…」

「ワシが知らなかったとしても思っていたのか!! このたわけッ!

!」

迦楼羅かるらが怒鳴った

「何? 何の話してるの?」

悠助あしゅらが阿修羅の頭のミョンミョンを引っ張る

「お前達の父親…【竜】のことだ」

迦楼羅かるらが言った

「お父さん…?」

悠助かるらが迦楼羅を見ると迦楼羅が頷いた

「…阿修羅あしゅらお前…」

京助あしゅらが阿修羅を見た

「…今回はオライは話さんぜよ…? 竜との約束なんでさ…スマン

な竜のボン…」

阿修羅あしゅらが苦笑いで京助を見て悠助を撫でる

「いつかきつと…話すきに…今はまだ…」

そこか悲しそうな笑い方をして阿修羅あしゅらが言った

「約束だよ? あっくんにいちゃん」

撫でられながら悠助が言う

「おうさ!」

阿修羅あしゅらがグリグリと悠助を撫で回した

「…なあ鳥類」

京助が言う

「なんだ?」

迦楼羅かるらが返事をした

「乾闥婆けんたつばが言ってたんだけどさ…その…今の緊那羅きんならって…前の【時

ん時のお前と同じ立場にいるって…」

「そうだ」

京助が言うのと迦楼羅かるらが即答した

「ワシは前の【時】の時には今の緊那羅きんなら同様見極め役という形でこちら側にやってきたのだ」

迦楼羅かるらが言う

「じゃあ…何か？ 緊那羅きんならは…」

「ソレはわからんぜよ竜のボン」

京助が言う和阿修羅あしゅらがソレをさえぎった

「かるらんが言っただろう？ 今までにない【時】だって」

阿修羅あしゅらが言う

「今までにない【時】…だからどうなるかわからんきに…」

目を細めた阿修羅あしゅらが京助を見た

「【天】と【空】のヤツらがこんなにも仲良くしてんのは初めてな
んよ…今までになかったんよな…こんなことは」

阿修羅あしゅらが言う

「…だからこそ…なのだ京助…そしてその弟ワシ等は今回来るべき

【時】に…何かを望んでいるのだ」

「何かってなんだよ；」

迦楼羅かるらが言うと京助が突っ込んだ

「…何かとは…何かだ」

迦楼羅かるらが答える

「だから何；」

京助が聞く

「何かだ」

迦楼羅かるらが再び答える

「だからッ！； 何を望んでんのかって！；；」

京助が声を大きくして言う

「何かだといっているではないか！ たわけッ！！」

迦楼羅かるらが怒鳴る

「その何かがわからんからきいてんじゃん！；；；」

「何かとは何かだと言っているだろうッ！！」

「わっかんねーっの！！」

「だから何かだッ!!」

京助と迦楼羅かるらがギャーギャーと言い合い始めた

「何かって?」

悠助が阿修羅あしゅらを見上げて聞く

「とにかく【何か】なんよ」

阿修羅あしゅらが答えた

「ふうん…何かなの?」

「そう」

悠助が聞くと阿修羅あしゅらが頷いた

「そっか」

たぶんおそらく絶対わかっていない悠助が笑顔で言う

「こっちん竜のボンは素直だねえ」

阿修羅あしゅらが悠助の頭をなでて言った

「それはなんという曲ですか?」

声をかけられて迦楼羅かるらが振り向いた先にはゆっくりと迦楼羅かるらの隣に歩いてきた沙紗

「コレという名はない」

迦楼羅かるらが答えた

「貴方が作ったのですか?」

沙紗が聞く

「そうなるな」

迦楼羅かるらが笛を下げた

「…好きですよ」

沙紗が言う迦楼羅かるらがバツと勢いよく沙紗を見た

「す…」

「私はその曲…好きです」

驚いた顔で何か言おうとした迦楼羅かるらより先に沙紗が言う

「…曲…?」

気の抜けた顔で迦楼羅かるらが言う沙紗が頷いた

「そ：うか；」

迦楼羅が顔を背けながら言う

「：先日見せてくれた風景を思い出します」

沙紗が言った

「また見たいか？」

迦楼羅が嬉しそうに聞いた

「そうですね：機会があれば」

沙紗が微笑みながら言う

「言ったであろういつでも飛ぶと」

少し大きな声で迦楼羅が言った

「そしてお前が聞きたいならば吹く」

迦楼羅が笛を沙紗の前に差し出しながら言う

「どうしてですか」

沙紗が聞いた

「どうしてとは？」

迦楼羅が聞き返す

「何故私なのですか？」

沙紗が再び聞くと迦楼羅が止まった

「私は貴方が嫌いだと散々言いました：それなのに何故沙羅ではなく私なのですか？ 貴方が言う【時】に何のかかわりもない：」

沙紗がまっすぐ迦楼羅を見て言う

「貴方の金色の髪と沙羅の青銀の髪：私は好きです」

「だからなんだというのだ」

沙紗が言う迦楼羅が聞く

「：だから：」

沙紗が珍しく言葉をとめた

「ワシはお前の黒髪の方が綺麗だと思うがな」

迦楼羅の言葉に沙紗が顔を上げ迦楼羅を見た

「：あ：いや：；」

迦楼羅がどきまぎしながら顔を背けるとしばらく沈黙が流れた

「：聞きたいです」

沙紗が小さく言った

「先程の曲：もう一度聞きたいです」

もう一度沙紗が言うと言を背けたまま迦楼羅かるらが笛に口をつけた

「お前笛吹けたのか」

京助が言う

「あのな竜のボン緊那羅きんならに笛教えたんのかるらんなんよ」

阿修羅あしゅらが言った

「ほおー！！ すっげー！！」

京助が感心した声を出した

「かるらん笛上手いんだー！！ 聞きたいな」

悠助も言う

「すまん：ワシはもう吹かんと決めたのだ」

迦楼羅かるらが苦笑いで悠助の頭を撫でた

「そりや見事だったんよ？ かるらの笛は：音楽に全然興味ないオライですらたまに聞きたくなるンきに」

阿修羅あしゅらが言う

「聞きたい！ 聞きたいー！！」

悠助が身を乗り出した迦楼羅かるらに顔を近づけて言う

「コラ； 悠；」

京助が悠助を引っ張って自分の足の間に座らせた

「ひつとのいやがるこおとうはー：しちやアカーン！！」

「キヤー！！」

京助がそう言いながら悠助の脇腹をくすぐりだした

「あははははは！！ きっ：きよおすけやあだー！！！！！！」

悠助が笑いながら暴れる

「仲良しさんだあねえ：うっし！ オライも参戦ー！！」

「ギャー――――！！！！」

阿修羅あしゅらが京助の脇腹をくすぐりだした

「…なあ京助…」

迦楼羅かるらがボソツと言う

「…人を殺めた事はあるか？」

「…は？」

迦楼羅かるらが言うのと京助が上半身のみを起こして疑問形の返事をした

「殺め…って…ないないない！！；　　ってかあったらタアイヘン
ダァゝ；」

京助がナイナイと手を振って答える

「もしそうなら俺ここにいねえし；刑務所だし…網走」

あぐらをかいた京助が言う

「かるらん…もういいんでないかい？」

「ワシはあるのだ」

阿修羅あしゅらが言うとそのすぐ後に迦楼羅かるらが言った

「…な…マジで？」

少し間を置いて京助が言うのと目を細め悲しそうな笑顔で迦楼羅かるらが頷いた

「沙紗」

沙羅が香を焚いていた沙紗を呼んだ

「何ですか？」

香に火をつけた沙紗が沙羅を見た

「貴方は私にないものを全て持っている…」

沙羅が微笑みながら言った

「何ですかいきなり…」

沙紗が沙羅の隣に座る

「快活さ勇ましさ優しさ…」

沙羅がそう言った後軽く咳き込むと沙紗が沙羅の背中を優しくさする

「そんな貴方にだから迦楼羅かるら様が惹かれたのですね」

沙紗の手がピタツと止まった

「何を…」

沙紗が驚いた顔で沙羅を見る

「何を言っているのですか沙羅…侍女たちも言っているでしょう？
貴方と迦楼羅^{かるら}は似合いだと…金色の髪と銀の髪…私は好きですよ？」

沙紗が沙羅の髪を触った

「どんなに他人に褒められようとも…当の方に言われなければそんなこと…意味を成さないでしょう？」

沙羅の声が小さく震えた

「迦楼羅^{かるら}様は貴方に惹かれている」

そう言いながら上がった沙羅の顔にはどことなく陰りがあった

「そんなことは…第一私は…」

「…貴方は抱きしめられたでしょう？」

沙紗の言葉を沙羅が止めた

「沙羅…あれは…」

「私は貴方になりたい…沙紗…どうして…」

沙紗が沙羅の肩に手を置いて言うと言うと沙羅が顔を伏せた

「貴方が私じゃなかったの…？」

沙羅が嗚咽混じりに言った

「沙紗姉様」

泣き疲れた沙羅が眠った後沙紗が沙羅の部屋を出ると沙汰に呼び止められた

「沙汰…」

沙紗が何事もなかったかのように沙汰に微笑を向ける

「沙紗姉様は…僕が嫌いですか？」

沙汰が聞く

「…何を…嫌いなわけがないでしょう？」

沙紗が答えると沙汰が笑顔になった

「大切な弟ですもの」

沙汰の顔が沙紗のその言葉で曇った

「…弟ですか…」

沙汰が小さく呟いた

「どうしたんですかいきなりそんな…」

沙紗が聞く

「沙紗姉様…僕は貴方の弟でしかないのですか？」

沙汰が沙紗の手を掴んで言った

「沙汰…？」

「沙紗」

丁度沙紗の顎が沙汰の肩に乗るように抱きしめられ沙紗が目を見開く

「…慕っています沙紗」

沙汰が言った

いつものようにあの優しい香りがしていつものようにきちんと片付いてくる沙紗の部屋に迦楼羅が足を踏み入れた

「…沙紗？」

いつもと違ったのは灯りが灯っていなかったということ

「だッ；」

暗闇の中で迦楼羅が何かに躓いてコケた

「ッ；；」

額を何かにぶつけた迦楼羅が右掌に温かみを感じソレをペタペタと触るとソレが動いた

「…なんだ？」

「…何だは貴方です」

迦楼羅が呟くと沙紗の声がした

「沙紗…か？；」

迦楼羅が聞く

「…ここは私の部屋です…私がいておかしくはないでしょう」

少し震えた声で沙紗が答えた

「そうだが…いるなら灯りくらい灯さんか； 暗くて何も見えんで

はないか？」

迦楼羅^{かるら}がたぶんそこにいるんであろう沙紗に向かって言う

「…灯けてください…」

少し間を置いて沙紗が言った

「この部屋に…直接…貴方の炎を」

室内灯となる蠟燭に灯りを灯そうとしていた迦楼羅^{かるら}が沙紗の言葉に手を止めた

「…沙紗…？」

いつもと様子が違う沙紗に迦楼羅^{かるら}が声をかけた

「私を…いつかの虎の様にしてください…」

鼻を吸る音と共に沙紗が言う

「…何を…」

「やはりあの時死すべきは私でした…」

消え去りそうに小さい声なのにその沙紗の言葉ははっきりと迦楼羅^{かるら}の耳に届いた

「何を言っているのだ…」

沙紗の言葉に驚いた迦楼羅^{かるら}が言う

「貴方が私の運命をかえた…だから貴方が私の運命を終わらせてください…ッ…お願い…」

沙紗の言葉に小さく嗚咽が混ざった

「泣いて…いるのか？」

迦楼羅^{かるら}が聞く

「あの時私は死すべき存在だった…なのに貴方が私の死に害をなした…だか…」

半分手探りの状態で沙紗の体を見つけた迦楼羅^{かるら}が沙紗を抱きしめた

「…大切なものに害をなすものを手にかけるのは当たり前だと言ったのはお前だろう」

沙紗の耳元で迦楼羅^{かるら}が言う

「ワシは間違っではない」

小さく迦楼羅^{かるら}が言った

「…名を呼べ沙紗」

迦楼羅かるらが言うかるらと沙紗が迦楼羅かるらの服を握り締めた

「迦楼羅…」

「まだだ」

「…迦楼羅…ッ」

「まだ…」

沙紗が迦楼羅かるらの服を掴む力を強めると迦楼羅かるらも沙紗をさらに強く抱きしめる

「…ワシの前では強くなくていい…沙紗…ワシに守らせてくれ…」

迦楼羅かるらが自分の腕の中で泣く沙紗にだけ聞こえるよう小さく言った

「…守らせろ…か」

京助がボソツと言った

「どうしたん？ 竜のボン」

阿修羅あしゅらが京助を見る

「いや…そういう緊那羅きんならもしよっちゅう俺を守るとか言ってるなあ
って…」

京助が言う

「ワシはもう役目などどうでも良かった…ただ沙紗を…」

迦楼羅かるらが自分の両手を見てそれから両手を握った

「役目…」

京助が呟く

「大丈夫だ竜のボン」

阿修羅あしゅらが京助の首に腕をかけて自分の体に寄せた

「緊那羅きんならはちゃんとして自分の意思で竜のボン等の傍にいるんきに…
役目じゃなしに」

阿修羅あしゅらが言う

「だから…安心してさ」

笑いながら阿修羅あしゅらが京助に言った

「…別に俺は…」

京助が阿修羅あしゅらの腕を振り解いて言う

「オライもそうだし：」

阿修羅あしゅらが迦楼羅かるらを見た

「ワシもだ：」

迦楼羅かるらが答えた

「京助：」

迦楼羅かるらが京助をまっすぐ見た

「：ワシが沙紗に出来なかった：してやれなかったことをお前にはしてやりたい」

迦楼羅かるらが言うとき京助が止まった

「竜のボン？」

阿呆面のまま止まった京助の顔の前で阿修羅あしゅらが手を振る

「：言っとくけど俺受けは拒否しますぜ；」

京助が言う

「：オイオイ；」

首をかしげる迦楼羅かるらに変わって阿修羅あしゅらが京助に突っ込んだ

「【時】は来た：そして決まった：」

迦楼羅かるらが言った

「【時】：」

京助が時と繰り返す

「【時】に選ばれたのは：」

迦楼羅かるらが静かに話し始めた

「：沙羅は：？」

震えながら沙紗が聞いた

「：すまないな：俺もまだ力不足だった：」

迦楼羅かるらより背丈の高く長い鮮やかな緑色の髪を三つ編みにした影が

迦楼羅かるらの隣で言った

「：【時】」

廃墟に近くなった屋敷の瓦礫の上から声がした

「今回の【時】は僕達のもの…」

逆行に浮かぶのは赤い瞳の人物

「沙羅をどうするんです…」

沙紗が瓦礫の上の人物に聞く

「【時】の主に捧げる」

赤い瞳が閉じた

「沙羅を返してくださいッ!!」

沙紗がその人物に向かって叫んだ

「うるさいよ…」

赤い瞳が沙紗を鋭く見たが沙紗は怯まず逆にその瞳を睨み返した

「そこに転がっている【時】に選ばれなかった子…君を庇ったんだろ？」

沙紗が目を見開いたまま止まった

「沙紗!!」

迦楼羅かるらが沙紗の元に駆け寄り沙紗を呼ぶ

「君も共犯だよね迦楼羅かるら…君もその子を殺したんだ」

「ッ…貴様…」

赤い瞳が哀れみの色で迦楼羅かるらと沙紗を見ると迦楼羅かるらがその瞳の人物を睨んだ

「人間が招く【時】を僕等はただ導くだけ…面倒くさいよね人間っていうのは…迦楼羅かるら…君は人間に近付きすぎた。その結果…僕等が【時】を手に入れたんだけどね」

雲間から現れた月が照らしたのは横たわり目を閉じた沙汰の顔と風に靡く黒い布

「私は…」

沙紗が震えながら口を開いた

「私が…沙汰を…私があの時やはり死していれば沙汰は…」

「沙紗!!」

沙紗の肩を迦楼羅かるらが掴んだ

「お前のせいではない！ 沙紗！！」

カタカタと小さく震える沙紗を揺すって迦楼羅かるらが強く言う

「沙汰はお前が大切だっただから害をなすものから守っただけだ……！！」

沙紗の目から涙が一筋頬を伝った

「私は……何一つ守れなかったのに……大切なものを……何一つ……」

どこを見ているわけでもなくただ虚ろとなった沙紗の目は黒い水晶の様で迦楼羅かるらは唇を噛んだ

瓦礫の上の人影が二つになったのはいつなのか

赤い瞳の人物が迦楼羅かるらと沙紗に背を向けるともう一つの人影の白い布が風に靡いた

「待たんかッ！！」

迦楼羅かるらが声を上げながら炎を二つの人影めがけて放つと白い布を靡かせた人影が指で宙に何かを書きソレが光った

「またね……」

カチャリという音と共に宙に書いたモノが光り迦楼羅かるらの炎を跳ね返す「っ！！」

跳ね返された炎が沙紗と迦楼羅かるらめがけて迫ってきた

「下がれ！！ さ……」

掴んでいたはずの細い肩が迦楼羅かるらの手を振りほどいて黒い髪が迦楼羅かるらの顔を撫でるとあの優しい香りがした

悲鳴を上げるわけでもない細い体が赤く燃え上がる

「さ……」

目の前で起きていることがまだ理解できない、したくない迦楼羅かるらが炎に向かって手を伸ばすと炎をまとった細い腕が小さな手が伸ばされた

「……迦楼羅……」

悲鳴の代わりに聞こえた自分と呼んだ小さな声に迦楼羅かるらが伸ばされてきた手を握った

「足りないぞ…沙紗…まだワシは…」

「やっと…私は…大切なものを守れたんですね…」

迦楼羅かるらの手を沙紗が握り返すと迦楼羅かるらもまた沙紗の手を握り返す

「だから…私は今幸せです…」

炎の中にかすかに見えたのは微笑む口元

迦楼羅かるらの手を握っていた小さい手から握る力が段々と抜けていくのと同時に迦楼羅かるらの頬を伝った一筋の涙

握っても握り返してこない小さい手を引き寄せ赤く燃える細い体を迦楼羅かるらが抱きしめた

「…か…るら…」

「何だ…」

「……」

迦楼羅かるらが小さく呼ぶ声にこたえても返事は返ってこなかった

「…なくしてから気付く…遅いのに…」

迦楼羅かるらが悲しそうに笑った

「か細い…小さな手を握って…それまでの気持ちたちが全て慕いの気持ちだと…」

迦楼羅かるらがまるで何かを握るように軽く自分の手を握った

「…鳥類…」

京助が迦楼羅かるらに声をかけたがそれからかける言葉が見つからないのか黙り込む

「ワシは…続きが聞きたかった…沙紗の…ワシの名前を呼んだ後に続く言葉を…だからワシは…」

「かるらん!!」

段々と早い口調で自分を責めるように話し出した迦楼羅かるらの言葉を阿修羅あしゅらが止めた

「…もういいやんけ…もう…」

阿修羅あしゅらが膝に置いた自分の両手を握って言った

「もう…自分を許してやりよ…」

泣きそうな顔で阿修羅あしゅらが迦楼羅かるらを見た

「：そうはいかん：ワシは禁忌を犯した：乾闥婆けんたつばは：」

迦楼羅かるらが俯いて言う

「乾闥婆けんたつばはワシの罪の象徴だ：あやつがいるかぎりワシの罪は消えないのだ：」

迦楼羅かるらが目をつけた

「乾闥婆けんたつば：が？」

なんだかわけがわからないっぽい京助がやっと知っている単語を耳にしてすかさず聞いた

「：だがワシは乾闥婆けんたつばを隣に置く：そう決めたのだ」

顔を上げ迦楼羅かるらが京助に微笑を向けた

「乾闥婆けんたつばはワシの罪である以上に：大切なものののだ」

迦楼羅かるらが言う和阿修羅あしゅらがキュッと唇をかみ締めた

「：かるらん：乾闥婆けんたつばは：お」

「言うな阿修羅あしゅら」

もう黙っちゃいられねえぜ的に口を挟んできた阿修羅あしゅらに迦楼羅かるらが言った

「ワシは乾闥婆けんたつばが：あやつがそう言うってくれるまで他人の口からは

聞かん：」

迦楼羅かるらが言う

「ワシは待つ：いつまでもな：」

迦楼羅かるらが暗くなりかけている夕空を見上げると京助も一緒になって見上げた

「あのさ：鳥類」

空を見上げたまま京助が言う

「星って：死んだヤツなんだってよ」

「：は？」

京助がボソツと言うと迦楼羅かるらが疑問形の声を出した

「死んだヤツが：星になってるんだって話」

京助が苦笑いで迦楼羅を見る

「だからなんだ：アレ：いるかもなつてさ」
夕空を指差しながら京助が言う

「その沙紗だかつて：」

京助が指差す夕空を迦楼羅が再び見上げた

「お前のこと見守ってるんちゃうか？」

「竜のボン：」

京助が言う和阿修羅が眉を下げた笑顔で京助を見た

「……そうだな：可愛げなく：意地っ張りだが：な」

迦楼羅がふっと笑って言った

「あ、いたいた！ ご飯できたっちゃ」

緊那羅が小走りで和室に入ってきた

「おお！！ 待ってました！！」

阿修羅が自分の膝をパンツと叩いて言う

「私はハルミママさん呼びに行ってくるっちゃ」

「あ、俺が行くからいいぞ」

緊那羅が縁側の下に脱ぎっぱなしだった慧喜が履いてきたサンダルに足を入れて言う和阿助が立ち上がった

「いいちゃよ私が行くっちゃから：先食べてくれっちゃ」
そう言った緊那羅が歩き出した

「いいってんじゃんか；」

緊那羅の後ろを京助が小走りで追いかけて行く

「：仲良しさんだあねえ：オライ達も食いに：」

「ワシはもうしばらくしたら行く：先に行っている」

阿修羅の誘いを迦楼羅が断った

「つれないねえ； 悲しいわや～：」

阿修羅が溜息を吐きながら廊下に出た

「：星：か：」

迦楼羅が一番星を見上げてふっと笑って呟いた

歩くたびに落ち葉を踏んでカサカサという音がした

「冷めても知らないっちゃよ？」

後ろをついてきていた京助に緊那羅きんならが言う

「俺が行くってんのお前がきたんじゃん； お前が戻れよな」

足早に緊那羅きんならに近付きながら京助が言う

「私の方が先に歩いてるんだっちゃから私がいくっちゃ」

緊那羅きんならが言った

「俺が行くっての！！；」

京助が少し声を大きくして言う

「寒いだろうが」

京助が言うきんならと緊那羅が足を止めた

「：裸足にサンダルじゃん：人一倍寒がりのクセに」

止まった緊那羅きんならの横を京助が通り過ぎる

「戻ってろ」

そう言った京助が足早に社務所へ向かっていった

「：っ：私も行くっちゃッ！！」

緊那羅きんならが駆け出して京助に追いつく

「二人もいらねえだろが；」

隣に並んだ緊那羅きんならを見て京助が言う

「：ばあか」

「痛ッ！！；」

京助が緊那羅きんならの髪を思い切り引っ張った

「何するんだっちゃッ！！；」

頭を押さえた緊那羅きんならが怒鳴る

「何やってるのあんた達は；」

社務所に鍵をかけながら母ハルミが二人を見て言う

「飯だつてさ」

京助が言った後チラリと緊那羅きんならを見る

「さあさ！！ 寒くなってきたしお腹もすいたし！！ 早く戻るわ

よー！！！」

母ハルミが京助と緊那羅きんならの手を引つ張つて駆け出した

「今日は竜田揚げッ!!」

母ハルミが嬉しそうに言う

「母さんや母さんや;」

京助と緊那羅きんならが苦笑いでそんな母ハルミに引つ張られていった

「鼻水出てますよ」

スコンという音と共に後頭部に何かが当たって迦楼羅かるらが振り返ると京助の服を着てエプロンをつけた乾闥婆けんたつばがティッシュの箱を迦楼羅かるらの頭に当てていた

「ご飯できましたって: 緊那羅きんならが言いにきませんでしたか?」

ティッシュを二枚抜き取った乾闥婆けんたつばがソレを迦楼羅かるらの鼻に当てた

「ハルミ殿を呼びに行つた:」

迦楼羅かるらが当てられたティッシュを持ち鼻をかんだ

「呼ばれたならすぐ来てください」

「だっ;」

乾闥婆けんたつばがにつこり笑つて迦楼羅かるらの前髪を引つ張つた

「冷めたらまた文句言うんですから:」

乾闥婆けんたつばが言う

「: 迦楼羅?」

いつもならここで怒鳴るであろう迦楼羅かるらがおとなしいのを不思議に思つた乾闥婆けんたつばが迦楼羅かるらの顔を覗き込んだ

「お腹すきすぎましたか?」

乾闥婆けんたつばが聞く

「いや:」

迦楼羅かるらが首を振つた

「乾闥婆:」

「何ですか?」

迦楼羅が名前を呼ぶと乾闥婆けんたつばがすぐに返事をする

「今お前は幸せか?」

迦楼羅かるらが聞くと乾闥婆けんたつぱがきよとした顔をした

「…は？」

そしてしばらく間を空けた後疑問系で聞き返す

「…行くか…腹が減ってかなわん；」

迦楼羅かるらが立ち上がった

「一体なんなんですか；」

立ち上がった迦楼羅かるらを乾闥婆けんたつぱが見上げた

「別になんでもないぞ？ ホラ！ 行くぞ！」

迦楼羅かるらが乾闥婆けんたつぱに向かって手を差し出した

「立てますよ」

乾闥婆けんたつぱが迦楼羅かるらの手を掴まずに立ち上がると乾闥婆けんたつぱの手を迦楼羅かるらが

掴んだ

「…迦楼羅？；」

驚いた乾闥婆けんたつぱが足を踏ん張った

「冷めるのであろうが！！ たわけッ！」

迦楼羅かるらが怒鳴る

「あらあ！ かるらん君とけんちゃん！ ホラ！ ご飯ご飯！！」

母ハルミが京助きんすけと緊那羅きんならを引き連れて玄関を開けながら迦楼羅かるらと乾

闥婆んだつぱに声をかけた

「先行ってるわよ？」

母ハルミが家の中に入りながら言う

「…行くぞ」

クイツと迦楼羅かるらが乾闥婆けんたつぱの手を引っ張る

「…わかりました」

乾闥婆けんたつぱが溜息を吐きながら言う迦楼羅かるらが何故か微笑んだ

【第九回・四】くり・栗・みつくす（前書き）

スポーツの秋、読書の秋：色々あるけどやっぱり【食欲の秋】が一番だろうということで開催された秋の味覚祭りIN栄野家

【第九回・四】くり・栗・みつくす

「絶対アカンと思う」

中島が言う

「絶対そうだなー!! 夏場とか絶対アカンよなー!!」

坂田が中島に賛同する口調で言った

「いや夏場どうこうより基本的にアカンとおもいますよ俺は…ねえ？」

京助が3馬鹿に同意を求めた

「そうだよねえ…外にいてしかもモロに風とか受けてるしねソレを食わせるってのも…」

南が目を向ける先にあったのは黒板に書かれたご存知愛と勇気の顔を人に食わせる正義のヒーローアンパンマンの絵

「絶対硬いよな」

坂田が言う一同が頷いた

「顔やってソレ食ったやつが食中毒とかありそうだな…現実になったら」

京助が言う

「ってか現実にはいたらかなり怖ええと思いますよん； 頭取れるんだよ？ 頭；」

南が言う

「…アンパンマン実写とかになったらスプラッタホラー映画のなにものでもないよな…アレはアニメだからなあ…顔食うんだし顔」

京助が口の端をあげて言った

「考えてみる…アンパンマンの身長が180?で8頭身だとして」

坂田が言う京助、中島と南がしばし黙った後

「怖ッ!!!」

揃って言った

「そしてソレで【さあ！ 僕の顔をお食べよ】だぞ？」

さらに坂田が言う

「ギャー！！； 想像したら鳥肌立っちゃったよ俺；」

南が腕をさすりながら言う

「でもサア；そう考えると天井マンとかって；中身食わせてるような人で言う脳みそ？」

京助が言った

「；もう俺アンパンマンが幼児向け番組だってこと忘れそう；」

中島が苦笑いで言うと言と黒板の上についている古いスピーカーからザザ；ツとノイズが聞こえ

キンコンカーンコンコン；

とチャイムが鳴った

「お；もうそんな時間なんだ；」

中島が見た時計が指し示していた時刻は午後五時十五分

「外まっくらけ」

南が窓の外を見て言う

「いやいや；熱く討論していると時が経つのを忘れますな」

坂田が立ち上がり黒板に書いてあったアンパンマンを消し始めた

「小腹もすいてきたし；切り上げるか」

京助がギーッと音をさせながら椅子を引いた

「んだねー；そうだ！！」

京助に同意した後南が声を上げた

「何だ；」

中島が聞く

「栗！」

「はあ？；」

南が言う可他三人が疑問系に聞き返した

「お婆ちゃんが栗送ってきたんだけどウチじゃ食いきれないからやれって言われてたんだ！」

南が言う

「栗？ 甘栗？」

坂田が聞き返す

「いんやイガついた栗」

南が答える

「タワシか」

京助が言う

「そうそう！ タワシ！！ …でも忘れてきたんだわコレが」

南が【イヤゝ申し訳ない】的に頭をかきながら言った

「駄目じゃん；」

そんな南に坂田が突っ込む

「明日取りにこいよ休みだし」

南が言った

「もってこいよなー…ムフー； 面倒くせえ…」

「私か弱いですもの…ミナミ…女の子だもん」

坂田が言うとなが人差し指を唇に当ててポーズを取りながら可愛らしく言った

「そういうことは下を取ってから言いなさい」

中島が突っ込む

「いやーん！ 柚汰くんのえーっちーツ！」

「くつつくな！！；」

南が京助に抱きついた

「俺お前が将来本当ソツチの仕事に行かないか不安だよ南君…」

中島が遠い目をして言うとなまたスピーカーからノイズが聞こえてきた

「何してるんだっちゃ…？；」

茶の間の隅にある鞆やパーカーがかけてある物掛けをコマとイヌがじーッと見ているのを不思議に思った緊那羅きんならが聞いた

「…何かあるんだやな」

コマが見上げたまま言う

「何かって…なんなんだっちゃ？」

緊那羅きんならが近づいてきて一緒にあって見上げた

「何かなんだやな」

イヌが言う

「…まさかまた…」

緊那羅きんならが祭りの夜に起こった出来事を思い出して目つきを鋭くして物掛けを見た

「京助のパーカー…」

コマがボソツと言うと緊那羅きんならがすかさず立ち上がって京助のパーカーを掴む

「のポケットなんだやな」

イヌが付け足すと頷いた緊那羅きんならがパーカーのポケットに手を入れた

「…コレ」

ポケットの中で手にした物体を緊那羅きんならがゆっくりと引き出した

「コレは確かこの前…京助が持ってた…」

取り出した袋を見て緊那羅きんならが何かを思い出した

「よこすんだやな!!」

コマが緊那羅きんならの足に捕まって立ち上がりいわゆる「ちんちん」をしなから言う

「早くよこすんだやな!!」

イヌも緊那羅きんならのもう片方の足につかまりちんちんして言った

「あ…うん?」

緊那羅きんならが袋を下に提げると二匹がその袋を爪で破いた

「やっぱりなんだやなー!!」

イヌが嬉しそうに尻尾を振った

「…コレ…何だっちゃ?」

緊那羅きんならが袋から出てきた物体を摘み上げた

「カミカミサラミなんだやな」

コマがソレを口に入れて嬉しそうに噛みだした

「飼い犬の健康を考えたおやつなんだやなVV」

イヌも同じくおいしそうに頬張りながら言う

「：おやつ：；」

二匹が振り切れんばかりに尻尾を降りながら食べるさまを見ていた
緊那羅^{きんなら}が手に持っていたカミカミサラミを少し齧った

「：美味いか？；」

後ろから声をかけられてカミカミサラミを口にくわえたまま緊那羅^{きんなら}が振り返る

「ひょーふへ：；」

カミカミサラミをくわえたまま緊那羅^{きんなら}が言った

「おかえりなんだやな〜ん」

満足したのか前足を舐めりながらコマが言う

「もっと欲しいんだやな」

イヌが京助を見た

「：乞うな；」

京助が薄手のウインドブレーカーを物掛けにかけて制服のボタンを外しながら言う

「ケチーなんだやなー」

イヌがむくれた

「：食べるっちゃ？」

緊那羅^{きんなら}が自分のくわえていたカミカミサラミをイヌに差し出した

「食うんだやな」

イヌが緊那羅の手からカミカミサラミをもらおうと嬉しそうに噛みだした

「美味かったか？」

京助が靴下を脱ぎながら聞く

「特においしいとは：；」

緊那羅^{きんなら}が苦笑いで答えた

「：そーいやお前って好き嫌いあんの？ 何でも食ってるよな」

京助が言う

「え？ 私：は：」

緊那羅きんならがそう言った後しばらく黙った

「…京助は？」

「俺はエビフライと…まあエビフライだ」

緊那羅きんならが聞くと京助が答えた

「私の好きなもの…うーん；」

緊那羅きんならが考え込んだ

「いや； アナタそんな無理して答えなくてもいいですから；」

京助が脱いだ制服を持って立ち上がった

「ところで」

まだ考えている緊那羅きんならに京助が声をかけた

「なんだっちゃ？」

顔を上げた緊那羅きんならが聞き返す

「晩飯何？」

京助の声を同時に京助の腹の虫も鳴いた

「イモか」

京助が並べられた皿々を見て言った

「ハルミママさんが誰かから箱いっぱいもらったらしいんだっちゃ
…それで」

緊那羅きんならがお盆からオカズを並べながら言う

「僕イモ好きー」

悠助がサツマイモご飯の盛られた茶碗えきを慧喜から受け取りながら笑った

「俺もまあ好きだけど…こうも素敵にオンパレードだと…」

席に着いた京助が箸をもって言う

「まだまだ沢山あるのよねえ…」

母ハルミが茶の間に入ってきた

「さすがに飽きるだろ；」

傍にあった大学イモを箸でつまんだ京助が言う

「私も作っててちよっとそう思ったっちゃ；」

緊那羅きんならが苦笑いで言った

「しっかし：本当イモイモだナア；　：美味いけど」
大学イモを飲み込んだ京助が言う

「悠助えきご飯粒えきついてる」

慧喜えきが嬉しそうに悠助の頬からご飯粒を取るとためらいもせずソレを食べた

「あらあらラブラブねえ」

そんな二人を見て母ハルミが笑う

「今更だろ；」

京助がサツマイモご飯をかき込みながら言った

「にしても：イモ：誰かに上げないとわるくなるわねえ」

母ハルミが言う

「結構使えるんだけどね甘いし：お菓子にもなるけどモンブラン：スイートポテト：」

母ハルミがサツマイモでできるお菓子を挙げていった

「モンブランって栗じゃないっけ？」

京助が端をくわえたままで聞く

「あら？　知らないの？　モンブランって栗だけじゃないのよ？」

母ハルミが言う

「俺上に栗が乗ってるケーキがモンブランだと思ってるし：栗：あ」
サツマイモコロツケを端に刺した京助が何かを思い出したらしく声を上げた

「何だっちゃ？；」

隣で醤油に手を伸ばそうとしていた緊那羅きんならが手を止めて京助を見る

「南が栗くれるっていった」

「南君が？」

京助が言うと母ハルミが聞き返した

「僕栗ご飯好きー」

サツマイモご飯をおかわりしていた悠助が言った

「明日取りに行くんだけど：イモと交換でもしてくっか？」

京助が聞く

「あら！！ いいじゃない！ たまにはアンタもいいこと思いつくのねー」

母ハルミが言った

「たまにつてなんだよたまにつて；」

ピルルルルルル：

京助が口の端を上げて言うと言電話が鳴った

「ハイ一番近い人」

母ハルミがすかさず京助を指差して言う

「ヘイヘイ；」

京助が箸を置いて立ち上がった

「栗？」

慧喜えきがきよとした顔で言う

「こんな形しててねー；甘栗とか僕剥くの遅いけど凄く好きなの」
手で栗の形を作った悠助が笑いながら言った

「なんだよ中島かよ；は？ サンマ？；」

電話の相手は中島だったらしく京助が話している

「；秋の味覚万歳だなあ； ；いやウチもイモがさあ；」

片足でもう片方の足を掻きながら京助が言う

「；うん；；；おお！！ ソレナイスじゃん！！」

受話器を持った京助がいきなり大声を出すと一同が顔を上げた

「ウチなら落ち葉もわんさかあるし！ いいねー！！ 明日丁度休みだし！ ；うん；じゃ俺は坂田にかけるからよ」

京助が誰もいない方をむいて手招きのような仕草をしながら話している

「；またなにかやるみたいだっちゃね」

緊那羅きんならがそんな京助を見てボソツと言う

「いいんじゃない？ 楽しいことはしたほうがいいと思うわ」

母ハルミがモヤシの味噌汁を啜りながら言った

「ごちそうさまでしたー」

悠助が小さくゲップをしながら両手を合わせた

「栗にサンマにイモにウサギ」

新聞紙の上に並べられた秋の味覚を見て坂田が言う

「ウサギはアカンだろウサギは；」

京助がクロを抱き上げながら言った

「クロ食べちゃ駄目だよー！！」

悠助が坂田の尻をパスンと叩いた

「境内も綺麗になって一石二鳥ねゝたすかるわゝ」

栗を鍋に入れながら母ハルミが言う

「ですよねッ！！」

坂田が声を大きくして母ハルミを見た

「…って京助君京助君」

そしてその後すぐ京助にカニ歩きで坂田が近付いていく

「なんだよ」

京助が言う

「なんなんだアイツはよッ；」

小声で言いながら坂田がくいつと親指で指した先には母ハルミにべ

つたりの鳥倶婆迦うぐぼか

「ハルミおいちゃんも手伝う」

鳥倶婆迦うぐぼかが長い袖をイガのついた栗に伸ばした

「しかも呼び捨てかよッ！！；」

坂田が小声で怒鳴る

「あらあらありがとうでも怪我するわよ？ほら痛いのかよ？」

母ハルミが鳥倶婆迦うぐぼかに笑いながら言う

「大丈夫だよおいちゃん」

鳥倶婆迦うぐぼかが言う

「いや…なんだか妙に母さんに懐いてんだ」

京助がクロを撫でながら言う

「そりゃ見ればわかるッ!!!;」

坂田がよくわからない動きをしながら小声で叫んだ

「ハルミは優しいからおいちゃん好きなんだ」

「うおおお!!!?;」

すぐ隣から聞こえてきた鳥倶婆迦うぐばかの声に驚いた坂田が京助に抱きついた

「おいちゃん知ってるぞお前はハルミ馬鹿なんだよな」

鳥倶婆迦うぐばかが気の抜けたあのお面の顔を坂田に向けた

「だから勝負だ!!!」

そして無駄に長い袖を坂田に突きつけた

「なッ!!!」

坂田が京助に抱きついたままで眉を上げた

「おいちゃんとどっちがハルミ馬鹿なのか勝負だ!!!」

「オイオイオイオイ; 人の母親で勝負するなよ;」

鳥倶婆迦うぐばかが言うとき京助が突っ込む

「ふ...いいだろう:」

坂田が京助から放れながら言う

「オイってば;」

京助がクロを片手に坂田に突っ込む

「おいちゃんの方がハルミ馬鹿なんだからな」

鳥倶婆迦うぐばかが言う

「俺の方が長いんだもんな~!! ヘッ!!!」

坂田が腰に手を当てて勝ち誇ったように背の低い鳥倶婆迦うぐばかを見下した

「ハルミの胸は柔らかいんだよ」

鳥倶婆迦うぐばかが言うと坂田が止まった

「そしてハルミはいい匂いがするんだ」

鳥倶婆迦うぐばかが更に言う

「おま...」

まるで油の切れたロボットのような動きで坂田が鳥倶婆迦^{うぐばか}の方を見る
「うぐちゃんちよつと来てくれる？」

母ハルミが鳥倶婆迦^{うぐばか}を呼んだ

「うんいいよ」

鳥倶婆迦がソレに答えて母ハルミの元に走っていく

「…オイ?;」

京助が坂田に声をかけた

「…お館さヴあああああああああああッ!!!!!!」

「グハッ!;!;」

坂田が叫びながら京助に抱きついた

「負けたのか!? 俺は負けたのかッ!;!;」

坂田が京助の首根っこを掴んで喚く

「知らんわッ!;!;」

京助が怒鳴る

「俺もう出家する——————ッ!;!;」

オイオイと坂田が嘆いた

「京助と坂田君もいいかしら?」

「ハイ!;!」

「オイ;」

母ハルミが京助と坂田に声をかけると坂田がすかさず返事をしたのに京助が口の端を上げて突っ込んだ

「…見てるなら手伝え;」

母ハルミに栗のイガ剥きを言いつけられた京助が背中に視線を感じ振り向かずに言う

「…ん」

相変わらず初めの一言が聞き取れない話し方で制多迦^{せいたか}が返事をした
「…どうした? 制多迦^{せいたか}」

イガ付きの栗をじーつと見ている制多迦せいたかに坂田が聞いた

「：れウニ？」

制多迦せいたかがイガ栗を指差して聞く

「栗」

京助がイガをペイっと庭に落としながら答える

「：り：」

制多迦せいたかが栗をまたじーつと見る

「：にじゃなく栗：」

ボソツと言った制多迦せいたかがわしつと勢いよく栗を掴んだ

「：痛えんだろ；」

そのまましばらく止まったままだった制多迦せいたかに坂田が言う

「：ん；」

制多迦せいたかが頷いた

「思いつきり掴んだしな；」

京助がまたイガをペイっと庭に落としながら言った

「：二踏んだときも痛かった：；」

制多迦せいたかが海水浴で思い切りふんずけたウニのトゲの記憶を思い出し

ながら言う

「ウニはトゲで栗はイガ」

坂田が箱の中のイガ付き栗を取り出して言う

「似てるけど微妙に違うんよな」

京助が足を組みなおしながら言った

「：ゲとイガ：」

ボソツと言った制多迦せいたかがまたイガ栗をじーつと見る

「：だから：見てるなら手伝えちゅーん；」

京助が制多迦せいたかめがけてイガ投げるとソレが制多迦せいたかの頭に乗った

「：たい；」

イガを取って頭をさすりながら制多迦せいたかが言う

「コレはいてんで剥き剥き」

坂田が制多迦せいたかに軍手を差し出しながら言う制多迦せいたかが少し前のめり

になる

「ハイ起きる」

そんな制多迦せいたかの頭に後ろから矜羯羅こんがらがクロを乗せた

「…んがら；」

頭の上のクロを押さえながら制多迦せいたかが矜羯羅こんがらを見上げた

「お前いつの間になてんだよ；」

京助が矜羯羅こんがらを見て言う

「今だけど…何コレ」

矜羯羅が京助の手の中のイガ栗を見て顔をしかめた

「栗」

坂田と京助がハモって答える

「…ニじゃないんだって」

制多迦せいたかが頭にクロを乗せたままヘラリと笑って言う

「ウニ？ 何ソレ」

矜羯羅こんがらがしかめっ面のままで制多迦せいたかを見た

「ウニってのは…こう…トゲトゲOK？ あ…ン…栗！！ え…」

イガイガOK？」

坂田が何故かエセ外国人に出くわしたときにするような口調で説明する

「…わかんないよ」

矜羯羅こんがらが言う

「だーかーらー； …ちよつと待ってろ」

京助が立ち上がり和室に入っていくと紙とペンを持って戻ってきた

「あのだな…コレが…ウニ！！ んで…コレ…が栗だ！！」

京助が広告の裏に書いたのはどうみても同じものにしか見えない絵

「…コッチが栗か？」

京助の書いた絵を見て坂田が聞く

「ソレはウニ」

京助が答える

「…わかんないよ」

矜羯羅こんがらが言った

「わかるだろー！；　コレどう見てもまんま栗じゃん！！　この立派なイガ！！　ゴッホもビックリして咳がゴッホゴッホだ！！」

京助が言う

「お前さっきソッチがウニって言ってなかったか？」

坂田が突っ込む

「気のせいだ」

京助が言った

「…結局なんなのさコレは」

矜羯羅こんがらが栗を一つ持って聞く

「…り」

制多迦せいたかが言う

「栗？」

矜羯羅こんがらが聞き返すと制多迦がヘラリ笑って頷いた

「…お前よく制多迦せいたかの言いたいこと一言だけでわかるな…」

京助が言う

「最初なんて全然聞き取れねえのによ」

手に持っていたペンをクルクル回しながら京助が言った

「そりゃね…わかるさ」

矜羯羅こんがらがふっと笑って言う

「えっらい自信だナア」

坂田が言った

「まあね」

につこり笑った矜羯羅こんがらが裏手拳で制多迦の頬をパンチした

「…たい；」

制多迦せいたかが矜羯羅こんがらに殴られた頬をさすりながら言う

「…以心伝心か；」

京助が口の端を上げて言った

神社の境内正面にテンコ盛り山盛りに集められた落ち葉の山に向か

ってやってくるのは中島

「よっこら：せつと」

バサバサと袋から落ち葉を出してまた積み上げる

「だいぶ集まったっちゃね」

周りに散らばった落ち葉を緊那羅きんならが箒でかき集めながら言った

「垣根の垣根の曲がり角おゝつと」

後からやってきた南も中島同様袋から落ち葉を出しながら歌う

「ふいゝ…いやいや…すっかり秋だね」

集めた落ち葉を一枚持って南が言った

「肌寒くなってきたしナア：ついこないだまでは暑くて暑くてウダウダしてたのに：北海道の夏って本当短エよなあ…」

そう言って中島が見上げた空は高く青かった

「イモの準備はできたんだやな！！」

ゼンが頭の上にアルミ箔に包まれたイモが入ったザルを乗せてゴと共に駆けてきた

「お！ イモ班一番乗りでご苦労さん！！」

中島が言う

「：ちやつかり一番大きいイモに自分等の名前かいてる辺りしつかりしてるよねえ；」

一番上に乗っていた一番大きなイモであろうそのアルミ箔にはマジックでしっかり【ゼンゴのイモ】とミミズ文字で書かれていた

「早い者勝ちなんだやな」

ゴが笑いながら言う

「こんなデッカイイモ食ったらお前：屁連発すんじゃない？」

中島がそのイモを手にとって言う

「武器になるからいいんだやな」

ゼンが胸を張って言う

「嫌な武器だっちゃね；」

緊那羅きんならが苦笑いで突っ込んだ

「屁ってサア：スカシだとやたら臭エよなあ…」

中島がイモを落ち葉の山に埋めながら言う

「そうそう！！ やたらシリの穴の周りが熱くてさ！！」

南が笑いながら言う

「音がすれば臭くないってアレ絶対嘘だよな」

イモを次々に落ち葉の山に埋める中島がしみじみと言った

「そうなんだっちゃ？」

中島にイモを手渡しながら緊那羅きんならが聞く

「俺もそう思う〜：俺栗食って屁エしたらでっかい音したから臭くないと思ってただけど：きたんですよね後からジワジワと臭いが南が遠い目をして言う

「それがもう臭いのなんのって：よくコントとかで屁したら黄色い空気になるじゃん？ あんなカンジでさ〜； 家族で食ったからもうブツブツ音はするわ臭いわで：ネエ？」

南が【チョイと奥さん】的きんなら手つきで緊那羅にふった

「京助の屁も臭いんだっちゃ；」

緊那羅きんならが言う

「前にこう：握った手を顔の前に出されたかと思ったら：あの時は本気で引っ叩いたっちゃよ；」

緊那羅きんならが溜息をついた

「京助の屁は本当臭いんだやな」

ゼンがウンウン頷く

ざく

「人の屁を話題に上げるな；」

「痛いんだやな――――！！！！！！；」

声を上げたゼンの頭の上にはイガが乗っていた

「お！ 栗班もあがりか」

イモを落ち葉の中に埋め終わった中島が立ち上がった

「ゼンが言いだしっぺじゃないんだやなー！！」

ピーピーゼンが京助に向かって喚く

「よしよし；」

そんなゼンの頭からイガを取って緊那羅きんならが撫でる

「あうゝ；」

ゼンが自分でも頭を撫でた

「痛い痛いゝゝ京助に倍になってとんでけゝなんだやな」
ゴが京助に向かって言う

「飛んでこない飛んでこない」

京助がハッハと笑いながら言う

ざく

「痛い痛い痛い飛んできた飛んできた」

「：お前ナア；」

ハッハと笑いながら坂田が京助の頭の上にイガを乗せた
「おまけで」

坂田がそう言いながらも一個イガを京助の頭に乗せる

「きゃー可愛いゝ！！ 京子ちゃん」

丁度中華娘のお団子ヘアーの様に乗せられたイガを見て南が言う
「体を張って秋を演出してみました」

坂田が言う京助が坂田の頬を引っ張った

「おいちゃんが持つよハルミ」

鳥俱婆迦うぐぼかが母ハルミを見上げて言う

「大丈夫なの？ うぐちゃん」

母ハルミが鳥俱婆迦うぐぼかを見た

「大丈夫だよ」

鳥俱婆迦が軽く胸を張って言ったすぐ傍にあるのはお外で焼肉には
欠かせないアウトドアコンロ

「結構重いのよ？」

母ハルミが物置の中の鳥俱婆迦うぐばかに向かって言う

「やっぱり京助達に：」

「駄目ッ！！」

母ハルミが京助を呼ぼうとすると鳥俱婆迦うぐばかがとめた

「おいちゃん大丈夫だから！！ 大丈夫だからおいちゃんに任せて

よハルミ！！」

鳥俱婆迦うぐばかが長い袖で隠れて見えない手をブンブン上下に振って言う

「うぐちゃん：でもね：」

母ハルミが苦笑いで鳥俱婆迦うぐばかと目線を合わせる

「おいちゃんは決めたんだ！ おいちゃん坂田よりハルミ馬鹿になるんだって！！」

鳥俱婆迦うぐばかが言うと母ハルミがきよとした顔をした

「：坂田君？」

唐突に鳥俱婆迦うぐばかの口から出た坂田の名前を母ハルミが繰り返す

「坂田はハルミが好きなんだよ。そしておいちゃんもハルミが好きなの」

鳥俱婆迦うぐばかが言う

「あらあら」

ソレを聞いた母ハルミが笑った

「ありがとうねうぐちゃんおばさんとっても嬉しいわ」

母ハルミが鳥俱婆迦うぐばかの頭を撫でた

「でもねおばさん：もちろんうぐちゃんも坂田君も悠ちゃんや京助：みんな好きだけど一番好きな人がいるの」

母ハルミが静かに言った

「：竜？」

鳥俱婆迦うぐばかがボソツと言うと母ハルミが頷いた

「：ハルミ：」

「なあに？」

少し間を空けて母ハルミに鳥俱婆迦うぐばかが呼びかけた

「：お母さんって呼んでもいい？」

また少し間を開けて鳥俱婆迦うぐばかが言う

「うんいいわよ？」

母ハルミが言ううぐばかと鳥俱婆迦が躊躇いながら母ハルミの首に腕を回した

「おかあさん……」

鳥俱婆迦うぐばかが小さく言ううぐばかと母ハルミが鳥俱婆迦を抱きしめた

「おいちゃんのお母さんも……ハルミみたいなんだったらいいな……」

お面の顔とは対照的な鳥俱婆迦うぐばかの声を聞いた母ハルミが鳥俱婆迦うぐばかを更に抱きしめた

「臭いよ」

矜羯羅こんがらが煙を上げて燃えている落ち葉の山を見ていった

「仕方ないじゃん；」

そんな矜羯羅こんがらに中島が言う

「知ってる？ 煙っていい女とかいい男の方にいくって」

南がまたしょうもないトリビアを言った

「それ多分ガセ！！ 俺の方に来ない」

坂田が言う

「いやまさにトリビアだろう」

まだ頭にイガを乗せている京助が突っ込んだ

「どうでもいいけど臭いよ」

矜羯羅こんがらが手で煙を払いながら言う

「さつきから矜羯羅こんがらの方にばかり煙がいつてるっちゃね」

緊那羅きんならが言った

「煙は正直なんだやな」

ゴがウンウン頷きながら言う

「見てくれはいいんだやな」

ゼンが矜羯羅こんがらを見て言う

「……なんかムカってきました」

京助が手を上げて発言した

「そーいやタカちゃんは？」

南が制多迦せいたかの姿が見えないのを尋ねた

「悠助と慧喜えきと…庭にいる」

矜羯羅こんがらがまた手で煙を払いながら答えた

「ほっといいのか？」

中島が矜羯羅こんがらに言った

「…もう僕だけじゃないから」

矜羯羅こんがらがふっと笑った

「制多迦せいたかには僕だけじゃないから」

矜羯羅こんがらが言うと3馬鹿と京助そして緊那羅きんならが顔を見合わせた

「【みんな】がいるしね…ツケホ；」

につこり笑って言った矜羯羅こんがらが最後の方で煙に咽た

「ゲホッ； カハッ；」

モロに煙を吸ったのか矜羯羅こんがらが激しく咽る

「この色男さんめ ザマアみろリン」

南がわざとウチワで矜羯羅こんがらの方に煙を差し向ける

「ウーラウラ」

中島もシャツをバフバフさせて煙を差し向けた

「怒るよ…ッ；」

涙目で矜羯羅こんがらが睨む

「男の嫉妬って醜いわァ〜ん」

南がフツと溜息を吐きながらそれでも仰ぐのはやめずにいった

「コレは嫉妬じゃないさ！！ 天罰だ天罰」

中島が更にバフバフしながら言う

「…何してるんだっちゃ…；」

落ち葉を補充しながら緊那羅きんならが呆れ声で言った

「うわー！！ 凄い煙ー！！」

悠助の元気な声が聞こえてきた

「おーう！ 悠！！」

中島が悠助に手を振った

「ケホッ；」

頭に巻いている布で顔を押えた矜羯羅こんがらが数歩後ろに下がった

「…んがら大丈夫？」

咽ている矜羯羅こんがらに悠助と一緒にやってきた制多迦せいたかが声をかけた

「お前等 矜羯羅様こんがらになにしてんだよッ！！」

慧喜えきが中島と南に向かって怒鳴った

「いやあ？ 別に何もしてないよくん？ ただ煙さんがいい男の方

にいっただけのことで」

南がハッハと笑いながら言う

「そう素晴らしい男の方に」

中島もハッハと笑う

「そりゃ矜羯羅様こんがらは綺麗だけどお前等今わざとやってたろッ！！」

慧喜えきが怒鳴る

「そんなこたあないですぜい」

中島が言う

「嘘つけッ！！」

慧喜えきが更に怒鳴った

「…もういいよ慧喜…」

制多迦せいたかに背中を摩られながら矜羯羅こんがらが言う

「でも…ッ！！」

慧喜えきが矜羯羅こんがらを見ると矜羯羅こんがらの隣の制多迦せいたかが嬉しそうに頷いた

「…わかりました…」

ぷうっと膨れつつ慧喜えきが返事をした

「大丈夫？ きよんがらさん」

悠助が矜羯羅こんがらの顔を覗き込んで言う

「…大丈夫だよ…」

何故か嬉しそうに矜羯羅こんがらが言った

「…れしいんだね矜羯羅こんがらも」

制多迦せいたかが言う

「…こじや僕等もみんな一緒だからね…みんな同じに見てくれる」

矜羯羅こんがらの背中から手を離した制多迦せいたかが頭の上にいるクロを乗せ直しながら言った

「…別に」

矜羯羅こんがらがふっと笑って顔を上げた

「君達：覚えておいてね」

中島と南にっこりと笑顔を向けた矜羯羅こんがらが言う和中島と南が顔を見合わせた後揃って三歩歩いた

「オット!! しまったア!!」

そして三歩歩いて立ち止まったところで中島が叫んだ

「どうしたの？」

悠助が聞く

「いっやあゝ：俺等トリ頭だから三歩歩いちゃったら忘れちゃった」
南が【イッケナーイ】的に自分の頭を軽く小突きながら言った

「：自分で自分のこと悪く言ってるような気がするっちゃ：」
また落ち葉を補充しに來た緊那羅きんならがボソツと言う

「馬鹿だね」

慧喜えきが悠助の肩に手を置きながら言った

「馬鹿はおいちゃんツ!!」

家の方から聞こえた鳥俱婆迦うぐばかの声に一同が振り返る

「お!! ばか」

南が手をヒラヒラと振った

「上の名前を抜かすなって言ってるだろうツ!!」

鳥俱婆迦うぐばかがキーキーと喚く

「ホラホラ! うぐちゃん危ないからね?」

アウトドアコンロを二人で運んできた母ハルミが鳥俱婆迦うぐばかに言う

「あ、ごめん：えと：お母さん」

鳥俱婆迦うぐばかが躊躇いがちに言った

「：おかあさん?」

鳥俱婆迦うぐばかが言うと同がきよんととして止まる

「どうしたの皆しておかしな顔になってるわよ？」

アウトドアコンロを下ろした母ハルミが一同を見て言う

「今：うぐちゃんハルミママのことお母さんって言った…」

悠助が言うと同が頷いた

「そうよ？」

母ハルミがにっこり笑って言う

「じゃあうぐちゃんも家族？」

悠助が聞く

「：駄目：だったかな：おいちゃん：」

一同の視線を受けた鳥俱婆迦うぐばかが母ハルミの後ろに隠れるようにして言った

「ハルミみたいなお母さん：いいなって：でも：」

「悠助：」

鳥俱婆迦うぐばかがボソボソと言っている途中で矜羯羅こんがらが悠助の頭の上に手を置いて悠助の名前を呼んだ

「僕このお願い聞いてくれるかな」

矜羯羅こんがらが悠助ににっこりと笑顔を向けた

「生臭いんだやな：」

ゴが自分の手をクンカクンカと嗅ぎながら言う

「じゃあねえだろ； 魚なんだから」

母ハルミの捌いたサンマを水洗いしてソレをゴに手渡しながら京助が言う

「栗ご飯もうすぐだぞ」

「手伝え；」

坂田が炊飯ジャーの前でジャーに表示される時間を見て言うと同京助が突っ込む

「ハルミさんとならともかくなんで俺が男と肩並べてサンマ洗わんとあかんねん」

坂田がへッと笑って言う

「：ダイコン流星剣やったるか；」

京助がボソッと呟いた

「ゼンと一緒にダイコンでもおろしてろ」

京助が言うと坂田とゼンが顔を見合わせた

「ヘイ！！」

「よっしゃなんだやな！！」

坂田がダンッと勢いよく置いたボウルの上にはおろしがね

「うおりゃあああああああ——————！！」
「！！」

ジヨリジヨリジヨリジヨリジヨリジヨリジヨリジヨリジヨリ
ジヨリ

「いっけ——————！！」

坂田の押えるボウルとおろしがねにダイコンを付けて勢いよくすり
おろすのはゼン

「半分に切ってやるとか考えなかったんかい；」

ダイコン（LLサイズっぽいでかさ）を丸まんま一本を両手で持っ
てすりおろすゼンを見て京助が言う

「男なら妥協を許すなゼン！！」

坂田がわけがわからないんだけど妙に説得力のあることを言った

「わかったんだやな————————ッ！！！」

ゼンがそう言って必死でダイコンをすりおろす

「飛び散ってるんだやな」

勢いよくおろしているせいか辺りに飛び散っているすりおろしダイ
コンを見てゴが言う

「男なら細かいことは気にするな！！」

坂田がまたも言う

「後から掃除しろよお前」

京助が坂田に言った

「お願い？」

悠助が矜羯羅こんがらを見上げた

「そう」

矜羯羅こんがらが微笑みながら頷いた

「なに？」

悠助が聞く

「僕のことみんなの様に呼んで欲しいんだ」

矜羯羅こんがらが言う

「矜羯羅様？」

慧喜えきが矜羯羅こんがらを見た

「みんなと…って？」

悠助が首をかしげる

「悠助は僕のことなんて呼んでる？」

矜羯羅が聞くと悠助が少し考えた後

「…きよんがらさん…」

躊躇ちゅうちういがちに答えた

「そうだね…じゃあ制多迦せいたかと慧喜えき…緊那羅きんならは？」

矜羯羅こんがらが聞いた

「え…っとタカちゃん…慧喜えき…緊ちゃん…だよ？」

悠助がそれぞれの顔を見て言う

「僕だけさんがついてるよね」

矜羯羅こんがらが言った

「え…？ あ…うん…」

悠助が頷いた

「…さんって…つけないで欲しいんだけど」

矜羯羅こんがらがしゃがんで悠助と目線を合わせた

「じゃあ…なんて呼べばいいの？」

悠助が聞く

「コンちゃん」

「いやこんがらつちよだろ」

「君たちには聞いてないよ」

南が言う中島も言いそれに矜羯羅こんがらが否定の言葉を投げた

「：悠助の好きに呼んでいいよ」

につこりと笑って矜羯羅こんがらが言う

「矜羯羅様：」

鳥俱婆迦うぐばかがボソツと言う

「じゃあ：コン：ちゃん？」

悠助が小さく言う矜羯羅こんがらが悠助の頭を撫でた

「ありがとう嬉しいよ」

矜羯羅こんがらが立ち上がって鳥俱婆迦うぐばかを見た

「ハルミママさんは鳥俱婆迦うぐばかに【お母さん】って呼ばれるのは：嫌？」

矜羯羅こんがらが母ハルミに聞く

「ううん？ 嫌じゃないわ？ むしろ嬉しいわよ？ 子供が増えたみたいで」

母ハルミが笑って鳥俱婆迦うぐばかの方を見た

「：ハルミ：」

鳥俱婆迦うぐばかが母ハルミを見た後悠助を見た

「うぐちゃん：ハルミママ好きなの？」

悠助が鳥俱婆迦うぐばかに聞くと鳥俱婆迦うぐばかが頷く

「おいちゃんハルミみたいなお母さんだったらいいなって：でも悠助が嫌だって言うならおいちゃん：」

鳥俱婆迦うぐばかが無駄に長い袖をぎゅっと握って俯いた

「ダイイコーンおーろおーしー♪」

京助が六甲おろしの替え歌を歌いながらサンマを持ってやってきた

「おーキタキタ！！」

中島が京助を見て言った

「お？ どうしたばかり」

京助が袖を握って俯いている鳥俱婆迦うぐばかに声をかけた

「あのね京助…」

悠助が京助を見た

「…京助はおいちゃんがハルミをお母さんって呼ぶの…嫌？」

「はあ？」

鳥俱婆迦うぐばかが言っていると京助が疑問系に聞き返す

「ってか…みんな呼び方ちゃうけど母さんのこと【ママ】って呼んでるじゃん」

京助が言う

「そういやそうだよね…ハルミ【ママ】さんって…【ママ】って

【お母さん】って意味だしね」

南が言った

「そうなんだっちゃ？」

緊那羅きんならが中島に聞く

「そうそう【ママ】ってのは日本語にすると【お母さん】なんよ」

中島が答えた

「だから今更」

京助がサンマをザルごと地面に置いた

「…ハルミママ」

悠助がハルミを見ると母ハルミがにっこり微笑んだ

「…うぐちゃん…」

そして次に鳥俱婆迦うぐばかを見る

「あ…あのねっ」

悠助が少し大きな声を出した

「ハルミママは僕と京助のお母さんだけど…でもうぐちゃんもハルミママでいいよ？」

悠助が言う

「だってハルミママはハルミママだし…みんなハルミママって呼んでるしうぐちゃんだけ呼ばないって…変だし…だから…あのね…」

悠助が必死で何かを伝えようとしているのを見て母ハルミが鳥俱婆
迦の背中を軽く押した

「…ハルミ…？」

ソレに少し驚いた鳥俱婆迦が母ハルミを見上げると母ハルミが頷く
「だから…あのね…みんな一緒に…」

「ヘーイ！！　くりごつハアーン！！」

タイミング最悪なところで坂田が炊飯ジャーを持ってやってきた

「待つんだやな坂田ー」

その後から割り箸と紙皿を持ったゼンゴがかけてきた

「…何だよ？；」

静まり返っている上突き刺さるような視線を向けられた坂田が言う

「なんなんだやな？；」

ゼンゴも坂田の後ろに隠れながら言う

「…場の空気読もうね坂田君」

そんな坂田の肩を南が軽く叩いて言う

「だから何なんだっての；」

坂田が南に聞く

「ハルミさんはみんなのお母さんって話」

中島が言う

「は？　ハルミさんがなんだって？」

坂田が真顔で聞き返した

「ハルミママさんはハルミママさんなんだやな」

ゴが言う

「だから…えー…まあ…お母さん？；」

説明が混乱してきた中島が言った

「だからハルミさんがママでなんだって？」

中島に坂田が更に詰め寄って聞く

「…ぐばか」

坂田にタイミング悪く話を折られて止まっていた鳥俱婆迦に制多迦

が声をかけた

「…のね：コレがウニでコッチが栗」

制多迦せいたかが傍にあつた棒で地面になんだかさっき京助が書いたのときほど変わらない二つの絵を描いた

「…なじに見える？　けど違うんだって」

制多迦せいたかが微笑みながら言う

「…制多迦様？」

鳥俱婆迦うぐばかが首をかしげた

「…も似てるんだよねウニと栗」

制多迦せいたかが地面に書いた二つの絵を丸で囲んだ

「…ルミママさんは悠助と京助にとってお母さん：でも僕等もママって呼んでる」

制多迦せいたかが言う

「…からハルミママって呼んでいいと思う」

鳥俱婆迦うぐばかにへ拉里笑いを向けながら制多迦せいたかが言った

「…制多迦様…」

鳥俱婆迦うぐばかがお面の顔を制多迦せいたかに向けた

「…すいませんわけがわかりません」

鳥俱婆迦うぐばかが言うせいたかと制多迦がへ拉里笑いのまま首をかしげた

「…矜羯羅様…；」

しばらく間を空けた後困った鳥俱婆迦うぐばかが矜羯羅こんがらを見上げた

「同じに見えても違ってこと」

矜羯羅こんがらが言う

「ハルミママさんって呼んではいても…本当のお母さんじゃない…
ってこと」

矜羯羅こんがらが制多迦せいたかを見ながら言うせいたかと制多迦がへ拉里笑ったままで頷いた

「ハルミママさんから産まれたのは京助と悠助だけ…」

矜羯羅こんがらの言葉に京助と悠助が顔を見合わせる

「…わかってます…」

鳥俱婆迦うぐばかが俯うつむいて言う

「…でもおいちゃんは…」

顔を上げた鳥俱婆迦うぐばかが母ハルミをチラッと見た

「でも私もハルミママさんって…呼んでるっちゃ…」

緊那羅きんならがボソツと言う

「…だから呼ぶだけならいいんじゃないって言いたい…とか？」

南みなが制多迦せいたかを見る

「そうだと思おもうよ」

矜羯羅こんがらが言ういと制多迦せいたかが頷うなづき頭かぶの上うへのクロがずり落ちそうになった

「まあ…アレだな」

京助きょうすけの声こゑとかぱっという音おとと共に落ち葉ちりばが燃える煙けむりとは打うって変わかわっていい匂においの煙けむり…もとい湯気ゆきが上がる

「あッ！！； 京助きょうすけずるいんだやなッ！！；」

栗くりご飯ごはんが入いっている炊飯炊飯ジャーを開ひらけた京助きょうすけが紙皿しづにソレを盛もる

「悠」

そしてジャーの蓋ふたを閉しめると悠助ゆうすけを手招てまねきして呼よんだ

「…何？」

悠助ゆうすけが京助きょうすけに近付きつくと京助きょうすけが悠助ゆうすけになにやらボソボソと耳打みみうちをし始はじめる

「さあ！ じゃサンマ焼やいちゃいましょうか！！」

パンツと手を打うって母ハルミが言う

「矜羯羅君こんがらとタカちゃん」

母ハルミに名前なを呼よばれた矜羯羅こんがらと制多迦せいたかが自分自分に向むかって指さしを差さすと母ハルミが頷うなづく

「働はたらかざるもの食くうべからず！！ 手伝てでんって頂戴ていだい」

につこり笑わらった母ハルミの手てには二本ふたぽんのウチワがああった

「イモ…イモイモ…ホックホク」

中島なかじまが火バサミで落ち葉ちりばの中からアルミ箔はくにくるまれたイモを探さがし始はじめる

「隊長！！ 第一村人発見です！！」

「でかした！ 早速取り掛かれ！！」

同じく火バサミでイモを搜索していた坂田が発見したという南が
命令口調で言った

「蝶の様に舞い…」

坂田がどこからともなく割り箸を一本取り出した

「蜂の様に刺す——————————————————————
——ッ！！」

そしてその箸を見つけたイモにブツ刺した

「…どうだっちゃ？」

しばしの沈黙の後 緊那羅きんならが聞く

「…スミュージング」

坂田が爽やかな笑顔で親指を立てた

「第一村人合格！！ 次探せ次！！」

どうやら中まで火が通っていたらしいイモを退けると3馬鹿がまた
イモを探し始めた

「ゼン等のでっかいイモを早く見つけてほしいんだやな」

ゼンが尻尾を振りながら中島の背中に負ぶさった

「あんだだけでっかいならたぶんまだ生」

中島が落ち葉の山を崩しながら言う

「ぶー」

ゼンがむくれる

「緊那羅きんなら何してるの？」

悠助が京助に呼ばれたためにヒマしていた慧喜えきが煙に巻かれながら
もその場から離れない緊那羅きんならに聞いた

「ここあったかいんだっちゃ…ぷ；」

手で煙を払いながら緊那羅きんならが言う

「さっきからラムちゃんの方にはっかり煙いつてるねえ…」

イモを見つけては箸を刺すを繰り返していた南が言う

「俺の方にはこねえしよ」

坂田が言う

「煙は正直なんだやな」

ゼンが中島の背中でボソツと言う

「自然は嘘をつかないんだやな」

坂田の隣にいたゴも言う

「：オットオ！！ 手が滑っちゃったア！！」

「だっ；」

坂田が笑顔で火バサミでゴの頭を叩いた

「あらコツチはもつと激しく手が滑ったー」

「だっ；」

中島が坂田と同じく火バサミで背中にいたゼンを叩いた

「痛いんだやな——————ッ！！；」

ゼンゴがハモって声を上げた

「：何してるんだっちゃん；；」

煙に巻かれながら緊那羅きんならがボソツと言った

「：いつまでやればいいわけ？」

矜羯羅こんがらがウチワをハタハタと動かしながら呟く

「サンマが焼けるまでよ」

母ハルミがアウトドアコンロの上でサンマを焼きながら答えた

「：制多迦せいたか：クロ焼かないようにね」

制多迦せいたかの頭の上からずり落ちてきたクロを見て矜羯羅こんがらが言うたかと制多せい迦いが慌たかててクロを支えた

「楽しいわあゝ：大家族ってきつとこんなカンジなのね」

母ハルミが嬉しそうに言った

「ハルミママ様こっち焦えきげてる」

悠助を京助に取られた慧喜えきが真ん中のサンマを指差して言う

「あらあら大変；」

母ハルミが長箸でそのサンマをひっくり返した

「：矜羯羅君達こんがらって家族は？」

母ハルミが突然聞くとハタと矜羯羅こんがらが仰ぐ手を止めた

「：いない」

慧喜えきが答える

「僕等もそうだけど：緊那羅達きんならにもいないよ：」

矜羯羅こんがらがゆっくりウチワを動かし始めた

「あら！！　じゃあ丁度いいじゃない」

ソレを聞いた母ハルミが手を叩いて笑顔で言った

「：ハルミママ様？；」

母ハルミが大きな声を出し驚いた慧喜えきが母ハルミに声をかける

「みんなうちの子になっちゃいなさい」

母ハルミがにっこり笑って言う

「：は？；」

母ハルミの言葉に矜羯羅こんがらが再び手を止めた

「無理だよ：」

そしてしばらく間を開けた後静かに言った

「あら？　どうして？　別に私が産んだわけじゃないけど息子みた

いなものだわ」

にっこり笑顔を矜羯羅こんがらに向けて母ハルミが言う

「僕等はコッチに住めないからね：」

「住めなくなったっていいじゃない」

矜羯羅こんがらが言うと母ハルミが少し大きな声ですぐに言った

「いつでも帰ってきなさい？　いいわね？　決まりッ！！　ハイ！

！　お皿ッ」

母ハルミが一人で勝手に完結させて慧喜えきに皿を取るように言う

「もちろん慧喜えきちゃんもタカちゃんもよ？　みんな私の子供になっ

ちやいなさい」

慧喜えきが差し出した紙皿にサンマを取りながら母ハルミが言う

「いいわね？」

母ハルミが顔を上げて制多迦せいたかと矜羯羅こんがらを見た

「返事は？ お母さんの言うことは聞くものよ？」

腰に手を当てた母ハルミが言う

「…わかったよ」

スコーン

「矜羯羅様！！；」

矜羯羅がふっと笑って言うと言と箸が一本華麗に飛んで矜羯羅の額にジャストヒットしたのを見て慧喜が声を上げる

「返事はハイと一回！ 元気よくッ！！」

母ハルミが言う

「…い；」

ソレを見ていた制多迦が恐る恐る返事をした

ワイワイそれぞれやっているサンマチームとイモチーム
そのどれにも入れない鳥俱婆迦がぼつんと立っている

「……」

風で飛んできた落ち葉が鳥俱婆迦の足に絡んだ

「うぐちゃん」

不意に名前を呼ばれて鳥俱婆迦が顔を上げるとそこには悠助と京助

「食え」

京助が皿に盛られた栗ご飯をずいっと鳥俱婆迦の前に出した

「え…？」

鳥俱婆迦が栗ご飯を見てそれから京助を見上げた

「俺等味見班」

ニーツと京助が笑った

「さつき僕も食べたのーおいしかったよ」

悠助が笑って言った

「…いいの？」

鳥俱婆迦が恐る恐る皿を手にする

「駄目だったら持ってこねえって」

京助がしゃがんで言う

「そんな代わり感想を率直に簡潔にわかりやすく述べることッ」

そう言って京助が鳥俱婆迦うぐばかのお面の額に書かれた【笑】を突付いた

「お前外見インパクトあるくせにツツコミが弱いんだよなあ…突っ込め」

皿を持ったまま止まっていた鳥俱婆迦うぐばかに京助が言う

「お面外さないと食べられないよ？ うぐちゃん」

悠助が言う

「あ…でもおいちゃん…」

悠助の言葉に鳥俱婆迦うぐばかがどもりながら何かを言おうとすると京助が

悠助の背中を押して二人して鳥俱婆迦うぐばかに背を向けた

「京助？」

悠助がきょとんとして京助を見る

「はよ食え」

悠助の頭を押えた京助が鳥俱婆迦うぐばかに言った

「…う…ん」

鳥俱婆迦うぐばかが小さく頷いた

「…おいしい」

鳥俱婆迦うぐばかが言っていると京助がゆっくり振り向いた

「そっか」

そして口の端を上げて京助が笑った

「でしょ？」

京助に頭を押えられていた悠助も鳥俱婆迦うぐばかの方を見て笑いながら言う

「うおーい！！ イモ焼けたぞー！！」

中島が叫んだ

「サンマもだいぶ焼けたわよー」

そしてそんな中島に対抗するかのように母ハルミ言った

「…だってさ」

京助が悠助と鳥俱婆迦うぐばかをチラッと見る

「：焼けたって」

今度は悠助が鳥俱婆迦うぐばかをチラッと見た

「：焼けたの？」

鳥俱婆迦うぐばかが京助と悠助をチラッと見返した

「じゃ：行きますか」

京助が言って歩き出した

「うぐちゃん」

悠助が鳥俱婆迦うぐばかの長い袖を引っ張った

「早く行かないとおっきなイモなくなっちゃうよ」

びろゝんつと鳥俱婆迦うぐばかの袖を悠助が引っ張ると鳥俱婆迦うぐばかが片足を一歩前に出した

「あ：うん：」

どことなく遠慮しているような態度で鳥俱婆迦うぐばかがもう一步踏み出すのを見た京助が頭を掻いた後 鳥俱婆迦うぐばかの後ろに回った

「言っただろゝ：突っ込めよな：ッ！」

「うわっ；」

「あゝ！ ずるいゝ！！」

京助が鳥俱婆迦うぐばかを肩に担いで小走りで走り出すとその後ろを悠助がついてきた

「ヘイ！ ハンコお願いします」

母ハルミの傍に鳥俱婆迦うぐばかを下ろしながら京助が言う

「イモ判ならヘイ！ お待ち！！」

アルミ箔にくるまれたイモをカゴに入れた南が笑って言った

「ゴ等のがないんだやな」

ゴがカゴの中を見て言う

「だあからでつかくてまだ生」

坂田が軍手を履いた手にイモを持ってソレをカゴの中に入れながら言う

「ふー！！」

ゼンゴが揃って頬を膨らませる

「サンマから食べるからいいんだやな」

ゼンが尻尾を振って母ハルミを見た

「ハイハイ」

母ハルミが紙皿に焼けたサンマを乗せてゼンに手渡した

「いいにおいなんだやな……」

ゼンゴが揃ってサンマから上がる素晴らしき秋の香りを犬嗅覚全開で吸い込み思い切り幸せそうな顔をした

「うぐちゃんもいる？」

母ハルミが鳥倶婆迦うぐばかに声をかけると鳥倶婆迦うぐばかがビクツとした

「え……おいちゃん……？」

「栗ご飯もあるっちゃ」

鳥倶婆迦うぐばかが自分を指差して言うきんならと緊那羅が紙皿に乗った栗ご飯おにぎりを差し出した

「お……！ 緊那羅きんならナイス！ コレだと食いやすいな」

中島が親指を立てた

「自分の分は自分で作ってくれっちゃ」

鳥倶婆迦うぐばかに差し出したおにぎりを取ろうとした中島に緊那羅きんならが言う

「ぶー！！」

緊那羅きんならが言うきんならと3馬鹿と京助が揃って頬を膨らます

「悠助、はいあーん」

「あーん」

その横でラブラブっぷりを炸裂させている慧喜えきと悠助を見て制多迦せいたかがヘラリ笑う

「おいちゃん……」

「うら」

спан

鳥俱婆迦うぐばかが緊那羅きんならが差し出された栗ご飯おにぎりの皿を持ったまま
咄くと京助が新聞紙で即席で作ったハリセンで攻撃した

「人をむやみに叩くんじゃないッ!!」

スコーン

そして次の瞬間母ハルミの手から吹っ飛んできた一本の箸が京助の
後頭部に刺さった

「…ハルミさん素敵だナア…」

坂田が明後日の方向を見ながらボソッと呟いた

「お前一回眼科行つてこい;」

京助が坂田に言った

「…どしたんソレ」

「別に…」

南が矜羯羅こんがらの額が一点赤くなっているのに気付き聞くと矜羯羅こんがらがボ
ソッと答える

「…お母さんって…みんなこんな?」

額を押えながら矜羯羅こんがらが聞く

「は? …お母さん…?」

南が聞き返した声で中島と坂田も矜羯羅こんがらを見た

「俺はハルミさんが母さんだったら手となり足となり…」

坂田が語り始める

「母親だから」

南が突っ込むと坂田が止まった

「近親相姦できません」

中島が更に突っ込む

「…他人でよかった…」

坂田が額の汗を拭いながら安堵の息を吐い

「コレやる」

京助が新聞紙で作ったハリセンを鳥俱婆迦うぐばかの前に差し出した

「え…?」

栗ご飯おにぎりののった皿を持っていた鳥俱婆迦うぐばかが京助を見上げた
「さっきも言ったようにお前は外見インパクトあるのにツツコミが
ヨッワイー！！ つーことでハリセンを授与」

京助がパスパスと手にハリセンを打ち付けながら言う

「突っ込みイコールハリセン」

京助が言う

「…あ…りがとう…」

鳥俱婆迦うぐばかが躊躇いながら京助にお礼を言う

「いらなかったらちゃんといらないって言わないと駄目だっちゃよ
？」

そして緊那羅きんならが突っ込む

「ナイス突っ込みラムちゃん」

おそらく自分で握ったであろう栗ご飯おにぎりを片手に南がナイス
！ と親指を立てた

「…本当お前突っ込み上手くなったよな…」

京助がボソツと言う

「そりゃ…コレだけボケがいれば誰かが突っ込まなきゃでしょねえ
？」

母ハルミが栗ご飯をにぎりながら言った

「ですよねッ！！」

母ハルミの横で同じく栗ご飯おにぎりを作成していた坂田が声を高
めて言う

「坂田も立派なボケ要員に数えられてると思うんだやな」

サンマを食べ終わったゴができたてのおにぎりに手を伸ばしながら
言った

「…スッゲエワイルドな食い方してるヤツがいるし」

ふと顔を上げた中島が言った

「…何？」

サンマの頭を尻尾を持ち嚙り付いていた矜羯羅こんがらが中島の言葉と視線

に反応して手を止めた

「：お前なあ； フランス料理を食べてますってえ顔してんのにそ
おいしい方しますか：」

中島が言う

「悪い？ だってこの方が食べやすいし」

矜羯羅こんがらがもくもくと食べながら答えた

「：美形になりきれてない美形カア：俺と一緒にだな」

「矜羯羅様とお前を一緒にするなよ」

南がふつと髪をかき上げながら言う^{えき}と慧喜が間髪いれずに突っ込んだ

「ナイス突っ込み慧喜！！」

京助が親指を立てて言う

「本当ボケばっかだっちゃね：；」

ぼかんとしている鳥俱婆迦うぐばかの隣で緊那羅きんならが言った

「うおーい出遅れてるぞばか」

坂田が鳥俱婆迦うぐばかに声をかけた

「ツ：おいちゃんばかじゃなく鳥俱婆迦うぐばかだっ！！」

スパア——————————————ン！！

秋空高く響いたなんとも気持ちのいいハリセンの音

「：いいねえ：」

「風流だな」

「これぞ突っ込み」

南と中島そして京助がしみじみと言い頷く

「：やるな貴様：」

後頭部に思い切りツツコミを食らった坂田がずり落ちたメガネを上
げながら鳥俱婆迦うぐばかを見た

「あら大丈夫？ 坂田君」

そんな坂田の後頭部を母ハルミが撫でた

「あ、固まった」

南が呟く

「あ、震えだした」

中島がソレに続く

「…阿呆だ阿呆；」

京助が口の端を上げて言う

「だッ…だだだだいじょうブイですハルミさんッ！！」

坂田がかなり動揺した口調で言った

「駄目ようぐちゃんむやみに人を叩いちや」

母ハルミが鳥俱婆迦うぐぼかの頭を軽く小突いた

「あ…ご…めんなさい…」

謝うぐぼかった鳥俱婆迦うぐぼかの声はどことなく嬉しそうにも聞こえた

「あ…制多迦せいたかさ…」

スッコー——————————————————

慧喜えきがコックリと船を漕ぎ出していた制多迦せいたかに声をかけている横からお約束に飛んできた玉が制多迦せいたかの額に見事ヒットする

「凄いんだやな…」

口の周りにお弁当兼非常食といわんばかりにご飯粒をつけたゼンが呟いた

「ほぼ真ん中なんだやな」

同じようにご飯粒を口の周りにつけながらまだモフモフと栗ご飯おにぎりを食べながらゴも言った

「矜羯羅君こんがらも！！」

矜羯羅こんがらが指で玉をはじいたのを見たのか母ハルミが言う

「人に物をぶつけちゃ駄目よ！？」

母ハルミが少し声を大きくして言った

「…わ…」

溜息交じりで何か言おうとした矜羯羅こんがらがふと言葉を止めて母ハルミを見た

「…はい…」

そして小さく返事をしたのを聞いた母ハルミがにっこりと笑った

「うつまっ」

黄色くそしてやわらかく火が通ったイモに嚙り付いた坂田が言った

「ウマウマ」

南が熱いのかハフハフとしながらイモを頬張る

「コレでみんなして屁ブツプーだねえ」

やつのことで熱いイモを飲み込んだ南がイモを食べている一同を見て言った

「ゼン等のはまだ焼けないんだやな…」

もうくすぶりだした落ち葉の山をゼンゴがじーっと見ている

「欲たけてでっかいの取るからだろが」

京助が最後の一口を口に放り入れて言う

「ぶー!!」

京助の言葉にゼンゴがそろって膨れた

「私の半分あげるっちゃ」

そんなゼンゴに緊那羅きんならが自分のイモを半分差し出した

「あ…おいちゃんもあげる」

お面の下から口だけを出していた鳥倶婆迦うぐぼかがお面を直して緊那羅きんならと同じくゼンゴにイモを差し出した

「いいんだやな？」

ゼンが鳥倶婆迦うぐぼかを見上げると鳥倶婆迦うぐぼかが頷いた

「もうお腹いっぱいだからおいちゃん」

けふっとゲップまじりに鳥倶婆迦うぐぼかが言う

「いいやつなんだやなー!!」

ゴがイモを受け取るとキラキラした眼差しで鳥倶婆迦うぐぼかを見た

「ありがとなんだやなー!!」

ゼンが鳥倶婆迦うぐぼかに抱きついた

「うわ」

「おっと；」

反動でよろけた鳥俱婆迦うぐばかを中島が支えた

「危ないでしょ！ メっ！！」

南がゼンゴに向かって言う

「愛情表現なんだやな」

鳥俱婆迦うぐばかに抱きついたままでゼンが言った

「…お前はまだ食ってたのか；」

ゲップをしながら指を舐めていた京助が今だもくもくと皿に避けてあったサンマを食べている矜羯羅こんがらに言った

「悪い？」

サンマから少し口を離した矜羯羅こんがらが言う

「いいのいいの！！ 残っちゃ勿体無いでしょ？」

そんな矜羯羅こんがらに母ハルミが三個残った栗ご飯おにぎりを差し出した

「沢山食べなさい」

そしてにっこり笑う

「…はい」

少し間を開けて返事をした矜羯羅こんがらを見て制多迦せいたかが微笑んだ

「…うれしい？ 矜羯羅こんがら」

そして頭からずり落ちてきたクロを抱いて矜羯羅こんがらに聞く

「…何が」

矜羯羅こんがらが綺麗に骨と頭と尻尾になったサンマを食べカスが詰まれた皿の上に置くと今度はおにぎりを手にとった

「…くは嬉しいよ…お母さん」

制多迦せいたかが言う

「…そう…」

おにぎりに口をつけた矜羯羅こんがらがボソツと言った

「コンちゃんもタカちゃんもうぐちゃんも家族って本当？」

誰から聞いたのか悠助が嬉しそうに慧喜えきと共にやってきた

「…ん」

制多迦^{せいたか}が頷く

「じゃあお兄さんだねー！！ 京助よりお兄さん！」

悠助が言う

「俺は？」

慧喜^{えき}が聞く

「僕のお嫁さん」

悠助が答えると慧喜^{えき}が本当嬉しくて仕方がないってカンジで悠助を抱きしめた

「かるらんもけんちゃんもみんな家族っ」

慧喜^{えき}を抱きしめ返しながら悠助が言う

「…大家族化計画」

京助がボソツと言った

「あら…いいじゃない？ 寂しくないし…」

母ハルミがサンマが乗っていた焼き網のコゲをガリガリと箸で落としながら言う

「お帰りが言ってもらえることとお帰りが言えること…家族がいないとできないでしょ」

母ハルミが言うのと京助が嬉しそうな悠助を見て頭を掻いた

「…だな」

京助が小さく言うのと母ハルミが笑った

プー————
—————
— …

「…長つげエ…」

坂田がボソツと言うのと制多迦^{せいたか}がヘラリ笑って頭を掻いた

「長さじゃタカちゃんがダントツだったねえ」

南が笑いながら言う

「臭さはドッコイドッコイだったな」

京助が言う

「えー…京助のが臭かったよ」

悠助が慧喜えきの膝の上から言う

「俺もそう思う」

慧喜が悠助に賛同した

「…何の競い合いしてるんだっちゃ…」

「屁」

緊那羅きんならが聞くと3馬鹿と京助が揃って答えそして制多迦せいたかが頷いた

「さっきの匂いまだこもってるんだけど」

矜羯羅こんがらが器に入ったカリントウと齧りながら言った

「…お前はまだ食うのか」

頬杖をつきながらカリントウをボリボリ齧る矜羯羅こんがらを見て中島が言う

「コンちゃんの胃袋四次元ポケット」

南が旧ドラえもんの声真似をして言う

「…似ってねえ…」

坂田が突っ込んだ

「…突っ込めったろ」

「えっ」

京助が黙っていた鳥俱婆迦うぐばかを小突いた

「何のためにソレやったと思ってんだ」

京助が鳥俱婆迦うぐばかの膝元においてある新聞紙で作られたハリセンを持つて言う

「…」

「…何のためなの？」

鳥俱婆迦うぐばかが聞いた

「突っ込み」

南と坂田がハモって言う

「コレはハリセンって言ってさ…なんだ…アレ…漫才の剣…いわ

ば漫才剣だ」

坂田がまたまどろっこしくわけのわからない説明をした

「漫才剣？」

鳥俱婆迦うぐばかがハリセンを見て言う

「…おんまえはまたわけのわからん名称をつける…」

京助が言うのと坂田がまかせろといわんばかりに胸を張った

「言ったろ？ 突っ込め。少なくともココ…俺ン家じゃ突込みが弱いとやってけねえぞ」

京助がハリセン（漫才剣）を烏俱婆迦に差し出した

「キヤラを立てないとねえ」

南がハツハと笑う

プー
— — — — — — — — — — — — — — — —
— — — — — — — — — — — — — — — —
— — — — — — — — — — — — — — — —

「…さつきより長つげえ…」

中島が言うのと制多迦がヘラリ笑って少し照れながら頭を掻いた

「汚いよ」

スコ
— — — — — — — — — — — — — — — —

カリントウを食べつくした矜羯羅が指ではじいた玉が制多迦に直撃した

「いいじゃんいいじゃん…出るもの拒まず!!」

坂田が言う

「…臭くないと良いんだけどね」

矜羯羅がチラツと京助を横目で見るとソレにつられるように一同の視線が京助に注がれた

「…なんだよ；」

複数の視線に一人で対抗しながら京助が言う

「それだけ臭かったんだと思うっちゃ」

緊那羅がボソツと言った

「臭いよね京助のは」

「俺も同感」

「ドリフの世界だよな…こう…家が壊れますってカンジに」

3馬鹿がテンポよく京助の屁の臭さを語る

「やかましいッ!;俺だって好きで臭い屁出して……」

ブウー——————…

「クッサイッ!!!!;」

スッパア——————
————————ン!!

怒鳴ったことで肛門様が緩んだのか京助が屁をすると一番近くでソレをかいた鳥倶婆迦うぐぼかが手にしていたハリセンで勢いよく京助の頭をぶっ叩いた

「ナースツツコミング!!」

坂田が拍手する

「その調子その調子!!」

南も同じく笑いながら拍手をする

「できんじゃんツツコミ」

中島が手で臭気を払いながら笑った

「…さい;」

制多迦せいたかが言ってハタハタと手で臭気を払う

「…なんでこんなに臭いのさ…」

頭の布で鼻を覆った矜羯羅こんがらが顔をしかめて批難する

「俺の腸に聞け;」

京助が言った

「くしゃいゝ;」

鼻をつまんだ悠助を慧喜えきが自分の胸に埋めた

「同じもの食べても何で京助だけこんなに臭いんだっちゃ…;」

緊那羅^{きんなら}も手で臭気を払いながら言う

「だから！ 俺の腸に聞けつつーの！…；」

批難ゴーゴー言われまくりの京助がガツテム！！ ポーズで怒鳴った

「…なんだかたのしそうなんだやな…；」

家の中から聞こえてくるギャーギャーという騒ぎ声を聞いてゴが言
った

「まだ焼けないんだやな…；」

ゼンが燃えカスとなりつつある落ち葉の山の中に割り箸を突っ込ん
で呟いた

「…ぷー…ー…ー…；」

まだ焼けない大きなイモを見てゼンゴが揃って頬を膨らませた

【第九回・伍】散歩道（前書き）

坂田組の重役である柴田は年齢不詳から始まってとにかく謎が多い。
坂田はそれが気に食わないらしく…

【第九回・伍】散歩道

「復刻版だつてさ」

学校帰りに寄ったセブンイレブンのレジの前の棚を見て南が言う

「へー：つてか：俺こんな箱ん時のポッキーなんて知らねえよ；」

京助が並べられていたポッキーの箱を手にとって言った

「うわー！！ このペコちゃん微妙に頭の毛コスケてる！！」

南がミルキーを見て言う

【解説しよう。コスケてるとは色が微妙に落ちて薄くなっているときによく使う用語である】

「ココまで昔再現してるのか：やるなセブンめ：」

中島がパックに入ったバンホーテンのココアを持ってきて言った

「パックンチョコとかあったねー！俺コレの絵を先に舐めてそれから食つてたナア」

南が笑いながら言う

「俺はコレ：チョコタバコつての？よくくわえてこう：プハーとかやつてたわけよ」

京助がタバコを持つ手真似をしながら言った

「：低レベルだナア；お前等；」

レジで会計をしていた坂田が突っ込む

「なにおう！！懐かしき時代を思い返す純粋な少年に向かって何てこというんだお前様！」

南が坂田を指差して言う

「あ、チーズおかきだ」

中島が棚の下の方にあつた復刻版のチーズおかきを見つけて言った

「そーいや柴田さん好きだったよなコレ」

京助がチーズおかきを手にとって坂田に見せた

「…まあな」

坂田が言う

「京助、ソレ持ってきて」

少し間を置いて坂田が京助に言った

「ありがとうございますあゝ」

【ズきり】と書かれていない方のドアから外に出ると少しミズレ混じりの空模様だった

「ヒョー！！； 寒みい寒みい；」

中島が学生服のポケットに手を入れた

「毎年毎年思うけどよく越してるよなゝ…冬」

京助が言う

「だよねー…； 今で寒い言ってるコレからまだ寒くなって…ソレをよく乗り越えてるよ俺等…偉いねえ」

南が買った肉まんに頬擦りしながら言う

「そいや坂田…柴田さんどうしてる？」

京助が坂田に聞いた

「柴田？ あ…あゝ…まあ…怪我也も治って元気してる」
一瞬きよんとした坂田がどもりながら答えた

「最近見ないよな柴田さん」

中島が言う

「そっか？」

坂田が言った

「前はよく散歩とかしてるの見かけたけど」

坂田の家にわりと近いところに住んでいる南が言う

「仕事とか忙しいのか」

京助が聞く

「まあな…そんなカンジ？ 俺もあんま会わねえし…部屋いって
もいねえし」

坂田がチラッと自分の持つ買い物袋の中に見えるチーズおかきを見た

「祭りのときに怪我してから……だなあ……よく一人でいなくなんだよ
柴田」

坂田が言う

「どこいったのか聞いても皆しらねえっていうしよー……」

微妙に白く見える溜息を坂田が吐いた

「彼女さんでもできたのかねえ……柴田さん」

中島が言う

「もう結構いい年なんじゃないのか？　柴田さん……いくつ？」

南が坂田に聞くと坂田が指を折りながら何かを考え始めた

「……知らん……」

そして答える

「俺たぶん生まれる前からいるんだろうけど……外見も何も全然変わ
ってねえ気がする……」

坂田が言う

「……そうなのか？」

京助が聞くと坂田が頷いた

「……坂田家七不思議その一……柴田さんの年齢……」

南がいう

「なんだよソレは……七不思議ってことはまだ六つも不思議がある
のか俺の家に……」

坂田が突っ込む

「探せばね……」

南がハッハと笑って言った

「ちなみに京助の家の七不思議は完成済み」

「はッ！……」

南が京助に向かって言うのと京助が声を上げた

「まあ……京助の家はわかるよな」

坂田が頷く

「俺もそう思う」

中島がストローでココアを飲みながら頷く

「何でだよ；」

京助が聞いた

「だってお前【類】だし」

南が京助を指差して言う

「うん主体だし」

坂田も言う

「やーおめでとう」

中島が京助の肩を叩いた

「何がだ；」

京助が裏手で中島に突っ込んだ

「あれ？ アレってラムちゃんちやいますか？」

南が京助の肩をつかんで言った

「あ、本当だ緊那羅きんならじゃん」

中島が残り少なくなったココアをジュッジュ啜りながら南と同じ方向を見た

「ラ——————————————————————ム
ちや——————————————————————んッ！！！！」

南がでっかい声を出しながらブンブンと手を振った

「あ、気づいた気づいた」

坂田が言う

「そりゃコレだけ大声で呼びゃあ振り向くだろうよ；」

京助が言う

「買い物帰りカナア：買い物袋下げてるトコみると」

右手に正月スーパんならーの買い物袋を持って少し早足で近付いてくる緊き那羅をみて中島が言う

「おかえりだっちゃ」

まだ秋の終わり頃だというのにマフラーに手袋、そして少し大きめの上着を着込んだ緊那羅きんならが3馬鹿と京助に向かってお帰りを言った
「相変わらず寒いのは苦手か；」

坂田が緊那羅きんならの格好を見て言う

「ははは；」

緊那羅きんならが苦笑いをする

「私が暖めてあ・げ・る」

南が緊那羅きんならに抱きついた

「しよっぱー；；」

中島が口の端を上げて言う

「…坂田？」

緊那羅きんならがふと坂田に声をかけた

「へ？」

坂田がきよとんとして返事をする

「なんだか…元気ないっちゃよ？」

緊那羅が言うのと京助と南、中島も坂田を見た

「そんなこたあねえぞ？」

坂田が言った

「みつるんてば私がラムちゃんに抱きついたからやきもちやいてるのよきつと」

南が言う

「断じてソレはない」

坂田が即答した

「ホントになんともねえのか？」

中島が坂田の額に手を当てた

「熱なんかねえって；」

中島の手を掴んで坂田が言う

「ホントになんともねえのか？」

今度は京助が坂田の額に自分の額をブチ当てて言った

「…今はデコが痛いよ京助君」

坂田が言う

「…俺も少し痛いです坂田君；」

「ならやるな阿呆ッ！！；」

京助が言うに坂田が京助のみぞおちに手刀を入れた

「そして更にみぞおちも痛いよ坂田君；」

京助がおおおというカンジで膝を付いた

「自業自得だバカめ；」

坂田が額をさすりながら言う

「何してるんだっちゃ；；」

南に抱きつかれたままの緊那羅きんならが呆れ顔で言った

「まあ俺は本当なんともねえからよ； 変な心配すんなよな緊那羅きんなら」

坂田が緊那羅きんならを見て言った

「あ：う：ん：」

緊那羅きんならが躊躇いがちに頷いた

「つうことで：俺帰るわ」

坂田がセブイレブンの買い物袋を鞆と一緒に肩に担いだ

「んじや俺等も行きますか」

南が緊那羅きんならから離れて言う

「だばなー！！」

「おー！！」

歩き出した坂田の後ろを南と中島が京助と緊那羅きんならに向かって手を振

りながら追いかけて行った

「さって俺等も：どうした？」

京助が足を進めても動かない緊那羅きんならに声をかけた

「：ううん：」

顔は坂田達に向けたまま緊那羅きんならがゆつくりと足を動かした

「：なんでもないっちゃ」

そして京助の方に向きを変えると歩き出す

「：そか？」

遠ざかっていく3馬鹿の背中をチラッと見て首をかしげた京助が自分より少し前に出た緊那羅きんならを追いかけた

「あれ？ 若」

南と中島と別れて歩いたいた坂田の耳にさっきまで話題に上っていた人物の声がした

「柴田…」

坂田が振り向くと同時に駆けてきたのは柴田

「今帰りですか？」

少し青み掛かった背広を着た柴田が缶コーヒーを片手に坂田の隣に立った

「まあな…お前は？」

坂田が足を進めると一緒になって足を踏み出した柴田に坂田が聞いた

「俺ですか？ 俺は…まあちょっとヤボ用で…飲みます？」

笑って言った柴田が飲んでいた缶コーヒーを坂田に差し出した

「…コレ砂糖入ってんのか？」

柴田の差し出した缶を見て坂田が言う

「微糖ですよ」

柴田が答えた

「…微糖ってどんくらいだよ」

坂田が再び柴田に聞く

「えっと…少なくともブラックではないですよ」

柴田が自信なさげに苦笑いを交えて答える

「…いい」

坂田が缶を付き返して歩き出した

「…子供だなあ若」

プツと小さく噴出した柴田を思い切り振り返った坂田が柴田を睨んだ

「何がだよッ！！！」

そして怒鳴る

「いや…スンマセン」

口では謝っていても柴田の顔は笑っていた

「ったく…せっかく土産買ってきてやったのによ」

坂田がふいっと向きを変えて歩き出すと柴田がその後をついていく

「土産ですか？ 俺に？」

坂田と並んだ柴田が坂田の持っていた買い物袋に気が付いた

「復刻版のチーズおかき」

袋を前後に振りながら大股で歩く坂田が言う

「えー！ 本当ですか若！ うっわー！ 嬉しいナア」

柴田の顔がぱあっと明るい笑顔になった

「買おう買おうって思ってたんですけどすぐ忘れてきちゃうんですよ俺」

そしてそんな嬉しそうな笑顔のまま柴田が言った

「お前どっかヌケてんだよ」

坂田が鼻で笑いながら言う

「ひどいナア若；」

柴田が苦笑いで言った

「俺に黙って出歩いてるからだ呪われろ」

坂田がジト目で柴田を見ると一瞬きょとんとした柴田がふっと微笑んで坂田の頭に手を置いた

「なんだよ；」

坂田が柴田の手を掴んでどけてもまた柴田が坂田の頭に手を置いた

「なんなんだよ；」

それでもめげずに坂田が柴田の手をどかすが柴田がまた手をのせる

「いや：若だなんて」

柴田が言う

「はあ？；」

坂田が疑問形の返事をした

「大きくなっててもそのふてくされ方はかわりませんね」

柴田が笑った

「変わんねえのはお前だろ；」

坂田が突っ込んだ

「えー？ そうですか？ …変わったと思うんですけど…ホラ、こ
う：貫禄出てきてません？」

柴田が自分を指差して坂田に聞くと柴田の前進を見た後坂田が一言

「全然」

そう言って鼻で笑った

「傷つくナア；」

溜息を吐いた柴田が缶コーヒーをくいつと飲んだ

「あんまコーヒー飲んでと胃悪くするぞ。茶飲んどけ茶」

家の門の前で止まって振り返った坂田が言った

「大丈夫ですよ一週間前の牛乳飲んでも腹壊さなかったですから胃は丈夫なんですよ俺」

でかい門の横の出入り口をあげながら柴田が言う

「腹ン中でヨーグルトになったんじゃねえのか？」

柴田が開けた戸をくぐりながら坂田が言った

「うっわー……若さっきから俺に冷たくありません？；俺なんかしました？」

柴田が戸を閉めながら言う

「やっぱお前そっかぬけてるな：言っただじゃん俺に黙って出歩いてる先はどこかって」

「おかえりなさい若！柴田さんも！！」

坂田の言葉が組員のドスのきいたお帰りのなさいにかき消された

「ああただいま」

柴田が組員に軽く手を振って答えた

「ホラ、若ただいまは？」

柴田が坂田に言う

「俺の質問に答えろよ；：ただいま」

玄關へと続く無駄やたらに長い庭で坂田が言った

「ヤボ用って言いませんでした？」

柴田が笑いながら言った

「：お前まだ俺を子ども扱いする気だろ」

坂田が言う

「そんなところが子供ですよ若」

柴田が笑う

「それより俺の部屋でチーズおかき食べませんか？ 茶入れますんで」
「却下ッ!!」

柴田が言うのと坂田が怒鳴った

「柴田さんですか？」

組員でゴった返している事務所らしき部屋の入り口で坂田が一番近くにいた組員に柴田の行方を聞いた

「おっかしいなあ…さっきまでそこに…」

タバコの煙でモンモンとしている事務所内をぐるり見渡した組員が頭を掻いた

「俺じゃだめですか？ 若」

組員が自分を指差して言うのと坂田が無言で背を向け歩き出す

「馬鹿かお前柴田さんの代わりがお前に務まるかってんだ」

他の組員が野次を飛ばした

「若も組長も柴田さん柴田さん…か」

タバコを灰皿にねじりつけながらゲジ眉の組員が呟いた

「ありゃ…若荒れるぞ」

少し貫禄のある中年位の組員が言った

「…で？」

テーブルに肘をつきソレに頬を突いた京助が訊ねたのは坂田

「構え」

坂田が言う

「帰れ」

京助が返した

「ヒマなんだよ」

坂田が身を乗り出して言う

「だからって何で俺ン家くんだよ」

同じく身を乗り出して京助が言う

「なんとなく」

坂田が言う

「なんとなくでくんなよ；」

「まあまあ……」

京助が言うきんならと緊那羅が部屋に入ってきた

「お茶入れたっちゃ」

そういつて緊那羅きんならがテーブルの上に湯飲みを置きだした

「茶菓子は持参したから」

坂田がガサゴソと取り出したのは

「……お前コレ……たしか柴田さんにとかで買ったヤツじゃねえの？」

京助が見覚えあるパッケージをみて坂田に聞くと【柴田】に反応して緊那羅きんならが手を止めた

「……別に……」

坂田がチーズおかきの封を切って一枚口に放り込んだ

「お前もいちいち変な顔すんな；」

「たっ；」

止まっていた緊那羅きんならの頭を京助が軽く叩いた

「誰も柴田になんて言っていないし」

ボリボリと口を動かしながら坂田が言う

「まあ……そりゃそうだけど……」

京助がチーズおかきに手を伸ばした

「……なあ京助」

坂田が湯飲みを手に京助を見た

「……俺って変わってないか？」

「はあ？；」

坂田の突然の質問に京助の口からチーズおかきがぽとりと落ちた

「俺小さい頃からかわんねえか？」

坂田が聞く

「でかくはなっただろ」

落ちたチーズおかきを再び口に入れながら京助が言う

「だよな？」

坂田が頷いた

「かわらねえのはむこうだろってんだ：馬鹿め」

ぼそっと言った坂田が二枚目のチーズおかきを口に突っ込む

「柴田さんになに言われたんかわからんけどよ；」

京助が茶を啜りながら言う

「何かあるたびに家に集合すんな；」

湯飲みを置いた京助が坂田を見た

「だって丁度いい避難場所」

坂田が返す

「自治区が別です坂田君きちんと自分の自治区の避難場所へ避難してくださいませ」

京助がエセっぽいさわやかな笑顔で言う

「あー！ 坂田だー！！」

ガラッと戸が開くと同時に悠助の元気な声が響く

「よー！ 悠！ チーズおかき食うか？」

坂田が片手を上げて悠助に言った

「もう晩飯の時間だっちゃよ」

緊那羅きんならがテーブルに手をついて立ち上がった

「：坂田も食べていくっちゃ？」

立ち上がった緊那羅きんならが坂田を見下ろして聞く

「よろしく」

坂田が今度は緊那羅きんならに向かって手を上げた

「：オイ」

京助が坂田の背中を蹴った

「んゝんゝ」

モゾモゾと動いたつきり坂田はソレから動かない

「：寝やがった：；どうすんだよ明日学校なのによ；」

京助が坂田の背中を見ながら言う

「家に電話しなさい？ 泊めるなら泊めるで連絡しないと心配する

でしょう？　いくらミノちゃんでも一人息子だし」

母ハルミが言った

「まあ：そうだろうけど：しゃあねえなあ；」

京助が頭を掻きながら立ち上がり電話が置いてある棚に近付いた

「何？　坂田寝てる」

風呂から上がってきたパジャマ姿の悠助が坂田の顔を覗き込んで笑う

「変な寝顔」

慧喜えきが同じく坂田の顔を覗き込んで言った

「悠ちゃん坂田君に何かかけて：」

母ハルミがそう言いかけたところで部屋の戸が開いて緊那羅きんならが小さな毛布を持って入ってきた

「あら気がきくのねさすがだわ緊ちゃん」

緊那羅きんならが坂田に毛布をかけるのを見て母ハルミが笑った

「：今迎えにくるってさ」

電話を切った京助が振り返って言う

「えゝ坂田泊まらないの？」

悠助が眉を下げて不満そうに言った

「明日学校だしな休みならまだしも」

電話を置いて京助が戸の方へ歩き出した

「どこ行くの義兄様？」

慧喜えきが戸を開けた京助に聞く

「便所」

京助が戸を閉めながら答えた

「京助」

トイレから出てきた京助を呼んだのは緊那羅きんなら

「順番待ちか？　でつかいのじゃねえから臭くないぞ」

京助が戸を開けて緊那羅きんならにトイレを譲ろうと横に避けた

「違うっちゃん；　あの：私：」

緊那羅きんならがトイレにきたわけではないと聞いた京助がトイレの戸を閉

めた

「なんだ？」

洗面所の蛇口をひねった京助が鏡越しに緊那羅きんならに聞く

「私……」

「ごめんくださいー」

緊那羅きんならの言葉が玄関先から聞こえた言葉に止められた

「あ、やっぱ柴田さんか」

京助が手の水滴を飛ばして緊那羅きんならの横を通って玄関へと向かう

「あ……京助……」

「後から聞くわ」

そう言っで京助が小走りで廊下を駆けて行つた

「ごめん京助君」

柴田が苦笑いで京助に謝つた

「別にいいよ柴田さん； ヤツは茶の間で夢の中だし」

京助が家の奥を指さすと柴田が靴を脱いだ

「お邪魔します」

一応言っで柴田が家に上がった

「あら！ 勝美君」

柴田の顔を見るなり母ハルミが嬉しそうに言つた

「こんばんはハルミさんスイマセン；」

柴田が苦笑いで言う

「いいのいいの！ 泊めてもいいのよ？ ウチは」

母ハルミが言つた

「姐さんが連れて帰つてこいって言うモンですから……爆睡してます

ね若；」

坂田の顔を覗き込んだ柴田が呆れ顔で言う

「……アイツ誰？」

慧喜えきが柴田を見て悠助に聞く

「柴田さんって言っでね坂田の家の人」

悠助が答える

「：どうしたの？ 慧喜^{えき}」

柴田を黙って見ている慧喜^{えき}に悠助が聞いた

「：ううん：ただ：ちよつと似てるヤツ知ってるから：」

「世の中には似てるヤツが3人はいるらしいからな」

慧喜^{えき}の言葉が聞こえたのか京助が言った

「栗とウニとタワシみたいなモンだ」

「そうなの？」

京助が言うとうと悠助が聞き返す

「まあそんなトコだ」

京助が言う

「変なこと教えるんじゃないのアンタは」

バフン

母ハルミの言葉と共にクツションが京助めがけて飛んできた

白くでもどこかしる灰色のアスファルトが顔を出している初雪が降った日

「飲みますか？」

大きな手に包まれた茶色い缶が視界に入った

「甘いですから大丈夫ですよ」

少し白く湯気の上がつている缶を見てそしてそのまま視線を上上げる

「熱いもん」

舌ったらずな言葉で返すと缶が引っ込められた

「：そんなに熱くないですよ若」

しばらくしてまた視界に入ってきた缶を再び見る

「柴田は熱くないの？」

にっこり微笑んで頷いたのは柴田

「大丈夫ですよ？」

そう言って缶を差し出す

「…コーヒ―？」

受け取った缶からは香ばしい香りが湯気と共に上っていた

「苦い？」

缶から柴田へと視線を移しながら言う

「甘いですよ若も飲めるよう一番甘いの買いましたから」

柴田の手が伸びてきたかと思うと服の裾で鼻を拭かれた

「そんな薄着で寒いでしょう？ 鼻水でてますよ」

ペローンと糸を引いた袖口を見せて柴田が笑う

「柴田がいなくなるからだもん」

ジャツと水気を含んだ雪を小さな長靴の足が蹴り上げた

「いつもいないから今日はずっと付いて歩くって決めたのにまたいなくなりそうだったんだもん」

両手で持った缶から暖かいぬくもりが掌を通った

「スイマセン…」

大きな掌が小さな頭を覆った

「みんな忙しそうで俺だけ置いていかれそうで柴田もどっかいっちゃって」

ピスーっという鼻から息が抜ける音がした

「若； 鼻ちようちんでてます」

柴田が再び服の裾で鼻を拭ってくれた

「…今は先代：若のおじいさんが亡くなって今の組長：若のお父さんに代わったばかりでバタバタしてるんですよ」

目が熱くなって視界がぼやけてきた

「それに俺はどこにも行きませんよ…」

一瞬暗くなった世界から明るい世界に戻ってくると頬を冷たい液体が流れた

「あゝ； 若； 缶の中に涙入りますよ；」

グシュグシュという鼻を吸る音と白い吐息と少し慌てた柴田の声

「ほら； 泣かないで：そうだ！ チーズおかき食べますか？」

柴田がポケットから一枚のチーズおかきを取り出して微笑んだ

「後から食べようと思ってたんですけど：どうぞ」

袋を破いた柴田がチーズおかきを口に押し込んできた

「口閉じないと落としますよ？」

苦笑いで手を離れた柴田がその手を再び頭に乘せた

「外で菓子食べたなんて姐さんには内緒ですからね」

いきなりグンっと高くなった視界

「帰りますよ」

そして少し下になった柴田の顔

「：うん」

頷くと柴田が笑顔を向けた

「：甘いね」

「でしよう？ 熱いですか？」

「ううん：ぬるい」

「さっき若の涙が入っちゃって冷めたんじゃないですか？」

またチラチラと降り出した雪の中

人通りのない田舎道を大きな足跡が一行に

でも話し声は二人分

木製の天井には所々にできたシミ

嗅ぎなれた自分の布団の匂いに坂田がまたうとうとと目を閉じ始める

「……！！」

ガバッと布団をはぎ体を起こすとそこは目を閉じた京助の家の茶の

間ではなく明かりの消された自分の部屋

「：俺：」

時計を見ると午前1時

「：なんで：」

まだぼやっとしている頭をかきながら坂田が布団から出た

「：さむ；」

ふと目を向けた窓には外灯の灯りで影絵のようになった雪が映っている

「…寒いわけだ…」

カーテンを開けた坂田が寒いとわかっているのに窓を開ける

「根雪になるのかな…今年はもう」

空を見上げると吸い込まれそうなカンジになる
降ってきてるのかそれとも上っていつているのか

「…変な夢」

しばらく空を見ていた坂田が結んだあつた髪を解いて窓を閉めた

「…お前…ついにイカれたか?;」

中島が哑然とした表情で言った

「…素敵だけどね…うん…ニューファッション開拓?;」

南も同じく

「…モンペと防空頭巾をどこに忘れてきたのせっちゃん…;」

最近何とか遅刻しなくなった京助を交えての校門前

「気分転換」

そう言った坂田の今日のヘアースタイルは前に悠助にやられた三つ編

「…もっと他にいい髪形は思いつかなかったんですかい;」

隣に並んだ京助が突っ込む

「いいじゃねえか学生にとっちゃ基本の髪型だろが」

坂田が言う

「おかつぱもあるけどね」

南が言う

「…阿呆」

「おおおおお!!!!;」

背後からいきなり聞こえた声に3馬鹿と京助が揃って飛びのくとソコにいたのは本間と阿部

「どうせならちゃんまげとか結ってきたら?」

3馬鹿と京助が避けたことでできたというなら【お馬鹿道】を本

間が躊躇うことなく通りながら言う

「おはよう京助、坂田と南と中島も」

その本間の後ろを阿部が足早に追いかけていった

「お：ハヨウ；」

3馬鹿と京助がぎこちなく挨拶を返すと本間が振り向いた

「：坂田って子供だよね」

顔色一つ変えず本間が坂田に向かって言った

「な：なんだよ；」

名指しされて坂田が脅えたように返す

「：寂しいくせに」

ふいっと背を向けて本間が歩き出す

「寂しい？」

「誰が？」

「お前？」

「お前か？」

「財布の中は寂しいけどさ」

「あ、それは俺も」

本間の言い残した言葉に対し3馬鹿と京助がテンポよく意見しはじめた

「香奈：？」

前を歩く本間に阿部が声をかけた

「何？」

足を止めて本間が阿部を見る

「：どうしたの？」

阿部が聞く

「どうもしないよ」

本間が答えた

「：もしかして香奈：あんた：」

「：やっと気づいてくれた？」

阿部が何か言おうと本間を指差すと本間が微笑んだ

「…うっそー…」

通学してきた生徒でざわめく廊下で阿部が鞆を床に落とした

「切るとか男らしい選択はしなかったのかよ；」

坂田の髪形を見た浜本が突っ込んだ

「いい注目の的だな」

ハルが坂田の三つ編を引っ張った

「踊り子には手を触れないでクウダサアイ」

坂田がハルの手を軽く叩く

「にしても…お前なんで髪伸ばしてんだ？」

京助が坂田に対して質問するとはたと一同が止まった

「…そういや…小学校ン時はまだ短髪だったよなお前」

中島が坂田を見た

「別に…切んの面倒だから」

坂田が三つ編を指で弄りながらやる気なく答えた

「伸ばしてる方が面倒だろ；　こんがらがるしシャンプーの量も多く使うし」

浜本が言う

「お前ミミッチイなあ；」

南が浜本に言った

「俺はワンプッシュでいいんだぞ」

浜本が言う

「俺はツープッシュかな；」

中島が浜本に続いた

「俺もツーだぞ？」

坂田がさらっと言う

「マジで？；同じかよ…ちゃんと泡立つのか？　シャンプー何よ」

中島が聞く

「オーイェーアッハーン」

坂田が髪をかきあげてセクシーポーズを決めた

「…アレか」

何かわかったらしい京助が口の端を上げた

「ああ…アレね」

南も頷く

「ってかコレで通じるのもどうよ」

セクシーポーズを解除した坂田が突っ込んだ

「だからさー思うにヤツ等にはたぶん賞味期限が付いてないと思うんだよねー」

南が白い息と共に言う

「ジャロ行きだなジャロ」

京助が言った

「ソレは広告の苦情お問い合わせだろう？　この場合は…衛生管理局とかそこじゃねえの？」

三つ編の坂田が言う

「天井マンとか夏場絶対アメてるって…うわー…嫌だナア；」

京助が口を引きつらせた

「れ？」

南が足を止めて右方向を見た

「なした…ってあれ？　こんなトコに自動販売機なんてあったか？」

南に声をかけた坂田が自動販売機に気づき言う

「たぶんこの近くでホレ工事してんじゃない？　だからでないか？」

中島が【100m先工事中】のたて看板を見て言った

「工事のオッサン用か…俺どうもこの…あったか…い【…】って気に入わねえんだよな…別に伸ばしぼっこでもいいのに何でくねらせるよ」

京助が自動販売機の表示を見て言う

「作ったヤツがくねらせたいお年頃だったんだろ」

坂田が言った

「モンローウオーク！！」

「コケるぞ」

南が腰をくねらせて歩き出すと中島が突っ込む

「コーヒーばっかだな……かろうじてお茶か……やっぱオッサン達にあわせてんのかナア……あ」

並んでいる品物を見ていた坂田が何かを見つけた

「……なした？」

先に行くモンローウオーク南と中島の後を追いかけて数歩足を進めた京助がついてこない坂田に声を開けた

「……買うのか？」

坂田の隣に戻った京助が財布を取り出した坂田に聞く

「カイロ代わりにな」

坂田が左から三番目のボタンを押すと派手な音をさせながら缶が落ちてきた

「あったけ……」

取り出した坂田が缶を持って言った

「お前コーヒー飲めたっけか？」

缶に頬すりしながら歩き出した坂田に京助が聞く

「失礼な……飲もうと思えば飲める」

坂田が返した

「ふうん……ってかソレめっちゃ甘いヤツじゃん」

京助が坂田の手にしてる缶を見て言う

「わりいかよ」

坂田が京助を見た

「や……別に……あ、南コケてら」

坂田に凝視されて顔をそらした京助が前方で中島に手を引っ張られて立たせてもらってる南を見た

「馬鹿だナア……」

坂田が溜息を吐いた

「アレ……パンツまで濡れてんぞ」

なにやら尻を触った後ベルトを緩めているような仕草をしている南

を見て京助が言った後中島が野球の【アウト】のサインを出した

「…ご苦労さん；」

坂田がそういいながら早足で二人の元に向かい始めると京助もソレに続いた

「ぬる…；」

カイロ代わりだといって買った缶の中身を一口飲んだ坂田が呟いた

「こんなに甘かったっけか…」

ギィと机のイスを鳴らして背をそらせると缶をじっと見た

「変わらぬおいしさジョージアオリジナル…ってか…」

自分の吐く息がほんのり香ばしい

「…阿呆くさ」

ボソツと呟くと立ち上がり壁にかけてあった上着を取ると坂田は部屋を出た

「おでかけですか？ 若」

廊下ですれ違う組員にいちいち返事はせず片手を上げ続けて玄関へとたどり着いた坂田が靴を履いていると後ろから足音が近付いてきた

「あれ？ 若も出かけるんですか？」

坂田が靴を履いている隣に下ろされた黒い靴と聞きなれた声に坂田が顔を上げた

「柴田もか？」

坂田に聞かれた柴田がにっこり笑って頷いた

「京助君の家ですか？」

靴を履きながら柴田が聞く

「…別に…お前は？」

トトンとつま先を地面に打って靴を履き終えた坂田が柴田に聞く

「俺はホラ…って…若コーヒー飲みました？」

柴田が言っていると坂田が一瞬止まった

「…悪いかよ；」

そして少し膨れて答える

「いや…そうじゃなく…そうか…飲めるようになったんですね」
少し驚いた顔をした後柴田が微笑んだ

「なんだよ…」

「…いつまでも子供じゃないんですね」

ガララと引き戸を開けながら柴田が言う

「当たり前だろ」

柴田が開けた引き戸を坂田がぐぐった

「今度一緒にコーヒー飲みながらチーズおかき食いませんか？」

自分もくぐった後引き戸を閉めながら柴田が言った

「…考えとく」

立ち止まったまま坂田が言った

半分溶けかかった雪道と呼ぶには少し呼びにくい道を歩く柴田が軽く溜息をついた

「…若…」

足を止めて振り返ると電信柱から少しはみ出ているモスグリーンの上着に声をかけた

「別に同じ方向に行くだけなんだ」

自分に言い聞かせているかにも捕らえられる口調で言いながら坂田が電信柱の影から現れてツカツカと歩き出す

「なら一緒に行きますか？」

小さく笑いながら柴田が言う

「おうよ」

坂田が意味なく大きな声で返した

「根雪にはなりませんでしたね」

柴田が下を見て言う

「そうだな」

坂田が淡白に返す

「今年は雪多いんですかね」

柴田が今度は空を見上げて言う

「さあな」

やはり坂田が淡白に返す

「：若；」

柴田が溜息をついた

「何ふてくされてるんですか」

「ふてくされてなんかいいえよ」

柴田が言うと言と坂田が即答した

「：ふう；」

柴田がお手上げと言わんばかりに溜息をついて頭を掻いた

「大体：」

坂田が唐突に言葉を発した

「大体お前は隠し事やら謎が多いんだよ」

坂田が歩きながら言う

「俺が生まれてからずっといるけどいつも隠してばっかじゃん」

柴田が少し視線を落として前を歩く坂田の背中を見る

「歳だって知らねえしどっから来たのかも知らねえ」

車が跳ねた泥水を避けながら坂田が言う

「若：」

柴田が坂田に声をかけても坂田の足は止まらずに歩き続ける

「お前は」

そんな坂田が足を止めて振り向いた

「お前は何で俺に構うんだ」

坂田が柴田をまっすぐに見て言う

「何でって：」

「俺が次の組長だからか？ 親父に頼まれたからか？ 母さんにみ

てろっていわれたからか？」

いきなりの質問に驚いている柴田に更に坂田が突っ込んだ

「もしそうならもう俺に構うな。話しかけるんじゃない」

坂田が背中を向けた

「ソレもありますけど」

柴田が言うのと坂田の方が少しぴくつと動いた

「もう一つ理由があるんですよ」

坂田の頭に柴田が手を置いた

「よっこいしょ」

「のあッ；」

坂田の体が宙に持ち上げられた

「おろせ！ 馬鹿ッ！；」

「重くなりましたね若」

「おろせつてのッ！！；」

坂田を抱き上げた柴田が笑うと坂田が怒鳴る

「俺が構いたいから構うんですよ若」

坂田を下ろしながら柴田が笑った

「：ソレ理由になってねえじゃん：」

抱き上げられたことで出た腹をしまいながら坂田が言う

「立派な理由じゃないですか」

柴田がポケットから何かを取り出した

「大きくなりましたね若」

笑いながら柴田が坂田の口にチーズおかきを押し込んだ

「付いてきますか？ 俺のヤボ用」

行く先を指差しながら柴田が笑った

「：なしたよソレ；」

京助が【まことにイヤイヤ驚いたでゴザル】というカンジの表情で坂田を見た

「：ニャロメにやられた」

無然とした表情で答えた坂田の顔には数箇所絆創膏が貼ってあった

「あんにゃろ：思い切り爪立てやがって：」

絆創膏の貼られていない小さな傷を坂田が軽く搔いた

「嫌がることしたんじゃないの？ 尻尾触ったとか餌喰ったとか」

南が言う

「食うかつての；」

坂田が返す

「でもよくおばさんが許したよな」

中島が言う

「：ゴリ押し」

坂田が言った

「でも名前がどうよって思うぞ俺は」

京助が言う

「ニヤロメだしね」

南も言う

「付けたのは柴田だしな」

坂田が言った

「京助と対はるネーミングセンスだよな柴田さん」

中島が京助を見る

「なんだよ；」

京助が中島を見返すと中島がヘツと笑った

「カンブリにニヤロメ：どっこいどっこいだねえ」

ハッハと南が笑う

「久々に来たナァ：坂田組」

中島がデデン！ とそびえて立つ大きな門を見上げて言った

「避難所って言えば京助ン家だしね」

「各自地区の避難所に行けよ；」

南が言うと京助がすかさず言った

「保育園に避難してもサァ：ねえ？」

同じ自治区の坂田の肩を南が軽く叩きながら言う

「仲良くお手手繋いで野道を歩け」

でかい門の横にある出入り口をくぐりながら京助が言った

「二人で；？；」

京助の後に続きながら南が言う

「俺なんか文化センターなんですけど；何しろってんだよ；」

隣の自治区にお住まいの中島が言った

「教育委員長と教育について語ってろ」

坂田が出入り口を閉めながら言った

「メッロキュン!!」

そう言った南の腕に抱かれていたのは足が白く後は茶色になった小さな猫

「ニー…」

「にゅにゅ」

猫が泣き声を上げると京助と中島そして南が泣きまねをした

「…阿呆か」

ソレを見て坂田が呟く

「いやー…メンコイなコイツ」

チョイチョイと指を猫の前で動かしながら中島が言う

「チョメ〜チョ〜メチョメ〜」

京助が近くにあったネコジャラシを動かし始めた

「チョメチョメは君の頭の中だけで充分だよ京助君」

南がハッハと笑いながら言った

「ニヤロメかあ…ニヤロメ」

中島が柴田がニヤロメと名付けたという猫の喉を撫でた

「うみゅー」

「ズキュン!!」

ニヤロメが鳴くと南が胸を押えて蹲った

「か…かんわいいじゃないか…くっそ…ミナミ完敗…」

南が言う

「コレ子猫? …おオスカ」

ニヤロメを抱き上げた京助がニヤロメの股の間の物体を見て言った

「可愛い顔して結構なモンつけてんのな…」

中島も覗き込んだ

「いやもう大人だとか言ってたけどな」

坂田が言った

「コレでか？」

京助が聞く

「コレだよ」

坂田がニャロメの頭を撫でた

「そういう種類の猫なのか？」

中島が聞く

「知らねえよ； でも…柴田がそう言ってたし…コイツ祭りん時の

柴田の怪我の原因なんだとさ」

坂田が京助の手からニャロメを抱き上げた

「みー…」

坂田がニャロメを軽く撫でるとニャロメが小さく鳴いた

「俺に黙ってこんなん飼ってて…これから寒みくなんのに…やっぱどっか抜けてんだアイツ」

坂田がブツブツ言うのと京助と中島と南が顔を見合わせた後

「…お子ちゃまめ」

ハモって言うのにんまりと怪しい笑顔を坂田に向けた

「は？」

坂田がニャロメを抱いたまま自分に向けられる怪しい笑顔を見返した

「坂田さん家のみつつるくん…このごろすこおし変よくどおしたのっかつなッ♪」

南が歌いながら坂田に近付いた

「いや変なのは前からだっけどお〜♪」

京助が突っ込み加減でさり気に歌う

「ニャンコにヤキモチ焼いちゃってまあ」

「なっ!?!;」

中島が核心をぶっちゃけると坂田が声を上げた

「何が!;」

坂田が怒鳴ると三人揃ってヘッとまた怪しい笑いを向ける

「緊那羅にも突っ込まれてたしな」

京助が言う

「そーそー【元気ない】ってね」

南が頷いた

「原因はソレかあ…いやいやいや…」

中島がニヤロメを撫でた

「何がだちゅーん!!;」

坂田が三人に向かって怒鳴る

「そりゃねーアレだねーお兄さんをニヤンコにとられちゃえば弟さんふてくされますよねー…悠と一緒にだな」

中島が言う

「そ…!!」

中島の言葉に坂田が何か突っ込もうとして少し体を前に出した

「寂しかったのねみつりゅん」

京助がよしよしと坂田を抱きしめた

「そんなんじゃないっつーの!!;」

「またまたあ照れなくていいのよなんたってワタシはビクマザー」

坂田が京助を押し返すと負けじと京助がしつこく坂田に抱きついた

「離れんかーいッ!!;」

ぐぎぎぎぎと腕に思いつきり力を込めた坂田が本気で京助を押し返した

「…悠がそうだったから」

京助が坂田の耳元で小さく言った

「…え…?」

「俺気づいてやれなかったんだよな」

坂田にしか聞こえなかっただろう的声量で言いながら京助が坂田から離れた

「ニヤロメつぶれてないか?;」

中島が心配そうに離れた京助と坂田の間を見た

「ニ…」

坂田の腕に守られながらニャロメが鳴いた

「ホモサンドイッチで圧縮されたなんつたらシャレにならないも
んねえ」

南がハッハと笑った

「構って欲しかった俺等がいるじゃないみつるん」

「：構って欲しくて出向いた俺に帰れと速攻言っのけたヤツは誰
じゃ」

京助が言うのと坂田が突っ込んだ

「アレはホラ：晩飯の食い扶持が減るじゃん」

「友情より食い意地なんだあねえ君は」

京助が言うのと中島がチョップと同時に京助に突っ込んだ

「にうゝにゝ」

ポフポフと床に軽く叩きつけられているネコジャラシにニャロメが
必死になってじゃれている

「：うら」

坂田がネコジャラシを少し高く上げるとニャロメが思い切り体を伸
ばしてソレに捕まろうとする

「はっはゝコケてやんのー」

届かなくてそのままコケたニャロメを見て坂田が笑った

「：悠と一緒に：ねえ：」

今度はネコジャラシを床ぎりぎりまで左右に振りながら坂田が呟いた
「：まだまだ子供ってことか：俺も：」

ガリ

「イッテエッ！！！：」

「にうゝ」

ネコジャラシに勢いよく飛びついたニャロメが坂田の指に爪を立てた

「おんまえは俺をどこまで傷物にすりゃ気がすむんだッ！：」

坂田が怒鳴った

「あゝ：つとに：」

じわつと血がにじんできた指を見て坂田が溜息を吐いた
「みう」

動かなくなったネコジャラシには興味がないのかニャロメが坂田の膝の上に上ってきた

「イテテイテイテ； 爪たてて上ってくんなっつーの！； ……ったく…」

坂田の膝の上に上ったニャロメが坂田を黙って見上げた

「…なんだよ」

「散歩いきませんか？」

坂田が目を丸くしてニャロメを見た

「…若？；」

止まったままだった坂田がハツとして勢いよく後ろを振り返ると部屋の戸口に立っていたのは柴田

「ノックしろッ！； ビビルじゃねえかッ！…」

坂田が怒鳴った

「しましたよ； したんですけど返事が…あ、ニャロメここにいたんだな」

「にーう」

柴田がしゃがんで手を叩くとニャロメが坂田の膝から飛び降りて柴田の元に駆けて行った

「…何の用だよ」

坂田が立ち上がって聞く

「あ、暇なら散歩いきませんか？ セブンイレブンまで」

柴田がニャロメを抱き上げて立ち上がった

「何しに」

坂田が聞き返す

「ホラ：チーズおかきの復刻版あるじゃないですか」

柴田が言う

「…買いに行くのか？ 今から？」

坂田がまた聞き返した

「覚えてるうちにと：でもホラ一人で行くのもなんだから」

「何で俺よ」

口ではそう言いながらも坂田が壁にかけてあった上着を手を取った
「肉まんくらいおごりますから」

上着を着込んでいる坂田を嬉しそうに見ながら柴田が言った

「ブリトーもつけろハムチーズの」

坂田が言う

「ハイハイ」

柴田が笑いながら部屋の戸を開けた

「：お前ソレで行くのか？」

坂田が柴田を見て言う

「え？ あ：そうですね部屋戻るの面倒くさいですし：コレでいきます」

深い緑色のスーツを見た後顔を上げて柴田が笑った

「生きてるカイロありますし」

「みー」

柴田がニャロメを撫でるとニャロメが鳴いた

「：セブンは動物持込禁止だろ馬鹿め； ；待ってろ」

部屋の押入れを開けた坂田が黒と白のマフラーを引きずり出して柴田の首にかけた

「ないよりマシだろ」

坂田が言う

「ですねありがとうございます」

柴田が笑うと坂田が照れ隠しなのかメガネを外して上着の裾で拭いた

「にーう」

ニャロメが鳴いた

「こないだの根雪にはなかったんだな」

外に出た坂田がうっすらと積もった雪を靴でかいた

「こないだ：ああ京助君の家に行った時ですね」

柴田が言う

「：やっぱお前が迎えにきたんか：」

歩きながら坂田が言った

「若は相変わらず一回寝ると中々起きないですよね」

「うっさい！！；」

柴田が言うと坂田が怒鳴る

「まだ七時なのに真っ暗ですね足元氣をつけてくださいね」

間隔をあけて街灯はあるものの暗い道

「お前が行こうって言ったんじゃん；」

坂田が突っ込む

「：なあ」

しばらくして坂田が柴田に声をかけた

「お前俺が組継がないって言ったらどうすんだ？」

坂田の質問に柴田が足を止めた

「継がないんですか？」

柴田が聞く

「継がないって言ったらってんだろ； もしだよもし； ：どっか

行くのか？」

坂田が振りかえって言う

「そう：ですね：どうしようかなあ：」

「：お前は：；」

まるで人事のように笑いながら言う柴田を見て坂田が肩を落とした

「俺帰るトコ：あるにはあるんですけど帰りたくないんですよ」

柴田が言う

「：家族は？ 母さんと：」

坂田が言いかけて言葉を止めた

「いますよ？ 俺の家族は坂田組の皆です」

柴田が笑いながら言った

「：なんだソレ」

坂田が気まずそうにそれでも突っ込んだ

「帰りたいと思うところは今のところ俺にとっては坂田組なんです

よ」

坂田の頭に柴田が手を置いた

「若がいて組長や姐さん：ニャロメもみんなもいますからね」

柴田が笑って言うにつられたのか坂田も眉を下げて笑った

「おわっ；」

「若；」

思い切り滑って転んだ坂田に柴田が驚いて声をかけた

「大丈夫ですか？；」

柴田が手を差し出すと坂田がソレに捕まる

「イッテェゝ；；」

立ち上がりながら坂田が尻に付いた溶けかかりの雪を払う

「：なんだよ； 笑いたきやいいじゃん；」

黙って坂田を見ていた柴田をじと目で見つつ坂田が言う

「いや：泣かなくなったんだなって」

「はぁ？；」

柴田が言うと坂田が素っ頓狂な声を上げた

「昔は転んだら泣いて俺に助け求めてきたんですけどね：」

柴田が苦笑いで言った

「阿呆； いくつだと思ってんだ；」

坂田が言う

「なんだか寂しいナァ：」

柴田が言った

「何がだよ；」

坂田が歩き出して言う

「なんだか大事なものがなくした様な気がして」

「はぁ？；」

坂田に追いつこうと足早に柴田が歩き言った

「可愛かったナァ若：こーんな鼻ちようちんよく出してたんですよ」

「うっさい！：！；」

【こーんな】と指で輪を作って鼻につけながら柴田が言うと坂田が

怒鳴った

「：時間は流れるんですね：やっぱり」

ボソッと柴田が言う

「そりゃそうだろう； 時計止めても時間はとまらねえし」

坂田が言う

「です：ね：」

小さく聞こえるか聞こえないかの声量で柴田が言った

「なんか：お前変じゃねえか？；」

坂田が足を止めて柴田を見た

「そうですか？」

柴田が返す

「なんかあったのか？」

坂田が柴田に近付いて聞いた

「：なんでもありませんよ？ただ若が成長して俺の手借りなくてもよくなったってことが少し寂しいだけです」

柴田が笑った

「手：かりまくってるじゃん俺」

坂田が言う

「若：」

柴田が坂田を見た

「なんだよ」

坂田も柴田を見返す

「：いえ：なんでも」

少し間を開けて柴田が言った

「さ、早く行きましょう」

坂田から借りたマフラーを巻きなおした柴田が歩き出した

「：変なヤツ：」

坂田が言った

「あれ？ 本間：」

セブンイレブンに入った瞬間坂田が知り合いを見つけて小さく言った

「柴田さん」

本間も気づいたのか柴田の名前を呼んだ

「俺は!;;」

柴田の名前しか言わなかった本間に坂田が言う

「と坂田」

表情を変えずに本間が付け足した

「こんばんは香奈ちゃん」

「か:!:?;;」

柴田が本間を苗字ではなく名前で呼んだことに坂田が目を見開いて柴田を見た

「どうしたんですか? 若」

変な顔で自分を見る坂田に柴田が聞く

「か:香奈ちゃんって:」

「私」

坂田が言うとは本間が挙手して言う

「それはわーってる!;; なんてお前本間を名前で:」

坂田が柴田に聞いた

「え? いけませんか?」

柴田が聞き返した

「怪我はもういいんですか?」

坂田を無視しているようなカンジで本間が柴田に聞いた

「ああ:なんとかもう大丈夫」

柴田が答えるとやんわりと本間が微笑んでそして一礼をした後坂田と柴田の間をすり抜けてセブンイレブンから出て行った

「若:?:」

ガサガサと袋を持って歩く柴田が先に行く坂田に声をかけた

「若ってば:」

柴田に買ってもらったブリトーをもくもくと食いながら歩く坂田は足を止める気配がない

坂田が言った

「やっと口聞いてくれましたね」

「ブッ!;」

柴田が言う　と坂田が噴出した

「若黙ったままなんですもん」

ハハハと柴田が笑う

「それはお前が…ふぐ」

怒鳴り始めようとした坂田の口に柴田が何かを押し込んだ

「もう遅いですから近所迷惑ですよ若」

につこり笑った柴田の手にはチーズおかきの包み紙

「やきもちありがとうございます」

クシャシャと柴田が坂田の頭を撫でて笑うと坂田が思い切り柴田を
ひっぱたいた

「お前ってさ」

坂田が言った

「なんですか？」

柴田が聞き返す

「つかめねえよな」

坂田が言う　と柴田がきよとした顔をする

「なんですかいきなり…」

柴田が言う

「隠し事は多いわ…いなくなるわ抜けてるわ」

坂田が指折り言った

「…俺が組継ぐならお前はずっといるのか？」

「え？」

最後小さく言った坂田に柴田が聞き返す

「うら、ゴミ」

坂田が柴田に飲み終えた缶を押し付けて門の横の出入り口から中に入
った

「たまには茶にしろバーカ」

玄関に向かってかけていきながら坂田が言った

「バーカって…」

駆けて行く坂田の背中をぽかんと見ていた柴田がプツと噴出したのはまもなくのことだった

「…マジ?;」

昼休み昔ながらの石油ストーブを囲んで南が言った

「柴田さんが本間を…」

中島が南に続く

「香奈…」

京助がゆっくりと振り返ると阿部の机に腰掛けて足を組む本間が見えた

「って呼んだんだよな」

坂田が言う

「何がどうして香奈ちゃん?;」

南が坂田に聞く

「俺が知りてえよ; やたら仲よさげだったし」

坂田が答えた

「恋人は中学二年生? 南とありす以上の年の差?」

中島が南を見た

「そこで俺を出しますか」

口ではそう言いながらも南の顔がにやける

「…香奈ちゃん…」

京助が本間の名前を言うところ馬鹿と京助は揃って顔を本間方向に向けた

「…ええ乳してまん相変わらず」

「どこ見てんですか中島さん」

「いやでも目はソコにいくよね」

「制服になりたい俺」

「水着はえがったな…」

「：おう」

ボソボソと3馬鹿と京助が本間を見て言う

「柴田さんもあの乳に悩殺されたか」

「はっ!？」

京助が言うのと坂田が声を上げた

「まさかあ柴田さんに：でも：どうだろね坂田君や」

南が坂田を見る

「そーいや柴田さんの好みってどんなかとかお前知らねえのか？」

京助が坂田に聞く

「：知らん」

坂田が答えた

「俺は可愛いのがイイナア」

南が言う

「お前の好みは聞いとらんで」

中島が南に突っ込む

「柴田の好きなので俺が知ってるのったら：」

坂田がボソツと言うと京助と中島そして南が坂田を見た

「知ってるって言ったら？」

ザワザワと生徒がざわめく中でもしばしの沈黙

「：チーズおかきとコーヒー」

坂田が真顔で言った

「みう：」

ニヤロメの喉を柴田が指で撫でるとニヤロメが嬉しそうに身をよじつてもっと撫でろとねだり始める

「：あれ：お前ココどうした？」

腹を向けたニヤロメに柴田が聞いた

「にうゝ：」

ニヤロメの前足の内側に見えた生傷柴田が見つけた

「まったく：仕方ないな：」

柴田がふっと微笑んでゆっくりニヤロメの傷を撫でる

「気をつけろよ？」

柴田が指を離すとニャロメの傷が消えていた

「…あまり力は使えなくなったからな…」

ニャロメを抱き上げて柴田が言う

「俺もあの二人と同じ感情を持ってしまったんだ…おかしいだろう？」

腕の中のニャロメを撫でて柴田が目を細めた

「散々愚かだなんだかんだ言ってきたあの感情…」

柴田がニャロメを撫でる手を止めた

「…本当ヤキが回ったんだな俺も」

「なう…」

柴田の言葉が通じているのかいないのかニャロメが鳴き声を上げた

「お口の恋人はロツテだろ」

京助が言う

「アイツはチーズおかきとコーヒーなんだよ」

坂田がオレンジ色のカゴを下げて向かう先には復刻版シリーズの商品棚

「俺はゆず茶のど飴が最近のお口の恋人」

南が【はちみつゆず茶のど飴】を手にとった

「飴は茶菓子にならんじゃろ」

中島がカリントウをかごの中に入れた

「割り勘だかな」

坂田が言う

「一人500円くらい？ あ、俺薄焼きサラダ煎餅食いたい」

京助が南に向かって言う

「アイアイサー」

京助のリクエストを聞いた南がカゴの中に薄焼きサラダ煎餅を放り込んだ

「割れんじゃん； 丁重に扱え；」

京助が言う

「後何買うよ」

ポッキーをカゴに入れながら中島が聞く

「…コレでいくらいだったんだ？」

坂田がカゴを覗き込むと他の三人も覗き込む

「…誰か計算しろよ」

カゴの中を見たままとまっていた会話を進めようとしたのは京助

「言いだしっぺがやるべきですかここは」

南が京助の肩を叩いた

「…お前俺の期末の点数知ってて言うか？」

京助がエセっぽい笑顔を爽やかに南に向けた

「ってかドッコイドッコイの頭の俺らに無理難題ぬかせ」

中島が言う

「まあ…足りんだろ…たぶん」

坂田が言うとレジに向けて足を進めた

「たかが菓子…されど菓子…」

中島が言うと他三人が頷いた

「まさか三千円の大台に乗ってようとは…」

南が言う

「レジが松倉のねーちゃんでもよかったナァ； 返品させてくれて助かったぜ；」

坂田が言った

「第一誰だよ； よっちゃんイカとかサラム大量購入しようとしたヤツ」

坂田が言うと中島がゆっくりと挙手した

「お前将来飲兵衛決定だな」

南が言う

「でも飲兵衛って甘党になるんじゃないかなかったか？」
京助が突っ込んだ

「そういや…そう聞くよね…」

南が考え込んだ

「てか柴田さんて酒は…」

中島が坂田に聞いた

「飲まん…ってかそうだ； コレから宴会やりからコーヒーか茶用意しとけて言っとかねえとな；」

坂田がそう言いながら携帯を取り出した

「…なあ」

携帯を開いてメールを打ち出した坂田に京助が声をかけた

「何だ？」

坂田が送信ボタンを押した後顔を上げて京助を見た

「…携帯って計算機能付いてなかったっけか？」

京助が言うとはたと坂田が止まった

【第九回・録】ムカムカパラダイス（前書き）

滅多に怒らない緊那羅が怒っている
原因はどれも京助にあるみたいで…

【第九回・録】ムカムカパラダイス

ダンッ！！　という勢い任せて叩きつけました的音が栄野家台所から聞こえたのは金曜日の夕方

「：まな板が今日のおかず？」

悠助と共にホットミルクに蜂蜜を溶かしていた慧喜えきが言った

「緊ちゃん：怖い」

包丁を片手にした緊那羅きんならの目は据わっていてソレを見た悠助がボソッと言った

「：ムカつくっちゃ：」

真ッ二つになったタマネギを今度はリズムよく薄切りにしながら緊那羅きんならが言う

「何があつたの緊ちゃん：」

恐る恐る悠助が緊那羅きんならに聞くと緊那羅が手を止めた

「今朝ッ！！」

そしてまた勢いよく包丁をタマネギめがけて振り下ろした

「おいちゃんの計算では次やったらまな板が割れると思うよ」

「あ、ばか」

「うぐちゃんだー」

聞こえた声に慧喜えきと悠助が反応して声の主の名前を言った

「う・ぐ・ば・かだつてんだろっ！！」

慧喜えきの呼び方が気に食わなかった鳥俱婆迦うぐばかがキーキーと喚いた

「やかましっちゃッ！！！！」

そんなモブに対して緊那羅きんならが珍しく怒鳴った

「：怖っ」

「京助だー」

「義兄様」

またも聞こえた別の声にまたも慧喜えきと悠助が反応して声の主の名前を言った

「で？ 今朝がどうしたって？」

冷蔵庫を開けて牛乳を取り出しながら京助が聞いた

「今朝散々洗濯物出しておいてくれっていつてたじゃないっちゃかッ！！」

緊那羅きんならが京助に向かっていった

「：義兄様のせい？」

慧喜えきが京助を見ると悠助と鳥俱婆迦うぐばかも揃って京助を見た

「あゝワリワリ」

ボタンと冷蔵庫の戸を閉めて京助がハッハと笑った

「第一あのシャツ何日間着てるんだっちゃッ！ いい加減洗濯しろっちゃッ！！」

反省の色皆無の京助に緊那羅きんならが再び怒鳴る

「んな怒んなくなたっていいじゃん；」

「京助汚いゝ」

「義兄様ソレ全部飲んでよ？」

牛乳をラッパ飲みしだした京助に慧喜えきと悠助が批難えきゴーゴーした

「ちゃんとコップに注いで飲めっていつてるじゃないっちゃッ！！」

「ヘイヘイ；」

更に緊那羅も批難えきゴーゴーすると京助がやる気なく返事をして冷蔵庫に牛乳をしまった

「ほん：つと：痛ッ；」

溜息をついた直後片手で目を擦った緊那羅きんならが声を上げた

「ッゝゝゝゝ；」

緊那羅きんならが足踏みをしつつ目を押える

「緊那羅？」

緊那羅きんならの変な行動を見て鳥俱婆迦うぐばかが声をかけた

「どうしたの緊ちゃん？；」

悠助も心配になったのかホットミルク入りのカップを置いて緊那羅きんならに駆け寄った

「いたたたたたゝゝ；」

足踏みを早めて緊那羅きんならが言う

「ばっかお前タマネギ触った手で目エ擦ったろ；」

京助が口の端を上げて言った

「だってッ； うあゝ；」

「擦るなつてのッ； 悠タオルとつてんで濡らせ」

目を擦る緊那羅きんならの手を掴んで京助が悠助に言った

「痛い痛いゝ；」

緊那羅きんならが喚く

「うら」

京助が喚く緊那羅きんならの目に濡れたタオルを押し付けた

「治るの？」

鳥俱婆迦が京助を見上げた

「さあ」

京助が言う

「義兄様無責任…」

慧喜えきが呟いた次の瞬間

「きやあああああああああああ！……！！！」

黄色くそして可憐とは程遠い悲鳴が台所から正月町へ向けて発信された

「お約束だよね」

慧喜えきがその叫び声の主を見て言った

「何をなさってるんですの————————！！？」

緑の両葉を茶色の顔（？）に添えて可憐な夏の妖精ヒマ子さんが声を上げた

「何って…見ての通りじゃないの？」

鳥俱婆迦うぐはかが言う

「ばっ…；」

京助が鳥俱婆迦うぐはかの言葉に反応した

「見ての通り…って…」

鳥うぐばか俱婆迦の言葉にヒマ子が再び京助と緊那羅きんならの方を見た

「：見ての：通り：」

京助に押し付けられたタオルで目を押えている緊那羅きんなら

ソレがどう彼女（？）に映っているのかと一同黙ってヒマ子の次の言葉を待っていた

「まさか：」

ヒマ子が言葉を漏らすと一同息を呑んだ

「嬉し泣きですの——————————————————————」

「はっ！？；」

ヒマ子が叫ぶと京助が変な声を出した

「嬉し泣き？；」

やっと目の痛みがひいたのか緊那羅きんならがタオルから目を離して顔を上げた

「何で嬉し泣きなの？」

慧喜えきが率直にヒマ子に聞く

「最近どうもハルミママ様のお手伝いをしてらっしやると思ってましたわ：そうなんですのね：やっとなかりましたわ：」

ヒマ子がゴトリと鉢を引きずった

「：何だっちゃ？」

目の前に来たヒマ子を緊那羅きんならが見る

「花嫁修業：」

「へ？」

ボソッと聞き取れない声でヒマ子が言うのと聞き取れなかった緊那羅きんならが聞き返す

「花嫁修業だったのですわね：」

ユラユリとまさにアノNHK忍者アニメの剣客教師と同じような身の動きでヒマ子が体をくねらせた

「花：嫁？；」

わけがわからない緊那羅きんならが花嫁という言葉のリピートする

「：婿じゃないの？」

鳥倶婆迦うぐばかが突っ込む

「お婿さん修行？」

悠助えきが慧喜を見上げて言う

「花婿修行になるよね」

慧喜えきが悠助を見返して言った

「：緊那羅きんならって女だったの？」

鳥倶婆迦うぐばかがまた突っ込む

「私は男だっちゃ；」

緊那羅きんならが言った

「でも前にあつくん兄ちゃんが男同士でもケツコンはできるっていつてたよね」

悠助が言う

「ばっ：； 悠；」

京助がオイオイソレを言っちゃアカンデショというカンジで悠助を見た

「俺と悠助は結婚も子供もできるもんね」

慧喜えきがにっこり笑って言うとう悠助が嬉しそうに笑顔を返した

「ふゝん：じゃあ京助と緊那羅きんならはケツコンはできるんだ」

鳥倶婆迦うぐばかが妙に納得したように頷いた

「ソコ！； 納得すんな！！；」

京助が鳥倶婆迦うぐばかに向かって怒鳴る

「キ————！！」

ヒマ子がどこから取り出したのかピンクのハンカチをキリキリと歯で引っ張りながら悔しがる

「やはり緊那羅きんなら様は————ッ！！」

今にも食いちぎらんという勢いでヒマ子がハンカチを引っ張る

「私はただタマネギが…；」

喚き散らすヒマ子に緊那羅きんならが声をかける

「タマネギがなんだって言うんですの！？」

ヒマ子が緊那羅きんならに食って掛かる

「タマネギ切っててそれで目を擦ったら目が…だから京助が…」

緊那羅きんならが説明するとうんうんと一同が頷き始める

「京様が！？」

京助の名前に過敏反応したヒマ子が声を上げる

「こうやって濡れタオルで押えてただけだ；」

「うぶ；」

京助が再び濡れタオルで緊那羅きんならの顔を押えながら言った

「何するっちゃッ！！；」

京助を押した緊那羅きんならが少しよろけるとタマネギを切ったままだったまな板上の包丁が動いた

「なにしてるんですか…まったく…」

乾闥婆けんたつばが大きな溜息をついた

「何事かと思いましたよ」

じと目で乾闥婆けんたつばが見た先には右足の甲に包帯を巻いた京助と腕に絆創膏を二箇所貼ってる緊那羅きんなら

「第一台所で騒ぐ自体が間違っているんじゃないですか？」

乾闥婆けんたつばが血のついたティッシュやら何やらをまとめながら少し怒った口調で言った

「ごめんだっちゃ…」

緊那羅きんならがしゅんとして謝った

「しばらくは走ったり飛んだりしないことです」

立ち上がった乾闥婆けんたつばが京助を見下ろした

「あゝ…」

京助が乾闥婆けんたつばに向けて片手をヒラヒラさせた

「正装しないで飛び込んできたかと思うと説明もしないで手を引ッ

張って連れてこられてみれば…まったく…」

ゴミ箱にゴミを捨てながら乾闥婆けんだつばがまた大きく溜息をついた

「僕だって暇なわけじゃないんですからいつもいるとは限らないんですよ？」

きつい口調で乾闥婆けんだつばが言う

「…はい…」

緊那羅きんならが俯いたまま言った

「…さんきゅな乾闥婆けんだつば」

京助がお礼を言うのと乾闥婆けんだつばが小さく肩で息をしてそれから戸を開けた

「もう大丈夫ですよ悠助けんだつば」

廊下で待っていた悠助に乾闥婆けんだつばが声をかけると泣きすぎてしゃっくり地獄に陥った悠助が慧喜えきと烏俱婆迦うぐばかと共に部屋に入ってきた

「義兄様大丈夫？」

慧喜が京助に聞く

「まあ大丈夫といえば大丈夫だな…」

京助が右足を上げて言った

「貴方が本来ならば京助を守る立場なんですよ？」

「まあまあ…」

乾闥婆けんだつばが緊那羅きんならに言うのとそれを京助が宥める

「逆になってるじゃないですか」

乾闥婆けんだつばの言葉に緊那羅きんならが膝の上においていた握りこぶしをぎゅっと握った

「平穏を楽しむのも駄目とは言いません…が役目を忘れては困ります」

「…はい…」

淡々と発せられる乾闥婆けんだつばの言葉に緊那羅きんならが小さく返事を返す

「貴方の役目は見極め役と守護…わかっていますね？」

「…はい…」

乾闥婆けんだつばの言葉に緊那羅きんならがまた小さく返事をした

「その返事…信用しますからね」

乾闥婆けんだつぱが緊那羅きんならの頭を軽く撫でて言うと緊那羅きんならがコクリと頷いた

「では僕はコレで」

緊那羅きんならの頭から手を離した乾闥婆けんだつぱがにっこり笑ってそして廊下に出た

「おーさんきゅなー」

廊下に向かって京助が言った

「…きつついね」

鳥俱婆迦うぐばかがボソツと廊下を見ながら言った

「でも乾闥婆けんだつぱは正しいこと言ってるんだよね…だって緊那羅きんならは…」

「…っわかつてるっちゃー!!」

慧喜えきが言いかけると緊那羅きんならが声を上げた

「きん…なら？」

俯いたままの緊那羅きんならが大きな声を上げたのに驚いた一同が緊那羅きんならを見た

「わかつてるっちゃ…私は…私は京助と悠助を守らないといけない
ってことは…わかつてる…」

段々と声を小さくしながら緊那羅きんならが言った

「わかつて…るんだっちゃ…」

ゆっくりと立ち上がった緊那羅きんならの次の行動を一同が待っている

「…ごめんだっちゃッ」

そう言いって緊那羅きんならが足早に部屋を出ていた

「ごめんだっちゃって…言われてもナァ； 俺だって悪いんだし…」

緊那羅きんならが出て行った後京助が言った

「緊那羅きんならなんだかムカムカしてるみたいだった」

鳥俱婆迦うぐばかが言う

「緊ちゃん…」

しゃっくり地獄から開放された悠助が呟いた

「ストレスでもまあ溜めてんだろなあ…」

京助が天井を見上げて言った

自室の戸棚を開けて緊那羅きんならが小さな箱を取り出しそして部屋のほぼ真ん中に腰を下ろした

暗くなった室内に街灯の明かりがほんのり差し込んで緊那羅きんならの横顔を照らす

「…【竜】…」

小さな箱を両手で包み緊那羅きんならが呟く

「私は貴方の意志を継げるんだっちゃ…？」

小さな箱に額をつけると緊那羅きんならの右手首の腕輪がコツンと音を立てて箱にぶつかった

その腕輪を緊那羅きんならが黙って見つめる

腕輪についているのはほんのり緑がかった宝珠と透明な宝珠が二つ

「…守る力…」

腕輪を撫でた緊那羅きんならがゆっくりと目を閉じた

「お…」

「あ…」

緊那羅きんならが部屋を出ると京助と鳥倶婆迦うぐばかが部屋の前に立っていた

「歩いて…大丈夫なんだっちゃ？」

京助の足を見た緊那羅きんならが京助に聞く

「走ったりしなきゃ大丈夫だって乾闥婆けんたっぱも言ってただろ」

京助も自分の足を見て言った

「おいちゃんの計算じゃあと4日もすれば走れるようになるよ」

鳥倶婆迦うぐばかが言う

「それより腹減ったんだよな」

きゆるうーっと京助の腹の虫が鳴いた

「おいちゃんも腹減った」

鳥倶婆迦うぐばかが京助の腹を見てそして緊那羅きんならを見ていった

「あ…うん…」

緊那羅きんならが返事をするとう京助と鳥倶婆迦うぐばかが歩き出した

「…京助」

緊那羅きんならが京助を呼ぶと鳥俱婆迦うぐばかも一緒になって緊那羅きんならを振り返った
「なんだ？」

京助が聞く

「…私…【天】に…戻ろうと思うっちゃ」

緊那羅きんならが言った

「いんじゃない？」

京助がさらっと言う

「てか今日行ったばかりじゃん？ 忘れ物でもしてきたのか？」
へっとの端を上げて言う京助を緊那羅きんならが見る

「…そうじゃなくて…その…だから…」

緊那羅きんならが京助の言葉を否定して何かを言おうとする

「まあ後から行ってこいよ今はとにかくハラヘリだし」

京助が歩きながら言った

「母さんとかには俺が言っておくからさチャッチャと行ってこいや」
足をひよこひよこさせて歩く京助の横を鳥俱婆迦うぐばかが緊那羅きんならの方を気にしながらも歩く

「…緊那羅？」

一向に足を出そうとしない緊那羅きんならに鳥俱婆迦うぐばかが声をかけた

「そう…するっちゃ」

いかにも今即席で無理して創りましたという笑顔で緊那羅きんならが言いそして小走りで京助と鳥俱婆迦うぐばかの後ろまで来ると何事もなかったかのように歩き出す

「手貸すっちゃ？」

緊那羅きんならが京助に聞く

「いいっちゃよー」

京助が笑いながら返すと緊那羅きんならが苦笑いを返した

「…緊那羅…」

鳥俱婆迦うぐばかが緊那羅きんならのその苦笑いを見て呟いた

「緊那羅」

名前を呼ばれたのに少し驚いたのか緊那羅きんならがぴくつと肩を少し上げたあと振り向いた

「…鳥俱婆迦うぐぼか…」

わいわいと騒がしい茶の間から一転静かな和室に街灯の明かりか月明かりかそれともその両方の灯りか…そんなほんのりとした明かりに照らされた二つの人影

「おいちゃんはお前のことはよく知らない」

鳥俱婆迦うぐぼかが言う

「でもお前が役目を持つてるのは知ってる」

ずり落ちてきたのか鳥俱婆迦うぐぼかが帽子をくいと直しながら言った

「おいちゃんの計算ではお前の宝珠に完全に色がつく前に【時】はくるよ」

鳥俱婆迦うぐぼかの言った【時】という言葉に緊那羅きんならが一瞬目を見開いた

「そしてお前は【役目】を果たさないといけないんだよ」

鳥俱婆迦うぐぼかが言う

「それとも…迦楼羅かるらと同じ罪を負う？」

「え…？」

俯うつむいて鳥俱婆迦うぐぼかが小さく言った

「迦楼羅かるらは前の【時】のとき役目を捨てたんだ…そして罪を負った」

鳥俱婆迦うぐぼかがまた帽子を直した

「うん…乾闥婆けんだつぱからきいたっちゃ…でも…」

「おいちゃんも【時】は嫌いだよ」

緊那羅きんならの言葉を鳥俱婆迦うぐぼかがさえぎった

「矜羯羅こんがら様も制多迦せいたか様もみんなみんな笑わなくなるから」

鳥俱婆迦うぐぼかが言う

「…うん…」

緊那羅きんならが頷く

「おいちゃんはみんなに笑っていて欲しいんだよ」

鳥俱婆迦うぐぼかが言った

「【天】に戻るって言ったけど…それがどういことかおいちゃん

計算してみた」

緊那羅きんならの顔が真顔になった

「緊那羅は気づいてないかもしれないけどお前の存在って凄く大きいんだ…特に京助にとっては」

「私もだっちゃ」

鳥倶婆迦うぐぼかが言うきんならと緊那羅がふっと笑った

「私にとっても京助は大きい存在だから私は【天】に戻るんだっちゃ…守りたいから」

「…いいの？」

鳥倶婆迦うぐぼかが聞くと緊那羅きんならがゆっくり頷いた

「緊那羅きんならが今いなくなったら…」

「大丈夫だっちゃ…すぐ…すぐ戻ってくるっちゃ」

鳥倶婆迦うぐぼかの頭を撫でた緊那羅きんならの腕で腕輪が光る

「だから…それまで京助と悠助を…」

撫でていた緊那羅きんならの手が鳥倶婆迦うぐぼかの頭から離れた

「悠助には慧喜えきがいるよ」

鳥倶婆迦うぐぼかが緊那羅きんならを見た

「そうだっちゃね」

緊那羅きんならが苦笑いで言った

「朝とか本当寝起き悪いっちゃしすぐ忘れ物するっちゃから…そこらへんもお願いするっちゃ。あ、あと…」

「まだ何かあるの？」

栄野家の日常茶飯事を思い出しながら言う緊那羅きんならに鳥倶婆迦うぐぼかが突っ込む

「いってらっしゃいとおかえりは忘れないで言って上げてほしいっちゃ」

「え…？ あ…うん」

緊那羅きんならの言葉に鳥倶婆迦うぐぼかが首をかしげながら返事をするきんならと緊那羅が笑った

「じゃあ…頼むっちゃ」

「言っ*て*いかなくていいの？」

腕を前に伸のばした緊那羅きんならに鳥俱婆迦うぐばかが聞くと茶の間から京助の馬鹿笑いが聞こえてきた

「…でっかい笑い声だっちゃんね」

その笑い声を聞いた緊那羅きんならが苦笑いで溜息をつくと緊那羅きんならの腕が何かにさえぎられたかのように消える

「緊那羅きんなら」

部屋に入っ*て*いくかのように消えていく緊那羅きんならに鳥俱婆迦うぐばかが声をかけた

「いっ*て*らっしやい」

鳥俱婆迦うぐばかが言っ*た*

「京助！！ アンタまた靴下投げ出してッ！！」

土曜日母ハルミの声が栄野家に響いた

「今片付けるってんだろッ！！」

それに負けじと劣らない京助の声も響く

「今今ってアンタの今はいつなのッ！」

「今ったら今しかねーじゃんッ！ 俺だっ*て*一人しかいねえしやっ*て*ることあんだからそんなすぐできるわけねーじゃんッ！！」

「脱い*で*すぐ洗濯機に入れておけば一回で事がすむでしょ！？ まっ*た*く…」

母ハルミと京助の声が交互に響く

「…今日コレで6回目だね」

鳥俱婆迦うぐばかがボソツと言う

「緊那羅きんならいなくなっ*て*からまだ一日もたっ*て*ないのに」

そう言いながら鳥俱婆迦うぐばかがチラツと横を見ると慧喜えきの膝の上に座っ*て*いる悠助がつまらなそうな顔をしている

「なんだか…イヤなんだやな」

でべろっ*っ*とうつ伏せに伸びたコマが言っ*た*

「自分の家なのに居心地わるいんだやな」

イヌも同じく言う

「なんでなんだろう：俺もそう」

慧喜えきが悠助の頭に頬ずりをして言う

「おいちゃんの計算では緊那羅きんならがいないからだよ」

そんな面々に鳥俱婆迦うぐばかが言った

「だって前は緊那羅きんならがいなかったんだやな」

起き上がったイヌが言う

「そうなんだやなでもこんなに居心地悪くなったことは…」

コマが言うといヌが頷く

「まったく：ホラホラコマもイヌも！ だらだらしないの！！」

茶の間に入ってくるなり母ハルミがコマといヌに向かって言った

「ハルミママ…」

そんな母ハルミを見て悠助が眉を下げた

「こんな嫌な空気：主がいなくなつたとき以来なんだやな…」

コマがボソツと呟いた

「面白いことになるかも」

栄之神社の鳥居の上クスリと笑みを浮かべ腰掛けているのは白い布を纏った誰か

伸ばした黒い腕には黒い玉で作られた数珠の様な腕飾り

「待ってるだけじゃ：いつになるかわからないし：また少し突付いてもいいかもね」

口元に笑みを浮かべたその誰かが耳から外したのはオレンジ色のフサ飾りがついた黒い耳飾

「ね…？ 京助…悠助」

そしてその耳飾を鳥居の下に落とした

バチッ！！！！

「な…」

落とした耳飾が何かにはじかれ石段をカツンカツンと音を立てながら落ちていく

「…結界…へえ…あんな風になってまで守るんだね」

感心したような口調で言うとなつわりと体を浮かせ転がり落ちた玉の元に着地すると玉を拾い上げる

「竜」

呟いたその言葉には憎しみ嬉しさその他イロイロな感情が込められて聞こえた

「京助!!」

母ハルミの声が再び響いた

「なんだよッ!!」

ソレに対してまた京助の怒鳴り声が返される

「でも…今回は手を出さなくてもいいかもね」

母ハルミと京助の親子口げんかを聞いたその人物が耳飾を耳に付け直して呟く

「さあ…どうなるかな？」

楽しそうに言うとなつとその人物は姿を消した

「京助が変？」

電話の子機を持ったまま中島がソファに腰掛けた

『そーヒマだから遊ばね? って電話したらさー不機嫌極まりない声で断られたんだよねえ』

困ったようなでもどこことなく楽しそうな南の声が受話器の向こうから聞こえた

「お前またふざけてからかったんじゃねーの? ;」

南のいつもの行動から予測したのか中島が苦笑いで聞いた

『んな人がいつもギャグ路線行ってるような言い方すんなよなー…; ,

でも…マジで変だぞ京助』

前半は笑って言っていた南の声が後半少しシリアスになった

「…お前がそういうなら変なんだろうな」

中島がソファの背もたれから体を起こして言う

『どういう意味だそりゃ；』

南が突っ込む

「お前って何かしろ細かいこと気づくからさー…坂田には？」

『…まだ言っていない』

中島が言うとな南が少し黙った後言った

「そか…とりあえず京助ン家で集合しねえ？ お前坂田つれてこいや」

反動を軽くつけて立ち上がった中島が尻を掻きながら子機の充電器の所まで歩く

『押しかけて大丈夫かね？』

南が聞く

「原因究明だろ？」

中島が言う

『事件は学校でおきているんじゃない！！ 栄野家で起きているんだ！ 的ですか』

南が言った

「まあそんなトコ？ 滑る大捜査線とでも仮につけとけ」

『ヒャー！！ マイツタネ！ 了解了解…じゃ石段の下で逢引ね柚汰さん』

南が笑いながら言うとな電話が切れた

「…なんかあったな」

プープー…という電子音が出る子機を見つめて中島が呟いた

「土曜日に 起こされ何事 京助さん」

いつもは結っている髪をざんばらに解いた頭のまま坂田が石段の上を鳥居を見上げた

「お前よく即席で俳句できるよなあ；」

中島が言う

「ソレより今は京助でしょ； …ラムちゃんに聞けばわかるかな」

南が石段に足をかけた

「お？ コマイヌコンビじゃん」

同じく石段に足をかけた坂田が石段を上から降りてくる二匹を見て言った

「おいコマイヌー!!」

中島が二匹を呼ぶと気づいたのか3馬鹿に向かって二匹が石段を駆け下りてきた

「3馬鹿なんだやな」

コマが言う

「そうなんだやなんゝ…てか京助いる？」

南が二匹の独特の口調を真似して聞いた

「…いるんだやな…でも…」

「でも？」

答えたイヌに坂田が突っ込む

「凄い機嫌悪いんだやな」

「やっぱ？」

コマが言うと中島も言う

「原因は何なワケ？」

南がしゃがんでコマイヌと目線を合わせて聞いた

「…京助だけじゃないんだやな…家全部が不機嫌なんだやな」

しゅんと尻尾を下げてイヌが言う

「家…ってハルミさんも悠も？」

坂田が聞くとコマイヌが揃って頷いた

「親子喧嘩？」

南が聞くと今度は二匹揃って首を振った

「違うんだやな…緊那羅がいなくなっただやな」

「へー…緊那羅がねえ…いなく…」

イヌが言った言葉を何気なく聞いて次に移ろうとした3馬鹿が数秒間止まった

「…緊那羅【天】に帰ったんだやな」

コマが石段を見上げて言った

コマイヌの話聞いた3馬鹿が顔を見合わせると揃って頷いた
「そかそか：原因は説明したな」

坂田が納豆ゴムで髪の毛を束ねながら言った

【解説しよう。「納豆ゴム」とは俗に言う布などでコーティングされて
いないただのゴムのことをいうのである】

「で？ ラムちゃんはいつかえってくるのさ？」

南がコマイヌに聞く

「知らないんだやな」

「：つかえねえ；」

イヌが言うのと南が溜息をついた

「山口さん家のツトムくんよりタチが悪いかもよ？；」

南が中島と坂田を振り向いて言う

「えーいのさん家の京助くんこのごろ少し変よ～ってかあ？
こりゃ：どうしますか？；」
：

中島がワンフリーズを歌い終わった後聞く

「どうするっても：」

坂田が顎に手を添えて考え込む

「でもなんだって急にラムちゃん帰っちゃったんだろね」

南が言った

「あんだだけ京助を守る守る言ってたのに：愛想尽きたとか？」

「違うよ」

南の言葉に石段の方から突込みが入った

「ばかなんだやな」

「鳥倶婆迦だッ！！
：守りたいから緊那羅きんならは【天】に戻ったんだ」

コマの言葉を怒鳴り半分で訂正したあと鳥倶婆迦うぐばかが言った

「守りたいから帰ったって：どゆこった？」

中島が聞く

「緊那羅きんならは弱い」

鳥俱婆迦うぐぼかが言った

「ソレが緊那羅きんならはイヤだったんだよ弱かったら京助も悠助も守れないだから緊那羅きんならは帰ったんだ」

鳥俱婆迦うぐぼかが一通り言い終わると3馬鹿がほぼ同時に石段を見上げた
「でも：おいちゃん思うんだ：たしかに緊那羅きんならは力は弱いかもしれないけど緊那羅きんならにしかできないことがあるよねって。緊那羅きんならだけにしかできないこと：おいちゃんだけにしかできないこときつとあるよねって」

今度は3馬鹿が揃って鳥俱婆迦うぐぼかを見た

「：いいこと言うじゃんばか」

坂田が言った

「鳥俱婆迦うぐぼかだッ！」

キーキーと鳥俱婆迦うぐぼかが喚く

「ゼンにしかできないこともあるんだやな？」

「ゴにもあるんだやな？」

鳥俱婆迦うぐぼかの言葉を聞いていたコマイヌが半分ハモリながら聞いてきた

「みんなにあるんじゃないかと俺は思う」

中島が言った

「解決！！」

坂田がパンツと手を叩いた

「栄野家に渦巻くこのムカムカパラダイスな空気を排除できるのは緊那羅きんならだけだと思います」

そして人差し指を立てて言った

「俺等にはたぶん無理だろな」

中島も同意した

「そう考えるとラムちゃんの力ってすげくね？」

南が言う

「おいちゃんもそう思う」

鳥俱婆迦うぐばかがずり落ちてきたのか帽子を直しながら南の言葉に頷いた

「おいちゃんは緊那羅好きだよ」
きんなら

鳥俱婆迦うぐばかが言った

「京助もお前等も好きだよ」

「…ど…ドウモ」

3馬鹿とコマイヌに向けて鳥俱婆迦うぐばかが言うとき中島が何故か照れながらお礼らしき言葉を返した

「だからおいちゃんはみんなに笑っていて欲しいんだ」

鳥俱婆迦うぐばかが言う

「だから…」

そしてキュッと帽子を掴んでお面の顔を上げた

「おいちゃんが緊那羅きんならを連れて帰ってくる」

足に巻かれた包帯をただ黙って見ていた京助がずるずると足を延ばして最終的に仰向けに寝転がった

「気にしすぎなんだよ…」

ボソツと言うと鼻から息を出した

「ばかやろ」

「貴方に言われたら緊那羅きんならも終わりですね」

自分しかいないと思って吐き出した言葉に突込みが入ったことに京助が驚き体を起こした

「け…」

「いつも以上に阿呆な顔してますよ京助」
けんだっぱ

乾闥婆けんたっぱがにっこり笑いながらもいつものように毒舌で言った

「おま…なんで…」
きんなら

「緊那羅の代わりに来たのか…と知っているなら外れです」
きんなら

「あ…さいですか…」

京助が聞こうとしたことに對し京助が聞く前に乾闥婆けんたっぱが答えた

「…き」

「緊那羅きんならは元気ですよ表向きは」

「あ…そですか；」

またも乾闥婆けんたっぱが京助が聞こうとするより先に答えた

「…京助」

乾闥婆けんたっぱが小さく京助を呼んだ

「なん…」

返事を返そうとした京助の頬に薄水色のピョン毛が触れた

「繰り返さないでください…【時】を」

「な…乾闥婆？；」

京助に抱きついた乾闥婆けんたっぱが静かに言った

「変えてください【時】を…悠助と共に…もうあんな【時】は最後
にしてください」

「…それ鳥類…迦楼羅かるらにも言われたような気がする…」

抱きつかれたまま話を聞いていた京助が言った

「【時】の犠牲者は僕等で最後にしたいんです…だから…」

顔を上げた乾闥婆けんたっぱを見た京助が一瞬止まった

『変えてください』

乾闥婆けんたっぱと被って見えたのは黒髪の少女

そして乾闥婆けんたっぱの声と聞いたことのない少し高い少女の声がハモって

聞こえた

「…乾闥婆？」

数回瞬きをして目を擦った後京助が目の前にいる人物を確認するか
のように呼びかけた

「なんですか？」

乾闥婆けんたっぱが返事をするどこかほっとしたように京助が息を吐いた

「いや…なんでもねえ」

京助が言った

「京助貴方は今自分に負けています」

京助から離れた乾闥婆けんたつばが真顔で言った

「慧喜えきと出会ったときの悠助と同じ…」

「は？」

乾闥婆けんたつばが京助を真っ直ぐ見る

「悠と…ってどーゆう…」

「心の拠所がない状態です」

京助が聞くと乾闥婆けんたつばが即答した

「悠助にとっての貴方が今の貴方にとっての緊那羅きんならなんです」

乾闥婆けんたつばが言う

「あの時の悠助は貴方という存在をなくしたと思って慧喜えきに心を壊されたの…覚えていますか？」

「…まあ…うん…」

「今貴方の心を壊すのは簡単ですよ」

乾闥婆けんたつばがキツパリと言った

「んなコトねえだろ；」

ゴス

ソレに対し京助が笑いながら返すと思い切り頭にチョップを食らった

「つてえッ！！；」

「んなことあるから言ってるんです」

少し睨みのきいた笑顔で乾闥婆けんたつばが言う

「自分の弱さに気づいてください」

乾闥婆けんたつばが言うと京助が黙った

「弱さとか強さとか…わけわかんなくなってきた」

京助がボソツと言った

「弱くたっていいじゃん強くたっていいじゃん」

さつきより少し大きな声で京助が言う

「強さも弱さも全部ひくるめての自分だろ」

そして今度ははっきりと聞き取れる声で言った

「受け入れる受け入れないじゃなくてそう見えたらソコは俺の弱さなんだから仕方ねえじゃん」

乾闥婆がきよとした顔をしたまま止まった

「人に言われるがまま自分を直して言ったら俺じゃなくなるじゃん」
京助が言う

「だから俺はコレでいいのだ」
フンッと鼻から息を出した京助を見たまま乾闥婆はまだ止まったままだった

「：ソレが貴方の強さですね：」
小さく乾闥婆が言った

「全てを認めて受け入れる：貴方も悠助も：だから人が集まる」
ずっと乾闥婆が立ち上がって窓口へと歩き出しそして

「入ったらどうです？」

そう言いながら窓をガラッと開けた

「鳥類か？」

「ピーヨピヨピヨー」

「アホーバカーボケー」

「ホーホケキョ」

京助が言うのと聞こえて来たのは鳥（？）の泣き声をまねする聞き覚えのある声

「お引取りください」

ガシッと京助が閉めようとした窓を3馬鹿が掴んで閉めさせまいとする

「さーんばつかさーんッ！！ おつかえんなさいッ！！：」

京助が歌いながら窓を閉めようとするのに対し

「えーいのさんちの京助君！ こんごろすこっしへんよー！！」

南の歌にあわせて3馬鹿が京助とは逆方向に窓を引っ張る

「壊れますよ」

そんな光景を見ていた乾闥婆が冷静に突っ込んだ

「緊那羅きんならがいないからってグレるなよー！」

中島が言った

ガラッ！！！！

「おうわッ！！；」

京助がいきなり力を弱めたことで3馬鹿が揃って前のめりにコケた

「さすが旧知の仲といえますか：ばれてますね」

けんだっば
乾闥婆が言う

「ばかから聞いたぜ？　きんなら緊那羅帰ったんだって？」

坂田が言った

「あんやろ；」

京助が口の端を上げた

「お前って素直なのか素直じゃねえのか今だからねえよな；」

中島が言う

「ソレが俺だ」

京助が胸を張って言った

「開き直んな；」

南がジャンプして京助の頭を叩いて突っ込む

「元氣そうじゃん」

坂田が言う

「枕をぬらしてる儂げな姿でも想像してたのですかアン？」

京助が言った

「うぐっちゃんから聞いてたのはムカムカしてるお前のことだったからさーてつきりキレてるのかと思って様子見てたわけよ」

南が言う

「そーいやばかは？」

さっきから話には出てくるものの姿が見えない鳥うぐばか倶婆迦のことを京助が3馬鹿に聞く

「あーきんなら緊那羅迎えにい：」

中島がソコまで言うのと今まで黙っていたけんだっば乾闥婆が驚いた表情で窓枠に掴みかかった

「鳥俱婆迦うぐばかが何ですって!？」そして中島の胸倉を掴むや否や声を荒げて聞いた

「ど…どうしたよ乾闥婆けんたっぱ；」

押しのけられた京助が乾闥婆に聞く

「鳥俱婆迦うぐばかが緊那羅きんならを迎えに行ったんですか!？」

ガクガクと中島を揺すって乾闥婆けんたっぱが更に聞く

「そうだって!； そうだからなしたんだよ!!；」

乾闥婆けんたっぱの手を押えながら坂田が言った

「…ッ!! なんてこと…」

中島の胸倉を離れた乾闥婆けんたっぱが其の手を握り締めた

「…何か…ヤヴァイのか?；」

京助が恐る恐る聞いた

「最悪…命を落とします」

窓枠にかけていた足を下ろした乾闥婆けんたっぱが真顔で言うところ馬鹿と京助が顔を見合わせた

「…マジで？」

乾闥婆けんたっぱが言った不吉な言葉に対し坂田と中島がほぼ同時に言った

「僕は嘘は嫌いです」

ソレに対し乾闥婆けんたっぱが真顔で返す

「鳥俱婆迦うぐばかは【空】緊那羅きんならがいるのは【天】…分けられているということはいくら貴方達が馬鹿だといっても名前ですわね?」

乾闥婆けんたっぱが言うところ馬鹿と京助が頷く

「…そして今は【時】がくるという時…忘れているかもしれません
が僕等【天】と【空】は敵対する存在です」

「そうなのか？」

「…さあ；」

乾闥婆けんたっぱの説明を聞いた中島が京助に聞くと京助が顔をそらしながら答えた

「覚えている期待はしていませんでしたよ」

乾闥婆けんだつぱが笑顔で言った

「そっか！ わーった！ 【時】が来るから敵対心が上昇してるんだあな！！」

南が言う

「そうです」

乾闥婆けんだつぱがにっこり笑顔を向けた

「わーい！！ ほっめられたー」

南が万歳をして喜ぶ

「そんな中【空】の鳥俱婆迦うぐへばかが【天】に行ったらどうなります？」
南に便乗して万歳三唱をやっていた3馬鹿と京助に乾闥婆けんだつぱが言った

「…どうって…」

両手を半分上げたままで京助が3馬鹿の顔を見渡した

「…ヤヴァイ？」

両手を挙げたままで坂田が言う

「少なくとも無傷で…とはいかないでしょうね…」

乾闥婆けんだつぱが踵を返して腕を前に出した

「俺も行く」

乾闥婆けんだつぱの肩を京助が掴んだ

「駄目です」

乾闥婆けんだつぱがきっぱりと断った

「俺等も行く」

窓からよじ登ってきた3馬鹿が靴を手に乾闥婆けんだつぱの周りに集まった

「駄目だって言ってるでしよう？」

乾闥婆けんだつぱが少し睨みを入れて3馬鹿と京助を見渡した

「俺らは【空】のヤツじゃないだろ」

坂田が言う

「俺等だって立派な関係者だもんね」

「無関係という最強の関係者だな」

南が言うと中島も言った

「貴方達にこの扉が見えますか？」

乾闥婆けんだつばが聞いた

「見えるならば危険を承知で連れて行きます」

乾闥婆けんだつばが指差す方向を見た3馬鹿と京助が少し止まった

「：見えないでしょう？」

しばしの沈黙を破って乾闥婆けんだつばが言った

「おとなしく待っていてください」

乾闥婆けんだつばが腕を伸ばすとその腕がすうっと消えた

「最善をつくし：っ！？：」

言いかけた乾闥婆けんだつばの消えかけた腕を京助が掴んだ

「俺だって【時】の関係者なんだろ？ つれてけったらつれてけっ
！！」

「離して下さいッ！！；」

ブンブン腕を振って京助の手を振り解こうとする乾闥婆けんだつばを3馬鹿が押えた

「つれてけゝつれてけゝ」

まるで置いていけ堀の怪談を髣髴させるように3馬鹿が呪文のように繰り返す

「駄目ですッ！ 離して下さいッ！！」

「やかましいッ！ 行ったら：行くてんじゃんかッ！！！」

京助が声を上げると3馬鹿が目を見開いて乾闥婆けんだつばから手を離れた

「：きよ：うすけくん？：」

中島が恐る恐る京助の名前を口にした

「んだよ」

京助が返事をする

「京助：だよな？」

南が京助の顔を覗き込むようにして聞く

「そうだからなんだよ；」

京助が言う

「…京助…貴方…」

3馬鹿と同じようにして乾闥婆けんだつばも大きな目をさらに大きくして京助を見た

「その…背中…」

「はあ?」

乾闥婆けんだつばが言う京助が自分の背中を見ようとして体をねじった

「…おおお!!?」

そして声を上げた

「なんだコレ!!!」

しかし京助が驚いたのは3馬鹿と乾闥婆けんだつばが見ているものではないらしく

「なんだって…お前…」

全然別のものを見て驚いているらしい京助と同じ方向に坂田が目をやってそして止まった

「…教室…の…」

中島が言う

「戸…だよ…オイ…」

中島の言葉に南が付け足して言った

「いつの間に俺等学校に…? …じゃない…ココ京助の部屋だ…よ!!!」

坂田が周りを見渡して言う

「貴方達…もしかして…扉が見えて…?」

乾闥婆けんだつばが驚いた顔で言った

「がらっと」

「んぎゃー!!! 開けたよオイ!!!」

京助が戸を開けると坂田が叫んだ

「…開けた…?」

乾闥婆けんだつばが更に驚いて言う

「…コレが【天】だかに行く戸かい…教室の戸とソックリだな」

中島が戸に近付いていった

「扉は：それぞれ異なる姿で見えるのです：一番印象の強い扉の姿で：」

乾闥婆けんだつばが言う

「俺らにとつて一番頭の中にある扉は教室の戸である：」

坂田が言った

「それより：京助：」

「あ？」

乾闥婆けんだつばが京助に声をかけると3馬鹿も京助を見た

「貴方の背中：に：その：」

「だからなんだよ；」

乾闥婆けんだつばがどう説明していいのか迷っていると

「激写」

パシャツという音がして坂田が携帯のカメラで京助の背中を撮った

「：見てみ？」

そして画像を確認すると京助にソレを向けた

「：何コレ：；」

携帯のカメラ画像を見た京助が少し間を置いて言った

「：悠助：？：；」

「何？」

ほぼ同時刻

茶の間で悠助の耳掃除をしていた慧喜えきが手を止めて悠助に声をかけた

「どうしたの慧喜？」

信じられないという表情で悠助の顔ではなく上半身に目を向けてい

る慧喜えきに今度は悠助が声をかけた

「：なんなんだやな：；」

コマが言う

「：コレは：」

イヌもポカンとした阿呆顔で身を起こした悠助の背中を見た

「どっちかっていうと…悪魔ってか…爬虫類の羽」

坂田が言った

「竜…」

乾闥婆けんだつぱが呟いた

「でもまだ不完全ですね…半透明ですし…」

乾闥婆けんだつぱが今度は悠助の背中に目をやった

「感覚とかわかるのか？」

中島が京助に聞いた

「全然…」

京助が何とか自分の背中を見ようとさっきから体をひねっている

「消えるのか？ コレ； 明後日までに消えないと学校とか…どうするわけ？」

南が言う

「…そもそもどうして急に…」

慧喜えきが悠助の隣に来て首をかしげた

「…まだ扉は見えてますか京助」

乾闥婆けんだつぱが聞くと京助が教室の戸によく似た扉が立っている方向を見た

「あるよな」

京助が言うより先に中島が言った

「アンタ達も見えてるの！？；」

慧喜えきが驚いた顔で言う

「何でココにどこでもドアがあるの？」

悠助が戸がある方向を見て言った

「…悠にはドラえもののどこでもドアに見える見たいだねえ」

南がハッハと笑った

「悠助まで…」

乾闥婆けんだつぱが多少混乱しているっぽい顔で言う

「乾闥婆…これって…」

慧喜えきが乾闥婆けんだつぱを見た

「この羽根はおそらく【時】の力ではなく【竜】の力でしよう…」

乾闥婆けんだつぱが言う

「何らかの引き金で京助と悠助の中の竜の血：力が少しだけ目覚めた：と考えるのが最有力だと：確信はありませんが」

乾闥婆けんだつぱが言うと京助と悠助が顔を見合わせた

「じゃあ何か？ その：京助の親父さんの力が全部目覚めちゃうと京助と悠助ってウロコとか生えちゃうわけ？」

坂田が言う

「そんでこの辺からツノがよーんって？」

南も言う

「そしてアレか7個の玉集めて召喚されるのか」

中島がめた

「：お前等の願い事はぜってえ叶えてやらん」

京助が言う

「にしても：何故：」

乾闥婆けんだつぱが悠助の羽根を見て呟いた

「鳥さんとかわかんじゃないの？」

南が言う

「迦楼羅かるら？ ……！！！」

南に突っ込まれて少し考え込んでいた乾闥婆けんだつぱがハツとして顔を上げた
「こんなことしてる場合じゃないじゃないですか！ 鳥俱婆迦うぐぼかが！

！」

乾闥婆けんだつぱが先の問題を思い出して扉の方に体を向けた

「鳥俱婆迦うぐぼかが？」

慧喜えきが聞く

「緊那羅きんならを迎えに【天】に：急がないと…」

乾闥婆けんだつぱの言葉を聞いた慧喜えきの顔つきが変わった

「な：それ本当！？；」

慧喜えきが声を上げる

「僕は嘘は嫌いです」

乾闥婆けんたつばがキツパリと言い切った

「お二方に：！！！」

慧喜えきが指にはめていた指輪に手を添えると一瞬にして摩訶不思議服に変わった

「事を大きくしないでください」

扉に入ろうとしていた慧喜えきの肩を乾闥婆けんたつばが掴んだ

「でも！！」

「僕が何とかします」

慧喜えきの肩を軽く後ろに押して乾闥婆けんたつばが扉の中に入ろうと：

「約束だぞん」

して坂田に肩を捕まれた

「扉が見えたら危険を承知で連れてくんでしょ？」

南が乾闥婆けんたつばに並んだ

「うそは嫌いなんだよな？」

中島が言う

「じゃ：レツツラ！！」

京助が言うけんたつばと乾闥婆が大きな溜息を吐いた

「：わかりました」

乾闥婆けんたつばが顔を上げて3馬鹿と京助を見渡した

「ただし：僕から離れないでください」

乾闥婆けんたつばの言葉に3馬鹿と京助がこれから初めての遠足にでも行くような幼稚園児の見せる笑顔で頷いた

「：不安；」

顔をそらして乾闥婆けんたつばが呟いた

「僕も行きたいー！」

悠助が言った

「悠助はココに残っててください」

乾闥婆けんたつばが悠助に言った

「京助達ばかりずるいよー！ 僕も行きたい行きたいー！！」

悠助が地団太を踏んで行きたさを主張する

「悠」

京助が悠助に声をかけた

「俺達は遊びに行くんじゃないんだぞ？ 緊那羅きんならをつれてきて鳥うぐ倶く婆ば迦かを助けに行きたいっ：せつな使命を負って行くんだ」

悠助の頭に手を置きながら京助が言うのと3馬鹿も頷うなづきその光景けいを乾け闥く婆ばが胡散臭こさんくさそうな顔で見る

「：そんな大事なことにしに行くのにウキウキ気分に見えるんだやな」
ゼンの姿になったコマが突っ込むと3馬鹿と京助の肩がぴくつと動いた

「ココから力が流れてきてるんだやな」

ゴの姿になったイヌが開いている扉を見て言う

「お前等にも見えてるって：いうの？」

慧喜えきが驚きの顔で言った

「これは：間違いなく京助と悠助：いえ：竜の力ですね」

乾闥婆けんだつばがゼンゴを見た後京助と悠助に目を向けた

「あったかいんだやな」

ゴが深く息を吸ってしみじみと言う

「懐かしいんだやな」

ゼンも同じく言った

「主」

そして二人揃って京助と悠助を見るとおすわりのポーズで頭を下げた

「おおお？」

いきなり今までされたことのない行動をされて京助が少し後ずさる

「栄野の前後は我等が御守りいたすんだやな」

ハモって言うのと二人が顔を上げた

「今まで散々馬鹿にされてきただけにいきなりそうされるといくら俺でもどうすりゃいいのか混乱すんですけど」

京助が言う

「我等ゼンゴは主の思いのままに」

京助の混乱をヨソにゼンゴが続けると悠助がしゃがんでゼンゴと視線を合わせた

「ゼンとゴなんだか知らない人みたいだよ？」

悠助が言った

「竜の力が目覚めた貴方達が新たな彼らの主……」

乾闥婆けんたつぱが言う

「よくわかんないけど……今まで通りがいいな」

悠助が満面の笑顔で言うとう京助を見上げた

「……なぜ俺を見るか； ……まあ……でもそうだな……お前等に敬語程似合わねえモンはねえわな」

京助が言うとうゼンゴが顔を見合わせてニーっと笑った

「やー！！ 悠助と京助ならそういつてくれると思つてたんだやなー」

ゴが背伸びをして立ち上がった

「堅ッ苦しくて肩凝ったんだやなー； ふいー」

ゼンが肩をグルグル回して同じく立ち上がる

「そうそうお前等はそうじゃないとねー」

南が言う

「一応式としての礼儀だったんだやな」

ゼンが言った

「でも主もコレは嫌いだっていつてたんだやな。やっぱり血筋なんだやな」

ゴが京助と悠助を見て言う

「おい！！ すげえ！」

中島が声を上げると一同揃つて中島の方を見た

「街があつた街！！」

「な……何してるんですかッ！；」

坂田が言うとう乾闥婆けんたつぱが怒鳴った

「だつてお前等トロイんだもんよー好奇心の塊の男子中学生はやめ

られない止まらない」

中島が言う

「…殴りますよ？」

乾闥婆けんだつばがにっこり（怖い）笑顔で言うのと坂田と中島が引きつった笑顔で戻ってきた

「…では貴方達はココで悠助と慧喜と共にいてください」

「ゴがお前等とともにいくんだやな」

乾闥婆けんだつばが言うとゴが京助の隣に立った

「我等ゼンゴは絶対二対の存在なんだやな」

ゼンが悠助の隣に立って言う

「離れていても二対は離れない存在なんだやな…だからもし何かあって扉が開かなくても大丈夫なんだやな」

ゴがニーっと笑って京助を見上げた

「…不吉な事言わんどけ；」

京助がゴのデコに軽くチョップを落とした

緑の布が窓にかかりソレが風か何かでふわっと持ち上がった

「何イライラしてんよ」

声をかけられ振り向いた緊那羅きんならの目に入ったのは戸口に腕をかけてこちらを見ている阿修羅あしゅら

「別にイライラなんてしてないっちゃ」

足早に阿修羅あしゅらの前を横切ると緊那羅きんならが椅子に腰掛けた

「自分の部屋なのに他人の部屋にいるみたいやよ？」

阿修羅あしゅらが部屋に入ってきて緊那羅きんならの部屋だというその部屋を見渡した

「…そんなこと…ないっちゃ」

緊那羅きんならも部屋の中を見渡して言う

「お前さんがコッチきてマゴツチヨは喜んでるみたいだけどな」

阿修羅あしゅらが言った

「…そんなんで本当いいのかい」

俯いたままの緊那羅きんならに阿修羅あしゅらが聞いた

「私は…京助と悠助を守らないといけないんだっちゃ…だから私は強くないといけないんだっちゃ」

俯いたまま緊那羅きんならが言う

「だからってきて早々こんな調子じゃアな」

阿修羅あしゅらが緊那羅きんならの頭に手を置いた

「頑張るってのと無理するってんは似てても違うんやよ？」

「私は別に無理なんか…」

「してるだろが」

トントン拍子の会話が阿修羅あしゅらで始まり阿修羅あしゅらで終わった

「気になってる顔しとんもの」

阿修羅あしゅらが言う

「別に私は洗濯してこなかったこととか牛乳の賞味期限とか京助の…あ…し…」

顔を上げて実は気になっているっぽい事をあげていていた緊那羅きんならが京助の足の怪我を思い出して言葉を止めた

「…お前はヨシコに比べて自由なんやよ緊那羅きんなら」

再び俯いた緊那羅きんならに阿修羅あしゅらが言う

「…私は…」

膝に置かれた緊那羅きんならの手がぎゅっと握られた

「私はどうしていいかわからないんだっちゃ…強くなるために帰ってきたのに…こっちが本当に帰ってくるべきところなのに…あっちに…京助の家に帰りたい…んだっちゃ」

途切れ途切れに緊那羅きんならが言う和阿修羅あしゅらがふっと笑った

「緊那羅きんなら」

阿修羅あしゅらが名前を呼ぶと緊那羅きんならが顔を上げた

「力ってのは目に見えるもんだけじゃなかったさ…イロイロ力にもあるんきに」

阿修羅あしゅらが言った

「お前だけの力…たぶん気づいていないのはお前だけだとおもうんよ」

あしゆら きんなら
阿修羅が言う　と緊那羅がきよ　ととした顔をした

「私だけの…力…？」

緊きん那なら羅らが自分の腕にある腕輪を見た

「緊那羅きんならの力は凄いとおいちゃんきんならは思う」

「そうそう緊那羅きんならの……」

はたと阿修羅と緊那羅が止まった

「緊那羅きんならがいなくなっただけでアツ凄いことになってるんだよ」

コツコツと足音をさせてココで聞こえてはいけない声が聞こえた

「…」

同時に振り向いた阿修羅と緊那羅が目を大きくさせて口を開いた

「鳥俱婆迦うぐばか」
「！！！！？」

そして揃ってその名前を叫んだ

「すつげえー」

坂田が本気で驚いているという声を上げた

「ココが【天】だかいうトコ？」

南が乾闥婆を見て聞いた

「そうです」

乾闥婆けんたつばが答えた

「ぶちやけ聞くけどココってやっぱ【天】っていうくらいだから空の上なわけ？」

中島が聞く

「そういうわけではありません……どこにあるかは誰もが知っていてどこにあるのかは誰も知らない……僕もそう聞きました」

けんだつぱ
乾闥婆が言う

「まっくら森みたいだねえ…まっくらもくろくろはあ」

南が歌いながら足を踏み出した

扉をくぐった前に見えたのは白と赤の門

その向こうには街並みが見えそしてその更に向こうには大きな建物が霞んで見えていた

「アソコまで行きます」

乾闥婆けんたつばがその巨大な建物を指差した

「遠ッ！！！」

坂田が言う

「貴方達がいるから正道を通れないんです」

乾闥婆けんたつばがにっこりと笑顔で（少しドスの聞いた声で）言った

「正道を通れば扉を出ればすぐ宮だったんですけど」

乾闥婆けんたつばの言葉がサクサクと3馬鹿と京助とゴにまるで生け花の花のごとく突き刺さっていく

「いいですか？ 決して僕から離れないでください」

乾闥婆けんたつばが念を押して強く言うのと3馬鹿と京助そしてゴが頷いた

「ばか…お前…」

阿修羅あしゅらが口をパクパクさせてやっとのことで一言言葉を出した

「鳥倶婆迦うぐばかだッ！！」

そんな阿修羅あしゅらに鳥倶婆迦がキーキー言う

「そんななんどうでもいいんわ！！」 【空】のお前がココに来たこと

バレたらエッライことなんぜよ！！？！！」

阿修羅あしゅらが怒鳴った

「よく…宮司に引っかけからなかったっちゃね… 【空】の血に過敏に

反応するっちゃのに」

緊那羅きんならが言うのと鳥倶婆迦うぐばかが止まった

「いや、そりゃ…鳥倶婆迦うぐばかの得意な計算ででろやな？」

そして途端慌てだした阿修羅あしゅら

「…おいちゃんは特別だから」

鳥倶婆迦うぐばかがクイツと帽子を直した

「…？」

二人の行動に緊那羅きんならが首をかしげた

「コレがおいちゃんの力でと思っていいよ」

鳥倶婆迦うぐばかが言う

「どんな小さなことでもその人の力だろ？」

「よく言っただか！！」

鳥倶婆迦うぐばかの言葉に阿修羅あしゅらが嬉しそうに言った

「一つの大きな力もいいけど沢山の小さな力でも力には変わらないよ緊那羅きんなら」

「…鳥倶婆迦…」

緊那羅きんならが鳥倶婆迦うぐばかのお面顔をじっと見た

「大きな力だって小さな力が合わされば大きな力になるんじゃない？　だって1＋1は小さくならないよ」

表情が変わらないお面の鳥倶婆迦うぐばかが言った

「京助には緊那羅きんならが必要なんだ」

「私…」

緊那羅きんならが眉を下げた

「一人でやろうとしないこった」

阿修羅あしゅらが鳥倶婆迦うぐばかの頭に手を置いた

「竜のボンの体を守ることはオライにも手伝えるんけどな…竜のボン…の上の方の心を守るのはお前しかいないと思うんぜよ」

阿修羅あしゅらの言葉に緊那羅きんならが少し驚いた顔を上げた

「緊那羅きんならがいなくなつて京助凄くムカムカしてた」

鳥倶婆迦うぐばかが京助の様子を伝えた

「それだけ緊那羅きんならは大きい力なんだよ京助にとって」

鳥倶婆迦うぐばかの言葉に緊那羅きんならが少し顔を赤らめてそして腕輪を見た

「…私は京助を守りたい…」

緊那羅きんならが小さく言う

「そのために帰ってきたんだっちゃ…けど…私は…」

腕輪を片手で押えて緊那羅きんならが目を閉じた

「いたいんだろ？　竜のボントコに」

阿修羅あしゅらが目を細めて言う

「つれて帰るっておいちゃん3馬鹿と約束しただから帰るよ一緒に

緊那羅^{きんなら}」

鳥俱婆迦^{うくばか}が言うと緊那羅^{きんなら}がゆっくりと目を開けた

「…うん」

緊那羅^{きんなら}が強く頷いた

【第十回】 飛ぶ計画（前書き）

乾闥婆と共に【天】に來た京助たち

ミッションは緊那羅を迎えにいくのと緊那羅を迎えにいった鳥俱婆迦の回収

だがしかしこの面子がひと騒動起こさないわけもなく

【第十回】飛ぶ計画

「行きますよ」

乾闥婆けんだっぱの声がした

「…どこに持ってたんだやな…」

ゴの視線の先にはあの独特の帽子姿ではなく髪を団子状にして布の中に詰め込みそしていつもよりラフな服装になった乾闥婆けんだっぱ

「何？ 何で着替えんの？」

南が聞く

「僕も一応立場があるので表立った行動はあまりできないのです」

乾闥婆けんだっぱが歩きながら答えた

「お忍びけんちゃん」

坂田が言うと乾闥婆けんだっぱが（黒い）笑顔で坂田を見た

「気づかれないうちに宮まで行かないと…」

乾闥婆けんだっぱの笑顔を見て固まった坂田をヨソに乾闥婆けんだっぱが宮と呼ぶ巨大な建物を見た

「無駄話は謹んでそして僕から離れないでついてきてください」

乾闥婆けんだっぱが一同を見渡して言う

「了解」

「アイアイサー」

「おー」

「わっかりー」

「ヘイヘイ」

各々好き勝手に返事を返した

異国のようなでもどこか正月町に似ているようなそんな街並み

見たことあるような顔

見たことあるような店

見たことあるような品物

「あ、ピーマンっぽくね？」

坂田が店先に並んだ野菜のようなものを見て中島の肩を叩いた

「こっちなんだかアイスみたいの売ってんぞ」

京助がその少し先を見て言う

「人が多いねえ」

乾闥婆けんたつばのすぐ後ろで南が言った

「観光に来たんじゃないんですよ」

乾闥婆けんたつばがピシヤリと言う

「服装も似たり寄ったりなんだな：俺等と」

中島が行き交う人の服装を見て言った

「なんでお前等だけあんな特殊な変な格好してんだ？」

そして続けて中島が乾闥婆けんたつばに聞いた

「別に特殊でもなんでもないでしょう：アレが僕等の正装なんです」

乾闥婆けんたつばが答えた

「なんか：ココ：【天】？　　って：いろんな国とかミックスってカ
ンジ？」

京助が言う

「そう：言ってるかもな：アイツなんかインドっぽいけどコッチは
なんだかワッフウだし」

坂田が指をさして言った

「建物だってそういう感じだしねえ：不思議不思議」

南が笑いながら言うけんたつばと乾闥婆が振り向いた

「無駄話は慎んでくださいと言ったでしょう？」

乾闥婆けんたつばがにっこりと　（黒くそして怖く）微笑んで言う

「だって：だっ！；」

言いかけた南が何かにぶつかってコケた

「いつゝ：；」

コケた南が膝をさすった

「あのやろぶつかってきて謝らねえで：」

京助が赤い上着を着て歩いていく人物を睨んだ

声で乾闥婆けんたっぱの名前を叫んだ

「のわけないじゃないですか」

赤い上着の人物の叫びに乾闥婆けんたっぱが笑顔で返した

「乾闥婆様けんたっぱがこんなところにいると思いますか？　よく似てるといわれますけど僕は違いますよ」

ニコニコとしかし裏がありそうな笑顔で言う乾闥婆けんたっぱを京助と3馬鹿そしてゴが見る

「…嘘は嫌いなんじゃなかったんだやな？」

ゴがボソツと言う

「…嘘も方便？」

南が言う

「そう…だよな…いや；　スマン；」

赤い上着の人物が乾闥婆けんたっぱに向かって頭を下げた

「そっちのヤツもゴメンな？　僕がぶつかったみたいだそうじゃないか」

今度は南に向かって謝る赤い上着の人物に南が軽く頭を下げた

「…いいヤツっぽくてなにより」

坂田が言った

「…ってか【様】付けだってよ」

京助が乾闥婆けんたっぱに言った

「言ったでしょう…僕は一応立場があるんですって」

しれっとした顔で京助の隣にきた乾闥婆けんたっぱが言う

「…お偉いさん？」

中島が乾闥婆けんたっぱに聞いた

「偉くはないと思います…が役目が大きいというのでしょうか」
乾闥婆けんたっぱが言う

「役目？」

足を進めだした乾闥婆けんたっぱの後ろを歩く坂田が言った

「【時】に関わる…【時】の為の役目とでも言っておきます」

人並みを縫うようにして進みながら乾闥婆けんたつばが説明する

「なあ：まだ教えてくれねえのか？ その：【時】っての」

京助が聞くと乾闥婆けんたつばが足を止めた

「あ：いや； なんつーか：その：前の【時】の話をさ：鳥類が…」

「迦楼羅かるらが？」

またチョップか何かの攻撃を食らうと思った京助がしどろもどろ言う
うと乾闥婆けんたつばが振り向いた

「：迦楼羅かるらが：話したのですか？ 前の：【時】の事を」

乾闥婆けんたつばが京助に聞く

「まあ：【時】の話って言うよりは：コイバナ？」

京助が言った

「何？ 鳥さんの昔話？ ってか鳥さんっていくつなわけ？」

南が話に割って入ってきた

「コイバナってへー：青春INGだねえ」

中島も入ってくる

「前の【時】ン時に…」

「沙紗ですね」

京助の言葉を止めて乾闥婆けんたつばが言った

「そうそう」

京助が乾闥婆けんたつばを指差して言う

「：まだ忘れてないんですね：迦楼羅かるらは」

乾闥婆けんたつばがふつとどこことなく悲しげな笑顔で言った

「なんか：深そう？」

坂田が京助の肩をつかんでボソツと聞く

「たぶん深そう」

京助も小声で答えた

「：てゆーか：一同注目」

中島が右手を上げると一堂が中島に視線を向けた

「なんなんだやな？」

ゴが聞く

「…でかくなってねえ? ; 京助のコレ」

コレと中島が指差したのは京助の背中…にある半透明の羽のようなもの

「…成長期?」

南がソレを見て言う

「ちよい ; 俺は見れねえんだけどもよ ; 」

京助がそう言いながら体を捻る

「…もしかして…竜の力を感じ取って…いるのかもしれないですね」

乾闥婆が宮と呼ぶ巨大な建物の方を見た

「父さんの?」

京助が聞くと乾闥婆が頷いた

「言っただでしょう? …竜は…貴方の父親は生きています」

乾闥婆が言う

「アソコにいちちゃったりするの? 京助パパン」

南が宮を見て聞く

「そうです」

乾闥婆がキツパリと言い切ると京助も宮の方を見た

まだかなり遠くだというのに宮という巨大な建物はすぐ傍にあるような存在感で建っている

「急ぎますよ鳥倶婆迦が見つかる前に」

おそらく3馬鹿と京助そしてゴは忘れていたであろう当初の目的を言うと乾闥婆が足を進め始めた

「人が住んでるんだなあ…」

中島がぼそつと呟いた

「街だね」

南も言う

「なんつーか…街だよな」

坂田も言う乾闥婆が溜息をついた

「さつきから似たような事何回言いましたか？」

乾闥婆けんだつぱが言う

「いや：だってちよつと意外でサア；　：やっぱりこの方々もお前等みたいに技とか使えちゃったりすんの？」

坂田が聞く

「使えませんよ。彼らは宝珠を持っていないますし：扉も開けられない上に見えもしないんです。貴方達と同じです」

乾闥婆けんだつぱが言うと3馬鹿が顔を見合わせた

「でも俺等戸見えてこっちにきてんじやん？」

中島が言う

「それは京助の：」

乾闥婆けんだつぱが言いかけてハタと止まった

「どうしたんだやな？」

ゴが首をかしげた

「：京助がいない：」

乾闥婆けんだつぱが小さく言った

「本当：よくここまでこれたもんだあな；」

曲がり角から首だけを出して辺りをきよろきよろ見ながら阿修羅あしゅらが言った

「宮司に見つからないにしろ：誰かかにかに会ってもおかしくないんよなー：」

首を引っ込めた阿修羅あしゅらの目線の先には緊那羅きんならと鳥俱婆迦うぐばか

「おいちゃんは計算した通路を通ってきただけだよ」

鳥俱婆迦うぐばかが胸を張って言う

「計算が鳥俱婆迦うぐばかの力なんだっちゃね」

緊那羅きんならが笑った

「お暢気さんだあなアお前さん達；」

阿修羅あしゅらが苦笑いで二人を見る

「でもまだおいちゃんの計算には続きがあるんだ」

阿修羅あしゅらの後ろを小走りで追いかけてながら鳥倶婆迦うぐばかが言った

「なんだっちゃ？」

阿修羅あしゅらが足を止めたのを見た緊那羅きんならが自分も足を止めて鳥倶婆迦うぐばかに聞く

「おいちゃんの計算ではおいちゃんの話聞いた3馬鹿が京助に会っておいちゃんが話したことを京助に話して：」

前にずり下がってきた帽子を直しながら鳥倶婆迦うぐばかが話し始める

「ソレを慧喜えきが聞いたらたぶん慧喜えきも来る」

「わぶ；」

鳥倶婆迦うぐばかがそういうと阿修羅あしゅらが止まってその阿修羅あしゅらに緊那羅きんならがぶるかった

「：その可能性：アリやな；」

阿修羅あしゅらがハアと溜息を吐いた

「ってことは：」

緊那羅きんならが鼻を押えて阿修羅あしゅらからはなれると鳥倶婆迦うぐばかを見た

「：輪をかけて事が大きくなっちゃうんやねー：」

阿修羅あしゅらがもうこのさいなんとでもなっちゃえVV的口調で言った

「それよかオライは：緊那羅きんならが向こうに帰ったって事を知ったまご

つちよの事が心配だあわ；」

緊那羅きんならの方をチラッと見た阿修羅あしゅらが言う

「おいちゃんもソレは思う」

鳥倶婆迦うぐばかも緊那羅きんならを見上げた

「更に更にオライはまごつちよが竜のボンにちよっかいかけそうなのも心配やわ；」

「おいちゃんもソレも思う」

阿修羅あしゅらが言うと鳥倶婆迦うぐばかもまた言った

「京助に何か：って：そんなことしたら引っぱたくっちゃ」

緊那羅が言う

「まあ（きんなら）：今はとにかくアッチに無事帰ることができりや万々歳って：いうことで」

阿修羅あしゅらが緊那羅きんならを見て笑った後また曲がり角から少し顔を出してキョロキョロ辺りを見渡した

「正道通れないんがちよおキツイんよなー；」

鳥俱婆迦うぐばかを見た阿修羅あしゅらが言う

「仕方ないよおいちゃんは【空】の…」

フイオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ…ン

鳥俱婆迦うぐばかが言うところからともなくまるで何か獣の遠吠えのような音とも声とも取れる音が響いた

「バレちゃいのホイ！！；」

阿修羅あしゅらがそう言うところ鳥俱婆迦うぐばかを小脇に抱え上げて走り出し緊那羅きんならも阿修羅あしゅらを追いかける

「宮司みやじがくるよっほほーい；」

走りながら阿修羅あしゅらが困った笑顔で言った

「…ウオーリーを探せのウオーリーって…」

ザワザワと賑やかな人ごみの中

「見つけてもらうまでこんなカンジ？；」

京助が口の端を上げて呟いた

「…迷子の迷子のきょーすけくんゝあなたのお家はどこですかゝ名前を聞いてもわからないゝって京助君ゆゝてんやーん」

とりあえず歩き回る京助が一人でボケて突っ込んでいると同時刻

ダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダ

「次！ 右ッ！！；」

阿修羅あしゅらが言うところ緊那羅きんならが右の通路に入った

「おおおおおいちゃああんも走れるよ」

阿修羅あしゅらの小脇うぐばかで鳥俱婆迦うぐばかが言う

「今はだーつとれッ！！；」

阿修羅あしゅらが怒鳴ると緊那羅きんならがプツと小さく噴出した

「何か楽しそうやんねえ； 緊那羅きんなら」

緊那羅きんならを見て阿修羅あしゅらが言う

「そのセリフ前に京助も阿修羅と同じように言った事あるんだっちゃ」

緊那羅きんならが笑いながら言った

「ほけほーけ；； でも今はそれどころじゃなかんきに；」

阿修羅あしゅらが走りながら言う

「うん； ごめんだっちゃ；」

緊那羅きんならが謝ると二人して走る速度を上げた

「…右を見て…左を見ても…知らん顔…」

京助が橋の欄干に座ってゆっくりと左右を見て呟いた

「…まいっちんぐ；」

深く溜息をついた京助の隣に誰かが座ったらしい気配がした

「…何見てんだよ」

視線を感じた京助が顔を上げ隣にいた人物に言った

「アンタから変な感じするんだよな」

何色にも見える中途半端な髪を適当に束ねたっぽい髪に桃色の球がついた髪飾りがキラリと光った

「…ココのヤツじゃないだろ」

言われて京助が驚き目を見開いた

「な…」

「安心していいって俺は何もしないよ。あ、俺はマホって呼んでくれていいから」

【マホ】というらしき人物が無理矢理京助の手を掴むなり握手といわんばかりにブンブンと上下に振った

「退屈なこの頃に刺激を求めているんだよな俺」

京助の手を握ったままマホが笑う

「で？」

手を握られたまま京助が聞き返す

「困ってるみたいだけど」

マホが言う

「迷子なんだろ」

マホの言葉に京助が顔をそらした

「わかりやすいなー！面白いじゃん」

カラカラ笑いでマホが言う

「決めた！俺が助けてやろうではないか」

そう言って立ち上がったマホは京助より頭一つ分背が高かった

「さあ！どこに行きたいんだ？」

顔をずいっと近づけてマホが聞いてきた

「無理なんだやな——————！！！」

ゴが叫んだ

「犬だろ！何とかしろワン！！」

叫ぶゴに坂田も叫んで言う

「そうだワン！仮にもご主人様じゃないかワン！！」

南も言う

「根性見せろだワン！！」

更に中島も言った

スパパパン

「ワンワンワンワンうるさいですよ」

そんな三人の頭を流れるように叩きながら乾闥婆けんたっぱが言った

「犬的語尾でお送りしましたワン」

頭をさすりながら南が言う

「にしても…困りましたね…」

乾闥婆けんたっぱが難しい顔をして俯いた

「何とかなんのか？ 乾闥婆けんたっぱ…」

中島が真顔で聞く

「鳥さんなら飛んで探せるんじゃない？」

南が言う

「迦楼羅の手は借りません」
かるら けんだっぱ

乾闥婆がキツパリと言いつつ切った

「貴方達を連れてきたのは僕です…僕が責任を持ちます」
けんだっぱ
乾闥婆が顔を上げた

ダダダダダダダダダダダダダダダダ

「だあッ！！； しつこいッ！！」

阿修羅が走りながら喚く
あしゅら

「宮司は律儀だからね」
うぐはか

鳥俱婆迦が言う

「このままじゃ…；」

緊那羅がチラッと後ろを振り返った
きんなら

「捕まるより先に誰かにばれると思う」
うぐはか

鳥俱婆迦が言う和阿修羅と緊那羅が顔を見合わせた
あしゅら きんなら

「ねえ」

そんな二人に鳥俱婆迦が呼びかけた
うぐはか

「外に逃げるとかしないの？」

桃色の玉が黒い紐の先で揺れている

「変わってるねーやっぱり格好からしてそうかとは思ってたんだけど」

マホが京助を見て言う

「宮に行きたいなんてさ」

頭の後ろで手を組んだマホが宮の方を見た

遠くかすむ宮と呼ばれる建物

巨大で美しくそしてどこか好きになれないそんなオーラが感じられる

「どんくらいでつくんだ？」

京助がマホに聞いた

「お前次第」

マホが京助の背中に回った

「コレが使えるならあつという間」

そして手を京助の背中に伸ばす

「コレ…って」

京助が身をねじって背中を見ようとする

「でも使えそうにないな…コリヤ…」

ツンツンと京助の背中にある半透明の羽根をマホが突付いた

「…お前もしかして鳥類…迦楼羅かるらの仲間かなんかか？」

京助が言うともマホが目を大きく見開いた後

「し——————————————ッ!!!;」

そう言つて京助の口を手で押えながら周りをキョロキョロ見回した

「…ココじゃそいつ等の名前は言わない方がいいぜ」

手を離しながらマホが言う

「何でだよ;」

口を拭いながら京助が聞く

「何でも」

マホが口の前に人差し指を立てて言った

「捕まってもいいなら言ってもいいけど」

マホの目は至つて真剣そのもので京助は黙った

「…やつ等の力と宝珠と立場…欲しいやつ等はわんさかいるんだ…」

小さな溜息混じりでマホが言った

「んなの…別にあつてもなくても同じなんだと思うんだけどな」

腰に手を当てたマホが言う

「…ってかソレ…隠せないのか？」

マホが京助の羽根を軽く引っ張った

「隠せて…言われてもナア; 俺は見えねえし…感覚もねえし;」

京助が言うとも羽根がパフパフと動いた

「動かせはするのか」

マホが言う

「は? 別に動…いてんのか?;」

京助が聞くとマホが頷いた

「ピンポンパンポ~~~~ン」

「迷子のお知らせです。正月町からお越しの栄野京助君。栄野京助君。ご友人がお待ちです。」

「至急カモンだコンチクショー!!」

3馬鹿が言った

「聞こえるわけないんだやな」

ゴが冷静に突っ込む

「本当：どうすんだよ；」

坂田が乾闥婆けんだつばを見た

「探すしかないでしょう」

乾闥婆けんだつばが言う

「探すって：どうやってだよ」

中島が聞く

「探すといったら探すんです」

寄りかかっていた壁から身を離すと乾闥婆けんだつばが歩き出した

「まさか地道にこの町探すのか？；」

中島が再度聞く

「それしかないでしょう？」

乾闥婆けんだつばが言った

「…だな」

坂田が軽く頷くと小走りで乾闥婆けんだつばに追いついた

「帰ったら京助にジュシー肉まんおごってもらうか」

南が中島を肘で小突いて走り出した

「…ホットココアもつけたれ」

ヘッと笑った中島も後を追いかけた

天井まで詰まれた資料や本

透明な容器に入れられている薬品のようなもの

「ワシにはむやみにいくなと言っていくせに」

そんな部屋の中を見渡した後 迦楼羅^{かるら}がむすつとしながら言った
「まったく…」

観音開き状の戸を閉めると迦楼羅^{かるら}が長い上着を翻した

ダダダダダダダダダダダダダダダダダダ

遠くから聞こえてきた駆け足の音

「…なんだ？」

来た道を振り返りそして足を一歩進めるとT字廊下から現れたのは
緊那羅^{きんなら}

「な…!!?;」

「迦楼羅^{かるら}!?!」

「おあ!; かるらん!?!;」

迦楼羅^{かるら}の名前を言いつつその迦楼羅^{かるら}の横を駆け抜けた阿修羅^{あしゅら}と緊那
羅^{なら}につられたのか何故か迦楼羅^{かるら}まで走っていた

「何をしているのだ!;!;」

走りながら迦楼羅^{かるら}が聞く

「宮司に追われてるんだっちゃ;」

緊那羅^{きんなら}が答えた

「何故お前達が宮司に追われているのだ!;!;」

迦楼羅^{かるら}がまたも聞く

「おいちゃんがいるからだよ」

阿修羅^{あしゅら}の小脇^{うぐば}から鳥倶婆迦^{うぐばか}が言くと迦楼羅^{かるら}が口をパクパクさせて鳥
倶婆迦^{うぐばか}を指差した

「あっはっはかるらん変な顔ー」

阿修羅^{あしゅら}が笑う

「やかましいわたわけッ!;!;」

スパーン！！

阿修羅あしゅらの頭を迦楼羅かるらがジャンプして引っぱたいた

「おいちゃんうぐばかは緊那羅きんならを連れ戻しにきたんだ」

鳥倶婆迦うぐばかが帽子を押えながら言う

「たわけッ！！； お前がココに来るといふことはどうなることかわかって来ているのか！？；」

迦楼羅かるらが鳥倶婆迦うぐばかに怒鳴る

「知ってるよ」

鳥倶婆迦うぐばかがさらつと答えると迦楼羅かるらがまた口をパクパクさせた

「でもおいちゃん笑っていて欲しかったから来たんだ」

鳥倶婆迦うぐばかが言う

「緊那羅きんならが戻れば皆が笑顔になるからだからおいちゃんは来たんだ」

「鳥倶婆迦うぐばか…」

緊那羅きんならが鳥倶婆迦うぐばかを見た

「だあッ！！； 揃いも揃ってたわけものどもめッ！！；」

迦楼羅かるらがいきなり大声で怒鳴った

「ハイ、いっちにいちに」

パンパンとマホが手を叩く

「…ドウ？」

京助がチラッとマホを見て聞く

「さつきよりはちゃんと動いてるけど…なんで半透明なのかな」

京助の背中にある羽根っぽいソレを見てマホが言う

「てか…なんでお前こんなん生やしてるワケ？」

羽根っぽいソレを突付きながらマホが聞く

「知らんがな；」

京助が言った

「こりゃ…地道に歩いて宮に行った方はやいな」

マホが頭を掻いて宮を見た

「ところでお前は何で宮に行きたいわけ？」

歩きながらマホが京助に聞く

「なあ？」

返事がなかった京助にマホが再度呼びかける

「返事くらいしろよ」

溜息を吐きつつマホが振り返った

「いないねえ；」

南が腰をトントン叩いて伸びをしながら言った

「結構探したけどサア；」

坂田が溜息をついた

「手分けが出来ない分時間が掛かるよな…」

中島が辺りを見渡しながら言った

「貴方達まで迷子になってはお手上げですから」

乾闥婆けんだつぱが言う

「けんちゃんゝなんかこう…探し物発見する術とかないの？」

南が聞く

「僕等は魔法使いではないんですよ？ そんなものはありません」

乾闥婆けんだつぱが言い切った

「じゃあの技とかって何」

坂田が聞く

「アレは宝珠の力です…宝珠とその宝珠に選ばれた…僕や迦楼羅かるら…

緊那羅きんならの心が合わさって初めて宝珠の力を引き出せるんですよ」

乾闥婆けんだつぱが言った

「宝珠が選ぶのか？」

中島が聞く

「そうです…何をどう基準として宝珠が使い手を選ぶのかはわかりませんが…僕自身も宝珠に選ばれた理由はわかりません…何故僕を選んだのか…僕は自分の解釈で受け入れていますけど」

乾闥婆けんだつぱが言う

「自分の解釈？ 何？」

南が聞くと乾闥婆けんだつばが一呼吸置いて口を開いた

「罪です」

乾闥婆けんだつばがにっこりと笑って言った

「罪：ってお前何かやったのか？」

坂田が聞いた

「やったから罪なんじゃないんですか？」

乾闥婆けんだつばがにっこりと笑顔で返した

「まあ：そろそうだけど：結構大きなことやらかしちゃったの？」

南が聞くと乾闥婆けんだつばが自分の胸に手を添えて目を閉じた

「：結構どころじゃない：ですね：僕は罪の塊なんです」

乾闥婆けんだつばが言うところ馬鹿とゴが顔を見合わせた

「けんちゃん：ワル？」

南が言う

「：さあ京助を探さないと」

南の質問には答えず乾闥婆けんだつばが歩き出した

「：深く突っ込んでいいところだと思う？」

坂田がボソツと投げかける

「いや：埋めたほうがいいとおもう」

中島が答えると一同が頷き先を歩く乾闥婆けんだつばの背中を見た

「おいていきますよ」

乾闥婆けんだつばが振り向いて言った

「お前の知り合い？」

「知るか！！； 俺は自慢じゃねえけどこんな素敵なお知り合いはいませんッ！！；」

マホが聞くと京助が喚いた

「うるせえ！」

京助の手首を掴んでいた少し色黒の男が怒鳴った

「なんなんだよッ！！；」

京助がその男を見上げて怒鳴り返した

「お前の背中のソレといい向こうのヤツの宝珠といい…お前等宮のモンだろ」

ゾロゾロと出るわ出るわしてくる柄の悪い集団の頭っぽい男が京助とマホを顎で指して言う

「違うって言ったら？」

マホが言った

「お前は違うって言ってもコッチのヤツの背中…こりや間違はなく宮の力持ちだってことは俺らでもわかる」

頭っぽい男が京助を見た

「俺は健全な良い子の遅刻常習犯な一般男子中学生だッ！！；」

京助が怒鳴った

「何わけのわからねえことぬかしてやがんだコイツ」

京助の腕を持つ男がヘッと笑う

「てかもし宮のヤツだったとしてお前等俺達をどうしたいんだよ」

マホが面倒くさいことになっちゃったよマイッタネという感じにやる気なく聞いた

「宝珠を渡せ」

「簡潔だな」

頭っぽい男が言うマホが突っ込んだ

「そうすりゃ何もしねえで離してやる」

「てッ！！；」

頭っぽい男の言葉に京助の腕を掴む男が京助の腕をもつ手に力を入れた

「俺のお気に入りなんだよねソイツ」

マホが京助を見た

「だったら宝珠を渡せ」

頭っぽい男がマホに近付く

「コレは宝珠じゃない」

マホがキツパリと言い切ると頭っぽい男の口元が笑った

「それにソイツは宮のヤツでもない」

マホが京助を指差した

「宮のヤツ以外にこんな変なモンつけてるヤツなんざいねえだろう？
なあ？」

「いてえッ！！； はなせッ！！；」

京助の腕を掴む男が京助の背中にある羽根っぽいソレをぐいっと引っ張ると京助が痛がった

「なんだ感覚あるんじゃない」

マホがけろっとした顔で言う

「知らねえって！！； はなせって！！；」

京助が喚く

「うるせえッ！！」

集団の中の一人の男が京助めがけて拳を振り下ろしてきた

3馬鹿や緊那羅きんならとかからはふざけあいやそんなカンジではよく殴られていた京助の体がぐらついた

「さっきの威勢はどこいった？」

殴った男がヘラヘラ笑ながら京助の髪を掴んだ

「コレ本当に飾りじゃないか？ 宮のヤツがこんな弱ええわけねえぞ？」

集団の中から声が上がった

「そうかもしれない：がコレはコレでいい見世物になりそうじゃない？」

京助の腕を持つ男が頭っぽい男を見た

「助けてほしい？」

霞む京助の目に映ったのは下から笑顔で覗き込むマホ

「：すけるよ：；」

まるで某どっかの眠い人の様な話し方で京助が言う

「なんだお前も：」

京助を殴った男が今度はマホめがけて拳を上げた

「…緊那羅！！」

足を止めた緊那羅を振り返り阿修羅が緊那羅を呼んだ

「止まるな！！； 宮司がきてんだぞ！！；」

阿修羅の声に躊躇いながらも緊那羅が走り出した

「どうしたのだ；」

何故か一緒に走っている迦楼羅が緊那羅に聞く

「ううん…なんだか…なんでもないっちゃ」

ボソボソツと言うと緊那羅が顔を上げた

「にしても本当このままじゃ…；」

阿修羅が後ろをチラツと見てそしてすぐさま前を見た

「だから外に逃げようって言ってるじゃない」

阿修羅の小脇で黙っていた鳥俱婆迦の言葉に三人が鳥俱婆迦を見た

「外：！！！」

そして迦楼羅が足を止め並ぶ窓に手を…伸ばしたが届かない

「窓から出てもここは…ツ；」

迦楼羅が開けようとしていた窓を緊那羅が開けると一気に風が入り

込んで緊那羅と迦楼羅の髪が靡いた

「ヒョー； 高っかい高っかい；」

阿修羅が窓の下を見て言う

「いくぞ」

迦楼羅が窓枠に手をかけてよじのぼろうと試みるのを緊那羅が脇の

下に手を入れて手伝う

「いくぞって…かるらん…」

ミヨンミヨンした飾りを風に遊ばれながら阿修羅が窓枠に立った迦

楼羅を見上げた

「迦楼羅…」

「少ししゃがんでいろ」

迦楼羅が言う風が少し強くなったのを感じた阿修羅と緊那羅がし

やがむ

「お面押えておけよ？　ばか」

「鳥倶婆迦だ…ッおわ…！！」

阿修羅が笑いながら言った言葉に突っ込んでいた鳥倶婆迦が慌ててお面と帽子を押えた

「いきなりは駄目でしょ」

パシンという音をさせてマホが男の拳を止めた

「な…ッ」

拳を止められた男はもちろん回りの集団も驚いてマホを見る

「戦いはまず礼から」

黒い髪結い紐の先の桃色の飾りが宙を舞いマホが集団から離れ立ち上がった

「礼だあ？」

立ち上がったマホがまるで英国紳士のように胸に手を当てそして深々と礼をした

「いったでしょ？　ソイツ俺のお気に入りだって」

顔を上げたマホの目が開く

「面白いし変わってるし…」

開けたマホの目が鮮やかな緑色から桃色に変わっていく

「案の定退屈をしのげるみたいだしね」

京助はマホの口元が笑ったのをうつすら見たような気がした

「乾闥婆？」

足を止めて上を見た乾闥婆に坂田が声をかけた

「どうしたんだやな？　京助いたんだやな？」

ゴが乾闥婆に駆け寄った

「いえ…そうではなく…なんだか胸騒ぎが…」

自分の胸元を掴んだ乾闥婆が宮の方を見る

「まさか京助…」

「シャラ——————————————————————」
「——ッ（プ）」

スパ——————————————————————
ン！！！！！！

言いかけた中島の口を坂田が勢いよく平手でふさぐ

「気のせいだ気のせい！ うん！！ そうだ！ そう思って！ お

願いだから！！！！」

乾闥婆けんたっぽの肩を叩きながら南が言う

「そう：だと：僕も思うようにします」

肩を叩いていた南の手を掴んだ乾闥婆けんたっぽが言った

マホの右目が完全な桃色になる

「なんだ：？」

集団がざわめきだした

「俺ってね」

マホがにこつと笑った

「特別って言葉嫌いなんだ」

そして集団を見る

「宮のヤツ等だって宝珠が無きゃお前達と一緒にだし：別に特別じゃないでしょ」

腕をつかまれたままさつきまではかろうじて意識はあったと思われる京助を見てマホが言う

「だからなんだって言うんだ？」

頭っぽい男がマホを睨んだ

「：俺に力を使わせないでよ」

にっこり笑っていた目が鋭く集団を睨むと集団が一斉に息を呑んだ

「俺は特別はいらないし特別にはなりたくない」

マホの左手がスウツと集団に向いた

「だから俺に力を使わせるな」

まるで蛇に睨まれたカエルのように黙ったままの集団にマホが言う
「ッ…； オイ！！」

頭っぽい男が何とか声を出すとハッとした集団が一斉に走り出した腕をつかまれたまま気を失っているっぽい京助を数人で運ぼうとしている男達にマホが視線を移した

「もしかして…もうアソコに先にいたりしないもんかね」

坂田が言うと言頭を歩いていた乾闥婆けんだつばが足を止めた

「いくら京助でも無理無理； だいいち道がわかんないじゃん」
南が言う

「…ココの道は全て宮に通じます」

乾闥婆けんだつばが言った

「どの道も必ず宮へ通じます…どんなに時間がかかっても必ず宮へ」
乾闥婆けんだつばの言葉に3馬鹿とゴが顔を見合わせた後ニーっと笑った

「それを早く言ってほしかったんだやな！！」

ゴが言う

「そうそう！じゃ最初からアソコめざしやよかったんじゃん！！」

中島が嬉しそうに宮を見た

「…必ず宮には通じますけど距離を考えてください…道はそれぞれ長さがあります…どの道も決して同じではないんです」

乾闥婆けんだつばが言う

「もし僕等が一番早い最短の道に来て京助が一番遠い道を歩くならば決して出会うことは無いんです」

3馬鹿とゴを流れるように見ながら乾闥婆けんだつばが言った

「それって…」

少し間を置いて坂田が乾闥婆けんだつばに聞く

「宮への道は…詳しい人でも詳しく知らない…わかっていてもわからない…それが宮への道なんです」

乾闥婆けんだつばが言う

「じゃあ乾闥婆けんだつばは何でこの道を選んだんだ？」

中島が自分達の立っている道を足で数回踏んで言う

「宝珠の導きです」

乾闥婆けんだつばが言った

「また宝珠……」

南が呟いた

「僕等は宝珠に導かれるまま……」

乾闥婆けんだつばが俯き呟く

「全部宝珠かよ……」

坂田が言う

「……宝珠がなければ……何もなかったんですよ……そう……何もなかったんです」

乾闥婆けんだつばがどこか悔しそうに言った

「全てが……僕の罪も迦楼羅かるらの罪も【時】も……宝珠なんかがあるから

……」

自分の胸を掴んだ乾闥婆けんだつばが唇をかみ締めた

「お……落ち着いてけんちゃん；」

そんな乾闥婆けんだつばの腕を掴んで南が軽く肩を叩いた

「今は京助京助；」

南の言葉に深く深呼吸をした乾闥婆けんだつばが顔を上げた

「……そうでしたね……すいません」

自分の胸から手を離れた乾闥婆けんだつばが南を見た

「何？」

南がきょとんとして乾闥婆けんだつばを見返す

「いえ……ありがとうございます」

お礼を言った乾闥婆けんだつばが肩から南の手を外し宮を見る

「とりあえず行ってみようぜ？ それっきゃねえべ」

坂田が歩き出す

「だな」

顔を見合わせて同時に頷いた中島とゴも歩き出した

「…いこつか」

南が乾闥婆けんだっぱに声をかけると乾闥婆が軽く頷き歩き出す

「…なあ乾闥婆」

追いついてきた乾闥婆けんだっぱに中島が声をかけた

「なんですか？」

「や…のな？ …アイツもアソコにいるのか？」

「アイツ？ 緊那羅きんならですか？」

ボソボソと言う中島に乾闥婆けんだっぱが聞き返す

「緊那羅きんならじゃなく…その…ヨシコ」

「吉祥？」

かろうじて聞き取れる大きさで言った中島の言葉を乾闥婆けんだっぱが繰り返した

「だッ； …まあ…うん；」

中島が気まずそうな顔をそらした

「…いますよ」

乾闥婆けんだっぱが答える

「そっか…」

中島が嬉しそうに宮を見た

真っ白な真っ白な空間

天井と床と壁の境目なんか見当たらない真っ白な空間

自分が今ここにいることも疑いたくなるような真っ白な空間

足元を見ても影は無く見えたのは自分の足だけ

声が出るのかもわからないから出さないのかそれとも出せないのか自分にもよくわからない

自分が【栄野京助】であることもわからなくなりそうな

あまりにも真っ白な空間

止まっていたら本当に自分が自分：栄野京助であることもこの景色のように頭の中が真っ白になってわからなくなりそうで京助は足を一步踏み出した

当ても無くどこなのかもわからずでもただ足を進める

歌が聞こえた

聞いたことのある声が優しく歌い真っ白な空間と京助の頭に響く

決して大きな声ではなく逆に小さくもなく心地よい大きさの歌声

真っ白な空間に京助がその歌声の主の姿を探す

歩いていた京助の足が小走りから駆け足になりそして走り出した

あまりにも真っ白な空間に眩暈まで覚えた

それでも聞こえる歌声に京助は走る

変わらないままの真っ白な空間

変わらないままの大きさを聞こえ続ける歌声

さすがの京助も息が上がって足を止め膝に手をついた

一体どれだけ走ったのだろう

全校マラソン大会で5キロは軽く走れた

登山も走って登り走って下山してそれでもまだ素手で魚を取る元気があった

そんな京助が息を切らせるまで走り続けても真っ白な空間と歌声は全く変わらなかった

「…いるんだろ」

自分が言ったのかもわからない自分はこんな声だったろうか

「ッ…」

唇をかみ締めて京助が顔を上げた

薄い青…青銀が目の前にあった

細い指がずっと上がり指し示したのは京助のジャケットの右ポケット

「…何…」

指されたポケットを見てその後再び顔を上げるとそこはまた真っ白な空間

今さっきまで人がいた形跡はどこにもない真っ白な空間

それでも歌声はまだ聞こえ続けていた

変わらない大きさで

変わらない優しさで

「…財布…」

とりあえず右ポケットに手を突っ込んだ京助が取り出したのは黒い自分の財布

後は何もポケットには入っていない

「…なんだってんだ…?」

京助が財布をひっくり返しもう繰り返して見た後何気にそっと財

布を耳に当てた

「…まさか…」

耳から財布を放すと京助が財布のファスナーを開けた
はらりとレシートが落ちたが拾う気はなく

「…これ…か…?」

落ちたレシートともに取り出した物を京助は耳に当てた

『これが京助のだっちゃ』

そんな言葉とともに緊那羅きんならから手渡された【最後に咲いた桜の花の
花びら】が一枚入っているプラ板で作られたお守りのような物

間違いなく歌声はコレをくれた緊那羅のもので
そしてその歌声は間違いなくソレから聞こえていた

「…そいや…こんなのももらったっけな」

入れっぱなしで忘れていたそのお守り（?）を見て京助が口の端
をあげた

財布をポケットにしまいお守りを手に握って顔を上げると見えたの
は再び青銀の髪

『願って』

小さく一言青銀の髪が言った

「願うって…」

『貴方はまだ負けていない…私の様になっては駄目』

細い指がお守りを握る京助の手に添えられた

『会いたい人…聞こえるでしょう? 向こうも同じ…』

京助の手を包む細い指に少し力がこもった

『名前を…今なら大丈夫』

細い指が離れて京助の手が暖かくなる

「コレ…」

京助が手を開くとお守りの中の花びらが鮮やかに光っていた

『戻って…』

真っ白な空間にその声だけが歌声に混じって響いて消えた

「かるらんカッチョイー!!」

「やかましい! たわけッ!!!」

金色の翼が大きく羽ばたく

「落ちる落ちるッ!!!」

青年の姿になった迦楼羅かるらの手を掴む緊那羅きんならの腰を掴む阿修羅あしゅら
その阿修羅の背中に必死でしがみついている鳥倶婆迦うぐはか

「迦楼羅…大丈夫なんだっちゃ?」

緊那羅きんならが迦楼羅かるらを見上げた

「大丈夫でなければこんなことはしない」

迦楼羅8かるらが言う

「たあまに大丈夫じゃなくても大丈夫だっつてやっちゃってだっばに怒られてんやの」

阿修羅あしゅらが笑いながら言う

「コチラには【元】があるからな…多少のことでは力は減らん」

迦楼羅かるらが金色の翼を大きく羽ばたかせる

「でも乾闥婆けんだつぱに見つかったら怖いね」

鳥倶婆迦うぐばかが言うかと迦楼羅かるらが口に端を引くつかせる

「ソレを言っちゃ駄目だっしょばか；」

「鳥倶婆迦だッ！！」

阿修羅あしゅらが突っ込むうぐばかと鳥倶婆迦うぐばかが阿修羅あしゅらのミョンミョンを引っ張って
キーキー喚いた

「暴れるな！ たわけッ！；」

迦楼羅かるらが怒鳴る

「緊那羅きんならどうした？」

「え：？：；」

迦楼羅かるらの身を案じたつきり黙って下を見ていた緊那羅きんならに阿修羅あしゅらが声をかけた

「ううん：ただ：正月町を上から見たらどうなのかなって」

緊那羅きんならが苦笑いで答えた

「：お前の頭は向こうの事で一杯のようだな」

迦楼羅かるらが言うきんならと緊那羅きんならが迦楼羅かるらを見上げた

どこか悲しそうな顔で迦楼羅かるらも緊那羅きんならを見てそしてふっと笑った

「おいちゃんの計算じゃ緊那羅きんならは冷蔵庫の中の心配もしてるよ」

鳥倶婆迦うぐばかが言う

「ああゝ牛乳の賞味期限がどうのってたなあ」

阿修羅あしゅらが笑いながら言った

「お前は：；」

迦楼羅かるらが半分呆れたような口調で言うきんならと溜息をついた

「や：ソレも心配だっちゃけどッ；」

緊那羅きんならが慌てる

「でもおいちゃんの計算ではそれ以上に京助の心配をしてる」

鳥倶婆迦うぐばかが言うきんならと緊那羅きんならが何かを思い出したのかハツとした顔をした

「：京助：足の傷：」

緊那羅きんならが呟いた

右の足の指がヌルヌルする頭ががんがんする

「…うあ…」

喉から声が出た

「…ッ；」

頭と足に走った痛みにも一度は起こしていた体をまた地面につけた背中に固い地面の感触を感じながら京助はうつすらと目を開けた

「…変な空」

七色にも透明にも何色にも捕らえられる上に広がる…自分達の世界では空があるところに広がるソレを見て京助が呟いた

「…この大空にー翼を広げーとんでーゆきたーいーよく…ってかあ…はあ…あ；」

ボソボソと歌った京助が最後に溜息をついた

「…なんで俺こんなトコで寝てんだ…いや殴られて…」

京助が自分に聞いて自分で自分で答えた

「マホだか…言うのが…」

ズキズキする頭で記憶を引っ張る

「…俺どうなんだろう…」

しばらく間を置いて京助が呟く

「…なんでこう…一人になると独り言が増えるんでしょーねー…アッハー」

変な空を見上げて京助が一人で話し始めた

「いやー…このまま戻れなかったらどうなるンザマシヨ俺…」
ぐう

短めに腹の虫が鳴いた

「…鳥類みたいに飛べたらなく…っても俺には羽根…あるじゃん」
はたと背中にある羽根っぽい物の存在を思い出して京助が指を鳴らした

「お礼は？」

ふっと影がかぶさったかと思うと黒い紐の先についていた玉がコンッと京助のデコに当たった

「…アリガトゴザマス…?」

笑顔で影を作ったマホに京助がわけもわからずお礼を言った

「いやいいんだ〜退屈しのげたし? やっぱお前のこと気にいた俺
そういつて笑いながらマホが手を差し出した

「マホって…言ったつけお前」

京助がマホの手につかまりながら聞いた

「そう俺はマホ」

京助の手を引っ張りながらマホが答えた

「この羽根みたいなヤツ…飛べると思うか?」

頭を押えて立ち上がった京助がマホに聞く

「それは俺に聞かれても」

マホが片手をヤレヤレというカンジであげた

「飛んだことは?」

マホが聞くと京助が首を横に振った

「いきなり生えてたんだし;コレ」

京助が羽根っぽいものを見ようと体をねじった

「いきなり…ってなんでまた」

マホが京助の後ろに回った

「何かきつかけとかなかったのか?」

チョイチョイと羽根っぽいものを突付きながらマホが聞く

「…きつかけ…かあ…」

京助が羽根っぽいものが現れたところまで少ない脳みそから記憶を
引っ張り出す

「…きつかけ…」

眩きながら京助が何気にポケットに手を突っ込んだ

「…キツカケ…きつかけ…」

そして取り出したのは

「なにそれ」

透明な板に挟まれた桜色の花びら

「…コレくれたヤツを一発引っ叩きたくてさ」

京助が取り出したお守りをマホに見せた

「それで宮に行くのか？」

マホが聞く

「何でもそこにいるっちゅーんだけどさあ…； はぐれて」

京助が口の端をあげて言う

「あゝ…迷子だって言ってたもんな」

マホが頷きながら言った後顔を上げて止まった

「あれ…?；」

南の声に一同が足を止めた

「どうした? 南」

中島が聞くと南が何もいわずに上を指差した

「上?」

坂田が上を見ると残りの面々も上を見た

「おりよ?」

「どうしたの?」

阿修羅あしゅらが変な声を出し鳥俱婆迦うぐばかがどうしたのか聞いた

「あれって…でっかいのとちっこいのとメガネとワンコの片割れと

…」

阿修羅あしゅらがまじまじと下を見てそんなまさかこんなところという言葉を上げていく

「…だっぱ…」

そして最後に言った言葉で迦楼羅かるらがバツと下を見た

「何であいつ等がコッチにいるんやん?；」

阿修羅あしゅらが言う

「でも京助がいないね」

鳥俱婆迦うぐばかも下を見て言った

「鳥…さんだね…ってけんちゃー…ん!?!?；」

タツと駆け出した乾闥婆けんだつばを3馬鹿とゴが追いかける

「…見つかった見たいだっちゃね…;」

「おいちゃんの計算ではおとなしく降りた方がいいと思う」

「オライもばかに同感」

緊那羅きんならと鳥俱婆迦うぐばかそして阿修羅あしゅらが迦楼羅かるらを見上げた

「…っ;」

迦楼羅かるらの顔が引きつった

乾闥婆けんだつばが人通りの少ない裏路地に入り耳の飾りを障ったかと思うと

一瞬にしていつもの乾闥婆けんだつばの格好になりそしてタンツと地面を蹴り
飛び上がった

「飛んだ!;!;」

追いかけてきた坂田が声を上げた

「けんちゃんが飛んだ! けんちゃんが…ゲハツゴハツ;」

運動神経皆無の南が息を切らせて走ってきてそう思ったかと思うと
思い切り咽る

「血の雨が降るんだやな」

ゴが上を見上げてどこことなくワクワクした口調で言った

「…なあ」

京助がマホを引きつった顔で見た

「…なんだコレ;」

バサツと音を立てて大きく広がったのはさっきまで半透明で小さかったであろう京助の背中の羽根っぽいモノ

「俺が聞きたいんだけど」

マホがヤレヤレをいうカンジで言う

「俺とうとう人外魔境?;」

京助が顔を引くつらせた

「まあ…それが原因なのは明らかだな」

マホが指差したのは京助の手の中のお守り

「コレ：か？；」

京助がお守りをマジマジと見た後マホを見る

「というか：ソレをくれたヤツが原因だろうな：よっぽど力が強いんだろうな」

マホが腰に手を当てて笑う

「でもコイツ自分が弱いからってアソコに帰ったんだ：俺に何も言わねえでさ：だからムカついて一発」

京助が言いながら腕をスイングさせる

「力っても想いの力だ」

マホがウィンクした

「んでお前もそいつに会いたっていう想いがあるんだろう？　だからじゃないのか？」

「：まあ：会ってひっぱたきたい：しな」

京助がモゴモゴと言う

「想いつてのも力の一つじゃないか？」

マホが京助の胸を人差し指で軽く突付いた

「想いの強さが力になってる：俺はそう思う」
にっこりとマホが笑った

「：すげえじゃん：アイツの力って：俺を人外にしちまうんだから」

京助が背中の中の今は誰が見ても羽根と答えるモノを軽く羽ばたかせた
「いやお前の想いも込みだから」

マホが言う

「俺の？」

京助が言った

「そう：まあ双方の思いの力の形？」

マホが羽根を撫でた

「空に道はないから俺はココでお役目ごめんになるな」

マホが京助に笑いかけながら羽根から手を離す

「：そーい、やあ、の、なん、だ、か、人、の、悪、い、方、々、は、ド、コ、い、っ、た、ん、で、す、か、？、；、」

京助がハタと思ひ出してマホに聞く

「あゝ：逃げてった？」

何故かマホが疑問系で答えると京助が微妙に納得した

「：ありがとな」

京助が間を置いて笑って言う

「いい顔するな、お前：本当気に入った」

マホも笑った

「また会えるといいけどな」

「だな」

京助が羽根を開いた

「俺との練習が無駄にならなかったな」

マホが広げられた羽根を見て言う

「：そーい、や、や、っ、た、っ、け、な、そ、ん、な、こ、と、」

忘れていた京助が言った

「相手によろしくな」

マホがヒラヒラと手を振る

「おう！！」

笑った京助の顔が羽根に隠れて、そして風が巻き起こった

「乾闥婆けんだつば：；、」

緊那羅きんならが目の前に来た乾闥婆けんだつばの名前を呼んだ

「：；、」

迦楼羅かるらは乾闥婆けんだつばを直視したまま固まっている

「：降りましようか」

乾闥婆けんだつばが静かに言う

「：顔は笑ってるね」

「シッ！！：；、」

鳥俱婆迦うぐはかがボソツと言うと阿修羅あしゅらが人差し指を口に当てて焦る

「乾闥婆飛べたんじゃん；、」

降りてきた乾闥婆けんだつぱに中島が言う

「羽衣の力で浮けるだけです」

乾闥婆けんだつぱが背中に大きく作られたリボン上の布を前に持ってきて言った
「迦楼羅かるらの様に飛ぶことはできません」

そう言いながら地面に降りてきた迦楼羅達かるらを乾闥婆けんだつぱが見る

「：あ：のだな；　これは：：；」

いつもの大きさに戻った迦楼羅かるらが気まずそうに何かを言おうとして
いる

「：：鳥俱婆迦うぐばか」

そんな迦楼羅かるらから乾闥婆けんだつぱが鳥俱婆迦うぐばかに視線を移した

「何？」

鳥俱婆迦うぐばかが返事をする

「貴方は何故こんな無謀なことをしたんですか？」

乾闥婆けんだつぱが聞く

「笑ってて欲しかったから」

鳥俱婆迦うぐばかが答える

「緊那羅きんならがいなくなったら皆笑わなかったから」

「鳥俱婆迦うぐばか：」

緊那羅きんならが鳥俱婆迦うぐばかを見た

「自分の身の危険は考えなかったんですか？」

「けんちゃん；」

さつきより口調がきつくなった乾闥婆けんだつぱの方を南が軽く叩く

「それより何で3馬鹿うぐばかがいるんだよ」

今度は鳥俱婆迦うぐばかが乾闥婆けんだつぱに聞いた

「ゴもいるんだやな」

中島の後ろからごが顔を出してぷーっと膨れた

「とうか：なんで3馬鹿うぐばかがいて竜のボンがないん？」

阿修羅あしゅらが聞くと乾闥婆けんだつぱがきゅっと手を握り締めた

「：僕の不注意で」

「迷子の迷子の京助君：：に：：ね；犬のおまわりさんは使い物にな

んないし」

「ゴは悪くないんだやなッ!!」

俯いた乾闥婆けんたっぱに言葉に坂田が言うところゴが反論した

「迷子…って…」

阿修羅あしゅらがチラッと緊那羅きんならを見ると緑色の髪飾りが靡いた

「緊那羅!!!」

中島が駆けて行く緊那羅きんならを呼んだ

靡く緑色の髪飾りに人ごみが視線を向けた

「緊那羅様？」

「そうだ緊那羅様だ!!」

誰かが言った一言に誰かが便乗してその波紋が広がる

「ばっか!!; あの格好で…ッ;」

「貴方もその格好で行ってどうするんです!!」

緊那羅を追いかけようとした阿修羅あしゅらの服を掴んで乾闥婆けんたっぱが言う

「でもじゃ…ッ!!;」

阿修羅あしゅらが緊那羅きんならの駆けて行った方向と乾闥婆けんたっぱを交互に見て焦る

「俺等が…」

「迷子になります確実に手間が増えるのでやめてください」

申し出ようと挙手した坂田けんたっぱに乾闥婆が言うところ坂田がメソリメソリと泣き真似をしその坂田の頭を中島が撫でた

「ラムちゃん京助絡むと突っ走るねえ」

南がヤレヤレというカンジで溜息を吐いた

「ワシが上から…」

「貴方ほどの階級所持者が出て行っては余計大騒ぎになるでしょう？」

迦楼羅かるらが上を見て言うところ乾闥婆けんたっぱがまたすかさず返す

「じゃあどうするんだやなッ!!;」

ゴが両手を忙しなく動かして聞く

「おいちゃんの計算によると乾闥婆けんたつば自分で行く気だね」

鳥俱婆迦うぐはかがまだ阿修羅あしゅらの背中に負ぶさったままで言った

「お前が行ったとて同じことだろう！ たわけッ！！」

迦楼羅かるらが怒鳴った

「僕の責任です」

乾闥婆けんたつばが言う

「何でもかんでも一人でやろうとするな！ たわけ！！」

迦楼羅かるらが怒鳴ると小さく炎が出た

「僕が責任を持つと言う約束で連れて来たんですから僕の責任です」

「しかし緊那羅きんならをココに連れてきたのはワシだ！！」

「つか緊那羅きんならを向こうに連れて行こうって言ったんはオライ」

「俺等だって結構無理矢理ついてきたし？」

「許可なくコッチにきたのはおいちゃんだよ」

あーだこーだと言い合う一同の中の迦楼羅かるらの服をゴがチヨイチヨイ

と引っ張った

「何だ？」

「緊那羅きんなら放置プレイなんだやな」

ゴの言葉にはたと空間の時間が止まった

「宝珠持ちに触ると願いが叶うんだぜ！！」

「声を聞くと病気が治るとか」

「髪の毛を財布に入れておくと水虫が治るんだってさ！！」

出所のわからないウワサを信じているのか人々が走る緊那羅きんならを追いかける

「ちょ…退いてほしいっちゃ！！ 通して！！」

前からやってきた人ごみに身動きを封じられた緊那羅きんならが言う

「私は…ッ！！； 痛ッ！！； 引っ張るなっちゃッ！！；」

まるでバーゲンセールのように人々の手が緊那羅きんならに伸びた

「通してくれっちゃッ！！；」

緊那羅きんならが叫ぶ

「おお！ 宝珠だ！！」

「触るといいことあるんだろ！？」

一人が緊那羅きんならの右腕を掴んだ

「やつ…； ちょ…離すっちゃッ！！；」

緊那羅きんならが腕を振って捕まれているのを解こうとする

「私は京助を…ッ！！；」

身動きが取れなくなった緊那羅きんならがそれでも何とか動こうと体を動かす

「ありがたやありがたや」

とうとう拌み始める人も出て緊那羅きんならの周りが厚い人垣で囲まれた

「ッ…京助————ッ！！」

緊那羅きんならが京助を呼んだ

「キョウスケって何だ？」

聞き慣れない言語に人々が疑問じみた会話を始める

「竜様の穴埋めに入った方の名前か？」

「いやソレにしては変な名前…」

ザワザワと話していた声が一瞬で静まり緊那羅きんならを掴んでいた手から

も力が抜けた

「…何…」

力の緩まった人々の手を離し顔を上げた緊那羅きんならが人々が同じ方向を

見てばかんとしていることに気付いき緊那羅きんならもその方向を見た

「何してんだお前」

影が出来て風が起こって声がした

「なん…」

人々同様ぼかんとした顔をしていた緊那羅がやっと一言言葉を言った

「でっけえ声で人の名前呼びやがって」

また風が起きてヘッと口の端をあげた京助が緊那羅きんならを見下ろした

「手を上にッ！」

「えっ； あ…う…上？；」

京助の言葉に緊那羅きんならがはっとして手を上に上げると頷いた京助が羽

根を広げそして滑空してきたかと思うと上がっていた緊那羅きんならの腕を掴んだ

「うわっ；」

「重ッ；」

緊那羅きんならの体が浮かんだ

「つでええええええええええええええいッ! ! ; ,」

「うわあ!!!」

「キヤー!!!」

まともに羽ばたきの風を受けた人々が悲鳴を上げる

「スンマセーンッ!;」

高く上がった京助が下にいる人々に謝った

「京助……な」

「何してたんだよ」

口を開いたのは緊那羅が先で言い終わったのは京助が先

「……京助が迷子になったって坂田達と言ったから……」

少し間を置いて緊那羅が答えた

「ふうん……で？　その坂田達はドコにいった」

京助が聞くと緊那羅が自分がかけてきた裏路地を指差しそれを見た

京助が何も言わずにその方向に向きを変えた

「…落ちるぞ」

きんなら
そう言われて緊那羅が京助の首に捕まる腕に力を入れた

「何でも言わねけで行ったんだよ」

京助が聞く

「言つたつちや」

緊那羅きんならが返した

「聞いてねえ」

それに対し京助がまた返す

「言ったっちゃー!!
そしたら行って来いって京助言ったっちゃー!!」

！」

声を大きくして緊那羅きんならが言う

「聞いてねえっつーの！」

「言ったっちゃッ！」

「聞いてねえったら聞いてねえ！！！」

「言ったって言ったら言ったっちゃッ！！！」

「何をしているのだたわけッ！！！！！」

いつの間にか怒鳴りあいレベルまで発展した口喧嘩に怒鳴りでは負けないぞというヤツが突っ込んだ

「鳥類……」

「迦楼羅……」
かるら

金色の羽根を広げ呆れ顔で迦楼羅かるらが二人を見る

「だって京助が聞いてないって……」

「聞いてねえってんだから聞いてねえんだよ！！！」

「だあッ！！　とにかく下に下りるぞ！！！」

また始まりそうになった怒鳴り合いを一刀両断して迦楼羅かるらが言った

「わああ……」

坂田が声を上げた

「ゴジラ！！　ゴジラ！！」

南がアッハッハと笑いながら京助の羽根をベシベシ叩く

「ゴジラは飛べねえじゃん；キングギドラ？」

中島が南に突っ込む

「いや……こりやまさしく竜のモンだぞ……」
あしゅら

阿修羅が羽根を触りながら言う

「主と同じなんだやな京助」

ゴが嬉しそうに尻尾を振って京助が見上げた

ゴス

「無事で何よりです」

「：おうよ；」

乾闥婆が笑顔で京助にチョップを放った

「貴方もよく見つからなかったですね」

「いだだだっ！！；」

乾闥婆が今度は迦楼羅の前髪を思いっきり引っ張った

「何をするたわけッ！！；」

迦楼羅が怒鳴る

「言ったでしよう？ 貴方ほどの階級がもし見つかったら：」

髪を引っ張る乾闥婆に手に更に力がこもっていく

「いだだだだだッ！！； 抜ける抜けるッ！！；」

迦楼羅がぎゃんぎゃん喚く

「ラムちゃんも無事で何よりだっちゃん」

南が緊那羅を見た

「あ：私は：」

いきなり名前を呼ばれて緊那羅が焦る

「：ごめんだっちゃ：今回のことは私が：」

「きんなラリアー——————————————————————」

「——————————————————————」

「だっ！！；」

ボソボソと言いはじめた緊那羅に京助が必殺！と言わんばかりにラリアットをかました

「できました！ 栄野選手の必殺技！！ モロに食らったラム子！

立てるか！！」

司会なら任せろ！的坂田が手をマイク代わりに実況を始める

「何するっちゃッ！！；」

緊那羅が怒鳴る

「おおおーっと！ ラム子起き上がりました！！」

「やかましいっちゃッ！！；」

坂田が言うど緊那羅が坂田に怒鳴った

「前にも言つたろが。誰が悪い彼が悪いゆゑてたらキリがねえんだ
つつーの」

京助が言う

「でも…ッ！」

「でもでもハワイでもイスカandalでもねく!! キリがねえって
んだろが」

「たっ!;;」

反論しようとした緊那羅きんならの頭を京助が叩いた

「…今日の晩飯エビフライな」

「おっ! いいねえ!!」

京助が言うと中島が京助の肩に腕を回して親指を立てた

「お前等もくんのかい;」

「アタリキシヤンシヤン!!」

3馬鹿が揃つて小躍りする

「オライも」

ハイと阿修羅あしゅらが手を上げた

「おいちゃんも行きたい」

「おし! 皆まとめて来い!!」

「お前が言うな!;!」

鳥倶婆迦うぐばかも言うと坂田が親指を立てそれに京助が突っ込む

「…行きたいんですね」

そんな様子を見ていた迦楼羅かるらに乾闥婆けんだつぱが言うと迦楼羅かるらの肩がぴくつ
と動いた

「…仕方ないですね」

乾闥婆けんだつぱが言うと迦楼羅かるらの頬が少し赤くなった

「あ…そうだからんとでっかいのにオライちよ〜っようお願い事あ
んだわさ」

阿修羅あしゅらが迦楼羅かるらと中島を見て言うとお招きをした

「何だ?」

お招きされた二人が阿修羅あしゅらの元に向かった

「…帰るぞ」

京助が緊那羅きんならに声をかけた

「買ひ物付き合ってやつから」

緊那羅きんならが顔を上げると京助がそっぽを向いたままで言った

「悠待ってる」

「…うん」

緊那羅きんならが笑った

「帰るぞうは…いいんだけどコレはどうすんの」

坂田が京助の片羽根を引っ張った

「どうすんのって…どうすんの」

「どうすんの…ってかどうすんの」

「え…どうすんの」

「どうすんのって言われても…どうするんだっちゃ?」

「ワシに聞くな!; どうするのだ!」

「僕にも聞かないでください…どうするんですか」

「アッハッハ…どうすんきに?」

「おいちゃんもわからないよどうするの?」

「ゴもわからないんだやな…どうするんだやな?」

坂田が京助に聞きそれからテンポよく南、中島、緊那羅きんなら、迦楼羅かるら、乾闥婆けんたっぱ、阿修羅あしゅら、鳥俱婆迦うぐばか、ゴの順に回る

「そもそもどうしてこうなったのだ」

迦楼羅かるらが聞くと京助と3馬鹿が顔を見合わせた後揃って緊那羅きんならを見た

「何だっちゃ;」

四つの視線を受けた緊那羅きんならが少し後ずさる

「…街中で世話になったヤツ…お前が原因だって言ってた」

京助がそういいながら取り出したのは

「それ…」

見覚えある桜の花びら入りのプラ板のお守り

「お前の想いの強さが云々って言ってた」

お守りを握って京助が言う

「戸が見えれば連れて行くって乾闥婆けんたっぱが言って…そしたら戸も見えて京助にソレが出たんだよな」

中島が言うと南と坂田も頷く

「かるらん…」

「んはいらんといっているだろう!; …感情の高ぶりだな…落ち着けばおそらく消えるだろう」

「感情…?;」

迦楼羅かるらが言うと京助が口の端をあげた

「感情が一時的に上昇したことで竜の力も一時的に現れたということです」

乾闥婆けんたっぱが補足説明をつけると迦楼羅かるらが横で頷いた

「ってか今までも何だかんだ怒り狂ったりしてたけど…こんなん出ませんでしたが;」

京助が羽根を動かした

「…【時】が迫っているからと考えるもおかしくはない…明確ではないがな」

迦楼羅かるらが口にした【時】という言葉に摩訶不思議服集団が表情を曇らせた

「…【時】ねえ…俺にはよくわからないけど…とにかく帰らない?」
重苦しい空気に耐えられなくなったのか南が言った

「ソレ賛成」

坂田が挙手する

「あ、の前に…」

阿修羅あしゅらが帰ろう帰ろう言っている一同に向かって声をかけた
「…はいよ」

中島が阿修羅あしゅらの元に歩み寄った

「…仕方ないな;」

迦楼羅かるらも溜息を吐きながら阿修羅あしゅらに向かって足を進めた
「先に行っててくりゃれん」

迦楼羅かるらを右に中島を左に連れて阿修羅あしゅらが一同を見送った

ギィという音にゆっくりと顔を上げたのはヨシコ

「…あつくん？ 今日の課題終わったでしょ？」

あの露出の高い格好ではなく落ち着きのある格好でヨシコが扉を開けた阿修羅あしゅらに歩み寄った

「そうだな…課題は終わった…からご褒美」

阿修羅あしゅらがニーっと笑った

「ご褒美？」

ヨシコが首をかしげると同時に開いた窓

「何…」

いきなり入り込んできた風にヨシコが顔を向けた

「ゆー…」

「その呼び方はやめろ；」

迦楼羅かるらに両手をつかまれた中島が窓辺に足をかけた

「…！？； どうして！？ どうしてゆーちゃんがここにいの！

？； そうよ！！ どうして！？；」

ヨシコが阿修羅あしゅらの胸倉を掴んでガクガク揺すった

「言ったるが…； ご褒美」

揺すられながら阿修羅あしゅらが言う

「な…んで…」

ヨシコが阿修羅あしゅらの胸倉からは手を離さずゆっくりと窓を振り返った

「…元気か」

何故か照れながら中島が言う

「…元気に見える？」

ヨシコが俯いたまま返した

「わかんねえから聞いたんじゃない；」

中島が言う

「…むかつくわ…っ…」

阿修羅あしゅらの方に向きを変えたヨシコが呟いた

「そろそろ離れなければまた厄介なことになる；行くぞ」

迦楼羅^{かるら}が羽根を広げた

「…またな」

中島のその言葉にヨシコがバツと振り向いた
長く垂れた布が風に靡いていた

「…あつくん…」

阿修羅^{あしゅら}がヨシコの頭を撫でた

「私…苦しいわ…」

ヨシコの声が震えていた

【第十回・弐】おふくろさんよ（前書き）

母ハルミが話すまだ知らない父のお話

【第十回・弐】おふくろさんよ

「ほら!! おとなしくするっちゃッ!!」

「ギャー!!; お前! 一気にかけん!!; しみるしみる!!;」

」

京助の足に消毒液 (マキロン) を思い切りかけた緊那羅きんならに京助が喚いた

「男ならコレくらい我慢しろっちゃ」

ガーゼで垂れた消毒液を拭いながら緊那羅きんならが言う

「っおおおおおお;;」

京助が意味のよくわからない手の動きをして痛さを訴える

「おもしろいんだやな」

コマがその様子を見て言う

「コレで主の羽根が生えたまんまだったらもって笑えたかもなんだやな」

イヌも言う

「お前等…人事だと思ってえおおう!!;」

むすっとした顔で二匹に言っていた京助がまた声を上げた

「ハイ! 終わりだっちゃ」

緊那羅きんならが余った包帯をクルクルと巻いて救急箱にしまった

「乾闥婆けんたつばの手当ての方が優しかったぞ;」

包帯の巻かれた足を見て京助が言う

「ハイハイ」

緊那羅きんならが言いながら救急箱を持って立ちあがった

「…お前段々母さんに似てきてねえか?;」

京助が緊那羅きんならを見上げて言うきんならと緊那羅がきよとした顔で京助を見返した

「ソレはゼンゴも思ってたんだやな」

コマが言う

「だよな？」

京助がコマとイヌに向かって指を指した

「そんなことはないと思うっちゃけど…うーん…」

緊那羅きんならが救急箱を抱えたまま考え込む

「行動がおばさん臭くなってきたというか…」

「誰がおばさん？」

「母さん…」

ペンッ！！

「ハルミママさん…；」

緊那羅きんならの目線の先には洗濯物が山になっているカゴを小脇に抱えたまま京助の頭を今まさに叩きましたな母ハルミ

「全く失礼な…」

ブツブツ言いながら母ハルミが京助を横切って和室に入ってしまった

「地獄耳…；」

京助が頭をさすりながらまたボソッと言う

「何か言った！？」

和室から母ハルミが叫んだ

緊那羅きんならがコッチに帰ってきたのは昨日

今日は日曜日で外ではコレでもかというくらい雪がもっさりと降り続けている

「今日買い物いけないっちゃから…カレーでいいっちゃね」

窓の外を見て緊那羅きんならが言う

「僕カレー好きー！！」

慧喜えきとトランプをしていた悠助が緊那羅きんならの言葉に万歳をして言った

「うずら入れてね」

悠助が目をキラキラさせて緊那羅きんならに言う

「たしか水煮の缶詰があった…っちゃから」

緊那羅きんならがにっこり笑った

「僕も手伝う」

「悠助が手伝うなら俺も」

悠助が立ち上がると慧喜えきがトランプをまとめはじめる

「ありがとだっちゃ」

悠助の頭を緊那羅きんならが撫でると慧喜がジト目で緊那羅きんならを見、ソレに氣づいた緊那羅きんならがパツと手を離れた

「ないっちゃ； …あれ…？；まだ確か一つ残ってたような氣がしてただけど…」

床下の室を覗き込んで緊那羅きんならがうずらの水煮の缶詰を探す

「ないの？」

緊那羅きんならを見下ろして悠助が聞いた

「仕方ない…買ってくるっちゃ；」

室の戸を閉めて緊那羅きんならが立ち上がる

「でも緊那羅きんなら…雪降ってるよ」

慧喜えきが言う和一瞬 緊那羅きんならがうっと止まった

「…緊ちゃん寒い嫌なんでしょ？ 僕が行く」

悠助が言う

「悠助が行くなら俺も行く」

慧喜えきも言った

「ダメだっちゃ； こんな天気の時…」

「俺が行ってきてやるか？」

緊那羅きんならの後ろを通り冷蔵庫をあけた京助が言った

「義兄様」

慧喜えきが京助を呼んだ

「でも足…」

緊那羅きんならが言うと慧喜えきと悠助も揃って京助の足を見た

「走らなきゃいいんだろ？」

冷蔵庫からチーカマを一本取り出して京助が戸を閉める

「まあ俺は体動かす手伝いしかできねえからよ…んじやいってくる」
チーカマを齧りながら京助が台所から出て行った

「よッ！」

ガラガラ：

気合一発玄関の引き戸を開けるとソコは一面の白
そんな景色を見て京助がしばし止まった

「…【時】」

京助が【天】で見た真っ白な空間を思い出す
たぶん夢だったんだろうけど夢で終わらせるにはなんとも後始末が
悪いような

「きようすけー！！」

パタパタという足音とともに悠助がやってきた

「これもっていって」

「何？」

開けっ放しの玄関の戸から悠助の方に歩き出した京助に悠助が手渡
したのはホツカイロ

「ちゃんとクシャクシャしたからすぐあったかくなるよ」

手渡されたカイロは確かににもまれた後があってほのかにあったかい
「さんきゅ」

京助がそのカイロをゴソゴソとズボンのポケットに入れた

「気をつけてねーいってらっしゃい」

玄関の戸の隙間から悠助の見送りの声が聞こえた

「…見えねえ」

さっきまではただのもっさもさ降る雪だったのに日本海の波が呼ん
だ風がついて俗に言う吹雪という事になっていた

「…さって」

京助がほんのりあったかい右ポケットを二回叩いて足を動かした
しばらく歩いて石段を石段を一段降りようとすると雪かきをする音
が聞こえた

「母さん？」

社務所の前で赤いじょんばを手に雪かきをしていたのは母ハルミ

【解説しよう。『じょんば』とは方言で『雪かきスコップ』の事を
指すのである】

「母さん；」

京助が母ハルミに声をかけた

「あら京助」

巫女服の上から一枚上着を羽織っただけの母ハルミが顔を上げた

「雪かきしないと出られなくなるからねゝゝアンタはこの雪の中ど
こ行くの」

雪で濡れて顔にくっついていた髪を耳にかけながら母ハルミが京助
に聞いた

「うずらの卵買いにゝってか手袋はけよ；　　ったくゝゝ」

京助が赤くなった母ハルミの手を見て言った

「大丈夫よ感覚ないから」

「そうじゃねえだろ；」

母ハルミが笑って言うのと京助が自分のポケットから黒い手袋を取り
出した

「俺軍手あるから」

そう言いながら母ハルミに手袋を差し出す

「あらゝありがとゝじゃついでに後ろ向いてくれる？」

手袋を受け取りながら母ハルミが言うのと京助が首をかしげた後言わ
れたとおりに後ろを向いた

「ぎょおあああ！！！！！！！」

境内に風とともに京助の悲鳴が響いた

「はゝゝあつたかい」

「なにすんだッ！！」

京助の背中に手をつ突っ込んだ母ハルミがふうっと息を吐いた

「人肌が一番なのよ」

「のあっ！！」

今度は反対の手を背中に突っ込まれた京助が再び悲鳴を上げる

「：アンタ：背え伸びたわねえ：」

母ハルミがいきなり言った

「いくつあんの？」

「：165：あるかないか；　　ってかもういいだろ；」

京助が母ハルミの腕を掴んだ

「大きくなつたわね京助」

「へっ？；」

「さっ！　　気をつけていつてくるのよ？　　帰ってきたら雪かき手伝

つて頂戴」

小さく聞こえた母ハルミの言葉を聞き返そうとした京助の背中を母

ハルミが叩いた

「あゝああ；」

吹雪の中母ハルミに見送られて京助は石段を降りていった

「これは？」

慧喜^{えき}が指差した

「これは保育所の遠足」

悠助が答える

「これ：もしかして京助だっちゃ？」

「そうだよ」

緊那羅^{きんなら}の指差したものに対して悠助が答えた

「昔の悠助も可愛いっ」

慧喜^{えき}が悠助を抱きしめた

「不思議だっちゃね：これ：」

緊那羅きんならがまじまじと見ているのは悠助が広げたアルバム

「ここに悠助がいるのに：こっちにも：しかも昔の悠助が：」

緊那羅きんならが悠助と写真の悠助を交互に見て言う

「カメラでねハイチーズっていったら撮れるんだよ」

悠助がピースして説明する

「どうしてみんなこう：指を二本立てた手の形で写ってるんだっ
ちや？」

緊那羅きんならが悠助に聞く

「それはねーピースって言ってねー写真のポーズ」

悠助がピースして笑った

「：ピース：」

緊那羅きんならが写真を見て呟いた

「っだー！！；」

「あ、京助だ！！」

玄関先から聞こえたなんだか知らんけど気合の入った京助の声に悠助が戸のほうを見た

「帰ってきたみたいだっちゃんね」

緊那羅きんならが立ちあがると廊下からゴトゴトと音が聞こえてきた

「緊那羅」

慧喜えきが緊那羅きんならを見上げた

「何だっちゃん？」

「早く行かないとヒマ子義姉様に先こされるよ」

「はっ！？；」

慧喜えきが素で言うきんならと緊那羅が素っ頓狂な声を出した

「ほらー緊ちゃん早く早く」

悠助が笑いながら言う

「早く：って； 別に私は：；」

「顔凄く嬉しそうだったけど」

緊那羅きんならが言うえきと慧喜が突っ込んだ

「おかえりなさいませ京様」

「あゝ：タダイマ；」

玄関先から会話が聞こえた

「あゝあゝ」

慧喜えきが緊那羅きんならをチラッと見た

「何だっちゃ；」

ソレに対し緊那羅きんならが返す

「ほらゝ早く行かないからだ」

慧喜えきが悠助の頭に顎あごを乗せて言った

「だから：何：」

「うらウズラ」

ガラツと開いた戸に一同が振り返った

「おかえり京助ゝ」

悠助が手を振った

「おう」

そう言った京助の腕にすっかり絡められた緑のしなやかな葉

「：脱ぎてえんですけど；」

京助がゆっくりその葉を剥がす

「京助鼻水ゝ」

悠助が京助の顔を指差して言うと言京助が鼻を吸った

「ほっぺ真っ赤だっちゃね」

緊那羅きんならが笑う

「：母さんは？」

ズビツと再び鼻を吸った京助が聞く

「ハルミママさんはまだ来てないっちゃけど：」

緊那羅きんならが答えると京助が買い物袋を差し出してまた廊下に出た

「：京助？」

緊那羅きんならが小走りで京助の後を追って廊下に出る

「どこ行くんだったちゃ？」

そして京助の背中に聞いた

「雪かき」

振り向かずに京助が答える

「雪：かき：あ私も：」

「お前はカレーを作るといふ使命があんだろ」

今度は振り向いて京助が言った

「それに寒さハンパねえぞ」

へツと笑った京助に緊那羅きんならの顔が少し引きつった

「お氣をつけて京様く！！」

ヒマ子が茶の間から半分体を出して言った

「：いってらっしゃいだっちゃ」

緊那羅きんならも小さく言うと言こえたのか聞こえてないのか京助がヒラヒ

ラと手を振った

「面倒くさいね緊那羅きんなら」

慧喜えきが言う

「何がだっちゃ；」

買い物袋を持ったまま緊那羅きんならが慧喜を見る

「イロイロ：ねー？ 悠助ー」

慧喜えきが悠助を抱きしめた

ストーブの上にかけてあるカレー（味付け前）の鍋がコトコトと

いい始めた

まだ吹雪がやまない外に再び出た京助が買い物前に母ハルミがいた

社務所前までやってきた

「スゲエ；」

暴風雪の中京助が呟いた

社務所入り口から家の玄関先まで綺麗に雪が掻いてあった

「：手伝うことねえじゃん；」

京助が頭を掻いてそして社務所の戸に手をかけた

戸を閉めるとオオオオンという風の泣き声が耳に付きそして鼻には香ばしいコーヒーの香りがついた

ギシッと音をさせて京助が玄関にしかれているスノコに靴を脱いで上がるともう片足で社務所に上がる

入ってすぐにあるのは給湯室とかこつけた小さな台所
少しいくと物置になっている部屋が一つ

その向かいの少しレトロなガラス戸の向こうに母ハルミの姿があった
「よいっす」

少し建付けが悪いレトロなガラス戸がキュキュキュと言いながら開けられ京助が片手を挙げた

「あらおかえり」

母ハルミが振り返って言う

「雪掻き終わってんじゃん」

京助が上着を脱いで丸く小さな昔ながらの石油ストーブに両手を向けた

「アンタが遅いからよ」

再び机の方に体を向けた母ハルミが言う

「ヘイヘイ：さようですね；」

京助が口の端をあげて言った

「で？ なにしにきたの？」

何か書類を書きながら母ハルミが聞いた

「別に：」

京助がボソツと答える

「コーヒーは？」

「いらねえ」

「そう」

トントンと進んだ会話が途切れてストーブの上のヤカンがシュクシユク言い出した

「：カレーにさ」

京助が口を開いた

「カレーにうずら入れるっていうのウチだけなんだか？」

京助が言う

「ああ：そうかもね私が好きだから入れるの」
母ハルミが言った

「俺も好きだけどさ」

京助が言う

「：母さんってさ：」

「なあに？」

京助の言葉に返事をした母ハルミの言葉から少しの沈黙

「：母さんが何？」

ふうと溜息をついて母ハルミが振り返った

「：父さんがその：少し違うやつだって知ってたのか？」

京助がぼそぼそと聞く

「知らなかったわよ？ たぶん：でも変わってたのは知ってたと思
うわたぶん」

母ハルミが言う

「：その二つはどう違うんだよ； そんでたぶんってなんだよたぶ
んって」

京助が突っ込む

「たぶんだからたぶんよ。そんな昔のこと覚えてるわけないでしょ
？ アンタの母親なんだから」

何故か誇らしげに母ハルミが言った

「昨日：さ：見たろ？」

今は何もなくなった自分の背中を京助が指差した

「俺と悠の背中の中：」

「見たわよ？ だって見せにきたじゃないの」
母ハルミが言う

「どう思った？」

京助が聞く

「寝にくそう？」

母ハルミが言うと京助が阿呆面で止まった

「仰向けに寝られないじゃない？　小さい時アンタいつも仰向けから寝始めてたからねえ…よかったわね消えて」

母ハルミがにつこり笑った

「…そんだけ?」

少し間を置いて京助が聞く

「他に何か…キモいとか思わなかったわけ?」

「思わなかったわよ?」

京助の言葉に母ハルミが即答する

「こんなの生やしたのが自分の息子で…嫌…だとか…」

躊躇いがちにそして凄く小さな声で京助が言った

「アンタねえ…そんなこと気にしてたの?　意外に繊細に出来てるのねえ…」

少しきよとした後母ハルミが呆れ顔で言う

「悠ちゃんが緊ちゃん拾ってきてかるらん君やけんちゃん…タカちゃん矜羯羅君、慧喜ちゃんに…コマイヌ…ゼンゴの方がいいかしら」

母ハルミが名前をあげていく

「どこでやってきたのかすごい怪我してきたこともあったわねえ…

あと桜がココだけ咲いたとか」

思い出しながら母ハルミが言う

「すごいじゃない?」

そして最後にそう言った

「…は?」

京助が少し間を置いて言った

「それってアンタじゃなきゃ体験できなかったことじゃない」

母ハルミが言う

「いや…まあ…うん?」

京助が首を捻りながらも返事をする

「よかったじゃない?　【栄野京助】だったから緊ちゃん達に会えたんでしょ?」

母ハルミが言うのと京助がゆっくりと顔を上げた

「それとも【栄野京助】として生まれてきたくなかった？」

なんとなくどことなく元氣のないような声で母ハルミが聞いた

「私と竜之助の子供に生まれてきたくなかったかしら？ 折角私が腹痛めて生んだのに」

母ハルミが自分の腹を叩いた

「…すこし太ったわね…」

そしてボソッと付け足す

「私はアンタ産んでよかったと思うわよ？ 今私アンタと悠ちゃんのおかげで凄く楽しいもの」

母ハルミが言う

「京助」

黙ったままだった京助を母ハルミが呼んだ

「きなさい」

ポンッと膝を叩いた母ハルミの右手には梵天付きの耳搔き棒があった

緊那羅きんならがオタマでグルグルと鍋の中をかき混ぜている

「今日はカレーなんだやな〜！」

コマが台所に入ってきて鼻を動かした

「普通のワンコは食えないんだやな〜…ゴ等は幸せなんだやな」

イヌもうつとりしながら言った

「…緊那羅？」

コマが緊那羅きんならを呼んだ

「きーんーなーらー？」

イヌも緊那羅きんならを呼んだが反応がなかったただオタマを持った手がグルグル動いているだけだ

「…どうしたんだやな？」

「さあ…」

コマとイヌが顔を見合わせて首をかしげる

「変なんだやな」

「変なんだやな」

コマとイヌがそう言って頷いた

「…はああ…」

ぴたっと手が止まったかと思うと緊那羅きんならが大きな溜息をついた

「…緊那羅？」

「なんだっちゃ？」

イヌが緊那羅きんならを呼ぶと今度は返事が返ってきた

「緊那羅変なんだやな」

イヌが言うとかマが頷く

「え…?…」

指摘が凶星だったのか緊那羅きんならが驚いた顔をした

「や…あの…；…そう…だっちゃか?…」

緊那羅きんならがしゃがんでコマイヌの目線で真顔で聞いた

「うん」

コマイヌが揃って頷く

「…はああ…」

緊那羅きんならがまた大きな溜息をついてそして立ち上がった

「どうしたんだやな」

コマが聞くと緊那羅きんならがガスコンロを止めて鍋のふたを閉めた

「私にもよくわからないんだっちゃ…はあ…」

鍋のふたの取っ手に両手を添えて緊那羅きんならがまた大きな溜息をつく

「でもなんだか…溜息ばかりでるんだっちゃ…」

顔を上げた緊那羅きんならがまた溜息をつく

「幸せが逃げるんだやな」

イヌが言う

「溜息はしちやだめなんだやな」

コマも言う

「…はあ…」

「言ってる傍からしないで欲しいんだやな…」

緊那羅きんならがまた溜息をつくといヌが突っ込む

「本当：なんなんだっちゃ：」

緊那羅きんならが肩を落としてまた溜息をついた

「あ、今カサツつーた」

京助が言う

「アンタ：耳掃除くらいちゃんとしなさい?」

母ハルミが京助の耳からゆっくりと引き上げた耳掻き棒の引っかかり部分にはこんもりの耳クソ

「昔は嫌がってたのにねえ」

こんもりの耳クソをティッシュにこすり付けて母ハルミが再び耳掻き棒を耳に入れた

「昔は：俺も若かった」

京助がフツと笑った

「何いってんの」

母ハルミが突っ込む

「相変わらず固い髪ねえ：」

母ハルミが京助の髪を撫でた

「生まれた時は本当に毛が生えてくるのかって思うくらいキューピーちゃんだったのにねえ」

「あのな；」

京助の髪をツンツン軽くひっぱって母ハルミが溜息混じりに言った
「本当：でっかくなっちゃって」

耳掻き棒が再びゆっくり京助の耳の中で動き出した

「いつかアンタも男になってお嫁さん貰ってくるのかしら」

「は?」

母ハルミが言うのと京助が少し上を向いた

「ホラ！ 動かないの!!」

京助の頭を掴んだ母ハルミがまた横を向かせる

「京助はアレよ? : アンタの父さん：竜之助みたくお嫁さん置いていっちゃダメよ?」

耳搔き棒を耳から抜きながら母ハルミが言う

「精一杯幸せにしてあげないと母さんが怒るわよ？」

「あんな；俺まだ14歳です母さん；」

母ハルミが言うのと京助が突っ込んだ

「あつという間よ：ついこの間まで抱っこできてたんだもの」

ふわっと髪に母ハルミの手が置かれそれがゆっくり動いた

「今じゃ膝枕くらいしか出来ないでしょ」

京助の頭を母ハルミがゆっくり撫でる

「アンタ：こようやって頭撫でるとすぐ寝てたのよ」

母ハルミが笑った

「寝ちゃった」

慧喜^{えき}がやんわり笑顔に向けた先には自分の膝の上で寝息を立てている悠助

「悠助ね頭撫でるとすぐ寝るんだ」

慧喜^{えき}が嬉しそうに言った

「安心するんだっちゃね」

緊那羅^{きんなら}が煙突の空調を調節しながら眠る悠助を見て笑った

「緊那羅^{きんなら}」

慧喜^{えき}が緊那羅^{きんなら}を呼んだ

「なんだっちゃ？」

緊那羅^{きんなら}が首をかしげた

「：難しいよね」

慧喜^{えき}が真顔で言った

「へ？；」

それに緊那羅^{きんなら}が疑問系の返事を返す

「義兄様甘えるのヘタだから」

「あ：えつと；」

慧喜^{えき}が俯いて悠助の髪を撫でた

「悠助と正反対：義兄様って」

モゾモゾと悠助が動く

「…だから緊那羅きんならが必要なんだよ義兄様には」

慧喜えきが顔を上げた

「でも…京助には沢山友達とか…私の他にも誰か…」

「馬っ鹿じゃない？」

緊那羅きんならの言葉を慧喜が切り捨てた

「緊那羅は一人しかいないんじゃない俺でも悠助でも緊那羅きんならにはなれないんだよ？　なんでわからないのさ」

慧喜えきが強く言った

「どうして置いていったんだよ義兄様を」

緊那羅きんならを慧喜えきが睨む

「置いていかれる辛さ…知らないんだろ…ッ…」

慧喜えきの言葉が詰まった

「どんなに心細いか辛いか悲しいか苦しいか…っ」

俯いた慧喜えきの言葉に嗚咽が混ざり始める

「慧喜…」

緊那羅きんならが慧喜えきの顔を覗き込もうと膝をついた

「俺は…もう嫌だ…」

慧喜えきが鼻を吸りながらいった

悠助を起こさないためなのか声を押し殺して涙を流す慧喜えき

「慧喜…」

そんな慧喜えきを緊那羅きんならがおろおろしながらただ見ている

「緊那羅きんなら…俺はね…捨てられたんだ…宝珠に選ばれた瞬間に」

慧喜えきの肩に伸ばしかけていた手を緊那羅きんならが止めた

「また来る…俺が聞いた最後の親の言葉」

慧喜えきが小さく言った

「でも来なかった…俺はずっと待っていた…」

鼻を吸った慧喜えきが赤い目をして顔を上げた

「来てくれたのは…お二方だった…」

「矜羯羅と…制多迦…？」

緊那羅が言うきんならと慧喜えきが頷いた

「初めは恐れ多くてロクに話もしなくて…でもお二方はずっと傍にいてくれて…」

慧喜えきが微かながら微笑んだ

「お二方はね…俺の中で失礼かもしれないけど『親』なんだ…俺にとつての」

悠助の頭を撫でて慧喜えきが言う

「だから…お二方が悠助や義兄様に構うのが俺は嫌で…あんなことしたんだよ…」

慧喜えきが言うあんなこと

悠助と京助…【時】の鍵となる二人を消そうとしたこと

「俺さ…【時】は来なくていいと思うけど…【時】がなければ悠助にも出会えなかったんだって…思う」

【時】という言葉に緊那羅きんならが慧喜えきを見た

「緊那羅だつて…【時】がなければここにはいない…全ては【時】なんだよね…」

慧喜えきが静かに言うえきと悠助がもぞつと動いた

「親が俺を捨てた原因の宝珠も【時】が生んだもの…」

緊那羅きんならが自分の腕を見た

「【天】じゃ宝珠持ちはどう思われてるか知らないけど【空】ではね…禍々しいものと恐れられてるんだ…だから俺の親は俺を捨てた」
慧喜えきが自分の左中指についている宝珠を見た

「恐れとソレを避けるための崇拜…それが【空】での宝珠持ちへの応対…」

緊那羅きんならが顔をしかめた

「宝珠…」

ボソッと緊那羅きんならが呟く

「どうしてこんなモノが生まれたのか…って俺は何度も宝珠を捨て

ようとした…でも…」

「でも…？」

少し間を置いて緊那羅きんならが慧喜えきに言う

「誰のため何のためにこの力があるか…考えて俺なりに答えを出した」

慧喜えきが緊那羅きんならを見た後ふっと笑って悠助を見た

「俺はこの力…悠助を守る…ただそれだけのためにあるって…答え」
小さい声で言った慧喜えきの言葉に緊那羅きんならがまた自分の宝珠を見てそして唇をキュッと噛んだ

「俺は…悠助を守るよ…」

時刻はとくに晩飯の時間をすぎていた

「…遅いっちゃね…京助もハルミママさんも」

先に済ませた悠助えきと慧喜きんならも緊那羅きんならと一緒にって時計を見た

「ゴ等がみてくるんだやな」

イヌが伸びをして言った

「私が行って来るっちゃ」

そのイヌの横を緊那羅きんならが素通りして戸をあけた

「寒いよ？ 緊ちゃん」

悠助が緊那羅きんならを見上げた

「大丈夫だっちゃよ；すぐソコだし…」

一瞬うつという顔をした緊那羅きんならが今度は苦笑いを悠助に返した

「まだ吹雪いてるから気をつけるんだやな」

ストーブの前でゴロゴロしながらコマが言う

「わふ；」

玄関を開けた瞬間 緊那羅きんならの全身に浴びさられたのはほんのり磯の香りが混ざった雪と風

「っ；」

キッと気合を入れた顔をして緊那羅きんならが足を進めた
社務所には明かりがついていなかった

「…あれ…?」

首をかしげながらも戸を開けた緊那羅きんならが中に入る

「靴は…二人ちゃんとあるっちゃ…」

無造作に脱ぎ捨てられた靴と揃えられた靴を見て緊那羅きんならが社務所の廊下の奥を見るとユラユラとほんのり暖かな明かりが見えた

ギシッと音を立てた廊下に少しびくつきながら緊那羅きんならが明かりを指し足を進める

少しレトロなガラス戸の向こうに見えたのは何かを見下ろして優しく微笑んでいる母ハルミ

その下はガラス戸の模様でよく見えなかった

「…緊ちゃん？」

気配に気づいたのか母ハルミが緊那羅きんならのいるガラス戸を見た

「あ…はい」

緊那羅きんならが少し驚いた後返事をした

「寒いでしょう？ ホラ入ってきなさい」

母ハルミが手招きをすると緊那羅きんならがガラス戸を開けた

「あ…京助…」

緊那羅きんならがガラス戸を閉めながら目に入った母ハルミの膝枕で寝息を立てている京助に気づいた

「寝ちゃったの」

母ハルミが笑った

「ああ…だからこれなかったんだっちゃね」

納得というカンジに緊那羅きんならが笑った

「あらもうそんな時間？」

母ハルミが体を捻って壁に掛けてある時計を見た

「京助起こすっちゃ？」

緊那羅きんならが聞く

「…もう少ししたら…にしようかしら」

少し考えて母ハルミが言う

「悠助も…慧喜えきに頭撫でられてさっきまで寝てたんだっちゃ」

京助の寝顔を覗き込んで緊那羅きんならが言う

「やっぱり兄弟ってそんなモンなのかしらね」

母ハルミが京助の髪を撫でた

「…安心できるんだっちゃね」

緊那羅きんならが京助の寝顔を見て微笑んだ

「何年ぶりかしら…京助に膝枕するのって」

母ハルミが言った

「してなかったんだっちゃ？」

緊那羅きんならが聞く

「少なくとも…悠ちゃんが生まれてからは…してなかったと思うわ」
母ハルミがゆっくり京助の髪から手を離れた

「悠ちゃんが生まれて竜之助がいなくなって…」

静かに母ハルミが言う

「この子には『お兄ちゃんなんだから』って言葉でずいぶん我慢してもらったの」

苦笑いで母ハルミが緊那羅きんならを見た

「だからなのかしら…妙なところで大人で妙なところで子供で…甘え下手になっちゃって…」

黙ったまま緊那羅きんならが母ハルミの話しを聞く

「私ね…京助が泣いたところってあんまり見たことないのよ…」

「え…？」

母ハルミの言葉に緊那羅きんならが京助を見る

「その様子じゃ緊ちゃんは見えたことあるのね」

母ハルミが言うきんならと緊那羅が躊躇いながらも一回頷いた

「自分がしつかりしなくちゃ、お兄ちゃんだから泣いちゃダメなんだってきつと今でも思ってるんだと思うわ…昔のまんま」

母ハルミが京助の母を軽く突付いたが一向に京助には起きる様子がない

「昔の…まんま…」

緊那羅きんならがボソツと言う

「：馬鹿だけど：いい子に育ってくれてまあ：」

母ハルミが嬉しそうに言った

「ねえ：緊ちゃん：男の子にこんなこと言うのはおかしいと思うけど聞いて頂戴」

母ハルミが緊那羅きんならを見た

「母になるって凄く幸せなの」

「母：」

「そして母でい続けることはもっと幸せでね」

間に緊那羅きんならの眩きを挟んで母ハルミが話す

「京助と悠ちゃんがいる限り私は母でそれはずっと嬉しいことだね：」

ストーブの灯りだけの部屋の壁にユラユラと二つの影が揺れる

「守りたいの」

母ハルミが静かに言った言葉に緊那羅きんならが顔を上げる

「ハルミ：ママさん：」

「時だかなんだか知らないけど：幸せを守りたいって思うのは私だけじゃないと思うわ」

母ハルミが言う

「私の幸せは京助と悠ちゃんと：そして」

母ハルミの手が緊那羅きんならの頭に伸びた

「みんながいること」

緊那羅きんならの頭を撫でながら母ハルミが微笑んだ

「誰が欠けても幸せになれないわ」

「私も：っ」

緊那羅きんならが声を上げた

「私も：守りたいっちゃ：幸せ：」

少し驚いた顔をした母ハルミがまた微笑んだ

「：京助は私を守ります」

緊那羅きんならがまっすぐ母ハルミを見た

「でも無理はしないのよ？」

母ハルミがあっけらかんと言った

「え…っ；」

「そんな力まないで」

思わず立ち膝になっていた緊那羅きんならにカラカラと笑いながら母ハルミが言う

「ありがとうね緊ちゃん」

少し照れながら座りなおした緊那羅きんならに母ハルミが言った

「竜之助はみんな知ってたのかしら」

ふと母ハルミが言った言葉に緊那羅きんならが顔を上げた

「あの…えっと…たぶんだっちゃけど…」

緊那羅きんならがしどろもどろしながら言う

「やっぱり…知ってたのね…」

母ハルミが俯いた

「ハルミママさん…」

「っ…あんのたくらんけ——————ッ!!!!」

俯いた母ハルミの肩に手を置こうとした緊那羅きんならがいきなり叫んだ母ハルミに目を丸くして手を引っ込めた

外でドササツと屋根から雪が落ちる音が聞こえた

「はー!!　もう!!　腹立つたらありやしないッ!!　目玉焼

きは完熟じゃないと食べないとかトイレの水を流さないとかのレベルじゃないわ!!　っともう!!」

「は…るみママさん?」

怒鳴り散らす母ハルミを緊那羅きんならがおろおろしながら見る

「京助のオシメ取り替えてっっても取り替えたままでズボンはかせないし…ッ!!」

「…あの…」

「あーもう!　生きてるんなら一回くらい顔出しなさいよ!!　ねえ!？」

「ハイッ！！！；」

眉を吊り上げて母ハルミが言うきんならと緊那羅が背筋を伸ばして返事をした
「そして説明しなさいってのよ！！ どうして生きてるのか！」

なおも母ハルミが声を上げる

「つとにッ！！」

「…どーどー…；」

フンッと鼻息を出した母ハルミの肩をポンポンと京助が叩いた

「あら起きたの」

京助を見て母ハルミが言う

「あんだだけでつけえ声だしやいくら俺でも起きるわ；」

京助が体を起こした

「おはようだっちゃ」

きんなら緊那羅が言う

「…おす」

京助が頭を掻きながら返した

きんなら「緊那羅に怒鳴ったって仕方ねえじゃん；」

「それはそうだけど…そうよねえ；」

京助が突っ込むと母ハルミが苦笑いを浮かべた

「でもま…俺も一回は見てみたいかな」

京助が言う

「思い出せないっていうの…やっぱ何かあるんだろうな」

京助がきんなら緊那羅を見た

「あ…えと…私は…ごめんだっちゃ…」

きんなら緊那羅が俯く

けんだっぱ「鳥類や乾闥婆は絶対教えてくれねえだろうけど…」

京助が溜息をついた

「…竜は…迦楼羅かるら以上の力を持つ…【天】の要のような存在だった
って…聞いたことがあるっちゃ…でも変わった志向を持って上からは目の敵にされていたって…」

きんなら緊那羅が小さく言った

「あの竜之助が？」

母ハルミが信じられないという顔で言う

「ナメコをのっこり入れた味噌汁出したら半べそかいた竜之助が？；

」

「：はい？；」

母ハルミが言うのと京助と緊那羅きんならがハモった

「あ、竜之助ねナメコ大ッ嫌いだったの」

母ハルミがチョイトという手付きをして笑いながら言った

「：ナメコ：；」

京助が口の端をあげた

「ナメコって：あのヌルヌルしたキノコだっちゃ？」

緊那羅きんならが京助に聞いた

「んだ；」

京助が口の端をあげたままで答えた

「悠助大好きじゃなかったっちゃ？；」

緊那羅きんならが再び聞く

「：まあ：な；」

京助が再び答えた

「ヌルヌルしたのが大嫌いでねー：ナメクジ一匹に対して鷲掴みにした塩をかけたこともあったわー：」

母ハルミが言う

「：なんだか：全然弱そうに思えてきたっちゃ；」

緊那羅きんならが呟く

「弱かったわよ？」

母ハルミがさらっと言った

「だからさっき驚いたの：要っていったじゃない？」

母ハルミが言うのと緊那羅きんならが頷いた

「でも：強いって：みんな言ってるんだっちゃ； 宝珠も：」

ソコまで言って緊那羅きんならがはっとして口を閉じた

「宝珠：やっぱ父さんも宝珠あったんだな」

京助が緊那羅きんならを見た

「…あ…う…ん…最高位の宝珠を持っていたらしいっちゃ」

「らしいかよ；」

緊那羅きんならが言くと京助が突っ込んだ

「私も阿修羅あしゅらから聞いただけ…だ…っっちゃし…私は直接竜に会った事はないんだっちゃ；」

所々躊躇いながら緊那羅きんならが言った

「初めてあったときから変わったやつだとは思ってたけどねえ…」
フツと母ハルミが笑った

「そういや…どうして母さんと父さん…どうやって出会ったんだ？」

京助が聞くと緊那羅きんならも母ハルミを見た

「聞きたい？」

母ハルミが笑った

「あ…まあ…」

京助が頭をかきながら言う

「じゃあ…家で話すわ。お腹減ったしね」

母ハルミが立ち上がってストーブのスイッチを切った

「初めて竜之助を姿を見たのは私が小学生の時」

カレーの盛られた皿にスプーンをさして母ハルミが話し始めた

「小学六年生のとき…の夏休みだったかしら」

ウズラを口に運びながら母ハルミが言う

「ずんぶ昔だなあ；」

京助がカレーを口に運びながら言った

「たまたま友達がラジオ体操休んでね。私が一人で待ってた時に変な格好した人が黙って私を見ててね…それが竜之助」

「変…」

京助が緊那羅きんならを見た

「なんだっちゃ；」

緊那羅きんならがスプーンをくわえたまま京助を見返した

「お父さん変なの？」

風呂から上がった悠助が言った

「竜は変わってたって聞いたことある」

同じく風呂上りの慧喜えきが悠助の頭をタオルで拭きながら言った

「しばらく私の竜之助も動かないまま黙って見ていて…友達が来て振り向いたらもうソコにはいなくてね」

母ハルミが言う

「そして次にあったのが中学一年のやっぱり夏休みでね…その時初めて声をかけられたの」

「ほ…なんて？」

京助が聞いた

「いい天気だね」

「…いつの時代のナンパだ；」

京助が肩を落とした

「で…？　なんて返したんだ？」

京助が聞く

「たしか…昼から雨だったかしら？　そしたら困ったなーって言うもんだから…家に来る？　っていったの」

母ハルミが言った

「で…なんか知らないけどそれからずっといたのよ」

「は…？」

母ハルミの言葉に京助を緊那羅きんらが声を揃え慧喜えきを悠助はきょとんとした顔で母ハルミを見た

「住み着いてたわけじゃないんだけど…気づいたら境内とか木の上とか…私の隣とかにいつもいてね…なじんだの」

母ハルミが笑った

「私の父さん…ジジちゃんとババちゃんが高校の時にいなくなっても竜之助だけは側にいてね」

左手を撫でながら母ハルミが言う

「奥の部屋にしまってたあの布と一緒に私を抱きしめてくれた

の」

母ハルミが幸せそうに笑った

「で…ゴールイン？」

京助が聞く

「そ。そしてアンタが生まれて悠ちゃんが生まれたの」

話し終えた母ハルミが京助と悠助を見て頷いた

「…なんか」

京助がボソツと言った

「…まともに父さんの事…初めて聞いた」

「そりゃそうでしょ初めて話したわよ竜之介のことなんて」

京助が言うと母ハルミが即答した

「俺…七年…くらいは一緒にいたんだよね？」

京助が母ハルミに聞く

「そうね…悠ちゃんが生まれて…そんなもんかしら」

母ハルミが答える

「でも…私も変なのよね…私の中では…竜之助はしんでの…確かに…でも生きてるの…よね？」

母ハルミが緊那羅を見た

「えっ；…あ…そう迦楼羅かるらが言ってたっちゃし…」

いきなり話を振られた緊那羅きんならが焦りながら答えた

「どうしてこんなに記憶があやふやなのかしらね」

母ハルミが溜息をついた

「…俺どうして父さんの記憶ないんだ？」

「私に聞かれても；」

京助が緊那羅きんならを見て聞くと緊那羅が苦笑いを浮かべた

「僕…」

悠助が小さく言葉を発した

「僕は…お父さん知らない…」

悲しそうに悠助が言う

「俺だつて知らんがな；」

京助がしゅんとなつてゐる悠助の頭に手を置いた

「悠助：俺が知つてゐるだけでいいなら竜：悠助と義兄様の親のこと
教えてあげるよ」

悠助の頬にキスしながら慧喜が静かに言つた

「慧喜：うん：」

悠助が嬉しそうに慧喜に頬刷りする

「ツて言つても：前の【時】の時の話になるんだけどね：」

「前の：」

「【時】：」

慧喜の言葉に続いて京助と緊那羅がいった

「俺が見た竜はハルミママ様が言うようなヤツじゃなかったよ。四
枚の羽根を持つて四本の角があつて：」

「ちよつと待て；」

慧喜の話に京助が手を前に出してストップをかけた

「何義兄様？」

慧喜がきよとした顔で京助を見た

「角に羽根つて：何者？；」

「竜」

京助の質問に慧喜がさらつと答えた

「いや：ハイ；　ワカリマシタ；」

何のためらいもなくさらつと答えをもらつた京助が引つ込んだ

「：悠助より少し濃い目の緑の髪を長く編んで：ただ一人　制多迦

様と互角に：」

「制多迦？；」

慧喜の言葉にまた京助が突つ込んだ

「アイツ：つええの？」

「うん」

京助が聞くと慧喜がまたさらつと答えて頷いた

「人は見かけによらないわねえ：本当」

母ハルミが笑う

「制多迦様は…でも…あの制多迦様は俺の知ってる制多迦様じゃないんだ…」

「慧喜の知らないタカちゃん？」

小さく言った慧喜に悠助が聞いた

「何それ；　なんだか聞いてて本当こんがらがるんですけど…」

京助が口の端をあげて言う

「とにかく竜は強いんだ…ううん強かった」

慧喜が言い直した

「最高位の宝珠を持ってた」

慧喜が言うと緊那羅がハツとして自分の腕についてる宝珠を掴んだ

「最高…ほ…：やっぱソレで階級とかきまるん？」

慧喜に聞く京助を緊那羅が見た

「あるよ。どうやって決まってるのかわからないけど…赤、金が最

高だって」

「…慧喜…」

慧喜が言うと緊那羅が小さく慧喜の名前を言った

「…だよね緊那羅」

何かを隠しているのを隠すかのように慧喜が緊那羅にふった

「あ…そうだっちゃ確か」

緊那羅がソレを感じ取ったのか頷く

「竜の持ってたのは金」

慧喜が言うと京助が何か変なことを思いついたのか一瞬止まった後顔をそらした

「…母さんアンタが言おうとしてることわかるのがいま少し悲しいわ」

母ハルミが言った

「わかった私もなんだか悲しいっちゃ…」

緊那羅が溜息をつく

「きんたま？」

「ナイス悠」

京助が言わなかった言葉を悠助が笑顔で言った事に京助が親指を立てた

「…悠助が言うとは下品に聞こえないのが不思議だっちゃ」

緊那羅きんならが京助を見て言う

「どーゆーこってすか緊那羅さんきんなら」

「まんまよまんま」

京助が緊那羅きんならを見て聞くと母ハルミが言った

「うんそのまんまだっちゃ」

緊那羅きんならも頷く

「とにかく…竜は強かったんだよ…変わってたらしいけど」

慧喜えきが言った

「そんなに変わってたのか？」

京助が慧喜えきに聞く

「うん…なんかね…【時】を…【時】が来るのがおかしいって言っ

て上に逆らったとか…したらしいよ」

慧喜えきが悠助の頭を撫でながら言った

「…でも俺も今は竜の考えに賛成なんだ」

顔を上げた慧喜えきが言った

「どうして【時】が来なきゃダメなのか【時】なんか来なければいいって思ってる…」

「慧喜えき？」

自分を抱きしめる慧喜えきの腕に力がこもったのがわかったのか悠助が

慧喜えきを見上げた

「悠助と…義兄様に出会ってから」

慧喜えきが京助を見た

「俺は別に何もしてえねぞ；」

見られた京助が手を顔の前で振った

「私もだっちゃ京助」

緊那羅きんならも言った

「私も：前にも言ったけど京助と悠助に会ってから：【時】までじやなく：【時】から京助を守りたくなっただっちゃ」

緊那羅きんならがまっすぐ京助を見た

「いや：あの：あゝ：？；」

緊那羅きんならから目をそらしながら京助が頭を掻いた

「お願いだっちゃ京助：私に守らせて欲しいっちゃ：」

緊那羅きんならが畳に両手をついて頭を下げた

「竜の分も：守るからッ：」

そんな緊那羅きんならを京助がぎよっとした顔で見てそれから溜息をついた

「京助」

母ハルミが京助を呼んだ

「：緊ちゃん」

そして今度は緊那羅きんならを呼ぶ

「馬鹿息子をよろしくね」

「なっ！？；」

母ハルミが笑顔で緊那羅きんならに言うとき京助が声を上げた

「ハルミ：ママさん：」

顔を上げた緊那羅きんならが母ハルミを見る

「でもさっきも言ったけどあんまり力まないで」

母ハルミがにっこり笑った

「慧喜えきちゃんも悠ちゃんをよろしくね」

「うん！！」

慧喜えきにも言うとき慧喜えきが大きく頷いた

「俺なんだか嫁がされてる気分なんですけど母上；」

京助が言う

「アンタはいつから嫁にいける体になったの」

母ハルミが突っ込む

「：いやしっかりいけない体ですが；」

京助が自分の股間に手を置いて言う

「俺は悠助に嫁ぐ」

「うん」

慧喜^{えき}が悠助を抱きしめて言うのと悠助が嬉しそうに返事をした

「緊ちゃん」

ぽかんとしている緊那羅^{きんなら}に母ハルミが声をかけそして微笑む

「…はいっ」

緊那羅^{きんなら}が嬉しそうに返事をして笑った

「俺ハルミママ様みたいなお母さんになる」

慧喜^{えき}が悠助をぎゅっと抱きしめて言った

「あら嬉しい」

母ハルミが笑う

「ねえ慧喜^{えき}」

悠助が慧喜^{えき}を見上げた

「子供ってどうやって作るの？」

和やかなホノボノ空気がピシッと固まった

「今日作る？」

「うん！」

「コラコラコラコラ！！！」

何の戸惑いもなく慧喜^{えき}が聞くと悠助が満面の笑みで返事をして京助がそれに突っ込む

「何さ義兄様」

慧喜^{えき}がブーッと膨れて京助を見た

「慧喜^{えき}…」

緊那羅^{きんなら}が苦笑いで慧喜^{えき}を見た

「ねえ京助、子供ってどうやって作るの？」

悠助が今度は京助に聞いた

「…あー…しゃあねえなあ…緊那羅^{きんなら}」

京助が緊那羅^{きんなら}を呼んだ

「なんだっち…わっ」

「まごっちょ；落ち着いてくりやれ：ッ；」

阿修羅あしゅらが吹っ飛んできたツボのようなものを避けながら言った

「俺は知らないぞ：緊那羅」

上から下まで黒く長い衣装を纏った後姿が言う

「いい加減 緊那羅きんなら離れしたらどうですか？」

阿修羅の少し後ろで乾闥婆が言った

「うるさいッ！！」

「どあっ！；」

怒鳴り声とともに今度はなにやら壁掛けらしきものが吹っ飛ぶ

「緊那羅きんならは宝珠をもったんだろう！？ ならどうしてコッチに帰っ

てこない！？ どうしてアッチに行ったつきり：戻ってきたと思え

ば：もういない：」

阿修羅あしゅらに【まごっちょ】と呼ばれた黒尽くめの人物がうなだれた

「緊那羅きんならは自分の居場所を見つけたんです」

乾闥婆けんたつばが言う

「竜のボンがいるトコ：か」

「：栄野京助」

阿修羅あしゅらがボソツと言うとまごっちょが京助の名前をフルネームで言

った

「あ、そうそうまごっちょ：竜のボンになんかしたら緊那羅きんならがひ

っぱたくっていったん」

阿修羅あしゅらがぽんと手を叩いて言うともごっちょがびくつと体をすくま

せた

「：ひっぱたく：？」

「おうとも」

まごっちょが小さく聞き返すと阿修羅あしゅらが大きく頷いた

「緊那羅きんならが俺を：」

まごっちょがフルフルと震えた

「…ヤレヤレ；」

阿修羅^{あしゅら}が溜息をつく乾闥婆（けんたつぱ）もその後ろで大きな溜息をついた

午後九時半を指した時計が尚も時を刻む茶の間にほのかに香る消毒液のにおい

頭にタオルを乗せた京助の視線の先には足に包帯を巻く緊那羅^{きんなら}

「…痛いっちゃ？」

「うんにゃ」

包帯の巻き加減を聞いた緊那羅^{きんなら}に京助が答える

「昼間は痛かったけどな」

京助が鼻クソをほじりながら言った

「京助…」

しばらく間を置いて手を止めた緊那羅^{きんなら}が俯いたまま京助を呼んだ

「何だ？」

フンツと鼻息を出しながら京助が返事をした

「……」

京助の返事に緊那羅^{きんなら}の返事はなく

「…何だっつーの；」

京助が言いながら緊那羅^{きんなら}の頭を突付いた

「膝枕…」

「は？」

緊那羅^{きんなら}が小さく言う京助が聞き返す

「膝枕なら私にもできるっちゃ」

「は？；」

顔を上げていった緊那羅^{きんなら}に今度は京助が疑問系で聞き返した

「ハルミママさんにはなれないっちゃけど…でも膝枕なら私にも出来るっちゃ」

間抜け面した京助の頭からタオルが落ちた

「…何言ってんだお前；」

京助が言う

「：私の前ではわがままでもいいっちゃ：だから我慢しないでいいんだっちゃ」

緊那羅きんならが言った

「我慢って：何をだよ；」

包帯巻きたての足であぐらをかいて京助が聞く

「京助は私が守るっちゃ：体はもちろん心も」

京助をまっすぐ見ながら緊那羅きんならが言う

「：あのな：俺は別に我慢なんてしてねえし：それに…」

「私が男でハルミママさんじゃないからだっちゃ？」

京助が言い終わらないうちに緊那羅きんならが言った

「私は京助の全部を守りたいんだっちゃ」

緊那羅きんならが真顔で京助に言う

「：なんでだよ」

間を開けて京助が緊那羅きんならを見た

「京助が京助だからだっちゃ」

それに緊那羅きんならが何の躊躇いもなく答える

「：ソレ答えか？；」

「そうだっちゃ」

京助が聞くと緊那羅きんならが即答した

「京助が京助じゃなかったら私は守りたくないっちゃ」

緊那羅きんならが微笑む

「：なんだソレ…」

京助が顔をそらして頭を掻いた

「私が京助を守りたい理由だっちゃ」

緊那羅きんならが言うとき京助が頭を掻いていた手を止めチラッと横目で緊那きん

羅ならを見た後 緊那羅きんならの膝めがけて頭を倒した

「：もう少し肉つけろ」

「悪かったっちゃねッ；」

「…さんきゅ」

京助がボソツと言った

「ねえ慧喜えき」

悠助が隣にいる慧喜えきを呼んだ

「何？」

慧喜えきが返事をする

「僕ねいいお父さんになるからね」

満面の笑みで悠助が言う

「そして慧喜えきといっぱい子供作るの」

寝ていた布団から体を起こして悠助が嬉しそうに言った

「悠助…」

慧喜えきが少し驚いたような顔をした後嬉しそうに微笑む

「俺…悠助に会えてよかった」

起き上がった慧喜えきが悠助を抱きしめた

「悠助…俺を置いていかないでね…」

「うん！！」

小さく言った慧喜えきの言葉に悠助が強く返事をした

「何とか言いなさい？」

母ハルミの声がした

「…まったく…明日ナメコの味噌汁供えてやるからね」

話しかけている相手は仏壇

置かれているのは中年の男女の写真と黒い位牌と火のともされた蠟

燭と線香

「生きてるなら…私がこうして元気なうちに会いにきなさいよ…」

答えの返ってこない位牌に母ハルミが話しかける

「私だけじゃなくヨシコちゃんも泣かせて…馬鹿野郎」

コイーン

母ハルミがリンを叩く棒で位牌を小突いた

「私におかえりを言わせて頂戴：」

どこからか入ってきた隙間風で蠟燭の火が揺れた

「何なさってるのですか——————！！！！」

「シート！！； ヒマ子さんシート！！！！；」

叫んだヒマ子に緊那羅きんならが慌てて言う

「今何時だと思ってるんだッ；」

京助も言う

「だッ：だだだだだだッてですけどッ！ 今ッ！！ ひ：ッ！！」

ヒマ子が青い顔で葉をプルプル震わせて二人を見る

「膝枕だっちゃ？」

緊那羅きんならが言う

「そうですわ！ 膝枕！！」

ヒマ子がびしっと葉を緊那羅きんならに向けた

「そういうことは妻がすることですわ！！」

「誰が妻だ； 誰の妻だ；」

ヒマ子が息を荒げて言うとき京助が突っ込む

「妻じゃなくてもいいと思うんだっちゃけど；」

緊那羅きんならがボソツと言うときヒマ子が緊那羅きんならに鋭い視線を向けた

「ソレは宣戦布告ですか緊那羅様」

「へ？；」

キラーンと光ったヒマ子の目

「：どうしてそうなるか；」

混乱してる緊那羅きんならの代わりに京助が突っ込む

「愛人から妻への宣戦布告ですわね：ッ！！」

「誰が愛人だ誰の愛人だ；」

おそらく聞く耳には言っていないであろうと思いつつも京助が言う

「私はただ京助を守りたいだけで：愛人とか：ってそういうのじゃ
：；」

緊那羅きんならが苦笑いで言う

「おだまりになったださいませ！」

ヒマ子がペシペシと葉で緊那羅きんならの頬を軽く叩く

「わかりましたわ：緊那羅様きんならがその気なら：」

「いや：だから私はその気だとか：っていうかなんの気だっちゃ？；」

「：知るか；」

一人の世界に入ってしまったヒマ子に小さく突っ込んでいた緊那羅きんならが疑問を京助に聞く

「私も考えがありますわ！！！」

「だから私は：；」

例えるならエースを狙えのヒロイン、ヒロミを見下すお蝶婦人の様にヒマ子が緊那羅きんならの前に立った

「あの：だから：；」

「：諦める；もうアカン；」

必死でヒマ子に何かを言おうとしている緊那羅きんならの肩を京助が軽く叩く

「京様！！！」

「はッ！？；」

いきなり名指しされた京助が自分を指差して驚く

「はつきりなさってくださいませ！！ 私と緊那羅様きんなら！ どちらの

膝枕をお求めですの！？」

ヒマ子が京助を見ると緊那羅きんならもチラッと京助を見た

「俺を巻き込むなよ：；」

京助が頭を抑えて溜息をついた

「さあ！！！」

ヒマ子が緊那羅きんならの隣に立って京助に答えを催促する

「：てか：ヒマ子さん膝ってどこだっちゃ？」

横に立っていたヒマ子の全身を見た緊那羅きんならが突っ込むとヒマ子が止まった

「…膝…」

ヒマ子が自分の茎を見る

「つか…横になっても土こぼれるからできねえんじゃねえ？」
更に京助が突っ込むとまたヒマ子が止まる

「…ヒマ子さん…?…」

数分間動かないままのヒマ子に緊那羅^{きんなら}が声をかける

「…ショックで氣イ失ってる…」

ヒマ子の顔の前で手を振った京助が言った

「…お前ももう少し肉つけろな」

「やかましいっちやッ!!…」

京助が緊那羅^{きんなら}を指差して言った

【第十回・参】タリラリタララ（前書き）

【神様の言うとおりに】どこの地域にもあるこの呪文のような言葉。
その後ろにつける言葉に緊那羅が悩まされてそして…

【第十回・参】タリタリタラ

「ど・れ・に・し・よ・う・か・な・て・ん・の・か・み・さ・ま・
の・い・う・と・お・り・に・し・ま・す・よ・な・の・な・す・び・の
かきのたねゝあぽへのゝぺっ!! これっ!!」

悠助がテンポよく歌いながら指を動かしてそして止めた

「ハイ! ハッズレ」

南が笑う

「むゝう」

悠助が膨れた

「んでコレとコレ…あっがり!!」

南が畳の上にあった四枚のトランプをめくってそして手持ちにする

「いやゝゝ久々にやると楽しいね神経衰弱!」

南がハッハと笑って手持ちトランプを数えだす

「てか【神様の言うとおりに】ってのもあったっけナア…たしかコレ
地域地域でちがうんじゃないかったか? こないだテレビでやってた」

中島が同じく手札を数えながら言う

「あゝ俺も見えた見た! たしかさゝ…【桜島ドカーン!】とか言う
のなかったか?」

坂田が言う

「あったあった!! 俺ソレお気に入り!」

数え終わった南が坂田を指差して言った

「…なんなんだっちゃソレ…ドカーン?」

ストーブの前を陣取っていた緊那羅きんならが聞く

「あのねゝコレはねゝ選ぶ時に使うの」

悠助が笑顔で言う

「選ぶ時?」

悠助の隣で慧喜が聞く

「そーホラ、よくあるじゃん? どれにしようか迷う時。そんな時に

歌っちゃうのがコレ」

南が答えた

「いろんなのあるんだっちゃ？」

緊那羅きんならが膝で歩いてきて聞いた

「神様の言うとおりでまではなんだかドコモわりと一緒にだけその後
が違うんだよ」

中島が答えた

「俺らは【なのなのなすびのかきのたねアポペノペ】だけどな」

京助が言う

「：最後のアポペノペってなんだっちゃ？」

緊那羅きんならが聞く

「：アポペノペ：」

南が繰り返して隣にいた坂田を見た

「：アポペノペ：」

坂田が悠助を見た

「アポペノペはねーアポペノペだよ緊ちゃん」

悠助が緊那羅きんならに言った

「あ：そうなんだ：っちゃ？：」

「うん」

いまいちよくわからない答えを貰った緊那羅きんならが納得いかないような
カンジで言うとう悠助が満面の笑みで頷いた

「：緊那羅きんならの【どうして？】には悠が使えるな：」

京助が口の端をあげて言った

「アポペノペ：」

3馬鹿が帰った後の茶の間で緊那羅きんならが小さく繰り返す

「お前ナア；」

そんな緊那羅きんならに京助が呆れたように言った

「だって：気になるんだっちゃッ！：」

緊那羅きんならが声を大きくして言う

「だから悠が言っただろ？ アポペノペはアポペノペだっつーの」
京助が側にあつたタマゴボーロを数個口に運んだ

「うあゝゝ；気になるっちゃゝ； かゆいゝ；」

緊那羅きんならが言う

「アポペノペくらいでんなに考えるなよ； 深い意味はないと思うぞたぶん」

口の中でタマゴボーロを溶かしながら京助が言った

「俺はその前の【なのなのなすびのかきのたね】の方が気になるぞゝなすびなのに何でかきのたねがでてくのかさゝゝ」

京助がまたタマゴボーロを口に入れた

「なのなのなすびゝアポペノペゝ」

緊那羅きんならがボソボソと繰り返す

「ゝ不思議な言葉沢山あるっちゃね」

少し間を置いて緊那羅きんならが呟いた

「そか？」

聞こえたのか京助が聞いた

「うんゝ言葉だけじゃないっちゃけどゝ物でもなんでもゝ」

緊那羅きんならが言う

「そりゃゝそうだろ俺だってこないだ【天】だか行つた時は回り全部不思議だったんだゝお前がコツチで不思議と思わない方が不思議だろ」

一個のタマゴボーロを指でつまんで転がしながら京助が言った

「まあゝそうかもだっちゃけどゝ」

緊那羅きんならが言う

「ゝアポペノペゝ」

「もうええっちゃゅーん；」

しばらく間を開けて緊那羅きんならがまた呟くと京助がタマゴボーロを緊那羅きんにぶつけた

テーブルの上に置かれた青い包みの四角い箱

「：やっちゃったっちゃ：；」

まだボサボサ頭の緊那羅きんならが溜息をついた

「珍しいわね緊ちゃんきんが寝坊なんて：何かあったの？」

母ハルミが洗い物をしながら緊那羅きんならに聞く

「昨日アポペノペが気になって気になって眠れなかったんだっちゃ；；　ゴメンだっちゃ；」

緊那羅きんならが謝る

「アポペノペ？　：何ソレ」

母ハルミが洗い物の手を止めて聞く

「えっと：何かを選ぶのに困った時に歌う歌の：最後：とか言ってたっちゃ」

緊那羅きんならが昨日きいたことを思い出しながら言う

「ああ！　神様の言うとおりね？」

母ハルミが笑った

「うん：；それで：このアポペノペの意味を考えてたら：つく：ふ

ああ」

緊那羅きんならがあくびをした

「弁当後から届けにいくっちゃ：」

のらくらと洗面所に向かいながら緊那羅きんならが言った

ぐきゅるるる：；

「うあ”　：：：～：；」

机に突っ伏して京助が腹を押える

「何？　今日は弁当ナシか京助」

浜本が京助の頭を教科書で叩く

「緊那羅きんならまた帰ったんか？」

隣の席の坂田が聞く

「：いや：いるけど：起きてこなかったんだよ：；」

京助が頭だけを動かして言う

「喧嘩か？」

浜本がしゃがんで京助の顔を覗き込んだ

「：なんもしてねえぞ俺；」

しばらく何かを考えた後京助が言う

「：なあ京助」

「あ？」

浜本が意味深な顔で京助に耳打ちしてきた

「ラムちゃんて：」

「京助――――！！ お客さん連れてきて
やったつぴょん――――！！」

ガラツと戸が開いてリコーダーを片手に持った南が大声で言う
と教室中が南の方に注目した

「ホレ」

南の後ろから顔を出した中島が手招きすると京助へのお客きんなら＝緊那羅
が現れた

「弁当！！」

ガタンッと立ち上がった京助が戸口へと走る

「ごめんだっちゃ；」

緊那羅きんならが謝りながら弁当を京助に手渡す

「寝坊したんだって？ ラムちゃん」

南がリコーダーで肩をトントン叩きながら緊那羅きんならに聞いた

「うん；」

緊那羅きんならが苦笑いで答えた

「：どうせアポペノペの意味とか考えてたんじゃねえのか？」

弁当に付属されていたおにぎりのアルミを剥がしながら京助が言う

「え？； なんてわかるんだっちゃ？；」

緊那羅きんならが聞く

「：マジか；」

冗談で言ったらしい京助が呆れる

「よかったでちゅねー京助君昼休み中に御飯届いて」

坂田がやってきて京助の頭を撫でた

「はゝゝいただきますおにぎりさん…」

京助が目を閉じて言うとおにぎりにかじりついた

「うらやますいーな京助ゝ」

どこからか戻ってくる生徒がからかい気味に京助達に声をかけていく

「彼女に弁当届けてもらってさゝ」

「…彼女? ; ;」

掛けられた言葉に京助が緊那羅きんならを見る

「かの…じよかあ」

中島が同じく緊那羅きんならを見る

「まあ…見えるよな」

坂田が頷く

「へ? ; ;」

マフラーを巻き直していた緊那羅きんならが首をかしげた

「すっかり【京助の彼女】で定着だねえ【かのじよ】で」

南が彼女のじよの部分強調して言う

「いんでない? じよでこの際」

「んだな」

中島が言うと南と坂田が頷いた

「箸折れると思うけど」

本間が雑誌をめくりながら言う

「なっ… ; ;」

その本間の言葉に阿部が驚く

「彼女ねえ」

本間が言うと阿部がぴくつと反応した

「…何よ」

そしてジト目で本間を見る

「別に?」

そんな阿部に本間がにっこりと笑顔を返した

「今日五時間だから待ってりゃいいじゃん」

帰ろうとしていた緊那羅きんならに坂田が声をかけた

「あ、そうそうそうしなよラムちゃん！俺ら次音楽だから教室にいないからさ」ストーブもついてるしあったかいっちゃーん」

南がリコーダーを軽く回しながらいった

「え…； でも…；」

緊那羅きんならが手づかみで弁当を食っていた京助を見る

「いんじゃない？」

ペロっと指を舐めた京助が言う

「一時間待ってられるなら」

くいつと口を拭った京助が教室の中に歩いていった

「俺の席ストーブのすぐ近くだからさ」

京助を目で追っていた緊那羅きんならに南が言う

「見つかったも別に怒られんの京助か俺等だし」

中島が言う

「でもホラ、祭りん時結構顔知れてるから…」

坂田が言った

「戦う彼女として」

「はっ！？；」

坂田の言葉に中島が笑いながら付け足すと緊那羅きんならが素っ頓狂な声を出した

「誰の彼女だ；」

戻ってきた京助が中島の尻を叩いた

「イトコだろ？　なあ坂田君？」

京助が笑顔で坂田に言う

「…京助君…関係はいつも進化するものだよ…」

そんな京助に坂田がエセっぽい爽やか笑顔で肩を叩いた

「昨日のイトコは今日の彼女…それもまたくじんせえい」

後半を美空ひばりの名曲に変えながら南が言う

キーンコーンカーンコーン：

「あゝあゝ川の流れのよおゝにいゝゆうるうやあかにいゝ」

昼休み終了5分前のチャイムとハモリながら3馬鹿が歌う

「てことで後ろから二列目の廊下から参列目が俺の席だからラムちゃん」

南が後ろ歩きしながら言った

「あ：うん」

緊那羅きんならがどもりながら頷いた後京助を見た

「：いんじゃね？」

頭を掻きながら京助が言う

「廊下側だからあんま外から見えねえし：眠いなら寝てりゃあつと
いう間だし」

2組の戸を開けながら京助が言った

もう皆音楽室に出向いたらしい2組の教室の中に恐る恐る入った緊き那羅んならが教室を見渡した

「ここが南の席で：そっちが中島。好きな方に座ってろ」

南の席の椅子を引いて京助が言う

「じゃあ：こっち：」

緊那羅きんならが南の席に歩いてきた

「授業終わったらくっから」

そう言い残して京助が2組の教室から出て行った

「ラムちゃん帰ったん？」

戻ってきた京助に浜本が聞いた

「いんやゝ：南の席に座ってる」

京助が席について5時間目の授業国語の教科書を面倒くさそうに机の上に出した

「健気だねえ旦那の帰りを待つ妻：」

坂田が言う

「…また進化したんですか坂田君」

京助が口の端をあげて言った

「…俺チョイ保健室いつてくるわ」

浜本が立ち上がった

「行ってくるわって…もうすぐチャーリー（国語教師）くんぞ？」

坂田が言う

「なんか腹痛くてさ…； 出産してから保健室に直行してくんわ」

浜本が腹を撫でながら歩き出した

「…ありゃ仮病だな」

坂田が浜本の出て行った教室の後ろの戸を見ていった

「あからさまにそうだろ…； 誰でもわかるちゅーん」

京助が軽くゲップ混じりに言った

「まさかと思うけど…まさか…ナア…」

坂田がボソツと呟きながら京助を見た

「…なんだよ…」

京助が坂田を見返す

「…いや…たぶん違う…うん…； 違う違う！ ヨシッ！」

坂田が自問自答して一人納得した後大きく頷いた

チャーリー（国語教師）が3組の教室に入ったのを見ると階段脇

の掃除用具入れから浜本が出てきた

「きりーっ…」

号令が掛かりガタガタと椅子の音が聞こえる中浜本がそおと掃除用具入れの戸を閉め歩き出しそして2組の教室の後ろの戸の前に立った

「…落ち着け…； 落ち着け…」

ボソボソと自分に言い聞かせて浜本が戸に手をかけた

「…アレ…？」

ゆっくり開けた教室の戸の開いた部分から教室内を覗いたがソコには誰もいなく

「何の用だっちゃ」

「ヒッ!」

コツンと後頭部に固いものが当たり独特の話し方が聞こえた

「…あれ…? あなたは確か…京助の…」

止まった浜本の後頭部かに当たっていた固いものが離れ浜本がゆっくり振り返った

「ラ…ムちゃん?」

教室の中にいると思ってた緊那羅きんならが浜本のすぐ後ろに立っていた

「どうしたんだっちゃ?」

右手に持っていた武器笛を下げながら緊那羅きんならが浜本に聞く

「あ…や…ハハハ」

浜本が作り笑いをして緊那羅きんなら見た

「…と…とりあえず中はいろ?」

浜本が戸をあけて2組の教室の中に入った

「授業とかいうのもう終わったんだっちゃ?」

中に入った緊那羅きんならが戸を閉めながら聞いた

「いやまだだけど…ちよつと…」

ボソボソと言った浜本に緊那羅きんならが首をかしげる

「まだ…なのはどうしてあなたはここにいるんだっちゃ?」

緊那羅きんならが聞くと浜本が振り返って自分の頬をポリポリ掻きながら言葉を探す

「え…と…と… : サボリ」

そして小声で言った

「サボリ?」

緊那羅きんならがきょとんとして聞き返した

「あの…だから…あ…」

耳を赤くした浜本をきょとんとしたまま緊那羅きんならが見る

「ラムちゃんって…」

「へ?」

段々俯き加減になりながら浜本が何かを言った

「ごめん； 聞こえなかったっちゃ；」

聞き取れなかった緊那羅きんならが謝る

「だからっ； …ラムちゃんってその…京助の…」

「は？；」

また最後の方が聞き取れなかった緊那羅きんならが聞き返す

「あの…もう少し大きな声で…お願いするっちゃ； 私きんならが京助の？；」

緊那羅きんならが浜本に近付く

「だから…！！； …ッ！？；」

顔を上げたすぐ側に緊那羅きんならがいて浜本が固まった

「この距離ならたぶん聞こえ…って離れたら意味ないじゃない；」

緊那羅きんならから後ずさって離れていく浜本に緊那羅きんならが言おうと浜本が黒板めがけて駆け出しチョークを掴んだかと思うと勢いよく黒板に文字を書き出した

「え…」

黒板を見ていた緊那羅きんならが少し驚いた顔をした

「…そんなこと急に言われても私…；」

困った顔をした緊那羅きんならが言う

「だ…よね； あ…あはははは…ああ；」

浜本がわざとらしく笑った後溜息をついた

「ごめんだっちゃ…私…」

「いや！ いいって！ 謝らなくていいって； 俺のほうこそいきなり変なこと聞いてゴメン；」

謝った緊那羅きんならの言葉を止めて浜本が謝った

「馬鹿だよな俺…； 困るよね本当いきなりこんなこと聞かれちゃアさ…；」

浜本が苦笑いで言う

「う…ん…でも私…」

「もういいから！ 忘れて忘れて！；」

浜本がヒョイと教卓から降りてきた

「…本当馬鹿だよナァ俺；」

浜本がそう言ってチラッと見た黒板に書かれていた言葉

『京助の今日のパンツの色は何色？』

「そうだよねいくら一緒に暮らしてもおんなじ部屋じゃマズイも
んね； 着替えなんか見ないよな；」

浜本が黒板消しで文字を消しながら言った

「別にまずいことじゃないと思うんだっちゃんけど…部屋があま…」

ゴトツ

緊那羅^{きんなら}が言うと浜本が黒板けしを落してチョークの粉が舞った

「…えっと…一緒の部屋でもまずくない…の？；」

浜本が黒板消しを拾いながら聞く

「うん」

緊那羅^{きんなら}が首をかしげながらも頷いた

「そ…うなんだ； へー…一緒の部屋でも別にまずくないんだ；…；

」

浜本が棒読みで言う

「…あのさラムちゃん」

「なんだっちゃん？」

パンパンと手についたチョークの粉を払いながら浜本が緊那羅^{きんなら}を見た

「…京助のこと…ど…う思ってる？」

「どうって…いうのは？」

どもりながら聞いてきた浜本に緊那羅^{きんなら}がさらりと聞き返した

「どうって…いうのは…ホラ…好きとか嫌いとか…あんじゃん」

浜本が緊那羅^{きんなら}から目をそらしてボソボソと言った

「好きとか…好きとか…さあ；」

執拗に好きを繰り返す浜本をきよとした顔で緊那羅^{きんなら}が見る

「あの…」

緊那羅きんならが声をかけた

「つまりあなたは私が京助を好きかってこと知りたいんだっちゃ？」
緊那羅きんならが聞くと浜本が一気に赤面した

「あ…え…つと…そう…です；」

赤い顔の浜本が答えた

「好きだっちゃ」

「ベックショオッ！！！！；」

「汚ッ！！！！；」

「バッチィッ！！！！；」

教室中に響いた京助のクシャミに両隣の阿部と坂田が同時に飛びのいた

「手で押えなさいよ馬鹿ッ！！；」

阿部が怒鳴る

「風邪か？ 京助」

チャーリー（国語教師）が黒板の手を止めて振り返った

「誰か噂してんじゃねえの？」

坂田が言う

「ウワサねえ…まあ京助に対するウワサだからロクなことじゃないと思うけど」

阿部がずれた机を直しながら言った

「ホラ言うじゃない？ 馬鹿は風邪引かないって」

「てめ；」

阿部の言葉に京助が鼻を嚙りながら言う

「阿部に座布団三枚」

チャーリー（国語教師）が言った

「京助は大事だっちゃし…好きだっちゃよ」

固まっている浜本に緊那羅きんならが笑顔で言った

「私は京助を守りたいんだっちゃ」

おそらく聞こえてはいないであろう放心状態の浜本に緊那羅きんならが言う
「…そ…つか…はっは〜」

しばらく無言だった浜本があからさまな作り笑いをして顔を上げた
「アナタは京助が嫌いだっちゃ？」

緊那羅きんならが聞く

「俺？ …は…ってかあの…俺さ【浜本】…って名前」

浜本が自分を指差して言った

「浜本…だっちゃ？」

緊那羅きんならが言うと浜本が頷いた

「結構京助と一緒にいたじゃん？」

浜本が苦笑いで言う

「そう…だっちゃけど名前聞いたことなかったんだっちゃ； 浜本

…もう覚えてたっちゃ」

緊那羅きんならが笑顔で言った

「…っ…の…」

顔を赤くした浜本が顔をそらした

「…あのさ…ラムちゃん…」

少しためらいながら浜本が自分のポケットに手を入れた

「何だっちゃ？」

緊那羅きんならが返事をした

「…写真とらせてくんねえ？」

そう言いながら浜本がポケットから赤いデジカメを取り出した

「写真…って…このくらいの四角い絵みたいのだっちゃ？ こう…

ぴいすとかしてる…」

緊那羅きんならが前に悠助から聞いた【ピースは写真の時のポーズ】という話を思い出して指を二本立てた

「そうそう！！ …でもピースはしないで欲しいんだ」

浜本が緊那羅きんならの真似をして指を二本ピースにして言う

「え…しなくても写真とれるんだっちゃ？」

緊那羅きんならが少し驚いた顔で浜本を見る

「え…うん；　そうだけど…ラムちゃんもしかして写真撮ったこと
ない…？」

浜本が聞くと緊那羅きんならが頷いた

「そっか…そういうやラムちゃんって別なトコから来てるっていつて
たよな…」

浜本が祭りの時に起こった出来事を思い出したのか緊那羅きんならを見なが
ら呟いた

「なら丁度いいや！　一枚とらせてくんね？」

浜本がデジカメを構えた

「え…っ；」

緊那羅きんならが少し後ずさる

「大丈夫大丈夫一瞬だから…ハイ！　笑って」

「わっ；」

ピピンという音と共に明るく光ったフラッシュに緊那羅きんならが驚いて目
を閉じた

「あ…；　目え閉じちゃった；」

浜本がデジカメの画面を見て言った

「…なんなんだっちゃ…？；」

恐る恐る目を開けた緊那羅きんならが聞く

「写真とったの。ホラ」

浜本がデジカメの画面を緊那羅きんならに見せた

「え…私…？；　でも悠助の写真は四角い…薄かったっちゃけど…」

緊那羅きんならが手で四角を作って言った

「コレを現像したら四角くて薄くなるの」

浜本が笑って言う

「…へえ…；」

緊那羅きんならが再びデジカメの画面を覗き込んだ

「俺写真撮るの好きでさ…景色とか結構撮ってるんだ」
「そうなんだっちゃ？」

浜本が何気に言うきんならと緊那羅が顔を上げて浜本を見た

「写真って一瞬しか一回しかないものを残しておけるじゃん？」

浜本がデジカメを構ながら言う

「昔とか…だっちゃ？」

きんなら緊那羅が聞く

「そう！ もう二度と戻れない時を残しておけるしさ…俺はビデオとかより写真派」

ピピンという音がしてまたフラッシュが光った

「俺は好きなものをこうして写真に収めてんだ」

浜本が言う

「好きなもの…？」

「そう！ 好きな…」

きんなら緊那羅が聞くと浜本が言葉の途中で止まった

見る見る真っ赤になった浜本をきよとしたまま見るきんなら緊那羅

「好きなものを写真にとるんだっちゃ？」

きんなら緊那羅が聞くと意味もなく浜本が何度も頷く

「じゃあわた…」

「違うんだッ！！！」

何か言いかけたきんなら緊那羅の言葉を浜本が止めた

「俺はただ笑顔がッ！； だからあの俺はラムちゃんがッ！；」

「…へ？；」

「そう！！ あのだ！ 笑顔が好きで！ そうそう！！！」

浜本がやたら大きな声で言った

「やゝ！ 笑顔っていいよね！！ うん！！！」

「あの…；」

赤い顔で何度も頷きやはり意味もなく声を大きくして言う

「…あの…；」

「じゃ俺授業戻るからッ！；」

きんなら緊那羅の呼びかけを打ち消して浜本がソソクサと戸口に立った
「またねッ！」

「あ…;」

あからさまな作り笑顔を緊那羅きんならに残して浜本が2組の教室を出て行った

「…私にも写真の撮り方…教えて欲しかったんだっちゃけど…;」
浜本を呼び止めようとしたらしき緊那羅きんならの手が空しく宙をかいた

「あ、仮病人が帰還した」

坂田が後ろの戸から入ってきた浜本を見て言う

「いやゝ出産したらだいぶ楽になってさゝ」

「ずんぶふんばったんだなゝ顔真っ赤じゃん」

戸のすぐそばの席の男子生徒が言った

「そりゃもう難産で難産で…あ、でもケツは切れてません!!」

浜本が言うのアチコチから噴出したらしき笑いが漏れた

「わかったから早く席に着け」

チャーリー（国語教師）も笑いながら言った

「手洗ってきたか？」

「男の子？ 女の子？」

自分の席に向かう浜本に生徒達が面白がって聞く

「一本だったから男だな」

「何を基準にそれは決まるんだ」

浜本が言うのとそれに突っ込んだ言葉に教室中がドツと笑った

「旦那は誰だ？」

京助も笑いながら浜本に聞いた

「それは秘密です」

自分の席に座りながら浜本が答える

「真面目にウソコだったのか？」

坂田が斜め後ろの席に座った浜本にこそつと聞いた

「…:…:…:」

少し間を置いて浜本が答えた

「他にどこ行くっちゅーんだよ」

「まあ：そうだけど：：：うん；」

何かふに落ちない坂田が自分を納得させるためなのか少し考えた後
頷き前を向いた

「……」

浜本が自分のポケットをそつと触った後京助の後姿を見てそれから
教科書を机の上に出した

「いいか？　じゃ続きだ文法には……」

ようやく笑いと雑談が治まってきたのを見計らってチャーリー（
国語教師）が黒板に向かった

授業終了のチャイムがやはり雑音混ざりで正月中学校の校舎内に鳴
り響くと同時に二年三組の教室からは伸びとあくびそしてざわめき
が聞こえはじめた

「：：：終わった：：：んだっちゃ？」

二組の教室にいた緊那羅きんならが椅子のがたがたという音を聞いてひよい
と廊下に顔を出した

「：：：まだ誰も来ない：：：っちゃね：：」

再び体を引っ込めて緊那羅きんならは教室を見渡した

「：：：写真：：」

「写真？」

「うわ；」

突然聞こえた京助の声に緊那羅きんならが身構えたまま振り返った

「きよ：：うすけ；」

顔の前で構えた手を下げて緊那羅きんならが安堵の溜息をついた

「帰りのホームルームあるから先に玄関で待ってる二組も帰ってく
るし」

笑い声や雑談が廊下や教室から聞こえはじめる

「あ：：うん：：」

頷いた緊那羅きんならが廊下に出た

「逆逆！：：；」

「えっ；」

廊下に出たはいいが玄関とは逆方向に進もうとした緊那羅きんならを京助が呼び止める

「こっちだっちゃ？；」

「こっちだっちゃ；」

緊那羅きんならが振り返って方向を指差すと京助も真似をした

「校内で迷子になんなよな；」

「あははは；」

呆れる京助の横を緊那羅きんならが苦笑いで通る

「：あ、ラムちゃん」

本間が緊那羅きんならの姿を見て言う和阿部が顔を上げた

「：と栄野」

京助の名前をいいながら阿部を見る

「：何よ」

むすっとした阿部が本間を見返した

「別に？」

そんな阿部に本間がにこりと笑みを返す

「：別にアタシは：そりゃ：気になるけど：」

鞆に教科書一式を入れながら阿部がボソツと言う

「気にしなさい気にしなさい」

「ッ：！：！；」

本間が頷きながら言う和阿部が顔を赤くした

「緊那羅きんならは？」

席に戻ってきて教科書を机の上に一式出した京助に坂田が聞いた

「玄関で待ってるように言ってきた」

落ちたノートを拾いながら京助が答える

「やっぱ寝てたのか？」

鞆の止め具を止めて坂田がまた聞く

「突っ立って：写真がどうの言ってたん」

「しゃ……しん……ですか」

京助の返答を聞いた坂田がチラリと浜本を見た

「浜本」

椅子ごと移動して坂田が浜本の机の側にやってきた

「…お前まさかさつき二組にいたか?」

ドサッ

浜本の耳元で坂田がボソボソ聞くと浜本が鞆を床に落した

「な…ッ;」

口をパクパクさせて慌てる浜本を見て坂田が額に指をついて溜息を吐いた

「…大当たりかよ;」

「なんで知ってんだよッ;」

小声だけど怒鳴っているようなカンジで浜本が坂田に聞く

「俺は何でも知っている」

坂田が胸をはって言うと言ったと少し体を後ろにそらした

「一目惚れご苦労さん」

ポンポンと坂田が浜本の肩を叩いていると担任教師・通称ウニが教室に入ってきた

「緊那羅きんならは男だっっていただろが;」

坂田がボソボソと浜本に耳打ちする

「信じられッか!; あんなキラキラした男がどこにいる!!」

浜本が小声で怒鳴った

「…何してんだお前ら;」

鞆を肩にかけた京助が坂田と浜本を上から見下ろした

「ありん?; 帰りのホームルームは?;」

坂田が苦笑いで京助を見上げた

「終わったぞ?;」

京助の言葉に坂田と浜本が周りを見回すと生徒達が帰れる嬉しさで

キャツキャと話しながら教室を出て行っていた

「うっはー； 浦島太郎気分だねえ浜本君！！」

坂田が椅子をがたがた言わせて自分の席に戻ると鞆を持って立ち上がった

「なあ京助」

浜本が京助に声をかけた

「へいほ？」

京助が返事をする

「：やっぱいい」

少し間を開けて言った後浜本が立ち上がり歩き出した

「浜ちゃん； 鞆忘れてっぞー；」

京助が浜本の鞆を手に浜本の後を追いかけると坂田もそれに続く

「あ、旦那様ご登場」

玄関少し手前の角を曲がったところで南が手を振ってきた

「2組移動のクセに早かったんじゃねえ？；」

坂田が中島と南に言った

「音速の戦士と言ってくれ」

南がキラーンポーズで言う

「青いハリネズミか」

京助がそれに突っ込む

「南、中島ちよいカム」

坂田が南と中島を呼ぶと顔を見合わせた二人が首をかしげながら坂田の元に歩み寄った

「俺は仲間はずれですかーい；」

京助がジト目で3馬鹿を見た

「：帰りにスーパ―寄ってくのか？」

「へっ？； あ：うんできれば」

黙っていた緊那羅きんならに京助が聞くと緊那羅きんならが慌てて返事をする

「もしかしてお前まだアポペノペのこと考えてんのか？；」

京助が聞く

「アポ……ッ； 折角忘れてたのにまた思い出しちゃったじゃない
っっちゃかッ！……」

呟いてから声を大きくしながら緊那羅きんならが京助に言った

「気にしなせえ気にしなせえハッハ」

「阿呆ッ！……」

スパン！

エセ爽やか笑顔で頷く京助の頭を緊那羅きんならが軽快な音をさせて引っぱ
たいた

「……マジで？……」

中島と南がハモって聞くと坂田が頷いた

「あんなキラキラした男がどこにいるってさ」

坂田が言うとなと中島がゆっくりそおと振り返り緊那羅きんならを見た

「……まあ……ねえ……」

体を元に戻した南が眉を下げた笑顔で言う

「最初あったときはもうちょっとこう……男！……って感じだったんだ
けどナア……」

南より少し遅れて体に戻した中島も言った

「平和ボケ？」

南が言う

「……ありえる……」

坂田がメガネを光らせた

「ハルミさんの影響力ナア； すっかり栄野家の主婦……あ夫の方の
主夫ね？……になっちゃって……」

南が言う

「でもしつかりチンコはついてたし」

坂田が言うとなと三人揃って緊那羅きんならを見た

「……何か見られてるんだっちゃけど……」

三人の視線を感じた緊那羅きんならが3馬鹿を見返した

「お前に関する話を話してるっぽいなありゃ」

壁に寄りかかっていた京助が口の端をあげて言う

「私?;」

そんな話をされることに覚えのない緊那羅きんならが驚いて自分を指差した

「:でもこうみると立派なカポーに見えんだよナア;」

中島がボソツと言う

「ちよいお前 緊那羅きんならと並んでこいや」

「イエッサー!!」

坂田が南に言うとなが緊那羅に駆け寄った

「ハイハイ!!」

「うわ;」

そして緊那羅きんならと腕を組んで坂田と中島に向かって手を振る

「:何しとんじゃ;」

呆れ顔で京助が聞く

「ん? 男と女のラヴゲーム (仮)? とにかくそんなん」

「:わかんねえよ;」

ハッハと笑いながら南が答えると京助が南の頭を軽く叩いた

「ど?」

戻ってきた南が坂田と中島に聞いた

「よくわからんけど:しっくりきてないな:次中島行って来い」

「ラジャー」

坂田が中島を指名すると中島が敬礼ポーズをした後 緊那羅きんならの隣に立った

「:何なんだっちゃ;」

自分より背の高い中島を緊那羅きんならが見上げる

「マアマア」

そんな緊那羅きんならの肩を中島がハッハと笑いながらポンポン叩いた

「…お前等は一体何がしたいんだ；」

京助が突っ込むと中島が戻って来い合図をしている南に気づき京助に向けて片手を上げた後小走りで戻っていく

「…謎だ；」

緊那羅きんならと目があつた京助が呟くと緊那羅きんならも頷いた

「で？」

戻った中島が先ほどの南と同様坂田と南に聞く

「やっぱりしっくりこねえんだよなあ…」

そう言いつつ坂田が緊那羅きんならを京助の方に目を向けた

「…しっくりきてる」

坂田が呟くと南と中島も京助と緊那羅きんならに目を向けた

「…キテマスキテマス」

南が軽く頷きながら言うとか中島も頷く

「…また見られてるんだっちゃけど；」

3馬鹿の視線を受けながら緊那羅きんならが言う

「…今度は俺もかい；」

京助が口の端をあげて言うとか3馬鹿が足並み揃えてやってきて京助と緊那羅きんならを取り囲んだ

「お前らは二人で一つだ！ ウム！！」

「はっ！？；」

坂田が言うとか南と中島も頷き同時に緊那羅きんならと京助が素っ頓狂な声を上げた

「ラムちゃんと京助でワンセットってこ・と・さ」

南がキャルンポーズで言う

「人をファーストフード店のセット物と一緒にすな；」

京助が言う

「なんだかサア…いつからか京助の隣には緊那羅きんならってイメージが定着しちまつてるみたいなんだよな俺ら」

中島が言うのと坂田が頷く

「見た目は立派にカップルに見えるから安心したまへ!!」

「何をじゃ;」

南がハッハ笑いながら京助の肩を叩くと京助が南にチョップを繰り出した

「:何だよ;」

隣にいた緊那羅きんならが黙って自分を見ているのに気づいた京助が緊那羅きんならを見た

「いい加減帰らない?」

歓談の手すりに肘をついた本間が足を組みなおしながら声をかけたのは阿部

「:気になるなら側に言って聞いてくれ:」

「たらこんなことしてないわよッ!!」

本間の言葉を阿部がかき消した

「ぱっぱと告白でもなんでもすればいいのに」

「ッ!?!;」

本間が言うのと阿部が眉を吊り上げて真っ赤になる

「かわいい」

そんな阿部を見て本間がふっと笑った

「うるさいッ!?!;」

阿部が怒鳴って立ち上がる

「帰るよッ!;」

「はいはい」

大股で歩き出した阿部の後を本間が楽しそうについていく

「邪魔ッ!!」

「わッ!?!;」

京助たちの後ろで阿部が怒鳴ると一同が驚いて身をすくめた

「あ:阿部?;」

「通路でギャーギャーやってんじゃないわよッ!邪魔でしょッ!」

名前を呼んだ京助に阿部が声を荒げて食って掛かる

「ご：めんだっちゃ阿部さん；」

「こっちこそごめんねラムちゃん」

吃驚した顔のまま緊那羅きんならが誤ると本間が横から謝り返した

「香奈ッ！；」

本間に向かって阿部が怒鳴る

「阿部ちゃんどーどー；」

南が阿部を宥め様と手を上下させると坂田と中島そして京助も同様に手を上下させ始める

「アタシは馬じゃないわよッ！！」

「痛ってえッ！！；」

顔を赤くした阿部が坂田の足を思い切り踏んだ

「：うっわぁ痛そう；」

南が声なく痛がる坂田を見て言う和阿部が南を睨んだ

「どいて」

肩で風を切るように歩き出した阿部に一同がまるでモーゼのアレのように道を作った

「じゃあね」

大股で歩く阿部を追いかけていく本間が京助達に向かって軽く手を振った

「ラムちゃーんモヤシ安いよモヤシ！ 10円だって」

南が緊那羅きんならを呼んだ

「今日モヤシか？；」

京助がカゴを持つ緊那羅きんならに聞く

「え？； まだ何にしようか考えてないんだっちゃけど…；」

緊那羅きんならが答える

「カレーとか？」

中島が言う

「俺肉じゃが食いたい」

坂田も言う

「俺魚がいいな」

南がモヤシを手を持ちながら言った

「お前ら晩飯食っていくのか？」

京助がさりげなくカゴの中に薄焼きせんべいを入れながら聞く

「あつ； コラ余計なもの入れるなっちゃッ！！；」

緊那羅きんならがペンツと京助の頭を叩いた

「いいじゃん100円だし」

「駄目だっちゃッ！； ホラ！ 戻してくるっちゃ！！」

ブーッと口を尖らせた京助に緊那羅きんならが言う

「ママ！僕だけのこの山がたべちゃいの」

南が指をくわえて幼稚化して言った

「自分で買えっちゃッ；」

緊那羅きんならが怒鳴る

「じゃパパ」

南が今度はママをパパに変えて再度強請った

「言い方変えても駄目だっちゃッ！！； あーもう！買い物進まな

いじゃないっちゃッ！！；」

何も入っていないカゴを振って緊那羅きんならが言う

「つとに；； あ；」

「どうしたよ緊那羅きんなら？」

何かを見つけた緊那羅きんならに中島が声をかけた

「あれ；」

緊那羅きんならが指差した方向に3馬鹿と京助が目に向けた

「：写真：現像？ 一枚10円：？」

レジの側にかけてあったポスターを坂田が読み上げた

「：がどうかしたの？」

南が坂田の言葉の後に続けて聞く

「アレって写真：だっちゃよね？」

緊那羅きんならが聞きかえした

「そうだけど：そーいやお前さっき写真がどうの言ってたっけな？」
京助が言う

「写真って：好きなもの撮るんだっちゃよね？」

緊那羅きんならがまた聞くと少し間を開けた後3馬鹿と京助が頷いた
「まあ：そーだな嫌いなものを撮るってのは少ないかな」

中島が言う

「：中島達はどんなの写真に撮りたいって思うんだっちゃ？」

「俺等：？」

緊那羅きんならが聞くと3馬鹿と京助が考え出した

「俺は：そーだなあ：やっぱ楽しこととか？」

南が言う

「でも何で急に写真？」

言った南が緊那羅きんならに聞いた

「んと：私も写真撮りたいんだっちゃ」

緊那羅きんならが答えた

「何を撮るんだ？」

中島が聞く

「：え：つと：」

そのまま緊那羅きんならがしばらく黙り込んだ

「な：なんでもいいじゃないっっちゃか；」

緊那羅きんならが苦笑いで言った

「まさかラムちゃん盗撮？」

南が言う

「何を」

中島が突っ込む

「：何にしようか」

「オチを考えてから発言しろオチを；」

答えた南に中島がテンポよく再度突っ込んだ

「でもさ写真撮るにはカメラいるっしょ」

坂田が言う

「カメラねえ：バカチョンでいいか」

「ば：かちよん？；」

京助がレジの方に向かって歩き出す

「：バカチョンって何だっちゃ？；」

緊那羅が3馬鹿に聞いた

「あゝ：使い捨てカメラのこと」

坂田が答えた

「何で使い捨てをバカチョンって言うんだっちゃ？」

緊那羅が聞く

「んゝとねえ：：：どうしてだっけ；」

答えようとした南が中島の方を見た

「俺かよ； あゝ：何でだっけ？；」

中島が今度は坂田を見た

「：知らん！！」

坂田が気持ちいいくらいキツパリ言い切った

「：ばかちよん：：」

スーパ―から出た3馬鹿と京助と使い捨てカメラをまじまじと見る
緊那羅

「フジカラーで写そッ」

南が懐かしいCMソングを歌った

「：でもコレ：なんだか形が違うつちゃ」

カメラを上から下から見た緊那羅が言う

「なんだか違うつちゃっても：カメラだぞ」

買い物袋を下げた京助が突っ込む

「ばかちよんだけどな」

坂田が言う

「たぶん緊那羅言ってるのデジカメのことなんちゃうかなと俺は思
うんだけどさ」

坂田が緊那羅を見た

「：お前そんな高級なもん買えねえし正月町じゃ取り寄せて買うしかねえぞ；」

中島が言う

「デジ：カメ：こう：光るんだっちゃ」

緊那羅きんならが指で四角を書きながら言った

「あゝあゝ：デジカメだねえ：でもこのばかちよんも立派なカメラなだよラムちゃん」

南きんならが緊那羅の持っていたカメラを手に持った

「巻いてゝ巻いてゝ巻かれてゝたいてゝえゝ」

某演歌の替え歌を歌いながら南がカメラのアレをジャコジャコと指で巻きそしてフラッシュのツメを立てた

「ハイハイ！！ 駆けつけるのも撮るのも早い天才写真家でーす！ 思い出の一枚撮りますよゝ！」

そして某大人も子供もおねーさんもなゲームに出てくるキャラのセリフを言うと南がカメラを構えた

「チーズ！！ サンドイッチ！！」

パシャッ

「わっ；」

南がシャッターを切ると同時に緊那羅きんならが声を上げた

「：実に新鮮な反応だ緊那羅君きんなら」

しっかりピースを作って写った坂田が言う

「でもお前前に写真撮られてなかったか？ 文化祭ン時」

こちらもやはりしっかりバッチリピースで写った京助が言った

「：文化：祭：」

緊那羅きんならが考え込む

「コレ心靈写真とかだったら怖いねえ」

フラッシュのツメを疊んだ南がハッハと笑いながら緊那羅きんならにカメラを手渡した

「心霊写真ってなんだっちゃ？」

カメラを受け取った緊那羅きんならが聞く

「霊が写ってる写真」

手を幽霊ですよな形にした中島が答えた

「あなたの知らない世界の方が写ってる写真」

京助も答えた

「私の知らない世界……ってコッチの……世界のことだっちゃ？」

緊那羅きんならが言うとはたと3馬鹿と京助が止まった

「……じゃ何か？ ……俺等って緊那羅達きんならとかからすると……あなたの知らない世界の住人なワケ？」

坂田がチラッと南を見ていった

「……まあ……そうなるみたいねん；」

南が苦笑いで言った

「じゃあ俺らの知らない世界の住人の緊那羅きんならもそうなんじゃないか？」

「え？；」

中島が緊那羅きんならを見ると他の三人も揃って緊那羅きんならを見た

「誰かの知らない世界……」

京助がボソツと言うと坂田がゆっくり静かに手を上げた

「ハイ深弦君」

その坂田を中島が指名する

「この話題は季節柄今時期には合わないと思います」

坂田が言うとき京助と南が右に同じというカンジで拍手をした

「今の季節には合わないってことでこの話題はここでカー————

————ット——！」

中島が上から下へ手を手刀！ ……といわんばかりの勢いで振り下ろした

「では次のニュースです」

南が話題転換を試みながら一歩足を進めるとそれに一同が続き緊那羅きんも首をかしげながらも足を一歩進めた

お湯の中に昆布の入った鍋がクツクツと音を立てだした

「…ばかちよんカメラ…かあ…」

右ポケットから使い捨てカメラを取り出したきんなら緊那羅が小さく呟いた

「思い出…か…」

カメラをそつと撫でたきんなら緊那羅がカメラをポケットにしまい側にあった箸に手を伸ばす

「……」

箸を持ったままきんなら緊那羅が止まってそしてきゅつと唇を噛んだ

「はあ?; マジで?;」

京助の部屋から京助の声がした

「あんなキラキラした男はいないと申しておられました」

坂田が柿の種を一つ放り投げてそれを見事口で受け止めた

「あれは本気だよ本気」

南も坂田を真似てやってみたが失敗して柿の種が落下したっぽい周りを探しながら言った

「ライバル出現京助君」

バンホーテンのココアをストローで吸いながら中島が言った

「あのな; ……ってか; きんなら緊那羅は男だぞ; 真正正銘」

京助が中島を一発叩いた後呆れたように言った

「俺様も素晴らしいましたが全くとっていいほど信じてくれないんですよこれがまた」

坂田がお手上げポーズで溜息を吐く

「そりゃラムちゃん…あんなんだしねえ…初めて見た姿が女子の制服を着たのってのもあるかもだけど」

南がこりず柿の種を放り投げたも落して探しながら言った

「似合ってたもんな金名羊子…女子まで女子と思ってるしな」

中島が言う

「宮津さんだっけ? あの手ホワした先輩とか阿部とか…」

坂田が湯気の立つ湯飲みに手を伸ばした

「でもま：別にいいんじゃないねえ？ 緊那羅きんならは緊那羅きんならだしよ」

京助がズズッと湯飲みの中の茶を飲みながら言う

「そりゃそうだけど：浜本どうするよ」

ココアを飲み干した中島が今度は湯飲みに手を伸ばしながら突っ込む
「どうするっても：一発 緊那羅きんならの裸でも見せろってのか？」

「キヤー！！ ヌード！！」

京助が言うとなが頬に両手を当てて身をよじった

「おもしろいから放っておくって手もある」

坂田が言うで一瞬部屋が静まり返り各々顔を見合わせたあと揃って
ニヤリと笑った

「今日告白逃したみたいだし？ また何か一騒動起こしてくださいさる
ような？」

中島がフッフと笑いながら言う

「一騒動どころか二騒動？」

京助が中島と同じような笑いを浮かべながら言った

「いやゝ新しいおもちゃができて嬉しいわ」

南がハッハと笑った

「しかも浜本 緊那羅きんならが京助の彼女だと思ってるしな」

「は？；」

中島が言うとな京助がちょっと待てというカンジで中島を見る

「浜本だけじゃないっしょ？ たぶん」

「オイ；」

坂田がさらっと言うとな京助が今度は坂田に目を移した

「だねえ：真実を知る俺等にもどっからどう見てもカップルにしか
見えないしねえ」

南がウンウン頷いた後笑いながら京助を見た

「歌って戦って家事もできる彼女って最高じゃん京助！ 男だけど」

「ちよっと待て；」

坂田がエセ爽やか笑顔で京助の肩をポンッと景気よく一回叩いた
「誰が誰の彼女ですって：？」

まるで井戸の底から搾り出すような声に一同が止まった

「行くんだ慧光^{えいこう}」

「嫌ナリ!!」

かすれた声に答えた声は震えていた

「ここは僕が食い止める…そして僕がいかせない…」

「…様!!!!」

バチィィ!!!!

何かを弾く音と重なった声が聞き取れない

「…そこまでだ…いくらお前でもこの人数…そしてコイツには敵うまい?」

逆光の中に浮き出た影は3つ

「放すナリ!! 鳥倶婆迦^{うぐばか}ッ!!!!」

「放しちや駄目だよ…鳥倶婆迦^{うぐばか}」

慧光^{えいこう}と呼ばれていた少年の腰に捕まっていた鳥倶婆迦^{うぐばか}が頷いた

「駄目だよ慧光^{えいこう}!」

「でもだってッ…!!」

全体重をかけて鳥倶婆迦^{うぐばか}が慧光^{えいこう}を引き止める

「僕は大丈夫」

カチャリと腕についている腕輪が鳴った

「僕が止めなきゃいけないんだよ…」

白い布がふわっと靡いた

「いい加減にしろ…いつからそんなに聞きわけがなくなった…?」

声が響く

「わかるね…? アイツを止めるのが僕の役目…」

「矜羯羅様^{こんがら}…ッ!!」

涙を浮かべた慧光^{えいこう}が手を伸ばした

「行けッ!!!!!!」

矜羯羅^{こんがら}の声と同時に開いた扉

「矜羯羅様——————————————————————」

———ッ！！！！！！」

頷いた鳥俱婆迦うぐばかが慧光えこうを掴んだまま開いた扉の向こうへ飛び込むと扉が閉じた

ドサドササ———
——：

「：室内雪崩注意報：」

カップラーメンができそうなくらいの間沈黙が続きそれを南の一言が終らせた

「本日栄野家の天気予報は嫉妬時々ばかのち誰か知らんヤツが降ってくるでしょう：ってか？：」

中島が言う

「ってか下敷きになってるヒマ子さん生きてるのか？：」

坂田が言うヒマ子の葉がぴくつと動いた

「いたたた：：」

一番上になっていた鳥俱婆迦うぐばかが頭を振って顔を上げた

「重いですわ！！！！」

続いてヒマ子が叫ぶ

「お：：生きてた」

南が拍手をする

「お前らはフツーにこれんのかフツーに；」

京助が鳥俱婆迦うぐばかを引っ張ってヒマ子の上から下ろした

「そんなヒマなかったんだよ」

帽子を引っ張って直しながら鳥俱婆迦うぐばかが答えた

「で：コッチのちようちんブルマーっぽいのはいてるヤツ誰？」

坂田がヒマ子の鉢に頭をぶつけて気絶しているっぽいヤツを指差して聞いた

「ソイツは慧光えこう」

鳥俱婆迦うぐばかが答える

「えこう？ エテコウ？ 猿？」

南が慧光えいこうをツンツン突付きながら言う

「：矜羯羅様こんがら！！」

「どうわッ！！；」

ガスッ！！

気がつき飛び起きた慧光えいこうと南の頭が衝突した

「イツテェッ！！！！！！；」

南と慧光えいこうが同時に叫んだ

「星が出たな星が」

ハッハと中島が笑う

「おおおお：；」

南が頭を抱えて蹲る

「何するナリ！！；」

涙目で頭を抑えた慧光えいこうが怒鳴った

「：今コイツ【ナリ】っうたよな：？」

京助が坂田を見た

「：だっちゃんに続いてナリか：」

坂田が口の端をあげて言う

「おいちゃんの計算ではまたくだらないこと考えてるだろ」

鳥俱婆迦うぐぼかが京助を見上げて言った

「で：？ 何しにきたんよ？ 暇潰しか？」

京助がしゃがんで鳥俱婆迦うぐぼかを目線を合わせて聞く

「ちが：」

「違うナリッ！！」

答えようとしていた鳥俱婆迦うぐぼかの言葉を慧光えいこうが声でかき消した

「私は矜羯羅様こんがらが：ッ！！ 制多迦様せいたかが：ッ！！」

「慧光えいこう！！」

叫びに近い声で慧喜えいきが言葉を綴っていると騒ぎを聞きつけた慧喜えいきが部屋に入ってきた

「慧喜ッ！！」

慧喜の姿を見た慧光が目つきの悪い目をさらに吊り上げた

「慧喜…ッ！！ 矜羯羅様が…制多迦様が…ッ！！」

「ぐえッ！！」

ヒマ子を踏んで慧光が慧喜に駆け寄る

「落ちてけコロ助！！」

慧喜の胸倉を掴んだ慧光を京助が止めた

「矜羯羅様と制多迦様が…が…？」

慧喜が京助に捕まっている慧光を目を見開いて見た

「上が…上が…ッ…！！」

吊り上った慧光の目から涙がこぼれた

「まま…座って座って」

中島が座布団を敷きそこに慧光を招いた

「泣きながらしゃべるとわけわかんねーからとりあえず落ち着け？
な？」

京助が慧光をずるずると中島の敷いた座布団へと引きずって座らせる

「…矜羯羅様と制多迦様が…どうしたんだ？ 慧光…」

小さく震えながら慧喜が慧光に聞いた

「慧喜…寒いのか？」

震えに気づいたのか悠助が慧喜を見上げた

「上に背いたんだ」

キィキィと京助の机に椅子を鳴らして鳥俱婆迦が答えた

「【時】に対して…【時】がおかしいって…そしたら上が…」

ハアッと息を吐きながら慧光が続きを答えた

「矜羯羅様は気づいたんだ…【時】を重ねていく度上がおかしくな
つてたこと…【時】が一体どんなものになろうとしているのか」

鳥俱婆迦が椅子から降りた

「おいちゃんたちは今まで【時】に関わったけど【時】を直接見
ちゃいなかったんだ」

くいつと帽子を直しながら鳥倶婆迦うぐばかが言った

「ちよつと待て?; 【時】 って: 一体:」

坂田がチヨイ待ちポーズで話を割って質問する

「【時】は【時】だよ」

鳥倶婆迦うぐばかが答える

「あ: そ:」

坂田が手を下ろした

「私達が【時】と呼んでいるもの: その正体はおそらく誰も知らないナリ」

慧光えこうが言う

「でも【時】には正体があるんだ: 矜羯羅様こんがらはそれに気づいた: でも遅かった」

鳥倶婆迦うぐばかがぎゅつと手を握った

「: 慧光: 鳥倶婆迦:」

慧喜えきが俯いたまま二人を呼んだ

「: お二方は: ?」

震える声で慧喜えきが聞く

「矜羯羅様こんがらは私達をコツチに逃がして:」

「制多迦様せいだかは:」

慧光えこうが言葉に詰まった先を鳥倶婆迦うぐばかが言おうとして口を紡いだ

「タカちゃんとコンちゃん: どうしたの? ねえ?」

悠助えきが慧喜えきに聞くと慧喜が思い切り悠助を抱きしめる

「: おいちゃんの計算では: 矜羯羅様こんがら: 空への扉を閉ざしてる:」

鳥倶婆迦うぐばかが言った

「矜羯羅様の力で閉ざされた扉は私では開けられないナリ: 慧喜えきでも鳥倶婆迦うぐばかでも無理ナリ:」

慧光えこうが俯いた

「: えーと: あのチヨイ話をまとめていいか?;」

坂田が挙手した

「つまり何か？ 【時】がどうの云々って事に何か気づいた矜羯羅こんがらが上だかにボコられるってことか？」

京助が言う

「タカちゃんは？」

中島が突っ込むと慧光えいこうが唇を噛んだ

「：制多迦せいたか：どうしたんだ？」

それに気づいた京助が慧光えいこうに聞く

「：アレは制多迦せいたか様じゃないよ慧光えいこう：」

慧喜えきが顔を上げた

「あんなの制多迦せいたか様じゃない：俺の好きな制多迦せいたか様じゃない：」
自分に言い聞かせるように慧喜えきが言う

「：何がなんだか；」

南がボソツと言った

「：私のことお忘れになっていませんか？」

倒れて自分で起きられない夏の妖精がしばしの沈黙を破り私はここに
いることを主張した

「迦楼羅かるら様やけんちゃん様に頼めばよろしいのではないですか？」

「おお！ 今まで黙っていた分を取り返す勢いでいい提案を！ ミ
ス・ヒマ子！！」

坂田がぽんっと手を叩きヒマ子を起こした

「無理だね」

鳥俱婆迦うぐぼかがキツパリと言い切った

「無理：って」

鳥俱婆迦うぐぼかに視線が集まった

「もし迦楼羅かるらや乾闥婆けんだつばが来て矜羯羅こんがら様の閉めた扉を開けられたとしても：敵なんだよ？ 空が受け入れると思う？」

鳥俱婆迦うぐぼかが言う

「でも：じゃあどうしたらえーねん；」

中島が言った

「おいちゃんの：計算：じゃ：わからないよ：」

ずるっと鼻水を吸る音がお面の下から聞こえた

「うぐちゃん：我慢してた？」

慧喜えきから離れた悠助が鳥俱婆迦うぐばかの頭を撫でる

「お面被ってるから泣いてんだか笑ってんだかわかんねえからなお前；」

側にいた坂田が鳥俱婆迦うぐばかを自分の膝に座らせた

「どうしよう矜羯羅様こんがらが制多迦様せいたかが：っ」

ヒッヒッと泣きしゃつくりをし始めた鳥俱婆迦うぐばかを見ていた悠助の目も潤んできた

「：ヤヴあくないか？； このまま行くとアレだ：連鎖がはじまんぞ？；」

【解説しよう。この場合の連鎖とは一人が泣くことにより回りも次々つられて泣き出すという現象を現すのである】

「うわ————————————————んッ！！」

「お前がきたかッ！！；」

鳥俱婆迦うぐばかでも悠助でもなく一番先に泣き始めた慧光えこうに3馬鹿と京助が揃って突っ込む

「相変わらず泣き虫なんだな慧光えこう：泣いても何も始まらないだろッ！！」

ペンッと慧喜えきが慧光えこうの頭を叩いた

「だってッ：矜羯羅様こんがら：ッ制多迦様せいたか：」

「今の泣き声な……に事何だっちゃ？；」

慧光えこうの泣き声が聞こえたのか箸を持ったままの緊那羅きんならが戸を開けて顔を出しそして部屋の中を見て状況把握しようとしている

「緊那羅様きんなら！ 踏んでますわ踏んでますわ————————ッ！！」

「うっわ； ヒマ子さん；」

ヒマ子の葉を踏んでいたらしくヒマ子が声を上げると緊那羅きんならが慌てて足を退けた

「で：一体さっきの泣き声は：なんなんだっちゃ？」

ヒマ子を起こしつつ緊那羅きんならが聞く

「そちらにいらっしゃるコロ助様のものですわ」

ヒマ子が慧光えいこうに葉を向けて答えた

「コロ助様：？；」

「慧光えいこうだよ緊那羅きんなら」

緊那羅きんならが慧光えいこうを見ると慧喜えきが言う

「あ：そうなんだっちゃ？；　：もしかしてまた京助達が何か：」

「ひっどー——————い！！；」

緊那羅きんならがジト目で京助達を見ると南が声を上げた

「俺らは逆に慰めてたんだぞ；」

京助がブーイングで緊那羅きんならに言う

「慰め：？　：本当一体何があったんだっちゃ？」

緊那羅きんならが首をかしげた

「矜羯羅こんがら様が上に背いたんナリ」

慧光えいこうがボソツと言うと緊那羅きんならがバツと慧光えいこうを見た

「そして：扉を閉めたナリ：」

「鼻水鼻水；」

顔を上げた慧光えいこうの両鼻から流れ出ていた鼻水を見た中島がティッシュを投げた

「中島が投げたティッシュを掴んで鼻と口に当てた慧光の目からまた涙が流れだす」

「緊ちゃん：こんちゃん助けられる？」

つられ泣きしていた悠助がうまく回らない口調で緊那羅きんならを見上げた

「おいちゃんの計算では：ここにいるヤツ全員でも：扉すら開けられないと思う」

坂田の膝の上で鳥倶婆迦うぐはかが鼻を吸って言った

「助けて…ッ…」

畳に突っ伏した慧光えいこうの背中を慧喜が撫でる

「助けて…やりたいけど…さ…」

中島が苦い顔を京助に向けた

「…お前らにすらどうしようもできないこと俺らには…」

南もやるせない悔い顔で俯くと部屋中が沈黙した

「…大丈夫だっちゃ」

慧光えいこうの隣にしゃがんだ緊那羅きんならが小さく言った

「大丈夫って…緊那羅きんならお前…」

緊那羅きんならの言葉に目を丸くした慧喜えきに緊那羅きんならがにっこり微笑んだ

「…ごめんね…制多迦せいたか…」

笑った口元にうつすらとにじんだ赤い血がゆっくりと顎を伝った

【第十二回】きみのて（前書き）

ぼくのきらいな 【赤】

【第十一回】きみのて

「何のために？」

そう聞く矜羯羅こんがらの隣には相変わらず眠さをこらえている制多迦せいたか

「そもそも時って…」

「いい加減にしないか…」

空間の中に響いた声は矜羯羅こんがらのものでも制多迦せいたかのものでもなかった

「…僕は今なら竜の考えに賛成だね」

「…くも」

矜羯羅こんがらが言うと制多迦せいたかも頷く

「…黙れ」

ピシッと空間の空気が固まった様な一瞬

「僕様の考えは絶対だって…知ってるだろう？」

「だから何なのさ」

ひるまず矜羯羅こんがらが言う

「上に背く気か矜羯羅こんがら」

聞こえたのはまた別の女性とも聞き取れる声

「いくら二人とて上に背くのは…」

そしてまた別の声

「矜羯羅様…制多迦様…」

矜羯羅こんがらと制多迦せいたかの後ろで不安そうな顔をしているのは慧光えこう

「…向こうで【天】と関わりすぎ毒気にやられたか…しょうもない

奴等だ」

「その逆だよ」

矜羯羅こんがらがふっと笑って言った

「僕らは向こうに行って…ここでの毒が抜けたんだ」

「ここが毒だと？」

女性のような声が多少の怒っているとも捕らえられる口調で聞く

「ああ：そうだよここは毒だね：だから僕らは向こうに惹かれたんだ」

矜羯羅こんがらが言うせいたかと制多迦せいたかが嬉しそうに頷いた

「僕はもう従わない」

矜羯羅こんがらがキツパリ言い切った

「矜羯羅様：！！」

ソレを聞いた慧光えいこうが驚き足を一步前出だした次の瞬間

シン

という音とまぶしい光が同時に押し寄せたかと思うと慧光の目の前から制多迦せいたかと矜羯羅こんがらが消えた

「右だよ避けたんだ」

二人が消えたことでさらに驚いている慧光えいこうに隣にいた鳥俱婆迦うぐばかが右方向を指差しながら言う

「：ソレは本心か？」

制多迦せいたかに抱えられていた矜羯羅こんがらが足を下ろして立ち上がり目線を向けた先には小さな玉

「僕は冗談が嫌いだよ」

口元は笑っていても目つきは真剣そのものの矜羯羅こんがらが玉に向かって言った

「：制多迦せいたか」

どうやら玉から聞こえているらしいその声が制多迦せいたかを呼ぶと眠そうだった制多迦せいたかの目が少しだけ鋭くなった

「：くも矜羯羅こんがらと一緒にだよ」

そしていつもより少しキリつとした口調で答える

「わ：私もナリッ！」

慧光えいこうが声を上げた

「おいちゃんも向こうが好きだよ」

慧光えこうに続いて鳥倶婆迦うぐばかも言う

「お前等……!!」

怒りの籠った女性にも聞こえる声が響く

「おいちゃんの計算では慧喜えきもそうだと思う」

鳥倶婆迦うぐばかが言った

「……鳥倶婆迦……慧光……」

少し驚いた顔で矜羯羅こんがらが二人を見ると慧光えこうが俯きその慧光えこうの頭にポンッと制多迦せいたかが手を置いた

「あの……迷惑ナリ……か？」

恐る恐る聞いた慧光えこうに制多迦せいたかがヘラリ笑って首を振った

「おいちゃんは矜羯羅こんがら様と制多迦せいたか様が好きだよ」

鳥倶婆迦うぐばかが言うのと制多迦せいたかが空いていた手を鳥倶婆迦うぐばかの頭にポンッと置きそして両手を同時に動かして二人の頭を撫で始めた

「……まったく……仕方ないね……」

呆れながらもどこことなく嬉しそうに矜羯羅こんがらが微笑む

「……そうか……しかし言っただろう？ 僕様は絶対……」

和やかなその空気をぶち壊した玉から響く声

「僕様から逃れられると思う？ 制多迦せいたか」

その声に呼ばれた制多迦せいたかがピクッと反応した

「させないよ」

制多迦せいたかを庇うように矜羯羅こんがらが玉と制多迦せいたかの間に立った

「……んがら……」

矜羯羅こんがらの背中に制多迦せいたかが声をかけた

「今の制多迦せいたかが僕の知っている制多迦せいたかなんだよ……」

少し振り向いた矜羯羅こんがらがふっと微笑みながら言う

「……ん」

その言葉に制多迦せいたかが嬉しそうに返事をした

「制多迦せいたか様……」

慧光えこうが制多迦せいたかを見上げる

「制多迦…お前は…」

玉から聞こえる声が制多迦を呼ぶ

「制多迦は制多迦だよ」

矜羯羅が玉に向かって言った

「慧光…鳥俱婆迦」

玉から目をそらさず矜羯羅が鳥俱婆迦と慧光を呼んだ

「はい」

鳥俱婆迦が返事をする

「制多迦をつれて向こうへ行くん…そしたら僕が扉を閉める…」

時」が来るまで…」

矜羯羅が言うと慧光が目を大きくして首を振った

「嫌ナリ！！ 矜羯羅様も一緒に…ッ！！」

そう叫んだ慧光の頭から制多迦の手が離れた

「…何さ」

慧光の頭から離れた制多迦の手が掴んだのは矜羯羅の手

「離してよ」

矜羯羅がブンブンと捕まれた手を振るが制多迦は手を離さなかった

「せいた…」

「…ま離すと…もう掴めない気がして」

制多迦の言葉に矜羯羅がぴたっと振り解こうとしていた手を止めた

「…何言ってるのさ…」

一呼吸おいて矜羯羅が空いている手で制多迦の手を離そうとする

「…つもそうだったよね矜羯羅はいつも僕を守ってくれた」

「何…」

制多迦の指を一本一本剥がしていた矜羯羅に制多迦が言った

「…りがとう…」

剥がされかけていた手にもう片方の手を添えて制多迦が矜羯羅の手を包んだ

「…り返して何度も繰り返したのにいつも守られてた」

包んだ矜羯羅こんがらの手を額に当てて制多迦せいたかが目を閉じる

「…つも側にいてくれた…僕も今度は守りたい」

「泣けるじゃない？」

制多迦せいたかの言葉の後に聞こえた女性の声とも取れる声にハツとして顔を上げた制多迦せいたかと矜羯羅こんがら

「指徳…！！」

慧光えいこうが声を上げ向けた視線の先には甲冑とも見えるしかしやはり摩訶不思議な服装をした女性

「でもね制多迦せいたか？ …それは無理なんだよ？ わかるね」

「制多迦せいたか！ 行け…！！」

矜羯羅こんがらが手を振り解こうと思いつき制多迦せいたかを突き飛ばそうとした

「離しなよッ！」

しかし制多迦せいたかは矜羯羅こんがらの手を離さない

「鳥俱婆迦うぐばか！！ 慧光えいこう！」

矜羯羅こんがらが鳥俱婆迦えぐばかと慧光えいこうを呼んだ

「させないよ？」

口紅を塗った赤い指徳しどくの唇が弧を描く

「離しなよ！ このままじゃまた…」

いつもになく声を荒げ矜羯羅こんがらが制多迦せいたかの手を振り解こうとする

「…やだよ…」

制多迦せいたかが静かに言った

「制多迦せいたかッ…！！」

矜羯羅こんがらがほぼ怒鳴り声に近い声の大きさで言う

「制多迦せいたか様！ 矜羯羅こんがら様ッ…！！」

慧光えいこうが叫ぶ

「…ッ」

唇を嚙んだ矜羯羅こんがらが走り出した

「おやおや…追いかけてっこ？」

指徳しとくが面白そうに笑った

「指徳…」

玉から聞こえる声が指徳しとくを呼ぶ

「わかっております」

玉に向かつて膝まずいた指徳しとくの手に玉が乗った

「上の思いのままに」

「矜羯羅様ツ!!」

走り出した矜羯羅こんがらの手を離さない制多迦せいたか、その後ろには烏俱婆迦うぐばかと慧光えこうがついて走る

「向こうに行けば迦楼羅かるらも乾闥婆けんだつばもいる…だから…」

「…から矜羯羅こんがらがいなくてもいいっていうの？」

走りながら言った矜羯羅こんがらに制多迦せいたかが聞く

「そうだよ…僕がいなくても君を守ってくれる」

矜羯羅こんがらがそう言うのと制多迦せいたかが足を止めた

ゴン

「…せ…いたかさま…?…」

追いついた慧光えこうが目を丸くして見たのは矜羯羅こんがらに頭突きしている制多迦せいたか

「…何するのさ;」

制多迦せいたかの頬を思い切り引つ張って矜羯羅こんがらが言う

「…よんはらほふあふあふいふあひひゃらいひふいふあい」

「…何言ってるのかわからないよ」

頬を引っ張られながら制多迦せいたかが言った

「…んがらの変わりはいらないしいないよ」

開放された頬を撫でながら制多迦せいたかがさっき言ったらしい言葉を繰り返した

「…くが好きなのは矜羯羅こんがらって言う矜羯羅こんがら」

ヘラリと制多迦せいたかが笑う

「：何言ってるのさ」

溜息をついた矜羯羅こんがらの服の裾を鳥俱婆迦うぐばかがくいくいと引っ張った

「おいちゃんの計算ではもうすぐ指徳しとくが：」

「私がなんだって？」

響いた声に一同がはっとして振り返ると近付いてくる足音

「制多迦せいたか様！！ 矜羯羅こんがら様逃るナリッ！！」

慧光えいこうが叫んで両手を前にかざした

「ここはおいちゃんたちが：うわ；」

「制多迦せいたか様ッ！？；」

ふわっと鳥俱婆迦うぐばかと慧光えいこうの体が浮き上がったかと思うと遠ざかるも
といった場所

「：どこ行く気？」

左脇えいこうに慧光えいこう、右肩うぐばかに鳥俱婆迦うぐばか、そして右脇こんがらに矜羯羅こんがらを抱えた制多迦せいたか
が走る

「：あ？」

矜羯羅こんがらの質問に制多迦せいたかがヘラリ笑いで返した

「：めんね矜羯羅こんがら」

しばらく黙ったまま走っていた制多迦せいたかがいきなり口を開いた

「：くがいたから僕が僕だったから：でも僕は僕でいたくて：だから：」

「だから？」

【だから】の後黙り込んだ制多迦せいたかに矜羯羅こんがらが声をかけた

「：めんね：ありがとう」

そう言った制多迦せいたかが矜羯羅こんがらに向けたのはヘラリ笑いではなく眉を下
げたでもどこことなく嬉しそうでそれでいて悲しそうな笑顔

「な：」

「制多迦せいたか様」

何か言おうとした矜羯羅こんがらの言葉より先に鳥俱婆迦うぐばかが言った

「…に？」

「前」

ゴン

何か固いものに勢いよくぶつかった音が廊下に響く

「…ッ」

矜羯羅こんがらと慧光えこうが制多迦せいたかの両脇に抱えられながら頭をおさえる

「…めん」

制多迦せいたかが申し訳なさそうに謝った

「前見ないで走るとあぶないよ制多迦様」

間一髪制多迦の方から降りて壁激突を（せいたか）免れた鳥俱婆迦うぐばかが小走りでやってきて制多迦せいたかに言う

「…うだね」

両脇に抱えていた二人を降ろして制多迦せいたかが頭をかいてヘラリと笑った

「抱えて走るなら責任持ちなよ」

スパンッと軽快な音をさせて矜羯羅こんがらが制多迦せいたかの頭を叩いた

「…何笑ってるのさ…」

叩かれたのにめちやくちゃ嬉しそうな制多迦せいたかを見て矜羯羅こんがらが聞く

「…んがら最近玉じゃなく手で叩いてくれるのが嬉しい」

「は？」

制多迦せいたかが言うと矜羯羅こんがらが自分の手を見た

「そうなんナリか？」

慧光えこうが頭をおさえながら矜羯羅こんがらに聞く

「…別に…」

手をキュッと握って矜羯羅こんがらが言う

「…何さ」

反対の手を制多迦せいたかが取って首を振った後ヘラリと笑った

「…んがらは全部見ても僕をおいていけないでくれた」

制多迦せいたかが静かに言う

「…んぶ…初めからずっと見ていたのにずっと側にいてくれてずっと守ってくれた…僕が僕だから矜羯羅こんがらは苦しかったんでしょ？」

両手で矜羯羅こんがらの手を包みながら制多迦せいたかが悲しそうに笑った

「…から願ったんだよ…僕が僕じゃなくなるようにって…怒られたけど」

矜羯羅こんがらが俯いたまま黙って制多迦せいたかの話を聞く

「…もごめんね…僕はもう少しだけ僕でいたい…【時】が来るまで僕はこのまま僕のまままでみんなと…矜羯羅こんがらといたい」

「ちが…!!」

矜羯羅こんがらが顔を上げ最初に見たものは制多迦せいたかのすぐ後ろで弧を描く唇だった

「指徳…!!」

制多迦せいたかのすぐ後ろにいたのは指徳しとくそして逆光で黒く見えるもう一つの影

「つかまえた」

どこか面白そうに指徳しとくが制多迦せいたかの肩に手を置いた

「今度は…制多迦せいたか…お前が鬼だよ…」

「やめろ指徳しとくッ!!」

指徳しとくが制多迦せいたかの前に手をかざすのを見た矜羯羅こんがらが叫ぶ

「見ちゃ駄目だ制多迦せいたかッ!!」

矜羯羅こんがらの声を聞きながらも制多迦せいたかの目は指徳しとくのかざした手の内にある玉を見てしまっている

「制多迦せいたか…ッ!!」

「制多迦せいたか様ッ!!」

矜羯羅こんがらと慧光えこうがめいいっぱいの声で制多迦せいたかを呼ぶ

「さあ…鬼さんおはよう」

矜羯羅こんがらの手を包んでいた制多迦せいたかの手から段々と力が抜けていくのを矜羯羅こんがらが感じ取って制多迦せいたかの手を掴んだ

「…めんね…」

目こそ指徳しとくの手で見えないがその頬を伝ったのは目からのよだれ…
もとい涙だということ

「…逃げなくていいのかい？ 鬼は待つてはくれないよ？」

ゆっくりと指徳しとくがかざしていた手をどけるとそこには目を瞑つぶつたい
つもと変わらない制多迦せいたかがいた

「…制多迦様…」

鳥俱婆迦うぐぼかが制多迦せいたかを呼ぶとぴくっと制多迦せいたかの肩が動いた

「追いかけてこの第二回戦だね」

楽しそうに笑う指徳しとくの手の上には真っ赤に色を変えた玉

「…おはよう…制多迦…」

玉から聞こえた声に制多迦せいたかがゆっくりと目を開けた

「…せい…」

「矜羯羅…」

矜羯羅こんがらを見据えるその目は赤くそして話し方はあの独特のものでは
なく

「久しぶりだね制多迦…」

「…その名でコイツを呼ばないでよ…コイツは制多迦せいたかじゃない」

矜羯羅こんがらが掴んでいた制多迦せいたか（？）の手を振り払った

「僕は僕だよ矜羯羅…」

「僕の知っている制多迦せいたかはお前じゃない」

赤い目の制多迦せいたかを睨みながら矜羯羅こんがらが言った

「何を言っている…？ コレが本来の制多迦せいたかだろう？」

玉から声がした

「殺めること破壊することを躊躇ためらわず…【空】で最強の者」

指徳しとくが玉の後に続いて言う

「それが制多迦…」

指徳しとくが制多迦せいたか（？）の体に腕を回した

「制多迦様…」

鳥俱婆迦うぐばかが小さな声で制多迦せいたかを呼ぶ

「アレはもう制多迦せいたかじゃないよ…鳥俱婆迦…」

矜羯羅こんがらが言った

「矜羯羅が反した…制多迦せいたか」

玉が言うせいたかと制多迦が頷いた

「上の命は絶対…」

左足の小さな鞆せいたかの様なものから制多迦（？）が何かを取り出した

「行くんだ慧光えいこう」

「はい」

差し出されたのは白に青い花が描かれている茶碗

「これ…」

その茶碗を見た慧光えいこうが緊那羅きんならを見上げた

「御飯みいだっちゃ」

緊那羅きんならがにっこり笑って言う

「あっ！！ てめこのヤロ俺の肉！！；」

慧光えいこうの向かい側で中島が坂田のしょうが焼きを奪ったんだかんだ
すったもんだを繰り返している

「肉じゃがも良かったけどしょうが焼きでもいいねえ」

南がハッハと笑いながら言った

「少しおとなしく食べるってことはできないんだっちゃッ！？；」

すったもんだしている面々に向かって緊那羅きんならが怒る

「おいちゃんの計算では絶対無理だとおもう」

お面の下からちよろちよろ食べながら鳥俱婆迦うぐばかが言った

「こんなことしてられないナリ…ッ！」

「まあまあ」

立ち上がった慧光えいこうの太ももを京助がポンポン叩いた

「腹が減っては戦はできぬっていうじゃん？　腹減つてるとマイナス思考が更にマイナスになるんよ？　緊那羅オカワ〜リ」
京助が緊那羅に空になった茶碗を差し出しながら視線は慧光に向けて言った

「でも…!!」

「信じようよ慧光」

何かを言おうとした慧光に慧喜が言った

「俺らにはなんともできない何も思いつかないなら…大丈夫だって

言う緊那羅の言葉：信じてみよう？」

慧喜が慧光を見上げる

「そんなの…だってコイツは天の…」

慧光が緊那羅を見下ろした

「だからなんだっの」

京助が程よく山盛りに盛られた茶碗を受け取りながら言う

「ここは天でも空でもなく俺ン家!!」

京助が箸をビシッと慧光に向けた

「関係ねえじゃん？　ここじゃ」

坂田が言う

「そーそーいいじゃんいいじゃん天だろうと空だろうと」

中島も頷く

「だって…なあ？」

南が箸をくわえたままにーっと笑った

「ここは【天】でも【空】だかでもない正月町は別荘（地区名）
の栄野さんのお宅ですし」

南が言う

「だからなんナリか…」

慧光がボソツと言った

「関係ないンちゃう？　なあ？」

軽いゲップの後京助がさらっと言いながら緊那羅を見た

「大丈夫だっちゃ」

緊那羅きんならが笑いながら頷いた

「でも大丈夫って…どうするの？」

慧喜えきが緊那羅きんならに聞く

「…前に…お祭りの時に迦楼羅達かるらから聞いたんだっちゃ…宝珠を一つ…使えば私にでも扉が開けられるかもしれないって」

緊那羅きんならが言うのと摩訶不思議服を纏った面々が驚きその他の面々はきよんとした顔をした

「ばっ…!!」

「なに…!!」

「きん…!!」

摩訶不思議服の面々が単語にならない言葉を次々を口にした

「ばなにきん」

「ばなにきんだな」

「うんばなにきんだった」

「ばなにきんばなにきん」

「ばなにきんって何？」

ソレに対するはその他の面々のよくわからない言葉

「お前本気ナリかッ!?!」

慧光えいこうがバンツとテールブルに手をつき声を上げた

「そうだよ緊那羅きんなら!! わかって言ってるの!?! 宝珠を一つって

…」

慧喜えきも緊那羅きんならに向かって声を上げる

「…その続きは？」

中島うくばかが鳥俱婆迦に聞いた

「宝珠を色つけるのは心でその心っていうのは簡単に言うて自分の

命だよ」

鳥俱婆迦うくばかがお面を少しあげてたぶん口を拭きながら答えた

「命って…命か？」

京助が聞くと鳥俱婆迦うぐばかが頷く

「だから宝珠を使うとかってなると命を使っているってことになるんだ」

鳥俱婆迦うぐばかが付け加えると一同が緊那羅きんならを見た

「だったら：私を使うナリッ！！」

慧光えいこうが立ち上がった

「俺のだって使えるよ！！」

慧喜えきも言う

「おいちゃんだって矜羯羅こんがら様が助けられるなら使うよ」
続いて鳥俱婆迦うぐばかも言った

「お前等本当 矜羯羅こんがらっ子なのな」

「制多迦せいたか様も好きだよ」

中島が突っ込むとすかさず鳥俱婆迦うぐばかが言う

「でもおいちゃん：今の制多迦せいたか様は好きじゃない：」

そしてボソッと付け足した

「今の制多迦せいたか？」

聞こえた中島が聞き返すと鳥俱婆迦うぐばかが黙り込んだ

「もう食えないんだやな～：」

ホウッと幸せそうな顔をしてイヌがゲップをした

「ゼンもなんだやな～」

コマも同じくゲップをして寝転がった

「食べてすぐ寝ると牛になるって言うけどゼン等は犬だからいいんだやな」

コマがよくわからない自論を説きながらコロコロ転がる

「安心なんだやな～」

イヌも同じくコロコロ転がった

「あとは寝るだ：」

フニフニと顔を撫でていたイヌの鼻がピクッと動きバツと起き上がった

「この感じ…この匂い…」

同じものをたぶん感じ取ったのかコマも起き上がり鼻をきかせる

「…主…！」

二匹同時に口にしたその言葉と共にコマがゼンヘそしてイヌがゴへと姿を変え走り出した

「今…ってなんだ？」

京助が聞く

「制多迦様は…」

慧喜がつらそうな顔で口を開いた

「慧喜…？」

その慧喜を悠助が心配そうに見ると慧喜が悠助を抱きめて顔を上げた
「…義兄様達が知ってる制多迦様は制多迦様の半分の制多迦様なんだ…」

慧喜が言う

「半分？ ハーフ？」

南が聞き返す

「制多迦様には義兄様達の知らない制多迦様がいるんだ…」
慧喜が小さく言う

「俺等の知らないタカちゃん…あなたの知らないタカちゃん？；

…多重人格ってことか？」

坂田が聞く

「義兄様を知ってる制多迦様がどうして眠らなかったか…話してあげる」

窓に三月のみぞれ混じりの雨がココンと当たった

「制多迦様は自分で抑えられないくらいの力を持っているんだ…自分すら自分で消してしまう位の力を」

慧喜が話し始めた

「だから上が…力と感情を分けたんだよ…感情が抜けた部分で自分

で力を使えるようにって」

「分けた…？」

京助が疑問形に聞いた

「そうだよお前達が知ってる制多迦様は感情を表にした制多迦様なんだよ」

鳥俱婆迦が答えた

「そしてその…義兄様達が知らない制多迦様は…感情が殆どない力の制多迦様…」

慧喜がキュツと唇を噛んだ

「制多迦様はもう笑わない…泣かない…そして…私達の事を見てくれないナリ…」

慧光がぐすつと鼻を拭る

「あるのは…上の命に従って自分の考えで力を使う…獣の本能を持った操り人形みたいな感情…」

慧喜が言う

「制多迦様が眠ると感情も眠るから力の制多迦様が起きてくるんだ」
鳥俱婆迦が言った

「だから制多迦様は眠らなかったんだ」
茶の間がしん…となった

「…いくら矜羯羅様でも制多迦様には…勝てない…ナリ…だから…」
慧光が俯いたまま鼻を吸りながら言う

「助けて…欲しいナリ…ツ…矜羯羅様だけでも…ツ」

ヒツヒツと泣きしゃっくり地獄に陥りながらも慧光が必死で懇願した
「…助けたいならやっぱり宝珠は取っておくっちゃ」

緊那羅が言う

「扉を開けて…宝珠がなくなったら誰が矜羯羅を助けられるっちゃ？」

カチャカチャと空いた皿を重ねつつ緊那羅が慧光を見た
「私が扉を開けるっちゃ」

皿の次に箸を集めながら再び緊那羅きんならが言う

「でも緊那羅きんなら……!!」

「時間ないんだっちゃよね？」

何か言おうとした慧喜えきの言葉を緊那羅きんならが止めた

「私はこの中で一番力がないってこと……だからその私に今できることは扉を開けることなんだっちゃ」

そんなに大きな声で言ったわけではないのに緊那羅きんならの声がよく響いた

「どうして……空の事なのにお前は……」

「ここは栄野家だっちゃよ？　ね？」

慧光えいこうが小さく言うえいこうと緊那羅きんならが笑顔で返しそして3馬鹿と京助を見た

「あ……まあ……ハイ……」

坂田が躊躇いながらも頷く

「私が助けたいから助けるんだっちゃ」

皿の上に茶碗を重ねてソレを持った緊那羅きんならが立ち上がった

「台所に下げたらすぐ来るっ……」

スパア————————————————————

————————ン!!!!

予告もなしに勢いよく開いた襖に茶の間が驚きの静寂に包まれた

「ここじゃないんだやな!!」

ゴが茶の間の中を見回した後また顔を引っ込めてバタバタと走っていく

「お邪魔しましたんだやな!!」

そのゴに続いて顔を覗かせたゼンもまたすぐに顔を引っ込めてバタバタと去っていく

「……なん……」

あっけに取られながら南が口を開いた

「何か探してたみたいだったな……」

中島が言う

「晩飯はさつきあげたはず…だっちゃけど…」
立ち尽くす緊那羅きんならが言った

「見つけた…んだやな…」

境内の裏手で目にいっぱい涙を溜めてゼンが見る先には誰かがいるらしく

「やっと…あえたんだやな…」

ゼンの見る先を同じく見てポロポロと涙を流しだしたのはゴ

「ずっとまってたんだやな…っ」

程なくしてゼンの目からも涙が溢れるとヒタという足音と共に誰かが二人に近付きそして二人の頭に手を置いた

「主…ッ」

泣きながらゼンゴがハモって言った

「…笑えないんだね」

ハアッと息を吐いた口元には血を拭ったらしい跡

「もう…笑わないんだね…」

「黙れ」

棒の先で顎を持ち上げられ無理矢理顔を上げさせられた矜羯羅こんがらがうつすら目を開けた

「…その声で話すのやめてほしいんだけど」

矜羯羅こんがらがそう言いながら棒を掴んだ

「…制多迦せいたか…【帰って】きなよ…」

棒を掴んだ手に力を入れて矜羯羅こんがらが立ち上がる

「迷惑なんかじゃない…困っているわけじゃない…僕はただ…」

フラフラと立ち上がった矜羯羅こんがらの顎を伝ったのは赤い血ではなく透明な液体

「扉を開ける。開けるつもりがないなら僕と戦え」

赤い目を鋭くして制多迦せいたかが矜羯羅こんがらに向かって言う

「…僕は…ッ」

目尻に溜まっていた涙を拭った矜羯羅こんがらが制多迦せいたかを見た

「私達が出る幕はないね」

ふいっと指徳しとくが踵を返すともう一人もソレに続く

「まかせろぞ制多迦せいたか」

指徳しとくの手の上の玉が言った

「制多迦せいたか」

二人の後姿を見ていた制多迦せいたかに矜羯羅こんがらが声をかけた

「僕はね…」

矜羯羅こんがらが一步足を進めると制多迦せいたかが棒を構える

「君の…」

矜羯羅こんがらがふっと笑い制多迦せいたかが棒を振り上げた

「でも大丈夫じゃないっしょ…って思うんだけど俺」

ゼンゴが去って緊那羅きんならが台所に向かってしばらくして南がボソツと言った

「扉：開けるのに宝珠だか使う…イコールラムちゃんの命を使うってこと…なんだよなね？」

南が言いながらチラッと慧光達えこうを見る

「命…って…いうことはさ…その…寿命が…になるんだよね？」
付け足すようにまた南が言った

「そうだよ」

鳥俱婆迦うぐぼかが答えた

「でもおいちゃんの計算では緊那羅きんならは止めてもやると思う」

「同感…」

鳥俱婆迦うぐぼかが言うと坂田もボソツと同意した

「…京助…」

「んだよ」

中島が京助を見た

「…俺にどうせっちゅーんだよ…」

京助が顔を背けて呟いた

「：俺等ってな〜んもできねえナア：こうなると」

坂田が肘をついて溜息もついた

「はじめから期待してないよ」

そんな3馬鹿と京助に向けて鳥倶婆迦うぐばかがさくつと言う

「おいちゃん達もなにもできない」

言った後小さくまた言った

「助けを求めてここにきた：何もできないからここにきたんだ」

段々と鳥倶婆迦うぐばかが俯き加減になる

「：ここしか：もうくるところがなかったんだ：【空】以外じゃこ

こしか：」

鳥倶婆迦うぐばかが黙るとソレからは誰も何もいわずにしんとなった

「矜羯羅こんがら様と制多迦せいたか様のいない空なんか：いたくないナリ」

慧光えこうが勢いよく鼻水をかんだ

「：横からはみ出てるぞ」

あまりにも大量に出た鼻水がティッシュの横からはみ出したのを見

て京助がティッシュの追加を手渡す

「でももし：扉を開けられたとしても：矜羯羅こんがらを助けられんのか？」

中島が言うとまた茶の間がしんとなった

「：重いなあ； この空気：嫌だなあこのシリアス空間；」

南がウダウダと言いながら窓の外を見て止まった

「：南？」

窓を見たまま止まっている南に京助が声をかけた

「おーい？」

中島も南に声をかけそして肩を叩く

「：何見：」

南を同じく窓の方を見た坂田も止まった

「おまたせだ：」

茶の間の戸を開け中に入ろうとした緊那羅きんならも窓を見て止まる

「：緊ちゃん？」

戸口に立ったままの緊那羅きんならを悠助が見上げる

「…なんだって…い…」

頭を掻きながら京助も窓を見てそれにつられるかの様に残りの面々も窓を見て…そしてやはり止まってしまった

ゴッ

という鈍い音がした

「…どうして防がない？」

赤い目の見据える先には矜羯羅こんがらの肩に見事に当たった棒

「…どうして攻撃しない？」

ヒュンと風を切り棒を持ち替えた制多迦せいたかが黙り込む矜羯羅こんがらに聞く

「…黙ったままじゃわからない」

コツと床に棒をつき制多迦せいたかがまた聞く

「諦めたの？」

一方的に制多迦せいたかがまた聞くと矜羯羅こんがらがゆっくり顔を上げた

「…痛い…」

矜羯羅こんがらがボソツと言った

「叩かれたら痛いのは当たり前だよ」

制多迦せいたかが返した

「…僕じゃない制多迦せいたかが」

おそらく碎けているであろう肩を掴んで矜羯羅こんがらが制多迦せいたかを見る

「僕は何も痛くない」

さらっと制多迦せいたかが言った

「お前じゃないよ…僕は制多迦せいたかが痛いって言ったんだ」

肩から手を離し矜羯羅こんがらが言う

「制多迦せいたかは僕だ」

制多迦せいたかが言う

「違うよ…お前は制多迦せいたかじゃない…外見は制多迦せいたかでもお前は制多迦せいたか

じゃない」

ふっと笑いながら矜羯羅こんがらが言った

「いつも見てきた…お前が残した跡を見た制多迦せいたかを」
矜羯羅こんがらが静かに言う

「生命がなくなった跡を見た制多迦せいたかを僕はいつも見てきた…その度に制多迦せいたかは…」

矜羯羅こんがらが言葉に詰まる

「【帰って】きなよ制多迦せいたか…」

矜羯羅こんがらが一步足を進めると制多迦せいたかがまた棒を構える

「…せっかくずっと笑えていたのに…」

また一步 矜羯羅こんがらが制多迦せいたかに近付く

「…僕の好きな笑顔をもう…絶やさないで…」

「いやゝそれがさいつもここにいるじゃない？ でもきたらいないじゃん？ 困ってさー？ でもホラねえ？ 大事にしちゃまたアンタ等に攻められるとか考えちゃったわけでさー？ んでもやっぱり言った方がいいのかなー？ なーんでおもったりもなんだったりも？ だからこうして…」

「だ————ッ！！； やかましいわたわけッ！！！！；」

迦楼羅かるらの怒鳴り声が響いた

「貴方も充分やかましいですよ」

「だっ！！；」

そんな迦楼羅かるらにお約束とばかりに乾闥婆けんたつばがチョップで突っ込みを入れる

「いやいやゝ？ ういもまあずっとここについてるわけにもいかな
いじゃない？ 最近一気に成長しちゃったり？ だからもしかしてゝ
とか思っただけどそのもしかして？ そうなの？ そうなん
でしょ？ わーなんだかういもこんなことしてられないんじゃないか

「貴方は本当にやかましいですよ」

「まあ……だいたい見当はついているんだがな……」

「何々？ やっぱり？ やっぱりあそこにいったんだ？ いいなー

マシンガン
トークがまた再開されると乾闥婆けんだつばが溜息をつく

迦楼羅かるらが指を二本立てて言った

「なんだよ乾闥婆ー？
ういにだってそれくらい黙ってられるさ」

いいの？ 本当？ 三十秒黙ってたら行っているんだよね？ そうだよ？ やったー前に宮司が騒いだ時ってあれでしょ？ きてた

[illegible]

マシンガン・トークが全弾命中している迦楼羅かるらがまたも怒鳴った

けんだつは
乾闥婆がまた溜息をついた

坂田が顔は動かさず目だけを動かして京助を見た

そして京助も坂田と同じく目だけを動かして緊那羅を見る

「私も：二回くらい：見た：：のような気がする：：っちゃ；」

緊那羅きんならが連鎖反応なのかまた目だけを動かして南を見た

「いや～：でも：：さあ；」

南が中島を見た

「：：いつの間に増加したんだ？；」

ポンポンと会話は進めどまだ止まったままの顔が見つめる先には窓枠に必死にしがみついて登ろうとしている手

「かるらん？」

それを見て悠助が立ち上がった

「待って悠助：よく見て？」

慧喜えきが悠助に言うとうと悠助が窓枠をもう一回よく見る

「：：かるらんいっぱい：？」

悠助が見た窓枠には合計8つの手

「なあ：緊那羅きんなら：鳥類って影分身の術とか：使えるのか？」

京助が緊那羅きんならに聞く

「さ：：あ；」

緊那羅きんならがどもりながら返事をする

「もしかして分裂したのかもよ？ 単細胞生物って分裂するって言

わないか？」

坂田が言った

「おいちゃんの計算では今頃 迦楼羅かるらクシャミ連発してると思う」

鳥俱婆迦うぐぼかが言った

「あ、消えたナリ」

慧光えこうの言葉に一同が窓枠を見るとさっきまであった手が消えていた

「諦めた：：のか？；」

中島がゆっくり立ち上がって窓に近付く

「：：何もいない：：ぞ？；」

そろ～つと外を見た中島が言う

「：：鳥類なら意地でも入ってくるから鳥類：：じゃなさそ：」

ガラッ

京助の言葉の途中で玄関の戸が開く音がした

「ハルミママかな？」

悠助が言う

「いや：集会に出向いた母さんがこんな早く帰ってくるわけがない
：」

京助が言った

「午後８時：こんな時間に来るって：集金とかでもなさそうだよナ
ア；」

南が言う

ドタドタドタドタ：

「：何か：沢山聞こえますよね足音；」

坂田が言うと一同が頷く

「：お邪魔しますとか聞こえなかった：よね？；」
南が言うともたも一同が頷く

「：ドロボウ？；」

中島が言うとそろって戸に視線を向けた

「びくしょっ！；」

「あー？ 迦楼羅^{かるら}ほら鼻水飛ばなかった？ 飛んだよね？ うわー
汚いなー汚いよ？ っていうか鼻水でてるんじゃない？ もー風邪
でも引いたの？ また窓開けたまま寝てたんじゃない？ 寝てたん
でしょ？」

「えー————い！！； 少しは本当黙らんかッ！！！！；」
ズビツと鼻を吸りながら迦楼羅^{かるら}が怒鳴る

「袖口で拭かないでください」

「だっ！；」

袖で鼻を拭おうとしていた迦楼羅^{かるら}の顔を無理矢理横に向けて乾闥婆^{けんたつば}
が取り出した布で迦楼羅^{かるら}の鼻を拭いた

「ホラ後は自分でかんでください」
ある程度ふき取ったところで乾闥婆けんたっぽが迦楼羅かるらに布を渡した
「とにかくさ？ 探したけどコッチにはいないんだよね？ だから
もってアツチだと思っただけ？ で！！ ういも連れて行ってくれ
るの？ ねえ？ 迦楼羅？」
鼻をかんだ迦楼羅かるらが顔を上げてそして深く息を吸い込んだ
「後21秒我慢できてたらよかったのにな」
その横で乾闥婆けんたっぽがまた溜息をついた

ズダ——————————
————————————
————————————

「おうわッ！！；」

「だ————————————ッ！！；」

「うわっ！！；」

いきなり倒れてきた茶の間の戸（襖）に近くにいた緊那羅きんならと慧光えこう
そして坂田が声を上げた

「一体いつからお前ン家の襖は倒して入ることになったんだ？」

中島が京助に聞く

「知るか； ……ってか；お前等なあ；」

倒れた襖の上にうつ伏せになっていたゼンゴに京助が声をかけた

「勢いつきすぎたんだやな；」

いやあというカンジに頭を掻きつつゼンが起き上がる

「どんだけ激しい勢いですかい；」

京助が口の端をあげる

「…で」

南が【で】と言いながら襖のなくなった戸口を見た

「あの子達何？」

南の言葉に顔を戸口に向けた一同が目にしたのは黙って部屋の中を
見ている4人の見たことのないお子様達

「…誰？」

悠助が声をかけるとそのうちの一人…頭に三角の生えた大きな眼をした子供が悠助を見た

「…あ—————
—————
！！！！！」

そして大声を上げる

「お前もしかして悠助か？」

別の子供…今度は頭に一本角の生えたいかにもやんちゃそうな子供が悠助に近付いた

「う…ん」

悠助が戸惑いながら返事をする^{えき}と慧喜がその一本角の子供を睨みつつ悠助をかくまうように抱きしめた

「じゃあ京助は…」

「コイツ」

「うおい；」

また別の子供今度は頭に二本角を生やした目つきの悪い子供が聞くと中島が京助の腕を持って教える

「ハルミソックリになってきたな」

最後の一人…前髪で目が見えない四本角を生やした子供が言う

「ハルミ…って…」

^{きんなら}緊那羅が四本角の子供の言葉に反応して言った

「誰だよお前達ッ！」

^{えき}慧喜が怒鳴る

「主なんだやな」

ゼンゴがはもる

「ほー…主かあゝ…」

坂田が頷く

「主？」

^{うぐぽか}鳥俱婆迦が聞く

「そうなんだやな」

ゼンが答えた

「じゃあ竜なの？」

鳥俱婆迦うぐはかがまた聞く

「そうなんだやな」

ゴが答えた

「へー竜ねえ…」

中島が鼻くそをほじりながらティッシュを取った

「ってことはアレだな京助のお…」

笑いながら言おうとした南がハタと止まる

「

俺の何だよ；」

京助が止まった言葉の続きを催促するように南に突っ込んだ

「竜…って…」

慧光えいこうが言う

「竜は竜だろ？ それより俺のなんだよ； 気になるから止まんな

よ；」

慧光えいこうに何気に突っ込んだ後京助が再度南に聞く

「…お父さん…？」

悠助がボソツと言った言葉に京助が少し考え込んだ後ハツとして四

人の子供を見た

「お前等の父親って…ちみっこだった上4人もいるのか？」

坂田が言う

「俺の知ってる竜は…一人だけど」

慧喜えきが信じられないという顔で四人の子供を見た

「元は一つだったんだけど」

一本角の子供が言う

「…今はワケあってこうなってる」

三本角の子供が続けて言った

「本当に…お父さん？」

悠助が聞くと四人の子供が悠助を見た

「そうだよ…って言っても信じられないだろう？」

一本角の子供が苦笑いで聞きながら頭を撫でると悠助がブンブンと首を横に振った

「…そうか」

撫でながら一本角の子供が嬉しそうに笑った

「でも何で今…今まで何も…」

混乱してるのか京助が独り言のように言うと二本角の子供が京助の近くに歩み寄った

「お前…力が目覚めただろう？」

二本角の子供が言うとき京助が顔を上げた

「京助…お前の中にあつた俺の力が目覚めたことで…俺…俺達に少し力と記憶が戻ったんだ…記憶が少し戻って一番最初に浮かんだのが…ここです」

京助より小さな手が京助の頭を撫でた

「大きくなったな」

二本角の子供が笑いながら京助の頭を撫でる

「竜…」

それを見ていた緊那羅きんならが呟くように言うと四本角の子供が緊那羅きんならに近付いた

「阿修羅あしゅらから貰ったもの…まかせていいか？」

目は髪で見えないものの口元が笑っている四本角の子供が緊那羅きんならを見上げた

「え…」

緊那羅きんならが驚いていると三本角の子供も近付いてきて緊那羅きんならを見上げる

「君に足りないのは自信だよ緊那羅きんなら」

「どうして名前…知ってるんだっちゃ…」

名前を言われて更に驚いている緊那羅きんならを見て二人の子供が顔を見合わせた後笑った

「俺の心：持っているだろう？」

三本角の子供が緊那羅きんならの腕についている緊那羅きんならの宝珠を突付いて言う
「宝珠は持ち主と一心同体だからね」

四本角の子供が言った

「ねえ」

鳥俱婆迦うぐぼかが慧光えこうの服の裾を引っ張る

「竜なら…」

「わかってるよ」

鳥俱婆迦うぐぼかが言い終わらないうちに二本角の子供が鳥俱婆迦うぐぼかと慧光えこうに
笑顔に向けた

「君達の大切な人が危ないんだろう？」

二本角の子供が慧光えこうと鳥俱婆迦うぐぼか（うぐばかりを見た

「でも：お前は：天なんナリよ：？」

慧光えこうが助けて欲しいけどでも：なんだか躊躇うなあというオーラ全
開で言った

「俺は天だとか空だとかどうでもいいと思ってるんだ」

一本角の子供が言う

「こんな考えだから上に目えつけられてたんだ」

ハッハと一本角の子供が笑った

「君達の大切な人：矜羯羅こんがらと制多迦せいたかだね」

三本角の子供が言うと何度も頷く慧光えこうの目からまた涙が流れた

「今の俺に：俺達にどこまでできるかわからないけど…」

「それでもッ：！！　それでもお前は私達より力あるナリ：だから
…」

四本角の子供が言うと慧光えこうが鼻水を流して言った

「あの子達もまた：ここの居心地のよさに気づいたんだな」

二本角の子供が茶の間をぐるり見渡した

「

前はここに：そうだ悠助の哺乳瓶やら入れる棚があったんだっけな」

一本角の子供が今は何も置かさっていない部屋の隅を目を細めて見た
「ハルミが悠助に掛かりつきりで捻くれた京助が悠助の粉ミルク全部
食い尽くしたつけナァ…」

二本角の子供が懐かしそうに言うと言うと一堂の視線が京助に集まった

「マジで…?;」

「飲んだんじゃなく…食った…んだ;」

「いろんな意味で嫌な子供だったんだなお前;」

3馬鹿が口をそろえて言う

「覚えてねえよんなことツ;」

京助が反論する

「…さあて…」

一本角の子供が大きく伸びをするとその周りに角の子供達が集まった

「扉を閉じてるのは…こんがら矜羯羅だね」

三本角の子供が言うと言うぐばかと鳥俱婆迦が頷いた

「開けられるナリ…?」

不安な顔で慧光えいこうが聞く

「開けて矜羯羅様助けられる力残るの?」

鳥俱婆迦うぐばかも不安そうな声で聞いた

「扉は私が…」

「君の役目は?」

言った緊那羅きんならに四本角の子供が言った

「君の力は今使うべきじゃない…そうだろうか?」

二本角の子供が言う

「君達も…だ」

続けていった二本角の子供が茶の間にいる全員を見渡した

「京助、悠助」

いきなり名前を呼ばれた京助と悠助が驚いた顔を上げた

「おいで」

三本角の子供が手招きした

「栄野兄弟ご指名はいりマァース」

南が立ち上がった京助の尻をペンツと叩きながら言う

「：父親を見下ろすな」

「じゃあねえだろがッ！；」

自分たちより背の高い京助に一本角の子供が言った

「本当に大きくなったな二人共」

四本角の子供が京助の手を取った

「あの頃と逆の大きさだ」

京助の手を握った四本角の子供の手に手を重ねた二本角の子供が笑う

「主：」

ゼンゴが切なそうな顔を四人の子供に向ける

「悠助も：今の俺と同じくらいの大きさだ」

三本角の子供が悠助の手を取った

「指しか握れなかったのにな：」

三本角の子供の手に一本角の子供が手を重ねる

「：ごめんな」

一本角の子供と二本角の子供が手を繋いだ瞬間聞こえたのは若い男性の声

「お：」

何か言い始めようとした悠助の目の前が光に包まれた

「ゴジラ再び：」

京助と悠助の背から生えた羽根を見て坂田が言う

「何が一体：；」

そんなに強い光りではないのにぼやっとしていてあまり見えなく何がわからない現状に中島が言う

「お：とうさん：」

霧の様な光りの中で悠助が小さく呟くと頬を撫でた大きな手

「僕ね：」

ゆっくりと悠助のまぶたが閉じた

「京助！！」

グラついた京助がぼんやりと見えた緊那羅きんならが手を伸ばすと光りの中から出てきた手に腕を捕まれた

「な…離…」

腕を引っ張られた緊那羅きんならがブンブンと腕を振ってつかんでいる手を離そうとすると腕に重みを感じる

「…京助…?」

その重みが京助であることに気づいた緊那羅きんならの腕がずり落ちないよう反射的に京助を抱きしめた

「京助を本当の意味で守ってやれるのは君なんだよ…」

だんだんと視界が開けてゆく中 緊那羅きんならの耳元で聞こえた声

「…竜…?」

意識を失った京助を抱えた緊那羅きんならが目の前で悠助を抱えた若い男に向かって言うとその男がにっこりと微笑んだ

「悠助!!」

竜の腕に抱かれている悠助を見て慧喜えきが駆け寄った

「竜…」

鳥俱婆迦うぐばかが言うのと竜が振り返る

「さあ…行こうか」

駆け寄った慧喜えきに悠助を託した竜が倒れていた襖を直して廊下に出ると慧光えこうと鳥俱婆迦うぐばか、そしてゼンゴも竜に続いた

「ま…」

後を追おうとした緊那羅きんならが意識のない京助を見てそれからまた廊下を見る

「…アレが…京助の…」

啞然としていた南がようやく口を動かした

「そしてハルミさんの…」

坂田がずり落ちたメガネを掛けなおしながら竜の去った廊下を見る

「京助頼むっちゃッ!」

「えっ； ちょ…!!」

中島に京助を半ば強引に押し付けた緊那羅きんならが茶の間から飛び出した

「竜! !」

境内の御神木の側に立っていた竜が緊那羅きんならの声に振り向いた

「また戻ってくるっちゃよね?」

緊那羅きんならが聞くと竜がゆつくりと空を見上げた

「戻って…きたいね…ここは俺が一番好きな場所だからな」

まだ肌寒い夜風を体を感じながら竜が言った

「守りたいものが沢山有る場所だ」

悪戯っぽく竜が笑った

「貴方は戻ってこなくちゃいけないんだっちゃ…貴方を待ってる人がいるんだっちゃ…だから…」

緊那羅きんならが少し白い息を混ざしながら言うのを聞きながら竜が右手を上げた

「主…」

ゼンゴが竜を見上げる

「開けるぞ」

竜が親指を中に折り込んだ状態で掌を宙に翳した

ぼんやり見えた見慣れた天井がこれまた見たこと有る三人の顔でさえぎられた

「お、気づいたか」

中島が京助の鼻をつまんだ

「…俺…」

中島の手をつねって外すと京助が起き上がり部屋の中を見渡す

「…悠?」

そして慧喜えきの腕の中で眠っているような悠助を見てそのあと少し考え込んでハッとして顔を上げ立ち上がってグラついた

「っとおう!!!; しっかりー!!!」

倒れそうになった京助を南と坂田が支えた

「手…」

「手？」

支えられたまま京助が自分の手を見た

「アイツの手いきなりでかくなって…すげえ…懐かしい感じがしたんだ…」

京助が見ていた手を握ってまた立ち上がった

「そりゃ…お前…」

坂田が言いかけて口を噤んだ

「…見て…ないのか？」

中島が京助に聞く

「…ドコ…いったんだ？」

京助が聞き返してきた

「外…って京助！…！」

南が言うや否や京助が駆け出した

が一旦部屋から出てまた戻ってくると慧喜^{えき}に抱えられていた悠助をぶんどって抱きかかえるとまた茶の間から出て行った

「ハルミママさん…ずっと待ってるっちゃ…」

緊那羅^{きんなら}の言葉に竜の肩がぴくつと動いた

「迦楼羅^{かるら}から貴方が生きてるって聞いてから…ハルミママさん…ずっと…」

緊那羅^{きんなら}が言う

「ハルミママさんだけじゃないっちゃ…京助も悠助もそして吉祥^{きつしやう}も阿修羅^{あしゅら}も…皆貴方を待ってるんだっちゃ」

緊那羅^{きんなら}の言葉を聞いた竜の口元が微笑んだ

「靴はいてこないと…ハルミに怒られるぞ？」

竜が言うと緊那羅が振り返った

「…京助…」

雪解けでドロドロの地面に白い靴下で立っていた京助を見て緊那羅^{きんなら}が駆け寄った

「京助だい…」

大丈夫かと声をかけようとした緊那羅きんならの前を横切って京助が竜に近付く

「京助…？」

緊那羅きんならが京助の背中に声をかけた

「悠は…」

竜の前で足を止めた京助が顔を上げないで口を開いた

「悠は…肩車してもらったことねえんだよ…アンタに」

京助が言うと言が上げていた手を下ろした

「俺でもできるけど…でもさ…やっぱり…して欲しいんだよ…」

俯いたまま話す京助が抱きかかえていた悠助の体に竜が手を伸ばした

「父親に向かってアンタってなんだアンタって」

空いている手で竜が京助の頭をぐしゃぐしゃと撫でる

「…でもな…父親らしいこと何もしてないからな…」

目を閉じたままの悠助の体をヒョイと持ち上げた竜が苦笑いで言った

「京助泣いてるんだやな？」

「泣いてねえッ！！！」

ゼンが京助の顔を覗き込んで聞くと京助が怒鳴る

「コラコラ； ご近所迷惑だろう？」

悠助を抱きかかえた竜がゼンと京助の頭を小突いた

「肩車…か…お前もよく強請ってきたな」

竜が微笑みを京助に向けると目を閉じたままの悠助を肩車した

「悠…寝てちゃわからんだろ；」

「京助少し右にどけてくれっちゃ」

悠助の膝を突付いていた京助が緊那羅きんならの声に振り向いた

パシヤッ

という音と光りに京助が目を瞑った

「…何…；」

目を開けた京助が緊那羅きんならを見るとカメラを手にした緊那羅きんならがいた

「写真：撮ったんだっちゃ」

緊那羅きんならが言う

「写真撮れば悠助もハルミママさんも竜がいたってわかるっちゃ……だから写真撮ったっちゃ」

ぽかんとしている竜と京助に緊那羅きんならが言った

「悠助が起きたら見せるんだっちゃ……竜……お父さんに肩車してもらったんだって」

緊那羅きんならがカメラをしまった

「……お前は……」

京助が呆れたような笑を緊那羅きんならに向けた

「ハッハッハ」

竜が笑う

「いや……なんだ……ありがとな緊那羅きんなら」

笑いながら竜が緊那羅にお礼を言った

「……ごめんナリ……」

慧光えいこうが小さく言った言葉に京助が慧光えいこうを見た

「私……自分の大切な人を助けたいから……でも……」

目に涙をためた慧光えいこうが京助を見た

「でも……それはお前の大切な……」

「……それ以上は言わないこった」

慧光えいこうの言葉を京助が止める

「コイツが助けるっていつてるんだから……誰のせいでもねえよ」

京助がぐいっと親指を竜に向けた

「父親にコイツがお前は」

竜が京助に突っ込む

「……京助……」

緊那羅きんならが京助に声をかけた

「時間ねえんじゃねえの？」

竜を見ないで京助が言う

「…そうだな…」

竜が悠助を肩から下ろして抱きかかえた

「慧光えいこうと鳥俱婆迦うぐばか…お前達の大切な人達を助けるのに手を貸してくれるか？」

竜が言ううぐばかと鳥俱婆迦と慧光えいこうが頷く

「…京助」

少し間を開けて竜が京助に声をかける

「悠助…落すなよ？」

お姫様抱っこ状態の悠助を京助の前に差し出すと京助が無言で悠助を受け取った

「主…」

竜を呼んだゼンゴの頭を竜がクシャクシャ撫でる

「また…頼むな？」

竜が言ううぐばかとゼンゴが首が吹っ飛ぶんじやないかというくらいの勢いで何度も首を縦に振って頷く

「…京助」

ポフッと京助の頭に竜が手を置いた

「ごめんな」

ゆっくりと京助の頭を撫でながら竜が謝った

「…アンタが謝るのは俺じゃなく母さんにだろ…」

小さく京助が言う

「…そうか…？」

眉を下げて笑う竜が京助の頭から手を離れた

「しいたけ食えるようになったか？」

「苦手だけどな」

「おねしよは？」

「してねえよ」

「自分の名前漢字で書けるか？」

「いくつだと思ってんだ」

「いくつになった？」

「14：なんだよ…」

竜の他愛もない質問に京助が俯いたまま淡々と答える

「…ってきたら…」

再び腕を上げた竜が京助の小さく言い始めた言葉に振り向く

「ちゃんと帰ってきたら：呼んでやるよ：アンタのこと父さんって」

その言葉に竜がふっと微笑んだ

「約束：な？」

かざした竜の手に光が集まりだした

「京助…」

竜と鳥俱婆迦うぐぼかそして慧光えいこうが扉をくぐり消えてしばらくして緊那羅きんならが

京助に声をかけた

「…見んな…」

悠助の体に自分の頭を押し付けて京助がくぐもった声で言う

「うん：見ないっちゃ」

頷いた緊那羅きんならが悠助ごと京助の頭を抱きしめるとコマイヌの姿になった二匹が京助の足に擦り寄ってきた

「ごめんね：制多迦せいたか…」

制多迦の肩に頭をつけた矜羯羅こんがらが小さく言った

「結局僕は…」

矜羯羅こんがらの前髪の一部が赤く染まり頬を赤い血が伝う

「……」

制多迦せいたかの肩からゆっくりズルズルと矜羯羅こんがらの頭がずり落ちていくのを制多迦せいたかはただ黙って見ていた

「上の命は絶対：それに反した矜羯羅こんがらは…」

床にうつ伏せに倒れた状態の矜羯羅こんがらに目をやると制多迦せいたかが再び棒を振り上げてそして止まった

「…何…」

目の前がぼやっとしたかと思うと制多迦せいたかが自分の頬を何かが伝うの

を感じた

「どうして…」

振り上げていた棒を握る手から力が抜けカランと音を立てて棒が床に落ちた

「何で…コレは…僕が泣く…？ まさか…僕は…」

制多迦せいたかが自分の流した涙に驚く

「矜羯羅様こんがらッ！！！！」

流れ止まらぬ涙を拭っていた制多迦せいたかが聞こえた声にハッとして顔を向けると壁にひびが入り

ドオン！！

という音を立てて光が広がった

「こ…矜羯羅こんがらさまあッ！！！！」

青い顔をした慧光えいこうが倒れている矜羯羅こんがらの元に駆け寄るとその後を鳥う倶婆迦くばかも追う

「…竜…」

制多迦せいたかが最後に現れた竜を睨んだ

「驚いたな…泣いているのか制多迦せいたか…」

「うるさいよ…僕にもわからない」

竜を睨みつつも止まることのない涙を拭いながら制多迦せいたかが言う

「矜羯羅様こんがら…ッ」

矜羯羅こんがらを抱き起こした慧光えいこうが意識のない矜羯羅こんがらを見て今にも泣き出しそうな顔をした

「泣いてる暇はないよ慧光えいこう」

そんな慧光えいこうに鳥倶婆迦うくばかが言う

「泣くのは矜羯羅様こんがらを…ううん矜羯羅様こんがらと制多迦様せいたかを助けてからだよ」

鳥倶婆迦うくばかが言うときズビツと鼻を吸った慧光えいこうが頷いた

「僕が泣くななんてあつてはならないんだ：僕には感情はいらない：感情なんかない：」

制多迦せいたかがまるで自分を落ち着かせようとするかのように言う

「：制多迦せいたか」

竜が一步足を進めて制多迦せいたかに声をかけた

「寄るな」

落していた棒を足で蹴り上げ手に取った制多迦せいたかがその棒を竜に向けた

「お前も：好きなんだろう？ あの場合が」

もう一步足を進めながら竜が微笑んだ

「制多迦様：」

矜羯羅こんがらを腕に抱いた慧光えいこうが鼻水を出しながら小さく言うと鳥俱婆迦うぐばか

が自分の袖で慧光えいこうの鼻水を拭う

「【帰って】きたいんだろう？」

「うるさいよ」

更に制多迦せいたかに近付いた竜を制多迦せいたかが睨んだ

「俺が手を貸してやるから：【帰って】こい」

竜が手を差し出すと足を一步引いた制多迦せいたかが攻撃の構えをする

「鳥俱婆迦うぐばか：慧光えいこう」

視線は制多迦せいたかから逸らさず竜が鳥俱婆迦うぐばかを慧光えいこうに声をかけた

「もうしばらくしたらおそろく宮司に見つかる：だけどお前達は空

だから大丈夫だ：俺が制多迦うぐばかと扉を閉ざす：まだ【時】はきていな

いからな：」

竜が言う

「閉ざす：ってじゃあお前は：」

「制多迦様を：って：」

鳥俱婆迦うぐばかと慧光えいこうがそれぞれ違うことを同時に聞いた

「：俺の大事なモノを守るのもお前達の大事なモノを守るにも：こ
うするのが今一番いいと思うんだ」

竜が笑う

「僕を閉ざす？

無理だよ：わかるんだ竜：お前は今まで完全じゃ

ない」

まだ止まらない涙にもう構わず制多迦せいたかが言った

「ああ…まあ…何とかなる…いや…しなければ駄目なんだ」

再び視線を制多迦せいたかに向けつつ竜うぐぼかが言う

「鳥俱婆迦うぐぼか…慧光えこう…京助に一つ言っておいて欲しいんだけど」

竜うぐぼかが言うと鳥俱婆迦うぐぼかと慧光えこうが顔を見合わせた

「…約束守れよってな」

そう言いながら床を蹴った竜が制多迦せいたかに向かっていった

鼻についたほのかに香る消毒液の匂いと口に残る微妙な味に矜羯羅こんがらがゆっくりまぶたを上げた

「…重い…」

腹の辺りになんだか重みを感じて頭を起こすと額に乘せられていたタオルが落ちた

「怪我人はおとなしく寝ていてください」

トゲの効いた一言に矜羯羅こんがらがそのままその声の方向に目をやる

「…け…」

ソコにいたのは笑顔は笑顔だがやはり何かが怖い笑顔をした乾闥婆けんたつぽ
「まったく…どうして僕が…」
ブツブツ言いながら乾闥婆けんたつぽが矜羯羅こんがらの額から落ちたタオルを拾い側にあった桶の中に入れた

「数箇所折れていましたけどソーマを飲ませましたから多少痛むでしょうけどしばらくすれば完治します…おとなしく寝ていればの話ですけど」

にっこり笑いながらもタオルを絞る乾闥婆けんたつぽの手にはコレでもかという力が込められているのが見てわかる

「…ここは…京助の家…？」

自分に掛けられた軽めの羽根布団と毛布を見てその後部屋を見渡した矜羯羅こんがらが呟く様に聞いた

「僕の話は無視ですか？」

スペンッと乾闥婆けんだつばが絞ったタオルを矜羯羅こんがらの額に勢いよく押し当てるとそのまま矜羯羅こんがらの頭を無理矢理枕につけた

「どうして君が…」

目をふさいでいたそのタオルを少し持ち上げて矜羯羅こんがらが聞くと睨むように乾闥婆けんだつばが矜羯羅こんがらを見た

「…そこで眠っている方達に泣きつかれたんです」

【そこ】と乾闥婆けんだつばが顎でくいつと指した方向を矜羯羅こんがらが見ようとまた体を起こす

「…慧光…？」

自分の腹辺りで寝息を立てていたのは慧光えいこう

「そっちにもいます」

乾闥婆けんだつばがソツチと指差した方向を矜羯羅こんがらがまた見る

「鳥俱婆迦…悠助…慧喜…」

壁にもたれかかって寝ている慧喜えいきの膝枕で眠るのは悠助、その悠助の尻部分に頭をつけてたぶん寝ているのは鳥俱婆迦うぐばか

「さっきまで京助や緊那羅きんならもいたんですけど追い出しました…一応

貴方は怪我人ですからね」

乾闥婆けんだつばが【一応怪我人】部分を強調して言う

「何があったのか聞く前に泣きながら助けてくれと連呼されて…」

溜息をつきながら乾闥婆けんだつばが開いていた救急箱の蓋を閉めた

「断ったらまるで僕が悪役じゃないですか…何も知らないで悪役呼ばわりされるの僕だっけんだつばて嫌ですから」

にっこりと笑顔で乾闥婆けんだつばが言った

「…僕なんか助けて…なんになるんだろうね…」

矜羯羅こんがらがボソツと言った

「僕は…」

「その言葉今寝ているこの子達が起きた時にもう一度言ってみたらどうです？ 必死で貴方を助けたこの子達の目の前で」

乾闥婆けんだつばが言う

「貴方を助けて何かになるから助けたんじゃないんですか？」

乾闥婆けんだつばの言葉に矜羯羅こんがらが少し驚いたような顔で乾闥婆けんだつばを見た

「貴方には貴方の必要性がなくともこの子達には貴方の必要性があるから目が腫れるまで泣くこともできると思いますが」

そう言われて見た慧光えこうのまぶたは赤く腫れていた

「どんな理由でも：誰でも誰かに必要とされているんです：それがいい感情ではなくても」

乾闥婆けんだつばの顔が一瞬曇る

「：それは自分の事：言っているの？」

矜羯羅こんがらが乾闥婆けんだつばに聞く

「誰かを憎むことによってそれを生きる糧としている人だっています：憎まれているということが僕を：生かしている：」

乾闥婆けんだつばの言葉が止まった

「君はまだ：あの時のこと：」

「忘れられると思いますか？」

矜羯羅こんがらが聞こうとするとその言葉を乾闥婆けんだつばが強い口調で割った

「：僕は迦楼羅かるらの罪なんです：この先もずっと迦楼羅かるらの罪ということが僕を生かすんです」

乾闥婆けんだつばがにっこりと笑う

「罪としてでも：迦楼羅かるらは僕を必要としてくれている：だから僕は迦楼羅かるらの隣にいるんです」

乾闥婆けんだつばの言葉を聞きながら矜羯羅こんがらが慧光えこうの頭をゆっくりと撫でる

「：あいかわらず：だね姿が変わってもそのまま」

矜羯羅こんがらが静かに言う

「僕は今誰でもない乾闥婆けんだつばです」

乾闥婆けんだつばが強く言った

「：そうだったね：」

矜羯羅こんがらがふっと笑った

「おとなしく寝ていることです」

乾闥婆けんたつばが立ち上がり出口ではない方向に足を進める

「ねえ…」

矜羯羅こんがらが乾闥婆けんたつばを呼び止めた

「なんです？」

乾闥婆けんたつばが襖を開けながら聞き返す

「制多迦せいたかは…」

「いだだだだだだだッ！…！」

乾闥婆けんたつばが開けた襖の向こうから聞こえた迦楼羅かるらの声

「きゃっきゃっ！！」

それに続いて聞こえたのは幼い笑い声

「ギャー！！； 何か匂う匂うッ！！；」

バタバタという足音と京助の声

「あつ； ころそっちいっっちゃ駄目だっちゃッ！！；」

空けている隙間から見えたのは慌てて何かを追いかけていく緊那羅きんなら

「…何やってるんですか…」

乾闥婆けんたつばが呆れたように言うのと途中まで開けていた襖を全開にすると

矜羯羅こんがらの目が点になった

そこに広がっていた光景はまるで託児所

迦楼羅かるらの前髪を引っ張って笑う赤ん坊の隣では違う赤ん坊を抱き上

げておたおたしている京助、そして暴れるまた別の赤ん坊を抱き上

げて赤ん坊パンチを連打されている緊那羅きんなら

そして

「…制多迦せいたかがどうかしましたか？」

乾闥婆けんたつばが目点をしたままの矜羯羅こんがらを振り返って聞く

「…はよ」

額に大きな絆創膏を貼り腕には眠る赤ん坊を抱いた制多迦せいたかが笑顔を
矜羯羅こんがらに向けた

「…せ…」

矜羯羅こんがらが一言言葉を発した

「夜行性なのかこいつ等はッ！！；　うあああ：なんかすっきりした顔してるしッ；」

京助が抱き上げている赤ん坊がやたら開放感に満ち満ちた顔をして
いる

「代わりますよ」

乾闥婆けんたつばが制多迦せいたかから赤ん坊を受け取った

「：りがと」

赤ん坊を手渡した制多迦せいたかが立ち上がって矜羯羅こんがらのいる部屋のほうに
歩きそして襖を閉めた

襖の向こうから聞こえるてんやわんやの声とは反対の沈黙

「：制多迦せいたかなの？」

矜羯羅こんがらが小さく聞くと制多迦せいたかがこくと頷いた

「：のね：」

「おかえり：」

何か言おうとした制多迦せいたかの言葉を矜羯羅こんがらの【おかえり】が止めると
制多迦せいたかがきよとした顔を上げ見たものは穏やかに微笑んだ矜羯羅こんがら

羅の顔

「：んがら：僕は：」

「謝ったら叩くよ」

その笑顔のまま矜羯羅こんがらが言う

「：も：僕は：」

制多迦せいたかがブンブン首を振った

「この怪我は制多迦せいたかがつけたものじゃない：だから制多迦せいたかが謝る必要
なんかないんだよ：」

矜羯羅こんがらが自分の肩を触った

「泣いても叩くからね」

そしえ付け加えた矜羯羅こんがらに制多迦せいたかが抱きつく

「：痛いんだけど」

矜羯羅こんがらがボソツと言った

「もう11時過ぎてるのに明かりがついてるから何事かと思ったら……」

上着を手に和室に入ってきた母ハルミが多少驚いた声で言う

「母さん：俺今ほど母さんが女神のように見えたことはねえわ……」
出すもんだしてすっきりしたのか京助の腕の中ですやすやと眠る赤ん坊

「お……かえりだっちゃ……」

まだまだ遊べるぜというカンジに笑う赤ん坊を抱えつつ緊那羅きんならが疲れきった顔をしている

「前が見えんではないかッ！ たわけッ！！！」

迦楼羅かるらは前髪を頭にぐるぐる巻かれて目隠し状態にされている

「おかえりなさいハルミママさん」

乾闥婆けんたつばが余裕の表情でハルミに挨拶した

「どうしたのこの赤ちゃん……」

緊那羅きんならの抱いていた赤ん坊を覗き込んで母ハルミが聞く

「……言っていいもん……」

京助が迦楼羅かるらと乾闥婆けんたつばを見た

「なあに？ 隠し事？ 内緒？」

母ハルミが京助を見る

「……話すしかないでしょう……」

乾闥婆けんたつばが言う

「……フオロー頼むぞ……」

京助が乾闥婆けんたつばに言った

「母さん」

京助が覚悟を決めて口を開くと自分が抱いていた赤ん坊を指差して一言

「パパでちゅよー」

「誰の」

ふつと竜が笑うと制多迦せいたかの目が見開いた

バチバチバチツ

赤い電撃が迸り光りが視界を奪った

「竜！！ 制多迦せいたかさ：！！」

その電撃を飲み込んだのはやわらかく暖かな光り

「制多迦様——————————————————————」

ツ！！」

慧光えこうの叫びが響いてからしばらくして光が収まった

「：竜」

鳥俱婆迦うぐばかが言うと慧光えこうが眩しさに閉じていた目を開けそして止まる

「せ：」

「大丈夫だ」

竜が腕に抱えた制多迦せいたかの顔を鳥俱婆迦うぐばかと慧光えこうに見せた

「：おいちゃんの好きな制多迦様せいたか：？」

鳥俱婆迦うぐばかが聞くと竜が頷く

「じゃあ：もう片方の制多迦様せいたかは？」

慧光えこうが躊躇いがちに聞くと竜が制多迦せいたかの頭の宝珠を指差した

「：宝珠：？」

鳥俱婆迦うぐばかも聞く

「今の俺の全力ではこの中に眠らせることしかできないんだ：そして俺ももうこの姿ではいられなくなる」

ゆっくりと腰をかがめて制多迦せいたかを床に降ろしてもう一人の制多迦せいたかを

眠らせたという宝珠を制多迦せいたかの頭から外した

「俺はこれからこの宝珠と残りの力でこっちから扉を閉ざす」

竜が制多迦せいたかの宝珠を持って立ち上がった

「今空は危険だ：」

フオオオオオオオオオオオオ：ン

竜が言うとはぼ同時に響いた鳴き声にも聞こえる音

「宮司…」

鳥俱婆迦うぐばかが言う

「でもそしたら京助…」

「そこでお前たちに頼みがある」

聞きかけた慧光えいこうに竜がにっこりと微笑んだ

「つまりは力を使った竜はこうなっただけです」

乾闥婆けんだつばが敷かれた布団ですやすや眠る四人の赤ん坊を見て言った

「こうって…こう?…」

京助が同じく眠っている四人の赤ん坊を見て聞く

「体が小さいと使う力も少なくていいですから」

乾闥婆けんだつばが答えた

「…母さん…」

京助がちらっと母ハルミを見た

「…この赤ちゃん…全部竜之助なのね?」

母ハルミが乾闥婆けんだつばに聞くと乾闥婆が頷く

「そうです」

「…そう…」

乾闥婆けんだつばが言うと母ハルミが一番端の赤ん坊の頬を撫でた

「どんな姿でも竜之助は竜之助だもの」

ふにふにと動いた赤ん坊を見て母ハルミが微笑む

「…若い男選り取りみどりだな母さん」

京助が言う

「若すぎよ」

母ハルミが速攻突っ込んだ

「で…この四人の竜…どうするんだっちゃ?」

緊那羅きんならが聞く

「もちろん天に…」

「ここで育てるわよねえ？ 折角帰ってきたんだもの」

言いかけた迦楼羅かるらの言葉を母ハルミの嬉しそうな声がかき消した

「なっ…；」

迦楼羅かるらが驚いて母ハルミを見た

「いいじゃない？ 私の旦那ですもの」

「いやしかし…；」

につこり笑う母ハルミに迦楼羅かるらが慌てて何かを言おうとする

「ねえ緊ちゃん確か今日のチラシで粉ミルクの写真載ってたわよね？ それとももう離乳食かしら」

パンつと手を叩いて緊那羅きんならを見た母ハルミを止めようとして伸ばした迦楼羅かるらの手が見事に無視されている

「あらでも…さっきの話聞いているとこんちゃんとタカちゃん達帰るところないみたいよね？ あらあ…！！」

母ハルミがまたパンつと手を叩いて今度は京助を見た

「まー！！ すごいわ大家族じゃない！！」

母ハルミが嬉しそうに言うのと迦楼羅かるらがぐつと肩を落す

「…負けてますよ」

乾闥婆けんたつばがさくつと迦楼羅かるらに突っ込む

「母は強しだ鳥類」

京助が迦楼羅かるらの方をぽんつと叩く

「それは意味が違います」

乾闥婆けんたつばが速攻で突っ込む

「なんだか…一氣に賑やかになっちゃったっちゃね…；」

緊那羅きんならが苦笑いと言った

【第十一回・弐】うらうらら（前書き）

栄野家の人口が一気に増加したようです

【第十一回・弐】うらうらら

「また寝てるし……」

元開かずの間の窓枠に頭を乗せて寝ている制多迦せいたかを見て京助が呟いた

「まるで今まで眠れなかった分を取り戻してるみたいだっちゃんね」

栄野家の人口が一気に増加してから数日

やっと春らしく雪解けが進んできた北海道日本海沿岸の正月町には
うらかな春の日差しが降り注いでいた

「しっかし……よく寝るなあ……息してんのか?」

京助がそう言いながら制多迦せいたかに近付き制多迦せいたかの鼻をつまむ

「……ぷっはっ」

しばらくつまんでいると制多迦せいたかが顔を振って起きた

「……に?」

そして半分寝ぼけて半分驚いた顔を京助に向けた

「お……生きてたか」

京助がハッハと笑う

「何してるのさ」

ずしりと頭に重みを感じて京助が振り向くと赤ん坊を抱いた矜羯羅こんがら
がいた

「制多迦せいたかで遊んでる暇があるなら一人くらい面倒見たら?」

その矜羯羅こんがらの足元をハイハイで歩き回るもう一人の赤ん坊を京助が
見下ろした

あの日から栄野家の人口は10人を突破している

空に帰れないという矜羯羅こんがら、制多迦せいたか、慧光えいこう、烏俱婆迦うぐばかに加え力を使
って赤ん坊化した上何故か四人になってしまった父親である竜

「後の二匹は?」

ハイハイしている赤ん坊を目で追いつつ京助が聞く

「慧光達えいこうが見てるよ」

赤ん坊を抱きながら矜羯羅が答えた

「コレが【飛竜】だっけか？」

ハイハイしてついに制多迦せいいたかに辿り着き制多迦登りせいいたかをはじめた赤ん坊を見て京助が聞く

「そつちは【天竜】飛竜は鳥俱婆迦達の方にいるよ…そしてコツチが【独眼】」

こんがら
 矜羯羅が言う

「…よくわかるナアお前；…もう一匹が【竜登】だっけ？」

京助が聞くと矜羯羅こんがらが頷いた

「ぱー」

せいたか
制多迦を登っていた天竜という赤ん坊が制多迦の頬をぺちぺち叩く
せいたか

「…何か…匂わないっっちゃ?」

緊那羅きんならが言ういと矜羯羅こんがらと京助けいすけがふんふんと周りの匂においを嗅かぎかとして
矜羯羅こんがらの腕うでに抱かかれている独眼どくがんという赤ん坊あかちゃんを見た

「…ふんばってますね」

赤い顔をして矜羯羅こんがらの服を掴みながらふんばっている独眼どくがんを見て京助が呟いた

「…さっきしたばかりなんだけど」

こんがら
 矜羯羅が言う

「だふー」

てんりゅう、せいとか
天竜が制多迦の顔に覆いかぶさるようになって声を上げる

「ふええ ええええええええええ!!!!」

「緊ちや——ん！！ 竜ちゃんが泣きやまな

2 _____

! ! _____

ドタドタと廊下を走る足音と赤ん坊の泣き声、そして悠助の声が近付いてくる

「ばっか； コツチつれてくるな！！； 連鎖起こる連鎖ッ！！；」
京助が大声で言うせいたかと制多迦の頭に上ったてんりゅう天竜がビクツとした後顔が

そして慧光えいこうを見て微笑む

「え：い：いいナリか？」

少し驚きながら矜羯羅こんがらと足を交互に見て慧光えいこうが聞く

「駄目だったら言わないよ」

矜羯羅こんがらが返すと少し躊躇いながら慧光えいこうが矜羯羅こんがらの足に頭をつけた

「鳥俱婆迦うぐばかは？」

服装はコッチの服装をしてもやぱりあのお面をつけている鳥俱婆迦うぐばに矜羯羅こんがらが聞く

「おいちゃんもいいの？」

鳥俱婆迦うぐばかが聞き返すと矜羯羅こんがらが頷いた

「みんな揃ってお昼寝タイムかよ；」

へツと口の端をあげた京助も軽くあくびをすると立ち上がりおもむろに緊那羅きんならの側に腰を下ろすとそのまま緊那羅きんならの背中に頭を預けた
少しだけあけていた窓から春の風が入り込んできた

「幸せ？」

矜羯羅こんがらが緊那羅きんならに聞いた

「：へ？」

歌うのを止めた緊那羅きんならが矜羯羅こんがらを見た

「君は今幸せ？」

矜羯羅こんがらがもう一度同じ質問をする

「：私は：そう：だっちゃね：うん」

緊那羅きんならが照れながらの笑顔で返すと矜羯羅こんがらがふっと微笑んだ

「：ずっと続けばって思わないほうがいいよ：いつかは：」

「わかってるちゃ」

矜羯羅こんがらの言葉を緊那羅きんならが止める

「だから私は【今】の【幸せ】を思いっきり満喫してるんだっちゃ
：私は永遠とかずっととか：思うことあるっちゃけど：でも：でも
それは：だから私は【今】の【幸せ】だけでいい：って思うように
してるんだっちゃ」

緊那羅きんならが少し体をねじって片腕を上げると背中にあった京助の頭が上手い具合に緊那羅きんならの膝に落ちる

「…そうだね…」

矜羯羅こんがらが自分の足で眠る慧光えいこうと鳥俱婆迦うぐばかの頭を撫でる

「…でも…でもずっとって…やっぱり願っちゃったりするのは…」
【今】が【幸せ】だからなんだっちゃやね…叶わないのに願っちゃうのは本当に今が好きだからだっちゃやね」

緊那羅きんならが矜羯羅こんがらを見ると矜羯羅こんがらが制多迦せいたかの方を見た

「…僕はね…制多迦せいたかの笑顔が好きなんだよ」

矜羯羅こんがらのくと元が緩やかに微笑む

「だから制多迦せいたかが笑っている今が君と同じく好きだよ…」
その微笑のまま矜羯羅こんがらが緊那羅きんならを見ると緊那羅きんならがめっちゃくちや嬉しそうに笑った

ブルルルル…

日本郵政公社のバイクの音が家から遠ざかってしばらくすると家から出てきたのは南

そしてイソイソと郵便受けの中身をチェックし始めそして何かを見つめ笑顔になりそのまま家へと戻っていく
相変わらずチョ汚い部屋のかろうじて座れるベッドに腰掛けると可愛らしいピンクの封筒の差出人のところを見て南の顔が更にほころんだ

【きただ あります】

そうかかれた封筒のウサギさんシールを大事そうにゆっくりはいで中の手紙を取り出し広げ読み始めて数秒後

「…マジで？」

ぼそっと呟くと何度も何度も同じところを読み返し始めそして顔を上げるとカレンダーに目を向けた

「アカン；　これ去年のじゃん；」

カレンダーは去年の10月で止まっていた

「今日は土曜…で日、月、火…」

指を折りつつブツブツ何かを考えていた南が7本目の指を折り曲げて止まる

「…来週…？」

そしてまためくられていないカレンダーに目をやった

「だから！！　コレは去年の————！！！」

南が自分に突っ込むと立ち上がり床に散乱している物を蹴ったり踏んだりしながら部屋から出て勢いよく階段を駆け下りていき茶の間に入ると壁に掛けてあった真正銘今年のカレンダーの前に立った

「…来週…だ…」

カレンダーに指をつけたまま南が笑顔になった

「ありすが来る？」

昼休みイカソーメンをくわえた坂田がにやけが止まらない南を見た

「いつ」

その坂田の隣の席で同じくイカソーメンを口に入れつつ京助が聞いた

「ら・い・しゅ・うッ！！」

南が嬉しそうに答えた

「朝からこんなカンジ」

中島が南の体を肘で押した

「【さくやおにいちちゃんにあいにいくらかね。まってるね】…っつか————！！！！　可愛いナアも————　おにいちちゃん困っちゃうん」

南がバシバシと中島の背中を叩く

「俺等も困っちゃうん；」

京助が口の端をあげて突っ込む

「で？　何しにくるんだ？」

坂田が聞いた

「そこまでは書いてないんだけどさ……も……ね……わかる？俺のこの胸のトキメキ……ああん！！　クッハ————————」

「わかってたまるか」

意味のない動きをして更に強く中島の背中をたたきだした南の頭を中島がスパンと叩いた

「大きくなったかな……髪伸びたかな……なーどうだと思う？」

にやけが止まらない南が京助達に聞く

「しるか；」

手に負えなくなった中島がイカソーメンをかみながら溜息をついた

「も……いくつね……る……とお……うへへへへ」

「アカンこいつ；」

歌った後で不気味な笑いをし始めた南から京助と坂田がガタガタと机ごとはなれた

「いっやーん！！　　いかないでー；　　いかないでー；　　私をおいて
いかないで——————！！；」

南が坂田の机をしっかと掴む

「君は強い！　俺がいなくても大丈夫だ——————ッ！！；
離せ」

その机を坂田が引っ張る

「ものは相談なのだよーう！！；　　だからいかないでー！！；」

「あつ；　イカソーメン！！；」

机から手を離しその代わりに机の上に乗っていたイカソーメンを南が奪った

「聞いてくれないとコレ全部食うぞ！！」

「脅しか！！；」

南が脅迫まがいと言うと坂田が突っ込む

「俺のイカソーメン返せ！！　　ロリコン！！」

京助が手を伸ばす

「ロリコンちゃいまっせー！！　こぼすこぼす；　落ちるって！！
引っ張んなって；」

京助に袖をつかまれた南が言う

「あっ！！；　てめ今三本落ちたるがッ！！；　勿体ねー！！」

坂田が落ちたイカソーメンを拾った

「3秒ルール適応！」

そして自分で言っつてそのイカソーメンを食う

「だから相談聞いてくれたら返すっちゅーの！！」

南が京助に渡すまいとイカソーメンを遠くにやる

「だから何の相談だよ！！！！；　内容によりけりだろがッ！！」

京助が必死でイカソーメンに手を伸ばしながら聞く

「…どうせありすに關することだろ」

「あ、それ俺も思う」

中島がボソツと言うと坂田がソレに賛同した

「ぴんぽおおおおおッ；」

「ギャー————！！！！；　イカソー！！！！；」

南が正解とばかりにピンポンと言おうとしてバランスを崩し後ろに倒れてゆくと手にしていたイカソーメンが宙に舞った

「248円です」

ガチャチーンという音がして小銭が南の手に手渡された

「つてかさーもう半分以上食つてたのになんで弁償なわけよ；」

放課後歩きながら京助に買い物袋を差し出しながら南が言う

「まだ！　まだ半分だろが…で？　相談はなんじゃらほ」

買い物袋を受け取った京助が聞く

「実はなく…前見たくやっぱなんかしてやりたいわけよ」

「なんか？」

坂田が聞くと南が頷く

「前ってあの不思議の国のアリスみたいなのか？」

「まあ…そんなカンジの…かな」

中島が聞くと南が言った

「具体的にどんなんよ」

京助が聞く

「それを相談すんだよ君達に」

南が返した

「そっからかい；」

ソレに対し坂田が突っ込む

「一日しかいられないみたいだしさー…まだ小さいし…どっかつれてくにも…アレだし…ってさ」

南が苦笑いで言う

「まあ…そうだよな…たしか病気…なんだよな？」

京助が聞く

「病気っていうか…声が出ないっての？ 声帯が何か…よくわかんねえけど」

南が答えた

「なんか…なんかねえ…；」

京助がそういつて考え込むと中島と坂田も足を止めてその場で考え出した

「花見だな」

中島が言った

「あ、考え一緒」

坂田も言う

「実は俺も」

京助も言った

「…安易だなあ…って言ってる俺も実はソレが思い浮かびました」
南もハッハと笑いながら言った

「でもただの花見じゃなあ…第一花まだ咲いてねえじゃん」

坂田が言うとなたちが周りを見渡した

「…雪がまだ残ってるくらいですなあ…見る花って…ゆーてもフキノトウくらいか？；」

京助が道端にはえていたフキノトウを見た

「じゃあ花見却下か？」

中島が聞く

「じゃあ他に何あるよ；」

坂田が突っ込むとまた京助も3馬鹿も考え込んだ

「ってことなんですよ」

栄野家の茶の間で南がヤレヤレお手上げ調に言い視線を向けた

「ってことでどうして僕達に回ってくるのさ」

天竜てんりゅうと飛竜ひりゅうを膝の上においた矜羯羅こんがらが聞く

「いやあ：なんか突拍子もない意見が聞けるかなーと思ひまして」

坂田が答えた

「だぶーう」

何か意見があるかのごとく緊那羅きんならに抱かれていた竜登りゅうとが手を上げた

「ハイ竜そのイチ君」

南が指名する

「竜登りゅうとだっちゃ」

緊那羅きんならがすかさず突っ込んだ

「んによー」

指名されたのがわかったのか竜登りゅうとがよだれをたらしながら何かを訴

え始めた

「…息子！！ 通訳！」

「わかるかッ！！；」

南が京助に振ると京助が怒鳴る

「息子シツカーク」

その京助に南が両手を上げてヤレヤレという感じで言い返した

「ここは女の子の意見聞いてみようかなあ：ってことで慧喜えきっちゃ

ん

「俺？」

南が慧喜えきを指名すると慧喜がきよとした顔で自分を指差した

「慧喜えきがされて嬉しいこととかなんかないか？」

坂田が聞くとしばらく考えた慧喜えきが悠助を見た

「俺は悠助とケッコンして子供できればソレが嬉しい」

慧喜えきが満面の笑みで悠助を抱きしめた

「わ：私は矜羯羅様こんがらと制多迦様せいたかがいれば嬉しいナリ！！」

慧光えこうが身を乗り出して言う

「おいちゃんは笑っていてくれれば嬉しい」

鳥俱婆迦うぐぼかも言った

「俺はそうだなあ：まあエビフライが食えりやなんでもいいかも」

京助もさり気に乗乗した

「じゃあ俺は：ハルミさんがいれば嬉しい」

坂田がニヘラと笑った

「ふむふむ：っじゃな——————くッ！！」

バインと南がテーブルを叩いた

「誰も嬉しいことを聞い：ただけどエビフライとか却下！！　な

んかまともに！　まともッ！！」

南が激しく手を上下させて言う

「はい」

中島が手を上げた

「はいナカジ」

南が指名する

「このメンツでまともに話し合おうなんて最初から無理だったんぢやいます？」

「：そこかい」

中島が言うとながが力なく突っ込んだ

「もー：」

溜息をつきながら南が後ろに倒れた

「：南はありすが本当好きなんだっちゃんね」

「…そうだよ」

緊那羅きんならが言う。南が自然に答えた

「だから何かしたいんじゃない…」

南が天井を見て呟いた

「…ありすが一番喜ぶこと…」

南がボソツと言う

「なんなんだあ…」

うつ伏せになった南が溜息混じりに吐き出した

「南は一番何が嬉しい？」

鳥倶婆迦うぐぼかが聞くと南が半分顔を鳥倶婆迦うぐぼかに向けた

「…俺？」

残り半分の顔を上げた南が聞き返す

「もし逆の立場だったらって考えたら南は何されて嬉しい？」

みんなの視線が南に集まる

「俺は…ありすが来てくれたってだけで嬉しいから別に…」

起き上がった南が言う

「じゃあそれでいいんじゃないの？」

鳥倶婆迦うぐぼかがさらっと言った

「…そんなもん？」

京助が隣にいた坂田に聞く

「まあ…そんなもんなんじゃねえの？」

坂田がボソツと返す

「…会えるだけで…か」

中島が呟くと京助と坂田が中島を見た

「…そうかもなあ…」

どこか物憂げに独り言を繰り返す中島を見て坂田と京助が顔を見合
わせる

「…柚汰君思春期？」

「ぶっ」

京助が中島をツンツン突付いて突っ込むと中島が噴出した

「汚いよ」

中島の噴出した唾液がかかったのか矜羯羅こんがらが中島を睨んだ

「…ゆんき？」

制多迦せいたかが首をかしげて京助を見る

「思う春と書きまして思春期：別名青い春とかいて青春：恋だねえ
…」

坂田が妙な動きをしながら語り始めた

「恋？」

鳥俱婆迦うぐばかが緊那羅きんならを見た

「好きな人がいるってことだっちゃ」

緊那羅きんならが説明すると鳥俱婆迦うぐばかが中島を見た

「私は矜羯羅こんがら様と制多迦せいたか様が好きナリ」

「それは恋になるのか？」

慧光えいこうがキッパリ言い切ると中島が突っ込んだ

「ハイ！ 脱線！！；」

南がまたもバインとテーブルを叩く

「とにかく：下手にアレコレしないでいいんちゃうかってことだろ」
京助がまとめて言う

「…そう：なのかなあ」

南が腕を組んで唸った

「そうなんじゃね？」

坂田が言う

「でもまずさ：」

少し間を置いて坂田が南の肩を叩いて

「部屋に入れるなら部屋を片付けろ」

そう笑顔で言う京助と中島も頷く

「…一週間で片付くと思う？」

南がハッハと笑いながら聞くと京助と中島が無理無理と言うカンジに手を顔の前で振った

「：もしかしてあの時の部屋に入れる気だったんだっちゃ？；」

一度南の部屋に入ったことのある緊那羅きんならが聞く

「うゝん：もうちょっとカオス度が増加してるかなー：」

南がエヘーと笑った

「：どのくらい汚いのさ」

矜羯羅こんがらが聞く

「あゝ：俺の部屋の汚さ度がこんくらいだとしたら：」

京助が親指と人差し指をつけて丸を作って矜羯羅こんがらに見せた

「南の部屋は：：：あゝ：まあ：サロマ湖？」

「広ッ！！；　てかどんだけなのさ俺の部屋の汚さって；」

南が突っ込む

「どのくらい汚いの？」

鳥俱婆迦うぐぼかが緊那羅きんならに聞く

「：うゝん：；　とにかく：汚いつちゃ」

悩んだ末　緊那羅きんならが苦笑いで答えた

「出番なんじゃない？　慧光：」

矜羯羅こんがらが言った言葉に一同が慧光えいこうを見ると慧光がふるふると震えている

「：オイ？　コロ助？」

「：ッ：今すぐお前の部屋を見せるナリ！！」

バツと立ち上がった慧光えいこうがびしつと南を指差して目つきの悪い目を更に吊り上げて言った

部屋の中で起きた雪崩で完全に閉まらなくなっているドアを南が開けるとその部屋の光景に一同がしばし止まった

「：おんまえ：どこで寝てるんだよ；」

「そのベッド」

坂田が聞くと南がさらつと答えた

「カレンダー去年のじゃん；」

一歩部屋に足を踏み入れ壁を見た京助が言う

「いやあ」

南が何故か照れた様に頭を搔くと慧光が部屋に入った

「…コロちゃん？」

動かない慧光の背中に南が声をかけると慧光が腕まくりをした

「…片付ける気か？； このカオスを」

京助が慧光を見た

「こんだけ片付けがいのある部屋は久しぶりに見たナリ…」

慧光がうっとりとした表情で部屋を見渡す

「俺等も手伝う？」

中島が聞く

「邪魔ナリ」

慧光がキツパリ言い返した

「邪魔って…お前コレ一人で片付け…」

「のわけないナリよ」

坂田が聞きかけると慧光が南の腕を引っ張った

「二人でナリ」

慧光がそう言うのと部屋の中にいた京助を部屋の外に押し出した

「お…俺も？； 俺足手まといになると思うんだけどな…」

南が言う

「全部捨てていいなら手伝わなくていいナリ…一応この部屋はお前の部屋なんナリからいるものとかいらぬものとかあるじゃないナリか？」

「あ…まあ…そう…だけど…」

慧光が言うのと南が微妙な表情で部屋の外にいる坂田と中島そして京助を見た

「がむばれ」

京助が手を振った

「一週間あればなんとかなるって」

中島も同じく

「ありすのためだろ」

坂田もそう言つて手を振つた

「うゑあああああ…」

がっくり肩を落した南の隣でサクサクと片付け始めた慧光えいこうを南がチラッと見た

「…お手柔らかに」

そういつて南もしゃがんだ

「寝てるゝ可愛い」

慧喜えきの腕の中で眠っている童登りゅうとを覗き込んで悠助が顔を緩ませる

「悠助と俺の子供はもつと可愛いよ」

慧喜えきがにっこり笑う

「うん！ 早く欲しいな」

悠助もわかつていないだろうけど笑つた

「…かよしだね」

そんな二人を見て制多迦せいたかが言つた

「…そうだね」

矜羯羅こんがらが言う

「…も…逆に悲しいね」

制多迦せいたかが俯いた

「…つて僕等は…」

「ずっとはないんだよ制多迦せいたか…だから今の幸せを精一杯楽しむ…それでもいいんじゃない？」

制多迦せいたかの言葉を止めるかのように矜羯羅こんがらが言つた

「ずっとつて願える幸せが今あること…それが幸せだって事…前はなんとも思つてなかったことさえ僕は今そう思える…不思議だよね」
そう言う矜羯羅こんがらの横顔を見て制多迦せいたかが微笑んだ

「僕も君ももう上や天や空なんか関係ない…守りたいものを守る」

矜羯羅こんがらが制多迦せいたかを見ると制多迦せいたかが頷いた

「…くは矜羯羅こんがらも守るよ」

「…ありがとう」

笑いながら言った制多迦せいたかに矜羯羅こんがらが微笑み返した

「ちよっと誰でもいいから洗濯物取り込むの手伝って欲しいっちゃー！」

和室の方から緊那羅きんならの声が聞こえる

「あ、雨だー！」

悠助がふと窓の方を見ると窓にはポツポツと雨粒がついていた

「僕手伝ってくるね」

悠助が立ち上がって襖を開けると茶の間にいた全員が一斉に立ち上がる

「…総出？」

矜羯羅こんがらが言う

「…いじゃない？ 皆でいこう？」

制多迦せいたかがへーり笑った

「…ウチは避難場所じゃないっつーただろが…！」

南の家から帰ってきた京助が茶の間の戸を開けるなりがっくりと肩を落した

「いやあアッハハ！！ おかえりー竜のボン！！」

窓枠に軽く腰をかけた阿修羅あしゅらが片手を挙げた

「おかえりなさい」

「おぎよあッ！！！」

背中から声をかけられ京助が激しいリアクションをしながら振り返るとソコには乾闥婆けんだつぱ

「なんですかその反応」

一見優しそうな微笑を向ける乾闥婆けんだつぱの笑顔の後ろには今日も何故か黒くおどろおどろしたようなカンジがあった

「矜羯羅こんがらの怪我をみにきたんだっちゃ」

乾闥婆けんだつぱの後ろから緊那羅きんならがやってきた

「…一応一度診たものは最後まで診ないと気がすまないだけです」
妙な格好のまま止まっていた京助の横をすり抜けて乾闥婆けんだつぱが腰を下

ろす

「…あれ？　ちよう…」

「いだだだだだだッ！！；」

いつもワンセットな二人の片割れの行方を聞こうとした京助の言葉がその片割れのものらしき声でかき消された

「…いないわけねえよな；」

その声を聞いた京助が口の端を上げた

「…かえり京助」

両手に二人のガキンチョ竜を抱いた制多迦せいたかが緊那羅きんならの後ろから顔を出してヘラリと笑いかける

「ソコにいると誰も入れないと思うよ」

その制多迦せいたかの後ろから突っ込みを飛ばしたのは鳥倶婆迦うぐばか

「引っ張るなど言っているだろう！！；　たわけッ！！；」

そしてまたも声だけがギャーギャーと響く

「…貸しなよ」

その声に続いて呆れたような矜羯羅こんがらの声

「どうしてワシが抱くと髪を引っ張るのだッ！！；」

ドスドスと大股で廊下を歩いてくる足をとともに迦楼羅かるらの不機嫌な声も近付いてくる

「引っ張りやすいのよそうよそうなのよ」

迦楼羅かるらをなだめるかのような聞かなくなつて久しい声に京助が思わず廊下を見た

「…よ…！！！」

「吉祥ッ！！！」

相変わらずのアノ服装

そしてその豊満な胸にはガキンチョ竜が一人抱かれている

「おま…」

京助が驚いた顔でヨシコを指差した

「…久しぶり」

ヒラヒラとヨシコが京助に向けて手を振る

「やっと宮の外に出れるようになったんきに」

戸口に腕をつけて阿修羅^{あしゅら}が言う

「りゅー様がこっちに在るって聞いたからきたの」

ヨシコが言う和阿修羅^{あしゅら}が目を細めた

「…そおれだけやんかねえ？」

「何よあつくんッ！！；」

ガスッ！！！！

「ガハッ！！；」

ニヤニヤしながら言った阿修羅^{あしゅら}の顎にヨシコの華麗なケリがヒットした

「…今俺絶対領域というモンを見た…」

京助の耳がほんのり赤くなっていた

「醤油ってコレ？」

「そうです」

あの衣装にエプロンをつけたヨシコが振り返り乾闥婆^{けんたつば}に醤油ビンを手渡す

「大根切れたよー」

悠助がザルに短冊切りにした大根を入れて嬉しそうに緊那羅^{きんなら}に声をかける

「油揚げはどうするの？」

慧喜^{えき}と共に大根を切り終わった鳥俱婆迦^{うぐばか}が聞く

「あっ！！；　こら京助ッ！」

スコォー——————————————————！！

皿の上に盛ってあったロールキャベツを一つつまんだ京助を見て緊那羅^{きんなら}が声を上げると途端に飛んできた一本の箸

「行儀が悪いですよ京助」

にっこり笑顔の乾闥婆けんだつばの手には一本になった端が握られていた

「…賑やかだな」

迦楼羅かるらが台所を覗いて言う

「そうだね…」

その迦楼羅かるらの頭の上で暖簾を捲り上げていた矜羯羅こんがらも同意する

「…のしそう」

矜羯羅こんがらの隣で制多迦せいたかがへ拉里笑った

「ほらほら！ 手伝う気がない人は邪魔なだけです」

京助の額にヒットして床に落ちた箸を拾った乾闥婆けんだつばが外野に向かつて言う

「おっ邪魔ムシィ」

台所の戸に腕をかけていた阿修羅あしゅらが笑いながら言った

「ほやあああああ！！！」

「仕事できたみたいですょ？」

茶の間の方から聞こえてきたチミッコ童達の泣き声コラボレーション

「…緊那羅歌」

「そんなに今から寝せてたら夜寝なくなるってハルミママさん言ってたっちゃ」

コンブが入った鍋の中に悠助から受け取った大根をいれ火をつけた

緊那羅きんならが言う

「別に僕達が竜を見ていても構いませんがその代わり貴方達で御飯を作ってくださいね？」

乾闥婆けんだつばが言う和外野（京助、矜羯羅こんがら、制多迦せいたか、迦楼羅かるら、阿修羅あしゅら）

がアイコンタクトを交わした

「…わかったよ…」

矜羯羅こんがらがふうと溜息をついて暖簾を下ろすと泣き声とどろく茶の間へと向かう

「まさに大家族…だなあ；」

京助も赤くなつた額をさすつて台所から出た

「まあ！！ 京様！！ どうなさつたのですか！ その額！！」

台所から出たところで上がった高い声

「おりょんヒマ子の姉さんじゃないけ」

あしゅら阿修羅がヒラヒラと手を振つた先にはヒマ子の姿

「大変ですわ！！ 跡が残つてしまいますわ！！」

そう言いながらゴリゴリと鉢を引きずりヒマ子が京助ににじり寄ると

「唾をつければ治りますわ！！ さあ！！」

バチコイ！！ カモン！！ とヒマ子が唇を尖らせた

「イヤ； 遠慮します；ツ！！；」

そのヒマ子の横を京助が全力で駆け抜ける

「京様ッ！！」

そしてその京助の後をヒマ子が鉢を引きずりながら追いかける

「愛されてるねえ竜のボン」

あしゅら阿修羅がハッハと笑う

「…うだね」

せいたか制多迦もヘラリ笑つた

「京様ー！！ 京様つてば！！」

ドンドンと襖を叩くヒマ子に内側から襖を抑える京助

「もう…照れやさんなんですから…」

ズルズルという音共に遠ざかるヒマ子の声を京助が安堵の溜息をつきその場に腰を下ろした

「…つとに…」

ソコは元開かずの間

だいぶ春らしく日も長くなってきたとはいえソコは北海道

夕方になればまだ肌寒かった

「……」

京助が無言のまま窓を見る

まだ葉もついていない木が数本見えた

茶の間から聞こえてきていたチビツコ竜達の泣き声やんだところをみると矜羯羅こんがらや制多迦達せいたかがあやしているのだろうと思うほのかに香ってくる夕飯のにおいをかぐと緊那羅きんならや乾闥婆けんだつばが着々と晩飯の支度を進めているのだと思える

今は当たり前のように揃っている面々も昔は当たり前じゃなかった出会ったからそれはここに集まった

その出会いは【時】というものがもたらしたもので

だからこの出会いは【時】によって終わりを迎えるんだろう

「…時…か…」

ことあるごとに迦楼羅達かるらが口にする【時】という言葉を真似てなのか京助が口にした

今じゃ当たり前になっている返事

【ただいま】といえば【おかえり】が返ってくる

ランドセルを背負ってあけた玄関の扉の向こうから欲しかったものなんとも言い表せないモヤモヤうのうのした気分になった京助が溜息をつく

母ハルミと悠助と自分しかいなかったこの家

「…なんやねん…」

京助が自分で小さく自分に突っ込みを入れた

「京助！晩飯できた…ってなにしているんだっちゃ？」

仕度が終わった緊那羅きんならが開かずの間の襖を開けると襖に寄りかかっていた京助が廊下に倒れた

「センチメンタルになってみました」

体を起こしながら京助が言う

「せん…?…」

緊那羅きんならが聞き返す

「…なあ…あのさ」

緊那羅きんならの方を見ないで京助が何かを聞こうと口を開いた

「なんだっちゃ？」

襖に手をかけたまま緊那羅きんならが返事をする

「…時だかつての…終ったらお前等って…やっぱ天とかに帰る…んだよな」

どもりながら言った京助の言葉に緊那羅きんならが静かに襖を閉めた

「時のこと俺よくわかんねえっ…か詳しく教えてもらってねえからどんなかわかんねえんだけどさ…その…お前等って時の為にここにきたんだろ？…ってことはさ…そうなんだよな…」

緊那羅きんならに背中を向けたまま京助が言う

「たぶんそうだと…おもうつちゃけど…」

緊那羅きんならが言った

「…そっか」

背中を向けたまま京助が顔を上げた

「母さんも悠助も寂しがらるだろうナア…今コンだけ賑やかじゃあなあ…」

京助が伸びをしながら言う

「やれやれ…」

「京助は？」

踵を返そうとした京助に緊那羅きんならが聞いた

「京助はどうなんだっちゃ？」

緊那羅きんならがさらに聞くと京助が緊那羅きんならのほうを向いた

「…どうだっていいじゃん俺は；」

苦笑いを向けた京助が襖に手を伸ばすとその腕を緊那羅きんならが掴んだ

「なにすんだよ；…腹減ってんだけど俺；」

自分能手を掴む緊那羅きんならの手を剥がそうと京助が空いている手を緊那羅きんの手ならに近づけるとその手も緊那羅きんならが掴む

「離せっ…の；」

京助がブンブンと腕と手を振って緊那羅きんならの手を剥がそうとする

「私は今凄く幸せだっちゃ」

いきなり緊那羅きんならが言うのと京助が止まった

「京助：私は今がずっと続けばいいって思うくらい幸せだっちゃ」
真っ直ぐな目で緊那羅きんならが京助を見る

「こんなこと乾闥婆けんたつばが聞いたらきつと凄く怒られるような気もする
っちゃけど：私は【時】が嫌いだったちゃけど【時】がくれた今この

時が凄く幸せで好きだったちゃ」

緊那羅きんならが微笑む

「たといつか：」

微笑んでいた緊那羅きんならの眉が少し下がった

「【時】がきて：も：私はこの幸せな今を忘れたくないっちゃ」
後半少し震えていた緊那羅きんならの声

「：俺は：」

京助が俯いてそして口の端を上げた

「そこでちゅうの一つでもすれば盛り上がるんだやな」

「肩に手を回すんだやな」

足元にいたのはコマとイヌ

「まったく盛り上がり欠けるんだやなあ」

二匹揃って溜息をつく

「おんまえらは：：」

京助が二匹の首根っこを掴んで持ち上げる

「：あああ！！」

コマが緊那羅きんならを見て声を上げると緊那羅きんならがビクツとすくみあがった
「大変なんだやな！！」

コマがバタバタと両手足を動かしてさも大変だー！！
をボディランゲージする
「どうしたんだやな！？：」

コマの様子を見たイヌが聞く

「緊那羅きんならオスだったんだやな!!」

「…おおおおお!!; そうだったんだやな!!; ウツカリウツカリなんだやな;」

コマが言うといヌも思い出したー!! と声を上げた

「まったく人騒きんならがせなんだやな!!」

イヌが緊那羅きんならに向かって怒った

「へっ!?!; あ…ごめん…だっちゃ…?!;」

「謝るなよお前も;」

何故か謝った緊那羅きんならに京助が突っ込んだ

「あれ? 京助は?」

晩飯の後片付けをしようとした緊那羅きんならが見えない京助の姿を聞いた

「京助御飯食えきべた後すぐどっかいったよ?」

「…どこいったかは貴方が一番知ってるんじゃないんですか?」

隣をすり抜けつつ乾闥婆けんたつばが言う

「…行ってあげたらどうですか?」

付け加えた乾闥婆けんたつばが振り向かずに食器を集めだす

「後片付けは僕等でやります」

「…ワシもか?;」

乾闥婆けんたつばがいうと迦楼羅かるらが聞き返す

「それとも竜の面倒を見えますか?」

「…;」

にっこり笑って乾闥婆けんたつばが聞くと迦楼羅かるらが引きつった顔で立ち上がった

「私も手伝うわ」

ヨシコが立ち上がる

「お前はまた…; 立場という…」

「いいじゃないけー…こっち…ここじゃヨシコはただのヨシコなん
きに」

迦楼羅かるらの言葉を阿修羅あしゅらが遮った

「オライもかるらんもこんがらっちよも…ここじゃただのなんきに」
阿修羅あしゅらが言うに迦楼羅かるらがぐつと何かを飲み込んだようにした後溜息をついた

「ありがとあつくん…でも私はヨシコじゃないわそうよ私は吉祥ッ
！！」

ヨシコが怒鳴る

「そろそろハルミママ様が帰ってくるね」

慧喜えきが時計を見た

「竜のカミさんどつかでかけてんのけ？」

阿修羅あしゅらが聞く

「自治会とか言って…」

説明をし始めた慧喜の声が聞こえる茶の間の戸を緊那羅きんならが廊下から静かに閉めた

はじめは何もかもが初めてで戸惑って迷ってでも不思議と戻りたいとは思わなかった

どうしてだろうと考えたこともなかった

その逆はあったけど

【天】が自分のいるべき場所

【天】が自分の帰る場所

【天】に帰った時戻ってきたはずなのに何故かこっちに帰りたくな
った

自分から戻って帰ってきたはずなのに
こっちに帰りたくて帰りたくて…

少し廊下が鳴るこの古い家

朝は毎日ドタバタしてて

天気の良い日は縁側から入る風が気持ちよくて

春には桜や庭の若木が綺麗で

夏は風鈴が鳴って潮の香が届いて

秋には枯葉が舞って

冬は雪だるまを作って

自分の居場所

『…好きなだけいりゃいいじゃん』

そう言ってくれてここが自分がいていい所だとそう思った

だから好きなだけいたいと思った

「わかってる…でも…」

【ずっと】

【永遠に】

思わないようにすればするほど思ってしまう

廊下の窓から何気に見上げた空

窓を開けてまた見上げる

春の朧月が星を隠して夜空にぼんやりと浮かんでいる

【いつか】必ず来る

『…ずっと続けばって思わないほうがいいよ…いつかは…』

その言葉で【今】を自分だけが思っているわけじゃないことを知った

【時】がくれた【今】が幸せでなくしたくないもの

一番嫌なことがくれた一番好きなもの

「……」

緊那羅^{きんなら}の髪が夜風に靡いた

「なにしてんだ」

探しに行こうとした声が聞こえ緊那羅きんならがその方向を見る

「京助：どこ行ってたんだっちゃ？」

「便所」

「…流す音聞こえなかったっちゃよ」

「流してきたっの」

頭を掻きながら京助が廊下を歩く

「あ…のね」

緊那羅きんならの横を通った京助に緊那羅きんならが声をかけた

「なんだ？」

京助が振り返って聞く

「…前に京助：好きなだけここにいていいって…言ってくれたっちゃよね」

月明かりが差し込む廊下で緊那羅きんならが顔を上げた

「あ？ …ああ…何か言ったような気がしなくもないけど…」

京助がウロな回答をする

「で？ …それがどうした？」

そして聞く

「私は…ここにいてるっちゃ」

緊那羅きんならが言っていると京助がきょとした顔で緊那羅きんならを見た

「時が来ても時が過ぎても私はここにいてるっちゃ」

笑顔でも真剣な顔で緊那羅きんならが言う

「だから…だから京助もどこにも行かないで…ほしいっちゃ」

少し躊躇さかんいがちに緊那羅きんならが言った

「…なんだそれ；」

少し間を置いて京助が突っ込む

「私がここにいるても京助がいらないならいる意味がないんだっちゃ…
私は京助がいる場所が好きなんだっちゃ」

開けている窓から少し強めの風が入って京助の髪をも揺らした

「私の場所は京助の隣だっちゃ」

緊那羅きんならが言い切った

「……なんか……だなあ； 告白か？ それ」

口の端をあげて京助が言う

「そうなるんだっちゃ？」

「いや； 俺に聞くな；」

きよとんとした顔で緊那羅きんならが聞くと京助が顔の前で手を振って返す

「……でも……ま……アレだ」

腰に手をついて一息吐いた京助が顔を上げた

「どこにも行くなっつーなら一緒にくりやいいじゃん」

そう言いながら京助が悪戯っぽく笑う

「え……？」

緊那羅きんならが首をかしげた

「俺にどこにも行くなっつーんだったら一緒にくりやいいじゃんってことだ」

京助が言う

「……一緒……に？」

緊那羅きんならが聞き返すと京助が頷いた

「……いいんだっちゃ？」

小さく緊那羅きんならが聞き返す

「隣にいてえんだろ？ ならそうすりゃいいじゃん」

京助が言う

「……少しくらいなら待っててやるよ追いつくまで」

京助が背中を向けて歩き出した

「……うん……」

緊那羅きんならが嬉しそうに頷き小走りで京助の背中を追いかけた

「窓閉めてこいよ；」

「あ； うん；」

京助に言われて緊那羅きんならがまた窓を閉めに戻った

「パトラッシュ……僕はも……ガッ；」

「ほら！！ 何してるナリ！！」

壁にもたれかかった南の頭にのしかかったのは地区指定の燃えないゴミの袋

「休憩しようよーコロちゃーん；」

雑誌を束ねる慧光えいこうに南が言う

「駄目ナリ」

ぎゅっと縛った雑誌の束を二つ抱えた慧光えいこうが南を足蹴にする

「おおあああ；； ミナミ何だかシンデレラの気分；」

ヨヨヨ：と南が床に突っ伏した

「にしても：片付けても片付けても片付かないナリな」

慧光えいこうが腰に手を当てて部屋を見渡す

「さくー！ そしてお友達も！ 御飯食べなさいー」

一階から南の母の声がした

「ママン！！ 救いの声！」

南がガバッと飛び起きた

「コロちゃん飯食おうぜ」

南が言う

「え？ 私もナリか？」

慧光えいこうがきよとした顔で聞く

「どうせなら泊まっていきなよ」

頷いた南が笑いながら言った

「：いいナリか？」

「いいって！ 俺一人っ子だしさ部屋片付け手伝ってくれてるし」

パンパンと服を払って南が言う

「いこっか」

そして部屋の戸をあけた

「ホラ座ってゝ父さん遅いから」

椅子を引いて南が手招きをした

「あ：うん」

慧光えいこうがゆっくりと椅子に座ると南母が皿に盛られたカレーを慧光えいこうの

前に置いた

「いったまー」

南がスプーンを持った

「そういえばさく…こっちの友達の名前って…」

自分の分のカレーを持った南母が南に聞く

「あ…慧光ナリ」

慧光が軽く頭を下げた

「ずいぶん礼儀正しいのね…少しは見習いなさいさく」

苦笑いで南母が言う

「慧光君は兄弟いるの？」

南母が聞いた

「いるナリ」

「いるの！？；」

慧光の返答に南が突っ込む

「何！？； マジで？； 弟？ 妹？ 兄？ 姉？」

南が半分立ち上がった状態で慧光に詰め寄る

「姉ナリ…って…言ってなかったナリか？」

「初耳初耳！！；」

「さく座りなさい；」

慧光に詰め寄る南の服を南母が引っ張った

「名前は！？ なんつーの！！」

南が聞くと慧光がきよとした顔で南を見上げ

「…慧喜」

慧光が言うとな南の手からスプーンが落ちた

「…れしそうだね」

「え？」

あぐらをかいた足の上にガキンチョ竜を二人抱えた制多迦が緊那羅
を見て言った

「…にか吹っ切れたみたい」

制多迦せいたかが言うと緊那羅きんならが自分の顔をペチペチと叩いた

「自分の居場所みつけたんだっちゃ」

緊那羅きんならがてれた笑いを制多迦せいたかに向けると制多迦せいたかが緊那羅きんならの頭に手を置いた

「：かったね」

そしてヘラリ笑って緊那羅きんならの頭を撫でる

「ずっとはないけど：好きなだけいるって決めたんだっちゃ」

緊那羅きんならが言う

「どこが違うの？」

聞いていた鳥俱婆迦うぐばかが突っ込む

「まあまあ：いいんじゃないけ」

その鳥俱婆迦うぐばかの頭をポフポフと叩いて阿修羅あしゅらが言った

「いいの？」

鳥俱婆迦うぐばかがうざったそうに阿修羅あしゅらの手を払って聞く

「いいのいいの」

負けじと鳥俱婆迦うぐばかの頭を撫でつつ阿修羅あしゅらが言った

「うんいいんだっちゃ」

緊那羅きんならも笑いながら言った

「どこ行くの？」

いきなり声をかけられてヨシコがビクツと肩をすくませた

「：こ：矜羯羅こんがら：： おどろかさないでよ： そうよビックリしたじゃない；」

ヨシコが胸をなでおろした

「すぐ迷子になるんだから一人で出歩かない方がいいと思うけど」

腕にガキンチョ竜を一人抱いた矜羯羅こんがらが言うとヨシコが眉を吊り上げた

「な：によ！； 人が方向音痴みたいな言い方じゃない？！」

「方向音痴だろうが；」

タオルを首にかけこれから風呂に向かおうとしていた京助が突っ込

んだ

「京助まで！！；」

ヨシコが怒鳴る

「ふえ；」

「；声大きいよ」

鼻を鳴らして泣くぞという合図を出したガキンチョ竜の背中をポンポン叩いてこんがら矜羯羅が溜息をついた

「なゝかしたなゝかしたゝ」

京助が面白そうに歌う

「っ；何よ！　なんなのよ！！　私がゆーちゃんのところいつちやいけないの！！？」

「；中島？」

言ってからヨシコがハツとして口を押さえた

「；や；あの；違うの！　違うの！！　私はゆーちゃんじゃなくて蜜柑；」

慌てるヨシコを見てガキンチョ竜をあやすこんがら矜羯羅と京助が顔を見合わせた

「じゃなくて；ッ！！　；お礼言いたいの；そうよお礼が言いたい
の！！」

ヨシコが顔を赤くして言う

「お礼？」

こんがら矜羯羅が聞くと吉祥が何かを取り出した

「；キーホルダー？；」

チャリッと音をさせてヨシコが二人の前に差し出したものは【ようこそ！　正月町へ！！】とかかれた観光土産のキーホルダー

「何これ」

こんがら矜羯羅がキーホルダーをまじまじと見て聞く

「；くれたの」

ヨシコが大切そうにキーホルダーを握った

「中島がか？」

京助が聞くとヨシコが頷いた

「アワビとかいう貝なんだってあつくん言ってたの」
ヨシコが言う

「アワビだな」

京助が言った

「でも何で中島が？」

「…さあね」

京助が矜羯羅こんがらを見て聞くと矜羯羅こんがらが軽く溜息をついた

「理由のない贈り物があってもいいんじゃない？」

そういう残すと矜羯羅こんがらが踵を返して歩いていった

「…そんなもんかねえ…」

京助が呟く

「ねえ…京助あのね」

「…なんだよ」

ヨシコが躊躇いがちに京助をチラチラと見ながら言う

「…その…」

「…ハイハイ…わかりましたよ」

中々言い出さないヨシコを見て京助が大きく溜息をついた後首にか
けていたタオルを腰に差し込んで歩き出した

「明日にしろって言っても聞くようなヤツじゃねえし…ほつといた
らまた迷子になるんだろうし？」 …連れててやるよ」

京助が言うとヨシコの顔がぱあっと明るくなった

「その前にもう9時過ぎてるし…一応電話でアポな」

そんなヨシコを見て京助も呆れながら笑った

「…それと…その格好じゃアカン」

京助がヨシコの格好を見て言うと言うと吉祥が首をかしげた

「どっか行くんだっちゃ？」

電話を切った後ゴソゴソとパーカーを身に纏った京助に緊那羅きんならが声
をかけた

「中島ン家」

前をあげたままのパーカーを着て京助が答える

「今からだっちゃ？」

歩く京助について歩きながら緊那羅きんならがまた聞く

「こんな時間に外出ですか？」

袖を下ろしながら歩いてきた乾闥婆けんたつばにも聞かれると京助が頭を掻いて指で何かを指した

「…吉祥？」

そこにいたのは慧喜えきの服を借りたヨシコ

「…吉祥も一緒に行くんだっちゃ？」

「俺が連れて行くん」

緊那羅きんならがヨシコに聞くと京助が答えた

「吉祥：あなたはまた…」

乾闥婆けんたつばが溜息をつく

「ごめんね乾闥婆：私行きたいのだから京助に頼んだの」

ヨシコが乾闥婆けんたつばに言う

「どこに行くんです？」

乾闥婆けんたつばが京助に聞くといきなり話題を振られた京助がすくみ上がる

「…ゆーちゃんに…」

「中島？」

小さくヨシコが言うきんならと緊那羅が聞く

「……そうですか」

少し間を置いてから乾闥婆けんたつばが小さく言った

「…早く帰ってきてくださいね…」

乾闥婆けんたつばが言うきんならとヨシコと緊那羅そして京助の目が点になった

「こちらの時間で0時になる前に帰りますからね」

目が点になっている三人の横を通り乾闥婆けんたつばが茶の間の方へ歩いていった

「…怒られるかと思ったわ…：そうよ怒ると思ったの…：…」

ヨシコが言っていると京助と緊那羅きんならも頷いた

「なんか：拍子抜けしたっちゃ：」

緊那羅きんならが言っていると今度はヨシコと京助が頷く

「：何かあったのか？；」

京助が聞くと緊那羅きんならとヨシコが首をかしげた

「だっば」

茶の間の戸に手をかけた乾闥婆けんだつばに阿修羅あしゅらが声をかけた

「：何です？」

振り向かず乾闥婆けんだつばが答える

「：やっばお前：まだ：」

「僕は乾闥婆けんだつばですから」

阿修羅あしゅらの言葉を打ち消すような口調で乾闥婆けんだつばが【僕は】の部分**を強調**して言った

「：それ以外の：何者でもありませんよ」

そしてにっこりと微笑みながら阿修羅あしゅらを見た

「：あんなことは：僕等だけでもう：いいんです：」

顔は笑顔でもどこか悲しそうな言い方で乾闥婆けんだつばが言う

「：だっば：お前はまだ【乾闥婆けんだつば】になりきれてない」

「：！ッ：！！」

阿修羅あしゅらが言っていると乾闥婆けんだつばがバツと阿修羅あしゅらを見てそして唇を噛んだあと無言で茶の間の戸を開けた

「どうしたのだ？」

戸を開けても中に入ってこない乾闥婆けんだつばに迦楼羅かるらが声をかけた

「：なんでもありませんよ？」

乾闥婆けんだつばが笑顔で返す

「そうか：？」

「はい」

いつも通りの受け答えをする二人を見た阿修羅あしゅらがやりきれない顔を**して**その場から離れた

「オイ」

京助が中島を肘で押すと中島がハツとして京助を見た

「お前も； 何しに來たんだよ…ったく；」

今度はヨシコを見て京助が溜息をつきながら言う

「わ…私は…」

吉祥が慌ててゴソゴソと何かを探しはじめた

「ゆーちゃん？ きょうちゃんなら中に入ってもらいなよ」

蜜柑の声が聞こえると中島が家の中を見た

「…入るか？」

そして京助に聞く

「俺は別にいいんだけどさー…」

中島に聞かれた京助がヨシコを再び見る

「…お前は？」

中島が稀少に声をかけるとヨシコが顔を上げた

「わ…私も別に…そうよ私も別にいいわ」

ふいっと顔をそらして言ったヨシコに中島がむっとした表情をする

「あーそうですかー…で？ 何しにきたんだよまともな格好して」

わざと少し大きめの声で言った中島に今度はヨシコがむっとした表情をした

「まともな格好ってなによ！ なによその言い方！！ まるで私の格好がいつもはまともじゃないみたいじゃない！？」

ヨシコが大きめの声で反論する

「まともじゃねえだろあの格好は」

中島が言い返すとヨシコの眉がだんだんとつり上がった

「…俺はどうすりゃえーん；」

たぶんおそらく存在を忘れられているであろう京助が壁に寄りかかって二人を見る

「なによ！ なんなのよ！！ ムカつくわ！！」

ヨシコが怒鳴る

「近所迷惑」

中島が言う

「どうしてそう可愛げないの！？　そうよ！！可愛くないわ！！」

「可愛くなくて結構そして近所迷惑」

ヨシコが中島を指差して怒鳴ると中島がしれっとした顔で言い返す
「おゝい；」

一応止めようと京助が呼びかけたがまるで無視された

「少しは素直になったら！？　そうよ素直になりなさい！！」

「そっくりそのままお返ししますわソレ」

ああ言えばこう返すというカンジで中島とヨシコの言い合いが続く
「私のどこが素直じゃないって言うの！？　そうよどこよ！！」

「全部じゃないんですかね？」

「どうしてそう突っかかるのよ！！　むかつくわ！凄くむかつくわ
！！」

「突っかかるところが満載だから突っかかるのいは当たり前だが」

「なによ！　なんなのよ！！」

「なんだよ」

「なに：よ」

テンポの良かった言い合いが止まってややしばらくするとヨシコが
ぎゅっと手を握り

「ッ：大っ嫌いッ！！！！！！」

ガスッ！！！！！！

「ガハッ！！；」

ヨシコの右手から綺麗に繰り出されたストレートパンチが中島の顔
面を直撃した

「：一般的に見ればソコは平手打ちが妥当だと思うな俺」

何故か冷静に京助が言う

「んなにすんだよッ!!!」

鼻の部分を押さえながら涙目の中島が怒鳴る

「鼻血でてねえのか面白くねえ」

「やかましいッ!!!」

面白そうに言った京助に中島が怒鳴った

「むかつくわッ!!! お礼なんか言わないわ!!! そうよ!!! 絶
対言わないわ!!!」

ヨシコも声を上げて怒鳴る

「なにがむかつくんだよ!!! それはこっちのセリフだが!!!
いきなり来ていきなり殴られて!!!」

負けしと中島も返す

「ゆーちゃんもむかつくわ! でも私もむかつくのよ!!! よくわ
からないのもむかつくの!!! そうよよくわからないでむかつくの
!!!」

「じゃあ何か!? 俺はよくわからないむかつきで殴られたのか!
?」

ギャーギャーと怒鳴りあう二人を見て京助が頭を掻いて溜息をつく
「むかつくの!!! ッ!!! むかつくのに会いたかったのよ!!! そ
れがむかつくの!!! でもお礼は言わないわ!!! むかつくものッ
!!!」

「何のお礼だよ!!! むかつくむかつくばっかじゃん!!!」

「...近所迷惑なんじゃねえのか?」

京助がボソツと言うと中島がぐっとこらえてフンッとそっぽを向く
「...帰れよ」

「言われなくても帰るわ!!! そうよ! 帰るわよ!!!」

そっぽを向いたまま言った中島にヨシコが京助の腕を引っ張りなが
ら怒鳴る

「何しにきたんだ結局!」

吉祥に腕を引っ張られながら京助が呟く

「京助もご苦労なこって」

中島が言うところ、ヨシコがキツと中島を睨みそれに気づいた中島が顔をそらした

「大嫌いだ……ッ」

そう呟くとヨシコが京助の腕を引っ張って歩き出した

「……オイ； 逆方向；」

引っ張られながら京助が言った

朧月のせいで星が見えなくそれでもその朧月の光りで明るく優しく照らされている神社の屋根の上
あぐらをかいてそこに座るは阿修羅

「なあ……オライは怖いんやよ」

カンブリの頭部分を撫でつつまるで語りかけるかのようにカンブリに向かって阿修羅がボソツと言った

「ずっとと思える今が……無くなった時が怖いんきに……」

頭のみよんみよんを風に遊ばれながら阿修羅が寂しそうに笑う

「……それが自分の手で失くすことになるってえことに緊那羅耐えられないと思うか？」

語りかけてもカンブリからは何も返ってはいない

「【今までに無い時】 ちゅーのも……また……な……オライにもどうなるかはわからんきに……」

阿修羅が朧月を見上げた

「……ただ……オライや迦楼羅みたいなことになるのは……嫌なんよ……なあ……」

朧月が阿修羅の頬の傷を照らした

「……会いてえなとかいまだ思うあたり……未練がましいんやなオライも」

阿修羅がカンブリを持ち上げた

「あん時……駄目もとで願ったくんだったなあ……流れ星に」
阿修羅が溜息をつく

「……幸せな【時】を……」

星が見えない夜空を見上げて阿修羅あしゅらが呟いた

「制多迦様せいたか」

鳥俱婆迦うぐばかがガキンチョ竜を抱く制多迦せいたかに声をかけた

「…に？」

制多迦せいたかがヘラリ笑顔で鳥俱婆迦うぐばかを見た

「体大丈夫？」

鳥俱婆迦うぐばかが聞くと制多迦せいたかがゆっくり目を開けた

「…いじょうぶだよ…僕は」

制多迦せいたかが言った

「でも半分ここにあるんでしょ？ だから…」

鳥俱婆迦うぐばかが制多迦せいたかの宝珠を指差して言う

「…うだね…でも僕は僕だから大丈夫…」

制多迦せいたかが笑った

「…ゆうは僕を助けてこうなって…だから僕はここにいるんだ…」

自分の腕の中で眠っているガキンチョ竜を見下ろして制多迦せいたかが呟く

「…つと竜は竜として京助たちを守りたかったのに僕のせいであ

なったんだよね…」

「制多迦様せいたか…」

静かに言った制多迦せいたかの顔を鳥俱婆迦うぐばかが覗き込んだ

「そこでそれ以上言うとか叩くよ」

「矜羯羅様こんがら」

制多迦の頭の上に紙おむつをした尻が乗った

「…んがら…」

「…叩かれないの？」

制多迦せいたかを見下ろして矜羯羅こんがらが言う

「竜がこうなったのは君だけのせいじゃない…守れなかった僕のせ

いでもあるんだよ」

矜羯羅こんがらが言うとか制多迦せいたかが驚いた顔で矜羯羅こんがらを見上げた

「それならおいちゃんだつてそうだよ制多迦様^{せいたか}」

制多迦^{せいたか}の服を引っ張つて鳥俱婆迦^{うぐばか}が言った

「そしてねここに京助がいたらきつとこう言うんだと思う」

「…ようすけが…?」

「誰が悪い彼が悪い言つてたらキリがねえって」

鳥俱婆迦^{うぐばか}が言うのと制多迦^{せいたか}と矜羯羅^{こんがら}が顔を見合わせた

「…今の京助の物まね?」

矜羯羅^{こんがら}が鳥俱婆迦^{うぐばか}を見る

「似てなかった?」

鳥俱婆迦^{うぐばか}が首をかしげると制多迦^{せいたか}が顔を背けたあと肩がピクピク震えた

「…ツボつたの?」

矜羯羅^{こんがら}が制多迦^{せいたか}に聞くと制多迦^{せいたか}が頷いた

「阿修羅君^{あしゅら}——————?」

呼ばれた阿修羅^{あしゅら}が振り向いて見下ろすとそこには自治会から返った母ハルミ

「いんやゝ…カンブリと月見してたんきに」

ヒラヒラと母ハルミに向けて阿修羅^{あしゅら}が手を振る

「滑って落ちるわよー?」

母ハルミが笑いながら言う

「大丈夫だっつーん」

阿修羅^{あしゅら}が立ち上がって伸びをした後朧月を見上げた

「そろそろ家に入っちゃいなさいね」

「おー…先はいつててくりやれ」

母ハルミが言うのと阿修羅^{あしゅら}が返した

「…【幸せな今】と【幸せな時】…両方はやっぱ贅沢なんかね」
カンブリを腰にくくりつけた阿修羅^{あしゅら}が屋根から飛び降りた

「悠助…寝ちゃった?」

慧喜^{えき}が布団の中にいる悠助^{えき}に声をかけた

「うん」

モゾモゾと悠助^{えき}が顔を出す

「悠助^{えき}：俺ね今凄く幸せなんだ…」

小玉電灯と月明かりの部屋の中 慧喜^{えき}が言った

「今までの中で一番幸せなんだ…だから怖いんだ…」

「怖い？」

悠助^{えき}が起き上がって慧喜^{えき}を見ると慧喜^{えき}が小さく頷いた

「今を無くすのが凄く怖い…悠助^{えき}を失うのが…」

そう言った慧喜^{えき}の頭を悠助^{えき}がゆっくり撫でたあと慧喜^{えき}の頭を抱きしめた

「…まだ怖い？」

悠助^{えき}が聞くと慧喜^{えき}がその悠助^{えき}の体をぎゅっと抱きしめる

「…悠助^{えき}の心臓の音聞こえる…」

「どきんどきんって？」

「うん…」

慧喜^{えき}がゆっくり目を閉じた

「だって僕生きてるもん。だからどきどきいってるんだよ」

悠助^{えき}が笑った

「…俺は？」

慧喜^{えき}が聞くと悠助^{えき}が慧喜^{えき}の胸に顔をうずめた

「…うん…大丈夫ちゃんとどきどきいってるよ？ 慧喜^{えき}も」

「…生きてる？」

慧喜^{えき}が聞くと悠助^{えき}が顔を上げた

「生きてるよ」

そう言って笑った悠助^{えき}を慧喜^{えき}が思い切り抱きしめた

「…うん…生きてる…」

慧喜^{えき}が静かに言った

「…主は望んでたんだやな？」

コマが境内の欄干に座って朧月を見上げて言った

「わからないんだやな…でも…主は今度も自分からいったんだやな」
イヌが階段に座って言う

「…思い出したんだやな…」

いつの間にかゼンの姿になったコマが赤い前髪を風に靡かせて俯いた

「やっぱり主はゴ等の記憶を…」

イヌもゴの姿になり立ち上がった

「ゼン等は…栄野を守る…」

「ゴ等は…栄野を守る…」

ゼンとゴがハモって言う

「ただ…それだけなんだやな」

ゴが言うとそのからしばらくの沈黙

「ただそれだけでいいんだやな」

ゼンが言う

「そうなんだやな…そうなんだやな…！
難しく考えるのはゴ等らしくないんだやな…！」

ゴが伸びをして言った

「栄野の前後は我等が守るんだやな…！」

ゼンが朧月を見上げて言うのにんまりと笑った

「…なにがあっても」

ゴが言うときゼンが頷きがしつと腕を組み合わせてまた笑った

「…つたく何しにいったんだか…」

「いいじゃない！ あーもう…」

「あーもうはこっちだもう…」

石段を登りながら京助が溜息をついた

「…緊那羅？」

足を止めたヨシコが言った言葉に京助が石段の上を見ると鳥居の下
に緊那羅きんならがいた

「まさか待ってたとか…じゃないわよね？ あれからずっと？ ま

さか…よね?;」

ヨシコが言う

「…あんの馬鹿ならやりかねん…;　　ってか阿呆…;」

京助が石段を一段抜かしで駆け上る

「ちょ…つと待ってよっ;」

ヨシコも一段ぬかしではないが京助に続いて駆け上った

「なにしてんだよ;」

「うわ;」

いきなり声をかけられて緊那羅きんならが思わず上ずった声で京助を見上げた

「あ…京助…と吉祥…;」

「何だか私はオマケみたいじゃない?;　　そうよオマケみたいだわ;」

ヨシコが腰に手を当てて溜息をついた

「で…なにしてたんだよ」

京助が聞くと緊那羅きんならが立ち上がった

「待ってたんだっちゃ」

緊那羅きんならが言って笑った

「家ン中でまったりやいいじゃん;」

「おかえり言いたかったんだっちゃ」

頭を掻いた京助に緊那羅きんならが言った

「んなもん家の中にも言えるだろうが…;　　寒いのアカンクセに…」

「…京助…鈍いわ…そうよかなり鈍いわ」

京助が言うヨシコが首を振って言う

「…私先家に入るわ」

ヨシコが二人の横を通って歩いていくのをしばらく黙ってみていた
あと顔を見合わせた

「…鼻水」

京助が言う緊那羅きんならがズツと鼻を吸った

「…ただいま」

「あ…うん…おかえりだっちゃ」
歩き出した京助の隣に追いついた緊那羅きんならが嬉しそうに笑った

【第十一回・参】ちもきのぽぽんた（前書き）

黄色い春に南の小さな恋人がやってきた

【第十一回・参】ちもきのぼんた

「俺：何年ぶりだろか…」

南がそつとフローリングの床に手を置いた

「この部屋の床まともに見たの」

そしてでべろくと床に伸びた

「こんなに広がったんだあねえ…」

ズシッ

「まだ終ってないナリ」

慧光^{えいこう}が寝そべる南の背中の上にゴミ袋を乗せた

「あゝ：ゴミ投げですねー…」

ノソノソと起き上がった南が廊下に目をやると山となっているゴミが目につき目をそらした

「燃やすゴミはウラのドラム缶で：燃えないゴミは：運ぶしかないんだよナア；」

南ががつくり肩を落した

「私も最後まで手伝うナリから：ホラ」

「…ここはアレだ：ファアラウェイのフレンズにSOS指令を出すしかないねゝ：よっし」

慧光^{えいこう}が肩を叩くと南が小走りで部屋を出て行った

「京助は？」

母ハルミが電話を持ったまま茶の間に姿の無い京助の行方を聞いた

「まだ寝てるんじゃない？」

哺乳瓶を片手に矜羯羅^{こんがら}が答える

「たぶんそうだと思うっちゃ； 8時半だし：起こすっちゃ？」
ガキンチョ竜の一人に哺乳瓶を吸わせながら緊那羅^{きんなら}が言う

「そうね：お願いしようかしら？　そして起きたら南君から電話きてたから掛けなおすように言ってくれる？」

母ハルミが言うきんならと緊那羅が頷いた

「おいちゃんの計算ではまたたぶんくだらない用事だとおもう」

ガキンチョ竜の一人を肩に担いでゲップをさせようとしている制多せいたか迦の隣で鳥俱婆迦うぐばかが言った

「：こうは南の家に泊まったんだね」

制多迦せいたかが言う

「慧光えこうは少し制多迦せいたか様　矜羯羅こんがら様離れしないと駄目なんだよ」

鳥俱婆迦うぐばかが言うせいたかと制多迦がヘリリ笑った

「うぐちゃんも慧喜えきちゃんも慧光えこう君も皆タカちゃんとかんちゃんの
こと好きなのね」

「そうだよでもおいちゃんハルミママも好きだよ」

母ハルミが電話を切りながら言ううぐばかと鳥俱婆迦が言った

「あらぁありがとう嬉しいわ」

母ハルミが笑った

「よくまあ：：」

坂田がリヤカーを後ろから押しながらゴミ山を見上げた

「どれだけ地球に厳しい部屋だったんだよ：：」

ゴミが落ちないように横で支えながら京助も言った

「もう一回運ばねえとだな：」

リヤカーを引っ張りながら中島が溜息をついた

「にしてもよく片付いたよな一日で：スゲェじゃん」

坂田が後ろから手にゴミ袋を持って歩く南を慧光を見た

「俺はただゴミを袋に突っ込んでただけなんだけどね：　コロち

ゃんが殆どやったみたいなもの」

南が慧光えこうを見てニーツと笑った

「一つ持つっちゃ」

「あ、さんきゅラムちゃん」

南の持っているゴミ袋を一つ緊那羅きんならが受け取った

「あれだけ片付けがいのある部屋は久々で私も楽しかったナリ」
慧光えいこうが笑った

「なにはともあれ：これでありすがいつ来ても大丈夫だな」

中島がゴミ回収場所の前でリヤカーを止めて言った

「：この状態ではたして後約一週間もつかだよな問題は」

京助がゴミ回収場所の簡易小屋の戸を開けながら言う

「：アッハッハ！　：二日で散らかす自信があります」

南が笑った後真顔で言う「と坂田が頭をチョップした

「部屋に入るな」

「いやむしろ家に入るな」

中島と京助がゴミを小屋に投げ込みながら言った

「なにをどうすれば二日で散らかるんだっちゃ；」

緊那羅きんならも持っていたゴミ袋を小屋の中に放り込んだ

「出したらすぐ片付けるってことしないナリか？」

慧光えいこうが南に聞く

「それは京助もやらないっちゃ」

慧光えいこうの言葉を聞いた緊那羅きんならが京助を横目で見る

「だから散らかるナリよ：」

ジト目で慧光えいこうが南を見る

「あああ：；　視線が痛い痛い；」

南が中島の後ろに隠れた

「そういや中島：昨日は悪かったな；　あの時間に」

京助が小屋の戸を閉めながら中島に言う「と中島が目をそらした

「：別にいいってただムカついただけだし？　：さく第二弾第二弾」

中島がリヤカーをＵターンさせて南の家の方に向けた

「俺乗っていい？」

南がリヤカーに手をかけて聞く

「ジャンケンだジャンケン」

京助が言う

「ジャンケン？」

慧光えいこうがきよとした顔で聞いた

「グーチョキパーで…」

「あのネタはもう言うなよ？」

説明しだした南に京助が突っ込んだ

「おっ！　ぽぽんた咲いてんじゃん」

京助が立ち止まってしゃがんだ

「ぽぽんた？」

緊那羅きんならがしゃがんだ京助を振り返って止まった

「たんぽぽのことだよたんぽぽ」

坂田が戻ってきて説明する

「そういや毎年この空き地たんぽぽの群生地だもんな」

中島もリヤカーを止めて戻ってきて言う

「群生地？」

慧光えいこうがまだ数えるだけしか咲いていないたんぽぽを見て言った

「そうそうここ一面真っ黄色になるんだよね」

南が言う

「あと一週間もすりゃ…見ごろだろな」

京助がたんぽぽを摘んでくるくる回した

「やっとこさ春だねえ…桜はまだまだだけど」

南が歩き出した

「…後一週間で見ごろならありますがるのに間に合うんじゃないっ
ちや？」

緊那羅きんならが言うと同がそろって南の背中に目をやった

「ぽぽんたで花見…ねえ」

坂田が言う

「まあフキノトウよかは…いいかもしれねえな」
中島も言う

「…って言ってるナリよ？」

慧光えいこうが南に声をかけ？

「…ってかやっぱ花見しか思いつかねえの俺等」
京助がハッハと笑った

「乏しい想像力ですねえ」

坂田もハッハと笑う

「でも思いついたのは緊那羅きんならさんですねえ」

中島が緊那羅きんならを見た

「…何だっちゃ；」

緊那羅きんならがたじつと後ずさる

「おいでませ乏しい想像力の世界へ！」

坂田がバツと両手を広げて言った

「今ならもれなくぼんた一本ついてくる！！」

京助が手に持っていたたんぽぽを掲げて言った

「行きたくないっちゃ；」

緊那羅きんならが言う

「で…どうするや」

中島が南に聞く

「上見上げなくていいから逆にいいかもしれねえぞ？」

坂田が言う

「上から毛虫とか降ってくることもねえしな」

京助も言った

「まあ…そうだよね…うーん…」

「おつまみとかなら多少協力してやっからさ」

中島が言うとながバツと振り返った

「よっしOK！ 花見歓迎！ぼんた万歳！！」

南がウインク＋ペコちゃんのごとく舌を出して親指を立てた

「緊那羅きんならの案採用！！おめでどう！」

坂田が緊那羅きんならの背中を叩いた

「ではこのぼんたを…」

京助がたんぽぽを緊那羅きんならに差し出した

「あ：りがとだっちゃ；」

緊那羅きんならがたんぽぽを受け取った

「そうだ！ お礼にいいこととしてやるよラムちゃん。ぽぽんた貸して？」

南きんならが緊那羅からたんぽぽを受け取るとその茎を縦二つに裂いた

「しゃがんで？」

「あ：うん？」

笑いながら南が言うきんならと緊那羅がしゃがむ

「こうし：てつと。あら！ かんわいい」

南が笑いながら言った

「：違和感ねえのがなんだかなあ；」

京助が口の端を上げた

「似合う似合うハッハ」

坂田が笑いながら見た緊那羅きんならの頭にはたんぽぽの花

「茎で結んだんナリか」

慧光えいこうが言うきんならと南が頷いた

「昔よく作っただよねえ：花冠とか？」

「俺たんぽぽの茎で笛よく作っただよ：苦いんだよなアレ；」

中島が言う

「後さ咲いた後のツボミ裂く前にジジかババかコーヒーかってのもやらんかんだか？」

京助が言う

「やったやった！ いや：懐かしいですな」

坂田がしみじみ言った

「何だかいろんなことやってるんだっちゃね」

緊那羅きんならが言う

「だよなあ：なんかこう：まだ14年くらいしか生きてねえのに思い出とかわんさかあんだよな」

京助が言った

「だぶん忘れてることとかもあるんだよなコレが」

坂田が言う

「俺の少ない頭には全部なんか突っ込めないしねえ」

南がハッハと笑った

「じゃアレだ来週の花見はありすがいつまでも覚えているようなモンにしたいですな」

中島が言う

「あたりき!!」

南が親指を立てて返した

「…暇なんだね」

矜羯羅こんがらが声をかけるとピョン毛がぴくつと反応した後 乾闥婆けんだっぱがあ
のにつこり（でもどこことなく怖い）笑顔で振り返った

「余計なお世話です」

そして言う

「…子供の前だぞ；」

もう放っておくことにしたのか迦楼羅かるらがガキンチョ竜に前髪を引っ
張られながら言う

「別になにもしませんよ？ ねえ？」

乾闥婆けんだっぱが今度はその笑顔を迦楼羅かるらに向けた

「ねえといわれてもな；」

迦楼羅かるらがボソツと言う

「…そっちはどう？」

矜羯羅こんがらが言うと迦楼羅かるらが矜羯羅こんがらを見た

「上の様子か…？」

迦楼羅かるらが言うと矜羯羅こんがらが頷いた

「【空】であんなことがあったのに【天】がなにもないなんて思えない…」

矜羯羅こんがらが言う

「たしかに…おかしいですね」

乾闥婆けんだつぱがボソツと言った

「迦楼羅かるら」

そして迦楼羅かるらに声をかける

「…鈍い君でも気づいているんじゃない…?」

矜羯羅こんがらが立ち上がった

「【上】のこと…」

矜羯羅こんがらが言うと乾闥婆けんだつぱが迦楼羅かるらを見た

「…ワシは何も知らん…」

吐き捨てるように言うと迦楼羅かるらが踵を返し部屋を出て行った

「…わかりやすいんですから…」

迦楼羅かるらが出て行った後を見て乾闥婆けんだつぱが溜息をついた

「心配しなくても…大丈夫ですよ…」

乾闥婆けんだつぱが背を向けたまま矜羯羅こんがらに言う

「貴方に心配されては調子が狂います。気持ち悪くて」

そう言い残して乾闥婆けんだつぱも部屋を出て行った

「…だつてさ…」

矜羯羅こんがらが抱いていたガキンチョ竜に話しかけた

「ぶー…」

不安げな顔で矜羯羅こんがらを見上げてきたガキンチョ竜の尻を軽く叩きながら矜羯羅こんがらが窓から空を見上げた

「わー!! 緊ちゃん可愛いー!!」

悠助の声が茶の間に響いた

「ほっほー可愛いやんけ緊那羅きんなら！ ハッハッハ似合う似合う」

阿修羅あしゅらが膝を叩いて笑いながら言う

「…複雑だっちゃ…」

髪にまだタンポポを付けたまままだた緊那羅きんならが苦笑いを浮かべる

「そうだ悠、お前も来るか？ タンポポ花見」

制服の上着を脱いだ京助がティッシュを数枚取って鼻にあてながら

聞いた

「タンポポ花見？」

悠助が聞き返す

「来週ありすが来たら毎年タンポポ沢山咲いてる空き地で花見やるべって事になってさあ…で…」

「行くー！！」

まだ言いかけの京助に悠助が元気よく手を上げて返事をする

「悠助が行くなら俺もいきたい、っていうか行く」

慧喜も手を上げた

「ハイハイ！！ オライもオライも！！！！」

阿修羅も手を上げた

「…つまみ足りるっちゃ？」

緊那羅が京助に聞く

「矜羯羅様と制多迦様も一緒に行くナリッ！！！！」

慧光が横から両手を挙げて言ってきた

「うるさいよ慧光」

慧喜が慧光を睨む

「慧喜は矜羯羅様を制多迦様を誘わないんナリか？」

慧光が言うと慧喜がむっとした顔をする

「後から声をかけようと思ったんだよ！！ もう！！」

慧喜が言う

「喧嘩駄目だよ慧喜…」

悠助が慧喜に言った

「こんなの（えき）喧嘩じゃないよ悠助」

悠助を抱きしめながら慧喜が慧光を睨む

「まあまあ； 姉弟喧嘩は犬も食わないってな；」

阿修羅が二人の間に入って言う

「…どうしたん竜のボン」

いつの間にか固まっていた京助を見て阿修羅が声をかけた

「…姉弟…って…」

「慧喜えきと慧光えこうのことだっちゃよ？」

緊那羅きんならが答えた

「慧喜えきがお姉さん？ それとも妹？」

悠助が聞く

「俺が上で慧光えこうが下」

慧喜えきが答える

「あんれ？ 竜のボン知らなかったんけ？」

阿修羅あしゅらが聞くと京助が頷く

「実はそうなんです」

阿修羅あしゅらが笑いながら慧喜えきと慧光えこうの肩を掴んだ

「いよいよ明日でございますね南さん」

生徒玄関で靴を履き替えながら京助が言った

「これから買い物行くか？」

靴を履き終えた中島がずり落ちた鞆を肩にかけなおしながら言う

「一旦家もどるか？ 俺サイフ持ってきてねえし…どうせ今時間なら緊那羅きんならも買い物行くと思うし」

京助が言った

「何の話？」

「おうっ！…」

いきなり聞こえた落ち着いた声に坂田が声のトーンを上げて吃驚した

「本間ちゃん…； 相変わらずいつきたの；」

南が苦笑いを浮かべた

「何の話してるのかって聞いているの」

表情を変えずに本間が聞く

「南君の恋人が明日来るんでその準備の話」

中島が答える

「恋人？」

本間の後ろから阿部が聞く

「前にホラ：手紙：ってお前等いたよな？」

京助が指で四角い封筒の形を描きながら説明する

「ああ！！ 何？ その子がくるの？」

思い出したのか阿部が声を大きくして言う

「そ。で明日花見するんだ」

南が嬉しそうに言う和阿部と本間が顔を見合わせた

「でもまだ桜咲いてないよ？ それとも京助ンとこの桜の木咲いたの？」

阿部が京助に聞く

「別に桜じゃなくても花は花だしってことでタンポポで花見すんだ」
京助が言った

「へえ！！ 面白そう！！」

阿部が声を上げる

「：いきたい：んだよねやっぱり」

「なっ！！！！；」

その阿部の耳元で本間がボソっと言う和阿部が赤くなって眉を吊り上げた

「わかりやすいわかりやすい」

うんうんと本間が頷く

「私たちも行っている？ もちろんお菓子とか協力するから」

「ちょ：香奈！？；」

本間がさらっと京助達に向かって聞くと阿部が何故か慌てる

「どうする主催者」

坂田が南を見た

「うーん：女の子ありす一人てのもって思ってたから：いいよ歓迎！！」

南が親指を立てた

「女の子一人：ってラムちゃんはこないの？」

「いや：来ると思うけど：なあ？」

阿部が聞くと中島が京助を見た

「なあって何でそこで俺に視線が向けられるんですか；」

京助が言う

「こないと思う？」

坂田が阿部に聞く

「……べ…別に…じゃあアタシも行く」

阿部が言うと本間がふっと笑った

「じゃあ一旦家に帰って資金もって集合！！」

「どこに」

南が高らかに人差し指を天に向けて立てて言うとは本間が突っ込んだ

「タダイマントヒヒ」

ガラガラと玄関の戸を閉めて京助が靴を脱いだ

「おかえりだっちゃ」

「うお；」

閉めた戸が再びガラガラと開いて買い物袋を提げた緊那羅きんならが入ってきた

「…買い物か？」

「うんただいまだっちゃ」

買い物袋を見て京助が聞くと緊那羅きんならが答えた

「おきゃーり…一足遅かったか…；まあ…いつか」

「何がだっちゃ？」

家にあがりながらボソツと行った京助の言葉に緊那羅きんならが突っ込む

「いや…明日の買い物これから行くからさお前晩飯の買い物どうせ行くなら一緒にって思ってただけ」

足を進めながら京助が言う

「…そうなんだっちゃ…」

そういった後少し止まると緊那羅きんならの口元が微笑んだ

「京助」

「あ？」

「ありがとだっちゃ」

京助の横を緊那羅きんならが小走りですり抜けながら笑顔を京助に向けた

「：何にありがとなんだ？；」

身に覚えのないお札を言われて京助が口の端を上げた

「なんとなく嬉しかったからだっちゃ」

台所の方に後ろ向きで向かいながら緊那羅きんならが言った

「：へんなヤツ」

緊那羅きんならが廊下を曲がっていなくなると京助が口の端をあげて言った

「何の集団だって話だな」

昔映画の舞台に使われたとかいう小さな駅に集合した面々を見て坂田が言う

「阿部さん久しぶりだっちゃ」

緊那羅きんならが笑って言う和阿部が笑い返す

「：少しは大人になったみたいだね」

そんな阿部に本間がボソツと突っ込むと阿部がむすっと膨れた

「案の定なカンジだねえゝハッハ」

南が言う

「まあ想定内だったけどさ」

「寒いわ！！」

京助が言うと後ろから飛んできた声

「そりゃ：寒いだろうて；」

阿修羅あしゅらがヨシコの肩を叩いた

「しょうがないじゃない！！？ あっくんも迦楼羅かるらも乾闥婆けんたつばも私を

置いていこうとするんだもの！！」

ヨシコが阿修羅あしゅらに食って掛かった

「：やっぱりか：；」

中島が溜息をつくと手に持っていた紙袋を見下ろした

「なんだソレ中島」

南が紙袋を覗き込んで聞く

「：ミカ姉の服」

中島がボソツと答えた後京助に紙袋を突き出した

「アイツに貸してやって」

「は？」

中島が無理矢理京助に紙袋を押し付ける

「自分で渡しやいいじゃん；」

坂田が突っ込む

「なに照れてるんでちゅか？」

南がツンツン中島の頬を突付く

「別に照れてねえけど俺が話しかけるとアイツ嫌がんだろが」

中島が言う

「：ん」

「へ？；」

京助が隣にいた緊那羅きんならに紙袋を渡した

「まかした」

「私が渡すんだっちゃ？；」

京助が言うきんならと緊那羅が自分を指差して聞くと京助が頷いた

「吉祥きつしょう」

緊那羅きんならがヨシコに声をかけた

「コレ：えと：中島から」

「ゆーちゃん？ …どうして自分でこないのよ、そこにいるのに」

ヨシコが紙袋を受け取りながら中島の方を見て言う

「なんか自分が話しかけると吉祥きつしょうが嫌がるからって言ってたっちゃ」

「な：っ：」

緊那羅きんならが言うきんならとヨシコが目を見開いた

「私がいつ嫌がったのよ！！」

「声が大きいですよ吉祥きつしょう」

ヨシコが声を上げると乾闥婆けんたつばがソレを批難した

「だって：」

「態度がモノをいつているのではないですか？」

ぐつとこらえたヨシコに乾闥婆けんたつばが言う

「態度：つてなによ…」

「まあアレだヨシコ：素直になれっちゅーことやんきに」
阿修羅あしゅらがヨシコの頭に手を置いて言う

「何よそれ！！　まるで私が素直じゃないみたいじゃない！？　そ
うよそう聞こえるわ！！」

「誰が素直なのさ…」

ヨシコが怒鳴ると矜羯羅こんがらがうるさそうに突っ込む

「素直って何？」

悠助えいすけが慧喜を見上げて聞いた

「素直というのはそうですね：貴方みたいなことを言うのですよ悠
助」

乾闥婆けんたつばが先に答えると慧喜えきがぷうと膨れた

「慧喜：大人気ないナリよ」

「なんだよ慧光えいこう！！　うるさいなっ！！」

慧光えいこうが言うと慧喜えきが慧光えいこうに食って掛かる

「：あまあ；」

「：ふんっ」

制多迦せいたかが間にはいつてなだめると慧喜えきがそっぽを向いた

「：アンタも素直になりなさいね」

「うるさいわよっ！！；」

本間が阿部の肩を叩きながら言う和阿部が怒鳴る

「そろそろきますぜ！！」

殺風景な駅の中に掛けられた時計を見て南が言った

1両編成の電車がキキィ〜というブレーキ音と共に止まりガコンと
揺れた

「：乗ってるか？」

小さなホームを南が小走りで後ろ車両へと向かっていくのを一同が

黙って見ているとま真ん中より少し後ろの方の窓を見た南が止まって途端満面の笑みを浮かべるとダッシュで後ろの乗降口へと向かう
「…わかりやすう…」

それを見ていた坂田が口の端を上げると駆け出した

「遅れを取ってなるものか!!」

京助がそう言いながら駆け出すと中島も京助に続いて駆け出した

「ちょ…待ってよ!!」

阿部が躓きながら駆け出すと本間もゆっくりと阿部の後を追いかけて歩いていく

「…ワシらも行くべきなのか？」

迦楼羅^{かるら}がボソッとこぼすと各々の顔を見てまあ…とりあえず行ってみますかという結論に達したのかゾロゾロとホームに足を進めた
「あります!!」

プシー!!

っという音がして自動ドアが開くと同時に南に向かって伸ばされた小さな両手の下に南が両手を差し入れ白いワンピースを着たありすを抱き上げた

「おっ!! 南君のチョイ人再び!」

京助が拍手をしながら言った

「こんちわおばさん」

ありすに遅れて姿を現したありすの母親らしき女性に南が挨拶をする

「凄いい出迎えね…よかったねありす」

総勢10人の顔ぶれを見渡してありすの母親らしき女性がありすの頭を撫でながら笑った

「今回は何の話の格好してるの？」

ありすの母親らしき女性の言葉に3馬鹿と京助が（一部私服を着てる）摩訶不思議服集団を見た

「…え…ナンデシヨ?」

坂田が頭を掻きながらチラッと南を見た

「…あゝ…京助君と愉快的仲間たち…カッコ飯で」
南が言う

「だれが愉快的仲間なんですか」

途端（どことなく怖い）笑顔で乾闥婆けんたつぽが突っ込んだ

「…じゃあありすお兄ちゃんの言うことちゃんと聞くのよ？ 朔夜
君じゃあ6時までお願いね」

ありすの母親らしき女性がそう言い残して駅の中にはいっていった
「可愛くこの子がありすちゃん？」

阿部が南に抱き上げられているありすを見て言う「ありすがにっこり笑った」

「いくつ？」

本間が聞くとありすが右手を広げた

「五歳？」

本間が再度聞くとありすが頷く

「…の子…声が…？」

「そう」

制多迦せいたかがありすを見て言う「南が返事をした」

「可愛いだろ？」

ありすを下に降ろした南が笑顔で言う

「…そうだね」

矜羯羅こんがらがありすの頭を撫でるとありすが笑顔で矜羯羅こんがらを見上げた

「ねえねえありすちゃんは南…このおにいちちゃん好き？」

「キャー！！！！ 阿部ちゃんなんつー質問をいきなりしてください
る！！」

阿部がしゃがんでありすに聞くと南が慌て、ありすがポツと頬を赤らめた

「…きゃわゆいなあ…」

阿修羅あしゅらがほへっとした顔で言う

「好き？」

阿部がもう一回聞くと南の服をぎゅっと握ってありすが頷いた
「オメデトウ」

京助が南の肩を叩いた

「…あ…りがとございます…」

南がどもりながら言う

「…もしかして照れてる？」

本間がボソツと言うと南の肩がびくつと動いた

「や…ハハハハハ！…！」

「笑ってごまかしたっちゃ…」

いきなり笑い出した南を見て緊那羅きんならが小さく呟いた

「ああいうのを素直っていうんだよ」

一歩下がったところで見ていた鳥俱婆迦うぐばかが隣のヨシコをちらつと見て言った

「…ああいうのって…どういうのよ」

吉祥がむすつとして聞き返す

「自分の気持ちに正直」

鳥俱婆迦うぐばかが言う

「私はいつでも正直よ？　そうよ嘘の気持ちじゃないわ」

ヨシコが強く言った

「…そう？」

「…そう…よ」

鳥俱婆迦うぐばかがヨシコを見て聞くとヨシコが顔をそらして自信なさげな返答をすると中島と目が合った

「…っ」

そして思いつきりそっぱを向く

「…な…」

それを見た中島が眉を吊り上げた

「そうはおいちゃん思わない…」

鳥俱婆迦うぐばかがボソツと言った

「ありすはタンポポ好きか？」

南が小さな手を掌に包み込むように握って歩きながらありすに聞くとありすが嬉しそうに笑って頷いた

「そっかーこれからいくトコにはタンポポがいっぱい咲いててさー」
ありすと同じくらい嬉しそうな笑顔で南が話す

「おーおー：ほほえましいカッポー」

ソレを見て坂田が茶化すように言った

「アレだけ素直だと本当嫌味ナシで可愛いよな」

中島がどことなく強めの口調で言う

「：何頷いてるんですか？ 迦楼羅」

中島の言葉の後にしみじみと頷いた迦楼羅に乾闥婆が聞いた

「や：んんっ！；」

いつもながらの（どことなく怖い）笑顔で聞いてきた乾闥婆に迦楼羅が咳払いで返す

「どうしたんだっちゃ？ 吉祥」

中島の持ってきた蜜柑の服に着替えたヨシコが不機嫌そうな顔をしているのを見て緊那羅が声をかける

「なんだか今のゆーちゃんの言葉：私に向けられてるような気がしなかった？ ねえ？ そう聞こえなかった？」

ヨシコが緊那羅を問い詰める

「え：つと；」

緊那羅が困った顔で少し後ずさりする

「：今の中島の言葉に同感した人半分以上いると思う」

本間が隣を歩く阿部をチラッと見て言う和阿部がキッと本間を見た

「：素直：」

慧光が呟きながら自分のやや後ろを悠助と手を繋いで歩く慧喜を見た

「その点においちやあばかも素直だよなハッハ」

「鳥俱婆迦だッ！！」

阿修羅が笑いながら鳥俱婆迦の頭を撫でた

「…だつてさ」

「何が」

矜羯羅こんがらがトンッと軽く京助にぶつかりながら言う

「…つてさ」

矜羯羅こんがらの真似してなのか制多迦せいたかも同じように京助にぶつかった

「だから何が；」

早足で少し前に出て二人を振りかえって京助が言う

「我慢つてし続けると素直じゃいられなくなるみたいなんだよね」

矜羯羅こんがらが言うせいたかと制多迦せいたかが頷いた

「…んがらもそうだもんね」

「うるさいよ」

ペシッ

制多迦せいたかが言うこんがらと矜羯羅が裏手で制多迦せいたかの額を叩いた

「俺は別に我慢とか…；」

「京助ー！！」

何か言おうとした京助を坂田が前の方で呼んだ

「…してねえよ」

少し間を置いて京助がそういう言い残り坂田の元に駆けて行く

「…んがら最近よく喋るし表情コロコロ変わるようになったよね」

赤くなった額を撫でながら制多迦せいたかが言う

「…そう？ …だから何？」

矜羯羅こんがらが返す

「…かったなーって思う」

制多迦せいたかがへらりと笑った

「…君は少し顔を引き締めるようにしないとね」

矜羯羅こんがらが制多迦せいたかの頬を引っ張った

「ワリィね本間」

「別に？ いいよこのくらい」

駅に迎えにいくのに大荷物を持ったままだと何かと邪魔になるということで通り道に立っている本間の家に預けた荷物を受け取りながら坂田が言う

「どうしたあります？」

お菓子の入った袋を持った南をありますが見上げてそして手を出した「え？ 何？」

南がありすを見て聞く

「手伝いたいんじゃない？」

阿部が言うとありすが頷いた

「大好きな南君のお手伝いしたいんだ？」

京助が言うとありすがポツと顔を赤らめた

「…きやわゆいなあ…」

ソレを見て場に和みの空気が流れる

「もー…可愛いナアありすー…」

南がニヘーっと笑った

「…なんですか」

視線を感じた乾闥婆けんたっぱが言うかるらと迦楼羅かるらが乾闥婆けんたっぱの荷物に手を伸ばした

「コレくらい持てますよ」

「いいから貸さんか」

「いいです」

「貸せと言っているだろう！ ワシだって何か持ちたいのだ！！」

「じゃあコッチ持って」

「なっ；」

乾闥婆けんたっぱと荷物の取り合いをしていた迦楼羅かるらに中島が紙袋を差し出した

「ワシは…！！；」

「よかったじゃないですか持ち物できて…それともコッチが持ちたかったんですか？ 交換しますか？」

中島に何か言い返そうとした迦楼羅かるらに乾闥婆けんたっぱが言う

「…ッ；」

迦楼羅かるらがぐつとこらえて紙袋を握り締めた

「かるらんから回りやねえ…」

「やかましいッ！！ たわけッ！！！！」

「おおおう！！！！」

阿修羅あしゅらがからかう様に言うと怒鳴った迦楼羅かるらの口から炎が出た

「久々だな」

京助が口の端を上げて言う

「怖がらせてどうするんですか」

「いだだだだだだ！！！！」

乾闥婆けんたつばが（怖い）笑顔で迦楼羅かるらの前髪を引っ張った

「な…に今の…火…?」

阿部が眼を丸くして言う

「…あ…あ…；そっか…阿部…知らないんだ」

坂田がポンッと手を叩いた

「祭りの日…いなかったんだっけ」

中島が言う

「…京助…」

祭りの日という言葉聞き動きが止まった京助に緊那羅きんならが声をかけた

「…京助…」

二回目の呼びかけで京助が緊那羅きんならに向かって苦笑いを向ける

「なんでもね」

そう言うとき京助が3馬鹿の元に向かった

「おお…まっきつきやんけ…綺麗だねえ」

空き地について阿修羅あしゅらがまず第一声を出した

「すごい…何このタンポポの量」

阿部も空き地を見て言った

「そかー阿部ちゃんコッチ通らないんだもんねー」

南が言う

「で：どこに座るんだ？」

レジャーシートを持った中島が聞く

「：それ敷いちゃうの？」

ヨシコが中島に聞くと中島がどことなくむすっとした顔を向けた

「：俺に聞くなよ俺の方が聞いてるんだから」

「駄目よ！ 敷いちゃ駄目だと思うわ！！ だって可愛そうじゃない？ ソレに隠れて見えないばかりかその上踏んじやうなんて可愛そうよ」

「だから俺に言うなってんじゃん；」

ヨシコが中島に向かって言っているのを聞いたありすが南の服を引っ張って首を振った

「え？ …でも服汚れるぞ？」

ありすが何を言いたいのかなんとなくわかったのか南が言うところがあるが頷いた

「：君の膝の上に座らせれば？」

矜羯羅こんがらがふいに言った

「人間イスですか」

京助が言う

「阿部さん達は：」

「アタシ達は大丈夫よそんなお洒落とかしてないし」

緊那羅きんならが阿部と本間を見ると阿部が笑顔で返した

「慧喜えきは？ 僕の膝えきに座る？」

悠助が慧喜えきに言うとうと慧喜えきがきよとした後めちやくちや嬉しそうな顔をして悠助を抱きしめた

「俺も大丈夫だよありがと悠助」

そして悠助の頬に口付けた

「そういうことは大勢の前ではやらない方がいいナリよ：」

「うるさいなあ：もー」

慧光えいこうが突っ込むと慧喜えきが慧光えいこうを睨んだ

「喧嘩こそ大勢の前でしないでくださいね」

そんな二人に乾闥婆けんたつばが言った

ぐきゅるるるる…

「…懐かしいナアこの音…」

京助の言葉と共に一同の視線が迦楼羅かるらに向けられた

「…やかましい!!!」

「やかましいのはあなたの腹ですよ」

スコンっという音と共に乾闥婆が迦楼羅にチョップした

「痛いではないかたわけッ!!!」

「だから一口だけでも食べてはどうですかと言ったんですそれなのに竜田揚げ竜田揚げ…子供ですか」

「いだだだだだッ!!!」

怒鳴った迦楼羅の前髪を思い切り引つ張りながら乾闥婆が言う

「…慧喜えきと慧光えこうに言った本人が先に喧嘩してるね」

鳥俱婆迦うぐばかが言う

「ばか…こりやもう喧嘩じゃなくてたぶん…」

鳥俱婆迦の頭に手を置いて阿修羅あしゅらがその様を遠い眼で見と言う

「言うこと聞かない子供とスパルタな保護者」

阿修羅あしゅらが言うと3馬鹿と京助そして緊那羅きんならが頷いた

「…ありすちゃんいいものあげようか」

ギャーギャー騒ぎからはなれていた本間が両手を後ろにありすの前にしゃがんだ

「本間ちゃん？」

南が本間を見下ろすと本間が目を細めて笑った

「はいどうぞお姫様」

そしてありすの頭にタンポポで作られた花冠をのせる

「うっわー!!! サンキュ本間ちゃん!!! よかったなありすー!!!」

ソレを見た南がまるで自分のことのように嬉しそうにお礼を言った
「よく作り方覚えてたね香奈」

阿部が言う

「アンタ忘れたの？」

本間が返すと阿部がハハッと笑った

「可愛いつちゃよありす」

緊那羅きんならが言うとありすが嬉しそうに笑った

「俺も実は作れちゃったり？」

京助がシャキーンポーズで言う

「僕も作りたいー!!」

悠助が手を上げた

ぐううううううううう…

「…腹音で返事とは器用なヤツよ…」

「やかましいッ!!!」

坂田が言うかるらと迦楼羅が怒鳴った

「まあ！ 奥様素敵なネックレスですこと！」

坂田がタンポポで作られた首輪をつけている中島に言う

「あらあ安物でしてよ？ 奥様の髪飾りには及びませんわー」

中島が京助を見た

「こんなものなんテエことなくってよー？」

京助が言うかるらと3人してマダム笑いを始めた

「馬鹿ばっか」

本間が荳わかめを食べながらその様子を見る

「…ちゃんと残しておいてね」

その本間の後ろで早々と弁当を食していたかるら迦楼羅とこんがら矜羯羅こんがらに向けて
本間が言うこんがらと矜羯羅こんがらと迦楼羅が手を止めた

「…だってさ」

「ワシか?;」

ちくわのキュウリ詰めをひよいと口に入れた矜羯羅こんがらが迦楼羅かるらに言う

スコン

「二人共です」

軽快な音ともに乾闥婆けんたつばのチョップが二人の頭にヒットした

「いいかー?　ここをこう…ちよつときつめに巻いて…そうそう」

「こう?」

南を中心にあらずと悠助そして慧喜えき、慧光えこう、鳥俱婆迦うぐばか、緊那羅きんならがなにやら作っている

「たりなくなった」

鳥俱婆迦うぐばかがタンポポを編んだ物を南に見せた

「あー；　ちよつと短めの選んじやつたんだねえ；　そお言う場合は」

鳥俱婆迦うぐばかのソレを受け取ると南が長めに取ったタンポポを器用に巻きつけていく

「器用ナリね」

感心して慧光えこうが言うとなが笑った

「サンキュ」

そして照れくさそうに言いながら鳥俱婆迦うぐばかにソレを返した

「南って凄いいんだよー服とか作るんだよー」

悠助が言う

「俺の服もコイツから作ってもらった」

慧喜えきが今着ている服の首元を少し引っ張って言うところがあるが南を見上げた

「ありす?」

黙って自分の顔を見てくるありすに南がきよとしたまま声をかける

「…ごいね」

「ついうおいやあぎよ！！！！？？」

突然耳元でした制多迦せいたかの声に南が宇宙語を叫んで後ろに引いた

「制多迦…；」

「ハアイ！ 進んでるかい？ 諸君」

制多迦せいたかの後ろから阿修羅あしゅらがチャキツと片手を上げて言う

「これ制多迦せいたか様にあげるナリ」

慧光えいこうが立ち上がって出来上がったばかりのタンポポの花輪を制多迦せいたかの頭に置いた

「…りがと」

制多迦せいたかがヘラリと笑ってずり落ちそうになった花輪を戻しながら言う

「お〜いいねえ…」

「じゃああつくんにいちちゃんには僕があげるー」

悠助が笑顔で阿修羅あしゅらに言うえきと慧喜がむっとした顔で阿修羅あしゅらを見た

「慧喜…；」

ソレを見た慧光えいこうが溜息をつく

「おいちゃんは矜羯羅こんがら様にあげる」

鳥俱婆迦うぐばかが立ち上がって矜羯羅こんがらを探し始める

「向こうで何か食べてると思うっちゃ」

緊那羅きんならが右方向を指差して言った

「…何してるの？」

下から声をかけられた吉祥が目をやるとそこには阿部

「なんでもないわ」

ヨシコが首を振った

「よく登ったわねそんなトコに…怖くないの？」

阿部が見上げたのは結構いい感じに高い木の枝に座るヨシコ

「別に怖くないわ」

ヨシコが笑った

「ねえちよつといい？」

「本当？ おいちゃん天才？」

鳥倶婆迦うぐばかが身を乗り出して乾闥婆けんだつぱに聞く

「そうですね花輪作りの天才かもしれませんね」

乾闥婆けんだつぱがにつこり笑って言ううぐばかと鳥倶婆迦うぐばかの後ろにパアッとはなが咲いた（様に見えた）

「じゃあおいちゃん今度は乾闥婆けんだつぱにも作ってあげるよ」

そう言ううぐばかと鳥倶婆迦うぐばかがイソイソと長めにタンポポを三本とって花輪を編み始めた

「…不機嫌そうな顔するなら君も作ったら？」

「だ…ッ；」

チラッと横目で迦楼羅かるらを見ながら矜羯羅こんがらが言う

「べ…別にワシは…；」

迦楼羅かるらが慌てる

「黄色こんがらって濃い色にも映えるけど薄い色にも映えるんじゃない？」

矜羯羅こんがらが言うかるらと迦楼羅かるらが乾闥婆けんだつぱを見た

「…変わってきてるね…もしかしたら…」

「…そうだと…いいのだがな…しかしそうだとしたら…ワシはどうすればいい？」

鳥倶婆迦うぐばかの隣に腰を下ろして鳥倶婆迦うぐばかの花輪作りを見ている乾闥婆けんだつぱを二人して見る

「ヤツはもういない…しかしここに…そうになったら…」

「素直になれば？」

途切れ途切れに言うかるら迦楼羅かるらに対し矜羯羅こんがらがさらっと言った

「いつも君が乾闥婆けんだつぱに言うように君も素直になればいいんじゃない？」

矜羯羅こんがらがそういった後パリンと薄焼きサラダせんを齧った

「…沙紗…」

迦楼羅かるらが小さく呟いた

「わかりやすいんだよね」

「そうよね」

本間とヨシコが頷く

「…悪かったわね；」

阿部がブスツとした顔で言った

「そう言うアンタだって中島…」

「ちょっと待って？ どうしてそこでゆーちゃんがでてくるの？
そうよどうして？」

阿部が言うのとヨシコが間髪いれずに反論する

「だ…だって…」

ズバツと反論されて阿部が言葉に詰まった

「私はただゆーちゃんがムカつくだけよ。そうよソレだけなの」
「でも気になるんでしょ」

胸を張って言ったヨシコに本間がさらっと突っ込む

「それはムカつくから気になるだけよ」

ヨシコが返す

「…ふうん」

本間が意味ありげな表情でヨシコを見た

「…別にいいけどね…ああ見えて中島人気あるから」

本間が馬鹿騒ぎしている京助達に目を向けた

「私は…りゅー様一筋だもの…そうよ」

本間と同じく京助達を見た後ヨシコが言った

「アンタ達二人して馬鹿だねえ」

ふうっと本間が溜息をついた

プーププッピプー

ブーブベッブー

ピップーブベッベー

「苦っげえ；」

タンポポの茎から口を離した京助が舌を出した

「…なんなのだそれは」

「口に物を入れたまま話さないでください」

迦楼羅^{かるら}が食べる手を休めずに聞くと乾闥婆^{けんたつば}が軽くチョップした

「ブリトラ、正式名称ブリーファードトランクス！！ 石焼イモは名曲！！ しかし今回歌うのは…ペチャパ…」

ガンッ！！！！

坂田がオーバリアクションでブリトラの解説をしてる途中で坂田の頭に向かい飛ばされた2リットルペットボトル

「キャー！！！！ 坂田ー！！！！！！」

南が声を上げる

「あ…阿部さん…?;」

隣に座っていた阿部の方を見て緊那羅^{きんなら}が声をかけると阿部がすつくと立ち上がって倒れている坂田の胸倉を掴みにっこりと笑うと

「何？ 何を歌うって？ ん？」

その (怖い) 笑顔のまま坂田に聞いた

「…ナンデモアリマセン;」

メガネが外れた状態の顔を阿部からそらして坂田が答えた

「歌なら緊那羅^{きんなら}の聴きたい」

鳥俱婆迦^{うぐぼか}が言うのと視線が緊那羅^{きんなら}に集まった

「…へっ?;」

丁度エビフライをくわえた所だった緊那羅^{きんなら}が視線を向けられてそのまま顔を上げる

「歌といえば緊那羅ナリ」

慧光^{えいこう}が言う

「僕も聞きたいー！！」

悠助が慧喜^{えき}の隣でハイハイと手を上げる

「おーおー…歌ってやりやいいじゃん？」

膝を立て紙コップをフラフラ振りながら阿修羅^{あしゅら}が笑った

「で…でも…;」

口からエビフライを話した緊那羅きんならが慌てて見渡す

「嫌なら嫌でもいいんだぞ？」

京助が言う

「ただ聞きたいだけでお前が嫌なら嫌でいいしさ」

「…京助…」

バリバリとエビフライの尻尾を喰いながら言う京助を緊那羅きんならが見ると阿部がその二人を見る

「アンタが歌えぼ？」

「なっ!!!;」

本間が言う和阿部が眉を吊り上げて本間を振り返る

「ありすは誰の歌聴きたい？」

南がありすに聞いた

「…なんだよ」

視線を感じた中島が横目を向けた

「落ちたわ」

ヨシコが一本のタンポポを差し出した

「…やるよ」

どうやら中島の頭の上の花冠から落ちたらしいタンポポを見て中島が言う

「もらって私どうすればいいの？」

ヨシコが聞く

「知るかよ; 指輪にでも腕輪にでもすりゃいいじゃん」

中島が答えた

「指輪…？」

ヨシコがタンポポを見て首をかしげる

「…かせよ」

溜息をついた中島がヨシコからタンポポを受け取った

「手」

「え？」

「手えだせ」

中島が言うのとヨシコがゆっくり手を差し出しその指に中島が茎を裂いたタンポポを巻きつけた

「ホラよ」

きゅつと茎を縛って中島が手を離すとヨシコが手をじっと見た

「あゝあゝ…駄目やんけーでっかいのー」

「うお；」

中島の上に阿修羅あしゅらが乗りかかってきた

「あつくん」

ヨシコが言う和阿修羅あしゅらがハオと手を上げる

「何が駄目なんだよ；」

うざったそうに中島が聞くと阿修羅あしゅらがにーっと笑いそして中島に何か耳打ちし始める

「…はあッ！！！！？；」

「アッハッハ！！！！」

しばらくして顔を赤くして中島が声をあげ阿修羅あしゅらが笑うのを見たヨシコが首をかしげた

「ではありすのリクエストにお答えしまして我等が歌姫 緊那羅きんならが歌います！！」

「誰が姫だっちゃ誰がッ！！！！；」

結局歌うことになった緊那羅きんならが坂田の紹介に突っ込んだ
春先の風に乗って気持ちいいくらいに響き渡る緊那羅きんならの歌声

「…俺等が歌うとギャグにしかない歌なんにねえ…」

緊那羅きんならが歌うのは悠助から教えてもらったという小学校の校歌
「なんという歌なのだ？」

迦楼羅かるらが京助に聞く

「校歌って言って…なんだ…学校の歌…でいいのか？」

「アタシに聞かないでよ；」

聞かれた京助が更に阿部に聞く

「緊那羅きんならの歌おいちちゃん好きだよ」

鳥俱婆迦うぐはかが言うと丁度歌い終わった緊那羅きんならがほうつと息を吐いた

「ブッラボー!!」

瞬間坂田が立ち上がって拍手を起こした

「相変わらずいい声してるね」

聞いている最中手を止めていた矜羯羅こんがらが再び口に物を運びながら言った

「ありがとだっちゃ」

緊那羅きんならが少し照れながら笑った

「なあ…」

お茶の入った紙コップを手を取った緊那羅きんならに京助が声をかけた

「あのさ…俺あの歌聞きてえんんだけど」

「あの歌？」

一口お茶を飲んだ緊那羅きんならがきよとした顔で京助を見る

「前にホラ悠に歌ってた…子守唄っぽいの」

京助が言うと緊那羅きんならが少し考え込んだ後悠助を見た

「どうしたの？」

悠助が首をかしげた笑顔で緊那羅きんならを見返した

「子守唄って…ばおやゝ良い子だ金だしな…ってのか？」

中島が替え歌を歌う

「…お前相変わらず音痴な」

中島の歌を聞いた坂田が突っ込む

「緊那羅きんならの歌の後だから余計に聞こえが悪いですね」

乾闥婆けんたつばがさらっと毒を吐く

「あっはっは!! なんだかスゲイわれてんなーでっかいの」

バシバシと中島の背中をたたきながら阿修羅あしゅらが笑った

「痛ってえし!!; ってかお前等も何かやれよっての!!;!!;」

中島が怒鳴る

「何かってもねえ…何」

阿修羅あしゅらが逆に中島に聞いた

「何って：何かねえのかよ…；踊るとか…漫才とか」

聞かれた中島がボソボソと例を挙げる

「踊り？」

それを聞いていたヨシコが立ち上がった

「踊るんか？ ヨシコ」

立ち上がったヨシコを阿修羅あしゅらが見上げる

「何かやらないといけないんでしょ？ そうなんでしょ？ なら私

もやるわ」

につこりとヨシコが笑った

「緊那羅きんなら頼んでいい？」

くるっと1ターンをすると一瞬にしてあの摩訶不思議な格好になっ

たヨシコが緊那羅きんならに言う

「わかったっちゃ」

頷いて笑った緊那羅きんならの手にはいつの間にか笛が握られていた

「：何見てるのか一目瞭然なんだよね：アンタ」

本間が阿部に言う和阿部がビクツと肩を上げた

「な：別にアタシは：何食べたら乳がとか：ツ；」

「自分からばらしちゃうところとか私は好きだけどね…」

慌てる阿部に本間がふっと笑った

「：驚かなくなりましたね」

乾闥婆けんだつばが本間を阿部に言う

「そりゃね：何回目だか：でも見てるんだから疑えないし」

本間が言った

「人間だけが生きてるわけじゃないしね」

「：そうですか」

本間がニツと笑って言う和阿部けんだつばが笑った

「それにあんまり突っ込んで聞いても：無駄なんでしょ」

「そう：かもしれないですね」

「：アタシ付いてってないんだけど；」

淡々を受け答え会話を進めていく本間和阿部けんだつばに乾闥婆が小さく突っ

込んだ

緊那羅きんならの笛の音に流れるように乗ってヨシコの手足が咲く

「…コレ金とれるよな…」

坂田が言うとなと京助が頷いた

「ヨシコの舞いは一品なんきに…綺麗だろ？」

阿修羅あしゅらが笑って言う

ありすも南の隣でヨシコの動きに魅入っているようであだじつと見ていた

黄色い花の中で布を靡かせヨシコの体がしなやかに笛の音に流れるのを一同はただ黙ってみていた

「代わるか？」

「うんにゃいーよ」

京助が南に聞くと南が笑顔で断った

「疲れたんでしょね…悠助もその子も」

乾闥婆けんだつばがチラッと振り返った先には慧喜えきの背中で寝こけている悠助

「はっちゃけてたもんなあ…よっぽど楽しかったんだろな」

坂田がハッハと笑った

「…何よ」

「…別に…」

チラッと横目でヨシコを見た中島にヨシコが聞く

「…踊り上手いんだなお前」

中島がボソツと言うとヨシコが足を止めた

「え…？」

少し驚いた顔をヨシコが上げると中島がスタスタと足早に前を歩いていく

「な…に…よ」

呟くように言いながらヨシコも数歩足を進めてまた止まる

「なんなのよ…っ」

そしてまた一人で呟くように言うと言に巻きつけられたしおれかけのタンポポに目をやる

「知ってる？」

「!!!?!?!」

本間がいきなり声をかけたのに驚いたヨシコが思わず構えた

「…香奈;」

阿部が溜息をつく

「こっちではね左手の薬指にする指輪には理由があるんだよ？」

「薬指？」

ヨシコが本間の言葉に自分の左中指を見た

「エンゲージリング」

本間がヨシコの右中指にしてあったタンポポを突付きながら言う

「えん…?」

「結婚するときにこの指に指輪をすんの」

今度はヨシコの左薬指を本間が突付いた

「好きな相手からこの指に指輪をはめてもらうの」

「好きな…相手？」

ヨシコが自分の左薬指を見た

「そう幸せの指輪」

につこり笑って頷くと本間が足早にヨシコを追い越して歩いて行く

「…幸せの…」

ヨシコがタンポポの付いた右中指と何も付いていない左薬指を見た

「アナタは京助からもらいたい？」

「はっ!!!?!?!」

いきなり振られた阿部が声を上げた

「好きなんでしょ？　なら欲しい？」

「だ…っ；あ…ま…ま…」

率直に聞くヨシコに阿部が慌てる

「アタシは…;」

「アナタ可愛いわ」

慌てる阿部を見てヨシコが微笑んだ

「…どうしてゆーちゃんはこの指を選んだのかしら…」
タンポポの付いた右手越しにヨシコが中島の背中を見た

駅の前に立つ人影がありすの母親だと気づいた一同が少し進む速さを上げた

「遅くなってスンマセン；」

南が少し疲れた顔で笑顔を作って言う

「いいのよ」

ありすの母親が南に笑顔を向けそれから京助達をみて軽く頭を下げた
「もう来られないかもしれないんだから」

「え…？」

南の背中で眠るありすの頭を撫でながらありすの母親が言うとな南が大きな目を更に大きく見開いた

「離婚が成立したの…だからもうこの町に来る理由がないの」
ありすの母親がありすを南の背中から抱き上げながら言う

「私は元々この町の人間じゃないしね…親権は私が貰ったから」

母親の腕の中でうつすらとありすが目を開けた

「じゃ…あ…もうありすは…」

南の声を聞いたありすが南を見てそして手を伸ばす

「駄目よありす…この電車に乗らないと今日は帰れなくなるんだから」

母親の言葉にありすがぶんぶんと首を振って母親の腕から抜け出し南の後ろに隠れた

「こら！　ありす…！」

母親が手を伸ばしてありすの肩を掴む

「あのっ…！！」

その母親の手に南が手を添えて母親を見た

「あの…今日一日…って言いましたよね俺…まだ今日…ですよね？」
南がありすを見ると南の服をありすがキュッと握ったまま南を見上

げていた

「だから…」

ありすの頭に手を置いた南が母親を見た

「…今日一日…ありすを…」

真っ直ぐ自分を見る南から目をそらせなかった母親が溜息をついた

「…しようがないわね…明日始発で行くからね？」

そして負けたわというカンジの苦笑いでありすの頭を撫でた

「手え出すなよ」

「出さんわ！！！」

「変なことされたら殴ってもいいからね？」

「あのねえ…」

坂田と阿部がしゃがんでありすに言うと言南が溜息をついた

「男の家に女の子が一人でお泊り…ねえ」

「何もしないから！！！」

本間が意味深な顔で頷きながら言うと言南が思いっきり反論する

「よかったナリね部屋片付けたのが無駄にならなくて」

慧光えいこうが南に言う

「まあ…うんその節はサンキュねコロちゃん」

南が笑う

「…京助…」

「あん？」

緊那羅きんならが京助に声をかけた

「あの…離婚っていうことすると逢えなくなるんだっちゃ？」

緊那羅きんならが聞くと京助が頭を掻いて何かを考えた後溜息を吐いて顔を上げた

「離婚ってのは…結婚したのが別れるこというんだ…だからまあ…

大体は嫌いになったってことだから会わんだろうな」

京助が気まずそうに説明する

「でもありすは南を好きなのに逢えないんだっちゃ？」

緊那羅きんならが再び聞くと京助が黙り込んだ

「ありすは…逢いたくても母親がきたくないなら…どうしようもねえんだよ」

京助が躊躇いながら言う

「そんなの…ありすも南も可哀相じゃないっちゃか…逢いたいのに逢えないなんて…そんなの…」

「それなら貴方きんならにどうにかできるんですか緊那羅きんなら」
顔を顰めた緊那羅きんならに乾闥婆けんたつばがピシヤリと言う

「きつついねえ…； もう少し柔らかくいっちゃあどうなんきに…；」

「そうですか？ しかしでもこれが僕なんです」

横から入ってきた阿修羅あしゅらに乾闥婆けんたつばが笑顔で言う

「逢いたくても逢えない…か」

迦楼羅かるらがボソツと言った

「…るらとはまた違った意味での逢いたくて逢えないだね…」

制多迦せいたかが言う迦楼羅かるらがふっと笑う

「ワシは…逢っているといえれば逢っているからな…すぐ側にいる…」

「…うだね…でも逢えない…んだね」

「…まあな…」

そう言う迦楼羅かるらと制多迦せいたかが顔を見合わせた後揃って乾闥婆けんたつばを見た

「じゃ明日5時くらいか？」

「早ッ；」

中島が言う京助が速攻突っ込んだ

「だって始発6時くらいだろ？」

坂田が言う

「5時半でもいいじゃん； 俺絶対起きれねえって；」

「嫁に起こしてもらえ嫁に」

京助が言う中島が緊那羅きんならを指差して言う

「誰が嫁だ！…； つうか絶対無理！…； 起きれません！…！」

「大丈夫だっちゃんっかり起こすから」

挙手して半分威張りながら主張した京助に緊那羅きんならが言う

「できた嫁だこと」

ホッホと中島と坂田が笑う

「ねみいじゃん!!!; 学校で寝たらどうすんだよッ!!!;」

「いつもは寝てないの?」

反論した京助に鳥俱婆迦うぐばかがさらっと突っ込んだ

「寝てるわ」

本間が言った

「じゃあいいんじゃない?」

矜羯羅こんがらが言うと同が頷く

「じゃ明日5時に駅前!!!」

坂田が指を立てて言った

「ちゃんと寝れた?」

まだ薄暗くちよつと肌寒い正月町の朝

南の家の前に立つのは南と少し眠そうなありす

「寒くない?」

しゃがんでありすの顔を覗き込んだ南にありすが笑顔を向けた

「歩くと疲れるから一応こんなもん用意したんだけど…怖くない?」

そう言って南が視線を向けたところには愛車ニボシ…の後部車輪カ

バーの上に座布団を巻きつけた簡易座席がつけられていた

「それとも歩く?」

南が聞くとありすが首を振ってその後ニボシに駆け寄り簡易座席を

ポンポンと叩いた

「…よっし!!! じゃあしっかりつかまってるよっ」

ストッパーをかけたままの状態のニボシにありすを抱き上げて乗せ

た南が自分もニボシにまたがり器用に足でストッパーを外した

「出発進行————!!! きゅうりの糠漬け—————

——!!!」

ガタンという衝撃と同時にありすが南にしがみつき目を瞑った

ゆっくりとでも歩くよりは速い速度で朝の少し冷たい風を切つて走るニボシを漕ぎながら背中に確かに感じるありすのぬくもりに南が鼻水を啜つた

少し狭い路地からまだ黄色点滅の信号機のある交差点を渡ってなかなか上り坂を立ち漕ぎで南がニボシを進める

「ただ……！！！」

上り終えた南が声を発するとありすがクスリと笑つてまた南の背中に抱きついた

「結構キツツイんだよこの坂；」

少し後ろを振り向き南が言う

「でもここ登ったら……」

南がギツと音をさせて体を前に出してニボシを漕ぎ出した

「ホラ！！
ありす！
港ッ！！」

国道沿いの木々の間から朝日に照らされて光る海面に数隻見えるのは春先行なわれているホタテの稚貝漁の船

その船にくわえて磯舟が沿岸近くに浮かんでいる

たまに横を通る車とトラックの風に目を瞑りながらありますが港の方を見る

赤い灯台と白い市場の建物と出向を待つ船とそしてカモメ
前輪をカーブに合わせて切ると少し急な下り坂をニボシが走り出し
ありますが南に抱きつく腕に力を込めた

「…うん…ゆっくり…いこっか」

ぎゅつと南がブレーキを握り下る速度を遅くした

岸壁に掛けられて並んだ梯子に登って今日の波の調子を見る漁師の
オッサン

テトラポッドにとまったカモメが鳴いてどっかからやってきた猫が足早に道路を横断する

船のエンジンの音が小さく聞こえ波の音もそれに負けじと静かにテトラポッドに打ち付ける

出荷を待つトラックが並ぶ港の駐車場を横切つてカッパを着たホタ

テ漁を手伝いに来ているオバサン達のやたら早口な会話を聞きながら背中に感じるありすのぬくもりに南はまた鼻を噉る

市場の冷蔵倉庫の向こうに見える小さな駅を横目で見た南がチラッと後ろを見た

「…もう少しで…つく…よ」

南が言うところだがぴくっと少し動いた

「お母さん…もう待ってるかな」

南がまた言うところ南に抱きつくありすの手にまた力が入った

最後のカーブを曲がると【正月駅前】と書かれたバス亭が見えその少し後ろには【観光案内所】という看板を掲げた木造の商店が立っている

「…つい…ちゃった」

キューイイというブレーキ音をさせて二ボシが止まり同時に南も動きを止めた

「おっせーぞー!!」

そう言いながら駆けてきたのは中島と坂田

「やー…； ゴメンゴメン；」

器用に片足で南がストッパーをかけ頭を掻きながら苦笑いを向ける

「ありすママンはまだ来てないしついでに京助もまだ」

坂田が言う

「そ…っか」

南がありすを簡易座席から降ろしながら顔を上げずに答える

「変なことされなかったか？」

「早速それかい；」

中島がありすに聞くと南が裏手で突っ込む

「一緒にフロに入っちゃったとか？」

「してないしてないから；」

更に坂田が突っ込むと南が手を振って否定する

「一緒に寝ちゃったり？」

「え…あ…何？」

ハッとした南が慌てて坂田を見る

「何か話せよ；」

中島が小さく言う

「何か…つても…さ…何？」

南が眉を下げた笑顔で返すと二人も黙った

「…遅いわね」

母親が腕時計を見て呟く

「…いま何時？」

南がいきなり聞いてきた

「あ…5時36分」

坂田が携帯を取り出して時刻を見て答えると南が顔を上げた

「ちょいいってきますッ！」

「はっ!!?;; 汽車くんぞ!!?;;」

ホームから飛び降りて駆け出した南の背中に中島が叫んだ

「すぐ戻るからッ!! 待っててあります!!！」

南が大きな声で言うところがありすがぎゅっと母親の手を握ったまま黙って南を見て小さく頷いた

「だあああああ!!!!!!;;」

南がホームから去って十数分後深川行きの電車が発車時刻を迎えていた

「まだか南はもー!!!!;;」

搭乗口のすぐ側でありすがじっと南の駆けけて行った方向を見ている

「ありすそろそろ席に座りなさい」

母親が窓を開けてありすに言うところとほぼ同時に電車から発車の合図であるプアンという軽い音が鳴った

「アカン… もーアカン…」

坂田が頭を抱えてしゃがむ

「ほら…お兄ちゃん達にバイバイって」

嫌がる無理矢理ありすを電車内に引っぱりながら母親が言った

プシュンと自動ドアが閉まると二度目のプアンという音と共に電車の車体がゆっくりと動き出した

「だああああ！！！！； 南のや…キター————！！！！」

ゴトンと音をさせて動いた車輪の音に対抗するかのようにな中島が指差した方向にはこっちに向かってかけてくる南

「はよはよ！！！！； 早くってば！！！！」

坂田と南の様子に気づいたのかありますが母親の手を振り解いて1両編成の電車緒の一番後ろに向かって駆け出した

バンッとガラスに手をついたありますがバンバンと窓を叩くが発車し始めた電車は徐々に速度を上げていった

「だー！！； ストップストップトレイン！！！！； はよはよ！！」

南————ッ！！！！；

坂田がギャーギャー喚くが電車は止まることなくホームから遠ざかっていく

「どこいったんだよ馬鹿————！！！！；」

息を切らした南が顔を上げて見たものは窓に手をついたまま泣きそうな顔をしているありすとブレーキ音を響かせて止まった一台のチャリンコ

「だから無理っていったじゃんか！！！！；」

「便所で二度寝するからだっちゃッ！！ 馬鹿ッ！！」

「京助が馬鹿なのは生まれつきなんだやな」

「そうなんだやな」

「うっさい！！！！；」

ギャーギャー騒ぎながらチャリンコから降りたのは京助と緊那羅きんならそしてコマとイヌ

「何してたんだよ！！！！；」

ハーハーしている南に坂田と中島が駆け寄るのを見て京助達もつられるように駆け寄った

「こ…れ…渡したくて…」

そう言いながら南が見せたものはタンポポの花輪

「お前なあ…モノより思い出っというじゃん；　ありす泣いてたぞ？」

中島が言う息を呑んだ南がその息を大きく吐き出した

「…そ…つか…」

そして力なく言う

「今からじゃチャリでも…」

もはや豆粒に等しい大きさになった電車を見て坂田が言うと同が黙り込んだ

「こんな時ナウシカのアレがあればなあ…」

空を飛ぶカモメを見て中島が言う

「箒でもいいと思うぞ」

「むしろネコバスだろニャンコバス」

京助が言う坂田も続く

「山犬でも充分…犬…」

再び言った京助がハタと視線を下に移した

「なんだやな？」

京助の視線の先にはきょとんとしたコマとイヌ

「…なあお前等…」

京助がしゃがんでコマとイヌを見た

田園風景が続く窓の外をありすは黙ったまま見ている

「仕方ないでしょう？　きっと何か大事な用事があったのよ…ね？」

母親がありすの頭を撫でその母親をありすが見上げそして再び窓の外を見た

「少し眠りなさい？　朝早かったから眠いでしょう？」

母親が言ってもありすは窓の外を見続け…そして何かを見つけて目を見開いた

「ありす？」

母親が声をかけると同時にありすが立ち上がり車両の後ろに走り出した

「ありす!!」

そのありすの後を母親が追いかけていく

一番後ろの座席の窓を必死で開けようとしているありすに手を貸しながら母親が見たものは大きな犬に乗った南と緊那羅きんなら

「ありす!!」

窓を開けると同時に南がありすの名前を呼んだ

「な…」

母親が信じられないという顔をして一步後ろに下がった

「これ!!!!」

ギリギリまで電車に付いた大犬に乗った南が思い切り手を伸ばしてタンポポの花輪を差し出すとありすがそれを受け取った

「今度は俺が会いに行くから!! だから!!!!!!」

笑顔で言った南にありすが満面の笑みで頷き花輪を抱きしめた

「待ってろよ——————————————————————ッ!!!!!!」

トンネルに入る寸前で大犬が電車から離れ南の声と共に電車がトンネルに吸い込まれていった

「お疲れさん」

「おかえりなんだやな」

京助とコマが声をかけると大犬が消えへたり座りのイヌが現れた

「つ…疲れたんだやな;」

へへへへと舌を出して体温調節するイヌを南が抱き上げた

「私も…疲れた…っちゃー…;」

緊那羅きんならもその場に座り込んだ

「おきゃーりーってかコイツ等巨大化できたんなー…;」

坂田が言う

「前に鳥類の力ででっかくなったんよ…でソレ思い出して」

京助が言う

「緊那羅きんならの力だけじゃ維持しにくかったからゴも力使ったんだやな
…； だから疲れたんだやな…；」
イヌがヘロヘロになりながら言った

「ごめんだっちゃ…；」

ハアと息を吐いて立ち上がった緊那羅きんならがふらふらと傾いた

「なんでお前が謝るか；」

その緊那羅きんならを支えて京助が突っ込む

「そうだよ！！ …本当あんがとね…ラムちゃんもワンコも」

南が笑って言った

「さーそろそろ一旦帰ないと遅刻だな遅刻」

坂田が携帯を見ながら言う

「そうだなーじゃ諸君！！ 学校で！」

「おー」

「んだばな」

「また後でな」

京助の声で解散すると南がニボシに駆け寄った

「……」

ニボシの後部車輪カバーの簡易座席を見た南がふつと笑ってストツ
パーを外した

【第十一回・四】らぶりーべいべー（前書き）

お互いのいいところを見つけよう　の言葉の元に開催された正月中
学校2年生の合宿で思い出す優しい思い出

【第十一回・四】らぶりーべいべー

紺色のジャージ姿の生徒がワイワイザワザワと楽しげになにやら作業している夏休み間近の土曜日

「女子は二年の教室男子は体育館にそれぞれ荷物運べよー」

通称ウニと呼ばれている三組の担任が声を張り上げて全員に聞こえるように言う

本日土曜日から日曜にかけて正月中学校の二年全体でお楽しみ合宿という催しで学校に宿泊するということで生徒先生が休日の学校に集まりだしたのは土曜の午後二時チョイすぎ

「この暑い中合宿ってさあ……」

ジャージの袖を捲り上げた南がズルズルと鞆を引きずりながら体育館へと続く廊下を歩く

「何を楽しむ合宿なんだ……」

南の少し後ろを歩きながら中島が言う

「しおりには……【友達の知らないいいところを見つけよう】とか書いてありますがねえ……知らないいいところってどうよ……」

坂田が黄色い表紙の合宿しおりを読んだ

「坂田のチンコがでかいとか？」

「京助の屁が臭いとか？」

「中島のスネ毛が超濃いとか？」

「南が実は女だとか？」

「ないないないない……」

3馬鹿と京助が馬鹿冗談をいいながら歩いていく

「さすがについてきてないみたいだよ」

「何が？」

二年の教室に荷物を置いた阿部と本間が階段を下りていると丁度体育館に向かう京助達を見かけ本間が阿部に言った

「ラムちゃん」

本間が緊那羅きんならの名前を出すと阿部がバツと顔を本間に向けた

「な：だからなんなのよっ；」

阿部が慌てて声を荒げた

「今日がチャンスかもねえってことでしょ？」

本間の肩に手を置いてミヨコが阿部を見る

「なにがよッ！！；」

阿部が赤くなりながら更に声を上げる

「チャンスと時間はミヨと香奈で作ってあげるから」

ミヨコがにっこり笑う

「だから何がチャンスなのよ！！；」

階段をおりきった阿部が言う

「告白？」

本間がさらっと言うと阿部の顔が更に赤くなる

「何年越しの片思いなんだっけ？」

ミヨコが阿部に聞くと本間がスツと手を上げて両手で8本指を立てた

「ンっもう！！ 一途だねえ阿部く！！」

ソレを見たミヨコが阿部に抱きつく

「ラジオ体操が出会いっつてのもまた面白いよねえ；」

「なっ；；」

そして阿部の耳元でボソツと言うと阿部が目を見開いた

「…だって…っ；」

阿部がミヨコを引き剥がしながら言う

「だって…しょうがないじゃん；」

赤い顔のまま口を尖らせた阿部が本間とミヨコを見た

「好きになったんだもん…っ」

だんだんと俯きながら阿部が言うとは本間とミヨコが顔を見合わせた

「…可愛いねえ；」

本間がその阿部の頭をぎゅっと豊満な胸元に抱きしめた

「大丈夫だよ阿部く女は乳じゃないから乳じゃないから」

ミヨコが阿部の頭を撫でながら言う

「そうそう乳じゃない乳じゃない」

本間も言う

「でもアレだよねー阿部とラムちゃん胸の大きさドッコイドッコイじゃない?」

ミヨコが言う和阿部がぴくつと反応する

「そうなるよ：勝負どころは中身?」

更にミヨコが言う和阿部が抱きしめている本間の腕を掴んだ

「あっちは家事が得意」

本間が言う

「こっちは…」

ミヨコがチラッと阿部を見る

「どうせアタシはホワイトシチューに牛肉入れたわよっ!!!」

阿部が怒鳴る

「：何色になったのそのシチュー…」

ミヨコが顔を顰めて聞いた

首から提げたラジオ体操のカードには参加した証拠に押してもらえ
る判子が12個

タイヤを半分地面に埋め込んだ遊具の上に座って同じくラジオ体操
をしに来る誰かを待つ一人の：

「やだなあ…」

少しふっくらした唇がとんがった

「でも判子欲しいしなあ…」

ペラッとラジオ体操のカードを裏返し押してある判子を見る

「だから帰ってたのに…隣町なのになんで泊まるかなあ…」
ハアと溜息をついて顔を上げる

【別荘小学校】と校門に刻まれたその先にあるグラウンドにはまだそ
の子一人しかいない

正月町には5つの小学校がありこの別荘小学校はその小学校のうち
の一つでこの地区でのラジオ体操開催場となっていた

「誰も来ないし…」

朝日に照らされ飛ぶトンボを目で追いかけているが耳に聞こえるのは磯舟の帰ってくる音とカモメとスズメの鳴き声と一つの足音

「…誰かきた…?」

顔をあげその足音の主がやってくるであろう校門の方を見る

「誰だお前」

「きゃあああ!!!!!!」

「危なっ!!!!!!」

思いもよらぬ方向から聞こえた声に驚いた体がバランスを崩し座っていたタイヤの遊具から滑るように芝生へと落ちた

「大丈夫か!?!」

目を開けたそこには金色と白と青が混ざったような空と見たことない顔

「大丈夫…」

小さく返すと体を起こす

「ごめん…落ちるなんて思わなくて」

申し訳なさそうに謝ってきたのはいわゆるスポーツ刈りの少年で首からはラジオ体操のカードが下がっていた

「…えいのきようすけ…? 一年生?」

カードに書かれていたヘツタクソな字を読む

「うん俺は京助お前は?」

京助が聞く

「あべいくえ…」

「女の子?」

阿部が答えると京助が聞き返した

「そうだよ」

「男かと思った」

へへっと京助が笑う

「だって髪短いしズボンはいてるし俺より背高いし」

立ち上がった阿部を見て京助が言う

「別荘のヤツじゃないでしょ」

京助が聞くと阿部が頷く

「正月だもん郁恵」

阿部が言う

「へーそつかあ…だからわからなかったんだ」

京助が笑った

「おばあちゃんの家にきたんだけど帰ろうっていったのにお母さん達泊まるって言って…でも郁恵は判子欲しくて」

阿部がラジオ体操のカードを見せた

「うわー！！　　すげー！！　　全部押してあるんだー！！」

カードを見た京助が声を上げた

「俺もいまのところ全部！！」

京助も自分のカードを自慢げに阿部に見せた

「俺さ弟生まれたからお兄ちゃんだからしつかりしないと駄目だからさ大変なんだ」

幼子特有の文法がなってません話し方で京助が言う

「そうなんだー」

阿部が笑う

「なあなあお前明日も来るか？」

京助が阿部に聞く

「わかんない…帰るって言わなければ明日も来るし」

「来いって！！　　あそぼーぜ！！　　坂田が旅行いってるから暇なんだ」

子供の特技とも言える会ってハイ！！　　すぐお友達というコトになったらしく京助が阿部に言う

「郁恵も遊びたい！！」

ばあっと笑顔になった阿部が言った

「じゃあ明日もこいよ！！　　約束ッ」

京助が笑顔で差し出した小指に阿部が小指を絡ませた

「ゆーびきーり…」

「おい京助ー！！！」

歌いだした京助を校門のところから誰かが呼んだ

「キヨちゃん達だ」

阿部を指を絡ませたまま京助が校門のところに向かって手を振る

「何年生？」

阿部が聞く

「キヨちゃんは五年生でゆっかとクリが二年でー…あ、体操始まる！！」

紺色のミニカから出てきた誰かのお母さんの手に持たれていたラジカセを見た京助が阿部の手を引っ張って走り出した

チャンチャララッチャッチャッチャ♪

「あーたーらしいあっさがきーたーきぼおのあっさーだー」

ラジカセからノイズ交じりに流れてきたラジオ体操の歌を誰からとでもなく歌い始めそれがいつの間にか合唱となってグラウンドに響く

『全国の皆さん！おはようございます！！今日は埼玉県…』

ラジオ体操の歌が終るとやたら元気が良くて聞いているこっちが逆に疲れそうなんだよというカンジのオッサンの声

「この声さあ俺が一年の時から変わってねえ気がするんだけど」

キヨちゃんと呼ばれていた五年生が言う

「だってドラえものの声もずっと一緒じゃない？ だから別にいいと思う」

ユツカと呼ばれていた二年生が言った

「ハイハイ！！ 広がって広がって！！」

誰かのお母さんが声を張り上げると各自両手を思い切り伸ばして間隔を取り体操の準備に入った

『腕を前から上げて背伸びの運動ー！！』

ラジカセから聞こえた指示にあわせて子供達が一斉に足を肩幅に開き両手を上に上げた

『イツチニ、サンシッ』

やたら軽快にリズムをとるその声に操られてるかのように体操をする
『続いてラジオ体操く第二く!!!』

第一体操が終わり第二体操の準備に入るようラジカセからの声が指示を出したところで誰かのお母さんがスイッチを切った

「第二やらないの？」

阿部が隣の京助に聞く

「やったりやらなかったりだな」

京助が返した

「まゆちゃんトコのおばさんはやらないんだ」

「ふうん：郁恵のときは毎回第二やってたよ」

判子を貰うためにまゆちゃんのお母さんの所に向かいながら阿部が言った

「はっらへったゝあ!!!」

判子を押しもらったクリと呼ばれた二年生が大きな声で言う

「俺もー」

京助が手を上げた

「なあなあ朝ごはん食べたらさ海いかねえ？」

キヨちゃんが校門方向に向かいながら振り返った

「あーじゃあゆか あじゅも連れて行くー」

「えゝ：あじゅすぐ泣くじゃん」

「アキラ君とかも誘ったりしない？」

ワイワイしながら歩く子供達の中で阿部は一人黙って歩く

「えっと：名前なんていったっけ；」

京助にいきなり聞かれて阿部がきよとした顔を上げた

「阿部：郁恵」

「じゃあ郁恵ちゃん？ 阿部ちゃん？」

阿部が答えるとキヨちゃんが聞く

「学校ではいっくって呼ばれてた」

阿部が小さく言う

「じゃあいく!! お前もこいよ海!!」

京助が笑いながら言う

「でも水着もってきてないし…」

「俺らも着ないし水着なんて」

「そうそう短パンとシャツだよな」

阿部が言うとそのな答えが返ってきた

「な? な? いっくも泳ごうよ」

京助が是非ともというカンジで阿部を誘う

「うん:じゃあお母さんに言ってみる」

阿部が笑って答えた

「じゃあさ、どうする? 前浜? それとも浜ちゃんトコまで歩く?」

「前浜にしようよー」

「まずは朝ごはん食べてー:九時くらい?」

またワイワイと話しながら動き出した集団の中で阿部がなんとなく嬉しそうに顔をほころばせた

「昨日はアレだけ帰る帰るいったのに…」

少しパンチパーマッ気がある髪のア部の母親が茶碗に口をつけて御飯をかき込む阿部を見ていった

「栄野ンとこの京助達と海さいくってな」

首からタオルを提げた婆が新聞を広げて聞く

「うん御飯食べて九時」

「ホラ御飯ツブ」

嬉しそうに阿部が答えると阿部の母親が阿部の服についた御飯ツブをとった

「いっくにもついに彼氏?」

「違うもん!!」

ボタンと冷蔵庫を閉め手には麦茶を持った阿部の姉が茶化すように言う和阿部が反論する

「だって郁恵より背低いもん」

阿部が自分の食べた茶碗を台所に運びながら姉に言った

「男子って中学校くらいからすんごい身長伸びんだよー」

麦茶を飲み干したコップを水ですすぎながら阿部の姉が言う

「私もついていっていい？」

「なんで？」

「将来の弟でも見に行こうかなって」

「馬鹿言っていないで洗濯物干してきて」

阿部に聞いた阿部の姉に阿部の母親が言った

「阿部」

家庭科室の入り口で呼び止められた阿部が振り向いた

「きよ…；」

「どもってるどもってる； …どうしたの？」

今の今まで話題にしてた京助を見て言葉に詰まった阿部の代わりに
ミヨコが答える

「いや大したことじゃないんだけどさあ…前にありす来た時の写真
あるか？」

京助が聞く

「写真…って…」

「ホラお前携帯で何か写してたじゃん？」

阿部が一步前に出た

「…私達先に行くね」

本間がソレを見てミヨコの腕を引っ張って家庭科室の中に入っていく

「ちょ…；」

「ねえならいいんだけどさ；」

「え…つと；」

本間の方を見てそしてまた京助の方を見てそして俯く

「…どっか具合悪いんか？」

「べ…なんでよ；」

しばらく黙って俯いたままだった阿部に京助が聞いた

「いや；　だってお前何か変だし」

「ッ：！！　失礼ねっ！！！！；　別に具合悪くないわよッ！！！！；」

阿部が怒鳴ると生徒の視線が集まった

「：馬鹿」

本間が家庭科室の中で蛇口を捻りながら呟いた

「：携帯のメモリに残ってるかもしれないけど：」

阿部が小さく言う

「ソレって現像とかできんのか？」

京助が聞く

「セブンで：でもまずは残ってるか確かめないといけないから：ちよっと待ってて」

阿部が歩き出す

「俺も行くわ」

阿部の後ろを京助も付いて行く

「付いてこなくてもいいよ」

「いーじゃん；　可愛くねえなあ；」

「悪かったわねッ！！！！；」

隣に並んだ京助に阿部が怒鳴りながら歩く

「えっと：」

教室に付いた阿部が自分の鞆から携帯を探す

「すげえ荷物だな；　一泊しかしねえのに」

京助が阿部の鞆を見て言った

「コレでも少ない方なんだけど：」

阿部が携帯を開きながら鞆を見た

「何入ってるんだよ：」

「えー：っと化粧水とか：着替えとか：ってちよっと！！！！；　覗かないですよ！！！！；」

除きこんで来た京助の頭を阿部が叩いた

「コレ香水？」

「だから！！！！；　もうっ！！！！；」

透明のケースの中に入ってる小瓶を指差して京助が聞く

「いいじゃん；」

「返して！；」

阿部が京助が持っていたケースを奪い取って鞆にしまったあとしばらく携帯を弄ってそして京助を見た

「三枚だけなら残ってた」

「どれ？」

「…ッ！；」

阿部の持つ携帯を京助が覗き込む

「おー！！ 結構いいショットじゃん！！」

よくよく見ようとした京助が阿部の手に手を添えて携帯の角度を変えた

「…京助…ち…かい…」

阿部が俯きながら呟く

「あ、スマン；」

京助が阿部から離れると阿部が息を吐いた

「金払うから現像頼んでいいか？」

京助が聞く

「いいけど…」

阿部が携帯を閉じて聞く

「南がありすに送りたいんだとさ…緊那羅^{きんなら}も写真撮ってたみたいなんだけどまだ枚数の請ってるから現像に出すの勿体ねえしさー…」

京助が口の端を上げて言う

「ラムちゃん…」

阿部が自分の胸元をキュッと掴んだ

「あのね京助一つ聞きたいの」

「へ？」

阿部が京助を見た

遠くから生徒の笑い声が聞こえる

「…なんだ？」

いくら待っても聞きたいことを聞いてこない阿部に京助が逆に聞いた
「京助って昔は早起きだったよね」

「は？」

阿部が言うのと京助が間抜けな顔で阿部を見た

「京助が覚えてないかもしれないけどアタシと京助って中学で初めてあったんじゃないんだよ」

阿部の言葉に京助が考え込む

「あのねアタシ小学校一年のとき…」

磯舟並ぶ前浜に色とりどりのタオルが船の上に置かれていた

「ぬるゝッ；」

足を入れたゆっかが苦笑いで言った

「今日は暑いからなーでも冷たいよかいいいじゃん」

黄色い海中メガネを装備したキヨちゃんがいけすをヒョイヒョイ渡って行く

「あーじゅーもー！！！！」

自分の事をあじゅというまだ小さい女の子が浮き輪をもって地団太を踏んだ

「だから嫌だったんだよあじゅがくるのー」

ブーブー周りから野次が出た

「いっくー準備できた？」

京助が阿部の元のにやってきて聞く

「あ うん」

阿部が取るを磯舟の上において京助に笑いかけた

「あのテトラあたりは少し深くなってるんだけどあとはいだいぶ浅いから」

話しながら京助が歩くと阿部もソレについて歩く

「いっくは俺より背高いから大丈夫だよ」

京助が振り返って笑う

「ちゃんと準備体操しなきゃ駄目だよ京助もそっちの子も」

背中から声を掛けられて二人して振り向く

「操ちゃん!!!!」

京助が嬉しそうに言って操ちゃんと言う人物の元に走った

「来てくれたんだー!!!」

操という名前の人物の手を引っ張って京助が笑う

「一応ね小学生だけじゃ危ないって言うもんだから……こんにちは」
操が阿部に挨拶をした

「こ……んにちは」

阿部が小声で返すと操が笑う

「あー!!! 操だー!!!!」

海の中からキヨちゃんが叫んだ

「準備運動はしたのかー………!」

操のその声は決して叫んだわけではないのにとてもよく響いた

「ねーねー! 操ちゃんも泳ぐんだろ? な?」

よほど操に懐いているのか京助がしきりに操に聞くのを阿部がただ黙ってみている

「お前なあ……; その子お前の友達なんだろう? だったらちゃんと遊んでやりなよ」

操が京助の頭を撫でた

「じゃー操ちゃんも一緒に!」

「あ……な……あ……」

京助に手を引っ張られた操の頭からタオルと帽子がずり落ちて今まであまり見えなかった操の顔が見えた

頭の上で一本に束ねられた色素の少し薄い髪の毛が浜風に舞った

「男?」

阿部が思わず聞くと京助と操がきょとんとして止まった

「そうだよ」

苦笑いで操が返し帽子を拾った

「外人みたい」

阿部が言う

「よく言われるけど日本人、コイツのイトコ」

京助の頭に手を置いて操が笑った

「中学三年の14歳」

グシャグシャと京助の頭を撫でると京助が嬉しそうにでも半分嫌そうにその手を払った

「…京助と一緒に海にいったんだよ」

阿部が言った

「…俺と？」

京助が自分を指差した

「そう…でねアタシ…」

「京助——————————！！ キョンスケー——
——————————————！！ キョんキョ———
————————————————ン！！！！」

言いかけた阿部の言葉が坂田の大声で止められた

「お————————————————————いす！！
……
ワリ；またな」

京助が坂田の声のした方に向かって叫ぶと阿部に苦笑いを向けた

「あ…ううん；　じゃ写真現像して…おくから」

阿部も苦笑いを返して手を振った

「さんきゅ！」

にかつと笑った京助が靴をキュツキュとならしながら廊下を駆けて行った

「…おしかった…よね…アタシ…うん、頑張れた」

阿部が携帯を握った

「何やってたんだ？」

軍手を真っ黒にして炭を割っていた坂田が駆けて来た京助に聞く

「阿部に写真のこと聞いてたんよ。南欲しがってたろ？」

「えっ！　何？　京助聞いてくれたん？」

京助が火バサミで袋から炭を取り出しながら言う。南が顔を上げた。
「緊那羅のカメラまだ枚数のこっててさあ。阿部が確か携帯で。」
京助が話す。

「さんきゅー！！　ありす喜ぶわー！！　大好きン京助！！」
南が京助に抱きついた。

「せんせー破廉恥なことしてるヤツ等いまーす」
中島が手を上げてウニに向かって言った。

「緊那羅きんならとヒマ子さんだけじゃ飽き足らずついに親友にまで。」
「悪友の間違いだろが；　ってかまたそのネタかよ；」

京助が南をひっぱしながら口の端を上げる。
「俺にはありすがいるし？」

引っぺがされた南が笑う。
「高校入ったらバイトして金貯めて。」

「ハイハイ未来予想図はソレくらいにして手を動かせ手を；」
金網を掃除していたハルと浜本が戻ってきて突っ込む。

「この合宿終わったら夏休みだなー。ふー」
パキンと炭を割った坂田がしみじみという。

「なんつーか。早ええよなあ。」
中島が空を見上げた。

「年取ったねえ俺等も」
ウンウンと南が頷く。

「オイオイ；　お前等がそんなこと言ってんなら俺たちはどうするんだ；」

順ちゃんが苦笑いと言う。
「いやー。だってもう14歳ですぞ旦那」

南がちよいとポーズで順ちゃんに言う。
「14歳ってさあ。俺昔スゲ大人に感じたんだよな。なんつーか

。何でもできてさ。」
京助が言う。

「だから。」

そこまで言っていると京助が止まった

「だからどうした？ 京助」

突然黙った京助を一同が見た

「だから……って……あれ？；」

「あれ？ はお前だよ；」

何かが引つかかっている京助に中島が突っ込む

「……いや……うん……なんだかね？」

「いやだからお前がなんだかねだろうが；」

ハッハと笑いながら言う京助を坂田がどついた

「遅かったじゃない」

戻ってきた阿部に本間が言う

「……あのね香奈」

阿部が本間のジャージの袖をぎゅっと掴んだ

「アタシまだ頑張れると思った」

「そう……いいんじゃない？」

阿部が笑顔で言うと言間がさらっと言った後笑う

「じゃ頑張れる阿部ちゃん玉ねぎ切ってくださいな」

本間が玉ねぎを差し出した

「はいさー」

阿部が笑顔で敬礼した

「……なーんか引つかかる……」

「ホレ、水」

呟いた京助の目の前に坂田が紙コップを差し出した

「それともホレ、ツマヨウジ」

反対側からハルがツマヨウジを差し出した

「いやいや……そうじゃなくてよ……」

京助が言う

「じゃ何がひっかってんだ？」

南が割り箸を咥えて聞く

「ソレがわからんのかな；なんかこう：すげえ大事なことの様な気がするんだけども：でてこないっつか」

京助が溜息交じりに言う

「なんだソレ；」

中島が言う

「例えると：出そうで出ないクシャミ？」

「うわーやるせなーそれ；」

京助が言うと南が突っ込んだ

「うあー！！； 気になるー；」

京助が頭を抱えてフオオオっとしゃがんだ

「家のことか？」

中島が聞く

「いや：違う：と思う：けど：うあー；」

しゃがんだまま京助が喚く

「電話掛けてみたら？ 思い出すかもよ？」

「若、携帯」

「俺か；」

南が言うとき中島が坂田の前に手を差し出した

「ホレもう繋がってるからな」

「あ？ あー：さんきゅ」

坂田が京助に携帯を手渡した

『はいっ栄野ですっ』

「あ、悠だ」

元気よく電話に出た悠助の声に中島が笑う

「よっす」

『あれ？ 京助だ！』

「悠声でけー」

見えるわけではないのに片手を上げながら返事をした京助の名前を呼んだ悠助の声が周りにも聞こえる

『京助？』

『うんゝ京助だよ』

『ほやあああああああ！！』

「…騒がしいナアおい；」

電話の向こうから聞こえてくる声をと物音に京助が口の端を上げた

『どうしたのゝ？』

悠助が京助に聞く

「いや…別になんでもないんだけどよ」

「悠ゝ京助ホームシックなんだー」

坂田が京助から携帯を取り上げて言う

「オイこら；」

京助が坂田をどついた

『今日ねー冷やし中華なんだよー』

悠助が嬉しそうに言う

「ほーこっちは焼肉だぞー」

南が京助の肩越しに言った

『ちよっと待ってねー慧喜ー京助ー』

「オイオイ； かわらなくていいっての；」

悠助が近くにいらしい慧喜に声をかけている

『義兄様？』

「よー」

慧喜が電話に出るとやはり見えるわけ無いのに京助が片手を上げて返事をした

『緊那羅にかわるね』

「だあから！！ ；かわらなくてもいいっつーの；」

かわるがわる電話をかわるのに京助が突っ込む

『え？ なんだっちゃ？ …京助？』

ゴソゴソという雑音に交じって聞こえた緊那羅の声

『京助？』

「おー」

『どうしたんだっちゃ？ 晩飯は食べたっちゃ？』

「今食ってるどこ」

『そうなんだっちゃ？ 今日ほこっち冷やし中華とか言うの作ったんだっちゃけどハルミママさん京助の分まで作っちゃったんだっちゃ』

「ほおーうってことは明日帰ったら食えるのか」

『ううん矜羯羅こんがらが食べたっちゃ』

「…コナクソ；」

『あははは』

しやがんで立ち上がりしながら電話をする京助を阿部が黙って見ていた

『で？ 何か用あったんじゃないんだっちゃ？』

他愛も無くただ話しているろ緊那羅きんならが思い出したように言った

「…いや別に」

『へ？』

京助がさらりと言うと緊那羅きんならが電話の向こうで素っ頓狂な声を出した

「別に何にもねえんだけどさ…；」

『そうなんだっちゃ？ …そっか』

京助が言うきんならと緊那羅がどこか嬉しそうに返した

「何で笑ってんだよ；」

そんな緊那羅きんならに京助が突っ込む

『ううん ただ何もなくてよかったなって思っただけだっちゃ』

緊那羅きんならが言うきんならと京助がきよとした顔で止まった後眉を下げた

「ばっか」

そして苦笑いで言った

「おーおー…和んでる和んでる…」

少し焦げた肉を箸でつまんだ坂田が京助を見て言う

「話してる相手が声聞かずとも誰かわかるや俺」

「あ俺も」

南が言う中島も言った

「京助はさー誰とでも仲良くなれるような気がして実は人見知りだったりすんだよな」

ハルが紙コップに口をつけた

「俺らにも滅多に相談とかしねえし」

中島が軽くゲップをした

「そう考えるとさラムちゃんって凄いよねー：なんか俺らより前から京助と一緒にいるみたいじゃん？ すっかり京助の隣が定位置っつーか：京助の甘え場っつーか心の拠所っつーか役場っつーか」

南が割り箸を上下させて言う

「：それなんだけだよ」

坂田が少し真面目な顔で声を殺して呟くように言う一同が坂田を見た

「俺さ：最近なんだけど：緊那羅きんならと前に：あったような気がしなくもないような感覚があるんだよな：」

坂田が言う一同が顔を見合わせた

「でも：ラムちゃんってアレなんだろう？ こっち：っつーかいる世界が違う：んじゃなかったか？」

ハルが言う坂田が頷く

「それじゃラムちゃんが前にもこっちにきたことがあるかもしれないってこと？」

南が聞く

「：わかんねえけど：でもそう思いはじめたのって本当最近でさ：もしかしたら気のせいかも知れねえし：でも：うーくくくくくくくくくん；」

坂田が腕を組んで考え込む

「似たような人じゃなくてか？」

中島が言う

「：かも：でも：うーんうーん；」

坂田が頭を左右に動かして悩む

「

何してんだ；」

動いていた坂田の頭を両手で真剣白羽取りのように掴んだ京助が言った

「おきゃーりー」

南が言う

「あー：ホイ携帯」

京助が坂田に携帯を差し出した

「引っかかりは取れたか？」

中島が聞く

「：まあ：たぶん」

京助が置いてあった自分の箸を手にとった

「すごいねえ：声だけで癒されたっしょ」

南が京助の背中を叩きながら言う

「でも：やっぱ引っかかる：んだよなあ；」

京助が黒くなった肉をつまみあげながら言った

「：なあ京助」

坂田が肉を半分口から出した阿呆面の京助に声をかけた

「にゃひた？」

肉を半分口から出した状態で京助が返事をする

「：もしかしたら俺の引っかかりとお前の引っかかり：同じかもしれないのだよ」

「ほ？」

坂田が言うとき京助だけではなく南と中島そしてハルも坂田を見た

「お前の引っかかりって：緊那羅きんらと関係してねえか？」

また坂田が言うとき今度は京助に視線が移る

「：緊那羅きんら：？」

京助が肉を飲み込んだ

「俺：最近なだけでさ：緊那羅きんらとは前に：ずっと前にあったような気がするんだ」

坂田の言葉に京助が止まった

「何で最近になってそう思ったのか俺にもわかんねえんだけど…さ…何でか…」

坂田が口籠った

「ずっと前…に…?」

ザワザワとグラウンド横の並木の木が風に鳴かされる

「ハイ!! ストップ」

ここじゃ聞こえちゃアカンのではないかと とうとう人物の声がして

京助が振り向いた

「あ…」

「どうしたの? 緊那羅」

「え…あ…; …ううん;」

電話の子機を持ったままぼーっとしていた緊那羅にガキンチョ竜を腕に抱いた矜羯羅こんがらが声をかけた

「…なんでも…ないっちゃ」

緊那羅きんならが作った笑顔で返事をする

「不安?」

「え?」

ガキンチョ竜を抱きなおしながら矜羯羅こんがらが聞いた

「京助がいなくて」

緊那羅きんならがゆっくり静かに子機を戻して矜羯羅こんがらを見た

「…少し…」

そして苦笑いで答える

「…でも…なんだろう…なんだか…私最近…おかしいんだっちゃ」

「おかしい?」

矜羯羅こんがらが聞く

「…記憶に無いものなのに記憶にある…っていうか…たまたま私も
う一人いるような…そんな感覚になるんだっちゃ…」

緊那羅きんならがぎゅっと手を握って俯いた

「ひっどー； オライは暇人じゃないんきにー」

阿修羅あしゅらが眉を下げて溜息をついた

「じゃあ何しにきたん？」

南が紙コップに茶を入れて阿修羅あしゅらに手渡した

「おっ！ あんがとさんちっこいの」

阿修羅あしゅらがソレを受け取ると一口口をつけてそして京助を見た

「…あんな竜のボン」

紙コップを揺すりながら阿修羅あしゅらが京助に話しかける

「なんだよ； 改まってキモチワリイ；」

いつもより少しシリアスな雰囲気あしゅらの阿修羅に京助が突っ込む

「…本当はなもう少し先かと思ってたんよな…この話すんの」

阿修羅あしゅらが紙コップの中を飲み干して言う

「竜のかけた術が弱まってきてるんよ」

「術？」

阿修羅あしゅらが言うとき中島が聞く

「楽しんでるところにこーゆー話題どうかと思ったンけどな…スマン」

眉を下げた笑顔で阿修羅あしゅらが京助に謝った

「な…； なんなんだよ； 怖エえなあ； ミリオネアのみのもん

た並だぞお前；」

京助が一步後ずさって言う

「聞きたいけ？」

阿修羅あしゅらが静かに京助に聞くと視線が京助に集まった

「…コレって俺等も聞いていい話？」

坂田が阿修羅あしゅらに聞いた

「…まあお前さん達も…竜の術にかかってるんきにな…」

「俺等も？；」

阿修羅あしゅらが言うとき坂田が驚いて声を上げた

「そう…っつか…この町全体が竜の術にかかってるんきに」

「町全体ッ！？；」

南と坂田が声をハモらせて言う

「…話して…いいか？」

阿修羅^{あしゅら}が真っ直ぐ京助を見た

まだ外はぼんやりと明るく窓から差し込む夕焼けの光が電気の代わりになっていた

「……」

入浴剤を入れたせいでほんのりとお湯から漂うはさくらの香小さくなったソレはしゅわしゅわと音を立てて浮かび緊那羅^{きんなら}の肌に触れそして溶け消えた

遠くから悠助の笑い声が聞こえそして鳥俱婆迦^{うぐぼか}の声も聞こえた浴槽の淵に顎を乗せてなにげなく風呂場を見渡す

「…ふう…」

鼻からの溜息をつくると天井を見上げた

「…明日…天井掃除しないと駄目だっちゃんね…」

ポツリと独り言をもらしてまた黙り込む

しばらくして浴槽の淵に手をつき湯船から上がろうと足をかけ…

ガラッ

…ピシヤン

ザー…

チャポン

「ふー…」

突然の乱入者を見たまま止まった緊那羅^{きんなら}

「…何を見ている」

湯船の中でタオルを絞った迦楼羅^{かるら}がソレを頭に乗せながら緊那羅^{きんなら}に言う

「上がるなら上がれ浸かるなら浸からんか…」

顎すれすれまで湯船に浸かりながら迦楼羅かるらが言った

「な…；」

やっと緊那羅きんならが口をパクパク動かした

「何してんだっちゃ——————————ッ！…；」

「風呂に入っている…見てわからんのか」

「そうじゃなく！！； どうして入ってきたんだっちゃッ！！；」

「入りたかったからだ」

「だ…ッ；」

顔を赤くして湯船に勢いよく沈みながら緊那羅きんならが喚くのに対し迦楼羅かるが淡々と答える

「女でもないのに喚くな！ たわけッ！」

「ぶっ；」

迦楼羅かるらが手で水鉄砲を作り発射すると緊那羅きんならの顔面に直撃した

「同じものが付いているだろうが！！」

「立たなくていいっちゃッ！！；」

迦楼羅かるらが立ち上がるとうとするのを緊那羅きんならが必死で止める

「まったく…」

ブツブツ言いながら迦楼羅かるらがタオルを湯船に沈めた

「…聞きたいことがあるのではないか？」

「え…？」

ぎゅっとタオルを絞りながら迦楼羅かるらが緊那羅きんならに聞いた

「今頃 阿修羅あしゅらが京助に話しているだろう」

「京助…に？」

緊那羅きんならが迦楼羅かるらを見た

「…そしてワシはお前に話す…ようにと頼まれたのだ」

タオルを再び頭に乘せた迦楼羅かるらが湯船の中であぐらをかい

「だからって何で風呂…；」

向かい合った緊那羅きんならが正座をした

「話にきたらお前が風呂だと聞いたからだ」

「だからって…； 上がるまで待つとか…；」

呆れる緊那羅きんならに対しさらっと迦楼羅かるらが言う

「正直…ワシもこんなことになっているとは知らんでな…阿修羅あしゅらから聞かされるまで…は…」

まいったよというような顔で迦楼羅かるらが溜息をついた

「こんなこと…って…」

緊那羅きんならが聞く

「…緊那羅…」

迦楼羅かるらが真剣な顔で緊那羅きんならを見た

「…実はな【時】はもう始まっていたんよ」

阿修羅あしゅらが静かに口を開いた

「竜のボン…いいか？ オライが今から話すことを聞いても……」
京助を真っ直ぐ見る阿修羅あしゅらが目を伏せた

「…最初に言っておく…逃げるな」

そして見たことないかもしれない真剣そのものの視線で再び京助を見た

「そんなに念を押して言うほどの話？…」

中島が聞く

「ああ…そうだ」

阿修羅あしゅらが答える

「それでもオライは話さないと駄目なんきに…そして竜のボン…お前は聞かないといけないんきによ」

視線が京助に集まる

「…竜の術が完全に解けた時…もう始まっていた【時】は全貌を現す…その前に…」

「京助？」

瞬き一つしない京助に南が声をかけた

「少しは思い出してきたんじゃないかと思うんだけど」

「思い出して…って…」

阿修羅^{あしゅら}の言葉に坂田が突っ込む

「勘がいいのーメガネ…そう…竜はな…【記憶】に術をかけたんきに…【アイツ】を知ってる…全ての奴らの記憶に」

「きやあ!!」

「おうッ!」

突然吹いた風に生徒達が声を上げ物があちこちに飛んでいく乾いた音をさせて発泡スチロール製の箱が校舎の壁に当たった

「…操」

阿修羅^{あしゅら}が小さく言った名前を聞いた京助が目が見開いた

立ち上る湯気が天井で雫にかわり湯船に落ちた

「…【時】は既に始まっていたのだ」

迦楼羅^{かるら}が静かに言った

「え…そ…ええ!!」

ザバッと緊那羅^{きんなら}が立ち上がった

「だが…始まってはいないのだ」

「…は?」

付け足した迦楼羅^{かるら}の言葉に緊那羅^{きんなら}がきよんとする

「それって…どういう意味だっちゃ?」

緊那羅^{きんなら}が聞く

「だからだな…【時】は始まっていたのだが…本格的には始まっていたのではなく…」

迦楼羅^{かるら}が説明するのを聞く緊那羅^{きんなら}が考え込む

「だから僕が説明すると言ったんですよ」

風呂の戸越に聞こえた乾闥婆^{けんたつば}の声

「まったく…とにかく早々に風呂から上がってください」

そう言う戸越に見えていたシルエツトが遠ざかっていった

「…迦楼羅^{かるら}って…口下手なんだっちゃ?」

緊那羅^{きんなら}が聞くと迦楼羅^{かるら}がむすつとした顔で浴槽の淵に手をかけた

カランと京助の手から割り箸が地面に落ちた

「…み…さお…」

どこを見ているのかわからない京助が阿修羅あしゅらの言った名前を繰り返した

「その顔…思い出してみ？どんなヤツだったか…」

阿修羅あしゅらが言う

「操って…操…」

坂田が腕を組んでブツブツ言いながら考え込むのに対し京助はやはりどこを見ているのかわからないまま止まっている

「操…って何…」

「さあ……」

南がハルに聞くとハルも首をかしげた

「ちよつと炭…って…なにしてんの？」

炭を取りにきたミヨコが異様な空気のその場所にいた面々に聞いた

「いや…何かようわからんけど…」

ハルが答える

「…竜のヤツ思いつきりかけたんだなあ； 深い深い；」

阿修羅あしゅらがハッハと笑いながら頭を掻いた

「…思いだせんかい？」

阿修羅あしゅらが京助に声をかけると京助がぴくつと微かに動いた

「…俺…」

口を開いた京助の右目から一筋涙が流れた

「京助！…； なした！…； 何があった！…；」

ソレを見た中島が聞く

「あれ…？； なんで…ちよい待ち…ッ；」

京助がTシャツの首元を引っ張って涙を拭う

「煙が目にしみたんじゃないの？」

ミヨコが言った

「そうかも； あー…；」

京助が顔を横に振った

「…心は思い出したみたいなんやいけどな」

阿修羅あしゅらがフウと溜息をついた

「…こりや緊那羅きんならの方が…早いかもしれんきにな」

「緊那羅？」

呟いた阿修羅あしゅらに京助が聞く

「緊那羅きんなら…きんきんラムラム…うーん；」

「お前まだ考えてんのか；」

さつきから腕を組み返ししながらまだ考え込んでいた坂田に中島が突っ込んだ

「すっげー引っかかるんだって；」

坂田が溜息を付いた

「そりや…そうだろなあ」

そんな坂田を見て阿修羅あしゅらがハッハと笑った

「どういう意味だよ；」

坂田が阿修羅あしゅらに聞く

「やっぱり竜のヤツ…竜のボンには輪をかけて強く術かかってたらしいんきにな…まあ…オライも竜の立場だったらそうしてるし…な」

阿修羅あしゅらが京助の頭を撫でた

「緊那羅きんならも…同じ話なのか？」

京助が阿修羅あしゅらの手を払いながら聞く

「微妙に違うンだけんどなあ…同じといえば…」

阿修羅あしゅらが答える

「…一緒に聞きたいのけ？」

少し間をあけて阿修羅あしゅらが聞いた

「だらしないですよ」

「いだだだだだだだッ！！； 引っ張るなたわけっ！！！！； 暑いのだ！！ いいではないか！！！」

風呂から上がったもののタオル一丁姿の迦楼羅かるらの前髪を乾闥婆けんたつばが思

いっきり笑顔で引っ張る

「せめてもう少し大きな物にしてください：まったく見苦しい」

「だっ！！！」

前髪から手を離れたかと思うと今度はチョップが迦楼羅の頭に直撃した

「見苦しいとはなんだ見苦しいとは！！！」

「まんまの意味じゃないの？」

怒鳴った迦楼羅にソレを見ていた矜羯羅が突っ込む

「やかましいッ！！； たわけッ！！」

「やかましいのは貴方です」

「だっ！！！」

再び乾闥婆のチョップが迦楼羅に直撃する

「あの：； 話ってなんなんだっちゃ？；」

髪をタオルで拭きながら緊那羅が聞く

「：そうでした：がまずは水分を取ってください」

思い出したように乾闥婆が言った

「：麦茶でいいっちゃ？；」

そういつて緊那羅が立ち上がった

麦茶の入った容器と数個のコップを緊那羅がテーブルに並べる

「ひーふー：足りる：っちゃんか？；」

茶の間にいた人数を指折り数えてそしてまたテーブルを見る

「ゼンはこちらが飲みたいんだやな」

「ゴもこーらがいいんだやな」

緊那羅の足元でコマとイヌが尻尾を振る

「ハイハイ； じゃあ運ぶの手伝って欲しいっちゃ」

「わかったんだやな！！」

緊那羅が言うコマイヌが声をはもらせそしてゼンゴへと姿を変えた

「ゼンはコップ運ぶんだやな」

ゼンがお盆を持った

「じゃあゴは麦茶なんだやな」

ゴが麦茶の入った容器を持った

「じゃあ私は…」

緊那羅きんならが冷蔵庫を振り返った

「せんせー…」

背後からした声にウニが振り返るとそこには坂田と南に支えられた京助

「…どうした？」

黒いジャージ姿のウニが京助に聞く

「なんだか低気圧っぽいんだよ京助」

坂田が言う

「…そうかー…西高東低はテストにでるぞ」

ウニが言った

「…俺何か間違ったか？」

坂田が振り返ると阿修羅あしゅらが溜息を付いたあと手招きをした

「…作戦タイムか？」

ウニが言う

「そうとも…言いますか？」

南がチラリと目配せすると三人揃って後ろ歩きをし始めそして阿修羅あしゅらの元に戻った

「低気圧じゃなく低血圧やんきに…」

肩を組んで円陣を組んだ中 阿修羅あしゅらが言った

「え？ 俺低血圧つつわなかったか？」

坂田が言う

「お前低気圧だった」

南が指摘する

「低気圧ってさあ…台風だよな」

ハルが言う

「俺は台風かい？」

京助が突っ込む

「：どうすんよ； 仮病は通じねえみたいだぞ」

「誰のせいだ誰の；」

坂田が言うとか島が突っ込んだ

「あなどりがたしウニ：勘がいいみたいだな：」

「いや：メガネそりや：；」

うんうんと一人納得している坂田の肩を阿修羅^{あしゅら}が軽く手を置いた

「こうなったら最終手段だな」

「もうはや最終手段って：もなあ：；」

中島が言うとか阿修羅^{あしゅら}がハッハと笑いながら言う

「結局：ソコにいきつくんだあねえ：」

南が遠い目で言った

「脱走するならフォークダンスの時にしろよ」

ウニが遠くから声をかけた

「：ばれてますがな；」

少し間を開けた後一同顔をあわせてハッハと笑った

「脱走するみたいだね」

本間が言う

「：ついていく？」

阿部の方を見て本間が聞いた

「うん」

阿部が頷いたのを見て本間が少し驚いた顔をした

「：言ったじゃない：まだ頑張れるって」

阿部が笑う

「：当たって：碎けてやろうじゃない：アタシだって伊達に女やってないっての！！嫌われるまで好きでいるッ！！！！」

何か吹っ切った阿部がフンッと息を荒げて宣言した

「何があったんだか：ま：私は応援するよ」

「香奈：」

「面白そうだし…ね」
本間が笑った

「緊那羅」きんなら

冷蔵庫からゼンゴご所望のコーラを出していた緊那羅きんならがゴの声に振り返った

「なんだっちゃ？」

冷蔵庫を閉め緊那羅きんならが聞く

「コップ足りないんだやな」

「えっ； でも…迦楼羅かるらに乾闥婆けんたつば…矜羯羅こんがら…」

足りないといわれ名前を上げつつ人数を確認する

「…何個足りないんだっちゃ？」

途中で数えるのをやめた緊那羅きんならが手っ取り早いと思ったのかゴに聞いた

「えーっと…沢山なんだやな」

「はっ?;」

ゴがいうと緊那羅きんならが目点を点にして素っ頓狂な声を上げた

「沢山…って…;」

ゴの言葉を聞いた緊那羅きんならが自分で数を確認しようと思ったのか台所を出た

「緊那羅こーら忘れてるんだやなー!;」

テーブルの上にあったコーラを抱えてゴも緊那羅きんならの後を追いかけた

「よ」

片手を上げた京助と3馬鹿そして阿修羅あしゅらと

「お邪魔してます」

にっこり笑って言う本間

「あ…お邪魔してます」

本間に促され阿部も言った

「きよ…なんで； 今日帰ってこないって…言っただけだったっ

や?;」

緊那羅きんならが京助に聞く

「制限時間付きの一時帰宅」

京助が言う

「狭い!!」

「うるさいですよ」

「だっ!!!」

迦楼羅かるらが怒鳴ると乾闥婆けんだつばがお約束とばかりに前髪を引っ張った

「確かにせまいねえ」

南が茶の間を見渡した

「そりゃそうだろ; こんだけの人数だし: ミッチミッチじゃん」

窓枠に寄りかかるようにしていた中島が言う

「おいちゃんもつと広い部屋にいけないと思う」

制多迦せいたかの隣でガキンチョ竜をあやしていた鳥俱婆迦うぐぼかが言った

「もつと広い: って:」

京助が自分の家の内部を思い出そうとしている

「: んがわのある部屋なら外にいてもいいんじゃない?」

制多迦せいたかが言う

「そうだね:」

「さすが制多迦様ナリ!!!!」

矜羯羅こんがらと慧光えこうが言うのと制多迦せいたかがどこか照れたカンジでヘラリと笑った

「一時帰宅って: どうしたんだっちゃ?」

ゾロゾロと移動している最中 緊那羅きんならが京助に聞いた

「なんとなく」

「は?;」

京助が答えた

「別々に同じような話聞くよりいっぺんに聞いたほうがいいと思っただけ」

「同じような: 話って:」

「はあッ!? 何で妖怪…ッ」

阿部が京助を見た

「ヒマ子義姉様は義兄様の妻なんだって」

「はあッ!!!!!!」

慧喜^{えき}がさりげなく言う和阿部が裏返りそうに高い声で言った

「阿部さん落ち着いて」

緊那羅^{きんなら}が阿部に声をかけた

「ちょ…妻あ?!」

緊那羅^{きんなら}の声が聞こえなかったのか更に阿部が混乱しつつ言う

「あーあ…思いつきメダパニってるよ阿部ちゃん」

南がハッハと笑った

「落ち着きましたか？」

コップを両手で持ってじーっとヒマ子を見据えていた阿部に乾闥婆^{けんたつぽ}が聞いた

「…ねえ…一体なんなのアンタ達といいソコの妖怪といい…一体なんなの？」

阿部が逆に聞く

「あ…そっか阿部とか…祭りン時いなかった…んだっけ？」

坂田が思い出したかのように言った

「祭り？」

本間が聞く

「まあ…うん； ちよつとあったんだけど…そっか…じゃあわからんよな」

中島が言う

「説明するの？」

鳥俱婆迦^{うぐぼか}が中身の減ってないコップを持って聞いた

「そうやねえ…ま…この話聞いたら…たぶんわかるんきにな…全部とはいかなくとも齧^{あしゅら}り程度…オライ達のこと」

阿修羅が縁側に足をブラブラさせながら言った

「てか時間内に説明できんの?； 九時までに戻らんとアカンのだよ? 俺等」

南が言う

「お前等そうなたら先戻れ」

京助が麦茶を飲み干した

「いっやーん； 最後まで聞きたいじゃん」

南が苦笑いで坂田と中島を見ながら言った

「そうだよなあ…どうせなら」

中島も言う

「俺もこの引っ掛かりをとりてえしな…内申点より好奇心!」

坂田がハッハと笑った

「そっかあ…」

阿修羅あしゅらが空を見ながら溜息混じりに言うとう向きを代え部屋の方に体を向けた

「…じゃ…はじめっか…」

「慧喜えきと悠助えすけはいいんナリか?」

姿の見えない慧喜えきと悠助えすけには聞かせないのかと慧光えこうが聞く

「さっきまで竜達の面倒見てたけど…」

矜羯羅こんがらが探しにいこうと立ち上がると制多迦せいたかと慧光えこうも立ち上がった

「仲間はずれば可愛そうだしねえ」

南が言う

「京助?」

悠助と慧喜えき搜索隊が結束されている中黙ったままの京助に緊那羅きんならが声をかけた

「あ…なん…だ?」

少しどもりながら京助が返事をした

「どうしたんだっちゃ? なんか…変だっちゃよ?」

「失礼な;」

緊那羅きんならが言う京助が口の端を上げて言う

「なんでもねえよ」

コップの中身を飲もうと口をつけた京助がカラだと気づき口から離すと緊那羅きんならが自分のコップを差し出した

「口つけてないっちゃ」

緊那羅きんならが笑いながら言った

「：さんきゅ」

半分呆れてでもどこか安心したような顔で京助がコップを受け取る

「：あのさ」

「なんだっちゃ？」

半分まで飲んだところで京助がコップから口を離した

「：やっぱいいわ」

「なんだっちゃ；」

「なんでもねえよ； 気にすんな」

言いかけてやめた京助に緊那羅きんならが突っ込むと縁側をさつき悠助と慧え喜きを探しに言った面々が歩いて戻ってきた

「寝てた」

鳥俱婆迦うぐはかが座りながら言う

「そか：じゃ：いいんきに？」

阿修羅あしゅらがあぐらをかいて部屋の中の面々を見渡した後京助に視線を向けた

【第十二回】ココロのうた（前書き）

もうひとりの【緊那羅】

乾闥婆けんたつばがぎゅっと胸を掴んで俯くと迦楼羅かるらが乾闥婆けんたつばの手に手を添えた

「つらいなら聞かなくていいinkyによだつば」

ソレを見た阿修羅あしゅらが乾闥婆けんたつばに言う「乾闥婆が首を振った」

「いえ…大丈夫…です」

そして笑顔に向けた

「…なんで緊那羅きんならの話で乾闥婆けんたつばがづらいんだ？」

「俺が知るか；」

「複雑模様だねえ；」

3馬鹿がボソボソと小声で会話をする

「アタシよくわかんない…；」

阿部が呟いた

「…私の中に…って…」

緊那羅きんならが驚いた顔で阿修羅あしゅらに次の言葉を促すように聞く

「簡単に説明すつと竜のボンとかがよーやってるゲームとかいうのに…【復活の呪文】とか…あるだろ？」

「あーザオリクとか？」

「レイズデットとか」

「レイズとか…ヒーリングとか」

「あと…何あった？」

阿修羅あしゅらが言う「3馬鹿と京助がゲーム中でてくる復活の呪文を次々上げていく」

「ハイハイ…いいか？」

とめどなく出てきそうな復活の呪文に阿修羅あしゅらがパンパン手を叩いて楔を入れた

「竜は…お前に【復活の呪文】をかけたんよ」

「え…」

部屋全体がしん…となった

「…それって…」

矜羯羅こんがらが最初に口を動かして聞いた

「それって緊那羅は…」

続いて坂田が言葉を発した

「…ッ…」

乾闥婆が顔を背けると迦楼羅がその乾闥婆の頭を自分の胸に押しや
った

「…そうやんきに…緊那羅は一回命落としてるんきに…」

阿修羅が静かに言うとき京助が緊那羅に視線を向けた

「…私は…一回…死んでる…んだっちゃ…？」

緊那羅が途切れ途切れで言うとき阿修羅が頷いた

「でもだったら何で一回死ぬ前の記憶がないの？」

鳥俱婆迦が突っ込んだ

「それが…竜の術やんきに…」

阿修羅が言いながら今度は京助を見る

「緊那羅が一回死んだ時…【時】が始まっていたんきに…そして…」

緊那羅は竜のボン…お前を守って死んだんきに」

京助の目が大きく見開いた

下げられた風鈴がチリリリリと少しやかましいくらいに鳴った

「…びびったか？」

阿修羅がヘラッとして笑って京助に言った

「…もしかして…冗談…とか言うなよ?…」

ちよつとどこことなく作ったような平然とした顔で京助が阿修羅を見
返した

「いっや…残念だなあ」

阿修羅がハッハと笑ったのを見て迦楼羅と乾闥婆以外の一同が一斉
にナンダ…冗談かコンチクショウというカンジで息を吐いた次の
瞬間

「全部…本当のことやんきに」

部屋中に阿修羅の声が響き渡り迦楼羅が顔をしかめた

「…ちょ…っと待ってよ…待って待って!!;」

阿部が身を乗り出し声を上げた

「わっかんないんだけど!! ラムちゃん生きてるじゃない!! ココにいるじゃない?! 生き返るとか…なんなのよソレ!! 第一京助を何から守ったっていうのよ!!」

「落ち着け阿部郁恵」

眉を吊り上げて阿修羅あしゅらに食って掛かる阿部を本間がなだめる

「ソレをこれから話すんきによお嬢; すまんけど静かにしたっての」

片手を上げた阿修羅あしゅらが阿部に向かっていうと阿部がぐっと何か言葉を飲み込んだままおとなしく俯いた

「竜のボン…がちっさい時に竜が死んだ…そう覚えてるだろ?」

「まあ…そう覚えてますけど…も;」

阿修羅あしゅらの質問に京助が答える

「どうしてそう覚えてるんきに?」

「…どうしてって…」

「どうして竜が死んだって覚えてるか…」

「…知るかよ; どうしてとか聞かれても俺は…俺は…」

更に質問した阿修羅あしゅらに答えていた京助の言葉が詰まった

「あのな…竜は生きていたのは知ってるよな?」

阿修羅あしゅらが言うとき京助が頷いた

「…とうか今いるしね…」

矜羯羅こんがらが言う

「…ん…ちょっと増えたし小さくなったけど」

制多迦せいたかも言った

「小さい姿でいると使う力が少なくてすむ…だからだろう」

乾闥婆けんたつばの頭を抱えたまま迦楼羅かるらが言うとき阿修羅あしゅらが頷いた

「竜は今力を最後の一滴だけ残した状態なんきに…」

阿修羅あしゅらが言うとき制多迦せいたかが俯きソレを見た慧光えいこうが阿修羅あしゅらを睨んだ

「あああ; 別にタカちゃん責めてるわけじゃないから睨まんとい

てー； 痛いから；」

ガンを飛ばす慧光えいこうに阿修羅あしゅらが言う

「宝珠…って見たことあるだろ？」

阿修羅あしゅらが聞くと3馬鹿も京助と一緒に頷いた

「あー…やっとなるる単語登場；」

南が苦笑いで言う

「コレにはオライ達の力が溜められているんきに」

阿修羅あしゅらが自分のミヨンミヨンを引張りながら言った

「コレを使ってオライ達は…まあ…お前さんたちに言わせれば【魔法】みたいなヤツを使ってるんきにな」

3馬鹿がフンフンと頷きながら阿修羅あしゅらの話聞く

「…京助…？」

リアクションのない京助に緊那羅きんならが声をかけそれでもなお反応がない京助の手に緊那羅きんならが手を添えるとバツと京助がその手を払った

「あ…スマン；」

無意識での行動だったのか京助が緊那羅きんならに謝りそしてまた黙り込んだ

「…京助…」

それ以上どうしていいかわからない緊那羅きんならも京助同様黙り込んだ

「竜はな宝珠を2つだけ残して全部使ったんよ…そして術をかけた

…」

阿修羅あしゅらが言う

「…かつてこの町にいた【一人】に関する記憶に…な」

そう言いながら阿修羅あしゅらが少し腰を浮かせ尻ポケット辺りから何かを取り出した

「っじゃーん」

そう明るく言いながら広げたのは【柴野ストアー】と書かれていたいわば粗品として配られると思われる一枚のタオル

「…しばぴーの家のタオルじゃん；」

南が突っ込む

「それがどうか…京助?;」

更に突っ込もうとした坂田が目には言った京助の異変に名前を呼んだ瞬きしない京助の目から次々に出てくるのはとまることのない涙

「…オイ…?;」

坂田が呼びかけても京助の視線は阿修羅あしゅらの持つタオルに釘付けのまま動かずにそれでも流れる涙は顎をつたいポタポタとあぐらをかくその膝に落ちてしみを作っていた

「京助…」

隣に座る緊那羅きんならが呼びかけてもかわらずの京助を見て阿部が立ち上がりそして京助の後ろに立った

スパンツ

というまるでスイカを叩いたかのような音が風鈴の涼しげな音と重なり響く

「お嬢…;」

阿部の行動にあっけに取られていた一同が阿修羅あしゅらの声で帰ってきたのはソレから少したってからだった

「トリップしてんじゃないわよッ!!! 泣くならアタシ達が物事理解したうえで泣いて!! わけわかんないんだからっくにッ!!!」

涙を垂れ流した状態で目を大きくして阿部を見上げる京助に阿部が声を荒げた

「…一人で泣かないでよ…わけわかんないから慰めることも一緒に泣くこともできないじゃないアタシ達…」

ソレまで眉を吊り上げていた阿部の顔が泣きそうな顔にかわった

「阿部さん…」

緊那羅きんならが声をかけるとふいっと顔を振ってそして笑顔きんならを緊那羅に向けた

「ラムちゃんもだよ? …一人でないちゃ駄目だからね」

そういつて阿部が本間の隣へと戻り腰を下ろした

「阿部」

顔を上げた阿部を京助が呼んだ

「…さんきゅ」

少し鼻声で京助が言うのと阿部が嬉しそうに笑った

「…続けていいか？」

阿修羅あしゅらが言う

「ああ…」

ズツと鼻を吸った京助が大きく深呼吸して答えると阿修羅あしゅらが手に持っていたタオルを京助に向かって投げた

「…ただのタオルだよね…」

タオルを見によつてきた南が端っこをつまんでしげしげとタオルを見る

「でも京助コレみた瞬間目からナイアガラだったじゃん？ ただのタオルじゃないんじゃない？」

坂田が京助の頭に腕を置いて上からタオルを見下ろした

「…竜のボンには見えたんきに…まだ術が解けてないけどな…きつと…違うけ？」

阿修羅あしゅらが静かに言うのと視線が京助とその京助の手にあるタオルに集まった

「あの日のこと…時が始まった日のこと…そして…【緊那羅きんなら】が一

回死んだ日のこと…」

緊那羅きんならがぴくっと反応して阿修羅あしゅらを見た

「…阿修羅」

小さく緊那羅きんならの唇が動き阿修羅あしゅらの名前を呼んだ

「…一っだけ聞いていいっちゃ？」

「なんだ？」

「…前の私はちゃんと京助を守れて…たっちゃ？」

真っ直ぐ緊那羅きんならが阿修羅あしゅらを見て聞く

「…守れてなかったら竜のボン…いないんちゃうけ？ ソコに…お前の隣に」

阿修羅あしゅらが眉を上げて苦笑いで緊那羅きんならの隣の京助を指差した

「うんそうだと思う」

鳥俱婆迦うぐぼかも頷きながら言う

「じゃあ私は…京助を守れたんだっちゃね…：そっか」

小さく独り言のように呟いた後 緊那羅きんならの顔がほころんで嬉しそうな笑顔を作った

「…でもお前俺守って死んだんじゃん…笑ってていいところなのか？ ソコは」

横目でその笑顔を見ていた京助がボソボソつと言うと聞こえたのか 緊那羅きんならがきよとした顔で京助の方を見た後

「京助を守れたって言うならそれでいいんだっちゃ私は」
そういつてまた笑った

「緊那羅きんなら…らしい…ね」

呆れたように矜羯羅こんがらが溜息をついた

「でたよラムちゃんの京助馬鹿…ハッハ」

南が笑いながら緊那羅きんならを突付く

「ハッハッハ…いや…なんつーか…やっぱ…想像ついてたんけど…：そうけー…」

膝を立ててソレに手をついた阿修羅あしゅらが楽しそうに笑ったあと迦楼羅かるらと乾闥婆けんたつぱを見た

「かるらん…だっぱ…大丈夫やんきに…こいつ等は」

阿修羅あしゅらが言うのと乾闥婆けんたつぱが迦楼羅かるらの胸から顔を上げた

「…オライが保障する」

「…貴方の保障じゃ…なんですけどね…」

「オイオイ；」

俯きながらも突っ込んだ乾闥婆けんたつぱに阿修羅あしゅらが裏手そぶりで突っ込み返した

「じゃあさ緊那羅きんならは前にもコッチにきたことがあって…：そんな時にア

レか？ 京助を…」

「いんや…ちよいと違うわ」

中島が言う和阿修羅^{あしゅら}がさっき乾闥婆^{けんだつぱ}に突っ込んだ手をそのままチヨイと奥さん風に振った

「緊那羅^{きんなら}はな…もとはこっちにいたんきに」

チリィー————…ン…

風鈴が長めに鳴った

「緊那羅^{きんなら}はな…もとは緊那羅^{きんなら}じゃなくてな別の名前でこっちにもとはいたんきに…」

京助が手に持っていたタオルを見て顔を上げると阿修羅^{あしゅら}と目が合った

「竜のボンがソレ見て泣いたんは…ちゃんと理由があるんきによな」
阿修羅^{あしゅら}が目を伏せ一呼吸置いた後ゆっくり口を開いた

たったいくつかの言の葉を聞き終える時間が永遠にも感じるほど長かった

最初の言葉で心臓が早くなった

次の言葉で更に

そして視界がぼやけて

やがて暗くなった

…聞こえたのは緊那羅^{きんなら}の声

薄暗くなった部屋の天井がだんだんとはっきり見えてきて悠助が体を起こした

「暑い……」

しつとりと汗ばむ自分の体にへばりついてたシャツを引張って風を送り込みながら辺りを見渡すとすぐ側には寢息えきを立てている

その前髪は悠助のシャツと同じように肌にへばりついてた

更に部屋を見渡すと少しはなれたところに並んで寝ているガキンチョ竜が見えた

少しまだシヨボシヨボする目を擦ると悠助が何気に立ち上がり部屋の戸を開け廊下にでる

「……誰もいない……の？」

物音のしない家の中

部屋の中を振り返ると寝ている慧喜えきとガキンチョ竜がいたソレを見て安心したのか悠助が戸を閉め廊下を歩き出した

キシキシと鳴く廊下を歩き縁側のある和室の前を通ろうとした時

「京助……!!」

きんなら緊那羅の声が聞こえたあとバタバタと何か騒がしい物音がし始め

「ちょ……京助……!! 京助ってばオイ……!!」

「どうしたっていうのよ! ちよつと……!!」

「救急車か!? きゅうきやしゅ……!!!」

けんだっば「乾闥婆……!!」

今日は帰らないと言っていたはずの京助という名前を呼ぶのは南の声に似ていた

部屋を覗かなくても何か大変なことになっているということが声だけで感じられた

「京助……!! 京助……!!」

「オイ布団……!! フットン……!!」

「落ちて着いてくださいッ……!!」

スパーン……!!

ギャーギャー喚く声と何かを叩いた音

「…京助…?」

ぎゅっと自分の服を握った悠助が恐る恐る和室の戸を開けた
見えたのはみんなの後姿

何故かものすごく怖くなって悠助はその場から逃げるように駆け出した

目が痛い

でもそれ以上に足…膝の辺りがジンジンと痛かった

見覚えあるでもちよつと違う景色

足音がして無意識にその足音の方向を見て…

「京助…!!」

呼ばれた

「京助…!!…!!」

もう一度呼ばれる

【誰がどうして呼んでんだ?】

【てかそんなにでっけえ声で叫ぶようにいわなくてもすぐ側にいるのに】

【でもおかしい】

【すぐ側にいるのにどうして…顔が見えないんだ?】

【つーか…なんで俺泣いてんだ？】

【…あー膝イテェ…ってか血ィでてんじゃん…；】

【オイオイこの年になってコケて泣いてるってさぁ…】

足音が数センチ近くで止まってポフッと頭に感じた感触

そして目の前に差し出されたピンクのファンシーな超可愛い絆創膏

【…コレを貼れと…；】

【うっわケッティちゃんだってさー…あっはっはかわいいねえ…
はぁゝぁゝ】

「京助！！！！」

まただ

呼ばれた

【なんだよ；　　ってか声でっけーよき…】

一体誰の声なんだろう

今誰の名前を呼ぼうとしたんだろう

どうしてこの声がそいつの声だっけってわかった？

一気にこみ上げてきた不安で絆創膏を差し出している手の主を思わず見上げた

【……あ…】

無意識に一言喉から声が出た

「京助！！ 京助ッ！！！！！」

「落ち着いてくださって言うてるじゃないですか！！！」

「とりあえず座布団でいい座布団！！！！； 折ってコッチ！！！」

耳に入ってきたのは飛び交う言葉の嵐で体を感じたのは頬の痛みとアチコチを触られている感触

手に感じたのは自分よりちよつと細めの指でしっかりと包まれている感じ

「…京助…？」

その手が誰のものかなんとなく見たくなくなって腕を上げると小さく名前を呼ばれた

「あ、気が付いた」

その一言でさっきまでの言葉の嵐がやんだ

「きょう…すけ…？」

もう一度名前を呼ぶのは同じ声その声の主は自分の手をしっかりと握っていた手と同じ人物

「べソつかき…；」

眉を思いつきり下げて自分の顔を見ていた緊那羅きんならにしてみた

「だーもー！！！！ 心配かけやがって————！！！！；」

「

坂田が大げさに溜息を付く

「大丈夫？ なんか本当…大丈夫？」

南が心配そうに聞いた

「泣きながら気イ失うんだもんナア； ビビッたービビッた；」

座布団を肩に担いで中島が言う

「うーん…チョイいきなりすぎたつけねえ…？；」

阿修羅あしゅらがハッハと笑い頭を掻いた

「笑い事じゃないでしょッ！！！」

ボン

阿部が阿修羅^{あしゅら}めがけて座布団を投げつけて怒鳴った

「げ； やばい；」

ふと携帯をひたらいいた坂田がデジタル表示の時計を見て言った

「タイムアウト？；」

南が坂田の携帯を覗き込みながら聞くと坂田が溜息交じりに頷いた

「戻らんばヤバイなー…っとおもう…んです…けども…」

坂田がそう言いながらゆっくりと目を向けた方向に一同も同じように目を向ける

その視線の先にはきよとんとした京助

「…なんですか；」

京助が口の端を上げて聞く

「…京助は早退ってことで…じゃ駄目なのかな」

「は？ 俺は別になんとも…；」

「なくないじゃない」

ボソツと言った阿部に京助が返すと更に阿部が返してきた

上げた阿部の顔の眉毛はコレでもかというほど下がっていて不安いっぱいの顔だった

「なんともなくないよ…今はなんともないかもだけど学校戻ってなんかあったらどうするのよ…学校には…」

ソコまで言っていると阿部が少し言葉を止めて一呼吸した後

「ラムちゃんいないんだよ？」

阿部の言葉に緊那羅^{きんなら}が顔を上げた

「え…？」

どうして自分の名前が阿部の口から今出たのかわからない緊那羅^{きんなら}がそのまま阿部を見ると目が合った

「さ…じゃ戻ろうか」

阿部と緊那羅^{きんなら}の間に本間が立ち上がった

「ね？ 郁恵」

本間が阿部に向かって手を差し出すと阿部がソレを掴み立ち上がる

「じゃ…俺等も…」

「いててて； 足しびれた；」

女子二人に続いて3馬鹿ものりくらりと学校に戻ろうと行動し始めた

「俺ももど…」

「アタシの言うこときいてくれないの？」

立ち上がろうとした京助に阿部が振り向かないで言った

「…たまにはアタシの言うことききなさいよ！！馬鹿ッ！！！！」

ズドガスッ！！！！

「ガフッ！！；」

「京助！！；」「あべちゃ！！？」

「あゝあ…」

阿部の回し蹴りが華麗に京助にヒットすると個性豊かな声が単発で上がった

腰を抑えてうずくまる京助をふんツと鼻から息を吐いて見下した後大股で阿部が部屋を出て行った

「ハッハッハ； お嬢は相変わらずつええんのー；」

阿修羅^{あしゅら}がうずくまる京助の腰をポンポン叩きながら笑う

「…なんか…似てない？」

矜羯羅^{こんがら}が横目で迦楼羅^{かるら}と乾闥婆^{けんだつば}を見ると乾闥婆^{けんだつば}が迦楼羅^{かるら}と顔を見合わせる

「…似て…って…」

「雰囲気」

クイツと顎で矜羯羅^{こんがら}が乾闥婆^{けんだつば}を指すと迦楼羅^{かるら}がまじまじと乾闥婆^{けんだつば}を見る

「なんですか」

「だっ；」

そんな迦楼羅^{かるら}の前髪を乾闥婆^{けんだつば}がぐいっと引張った

「ね？ 似てない？」

矜羯羅こんがらが今度は阿修羅あしゅらにふると阿修羅がふーっと長い溜息を吐き
「…やっぱ…なんつーか…似た臭くなるもんなんかねー…」

そう言っつてポンポン京助の腰を叩いた

「さっきから似てるってなんナリか？ 矜羯羅様こんがら」

慧光えいこうが矜羯羅こんがらに聞く

「それは…」

「香奈ツ！！！！！」

矜羯羅こんがらの言葉が阿部の叫びに近い声でかき消されその声に一同が立ち上がった

「どうし…」

阿部の姿を鳥居の下に見つけ駆け寄った坂田が何かを見てそして一歩後退した

「な…にして…」

震える声で坂田が誰かに聞くとジャリっと言う音共にその【誰か】が最後の石段に足をかけた

「…——————————————————————ッ！！！」

【誰か】の姿を見た緊那羅きんならが目を見開き口を押さえて座り込んだ

「緊那羅！！！！？」

鳥俱婆迦うぐぼかが緊那羅きんならを支え名前を呼ぶ
制多迦せいたかと矜羯羅こんがらの目付きが変わった

何か懐かしいものをでも今は見たくなかったものを見たような渋い顔で【誰か】を見据える

「…だいぶ思い出してきたんきにな…緊那羅きんなら」

「何をだよ！！ 何なんだよ！！！」

緊那羅きんならの肩に手を置いた南があからさまに混乱してる様をあらわにして阿修羅あしゅらに怒鳴った

口を押さえうずくまる緊那羅きんならの目からは涙が流れ呼吸が荒くなっていく

「――――
――ツ！――」

光が小さな手を生んでそれが思いっきりこっちに向かって伸ばされた
やっぱり何かを泣き叫びながら

ごめん
ごめんな……

どうしてか謝る自分
どうしてかこみ上げてくる涙

守らなきゃ

だってほら……また泣いてるじゃないか
謝ってる暇があるなら伸ばされた手をつかまなきゃ
この間も呼ばれて知らん振りしていたらグレて一人で遊んでコケて
……膝すりむいて

泣くもんかって強がってた
なのに人の顔を見るなり泣き出して
だから側にいなきゃ……守ってやりたい……

――――
――――……京助――

「香奈！！ 香奈ッ！！！！ 離して香奈ぁッ！！」

【誰か】に向かって本間の名前を叫び続け駆け出そうとした阿部の体を制多迦せいたかが抱きかかえた

「…みがいつてどうなるの？」

そして静かに言い【誰か】を真っ直ぐ見据えた

【誰か】の腕の中には意識がないと思われるい本間が頭を垂れたまま抱かれていた

「なん…で…」

坂田が声を震わせて問いかけると【誰か】がまた一歩足を進め坂田がまた一歩後退する

「どうして!?!? ねえどうして香奈を…なんで!?!? なんでなの柴

田さんッ!?!?!」

左頬に二つ並んだほくろ

紺に近いスーツそして

「…なんで…なのかな」

いつもと変わらない話し方と声はまちががなく柴田だった

「…彼女を離しなよ…」

「できません」

矜羯羅こんがらの言葉を柴田がきっぱり断った

「…しり…あい?;」

今知り合いました、つい先日知り合いましたというにはあまりにも

おかしい会話のやり取りを聞いて中島が聞く

「そう…なる…かな…お久しぶりです…矜羯羅様こんがら、制多迦様せいたか」

一瞬トボケた顔をした柴田が制多迦せいたかと矜羯羅こんがらに向かって軽く頭を下げる

「…清浄しょうじょう…」

矜羯羅が聞いたことのない名前を口にすると瞬き一瞬ソコにいたのはスーツ姿の柴田ではなく摩訶不思議な服装に身を包んだ柴田だった

「清浄しょうじょう!?!? な…んでお前がこっちにいるナリか!?!? お前は…

!?!?!」

「…しよう…じょ…う…」

慧光えいこうの怒鳴り声よりその場に響いたのは緊那羅きんならの声
ヒューヒューと喉から息を漏らしながらゆらりと緊那羅きんならが立ち上がった

「きん…」

支えていた鳥俱婆迦うぐばかが心配そうに緊那羅きんならを見上げそして何かにおびえるように緊那羅きんならから離れた

「タイミング…悪かったのか良かったのか…だの…」

阿修羅あしゅらが緊那羅きんならと清浄しょうじょうを見て言った

「タイミング…って何?;」

南あしゅらが阿修羅あしゅらにこそつと聞く

「あんな…ヤツ…清浄しょうじょうはな…」

「何騒い…で…」

阿部にくらった回し蹴りの痛みからようやく回復したっぽい京助が遅れてやってきた

「清浄しょうじょうは昔…竜のボンをな…ソレを守って昔の緊那羅きんならが死んだんきに…」

本当にタイミングがいいのか悪いのか阿修羅あしゅらが言った言葉がバツチ
り京助に聞こえた

「…あ…京助…」

やっと存在に気づいた南が京助の名前を口にすると緊那羅きんならが顔を上げた

その目は何かを見ているようで何も写していなくても真っ直ぐ京助の方向を向いていた

「お前は…【上】につくの？」

いつの間にやら摩訶不思議服になっていた矜羯羅こんがらが清浄しょうじょうに聞く

「いえ…そうじゃない…と思いますけど…俺は俺自身…俺に守りたいもののため…守りたいものにつきます…そのために…ッ！！！？」

清浄しょうじょうの話の最中いきなり目分けていられないほどの強風が巻き起こ

った

「迦楼羅^{かるら}！？」

「違う！！　ワシではないッ！！；　なんでもかんでもワシにする
なたわけッ！！！！；」

強風Ⅱ迦楼羅^{かるら}というイメージが定着しているのか鳥俱婆迦^{うぐばか}が迦楼羅
に言う迦楼羅^{かるら}が怒鳴り返した

「これは…ッ…」

「ギャー！！；　目痛い痛いー！！；」

突っ立ったままだった坂田を南と中島が支え強風に耐える

「竜のボン」

坂田と同じように突っ立ったままだった京助を支えながら阿修羅^{あしゅら}が
声をかけた

「まだ…始まったばかりなんよ…しっかりせ？」

必死だった

手を伸ばした

そんなに深くない

大丈夫…すぐ届くと思った

でも…

つかめなかった

青に浮かぶ白がゆがんで声が枯れた

いくら呼んでも叫んでも手を伸ばしても

膝に貼りっぱなしだったピンクの絆創膏がはがれて波に流されていく

もう泣かないから

もう転ばないから

もう困らせないから

だから：

名前を呼んで

頭を撫でて

一緒に遊んで

今日帰ったら母さんがスイカ切ってくれるって言ってた

夕方になって涼しくなったらコマとイヌの散歩に行こう？

花火もう線香花火を一気にやったりしないから

布団蹴っ飛ばしたりしないから

悠の粉ミルクもう食べないから――――――

――――――：

――――――：

操ちゃん――――

「…み…さお…ちゃん…」

吹き荒れる強風の中京助がポツリと口にした名前

「…思い出したか…？　そうだ…緊那羅きんならは【操】なんきに…操は【

緊那羅きんなら】なんきによ…」

京助に阿修羅あしゅらが静かに告げた

どこかで聴いた歌

その歌を歌っていたのは父親…竜だったと母ハルミは言っていた
自分が泣いた時その歌を聴くと泣き止んだと
ウロけどその歌を確かに覚えていた

「京助…いいか？　自分の気持ちに素直になればいいんきに…よ」

阿修羅あしゅらの言葉に京助がハツとして阿修羅あしゅらを見た

「おま…今名前…」

「ハッハ…お前は竜のボンだけどな…京助っっ！名前あるんよな…
ソレと一緒にゃんきに…お前が本当に…」

「緊那羅きんなら！」

乾闥婆けんたつばが声を上げ一同がその声に強風の中目を緊那羅きんならがいた方向へと向けた

「き…んなら…？」

うつすらあけた目に見えたのは透き通った羽と靡く緑色の飾り

「…あれは…竜の羽根…だね」

矜羯羅こんがらがボソツといった

「え？　でも竜の羽根って京助と悠に生えたヤツ…なんか爬虫類で
ラムちゃんのもって…」

「何でワシを見るんだたわけッ！！…竜には二種4枚の羽根があ

った…京助達に生まれた羽根とはまた別にもう一種…それがあの羽根だろう…」

南の間に迦楼羅かるらが答えた

「緊那羅きんならに竜の力が流れているなら…おかしくは…ない…」
何かいやなことを思い出したのか迦楼羅かるらが渋い顔をした

「…そうか…どこかで覚えていたから…君は俺が苦手だったんだね…君を殺したこの俺が」

柴田…清浄しやうじやうが緊那羅きんならに言ったが緊那羅きんならは何も言わずただ清浄しやうじやうを睨にらんでいた

「……」

何も言わずしてただ清浄しやうじやうを睨にらむ緊那羅きんなら

「…戦けんう気だつばですね…緊那羅きんなら」
乾闥婆けんたつばがボソツと言った

「…あれは緊那羅きんならであって緊那羅きんならじゃない…緊那羅きんならじゃこんな高度な結界…まだ作れないからね…」

矜羯羅こんからがいつもと変わりない風景をぐるり見渡して言う

「操さんならと緊那羅きんならが共通で強く思うことがアレを動かしてるんきにな…ただ一つ…京助を守るってことだけが…」

「でも待って！だって香奈…香奈が！！」

「…たい；」

制多迦せいたかに抱きかかえられていた阿部が半べそで腕を振り上げるとソレが見事に制多迦せいたかの頭に直撃した

「…てよ…待てよ…」

「坂田？ お前いつからタカちゃんと同じような話し方になったわけ？」

しばらく無言のままだった坂田が口を開いた

「柴田なんだよな…あいつ…柴田だよな？ なんであんな格好になつて本間…ッ…柴田ッ！！」

「坂田ッ！！；　　ちょ……！！！」

「いかん！！！！；」

中島の手を振り払い坂田が柴田：清浄しやうじやうの方へと駆け出した
同時に緊那羅きんならが武器笛に口をつけた

「ラムちゃん！　ラムちゃんちよつと待って——————
——！！！！；」

「今の緊那羅きんならは緊那羅きんならじゃないってさっき聞きましたか？
無駄ですよ呼んでも……ッ」

ゴゴゴゴゴゴゴゴ……

クイックで腕の布を解いた乾闥婆けんだつばが腕を動かすと坂田の前に巨大な
水柱が何本も立った

「乾闥婆けんだつばナイスー！！！」

中島が声を上げる

「向かっていってるよ」

キャッキヤ喜んでいたところに鳥俱婆迦うぐばかがさらつと言うとそのキャ
ツキヤが止まった

「坂田——————————！！！」
！！；」

「っ……；」

乾闥婆けんだつばの出した水柱に向かっていく坂田に乾闥婆けんだつばが慌てて水柱を操
り道を作った

「坂田——！！　　坂田——！！！！；」

「あっ；　馬鹿お前等ッ！！；」

坂田の後を追って駆け出した南と中島を慧光えいこうが追いかける
聞く耳持たないといったカンジの坂田はただ真っ直ぐ清浄しやうじやう……柴田の
元へと駆けて行く

「はなしてえッ……てんでしょッ！！！！！」

ガンッ！！！！

「~~~~~」

制多迦せいたかに抱えられていた阿部が思い切り足を後ろに蹴り上げその踵かかとが制多迦せいたかの股間を直撃したようで制多迦がうずくまった

「一回で離さないからこうなるのッ！！……っ……香奈ッ！！」

蹲せいたかる制多迦を見下ろすかんじでそういう残した阿部が同じように駆け出した

「待たんかお前等！！！！」

「どけよ！！……っお前！柴田だろ！！？　なんでそんな阿呆くさい格好してんだよ！！なあ！！」

迦楼羅かるらに腰をつかまれた坂田が迦楼羅かるらを振りほどこうとしながら清しょう浄じように向かつて叫んだ

「柴田さんッ！！！！」

追いついた南が坂田同様【柴田】と呼んだ

「香奈！！」

阿部も追いつき柴田ではなくその腕に抱きかかえられている本間の名前を呼んだ

「……！！　迦楼羅かるら！！」

「危ない！」

乾闥婆けんだつばと矜羯羅こんがらが同時に叫びそして同時に両腕を前に出した

その二人の声に振り向いた迦楼羅かるらが見たものは目の前に迫ってきていた緑色の光り

「……！！」

「うわあああああッ！！！！！！」

「きゃあああッ！！！！」

無音にも思えた一瞬

上がった悲鳴

巻き上がった砂埃

「…ま…にあったナリ…」

その中から聞こえた慧光えいこうの声とハラハラと舞い落ちていく蓮の花びら砂埃が晴れていくとその場に蹲る中島、南と阿部そして金色の羽根を広げた迦楼羅かるらといつの間にか摩訶不思議服になっていた慧光えいこうの姿が見れた

「…無事みたいだね」

矜羯羅こんがらが腕を下ろし乾闥婆けんだつばに言う

「…そう…ですね…」

乾闥婆けんだつばも腕を下ろし安堵の表情を作った

「緊那羅きんなら…がやったのか？」

恐る恐る頭を上げた中島が言った

「…あの緑の光りって…祭りの時のヤツと一緒に…だよね？」

南がゆっくりと緊那羅きんならを振り返った

「…今の緊那羅きんならは緊那羅きんならではないといったであろう…」

迦楼羅かるらが羽根を消して服についた砂埃を払う

「…蓮が散るほどの攻撃力が緊那羅きんならにあるなんておかしいナリ…だつて緊那羅きんならの宝珠はまだ…」

「何度とも言わせるなわけッ！！ アレは緊那羅きんならではないのだ！！」

慧光えいこうが言う迦楼羅かるらが怒鳴った

「そ…んな言い方なくて…も…っ」

見る見る慧光えいこうの目に涙が溜まり方が小さく上下し始めると迦楼羅かるらがギョっとした

「あーあ…な…かしたな…かしたー」

南が迦楼羅かるらを横目で見て歌う

「なっ…」

迦楼羅かるらが思いつきり動揺する

「守ってもらって…泣かして…恩を仇で返すなんてなんてひどい…」

中島もジト目で迦楼羅かるらを見る

「……」

「…アレ?;」

その中島に続いて何か言うのかと思っていた坂田が何も言わず南が
思わず坂田の顔を覗きこんだ

「…坂田…くん?;」

「いい加減にしてくれよ…なあ…いい加減にしてくれよ!!!」
「」

怒鳴った坂田が立ち上った

「なんなんだよ!!! どうして…柴田あッ!!!!」

坂田の声聞いた清浄しやうじやうがゆっくりと坂田の方を見た

「…若…」

そう呼ばれた坂田が一瞬止まった

「すいません」

次に続いた清浄しやうじやうの言葉に坂田が目を大きく見開く

「な…」

坂田がぎゅっと拳を握った

「柴田として過ごした時間…大事なことに気づいた時間でした…」

本間を片手に抱き空いている方の腕を振り下ろすと袖口から巻物が
出てきた

「坂田組に恥じないよう…けじめをつけさせてもらいます」

清浄しやうじやうが巻物の紐を解いた

清浄しやうじやうが紐解いた巻物が一枚から二枚、二枚から三枚…合計12枚の
細長い紙となり清浄しやうじやうのまわりに泳ぐ

そして緊那羅きんならは無言の表情でただ清浄を見据えていた

「やめろよ…なあ…これアレだろ? ダーツの旅とかなんかそんな
テレビの企画なんだよな? そうだろ?」

半分震えた声で坂田が笑顔を作って言った

「カメラどこだ? カメラッ…」

そういつて坂田が清浄しやうじやうと緊那羅きんならに背中を向けた瞬間

「使役十二支神将」

清浄しやうじやうの声とともに巻き起こった強風と影ができるほどの強い光り
振り返った坂田が見たもの

「いかん！！！」

迦楼羅かるらが叫び両手を前に出すと続いて慧光えこうと矜羯羅こんがらも同じように手を前に出した

「動くなよ京助！」

阿修羅あしゆらがそう言い残し駆け出した

「あなた達も動かないでください！！！」

乾闥婆くわんた（けんだ）っぱ9が中島と南の前に立った

「…っち…」

「ちよ…やだッ！！ はなし…！！！！」

再び制多迦せいたかに抱えられた阿部が腕を振り上げた

「…となしくして…怪我しちゃうから…ね？」

「ッ…！！！」

耳元で制多迦せいたかが言う和阿部が赤くなって腕をゆっくり降ろした

「…りがと…いいこだね」

制多迦せいたかがへうっと笑って阿部の頭を撫でた

「…タカちゃん…阿部ちゃんも悠も同じ扱いだあ…；；；」

それを見て南が突っ込んだ

帰ったら…

帰ったらね

母さんがスイカ切ってくれるって

でもさ

俺本当はメロンの方が好きなんだ

「しば…たあ— — — — —
— — — — — ツ！！！！」
坂田の悲鳴にも似た声が響いた

『お前俺が組継がないって言ったらどうすんだ？』

『継がないんですか？』

『継がないって言ったらってんだろ； もしだよもし； …どっか行くのか？』

『そう…ですね…どうしようかなあ…』

『…お前は…；』

『俺帰るトコ…あるにはあるんですけど帰りたくないんですよね』

『…家族は？ 母さんと…』

『いますよ？ 俺の家族は坂田組の皆です』

『…なんだソレ』

『帰りたいと思うところは今のところ俺にとっては坂田組なんですよ若がいて組長や姐さん…ニヤロメもみんなもいますからね』

緊那羅きんならの背に見える羽根が大きく開き羽ばたくと緊那羅きんならの体を空へと運ぶ

その緊那羅きんならの体を追うように清浄しょうじょうから放たれた十二の光りが緊那羅きんなら目掛けてぶつかっていく

「柴田！ やめろよ！！ 緊那羅きんならにあた…」

「メガネ！！」

駆け出そうとした坂田の腕を阿修羅あしゅらがつかんだ

「はなせよ！！ はなせてんだろッ！！」

「お前さんがいってどうなるっちゅうんだ！！ ただ怪我するだけやんきに！！」

「怪我するんだろ！？ あの技って…だったら柴田だって怪我するじゃんか！！！」 緊那羅きんならだってそうじゃんかよッ！！！」

坂田が怒鳴り散らす

「メガネそ…」

「柴田はッ！！ 俺の家族なんだッ！！！」 緊那羅きんならは俺の友達で！！ 友達や家族を守りたいと思って何が悪い！！！」

右の鼻の穴から少し鼻水を覗かせながら怒鳴った坂田に清浄しょうじょうが目を向けた

くいくいと服を引張られて京助が少し視線を下に向ける

「京助は？」

表情変わらないお面の鳥俱婆迦うぐばかが見上げ聞く

「京助は守りたくないの？ 緊那羅きんならを」

「へ…？」

聞かれた京助が疑問形の返事を返した

「おいちゃんたぶんだけど緊那羅きんなら…混乱してるんだと思ういっぱいいいいなんだと思う…自分が誰なのかわからないんだと思う」

京助の服を握る鳥俱婆迦うぐばかの手に力が入った

「操って人と緊那羅きんならとが一緒になっちゃって緊那羅きんならが困ってる気がするんだ…京助…京助が操って人をどう思っていたのかおいちゃん

「：わからないけど：：けど：京助は緊那羅きんならが好きでしょ？」
鳥俱婆迦うぐばかの言葉に京助が自分の手をぎゅっと握り締めた
「：俺は：」

変な服装でいきなり現れていきなり家族になった
俺を守るが口癖のようになっていて
気付けば隣で笑ってて

歌が上手くて
結構天然入ってて

『私は京助の全部を守りたいんだっちゃ』

「俺は：アイツみたいに変な力とかつかえねえし：それに：」
「守りたくないの？」

ボソボソといった京助に鳥俱婆迦うぐばかが突っ込んだ
「まも：りたいたい：とは思うけど：俺：」

「なら守れるよ」

躊躇いながら言った京助に今度は鳥俱婆迦うぐばかがさらっと返した

「思いがあるなら守れるとおいちゃんは思う。あとそんなに深く考
えてる京助気持ち悪くておいちゃんは嫌だ」

「オイオイオイ；」

最後に余計な一言を付け加えた鳥俱婆迦うぐばかに京助が口の端をあげた

「あれって：」

緊那羅きんならに向けて清浄が放った光りがだんだんと形を作っていくのを
見て南がそれを指差した

「：あれが牛：であっちは戌：十二支？」

中島も光りを見て言う

「そうです十二支：清浄しょうじょうの使役です」

乾闥婆けんたっぱが言った

「清浄しよつじようは竜と対をはる使役の使い手…」

「え！？； 何！？ じゃあラムちゃんやばくね？；」

乾闥婆けんだつばの言葉に南が突っ込む

「…僕らの知っている【緊那羅きんなら】なら確実に…でも今の【緊那羅きんなら】

は…緊那羅きんならであって緊那羅きんならではないですから…僕にも…どうなるのかわかりません…」

乾闥婆けんだつばが顔を顰めた

緊那羅きんならの背中の羽根がゆっくりと折れ緊那羅きんならを覆い隠すようになるとそれが一気に開き強風が巻き起こった

「うおおおッ！！；；；」

「きゃあッ！！；」

「ッ…！！；」

その強風で十二支の光りの動きが鈍くなると清浄しよつじようが唇を噛んだ

「…竜の力…か」

清浄しよつじようはボソッと呟くとフツと笑い腕に抱えた本間を見、そのあと阿あ修羅を見たと本間を抱く腕に力を込めた

「…ちよ…ま…！！；」

阿修羅あしゆらが駆け出すと同時に本間の体が宙に放り出される

「香奈ああ——————————————ッ！！」

！！」

制多迦せいたかに抱えられた阿部が悲鳴に近い声をあげた

「本間ちゃ…！！！！；」

阿部に続いて声を上げそうになった3馬鹿が声を止めたのは阿修羅あしゆらが見事に本間の体を受け止めたのを見届けたからで

「せ…せええーふ；」

つま先立ち中腰で本間を受け止めた阿修羅あしゆらがつま先をプルプルさせたままで言う

「…京助」

[illegible]

「いかん!!! ;
: つだあッ!!! ;」

「迦楼羅」
かるら

「完全なるギャグキャラだな迦楼羅」かるら

「それよりそんなことより——————！！！！」

「柴田……ッ！！」

息を切らせて半ベソはいっているような顔で坂田が清浄しやうじやうを見た

からかう様に清浄が苦笑いで言う
しょうじょう

俯いて首を振りながら言う坂田に清浄しやうじやうが歩み寄って自分の服の裾で

そして上を向かせるとフガフガ言う坂田を抑えて鼻水を拭く

「…柴田なんだろう？」

「清浄！！」

1697

見据える空の緊那羅は瞬きもせず

「――――」

ぬくもりを感じた瞬間ぬくもり越しに感じた衝撃
広がった光とずり落ちていく眼鏡

「…若…」

眼鏡がずり落ちたせいで多少ぼやける視界
耳元で吐息まじりに聞こえた聞きなれた声

「俺なんかを家族だって…言ってくれたこと嬉しかった…」

「…かったって…かったってなんで過去形なんだよ…」

清浄の背中に回した手に感じたあたたかなでも感触の悪い液体の色
は赤かった

「ははは…そういえば…そう…ですね…なんで過去形なんだろう…」
ヒューっという息が清浄の声とともに吐き出される

「嬉しいだろ…かったって…かったって言うな…」

「だっば!!」

阿修羅の声が響いた

「…若…ありが…――――」

「…ありが…なんだよ…」

「どいてください!!」

乾闥婆が坂田から清浄を引っぺがし小瓶の口を清浄の口に突っ込んだ

「…坂田!!」

南と中島が坂田に駆け寄った

坂田は自分の両手を見たまま動かない

「…だ…大丈夫だッ!!」

そんな坂田を南ががばっと抱きしめると中島も同じように坂田を南
ごと抱きしめる

「…緊那羅…いや…お前は緊那羅…なのか? それとも…」

迦楼羅が緊那羅を見上げ問うと緊那羅がゆっくりと地面に降り立ち

迦楼羅^{かるら}を見据える

「…お前は…」

「ストップ」

何か言おうとした迦楼羅^{かるら}の肩に手が置かれグイと後ろに引張る

「…京助…お前…」

驚いた顔で見上げる迦楼羅^{かるら}に京助が口の端を上げた笑顔を返した

京助が一步足を進める

ジャリっという音がした

無言のまま迦楼羅^{かるら}が一步足を下げた

【緊那羅^{きんなら}】は無表情のままだった

「回復が遅い…どうして…」

乾闥婆^{けんたつば}がなかなか止まらない清浄^{しやうじやう}の赤い液体を見て表情を曇らせた

「大丈夫だよな？ …な？」

中島が乾闥婆^{けんたつば}に聞く

「清浄^{しやうじやう}といえば…向こうでも中の上階級…ならばそれ相応の宝珠を
持っているはずなのにこの回復の遅さ…」

中島のといには耳かさずというカンジに乾闥婆^{けんたつば}がブツブツと何かを
呟く

その間も坂田は自分の両手を見ていた

赤い液体がついた両手

中島がそんな坂田に気付きその両手を自分の両手で掴み握らせる

「大丈夫…大丈夫だからな…落ち着けよ…大丈夫」

南が呪文のように繰り返しながら坂田の背中を抱きしめる

「なあ…宝珠と…傷の治りって関係してんのか？」

中島が聞く

「…ソーマは宝珠の力を借りて回復する薬です…宝珠に選ばれたもの
の以外にはただの苦い液体…宝珠に選ばれたものだけがソーマで回
復できるんですが…おかしい…！！ …まさか…あの時…扉を開
けたの…は…」

乾闥婆けんたつばが何か思い出したのか大きな目を更に大きくして清浄しやうじやうを見た
「貴方きんたつば：だったんですね：宝珠しょうじゆを使ってあの時扉を開けたのは：」
乾闥婆の言葉に清浄しやうじやうが口だけで笑った

ゆつくりと京助が【緊那羅きんなら】に向かつて足を進める

【緊那羅きんなら】は動かない
背中であつた半透明の羽根はいつしか消えていて緑の飾りが微かな
風にふわりと揺れていた

「：忘れててごめんな」

京助の第一声

「思い出した：気がする」

そして第二声

「怒ってるよな：守ってくれたのに守られた本人まで忘れてた：んだから：」

矜羯羅こんがらと慧光えいこうが腕を下ろし【緊那羅きんなら】に歩み寄る京助を見る

「謝えって許してもらえとか：そりゃちょっとは思ってるかも知れ
ねえけど：そう調子よくいかねえっても思ってる：し」

後三步でというところで京助が足を止めた

「俺：さ今年で14になる：んだ同年：いやいつこ下？ まああ
んまかわらねえけど：14：つてもっと大人に見えて：たんだよな」
無表情の【緊那羅きんなら】がたぶん京助を見ている

「だから：かなり我儘とか：言ってた：気がしなくもねえんだけど
：けど：け：ど：」

京助が言葉に詰まった

「：ありが：とうの：言葉照れくさくて：言った事ない気がするん
だよ：：な」

【緊那羅きんなら】がその言葉にゆつくりと目を伏せた

「そしてごめん：俺：今は名前呼べない：俺にとってソイツは：」

「京助：」

【緊那羅^{きんなら}】の唇が確かにそう動き音を發した

自分と同じくらいの大きさの手で撫でられている頭に京助が顔を上げると【三步先^{さんぽさき}】にいた【緊那羅^{きんなら}】がすぐ側にいた

「大きくなつたな…もう…コケて怪我しても自分で絆創膏…貼れるな…?」

自分より若干小さな背丈の【緊那羅^{きんなら}】は目を細めて笑っていた

「み…」

「違うだろ? …俺はもういないんだ…お前にとってこの体はもう俺じゃないんだろう?」

ワシワシと思い切り頭を撫で回しながら【緊那羅^{きんなら}】が苦笑いで京助が発しようとした言葉を止めた

「…呼んでやんな…名前」

「…っ…」

グシャグシャになった京助の頭を仕上げとばかりに【緊那羅^{きんなら}】がポンポンと軽く叩いて目を細めた

「…男は泣かないもんだぞ…? …ブツサイク」

濡れた京助の頬をみよーんと左右に引張って【緊那羅^{きんなら}】が笑う

「ごめ…ごめん…ごめ…ん…ッ…」

「うつわ; マジでブツサイク;」

引張られたままで泣く京助を見て【緊那羅^{きんなら}】が苦笑いを浮かべそのまま京助を抱きしめた

「俺が聞きたいのは…ごめんじゃないぞ京助…さっきの言葉…もう一回聞きたい」

「…っ…ふ…」

【緊那羅^{きんなら}】の肩で京助がぎゅっと目を閉じ、そして深く息を吐き「…ありがとう…」

鼻にかかった声で綴った五文字の言の葉

「どういたしまして」

前の時のように強風は起きなかった

ただ初夏の夕暮れの風が何事もなかったかのように庭や御神木の葉を揺らして意識がない【緊那羅^{きんなら}】の体を強く抱きしめたまま小さな子供のように泣く京助の声を空へと運んでいった

「少し休んだらどうやんきに…二人とも」

「…慧光^{えいこう}は休んでくださいあとは僕が」

「乾闥婆^{けんたつば}こそ休むナリ…私はまだ大丈夫ナリよ」

阿修羅^{あしゅら}が壁に寄りかかった体勢で部屋の中の二人に言うところ返ってきた

「…二人とも休みなよ…」

乾闥婆^{けんたつば}と慧光^{えいこう}の間を割って矜羯羅^{こんがら}が座り向けた視線の先には横たわる清浄^{しょうじょう}…柴田

「ちよ…割り込まないでください」

「矜羯羅様^{こんがら}…」

矜羯羅^{こんがら}が翳した手から溢れた優しい光りが柴田を照らす

「…二人とも」

阿修羅^{あしゅら}が言う乾闥婆^{けんたつば}が溜息をつき慧光はチラリと矜羯羅^{こんがら}を見た後立ち上がり阿修羅^{あしゅら}とともに部屋を去った

「…矜羯羅様^{こんがら}…」

柴田が小さな声を出した

「…止めてください…」

そして矜羯羅^{こんがら}の腕を掴んだ

「俺には…こうしてもらう理由がない…」

「君にはなくても君を望む人にはあるんだよ…」

矜羯羅^{こんがら}がピシヤリと言いきった

「望む人なんか…ははは…いませんよ…むしろ俺は憎まれて…」

「若とかよんでたね…」

柴田の動きが止まった

そしてそのまましばらくの沈黙

「…矜羯羅様…」

「何？」

「…若は…意地っ張りなんです」

「そう…」

「でも…優しいんですよ…」

「…ふうん…」

そしてまた沈黙

「…俺…もつと早く若と会えてたら…」

「そうしたら緊那羅きんならはここにはいなかったんだね」

矜羯羅こんがらの声が静かに響いた

「…どちらがよかったのか…誰が悪かったのか…追求するとキリがない…京助がよく言う言葉」

そう言つて柴田に向けた矜羯羅こんがらの顔は微笑んでいた

「…過去に…君がそうしていなければ【今】はなかったんだよ…僕はこの【今】を後悔してはいない…【今】になるには過去がなければいけない…」

矜羯羅こんがらがゆっくり俯き目を伏せた

「【今】が好きだからみんな生きてるんじゃない？ その【今】を作ったのは【過去】にいるもの全て…誰一人何一つかけてたら【今】は存在しなかった…過ちも後悔も全部含めて…【今】の材料だったんだよ…」

「…そんな…モンですか…ね…」

「…そんなモンなんだよ」

「…そうですか…」

片手で顔の上半分を覆った柴田の口元が微笑んだ

【笑】の文字がぼんやりと見えはじめた

「おきた？」

聞こえた声に自分が布団の中にいるということに気付いた

「開かずの間だよ」

一言そういい残して鳥俱婆迦うぐばかがパタパタと駆けていった

体にかけられていた薄手のタオルケットから抜け出し立ち上がる
一步、そして二歩交互に足が動く

廊下に出ると小さく響いた風鈴の音

暗い廊下に差し込む月明かり

ちよつと鳴く廊下を歩く

辿り着いた外れの部屋の前で足が止まった

少し開いていた戸口から月明かりに伸ばされた誰かの影が見える

取っ手に手をかけたのはいいがあげようか迷う手をややしばらく見
つめ少しだけ戸を動かしてみた

ガタッと小さく戸が音を立てた

伸びた影を踏んでその影の本体が腰掛ける窓枠の下に腰を下ろす

長い長い沈黙

まるで初対面

いや初対面の時は確か…

『誰だお前…』

緑色鮮やかな髪飾りを靡かせ立っていた

『…栄野…京助』

呼ばれた名前

『はい?』

驚いて上ずった返事を返した

それから…校内追いかけて…宙に舞って床に落ちたエビフライ…

そして…そして…

「…京助?」

その時よりどこことなく優しく親しくなった声で同じように呼ばれた
名前

ハッとして呼ばれたほうに顔を向けると…泣きそうに下がった眉と不安一杯に見上げる顔

胸が締め付けられるという感覚はこんな時に使っていいんだろうか切ないとも違う苦しいとも違う楽しいとも悲しいとも嬉しいとも…自分が知っている感情のどれにも当てはまらないこの気持ちは一体なんなのか

「あの…わ…」

口早に言葉を綴ろうとして途中で止めた

ゆっくりと顔を逸らし俯きそしてまた沈黙

鳥俱婆迦^{うぐはか}の言葉がふと頭をよぎった

『自分が誰なのかわからないんだと思う』

それに続いて…よぎった言葉

『…呼んでやんな…名前』

頭ではわかってる

コイツが誰なのか

名前も知ってる

自分が前に夢(?)の中真っ白い空間で道を見失った時導いてくれたのはコイツの歌

友達巻き込んで自分自身が嫌になって泣いた時側にいてくれたのもコイツ

気付けば隣にいた側にいたいてくれた

懐かしく思えたのは昔の記憶が少しあったから?

でもそうじゃないような気もする

【いてくれた】のはコイツなんだ

誰でもなく…いてくれたのはコイツ

「緊那羅^{きんなら}」

驚いた表情が向けられた

「…歌え」

「…は？」

「いいから！歌え」

不思議なことに名前を呼んだだけで後から言葉が自然と続いた

「きよ…うすけ…あの…私…」

「う た え」

何か言おうとしてる素振りの緊那羅^{きんなら}に強く言う

「歌え…って…歌…」

気迫に負けた緊那羅^{きんなら}がゴニョゴニョ口ごもっている正面に京助がしやがむ

「聞きてえんだ【緊那羅^{きんなら}】の歌」

京助が口の端をあげて笑うと緊那羅^{きんなら}の眉が下がった

「っ…ありがとう…」

俯いて言った緊那羅^{きんなら}の頭を京助が軽く数回ポンポンと叩いた

「結局サボっちゃったねえ…；」

南が頭をかきながらチラリと横目でサボリーズを見る

「こんな状態でいけんっの；　しゃーねーじゃん…後からウニにする言い訳考えようぜ？」

中島が言う

座布団を枕にまだ目を覚まさない本間

そのすぐ側に座る阿部は俯いたまま

本間と阿部から対面側の壁にもたれかかる坂田の頭には顔を隠すためなのか大きめのタオルが掛けられていた

「…しけってるうー；　北海道は梅雨ないのでここだけ梅雨ー；」
南が言いながら溜息をついた

「…かた」

「…なんだよ」

ゴン

「…いてえよ」

【ゴン】という音に南と中島が振り向くと制多迦せいたかが坂田に頭突きを
している様が目に入ってきた

「…めんね」

額と額をつけたまま制多迦せいたかが小さく謝りの言葉を言った

「なんで…お前が謝るんだよ…」

「…ようじよう…柴田だっけ？ 怪我したの怒ってるんでしょ？」

だからごめん」

制多迦せいたかがヘラリ笑顔で言う

「だから…なんでそれをお前が謝んだよ…怪我させたのはき…」

「…とを辿れば…操さんならを緊那羅きんらにした清浄しょうじようが悪くて…清浄しょうじようをそうさせた時がわるくて…だから僕もごめん」

「タカちゃん…支離死滅の言葉だけどなんとなーく…俺理解できた」

坂田と制多迦せいたかの側に来た南がしゃがんで言った

「俺も…坂田は？」

同じく中島もしゃがんで坂田に聞く

「…わかつてる…緊那羅きんらが悪くないっての…でも…」

坂田が今は綺麗になった自分の両掌を見て言葉を詰まらせた

「でも俺…どうやって緊那羅きんらと話せばいいのか…って」

「何格好つけてんだよ」

言った坂田に中島が突っ込んだ

「そうそう【坂田】でいいじゃん」

南がそう言って笑う

「…かたは【坂田】だからね」

制多迦せいたかもヘラリと笑ってその後坂田の頭からタオルを引きずり取った

【第十二回・弐】ハリスのハリセン（前書き）

あの【出来事】から数日たったある夏の日に

【第十二回・弐】ハリスのハリセン

「ただいまンゴスチン――――！！！」

片手に買い物袋、もう片手には悠助の手を引いた京助が玄関の引き戸を開けた

「おかえりだっちゃ」

奥から京助の声を聞いて走ってきた緊那羅きんならが京助から買い物袋を受け取った

「ホラ、悠； いい加減手エ放せ； あっちいんだからよーお子様体温：あと慧喜のガンツケが痛い痛い；」

いつまでも京助の手を離さない悠助に京助が言いながら悠助の反対の手を握りながら京助に向かってジェラシーオーラを目から放射している慧喜えきを見る

「やだ」

悠助がぷーっと膨れながら更に京助の手を握ると京助が溜息をつき緊那羅きんならが苦笑いをした

夏休みに入って一週間と少し

それぞれ家族旅行やら何だかんだでここしばらく3馬鹿とも会ってはいない

宿題はお約束どおり一切手をつけていなく今だ通学鞆の中

夏の妖精向日葵のヒマ子さんは私の季節到来と北海道の短い夏を照らす太陽をめい一杯浴びて超元氣

コマとイヌは暑さに弱いらしく和室の隅っこで伸びている

矜羯羅こんがらと制多迦せいたかはちみつこ童の世話係りにいつの間にか落ち着いていて

慧光えこうと烏俱婆迦うぐはかが懸命にその手伝いをしている
栄野家の今年の夏

仏壇には綺麗に畳んだ【柴野ストア】粗品のタオルが置かれている

「最近悠助京助にべったりだっちゃね：何かあったんだっちゃ？」

緊那羅きんならが廊下を歩きながらまだ京助の手を離さない悠助に聞いた

「：何もないもん」

悠助がぼそつと答えると緊那羅きんならと京助が顔を見合わせて首をかしげた

「風呂も寝るのもついてきやがって：：」

京助が溜息をつく

「昨日も風呂大変だったしよお；」

昨日の風呂は京助と一緒に入ると言った悠助に慧喜えきも一緒に入ると

言い出して一悶着あったことを思い出し京助がチラッと慧喜えきを見た

慧喜えきはむすつとして頬を膨らませている

「：：；」

慧喜えきから目をそらして京助が肩を落とした

「はははは：」

緊那羅きんならが場を繋ぐためか声を出してわざとらしく笑う

「：あ！　そうそう」

少しして京助が何かを思い出して緊那羅きんならを振り返った

「買い物いったら外人いたんよ外人」

「がいじん？」

「あー：んとヨソの国の人」

きよんとした顔で聞き返してきた緊那羅きんならに京助が説明した

「日本人じゃねえっていう：アメリカとかの」

台所で冷蔵庫からパックのアクリアスを取り出しストローを刺そう

として片手を使おうとした京助がまだ悠助に握られているのに気付

いてアクリアスをテーブルに置いた

「悠：；いい加減放せよ；何もできん；」

京助が悠助の頭に手を置いた

「やだ」

答えはさっきと一緒だった

そしてやっぱり京助が溜息きんならをついて緊那羅が買い物袋を畳みながら

苦笑いをした

「悠：暑い；」

夏休み中間辺り、北海道にも夏らしき夏がやってきて栄野家の窓という窓が全開になった午前11時ちよいすぎ

少しでも暑さから逃れようと風通しのいい和室の日陰にいる京助の背中にはべったりとくっついたままの悠助

「義兄様ずーるーいー！！！」

「んなこといわれたってなあッ！！！！；」

京助の首にぶら下がっている悠助をみて慧喜えきが怒鳴ると京助も負けじと怒鳴り返した

「：夏休みとか言うのに入ってから悠助はずっとそんなかんじだね
：」

前髪をアメピンで左右に別けた矜羯羅こんがらがチミッコ竜を二人抱えて和室に入ってきた

「：やっぱりここが一番涼しいね：」

そういつてチミッコ竜を床に降ろすとひとりがよたよたと歩き出した

「おおおお！！！！； もう歩くのかコイツ！！！！；」

ソレをみて京助が声を上げる

「ぷ」

よたよた歩いてきた一人のちみっこ竜が京助の足に捕まってヨダレだらけの笑顔を京助に向けた

「僕たちの力を少しずつ与えているからね：」

一方床に座り込んだもうひとりのチミッコ竜の頭を撫でながら矜羯羅こんがらが言った

「は？； 力与えて：って：」

「来月辺りにはたぶん話せるようになると思うよ：」

「いや：ってかいのかソレ；」

チミッコ竜を抱き上げふっと笑った矜羯羅こんがらに京助が突っ込んだ

「力は作れるんだよ：食べ物から休息から：想いから：ただその変

換量が違うだけ…宝珠によってね…竜の宝珠は後ひとつ…いくら竜でもひとつの宝珠じゃ満足に力に変換できないから僕らが手伝っているだけ…制多迦せいたかを助けてくれたからね」

矜羯羅こんがらの説明を京助が黙って聞く

「作られた力を蓄えるのも宝珠…宝珠がなければ僕らも京助達と何も変わらないんだよ…全ては宝珠が…あるからこそなんだ」

「…ふうん…」

京助が足元のチミツコ竜を抱き上げた

ヨダレだらけの満面の笑みに京助が口の端を上げて苦笑いをした

「ごめんくださいーい」

玄関先から高い声で誰かいないかたずねる言葉が聞こえた

「…阿部…?」

聞き覚えのあったその声に京助が一步足を進めようとする

「はーいっ」

一足早く緊那羅きんならの声が玄関に向かった

パタパタと廊下を走る音

「京助お客さん」

「…お前…顔蒸れてねえのか?」

縁側にひよっこり現れた鳥俱婆迦うぐぼかをみて京助が突っ込む

「暑いよ? でも面白い」

両サイドが長い髪を高いところで結んでまるでツイントールのような髪形になった鳥俱婆迦うぐぼかが縁側に腰掛ける

「ここはくるくる変わるから面白いんだおいちゃんここ好き」

鳥俱婆迦うぐぼかが言う

「昨日は雨が降ってたのに今日はすごく暑くてさっきは風が吹いてたのに今は吹いてなくて」

「んなの当たり前…」

「じゃなかったんだよ…【空】では」

鳥俱婆迦うぐぼかに突っ込むとした京助の言葉に矜羯羅こんがらが突っ込んだ

「いつも同じ」

鳥俱婆迦うぐぼかが後ろに倒れながら言う

「だからおいちゃんここ好きだ：暑いけど」

「：そりゃな； お面は蒸れるだろう；」

最後にちよつと付け足した鳥俱婆迦うぐぼかの言葉に京助が言った

「あ：べさん：」

「あ：ラムちゃん：」

気まずそうな空気が玄関に流れた

「：き：」

「きよう：」

同時に口を開いて同時に噤む

「あ：あのね：これ：お供え」

「え？」

阿部が紙袋を差し出した

紙袋には【のがみ】という店の名前が書かれている

「：【操】ちゃんに」

阿部が小さく言うきんならと緊那羅が止まった

「忘れててごめんねっていうのと：思い出したよっていうの：伝えて：」

「阿部さん：上がって」

「え？ ちょ：！：！」

緊那羅きんならが阿部の手を掴んで引張ると履いていたミュールが脱げた

「ラムちゃん； 待ってって；」

阿部の声にも振り返らず緊那羅きんならが歩く

「あ：阿部：」

「あ、京助；」

和室の前を通ると京助が見え阿部が京助を呼んだ

「どこー：って：どこ行くんだ？； あいつら：」

一瞬で見えなくなった阿部と緊那羅きんならの姿に京助が呟いた

開けっ放しの戸からほのかに線香の匂い

悠助を背中に背負った京助の鼻にその香が届いた

「きん：」

緊那羅きんならを呼びながらその部屋の中に入ろうとした京助が言葉を止めた
綺麗に畳まれたタオルに向かって手を合わせる阿部きんならと緊那羅
何故か動けなくなった京助はただ黙ってその光景を見ていた

阿部きんならがチラリと緊那羅きんならを見た

緊那羅きんならはまだ目を瞑ったまま手を合わせている

しばらく緊那羅きんならの横顔を見ていた阿部が再び目を閉じて手を合わせ
ると今度は緊那羅きんならがチラッと阿部を見る

そしてまた手を合わせ始めた

「：何してんだお前等；」

数回そんなことを繰り返していた二人に除いていた京助が呆れたよ
うに突っ込んだ

「きよ：：；」

阿部きんならと緊那羅きんならが同時に口を開きそして同時に口をつむいだ

「シンクロしてるシンクロしてる；」

そんな様子を見て京助がまた突っ込む

「お：お菓子食べよ！； お菓子ッ！！；」

阿部がお供えとは別に持ってきた包みをゴソゴソと取り出す

「あ、じゃあ私は飲み物：ッわ；」

阿部の行動につられたのか緊那羅きんならがずっと立ち上がった：がいきな
り立ち上がったのでよろける

「ラ：！：！；」

「：つぶねえなあお前；」

仏壇の方に倒れそうになった緊那羅きんならの手を京助が引張ると阿部の頬
がぴくっと引きつったように見えた次の瞬間

ヒュン

ゴッ：

「ハイ！！ お菓子ッ！！！！」

阿部の投げたお菓子の箱が京助の頭に見事命中した

「：なんですかコレは阿部さん；」

ゆっくりと自分の頭にのっかっていたお菓子の箱を両手で取り京助が阿部を見る

「お菓子ッ！！ アタシはラムちゃんの手伝うからッ！！」

勢いよく立ち上がった阿部が京助が掴んでいた緊那羅きんならの手を勢いよく掴むと大股で和室を出て行く

「：鈍いんだやな」

「今の音からしてきつとくつきーなんだやな」

空けていた和室の窓からコマイヌが顔を覗かせて言う

「：わけわからん；」

和室に入ってきて足元でピョンピョンはねてお菓子を取ろうとしているコマイヌに箱を取られないよう箱を頭上に持ち上げた京助が空いている手で頭をさすりながら廊下の方を見て口の端をあげた

「ちよ：あべさ：ん？；」

阿部に手を引張られて阿部と同じように大股で歩く緊那羅きんならが阿部を呼ぶ

「何ッ！！」

止まった阿部が声を上げる

「：な：んでもないっちゃ；」

その気迫に負けて緊那羅きんならが苦笑いを返した

「いいな：」

「え？」

緊那羅きんならの手を離しながら阿部がボソツと呟いた

「なんでもないっ； ね、何人分コップ用意するの？」

きよとんとしている緊那羅きんならに阿部が笑顔で聞く

「え…?； えっと…えーと…京助悠助…ゼンゴに…阿部さん…矜んがら羯羅に鳥俱婆迦に…それから…」

「多めに用意しよっか；」

指折り思い出して名前を挙げていく緊那羅きんならに時間の無駄だと思ったのか阿部がさくつと突っ込む

「そうだっちゃね； …きつと三人くらい…増えると思うっちゃ」
緊那羅きんならが笑った

「そういえば…」

口をつけたコップから口を離れた阿部が二枚まとめて口にクッキーを突っ込んでいる京助を見た

「新しい英語の外国人教師来るって話聞いた？」

「はいほふひんひようひ？」

口をモゴモゴさせながら京助が聞く

「そうグリーンさんが二週間くらい母国に帰るからって代わりの人
が来るんだって」

「ほー…全然知らなかったわ； ここんとこってか夏休みはいつ
から誰ともあってなかったし…」

麦茶を一気飲みして京助が一息つく

「…悠…邪魔くさい；」

京助の背中にべったりくっついてる悠助の頭に京助が手を置いた
「悠…どうしたの？」

「夏休みはいつてからずっとその調子なんだっちゃ；」

阿部が実はさっきから気になってた的視線で誰にでもない誰かに
聞くと緊那羅きんならがそれに答えた

「…なんでもないもん」

悠助がぷーと膨れて京助の背中に顔を押し付けた
そしてその後ろで慧喜えきも顔を膨らませて京助を睨む

「…いや； 俺が悪いのか?；」

その慧喜えきの視線に京助が顔をそらしてまわりに聞く

「…さあね」

矜羯羅こんがらがクッキーを齧りながらそっけない返事をした

「わざわざ…あんがとな」

玄関先で京助が阿部に言った

「…あ…あのねっ」

少し間を開けて阿部が京助を振り返った

「あ…あのね…アタシ…」

「…途中まで送ってく」

京助がサンダルに足を入れた

山鳩が煩く鳴きそれに対抗するかのように蝉も鳴く

北海道には珍しい夏日なのか向こうの景色が少しぼやけて見える

キヤーキヤーと海で誰かが遊ぶ声と帰省ラッシュかそれとも海を求めてなのかいつもより多く通る車の音

そんな騒がしい周りと正反対に黙ったまま歩く二人

「…京助」

阿部が口を開くと京助が足を止めた

「…本間…どうしてる？」

「え…あ…なんともないよ？ 元氣元氣！ うん…元氣だよ？ 昨日もあつたし…」

「そっか…」

会話が途切れた

「…京助は…強いね」

阿部が静かに言った

「アタシだったら…逃げ出してるよ…こんなこと…だって…だって現実じゃ考えられないことなんだよ…？ なのにな…」

「現実なんだよ」

阿部の言葉を京助が止めた

「考えられなくても現実なんだ…現実以外のなんでもない」

いつも通りの京助がどこかいつもとは違うカンジで言う和阿部がき

ゆつと唇を噛んだ

「俺だって逃げたいさ」

ハハッと笑った京助が歩き出す

「…でもさ…現実からは逃げられないだろ」

二人の横を高速貨物トラックが通り過ぎ風が起こる

「それに…」

「…それに？」

京助が再び足を止めた

「【今】逃げ出したくても【これから】は逃げ出したくねえくらいの現実があるかもしれないじゃん…【今】現実から逃げたら【これから】の現実はこねえだろ？ だったら俺は逃げたくても逃げねえ」

「…わけわかんない；」

「…スマン； 言ってて俺もよくわからんことになってた；」
考える阿部に京助がハッハと笑いながら軽く謝った

「ま…これから楽しくなるかもしれないから…ってことかウム」

京助が頷き納得したのか歩き出した

「…なにそれ；」

苦笑いを浮かべながらも阿部が小走りで京助の隣に並んだ

「ラジオ体操いつてるの？」

阿部が聞くと京助が無言で顔をそらした

「…昔は毎日行ってたのにね」

「昔は昔だろ…； …れ？」

ふと京助が何かを思い出して足を止めた

「…どうしたの？」

数歩先に出ていた阿部が振り返り京助に聞く

「…なんで学校違ったのに俺が昔はラジオ体操毎日行ってたって…
知ってんだお前…」

阿部が固まる

「確かに…一回会ってる…けどよく覚えてンなあ…」

「…そりゃそうよ」

ゆつくりと阿部が京助を向かい合った

「だって…」

「わーか」

「んみゃー…」

ふにっとした感触の桜色の肉球が坂田の頬に触れた

「お土産もっていかないんですか？ 京助君のところに」

顔を上げた坂田を上から覗き込むようにして柴田が笑った

「…お前は…」

「んみー…」

柴田からニャロメを奪って坂田がソファーから立ち上がった

「夏休みはいつてから…京助君だけじゃなく南君や中島君にもあつてないでしょ」

ソファーの背もたれに肘を着いて柴田が言うどむすつとした顔で坂田が柴田を睨んだ

「…どうやって…どうやってどんな顔してあえっつーんだよ…あんなことあって…どうすりゃいいかわかんねえ…の」

「意外と繊細だったんですね若」

俯きながら言った坂田に柴田がハハッと笑いながら言った

「お前は…ッ！！ …お前は…お前…」

「俺は柴田勝美ですよ若…若の前ではね」

柴田が腰を伸ばして立ち上がり坂田の頭に手を置いた

「…でもじょうしよーとかいう…名前なんだろ？ 本当は」

「清浄ですよ… …その名前…若には呼んでほしくないんですけど

ね…言ったでしょう？ 若の前では柴田勝美だって」

「でも！！」

バツと坂田が顔を上げるとその顔は眉の下がり泣きそうな顔になっている

「…お前は…緊那羅きんならにあんな怪我させられて…どんな顔して緊那羅きんならにあうんだ…？」

しばらく間を開けて坂田が小さく聞いた

「こんな顔ですけど」

柴田がにっこり笑った自分の顔を指差した

「ふざけてンのか…？ 自分に怪我させたヤツに笑顔…」

「やだなあ…やられたらやり返すのが男の喧嘩の基本でしょう？」

…緊那羅君きんなら…操君は昔俺がやったことに対してやり返したただですよ」

くしゃくしゃと坂田の髪を撫で回しながら柴田が言う

「でも！！　　すげえ血がでてたんだぞ！？　　それで…」

「俺は殺しました」

柴田の言葉に坂田が止まる

坂田の腕からニャロメがすり抜けてそして柴田の足に頭をこすり付けた

そのニャロメを柴田がゆっくりと抱き上げる

「んにー…」

甘えるようにニャロメが柴田の胸に頭を擦りつけ鳴く

「若は…京助君たちと喧嘩した次の日どうやって会いました？」

「…べつに…普通」

「それでいいんですよ」

柴田の質問に坂田がぶっきらぼうに答えると返ってきた言葉に坂田が柴田を見た

「普通…いつもどおりで会えばいいんですよ」

柴田が笑う

「仲直りの方法っていうのは…あってないもんなんですよ」

「…別に俺は…仲直りとか…」

ぶつぶつ言う坂田の前にずっと差し出された【登別】とかかれた紙袋

「…いってらっしゃい」

にっこりと柴田が微笑んだ

ブー……

夏の太陽の下立ち尽くす二人の横を一台の乗用車が通り過ぎ阿部のスカートが靡いた

「…だって…だってねアタシ…」

握り締めた阿部の手が微かに震えている

京助はただ黙って阿部の言葉を待っている

『だってねアタシ』の言葉から数分が過ぎた

「だってなんだよ」

暑さでイライラしながら京助が阿部に聞く

「アタシ…っ！…！」

「スンマセン」

阿部の声と誰かの声が重なり京助ふりむいた

「…お…おおおお！…？…！」

京助が数歩後ずさって声を上げる

「が…ガイジン…！！；　おい！！　ガイジンだガイジン…！！　ス

ーパーのガイジン…！」

京助が阿部と【ガイジン】を交互に見て言う

「ッ…みりゃわかるわよッ…！！…！」

спанッ…！！

阿部が赤い顔で怒鳴りながら京助の頭を叩いた

ひよこつと茶の間をのぞいた悠助と片づけをしていた緊那羅きんならの目が合った

「悠助？」

緊那羅きんならが声をかける

「…京助は？」

チラッと部屋の中を見た悠助が聞く

「えっと…ここにはいないっちゃけど…」

緊那羅きんならが部屋の中を見て言う

「…うん」

悠助が小さくうなずき廊下をきよきよと見た

「さっき阿部さんを玄関まで送っていったってことはわかってるんだっちゃけど…って悠助?;」

きんなら緊那羅の言葉が終わるか終わらないかというタイミングで悠助が廊下を玄関に向かって走る足音が聞こえた

「…いたい…何があったんだっちゃ…悠助…」

きんなら緊那羅が片付けていたコップの中の氷がカランと音を立てた

「みつつるんてば寂しがり屋さんなんだからもー」

「うるへー;」

笑いながら南が言うと坂田が怒鳴る

そんな二人の横を車が通り過ぎていく

「中島にもだいぶあってねえよな…夏休み始まってから全然俺ら顔あわせてなかったもんなー…」

薄手の半袖パーカーのポケットに手を突っ込んで歩く南が隣を歩く坂田をチラッと見た

「…まあな」

坂田が小さく返すと南がため息をついた

「あのなあ…;」

「…悠…」

何か言おうとした南に対して坂田が石段を駆け下り走っていく小さな後姿の名前を口にした

「悠? あ…悠だねえ…何あわててんだろ?」

南も走っていく後姿を見て言う

「ただ事じゃないよう…なカンジ?」

坂田の肩に南が手を置く

「…いくぞ」

タツと坂田が走り出した

「いっやーん; 待ってー;」

その坂田を南が追いかける

「悠！！」

坂田が呼ぶと悠助が振り向き

「あぶ…ッ！！！！」

南の声とともに悠助の足がもつれた

「わ…」

転ぶのを覚悟したのか悠助が目を瞑る

「あっぶねー」

間一髪坂田が悠助を支えると三人して安堵の息を吐いた

「あ…坂田ありがと…」

悠助が坂田を見上げてお礼を言う

「んや…俺が呼んだからコケたようなモンだし；　…で？　何そんなに急いでるんだ？」

坂田が悠助の頭に手を置きながら聞く

「京助…見なかった？」

悠助が京助の名前を口にする坂田がぴくつとそれに反応した

「…京助がどうかしたの？」

少し遅れて南が聞き返す

「京助…いないの…京助…」

「いない…って…どこいったんだ？　俺ら向こうから来たけど…見なかった…よ、な？」

しよぼくれた悠助を見て坂田がそういいながら南にも目で聞く

「う…ん京助は見えてない…けど」

南が頷きながら言う悠助が向かおうとしていた方向を見た

「じゃあやっぱりこっちなんだ…」

ボソツと言った悠助が坂田の手を掴んで下ろすとまた走り出した

「ちょ…待ってればいいじゃん；　すれ違いになるかも知れねえぞ
ー！！！！？」

走っていく悠助に坂田が叫んだが悠助は止まる気配がない

「…どうする…？」

南が坂田に聞く

「…きまってるじゃん」

坂田が走り出した

「…俺体力ないのに！； もー…；；」

南もため息を吐き坂田に続いた

「どこいくの？」

声をかけられた緊那羅きんならが振り向くとむすっとした顔の慧喜えきが立っていた

「あ…えと…買い物…がてら京助と悠助を探しにいかうか…なーなんて思ってたんだっちゃ；」

あからさまに不機嫌な慧喜えきに緊那羅きんならが苦笑いで答える

「悠助…やっぱり義兄様のあとついていったんだ…」

「…慧喜？」

きゅつと唇を噛んだ慧喜えきが俯く

「最近…悠助俺を見てくれない…ずっと義兄様義兄様…もう俺のこ
と嫌いになったのかな…」

「慧喜…」

俯き小さくいった慧喜えきにかける言葉が見つからないのか緊那羅きんならはた
だ慧喜えきの名前を口にするだけでそれ以上はなにも話せなかった

「…俺も行く」

しばらく沈黙が続いた後 慧喜えきがおもむろに足を進めてサンダルを
履いた

「あ、ちよ…待つつちや慧喜えき！；」

大またで歩き出した慧喜えきの後ろを緊那羅きんならがあわてて追いかけた

「ま…まっ…てええん；」

ゼーゼーとヒューヒューを言葉の間に挟んだ南が坂田のシャツを掴
んだ

「伸びるわ阿呆！！；」

びろーんと約1メートルは伸ばされたシャツを引っ張って坂田が怒

鳴る

「お前小学一年以下の体力ってアカンとおもうぞ俺；」

坂田が南に声をかけるが南はヒューヒューゼーゼー息を発するだけで精一杯らしくその場にへたりと座り込んだ

「：しゃあねえなあ：； お前ここにいろや；」

坂田がため息をついて南に言う

「：や：いじよぶ：；」

「いやだいじよばねえだろ； 話し方が制多迦弁になっちよるし； 手を振って大丈夫と主張する南に坂田が突っ込んだ

「わ：ったしをおいていかな：ゲホッゲホッ！！；」

南が激しくむせる

「アカンだろ； どうせ一本道だし帰りに拾ってやるから！ OK？ いい子だから動くなよ？」

咳き込む南に頭をなでた坂田が結構遠くにいつちゃった悠助を追いかけて駆け出した

「いっやあゝ：ん；」

南がゼーゼー言いながら遠のく坂田の背中に手を伸ばした

ブオー———————————————

排気ガスくさい少し埃っぽい風が吹いた

「あ：阿部； お前に託す！！」

「はっ！？； 何よそれ！！！！；」

京助が阿部の肩をぽんと叩く

「お前塾かよってんだろ； 俺英語アカンしさー日本人だしさー」

「アタシだって日本人よッ！！； アンタ男でしょ！？；」

阿部が怒鳴る

「あのー：；」

「黙っててッ！！；」

二人のやり取りを見ていた外国人の男性がおそろおそろ二人に声を

かけると阿部が怒鳴り返した

「：つええ：；」

それを見た京助がぼそつとつぶやく

「挨拶くらいできるでしょ！？　こんにちはとかすいませんとかッ
！！」

「ハローだろ？；　あとしらねえし；」

「ハローでいいのよハロー！！　ねえ？！」

「ハイ！；」

さつきは黙っててと怒鳴られ今度は同意を求められた外国人男性が
きょうつけをして返事をする

「きょうすけー！！！！」

「悠？；」

いきなりとふつと腰元に抱き疲れた京助がおもわずその名前を呼ぶ
ともうひとつ駆け足の足音が聞こえた

「：坂田：」

紙袋を提げた坂田の姿を見た京助が坂田の名前を口にする

「：坂田？　：あ：坂田：」

阿部も同じく坂田を見た

「何してたの？　京助：」

腰に抱きついたまま京助を見上げ聞いてくる悠助に京助がハツとする

「そうだがいじ：」

京助がたぶん忘れ去られていた外国人男性を振り返った

「がいじ：？　外人さんだー！！！！」

京助の見た方向と一緒に見た悠助が外国人男性を見て指を指した

「こんにちはってハローでいいんだよね？　ハロー？」

悠助が満面の笑みで言う外国人男性もにっこりと笑う

「すごいじゃない悠ー！！　えらいなー」

阿部が悠助をなでた

「それに引き換え：この二人の男どもは：」

悠助の頭をなでながら阿部が京助と坂田をジト目で見る

「なっ：俺とコイツの頭のレベルを一緒にすんなッ！！；」

「そりゃどーいう意味だどーいう！！；」

坂田が反論すると京助もそれに突っ込んだ

「俺だって英語くらいできるわ！！」

「じゃあやってみそ！！ 恥じかけ恥じ！！」

ギャーギャー言い合う坂田と京助をぽかんとしたまま見ていた外国人男性に坂田が近づいた

「じゃあ坂田：【すいません】って英語で言ってみて？」

「まかせろ」

阿部が坂田に言うのと坂田がコホンと咳払いをして外国人男性を見たあと一言

「あーえー：エクスタシー？」

「：は？；」

坂田の言った一言に外国人男性が更にぽかんとする

「：感じてどうするのよ：； 【エクス】しかあってないじゃない

：アンタも馬鹿だわ：；」

阿部がため息をついた

「：スイマセンはエクスキューズミーなんだよ少年」

やたら流暢な爽やかヴォイスで間違いを指摘された坂田とその他三名がその爽やかヴォイスが放たれたと思われる方向を見た

そこにはさっきからいたただけどなんだか今やっと存在を再確認したかなーみたいなのカンジ？ 的外国人の青年

「：しゃべったー：」

悠助がぽかんとした顔のまま言うと同がゆっくり頷いた

「そりゃしゃべるさ； 僕だって：ああ？ 何？ こういうん期待

してた？ ＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

（何かすげえ英語）」

「おおおおおおおおおお！！！！；」

外国人の青年が何か一人で納得した後ペラペラと話し始めたおそらく英語だと思われる言葉に坂田と京助が一歩たじろいて声を上げた

「…すごーい…英語だー」

悠助がきらきらした目で外国人青年を見上げると外国人青年がにっこりと優しい笑みを悠助に向けた

「僕の名前はハリス。ハリス・テレスっちゅーんだけどね…まあ日本語はなせるけどれっきとしたイギリス国籍の25歳」

自らをハリスと名乗った青年が聞かれてもいないのに簡単な自己紹介までしてきたのを京助と坂田そして阿部がただぼかんとしたまま聞いている

「ハリスさん？ 僕栄野悠助ー小学校一年生！ こっちが京助で僕のお兄ちゃんねーこっちが坂田ーそしてねー阿部ちゃんだよー」
一人キャッキャしながら悠助が固まっている中学校二年生三人をハリスに紹介するとハリスがほうほうと頷く
「そうかー…キョウスケ…サカタ…アベチャン…は中学生なんかな？」

「そうだよー！！」
ハリスが悠助に聞くと悠助が即答する

「じゃあ…そうか…僕の教え子になるわけだな」

「へっ！？」
ハッハと笑いながらさりと云ったハリスの言葉に中学生三人組がそろって声を上げた

「僕、英語の臨時教員なんよね」
腰に手を当ててハリスが爽やかに笑った

「…英語の…」

「臨時…」

「職員…」

坂田、京助、阿部がそれぞれ一言ずつ言って【英語の臨時職員】という単語を完成させるとソレに合わせてハリスが頷いた

「…何してんだっちゃん…」

ジーワジーワと低音の蟬が鳴く中、聞き覚えのある声と自分に覆い

かぶさってきた影に南が顔を上げるとそこには緊那羅きんなら

「あつれゝゝ； ラムちゃんヤッホウゝ；」

ヘロケソ笑顔で南がのらりくらりと片手を挙げた

「いや…実は…；」

「うん？ ってちよつ…慧喜えき！…； 待つつちゃ！…；」

「きゃー； ラムちゃんまでワタシをおいていくのねー！…；
白状者ー！…；」

話し始めようとした南の言葉をほんの冒頭だけ聞いた緊那羅きんならが南には目もくれず走っていく慧喜えきの背中を追いかけだすと南も立ち上がった

「待ってー！…；」

南の声が青空に高く響いた

「じゃあ…二学期から来るっての…あなた？」

阿部がハリスに聞く

「そうそう僕のことじゃないかな？ まあ…一ヶ月くらいだけどね」
ハリスが笑いながら答える

「…お前…なんか微妙に話し方に関西なまりあるけど…」

坂田がボソツと言うとハリスが坂田のほうを見た

「よくわかたなー！ 僕大学は関西なんだよねー…その先輩の青木ってのに頼まれてさあ…」

「順ちゃんに？」

ハリスが口にした記憶にある教師の名前に京助が反応した

「そうそう…北海道旅行がてらってことなんだけど…おっ登別いつてきたのかサカタ」

ハリスが坂田の手にしていた紙袋を見て聞く

「はッ！？； あ…ああ…まあ…」

ハッとして自分の手に持っている紙袋とハリスを交互に見た坂田が
どもりながらも頷いた

「ってことは…お土産…キョウスケにでも持っていたのか？ サカ

タ」

【キョウスケに】という言葉で坂田と京助の目が合った

「いいねーお土産をわざわざ届けてくれる友達…うんうん青少年」

ハリスが坂田と京助の肩をたたいた

「中身何？」

悠助が坂田を見上げた

「悠助！！！！」

そして呼ばれて悠助が振り向いた

ガバアッ！！！！

「うわッ；」

「危なッ！！；」

「ひどいよひどいよッ！！！！」

ロケットダッシュで抱きついてきた慧喜えきによろめいた悠助を坂田が支えた

「俺をおいてッ…俺っ…」

「あつついよ…慧喜えき；」

グリグリと慧喜えきが頬を悠助に擦り付ける

「おお：日本にも熱烈な女性がいるんだねー：いいねユウスケ」

ハリスが慧喜えきを見てハッハと笑う

呆れ顔でそれを見ていた坂田がふと顔を上げそして：

「…緊那羅きんなら…」

「あん？」

ボソツと言った坂田に京助が反応して同じく顔を向けると数メートル離れたところに立っていたのは緊那羅きんなら…とヘロケソの南だった

「おー！！ 金髪…地毛？ 染め毛？」

「染め毛ってなんじゃ； 染め毛って；」

緊那羅きんならを見たハリスが言うのと京助がすかさず突っ込む

「んー！！ いいね今のノリ突っ込み！ ！ごうつかっく！！」

「駄目――――！！！」

ハリスがバシバシと京助の背中を叩くのを見た悠助が叫んだ

「…悠?;」

周りが驚きそして同じように驚いていたえき慧喜の腕から悠助が抜け出すと京助の腰にしがみついた

「…なしたん; お前さんはよー;」

むすっとした顔でハリスをにらんだ悠助の頭に京助が手を置いた

「悠助…」

さっきまで悠助を抱きしめていた慧喜の腕が悠助を失ってそのままだらんと下がった

「っ…義兄様の馬鹿――――！！！！！！！！」

「だっ;」

「うわ;」

「俺かよ！！！！;」

泣き叫びながらえき慧喜がきんなら緊那羅と南を押しつけて栄野家方向へと全力で駆けていく

「…南…? 生きてる…っちゃ?;」

尻餅をついたきんなら緊那羅が地面とディープキスをしている南に声をかけると人影が覆いかぶさった

そして

「…ん」

差し出された手

「…さ…」

「はよ掴め」

掴むのを躊躇っていたきんなら緊那羅に坂田がぶっきらぼうに言う

「…う…ん」

差し出されたきんなら緊那羅の手を掴むと坂田がぐいっきんならと緊那羅を引っ張ってたたせる

「ほれ；　いつまでアスファルトとラブシーンしてんだお前も；」

坂田がペシンと小気味いい音をさせて南の尻を叩いた

「あついよいたいよあついよいたいよあついよいたいよ」

「やかましい！！！！；　さっさと立て！！！！；」

顔を上げずにしくしくとすすり泣きながら呪文のように言い出した
南の尻をさらに坂田が叩く

「その辺でやめとかねえと南の尻われんでー；」

腰に悠助を引っ付けたまま京助が南と坂田の漫才に突っ込んだ

「あの…坂田…わた…」

「ハッハッハー————！！！！　いいね——————その
ノリ突っ込み！！！！」

今までこらえていたのかハリスが急に笑い出した

「…ハリス…先生…？；」

阿部が恐る恐る呼ぶ

「アベ、ハリスでいいよハリスで」

そんな阿部の肩をハリスが叩いて言う

「先生ちゅーでも臨時だし短期間だしさ先生つけたら壁できるだろう？　仲良くフレンドリーにOK？」

ハリスが笑いながら一同に言う一同が戸惑いながら頷いた

「いやしかし…お久しだな」

腰に悠助を引っさげたまま京助が南と坂田を見た

「んだねえ…こげに会わなかったの…って本当ねえ気がするねえ…
一匹足らないけど」

南がしみじみ言った後うんうん頷いた

南が言う【一匹】というのはおそらく何も影が薄いがスネ毛は異
様なまでに濃い中島のことだろうとハリス以外の全員が思った

「一匹って？」

案の定ハリスが【一匹】について聞いてくる

「あのねこいつら…京助と南と坂田と…もう一人中島っていうのが
いるの…ハリスより…少し背は低くて…その中島とここに三人

めちやくちや仲がいいんだ」

阿部がハリスに3馬鹿と京助の仲のよさを説明するとハリスがほ
くっと言う顔で頷きながら京助、坂田、南を順に見る

「…で…そっちの金髪…」

ハリスが指差した人物に一斉に視線が向いた

「…え?…」

今まで蚊帳の外にいた緊那羅きんならが少し驚いて一歩たじろく

「…あ…その子は…」

そこまで言った阿部がはたと何かを思っきんならてなのか緊那羅を見たまま
言葉をとめた

それからしばらく何も言い出さない阿部に今度は一同の視線が集中
する

「…阿部…ちゃん?…」

南が阿部の名前を呼ぶ

「おーい…?…」

京助も手をヒラヒラと振ってみるが阿部はただそのまま緊那羅きんならを見
つめる

「…阿部…さん…?…」

一向に自分からそらされない阿部の視線を何とかしようとしてなの
か緊那羅きんならも阿部の名を口にした

ブイー…ン…

ジーワジワジワ…ミーツチョンミーツチョン…

ザー…ン…

沈黙したままの一同の周りでは色々な音が絶え間なくして
夏の日差しが真上から降り注いでいる

「あつつい…」

悠助がぎゅうつと京助の腰にさらに強く抱きついた

「…アベ？」

ポンッとハリスが阿部の肩に手を置くと

「…ラムちゃん…って…」

阿部が何分かぶりに口を開いて言葉を発した

「…緊那羅^{きんなら}？」

その発しられた言葉でまたも緊那羅^{きんなら}に視線が集中する

「…操…」

ブオー———————

三つの言葉

ハリスと悠助以外の全員の時間が止まったように思えた

再びの沈黙の到来にハリスがポリポリと頭を掻いてため息をついた
あと

「ハイッ！！！」

パンっ！！

わざとらしく大きく手をたたいて声を張り上げた
それに驚きハッとしてわれに返った一同がハリスを見る

「はりす…さん？」

悠助がハリスを見上げるとハリスがにっこりと笑って悠助の頭に手を置く

「僕はハリス。君は？」

ハリスが悠助から緊那羅^{きんなら}に今度は笑顔に向けた

「え…わ…私は…緊那羅^{きんなら}…だっちゃ…」

向けられた笑顔に緊那羅^{きんなら}が恐る恐る答えた

「OKキンナラだね」

これまたわざとらしく大きな声で【緊那羅^{きんなら}】と復唱したハリスが阿部を見てまた笑う

「アベ、キンナラでいいんだね？」

「え？； ……あ…そう…です…？；」

聞かれた阿部が戸惑いながら頷いた

「よしよし…キョウスケにサカタにアベにユウスケに…ナカジマだっけ？」

「…南だっぴょん…；」

一人だけ間違えられた南がさめざめと坂田の肩に頭を着けその南の頭を坂田が押し戻した

「で？ ミサオって誰？」

ブオー———————————————

ハリスがニコニコしながらその名前を口にした

「…操…は…」

坂田が呟きながら緊那羅^{きんなら}を見ると緊那羅^{きんなら}が気まずそうに俯きぎゅつと拳を握る

「操ってのは…操って…いう…のはだな…その…」

「今はいないけど京助の大事だった人」

続きの言葉が出てこなかった京助の言葉につなぎ足すように坂田が答えた

「いない？」

ハリスがきょとんとすると坂田がむっとしてハリスをにらんだ

「察しろよ！！ それでも先生なんか阿呆！！」

「さ…かたくんどうどー；」

怒鳴った坂田を南が止める

「っていうか他人首突っ込むな！！ すげームカつく！！！！」

南に抑えられてもおハリスに対して敵意剥きだしで怒鳴る坂田にハリスが驚きの表情をしている

「興味本位で：興味本位でその名前口にすんじゃねえ：」

一通り怒鳴った後シメの一言を言い放った坂田がギロつと極めつけとでもいうかのようにハリスをにらみ上げた

「：若ー； 若こわーい；；」

冗談交じりで南が坂田の肩をたたいた

「：OK：悪かったねサカタ：」

ため息をついてハリスが坂田に謝ると場に安堵の空気が流れた

「もう言わないし詳しくは聞きたいけど聞かないよ：約束する」

「わかりやいいんだわか：りやって何だよコレ；」

気づけば顔の前にずいっと出されていた小指に坂田がハリスを再び見た

「ユビキリ」

ニコツとハリスが笑いそして早く指を絡ませろといわんばかりに坂田にむかって立てられた小指をさらにずいっと進める

「ゆび：って何でだよ；」

怪訝そうにその指を押し戻しながら坂田が聞く

「大事なことは約束するのが当たり前、そして約束したならユビキリしないと」

「：なんですかその間違った日本の解釈はー；」

ハリスと坂田のやり取りを見ていた南がすかさず突っ込んだ

「やってあげればいいじゃない；」

阿部が坂田に言う

「じゃあ阿部がしろよ； 俺はいや：っちゅーとろーがーッ！！！；；

」

いつの間にか坂田の小指に自分の小指を絡めたハリスがにっこり笑って

「ゆーびきーりげーんまんうそついたら：」

そしてご機嫌に歌いながらブンブンと絡めた小指を上下に動かす

「音痴やナァ；」

その歌声を聞いていた京助がボソつと言った

「うっそついたらハリセンのーますゆびきつ…」

「ちょいまって…」

指切ったの【た】寸前で坂田がその歌を止めた

「ハリセンボンだろ? ; ハリセンボン: そうだよな?」

坂田が回りに聴くと周り一同緊那羅以外が頷く

「ハリセンじゃなく: ハリセンボンのーます♪ だよね?」

阿部が軽く歌う

「そうだよー? はりせんぼんのーますっていうの」

悠助も途中から歌った

「ハリセン: ボン?」

坂田と小指をつないだままぼかんとした顔でハリスが呟く

「針を千本飲ませるってことだよな? たしか…」

「え? ハリセンボンっていう魚じゃなく?」

京助が阿部に聞くと阿部が違った答えを返してきた

「マジで? ; えー: 俺は針が千本: だと思ってた: 悠は?」

京助が自分の腰にしがみついている悠助に聞く

「僕はねー: 僕も京助とおんなじ」

「な?」

「え? でも俺は魚説もきいたことあるけどなあ: 若はどうですか」

南が坂田にも聞く

「俺も針だとずっと思って: どうなんだ? ;」

今だ小指をハリスとつないだままの坂田がそのままうーんと考え込む

「: 緊那羅^{きんなら}はどっちだと思う?」

「へっ; や: 私^{きんなら}それ知らない: っちゃし: ;」

いきなり話題を振られて緊那羅^{きんなら}が少し上ずった声であわてて答えた

「: 操なら: 知ってた: かもしれないっちゃね」

無理に笑顔で緊那羅^{きんなら}が返すと一瞬にして訪れた重苦しい沈黙

「: 私じゃなく: ;」

何気なくだろう組んだ緊那羅きんならの手がかすかに震えている
誰も声が出せない声がかけられない

「…は…はは…うん、ごめんだっちゃ私にはわからない…本当…
わからないんだっちゃ」

「いやラムちゃんはわる…」

息継ぎしてるのかしてないのかというテンポで言葉を発する緊那羅きんなら
に南が声をかけ…ている途中に京助がずるずると悠助を腰につけた
まま緊那羅きんならの前に立った…かと思うと

ドス

勢いよく緊那羅きんならの額の二つの点を指でどついた

「い…何するんだっちゃッ！！…」

緊那羅きんならが額をおさえて怒鳴る

「あのなあ…いい加減にしろよ？」

半分呆れたような声で京助が頭を掻きながらため息をついた

「操ちゃんは【だっちゃ】なんつー話し方はしてなかった、デコポ
チもないし覚えてる限りではお前みたいなあんな奇想天外な動きも
できねえ」

「でも！ でも私のこの体は…ッ」

「世の中にはノッペリだかい…三人は同じ顔してるヤツがいるっ
つー話だ」

「キョウスケ、そこドッペルドッペル；」

自信満々でいった京助にハリスがさり気突つ込む

「それよ、いいか？ 操ちゃんはお前のノッペルだノッペル」

「いやドッペルだからして旦那」

ハリスに突つ込まれてもなおドッペルと言わない（言えない）京
助に今度は坂田が突つ込んだ

「…京助…」

「誰にだってしらねえことだってあるだろいいじゃん知らんくて」

緊那羅きんならの眉が優しく下がる

「：しよっぱいねえ：ってかもう見慣れたけどさあ：ねえ？ あ：」
南がハッハと笑いながら阿部の方を見てギョツとした

「阿部：ちゃん？；」

むすつとしてあからさまに不機嫌な表情の阿部とその阿部から出て
いる闘志というか：まあ燃えるオーラの気配に南が思わず苦笑いで
ゆっくりとその場から離れそして坂田の陰にコッソリと隠れた

「あなたのお名前なんてーの、ハイ！」

「えっ：； き：緊那羅きんなら：だっちゃ：？；；」

パパンと手を軽快に鳴らして京助がリズムカルに緊那羅きんならに聞くとど
もりながらも緊那羅きんならが自分の名前を言う

「じゃ緊那羅きんならじゃん、はいおわーり」

そしてパンつと最後に大きめに手を鳴らしてヘツと口の端をあげて
笑った

「：見事だねえキョウスケ：」

ハリスが感心してほうほうと頷く

「何がやねん；」

何に感心されたのかわからない京助がハリスに聞いた

「いやいや：ここまで強引にそしてここまでさっぱりと纏め上げる
ことできるなんてさ：一種の才能とでもいえるよキョウスケ」

パチパチと拍手をしてハリスが京助をほめる

「：香奈も言ってた：京助っているだけで場がまとめられるって：
すごいよね：」

阿部が頬を少し赤くして微笑む

「まあ：確かに：そうかもしれねえな：」

坂田も同意して頷く

「ヨーシ！ 僕決めた！」

ハリスがニーツつと笑って京助の肩をたたいた

ミーンミーンミーン：

「誰コレ」

ちみつ子竜の一人を片手に矜羯羅こんがらがそれを見下ろした

そしてしゃがみ半分口のあいだの間、抜けな面をツンツンと突付く

「あーそれね、放つといいていいっぽいよー」

シヤクシヤクとカキ氷にシロップを絡ませて南が矜羯羅こんがらに言った
その南の後ろでは

「うおりやああああああああああああああ……！」

ジャコジャコジャコジャコジャコ

気合の入った掛け声とともに取っ手を回す坂田

そして頭を抱えて隅っこでうずくまる制多迦のその頭をぺちぺちとたたいているちみつ子竜二号

京助たちの姿はない

「…いつまでここにおいておくの…？ 邪魔なんだけど」

チリーンと風鈴が鳴る

「しょうがないじゃん； 彼だつて一般の人間だもんさー：動くし
かも話すヒマワリみちやつたら：普通はこうなるモンだよねえ：」
赤いシロップが十分に染み渡った氷を口に運んだ南が半分苦笑いで
縁側に横たわっているハリスに目をやった

「日本の視察とかいって勝手にいつてきたのソイツなんだから放っとけ放っとけ」

山盛りに削られた氷に坂田は青いシロップをかけた

ペタペタと廊下を誰かがはだしで歩く音が聞こえ戸口に一番近かつた南が体をよじって廊下の方を見ると

「あらんコロちや…ん？」

や
つ
て
き
た
の
は
慧
光

南が慧光に声をかけたが慧光はその声には反応せずまっすぐ足を進めて隅っこで相も変わらず頭を抱えてうずくまっている制多迦に近

づいた

カチャン…

その際 制多迦せいたかの近くに置いてあった空になったカキ氷の入った
と思われる容器に足がぶつかり容器が倒れた

が、いつのものの片付け魔の慧光えいこうであるなら瞬時に拾い上げるであろ
う容器をそのままに制多迦せいたかの近くで足を折り座った

「…慧光？」

その場から数メートル先縁側にいた矜羯羅こんがらがいつもの慧光えいこうではない
ことに気づいたのかハリスをまたいでその場に近づく

「コロ助…？ カキ氷食いたいのか？」

スプーンをくわえた坂田が慧光えいこうに聞くがやはり反応は返ってこない
「…慧光」

膝を立て慧光の肩にそっと手を置いた矜羯羅こんがらが慧光えいこうを呼ぶと慧光えいこうの
目つきの悪い目から一筋涙が流れた

「…慧喜は…」

慧光えいこうの震える唇が慧喜えきの名前を吐き出した

辛いね

もうないって言ってたのにね大丈夫って言ったのは誰？

「悠助…」

まただね

ずっと一緒って言ったのは誰？

「…悠助」

ああ…嘔吐きだね悠助は

「違う…悠助は…」

どうしてかばうんだ？

だって今は？

一緒にいないじゃない

「でも違う…悠助は…」

まただよ慧喜^{えき}

ま た

「また…」

所詮は移り変わる心なんだ

移り変わる人の心それらが【時】を招くことを気づかないくらいなんだ

「時…」

そう慧喜^{えき}…君は時の中にいるもの…抜け出せるわけがない

「嫌…」

逃げてもその場しのぎでしかないんだよ

「嫌…」

全ては上の手の中で

「慧喜えきーおーいッ；」

ドムドムと襖をたたく京助の腰には悠助そして隣には緊那羅きんなら
「カキ氷食わねえのかー？」

その問いにも何も返事はなく京助がため息をつく

「…慧喜えき…」

緊那羅きんならが慧喜えきの名前をつぶやいた後悠助を見下ろした

木製の廊下がキシキシと鳴りその音に京助と緊那羅きんなら、そして悠助が
顔を上げた

「お…くんが…」

「慧喜えき」

やってきたのは矜羯羅こんがらと制多迦せいたか

矜羯羅こんがらが京助の呼びには向かず襖へと声をかけた

矜羯羅こんがらの呼びかけからいくらかしばらくの間

セミの聲が開けた窓から風と共に流れ込んでくる

もう一度名前を口にしようとした矜羯羅こんがらがそのまま言葉を出さずに
口をつむんだ

スー…っと襖が開いた

「せんせーにみえねえせんせー…カキ氷食う？」

南がブルーハワイのかかったカキ氷入りの容器をハリスの額につけた

「…日本の中学生ってキモが座ってんだねえ…」

ハハハと苦笑いでハリスが言う

「うんやー？ 俺らってか…ここが多分特別なだけじゃないかと思う…けどねえ…普通じゃないことが普通なんだしさー動くヒマワリとか」

「アレには驚いたわ；」

南からカキ氷の容器を受け取ったハリスがまたも苦笑いをした

「とうか…さっきの人達とかって…全部キョウスケの家族じゃないでしょ？」

「えっとー…；」

シャクつとカキ氷にスプーンをさしたハリスが聞くと困った南が坂田の方を見た

「…家族だ」

坂田が一呼吸置いて言う

「あいつらは全員この栄野家の住人で家族で俺の友達だ」

「俺のじゃなくてー； 俺らー； もーみつるんてばー；」

坂田が言うとなががそれを追いかけて付け足すように突っ込んだ

「…血は？」

「血が繋がってないと家族じゃないんかい、関係ねえじゃんそんなん…人類みな兄弟…って…や…まあ人類なのはわからんけどとにかく兄弟で家族でいいじゃん」

途中独りでブツブツいいながらも坂田がハリスに言った

「…うんいいね」

ハハッとハリスが笑う

「正月町をジュンイチが自慢していたのがよくわかるよ」

「順ちゃんが？」

空になったカキ氷の容器を片手にハリスがコメカミ部分を数回叩きながら言った

「義兄様ずるいー！！」

開いた襖からちよつと怒ったような声がして慧喜えきが京助の服をつかんでいる悠助を抱き上げた

「悠助もー!!　もう…」

ぎゅうっと悠助を抱きしめた慧喜えきがぷーッと頬を膨らませる
その様子をあっけにとられたように一同が見ていた

「…き?;」

制多迦せいたかが慧喜えきに声をかけるときよとした顔で慧喜えきが制多迦せいたかに向
って小首をかしげる

「どうしました?　制多迦様…?　あれ?　矜羯羅様も…どうした

んですか?　俺の部屋の前に集まって」

「…どうしたって…お前が…;」

?　マークを頭に上に5個くらい出した慧喜えきが一同に聞くと京助が口
の端を上げつつ慧喜えきを指差した

「…慧喜?;」

緊那羅きんならが慧喜えきに声をかけるとこんどは緊那羅きんならのほうに顔を向けてき
よんとする慧喜

「なんなんだ?　緊那羅も…なにかあったの?」

「だからおま…」

「慧喜」

京助が何か言おうとしたのを矜羯羅こんがらの言葉がさえぎった

「はい?　なんですか矜羯羅様…」

「…:カキ氷食べに行くよ」

「はぁッ?;」

矜羯羅こんがらの言葉に京助が思わずすっとなきような声を上げた

「はい!!」

慧喜えきが笑顔で返事をして悠助を下に下ろすと悠助の手をとった

「食べに行こう悠助」

「え…あ…うん…」

悠助がどもりながら返事をしてうなずくと慧喜えきがにっこりわらった

「俺さーこの年になってなんだけど…ぶちゃけ流しソーメンっつー
の食ったことねえんだよなあ」

チリーンと鳴った風鈴の音とかぶって京助が言った

「ンなもん俺だってねえよ；」

「あー俺もないなあ」

晩飯時氷の添えられたガラスの器から冷たく冷えたソーメンを汁の中にとりながらの会話

「流しソーメンって：流れてるの？」

薬味を自分の付け汁の中にいれつつ矜羯羅こんがらが聞く

「そうそう上からねこう：ソーメンが流れてくるんだー」

南が答える

「ボクはあるよ流しソーメン」

ズルルーっという音の中間こえたハリスの言葉に一同がハリスを見た

「マジでー？； 外人のクセに日本の心和の心を経験済みなんか：いーなー」

「いや逆に外人だからってのもあるんちゃう？ 観光とかでさー」

「流しソーメンっておいしいんだっちゃ？」

ちよつとずれた質問をした緊那羅きんならにハリスがにこーっと笑いかけると緊那羅もつられてにこーっとわけもわからず笑みを返した

「いやフツのソーメンだけど：こう：風情が：」

「散々ずるずる食べて何が風情なのまったく：」

京助が何か悟ったような顔つきで風情を語っていると母ハルミが刻んだキュウリの入った器を京助の頭の上に勢いよく置いた

「いってえ！！； なんだよ母さん！！； 何すんだよ！！；」

「：京助今口から何か飛び出したんだけど」

怒鳴った京助の口から何かが飛び出したのを目撃した鳥俱婆迦うぐばかが言う

「きったないわねー：拾いなさいよ？ ホラホラ、まだまだソーメンなら沢山あるからねー？ ハリス君も食べてる？」

「ハイっ！ 食べてますッ！！」

「：君は坂田君でしょ」

何故か答えた坂田に対して南が突っ込む

「：慧喜？」

「えっ？ …何？ 悠助」

いいだけ汁を吸って茶色くなりかけていたソーメンを一向に箸であげない慧喜えきに悠助が名前を呼ぶ

「ソーメン…」

「え？ あ…ソーメン…うん」

茶色くなったソーメンを慧喜えきが箸であげて口に運んだ

「しょっぱくない？」

「大丈夫だよありがとう悠助」

心配そうに見上げてきた悠助に慧喜えきがにっこりと笑みを向けるのを

慧光えいこうがじっと見ている

「慧喜…」

慧光えいこうが小さく呟いた

庭先からキャーとかわーとかいう悲鳴と笑い声が家の中に流れ聞こえる

「…なんだっちゃこの花火…まるでうん…」

「ハイー！！！！ わかっててもソレは君の口から言っではならない言葉だよラムちゃん！ その役目は俺たちだから！！！！」

「…んこみたい」

モリユモリユと楯円の中から出てくるソレを見て制多迦せいたかがさらっと言う

「…タカちゃん…；」

「…？」

言った制多迦せいたかに南が苦笑いを向けると制多迦せいたかがヘラリと笑い返す

「本当うんこだね…」

「うん、うんこだ」

「アッハッハッハ！！ そう！ うんこうんこ！！！！」

制多迦せいたかに続き矜羯羅こんがらと鳥俱婆迦うぐばかもソレをみて何か納得したように言う
うと南がもうヤケだという感じで笑いながら言った

「いいねえ…ソーメンのあとは花火…」

「じじくせーこと言ってまんない」

ハリスが微笑みながら言うのと坂田が突っ込んだ

「京助ーコレに火つけてー」

手に二本花火を持った悠助がチャッカマン片手に持つ京助の下に駆け寄ってきた

「ロウソクでつけろよ； 何のためのロウソクだ；」

京助がブツブツ言いながらもしゃがんで悠助の手持ち花火に向けてカチカチとチャッカマンを鳴らす

「京助！ バケツ用意しなさい！！」

「京様ー！！ 私のハートにも火がほしいですわー！！！！」

「京助このうんこもうでなくなったっちゃけど；」

「俺は一人しかおりませんってーの！！！！；」

母ハルミ、ヒマ子、そして緊那羅きんならに同時に言われた京助が怒鳴る

「あつはつは！！ キョウスケは人気者だなあ」

ハリスがソレを聞いて笑い立ち上がった

「ホームか；そういえばもう何年も帰ってないなあ；」

ボソつと言ったハリスがうーんと伸びをしてその手を腰に当てた

「帰ってみるかな；」

「何ひとりでブツブツいつてんよハリスせんせー？」

坂田が一本の線香花火をハリスに差し出した

「ま；日本の心まず一本」

坂田が線香花火に火をつけた

「慧喜えき；？」

慧光えいこうが席の背中に声をかける

「本当に慧喜えきナリか；？」

一步 慧喜えきに近づいて再び慧光えいこうが聞く

「；慧喜えき；」

「うるさいなあ；俺は慧喜えきだよ」

呆れたように面倒くさそうに慧喜えきが答える

「…それなら…いいナリ…」

スタスタと歩き出した慧喜^{えき}の背中を慧光^{えいこう}が不安げに見つめてた

「…かえろっかなあ」

玄関先でハリスがボソツとつぶやいた

「いや、今からまさに帰るんですけど…」

サンダルを履いた南がハリスに突っ込んだ

「うんや…家にじゃなく…国に」

「…ホームシック？」

家の中からの明かりで外の方に伸ばされた坂田の影がハリスの影を押しした

「まあ…そんなもん…かな」

ハリスが一呼吸おいた後玄関内にいた京助を見た

「…ここは帰る場所を教えてくださいとところだね」

「は?…」

「いつから栄野家は交番もしくは観光案内所もしくは地域相談センターになったんだ？」

につこり笑い言ったハリスに京助がわけわからんという目をむけ南が言う

「ホームスイートホーム」

「…家、甘い家」

「まさに直訳ガッテン中学二年生」

栄野家を見てハリスが言った言葉を坂田が直訳してそれに京助が突っ込む

「つうかかえろっかなーはいいんだけどさー…二学期からくんだろ? 学校…」

「んー…そういうことになってるねえ」

チンタラと石段方向に動き出した集団の影がひとつに固まって動く

「…帰る場所は始まった場所始まった場所は帰る場所」

石段をひとつ降りてハリスが言う

「帰りたいと思う場所が帰る場所」

もう一段降りてまた言う

「命の数だけ帰る場所があつて始まりの場所もある」
もう一段降りたところでハリスが振り返った

「君たちにもあるだろう？」

その一言で三人が顔を見合わせた

「…そりゃ…まあ…あ…」

「でもソコが家とか場所とかじゃないこともある」
話す坂田の言葉をさえぎりハリスが言葉を吐く

「…どこに帰るん？」

「母さんの腹？」

「いやソレは帰りすぎ」

スパンと突っ込みを交えて漫才を始めた京助と坂田
ハリスがまた一段石段を降りる

「心にも故郷はあるんだよ」

「…心？」

「なんかそんなタイトルの歌なかったっけ？」

「あー…もしかしてソレ涙のふるさとじゃねえ？」

そう話しながら石段を最後まで降りた

「ボクはこれから心のふるさとに帰るよ」

「…これから？」

坂田が携帯を開いた

「…九時だぜ？」

「今から歩いていけば明日には札幌行きのバスが出るターミナルに
着くとおもうんだ」

携帯をたたんだ坂田にハリスが言う

「別に今歩いていなくても明日バスでいって乗り換えれば…」

言いかけた南の前にハリスがずいとカード入れのようなものを出した

「…誰このパツキンガール」

「レナいうてボクの彼女」

「…ほー」

「そして僕の心のふるさと」

「…クサー」

京助が鼻をつまんで手を顔の前で振った

「一緒にいたいと思う存在こそ心のふるさとなんだよ」

カード入れをしまいつつハリスが言う

「さって…じゃあ…解散しますか」

伸びをしたハリスが背中を向けた

「んだねー…じゃあ俺らもかえろっか」

南が坂田に言う

「おー…んじゃな」

「おーまたなーサンキュ」

片手を挙げ京助が三人を見送る

三本目の街灯の下を三人が通ったのを見てから京助が石段を登り始めた

「…何してんだ；」

「えっ；」

鳥居の影から見えたポニーテールに声をかける

「えっと…あの…おかえりだっちゃ」

姿を見せた緊那羅きんならが笑顔で言う

「おかえりもなにも…どこにもいつてねえじゃん；」

「でも…いいじゃないっっちゃか； 言っただって別に…」

石段を登ってきた京助の隣に並んで緊那羅きんならが歩く

「…ただいま」

京助がボソッとつぶやいたのを聞いて緊那羅きんならが足を止めた

「…置いてくぞ；」

「…あ； うんっ」

数歩遅れた緊那羅きんならが駆け足で京助に追いついた

「京助ー花火の後片付けなさいよー」

「ヘーイヨー；」

「私も手伝うっちゃ」

母ハルミの声で二つの影が庭先へと向う
北海道の短い夏のある一日

【第十三回】ふわふわり（前書き）

阿修羅の過去と

【第十三回】ふわふわり

「えーいつきゅしゅッ！！！！！」

「…京助かったっちゃ」

「スマン；　　ってもさー俺だって好きでひ…ふっきしよおいッ！！！！」

夏の空気に漂っている白くふわふわの綿毛

「招いてもいねえのに俺の鼻にかつてにಾಗಿりこ…ひ…ひえつきしッ！！！！」

その綿毛が鼻の中に勝手に邪魔してしまつたらしい京助が豪快にかつやかましくくしゃみを連発していた

「にしても…すごいっちゃね綿毛…」

風に乗ってふわふわと浮かぶ綿毛が緊那羅の髪にもくつついた

「おまたせー」

ガサガサと紙袋を振って悠助と慧喜が【柳川】と書かれた表札の門から出てきた

「本当いいん？　　こんなにもらつてさー」

京助が門に近づいて家の中に声をかけると出てきた一人の女性

「もう着ないからいいの」

「お菓子もらつたー」

大きな紙袋とは別に小ぶりの袋を持った悠助が嬉しそうに京助にソレを見せた

「ご近所は助け合わないと」

髪をアップにしたその女性が悠助の頭を撫でると緊那羅がチラリと慧喜を見た

しかしいつものアレ…【悠助に触るな！！】的怒鳴りが無いのに緊那羅が首をかしげる

「かすみねーちゃんありがとー！！　　よかつたね慧喜ー」
「あ…うん」

悠助が慧喜を見上げ言うえきと慧喜が満面の笑みを返す

ソレを見た緊那羅きんならがまた首をかしげ

「…気のせい…？」

ぼそっとつぶやいた

【着なくなった服があるからいる？】

近所の【柳川】さんの家からそう連絡を受けて京助と緊那羅きんなら、そして慧喜えきと悠助が服を受け取りに出向いた

「あっちーし…； お前の髪はうっぜえし」

「わるかったっちゃねッ！！！！；」

「イメチェンで切ってみたらは」

「切…ッ…うーん；」

京助が靡く緊那羅きんならのポニーテールを軽く引っ張って言う

「ってかお前らってロンゲばっかやん？ 鳥類も乾闥婆けんだつばも制多迦せいいたかも

…短髪なのって矜羯羅こんがらと阿修羅あしゅらくらいじゃん」

くいくいと引っ張る

「ウザくねえの？」

「別に…もう慣れてるというか…もともとこの髪だったっちゃし私は」

だんだんと小さくなっていく声に京助がはっとした

緊那羅きんならは操

操は緊那羅きんなら

緊那羅きんならが緊那羅きんならになったとき体は操

操の体でも中身は緊那羅きんなら

操のまま緊那羅きんならに

「でも阿修羅あしゅら昔は髪が長かったんだよ義兄様」

慧喜えきが紙袋片手に口を挟む

「そ…そうなんか？；」

ほっとした表情で【ナイス!!】と心の中で思ったであろう京助が
すぐさまその話題に飛びついた

「そうなん？」

「え?; いや私は今の髪型しか見たことないっちゃ;」

緊那羅きんならを見て京助が聞くと緊那羅きんならが返す

「でも【宮】に入ったとき...切ったんだ」

慧喜えきが言う

「へー...身だしなみチェックとかでか？」

京助が聞くと慧喜えきが首を振った

「俺も良く知らない...けど昔の阿修羅あしゅらは今の阿修羅あしゅらと全然違って
たってことだけ覚えてる...あのときの阿修羅あしゅらって...本名前まんま
だったって...」

「名前？」

慧喜えきが何かを思い出したの唇をきゅっとかんだ

「慧喜えき...? 寒いの？」

小さく震えているのに気づいた悠助が心配そうに慧喜えきを見上げ腕に
触れる

「...阿修羅あしゅらは...あの時の阿修羅あしゅらは...」

「えいつきしょおッ!!!...」

京助のでかいくしゃみが夏空に響く

「...続きは家に帰ってからじゃアカンか;」

ズルリと鼻水をたらした京助が片手を上げて意見した

「ワン」

「ツー」

「スリー」

「...帰れ」

石段上で某ランキング番組のカウントのごとくなテンポでポーズを
決めていたお馴染みの三人に京助が吐きかける

「オミヤがあるんですけどねー?」

「いらっしやいませ」

真ん中でポーズを決めていた中島が前に出した箱を見て京助が態度を変える

「京助…」

ソレを見た緊那羅きんならが肩を落として呆れる

「ほお…キビ団子…つーことは岡山け」

中島の手荷物を上から見て言ったのは

「あ…」

「あつくんにいちゃんー！」

「おおおおお； いきなり現れんなやッ！…」

右側でポーズを決めていた坂田が怒鳴りながら倒れた

「あのねあのね！さっきねちようどねあつくんにいちゃんの話してたんだよー」

タタタツと石段を駆け上りながら悠助が言う

「オライの？ なんやんきに？」

「あのねー…」

「どうでもいいけどさー…；直射日光浴びて団子が生ぬるくなるぜ？…」

「ソレと同時に俺らの体力も奪われるぜ…；」

話し始めようとした悠助とその悠助を抱き上げた阿修羅あしゅらに中島と南が言う

そして緊那羅きんならはまた慧喜えきを見る

「…慧喜…？」

やはりいつもの【阿修羅あしゅらずるいッ！】という激しい抗議が起こらないことに緊那羅きんならがまた首をかしげた

「慧喜…？ 大丈夫だっちゃ？ 疲れた？」

「えっ！？ あ…なんでもないよ！ まって悠助ー！」

緊那羅きんならの声にハッとした慧喜えきが石段を駆け上る

「…青か…」

「…何見てるんだっちゃ；」

ヒラリと翻されたスカートの中を見た京助がぼそつと呟いた

「よっガラっちょー!!」

「…殴るよ?」

縁側に座っていた矜羯羅こんがらを見つけ阿修羅あしゅらが声をかける

「お帰りなさいませ京様お暑かったでしょう」

ゴトゴトと鉢を引きずってヒマ子が物干し付近からやってきた

「あーあ…； タカちゃん遊んでるんだか遊ばれてんだか；」

その物干し付近で子供用ビニールプールにちみつこ竜二人と一緒に入っていた制多迦せいたかが髪から水滴を滴らせながらヘラリと手を振った

「おー…竜もだいぶ大きくなってんのー…無理してないんか? がらっちょもタカちゃんも」

バシャバシャと制多迦せいたかに向って水をかけている竜を見て阿修羅あしゅらが言う
制多迦せいたかがヘラリ笑ってうなずくと顔面にちみつこ竜のバシャった水がかかった

「あーあその空間だけなんか和みだねえ…」

南がホワーンとした顔で眺めている

「麦茶用意するっちゃね」

小走りで緊那羅きんならが玄関の戸をあけた

「食べ物? それ」

「…目ざといなキサマ; あたりーキビ団だん子」

悠助の抱えていた中島のお土産をみた矜羯羅こんがらがソレを指差して言う

「…んがらはよく食べるから…でもよく噛まないとまたべ…」

スコーン

「…たい;」

「…余計なこと言わなくていいからさっさとあがりなよ」

何か言いかけた制多迦せいたかの頭に矜羯羅こんがらがはじいた玉が見事に命中した

「…今【べ】って…」

「よく噛まないからなる【べ】…」

「なんだ？」

「…べ…べ…べべべのべ…」

ぼそぼそと頭を寄せ合って三馬鹿と京助が話し合っている

「よっしゃじゃあオライがヒントをやるんきにー！！　よく噛まないとおこるのは消化不良つうて食いモンがうまく消化できんきになー」

ハイハイと手を上げた阿修羅あしゅらが説明する

ヒュン

チツ

その阿修羅あしゅらのスレスレを未確認亜高速飛行物体が通り抜けた

「…ご…ごめんなさい；」

にっこりと笑みを浮かべる矜羯羅こんがらに向って阿修羅あしゅらと三馬鹿そして京助が謝った

「運ぶの手伝ってほしいっちゃー；」

台所の方から聞こえた緊那羅きんならの声

「ぷしゅッ！！」

プールに入っていたちみっこ竜がくしゃみした

「いいか？　この団子を食べたからには俺のお供しなきや駄目なんだぜー」

「そうなの？」

白いキビ団子を手にとった鳥俱婆迦うぐばかに中島が言った

「あーモモタロさんやんきになー」

阿修羅あしゅらが緊那羅きんならから麦茶を受け取りながら言う

「モモタロ？」

「あー昔々犬とサルと鳥つれて鬼退治ーって話」

鳥俱婆迦うぐばかが首をかしげると南が大まかに桃太郎のあらすじを話した

「：犬と：サルと：鳥と：それってゼンゴと迦楼羅かるらと京助？」

「ちよつとまてえーい！！； 犬と鳥はわかるにして何でサルが俺なんだつーの！！；」

鳥俱婆迦うぐばかの言葉に京助がテーブルに勢いよく手について立ち上がる

「なんとなく」

「なんとなくで中島のお供になんかなりたくねえよ！！；」

「ひっどーい！！ キョンちゃんひっどーい！！！」

ギャーギャー怒鳴る京助とオイオイ泣きまねする中島そしてその中島の頭を撫でる坂田

「アッハッハッハ！！ いっやー：賑やかだねえ」

キビ団子をひとつ口に入れた阿修羅あしゅらが目を細めながらその様子を見ている

「：賑やか過ぎるようにも思えるけどね」

ひよいぱくひよいぱくと軽快なテンポでキビ団子を口に運びながら
矜羯羅こんがらが呟いた

「：いお茶ー」

そんな矜羯羅こんがらに制多迦せいたかが麦茶を手渡し受け取った矜羯羅こんがらがお礼とい
わんばかりに無言で制多迦せいたかの口にキビ団子を押し込んだ

ヘラリと笑ってモゴモゴキビ団子を制多迦せいたかが頬張る

「制多迦せいたか様と矜羯羅こんがら様と阿修羅あしゅらはお供？」

「もうその話題はえーちゅーん；」

いまだ桃太郎の話を引きずっていた鳥俱婆迦うぐばかに京助が突っ込んだ

「で？」

三箱あったキビ団子が綺麗に空になったところで阿修羅あしゅらが持っていた
カップをテーブルに置いた

「で…って…で？」

南が中島を見て言う

「で…デオドラント」

中島が京助の方を見ながら一言

「ト…ト…トンヌラ」

そして京助が南を指差す

「らー…ラー…ラー油」

南が今度は鳥俱婆迦うぐはがを見た

「何？」

「…ナンデモアリマセン；」

いつもと変わらぬあのお面の顔で見上げられた南が目をそらした

「さっきオライがどうの言ってなかったけ？」

テーブルに肘をつきソレで顎を支えた阿修羅あしゅらが聞く

「あのねーあつくんいちゃんって昔髪長かったの？」

悠助が無垢な笑顔で聞くと矜羯羅こんがらと制多迦ぜいたかがピクンと微かに動いた

「おー…よう知ってんなー悠助」

にーっと笑って阿修羅あしゅらが言った

「そうやんきになー…昔はタカちゃんや緊那羅きんならより長かったんきに

…あー…かるらんくらいだったかのー」

「…想像つかん；」

阿修羅あしゅらの話を聞き少し何かを考えたあと三馬鹿と京助が顔の前で手を振った

「でねそのときのあつくんにちゃんが…」

「悠助その話…誰からきいたの？」

矜羯羅こんがらが悠助の肩を掴んできくときよんとした悠助が矜羯羅こんがらを見上げる

「え…？ どうしたのコンちゃん…？」

首をかしげながら悠助が聞き返す

「…ようはアレけ…オライがなんで髪切ったつちゅーの知りたいんきにな悠助は」

阿修羅あしゅらが静かに言う

「あ…うん…？」

どもりながら悠助がうなずくと阿修羅^{あしゅら}が目を細めて俯き腰に下げて
あったカンブリを撫でた

「…オライのこの傷はな…竜がつけてくれたんきに…」
自分の頬についている傷を指差して阿修羅^{あしゅら}が言う

「あーあ…父親の失態を償うがよい京助」

「あのな…」

坂田がヤレヤレという感じで京助の肩をたたく

「いや別に責めとんわけじゃないんきに… …むしろ感謝…やんな
…」

傷を撫でて阿修羅^{あしゅら}が顔を上げた

「オライはな元々【天】の下町…見たことあるだろ？ あそこに
いたんきに」

「ああ！！ 京助が迷子になったところ！！」

「うっさい！！…」

阿修羅^{あしゅら}の言葉に過去を思い出した中島がポンツと手を打って言った
「京助迷子になったの？」

悠助が京助を見ると京助が目をそらした
すると悠助が立ち上がり

「…ちよ… …なんだなんだ悠…」

無理矢理京助の膝の上に座り抱きついた

「…暑いぞ悠…」

無抵抗ながらもボソツと京助が言う

「… …何かたりなくねえ？」

その様を見ていた坂田が言う一同が顔を見合わせた

「…何か？ ……って…言われれば何か足りない…ねえ」
南も言う

「…なんだろね…」

矜羯羅^{こんがら}もなにかがわからずに言った

「そのうち思い出すんじゃない？」

お面を少しあげて麦茶を飲んだ鳥俱婆迦^{うくばか}が言う

「…慧喜…」

緊那羅が慧喜を見ると慧喜はただどこかを見ている
まるで慧喜の中に慧喜ではない何かがあるみたいなの
そんな感覚にとらわれてまさかと緊那羅が頭を振った

「なにしてん；」

「えっ； あ…なんでもないっちゃ；」

ソレを見た京助が突っ込むと緊那羅がはっとして苦笑いを返した

「オライはな…まあいわゆる…良い子の部類じゃなかったんきに
な…； ハッハ」

阿修羅が頭をかきながら笑う

「荒くれてたんきに…；」

「きやあ！！ 不良ですわよ奥様！！」

「まあ！！ なんていうことでしよう！！」

きやあ！ という仕草をしつつ坂田と南が阿修羅を見た

「で、ソレをとめて改心させたのが京助のパパンでそのとき喧嘩してつけられたのがその傷…ってか？」

中島が先を読んだ考えを口にした

「あ…ブビーでっかいのは…ずれ…」

阿修羅が手でクロスをつくり口を尖らせて大げさにはずれを表現した
ソレを見て制多迦が何故か拍手をして矜羯羅にひっぱたかれている
麦茶を飲み干した鳥俱婆迦がゲップをした

「確かに…この傷は竜に止められたときにできたもんやんきにけど
…けどな…まだ長い話があるんきに」

阿修羅の眉毛が下がり作った笑顔になる

「…吉祥…」

阿修羅が口にした言葉に中島がピクッと動いた
自分の行動が回りにばれていないかきよろきよろした後ばれていない
ことに安堵して小さくため息をつく

「ヨシコがどうしたん」

京助が聞く

「…あんな…【吉祥】^{きつしやう} ってのは…ヨシコの名前じゃなきにな…ヨシコの名前は別なんよ…【吉祥】^{きつしやう} っつーのはまあ…肩書きっつーか…」
カンブリを指で撫でながら阿修羅^{あしゅら}が話す

「え？　じゃ何？　ヨシコちゃんって本当の名前じゃないの？」
南が聞くと阿修羅^{あしゅら}がうなずいた

「ヨシコの本当の名前はオライも知らんきにな…教育係のオライも
かるらんも知らんきに…知ってるのは【上】とヨシコだけ…【吉祥】^{きつしやう}
の名を継ぐものは…自分の一生をささげる相手にしか名前を教えち
やだめなんきに」

「…なんだソレ…」

中島がぼそつと呟いた

「【吉祥】^{きつしやう} が一生をささげる相手…【上】…【上】は絶対…」

阿修羅^{あしゅら}がきゅつと唇を噛んだ

「…オライが宮に入るきっかけになったんがな…【吉祥】^{きつしやう} なんきに
コトつとカンブリが音を立てた

「…なんなんきに…これ」

白く大きな扉を前にした青年が啞然としてソレを見上げた

「こんなところに…」

恐る恐る手を伸ばす

取っ手に手が触れソレを下へと下げようとしたとき

「見えるだけではなく触れるのですか貴様は」

丁寧なのか乱暴なのかハーフ&ハーフの言葉が背後から聞こえた

「誰…！！」

青年が長い髪を靡かせて振り返る

「驚きました」

鮮やかな橙色の髪

シャラっという可愛らしい鈴の音

髪に括られていたのは

「…宝珠…お前宮のモンけ!!」

バツとすばやく後ろに下がった青年が身構えた

「機敏な動き…でもわらわはなにもしないですよ」

くすつと笑うとまたシヤラつと鈴がなった

「…貴様…名前は？ …わらわは【吉祥】」

「き…っしょうってやっぱ宮のモンけ!!」

ザツと足を肩幅に開いた青年が吉祥と名乗った人物をにらんだ

「はよう名前いってください…わらわは【吉祥】貴様は何ぞ？」

シヤラつとまた鈴の音

「…阿修羅やんきに」

身構えたまま青年はそう名乗った

「阿修羅？ あの阿修羅と同じ名前とはまた面白いこと」

吉祥が驚いたでも半分は面白いのかそんな表情を阿修羅に向けた

「…どの阿修羅か知らねけどもたぶんお前さんがいつてる阿修羅

はオライやんきに」

阿修羅が身構えるのをやめ腰に手をつき吉祥を見る

半分は面白かった吉祥の表情が全て驚きに変わる

ソレを見て阿修羅がニツと笑った

「…わらわの言う阿修羅は残虐非道…まさに修羅と…でも貴様はま

ったくその様な感じはせぬのですが」

シヤラつと鈴が鳴る

「残虐非道…ハツハマあ…そうだろうなあ…」

「本当にその阿修羅なのですか？」

「…そうだといったらどうするんきに？ 殺すのけ？ 捕らえるのけ

？」

口元は笑いでも眼はまっすぐ獣を捕らえるかのように阿修羅が吉祥

を見る

「…不思議な眼…貴様の目」

「…は？」

大抵はその眼を見てすくみ上がる

この吉祥きつしょうとて宮の人間あしゅらといえど女、ちよつと位はおびえるか何かをすると思つていた阿修羅あしゅらは吉祥きつしょうの反応に気が抜けた声を出した

「大きな眼、不思議な眼…どこを見ている…？」

ふわつと香つたのはどことなく懐かしい香り

前髪がかきあげられた

シャラつという鈴の音がかなり近くで聞こえ頬に手が添えられる

「わらわはここ…わらわを見て…」

「な…」

緑色の瞳から目がそらせない

赤い唇が何かを言っている

「…そう…」

かきあげられていた前髪がぱさつと降りてきて阿修羅あしゅらがはつと我に返った

「義賊ということですか」

頬に触れていた手も離れていった

「何…を」

どもりながら聞く阿修羅あしゅらに吉祥きつしょうが微笑みを向けた

「貴様はその背中に沢山背負っている…沢山の批難と罵声と憎しみ

と…それと同じ量の笑顔と」

吉祥きつしょうが一步後ろに下がる

「…お前…オライの何を知ったん？」

「…次の獲物はやめた方がよい…」

ふいつと吉祥きつしょうが顔を背けた

「貴様は不思議です…」

「…オライが？」

開けられていた扉に吉祥が手をかけた

「…また会いましょう？」

橙色の髪が扉の中に消え戸が閉められた

「…不思議な阿修羅ちゃん…」

「あーかいキャンディあーおいキャンディ…」
南が歌う

「てか吉祥かあ…どんな吉祥だったんだ？　いまの吉祥…ヨシコと比べてどうよ」

京助が聞く

「ヨシコとは全然ちゃうんきになー…やっぱヨシコよかは大人やんきに…」

「やっぱこう…ヨシコみたいに…ボン！！　キュッボン！　なわけ？」

「んー…いんや…ヨシコの方がボンやんきに」

「ほほー！！！！」

坂田の問いに阿修羅が答えると三馬鹿と京助がそろって声を上げた

「馬鹿ばっか」

鳥俱婆迦が冷静に突っ込む

「しいていえば…尻がでかったやんきに」

「安産型ですな」

「うむ」

付け加えた阿修羅の言葉にもすっかり反応を示すあたり思春期なお年頃だということがわかる

「…で」

「で？」

パンっと手をたたいて仕切りなおそうとしたのか坂田が手を合わせ
たまま阿修羅を見る

「…なんやんきに？　メガネ…」

坂田に視線が集中する

しばしの沈黙

「…で…なんなのさ…」

痺れを切らしたのか矜羯羅が言う

「…どこまでのご関係まで発展なさったんですか？」

坂田の質問で今度は阿修羅^{あしゅら}に一同の視線が移された

ミーンミーンミーン…

チリィー—————ン…

「……………」

蝉の声と風鈴の音が響く中赤い顔をした青少年4人が各々の顔をチラ見してそれから阿修羅^{あしゅら}を見た

「…マジで…?」

中島がボソっと言う

「…本気で答えちゃったし…」

はああつと息を吐いて南がシャツで顔から流れていた汗を拭った

「どこまでー聞かれて別に隠すことはないやんきになー…まあ大人ーってあがめなさいなんー」

ハッハと笑いながら阿修羅^{あしゅら}が傍にいた京助の頭をポンポン叩く

「…せ…青少年健全育成基本法に引っかかるだろ今の話… 軽くエロ本だぞ官能小説…ッ;」

「エロ本?」

頭を叩かれながら京助が喚くときよんとした顔で悠助が阿修羅^{あしゅら}を見上げた

「あー悠ちゃんの無垢な視線がオライをみあげるーん;」

「…もつと見てあげなよ悠助」

いやーんと顔を隠した阿修羅^{あしゅら}に対して矜羯羅^{こんがら}が呆れ顔で言い放った
「穢れなき無垢な視線で浄化されよウリヤ」

悠助の顔を抑えて阿修羅^{あしゅら}の方向に固定した京助が言う

「エーロ魔人!! エーロ魔人!! エロイムエツサイムー!!」

三馬鹿が手拍子付で騒ぎ出した

「子供だね」

それを見た鳥俱婆迦^{うぐばか}がズバツという^{きんなら}と緊那羅が苦笑いを浮かべた

縛られた手首からは赤い血

体についているのは自分の血なのかそれとも…

どこかでかいだことのあるにおいがして阿修羅あしゅらのまぶたがピクンと微かに動いた

シャラっという音がして阿修羅あしゅらの眼が開く

「…わらわの言葉が通じなかった…のか…」

まず見えたのが赤い唇

その唇がきゅっつつむがさる

「阿修羅あしゅら」

名前を呼ばれて思い出す

「竜は…これでも手加減したとそしてすまないと」

そしてすまなそうに言った言葉で鮮明に蘇った記憶

「みんなは!?!」

声を上げると口の端に痛みが走った

そして広がる血の味

「…落ち着きなさい」

そつと口にあてがわれた柔らかな布

それが優しく動き口の周りの血を拭い取っていく

「…死んだのか」

ぴたっと手が止まった

「殺したのか」

布を持つ手に力が入った

「お前らが…」

ハッと笑いとも取れる息とともに言う阿修羅あしゅらの目線の先には眉を下げた吉祥けいしやうの顔

「わらわは忠告した…何故きかなかった…そうすれば貴様だって仲間だって…」

「宮に何がわかるんきに…オライ達のこと」
「吉祥けいしやう」

足音がして男の声がした

「…竜…貴様これで手加減したというんですか」

「いや…； 吉祥お気に入りってことでしたつもりなんだが…意外に強くてなこいつは」

「なっ…； 誰がおきに…ッ」

からかうように言った竜に吉祥が口ごもる

「…でもな吉祥…お前は…」

「おい…」

竜の言葉を阿修羅が止めた

「話が見えない上に…助ける気があるんならまずはどうにかしてくれんかの」

さかさまのまま吊るされていた阿修羅が言った

「俺は竜…ここにおられます吉祥様のお目付け役兼教育係だ」

「竜…貴様叩かれましたか」

半ばふざけて自己紹介をした竜に吉祥が鋭い視線を向けた

「お前のいう…宮の人間だ」

阿修羅を地面に降ろした竜が眉を下げて申し訳なさそうに言う吉祥がしがみ阿修羅の頬を撫でた

「次に貴様達が狙っていたあの屋敷…上も馬鹿じゃない…わかる？」

「…オライたちはまんまと引っかかったってえ…わけなんか…」

「そうなる」

きっぱりと言い切った竜を阿修羅がギンッと睨む

「…そうやんきにな…オライのせいやんきに…」

しばらく竜を睨んだ後 阿修羅がふっと笑って俯いた

「…阿修羅…」

まるで幼子を慰めるかのように吉祥が阿修羅の頭を撫でそしてその頭を胸に抱く

「貴様は頑張り過ぎた背負いすぎていた伝わった…わらわにそれが全て」

「ッ…お前にオライの何がわか…！…！」

押しつけた吉祥きつしやうの顔を阿修羅あしゆらが見てそして怒鳴りかけていた言葉をとめた

緑色の瞳から流れ出る雫

「貴様は…ただ守りたくてただがむしやらにただ…生きていただけ…今も…貴様はがむしやらで…わらわはそれが愛しい…」

「吉祥…鼻水」

女らしく顔を覆って泣くでもなく更には鼻から鼻水まで流しながらもまっすぐ阿修羅あしゆらを見て流れる涙に阿修羅はただ戸惑っていた
シヤラッと鈴が鳴って吉祥きつしやうが涙と鼻水を同時に拭うと竜がため息を吐いた

「…少しは俺のことも考えてくれよな吉祥様」

ヤレヤレと両手を挙げ眉を下げた竜が二人に背を向けたかと思うと片手で何かを宙に書き始める

「そして自分の立場も…お前がしていることは…しようとしていることは…」

「わかってます…でもわらわはわらわとして生きたい」

二人の交わす会話の内容がさっぱりつかめない阿修羅あしゆらはただ二人を交互に見つつ自分に投げかけられる言葉を待っていた

「できればわらわが変えたいんです…【吉祥きつしやう】を…そうしたらきつと【時】だって…」

書き終えたのか竜が振り返る

その竜の背にはおそらく何かの術になるのであろう印が光り浮かんでいた

「…阿修羅…」

ようやく名前を呼ばれた阿修羅あしゆらがハツとして竜を見る

「…また会おう」

竜がそう言ったと同時に印が輝きを増し目が開けていられないほどの眩しさになったそして…

阿修羅あしゆらが目を開けたときソコに竜の姿はなく代わりにはじめて吉祥きつしやう

とあつたときにみたあの扉があつた

「見えるでしょう：阿修羅^{あしゅら}」

吉祥^{きつしょう}が立ち上がりその扉に触れる

「どう見えているのかわらわにもわからない：貴様だけの扉：この向こうに見せたいものがある」

シヤラっと言う音ともに差し出された細く長い指の手

阿修羅^{あしゅら}は掴めずにただその手を見つめる

「：阿修羅^{あしゅら}」

名前を呼ばれて吉祥^{きつしょう}を見上げる

緩やかに弧を描いた唇と細めた目が優しく阿修羅^{あしゅら}を見下ろしていたそれはまるで愛しい我が子を見つめているかのような暖かいもの

「：さつきからわらわが呼ぶばかりで：貴様はわらわの名前すら呼んではくれないんですよ」

少し身をかめた吉祥^{きつしょう}が阿修羅^{あしゅら}を目線を合わせ眉を下げて微笑む

「：オ：オライは：」

なぜか鼓動が早くなって阿修羅^{あしゅら}は吉祥^{きつしょう}から目をそらした

「わらわは：貴様を愛したい」

「へっ?;」

吉祥^{きつしょう}の思いもよらぬ突然の告白にきょとんとしている阿修羅^{あしゅら}の頬に吉祥^{きつしょう}が口付ける

「：そして貴様がわらわを愛してくれたとき：わらわの名前：そして全てを変えてみたい：」

目を見開いたままの阿修羅^{あしゅら}を吉祥^{きつしょう}が優しくでも真剣に見つめる

「愛しても：いいですか：?」

ゆっくりと阿修羅^{あしゅら}の肩に頭をつけた吉祥^{きつしょう}が小さく言った

「なんなんきに：あの吉祥^{きつしょう}とか言うの：;」

「ハッハッハあの阿修羅^{あしゅら}がひとりの少女に困っているってなあ：いやいや」

ニヤニヤと笑うは竜、そのニヤニヤの先には分厚い書物を膝に置い

た阿修羅^{あしゅら}

【あの】出来事から3日ほどが経とうとしていた

「にしても…お前の頭はどれだけ記憶できるんだ…」

急に真顔になった竜が言う

「まあ…詰め込めるだけ詰め込めるんじゃないんかの」

落ちてきた横髪を再び耳にかけて書物に目を落とす阿修羅^{あしゅら}

「…ここからは宮がよく見えるな…」

「竜…お前こう毎日オライントコに来てて平気なんか； 一応おエ

ライさんなんだろうが…吉祥^{きつしょう}の教育係とか言う…」

「その吉祥^{きつしょう}が俺に行け行け言ってきたるんだからいいんじゃないのか？」

うーんっと伸びをした竜が言う

「…阿修羅^{あしゅら}」

「うん？」

「お前 吉祥^{きつしょう}をどう思う」

「ブッ！…」

ゴトン

阿修羅^{あしゅら}が噴出すと同時に分厚い書物が床に落ちた

「どっ…どうってなんなんきに； ど…ッ；」

「落ち着け； つとに…あーあーいーけないんだーコレ一応重要物
なんだけどねえ…； あーあー…まあ俺がシバかれるんかあ…は
あ；」

少し傷ついたその書物を拾い上げて竜が溜息を吐く

「…どうって…変わってる…なとは思…オライの想像してた宮の
ヤツとは全然違うしの…それに…」

「それに？」

「…いい匂いがした」

阿修羅^{あしゅら}が俯いてボソッと言った

「モテモテだねえ兄さん」

「いやー…ハッハッハ」

「ってかさこれ…えーっと吉祥…」

南が吉祥と口にする和中島が少し反応した

「吉祥ちゃん？　さん？　…吉祥さんでいいか…吉祥さんの片思いになるんだよね？　阿修羅はなんとも思ってたんでしょ？」

視線が阿修羅に集まった

「…吉祥は…」

「いつかわらわと一緒に戸の向こうに行ってくださいますか？」

書物を読む阿修羅の背中に背中を合わせたまま吉祥が小さく言った
「まあな…いつかな…」

パラっとページを捲る音と阿修羅の声が重なる

十日に一回の割合で吉祥は阿修羅の元に訪れていた

「…なあ」

「なに…？」

沈黙を終わらせたかったのか阿修羅が吉祥に呼びかける

「お前…ただこうやって…何か面白いんか…？…　オライはコレ読んでるしお前は…」

「わらわは貴様といれるだけでいい」

振り向かず聞いた阿修羅に吉祥が答えた

「言っただけでしょう？　わらわは貴様を愛したいのだと」

「…変なヤツや？　きにな…でもオライは…」

「言わないで…ただわらわが貴様を愛したいだけなのだから」
ハハッと笑って言おうとした阿修羅を吉祥が止めた

「でもなオライは…」

「人の気持ちを变えることが出来るのは人だけ…選ばれた人だけ…
わらわは貴様に使ばれたい…そして変えてほしい…わらわと【吉祥】を」

再び言おうとした言葉もまた吉祥が止めた

「わらわの望みは……貴様の口から貴様の声でわらわの本当の名前を呼んでくれる事……ただそれだけです」

小さくでもはつきりと聞き取れる大きさの声で吉祥きつしょうが言うのを阿修あし羅ゆらは黙もくって聞いていた

「…手…繋いでもいいですか…」

しばらくの沈黙の後ためらいがちに言った吉祥の手を阿修羅が無言で握った

「あつたかい」

なんとなく幸せそうな雰囲気で吉祥が言う

「そうけ…」

あしゆら
阿修羅が振り向かずボソつと言った

お互いの指を絡めて繋いだ手

荒い息をお互い整えながら視線は逸らさずに

「名前を教えてください。」

まだ完全には整っていない呼吸で阿修羅が吉祥を見下ろし言う

その阿修羅あしゅらを涙を流した後の潤んだ目を大きく開いて驚いた表情で
吉祥きつしやうが見上げた

「あ……しゅら……今……」

「名前……呼ばれてくれるかの……お前の」

絡めていた指がきゅつと強く握られた
きつしょう
 吉祥が目を瞑り深呼吸して目を開き阿修羅をじつと見る
あしゅら

「……オライに……名前……」

「……わらわの名前は——
——」

「きやあああああああ！……！なんだか恥かしい！！」

俺が恥ずかしい！！！！！！」

京助がじったんばったんと暴れながら隣にいた中島をなぎ倒した

「うるさいよ」

透かさず矜羯羅こんがらが突っ込む

「だってさーだってさー!!!; もうちよいオブラートに包むとかしてとかー!!!;」

京助と同じくらい南もあたふたしながら言った

「ま：まあ：うん：経験体験だうん；」

どこことなくギクシャクした話し方で冷静さを装いながらもやっぱおかしい坂田も言う

「へんなの」

鳥俱婆迦うぐばかがそれらを見てズバっと言った

「おま：恥ずかしくないのかコレ聞いてよー!!!;」

「別に」

京助が涼しい顔をしていた矜羯羅こんがらに聞いた

「：：：いいいしいね：：」

制多迦せいたかがヘリ笑って言う

「：：タカちゃん大人発言だア；」

ほんのり赤くなりながら中島が言うのと制多迦せいたかがまたヘリと笑った

「ハッハッハ！！ やー：初々しいのー：：：本当反応が面白いんきなー」

「阿修羅兄あしゅらさんは大人どすなー；」

何故か京都弁で京助が言うのと阿修羅あしゅらがニーっと笑う

「そーやんきにー崇められなー？ ハッハ」

「おいちゃんは嫌だよ」

「ばかも顔色一つ変わってねえし：：； くそう：：」

「いや、彼アレだから。お面だから坂田君」

鳥俱婆迦うぐばかを見て悔しそうにしていた坂田に南がさわやかにつつ込んだ

「で：：」

阿修羅あしゅらがかいていた胡坐を解いて微かに微笑みながらうつむくと深

く息を吸った

「…上にバレたんよな…」

チリー—————ン

差し出されたのはどこかで見たことのある小さな鈴

それが捕まれた掌にのせられる

軽く右側に掌を傾けると

シャラン

「これ…」

掌の上から聞こえた聞いたことのある可憐な音

「…吉祥はもうこない…いや…もうこれない」

やり切れないとも悔しいともそして怒りともとらえられる表情で竜
がつかんでいた阿修羅あしゅらの手を離れた

「…これないって…ていうかコレなんなんきに…こ…」

「吉祥ききうしょうはもういない」

時間が止まったかに思えた

「お前…吉祥ききうしょうの本当の名前よんだだろ…」

阿修羅あしゅらの目が見開く

「…【吉祥ききうしょう】の本当の名前を…呼んだらどうなるのか…吉祥ききうしょうから聞
いてなかったか？」

竜の言葉に阿修羅あしゅらがブンブンと首を振った

「何も…ただ…ただ本当の名前呼んでくれて…だからオライは…」

「教えてやろう…吉祥ききうしょうの本当の名前を呼んだものに吉祥ききうしょうは一生を捧
げるんだよ…」

竜が悲しそうに微笑む

「本来ならば【上】が呼ぶべき名前をお前が呼んだ…【上】が黙っているわけないだろう…横取りされたんだ…だ」

「だから…だから…だからあいつをどうしたんきに！！」

阿修羅あしゅらが怒鳴った

そして竜の首元を思い切りつかむと壁にたたきつけるように押した竜が軽く声を上げる

「…殺したんけ…？」

震える声で阿修羅あしゅらが聞くと竜が首を横に振る

「じゃあなんでいない…って…」

「…殺されてはいない…だが…」

竜の表情が曇った

「…生きてるのけ…？」

さつきより少し明るめの声で再び阿修羅あしゅらが聞くと曇ったままの表情で竜が阿修羅あしゅらを見る

「…俺にもわからない…吉祥きしやうの部屋に行くと…新しい【吉祥きしやう】がいた…」

竜が小さく答えた

「…吉祥きしやうの気配は…」

うつむき首を振る竜を見た阿修羅あしゅらの手からまるでスローモーションの様に小さな鈴が落ちていった

『いつかわらわと一緒に戸の向こうに行ってくださいますか？』

『わらわの望みは…貴様の口から貴様の声でわらわの本当の名前を呼んでくれる事…ただそれだけなんです』

『…手…繋いでもいいですか…』

『あったかい…』

コツ…ン…

床に落ちた小さな鈴は音色をたてることなく転がって阿修羅あしゅらから離れる

「…なん…ツ…」

竜の肩に額を押し付け阿修羅あしゅらが震えた声を出した

「名前呼んだだけなんきに…ただそれっぽっちの望み…それだけの…それすら…」

だんだんと強くなり自分の腕に食い込む阿修羅あしゅらの指を竜はただ見ている

「一回…一回しかオライは…あいつは何度もオライの名前呼んでたんに…オライはまだい…ツ…」

食い込んでいた指から今度は力が抜けていく
力なく床に座り込んだ阿修羅あしゅらを竜が見下ろしそして息を吸う

「…上は絶対…」

ボソッと呟いた竜の言葉に阿修羅あしゅらの肩がピクツと動いた

「…上…上か…ハッ…ハハハハハハッ」

阿修羅あしゅらがうつむいたまま笑う

「…落ち着け」

「落ち着け…？」

静かに言った竜を阿修羅あしゅらが眉を吊り上げた形相で見上げる

「落ち着け…ねえ…ツハハハハハハ…あゝあ…」

阿修羅あしゅらがゆっくりと立ち上がり転がっていた小さな鈴を拾い上げた
「…上は宮なんきにな」

「落ち着け」

震える声で聞いてきた阿修羅あしゅらに竜が再び同じことを言った

「…名前呼んだときのな…顔…忘れられないんきに…あの顔な…」
阿修羅あしゅらが自分の髪を数本引き抜きそれに鈴を通し首に下げる

シャラン

「…もう一回みたいんけえの…」

阿修羅あしゅらがゆっくり振り向く

その顔は笑っていた

「オライ達にとっては日常的なんにな…名前呼ばれる事…それがあいつには特別だったんきにな…オライも…照れんでもう一回…もっと呼んでやればよかったんにな…ツ————…」

最後のほうの言葉をかみ締めた阿修羅あしゅらの目から涙が流れる

「阿修羅あしゅら!!!!!!」

竜が叫ぶのとほぼ同時に阿修羅が走り出した

「待て!!! 阿修羅あしゅら!!!!!!」

その後をお約束というカンジで竜が追いかける

「冷静になれ!!! お前くらいの頭のいいヤツなら上が…」

「やかましい!!!!!!」

追いかけてながらかけた声に阿修羅あしゅらが怒鳴り返した

「オライにもうなくすもんだいんきに」

その言葉に竜が足を止める

「阿呆」

その直後に竜が言った言葉に阿修羅あしゅらもまた足を止めた

しばしの沈黙

ガッ!!!!

いきなり響いたのは何かが激しくぶつかった音

ズガガガガガガガガガガ!!!!!!

阿修羅^{あしゅら}を仰向けに寝かせると竜がため息交じりで言う

「阿修羅：【修羅】とつく名を持ちつつも誰より人を想う：それゆえ【修羅】となる青年：だとさ」

「…は？； 何なんきに…それ…」

「記念すべき一回目のこの技で俺にやられたとき…吉祥^{きつしょう}が俺にこういってお前を紹介したんだ…想いで修羅になる…まさにだなと」

竜が眉を下げた笑顔で阿修羅^{あしゅら}を見た

阿修羅^{あしゅら}はというとただ黙って目を閉じている

「…吉祥^{きつしょう}の初恋の相手がお前だ」

その言葉に阿修羅^{あしゅら}ががばっと起き上がった

「…は…はっこ…い？； あいつはっこ…はああ！？；」

「あんまり大口開けるな； あーあ…せっかく止まった血がまた…；
…いや俺がつけたんだけどな；」

驚き大声を出したことによって頬についた傷が再び開き血が流れる
そして竜がそれを自分の服の裾で押さえた

「吉祥^{きつしょう}はな…ずっと宮に閉じ込められてたまに抜け出しては…
【向こう】に行っていたんだ…決して誰にも会わないよう自分に術を
かけて見えないようにしてな…でもお前に見つかった…術をかけて
いたのにどうして見えたのか吉祥^{きつしょう}は帰ってきてからずっと考えてい
たさ」

ゴシ…っと少し強めに阿修羅^{あしゅら}の頬を袖口でぬぐいながら竜が話す

「……」

阿修羅^{あしゅら}はただ黙ってその話を聞いている

「お前をコテンパンにやったとき吉祥^{きつしょう}はな…； いや…やっぱコレ
はおいておいて…； …お前にあってから吉祥^{きつしょう}は俺にお前の話ばかり
してきたんだぞ」

阿修羅^{あしゅら}の頬から竜が袖口を離した
すれた血の跡がまだ残る頬を阿修羅^{あしゅら}が触る

「あ…； こりや痕のこ…るな； スマン； 俺もかっとなって

…」

「や…いいんきに…はは…そうけえ…初恋なんか…」

阿修羅が指についた血をペロっと舐めた

「いらん本の知識ばっか知って…あいつのことオライは何も知らなんだな…」

「…阿修羅…吉祥はな…【吉祥】としてではなく自分として阿修羅…お前を」

「そうけえ…でもオライは…」

「吉祥はお前がお前という時間が大切だった…生まれて初めて貰った感情それがなにより大切だったんだ」

竜が微笑む

「誰かを自分の心で愛するということ…自分自身の心で誰かを想うこと…それができるお前といれる時間を吉祥は…」

「…わんでくれんかの…」

阿修羅がうつむいたまま聞き取れない小さな声を出した

「…俺が最後に【吉祥】を呼んだとき…あいつは振り向かなかった…自分はもう【吉祥】じゃないと…お前に名前を呼んでもらえたことであいつは————…」

小さな嗚咽

「…あいつは【吉祥】から解放された…あいつは…あいつの願い叶えたのは阿修羅…お前だよ」

「——————————ッ…」

阿修羅の指が地面をえぐった

「だから…生きろ」

竜の言葉に阿修羅が顔を上げる

「何も残ってなくなかない…お前が生きること【吉祥】ではない吉祥がお前の中に残っているだろう…【吉祥】ではない吉祥を残せるのはお前しかないんだ」

トスッと竜が阿修羅の胸に下がっていた鈴に指をつけた

シャラン

竜が指ではじくとその鈴は小さく鳴る

「…目に見えないものだからいないってわけじゃないだろう…目には見えなくとも…な…？」

土のついた指で阿修羅あしゅらが小さな鈴を掴む

「――――――――――」

呟あしゅらきにも届かない阿修羅自身にしか聞こえないほどの声で何かを言った後 阿修羅あしゅらが小さな鈴を強く握り締めた

「…子供の知らない世界…」

南が呟く

「なんか…お前らってパッパアに見えて重いんだな…」

「パッパアパアって何さ…」

坂田の言葉に矜羯羅こんがらが突っ込んだ

「それで…」

「ん？」

「それでその…【吉祥きつしやう】は…どうなったんだ？ 見つかったのか？」

中島の質問に阿修羅あしゅらが首を振った

そして沈黙

いつの間にか京助の膝に頭をつけて寝息を立てている悠助目だけでのコンタクトがちらちらと行われること数分

「…！」

それまでホケっていた制多迦せいたかがハッとして顔を上げた

「制多迦？」

「…きは？」

いつもは平和そうに下がっている制多迦せいたかの眉毛がりりしくなる

「慧喜えき？」

「毎度思うけどお前よく制多迦せいたかの言ってることわかるよな；」

京助が感心して言う

「永いからね…それに…」

フツと笑った矜羯羅こんがらの言葉を身体でさえぎるかのように制多迦せいたかが立ち上がった

そしていつもの制多迦せいたかからは考えられない俊敏な動きで廊下をかける行く

「タカちゃん?;」

「ちょ…おいおいおいッ;」

各々が立ち上がり制多迦せいたかの後を追いかけていくのに対し膝に悠助が寝ている京助は立ち上がることにすらできずただ声を上げていた

「京助はここで待っててっちゃ」

最後に部屋を出た緊那羅きんならがそう言い残した

「…待ってる…って…俺も気になるんですけどー;」

ガランとなった部屋に一人残された京助がため息をついて天井を見上げる

「…何なんだろうな」

普通ではないとは頭の中でいつも思っていた

でもソレがいつの間にか普通となっていた

でもやっぱり違っていた

でもやっぱり…

「あー…わけわかんねえ…」

血は赤いのに

感触だって同じだし

感情だってあって

ただちょっと変わってるだけだと

外国の人と同じようなレベルで考えていた

文化が違うとかそういうレベルで

でもレベルが違っていた

天井にかざした手をただじっと見る

「こう考えてる俺だって…坂田達とはまた違って…緊那羅きんならも…みんな

な違って…俺は…」

かざした手を握り締めてはまた開いてを繰り返す

同じに見えて違う

この世の中全部がそうなんだと

同じものはひとつとして存在しない

「なんか…怖ええや…」

今までこんなこと考えたこともなかった

考えると考えるほど【ひとり】になっていくような気がした

悠助を起こさないようにゆっくりと後ろに倒れると壁にかけられた
時計が見えた

「…【時】…」

時計が刻む【時】と自分がかかわっている【時】

同じ【時】でも違う【時】

「…怖ええ…な」

ハハッと笑って腕で顔を隠す

「あー…怖ええ…」

【時】を刻む秒針の音が休むことなく聞こえていた

制多迦せいたかが足を止めた

勢いがつきすぎていた坂田と中島が制多迦せいたかを追い越して二人重なって
転んでとまる

「何してるんだっちゃ…」

「家壊れるよハルミママが怒るよ」

烏俱婆迦うくばかと緊那羅きんならが呆れたように中島と坂田に言う

「制多迦…」

矜羯羅こんがらが制多迦の（せいたか）隣に立ち制多迦せいたかと同じ方向へと視線
を向けた

「慧喜…」

制多迦せいたかと矜羯羅こんがらから少し離れた場所から慧光えこうが泣きそうな顔で慧喜えきの部屋の襖を見つめる

「…がって皆…」

「君も下がってなよ…」

制多迦せいたかの前に進み出た矜羯羅こんがらが手を横に出して遮る

「…んがら」

「こんがらっちょ、おまえさんも下がったときに」

制多迦せいたかがのぼした手より先に阿修羅あしゅらの手が矜羯羅こんがらの肩を掴んでひっぱった

とずっと制多迦せいたかに受けとめられた矜羯羅こんがらが少しむっとした顔をする

「何なんです…? ;」

一番最後に来た南がシリ阿斯を予感させる空気に恐る恐る尋ねた

「俺らもよくわからん」

「いや俺は君たちがよくわからんよ」

坂田と絡まったままの中島に南が突っ込む

「慧喜えきがどうかしたんだっちゃん？」

緊那羅きんならが聞く

「おいちゃんもよくわからない」

烏俱婆迦うぐばかが返すと慧光えこうが歩み寄ってきた

「慧喜えきが…慧喜えきじゃないナリ…」

「え?」

震える声で言う慧光えこう

「それって…」

「でも今朝おいちゃんが見た慧喜えきはちゃんと慧喜だったよ?」

くいくいと緊那羅きんならの服をひっぱって烏俱婆迦うぐばかがいう

「中身がちがうとか? まっさかねえ?」

「お、鋭いやんけちっこいのピンポンやんきに」

南が笑いながら言う和阿修羅あしゅらがにぱーっと笑って返した

「ひょう! 大正解!」

「おー! すげえ南!」

中島が拍手する

「…中身？」

わーわー騒いでいた三馬鹿が緊那羅の呟きで顔を見合わせた

部屋の真ん中

座り込む慧喜がゆっくり顔を上げる

「悠助…」

小さく唇が動いてはっせられた名前

「いやだ…」

震える声で慧喜が言った

「…しゅら…」

矜羯羅を背中に隠して制多迦が阿修羅を見ると阿修羅が頷いた

「気配が慧喜のモンじゃないの…これは…」

「指徳…だね」

矜羯羅がそう言った時

「大正解…久しぶりだねえ矜羯羅様、制多迦様」

襖の向こうから聞こえた慧喜の声

いつもと違う真面目でまともな顔つきの制多迦が構えると連鎖反応のごとく残りの面々も各々構えた

「…なあ」

シェーのポーズをした中島がちらりと隣でセーラームーンのキメポーズをしている坂田に呼び掛けた

「これって俺ら参戦しても意味なくね？　むしろしないほうよくね？」

坂田のやや斜め後ろでフラメンコと同じくキメポーズをした南がつぶやくと中島坂田が頷いた

「ふぬけた顔をしててもさすがにってとこだねえ制多迦…」

「…れほどでも」

「君は黙っているなよ…指徳」

制多迦の髪の毛をひっぱった矜羯羅が一步前に出るとゆつくりと襖が開いていく

「慧喜…」

慧光の眉毛が下がった

襖が開く

立っている慧喜は目を閉じたまま

「う…えっ！」

その慧喜を見た瞬間 慧光が口を押さえガクンと膝をついた

「コロ助!?!; ちょ…どうしたんだ!? オイツ;」

坂田が慧光の背中をさすりながら顔を覗き込む

中島と南も慧光を取り囲むようにして集まった

「え…き…」

苦しそうに喉の奥から絞り出た慧光の声が聞こえたのか慧喜がゆつくり目をあける

「慧喜…っ」

「待て待てコロ助; おい坂田そっち支えて」

よろよると自力で立ち上がりとした慧光の左脇の下に手を入れ支えた中島が坂田に言う

「残念だね慧光…今コレは私のモノでね」

慧喜の声で慧喜の中の指徳が笑った

「慧喜は…? 慧喜はどこナリか!」

「キヤー; 落ち着いてえこーさーん;」

南が中島と坂田を振り払おうとする慧光の腰に抱きついた

「今度はまた…仲間の体を借りるたあ…な指徳」

阿修羅が鼻で笑いながら言うと言った慧喜の姿のまま指徳が笑う

「慧喜が望んだんだ」

「嘘!」

慧光が叫んだ

「嘘ナリ！！　そんなの…っ！　えき 慧喜が…」

「嘘じゃないさ、ちゃあんとえき 慧喜から頼まれたんだよ？　…ねえ？」

「…！！　しまった！　ボン！！」

弧を描いたえき 慧喜の唇にあしゅら 阿修羅が何かに気付き声を上げた

「何かきたしオイ…；」

悠助を抱き抱え壁に背をつけた京助が【何か】を引きつった顔で見る
鎧のような摩化不思議服を着たオレンジ色の髪の女性

「どちら様…？；　あのーできれば靴は脱いでほしいんですけども
ー」

京助が話し掛けてもその女性は返事をしなかった

「てか言葉わかるか？　俺の話してる日本語、わからねえ言われて
も困るからわかつとけよ？　で…まずはだから靴…」

相変わらず京助の話には返事はせず代わりに赤い唇の両端が持ち上
がり弧を描く

「…っ；」

全身を走り抜けた悪寒に京助が身を竦めた

背中が壁だとわかつているのにまだ後ろへ逃げたい感覚
自然と悠助を抱く手に力が入った

『ヤバイ』

弧を描く赤い唇はそのまま女性の踵が床から離れた

『ヤバイって』

頭の中ではもうとっくに駆け出しているのに現実はまだその赤い唇
から目を離せず動けずにまだ寝息をたてている悠助を抱いたままで
何もできず背中に感じる逃げ道無しの現実
心臓が痛いくらい早くなっている

指先もあんまり感覚がない
声もでない
体が動かない

「きょう…すけ？」

柱に手をついた緊那羅きんならが名前を呼ぶ

返事はない

矜羯羅こんがらと阿修羅あしゅらが部屋に入ると苦い顔をした

「結界…だね」

ぐるり部屋を見渡した矜羯羅こんがらが言う

「京助ー！！ 悠ー！！ どこだー！！！」

「でてこーい！！ 飯だぞー！！」

南と坂田が部屋の中と外にむかって叫ぶ

「京助ー！！」

緊那羅きんならも叫ぶ

「無駄やんきに…竜のボンらは…結界の中やんきをの…破らないか
ぎり…」

阿修羅あしゅらが悔しそうに言うのを見た緊那羅きんならの膝がかくんとおれて座り
込んだ

「…んなら…」

小走りきんならで緊那羅に駆け寄った制多迦せいたかが肩に手を置く

「矜羯羅様…」

烏俱婆迦こんがらが見上げた矜羯羅こんがらは唇を噛んだまま眉間にしわを寄せていた
「上…」

ぎりっとこぶしを握り締めて矜羯羅こんがらが呟く

「なら破ればいいじゃん！！ できるんだろ！？」

中島あしゅらが言う和阿修羅が首を横に振った

「…上が張った結界は…」

「じゃ…じゃあ…京助と悠…は？」

南が躊躇いながら聞いても誰からも返事はなく

チリーン：

浜風がならした風鈴の音がやけに大きく聞こえた

くすくすという笑い声に一斉に振り返る

「慧喜…いや…」

「指徳…」

腕を組んだ慧喜：指徳がゆっくりと部屋に入ってきた

「京助と悠をどこやったんだよっ！！」

南が怒鳴る

「二人は結界の中だよ…」

そう言った矜羯羅をはじめいつのまにか摩化不思議服になった面々が三馬鹿をかばうように慧喜に向かい合う

そんな中一人だけ摩呵不思議服になっていない緊那羅

「…んなら…」

制多迦が座り込んだままの緊那羅の背中をさする

「…いじょうぶ…京助と悠助は大丈夫、君はそう信じないといけないよ」

そういうと制多迦が立ち上がり皆と同じように慧喜の姿の指徳と向き合った

「…んじて緊那羅」

緊那羅の右腕の腕輪のほんのり緑色の宝珠が光る

「…きょうすけ…私が…」

緊那羅が両手の握りこぶしをぎゅっと握った

「くんな！！」

京助が怒鳴る

「って言ってとまったら明日から5時に起きてやらあ…」
一歩一歩近づいてくる女性を見て悠助を抱く腕に力がいって壁に

着けた背中には熱くもないのに汗をかいていた

「っ：何だよ！ 何：つまたアレか！ 時がってのかよ！！」

京助が女性にむかって怒鳴っても弧を描いた赤い唇はそのままただ
ゆっくりと二人にむかって進んでくる

『やばい：』

どくん、と心臓が跳ねたかと思うと背中が痛いくらい熱くなった
と同時に下から巻き起こった強風

「っだああっ！！！」

悠助を抱き締めて京助が強風に耐える

背中には竜の羽があらわれていた

「そんなに怖い顔を揃えなくとも今回はまだあいつらに手はだしは
しないよ」

慧喜の姿の指徳が言った

「今私が：上が欲しているのは：竜の力さ」

「竜：の？」

慧光が構え姿勢をやめた

「どういうことやんきに：竜の力って：」

慧喜の姿の指徳が向けた視線の先には制多迦

制多迦に一斉に視線が向けられると制多迦が締めなくなりヘラリと笑
った

「まさか：」

矜羯羅がハッとして慧喜を見ると慧喜の傍に立っていたオレンジの
髪の女性

「指徳！！！」

赤い唇がニツと弧を描くと途端 慧喜の体が崩れた

「慧喜！！！」

慧光が駆け寄ろうとするのを矜羯羅が止める

「慧喜!! 慧喜っ!!」

「落ち着きなよ慧光」

矜羯羅の手が慧光の頭におかれた

「…阿修羅？」

烏俱婆迦が前に立っている阿修羅の異変に阿修羅の服をくいっとひっぱった

「阿修羅…阿修羅ってば」

阿修羅の体を揺する烏俱婆迦の声はおそらく阿修羅には聞こえていないのだろう阿修羅は目を指徳に向けたままぴくりとも動かない

「竜が封じた制多迦を解放するには竜の力が必要なんだよ」

制多迦の頭についていた宝珠の中には竜によって封じ込められた【制多迦】がいる

制多迦の顔が歪んだ

「その前に」

緊那羅の声が部屋に響いた

「京助と悠助を返してもらっちゃ」

摩訶不思議服になった緊那羅が立ち上がり指徳を見てきっぱりと言った

緊那羅の言葉に指徳の口の端がニツとあがった

「返すも返さないも…ねえ？ 言っただろう？ 私が欲しいのは…」

竜の、力なんだよ」

そう言い笑う指徳の手には制多迦の頭についていた宝珠があった

「ラムちゃん!!」

南の声に緊那羅が振り向くと目に入ったもの

「き…」

三馬鹿に囲まれ揺すられている京助

その腕の中には悠助がいた

「京助!!」

中島を押し退けて京助の頬をぺちぺち叩きながら緊那羅が名前を呼ぶすーすと寝息をたてる悠助に対してぐったりとしてぴくりとも動

かない京助の鼻に坂田が手をかざした

「生きて…はいる」

坂田の言葉に張り詰めていた空気が一皮だけむけた気がした

「おいちゃんの計算によると指徳しとくは京助の中の竜の力をとったんだ」
烏俱婆迦うぐぼかが言う

「竜の力…って力ってたしか…いの…ち…」

前に聞いた話を思い出した南が言うとか中島と坂田が京助を見た

「じよ…うだん…」

「じゃあ何か！？ あいつ…あいつ京助の命とったってのか！？」

じゃあ京助…は…」

「最小限の力は残した」

騒ぐ三馬鹿に指徳しとくが言う

「あとは…そいつ次第だねえ…死ぬも生きるも」

指徳しとくが宝珠を撫で笑う

「…とく…」

制多迦せいたかが指徳しとくに棒を向けて構えた

「…ようすけの力返してくれる？」

いつも下がっている眉を上げ制多迦せいたかが指徳に言う

「無駄だよ制多迦…」

制多迦せいたかの隣に矜羯羅こんがらが立った

矜羯羅こんがらの周りには小さい玉がいくつも浮いている

「渡す気はない…だったら奪うしかないだろ」

「おやおや…怖いねえ…」

くすくす笑う指徳しとくが足元に倒れていた慧喜えきの体を抱き上げた

「慧喜…！」

慧光えこうが駆け出す

「慧光…！」

小さな黒い玉が慧光えしこうと慧喜えきの間に現われた

矜羯羅こんがらが慧光えしこうの腕をひっぱったのとはほぼ同じくして目を開けては
いられないほどの光と押しつぶされそうなほどの重力が襲う

「っ…」

瞬時に矜羯羅^{こんがら}が宙に光で印を描くと重力が和らいだ

光が引くと指徳^{しとく}と慧喜^{えき}そして黒い玉の姿はどこにもなく

「え…き…」

キィキィと室内灯がゆれて上に蓄まっていた埃が落ちてきた
何事もなかったかのように聞こえた風鈴の音は4回

青かった空がいつのまにか灰色にかわっていた

【第十三回・弐】雨が止んだなら（前書き）

目覚めない京助
そして

【第十三回・弐】雨が止んだなら

ざあざあと雨が屋根を打つ

昼間の晴天はどこに行ったんだというくらいのざんざん降りの雨
閉められた縁側の引き戸の内側には鳴らない風鈴がぶらさがっている
いつもならうるさいくらいの栄野家は静まり返っていた

「…すいません…京助に力がないならば…ソーマは効きません…」
乾闥婆けんたつばが力なく言う

「京助本人が力を吸ってくれるなら…竜みたいに僕らの力吸えばいいんだけどね…それすら…」

窓の枠に腰掛けた矜羯羅こんがらがぎゅっと自分の腕を掴んで唇を噛んだ
「本当ぎりぎりですべて生きてるんだ…京助ぎりぎり…で」
南が呟いて膝に額をつき黙りこむ

「ごめんくださいーい、おばんですー」
ガラガラと玄関の引き戸が開けられる音と静かな家中に響いた声
「し…ばた…？」

坂田が立ち上がり戸を開けて玄関に顔を向けた

「柴田…」

「…あがってもいいですか？」

ごしっと目をこすった坂田がうなづく

「ほらほら若泣いても始まりませんよ？」

「泣いてねえっ!!」

坂田の背中をぽんぽん叩きながら柴田が茶の間の前になると軽く頭
を下げた

「清浄…」

「…上が動きましたか…」

もう一つの名前を呼ばれた柴田が静かに言う

「竜が封じた【制多迦せいたか】を解くつもりなんだろう…京助の中の竜の
力を殆ど抜き取っていったそうだ」

迦楼羅^{かるら}が腕を組みなおした

「：：そうですか：：で：：京助君は：：？」

しかれた布団のまわりだけが即席で片付けられた京助の部屋には緊^き那羅^{んなら}と悠助と母ハルミ、そして制多迦^{せいたか}

しかれた布団に寝かされた京助は寝返りもせずいびきもかかずにただ微かに息をしているだけだった

「：：緊ちゃん」

母ハルミが緊那羅^{きんなら}を呼ぶと緊那羅の肩がぴくつと動いて眉を下げた
緊那羅が顔をあげる

「はい：：」

ワテンポ遅れて緊那羅^{きんなら}が返事をした

「：：7年前はありがとう」

「え：：」

「何故かねいきなり思い出したの7年前のこと：：きつと竜之助が何かしてたのね、まったく：：」

ふうつと鼻から息を出して母ハルミが緊那羅^{きんなら}に笑顔に向けた

「あ：：のでも私：：」

「操：：なんでしよう？ あなたの体」

緊那羅^{きんなら}が俯く

「：：めんなさいハルミママ：：緊那羅^{きんなら}は悪くなくて悪いのは」

「あらなあに？ 怒っているわけじゃないのよ私」

母ハルミが制多迦^{せいたか}にっこりと笑顔を向けて言った

「竜之助と一緒にいるってことはいつこんなことが起きてもおかしくないってわかってたのよ私」

母ハルミが京助の頭を撫でた

「：：本当は7年前にこうなっていたのよね：：」

緊那羅^{きんなら}が握っていた手をさらにきつく握り締める

「それが7年：：7年くれたのは操だったって：：だけど操はもういないでしょう？ だからかわりに緊ちゃんに言ったのよ、でも：：操じ

やないのよねごめんなさい混乱しちゃうわよね」

母ハルミの眉毛が下がった

「京助…」

悠助が京助の顔を覗き込む

「眠ってるの？ まだ八時なのに具合悪いの？」

京助に守られ眠っていた何も知らない悠助が京助の鼻を摘んだ

「悠助…」

そんな悠助を見て緊那羅が目をこすった

ぽふっ

緊那羅きんならの頭の上に置かれた制多迦の手がポンポンと緊那羅きんならの頭を叩く

「…ったよね僕…君は信じないといけないよ京助を何があってもね」
につこり笑って制多迦が言うと言を押さえたまま緊那羅きんならが何度もうなずいた

「さあ！！ …ご飯にしましょうか」

パンつと母ハルミが手を叩いて立ち上がる

「…京助が起きておなかが減ったって騒いだら大変だものね。悠ちやん手伝ってくれる？」

「はあい」

悠助が元氣よく返事して立ち上がると京助の部屋の戸をあけた

「緊ちゃん、タカちゃん京助…おねがいね」

そういい残して母ハルミが戸を閉める

コチコチとあまり活躍していないであろう目覚まし時計の秒針の音が大きく聞こえるがどれだけ時間が過ぎたのかはわからなかった
震える手を伸ばして緊那羅きんならが京助の額の髪をかきあげる

「…あったかいっちゃ…京助…」

「…ん」

今度はその手で頬に触れる

「…今日はよだれたらしてないっちゃ」

「…ん」

だんだんと緊那羅きんならの声が震えてくるとそれまで相槌でうんうん言っていただけの制多迦せいたかが緊那羅きんならを抱き寄せた

「…うすけが前に言ってた泣き止むまでこうやってるといいって」

緊那羅きんならの頭に自分の頭をつけて制多迦せいたかが緊那羅きんならの頭を撫でる

「…ようすけのかわりに僕が今は付き合うからだから…泣き止んだら信じようね」

「っ…ひっ」

しゃっくりのような声ひとつ

そしてその後きんならに小さく嗚咽が続いた緊那羅きんならの頭を制多迦せいたかがゆっくり何度も優しく撫でた

外の雨はまだ当分止みそうにもなくざあざあきんならと降り続いていた

「ウラ、起きんかばかもの」

乱暴にタオルケットを奪い取られまだしよぼしよぼする目をこすった

「ラジオ体操開始20分前。一番乗りすんだろ？ 坂田に先越されんぞ？」

「坂田はじいちゃんとかいってる…つくあああ…」

腕を上にあげると同時にあくびが出た

「操ちゃんも一緒にこ？」

「はあ？； だあれが中3にもなって小学生の輪の中で腕を前から上げてエントとかやらんとなんねーんだよ； きゃーっか！ …俺はこれからハル姉に仰せ使った境内清掃にむかうんだよ」

ごそごそと少し短めのハーフパンツを履いた操が口にくわえていたゴムで髪を頭のほぼてっぺんで括る

色素の薄い髪は朝日を浴びると金髪にも見えた

「つか京助おまえいいかげん夜中に俺の布団きんなら中潜り込んでくるのやめろよな？ もう小学生だろ？ 悠にも笑われんぞ？」

肩に白いタオルをかけて操が京助を見下ろしそして足で軽く数回つついた

「だって…怖い夢みんだもん…」

京助が口を尖らせてごによごに言う

「んな毎日毎日怖い夢みんのかよ；　　ったく…」

はあっとため息を吐いた操が足でタオルケットを部屋の隅まで蹴った
「ま…おねしょやらなくなっただけヨシとすつか…ほれ、遅刻すぞ」

くしゃくしゃと京助の頭を撫で回して操が部屋を出ていく

京助がうれしそうに笑ったあと布団から飛び起きた

「みーさおちゃん」

「留守です居留守ぐー」

和室の扇風機の前で足で足を掻きながら漫画を読む操がだらけた返事をする

その背中に京助がまたがった

「京助おまえそのまま座ってみろよ？」

操が京助の方を見ずに言う

「操ちゃん海いこーよ」

「俺は今居留守つつたろが。居留守だ居留守、いるけど留守なんだっつーの」

ひらひらと手を振って操が返すと京助がぷーっとむくれた

「いーじゃん暑いだろー行こうよーねーねーつままないんだってー」

「んなこと俺が知るか；　　おまえはつままないんかもしれねえけど俺はつまってんだよ」

パラっと漫画のページをめくりながら操が面倒くさそうに言う

手を伸ばして扇風機の風力を強に切り替えると操の髪がその風に乗って京助の足をくすぐった

「操ちゃんがつまってても俺はつままないもん」

「んなこと知るか」

「：操ちゃんのばあかッ！！！」

ガスッ！！

「だッ！？；　てめ；　京助！！！！；」

京助が思い切り操の尾てい骨をかかとで踏んで逃げる

「もう夜来てもしらねえかなッ！！！！；」

「まったく：小学生相手に何むきになってんのよアンタは」

操の怒鳴り声は境内の方まで聞こえたらしく母ハルミに説教されたっぽい操がテーブルに頬をつき機嫌の悪そうな顔でじっと母ハルミを見る

「構って欲しくてちょっかいだしてるんだから」

「わーってるよんなこといわれなくなつて：」

操の前におかれた麦茶のコップの氷がカランと音を立てて崩れた

「昔はアンタも私にそういうことしてたんだから」

洗濯物を縁側にどっさりと置いた母ハルミがはいていたサンダルを脱いで家にかかる

「京助よりもっとタチが悪かった気もするし」

「はいはいはいはい；　ワタクシが悪うござんした；」

どこか黒い笑顔をむける母ハルミから顔をそらして操が分が悪そうにいった

「そうだなあ俺を勝手に敵視してたしなあ」

「りゅッ：；」

「あら竜之助」

頭上から聞こえた声に操が上を向きそこにいつの間にかいた竜に驚く

「からかいがいがあったなあ：」

「黙れこのクソ；」

あからさまにからかっています、というカンジで竜が言うと操はテーブルに顎をつき悪態を吐いた

「なあ……」

中島が誰に呼び掛けるでもなく声を出した

「宝珠とか力とか時とか……さ……説明とかしてくれねえわけ？　したら……もしかしたら俺らでもできることあるかもしれないねえ……し」

中島が躊躇いがちに言う^かと迦楼羅^{かるら}がチラと乾闥婆^{けんたつば}をみる

「前に言ったことあると思うけど……宝珠がなければ僕らも君達と同じなんだよ……宝珠が力を具現化させているんだ」

矜羯羅^{こんがら}が淡々と話した

「力っていうのは誰にでもあってね……その力って……何かってことはわかってるよね？」

「い……のちだよな……？」

坂田がつぶやくと矜羯羅^{こんがら}が頷く

「命は誰にでもあります……生きていればそれこそ植物だって宝珠に選ばれたのなら力を使えるようになったり……」

「ああ……ヒマ子さんか」

迦楼羅^{かるら}の宝珠が鉢にあることによって動き話す夏の妖精の名を南が口に出した

「あなた達は生きるだけに使う命を僕らはその他に力として使うことが出来るのは宝珠に選ばれたからなんです」

乾闥婆^{けんたつば}が自分の胸についている宝珠を触って言う

「宝珠はもとひとつで……僕の宝珠も迦楼羅^{かるら}の宝珠もとは一つだった……長く付き合えば宝珠も声を聞かせてくれるようになる……僕らが宝珠を使っているんじゃないやなくて宝珠に僕らが使われているんだ」
手のひらをくるっと返すと矜羯羅^{こんがら}の指の間にあらわれた小さな玉を矜羯羅^{こんがら}が指で弾くとフツと玉が消えた

「選ばれた僕らを崇めるやつもいれば疎ましく思うやつもいる……宝珠を我が物にして力を使おうとするやつもね……」
矜羯羅^{こんがら}が目を伏せる

「でもね僕の宝珠をたとえばそうだね…若」

「…は?;」

ちらっと坂田の方をみた矜羯羅こんがらに自分を指差して坂田が俺? とい
うカンジのジェスチャーをした

「坂田です先生;」

「どうでもいいよ…僕の宝珠を若がもつと…どうなると思う?」

坂田の言葉を右から左に受け流した矜羯羅こんがらが聞く

「力が使えるようになるんだろ? さっき言ってたじゃん」

中島が言うこんがらと矜羯羅の口元があがる

「死ぬよ」

一瞬音が消えた

「宝珠は一度選んだ持ち主だけが使えるんです…それ以外の人が宝
珠を使おうとすると…ありったけの力…命を逆に使われてしまうの
です」

乾闥婆けんだつぱが静かに言う

「だから僕の宝珠は僕にしか使えない…」

つぶやくように矜羯羅こんがらが付け足した

「…あれ? でもじゃあ…ヒマ子さんってどうなんだ? かるらん

の宝珠使って…」

南が思い出して呟くと乾闥婆けんだつぱが俯く

「んんッ!!」

「…それはまた今度だね」

そんな乾闥婆けんだつぱを見た迦楼羅かるらがわざとらしく咳をすると矜羯羅こんがらがフオ
ローのごとく言った

「まあ…宝珠のことをまとめると…宝珠に選ばれたヤツしかそれ
を使えなくて使うには命が必要で別のやつが宝珠を使うとアカンっ
て…ことだ…よな?;」

坂田がまとめた方がいいが自信がなかったのか周りにこんな感じですよ
ね? というカンジで聞く

「…そして…ソーマという薬は…力をかりて力を回復する薬…いっ

てみれば増幅薬ということになります：だから今の京助：には：」
「：宝珠に選ばれた竜の力がないと等しい京助には効いても効いて
ないと同じなんだよ：」

言葉を詰まらせた乾闥婆けんだっぽに続き矜羯羅こんがらが後に付け足す

「意識がないから僕らの力を自力で吸い取ることもできない：」

「なすすべ無し：ですか：」

小さく言った矜羯羅こんがらとは反対に柴田がわりとはっきり言うと言わんと坂田が
柴田を睨んだ

「なすすべなくない！！ 何かあるんだ！！ 絶対：ッ：！！！！」

「わ：か； すいません；」

柴田のネクタイを掴んで怒鳴った坂田に柴田が苦笑いで謝る
そして訪れた沈黙

ざあざあという雨の音だけが家の中に響いている

時たま聞こえるコンコンという音は外に放置プレイされた何かに雨
が攻撃している音だろう

ふいに中島が立ち上がって戸に手をかけた

「なしたんよ」

南が声をかける

「：ハルミさんに今日泊まっていいいか聞いてくる」

「あ、俺も行く！」

「俺も」

中島が言うと言わんと南も立ち上がった

「俺は：さすがに駄目でしょうねえ；」

柴田がハハッと笑いながら言う

「駄目もとで聞いてみりゃいいじゃん柴田さん」

「うーん：じゃあ：」

柴田が立ち上がろうとすると茶の間の戸が開いた

「おかえり」

開いた戸の方を見ずに矜羯羅が言うと言わんと戸をあけた制多迦せいたかがヘラリ笑

い手をあげた

「…京助は？」

黙っていた烏俱婆迦うぐばかが制多迦せいたかに聞くとその場にいる全員が制多迦せいたかに視線を向けた

「…ようすけは…」

熱もない

ただ眠っているようで

でもこんなに静かに寝る京助は初めて見た

いつも起こしにくると布団が壁の方まで吹っ飛んでいて

腹も背中も出ていて

下手したら半分尻もでてたりして

よだれ垂らして

でも幸せそうな顔をしていて

「京助…」

小玉電球のオレンジ色の明かりの下で緊那羅きんならが小さく名前を呼んだ
それにたいしての返事はなく

「京助あのね…私…」

それでも緊那羅きんならは話し続ける

「…あのね」

正座した膝の上にあった手をぎゅっと握った緊那羅きんならがゆっくり顔を
あげた

ざあざあとい向に止む気配がなく降り続く雨の音

いつもならこんなに長く続く沈黙には耐えられない京助が激しく突
っ込みを入れるだろう

無駄に動きを入れてキレよくスパーンと

「…ぷ…」

何かを思い出したのか緊那羅きんならが小さく吹き出した

「京助…私…」

眉を下げた笑顔で緊那羅きんならが京助の手を握る

「…信じてるっちゃ…」

両手で京助の手を包んで緊那羅きんならが小さく言った

「明日エビフライとふのりとイモの味噌汁と…あと何か京助の食べたいもの作るっちゃね」

返ってこないとわかっている返事

「坂田とか…今日晩飯食べて帰るんだっちゃんかね？　なら早く起きないに残ってないかもしれないっちゃ」

それでも緊那羅きんならは話し続ける

「…ね、京助」

京助の手を強く握った緊那羅きんならが微笑んだ

「そっか…まだ起きないんだ…まあ…そうだ…よね」

南がわざと笑顔で言うせいたかと制多迦せいたかが頷く

「緊那羅きんならがついてるなら大丈夫だよ」

「何が大丈夫なのかわからんけど…まあ大丈夫なんだろうな」
烏俱婆迦うぐばかの言葉に中島が何となく納得したように頷いた

「…君のせいじゃないからね…変な考えもってるなら殴るよ」

矜羯羅こんがらの腰掛ける窓枠の下に腰を下ろした制多迦せいたかに矜羯羅こんがらが言った
「…君のせいだって言うなら僕のせいでもあるんだ…わかった？」

「…ん…でも」

「でもじゃない」

「…めん…」

制多迦せいたかの頭を鷲掴みにした矜羯羅こんがらがその手にぐぐつと力をこめてギリギリと制多迦せいたかの頭を掴み絞める

「タカちゃんタカちゃんそんなこと京助の前でいったら即効突っ込まれんぞ」

中島が言う

「誰かのせい、ってのあいっちゃん嫌いだからなあ…絶対つかむな、うん」

南がウンウン頷くと坂田も同じくウンウンうなずいた

「のわりには結構自分…」

ハハッと笑った坂田の眉が下がりため息をつく

「何だかな…気付くと京助の話しになってんな」

「ハハハ…確かにそうですね…大きいんですね京助君の存在って」

柴田が坂田の頭を撫でながら言うとその手を坂田が払った

「まあ確かに…そうかもしれんな」

腕を組みなおし迦楼羅かるらが言う

「…あの雰囲気は…気分がいい…やかましいがな」

「そうですね…僕も騒がしいのは得意ではないのですけど」

「京助の名前が出ただけでこうも話題が出てくるもんなんだな」

張り詰めていた空気の一点が取れたかのように話し始めた一同の表情にほんのりと笑みが浮かぶ

「あら勝美君いらっしやい」

茶の間の戸が開いて正月スーパ一の袋を手にした母ハルミが入ってきた

「あ、どうも…買い物ですか？」

「ううん違うの。社務所の冷蔵庫に入れてあったの持ってきただけよ」

台所に向かいながら柴田に返す母ハルミにその場にいた全員が視線を向ける

「さあ急いで晩御飯作るわね、誰か手伝ってくれないかしら」

「あ…僕が」

台所から聞こえた母ハルミの声に乾闥婆けんだっぱが立ち上がる

「…俺も」

そして中島も立ち上がった

「俺も手伝うかな」

「俺も手伝いますハルミさん」

中島に続いて南と坂田も立ち上がり台所に入る

「おいちゃんも」

「あ：私も」

三馬鹿えこうに続いて慧光えこうと鳥俱婆迦うぐばかも小走りせうしで台所に入った

「僕らも行く：？」

さつきは誰もいなかった台所の人口密度が増して逆に4人しかいなかった茶の間で矜羯羅こんがらが3人に声をかける

制多迦せいたかがヘラリ笑ってうなづく

「：たまには：いいかもな」

迦楼羅かるらが立ち上がり腰を伸ばす

「どうかこれだけの人数がいると逆に手伝うことがあるのか：ですけどね」

笑った柴田が台所の暖簾をくぐった

「がらっちょ」

茶の間ですり鉢を押さえていた矜羯羅こんがらがあまり呼ばれたくない呼ばれ方で呼ばれ怪訝けんげんそうな顔を上げる

すりこぎ棒をぐりぐり動かしながら呼ばれていない制多迦せいたかも一緒に顔を上げた

「何さ」

すり鉢を押さえたまま矜羯羅こんがらが返事をする和阿修羅あしゅらがちよいちよいと手招きする

それを見て制多迦せいたかと矜羯羅こんがらが顔を見合わせると制多迦せいたかがヘラリ笑って頷いた

「……」

握った京助の手をときたま撫でる緊那羅きんならが小さくため息を吐く
ざあざあという雨はまだ止まずもしかしたらさつきより降り方が強くなった気がした

布団に寝る京助は微動きんならすらせず不安になった緊那羅きんならがそっと京助の鼻に手をかざして呼吸があることを確かめ安堵の表情で京助の頭を

撫でる

「…京助…」

頭から手を離しながら名前を呟く

ゴトゴトゴトゴトゴト…

何か重たいものを引きずる音が部屋の前で止まった

「緊那羅様」

「ヒマ子…さん？」

戸を開けずに名前を呼ばれた緊那羅きんならが京助の手を離して立ち上がり戸を開けるとヒマ子が俯いて立っていた

「…京様のご容体はいかがかと…」

両葉をこすり合わせて言うヒマ子がチラと緊那羅きんならを見る

「あ…まだ眠ってるっちゃ…」

「そうですか…」

緊那羅きんならが答えるとヒマ子が静かに言いそして黙り込んだ

「…あ…のねヒマ子さん…京助は…」

「大丈夫ですわ緊那羅様京様なら大丈夫です」

無理に笑顔を作って話す緊那羅きんならにヒマ子が笑顔で言う

「京様ですもの…そうでしょう？ 私が全力で愛しているんですよ？ 妻を残していなくなるような方ではございませんわ。そんな薄情な方は愛せませんわ」

茎に葉をつけてヒマ子がきっぱりと言い切るときよんととして聞いている緊那羅きんならが眉を下げた微笑んだ

「ヒマ子さん…」

「…だからそんな顔で京様を看病なさらないでください」

ヒマ子と同じように眉を下げた笑顔を緊那羅きんならに向ける

「目が覚めたとき貴方がそんな顔をしていたら逆に心配されますわ…京様が見たいのは…そんな顔ではないと思います」

ヒマ子の葉が緊那羅きんならの目元に伸び浮かんでいた涙を拭った

「…私負けたとは思っていませんからね」

「…うん」

「今は一時休戦という形ですからね」

「え…?; あ…うん?;」

「わかりまして!？」

「は…い;」

ビシッと強く言うヒマ子にちよいびビリがちに緊那羅きんならが返す

「よろしいですわ」

ヒマ子が頷きゴトゴト鉢を引きずりながら部屋を後にする

「あ…ヒマ子さんっ!!」

「あまり大きな声を出さないほうがよろしいのではないのですか？」

…なんでしょう」

緊那羅きんならがヒマ子を呼び止めた

「ありがとうだっちゃ」

「…その笑顔、京様が起きたときに見せて差し上げるのにとっておいてくださいませ」

そう言い残しゴトゴトという音をつれてヒマ子が廊下の角をまがった

「何の用？」

廊下の壁に寄り掛かって矜羯羅こんがらが面倒臭そうに聞く

「…あのながらっちょ…」

「その呼び方やめてくれない？」

矜羯羅こんがらが阿修羅あしゅらを軽く睨んだ

「…で？」

「指徳しとくの…ことなんだけんな…」

「指徳しとく…？」

聞かれた質問の意外さに矜羯羅こんがらが少し驚く

「指徳しとくが…何？」

「…指徳しとくってさ…その…指徳しとくのことわかる範囲でいいんきに…詳しく聞きたいんよな」

「…いいけど」

あからさまに作りましたな笑顔で言う阿修羅あしゅらに何かを察しそれ以上突っ込むことをやめた矜羯羅こんがらが壁から背中を離した

「指徳しとくは僕らとはまた違って…体をもっていなくてね…だから他人の体に移ることができるんだよ…慧喜えきの体に入っていたみたいだね

…」

「慧喜えきの体の前に入ってた体について何かしらんかの…？」

阿修羅あしゅらが聞くと少し何かを考えた矜羯羅こんがらが阿修羅あしゅらを見る

「…あの体は…こっちの世界のもの…それくらいしかわからないかな…悪いけど」

「そうけ…いや！ あんがとさんがらっちょ！ タカちゃんごめんなー今がらっちょ返すからに」

阿修羅あしゅらが茶の間をのぞいて一人ごりごりしていた制多迦せいたかに言った

「…阿修羅…？」

「タカちゃんまってるけの」

ひらひら手を振って歩きだした阿修羅あしゅらの背中を矜羯羅こんがらがじっと見る

「…んがら？」

ごりごりすり棒を動かしながら制多迦せいたかが矜羯羅こんがらを呼んだ

「今…いくよ」

矜羯羅こんがらが茶の間に入り戸を閉めた

竜之助が廊下にはんのり漂う線香の匂いに仏間の前で足を止め部屋を覗き込む

仏壇の前には操の姿があり4本の線香から煙があがっていた

「…今年で…何年だったか…」

そういうながら竜之助が仏間に入ると操が振り向いた

「俺が4歳るときだから10年…かないや9？ …そんなくらい」
操が仏壇にまた顔をむける

「もうそんなになるか…」

線香の灰がぱらりと落ちた

「：爺ちゃんと婆ちゃんと：母さんと父さん：」

「一人1本か」

操が頷く

「何だかな：俺：あーあ：よく生きてたよな俺だけ：あんなでかい事故だったのによ：」

足の裏を合わせて体を揺すりながら操が呟いた

「まあ：そうだな」

「母さん達の時間止まってんのに俺だけ動いてさ：でかくなって：いいんかな：」

位牌の横に置かれた写真立てに写る7人

母ハルミにそっくりな女性に抱かれ意気揚揚とピースをする子供を見つめて操が目を細めそしてうつむく

「全然覚えてねえんだぜ：気付いたら病院でハル姉がベッドの横にいた：ついでにお前もな」

「俺はついでかよ：」

竜之助が突っ込む

「：車ん中で眠くなって：目が覚めたら母さんじゃなくハル姉が：泣いてた：寝て：たんだあんな事起きてたのに俺：すげえよな人死んでる事故なのに寝てたんだぜ？　　どんだけ図太い精神なんだろうな俺」

操はハハッと笑う

「母さん：俺を抱き抱えてたんだろ？　　：婆ちゃんも：母さんと俺をかばうようにって：」

操が写真立てを手にとるとそれを裏返した

写真立ての後ろにはられた小さな封筒に入っていたのは切り取られた新聞記事

【トラックと正面衝突のちガードレールへ、幼子残し4人死亡】
そんな見出しの記事を見た操の眉が下がった

「親が子を守りたいって思うのは自然なことだ、：と俺は思う」

竜之助が座ってあぐらをかき操を見る

「いやまて：人が大切なモノを守りたいと思うこと：か」
少し考えた竜之助が言い直した

「ナツミにとって大切なものってのがお前だったんだろう」

竜之助の手が伸び操の頭をくしゃつと撫でる

「お前にもあるだろ？ 守りたいってモノが：人であれモノであれ：形のないものであれ：無いか？」

「操ちゃん！ 操ちゃん操ちゃんー！！」

ガラツと戸をあける音

ばたばたと廊下をかけてどこかの部屋で止まりそしてまたばたばたと
「：わっかんね」

反動を付けて立ち上がると伸び操が言う

「わかんねえけどさきつとたぶん：あるんだろな俺にも」

写真立てをもとの場所に戻し操がじつとソレを見つめたそして名残惜しそうに手を話すと大きく息を吐き顔をあげる

「みさおちゃあーん？ いないのー？」

「：おーおー：探されてる探されてる」

必死で自分を探していることが声からわかったのか操が苦笑いをしながら声の方に足を進める

「もしソレがわかったら俺も母さんみたく守ってやりたい：と思います、終わりッ！ おー！ 何だー！！」

声を張り上げながら操が廊下を歩いていく

「いるなら返事してよー！！」

「俺は留守時々居留守なんだよ、で？ 何だ？」

「見て見てー！！」

廊下から聞こえる二つの声に竜之助がほほ笑み仏壇の写真に目を向ける

左端に写る今と全然変わらない自分の姿の横には制服姿の少女が笑いながら立っていた

「：変わっていくことと変わらないことは：どっちが酷なんだろう

な…」

呟いた竜之助が立ち上がり仏間を出ると廊下にまだ二人がいた

「何してんだ？」

「あ、とーさん！ 見てー！！」

近付き声をかけると京助がもっていたノートを広げた

「これが操ちゃんね、これがとーさんでこっちが…」

京助がクレヨンで描かれた絵日記のおそらく人なのだろう図形を指さし名前をあげていく

その横で操が遠くを見たまま固まっている

「…うーん…よく描けてるなあ…特に操なんかこれ、写真みたいだぞ京助」

竜之助がハッハと笑いながら操の頭をぽんぽん叩いた

「…アーソーデースネー」

遠い目をした操がロボットのごとく言った

ふと時計を見るとまだ八時と十五分とちよつと

かなり時間が経っていたように感じていた緊那羅きんならが時計から京助へと目を移す

相変わらずに一定の呼吸をしつつも微動すらない京助を見る緊那羅きんならの目に涙が浮かんた

ごしごしとその涙が流れる前に目をこすり拭うとズツと鼻を啜りまた京助を見る

「信じなきや…大丈夫だって私が信じなきや駄目なんだっちゃ」

緊那羅きんならはそう自分に言い聞かせて息を吸いそれを深くゆっくり吐き出すと口元に笑みを作り顔をあげた

「…信じて…るっちゃ」

緊那羅きんならが笑顔で京助に言った

外ではまだ雨がざあざあど降り続いている

「迦楼羅^{かるら}」

よばれて顔をあげた

「…めずらしいなお前がワシを呼ぶなど」

「ハハハ…そうかもしれないですね」

ガチャガチャと泡立て器を動かしながら柴田が笑う

「何だ？」

食器を持ち歩く迦楼羅^{かるら}の後をガチャガチャやかましく卵黄を泡立てながらの柴田がついて歩く

「もしかしたら京助君…に竜の力を戻すことできるかもしれないかなーと」

柴田の発言にその場にいる全員が一斉に動きを止めた
一瞬の沈黙

そして

「…マジで？」

南がその沈黙をやぶって一言

「マジでー！！！！？」

それに続いて中島と坂田が声をハモらせて叫ぶ

「本当ナリか！！」

「そんな事が…できるんですか？」

慧光^{えいこう}が喜び言ったのに対し疑うように言う乾闥婆^{けんたつば}

「これは推測だけだね…試してみる価値はあるかなと…前に阿修羅^{あしゅら}が話したこと覚えてないかい？」

柴田が三馬鹿に笑顔で聞くと三馬鹿が顔を見合わせた

「阿修羅^{あしゅら}…大人の話か？」

「いやあれは大人になった、うん」

坂田がうんうんうなずきながらしみじみ言う

「違う違う；」

柴田が顔の前で手を振って違うと言った

「竜の力…もっているのは京助君だけじゃなかったんじゃないかな？
ね？若」

「ね？ 若って…ね…ね？ …ね…ね…ねー！！！」

何かを思い出したのか坂田が声を上げる

「そっか悠助」

ぽんっと手を叩いて烏俱婆迦うぐばかが言った

「そして…もう一人」

柴田が人差し指を立てた

まだうつすらとしか色付いていない宝珠がついた腕輪

それを見て緊那羅きんならがため息を吐く

「…私…強くなってるのかな…全然宝珠に変化ないっちゃ…
そしてまたため息を吐いた

「…京助…今私ができること私ちゃんとできてるっちゃ…？」

京助から返事はなく緊那羅きんならがゆっくりうつむいた

「…信じる…信じなきゃ…」

ぶつぶつと繰り返し緊那羅きんならが言う

「…よし…！！」

ガラッ

緊那羅きんならがぐつと手を握り言うのと部屋の戸が開いた

「…阿修羅…？」

緊那羅きんならが少し驚いた顔を見ると阿修羅あしゅらがいつものあのアツケラとした笑顔ではなく少し寂しそうな悲しそうな笑顔で片手を挙げ部屋にはいつてきた

「…竜のボン…京助どうやけ…」

そして緊那羅きんならの対面に座る

「うん…息はしてるっちゃけど…」

緊那羅きんならが京助を見てそして眉を下げた

「…緊那羅きんなら…竜のボン…助けたいけ？」

「…え…？」

「京助を助けたいかって聞いたんきに」

阿修羅あしゅらの質問に緊那羅きんならが躊躇いがちに一回頷きそのあと数回頷く

「助けたいっちゃ」

真顔で緊那羅きんならが阿修羅あしゅらを見、言う

「…そうけ…お前にはそれができるかもしれないんきに…いや…お前ともうひとりの竜のボン…悠助にしかできんことなんきに…京助を助けることは」

阿修羅あしゅらが京助を見てそして緊那羅きんならを見る

まっすぐに強い眼差しを自分に向ける緊那羅きんならに阿修羅あしゅらが口の端を上げニツと笑った

「お前の中には竜の力があるってことは…言ったよな？」

緊那羅きんならが頷く

「同じ力は共鳴する…つまりは…だ」

「つまり…京助と同じ竜の力を持つ緊那羅きんならか悠助に一度僕らの力をあげてそしてそれを京助にあげるってこと？」

「まあそうですね」

柴田がにっこり笑った

「ただ上手くいくかはわかりませんが」

その後につけ足された言葉で一同顔を見合わせ考え込む

「…でも上手くいくかもしれないでしょう？」

母ハルミがガスコンロを止めて話にはいつてきた

「何もしないより何かしたほうがいいと思わない？」

「ハルミさん…」

鍋を持ち茹で上がった海老を箆にあげながら母ハルミが言う

「できることは…やらないきゃ…ね？」

湯気の中で笑顔の母ハルミの表情とは反対に口に出た声は少し震えていた

ベコンと大きく流し台が鳴った

「私…京助を助けられるんだっちゃ？ 私が？」

緊那羅が何度も聞き返し阿修羅がその度頷く

「そーやんきに」

「私が…」

ちらっと京助をみた緊那羅の顔に笑みが浮かんだ

「ただ…な」

ふうっと阿修羅がため息をつく

それを見て緊那羅の笑顔が少し壊れた

「ただ…何だっちゃ？」

緊那羅が聞くと阿修羅がゆっくり緊那羅を見る

なかなか続きを話そうとしない阿修羅の代わりに雨音がざあざあと
もーいからってくらいに屋根に話し掛けている

「…ただ…今のお前じゃダメなんきによな」

「え…？」

「えー…何って言えばいいんかのー…」

ガリガリ頭を掻いて阿修羅が言葉を探す

「私にできるけど今の私にはできない…んだっちゃ？」

緊那羅の頭の上に？ マークが数個浮かんだ

「今のままのお前じゃダメなんきにな…そのー…あー…」

「今のままの…？； え？；」

緊那羅の頭の上の？がさらに増えていく

「んー…とな； お前の中に竜の力がある…んだけど普段は表にで
とらんきにな？ それを引っ張りださないとダメなんきに」

阿修羅の話を緊那羅が黙って聞く

「ただ…竜の力を表に出すと…緊那羅が奥にいつてしまふんよ…そ
うなったら…お前はたぶんまた暴走して竜のボン助けるどころじゃ
なくなるんきに」

「…ぼー…そう…？」

緊那羅きんならがきよとした顔で聞き返した

「清浄しょうじょうに怪我けがさせたら？」

緊那羅きんならの目が大きくなる

「今のお前いまのまえが清浄しょうじょうにあんな怪我けが負おわせることができると思うけ？」
ぶんぶんきんならと緊那羅きんならが首を振ふってうつむいた

柴田しばたと呼ばれている人物を初めて見たときから凄く嫌な感じがした
清浄しょうじょうと呼ばれる姿になった柴田を見たとき自分の中にあつた何かが
膨れ上がはふってそれが弾はじけた

そこには緊那羅きんならではなく操さくがいて自分の知らない京助きやうすけや記憶きおくがどん
どん流れ込んではきて自分は誰たれなのかわからなくなった
どうしていいかわからなくなった

そんな自分が今 緊那羅きんならとしてここにいるのは呼よんでくれたから
緊那羅きんならという名前なまえを呼よんでくれたから緊那羅きんならとしてここにいること

ができて
だから

「…どうしたらいいんだっちゃ…？ どうしたら私のままで竜りゆうの力
を使うことができるんだっちゃ？」
緊那羅きんならが顔を上げないままで聞く

助けたい守りたい

「操さくはちゃんと京助きやうすけを守ったのに助けたのに…緊那羅きんならの私わたしだって京
助すけを助けたい…守りたいんだっちゃ」

緊那羅きんならが顔を上げて一呼吸

「京助きやうすけを助けるためなら守れるなら私は何だってどんなことだって
やるっちゃ」

緊那羅きんならが言い切ると阿修羅あしゅらが笑みを浮かべた

「そう来るとおもったんきに…緊那羅きんなら、オライが前にお前にやった

竜の宝珠のカケラ：あるけ？」

「え：あ：うん部屋に：」

「チヨイもってこいや」

緊那羅きんならが頷き部屋から出て行くと阿修羅あしゅらの顔が途端難しい顔つきになっ

た「：指徳しとく：け：」

ボソッと阿修羅あしゅらが呟く

「：若干違うような気はする：でもあれは：」

ぎゅっと目を瞑って溜息をはいた阿修羅あしゅら

「：——————————————————」

阿修羅あしゅらの口だけが動いて綴った誰かの名前

悔しそうに阿修羅あしゅらの口元が歪んだ

「あ、緊ちゃん」

部屋へと向かい小走りで廊下を進んでいた緊那羅きんならが名前を呼ばれて足を止める

「：悠助？」

パタパタと悠助が緊那羅きんならに駆け寄る

「慧喜えきがいないの」

「え：」

ハッとして思い出す

「悠助：慧喜えき：は：」

それ以上言葉が続かずに緊那羅きんならが黙り込むと悠助が首をかしげた

「トイレにもいなかったしお風呂にもいなくて：」

「慧喜えきは：」

「慧喜えきはちよつと空に帰ってるんだよ：」

後ろから聞こえた声に緊那羅きんならが振り返る

「矜羯羅こんがら：」

ゆっくりと悠助の前まで歩きしやがんだ矜羯羅こんがらが悠助と視線を合わせて微笑む

「ちょっとやることができてね…」

「そうなの…？　いつ帰ってくるの？」

悠助が矜羯羅こんがらに聞く

「いつかはわからないけど…大丈夫…ちゃんと帰ってくるから」

「…うん」

悠助がしょぼんとして頷くと矜羯羅こんがらがその頭を撫でた

「大丈夫…慧喜えきはちゃんと帰ってくる」

一瞬険しくなった矜羯羅こんがらの顔

慧喜えきが指徳しじくに連れて行かれたことを知らない悠助に矜羯羅こんがらがめい
っぱい優しい嘘をついた

「ハルミママさんが探してたよ…」

「ハルミママが？　うん！！」

パタパタと悠助が矜羯羅こんがらの横を通って走っていくのを見ながら矜羯羅こん
羅がゆっくり立ち上がり緊那羅きんならの方をむいた

「悠助に慧喜えきのことは…」

矜羯羅こんがらが人差し指を口元にあてて内緒、と言うポーズをした

「あ…うん…」

緊那羅きんならが頷く

「緊那羅」

部屋に向かおうと自分の横を通ろうとした緊那羅きんならの肩を矜羯羅こんがらがつ
かむ

「なんだっちゃ？　話ならあとから…」

「君なら京助を助けられるかもしれないんだってさ…」

さつき阿修羅あしゆらから話されたソレを矜羯羅こんがらにもいわれた緊那羅きんならが頷く

「阿修羅あしゆらもいったっちゃ…でも今の…このままの私じゃ駄目なん
だっちゃ…」

「今の君…？　…よくわからないけど…そう…阿修羅あしゆらが…じゃあや

っぱり可能なんだね」

矜羯羅こんがらが腕を組んで緊那羅きんならを見た

「君にしかできないこと…いくら僕らが力が強くたって僕らにはで

きないこと」

矜羯羅こんがらが一步踏み出すと廊下がキシっとなる

「阿修羅あしゅらから聞いていたなら僕が話さなくてもいいね…皆待ってるから」

「え…？ 皆って…」

緊那羅きんならがきよんととして首を傾げる

「…今自分にできること…探して待っているんだよ僕らはね…」

ポンと緊那羅きんならの肩を叩いた矜羯羅こんがらが背を向けて去っていった

「自分に…できること…」

矜羯羅こんがらの背中を見ていた緊那羅きんならがきゅっと唇を噛んで小走りで部屋に迎った

タンスの一番上の引き出し

小さな箱を手にとるとソレをじっと見た緊那羅きんならがまた小走りで部屋から出ていく

いつもなら風に鳴らされている風鈴の代わりに聞こえる雨音にふと縁側の方を見た緊那羅きんならが足を止めた

和室の隣の仏間に目をやると暗やみの中にぼんやりと見えた白いタオル

緊那羅きんならが仏間に足を進めた

「そうか…やはり阿修羅あしゅらは知っていたのだな…まったく…」

迦楼羅かるらがため息を吐いて言う

「かるらん駄目駄目じゃん」

「やめんか！ たわけっ…！！」

ぺしぺしと南が迦楼羅かるらの頭を叩く

「阿修羅あしゅらはつかめないやつだからね敵にしたら竜より用心しないといけないかな」

柴田がハハッと笑いながら言うという意味がわかってるのかわかってないのか制多迦せいたかがヘラリと笑い頷いた

「…阿修羅…か」あしゅら

矜羯羅こんがらがさつき阿修羅あしゅらに聞かれた質問を思い出し何かを考え込む

「阿修羅あしゅらの考えていることはワシにもよくわからん…ただ知識は誰よりもあることは間違いないワシよりもしかしたら竜や上よりあるかもしれん」

「そうなの？」

「あ…ええ…阿修羅あしゅらはかなりの知識がありますからね」

「おいちゃんよりも？」

烏俱婆迦うぐぼかが乾闥婆けんだつぱの服をくいくい引っ張って聞くのを見た迦楼羅かるらの眉がぴくつと動く

そんな迦楼羅かるらの肩を制多迦せいたかがポンッと叩いてヘラリと笑った

「…何だ…?；」

迦楼羅かるらが聞くと制多迦せいたかが迦楼羅かるらの頭を撫でる

「やめんか！ たわけっ!!；」

怒鳴ると同時に迦楼羅かるらの口から炎が出た

「うるさいよ」

「うるさいですよ」

矜羯羅こんがらの足が制多迦せいたかの頭を踏み付けて乾闥婆けんだつぱの手が迦楼羅かるらの前髪を引っ張った

「賑やかやなあ」

ハハッと中島が苦笑いを浮かべる

「京助が助かるかもってだけで…こうも空気かわるもんなんかね」

「若も泣いてませんしね」

坂田が口の端をあげて言うとき柴田がにっこり笑っていうとき坂田が肘鉄を柴田の腹にのめりこませた

「やっぱりいいわねこう…たくさんにいるって」

隅の方で眠るちみつこ童を見ていた母ハルミがなんだかしみじみ言う

「分け合えるものが多くて…嬉しいことも悲しいことも」

「だからハルミは大家族が好きなの？」

鳥俱婆迦うぐばかが聞くと母ハルミが微笑んで頷いた

「ホラ、緊ちゃんが来る前はこの広い家に私と京助、悠ちゃんとコマイヌだけだったじゃない？ …その状態で今みたいになったら…
ってね考えちゃったら…ごめんなさいね」

目尻から滲んできた涙を母ハルミが指で拭いまた笑顔を上げる

「いてくれて…ありがとう」

「ハルミさん…」

その場にいた一同が言葉をなくした

部屋の戸が開くと阿修羅あしゅらが振り向いた

「…何持ってるんきに？」

部屋に入ってきた緊那羅きんならの手には竜の宝珠の入った箱の他に白いタオルがにぎられていた

「操のタオルだっちゃ」

緊那羅きんならが阿修羅あしゅらと向かい合って座り竜の宝珠の入った箱を畳の上に置く

「お守り…というか…」

緊那羅きんならが苦笑いで頬を掻いた

【柴野ストアー】と印刷された他人にとってはどこのお宅にでもあるような何の変てつもないただのタオル
そのタオルを握りしめ緊那羅きんならがまっすぐ阿修羅あしゅらを見る

「…いい目しとるの」

阿修羅あしゅらがニツと口の土師をあげて笑った

「私はどうすればいいんだっちゃ？」

緊那羅きんならが聞くと阿修羅あしゅらが竜の宝珠が入った箱を手にとり緊那羅きんならに突きつけると恐る恐る緊那羅きんならが受けてる

「オライは直接竜の宝珠に触れないからの」

「あ…うん」

緊那羅きんならが頷き箱を膝の上に置いた

「で…これからどうすればいいんだっちゃ？」

「開けてみ？」

阿修羅あしゅらがいうと緊那羅きんならが箱の蓋に手をかけてゆっくり引き上げる中に入っていたのはもとは阿修羅あしゅらの首元についていた小さな丸い飾りそれを掌にのせて指でつくとカコンと音をたてて開いた金色に輝く小さな欠片をみた阿修羅あしゅらの顔が険しくなる

「…阿修羅？」

「へ…？ …ああ！ すまんすまん」

阿修羅あしゅらが慌てて返事をした

「どうしたんだっちゃ？」

緊那羅きんならが聞く

「いや…ちよい思い出しての…ちよいセンチになっただけやんきに」
目を伏せながら言った阿修羅あしゅらがため息を吐く

「…すまんけの」

「や…別に…」

謝あしゅらった阿修羅きんならに緊那羅あしゅらがぶんぶん首を振って返した

「…竜の宝珠…か」

ボソッと呟いた阿修羅あしゅらの言葉が聞き取れなかったのか緊那羅きんならが首をかしげる

「…多分ソレに直接触った瞬間一気に竜の力がお前に流れ込むけの」
…

欠片に触ろうとしていた緊那羅きんならがビクッとして手を止めた

「そういうのは先にいてくれっちゃ」

「ハッハッハすまん」

阿修羅あしゅらが笑う

「…オライ達にはそれぞれ得意な力と苦手な力があるけ…まあ属性
つちゅーもんなんだけどの…見ててわかるとおりかるらんは炎、乾け
闍婆んだつばは水なん」

「うん…」

「そして慧光えいこうは花で鳥俱婆迦うぐばかはカラクリ…ってえどこか？」

「…あの私は？」

おそらく空の二人の属性は推測で言ったと思われる阿修羅あしゅらに緊那羅きんならが聞く

「わからんきに」

さくつと阿修羅あしゅらがソレを切った

「わからん…って私…」

「まだ宝珠がひとつも完全に色ついてないけの」

阿修羅あしゅらが緊那羅きんならの腕輪を指さしているというきんならと緊那羅が腕輪を見てため息をつく

「なかなか色ってつかないんだっちゃんね…」

「あたりまえやんに；　そして…竜の力はムゲン」

阿修羅あしゅらがゆっくりと口にしたその言葉

「夢幻のムゲンじゃなしにの…幻が無いムゲンなんきに」

「…む…げん？」

緊那羅きんならが繰り返す

「無幻の力は未知での…オライもよくわからんけ…」

「むげん…」

竜の宝珠を見て緊那羅きんならがもう一回呟く

「最強の力にも最弱の力にもなるっつーことくらいしかわからんか
つての…最強と最弱という相反するものを両方もっているという…」

「最強と最弱…って…意味がわからないっちゃん；」

「ハッハッハオライもよくわからんきに」

阿修羅あしゅらがハッハと笑った

「でも…その力があれば京助を助けられるんだっちゃんやね？」

一呼吸おいて緊那羅きんならが言うあしゅらと阿修羅が真顔で頷く

「あとは…緊那羅…」

緊那羅きんならが頷いて顔を上げるとにっこり笑った

「あれ？　京助は？」

「知らないわよ？」

前髪をターバンであげた操が右足で左足の脛をぼりぼり搔きながら聞くとそっけない返事が来た

「さっき散々呼ばれてたじゃない？」

「いや：そうなんだけどさ；」

操が気まずそうに母ハルミの質問から顔をそらす

「アンタ：また無視したんでしょ」

「：まあ：ちょーっと詰まってたんでー；」

操の言葉に母ハルミがため息をついた

「操：」

「わかってるってーの；」

名前を呼ばれた瞬間操が逃げるように茶の間から駆け足で遠のいた仏間から向こうの和室までぶっ続けで開け放たれた襖のよしかかって縁側にぶら下がる風鈴をぼーっとみながらずるずると畳に尻をつけて足を延ばす

頭ではわかってるんだ俺もそうだったから

構って欲しかったから構ってやりたいって思うんだ

でもなんだろうな：大きくなるにつれて思うように体が頭で考えていることをできなくなってる

「：帰ってきたら：スイカのでかい方やろっかな」

庭先のビニールプールで泳ぐスイカを見て操が呟いた

「：慧喜^{えき}：いつ帰ってくるのかなあ：京助明日早起きするつもりなのかな？」

浴槽の縁に顎を乗せて悠助が呟く

「明日晴れるかなあ：」

換気のために少しだけ開けてある窓から聞こえる止みそうにない雨の音

「てるてる坊主つくろうかな……うんそうしよう!!」

バシャッとお湯の中で手を叩いたせいで悠助の顔にお湯がかかった

「おっせえな……」

操が遠くから聞こえたチャルメラの音で顔を上げた

ビニールプールで冷やされていたスイカはさっくりと切り分けられてしまったらしく、その二切れが皿に置かれていた

ほんのりオレンジ色に染まりだした和室の襖から背を離し操が立ち上がって縁側から外を覗く

パー……パー……

チャルメラの音がさっきよりちよつと大きく聞こえる

庭をぐるり見渡すとスイカを冷やしていたビニールプールが物干し竿にかけられ水がぽたぽたとたれていた

足を進めて縁側のギリギリ縁まで来るとまた庭を見渡す

家のすぐ側の壁には京助が宿題で育てている朝顔が蕾をつけていてそのすぐ側には京助が気に入っている緑色のジョウロが置かれていた草の垣根の向こうに見える社務所の窓に母ハルミの姿が見える

背伸びをして石段の方も見ようとしたがよく見えず昼間脱ぎ捨てておいたサンダルを履いた操が庭に下りた

ちよつとだけ水平線に足をつけた夕日が海面に反射してそこらじゅうをオレンジに染めている

石段の下を見ても誰もいない

境内の方を見てもただ赤い鳥居が立っているだけで人影は見当たらなかった

「……つとに……愛の鐘なったら帰って来いっていったんじゃなか」

児童生徒の帰宅時間の目安としている愛の鐘がなったのはもうかれこれ1時間前

パー……パー……

チャルメラの音がすぐ側で聞こえそして遠のいていく

「…あーもー!!!」

ガシガシと頭を掻いた操が軽快に石段を駆け下り下につくとまずを右を見て次に左を見た

「どっちいったんだあの馬鹿」

無意識に【神様の言うとおりのしぐさをしていた指が左を指してとまると操が駆け出す

明日の漁で使う海水を運んでいた櫛引のおっちゃんのリヤカーの横をすり抜け落ちていた空き缶をよけて海岸線を操が京助を探す

途中に会ったおばちゃん達に聞きながら探すも京助の姿は見つからずにととう区域の境目までたどり着いた

「どこいったんだ…」

腰まで海水に浸かった夕日がさつきより濃いオレンジで操を染める

「逆…だったんかな…くっそ」

荒くなっている息を整えながら操が呟きもと来た道をまた駆けていった

カモメの鳴き声が波の音と重なって聞こえる

時たま横を通る車が歩道が無い道路を走っている操を避けて左にふくらんで追い越していった

栄之神社の石段鳥居が見えてきたころ数少ない街頭にパッと明かりがついた

いつのまにか夕日の姿はなくなっていて水平線に沿って一直線に伸びたオレンジの光もだんだんと消えていく

石垣に手をつけて呼吸を整えていた操が顔を上げると三本先の街頭の下に誰かが立っているのが見えた

足を引きずって亀か?というくらいのトロトロ歩きでこっちに向かってくるその人影に向かって操の足が動き駆け出した

「私は…何でもするって言ったっちゃよ」

緊那羅きんならが言う

「でもなあ緊那羅きんなら：【何でも】して竜のボンが全部喜ぶってこたあ
ないとおもうんきに」

「え？」

阿修羅あしゅらの言葉にきよとした緊那羅きんならが阿修羅あしゅらを見た

「たとえば：お前のためにしたこと：お前を助けて誰かが：死んだ
ら？」

さっきまで自分のことを話していた阿修羅あしゅら

大切なものを一度なくしているからなのか阿修羅あしゅらの言葉が緊那羅きんならに
突き刺さった

京助も【操】という大切なものを失っている

守られて守ってくれた大切な人がいなくなったとき守られた方はど
うおもう？

操が死んだのは自分を守るためだったって聞いたときの京助の涙を
緊那羅きんならがおもい出す

「：なんでもじゃなくな：できることをすればいいんきに：いつて
たろ？ 竜の：いや京助がの」

阿修羅あしゅらが京助を見ると緊那羅きんならも同時に京助を見る
相変わらず微動もしない京助

「：京助：私：」

「タカちゃんも言ってたろ信じての：自分を京助を信じるんきに」
緊那羅きんならが操のタオルを強く握る

「：うん」

緊那羅きんならが頷いて顔を上げた

緊那羅きんならが深呼吸して竜の宝珠の欠片を見つめた

小さいながらも金色に輝くそれは最高位の宝珠というだけあって見
ているだけで吸い込まれるような押し潰されるようなそんな感覚を
覚えた

不安一杯の表情で緊那羅きんならが阿修羅あしゅらを見ると阿修羅あしゅらが下を指差す
緊那羅きんならがその指差す方に視線を向ける

「京助…」

「京助！！」

ちよつとだけガラガラとした声で名前を呼ばれた

曲げる度伸ばす度シンジンと痛む膝から流れた血はもう乾きかけていて肌にこびりついている

「京助！！」

さつきより近くでまた名前を呼ばれ伸ばそうとしていた足を止め顔をあげる

「み…」

自分に向かって駆けてくる姿を見て視界がぼやけて頬を涙が伝った
「みさおちゃあー…」

あーから後はもう何も話せなくてただ目から溢れる涙を拭うだけで
精一杯の京助の前で操がしゃがむ

「みっみさ…っえっえっ」

ひっひつとしゃっくりをあげながら泣く京助をみて操が京助の頭を撫でた

「…転んだんか」

京助が頷く

「どこで」

息をひきつらせながら首を振る京助に操がため息をつくと背中を向けた

「帰るぞ」

けして大きくも広くもない操の背中に京助が胸をつける
「っこらせっ」と

操が軽く飛びながら立ち上がった

頭のとっぺんでくくられた操の髪が京助の額をくすぐる

「…鼻水つけんなよ」

「…うん」

ズビツと京助が鼻水を啜ると操の肩に頭を付けた
少し汗ばんでいる操の肌が心地よくて泣き疲れと歩き疲れからか京助の息が寝息へと変わった

「…ブツサイク」

チラッと京助を見た操がプツと笑う

「あーあ…重てえ」

笑顔で呟いた操が石段に足をかけた

ただ寝てるだけにしか見えない京助の顔をしばらく見ていた緊那羅きんなら
が操のタオルを腕輪をしていない右の手首に巻き付けた
そしてそのタオルに額をつけると目を閉じる

「操…京助を助けたいんだっちゃん…私も京助を助けたい守りたいんだっちゃん…だから…」

小さく言って緊那羅きんならが顔をあげ宝珠の欠片に指を伸ばした
指が宝珠に触れたか触れないかという瞬間小さな欠片から溢れた大量の光が窓から外を照らし襖の隙間から家中を照らす

「っ…緊那羅っ!!」

腕で光を遮りながら阿修羅あしゅらが緊那羅きんならを呼んだ
しかし光の中心からの返事はなく

「…なん…だこれは…」

迦楼羅かるらが驚いた表情で立ち上がった

「竜…緊那羅だね…」

矜羯羅こんがらが言々と柴田が頷く

「覚悟決めたみたいですね…はたして…」

「緊那羅…京助…」

慧光えいこうが手を組んで目をつむり祈りはじめると母ハルミもそっと目を閉じて手を組んだ

光の中でぎゅつと目を瞑っていた緊那羅きんならの右手を誰かが握った
同じくらいの大きさのその手に握られてどうしてか安心感が生まれ
てその手を緊那羅きんならも握り返した
音は何も聞こえない
目を瞑っているせいで何も見えない
握っている手から伝わってくる想い

…京助…

「ぎゃあああああ!!」

「やつかましい!!」

シャワーというシャワーの音に勝って聞こえる叫び声

「消毒だ消毒ッ!!」

湯気のとつ浴槽の縁に腰かけた素っ裸の京助が足に湯をかけられ泣き叫ぶ

「やだー! もういい! もうとれたー!!」

「ちゃんと洗わないと腐るぞって! ほら左!!」

操がそんな京助を無視して今度は左足を持った

「いやだー! いやだいやだ痛い痛いー!!」

「根性みせろ! 男だろ!」

操が京助を押さえてシャワーを膝の傷に当てた

「いだああああ!!」

またも響く断末魔の叫び声

「ほぎゃああああ!!!!」

それに続けと言わんばかりに悠助の泣き声も家中に響いた

「ひっひっ…ひったっ」

泣きしゃっくりで言いたいことが言えない京助が操のシャツを掴む
「つつたく：散々心配かけさせやがって…」

ぶつぶつ言いながら京助の脛に流れこびりついていた血を手で優しく擦り落とす

「…つめんなさい…ごめんなさい…」

操にしがみついてぐしぐしと京助が謝った

「…濡れたまんまで抱きつくくなよな…俺まで濡れたじゃんか…」

肩につけられた京助の頭を撫でながら操がため息をつく

「…ごめんな」

操が小さく謝る

「…スイカでかいほうやるからさ」

「メロンがいい…」

「贅沢拔かせ…」

キュッと蛇口をひねって操がシャワーを止めた

握られた手から想いと一緒に流れ込んでくるこの体のもうひとつの

記憶

操の記憶

きんなら

緊那羅が知らないまだこの体が操として京助と一緒にすごした時の

記憶

今より幼い京助

今より泣き虫な京助

今より：

思い出した、という表現はおかしいのかもしれない

でも：

なんでだろう懐かしいと感じるのは

この体が操のものだったから？

京助は今操と緊那羅きんならどっちが必要なんだろう？

『信じて…』

頭の中に聞こえたのは少女の声

『呼ばれたでしょう？』

ハッとして思い出す

呼ばれた名前

ゆっくりと握られていた手が放された

『ね…？ 彼が必要としているのは…』

『聞きてえんだ【緊那羅きんなら】の歌』

私で

操じゃなくて緊那羅きんならでいいと言ってくれたこと

嬉しかった

いつも先を歩くのにちゃんと待っててくれたり

文句をいいながらも結局は手伝ってくれたり

私だけに見せてくれた涙とか笑顔とか

それを全部守りたい、守らせてほしい

嫌だって言ってもこれだけはやめないから
これだけは

緊那羅きんならの口元に笑みが生まれた

その笑みはただの微笑みではなくどこことなく強い覚悟と決意がこめ
られた笑みで

「大丈夫だっちゃ：ありがとう：」

そう呟くとぎゅっと抱き締められるような感覚がした

「ありがとう：操」

緊那羅きんならも抱き締め返し小さく言う

途端に今まで抱き締めていたものが消えて緊那羅きんならの体を優しく暖か
な風が包み込んだ

今度は自分自身の体を抱き締めた緊那羅きんならがゆっくりと目を開ける
うつすらと見え始めたのは掌

「：あ：」

緊那羅きんならの顔が綻んでその掌に手を伸ばす

緊那羅きんならにとって見慣れた掌

その掌に緊那羅きんならの手が触れるとザアツと舞ったのは桜の花弁

その中で緊那羅きんならが強く掌を握りしめる

絶対放さないというように強く強く握りしめた

いつのまにか握っていた掌の中に感じた小さな固く薄い物体の感覚
もう片方の手を伸ばし両手で手を握った緊那羅きんならが顔を上げて目を細
めて笑った

「……」

京助の横たわる布団に覆い被さるように倒れ込む緊那羅きんなら

緊那羅きんならの手の中にはぼんやりと光を放ち続ける竜の宝珠があった

「緊那羅：」

ピクリとも動かない二人を阿修羅あしゅらがただ黙ってみている

「：京助」

名前を読んでも反応は返ってこない

「…頑張り…な…」

今自分にできるのはただ待つことだけ

阿修羅^{あしゅら}が唇を噛んで俯いた

あの時もそうだった

何もできずに後から知らされて自分に腹が立ってそれを竜へと上へとぶつけた

「…オライは…」

阿修羅^{あしゅら}が腰に下げられたカンブリを取りそれを撫でる

三つ開いた穴

間拔けな顔

「…オライにそっくりやけ…」

フツと阿修羅^{あしゅら}が笑う

ギリッとカンブリをもつ手に力が入った

緊那羅^{きんなら}の手の中で光る竜の宝珠

「…運命っていうのは…時っつーもんは…」

遠くでゴロゴロと雷が鳴る音がする

ざあざあといまだ降り続く雨

コチコチと時を刻む音

「…無きやないであつたらあつたで…まるで時っつーのは…」
一瞬の光そして

ドオン！！

という音と軽い震動そしてばたばたという廊下を走る足音が部屋の
前を通過する

「…落ちた…んかの」

ゴロゴロという音が尾を引いて遠くに聞こえる

阿修羅^{あしゅら}がゆっくり目を閉じた

勢いよく茶の間の戸が開いたかと思うと飛び込んできた悠助が一番近くにいた中島に抱きついた

「うお！； どうした悠；」

悠助を抱きとめながらも中島が驚く

「かみなり！；」

「ああ：今の雷か」

へしよげた顔で言う悠助に坂田が窓の方を見て言う

「落ちたよな絶対どっかにさ」

南が立ち上がり窓を見てそして固まった

一向に動こうとしない南を見て慧光えいこうが立ち上がる

「何みて：」

窓の外を見た慧光えいこうまでも南と同様に動かなくなった

慧光えいこうの顔がゆがむ

そして

「コロ助！？；」

「慧光えいこう！！」

南の身体を跳ね除けて窓を開けた慧光えいこうが外に飛び出した

そこだけが光っているように見えた白い布をまとったその人物がたっているその回りだけがぼんやりと光っているように

「：久しぶり」

ぱしゃつと水溜まりを踏んでその人物の前に慧光えいこうが立っていた

「慧喜えきを返すナリ」

ざあざあ降り続く雨に慧光えいこうの髪と服が濡らされていく

「誰だ：？ あれ：」

南が見るその方向を矜羯羅こんがらと迦楼羅かるらが見るなり二人同時に南を突き飛ばし窓から出ようとして詰まった

「どかんか！！ たわけっ！！」

「それは僕のセリフだよ」

ギヤーギヤー怒鳴る迦楼羅かるらに対し冷ややかに矜羯羅こんがらが返す

「…あまあ」

矜羯羅こんがらの肩をポンポン叩き迦楼羅かるらの頭もポンポン叩いて制多迦せいたかが二人を宥める

「一体アイツなん…」

突き飛ばされた南が柴田に支えられながら起き上がると一瞬の光

「慧光えこう!!」

矜羯羅こんがらが光に向かって叫んだ

「ほら、これ貼っておけ」ぴらっと差し出されたのはピンクの絆創膏

「ええ、これキティちゃんついてるじゃん」

「文句たれるな文句」

ペリリつと絆創膏の剥離紙をはがしながら操がしゃがむと京助が傷口に貼らせてたまるかというかんじで手をかざした

「抵抗するきかキサマ…京助の分際で」

「だってぜってえキヨちゃんとかあじゅにからかわれるもん…」

近所のおガキ様の名前を上げて京助が口を尖らせる

「…ばいきんはいって腐っていいなら」

「やだ」

「なら貼っとけ…はってやるから」

な？ と操が言うとしぶしぶ京助が手をどけた

「よしえらいえらい」

笑いながら操が傷口に上手くスポンジ部分があたるように絆創膏を貼る

その様子を京助がおとなしく見ていた

ペリリつともう一枚剥離紙をはがし今度は反対の膝に

「操ちゃん…」

「なんだよ」

「…なんでもない」

京助が操の頭に顔をつけた

「きしよい。やめんかコラ；」

膝に絆創膏を張り終えた操が動けず文句を言うが京助はそのまま動こうとはせず

「おいこらきよ…」

「父さんも母さんも悠、ゆうばかり…」

京助の身体に伸ばされかけていた操の手が止まった

「おれ：だっているのに」

頭の上から聞こえた微かに震えた声と鼻水をすすする音

「操ちゃんも悠のところいつっちゃうの…？」

びずっという音の後に問いかけてきた幼い従弟の言葉

「俺だっているのに…」

びずびずと今度は二回

わかってる

いるのに、ここにいるのにちゃんといるのに見てくれているのかっ
ていう不安

俺だっってわかってる

見ている見えている見てくれているふりをしているんじゃないかっ
て思うくらいに不安なんだ

側にいるのに不安なんだ

撫でられていても不安なんだ

わかってる、知っているんだその感じ

嫌なくらいに

だからそんな思いはさせたくないんだコイツには

京助には…

この感じを知っているからわかっているから一番の解決方法も知っ
ていて

難しいことは何も無くて

ただ精一杯の気持ちを込めて呼んでやるんだ

「京助」

名前を呼ぶと京助がズビツと大きく鼻水をすすった後顔を上げた

「お前はまだ危なっかしいからさ……どこもいかねえでちゃんど待っててやるしまた転んだら困るからなお前の後ついてってやるよ」
きよとんとして話を聞いていた京助の顔が次第に歪んできてひっぴつとしゃっくりが混ざってくると操が京助の鼻を摘んだ

「な　く　な。うっとおしい」

フガッと京助の鼻が鳴る

「泣いたらどっかいくからな」

操が言うと京助が慌てて両手で涙をぬぐった

「ない……てねえもんツ；」

「……よろしい」

真っ赤な目で強がる京助に操が笑って頭を撫でた

突如窓から差し込んできた光に阿修羅あしゅらが窓を開ける

しかし雨がざあざあどふっているだけで何も無く

「……反対側け……気になるがでも……」

阿修羅あしゅらが緊那羅きんならと京助を見下して今度は戸口に目をやった

「今の光……微かに宝珠の声がしたの……」

苦い顔をして阿修羅あしゅらが呟く

「……」

阿修羅あしゅらが無言で窓を閉めると再び京助と緊那羅きんならを見る

緊那羅きんならの持つ竜の宝珠の光が微かに強くなった

光が消えてもまだ慧光の姿は見えない

「慧光……!!」

窓枠に手をかけ飛び出そうとした矜羯羅こんがらを制多迦せいたかが引き留める

「……って……」

「何……」

矜羯羅こんがらが制多迦せいだかを睨み腕をつかんでいる手を引きはなそうとした

「…待て矜羯羅こんがら」

迦楼羅かるらが外を見て矜羯羅こんがらの前に腕を出した

「君まで…何なんだよ…」

「慧光えいこうは無事だぞ」

迦楼羅かるらの言葉を聞いた面々が窓に駆け寄る

目を凝らして見えたのは尻尾

「ぎりちよんセーフなんだやな」

ざあざあという雨の音の中から聞こえたのは独特の話し方

「ナリは大丈夫だよな？」

慧光えいこうの前に差し出された慧光えいこうよりひとまわりくらい小さな手をつかみながら慧光えいこうが頷く

「…式…か」

白い布の人物が呟くと慧光えいこうの前に揃った4本の足

その両外側二本が揃って一步引き下がりが膝が曲がりいわゆる構えの姿勢をすると慧光えいこうの目の前で尻尾が揺れた

「…栄野の前後は我らが守る！」

雨に濡れた赤と青の前髪とそこから天を向いた角

同じ型の構えをしたゼンゴが白い布の人物を真っ直ぐ見た

ぼりぼりシャツの中に手を入れて体をかいた操が昨日確かに隣でよだれをたらしながら寝ていた京助の姿を探す

「…便所か？」

カーテンを通して部屋に入ってくる朝日は柔らかく時計を見ると午前六時半

「珍しいこともあるもんだ」

伸びをして布団から抜け出した操が立ち上がるとカーテンをあげた網戸越しから風が入り寝癖の髪を撫でる

「…スイカ食いてえなあ」

ボソツといった操が欠伸をして踵を返した

部屋からでると足元に擦りよってきた二匹の犬

「あー飯かー…ちよい待てよ」

尻尾を振りながら歩く操についていく二匹に操が笑いかける

「こらこら踏むぞコマ、イヌ」

「わんっ!!」

名前を呼ばれた二匹が飛び上がって返事をした

「守れなかったんだやな」

ぐっとゼンが拳を握った

「思い出したんだやな…操がいたこと操を守れなかったこと」
ゴも同じく拳を握りしめる

「だから今度は何がなんでも」

二人揃って顔を上げると白い布の人物を睨む

「「栄野の全てを守り通す!!」」

ゼンゴの声がざあざあという雨の中響いた

【第十四回】雨上がり（前書き）

はじまりとそして

【第十四回】雨上がり

遠くでまだゴロゴロと響く雷

ずぶ濡れのゼンゴと慧光^{えいこう}とは逆に白い布の人物だけは何故かざあざあ降り続く雨には濡れていなく口元には笑みが浮かぶ

「…知り合い…?」

坂田が白い布の人物を指差して柴田に聞く

「まあ…知り合いというか…知り合いになりますけど」

答えた柴田は口元は笑っていても目は白い布の人物をじっと突き刺すようににらんでいた

「あ…の人…」

後ろの方で窓の外をみた母ハルミの目が見開く

「…ハルミさん？」

中島が母ハルミの顔を覗き込む

微かに震えていた唇をきゅっと噛み締めた母ハルミの顔が悔しそうに歪んだ

「ハルミ…?」

烏俱婆迦^{うぐばか}が心配そうに母ハルミの服をつかみ体をすりよせる

「ハルミママ…?」

悠助も母ハルミを見上げ声をかけた

「…ハルミさん…」

柴田が母ハルミの両肩に手を置くと母ハルミが悠助と烏俱婆迦^{うぐばか}を一緒に抱き締めた

「…ハルミさんも知って…るんだ…」

南が母ハルミと窓の外を交互にみて言う抱き締める母ハルミの腕に更に力が入った

「ハルミ…? どうしたの? どこか痛いのか?」

「ハルミママ…? なんで泣いてるのか?」

柴田が背広を母ハルミにかけた

「……」

天と空の面々が窓の外を見る
その顔は決して穏やかではなく

「…な…なんか重々しい…よな…」

坂田が南に耳打ちすると中島と南が頷いた

「式ごときが僕様に勝てると？」

微妙な一人称だがからかうような雰囲気
で白い布の人物がゼンゴに向かつて言う

「やってみないとわからないんだやな」

ゼンが構えの姿勢のまま返すとスツと白い布から出された手がゼン
ゴに向けられる

「まずい…!!」

柴田が窓から飛び出すと瞬間で摩訶不思議服を纏った

一瞬見えたのは耳から下がった黒い…

矜羯羅こんがらと乾闥婆けんだつばが二人並んで窓の外に向け手を翳す
迦楼羅かるらと制多迦せいたかが三馬鹿と母ハルミ達の前に立った

「生意気な」

白い布の人物の口元が見えた

浮かんでいたのは笑み

「操…」

母ハルミが小さく震えながら操の名前を口にした

「帽子被っていきなさいよ？ 日射病になるから」

「あー…」

壁にかかっている帽子の中から少しつばの広い麦わら帽子に手がか
かる

「つつたく…面倒くせえ…」

ため息をつきながら麦わら帽子を持った操が柴野ストアーと印字さ

れたタオルを中にかぶるとその上から麦わら帽子を被った

ラジオ体操から帰ってくるなり海に行くといい家を飛び出した京助をちよつと見てこいという母ハルミの半強制的なお願いをしぶしぶ聞き入れた操

「なんつーか…いつから俺は京助の保護者になったんだろな」

サンダルを履いてだらだらと歩き出す

北海道の短い夏の空は青く雲は白い

耳につくセミの声と縁側に吊るされた風鈴の音

なんとなく操が足を止めて家の方を振り返る

「……」

浜風が操の髪を撫でていった

閃光が辺りを包んだ

何か叫んでいる三馬鹿の声はかきけされ

地響きが体を襲った

摩訶不思議服の面々によって柔げられているのかもしれないのかもしれないがかなりの振動が伝わってくる

キィキィと室内灯が揺れる音が聞こえ始め三馬鹿が顔をあげた

制多迦の背^{せいたか}中と迦楼羅^{かるら}の背^{から}中から矜羯羅^{こんがら}と乾闥婆^{けんだつば}が見えた
その向こうには窓

「な…ん…」

中島が一言

「…いじょうぶ？」

制多迦^{せいたか}が振り返り聞くと南が頷いた

「清浄^{しょうじょう}の結界か…間一髪^{かんいつぱふ}といったところか…」

迦楼羅^{かるら}がふうつと息を吐き窓を見る

霧状になっている雨で窓の向こうは何も見えない

「それでもないよ…」

矜羯羅^{こんがら}が窓に向かつて手を伸ばした

「ここは結界の中に：入っていません：」

乾闥婆けんだつばが唇を噛み締める

「え：それって：」

霧状の雨が晴れるとざあざあとする雨の音が聞こえ始め窓の向こうにはいつもとからぬ風景

人の姿は見えない

「し：ばた：？」

確かに窓の外に飛び出していった柴田の姿はない

柴田だけではなく慧光えこうやゼンゴそして白い布の人物の姿もなかった

坂田が窓枠までダッシュして身を乗り出す

「柴田！　おい！！　どこいった！！？」

坂田が柴田を呼ぶがどこからも返事はない

「無駄だよ：結界の中には届かない：結界がなくならない限りこちらからも向こうからも：ね」

矜羯羅こんがらがぎゅっと手を握りしめ窓の外を見る

「なあ：あいつ：何なんだ？　誰なんだよ：」

中島が立ち上がって聞く

ざあざあという雨の音だけが響く沈黙

誰も口を開こうとしなかった

「：ハルミママ：？」

悠助が母ハルミを呼ぶ声に一同が視線を向ける

柴田の背広を肩にかけ烏俱婆迦うぐばかと悠助を抱き締めたまま肩を震わせる母ハルミ

「：ハルミさん：？」

南が母ハルミに近づいて背中を撫でた

途端咳き込んで母ハルミが嗚咽をあげ始める

「ハルミ：？　どうしたのハルミ：？」

烏俱婆迦うぐばかが腕を伸ばして母ハルミの頭を抱き締めた

「：っ：ごめんなさいね：ごめん：」

烏俱婆迦と悠助を更に抱き締めて母ハルミが謝る

「どうしたのハルミママ…?」

悠助も泣きそうな声で聞く

「…ルミママさん…」

制多迦^{せいたか}がしゃがんで三人いっぺんに抱き締める

「…っ」

矜羯羅^{こんがら}の顔が悔しそうに歪んだ

沿岸沿いを歩いていると聞き覚えのある声が数人分混ざって聞こえた

「…お…いたいた」

ひょいと防波堤から下を覗き込むとバスタオルやら浮き輪やらが磯舟の上に置かれていた

海の方を見ると数人の子供がはしゃいでいる

その中にはいない京助の姿を探していると一番端の磯舟のところに二人の子供の姿

「…いたし…」

溜息をつくと防波堤から飛び降りて簡易港の坂を京助の元へと歩いていく

「…あれ…?　ここら辺のヤツじゃ…彼女か?」

京助の隣には見たことの無い女の子の姿があった

「いっくは俺より背高いから大丈夫だよ」

「ちゃんと準備体操しなきゃ駄目だよ京助もそっちの子も」

初対面の子ということでもいつもより少し優しめに声をかける振り向いた京助の顔がぱあっと笑顔になった

「操ちゃん!!」

名前を呼んで駆け寄ってくる京助になぜか顔がほころぶ

「来てくれたんだー!!」

京助が操の手を掴んで引っ張る

「一応ね小学生だけじゃ危ないって言うもんだから…こんにちは」

「こ…んにちは」

操がこちら辺の子じゃない女の子に笑顔で挨拶をすると顔を赤くして小さく返してくれた

「あー！！ 操だー！！！」

海の方から名前を叫ばれて操が顔を上げた

「準備体操はしたのかー——————！！」

操が大きな声で言うとう海の課中の数人が両手で頭の上にマルを作った

「ねーねー！！ 操ちゃんもおよぐんだろ？ な？」

掴んでいた操の手をブンブンふって京助が見上げ聞いてくる

その少し後ろの方でもじもじとしながらコチラを見ているこちらへのヤツじゃない子チラっと目に入った

「お前なあ……その子お前の友達なんだろ？ だったらちゃんと遊んでやりなよ」

操が京助の頭を撫でながら言うところら辺のヤツヤツじゃない子が顔を上げた

「じゃー操ちゃんも一緒！」

「あのかなあ；」

ぐいっと手を引っ張られて麦藁帽子がずり落ち色素の薄い髪が浜風に舞う

「男？」

長髪でしかも金髪に見えたせいなのか思わず口に出してしまったらしいその子を操と京助が見た

「そうだよ」

引きつった苦笑いで応えながら操が落ちた帽子を拾いまた頭に載せた
「外人みたい」

「よく言われるけど日本人、コイツのイトコ……中学三年生の14歳」
京助の頭をグシャグシャと撫でて言うとう京助が嬉しそうにでも半分嫌そうに操の手を払う

「さ、準備運動しろよ？」

「はあい」

カモメがミャーミャーとうるさい位に鳴いた

「…大丈夫か？ 慧光^{えいこう}」

「あ…うん…大丈夫ナリ」

清浄^{しやうじやう}が差し出した手をつかんで慧光^{えいこう}が立ち上がる
その二人の前にはゼンゴが立つ

「…結界…か…」

白い布の人物かまぐるり辺りを見渡した

「清浄…」

慧光^{えいこう}が清浄^{しやうじやう}を見上げると清浄^{しやうじやう}がにっこり笑って慧光^{えいこう}の頭を撫でる

「今は泣いたら駄目だからな慧光^{えいこう}」

「っ…わかつてるナリっ！！」

凶星だったのか慧光^{えいこう}がぐしつと目を擦った

ザリっという地面を踏みしめる音がして顔をそっちに向けた慧光^{えいこう}と
清浄^{しやうじやう}

「お前らは下がってるんだやな」

「ここはゼンらに任せるんだやな」

腕を動かした清浄^{しやうじやう}にゼンゴが言った

「君たち…」

「お前らの力はここで使ったら駄目なんだやな」

そういいながらゼンが振り向いてニツと笑う

「まだまだ使うところじゃないんだやな」

ゴも振り向いて笑った

「でも君たちだけじゃ」

「竜の式…か…面白いじゃないか」

白い布が風に靡く

「竜と同じく僕様に齒向かうんだな」

くすくすと笑いながら白い布の人物が一步足を進めるとゼンゴがじ

りつと地面を踏みしめ白い布の人物を睨む

とその瞬間ドオンという音とともに白い布の人物をの足元から黒い何かが吹き出しそれがまるで生きているかのように動き出した

「ゼン」

ゴがゼンを見て

「ゴ」

ゼンがゴを見た

そしてニカッと笑い合うと頷き白い布の人物に向かい構えた

「なんだ？ あれ」

海に入っていた子供の一人が空を指差した

数人がその指先を見る

「：ひと？」

ザザン：と岩に波がぶつかる

カモメの鳴き声が響く

青い空に浮かんでいたのは間違いなく人影

まるで階段を降りるように一歩ずつ海面に向かい空から歩いてくるその人物を声なくただ信じられないという顔で見る子供達

「なん：だ：」

操も例外ではなく目を見開きその様を見ている

「操ちゃん：」

京助が操のシャツをつかんで擦りよってきた

青い顔をして微かに震える京助

「どうした：？ 京助：」

いくらありえない光景を目の前に行っているからといっても尋常ではない京助の様子に操がしゃがんで京助の頬を撫でた

「わかんない：でも：でもなんか：なんか：」

泣きそうに眉を下げた京助を抱き寄せ背中をさする操にもうひとりこの辺の子じゃない子が擦りよってきた

「…大丈夫だよ」

その子も腕の中に入れ操が顔をあげる

「栄野京助君…」

目に入った二本の足

爽やかな青年の声

「あ…」

ぎゅっと二人を抱く操の腕に力が入り操がその声の主を見上げる

操の顎に手を添えて上を向かせるとにっこり微笑む

左頬に二つならんだほくろが目に入った

「清浄^{しょうじょう}」

頭の上から声がした

「しょう…じょう…?」

見た事のある顔なのにきいたことの無い名前

「上…」

操の顎から手を離し軽く頭を下げる

「…しばたさん…?」

京助が小さくその名前を呼ぶとにっこりと返された微笑み

「勝美さん…? あ…」

「怪我はさせたくないからね…若の大事な友達だから」

身をかめ操の視線に柴田が自分の視線を合わせた

「こっちにおいで」

柴田が手を京助に向かって差し出すと操が京助をぎゅっと抱きしめ

柴田を睨む

「京助に何の用なんだ」

「君には関係ないよ操君、さあ」

ずいっと突き出された手を見て京助がひっとしゃっくりのような声を

を上げて操にしがみつく

「京助怖がってるからやめ…」

「まどろっこしい」

再び上から声がした

「早くしろ清浄しやうじやう」

操の視界に白い布が現れる

それはゆっくりと地面に降りて柴田の隣に立った

「上…もうしばらく…」

「嫌だね」

白い布から出てきた指がぱちんと鳴る

「上…!!」

柴田がはっとしてその指を掴んだ

「まどろっこしいのは…嫌いなんだよ今まで散々待った…待ちくたびれた【時】が来るのを」

柴田の手を払って白い布を纏った人物が言う

気付くとさっきまで鳴いていたカモメの姿が無い

海にいたはずの子供達の姿も

まるでこの一角だけ別の世界に放り込まれたようだった

「…おにいちゃん…きょうすけ…」

この辺りの子じゃない子が操にしがみつき半べそをかいている

「大丈夫…」

震える京助とその子を腕の中に操が柴田と白い布をまとった人物を見据え立ち上がる

「僕様に抵抗する…何の力も無いのに…宝珠も無いのに…おもしろい」

クスクスと微かに笑う白い布を纏った人物の隣で柴田が苦い顔をしていた

「結界…か？」

阿修羅あしゆらが部屋を見渡し呟く

そしてふと薄暗い部屋がほんのり明るくなっているのに気づいた

「緊那羅…？」

緊那羅きんならの手の中から発せられる光がさっきより強くなっている

「竜の宝珠…が…」

「なまいき」

白い布を纏った人物が口元に笑みを浮かべ手を翳すと足元から出ていた黒いものがゼンゴ目掛けて襲いかかってきた
まるで意思を持っているかのように避けるゼンゴを追いかける

ガガガガガッ！！

と地走る黒いものが碎けた地面を巻き上げる

「っ…加減ということを知らないから…なっ」

清浄しやうじやうが慧光えいこうを庇いながら白い布を纏った人物を見ると相変わらず笑む口元

清浄しやうじやう（しょうじょう）の顔が歪んだ

「ゼン！ ゴ！！」

慧光えいこうが叫ぶとはっとして清浄しやうじやうがゼンゴを探す

くるっと宙返りしたゼンが黒いもののひとつに蹴りをかまし身を屈めたゴの上を黒いものがゼン目掛けてぐんっと上がった

「っんの…！」

蹴りをかました黒いものを踏みつけてゼンが高く飛び上がると黒いものもまたスピードを上げゼンを追いかける

「ゼン…！！」

地面を蹴って飛び上がったゴの爪が黒いものを裂いた

「さんきゅなんだやな」

タタンっと黒いものを渡り地面に着地したゼンがニカッと笑い礼を言う

ゴが裂いた黒いものが苦しそうに蠢き出す

「やった…ナリか…？」

清浄しやうじやうの背に庇われていた慧光えいこうが言うしやうじやうと清浄しやうじやうが笑う

「そう簡単にはいかないさ」

バツと下に向けて腕を下ろした清浄しやうじやうの袖口から巻物が現れた

「十二支!!!」

勝手に巻物がほどけ光る

「…また邪魔するのか…清浄しやうじやう」

白い布を纏った人物の口元から笑みが消えた

怯える二人を背にやって操が白い布の人物をにらむ

「栄野京助」

白い布の人物に名前を呼ばれ京助がびくつと身をすくませた

「京助に何の用だ」

「時がきたから迎えに来た」

「時ってなんだよ」

「お前には関係ない」

白い布の人物と操の間答がたんと続く

操の服をぎゅっと握りしめた京助がちらつと柴田を見上げた

柴田がそれに気付き眉を下げた笑顔を京助に向け

口パクで何かを言ってきた

ごめん

口の動きが三言を綴る

柴田の口は確かにそう言っていた

「なまいき…僕様に齒向かんだ宝珠もないのに弱いのに」

ふんつと鼻で笑った白い布の人物が一步操に近づくと操が一步下がる

「僕様に齒向かう…どうして? 何もなく何もできないのに」

更に白い布の人物が歩み寄ると操もそれに合わせるように後ろに下がった

「逃げれば? ほら捕まえた」

操の肩を白い布の人物がつかむ

「怖くないの？」

怯える様子も逃げる動作もしない操に白い布の人物がきいた

「ああ」

操が頷く

「どうして？」

「さあね」

「どうして？」

「わからんつつて」

操の肩を掴んだままどうしてを繰り返しそれに操が淡々と返した

「どうして…どうしてどうし…てなんだよ」

「っ…」

ギリッと操の肩に白い布の人物の指が食い込み操の顔が歪む

「皆怖がるのにどうしてお前は怖くない？ 僕様を見ているのにど

うして怖がらない！！」

操の白いシャツに赤い染みが浮き出てきた

「っ…やめろっ！！」

「きよ…」

ドンッと京助が白い布の人物を突き飛ばす

白い布の人物がよろけると柴田がその体を支えた

「操ちゃんにさわるなばあかつ！！」

操の前に立った京助が白い布の人物にむかい声を張り上げた

「京助…」

肩を押さえた操が京助を見ると小さな体が震えている

「…弱いくせに…」

ピリッと何か電気が走るような音がした

「弱いくせに怖いくせに」

パチッパチパチッ

増えていく音

「弱いなら怖いならどうして僕様に齒向かう」

「上…」

柴田が白い布の人物を上と呼んだ

上と呼ばれた白い布の人物が柴田の手を払いのけ京助の喉を掴み力を込める

「か…はっ」

「京助！！」

「うるさいッ！！」

バチィッと何かが弾けて操が尻餅をついた

「きゃあ！！」

操の後ろに庇われていた子も一緒に倒れる

「上！」

更に力を入れる上の腕を柴田が掴む

「うるさいッ！！」

「京助っ！！」

操が上の腕にしがみついた

「放せんのやろ…っ」

ぐぎぎぎと操の手が京助の首を掴む上の手を引き剥がそうとする
上の手は操とそう変わらない大きさで力もそう変わらないらしく徐々に上の指が京助の首から剥がされていった

「緊那羅…」
きんなら

阿修羅が緊那羅に手を伸ばす
あしゅら きんなら

緊那羅の手の中の宝珠の光が更に強くなり部屋を阿修羅をそして京助を照らす
きんなら

強い光のはずなのにどこか柔らかく暖かい光が緊那羅の体を包み込んだ
きんなら

ぴくんと緊那羅きんならの睫毛が揺れた

「…きん…なら…？」

阿修羅あしゅらが名前を呼ぶ

今度は微かに緊那羅きんならの指が動く

ゆつくりと緊那羅きんならの瞼が開いていった

窓の外は相変わらずざあざあど雨が続いている

誰もいない窓の外を坂田がただ見ていてその横には矜羯羅こんがらが同じように窓の外を無言で見ている

「ハルミママ…大丈夫？」

悠助が母ハルミに聞くと顔をあげずに母ハルミが頷いた

「ハルミ殿…思い出したのだな…」

迦楼羅かるらが聞くと母ハルミが再び頷く

「思い出したのだなって…」

「竜の術で忘れていたこと…」

矜羯羅こんがらが小さく言う

「…みさ…おとかいう…？」

「…操はね…私の姉の子供でね…」

母ハルミが静かに話し始めた

「緊ちゃんとは正反対の性格で…でも京助は凄くなつていて何かあると操ちゃん操ちゃんって…」

鼻を吸った母ハルミが顔を上げた

「操も何だかんだ文句言いながらなついてくる京助をちゃんと面倒見てくれて…それこそ悠ちゃんが生まれてからは私や竜之助より京助と一緒にいてくれたんじゃないかしら…」

誰も何も言わずただ母ハルミの話を聞いている

「…でも…」

母ハルミの声が詰まった

京助の喉から上の手が離され操が京助を腕の中に納めた

「けほっ…み…」

「俺なんか庇うからだあほ…大丈夫か？」

京助の首にくっきりついた上の手の跡をみて操が眉を下げる

「ありがとな…京助」

操が麦わら帽子の下にしていたタオルを京助の首に優しく巻いて頭を撫でた

「…どうして僕様の邪魔ばかりするんだ…前の時の時も…」

「別に邪魔してねえだろわけわかんねえことばっかいつてんのそっちじゃん」

京助を立たせもう一人の子も立たせると操が再び上と向き合う

「もういい…」

「上」

ぎりっと上が歯を噛み締めると柴田が上の肩を掴んだ

「うるさい」

バチツと光が弾け柴田が手を離す

「もういい！　もういい！！　もういい！！　…今回の時は無かったことにする次がある」

「上！！」

柴田の服が一瞬にして摩訶不思議服へと変わった

「…へんなふく…」

こんなときでも子供は正直なもので京助がぼそつと突っ込む

ぶつと操が吹き出して顔を背け声を出さずに肩を震わせて笑う

「……」

上の肩を掴んだまま柴田…もとい清浄しやうじやうが複雑ふくざそうな顔でその様子を見ていた

「…どうして笑ってる…？」

上が呟くとはっとして操が顔を向ける

しかし清浄しやうじやうを視界に入れた途端にまた吹き出した

「…操君」

声なく笑う操を見てきよとんとしている京助ともう一人の子
苦笑いの清浄しやうじやうはただ黙って操を見ている

「…本当に僕様のことは…怖くないのか…？」

上が操をみて眩くとゆっくりと歩き出した

そして操のすぐ側で止まると操の髪をぐいと引っ張った

「操ちゃん！！」

京助が叫ぶと操が手を京助の前に出す

「…何回いやあいなんだよ； 怖くねえつつてんじゃん」

髪をつかむ上の手を掴み操が言うと上の手の力が弱まった

「…そうか…怖く…ないから齒向かうんだお前は」

上の口元が微かに緩み微笑む

「名はなんと言う」

「操」

操が応えたと上の口元が完全に微笑んだ

「僕様のものだ」

「は？」

「上！！」

清浄しやうじやうが上の肩を掴むと上がそれを払い操の額に指を二本当てた

「な…」

何がなんだかわからない操が動きを止める

「いけません上！」

「うるさい！！」

バチィッ！！

上が清浄しやうじやうに向けて怒鳴ると電気のようなものが弾け清浄しやうじやうが離れる

「お前…」

「操だっつーん」

再び操と向き合った上が二本の指にくつと力を込めた

白い布からちらりと見えた黒い宝石のような丸い飾りがキラリと光る

「操ちゃん!!」

「だあっ!?!」

それを見た京助が操を思い切り突き飛ばした

「お前…っ」

「操ちゃんにさわるなっ!!」

京助が怒鳴る

「うるさい!! 僕様に齒向かうな!!」

「上!」

「京助!!」

上の手が上がると操と清浄しやうじやうの声もあがった

「三度目…」

白い布の人物がつぶやく

「あの時もお前が邪魔しなきゃ竜が…」

ぎりっと白い布の人物が齒を噛み締めた

「お前があっ!!」

足元から更に黒いものが生まれゼンゴや清浄達しやうじやうに向かってくる

「ガンモ! ハンペン!!」

清浄しやうじやうの声と同時に2つの巻物から光が飛び出した

2つの光が布を織るように走りみるみる光の壁を築き上げるた

「おお」

ゼンゴがその壁を見て拍手をする

「邪魔をするなあっ!!」

ズガガガガガッ!!

黒いものが光りの壁に激しくぶつかった

ぎゅっと光る宝珠を握った緊那羅きんならがゆっくりと体を起こした

「…緊那羅…？」

阿修羅あしゅらが声をかけると緊那羅きんならが顔をあげる

「阿修羅…」

「…大丈夫け？」

「うん…」

緊那羅きんならを上から下まで見た阿修羅あしゅらが聞くと緊那羅きんならが頷く

「京助…！！」

はっとして京助を見た緊那羅きんならが京助の顔を見る

相変わらず微動だにしない京助を見て緊那羅きんならの眉が下がった

「私…どうしたらいいんだっちゃ…？」

阿修羅あしゅらの方をみず緊那羅きんならが阿修羅あしゅらに聞いた

竜の宝珠は緊那羅きんならの手の中で光り続けている

「どうしたら…京助…」

阿修羅あしゅらからは何も返ってこない

緊那羅きんならが京助の手に竜の宝珠を握らせその手を緊那羅きんならが両手で包んだ

しかし京助には何も変化はなかった

「京助…っ…」

緊那羅きんならが京助を呼ぶ

「晩飯…できてるみたいだっちゃよ？　早く起きないと…おき…っ

…起きて…起きて京助…っ」

京助の顔に近づいて緊那羅きんならが話しかける

やはり京助は動かない

「…駄目…だったんかの…」

阿修羅あしゅらがボソツと言ったのが聞こえたのか京助の手を包む緊那羅きんならの

手に力がこもった

「京助…目え…開けて…え…」

絞り出すような声で緊那羅きんならが言う

「何か…京助が目覚めるきっかけがないもんかの…」

「…目覚める…きっかけ…」

緊那羅きんならがふと何かを思い出し再び京助の顔を見た
そしてきゅって唇を噛み締めるとちらつと阿修羅あしゅらを見た

「…どうした緊那羅？」

「あ…の…ちよつと…やってみたいことあるんだっちゃけど…えつと…その…」

もごもごとうつむきながら言う緊那羅きんならに阿修羅あしゅらが首をかしげる

「前に…京助がやったらヒマ子さんが目を覚ましたんだっちゃだからもしかしたらっ…て」

「向日葵の姐さんが？ …そりゃ試してみる価値はあるの…やってみ？」

阿修羅あしゅらが言うきんならと緊那羅がちらつと阿修羅あしゅらを見てまた俯いた

「やらののけ？ 何か用意するもんあるん？」

「や…その…向こう…向いてほしいんだっちゃ」

「あ…ああ…いいけども…」

阿修羅あしゅらが緊那羅きんならに背中を向けた

阿修羅あしゅらの背中を見た緊那羅きんならが大きく息をはいてそして京助を見て京助の手を握りしめる

緊那羅きんならが背を丸めて京助に身を寄せ京助の顔に顔を近づけた

「…京助」

緊那羅きんならの髪がパラパラと垂れ京助の顔にカーテンのように掛かる
外の雨は幾分か小降りになってきていた

…京助…

同じ声が右と左から

…京助…

同じ声が上から下から

コポッ

返事をしようとした京助の鼻から口から水が流れ込む
しよっぱさからそれが海水だとわかった

でもなぜかどうしてか苦しくない

冷たくもない

逆に暖かい感じがする

体全体を優しく包み込まれるような心地よさ

誉められて頭を撫でられているようなくすぐったさ
手を引かれて歩いているような優しさ

一瞬誰かに抱き締められた気がした

とんっ

背中を軽く押され前につんのめりそうになった京助を支えた細い腕

おかえり

京助

キ…ン…

小さな何かが哭いた声

「…緊那羅？ きんなら もうい…」

振り返ろうとした阿修羅が眩しさに顔をしかめた
あしゅら

「京助！？」

「阿修羅…これ…っ」
あしゅら

「ちよ…まつ…何したんきに緊那羅きんなら!!」

目がやっと開けていられる位の眩しい光
それは京助から生まれていた

「えっや…別に…」

緊那羅きんならが顔を赤くして俯く

「とにかく…今なら京助が助かる…!!」

阿修羅あしゅらがニツとわらった

「…!!」

制多迦せいたかが何かに気付きはっとして顔を上げ矜羯羅こんがらと同時に頷いた

「乾闥婆けんだつば行くぞ」

「え…どこにですか？」

迦楼羅かるらが立ち上がる

「君はいかない方がいい」

「…こは僕らが」

戸口に立った制多迦と矜羯羅こんがらが迦楼羅かるらに向かい言う

「なしたん何？」

南が矜羯羅こんがらを見上げた

「…ようすけが起きる」

「マジで!？」

三馬鹿せいたかが制多迦せいたかに向けてハモると制多迦せいたかがヘラリと笑う

「だから僕達が行って力を与えてくる…」

矜羯羅こんがらが戸を開けた

「…るらは来ちゃ駄目だよ」

「なっ…何故だッ!!」

「それは君が一番わかっているはずだろ」

「…っ」

迦楼羅かるらが口ごもり顔をそらした

その隣で乾闥婆けんだつばが俯く

「乾闥婆…？」

烏俱婆迦うぐばかがそんな乾闥婆けんだつぱの顔を覗き込み名前を呼んだ眉を下げた笑顔けんだつぱを乾闥婆が返す

「乾闥婆…おいちちゃん乾闥婆けんだつぱの笑った顔好きだよ？　でもそんな笑顔おいちちゃん…」

「…すいません」

烏俱婆迦うぐばかの頭を撫でた乾闥婆けんだつぱが制多迦せいたかと矜羯羅こんがらを見上げた

「…お願いします」

「…ん」

制多迦せいたかがへらっと笑って頷いた

ガガガガッ

黒い物体が容赦なくゼンゴに襲いかかる

ギリギリでかわして体制を建て直すとまた黒い物体に向かっていく2人

体の至るところが傷付き汚れていた

「…慧光えいこう出番じゃないのかい？　泣いてばかりじゃ大事なものの涙で流すことになるぞ」

「私…」

清浄しょうじょうの少し後ろ側でただ泣き顔でいた慧光えいこうが立ち上がる

「慧喜…」

慧光えいこうが両手を前に出すと手のひらから生まれた優しい光が空に舞い上がりゼンゴの回りに集まった

「なんなんだやな？」

「これ…っ傷が消えたんだやな…！！」

ふわりと光が触れるとそこにあった傷がすうつと消えていく

「私は弱いナリ…泣いてばかりでいつも慧喜えいきの後ろにいたナリ…」

慧光えいこうが腕を下ろす

清浄しょうじょうが慧光えいこうの隣に立ち白い布の人物を睨んだ

「そうか：慧光^{えいこう}お前まで僕様に：わかったよ…」
白い布の人物の口の端がゆっくりと持ち上がった

「京助！！」

痛みはなかった

でも世界がぐるんと回って

空が見えた

ぎゅっと体を抱き締められて

ドン

という衝撃が少しだけ伝わった

「操君！！」

「お兄ちゃん！！」

2人の声が重なって聞こえた

優しい臭い

「み…」

白いタオルがふわっと頬に触れた

ドボン

鼻と口からしょっぱい水が入ってきた

がぼがぼと空気を吐き出した京助から離れていくぬくもり
手を伸ばした

ゆらゆらと揺れる視界で見たのは伸ばされた手いつもの笑顔
吐き出される空気とともにゆっくりと声なく動いた口

『きょうすけ』

ザブンと水面に引き上げられた

「京助！！ 大丈夫か！？」

父親である竜之助の声がした

カモメの声が聞こえた

車の音も

みんなの声も

唯一聞こえなかったのは

「み…」

海面にゆらゆらと揺れながら浮かぶ白いタオルを見つけた

「操ちゃ…操ちゃんツ！！」

「京助！！」

じたばたと手足を動かして操の名前を叫ぶ京助を竜が抱え直す

「とーさん！！ 操ちゃんがみ…っ…！！」

京助の動きが止まった

竜之助の手が濡れた京助の頭を撫でる

簡易港の斜面に集まる人垣

その真ん中には悠助をおんぶ紐で背中に背負った母ハルミ

そして母ハルミの腕の中には麦わら帽子を被った

目をそらしたかった

目はそらせなかった

動かない白い手足から

震えながら動かない細い体を抱く母ハルミから

竜之助が白いタオルを拾い上げ絞ると陸へと向かい歩き出した
人垣の真ん中で竜が京助を下ろす

ふわりと浜風が麦わら帽子を持ち上げる

少し持ち上がった口元は微かな微笑みを浮かべているようにも見えた

「…ごめんな…京助…」

竜之助の声がした

あとは…

あとは

そのあとは…

京助

名前を呼ばれた

手を握られて

何度も何度も名前を呼ばれて

そして光が見えた

懐かしくて暖かくて悲しくて

そんな感情が織り交ざって体中を駆け巡った

「京助」

体が重い

ようやくと指が動かせた

まるで今の今まで息をしていなかったかのようで思いっきり息を吸い込むとフガツと鼻が鳴った

「ぶっ」

誰かが吹き出したっぽい

ゆっくりゆっくり大きく息を吸い込む

「京助…?」

「…んがら笑いすぎだから」

「っ…ごめ…ぶ」

「箸が転がっても可笑しいお年頃け、がらっちは」

くくくく、っという噛み殺した笑いを聞きながらゆっくり瞼をあげていくと大きな目と下がった眉

「きよ…うすけ?」

唇がそう動いて名前を呼ばれた

「…へっ」

今にも泣きそうな緊那羅きんならの顔を見た京助が口の端をあげる

「っ…」

緊那羅きんならが目を擦って俯くとその頭を阿修羅あしゅらが撫でた

「…お遊戯でも踊るんかコレはこの状況は」

上半身を起こした京助が見たのは京助の手を握った緊那羅きんならの手を阿修羅あしゅらが握り阿修羅あしゅらの手を制多迦せいたかが握りそして最後に制多迦せいたかの手を矜羯羅こんがらが握っているというまさにお手々つないで、というもの

「あーまあ希望とあらば復活記念に踊ってもいいんやないけ? の

? きん…」

ポニーテールが靡いた

「きん…なら?」

返事をするかわりに緊那羅きんならは京助の首にまわした腕に力を込め抱き

つく

驚いた京助がそのまま固まった

制多迦せいたかがへらりと笑ってパチパチと小さく拍手する

「…おかえりだっ…ちや」

消えそうな声で緊那羅きんらが言った

悠助と烏俱婆迦うぐばかに支えられた母ハルミがようやく落ち着きを取り戻す

「大丈夫ですか…？」

乾闥婆けんたつばが差し出した麦茶のコップ

「…大丈夫よ…ありがとう」

それを受け取ると一口口に含み飲み込む

「ハルミママ…」

今にも泣き出しそうな顔で悠助が抱きついた

「ハルミ殿」

「…そうね…そうだったわね…あの子が」

コップを持つ母ハルミの手が震える

「あの子が来たの、あの日…今日みたいに白い服を着て…そして操…」

「ハルミママさん…」

「今度は京助なの？　せっかく操が…操が…今度は京助を…」

「俺がどうしたって」

茶の間の時間がその言葉で一瞬止まった

そしていつせいに声がした廊下を見る

少し寝癖のついた頭をぼりぼりかきながらあくびをする

「せつめえ…」

文句をたれながら足を進めて

「…なんだよ…なんで俺の顔見て固まってんだよ皆して…」

真ん中辺りで足を止めるとぐるりと見渡し口の端を上げる

「おはよー京助ー」

悠助が声をかける

「おー…ってか何お前ら飯食ってく…」

「京助…」

「あ？」

南が京助を見上げて指差して名前を呼ぶ

京助の後ろにいた緊那羅きんならが頷くと

「ば…」

「きよ…」

「…んの…」

三馬鹿がほぼ同時に俯いて

「ばかやろ…」

「……」

「…！」

「京助…」

「……」

「…！」

「心配かけさせやがって…」

「……」

「ギャ…」

「ッ…」

三方向からタツクルを受けた京助が三馬鹿にもみくちやにされる

「…のしそうだね」

「そう？ でもまだ…残ってるんだよ」

その様を見ていた制多迦せいたかがヘラリ笑うと矜羯羅こんがらが窓に手をかけた

「…まだ結界がとかれていないってことは…まだ…」

矜羯羅の言葉に坂田が動きを止めた

「…柴田は…大丈夫なんだよな…？」

「柴田さん？； てか…何がどうなってな…悠！」

ハッとして京助が悠助を見る

「おま…大丈夫か？；」

「何が？」

きよとんとした顔で悠助が首をかしげた

「栄野弟なら大丈夫だ京助」

迦楼羅かるらが言う

「そ…か…； うっかり俺寝て…ってあれ？； …あの…誰かこの状況説明してくれる方…；」

何があったのか、今まで何があってこうなっているのかチンプンカンプンな京助がおそろおそろ手を上げて聞く

「…きようすけ…」

「あ？ …って…母さんな…いて」

それまで黙って京助を見ていた母ハルミが名前を呼んだ

「京助なの…？」

「え？ あ？ あ…まあ…たぶん…；」

「本当に？ 本当に京助…」

「えーと…」

「京助だよーハルミママー」

悠助がニコっつと笑って言うと言うと母ハルミがゆっくち立ち上がった
麦茶のコップが倒れて中身が流れる

「あ、こぼ…」

身をかがめて倒れたコップを起こそうとした京助の体を母ハルミが抱きしめた

「ちよ…かあさん？；」

驚いた京助の声が裏返る

「…おはよう…」

母ハルミのその声は京助にしか聞こえなかった

「ふん…弱いくせに…」

上が鼻で笑うとまた足元から黒い物体が生まれ清浄しやうじやう達めがけて襲い掛かってくる

慧光えいこうの蓮の花の光と清浄しやうじやうの十二支使役の光が絡み合かってそれに向か

つていくとゼンゴもそれに平衡して駆け飛び上がった

「グユイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ！……！」

黒い物体が威嚇するかのよう^{よう}にだした泣き声ともとらえられる音

地面が揺れているように感じるその音の大きさに思わず涙ぐんだ慧^え光^{こう}が涙を飲み込みキツと上を見た

「慧喜^{えき}を…慧喜^{えき}をかえせえええッ！！！！！」

途端大きくな^なった蓮の花からでる光があたりを包み込む

「…生意氣…なんだよ…弱いくせに弱いくせに怖いくせに！！！」

慧光^{えこう}に負けないくらい^{くらい}の音量で上が声を張り上げると上の回りに宝珠^{ほしう}と思われる色とりどりの玉が現れた

「まづいな…」

清浄^{しょうじょう}が苦い顔をして上を見る

「僕様の…」

さっきまで少年の声だった上の声がだんだんと低音になっていく

「僕様の邪魔を…」

宝珠^{ほしう}たちが光を放ち上の姿を隠す

「まぶしいんだやなッ；」

「何なんだやなッ；」

くると宙返りをして着地したゼンゴが宝珠の放つ光のまぶしさに着物で顔を覆った

「しょ…うじょう何なんナリ？ これ…ッ」

まぶしさに顔をしかめながら慧光^{えこう}が聞く

「…上が…帝羅^{てら}様が本気になったみたいだ」

まぶしさの中心を目を細めて清浄が睨んだ

バリン

ぼりぼりぼりぼり

「…緊張感^{緊張感}つても君にはないわけ？」

腕を組んだ矜羯羅^{こんがら}が煎餅を食う京助に向って言う

「ふふへー； 腹が減ってはなんとやらだろなんとやら！！ 何か知らねえけどやったら腹減ってんだよ； しかたねえだろ」

煎餅を飲み込むと矜羯羅^{こんがら}に反論した京助

「京助：らしいですね」

「まったくだ」

「鳥さんに言われたら京助も立派なものだよ、うん」

南が笑いうなずきながら言う

「それはどういう意味だ；」

「まんまじゃん、緊張感のない腹の虫」

「まあほら、あれだこれこそ類友」

中島の言葉に何かを納得した面々がうなずいた

「で…」

麦茶を飲み干した京助が手の甲で口を拭いながら小雨になった窓の外を見る

「：あそこってかみえねえんだけどあそこに柴田さんとかが…」

「いるんだ…」

坂田が小さく言ったのが聞こえたのか京助が坂田の背中に手をやった

「そして：操ちゃんを殺した奴も…か」

緊那羅^{きんなら}がきゅつと唇を噛む

バリン

ぼりぼりぼりぼり

「：何してるんだよ制多迦^{せいたか}」

「：や：ちよっとおいしそいで：食べる？ はんぶんこ」

へラっと笑いながら制多迦^{せいたか}が矜羯羅^{こんがら}に煎餅を差し出すと矜羯羅^{こんがら}のかか^{せいたか}が制多迦^{せいたか}の頭にのめりこんだ

ぐきゅううううううううううううううううう

それに続いて響き渡った音の発祥元に一同の視線が集まる

「しっ…仕方ないだろうッ；」

迦楼羅かるらが怒鳴ると乾闥婆けんたつぱがじとつと迦楼羅かるらを睨んだ

うっとなった迦楼羅かるらに制多迦せいたかが煎餅を差し出す

「…らが減ってはなんとやら、なんだよね？ 京助」

「まあそのとおりだ制多迦君せいたか」

バリン

ぼりぼりぼりぼり

京助が五枚目の煎餅にかじりつく

「まったく…いい加減にしないと晩御飯入らなくなるわよ？ せっ

かくみんなで作ったのに、みんなで食べようって」

「そうだぞーみんな…で…って…」

母ハルミの言葉を受けてそれに続いた中島が何かを思い出して言葉を止めた

「…。」

とまった中島の言葉には誰も続かず中島の次の言葉を待っている

「…ここに何人かいない気がするのは気の…」

「せいじゃないよ」

続いた中島の言葉に鳥俱婆迦うぐばかがさらに続いた

ビキッ…

ビキキッ…

まるでなにかが大きくゆがんで軋む音がする

「…なんだこの音」

坂田が耳を澄ますと制多迦せいたかの手から煎餅が落ちた

「あーあータカちゃんせんべいおと…タカちゃ…ん？」

その煎餅を拾い上げ制多迦せいたかに手渡そうとした南が止まる

「…ッ…」

いつものしまりのない顔ではない制多迦せいたかに差し出していた煎餅を引っ込めた南

「なんだこの…この圧迫感…ッ」

迦楼羅かるらが苦い顔をして部屋の中を見渡すと矜羯羅こんがらが窓の外を見た

「…阿修羅…」

窓の外に一人立っていた阿修羅あしゅら

「なんだなんだ；」

「あつくんにいちちゃんぬれるよー？」

「大丈夫だ悠、馬鹿は風邪をひかねえ」

「いやまて京助今は夏だ、夏風邪は馬鹿が引くものだ」

坂田と京助そして悠助が窓に集まりやんややんやと漫才をかましていたその時

「…!!!…んがらッ!!!!!!」

制多迦せいたかが叫ぶと矜羯羅こんがらが窓に集まっていた三人をなぎ倒した
途端窓の外にドオンとおい音ともに水の壁が立ち上がる

体を起こした矜羯羅こんがらがすかさず宙に何かを指で描くとそれが光り広がって栄之神社一帯を包み込む

「なっ…何ッ；」

「おとなしくしている」

迦楼羅かるらが京助達と窓との間に立つ

水の壁の向こうで何かやばいことが起ころうとしていることくらいは三馬鹿や京助達にもわかった
でもそれが一体どんなことなのかまではわからない

「ほやああああ!!!」

「ほやあああほやあああ!!!」

和室の方から聞こえてきた泣き声の四重奏に母ハルミがハツとして立ち上がる

「まあこんだけの大騒ぎしてりゃ泣くわな」

「でも今は竜には頼れない」

鳥俱婆迦うぐぼかが立ち上がった母ハルミの服をつかみ俯く

「最初から頼る気はないよ…僕が行く」

頭の布を後ろにやった矜羯羅こんがらが窓に足をかけた

「だめえっ!!!!」

バシャー—————

悠助に布を引っ張られた矜羯羅こんがらが水の壁に頭から突っ込んだ

「ギャー!!!; 引っこ抜け引っこ抜け!!!! 死ぬ死ぬ!!!!」

中島があわてて矜羯羅こんがらの服を引っ張る

胸から上がびしょぬれた矜羯羅こんがら

「…悠助…」

「だめだよっこんちゃんッ!! だめッ!!」

水の滴る前髪を書き上げた矜羯羅こんがらに悠助が抱きつく

「どっかいつちゃだめだよ!! これからみんなで晩御飯なんだよ?

慧光えいこうもゼンゴも柴田さんもないくてそれなのにこんちゃんま
でいなくなったらだめだよ!!」

悠助の言葉に矜羯羅こんがらがゆっくりと悠助を抱きしめた

「…そうだね…でも誰かが迎えに、いかないといけないんだよ…だから僕が行くんだよ」

「だったら僕も行くよっ! 二人でいけばいいんだよ」

「それは駄目なんだよ悠助」

「なんでっ!!!!」

悠助が声を上げる

「なんで駄目なの!? なんで? なんでっ」

「…うすけ…」

制多迦^{せいたか}が悠助を撫でた後抱き上げる

「なんでだめなの…僕みんなでご飯…食べたいだけなのに…」

悠助の目から涙がこぼれた

バチバチという音

赤い水溜りがところどころにできている

「…ほら…弱い」

クスッと笑みを浮かべた口元

その手にはゴの金色の角が握られていた

「ゴ…」

ぐっと地面をつかんでゼンが体を起こしよろよろと立ち上がる

「ゴを離すんだやな…」

「まだ僕様に命令する元気があるんだ」

さっきの少年の姿から少し成長した姿になった帝羅^{てら}がゴの体をブン
つと放り投げた

「ゴー!!」

駆け出そうとしたゼンがガクンと膝を付く

もはや駆け出す力も残っていないらしくそのまま手を地面に付いた

「弱いくせに、ねえ? 清浄^{しやうじやう}」

微笑を浮かべたまま振り向いた帝羅^{てら}の白い布が風になびく

慧光^{えいこう}に抱きかかえられた清浄^{しやうじやう}が血の垂れた唇をかみ締め帝羅^{てら}を睨んだ

「っ…ごめんナリ清浄^{しやうじやう}…ッ…私をかばったから…ッ」

慧光^{えいこう}が泣きながら手をかざそうとすると清浄^{しやうじやう}がその手をつかんだ

「慧光^{えいこう}今ここで力を使うな…俺なんかのために」

「でもッ!! でも清浄^{しやうじやう}がっ…」

ぼろぼろと零れる慧光^{えいこう}の涙が清浄^{しやうじやう}に落ちる

横腹に滲んできた赤い血が服に染みを作った

フツと影ができて慧光^{えいこう}が顔を上げる

「僕様の邪魔をした：三回目だね清浄」

「帝：」

慧光が口を開こうとした瞬間突き飛ばされた

まだ頭の整理が付いていない慧光の目に映ったのは帝羅が高く掲げた腕

そして

メキメキメキメキ：

再び聞こえた音

頭の布を絞りながら立ち上がった矜羯羅が乾闥婆を見ると乾闥婆が無言で腕を下へと振る

すると窓の外にあった水の壁が消えた

すんすんと制多迦に抱かれて泣く悠助の頭を矜羯羅がなでると悠助が矜羯羅に抱きついた

「悠助、別に僕は帰ってこないっていつてないよ：？　ちよつと慧光としよ：慧光たちを迎えにいくだけ」

「本当だな」

京助が矜羯羅にずっと迫って聞く

「本当に帰ってくるんだな本当の本当だな？」

「：」

「嘘ついたら針、千本なんだからな」

「京助：」

かすかに震えている京助の声に緊那羅が京助に歩み寄った

「俺だって馬鹿だけどわかる、やばいってことくらいわかる：お前より強いんだろ？　父さんより強いんだろ：操ちゃん、殺した奴なんだろ？」

京助の肩に伸ばされかけていた緊那羅の手が止まって緊那羅がうつむく

しん：となった茶の間にはしとしという小雨の音さえ大きく聞こ

える

メキメキメキ：

「…なあ」

中島がハイと手を上げる

「この音ってなんなんだ？ さっきからメキメキ…」

「結界が壊れる音だよ」

「ほー…そうなんか」

鳥倶婆迦うぐぼかが答えた

「誰が壊してるんだろうなあご苦労様な…」

「しまった！！！」

南の言葉の途中で迦楼羅かるらが京助や制多迦せいたか、窓の周辺にいたものを押し
のけて窓から飛び出した

「っだあッ！！！！！」

のはいいが雨でぬれていた地面で滑って転ぶ

「うわーだっせー…；」

窓の下を見た京助が呟く

「何やってるんですかまったく…っ；」

「しかたないだろう！！！」

迦楼羅かるらの後に続いた乾闥婆けんたっぽがしりもちをついていた迦楼羅かるらをひっぱ
ってたたせた

「鳥さんって格好つけても格好つけられないタイプだね」

「あ、いえてるいえてる」

南と坂田がハッハと笑う

「やかましいッ！！； たわけッ！！；」

ゴウと迦楼羅かるらの口から炎が出されると乾闥婆けんたっぽがすかさずけるらの前
髪を引っ張った

「それどころではないでしょう」

そういつて乾闥婆けんたっぽが向けた視線の先を京助達も見る

「…あ…」

そこにはいつものあの飄々とした雰囲気あしゅらの阿修羅ではなく

「阿修羅…なのかれ…」

京助が慧喜えきのいつていた言葉を思い出した

『あのとときの阿修羅あしゅらって…本当名前のまんまだったって…』

修羅って言葉

意味はよくわからないけど雰囲気ならなんとなくわかってその修羅が付いている阿修羅という人物がそこにいた

誰もが言葉を失うほどの威圧感

短かった髪が長く伸び生ぬるい風にゆっくりと揺らされていた降り続く小雨までもが阿修羅をよけて降っているように見える

「…やっとお目にかかれるんだな…」

髪についているみよんみよんから宝珠をひとつむしりとるとそれを何もないところに向かいかざした

「どんだけ…待ったんかの…てめえにお目にかかれるんを」

ニイッと阿修羅あしゅらの口の端が持ち上がる

背筋が凍りつくような感覚に緊那羅きんらが思わず京助の服をつかんだ

京助も三馬鹿もただたたまま動こうとせず

「ほやああああああ!!」

ちみっこ竜の泣き声とメキメキという音だけが聞こえる世界

「…阿修羅…」

乾闥婆けんだつばが顔を背ける

「今、殺してやるからの…ッ!!!」

カッと目を見開いた阿修羅あしゅらのかざしていた宝珠から光があふれ爆発した

爆発した光が風を生み爆風となって栄野家一体を包み込んだ

「うおおおおお!!;」

「ひょー!!;」

「伏せるっちゃみんなッ;」

緊那羅きんならの声にまるで地震避難訓練時のような尻を高く上げた体勢で床に伏せる

ビリビリとした振動とゴウゴウという風の音と舞台を照らすライトを直で当てたような光

「乾闥婆!」
けんだっぱ

迦楼羅かるらが乾闥婆けんだっぱを押し倒し庇う様に覆い被さった

「か:」

迦楼羅かるらの無駄に長くばさばさした服が爆風に押されて持っていかれそうになっている

爆風で飛ばされた小石やらなんやらがそこらじゅうにあたって音を出しているが爆風の音でかき消されてひとつも聞こえない

乾闥婆けんだっぱが力いっぱいこめて泣きながら叫んだものも爆風にかき消された

ドオオオオン:!!::!!::!!

大きな音ひとつ

その後にはキィキィとゆれる室内灯の音だけが残った

「:終わり?: 終わり:~?」

南が恐る恐る頭を上げるとパラパラと小石が落ちてくる

家の中はめちゃくちゃで窓にもひびが入っていた

「ほやあああああ!!」

響いた泣き声に母ハルミがハッとして立ち上がると吹っ飛んだ襖を踏みつけて和室のほうへ駆け出す

「おーい:皆の衆:生きてるか?;」

「ういー;」

「なんとか; あー:なんだこれ; 悠のぞうさんじょうろじゃん;」

「京助が声をかけると各々が返事をする」

「…いじょうぶ？ 矜羯羅、悠助」

「ああ…」

「うん…ありがとうタカちゃん」

制多迦せいたかの下からはいずり出た悠助が制多迦せいたかの頭や背中から小石やら何やらを払い落とす

「阿修羅あしゅらが結界を壊したんだ」

一人立ち上がっていた鳥俱婆迦うぐばかが窓の外を見ていた

「大丈夫か？ 乾闥婆けんたつば」

パラッと迦楼羅かるらから小石が落ちる
声をかけても動こうとしない乾闥婆けんたつば

「どうした…？ 怪我でもしたのか？」

「…ッ…どうして僕なんかを庇かばったんですか…」
ぐっと力を込めて乾闥婆けんたつばが迦楼羅かるらの体を押す

「僕はッ…！！！！」

「柴田ッ!？」

ほぼ同時に上げられた坂田と乾闥婆けんたつばの二つの声

「おいおいおいおい； あっちに転がってるのもしかして…ッ；」

「ゼン!!!； ゴ!!!？ うっわマジかよ；」

身を窓から乗り出した坂田に続いて京助と中島、南が坂田の上に乗っかって結界がの中で起こっていたことのすさまじさを目の当たりにした

「…帝羅てら」

矜羯羅こんがらが帝羅てらを鋭く睨む

そんな矜羯羅こんがらと同じくらいもしかしたらそれ以上に鋭く睨むのは

「…会いたかったわ…上さんよ」

長い黒髪の間から見える鋭い目

「阿修羅…」

いつもの阿修羅ではないということ
そして何か本当にやばいということ

「お前…？ 僕様の結界壊したの」

掲げていた手を下ろして帝羅が阿修羅のほうへと向きを変えた

「いかん阿修羅ッ！！」

迦楼羅の聲が響く前に阿修羅が身をかがめた

帝羅が清浄の体を踏んで阿修羅の自ら近づいていく

表情一つ変えず帝羅が一步また一步 阿修羅に近づいて

「宝珠を一個使ったんだ…ふうんそれにしてもたいしたものだね清
浄の結界を壊すなんてさ…ねえ阿修羅」

あと数メートルというところで帝羅が足を止めてフツと笑った

「清浄！！」

慧光が清浄に泣き叫びながら駆け寄る

「柴田ッ！！！」

坂田がはだしのまま窓から飛び出して駆け出すと慧光よりも早く清
浄こと柴田を抱き起こした

「柴田！！ 柴田ッ！！」

「清浄…ッ」

少し遅れて駆け寄った慧光が手をかざすと光る蓮の花
その光が清浄をやさしく照らす

「…若…濡れますよ」

「馬鹿かッ！！； 自分の心配しろッ…自分のッ」

うつすら目を開けた清浄が坂田に言った

「久しぶりだねこうしてお前たちの前に姿見せるの」

帝羅が腰に手を当ててぐるりと摩訶不思議服集団を見渡す

「いつくらいぶりだろう…うーん…10年くらい？ いやもったか
な…この姿になるとさつかれるんだよ…だからむかつくこととか見
たくないんだ」

コキコキと首を鳴らした帝羅^{てら}

「え？ なになに？； お前ら全員あいつのこと知ってるん？」

「上は一人しかいないんだ」

中島の問いに鳥俱婆迦^{うぐばか}が答える

「天と空って分かれてはいるけど…上はあいつ一人だけなんだよ」
矜羯羅^{こんがら}が付け足す

「…あれ？」

帝羅^{てら}が京助を見つけるとしばらく黙って見続ける

「お前…京助、か」

「キョンちゃんご指名はいりまあす」

「うっさい；」

京助が南を軽く小突いた

「お前の相手はオライやんきにッ！！」

「うるさい」

ゴウッ！！！！

声を上げた阿修羅^{あしゆら}に向かい帝羅^{てら}が指を動かすと阿修羅^{あしゆら}が吹き飛び壁にぶつかる

「京助…ふうん…へーえ…」

その京助から視線を話すときよろきよろ何かを探し始める帝羅^{てら}

「操」

その帝羅^{てら}の口から発せられた名前に部屋の真ん中にいた緊那羅^{きんなら}が驚き目を見開く

「どこにいる？」

「いねえよ」

「嘘言うな」

「嘘じゃねえってん；」

京助の返事にむっとした顔をする帝羅^{てら}が窓へと近づく

「お前の隣にいたじゃないか」

「今はいねえんだよ…もういねえってんだろ！！　てめえが殺したんだっつーの！！！！」

怒鳴る京助

「操は僕様のものだ」

「は・な・し・を・聞けッ！！」

迦楼羅と乾闥婆が帝羅の前に立ちふさがった
「弱いくせに」

ゴウッ！！！！

さっきの阿修羅と同じ様に帝羅が指を動かただけで迦楼羅と乾闥婆が吹き飛ぶ

鳥俱婆迦が京助を引っ張り矜羯羅と制多迦が窓の前に立った
南を中島も京助のそばに集まり窓の外を見る

「操は僕様のものなんだ」

「人は誰かのものなんかじゃねえんだよッ！！」

京助が再び怒鳴ると緊那羅が京助の服をつかんだ

「京助…」

「お前は緊那羅だっちゃ」

何か言おうとした緊那羅の言葉より先に京助が緊那羅の真似をして
その言葉をとめる

「どいてよ二人とも」

「嫌だね」

制多迦が頷く

「…げてッ！！」

制多迦の声に鳥俱婆迦が京助の手を引っ張って駆け出した
南と中島も緊那羅と悠助を連れて後に続く

ドオン！！！！

茶の間から出て玄関に着いたとき聞こえた爆音

「いいから早く」

立ち止まった京助を鳥俱婆迦うぐばかが押して外に出る

「片付け手伝ってやるから今は逃げるが勝ちだ京助ッ；」

「お前に言われると逆に断りたくなるわッ；」

手伝うといった南の言葉に京助が突っ込む

「ブッ；」

いきなり立ち止まった中島に京助がそして南がぶつかった

「な……！！」

中島と言おうとしたのかそれとも何してんだといおうとしたのか
どちらにせよ京助が声を発した

「…慧喜…」

しかし京助のその言葉は緊那羅きんならの言葉で止まったまま視線だけが中
島の向こうへと向けられる

小雨もやんだ暗闇の中で生ぬるい風になびくのは薄紫色の布

「慧喜……！！」

慧喜えきの姿を見るなり悠助がぱあっと笑顔になって駆け出そうとした

「悠助……！！」

それを緊那羅きんならが腕をつかんで止める

「緊ちゃん？ どうしたの？ 慧喜えきだよ？ 帰ってきたから僕お帰

りって……」

「悠助」

慧喜えきが一步踏み出して両手を広げた

「悠助…俺ね…寂しかったんだよ…」

「え…き…」

慧喜（えき）が一步近づくと共に京助たちが一步下がる

それを三回くらい繰り返しているときまた茶の間から爆音が聞こえた
鳥俱婆迦うぐばかが振り返る

「俺…ねえ悠助…義兄様が憎いんだよ」

「は？…」

中島の後ろで京助が驚くと一斉に京助に視線が集中する

「だから：義兄様いらない」

「慧喜！！！！」

いつの間にか慧喜の手に握られていた三又の鉤を振るとフォンと風が鳴いた

「だめ！！ 慧喜ッ！！ だめだよッ！！」

「悠助！！ だめだっちゃッ；」

緊那羅の手を振り解こうとする悠助を緊那羅が抱き上げる
じたばたと暴れる悠助

「指徳でしょ」

鳥俱婆迦が言うとう慧喜がうつむきがくと膝を付いた

「おやおや：天才的頭脳優秀なお人形の鳥俱婆迦ちゃんには誤魔化しがきかないんだったねえ：」

コツコツと足音がして現れたのは真っ赤な口紅を塗った唇で弧を描きうす笑う指徳

「あっ！！ あん時の：ッ！！」

京助が指徳を指差して叫ぶ

緊那羅もぐつと唇をかんだまま指徳を睨んだ

中島と南が京助と指徳の間をさえぎるように立つと京助を後ろへを押す

「な：；」

少しよろけた京助が中島の服をつかんだ

「か弱いから俺、でもまあ何とかなるかと」

「は？」

「やるときや中学生だってやるんだって」

中島のはだしの足が少し前に出されると京助がハッとして二人の肩をつかんで引っ張る

「お前らは関係ねえッ；」

しりもちをついた中島と南の前にこんどは京助が立った

「京助！！」

緊那羅きんならが悠助をおろして駆け出すと一瞬で摩訶不思議服に変わりそのまま京助の隣に並び武器笛を構える

「慧喜！」えき

「悠！……」

その隙に慧喜えきのところに行こうとした悠助の腕を南がつかんだ

「離して！！ 南いやだッ！！ はなしてーッ！！」

「アカンッ； それだけは聞けないッ！！；」

暴れる悠助を羽交い絞めにした南が肘で顔を押されながらもしっかりと悠助を抑える

「おやおや……そんなにこの慧喜えきが大事なんだ」

「そうだよッ！！ だって慧喜えきは僕の子供産んでくれるんだッ！！ だから慧喜えきは大事なんだッ！！」

「子供……ねえ……ククク……それは大事だね」

指徳しとくが倒れていた慧喜えき（えき9の髪をつかんで引っ張りあげた「う……」

小さく慧喜（えき9が声を上げる

「慧喜！！ 慧喜ッ！！！！ 大丈！？ 慧喜ッ！！！！」

「いてていていてッ；」

悠助が暴れるたびに南に蹴りと肘鉄が入るのを中島がまた悠助を抱き上げてとめた

「指徳……慧喜えきを返すっちゃ」

緊那羅きんならの髪飾りがふわっと靡いて京助の腕に触れる
その飾りを京助がつかんだ

「きよ……」

くいと引っ張られて少し驚いた緊那羅きんならの横を京助がゆっくり通り過ぎて指徳しとくに近づく

「俺ばっか見せ場ねえじゃん」

そして立ち止まって振り返ると口の端を上げて笑った
その時また聞こえた爆音は今度は庭のほうから

「俺だって……」

京助が指徳しとくの方に顔を向けるとゆっくりと顔を上げた

「守られてばっかじゃ格好悪くてしゃあねえじゃん。俺だって守りたいじゃんやっぱ…大事だもんな」

ふわっと入り込んできた風が京助の足元に集まる

「僕もっ!! 僕も慧喜えき大事だもんっ!! 守りたいもんッ!!!!」

悠助が声を上げると風が悠助の周りにも集まりだした

「いっ」

静電気のようなものが中島と南に走って二人が手を離すと悠助が駆け出し京助に並ぶ

「京助…悠助…」

緊那羅きんならが武器笛を下ろして二人の背中を黙ってみる

指徳しとくの唇がまた弧を描いた

「ほやあああああ!!!!」

ちみっこ竜の寝ていた部屋にやってきた母ハルミが泣き叫ぶちみっこ竜の横に座り込んだ

「竜之助…どうしよう私…っ」

座り込んだ母ハルミがまるで少女のような口調で泣き喚くちみっこ竜に話しかける

「私ッ…自分の子供すら守れないの？ 操が守ってくれたの京助を竜之助が守ってくれたの私もこの町でも私は…なに…も…」

流れる涙を拭うことなく母ハルミが泣きながらちみっこ竜の寝ている布団に突っ伏して嗚咽をあげる

「ほやあああああ!!!!」

母ハルミにつられたのかちみっこ竜の泣き声もまた大きくなった

「竜之助…どうしよう…どうし…っ」

泣き崩れた母ハルミの耳に聞こえた何かを引きずる音
ゴトゴトと鉢を引きずって現れたのは夏の妖精

「ハルミママ様」

「…ヒマ子さん…?」

泣き顔を上げた母ハルミの涙をヒマ子が葉で拭うとにつこりと笑った
「大丈夫ですわハルミママ様：」

「え：？」

パラパラと崩れた瓦礫を制多迦が跳ね除けると矜羯羅が立ち上がった
てひとつ咳をすると口の端から血が流れた

「弱い」

帝羅が指を唇に当てて周りをぐるりと見渡す

犬の姿に戻ったゼンゴ：コマとイヌをその腕に抱いた乾闥婆をかば
い羽を大きく広げた迦楼羅が帝羅を黙って睨む

坂田に抱き起こされて慧光に治癒を受けている柴田こと清淨

肩を押さえて立ち膝で帝羅を長い前髪の間から睨む阿修羅
それらを一通り流し見た後、帝羅がフンと鼻で笑った

「僕は絶対：それをわかっててこんなことするから」

くるっと一回転した帝羅の姿が元の少年の姿になると白い布を靡か
せて制多迦に近づく

「：に」

いつもの半開きの目を少し鋭くして制多迦が帝羅を見下ろすと帝羅
の手が制多迦のあごをつかんだ

「制多迦！！」

矜羯羅が声を上げると帝羅が手のひらを向けその瞬間 矜羯羅の体
が吹き飛ぶ

「：んがらッ！！」

制多迦が帝羅の手を払いのけて矜羯羅の元に走る

「制多迦、お前も僕様のものだ」

うつすら笑みを浮かべて矜羯羅を抱き起こす制多迦を見る帝羅
気を失っている矜羯羅を抱きしめて制多迦がいつもの矜羯羅以上の
鋭い目つきで帝羅を睨む

生ぬるい風が帝羅の白い布と制多迦の黒い布を揺らした
制多迦と帝羅の睨み合いが続く

先に行動を起こしたのは帝羅^{てら}だった

しかしそれは攻撃でも防御でもなくてただ眉間にしわを寄せて面白くなさそうな顔を作っただけで

「…この…感じは…」

迦楼羅^{かるら}がハッとして辺りを見渡す

コマとイヌを抱えたままの乾闥婆^{けんたつば}がそんな迦楼羅^{かるら}を見てきよんとしている

「…迦楼羅^{かるら}…？　どうかしたんですか？　この感じって…何か…」

「…いやでも…まさか…だとしたら誰が…」

聞いた乾闥婆^{けんたつば}には答えずブツブツと言う迦楼羅^{かるら}に首をかしげた乾闥婆^{けんたつば}

「…！」

制多迦^{せいいたか}も何かに気づいたのか顔を上げて迦楼羅^{かるら}同様辺りを見渡す
制多迦^{せいいたか}の腕の中の矜羯羅^{こんがら}はまだぐったりとしたままだった

「…かるらん」

「…間違いない…しかし一体誰が…」

ずるずると体を引きずるように阿修羅^{あしゅら}が迦楼羅^{かるら}と乾闥婆^{けんたつば}の元にやってきた

「この感じは間違いない…竜…」

迦楼羅^{かるら}が小さく口にしたその名前に乾闥婆^{けんたつば}が大きな目をさらに大きくして辺りを見渡す

しかし迦楼羅^{かるら}が口にした名の主の姿はどこにも無く

代わりに目に入ったのはまだ治癒行為を必死に続けている慧光^{えいこう}の姿
ハッとして乾闥婆^{けんたつば}が二匹を抱えたまま慧光^{えいこう}の元に駆けていった

「ほう…やっぱり竜の子供…というわけか…あくまで上に反する…と」

弧を描いた唇に指を添えて指徳^{しとく}がにいと笑う

「うるせー！！　父さんがどうこうしたからとかじゃねえし、俺は俺だし」

京助がフンつと鼻息を荒くして言う

「僕も！！ 慧喜えきを守りたいっ！！」

悠助も京助に負けないくらいの鼻息を鼻から出した

「俺は俺なりに俺の守りたいと思ったモンを守りたいってん」

京助と悠助の足元に集まりだしていた風が一気に巻き上がる
そして

「おお； 爬虫類再び！！；」

ぐんつと二人の背中にいつしか現れたあの竜の羽が再び現れた

「おやおや：一丁前に」

指徳しとくの眉毛がピクつと動き一步後退する

「京助：」

緊那羅きんならが不安げな表情で京助の名前を呼ぶと聞こえたのか京助が振り向きヘツと口の端をあげて笑う

その顔を見た緊那羅きんならの表情がほころんだ

そして京助もそんな緊那羅きんならの顔を見て笑顔を作るとまた指徳しとくの方を向き指徳を睨む

「：アイコンタクトとかいうヤツ？ 今の」

「：相思相愛ってやつ？ 今の」

「そうだと思う」

南と中島が京助と緊那羅きんならの行動を見てつぶやくと鳥俱婆迦うぐぼかがそれに相槌を打つ

「こんなトコだけどしよっぱいなあ：；」

「いいんじゃない？ 笑顔を作れることはすごいことだもん」

「まあ：そうかもだけど；」

くいつとお面を引っ張って鳥俱婆迦うぐぼかが少し寂しそうに言った

「おいちゃんも：笑顔作りたいな」

「ばか：？」

ボソツとこぼれた鳥俱婆迦うぐぼかの呟きが聞こえた中島が鳥俱婆迦うぐぼかの頭に手を置き撫でる

「安心しろお前のお面バッチリ笑えるからさ」

「本当？」

「バチコイだ」

笑いながら中島が言うと鳥俱婆迦うぐばかが嬉しそうに帽子を直した

「そうだな笑顔を作れるってのは：すごいことだな」

そんな大きな声ではないのにその場にいる全員に聞こえたその声
弧を描いていた指徳しどくの唇

それがぎりつとゆがんだ

「ずいぶんと派手に家、壊してくれたな」

ギシつと鳴った廊下にだんだんと近づいてくる声

振り返った緊那羅きんならが目を丸くして驚き口をパクパクさせる

「俺はさっき笑顔を守ってくれと頼まれた」

南と中島も驚いた表情のまま固まっている

まだその声に背中を向けたままの京助と悠助

さきに悠助のほうが振り返り声の主を見上げた

振り返るに振り返れないでいた京助の頭に乗せられた手

「お前は幸せ者だな京助、父さん嬉しいぞ」

「おとうさん：？」

悠助が見上げると竜がにっこりと笑った

「竜：？　なんで？　おいちゃんの計算では：」

鳥俱婆迦うぐばかもお面でわからないがきつと驚いているんだろう少し戸惑
っている声を発しながら竜を見る

「：：竜：」

指徳しどくの表情が険悪になって竜を睨んだ

「ちゃんと悠助守ったんだなえらいぞ京助」

「：：まあな」

ぐりぐりと京助の頭を撫でる竜に京助が振り返らずに答える

「じゃあ今度は俺と悠助と京助で俺たちの守りたいもの守ってみな
いか？」

悠助を片手でひょいと抱きかかえた竜

「うんっ!!」

竜の言葉に悠助が首が吹っ飛ぶんじやないかって位強くうなずいた

「京助は？」

「…まあ…協力してやんよ」

京助が頭を撫でていた竜の手をつかんで竜を見上げるとヘッと口の端をあげた

【第十四回・弐】 ひまわり（前書き）

ひまわりは自分だけの太陽に恋をする

【第十四回・式】 ひまわり

「清浄……」
しやうじやう

「柴田っ……柴田おいっ!!」

叫ぶ坂田を押し退けて膝をついた乾闥婆けんたつばが清浄しやうじやうの胸の上にぐったりとなったコマイヌをのせ手を翳す

「あとには僕が引き受けます」

につこりと笑う乾闥婆けんたつばに慧光えこうの目が潤み鼻水が流れた

坂田も眼鏡を外してぐいっと目を擦る

「……乾闥婆……」
けんたつば

「今僕にできること……はこれくらいですから」

翳した手から光が生まれ清浄しやうじやうとコマイヌを包み込みに優しい空気が流れた

「わ……私も……」

「あなたは向こうにいつてくさい? あなたの大切な人も大変になっっていると思いますから」

「……大切な……っ!! 制多迦様!! 矜羯羅様!!」
せいたか こんがら

はっとして滑りながら駆け出した慧光えこう

「乾闥婆……柴田っは……柴田……っ」
けんたつば

「何いつているのかわかりませんよしっかりしてください」

「んなごといいだっでなあっ!!」

冷静に返す乾闥婆けんたつばに坂田が涙鼻水垂れ流したままで怒鳴るとその坂田の頭にぽんっとな手が置かれた

「しば……」

「ははは……若……凄いい顔になってます……よ」

「はははじゃないですよあなたも……まったく……」

血だらけ泥だらけの手で坂田の頭を撫でる柴田を見て乾闥婆けんたつばが溜め息をつく

「迦楼羅も……何してるんです?」
かるら

「いや…あの…雨がだ、な…」

乾闥婆けんだつぱの頭の上で着物を広げる迦楼羅かるらに乾闥婆けんだつぱが聞く

「雨が…かからないようにと…思ってたなその…」

「…ありがとうございます」

振り向かずと言った乾闥婆けんだつぱ

「もう濡れまくりで意味ねえと思うんだけど俺」

「うっ；」

坂田が突っ込むと迦楼羅かるらが固まった

「慧喜えきを返して!!」

悠助が指徳しとくに向かって叫ぶとふっと指徳しとくが笑う

「返すもなにも…慧喜えきは自分から私の呼び掛けに答えてきたんだよ？ 義兄様が憎い、悠助を独り占めしたいのに義兄様が邪魔って…

ねえ？」

「う…」

ぐいっと慧喜えきの髪を引っ張り上げ指徳しとくが慧喜えきに言う

小さく声を上げた慧喜えきの顔が歪んで目から涙が流れた

「え…き…っ…慧喜えきを泣かせたなっ!! 慧喜えきを（えき）返せっ！
！」

それを見た悠助がまた叫ぶ

「好きな女の子を泣かせられちゃあ怒るよな、よしよし正しいぞ悠助、さすが俺の子供だ」

「おま…」

うんうん頷きながら悠助の頭を撫でる竜に京助が呆れた

「なんつうか…京助の親父さん…だよなあ」

「この父ありてこの子ありってかんじ？」

中島と南が妙に納得して親子の会話やり取りを見る

ドオン!!!!!!

また聞こえた爆音に一同が振り返った
崩れた瓦礫を蹴飛ばす音

上がった土煙から見えた白い布

「上…」

指徳しとくが少し顔をほころばせて名前を呼ぶ

「…帝羅てら」

「ふん…やっぱりお前か、竜」

ばさつと髪と布を後ろにやりながら帝羅てらが竜を見た

「矜羯羅様こんがらっ!!」

土煙の向こうから叫びに似た慧光えいこうの声が聞こえ慧喜えきがぴくつと反応
してうつすら目を開けた

「慧喜えき!!」

「ゆ…うすけ…俺…ごめんね…ごめんね…」

「ふん…」

絞り出すような声で謝る慧喜えきの髪を床に叩きつけるように指徳しとくが離す
這うようにして慧喜えきが伸ばした手を悠助が掴んだ

「慧喜えき…っ」

「悠助…俺…」

「慧喜えき…おかえり…」

ぎゅうつと慧喜えきの頭を抱き締め素直なおかえりという悠助に慧喜えきが
嗚咽を上げてがむしやらに抱きつく

その反対側でお互いを睨んだまま動かない帝羅てらと竜

凍りついた空間に南と中島がどうしていいかわからずとりあえず京
助を見た

その京助もやはりどうしていいかわからずに緊那羅きんならを見ると緊那羅きんなら
は小さく震えながら帝羅てらを見てる

「緊那羅きんなら」

烏俱婆迦うくばかがくいくいと緊那羅きんならの髪飾りを引っ張った
「京助」

「へ？　なんだ？」

次に京助を手招きする

「これ、誰」

「は？　…緊那羅」

緊那羅を指差して聞く烏俱婆迦に京助がわけわからんというような感じで答えた

「だってさ、緊那羅」

「あ…うん」

ただそれだけ

ただそれだけのやり取りで緊那羅の顔がほころんだ
「なんだよ」

ひとりわけがわからない京助がじとつと二人を見た

「矜羯羅様…今…」

慧光が泣きながら制多迦に抱かれ動かない矜羯羅に向かい手を翳すと大きな蓮の花がぼんやりとした光となって矜羯羅を包み込む

「…めんね慧光…ごめんね矜羯羅…僕は…」

「制多迦様も…っ」

うつむいていた制多迦の頬についていた傷に慧光が触れると一瞬にしてその傷が消えた

「…りがとう慧光」

いつもより眉の下がった笑顔で制多迦が返す

「…めだね僕は…僕にできることが見つからないんだ…」

「制多迦さ…」

スコン

小気味いい音

「こん…」

「…んがら…」

矜羯羅こんがらの拳が制多迦せいたかの額を小突いた

「だ…いじょうぶナリか？」

「大げさだよ…ただ気を失ってただけだよ…大丈夫」

ゆっくりと体を起こした矜羯羅こんがらが制多迦せいたかを見るときよとした間の抜けた顔をしていた制多迦せいたかの頬を思い切り引っ張った

「…ひゃひゃひひひゃひひひひゃい」

「またおかしなこというからだよ」

「…ひゃいー」

両頬を思い切り引っ張られた制多迦せいたかが両手をじたばた動かすそんな二人を慧光えいこうがどうしていいかわからずにおろおろしながら見ていると矜羯羅こんがらが手を離れた

「自分にできることを見つけようとすることも自分にできることなんだよ…むしろ自分にしかできないことなんだ」

「…んがら…」

「ほらいくよ、まだ…だろ？」

スツと立ち上がった矜羯羅こんがらが制多迦せいたかに向かい手を差し出した

「あーあ…むかつく…疲れる…むかつく…」

帝羅てらの回りの空気がパリパリと殺気を帯びていく

「誰の力奪ったのかわからないけど…」

フンと鼻で笑いながら竜をみた帝羅てらを竜がにらみ返した

その竜の回りの空気も次第に殺気を帯びていくのがなんとなく感じられたのか南が腕をさすりはじめる

「操…」

帝羅てらがまた操の名前を口にする

緊那羅きんならがぎゅっと拳を握りしめると烏俱婆迦うぐばかがそんな緊那羅きんならに抱きついた

「大丈夫、緊那羅きんならだよ緊那羅きんなら」

「…烏うぐいす倶ぐ婆は迦ぢ…」

「ね？ 京助」

「へっ？ あー…ああ」

いきなり振られて慌てながらも京助が返す

「…お前は緊那羅きんならだ」

少し間をおいて京助が言った

「京助…」

「なんだよ」

緊那羅きんならが数歩京助に近づくと京助の服を掴む

「ごめん…だっちゃ私…あの…」

「…しゃあねえなあつとに」

溜め息をついて頭をかいたあと京助が服をつかんでいた緊那羅きんならの手を握った

「あーあしよっぺー」

握り返してきた緊那羅きんならの手

「…京助」

「大丈夫だ【緊那羅きんなら】」

「…うん…うんっ」

「泣くな…」

京助が緊那羅きんならの額を小突くと緊那羅きんならが半べそで笑った

「…らぶらぶだあねえ」

「まあ跡取りは悠が請け負うからええんじゃねえか？」

「こらそこ！ 何納得してんだ」

中島と南がうんうん頷きながら話しているところに京助が突っ込む

「いやいやお構い無く」

「お構いあるわ！ 大いにあるっちゅーねん！」

さわわ爽やかに流そうとした南に京助がさらに突っ込み怒鳴った

「いいじゃん現にらぶらぶだあねえなんだし」

「なにがだどこがだだれがだっ」

「あーなーたーとこーなーたー」

「…こなたって誰だっちゃ…」

大きな栗の木の下での振りつけをしながら中島と南が歌うと京助が更に更に怒鳴りさりげに緊那羅きんならも突っ込みを入れる

「…」

「…」

「…」

「…」

その後揃った沈黙

「なあ…なんか…」

「うん…なんか…なあ」

「そう…だっちゃね…なんか…」

「足りない…よな…」

四人揃って顔を見合わせる

「…あ…」

四人揃って足りないという何かに気づいた

母ハルミが見上げている向日葵

どこにでもある太陽に向かって花を咲かせるその姿は見る人を元気にさせる

「…ヒマ子さん…」

動かなくなった話さなくなったその夏の妖精

母ハルミの頬を一筋の涙が伝った

泣きわめくちみつこ童の横で泣き顔の母ハルミと対照的に穏やかな微笑みでヒマ子がゆっくり何かを差し出した

両手…いや両葉に包まれていたそれは赤く小さな宝珠

偶然に偶然が重なってヒマ子の鉢の中に入り込んだ迦楼羅かるらの宝珠

ヒマ子がこうして話したり動いたりできるのはこの宝珠のおかげだ

った

「ヒマ：子さん：？」

「：京様は私の太陽ですわ：ハルミママ様」

ヒマ子が4人のちみっこ竜を見渡して目を閉じた

「向日葵は太陽に恋をして花を咲かせます：その太陽がなくては：私、生きている意味がありませんわ：この玉には不思議な力が溜め込んであると聞いておりますの：私がこうしてハルミママ様とお話ししたりできるような不思議な力が：」

「：ヒマ子さん：」

「良妻は：夫の役に立ってこそその良妻ですわハルミママ様：私、京様の：お役に立ちたい：立てますでしょうか：」

ゴトゴトと鉢を引きずって泣きわめき続けるちみっこ竜の側で茎を曲げたヒマ子がそつと両葉を開き中にあった宝珠を見つめた

「私：京様に恋をして：幸せでした」

ヒマ子の少し厚目の唇がゆっくり弧を描く

両葉で宝珠を4人のちみっこ竜の真ん中に置いた

置かれた宝珠からほのかに光が生まれる

さあつと風が入り込みヒマ子の花びらを揺らす

やがて部屋全体を包み込むような大きな光になったそれはヒマ子を飲み込んだ

「京様の笑顔が私の全てでした：わ：京様：」

黄色い花びらが一枚光の中からは外へ舞い上がった

「：京助、悠助」

「あ？」

竜が京助と悠助を呼ぶ

「いいか？」

「あ：ああってか何が？」

慧喜^{えき}を抱き締めたまま顔をあげた悠助もきよんとしたままで竜を見る

「むかつく…」

ぱりぱりという空気を纏う帝羅がちらつと横目で京助を見た

「大事なんだ…へえそいつ…」

そしてこんどは悠助を見て

「…ふうん…」

ニツと帝羅の口元が上がった

「面白いよね自分が一番じゃないって…僕様にはわからないよ」

「そりやそうですよ上」

聞こえた声に帝羅の上がっていた口元が元に戻る

「清浄…なんだ…」

坂田と阿修羅に支えられながら清浄が帝羅の前に立った

「上、貴方は常に一番だったんですから」

「そうだよ僕様は一番なんだ」

ふふんと帝羅が鼻で笑う

「可哀想に」

清浄が言うのと帝羅の目が見開いた

「かわいそう？ 僕様が？ かわいそう」

「ええ…自分が一番ということは自分しかいないということなので
すから…誰も思わず誰も見ず自分しか見えない思わない」

帝羅の顔がだんだんと険しくなる

「まあ要するに激しい自己中ってことか」

「過激ナルシーとでもいえますけども」

中島と南が緊張感あふれんばかりの雰囲気の中あいかわらずの会話を
をする

「僕様がかわいそうなわけない！」

帝羅が叫ぶと清浄がフツと口の端をあげて笑った
それを見た帝羅が更に眉を吊り上げる

「帝羅様、確かに貴方は強い」

「…今更弁解か？ でもそうだ僕様は強い」

「でもここにゐる者達は貴方よりはるかに強い」
清浄しやうじやうの言葉に一同が驚いたような顔で清浄しやうじやうを見た

「は…?;」

「ここにゐる者たちって俺ら込み?;」

「自慢じゃねえけど俺手から何もでねえぞ?;」

「でるったらケツから屁くらいか?」

「いやそれもある意味強力な武器になるぞ毒ガス」

「京助のは臭い」

自分の手を見ていう南に京助と中島そして鳥俱婆迦うぐばかが便乗する

「お前達が僕様より強い?」

「ええそうです」

清浄しやうじやうが足に力を入れて自力で身を起こす

「柴田…」

それを坂田がぐしゃぐしゃになった顔で見上げると清浄しやうじやうがその頭をなでた

「またすごい顔になってますよ若」

「うるさいッ!!」

清浄しやうじやうが自分の着物の袖で坂田の顔を拭う

「あ; 逆に汚れちゃいました」

はははっと清浄しやうじやうが笑った

「…笑うな」

パリッとまた小さく電流のような音が聞こえた

鳥俱婆迦うぐばかが緊那羅きんならの服をつかんで少し後ろに下がるとそれをかばうかのように緊那羅きんならが自分の体に鳥俱婆迦うぐばかを抱き寄せる

「弱いのに弱いくせに…むかつく…」

「僕にすればお前の方がむかつくんだけど」

「わぁお;」

吐き捨てるようにいいながらやってきた矜羯羅こんがらが帝羅てらを睨む

「気に入りませんがそれに関しては僕も同感です」

コマとイヌを抱きかかえた乾闥婆けんだつばが同じく帝羅てらを睨んだ

「…やっぱり似ているのかもしれないね」

矜羯羅こんがらがいうと乾闥婆けんだつばがチラッと矜羯羅こんがらを見てソーマの入った小さな小瓶を差し出す

「さっさと飲んでください」

「…ありがとうございます」

矜羯羅こんがらがそれを受け取る

「この子達お願いします」

「へっ?; あ…うん」

次に乾闥婆けんだつばが南にコマとイヌを手渡すと再び帝羅てらを睨んだ

「この瓶返した方がいいの?」

「貴方のヨダレのついた瓶なんて要りませんよ。分別して回収日の金曜日に出してください」

「なんで乾闥婆けんだつばが資源ごみの回収日知ってるんだっちゃ…;」

緊那羅きんならが小さく突っ込むと聞こえたのか乾闥婆けんだつばが振り返ってにっこり（怖い）笑顔を緊那羅きんならに向けた

「乾闥婆けんだつばッ!;!;」

微笑む乾闥婆けんだつばの背中めがけて帝羅てらが光を放ちそれを見た南が声を上げると途端に巻き起きた強風
そして目が眩むほどに弾けた光

「だああああッ!;!;」

「うわああああッ!;!;」

各々足を踏ん張って強風と光に耐える

慧喜えきを抱きしめる悠助の前に京助と緊那羅きんならが立って悠助と慧喜えきそして烏俱婆迦うくばかをかばう

中島と南を背中に隠したのは竜

坂田を腕に抱き身がかめた清浄しょうじょうを阿修羅あしゅらがかばっていた

京助が目を開けると視界に入ったのは金色に輝く大きな翼と残り風

に靡く黒と白の布

「…弱いくせに」

吐き捨てるようにいった帝羅てらが腕を下ろす

「…いじょうぶ？」

制多迦せいたかがにっこり笑って乾闥婆けんだっぱを振り返った

「これで貸し借りなし…だね」

ばさっと羽衣を翻した矜羯羅こんがらがフツと笑う

「むかつくんだ…」

パリパリッとまた電流のような音がして帝羅てらの周りが光り始めた

「迦楼羅…」

「大丈夫か乾闥婆けんだっぱ」

青年姿になった迦楼羅かるらの背中にかばわれていた乾闥婆けんだっぱが迦楼羅かるらに声をかけると迦楼羅かるらが振り返らずに言葉を返してきた

「迦楼羅…僕は…また貴方に…」

「…今度は」

「…え…？」

「今度はワシがお前を守る。だからお前は何もするな」

「なっ…」

迦楼羅かるらの言葉に乾闥婆けんだっぱが大きな目をさらに大きくして口をパクパクさせる

「何言ってるんですか嫌です貴方こそ下がっててください」

「いだだだだッ； 痛いわ！！ たわけッ！！；」

「あ、久々に見た」

迦楼羅かるらの前髪を思い切りひっぱる乾闥婆けんだっぱを見て中島が言う

「何してるんだよ…」

矜羯羅こんがらが溜め息をつくとき制多迦せいたかがヘラリと笑う

「ほんつとう…緊張感あるんだかないんだか」

「ハッハッハ、おんもしれえ」

呆れて笑う清浄しょうじょうに阿修羅あしゅらも笑った

「慧喜!!」

悠助に抱きしめられていた慧喜えきの元に慧光えこうが駆け寄って手をかざす

「えこちゃん…」

「…慧光…」

今にも泣きそうな慧光えこうを慧喜えきと悠助が見上げる

「何も言わなくていいナリ…何も聞かないナリ…でも…もう一人で…」

慧光えこうが震える声で言っている途中 慧喜えきが嗚咽をあげ始めた

「ごめん慧光えこうごめん悠助ごめん…義兄様ごめんなさい緊那羅きんならツ…制せ多迦いたか様 矜羯羅こんがら様…ヒマ子義姉様…ツ」

一人一人の名前を言いながら泣き始めた慧喜えきの頭をまた悠助が抱きしめる

「…京助？」

「…そうか…わかった! さっきの違和感!!」

「へ？」

「ほらさっきなんか足りなかったのあれ! ヒマ子さんのツツコミだ!!」

「ああ!!」

「そういえば」

京助の言葉に中島と南が手をたたいて頷いた
途端に曇った竜の顔

「…京助」

「あん？」

ポンッと京助の頭に竜が手を置いた

見上げる京助と緊那羅きんなら

何か感づいたのか鳥俱婆迦うぐばかが家の中に走っていく

「…想いつていうのは本当に強いものだな」

「はあ?; なんだよいきなり」

頭に置かれた手をうざったそうにしながら京助が返す

「誰かが誰かを想う思いは本当に強い…俺もハルミに出会うまでは

その強さを本当にわかっていなかった」

竜きんならと緊那羅の目が合った

「…あ…」

緊那羅きんならがあわてて目をそらすと同時に握っていた京助の手も離す

「お前はそんな想いに支えられて助けられているんだ…お前だけじゃない…それにお前だって誰かを想っているだろう？ その誰かを助けたい守りたいと思う想いそれは本当に強い…」

「何が言いたいんだ何が； 俺頭悪いんだからまとめて簡潔にいつてくれ」

京助が緊那羅きんならが離した手をポケットに突っ込みながらいった

瓦礫をよけながら家の中に入った鳥俱婆迦うぐぼかが動かなくなった向日葵と向かい合っている母ハルミを見つけて駆け寄る

「ハルミ…」

「うぐちゃん…」

赤く泣き腫らした目からまた涙があふれた母ハルミが鳥俱婆迦うぐぼかを抱きしめた

「ハルミ…これ…この向日葵って…」

ふと鳥俱婆迦うぐぼかが鉢を見ると悠助がかいたのであろうミミズの這った様な字で書かれていた【ヒマ子さん】という名前

「…ヒマ子さんね…自分がこうなるのわかって竜之助をあんな姿にしてくれたの…京助の笑顔が見たいからって京助の…」

鳥俱婆迦うぐぼかを抱きしめる母ハルミの腕に力がこもった

「ヒマ子さん…」

鳥俱婆迦うぐぼかが呟き普通の向日葵になったヒマ子を見る

「ハルミ…おいちゃん今…どんな顔してる？」

「…え？」

小さく聞いてきた鳥俱婆迦うぐぼかに母ハルミが抱きしめる力を弱め鳥俱婆迦うぐぼかを見た

迦楼羅^{かるら}の羽が広がりそのすぐ横に歩み出た乾闥婆^{けんたつば}が袖を止めていた布を両方はずすとその布を大きく振り下ろした
するとその布がピンっと伸び二刀の剣になり乾闥婆^{けんたつば}が構える

「下がっているといっただろうッ；」

「嫌だといったでしょう」

「今度はワシが守るといっただろう！！」

「だから嫌だといったじゃないですか」

お互い顔は見ずに言い合う乾闥婆^{けんたつば}と迦楼羅^{かるら}の声がだんだんと大きくなっていく

「…うるさいよ君達」

帝羅^{てら}を睨んだまま矜羯羅^{こんがら}が突っ込むと制多迦^{せいたか}がへうっと笑った

「少しは可愛らしく言う事を聞いたらどうなのだたわけッ！！」

「可愛らしくないもので聞きたくありません」

「ッ；」

怒鳴った迦楼羅^{かるら}をさらっと乾闥婆^{けんたつば}が受け流す

「…るらの負け」

「やかましいわ！！ たわけッ！！！！；」

笑いながら言った制多迦^{せいたか}に迦楼羅^{かるら}が怒鳴った

「むかつく…」

パリパリという音を聞いて一斉に帝羅^{てら}に視線を向けるとそこには今までよりあからさまに様子の違う帝羅^{てら}

「…くるよ」

矜羯羅^{こんがら}が足を引く

制多迦^{せいたか}が頷き棍を構えた

「なんだかいよいよ本気でまじめにやばい雰囲気なんじゃござーせん？；」

「あいつらって結構強いんだろ？； 様つけられてたくらいだし…」

「ああ…タカちゃんも矜羯羅^{こんがら}ッちよもかるらんもだっばも強いきに

…んでもな…上、あいつ…帝羅てらはそれ以上やんきに」

「しかも完全にキレてるみたいで」

阿修羅あしゅらと清浄しょうじょうが険しい表情で帝羅てらを見る

足元から生まれている風と光を纏まとうて帝羅てら

「今ならまだ間に合うかもしれないけど。操はどこだ」

小さな口の動きだったにもかかわらず全員の耳に届いたその声

緊那羅きんならの足が後退する

「逃げんな」

京助が緊那羅きんならの手首をつかんだ

「お前は緊那羅きんならだ」

それを見た竜がフツと笑って京助の頭をワシワシとなでそして緊那きん羅ならを見ると目を細めた

それを見た緊那羅きんならが頷いて深呼吸を一回した

「そうそうそのいきだっちゃ」

緊那羅きんならが後退させた体を京助の隣へと移動させると京助が笑った

「…うん」

緊那羅きんならも微笑む

「…あえてここは塩加減は突っ込まないでいく方向で」

「だな」

「ってか俺この場合男女とか人間とかそーいうの越えていいんじゃないかーって思っちゃってるんだけど」

「想いには壁も何もない…だからいくらでも大きくなるだから強いんだ」

三馬鹿の会話に竜が入ってくる

「誰しも気付かないうちに誰かに想われてその想いに守られている…自分も含めてそれが回わっているんだ」

竜がそう言いって帝羅てらを睨にらんだ

「操を出せ」

「操ちゃんはいねえってんだろがッ！！！！何回言わせんだバーカ

「!!!!」

京助がイラついたように叫ぶ

「あー； いっちゃった」

「馬鹿にバーカ言われちゃったよ…バーカ」

「ハッハッハー!!! よく言った京助」

阿修羅あしゅらが笑いながら言う

しゃがんで肩を震わせ笑いをこらえている矜羯羅こんがらの背中を制多迦せいたかが撫で乾闥婆けんだつばがぽかんといい顔をしているその横の迦楼羅かるらも驚いた顔をしていた

「帰れバーカ!!!!!!」

「若？」

京助に続いて馬鹿と叫んだ坂田しょうじょうに清浄も驚く

「バーカ!!!!!!」

「悠?」

少し後ろから放たれたバーカは悠助のもので

「慧喜えいきを泣かせたっ！ だからッばーかっ！！
ばばーかッ!!!!!!」

「おおお； マシンガン」

「んじゃオライも…バーカっ!!」

阿修羅あしゅらまでもが帝羅てらにバーカと叫んだ

「なっ…お前達上に向かつて…ッ」

指徳しとくが帝羅てらの前に出ると帝羅の周りに吹いていた風がいつそう強くなる

「いかん…!!」

迦楼羅かるらが地面を蹴って飛び上がると帝羅てらと指徳しとくの前に立った
「制多迦せいたか!!」

「…け」

矜羯羅こんがらに呼ばれた制多迦せいたかが頷くと矜羯羅こんがらとつになる形で構え見事というしかないような揃った手の動きで何かを中に描いていく
二人の手の動きの後には光の跡

帝羅^{てら}の纏う光と風が渦を巻き始める

パンツ！！

と制多迦^{せいたか}と矜羯羅^{こんがら}の手が合わさると弾けた光が玉となって広範囲にわたり飛び散り半円状の光の結界を形作った

結界が完成するとほぼ同時に迦楼羅^{かるら}の羽がさらに大きく広がる

まるで迦楼羅^{かるら}の後ろにいるすべてをかばうかのように広がった金色の翼^{かるら}

「迦楼羅！！！」

「下がれ」

叫んだ乾闥婆^{けんたつば}とは対照的に静かに言った迦楼羅^{かるら}の声が響く

「…沙紗」

乾闥婆^{けんたつば}の動きが止まった

竜^{あしゆら}と阿修羅^{あしゆら}が苦い顔で迦楼羅^{かるら}と乾闥婆^{けんたつば}の背中を見ている

「迦楼羅…」

呟いた竜を京助が見上げそれから迦楼羅^{かるら}を見た

「…その名前は…僕は…」

「下がっている…」

迦楼羅^{かるら}の触覚が帝羅^{てら}の風に揺れる

乾闥婆^{けんたつば}の頬を一筋雫が伝って落ちた

「どんなって…いつものうぐちゃんの顔よ？」

「おいちゃん笑ってる？」

「え？あ…そうね笑って…」

鳥俱婆迦^{うぐぼか}の質問に母ハルミがすこし困りながら答える

「…おいちゃん…笑ってるのにどうして？」

ぐっと鳥俱婆迦^{うぐぼか}が帽子をつかんだ

「おいちゃんが笑ってるとみんな笑顔になるって。おいちゃん…だから…」

震える鳥俱婆迦の声に母ハルミが再び鳥俱婆迦を抱きしめた
今度は優しく包み込むように鳥俱婆迦を抱きしめた母ハルミに小さく鼻をすする音が聞こえる

「おいちゃん笑ってるよ？　ねえハルミ…でも誰も笑ってないよ…
おいっ…おいちゃんっ…」

しゃっくりをあげはじめた鳥俱婆迦の背中を母ハルミがさする

「おいっ…なんでえ…ッ」

やがて声を上げて泣き始めた鳥俱婆迦のお面が床に落ちた

「おいちゃんっ…笑ってたのにつ…なんでなんで…なんでみんな笑
ってない…おいちゃ…んッ」

母ハルミの服に鳥俱婆迦の涙と鼻水とその他もろもろが染み付く

「ねえうぐちゃん…誰がそういつてくれたの？　うぐちゃんが笑っ
ているとみんな笑顔になるって…」

母ハルミが鳥俱婆迦に静かに聞くと鳥俱婆迦がゆっくりと顔を上げた
大きな緑色の瞳の周りを赤くした鳥俱婆迦の素顔

悠助と同じくらいのおどけなさを持った鳥俱婆迦があふれてくる涙
を懸命に拭いながら何とか泣き止もうとするも泣きしゃっくり地獄
に陥ったらしくヒッヒッという声しかでてこないでいるのを母ハル
ミが眉を下げたやさしい笑顔で見る

「うぐちゃんのお面じゃない顔見たの二回目ね」

ふふっと笑う母ハルミを見た鳥俱婆迦の目からまた大量の涙があふ
れ鳥俱婆迦が母ハルミに抱きついた

迦楼羅が腕を前に出すと何かを握るような形で腕を止める

そしてもう片方の腕も前に出す

何もなかった迦楼羅の手の中に金色に光る一本の光の線があった
それはまるで金色に輝く光の弓矢

「…かるらんが格好いい」

呟いた南に中島と京助そして緊那羅が頷く

「…あれ？ 父さんそれ」

京助が竜の腰を見て何かに気づいた

「…それって…」

緊那羅が【それ】を見てそれから竜を見るとゆっくりと竜が頷いた

「ヒマ子さんから…だ」

竜の腰で赤く光る宝珠

竜の声が聞こえた面々の動きが止まった

「え…っとヒマ子さんって確かその宝珠の力で動いて…」

竜が頷く

「ってことは…」

南のその言葉から先は誰も言えずにいた

俯いていた緊那羅が顔を上げてきゅっと唇をかむと武器笛を手に数歩足を進める

「緊那羅？」

京助が緊那羅を呼び止めた

「…操にヒマ子さん…今度は私の番だっちゃ」

緊那羅が立ち止まると腕にしている腕輪の宝珠が光る

「っ…アカーン!!!!!!!!!!!!」

「うお；」

「なんだ!?!」

京助がいきなりあげた大声に周りだけでなく迦楼羅や敵の指徳と帝羅までもが驚いた

「きよ…」

「セイッ!!!!」

ゴンッ!!!!

「だっ!!」

緊那羅の耳をつかむと思い切り京助が頭突きをかます
しゃがみこむ緊那羅と京助に動きの止まったままの一同

あたりをなんともいえない間の抜けた空気が流れた

「：自分も痛いんじゃない？」

呟くように矜羯羅こんがらが突っ込みを入れる

「だ：大丈夫か二人とも；」

中島が声をかけるとよろめきながら京助が立ち上がった

「守るの禁止！！　　っ；；；」

そう叫ぶと京助が自分の額をさする

「な：んでだっちゃ：ッ；」

絞り出した声で緊那羅きんならが頭を押さえながら聞き返す

「俺が嫌だから」

「そん：」

京助の答えに顔を上げた緊那羅きんならが見たのは真顔で帝羅てらを見る京助

「守ってもらうばかりで俺守ってねえじゃん：格好悪い」

チラッと京助が竜の腰についている宝珠を見た

「ずっと守ってもらってばっか：操ちゃんにもヒマ子さんにも父さんにも。でもさ：俺だって守りたいものとかあるんだっつーの」

そして再び帝羅てらを見る

京助の足元からかすかに吹き始めた風が京助の髪や服を揺らす
いつの間にか消えていたあの竜の羽が再び京助の背中に現れた

「俺にも見せ場よこせよな」

京助がヘッと口の端をあげて笑った

「見せ場は奪い取るものだ京助」

竜が腰に手を当てて京助より一歩前に出る

「だったらッ；　私だって：ッ；」

「見せ場ほしいの？　ラムちゃん」

「違うっちゃッ！！；　私だって守りたいものがあるから守るんだ
っちゃッ！！；」

南の突っ込みに反論しながら緊那羅きんならが言った

「それって：京助？」

「そうだっちゃ」

中島と南が言う

「：ラスボスまで巻き込むお馬鹿パワー！：京助君」

「誰が馬鹿だ誰がッ；」

「加えて地獄耳：デビルイヤー」

「いやそれは悪魔耳」

「本当に緊張感が無いやんきに」

南と中島そして京助のやり取りに阿修羅^{あしゅら}が笑う

「いい息子だな」

「だろう？」

阿修羅^{あしゅら}が竜に言うと言が京助の頭を叩いた

「いてえよ；」

文句を垂れながらも竜の手を払おうとしない京助に緊那羅^{きんなら}も笑う

「僕様に：」

パリパリッという音が聞こえ一堂がハツとする

帝羅の白い布がフワリと揺れてオレンジの耳飾が見えた

「去れ、帝羅^{てら}」

言った迦楼羅^{かるら}の両隣には制多迦^{せいたか}と矜羯羅^{こんがら}

「弱いくせに：弱いくせに怖いくせに：」

帝羅^{てら}の顔が歪む

「京助！！ 悠助！！」

「ヘッ？；」

「うんッ！！」

竜が京助と悠助を呼ぶ

ヒマ子から受け取ったという元をたどれば迦楼羅^{かるら}の宝珠を見た後竜が帝羅^{てら}を見た

「約束守るからな：」

竜が宝珠を握り締めた

「お前達上に対して：」

「どきなよ指徳^{しとく}」

帝羅をかばうように前に出た指徳を矜羯羅こんがらが睨しどくむと指徳が一瞬身をすくめた

「…とく…」

制多迦せいたかも指徳をたぶん睨にんでいるんだろうがいまいち何故かしまらない

「どいつもこいつも…」

「オランダも」

震える声で言った帝羅てらの言葉に京助が付け足すと中島と南が声を殺して笑った

「僕様は…ッ」

帝羅てらの目が見開くと同時に迦楼羅かるらが光の弦から指を放す

「上…!」

その矢は指徳しどくの肩をすり抜け帝羅てらへと

「上…ッ…!!!!」

辺りが光に満ちた

「まぶッ;」

あまりのまぶしさに京助たちも目を瞑った

「笑うと幸せになるって幸せになったらみんな笑うからまたみんな幸せになるって」

お面をはずした鳥俱婆迦うぐばかがポツリと言った

「だからおいちゃん…いつも笑ってるようにこれつけてたんだそうしたらいつも笑ってる」

はずしたお面をぎゅっと握って鳥俱婆迦うぐばが言うとお母ハルミが鳥俱婆迦うぐばかの頭をなでた

「おいちゃんの計算では…みんな笑ってるはずだったんだよ…?」

「うぐちゃん…」

「おいちゃん…ただ笑ってほしいだけなんだよみんなに制多迦せいたか様にも矜羯羅こんがら様にも京助にも緊那羅きんならにも…ッ」

鳥俱婆迦うぐばかの目からまたポロポロと涙が溢れ出した

「幸せだったら【時】も来なかったかもしれない そしたら…」
言いかけた鳥俱婆迦うぐばかの言葉はまぶしすぎる光でさえぎられた

「迦楼羅かるら!!!」

光が消え行く中で乾闥婆けんだつばの声が響いた

そしてズシャッという何かが濡れた地面に落ちた音

「上!!! 上!!!」

ワンテンポ遅れて指徳しとくの声

ここでもうやく目が開けられた京助達が見たのは乾闥婆けんだつばに抱かれて
いる迦楼羅かるらと指徳しとくに抱き起こされている帝羅てらだった

どうやら帝羅てらは迦楼羅かるらの光の矢をまともに受けたく膝を付いて
いた

「迦楼羅かるら…ッ」

「力を使いすぎだよ…あんなに使ったら僕らだって」

「…とは僕たちが」

小さくなった迦楼羅かるらを抱く乾闥婆けんだつばを帝羅てらから隠すように矜羯羅こんがらと制せ
多迦いたかが立つ

「やか…ましいわ； たわけ；」

「たわけはあなたですッ!!!」

張り上げた乾闥婆けんだつばの声は震えていた

「あなたはっ…あなたはっどうして…ッ」

「…守りたいものを守りたかっただけだ」

ボソッと言った迦楼羅かるらが乾闥婆けんだつばの頬に手を伸ばした

「ゴホっ；」

「迦楼羅かるらッ！」

大きく咳き込んだ迦楼羅かるらの背中を乾闥婆けんだつばがさする

「…るら…無理すぎ」

「や…かましい…ッ」

ヒューヒューという呼吸で迦楼羅かるらが制多迦せいたかに返す

「迦楼羅^{かるら}…」

「そんな顔をするな。ワシなら大丈夫だ」

「そんな顔にさせたのは君なんじゃないの？」

矜羯羅^{こんがら}が突っ込む

「…んがら…!!」

制多迦^{せいたか}に呼ばれ矜羯羅^{こんがら}がハッして羽衣を翻した

ヨロヨロと立ち上がった帝羅^{てら}を指徳^{しとく}が支える

乾闥婆^{けんだつば}は帝羅^{てら}を睨むと迦楼羅^{かるら}を抱き寄せた

「上…」

「僕は…僕はあッ!!!!!!」

ゴウッ

と帝羅^{てら}の周りに強風が巻き起こり指徳^{しとく}がはじかれた

迦楼羅^{かるら}を抱く乾闥婆^{けんだつば}を矜羯羅^{こんがら}と制多迦^{せいたか}が壁になり強風から守っている

「あ…」

京助が何かに気付いた

「京助？」

そんな何かに気付いた京助に気付いたのは緊那羅^{きんなら}

「あいつ…」

京助が見ていたのは帝羅^{てら}だった

「どうしたんだっちゃ？」

「あいつ…」

「京助!!」

言いかけた京助が竜に呼ばれ言葉が止まった

「今の光…」

「迦楼羅^{かるら}だ」

「え？」

母ハルミの胸から身を放した鳥俱婆迦うぐばかが言った

「迦楼羅かるらの力だよ」

くいくいと帽子を直した鳥俱婆迦うぐばかがお面をつけようとするのを母ハルミが止めた

「またそのお面つけちゃうの？」

「…笑ってほしいから…おいちゃん今まだ笑えないからだからつける」

そう言った鳥俱婆迦うぐばかの目からはまだ涙が流れていた

「うぐちゃん…」

「おいちゃんみんなが好き笑ってるみんなが好き…おいちゃんが笑ってればきつとみんな笑うから」

お面をつけた鳥俱婆迦うぐばかがいつもの笑顔で母ハルミに言うとお母ハルミが鳥俱婆迦うぐばかを抱きしめた

「慧喜えき…だいじょうぶナリか？」

「うん…」

「清浄しやうじやうも」

「ああ…大丈夫だ」

慧光えいこうによって治癒された清浄しやうじやうと慧喜えきがやや後方から帝羅てらを見る

「…柴田…」

そんな清浄しやうじやうの隣で坂田が不安げな顔で清浄しやうじやうを見上げていた

「お前…」

「たくさん…あります若に話したい事、話さないといけない事…」
清浄しやうじやうが柴田の笑顔で言った

「そんな…そんなたくさん話さねえと駄目な事あんのにお前は…」
「ッ お前はッ!!!」

「ああ； だからすいませんって； ほら泣かないでください若；」

「泣いてねえッ!!!；」

「泣いてるじゃない」

慧喜^{えき}が突っ込む

「ないてねえッ！！」

坂田が怒鳴るとぐすつと鼻を吸る音が聞こえ

「っ……」

「慧光^{えこう}も泣かないの；」

今までこらえていた慧光^{えこう}の目から滝のように涙が流れた

「うえええええ……ッ」

「あーもーッ！！」

声を上げて泣き出した慧光^{えこう}を慧喜^{えき}が叩いたあと抱きしめる

「……ありがとう慧光^{えこう}……ごめん……ありがとう……」

そしてそのまま更に慧光^{えこう}を抱きしめた

「若」

「なん……っ」

呼ばれて返事をした坂田^{しんた}を清浄^{じじょう}が抱き寄せた

「ありがとうございます 若」

「なんで礼……俺何も……」

「俺が言いたかったんです」

坂田からの返事は無かった

「阿修羅^{あしゅら}、京助の友達を」

「あいさ」

竜にいわれた阿修羅^{あしゅら}が南と中島の肩を叩いた

何か言いたそうに口を動かした中島と腕に抱えたコマとイヌをぎゅ

っと抱きしめた南に京助が笑顔に向けた

「後から片付け手伝えよな」

「あ……お……おう！！」

「南は余計散らかしそうだけどな」

「ひっで……」

いつも通りのふざけた会話

でもどこことなくなんとなくいつもと違ってするのは誰も気付いていた

「京助！！　悠！！　ラムちゃん！！」

阿修羅におされながら南が振り向き叫ぶ

「…後でなッ！！！！」

「南…」

緊那羅が眉を下げて笑い京助が親指を立てた

「なあ…大丈夫だよな？」

「当たり前だろッ！！」

足早に阿修羅の後ろをついていく中島が南に聞いた

「今の俺たちに出来ること…これくらいじゃん」

「…そ　だな…」

「信じようぜ」

中島が頷く

振り向きたくても振り向かない振り向いたらきつと駆け出したくなる

でもそれは今中島と南がするべきことではないから

南がコマとイヌに顔をうずめた

「お前…」

帝羅を取り巻く空気がパリパリと音を立て帝羅の怒りを表している

それに怯むことなく帝羅と向き合い立つ制多迦と矜羯羅

帝羅の横で帝羅を恐れた顔で見上げる指徳

「…制多迦…矜羯羅…」

「君の作ったご飯は嫌いじゃなかったよ」

「…ん」

乾闥婆が二人の背中に声をかけると二人が振り向き笑った

乾闥婆の腕に抱かれた迦楼羅がハッとして身を起こそうとした瞬間

「らあああああああああー……………」

ッ！！！！！！！」

帝羅^{てら}の大声とともに今までに無い程の衝撃が空気を伝わり響き渡った

それは光であり 風であり 音であり 恐怖であり

あたりが激しい光で照らされる中、制多迦^{せいたか}と矜羯羅^{こんがら}の影が守るように乾闥婆^{けんだつば}と迦楼羅^{かるら}を暗くした

何かを叫んだ乾闥婆^{けんだつば}の声は激しい音でかき消された

「タカちゃんッ！！ こんちゃんッ！！！！」

竜の足にしがみつきながら悠助が光と風の中心に向かい叫ぶ

「ちょ：おいおいっ；」

足を踏ん張って飛ばされまいとしている京助に緊那羅^{きんなら}が掴まり同じく飛ばされまいとしている

「っ：あの至近距離からまともに：制多迦^{せいたか}：矜羯羅^{こんがら}ッ：」

悠助をひよいと小脇に抱き上げて京助の腕をつかんだ竜が帝羅^{てら}がいる中心を睨んだ

迦楼羅^{かるら}を抱きしめる乾闥婆^{けんだつば}の周りの空気が変わった

『ごめんなさい…』

声がした

聞いたことのある 懐かしい 遠い 遠い 記憶の中で聞いた 声

顔を上げた乾闥婆^{けんだつば}の頬に白い手が触れた

でもそれは実態ではなく幻と呼べるもので向うが透けて見えた

「さ…」

乾闥婆^{けんだつば}より先に迦楼羅^{かるら}が口を開いた

「沙羅…」

にっこりとでも悲しそうに微笑んだ沙羅が乾闥婆けんだつぱの頬から手を離し踵を返し倒れている制多迦せいたかと矜羯羅こんがらの傍に座ると二人の体に触れた優しい空気がその場に流れる

そして立ち上がると今度は帝羅てらを見た

「お前も：お前も僕様に：っ」

『：』

無言のまま帝羅てらに近づいていく沙羅

「沙羅！！」

乾闥婆けんだつぱが叫ぶように沙羅を呼ぶ

『：——』

沙羅から返された言葉は名前

懐かしい名前

目を見開いた乾闥婆けんだつぱを迦楼羅かるらが抱き寄せる

それを見た沙羅が顔を曇らせた

「近づくな！！」

再び帝羅てらと向き合った沙羅に帝羅てらが叫んだ

その帝羅てらの言葉を耳に入らず沙羅が帝羅てらに向かい手を伸ばした

「触るなあああー！！！！！！！！！！」

伸ばした沙羅の手が帝羅の腕をつかんだ

乾闥婆けんだつぱには触れられなかった幻の沙羅の手はしっかりと帝羅てらの腕をつかんでいた

「放せ：放せ放せッ！！」

まるで小さな子供のような駄々をこねだした帝羅てら

「上！！」

指徳しとくが立ち上がり沙羅の手を掴もうとするが不思議と掴めない

ふと沙羅が顔をどこかに向けそして微笑む
沙羅の視線の先には京助、そして悠助と竜

「沙羅…」

「え？ 沙羅…ってたしか鳥類…」

竜が口にした名前に京助が前に迦楼羅かるらがした昔話を思い出かるらし迦楼羅
の方を見る

乾闥婆けんだつぱを抱きしめただ黙って沙羅を見ている迦楼羅かるら

『竜様…』

沙羅が柔らかく悲しそうに笑い軽く頭を下げた

『そして京助様と悠助様』

「へっ？」

「お姉さん誰？」

突然名前を呼ばれ京助と悠助がきよんとする

「沙羅…お前は…」

『竜様…私は…私の【時】はもうじき終わります…そしてまた【時】
が来る…』

静かに言った沙羅の周りにはいつの間にかたくさんの宝珠が浮かんで
いた

そのうちのひとつ赤い宝珠がふわりと動き迦楼羅かるらの目の前で止まった

『迦楼羅様』

「沙羅…」

微笑む沙羅が頷くと迦楼羅かるらが手を出しその掌に宝珠が降りた

「さ…ら…」

『乾闥婆』

『…』

乾闥婆けんだつぱが絞り出したような声で沙羅を呼ぶ

「ごめんなさい…ッ！ ごめん なさい…ッ」

泣きながら沙羅に向かい謝る乾闥婆けんだつぱの体を迦楼羅かるらが黙ったまま押さ

え抱きしめる

『終わらせて：もう　こんな想いは私たちだけで：』

「沙羅ッ！！！！　沙羅！！　さらああッ！！！！」

足元から消え始めた沙羅と帝羅^{てら}

乾闥婆^{けんたつば}が叫び沙羅に手を伸ばした

「放せえッ！！！！」

帝羅^{てら}が叫ぶとバチバチッと電気のようなものが沙羅と帝羅^{てら}を取り巻いた

「：効いてない：んじゃね？」

「ああ：彼女には効かない」

京助が言うと竜が返す

「放せ！！　放せ！！　僕様はッーーーーー：」

「沙羅ああああー！！！！！！！！」

乾闥婆^{けんたつば}と帝羅^{てら}の声が混ざり辺りに響き優しい風がその場吹き抜ける

いままでずっとその場を見てきたのにまるで今ふと見たかのような
おかしい感覚

ついさっきまでそこに居た二つの姿はなくなっていて

散々ぶっ壊れていたはずの家や庭やは元に戻っていてさっきまで
起こっていた出来事が夢だったんじ
ゃないかという考えを頭に浮かばせた

時折聞こえる車の走行音

雨上がりの空気

満天の星空

「あ、あれ北斗七星だよねっ」

悠助が夜空を指差した

「ああ…そうだ…な」

竜が夜空を見上げた

風鈴が鳴るかならないかの弱い風が家の中に入ってきた

【少し前】　まであちこちが破壊されていた家の中は何事も無かったかのように元通りになっていたがそこに笑い声はなく

「…ヒマ子…さん…」

和室の片隅にある枯れかけている向日葵に向かい名前を悠助が呼んだ
畳の上には黄色い花びらが数枚落ちている
誰も口を開けないでいた

「ねえヒマ子さんヒマ子さんってばっ!!」

「悠…」

京助が悠助の肩に手を置いて向日葵を見た

その京助の隣にいた緊那羅きんならが一步前に出て向日葵に触れる

「ヒマ子さん…守りたいもの守ったんだっちゃんね…」

そして京助を見た

「…」

京助の眉が少し動いた

「京助…」

「悪い…ちょ　い」

中島に呼ばれた京助だったが振り返らず言葉を詰まらせた
悠助の肩に置いていた手に力が入る

「京助…?」

悠助が京助を見上げた

「悪い…悠…ちょい…」

さっきと同じような言葉を言った京助

「：俺らあっちいつてる わ」

「あ うんそうだな」

南が悠助の手を取り先に部屋から出て行こうとしている中島の後を追う

「京助 ヒマ子さんちゃんと起きるよね？ 前もちゃんと起きたから大丈夫だよね？」

「そ うだな」

「じゃあ僕お風呂はいろーかなっ」

京助の言葉を聞いた悠助が南の手を解いて廊下をかけていった
和室には緊那羅きんならと京助が残った

コッソ

と緊那羅きんならの肩に何かが当たり緊那羅きんならが肩を見る

「：きよ：」

京助が緊那羅きんならの肩に頭を乗せていた

京助がだらんと下げた両手を動かすこともなくただ緊那羅きんならの肩に頭を預ける

「京助：」

「うるせえ：」

緊那羅きんならが呼ぶと京助が震えた声で返してきた

肩にじわつと暖かさを感じた緊那羅きんならが京助の両手を手を掴むと

「泣けっちゃ」

ぐいっと京助を引き寄せ抱きしめた

「泣いてねえよ」

「うん」

「誰が 泣くか」

「うん」

「：っ」

緊那羅きんならの服を掴む京助の手に力が入る

肩につけられた頭を緊那羅きんならが撫でた

「京助」

「ひ…っく…」

熱い息を胸に受けた

痛いくらいに抱きしめ返された

肩が濡れているのがわかった

甘え方がわからなくてへたくそで

強がって泣き方もへたくそで

「京助…」

今はただあなたが泣けるよう

私はここに居る

緊那羅きんならが京助を抱きしめた

縁側に面した部屋の隅で丸くなっている乾闥婆けんたつばをただ黙って迦楼羅かるらが見ていた

どれだけ泣いたのか目の回りが赤くなり髪の毛が顔にくっついていて
その髪を迦楼羅かるらがそっと取ってやる
乾闥婆けんたつばからは静かな寝息がしていた

「…」

弱い風が迦楼羅かるらの触角のような前髪を揺らす
風鈴は鳴らない

迦楼羅^{かるら}が握っていた手を開くとその手の中には赤い宝珠

沙羅^{さらか}からもらった赤い宝珠

その宝珠と乾闥婆^{けんたつば}を交互に見た迦楼羅^{かるら}がまた宝珠を掌に収めぎゅつと握る

「かるらん」

「…阿修羅^{あしゅら}か」

伸びた髪をひとくくりにした阿修羅^{あしゅら}が縁側から部屋に入ってきた

「だっば…おちついたみたいやんに」

「ああ…」

阿修羅^{あしゅら}が少し離れたところに腰を下ろす

「他の者はどうしている…？」

「ワンコ達は竜とハルミ母さんが見てる。タカちゃんとがらつちよは慧光^{えこう}と烏俱婆迦^{うぐばか}がみてるし…清浄^{しょうじょう}はメガネ達と一緒に居る。悠助^{えき}は慧喜^{えき}と風呂^{えき}だ」

「…京助と緊那羅^{きんなら}はどうした」

名前の挙がらなかった二人を聞いた迦楼羅^{かるら}

「…向日葵^{ひまわり}の…姉さんのところ」

「ヒマ子^{ひまこ}さんか…」

「…動かなく…なっちまったから…な」

阿修羅^{あしゅら}の言葉の後 迦楼羅^{かるら}が手を開いた

「…！！ かるらんそれ…」

迦楼羅^{かるら}の手の中の宝珠を見て阿修羅^{あしゅら}がずいといと迦楼羅^{かるら}に近づいた

「…沙羅^{さらか}が…な」

「沙羅嬢^{さらか}が…？」

迦楼羅^{かるら}が乾闥婆^{けんたつば}を見ると目を細める

「それ使ったら…かるらん…元にもどれるんじゃないん…？」

「…そうかもしれん…が…」

迦楼羅^{かるら}が自分の上着を外し乾闥婆^{けんたつば}の体にかけた

「ワシだけが…罪を許されてはいかん…」

「かるらん…」

「この罪は…な」

ふっと笑って迦楼羅^{かるら}が立ち上がる

「ヒマ子さんは奥の部屋だったか」

「あ ああ…確かそうやんきに」

「乾闥婆^{けんたつば}を頼む」

そう言うのと迦楼羅^{かるら}が部屋を出て行く

その後姿を見送った阿修羅^{あしゅら}が乾闥婆^{けんたつば}を見るとやるせない顔をした

「【時】…もし今度来る【時】が最後になるとしたら…最後に来るとしたら…」

チリーン…

風鈴が鳴った

鼻水を啜る音

小刻みに吐き出される熱い息

ときたまあがる声

ぐしゃぐしゃに掴まれた服

少し固めの京助の髪が緊那羅^{きんなら}の頬あたる

緊那羅^{きんなら}が京助を抱きしめたままヒマ子さんの方を見た

いつもならこんなところ見つかったもんなら断末魔のような悲鳴が家中に轟いている

「…っ…く」

京助が小さくしゃっくりをあげた

ぎゅっと唇をかんだ緊那羅^{きんなら}が大きく息を吸い込む

そして唄を歌いだした

あの唄

子守唄にも聞こえるあの唄

柔らかく暖かく優しく何かを守るような唄

緊那羅きんならの歌う唄が廊下にも流れた

「…これは…緊那羅きんならか」

襖の前に立った迦楼羅かるらが襖を見上げそして手の中の宝珠を握る

スパーーーーーンッ！！！！

勢いよく開いた襖に目を丸する緊那羅きんならと思わず顔を上げた京助

「か…」

「鳥類…ッ！？；」

「…邪魔した か？」

襖を開けたのはいいものの京助と緊那羅きんならを見た迦楼羅かるらが聞く

ハッ とした京助が慌てて緊那羅きんならから離れた

「あ…え…つと； どうしたんだっちゃ？ 迦楼羅かるら…乾闥婆けんだつぱは？」

京助に掴まれてよれよれになっていた服を直しながら緊那羅きんならが聞き返す

「乾闥婆けんだつぱは阿修羅あしゅらに頼んできた」

「そう…」

「それよりも京助」

「んだよッ！！；」

赤い顔赤い目をした京助が怒鳴る

「手を出せ」

京助に近づきながら迦楼羅かるらが言った

「手…？」

「早くせんかッ！！ たわけッ！！」

なかなか手を出さない京助の手を迦楼羅かるらがひっぱって何かを手渡した

「何…ってこ…鳥類これ…」

「迦楼羅かるらこれ…宝珠…」

京助の掌には赤い宝珠があった

「これで…動くのだろう？」

「え…」

「悠助を泣かせたくないのだろう？」

ふっと迦楼羅かるらが笑う

「ほら！！ さっさとしなければ悠助が風呂から上がってくるではないか！！」

「あ…ああ」

迦楼羅かるらが急かすと京助がヒマ子さんの傍にしゃがんだ

「迦楼羅…あの宝珠って…」

迦楼羅かるらが緊那羅きんならを見てまたふっと笑う

「いいのだ…ワシはこの罪があるから乾闥婆けんたつばといられるのだからな」

「迦楼羅…」

「ワシはな緊那羅きんなら…幸せだぞ」

「へ…?…」

唐突に言った迦楼羅かるらの言葉に緊那羅きんならがきよんとする

「今のままで…な充分幸せだ。これ以上は望まん…今のままでいい」
そう言った迦楼羅かるらの顔は穏やかだった

「皆がいる何気ない日々があればそれで」

「…そう…だっちゃんね」

迦楼羅かるらにつられたのか緊那羅きんならの顔もほころんだ

ぐきゅうううう…

「…迦楼羅…」

「おま…」

久しぶりに聞いた体に似合わず豪快な迦楼羅かるらの腹の虫の声に京助と緊那羅きんならが揃って溜め息をついた

「しっ…しかたなかうッ！！」

それに対して迦楼羅かるらが怒鳴る

「感動のシーンだったのになあ…お前…」

「やつ…やかましいわッ!!!; たわけッ!!!; いいからさっさ

と宝珠を埋めんかつ!!!;」

ヤレヤレと両手を上げたりアクションをする京助

「お前だつてさっき…ッ」

「だーーーーーッ!!!; わかったッ!!!; 埋める埋め

ますハイ!!!;」

「さっき緊那羅きんなら…っ」

「わーーーーーッ!!!; だーーーーーッ!!!;」

「ッ!!!;」

迦楼羅かるらが何か言おうとするたびに京助が大声を上げて阻止する

「…やかましいっちゃ…;」

緊那羅きんならが呆れ顔で呟いた

社務所の奥に隠すように置かれていた古い石造りの狛犬をハルミが撫でる

その傍でコマとイヌに手をかざす竜

「本当に狛犬だったのね…コマとイヌ」

「ああ…」

ハルミが竜の隣に座ると

「…何か言うこと あるんじゃない?」

竜の顔を覗き込んだ

「…ただいま」

「おかえり なさい…」

竜がハルミを抱き寄せる

「いろいろ…あったのよ? 7年だもの…大きくなったでしょ京助

…悠助もね小学生なのよ?」

「そうだな…大きくなった な」

ハルミが少女のように笑いながら話すのを目を細めて聞く竜

「私も：すっかりおばさんになっちゃったし：当たり前よね：7年：」

「：ハルミ：」

途中から震えだしたハルミの声

「ごめん：な」

「そればかりッ！！」

ハルミが声を荒げた

「私は謝ってほしいわけじゃないッ！！　ただ私は：ッ：」
「変わらないな」

目を細めたまま笑った竜の頬をハルミが思い切りひっぱる

「どうしてアンタはいつもいつもッ：！！　どうして：」

竜の頬を引っ張っていた手から力が抜けその手でハルミが顔を覆った

「っ：ばかぁ：」

「ごめん」

「だからッ：謝るなっていつてんでしょッ：」

顔を覆うハルミの手を優しく掴むと竜が頬に口付けると

「本当に変わらないな：初めて会った時のままのハルミだ」
そのまま抱きしめた

「なにっ　よそれえ：」

竜の体を押してハルミが言う

「俺が一目惚れしたハルミのまま」

「う：うるさいッ！！」

「ほらそんなところも変わらない」

「うるさいっていつてんでしょッ：！！：」

涙を流したままハルミが怒鳴る

「素直じゃないところ：意地っ張りなところ、可愛くないところ」
「っ：：」

ハルミが拳を作ってふるふると腕を振り上げている

「すぐ赤くなるところ：」

「竜之助ッ！！！！」

「俺のハルミだ」

拳を振り下ろそうとしていたハルミに竜が抱きついた

「…」

ハルミがゆっくり腕を下ろすと竜の頭を撫でる

竜が顔を上げた

「待ってたんだから…」

「ああ…」

「ずっとよ？　ずっと…」

見上げたハルミの目からこぼれた涙が竜の顔に落ちた

「ごめんな」

「また…ッ…だから謝るなって…ッ…」

竜がハルミの腕を引っ張るとハルミが竜の腕の中に納まる

今度はハルミが竜を見上げると竜の手がハルミの頬に触れた

ハルミがゆっくりと目を閉じ7年分の想いを込めた口付けを交わす

「…ばか…」

ハルミが竜の胸に顔をうずめた

【十四回・参】＊あいのうた＊（前書き）

これがいつもの日常

【十四回・参】＊あいのうた＊

目が合った

笑ってたから

笑った

それから一年

一年前より伸びた髪と身長

一年前のあの日と同じ日

一年前のあの場所で

目が合って

笑ったから

笑おうとした

「いい天気だね」

声をかけられたから

「でも天気予報では雨みたいだけど」

「え？ 困ったなー…どうしょ」

「うちの神社の境内でよかったら雨宿りでもしていけば？」

少しだけ会話を交わした

ハルミが中学に上がっての夏休みの早朝

小中学生にとってのお約束といえばラジオ体操だろう

その会場となっているのが別荘小学校のグラウンド

漁師町の正月町の朝は早い

朝6時ともなれば大体の家は活動を始めている

だからこの別荘小学校のグラウンドに人がいたっておかしいことで

はない

「覚えてたんだ俺のこと」

「やっぱり去年もそこに座ってたよね？ その変な格好で」

ただおかしかったのはその人物の格好

去年もこの格好だった

「ひっで；」

【そこ】とはジャングルジムの上のこと

「ここは眺めがいいから」

朝日に緑色の長い髪がきらきらと光っていた

「名前は？」

「栄野ハルミ。アンタは？」

「あー…俺は…竜…之助？」

なぜか疑問系に名前を言ってきた竜之助にハルミが首をかしげた

「苗字は？」

「ない」

「…変なの」

立ち上がった竜之助がストンと地面に着地するとハルミを見る

金色に近い目が笑った

「高校生？」

「違う」

「じゃあ大学生？ それとも…」

ふわっとハルミの体が浮いた

「ちょ…ッ！？？」

「軽っ もう少しふっくらしろ」

竜之助がハルミを高らかに持ちあげる

「なんなのさっ！！； おろしてッ！！」

みしっ

ハルミが両足で竜之助の頭を踏みつけた

「おろしてってッ！！」

今度は顔を上げた竜之助に顔を踏みつける

顔に砂やら草やらをつけた竜之助がハルミをおろすと顔の砂やらを払った

「なあハルミ」

「何ッ!!」

「ごめんな…」

身をかがめてハルミと視線を合わせた竜之助が謝る

「べ：別にただ驚いただけだし：そんなまじめに謝らなくても…ッ！?;」

一瞬何が起こったのかわからなかった

気付いたら竜之助を思い切り蹴っていたハルミが真っ赤な顔をして口を押さえている

「だから謝ったじゃないか」

「何なのアンタはッ!!!; いつ…いきなり…キ…」

「あ、赤くなった」

「うるさいッ!!!;」

今度は竜之助のみぞおち目掛けてハルミがパンチをぶちかましたそれをヒョイとよけると地面を蹴って飛び上がりジャングルジムの上に着地した竜之助が空を見上げる

「あ本当に雨降りそう」

海の方から黒い雲が広がっている

「おりてきなよッ!!」

ハルミが下から怒鳴ると頭を搔いた竜之助がストーンと地面に降りたするとすぐさまハルミのパンチ連続攻撃が始まる

「じゃ帰るか」

そのこぶしを全て受け止めながら竜之助が言う

「どこにッ!! さっさと帰れッ!!」

真っ赤になってパンチをし続けるハルミの両こぶしを竜之助が掴んだ

「ハルミの家。 雨宿りさせてくれるんだろ？」

「な…ッ;」

ぐいっとハルミの体を抱き寄せた竜之助がにっこり笑うとハルミの

蹴りが脛にお見舞いされた

「いってきまーす」

紺色のスカートを靡かせハルミが玄関から出ると

「おはよう」

「：はいはいおはようございますっ」

垣根の傍にいた竜之助がにっこり笑った

その竜之助に投げやりに挨拶をしたハルミがさっさと横を通り過ぎる

「挨拶はしてくれるんだ」

「一応ね。おはようって言ってくれたし」

ガチャンと自転車の鍵を外すとその自転車を押して石段に向かう

「さって とっ」

石段の上に来るとハルミが自転車を持ち上げ石段を降りていく

「つとに：毎朝これがないきゃ：って：ちよ：」

ブツブツ文句を言いながら自転車を持って石段を降りていたハルミの手が軽くなった

「いいってば！！ 竜之助！！」

「俺らの間に遠慮は禁止」

「俺らの間って何さッ！！」

自転車を担いで石段を降りていく竜之助にハルミが言うと竜之助が振り返った

数段上に居るハルミを見たかと思うと

「白」

ヒュン バコッ

そう口にした瞬間ハルミの通学カバンが竜之助に命中する

「最ッ低ッ！！！！ 何見てんのさ！！ あーもー一瞬でもお礼言おうとした私が馬鹿だったッ！！」

「一瞬でもお礼言おうとしてくれたとか」

「はいはい！！ 自転車貸してッ遅刻するからッ」

竜之助の頭からカバンを取ったハルミが石段の下から言うと竜之助が跳んでハルミの隣に着地した

「相変わらずどんな運動神経してるの？」

「こんな運動神経」

自転車を下ろすと竜之助が微笑みながらハルミを見る

「ありがとう」

「あ、お礼」

「一応ね、いつてきますッ」

ハルミが竜之助から自転車を奪うと片足を乗せ勢いをつけて乗った
竜之助は遠ざかるハルミの背中をしばらく見ていた

あの日から竜之助はずっとハルミの家である【栄之神社】に入り浸
っている

気付けば社の屋根の上にいたり

ふと見れば御神木の上で寝ていたり

かと思えば境内で鳩やスズメと戯れていた

そして不思議なことに両親も姉も竜之助の話題をしない

まるで見えていないような

まるでそこに居るのがわからないような

細かいことを気にしないハルミでもさすがにだんだんと気になって
きていた

「ねえ」

境内の階段に腰掛けていたハルミが鳩と戯れていた竜之助に声をか
けた

「ハルミから声かけてくるとか珍しいな」

バサバサと竜之助の頭や肩に止まっていたハトが一斉に飛び立った

「アンタ…何者？」

「いきなりそうきたか」

竜之助がハルミの隣に腰掛ける

「母さんも父さんもお姉ちゃんもまるで見えてないみたいだし…変
な格好してるし運動神経とか…何なの？」

ハルミが聞く

「何なのって…も俺は俺」

「俺はわかった。だからその俺は何なのって話。どこから来たの？」
「天」

竜之助が答える

「何のために？」

「ハルミに会うため」

バサバサと一羽の鳩が竜之助の傍まで飛んできた

「はあ？；」

「本当」

竜之助が手を伸ばすと鳩がそれに止まる

「俺はハルミが好きだぞ」

「アンタねえ…だいたいいくつなのさ」

「信じてないのか？」

ずいっと竜之助がハルミに近づいた

「信じる信じないとかじゃなく…っ」

竜之助の手に止まっていた鳩が飛んでいく

「っ…近いッ！！；」

ハルミが竜之助の顔を思い切り両手で押すと立ち上がった

「ハルミ」

「…ばーかッ！！」

そういつてんべーっ舌を出したハルミが駆け出す

竜之助が目細めて笑った

積もった雪で一面が真っ白になった境内

木の枝に雪が咲いていた

「寒いッ！！」

ハルミの声が晴れた空に響く

「なら中に入ればいいと思うけど それとも抱きしめてやろうか？」

「アンタの格好が寒いッ！！」

そういつてハルミが竜之助を指差した

「つてか!! ずっとその服じゃない!! ちゃんと洗濯してんの?」

竜之助を頭の先からつま先までを見たハルミが服を引っ張る

「してくれるのか?」

「へ?」

「洗濯」

「ちょッ!!!」

竜之助がモゾモゾと服を脱ぎだす

「ここで脱ぐなッ!!!; あーもー…わかったッ!!!; わかったけどちよつとこつち来て」

脱ぎかけの服を腕に引っ掛けている竜之助の手を引っ張ってハルミが家の中に入った

「いいのか?」

「何が」

靴を脱いで家に上がったハルミが聞き返す

「俺を入れて」

「どうせみんなには見えてないんでしょ ほら早く」

「いや…俺としては嬉しいんだけど…」

さつさと家の奥に歩いていくハルミに竜之助も続く

「それに誰も居ないしね」

少しハルミの声が響いて聞こえた

「こつち 朝沸かしたからまだあったかいけど一応追い焚きするか入って」

「風呂?」

「どうせ服脱ぐんだから」

ハルミが洗濯機の蓋を開け振り返る

「ちょ…ッ!!!; 待って待ってッ!!!; 私が出てから脱いでッ

!!! そしてこの中に入れといて!!!」

再び脱ぎ始めた竜之助を見て慌ててハルミが脱衣場から出て行った
「着替え置いておくからッ!!!」

やや遠くからハルミが叫ぶのを聞いて竜之助が小さく笑った

「じゃ…遠慮なく…羽伸ばさせてもらおうか」

「父さんのじゃちょっと丈的に小さそう…だけど仕方ないか…」
ガシャーン!!!

突然の物音にハルミが飛び上がった

「な…に?;」

服を握り締めたまましばし放心していたハルミがハッとして駆け出し目指したのは風呂場

「竜之助ッ!!!?」

ガラッ

勢いよく風呂場の戸を開けたハルミが見たもの

「あれ? 一緒に入るのか?」

白い鳥のような羽とよくRPGとかに出てくるドラゴンのような緑色の羽

「…なに?」

「ごめんな ちょっと大きく出しすぎて棚の上のもの落として…」

「はね…?」

ハルミの口だけが動いた

浴室に立ち込めていた湯気がハルミの開けた戸から逃げていき視界がはつきりとしてきた

「ハルミ?」

体を動かさないハルミに竜之助が近づく

「な…竜之助それ…何」

ハルミが羽を指差すと竜之助が羽を少し動かして
「羽」

答えた

「じゃなくてッ!! なんてそんなのがあ…」

ハルミが再び動かなくなる

「ハルミ?」

「きつ：きやあああああッ！！ 変態ッ！！」
ビシャーン！！

ハルミの悲鳴とともに戸が閉められバタバタという足音が遠ざかる
「変なもの見せんナッ！！ 馬鹿ッ！！」
遠くから聞こえたハルミの怒鳴り声

「変なもの か やっぱりびっくりするよな」
羽の他にもうひとつハルミが見た【変なもの】には絶対気付いては
いないだろう竜之助が羽を見て苦笑いをした

「ほぎやあああ！！ ほぎやあああ！！」
初夏の栄野家から聞こえる赤ちゃんの泣き声
止んだかと思うと

「ほぎやああ！！ ほぎやあああ！！！！」
数分もしないうちにまた泣き声上がる

「もー！！ お姉ちゃんッ！！！！ 操が泣き止まないー！！！！」

「ほぎやあああ！！！！」

バタバタという足音と泣き声の不協和音

「お姉ちゃんッ！！！！」

「いないぞ」

縁側の和室まで来た時竜之助が声をかけてきた

「さっき母親と石段降りていったぞ」

「ええええー！！」

「ほぎやあああ！！ ほぎやああ！！」

泣き喚く姉の子供の【操】を抱いたままハルミが溜め息をついた

「おしめ：かミルク？」

「うぎやああー！！」

今までに無い泣き声をあげて操が泣き始めた

「ちょ：！！」

「母親を探してるみたいだな」

「な：竜之助あんたわかるの？」

操の顔を覗き込んで竜之助が言う

「ふくよかな胸が無い　ってさ」

「はぁッ!?!」

ハルミがくつくくくと笑う竜之助を足で蹴る

「しょうがないな」

「えっ…ちょ竜之助!?!」

泣き喚く操を竜之助が抱き上げた

「ふええあああああ!!　ふっ　ふえあああああ!!」

竜之助が抱き上げると一瞬泣き声が止まったがまた操が泣き出す

「ハルミも」

「えっ?」

竜之助がハルミの手をとった

「赤ちゃんって高い高いすると泣き止むとか」

「え…まあ…」

縁側から庭に降りた竜之助が空を見上げた

「わっ;」

そしてハルミを小脇に抱えると

「しっかりつかまってるよ?」

「ほぎゃあああ!!」

泣き止まない操を腕に抱き竜之助が膝を曲げた

バサッ　と何かが広がる音がしたかと思うと上から風を感じた

そして何故か足元にあるはずが無い神社の屋根が見える

そうこうしているうちに電信柱までもが足元に見え始めた

「ほーら高い高い」

「たっ…高すぎだっつーのッ!?!」

ハッハと笑う竜之助にハルミが半ベソになりながら突っ込む

「何っ;　なんなの!?!」

「前にも見たろ?　風呂で」

「前に…も…うん　でも…」

何かを一緒に思い出したらしいハルミが赤くなった

「たあーい　ぷー」

キャツキャと笑う操を見てハルミが赤い顔のまま微笑む

「笑っ…」

ぐいっと体が持ち上がったかと思うと少しの息苦しさ

「あうー？」

よだれをたらした操がきよんとする

「二回目」

鼻と鼻がくつつく距離で竜の助が笑う

固まったままのハルミ

「ふうあー」

操が竜之助に向かって手を伸ばしてきた

「ん？ お前は駄目だ ハルミは俺のだから」

「誰がアンタのなのさッ！！」

真っ赤な顔をしたハルミが肘で竜之助の顔をドリルのようにグリグリと攻撃した

鉢の中に埋められた赤い宝珠がきらっと光った

「で…」

京助が迦楼羅かるらと緊那羅きんならを見る

「で？」

「…何にも起こらないっちゃ…」

宝珠を埋めたのはいいが何も変化の無い元ヒマ子だった向日葵

「もっと深く埋めないと駄目なのではないのか？」

「いや…」

京助がどことなくなんとなくいや々な顔をしてあさっての方向を見る

「前は確か…京助 が」

「…； やっぱ…アレ？；」

「京助が？」

緊那羅きんならと京助が顔を見合わせるとひとり蚊帳の外の迦楼羅かるらが京助を見た

「…鳥類」

「なんだ？」

チオイチオイと手招きで京助が迦楼羅かるらを呼ぶ

「ここに立って」

「うむ？」

迦楼羅かるらが京助に言われたとおりに向日葵の前に立つ

「んで目エ瞑って」

「うむ」

おとなしく目を瞑った迦楼羅かるら

京助がニヤリと笑った

「きよ…」

バフツ！！

「んぶっ！！！！？」

ハラハラと数枚の花びらが床に落ちた

迦楼羅かるらの顔面には京助によって向日葵が押し当てられている

「京助…」

一応止めようとしたらしい緊那羅きんならが力なく手を引っ込めた

「なっ…；　なにをするたわけッ！！！！」

顔に花びらをくっつけた迦楼羅かるらが怒鳴る

「…どうだ…？」

怒鳴る迦楼羅かるらの頭を押さえつけて京助と緊那羅きんならが向日葵を見つめる

「はなさんかたわけッ！！！」

「るっせえ！！！！　一寸黙って…」

「京助！！」

ギャンギャン喚く迦楼羅かるらに怒鳴った京助の服を緊那羅きんならが引っ張った
「なにす…」

言いかけた京助の迦楼羅かるらの頭にあつた手から力が抜る

「京様」

いつもなら鬱陶しい声が何故か嬉しかった

「緊那羅様きんなら、それに鳥類様かるら」

「迦楼羅だッ！！；」

「私：確か京様の：」

怒鳴る迦楼羅かるらを無視するヒマ子に緊那羅きんならが抱きついた

「ヒマ子さんッ：」

「緊那羅様！？ まあいかがいたしましたの？」

茎が折れない程度に緊那羅がヒマ子を抱きしめる

「なんだ：誰でもよかったんかい；」

そう言いつつ京助が笑う

「なんなのだ；」

わけがわからない迦楼羅かるらがふてくされる

「おかえりなさい」

小さく緊那羅きんならが言った

「なあ：」

膝を抱えた坂田が白いワイシャツ姿になった清浄しやうじやうこと柴田に声をかけた

傷こそは消えたものの力の消費量が酷かったらしい柴田は折りたたんだ座布団を枕に横になっていた

「なんです？ 若」

「：なんでもねえ：」

坂田が膝に顔をうずめる

「若：」

「うるせえ」

「泣かせ：まし た？」

上半身を起こした柴田が坂田を見る

解けた髪が膝に埋めた顔をカーテンのように隠している
でもその肩は震えていて小さく鼻を吸る音が聞こえた

「わ…」

「若っていうなッ!!」

坂田が怒鳴る

「親父も昔【若】だったんだろ」

「え…?? あ…そうですけど」

坂田が鼻水を吸り一呼吸をする

「若って呼ばれるたび…親父の代わりみたいな気分になる…俺は親父じゃねえ」

「……」

「俺は俺なんだ…お前がッ…お前に【若】って呼ばれると親父の代わりなんだって…ッ…」

坂田の鳴咽がだんだんと大きくなる

「俺はッ…お前がしようなんたらだろうがなんだろうが…ッ柴田だからッ…俺にとってお前は柴田でしかないからッ…!!」

咳き込みながら言う坂田の肩に柴田がそっと触れた

「すいません…」

それからゆっくりと坂田の頭をなでる

熱い息がこもっているからなのか少し前髪が湿っている坂田

「柴田…」

「あ…はい」

鳴咽を抑えながら柴田を呼ぶ

「俺は誰だ？」

くいと引っ張られたワイシャツ

柴田がそれを見て微笑む

「深弦君…でいいですか？」

「ばーか」

間髪いれずに返ってきた言葉に柴田が苦笑いになっていると坂田が顔を上げた

「君ってガラじゃねえよ」

「え…でも」

「でもじゃねえ 俺がそういつてんだ【柴田】！！」

目を腫らして鼻水を出して涙を流したままの坂田の顔

「…変わりませんね…貴方は」

「うるせえッ；」

ワイシャツの袖口で坂田の鼻水を拭き取った柴田が笑う

「ありがとうございます…深弦」

「ッ…」

いきなり名前で呼ばれた坂田が驚く

「やつ…やっぱナシッ！！； 若でいいッ！！； いやッでもッ；」

「ははははっ」

「笑うなッ！！；」

真っ赤になった坂田が柴田の足を蹴った

「あつれー柴田さん大丈夫なの？；」

「うおうう！？；」

いきなり部屋に入ってきた中島と南に坂田が驚いて壁に頭をぶつける

「なにしてんだおまへ…；」

「入ってくんなら入ってくるっていえッ！！；」

呆れながら中島が言うのと坂田が怒鳴った

「お邪魔します」

「遅いわッ！！；」

南がお辞儀しながら言うのとまた坂田が怒鳴る

そんな三人のやり取りを柴田が微笑みながら見ていた

「…起きてる？ 制多迦せいたか」

「…ん」

矜羯羅こんがらがむくりと起きると制多迦せいたかも起き上がった

だるさはあるものの外傷が見当たらない自分の体を不思議に思った

矜羯羅こんがら

「…んがら?;」

矜羯羅こんがらが制多迦せいたかの黒い衣を剥いでまじまじと体を見る

「傷がない…」

「…んがらの傷も」

「結構大きな傷だったと思うんだけど…乾闥婆けんたつぽか慧光えこうか…どっちにしろ…お礼は言わないといけないね」

そう言いながら矜羯羅こんがらが布団の足元を見た

そこには目の回りを赤くした慧光えこうと相変わらずのお面の鳥俱婆迦うぐばかがしずかに寝息を立てていた

慧光えこうの手からは微かな光が漏れている

「…っと治癒しててくれたんだね…慧光えこう」

慧光えこうの頭を制多迦せいたかがそつとなでる

少し腫れている慧光えこうのまぶたがぴくつと動いた

「…起こしてどうするんだよ」

スパンッと矜羯羅こんがらが制多迦せいたかの頭を叩く

「…めん;」

制多迦せいたかがへらつと気まずそうに笑うと慧光えこうの目が開いた

「おはよう」

「おはようございま…ッ!?!」

矜羯羅こんがらの挨拶に目を擦りながら答えた慧光えこうがハッとしてガバツと身を起こした

「こ…矜羯羅様こんがら!!? 制多迦様せいたか…ッ」

「…はよう」

へらりと笑った制多迦せいたかとは反対にだんだんと眉が下がっていく慧光えこう

「矜羯羅様こんがら…制多迦様せいたか…」

鳥俱婆迦うぐばかもいつの間にか起き上がって二人を見ていた

「二人共…あ」

「ッ…!!」

言葉の途中で矜羯羅こんがらと制多迦せいたかに鳥俱婆迦うぐばかと慧光えこうが抱きついた

「っう…ああああああ!!!!」

「きよっ…うっ…せいた…うわああああんッ!!」

制多迦せいたかと矜羯羅こんがらに抱きついたかと思うと二つの泣き声が響く

「よかつ…うええええ…ッ」

押し倒された制多迦せいたかと矜羯羅こんがらが目を合わせそして微笑むと慧光えこうと鳥う俱婆迦くばかの頭をなでる

「ありがとう…」

「…りがとう」

泣きじゃくる二人に制多迦せいたかと矜羯羅こんがらが礼を言った

「おっ来た来た」

茶の間の戸を開けた制多迦せいたかに声をかけたのは中島

「なんだ…みんないるの」

矜羯羅こんがらがぐると茶の間を見渡すとそこには京助と3馬鹿、緊那羅きんなら、柴田がいた

「みんなっ…みんなでもない…けど一応」

「一気に密度はあがったけどな」

制多迦せいたかがヘラツと笑い戸を閉める

はじめからいた6人にあとから制多迦せいたかたち4人が加わって10人になった茶の間の人口

「…あとののは？」

矜羯羅こんがらがこの場にいない者たちを聞く

「鳥類は乾闥婆けんたつばんとこいったし…母さんたちはまだあっちにいますうけど」

京助が答える

「ヒマ子さんは庭にいるっちゃ。あと悠助と慧喜えきは風呂…」

緊那羅きんならが答えている途中で茶の間の戸が開いてふわっと香ったのはきつと入浴剤の匂い

「あっみんないる」

「えっ…」

元氣よく茶の間に入ってきた悠助

「慧喜？」

悠助が廊下にむかって慧喜を呼んだ

「慧喜？ どうしたの？ 入らないの？」

「…お：れ…」

茶の間に入ってこない慧喜

【入り】たたくても【入れ】ないんだと悠助以外の全員が察した
きつと慧喜が感じているのは【罪悪感】

「俺…っ…」

泣きそうな声が聞こえた

「え…」

慧光が立ち上がろうとすると目の前を緊那羅が通った

「お腹すいてないっちゃ？」

「…へっ？」

茶の間の入り口に立った緊那羅が振り返って茶の間の面々に聞く

「ま…まあ腹は減ってる…けど」

京助が答えると南と坂田が頷いた

「ハルミママさんがたしか晩飯作ってたはずだっちゃ」

「…で…？」

「ちよつと遅くなったけど晩御飯にするっちゃ」

につこりと笑った緊那羅

「慧喜」

緊那羅が慧喜に声をかけた

「手伝ってほしいっちゃ」

「え…っ？」

慧喜が驚いている

「僕も手伝うっ」

悠助がぱたぱたと駆け足で廊下に出た

「ほらっ慧喜ー」

「あっ…」

途中から足音が二つになり遠ざかっていく

「…緊那羅きんなら」

矜羯羅こんがらが声をかける

「ありがとう」

そしてお礼を言った

その隣では制多迦せいたかがへらりと笑っている

「…なかがすくと…イライラするって悠助が前言ってた」

「そういえば言っていたね…」

矜羯羅こんがらが思い出して微笑む

「まあたしかに腹減るとイライラはするよな」

中島がうんうん頷いた

「んじゃ俺母さんとと…父さん呼んでくっかな」

京助が立ち上がった

「んで誰か鳥類とか…」

「おいちゃんがいく」

烏俱婆迦うぐばかが立ち上がりくいくいと帽子を直し歩き出した

トタトタと烏俱婆迦うぐばかが廊下を小走りで縁側のある部屋の前までやって来た

襖を開けると迦楼羅かるらと阿修羅あしゅらが顔を上げた

「烏俱婆迦…？」

「ご飯だよ」

「…呼びにきてくれたんかばか」

「烏俱婆迦だっ！！」

キーキーと地団駄をふむ烏俱婆迦うぐばか

「はははは」

阿修羅あしゅらが笑う

「…乾闥婆けんだつばは？」

「ここだ」

迦楼羅かるらが少し体をずらすとそこには乾闥婆けんたつぱが丸くなって寝息を立てていた

「乾闥婆けんたつぱ…寝てるの？」

「ああ…だからワシが側にいるお前たちは…」

ぐううー…

迦楼羅かるらの言葉を迦楼羅かるらの腹の虫の声が遮った

「かるらん…オライがみちよるけ…飯食って…」

「おいちゃんがいる」

阿修羅あしゅらの言葉が終わる前に烏俱婆迦うぐぼかが乾闥婆けんたつぱの側に座った

「おいちゃんが乾闥婆けんたつぱの側にいる」

「いやワシが…」

ぐきゅううー…

再び鳴いた迦楼羅かるらの腹の虫

「おいちゃん乾闥婆けんたつぱが好きだ」

「なっ…?!;」

「ほっほー…」

驚いた迦楼羅かるらとあれまーという顔をする阿修羅あしゅら

「乾闥婆けんたつぱ…ハルミと同じ匂いをする…優しくて強くて柔らかくて

だからおいちゃん乾闥婆けんたつぱが好きだ」

「…だつてさかるらん」

固まった迦楼羅かるらを阿修羅あしゅらがつつく

はつと我にかえった迦楼羅かるらが烏俱婆迦うぐぼかと乾闥婆けんたつぱを見た

「ライバル…かねえかるらん」

「なっ…やつ…やかましいわッ!! たわけッ!!;」

「乾闥婆けんたつぱが起きるよ？」

怒鳴った迦楼羅かるらに烏俱婆迦うぐぼかが言う迦楼羅かるらがぐつと口をつむいで座る

「なあばか…だっぱってどんな匂いなんだ？」

「いい匂いだよ」

「…だとさ」

「やかましいッ!!;」

阿修羅あしゅらが迦楼羅かるらをからかう

「乾闥婆けんたつばが起きるよ」

「……;」

またぐつとなった迦楼羅かるらを見てククククと笑う阿修羅あしゅら

「だからおいちゃんが乾闥婆けんたつばの側にいる乾闥婆けんたつばが好きだから」

「おーおー：言うねえばか」

顔をひきつらせて堪えている迦楼羅かるらを横目に楽しそうな阿修羅あしゅら

「…乾闥婆？」

「…ぼ…くは…」

うつすら目を開けた乾闥婆けんたつば

「乾闥婆…だい」

「大丈夫？ 乾闥婆けんたつばどこ痛い？」

迦楼羅かるらより先に烏俱婆迦うぐばかが乾闥婆けんたつばに言うのとそれを見てまた阿修羅あしゅらが

また笑う

「烏俱婆迦…？ あ…迦楼羅かるらと阿修羅あしゅら…僕は…」

乾闥婆けんたつばが起き上がると迦楼羅かるらが側に寄った

「…乾闥婆」

「迦楼羅…僕は…」

まだ赤い目の乾闥婆けんたつばを見て迦楼羅かるらが俯く

「け…」

「ほいほい！ 飯だ飯だー」

阿修羅あしゅらが烏俱婆迦うぐばかを小脇に抱えて立ち上がった

「放せっ！！放せってっ！！おいちゃんは乾闥婆けんたつばとっ！！」

じたばた暴れる烏俱婆迦うぐばかを阿修羅あしゅらが連れていく

ぼかんとしている乾闥婆けんたつばの頬についていた髪の毛を迦楼羅かるらが取った

台所の暖簾をくぐった緊那羅きんなら

「あ…まだ作りかけだっちゃ…えと…カレー…でいいっちゃ？ シチ

ユー…うーん…」

鍋の中には玉ねぎ、にんじん、肉そしてジャガイモが煮えていた

「僕カレーがいいっ」

「わかったっちゃ」

悠助が緊那羅きんならの腰に抱きついてねだると緊那羅きんならが笑いながらガスコンロに火を着けた

いつもならここで慧喜えきが悠助をひっぺがしているはず

その慧喜えきは暖簾の向こうに立っていた

「緊ちゃんうずらは〜?」

「あうん悠助とつてきてくれるっちゃ?」

「うんっ!!」

悠助が緊那羅きんならから離れて室を開けた

「慧喜えき」

緊那羅きんならに呼ばれた慧喜えきがびくつとした

「手伝って欲しいっちゃ」

「…」

「えーき」

ゆっくりと慧喜えきが暖簾をくぐる

顔をあげない慧喜えきの手を緊那羅きんならがつかんだ

「味付けしてほしいっちゃ」

「えっ…」

驚いた慧喜えきが顔をあげると笑顔の緊那羅きんなら

「俺…が?」

「そうだっちゃ」

「でも俺…料理とか…それに…」

慧喜えきが俯く

「私もこっちにくるまでは料理とか全然しなかったし出来なかった
っちゃ」

「嘘!…!;」

慧喜えきが再び驚く

「嘘じゃないっちゃ」

「はいうすらー」

悠助がうずらの缶詰めを持ってきた

「最初はハルミママさんから教えてもらったんだっちゃ　よく焦がしたり変な味になって…」

うずらの缶詰めを受け取りながら緊那羅きんならが苦笑いした

「…ある日に味噌汁作ったんだっちゃ」

「味噌汁？」

「うん」

缶切りを取った緊那羅きんなら

「僕やりたいー」

悠助がいうと緊那羅きんならが缶切りを手渡す

「気を付けるっちゃよ？」

「はあい」

クツクツいいだした鍋

「…味噌汁…作って…どうしたの？」

「初めておいしかったっていわれたんだっちゃ」

緊那羅きんならが火を小さくしながら言った

「…義兄様に？」

「なんでわかったっちゃ；」

「緊那羅きんならが嬉しがるのってだいたい義兄様が関係してるし」

「…そう…だっ…ちや？；」

緊那羅きんならの頬が少し赤くなる

「できたー！！」

缶を開けた悠助が言う

「はい緊ちゃん」

「ありがとだっちゃ悠助　さ　慧喜えき」

缶を受け取った緊那羅きんならが慧喜えきを手招きする

「えっ？　今日は慧喜えきが作るの？」

「そうだっちゃ」

「でも俺…」

「僕 慧喜えきのカレー食べたいー」

悠助えきが慧喜に抱きついた

「悠助…でも…」

「私も手伝うから」

「慧喜えきー作ってー」

悠助と緊那羅きんならに言われて慧喜えきが恐る恐る鍋の前に立った

「…絶対…おいしくなんか…」

「おいしいよー絶対おいしいっだって慧喜えきが作ってくれるんだもん」

悠助が言う

「料理って想いも調味料になるんだっちゃ」

「想い…？」

「慧喜えきが悠助においしく食べて欲しいって想いこめれば大丈夫だった

ちゃ」

緊那羅きんならが慧喜えきにお玉を差し出した

「私がそうだったっちゃ」

「…さっきの味噌汁の話？」

慧喜えきが聞くと緊那羅きんならが微笑んで頷く

「想いって…強いっちゃ 誰かを想うって苦しかったり嬉しかった

り…それがいいのか悪いのかっていうのは…わからないけど」

「……」

「でも…誰かを想うことは力になると思うっちゃ」

慧喜えきが悠助を見た

「…想い…」

「慧喜えきは…このカレーにどんな想いを込めたいっちゃ？」

「俺…みんなに…謝りたい…そしてみんなでいつもみたいに…」

「うん」

緊那羅きんならが笑う

「お腹すいたー」

「…待ってて悠助 俺…作ってみる…から」

悠助が言う^{えき}と慧喜^{きん}が緊那羅からお玉を受け取った

京助が社務所の戸を開ける

「かーさん」

奥に向かって声をかけた

「あら京助…」

「俺はまだよ…」

「…とーさん…飯っ!!」

ピシャンと戸がしまる音がした

ハルミと竜之助が顔を見合わせる

「父さんだって」

「…ああ」

竜之助が嬉しそうに笑う

「俺の息子だ…」

「あら違うわよ？ 私と竜之助の息子でしょ？」

「…そうだな」

「ね？」

ハルミも微笑んだ

チリーン…

風鈴が鳴った

家の中は静まり返っていて

線香の香りで満ちていた

仏壇の回りには御供え物

そして白い箱が4つ

線香の灰がぼろっと折れて落ちる

「ハルミ…?」

竜之助がそんな部屋の中にハルミを探す

いないとわかると廊下を歩きまた隣の部屋を開ける

そうやって広い栄野家の中をハルミを探した

縁側に面した部屋

襖をあけると部屋の中心に寝息をたてる操の姿を見つけた

操から視線を縁側に向けると制服姿の背中を見つけた

柱に体を預けて庭を見ている

「ハルミ」

声をかけるとぴくつと肩が揺れた

操の横を通ってハルミの後ろに立った竜之助

「…何…?」

かすれた声が聞こえた

そのあとには鼻を吸える音

「…みんな…いなくなっちゃった…」

サワサワと風が庭の草木を揺らす

「操…だけになっちゃった…家族…っ」

ハルミの声が詰まった

「ハルミ」

「っ…」

背中から覆い被さるように竜之助が纏っていた白い布と一緒にハルミを抱き締めた

途端ハルミが竜之助にしがみついて声を上げて泣き出す

両親と姉夫婦が事故に合い幼い操だけが助かった

葬式の間気丈にも涙を見せなかったハルミ

「…俺がいる」

竜之助が耳元で囁いた

「ハルミ」

涙でぐしゃぐしゃになったハルミの顔を竜之助が両手で優しく包むと口付ける

無抵抗なハルミがゆっくりと目を閉じた

「家族になろう」

金色の目に映ったハルミが頷く

「ごめんくださいーい」

玄関から声がした

「はー…」

はっとしてハルミが返事をしようとする口づけで口を塞がれた

チリーン

風鈴が鳴った

「迦楼羅…？」
かるら

「……」

迦楼羅が乾闥婆の髪を乾闥婆の耳にかける
かるら けんだつば けんだつば

「大丈夫か…」

「…はい…すいませ…」

俯き謝りかけた乾闥婆を迦楼羅が抱き締めた
けんだつば けんだつば かるら

驚いた乾闥婆の目が大きくなる

「か…」

乾闥婆けんだつぱが迦楼羅かるらの服を掴もうと腕を上げた

「…しばらく…こうしていいか…？」

ぴくっとして止まった乾闥婆けんだつぱの手がゆっくりと迦楼羅かるらの服を掴む

「…はい…」

乾闥婆けんだつぱが迦楼羅かるらの肩に頭をつけて目を閉じた

「おろせっ！！」

「…なあばか…」

阿修羅あしゅらの小脇でキーキー喚いてバタバタ暴れる烏俱婆迦うぐばか

「…乾闥婆…竜の嫁さんと同じ匂いがするっていうてたんな…」

「そうだよっ！！」

阿修羅あしゅらが足を止めると烏俱婆迦うぐばかを下ろした

「…阿修羅…？」

烏俱婆迦うぐばかが阿修羅あしゅらを見上げる

真面目な顔で何かを考えている阿修羅あしゅら

「…二人とも…どこまで真面目で一途なんかな…」

そう言って阿修羅あしゅらが烏俱婆迦うぐばかの頭を撫でた

「制多迦様せいたか、矜羯羅様こんがらご無事で」

柴田が制多迦せいたかと矜羯羅こんがらの前に膝をつき一礼した後顔を上げた

「君もね」

矜羯羅こんがらが微笑むと制多迦せいたかもへらっと笑う

「俺は慧光えいこうのおかげです」「えっ」

そう言って柴田が慧光えいこうを見た

「わっ…私はっ…ただ私にできることしただけナリ；」

顔を赤くした慧光えいこうが制多迦せいたかの陰に隠れた

「…くたちの怪我も慧光えいこうが治してくれたんでしょ？　ありがとう」

制多迦せいたかが慧光えこうの頭を撫でると慧光えこうが驚いた顔を向けた

「私じゃないナリ」

「…じゃあ乾闥婆けんたつばなの？」

「…違いますお二人の怪我…だけではなく周りも直したのは【沙羅】です」

柴田が口にした名前に二人が驚く

「沙羅…」

矜羯羅こんがらが繰り返す

「…らと乾闥婆けんたつばは…？」

「乾闥婆けんたつばが取り乱して…今は休んでいるようです迦楼羅かるらはそこに…」

「…そう…」

矜羯羅こんがらが制多迦せいたかの頬をつねった

「…たい…」

「眉毛下がってるよ…君のせいじゃないんだ制多迦せいたか」

みょーんと制多迦せいたかの頬を引っ張る矜羯羅こんがら

その様を慧光えこうがオロオロしながら見ている

「タカちゃんのほっぺってよく伸びるよねえ」

南が言う

「餅だな餅」

坂田が柴田の頭に腕を乗せて制多迦せいたかを見た

へらっと笑う制多迦せいたか

「しまりがないよ」

「…たい…」

矜羯羅こんがらが更に制多迦せいたかの頬を引っ張る

「おー…伸びる伸びる」

「すごいすごい!!」

南と中島が拍手しながらそれを見る

「お前はあんま伸びねえな」

「若…」

坂田が柴田の両頬をつまんで引っ張った

「：何してん；」

茶の間の戸を開けて見た光景を理解できず阿修羅あしゅらが聞く

「制多迦せいたか様変な顔」

烏俱婆迦うぐばかが言う

「清浄も変な顔」

柴田を見て更に烏俱婆迦うぐばかが言うと制多迦せいたかと柴田が苦笑いをした

「：」

矜羯羅こんがらがふと顔を上げた

「：んがら？」

それに気づいた制多迦せいたかが矜羯羅こんがらに声をかける

「：この匂い：何：？」

「匂い？」

矜羯羅こんがらの言葉に一同がフンフンと鼻を動かす

「：これ：カレー：？」

中島が言う

「カレーだよなこの匂い：間違いない」

坂田も言う

「カレー？ なにそれ」

矜羯羅こんがらが制多迦せいたかの頬から手を放して聞く

「食べ物ですよ矜羯羅こんがら様」

柴田が答えると矜羯羅こんがらがぴくつと反応した

「大人も子供もおねーさんも大好きな食べ物」

南が笑いながら言う

「なにそれ：おいしいの？」

「まあおいしいいくなかったら大人も子供もおねーさんも食わないよな」

坂田が言うと中島と南が頷いた

「がらっちょカレーっつーのはなインドの：」

「まあ食えばわかる」

「…メガネ…オライの出番…」
説明しようとしたのを坂田に遮られた阿修羅が肩を落とした

「でき…た」

「いいにおーい」

味見用の小さな皿を手にした慧喜の隣で悠助が思い切り息を吸い込んだ

栄野家に広がるカレーの匂い

「僕も味見したいっ」

慧喜に向かい悠助がねだる

「もうご飯だっちゃ悠助」

「えー…味見…」

食器棚から大量の皿を出しながら言う緊那羅

「だったら！！ だったら早く食べたいっ！！ これ運べばいいん

だよねっ緊ちゃんっ」

悠助が緊那羅の出した皿に手をかけた

「重いから私が…って悠助；」

「俺も手伝うよ悠助」

ヨロヨロしながら皿を運ぼうとする悠助に慧喜が駆け寄り皿を半分持った

「ありがとー慧喜ー」

「ううん」

いつものようなバカップルっぷりが戻ったのに緊那羅の顔がほころぶ

「さて…じゃあ私は…」

緊那羅が冷蔵庫を開けて取り出したのは福神漬けとらっきょうそして引き出しを開けてありったけのスプーンをお盆に乗せる

「あと…は…ご飯はこのままもって…鍋も。あ、鍋敷き；」

あちこちパタパタと動いてはお盆に必要なものに乗せていく緊那羅

「…さすがにいつぺんには持っていけないっちゃね；」

カレーの鍋に炊飯ジャー、そしてもろもろの乗ったお盆

「あと…は あ、麦茶…」

「なんだ今日カレーか」

麦茶のピッチャーを冷蔵庫から探ろうとした緊那羅きんならが振り返った

「京助」

「悠のリクエスト？」

「うん」

ははっと笑った緊那羅きんならが冷蔵庫から麦茶の入ったピッチャーを取り出した

「手伝う」

「え？」

京助がカレーの鍋に手をかけた

「腹減ったし お前一人じゃ運べねえだろ」

「あ…う ん」

「…なんだよ；」

「えっ； や…なんでもないっちゃ；」

なんだよと聞かれた緊那羅きんならがビクつとなった

その後が続かない

京助はカレー鍋に手をかけたまま

緊那羅きんならは麦茶のピッチャーを持ったままお互いの顔を見て止まっている

「京助あの…っ」

「…ありがとな」

切り出した緊那羅きんならがきょとんとして言葉を止めた

「何あったのかわからねえけどお前が俺に何かしてくれたんだろ？」

「何…か…」

少し間をおいて緊那羅きんならの顔がかあつと赤くなった

「また守ってもらったんだな俺お前に」

「っ…」

自分が京助にしたこと

京助が前にひま子さんを起こしたきっかけ

その真似をした

それを思い出したきんなら緊那羅

えき慧喜が初めてここにきたとき

悠助が言っていた言葉

【あのね僕たちはちゅーって好きな人とするんだってハルミママが言ってたんだ】

今まで自分が京助に対して想っていた想いとは少し違う想いが混ざってきている
でもそれがどういう想いなのかはわからなくて

きんなら「緊那羅?;」

「えっ!?!; わっ;」

名前を呼ばれて慌てたきんなら緊那羅がピッチャーを手から滑らせた

「あぶっ!?!;」

それを受け止めようとした京助ときんなら緊那羅が二人してピッチャーを掴んだ

「何してんだお前; 疲れてんのか?」

「や:ごめんだちゃ;」

「お前それだけ持ってけ。後は俺が運ぶから」

京助がきんなら緊那羅にピッチャーを押し付けるとカレー鍋を持ち上げ台所

を出て行く

「あ京助ー」

「義兄様落とさないでね」

「わーってるわ；」

廊下から聞こえる声に緊那羅きんならがピッチャーを抱きしめた

「よいせえっ！！」

京助がカレー鍋をどどんとテーブルの上に置いた

「待ってましたっ！！」

三馬鹿が鍋に群がる

「これがカレー？」

矜羯羅こんがらも上から鍋を覗き込む

「そそ！！ この中にカレー様がいらっしやるわけ！！」

南が言う

「…レー…」

制多迦せいたかがへらりと笑う

「あ…私この匂い…たしか南の家で…」

「え？ あ、うんそうそう！！ あれだよあれがカレー」

前に南の家で嗅いだことのある匂いを思い出した慧光えいこうに南が笑いかけた

「…いしかった？」

「はい」

制多迦せいたかに聞かれて慧光えいこうが少し照れながら頷く

「今飯持ってくる」

「あ何か手伝うぞ？」

再び京助が茶の間から出ていこうとすると坂田と中島が立ち上がった

「さんきゅー頼むわ」

「あ俺も俺も」

一步遅れて南も立ち上がり坂田に続いて茶の間を出ていく
台所に向かう廊下でまた悠助と慧喜えいきにばったりと会った

「まだ何かあるか？ 運ぶの」

「あるよー？」

「了解」

スプーンと福神漬け、らっきょうの乗ったお盆を運ぶ悠助と慧喜えきを見送ると京助と三馬鹿が台所に入る

テーブルの上には炊飯器と麦茶のピッチャーとコップの並んだお盆とおかずの乗ったお盆があった

「これか」

「んじゃ俺炊飯器持つわ」

中島が炊飯器を持ち上げた

「んじゃ俺はか弱いから麦茶ー」

「俺これか」

坂田がコップのお盆、南が麦茶のピッチャーを持つと台所から出ていく

「京助ー？」

「あ悪い先いつてくりやれー」

坂田に呼ばれた京助が返事をする

誰もいなくなった台所

さっきまでいたはずの緊那羅きんならはいない

あったのは緊那羅きんならの持っていた麦茶のピッチャーだけで

その麦茶のピッチャーも南が持っていた

京助は台所を出て茶の間とは別の方向へ向かった

チリンと鳴った風鈴

風鈴を揺らした風が運んできた匂いに迦楼羅かるらが顔を上げた

「なんだこの匂い…」

「匂い…？」

乾闥婆けんだつばも顔を上げる

「…乾闥婆」
迦楼羅が乾闥婆を呼ぶ

「…はい…」

返事をした乾闥婆が真っ直ぐ迦楼羅を見た

「ワシは…お前…は…」

乾闥婆の肩を掴む迦楼羅の手に力が入る

「…お前は…幸せ…か？」

チリリと小さく鳴った風鈴

「はい」

乾闥婆が微笑んで頷いた

「本当にか…？」

「はい」

「本当に…本当にか？」

「はい」

何度も聞き返す迦楼羅

「ほん…っだっ；」

「しつこいですよ」

その迦楼羅の前髪を乾闥婆が引っ張った

「何をするたわけっ！！；」

「あなたがしつこいからです」

「っ…；だ…だってだなっ！！；」

「僕は…」

乾闥婆が迦楼羅の髪から手を放した

「あなたの隣にすることが幸せなんです」

「…乾闥婆…」

迦楼羅の眉が下がる

「ありがとうございます…ございます迦楼羅」

「……」

乾闥婆の肩にあった迦楼羅の手に更に力が入ったかと思うと思い切り乾闥婆を抱き締めた

「か…」

「乾闥婆けんだつぱワシはまだ…ワシは…」

「…迦楼羅かるら…僕は乾闥婆けんだつぱです…」

静かに言った乾闥婆けんだつぱに迦楼羅かるらが唇を噛んだ

「…すまん…」

乾闥婆けんだつぱを放した迦楼羅かるら

「鳥類？ って乾闥婆けんだつぱも起きたのか」

「だあっ！！？；」

いきなり京助が声をかけてきて迦楼羅かるらが慌てる

「なっ…；」

「ええ…ご心配お掛けしました」

慌てる迦楼羅かるらとは反対に落ち着いた様子の乾闥婆けんだつぱが京助に返す

「飯できたから食いに行け」

「ありがとうございます」

ぐきゅううー…

タイミングがいいのか悪いのか迦楼羅かるらの腹の虫が鳴いた

「…はよ行けや…？」

そう言って京助が引っ込んだ

「行きましょうか」

「…うむ」

立ち上がろうとした乾闥婆けんだつぱの前に差し出された迦楼羅かるらの手

「乾闥婆」

「…はい」

乾闥婆けんだつぱが手を乗せると迦楼羅かるらが微笑んだ

暗い廊下を歩けばキシキシという音がする

小さい頃は怖くて近づこうとしなかったあの部屋

あの掃除の時に壊して以来まだ直されていない襖

段ボールが積み上がっている室内に入ると少しカビ臭くて
でもそれが何故か落ち着いた

「いたし」

「あ…京助…？」

どうして？ みたいな顔をした緊那羅きんならが振り返った

「飯食うってんのにいねえし」

「ごめんだっちゃ；」

苦笑いをする緊那羅きんなら

所々毛羽立っている畳を踏んで京助が緊那羅きんならの隣まで来た

「なにしてん」

「や…なんか…」

京助が開いていた窓からなんとなく身を乗り出す

「…なんだろな…」

「え？」

「なんだろ…よくわからんな今起こってることやら起きたことやら
さ よくわからん」

「…京助…」

緊那羅きんならの方は見ずに京助が言った

「考えてもわからんから考えたくねえんだけど…考えちまうんだよ
な…でもやっぱよくわからんとかになるし」

話続ける京助

「…でもさ それがいいのかもな」

「え？」

「よく言うじゃん全部わかったらおもしろくないとか だからさ
よくわからんってのが丁度いいのかもなって話」

きよんとする緊那羅きんなら

「よくわからんから知りたいしわかりたいし だから死にたくねえ
しだから生きてえし？ なんかそんななんでもって今も自分で何言

ってんのかよくわからん」

京助が伸び上がると上半身だけを捻って緊那羅きんならを見た
「ちなみにお前のこともよくわからん」

「へっ?;」

緊那羅きんならが自分を指差すと京助なへつと笑う

「だから」

「…だから?」

「知りたいと思う緊那羅きんならのこと」

静かに部屋に入ってきた風が緊那羅きんならの髪を揺らした

「京助…」

「だからここにいろ」

真顔になった京助が言う

一瞬止まった緊那羅の口元が綻む

「…うん」

頷いて笑った緊那羅きんなら

「絶対だかんなっ」

「わかったっちゃ」

少し照れたような京助と嬉しそうな緊那羅きんなら

「京助ー!! どこだー!!」

坂田の声が聞こえた

「全部くっちゃまうぞー!! 矜羯羅こんがらが」

中島の声も聞こえた

「京助」

「いくか」

窓を閉めた京助が歩き出すと緊那羅きんならもそれに合わせて歩き出した

「明日エビフライ食いたい」

「じゃあ買い物付き合えっちゃ」

「あと…」

「いもとフノリ？」

「うむ」

他愛もない会話をしながら二人揃って廊下を鳴らして歩けるそんな何気ない日々

そんな日々が幸せなだけで

そう思えばそれが生きていける理由

「お前食いすぎだろう；」

「悪い？　だって美味しいから」

4杯目に口をつけた矜羯羅こんがらに坂田が突っ込めば制多迦せいたかがヘラツと笑う
制多迦の膝の上でもふもふとキャベツをかじるクロ

「悠助はいウズラあげる」

「ありがと慧喜えき」

「中島はいニンジンあげる」

「いらん」

慧喜えきが悠助にウズラを食べさせる横で南が中島の皿にニンジンをテンポよく入れ中島はそれを南の皿にテンポよく返している

「こぼしてますよ迦楼羅かるら」

「う？」

「口の周りにもついてますよ迦楼羅かるら…まったく…」

よほど空腹だったのかカレーを勢いよく食べていた迦楼羅かるらの口の周りにはカレー

そして衣服にもカレー

「服には食べさせなくていいんきになかるらん」

それを拭き取る乾闥婆けんだつぱと笑いながら見ている阿修羅あしゅら

「南のとこのとはちよつと違う味ナリ」

慧光えこうがスプーンをくわえたまままじまじとカレーを見る

「でもおいちゃんこの味好きだ」

口元だけを出した烏俱婆迦うぐばかがもくもくとカレーを口に運ぶ
「あらあいつばいねー」

「立ち食いだなこりゃ」

コマとイヌを抱いた竜之助とハルミが茶の間の戸を開けた
「こっち空いてますよ」

柴田が少し横にずれて手招きをする

「カレーなんだやなー!!」

コマがハルミの腕から抜け出すとゼンへと姿を変えた

「カレーカレー!!」

ゼンに続きイヌもゴに姿を変えた

「お前らただでさえ狭いつてんのにわざわざ人型にならんでもよからう;」

「こっちのがたくさん食べられるんだやな」

「食えるときに食っておくんだやな」

坂田が突っ込むとゼンゴが尻尾を振りながら言った

「まあごもつとも」

竜之助が笑う

「うっおすっげ;」

「ぎゅうぎゅうだっちゃ;」

「おっせえぞ京助!!」

最後にやってきた京助と緊那羅^{きんなら}が茶の間の中を見てあきれたように笑った

「おかわり」

「おまゝ自重しろ自重;」

わいわいと賑やかな茶の間

「ほら京助、緊ちゃんも」ハルミがカレーを盛った皿を差し出す

「食うか」

「うん」

京助と緊那羅^{きんなら}が顔を見合わせて笑うと茶の間の戸を閉めた

「なんだ帰るのか」

竜之助が庭にいた阿修羅あしゅらに声をかけた

「ああ：ヨシコが心配きっしょうやんきに」

「：吉祥きつしょう：か」

「オライは呼ばんに吉祥ってはな」

阿修羅あしゅらが伸びをしてニカツと笑った

「吉祥って呼んだら：ヨシコもアイツと同じようにさせちまう様な

氣いすんのな」

阿修羅あしゅら：「

今更思うけどな」

阿修羅あしゅらが伸びた髪を掴むと竜之助に背中を向けると竜之助が手刀でその髪を切った

「あんがとさん」

切られた阿修羅あしゅらの髪が空に舞い上がる

阿修羅あしゅら「

お？」

竜之助とは違う声に呼ばれて阿修羅あしゅらが顔を向けるとそこには中島がいた

「あ：えつ　と」

何かを言おうとしている中島

それを見て阿修羅あしゅらがふつと笑った

「ヨシコは大丈夫やんきに」

「っ：；」

言おうとしていたことの答えが先に返されて中島が言葉を飲み込んだ
それを見て竜之助が笑う

「押せ押せだぞ中島」

「なっ：！？：」

竜之助に茶化されて中島が赤くなる

「俺も押せ押せでハルミをだな」

「ばっ…ちが…」

「はっはっはー」

竜之助に阿修羅あしゅらが加わり更に中島を茶化す

「だあもうっ!!!」

「あんがとな…でっかいの」

阿修羅あしゅらがお礼をいうと竜之助も頷いた

「んじゃまいくわ」

「ああまたな」

すうっと阿修羅あしゅらが消えた

「さて…」

竜之助が庭から縁側に上がると中島の頭をポフツと叩いて家の奥に入ってしまった

竜之助に叩かれた頭を中島が触る
チリンと風鈴が鳴った

「なかじー!!! なかじー!!! どこだなかじー!!!」

「おー!!!」

坂田の呼ぶ声がして中島が返事をして家の奥に入ってしまった

また夏が終わる

風に揺れる風鈴が鳴る

きつと明日も風鈴は鳴ってその次の日も

そうやってめぐる季節

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4012r/>

無幻真天楼

2011年11月26日23時00分発行